妖乱舞

松原 透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖乱舞

【Ｎコード】
Ｎ７５９４Ｉ

【作者名】
松原　透

【あらすじ】
逆異世界パラレルやってます。復活して更にエロに走る傾向アリ……。現代日本に生きてきた少年が、異世界で美少女とトラブルとアクシデントに囲まれながらモンスターと戦い、生き延びていく話です。ただし、女の子たち、見た目は可愛いのに、性格が……。特にヒロインはかなりの曲者です。モンハンをご存じない方もぜひご一読ください。

邂逅1　（サバイバル）

ふと気がつくと目の前には苔むした大木があった。

「中也？」

呼ばれてそちらを振り向けば、これでもかと言わんばかりに赤く染められた髪に

黒い瞳をした幼馴染、シヴァの唖然とした顔がある。鼓膜に届くのは水のせせらぎ

と鳥の声で、足元にあるはずの絨毯はなく、代わりに腐葉土が広がっていた。

「どうなって～んだ」

周りを見渡すシヴァに釣られて中也も視線を巡らせる。そこはどこからどう見て

も「森」だった。

「俺たち、入学式に出てたんだよな？」

確認するようにシヴァに問えば、幼馴染が微妙な顔をして頷いて見せる。

「夢でも見てんのか～な？」

言いながら、シヴァは自分で自分の頬を引っ張った。どうやら痛いらしい。これは夢ではないようだ。

「何がどうなって～んだ？」

「さあ……」

どうしたことか、どことも知れぬ森にいる。目が覚めている時に、気が付いた

ら全く知らない場所にいたなど、生まれて初めての経験だった。彼らの動揺など、

素知らぬ風で、小鳥が穏やかにさえずる。鼻腔を、森の匂いが刺激した。

（あ……）

中也の目に、自分たちと同じく制服を着た数人の男女の姿が映った。自分とシ

ヴァを除いてもけっこうな人数がいる。全員が全員、どこともしれない森の中で

唖然とした表情をしたまま周囲を見渡していた。

「何でいきなり……。こんなことって……」

僅かながら動揺を含ませる口調で呟くのは、薄い色の金髪を丁寧に結いあげた

少女だ。その隣には艶やかな黒髪を無造作に肩まで伸ばした少年がいる。少年の

瞳の色は稀に見る深紅で、その顔立ちがあまりにも整っていたので、中也は最初、

少女だと思った。

（男……だよな。スラックスはいてるし……）

けれど、本当に息を飲むような美少年だった。彼の横には、見るからに痩せす

ぎの体に、神経質そうな顔が乗っかった少年がいる。

「どういうことだ？　僕はいま、確かに入学式に参加していたんだ。それがどう

していきなりこんな所にいるんだ。せっかくの制服が汚れるじゃないか。どうい

うことだ。誰か説明してくれ」

神経質そうな顔をした少年は答えられる者などいないのに、一人で喋り続けて

いる。その後ろには大木に寄りかかるようにして座りこんでいる小柄な少女がいた。そして……。

「私、いったいどうしてしまったの？」

森の中に、お姫様が立っていた。桃色に塗られた口元、結いあげられた濃い栗色の髪には宝石を散りばめた豪奢な髪飾り。首と耳には巨大な宝石。細い体を包むのは純白の絹仕立てのドレス、そして腐葉土に食い込むガラスの靴……。どこからどう見ても「お姫様」である。

「不思議。今日は軍学校の入学式に参加する予定だったの。けれど馬車が遅れてしまって、お城に着いた時にはもうお父様がお話を始めていたの」

アルテリア王国、王女……春宮（しゅんぐう）・朱宮（あかりみや）である。

「何でお姫様がこんなところにいるのか～な」

シヴァも呆れて言葉がない様子だ。そんな朱宮は周囲を見渡し、その中の一人

に笑顔で駆け寄った。深紅の瞳の美少年と並んでいる薄い色の金髪の少女のとこ

ろである。駆け寄られた方は、あからさまに嫌そうな顔になるが、朱宮は一向に

気にした様子がない。

「光ちゃん！　光ちゃん、いったいどうしたの？　どうして私たちここにいるの？」

「知らないわよ」

「そうなの？　でも今日は光ちゃんの入学式だったんでしょ？　おめでたい席だか

らって言われて、今日は白いドレスにしてもらったのよ？」

「あっそう……」

中也は「光」という名を脳内で反復する。王女の親しげな様子に、国王の直系だ

けに与えられる「宮」という字。光と宮。光宮……。

「もしかして、あんた、翡翠院（ひすいいん）・光宮（ひかりみや）？」

思わず声に出してしまうと、名前を呼ばれた金髪の少女が振り向いた。

「そうだけど。何か文句ある？」

「いや、別に……」

確認しただけだったのに、まるで親の仇を見るような眼で見られて中也は思わず尻込みしてしまった。現在の国王には双子の娘がいる。姉の朱宮と、妹の光宮だ。いきなり見知らぬ森にいたことも不思議だったが、王女が二人そろって一緒にいることも不思議でならない。しかも、二人ともウワサ以上に可愛い。

「ここがどこだか分かる人いる？」

軽く溜め息をついて、纏わりつく朱宮を引き離した光宮は動揺を隠せない一同に向けて問いかけた。しばらく、無言が続く。

（どこって言われてもなあ……）

中也は改めて回りを見渡した。アルテリアの国内ではないことだけは間違いない。何か場所の見当でも付かないか、と無意味に辺りに視線を走ら

せ、苔むした
大木の根元に生えているキノコが目に入った。
「フィールド。それも樹海だと思う」
声を出した中也に、光宮の視線が向けられた。
「どうしてそう思うの？」
「そこのキノコ」
中也が指差すと、その場にいた全員の視線がキノコに集中した。
「そこに生えているキノコはアルテリアの農場で栽培されている食用キノコじゃ
ない。だとしたら、そんなキノコが自生しているのはフィールドしかない。樹海
だと思ったのは、木の高さ。密林の木は低いって話だ。ここの木はどれも高いだ
ろ？」
中也の言葉に、全員が無意識に上を見上げる。苔むした木々はどれも十数メー
トルの高さを誇る。枝が分かれているのは人の二倍の背丈のあたりからで、低い

木は見当たらない。大木の幹には蔓が巻きつき、その蔓そのものもけっこうな太
さがある。一見して、長い年月を経た森のようだった。

「なるほど。そうみたいね」

光宮が溜め息混じりにその意見を肯定する。彼女の背後には、ストロベリー・
ブロンドとプラチナ・ブロンドの少女が二人、難しい顔で自分を見つめていた。
女の子にしては背が高く、やたらスタイルの良さが目立つその二人組は、まるで
太陽と月のように対照的だ。そう言えば、彼女たち二人は入学式で見かけたよう
な気がした。二人とも美少女だったので、記憶に焼き付いている。

「フィールドなら、ハンターが出入りしているはずだよな？　だったら、どうに
かしてハンターと合流すればいい」

光宮に向って中也が言った時、彼の横にいたシヴァがいつものおどけた口調で

声を上げた。

「聞いた話じゃあ、ギルドが把握してるのはフィールドの一部ってことなんだ～

ろ？　もちろんそうだとしたら、その一部はアルテリアに近い場所にあるはずだ

～な。フィールド全体から見てアルテリアは南側。じゃあ南を目指すしかないん

じゃあないか～な？」

シヴァの言葉に、光宮が納得したように頷いた。

「そうね。そうするしかないみたい」

「みんなでピクニックね！　うれしいわ！　じゃあさっそく自己紹介しましょ？

私は朱宮。みなさんは？」

満面の笑顔で手を叩きながら、何とも場違いな発言をした朱宮。あからさまに

顔をしかめたのは光宮だったが、互いの名前を知らないのは不都合だと思ったの

か、小さな溜め息をついただけで反論はしなかった。その時、中也は視界の端に

“水色の動くもの”を捉えたような気がした。

「私は光宮。光、でいいわ。こっちは……」

光宮がそう言って、隣にいる深紅の瞳の美少年の方を振り向いた瞬間、だしぬけに木立の影から飛び出してきた生き物がいた。

「!?」

何が起きたのか分からず、中也たちは思わず突如として現れたその生き物を凝視してしまっていた。まるで青空のような水色の鱗に覆われた体表に、黄色く濁った大きな瞳、人間と変わらない背丈、手足に生えた鋭い鉤爪……。後ろ脚だけで立ち上がり、ピンと伸ばした尾で器用にバランスを取るその生き物は、時折、まるで鳥のように小首を傾げ、中也たちを見つめていた。

（ランポス!?）

その姿には見覚えがある。図鑑に載っていた姿そのものだ。群れをなして獲物を

狩るモンスター、ランポスだ。

「マズイ！　みんな、円になるんだ！」

「なんで！？」

「ランポスは群れだ！　バラバラになったら一瞬で全員、殺される！」

中也の言葉に、全員が慌てて円陣を組む。当然のように、次期・国王である朱宮が中心になったが、少し離れた場所で蹲っていた小柄な少女だけが、その場を動こうとしなかった。

（あの子、腰が抜けたのかよ！？）

現れたランポスが鳥の鳴き声のような声をあげる。どうやら、先ほどから聞こえていた鳥のような鳴き声の主はランポスだったらしい。

「やばい……！」

そこには、本でしか見たことがなかったモンスターが現実に立っていた。

（本物だ……！）

呼吸に合わせて動く胸や、鋭い牙が並んだ口から滴り落ちる唾液、風に乗って

漂ってくる肉食モンスターに独特の、ものが腐ったような臭いが鼻をつく。紛れ

もない、本物のモンスターが、そこにいた。

（どうする……！？）

一人だけ離れている少女が危険だ。だが、モンスターを前にして無闇に動く自

信がない。

（動いたら、真っ先に殺される……！）

中也の額を冷たい汗が伝う。左右からランポスの群れが押し寄せてきたのは、

その時だった。現れたランポスたちが一斉に地を蹴る。彼らの背丈を一瞬で飛び

越すとんでもないジャンプ力に圧倒され、中也たちは思わず円陣を崩した。背後

で悲鳴が上がる。

「ちょっと！　ウソでしょ！？」

光宮が叫んだ。しかし、中也が振り向いた時には、離れた場所にいた小柄な少女の体が三頭のランポスたちに覆い尽くされていた。小さな体のどこからこんなに大きな声が出るのだろう。そう思わずにはいられないほどの絶叫が迸る。そこへ、新たな一頭のランポスが加わった。そしてまた一頭。水色の体表が交差する中、少女の小さな腕が助けを求めるように振り回されるのが見え隠れしている。

（ど、どうしたら……）

どうしようもなかった。助けに行きたくても、体が強張って動かない。目の前で食い殺されていく少女をただ見ているしかできない。そうこうしている間に、少女の肉を食い破るランポスたちの一頭が獲物からあぶれたらしく、飛びのくようにしてその体を離れた。中也たちの方に濁った黄色い眼球が向けられる。

「森に入るな！　離れちゃいけない！」

悲鳴をあげる朱宮。腰をぬかす神経質そうな少年。中也は叫ぶ。

そして、あっ

と思った時にはすでに遅かった。一頭のランポスが、中也の目の前に立っている。

その距離は僅かに三歩ばかり。人の背丈を軽く飛び越えるランポスにとっては、

何ということもない距離だ。冷や汗が伝う。ランポスが後ろ脚に力を込めた。頭

が真っ白になる。その時、中也とランポスの間に割りこんできた人影がある。

（だ、誰……！？）

その人影は鮮やかな回し蹴りでランポスの頭を蹴り飛ばした。地に転がったラン

ポスが飛び起きて、二、三度ばかり咆哮をあげる。

「あ、あんた……？」

中也の前にいたランポスを蹴り飛ばしたのは、光宮の隣にいた深紅の瞳の美少年

だった。彼は臆することなくそのランポスに向っていくと、再びその顎に下から脚
を叩きこむ。ランポスが仰け反った。間髪入れずに、体重をかけて肘を打ち込めば、
ランポスの体が再び横倒しになった。

「木の上よ！　木の上に逃げましょう！！」

光宮の声が聞こえる。真っ先に反応したのが、ストロベリー・ブロンドとプラチ
ナ・ブロンドの二人組だった。二人は同時に一本の大木に向って走り出し、プラチ
ナ・ブロンドの少女が幹の前で制止する。そしてすぐに後ろを振り向いて両手を腰
の前で合わせ、身を低くした。彼女の手の上に、助走をつけて走って来たストロベ
リー・ブロンドの少女が足をかける。彼女の体が空中に舞い上がり、太い枝にしが
みついた。そのまま体を反転させて勢いよく幹の上によじ登り、すぐに幹に巻きつ
いた太い蔦を剥がし始めた。

「誰か一人！　男が来い！」

枝の上から少女が叫ぶ。すぐに反応するのは神経質そうな顔をした少年だったが、

木の前にいたプラチナ・ブロンドの少女がその細い体に軽く蹴りを入れて進行を止

めた。小柄な少年が地面に尻もちをつく。

「あんたじゃ役に立たないよ。そこの赤毛のお兄さん。あんた、登れる？」

「もちろんだ～ぞ」

プラチナ・ブロンドの少女に言われ、シヴァがニヤリと笑うのが見えた。彼は先に

枝に上がった少女と同じ要領で枝によじ上る。その様子を見たストロベリー・ブロン

ドの少女が剥がした蔓を下ろしながら、朱宮の方に視線を向けた。

「とりあえず、お姫様！　あんたがおいで！」

呆然とした様子で佇んでいた朱宮を導いたのは光宮である。彼女は実の姉、朱宮

の手を取って蔦を握らせた。それを、シヴァが引き揚げる。横で、枝の上の少女が

再び蔦を剥がし始めていた。

（こいつ、すげ……）

中也の目の前では、深紅の瞳の美少年とランポスが格闘している。繰り返し打ち

込まれる回し蹴りは、寸分違わぬ正確さでランポスの頭を捉える。顎に直撃を食ら

ったランポスの足元が揺らいだ。その時、最初に襲われた少女の体を食らい尽くし

たランポスの群れが、一斉に弱った一頭のランポスに襲いかかった。

「今のうちよ！　早く木の上へ！」

目の前で繰り広げられる光景に唖然とした中也の手を取ったのは光宮だった。シ

ヴァたちの声が聞こえる方に視線を向ければ、神経質そうな顔をした少年が木の上

から下ろされた蔦を必死になってよじ上っている真っ最中だった。見るからに、遅

い。

「う、わっ！」

左側からランポスの一頭が飛びかかって来た。地面に転がるようにしてそれを避

ければ、獲物を仕留め損ねたランポスが振り返って悔しげに吠えたてるのが見えた。

「早く！」

光宮に促され、中也はランポスから距離を取る。もう片方の蔦は、プラチナ・ブロンドの少女が登っていた。それを助けているのは、シヴァである。

「おせーんだよ、この役立たず！」

神経質そうな顔をした少年に向かってそう言ったのは、最初に枝に登ったストロベリー・ブロンドの少女だった。彼女は少年がしがみ付いた蔦を上から引っ張り始める。凄い力だった。小柄な少年の体が、どんどん上方に引き上げられて行ってしまう。

「夏葉！　早く！」

光宮に声をかけられ、深紅の瞳の美少年がプラチナ・ブロンドの

少女の後に続い
た。神経質そうな顔をした少年を引っ張り上げたストロベリー・ブ
ロンドの少女が
すぐに蔦を中也の前に下ろす。それにしがみ付いて登り始めれば、
上から少女が助
けてくれた。視線の先では、太い枝に跨るようにして、小柄な少年
がバテている。
深紅の瞳の美少年が登り切った後で、光宮が最後に続いた。

（た、助かった……）

ランポスたちが悔しげな鳴き声をあげる。木の上にいる獲物に向
って跳躍を繰
り返すが、さすがに届かない様子だ。それを見て、中也たちはとり
あえず安堵の
息をつくことができた。ランポスたちはしばらく跳躍を繰り返して
いたが、やが
て諦めたのか、その場を去って行った。

「助かった……」

泣きそうな声で呟いたのは、やはり神経質そうな少年である。中
也は何となく

下を見る。すぐ傍には食い荒らされたランポスの死体があり、少し向こうには、

もはや原型を留めていない少女の亡骸が横たわっていた。名前も聞いていなかっ

たし、少女の顔をはっきり覚えていたわけではなかった。しかし、今そこにある

死体は断末魔の形相をしている。その表情が脳裏に焼き付くのが嫌で、中也は無

意識に死体から顔を背けていた。

「で、どうするんだ？　とりあえずは凌いだけど、状況に何の好転もないぜ？」

汗を拭いながら、ストロベリー・ブロンドの少女がそう言ってきた。

「南へ向かうしかないじゃないか！　早く行こう！　こんなところ、もうゴメン

だ！」

神経質な顔は、汗と鼻水と涙でいっそ可哀そうなほどメチャクチャになってい

る。

「行きたいなら、一人で勝手にど～ぞ。俺はゴメンだ～ぜ」

シヴァが幹に寄りかかりながら、そう呟く。

「どうして！　もうランポスはいないじゃないか！」

「そう思う？」

言いながら、シヴァは手近な木の枝を叩き折った。それを、地面に向って投げれば、四方からランポスが風のような速さで駆け出してきた。彼らは落ちてきたのが獲物でないと分かると、悔しげに吼え立て、森の奥を目指して走って行く。それを目の当たりにした少年の顔色がさっと変わった。

「下に降りたいか～な？」

シヴァの言葉に、彼は凄い勢いで首を振った。

「なんなんだよ、いったい……」

顎を伝う汗を拭いながら、中也は小さく毒づいた。

遡遡2

話は1時間ほど前に遡る。

その日は、やたら天気の良い朝だった。

「なんでこんな日にまで寝坊するんだよ、お前は！！」

雪に閉ざされていた街が、春の陽光に照らされている。寒風に俯いて歩いてい

た人々の顔には笑顔が戻り、突き抜けるような青い空の下に広がる、アルテリア

帝都。その一角を、中也とシヴァは全速力で駆け抜けていた。

「遅刻だ！！　急げ！！」

帝都は国の中央に位置し、国王アルテリア13世の居城を中心に、放射状に広がる

美しい石造りの町並みを自慢にしている。北には庶民から「ヒプノック街」と揶揄さ

れる高級住宅地、西には「クシャル塔」と呼ばれる集合住宅、東には通称「商い通り」

と言われる商店街、南には軍関係の施設が集中する「コンガ街」がある。道行く人々

は千差万別で、瞳の色と髪の色には数えきれない種類があり、雑踏の中は目に痛いよ

うな色彩でいっぱいだ。

「だって仕方ないだ～ろ？」

アルテリアの特産技術の結晶である腕時計の針を見つめつつ、二人が目指すのは

晴れあるアルテリア軍の軍学校（士官学校）である。本日は、その入学式が行われ

ることになっていた。

「仕方ないで済むかよ、このバカ！」

二人が走り抜ける歩道の傍には必ず雨水や生活排水を流す下水がある。これが整

備されたことにより、アルテリアを伝染病が襲う確率が極端に低くなった。また、

ポポの引く車が走る道の中央には、ところどころに縦横１メートル、高さ２０セン

チばかりの巨石が配置され左右の歩道を渡してある。これはいわゆ

る横断歩道で、
道を行く車の速度を落とさせる目的と、人を安全に横断させる目的がある。これの
設置により、老人や子供が車輪に巻き込まれて事故死する数が減った。

「誘(いざな)い通りのお姉さんに口説かれたんだ～ぞ」

「未成年だろ！」

「細かいことは言わないお約束だ～ぞ」

誘い通り、とはいわゆる歓楽街のこと。場所的には商い通りの最南端、兵士の宿
舎が立ち並ぶ位置に隣接している。

「俺は年上のお姉さんにモテるから仕方ないんだ～ぞ」

軍学校は、南の軍統括本部に隣接する位置にあり、王宮の建物からも近い。学業
施設は無料で入学できるというのが当たり前になりつつあるアルテリアにおいて、
軍学校だけはそれなりの入学資金が課せられる。入学に関しては、１５歳になる男

女で小塾（中学校）の学長の推薦書、保護者の同意書を持つものが条件で、また、

アルテリアの国民しか入学が許可されないという特徴もある。

「金はいらないからって言われたら断れるはずないだ～ろ？」

「知るか！」

中也は走りながら頭を抱える。シヴァは一事が万事この調子だ。

「だから昨日のうちに寮に入ろうって言ったじゃないか！」

「つまんないことは言うんじゃな～いぞ」

二人の出身は北東の都、龍都だ。軍学校への入学が決まり、帝都にやって来たの

が昨日のこと。荷物は先に業者に頼んで運び込まれており、入寮手続きは三日前か

ら行われていたので、中也としては早目に入寮してしまいたかったのだが、後ろの

遊び人がそれを拒否した。せっかく帝都に来たのに、商い通りに出ないなんて有り

得ない、と。結局、彼の目的は未成年者の立ち入りが固く禁止されている誘い通り

の方だったのだが、おかげで商い通りの一角にある宿屋に宿泊する羽目になり、連
れは朝方まで帰って来なかったという始末。挙句の果てに寝過して、晴れある入学
式の当日に遅刻寸前という、この有様だ。

「もう時間がないぞ！　急げ！」

「まあまあ、中也。何とかなるもんだ～ぞ」

南へ行くにつれて人通りが少なくなる。軍関係の味気ない施設が自分の目で確認
できるような位置まで来ると、すれ違うのは軍服に身を包んだ者か、私服ではある
が軍人らしい、あからさまな体格の者ばかり。必死に走る二人を、呆れた目で見る
者、あるいは笑いながら見送る者。その反応は二通りしかない。

「見えた！」

中也の視線の先、そこには黒龍の彫刻が施された門がある。二人は行きかう馬車
の間をうまくすり抜けて道の反対側に渡る。人は横断歩道しか通れないことになっ

ているので、これは立派な交通違反である。遠くで冬軍官（警察官）が僅かに動き

を見せたが、捕まる前にさっさと走りぬけてしまう。門の両脇に佇むのは大剣を携

えた兵士。軍服の色が青なので、春軍（陸軍）であるようだ。走りながら、中也と

シヴァは背中のカバンからイエローカード（身分証明書）、小塾の推薦書、保護者

の同意書を取り出した。

「時間ギリギリだな。向かって東に講堂があるから、早く行きなさい。席順は特に

決められていない。用意されたイスに詰めて座るように」

二人の書類を確認した門警備の兵士に見送られ、二人は言われるままに東へ向か

った。小走りに歩きながら、中也は周囲の建物を見渡す。田舎の小塾などとは比べ

物にならないくらい、建物の規模が大きく、造りが繊細である。立ち並ぶ校舎の群

れだけで、中也たちが暮らしていた北東の農村がひとつ、まるまる

入るくらいの大

きさだ。それに講堂、演習場、ついでに寮がある。慣れるまで苦労しそうだ、と中

也は内心で溜め息をついた。

「君たちで最後だ。早く来なさい。もうじき始まるぞ」

通り過ぎようとした建物の前で、二人は軍服を着た中年の男に声をかけられた。

講堂、と聞いていたので何の変哲もない四角い建物を想像していたのだが、実際に

連れて行かれた場所は石造りの大きな城だった。

（すっげ……綺麗な城……）

それは天に突き刺すような塔と、硝子の嵌め込まれた窓、彫刻の施された城壁、

講堂という利用目的にはもったいないくらいの、見事な建物だった。兵士に促され

るようにして潜り抜けた小さな入口。それを過ぎれば、唖然とするほど大きな空間

に出る。敷き詰められた赤い絨毯の上に、所狭しと並べられた椅子は、黒を基調に

した制服……。中也の知っている言葉で言うなら「ブレザー」を纏った生徒たちで、

ほぼ満席だった。その周囲を、青、赤、白、灰色の軍服に身を包んだ兵士たちが難

しい顔をしながら行きかっている。正面には三つの階段。中央が一番大きく、その

先には宴台が置かれている。吹き抜けになったその空間を囲むように巡らされた中

二階には、賓客らしい顔ぶれが並んでいた。

「ほら、あそこだ」

指さされた場所には、最後尾の一番端に二つほど開いたイスがある。促されるよ

うにして、中也とシヴァはそれに腰掛けた。

「ほら、何とかなっただ～ろ？」

シヴァが反省の色なくそう言って来るのを無視して、中也は高い位置から自分た

ちを見下ろす顔ぶれに視線を向ける。知っている顔などないが、アルテリアの高官

や軍の司令官たちを見るのは、なかなか興味深い。そして、正面の宴台に近い位置、

そこに据えられた椅子に悠然と脚を組んで座っている人物に視線を止めた。この位

置からでも分かるその髪は血のような深紅。軍服の裾が長く、背に外套を靡かせて

いるのは上官の証。その左に並んで座っているのは、陸と海、空、そして治安維持

を務めるアルテリア軍の四つの軍隊をそれぞれ束ねる四人の軍将だろう。

「おい、シヴァ。あれが将兄じゃねえか？」

隣のシヴァに声をかけると、彼も興味を引かれたらしく中也の指す方向に視線を

向けた。アルテリア軍の頂点に立つ将軍の名を、四軍統括将軍兄（しぐんとうかつしょうぐんけい）。略して将兄（しょうけい）と呼

ぶ。ひたすら評判の悪さだけが目立った前代の将兄を訴追し、新たにその位に君臨

したのは、まだ青年と呼べるほどの若い男だ。ただし、獅子王とまで言われた前々

代の将兄と剣を交えて圧勝したり、目撃例が極端に少ない銀レウス

を捕えて自らの
騎獣にしたり……と、年若き現在の将兄には国民の関心を惹いて止まないエピソー
ドが付きまとう。それも、神々の具現とまで持て囃されるほど見た目が良いとなれ
ば、女性陣が黙っていない。要するに、今現在の将兄はアルテリアで最も注目を集
めている男というわけだ。

「この位置からじゃあよく見えねえ～な。でも噂通り若い人みたいだ～な」

最後尾の席から見渡していると、数百人単位で集まっている入学生たちのところ
どころに、シヴァのような、あからさまな赤い髪が目立つ。ここ最近、アルテリア
の少年たちの間では、髪を真っ赤に染めることが流行っている。その元凶が、あの
将兄。シヴァの髪が赤いのも、まさしくその影響である。カッコいいと言われてい
る人の真似をしたら、自分もカッコよくなれるかもしれない、と思うのは仕方がな

い。誰だって、カッコいいヤツだと言われたいのだ。

「もうちょっと近くで見たかった～な」

「お前が寝坊するからだろ？」

中也たちの隣に座っているのは、二人組の少女だ。一人は金髪に透けるような白い肌の持ち主で、もう一人は銀髪に、褐色の肌をしていた。まるで太陽と月のように対照的な二人は、ともにかなりの美少女だったので、印象深かった。すぐ前の席には、丁寧に結いあげられた金髪の少女が、隣の席の黒髪の少年と何事か会話していた。

「ええ～それでは～ただいまから、入学式を始めます。一同、起立！」

どこの誰か知らない中肉中背の男の号令がかけられ、入学生たちが一斉にノロノロと立ち上がる。礼の合図でバラバラに頭を下げ、着席と言われて盛大な雑音とと

もに着席した。

「国王、祝辞」

脇の垂れ幕から、国王アルテリア１３世その人が姿を現した。絹で造られた上等な服。それを幾重にも重ね着しているので、遠くから見ると人間が膨らんだように見える。長く裾を引く衣装の端を、下官たちがいちいち整えながら進んでくる。何となくその光景が滑稽に思えて、隣のシヴァと同様に笑いを噛み殺した。一国の王の登場に、緊張感に包まれる講堂。しかしながら、大半の生徒たちの興味は国王よりもむしろ将兄の方に向いていた。

「本日は晴天なり。この晴れやかなる日差しの下、今、新たな……」

国王が喋り始めた。アルテリア１３世は、思ったよりもハリのある声をしている。

中也には、それが少し意外に思えた。

「諸君たちは小塾からの推薦を得て、ここに……」

国王の祝辞は続いている。使い古された、ありきたりな祝辞の内容は全く頭に入っ

て来なかった。うっすらと眠気を催した時、講堂を冷たい風が吹き抜ける。その時。

「なんだ!?」

突然、講堂が暗闇に包まれた。

そして気が付いた時、中也とシヴァ、そしてその周囲にいた少年少女たちはどこか

分からない樹海に放り出されていたのだ。

邂逅3

太陽が西に向って沈もうとしている。

「自己紹介が途中だったな」

ランポスの襲撃を受けてからすでに5時間。木の上に避難した8人は、ほとんど

無言のまま時が過ぎるのを見送っていた。静寂を切り裂いてそう言ってきたのは、

ストロベリー・ブロンドの少女だった。

「あたしはレイシェルだ。レイと呼んでくれよ。こっちはルナ。幼馴染なんだ」

レイと名乗った少女は、そう言って上の枝に座っていたプラチナ・ブロンドの少

女を差した。

「ルナよ。どうぞよろしく」

褐色の肌に、腰まで届く真っ直ぐなプラチナ・ブロンドの少女、ルナはこんな状

況にも関わらずニッコリと笑ってみせた。

「よろしくね。あんたは？」

光宮が自己紹介を促したのは、神経質そうな顔をした少年である。

「ぼ、僕はエマニエルだ。父は冬軍（警察）の秋佐。雷都の地方統括を任されてい

る。母は王族の出身。今は月府（宮中行事）の高官で王族の身辺を整えている。僕

自身は小塾では成績が常にトップだった。軍学校に入学した暁には……」

「そんなこと、どうでもいいの。あんたは？」

話を遮られて、エマニエルと名乗った彼は侮辱だと感じたらしく、その神経質そ

うな顔を紅潮させて拳を握りしめる。しかし、相手が王女である光宮では文句の言

いようもない。

「俺は、と……中也」

一瞬、友田中也と名乗りそうになって自制した。この世界では、苗字というも

のは使われていない。おかしなことで、誤解を招きたくはなかった。

「そう。こっちは友達の夏葉よ」

そう言って、光宮が指差したのは深紅の瞳の美少年だった。彼は何も言わずに

軽く会釈する。

「あんた、スカートじゃなくてスラックスはいてるから男だ〜な？すんげ〜美人なのにもったいねえ〜な」

まるで値踏みでもするように夏葉を眺めるシヴァに、光宮が胡乱気な視線を向けた。

「そういうあんたは？」

「俺はシヴァ様だ〜ぞ」

「あっそう」

自己紹介がすべて終わってしまった。一同は、再び無言になる。

「なあ、あんた。夏葉だっけ？」

何となく、中也は夏葉に話しかけていた。彼が声をかけると、深紅の瞳が向けら

れる。こうして改めてゆっくりその顔立ちを眺めて見ると、夏葉は確かに美人だ。

人の理想を集約したような、あるいは人であることを忘れさせるような。それくらい、夏葉という人物は他人の目を魅了する姿をしている。

「さっきは、助かった。礼を言っとくよ」

「いや、別に」

「あんた、強いんだな。武術とか、習ってたのか？」

「うん」

会話が終わった。中也は何となく気まずいものを感じてしまった。

「それより、これからどうするよ。いつまでもここにいたんじゃあラチが明かないぜ？」

中也と夏葉の会話にきっかけを得たのか、レイが木の幹に寄りかかったまま声を出した。

「僕は嫌だ！　ここを動かないぞ！　動かないからな！」

エマニエルが泣きそうになりながら、木の幹に縋りつく。

「……ちょっと見てく～るぜ」

体を起こしたシヴァが、何を思ったのか木の枝を伝って上に登り始めた。それを

見送り、中也は視線を下方に向ける。そこには、仲間に食い散らかされたランポス

の死体。大きさからすれば、成体であることは間違いない。襲撃してきたランポス

はどれも皆その大きさが一緒だった。

「あいつら、躊躇なく攻撃してきたな」

中也の言葉に、エマニエル以外の者たちが中也に視線を集中させた。

「それがどうかしたの？」

「フィールドに人はいない。見慣れない物をいきなり襲うなんて、有り得ないだろ、

普通」

そう言うと、レイが軽く眉を上げた。

「ハンターがいるじゃねえか」

「だったらなおさらだ。ハンターは武器を携帯してる。それも、ランポスくらいなら、

一撃で倒せるような武器だろ？　ランポスがフィールドに入ってくる人間を知ってい

るとしたらハンターしか有り得ない。そのハンターはランポスにとって危険でないは

ずはないんだ。それなのに、まるで躊躇なく襲いかかってきやがった」

「言われてみれば、そうね」

光宮が、無意識に握りしめた手を口元へ持って行く。

「それに、あいつらみんな成体だった。群れで生活しているなら、それもおかしな話

だ。どうして亜成体がいないんだ？　ついでに、餌を巣に持ち帰ろうとすることもし

なかった。ただ自分らが喰っただけだ。だとしたら、ランポスたちは巣を作ってない

ってことになるよな。この時期に」

季節は春。草食獣だけでなく肉食獣も巣の中で卵を孵すと言われている時期だ。

「お前、よくそんなところまで見てるなあ……」

呆れたように言うレイには答えず、更に中也は考える。

「ランポスは巣を作る時期が違うんじゃねえのか？」

「バカなこと言わないの。それはないわよ。そんなことしたら、他の肉食獣のいいエサになるだけじゃない」

レイの意見を一蹴したのは光宮だった。野生の動物たちは一斉に卵を孵す。それは卵や幼体が他の動物のエサになる危険を分散させ、種の存続を効率的にするためだ。

ランポスの営巣の時期が違うのは、理屈に合わない。

「おまけに躊躇なく共食いした。よほど食糧の事情が厳しいんだろ。だとしたら、やっぱりランポスは巣を作ってないんだ」

食糧の困窮を始め、自身に危険が迫れば、野生の生物は幼体を身捨て、自身の存続を優先させる。そういうものだ。

「人間に躊躇なく襲いかかってくること。この時期に巣を作っていないこと。共食いすること。よほど生存競争が激しいんだな。だとしたら……」

だとしたら、このフィールドで武器も何も持たない人間が生き延びるのは、予想以上に難しい。そう思ったが、声には出さなかった。

「いい話と悪い話を見つけてき～たぞ」

そこへ木の上方へ登っていたシヴァが戻ってくる。

「どっちから聞きたい？」

「どっちでもいいから、さっさと言いなさい！」

おどけた調子のシヴァに向って、光宮が怒ったように言った。

「気が短いんだ～な。いい話から言ってや～るぜ。向こうの方」

そう言ってシヴァは一方を指差す。

「向こうの方に建物が見えた～ぜ」

シヴァの言葉に、一同の顔に光が差し込んだ。

「普通に歩けば三日で着くか～な。で、悪い話の方だけどな～と」

彼の表情は変わらず明るい。

「近くにレウス発見した～ぜ」

中也は飛び起きるような勢いで枝の上に立ち上がった。

「そっちを早く言えよ！　この高さじゃあ、ちょうどレウスに食われる位置じゃ

ねえか！　移動しようぜ！　近くに血の流れた死体がある。血の匂いを嗅ぎつけ

てレウスが来る！」

「でもランポスが！」

光宮に向って、中也は言う。

「レウスが近くにいるなら、ランポスはいない。どう考えてもレウスの方が強い

からな。俺たちより、あいつらの方がよく知ってるさ」

「だったら」

浮足立つ中也の耳に、ひどく静かな声がかけられる。ルナだった。

「だったら、まずあんたが最初に降りなよ」

＊

アルテリア帝都の中央に聳え立つ国王の宮殿は、基本的に四つの建物群から成り立っている。王が執務を執り行う内殿。続いて、王のための居室である正殿。そして外殿は他国の賓客を泊める場所だ。しかし、アルテリアは国交などほとんど持っていないので、実質、ここに並ぶ建物たちは使われていないに等しい。最後に王妃や王子、王女が住まう後宮の四つである。

アルテリアの王宮は、日光や月光を浴びて反射する砂が多分に含まれる「光石」という希少な石で建築されている。そのため、城下から見上げた王宮は、昼であれ夜であれ、それ自体が発光しているかのような幻想的な雰囲気を醸し出す。また、天を突き刺すような塔の頂上には蒼天石が敷き詰められ、光を反射して遠くからでも光り輝いている様を見ることができる。まさしく、アルテリアという大国を象徴するかのよ

うな荘厳な建築物だ。その内殿に、喚き散らす一人の中年の姿がある。

「こういうことがどうして起きるんだ!?　なぜ予測できない!?　こんな事態が起

きないようにするのがお前たちの仕事ではないか!?　朱宮に何かあったらどうして

くれるんだ!?　責任はとれるのか!　何が将兄だ!　何が軍隊だ!　一国の王女も

守れない軍に存在意義があるのか!　いや、ない!　お前たち、全員この場で解雇し

てくれる!　ええい!　朱宮はどこにいるんだ!?　予測はつかないのか!?」

あちらこちらに灯された蝋燭の炎が、宵闇に包まれた石造りの城をまるで昼間のよ

うに明るく照らし出している。国王が座る玉座は黄金。周囲に下がった垂れ幕は国王

を示す紫色に染め抜かれた絹。玉座から少し下がった場所には、この国を動かす重要

人物が磨き抜かれた床の上で固唾を飲んで佇んでいた。その中に、一人の青年の姿が

ある。

「将兄！　この事態の責任はどうしてくれるんだ！？　何とか言え！」

口の横に泡を溜め、顔を真っ赤にして叫び続ける国王に指さされ、青年は真っ直ぐ

に前へ進み出る。大規模な軍の中、その職位にある者しか着用することができない特

別なデザインを施された漆黒の軍服を纏い、将兄を示す黒龍の形の階級章を胸に輝か

せる青年の髪は血のような深紅で、瞳の色は黄金のような金色（こんじき）だ。

彼が歩みを進める

度、背に靡く外套が優雅に翻る。

「お前に言いたいことは、ひとつだけだ」

巷で噂の美貌の将兄は、その整った顔立ちに悠然な笑みを浮かべて国王に詰め寄った。

「ちょっと黙ってろ」

国王アルテリア１３世は鼻白む。その場にいる重要人物たちも顔色を変えて将兄と

国王を交互に見やった。国王はあまりの事態に声もなく、全身をわなわなと震わせて

いる。その様子を馬鹿にしたように見下げ、将兄は踵を返して部屋を退出した。その

背に、四人の軍将を始め、数人の男たちが従う。全員、国王に起礼をすることさえし

なかった。

「な、なんなんだ、あいつは！！」

後ろ手に閉めた黄金のドアの向こう。絶叫するような国王の怒鳴り声が聞こえてき

たが、将兄は全く意に介さない。振り向くこともせず、後ろに従う軍将たちに言葉を

向けた。

「冬軍（警察）を出してアルテリア国内を捜索しろ。秋軍（空軍）は上空から雪山以

外のフィールドの捜索。春軍（陸軍）は冬軍の補佐と雪山の捜索。夏軍（海軍）は待

機。細かな采配はお前たちに任せる」

「は！」

四人の軍将が自分たちの背後に続く春佐（大佐）たちに手早く指示を出すと、彼らは逆の方向に向かっていった。軍学校の入学式が、襲撃を受けて一時間が経過しようとしている。

「全く、面倒なことになったものだな……」

将兄が向かったのは、王宮内にある執務室である。黄金と玉で造られたドアを開き、その奥にある執務机のイスに優美な肢体を投げ出した彼は、自らの左手の薬指に輝く銀色の指輪に視線を注ぐ。

「入学生が九人。その中の二人が国王陛下の愛娘。喚き散らすオヤジは自分の方が失神寸前。笑えないな」

呆れたように言いながら、彼は背後にある窓に金色の瞳を向ける。軍人や月府の高官たちが右往左往しながら、叫ぶような声で情報を交換し合っているのが目に映った。

「襲撃したものの目途はございますか」

静かな声音で話しかけるのは、軍将の中でも小柄な男だ。年齢は五十代の後半あたりで、短く刈り込んだ髪は灰色だ。彼は冬軍将（警察庁長官）である。

「分かり切ったことを聞くな。人間を九人。いきなりその場から消すことは難しい。誰にでもできることじゃない。あり得るとしたら、時空を操るモンスター、鬼龍だろう」

鬼龍、という言葉にさすがの軍将たちも僅かに顔色を変えた。

「伝説、なんてくだらないことを言うなよ。鬼龍は実在する。ただ、人と同じ見た目をしているから分からないだけだ」

「捜索は難航いたしますね」

そう言うのは、金髪を背に束ねた春軍将（陸軍の責任者）である。彼に向って、将兄は不敵な笑みを浮かべて見せる。

「心配するな。鬼龍が出てきたら俺が出るさ」

「将兄、しかし……」

何かを言いかけた春軍将を遮り、将兄は立ち上がる。

「お姫様がどうなろうと知ったことじゃないけどな、消えた九人のうち一人は俺の婚約者なんだ。どんな手を使っても無事に取り戻す。別動隊で戦闘準備を整えろ。お前たちにも出てもらう。冬軍は国民の避難を指揮しろ。鬼龍と戦闘になれば、国土も無事じゃ済まないぞ」

「は！」

短く返答し、四人の軍将は執務室を出て行った。

邂逅4

忍び寄る暗闇に覆われていく樹海、ランポスを避けて高い木の上に避難
した中也たちは、場所の移動を余議なくされていた。

「で、あんたはいったい何をしてるのよ」

手近な枝を折っていく中也に、光宮の不信気な声がかけられる。

「この木の葉、湿ってるからさ、火を付けたら燻ったまま煙を上げて長時
間、燃えてくれるだろうと思って」

そう言って、中也は光宮と朱宮に視線を向ける。

「お姫様が二人もいるんだ。軍が捜索してないはずはないだろ?だった
ら、少しでも居場所を示して行った方がいい」

「夜中に捜索すると思う?」

「しないだろうな。でも、近くにいるなら、見張りを置いてるはずだ。煙
が届いてくれたら、儲けだろ?」

ある程度の量が溜まったので、中也はそれを地面に放り投げる。
しばらく
待ってみたが、ランポスの襲撃は無かった。それを確認した後で、
木の枝に
登る時に使った蔓に手をかける。一同の視線が中也に集中した。そ
れに構わ
ず、中也はゆっくりと地面に向って降り始める。肌寒くさえ感じら
れる気温
にも関わらず、気がつけば額に汗が浮かんでいた。全身を耳にして、
近づい
てくる気配がないか聞き耳をたてる。吹き抜ける風に梢が揺れた。
思い出し
たように、羽を鳴らす虫の音が鼓膜を震わせる。森は、まるで死に
絶えたよ
うに静かだった。片足が地面につく。握りしめていた蔓を放し、上
方を見上
げて、仲間に降りてくるよう促した。
（ああ～、怖かった……）
二本の蔓を伝って仲間たちが木の枝から降り始める中、中也はと

ころどこ

ろに散乱している自分たちのカバンを拾いあげる。その中のひとつ、幼馴染

のシヴァのカバンから、本人に断りなくライターを取り出した。彼が未成年

者にあるまじき嗜好の持ち主であることは、長年の付き合いで了承済みだ。

カバンの中には数冊の冊子が入っている。入学式のために事前に渡された案

内書だ。それを丸めて火を付ける。集めた木の枝の上に置くと、じわりと音

をたてて葉が燃えはじめた。微かな黒煙が、宵闇を汚していく。

「急ごう。レウスが来る」

中也に促され、それぞれ頷いた。視線の端に見える少女の遺体に視線を向

ける。

（せめて名前くらい……知りたいな……）

そんな風に思って、中也は四方に転がったカバンのひとつを拾い上げた。

裏返せば、名前が記入してある。

（リン、か……）

カバンを地面にそっと下ろし、溜め息をつく。葬式以外で人の死体を見た

のは初めてだった……。

「建物の方向は南だ～ぞ。北極星があそこにあるから、目的地はあっちだ～

な」

シヴァが指差した空には木々の梢の間から星空が覗いている。中也には正

直、どれが何の星なのかさっぱり分からないが、こういうことに関してはシ

ヴァの方が詳しい。一同はシヴァの先導で暗い森の中を歩き始めた。

「でも、夜中に樹海を歩くなんて危険すぎない？」

押し殺したような声で、光宮がそう呟いた。確かに、周囲は見渡す限りの

暗闇。これでは、ランポスが近くにいても全く分からない。いきなり闇の中

からその蹴爪に襲いかかられるかもしれないと思うと、それだけで全身に緊
張が走る。
「なるべく早くレウスから距離を取って、また高い枝の上で夜が明けるのを
待とう」
無意識に顎へ伝う汗を拭って、中也はそう答える。彼の後ろで、エマニエ
ルが自分のカバンを抱きしめるようにして歩いていた。どこか遠くで、何か
の断末魔が響いた。鳥か、あるいは小型の草食獣が倒されたらしい。身が竦
む思いで、震える足を前に押し出す。
「ねえ、私、お手洗いに行きたくなっちゃった～」
樹海の腐葉土の上を、硝子の靴で歩く朱宮がいきなりそんなことを言い出
して、中也たちは一瞬、何を言われたのか分からなかった。
「ガマンしなさいよ！」

音量は抑えてあるが、自らの双子の姉に向ってそう言った光宮の声には、

あからさまな苛立ちが含まれている。

「ムリだよ～」

耳に届く朱宮の声音はどこか泣きそうな雰囲気。朱宮は王宮で蝶よ、花よ

と育てられた王女様だ。我慢しろと言われることは普通に考えて少ないだろ

う。しかし、レウスが近くにいると分かっているうえに、どこにランポスが

潜んでいるか分からないというこの状況で、足を止める勇気がなかなか持て

ない。獲物を巡っていがみ合うような声がする。近くに肉食獣がいることは

間違いないのだ。

「もうムリ～！」

朱宮の切羽詰まったような声に触発され、自然と中也たちに焦りの色が浮

かび始める。気がつけば、樹海のただ中で歩みが止まってしまった。

「どうするんだ～？」

シヴァに問いかけられても、答えなど出てくるはずもない。

「もうガマンできな～い！」

右往左往してしまう中也たちの心情など、どこ吹く風。止める間もなく朱宮は木立が立ち並ぶ樹海の奥に向かって走りだしてしまった。

「あのバカ！　レイとルナ、悪いけど付き合って！」

いきなり名前を呼ばれ、二人は一瞬、驚いた顔をするが、すぐに朱宮の後を追う光宮に従った。

「この辺で待ってるから～な！」

走り去っていく彼女たちの背にシヴァがそう言うと、レイが軽く手を上げて答えた。

「お姫様ってのは、大変だ～な」

「そうだな……」

残された中也たちは、それぞれ溜め息を零していた。

「シヴァ、それよりレウスはどれくらいの位置にいた？」

「ランポスの襲撃があった位置から北西方向に百メートル程度の距離だ～な。

俺が見た時には西側に向っていた～ぜ。ただし、相手は生き物だから気分次第

で変わるだろ～な」

それはそうだ。西側に向かっていたという情報は当てにならない。

「早く……早く行こう」

エマニエルが押し殺したような声を絞り出す。彼に目をやれば、暗闇の中で

もはっきり分かるほど全身を小刻みに震わせていた。

「おいおい、お姫様たちを見捨てるのか～な？」

「僕は……僕には……輝かしい未来があるんだ……。軍学校を卒業した暁には

上等兵として雷都の冬軍、地方統括補佐の地位がすでに約束されている……。

今こんなところで、死ぬわけにはいかないんだ……」

「あっそうか～い」

彼は夜空を見上げて息をついた。

「ああ……タバコが吸いて～な」

「ガマンしろよ、シヴァ。臭いがあるものは危険だぞ」

「分かってま～すよ」

そう言って、中也はふと思い至ったことがある。

「なあ、食い物とか、持ってねえよな？」

「なんだ、中也。腹減ったのか～な？」

「違うさ。もし持ってるなら、早目に処分した方がいいと思ったんだ。ヤツら、臭いに敏感じゃないはずないだろ？」

「そういうコトか～と。俺は持ってねえ～よ」

中也は視線を逸らして夏葉に無言で問いかける。彼は黙ったまま首を振った。

続いてエマニエルに視線を向ける。

「も、持ってるよ。朝方、ばあやが昼に食べるようにと用意してくれたんだ。

学生食堂なんかで食事するわけにはいかないからな。静羅（しずら）の特注品だ。悪い

か？」

「さっさと捨てろ」

静羅、とは帝都の商い通りでも有名な料亭である。けれど、そんなことは

どうでもいい。人間に嗅ぎ取れない臭いでも、モンスターには気づかれる。

慌てたようにカバンから静羅の特注品だという弁当を取り出したエマニエル

は、捨てろ、と言われて足元の地面に弁当箱をポトリと置いた。

「そんなところに置いても意味ねえだろ。遠くに投げろよ」

中也に言われて、彼は地面に置いた弁当箱を拾いあげ、勢いを付けて放り

投げる。が、しかし。物を遠くに投げる要領を知らないらしい彼のこと。エ

マニエルの手を離れた弁当箱は、１メートル手前の地面に叩き付け

られた。

一同の間に、冷たい空気が流れる。

「俺がやってや～るぜ」

苦笑を隠せないシヴァが弁当箱を拾い上げ、自分たちの進行方向とは逆の

方向に向って投げ捨てる。大きく弧を描いた弁当箱は、木立の遥か向こうへ

と消えて行った。

「……懐かしいな」

ふと、そんなことを呟いたのは夏葉だった。

「懐かしいって？」

「いや、昔、静羅にいたから」

何となく聞き返せば、彼は少しばかり逡巡する様子でそう答えた。

「静羅にいた？　親が静羅で働いていたとか？」

夏葉の言葉が気になって中也は思わず問い返していた。普通に考えれば中

也たちの年齢であれば、小塾に通っているのが当たり前だ。だから

こそ、軍

学校の入学に必要な書類として小塾の推薦書が求められる。推薦書、と言え

ば聞こえはいいが、実際は軍学校に入学しようとする者がきちんと小塾に通

っていたという証明書のようなものだ。そう考えると、自分たちの年齢で本

人が静羅にいた、というのは不思議な話だ。あり得るとしたら両親が働いて

いたとしか思えないのだが……。

「違う。下働き」

「え？」

返ってきた答えに中也は思わず目を丸くした。

「なんだ、お前。朱民（元・難民）か？　どうして朱民が伝統あるアルテリ

アの軍学校に入学を許可されるんだ？　裏口か？」

「うん、そう」

エマニエルの皮肉に、夏葉はごく真面目に頷いた。それに顔色を

変えるの
はエマニエルの方だった。
「認めるのか？　僕の父は冬軍官（警察官）だ。そういった不正は認めない。
無事に帰れたらお前を告発するからな！」
「別に、法律には違反してない」
「バカを言うな！　朱民がアルテリアの軍学校に入学すること自体、違反だ
ろう！」
「バカはお前だろ、エマニエル。もともと朱民でも、アルテリアの国民にな
る方法がないわけじゃない。アルテリアの国民と結婚するか、養子になるか。
そういうことだろ？」
興奮したようなエマニエルの言葉を遮って夏葉に問いかけると、彼は黙っ
て頷いた。
「それって裏口って言わないんじゃねえのか～な」

「そうなのか？」

「そうそう。裏口っていうのは、金を握らせて黄証（イエローカード）を買ったヤツのことだ～ぜ。養子になったっていうなら、別に問題な～いぜ。あ、違う。結婚の方か～な？」

「両方」

シヴァがそう言うと、夏葉がサラリとそう答えた。思わず中也がシヴァの方を見ると、彼は暗闇でもそうだと分かるくらいニヤリと笑って見せる。

「あんた、左手の薬指に指輪してるもんな。婚約中って～か？」

「うん」

気が付かなかった。こういうところは、シヴァの方がよく見ていると思う。

そういえば、自己紹介をした時、シヴァは夏葉を興味深そうに眺めていたような気がする。

「光宮さんとえらく仲がいいだ～ろ？　もしかして～って思ったけど、お姫
さんは指輪してないから違うみたいだ～な。なあ、相手はだ～れだ？」

この状況でよくそんなことばかり言えるものだとシヴァには呆れる以上に
感心させられる。しかし、夏葉の婚約者には少しばかり興味が湧いた。なに
せ本人がこれだけ綺麗な姿をしているのだから、やはり相手となる人もそれ
なりに美人なのだろう、とそう思ったからかもしれない。もちろん、名前を
言われたところで顔を知らなければ意味がないのだが。

「将兄」

「は？」

中也は言葉に詰まった。隣で、エマニエルも呆けたような顔をしている。

「え？　なんで？　あんた……あれ？」

頭が混乱して意味もない言葉を口走ってしまう中也。詳しく話を

聞こうとし

た時、ふいに森が揺れた。

「か、隠れろ……！　隠れろ……！」

中也たちは慌てて木の陰に身を寄せる。木が揺れる音がする。地面がかすか

に振動している。枝の固まりが地面に落ちる盛大な音がする。何か大きなもの

が、こちらへ向かっている。真っ先に思い浮かんだのが、レウスの存在だった。

息を殺して体を硬くする。見つかったら、ひとたまりもない。自然、早くなる

呼吸。額に冷たい汗が滲んだ。

（やばい……レウスだ……！）

やがて中也たちが身を潜める木の向こうに、のっそりと巨体が現れた。中也

は慎重に顔を動かし、様子を窺う。炎のような赤い鱗が朧な月光に反射して、

毒々しい色合いを醸し出していた。今は折りたたまれた翼膜に、長い尾。その

姿は、まさに絵で見たリオレウスそのものだった。風が吹く。肉食獣に特有の
腐ったゴミのような臭いが鼻腔を刺激した。風向きは、中也たちに味方してく
れている。じっと息を潜め、レウスが通り過ぎるのを待つ。息遣いが聞こえて
くる。低い、唸るような声だ。
（でかい……本物だ……！）
レウスはすぐ傍にいる。ここには、柵も檻もない。巨大で、しかも動猛な肉
食モンスターの前に、自分の身を守るものは何もない。無意識に、震えだそう
とする体を強く拳を握りしめてやり過ごした。今までの人生の中で、これほど
時間が遅く感じられたことはなかった。
（なんとか、なった、か……？）
レウスの巨体が森へ消えていく。地を揺らす足音が遠ざかって行くのを確認

し、中也たちは体の力を抜いた。エマニエルが地面に座り込む。シヴァが額の
汗を拭う。まるで恐怖が汗と一緒に流れ出るかのように、どっと背中が濡れた。

「気付かれずにすんだな……」

「でも、レウスが向かった方向、お姫さんたちが走って行った方向だ～な？」

シヴァの言葉に、解けたはずの緊張が再び全身に駆け巡った。

「遅いねえ～。いったいどこまで何しに行っんのか～な」

邂逅5

宵闇に包まれる帝都。その中心部にある王宮は、かつてないほどに浮足立っていた。

「伝令を飛ばして国内を捜索させましたが、今のところ有力な情報は上がっておりません」

廊下から漏れ聞こえる喧噪とは対照的に、冬軍将の声音はひどく落ち着いている。一方、その言葉を聞いた玉座の住人は顔を紅潮させ、握りしめた肘掛を掴む手が震えだす始末。

「なんだ、その結果は！　アルテリアの冬軍はその程度なのか！　朱宮が城下に降りて目立たないはずはないではないか！　どうして見つけられない！」

「いいから、少し黙ってろ」

国王に向かって溜め息交じりに呟いたのは、将兄。国王は更に顔

色を変色さ
せる。

「秋軍（空軍）の方はどうだ？」

将兄に問いかけられた褐色の肌に水色の髪の男は、床に膝をつき、顔を伏せ
たままの姿勢で静かに言葉を紡ぎだす。

「ギルドが把握している一部に関してはカプラスを飛ばして上空から捜索させ
ましたが、それらしい人影は発見できておりません」

「そうか」

フィールドは広い。そして危険だ。ギルドが把握しているエリアは、果てし
なく広がるモンスターの世界の、ごく一部に過ぎない。捜索が長引けば、捜索
隊の方にも危険が及ぶ可能性が高い。

「秋軍をすべてフィールドへ向かわせろ！　春軍（陸軍）と冬軍（警察）でア
ルテリア国内をすべて捜索するんだ！　何をしている！　さっさと

行け！」

「やかましい」

将兄に冷たく一瞥され、思い余った国王は玉座から滑り降りるようにして立ち上がると、自らの半分も生きていないだろう将兄の傍へと歩み寄り、その秀麗な顔立ちを見上げる。

「お前にいったい何が分かると言うんだ！　今ごろ朱宮がどんな気持ちでいるのか、お前は考えもしないのか！　軍は王族を守るのが務めだろう！　どうして朱宮を探さない！？　だいたいお前のような若造が将兄だと！？　笑わせるな！　わしの権限を持ってすれば、お前ごとき今すぐにでも首を刎ねてやるこなど、たやすいのだぞ！」

「どうやって？」

襟元にしがみつく国王を引き離し、将兄は軽く笑う。

「俺をどうにかするとしたら、実際に動くのは軍だ。冬軍将、国王陛下はこう
おっしゃっている。俺を拘束するか？」
「お断り申し上げます」
顔を上げることさえしないまま、冬軍将ははっきりとそう言い放つ。それは、
国王の命令には従わない、という軍の意思表示に他ならない。
「心配しなくてもお姫さんたちの捜索はしてやる。だから、お前は余計な口は
利かず、黙ってそこに座っていればいい。分かったか？」
取って付けたような笑顔を国王に向け、将兄は軍将たちを振り返る。
「フィールドに出た秋軍と春軍はいったん退却させろ。夜明けと同時に二班を
送れ。夏軍（海軍）の三軍で秋軍に物資の補給。春軍と冬軍は引き続き国内の
捜索にあたれ」
「は！」

「とりあえず、できることはそれくらいだな。あとは向こうの出方次第だな」

将兄の言葉を受けて、退室しようとしていた軍将が揃って足を止める。

「お姫さんを攫ったのがファーナの差し金なら、そろそろ要求が突きつけられてもおかしくはないころだ。秋軍将、旅の支度をしておけよ。全面戦争は回避するに越したことはない」

軍人らしい動作で一礼し、軍将たちは立ち去って行った。その様子を見送った後で、将兄は、顔を紅潮させたまま無言で佇む国王に向き直る。

「今回の件、ファーナが絡んでいるとしたら、お姫さんの命は絶望的だな」

薄く笑い、国王に向ってそう言い捨てる。先ほどまで紅潮していたはずの国王の顔色が、途端に蒼白になった。

「そんな……そんな……朱宮……」

膝が震えだす国王の様子に、将兄はさもおもしろい物でも見たよ

うに声を出し
て笑った。
「バカもここまで来ると貴重だな」
言いながら、彼もまた踵を返して退室していった。諸外国が絡んでいるとした
ら、朱宮は貴重な取引材料。そう簡単に殺すはずはない。国王アルテリア１３世
がそんな単純なことを理解する日は遠いようだ。
＊
一方、木立の奥へと走りだした朱宮を追った光宮たちは、ようやく朱宮を捕ま
えることに成功していた。すぐ近くで済ませればいいものを、何を思ったのか、
朱宮はあちらこちらへ走り回り、気が付いた時には随分、中也たちから離れてし
まっていた。
「すっきりした～」
げんなりした様子の光宮たちに向かって、朱宮は輝かんばかりの

笑顔で用が済
んだことを告げてくれた。
「さあ、みんなのところに戻ろうよ」
やれやれ、と腰を上げる光宮、レイ、ルナ。そして、三人が三人とも違う方向
に歩きだそうとして、顔色を変えた。
「そっちじゃない。こっちでしょ？」
「違うだろ。こっちだって」
「何おかしなこと言ってるの？　こっちよ」
三人は顔を見合わせる。これは、かなり危険な事態になってしまった。声には
出さず、誰もがそう思う。しかし。
「あら？　もしかして私たち、道に迷ってしまったの？」
誰のせいだ、とは思っていても口には出せない。この事態を招いた張本人だけ
は、まるで危機感のない顔をしている。
「どうしよう……」

光宮が無意識に呟いた時、森の向こうから木々を揺らす盛大な音が聞こえてきた。

「確か……近くにレウスがいるって赤毛の兄ちゃんが言ってたよな……」

顔色を無くしたレイが微かに震えた声でそう口にする。言われなくても分かっている。早くどこかに隠れなければ、と、そう思った時のこと。

「きゃあああああああ！！！！」

朱宮の絶叫が静かな夜の森に迸って、彼女たちは更に顔色を無くす。

「姉さん！　静かにして！」

慌ててその口を押さえようとするが、朱宮は両手を振り回して暴れ出してしまう。

「いやああ！！　放して！！」

「ちょっと！　頼むから静かにしてくれ！！」

押し殺した声で、レイが背後から朱宮を押さえつける。横から光宮とルナが口を

塞いだ。力任せに抑え込めば、ようやく朱宮が大人しくなる。

「木の陰に隠れ……」

光宮がそう言った時のこと、木立を割り開くようにして、レウスと思しきモンス

ターがのっそりと姿を現した。まさしく正面。その瞳は思いきり彼女たちを見据え

ている。四人は固まった。成す術がない。体中から汗が噴き出す。全身が小刻みに

震え出していた。

獲物を見据えたレウスは、ひどくゆっくりとした足取りで、一歩を踏み出した。

真っ直ぐに、動くことさえできずにいる彼女たちの方へと向かって来る。レウスが

一歩を踏み出す毎に、地面が揺れ、その振動が体に伝わってくる。額に汗が滲む。

恐怖のせいで、歯が噛み合わない。手を伸ばせば届くような位置に、レウスがやって

来た。鼻腔を刺激する腐臭。月光の元、赤いはずの鱗が黒く濁って見えた。喉をなら

すような音が聞こえる。ひどくゆっくりとした動作で、レウスが頭を下げる。光宮た

ちのすぐ目の前に、巨大なレウスの顔が突きつけられた。

（こわ、い……）

レイの腕の中で、朱宮が気を失った。支えることができずに、彼女の体はそのまま

地面に音を立てて転がってしまう。レウスの視線が朱宮に向かう。頭を下げて、その

臭いを嗅いだ。続いて、レウスは顔を上げ、無言で固まっている三人の臭いを嗅いで

いく。目の前にあるレウスの顔。鼻の穴が、息を吸う度に開いたり、閉じたりしてい

るのが見える。レウスが緩く口を開く。気が遠くなりそうになるのを、必死で堪えた。

無意識に、三人は互いの手を痛いような力で握りしめていた。緊張で、握った手がじ

っとりと汗ばんでいく。

（誰か、助けて、よ……）

鋭い牙は黄色く汚れていた。いつ喰ったともしれない獲物の肉がこびりつき、腐臭を放っている。牙の間から赤黒い舌が現れる。生暖かい息が吐き出される。気分が悪くなるような悪臭だった。

（しっかりしなくちゃ……！）

だしぬけに、レウスが咆哮を上げる。鼓膜が破れそうなその音量に、彼女たちは思わず繋いだ手を放して自分の耳を覆った。

「逃げましょう！！」

大音量に麻痺した聴覚に届くように、光宮は声を張り上げる。隣にいたレイが、足元に視線を落とし、躊躇なく朱宮を肩に抱え上げた。

「木の陰へ！」

レウスが尻尾を振り回す。大木が折れて、静かな森の中に轟音が響き渡った。降り注ぐ、木の葉。落ちてくる太い枝で頭を打たないように気を付けな

がら、三人はレウ
スから距離を取る。手近な木の幹に張り付いた。獲物を見失ったらしいレウスがあら
ぬ方向を見ている隙に、更に離れた木の裏へ張り付く。しかし、彼女たちの背後から
吹く風が、レウスに居場所を知らせてしまう。狂ったように尻尾を振り回していたレ
ウスが、光宮たちのいる方向に向って突進し始めた。

「マズイ！　避けて！！」

光宮とルナが左方向へ。朱宮を抱えたレイが右方向へ飛ぶ。木を薙ぎ倒しながら、
レウスは彼女たちの間を通りぬけた。

「こっちよ！　風下へ！！」

レウスが風上に行った。これで、少なくとも臭いは届かない。レウスの背中を見な
がら、素早く身を起こした光宮がレイの腕を引っ張る。その脚に、えぐれたような傷
を見つけた。転んだ時に枝で切ったか、あるいはレウスの爪に引っ掛けられたか。見

る間にレイの白い脚が血に染まり、地面に血だまりを作った。光宮は彼女の肩に体を
入れて支える。その横で、ルナが未だに目を覚まさない朱宮を背におぶっていた。

「静かに！　動かないで！」

レウスが身を起こす。見失った獲物を探して、再び尻尾を振り回し始めた。レウスが
自分たちから視線を逸らしている隙に、さっと身を移動させて幹の裏へ。風の方向に気
を付けながら、慌てず、徐々にレウスから距離を取っていく。レウスがあらぬ方向に突
進する。その逆方向へ体を移動する。身を起こしたレウスに気付かれないように、じっ
と息を殺して身を潜める。レウスが咆哮をあげる。その視線が自分たちを見ていないこ
とを確かめながら、更に距離を取っていく。

「レイ、大丈夫？」

「悪いね、お姫様」

「その呼び方、やめてよ。姉さんと一緒にされたくないの」

とりあえずレウスの姿が木立の向こうに見えなくなる位置まで距離を取ったことを

確認し、光宮は支えていたレイの体を地面に座らせる。手早く傷を確認するが、暗い

のでよく分からない。しかし、出血が止まりかけているところを見ると、最悪の怪我

ではなさそうだ。応急処置として、カバンの中からタオルを取り出し、傷ついた脚に

巻きつける。

「後で綺麗に洗わないと。動ける？」

「あたしはそんなにヤワじゃねえよ」

強気の発言に光宮は軽く笑う。そして、再び彼女の肩の下に体を入れて立ち上がら

せた。

「水、が必要ね」

傷口の洗浄だけではない。生き伸びるために、水は必要不可欠だ。しかし水辺は肉

食モンスターの狩り場だ。怪我人を連れて行くにはリスクが高すぎる。だが、モンス
ターに傷つけられたかもしれない傷をこのままにはしておけない。
それでなくとも汚
れた傷口を放っておけば、そこから毒を持った血が全身を巡って体を害する（敗血症）。
それは、できるだけ避けなければならない。光宮は無意識に唇を噛みしめた。

「とりあえず、休める場所を探そうよ。王女様っていうか、あんたの姉さんに失礼か
もしれないけど、いいかげん重いよ、この人」

「そうね」

ルナに言われ、何となく光宮は二人に申し訳ない気持ちになってしまっていた。そし
て、どこへ向かうべきかを考え、真っ先に建物、という言葉を思い出した。

「……シヴァって言ったかしら。あの赤毛の人。彼が言ってた建物に着けば、薬品があ
るかもしれない。傷の手当ができるわ」

思いついたままを口にすれば、ルナが呆れたように笑った。

「希望的観測だね」

「まあね。ないよりマシよ」

この時点で、光宮は中也たちと合流するという選択肢を諦めていた。レウスに襲われ、方向など関係なしにとりあえず逃げてきたのだ。今更、来た道を戻ることに意味はないし、戻れるとも思わない。だとしたら、無理に合流しようとするよりも目的地を目指した方がいい。それに、彼らもそこに向かうと分かっている。

「とりあえず、一晩しのげる場所を探さないとね」

「やれやれ、だな」

光宮に支えられながら、レイが呆れたように呟いた。

邂逅6

闇に沈んだ木立の向こうから、派手な音が聞こえてきたのは、レウスを
やり過ごして半時も経たないころだった。その前には、女の子の声と思わ
れる悲鳴が冷えた空気を切り裂いて鼓膜を揺るがす。

「こりゃあ、マズイんじゃないか～な」

悲鳴が上がった方向を見ながら、シヴァが人事のように呟いた。

「助けに……」

言いかけて中也は口を閉ざす。自分たちが行って、レウス相手に何がで
きるというのだろう。悩んでいるうちに、木々が薙ぎ倒される盛大な音が
聞こえてくる。

「助けに行こう」

「冗談じゃない！」

中也の言葉にエマニエルが血相を変えて反発した。

「相手はレウスだぞ？　僕たちに何ができると言うんだ！　みすみす死に
行くようなものじゃないか！　それとも君がエサになっている間に姫君た
ちを逃がそうとでも言うつもりなのか！？　だったら一人で行け！
　僕は
ゴメンだ！　絶対に行かないからな！」
「だったらお前は来るんじゃねえ～ぞ」
　シヴァが歩き出し、中也と夏葉がそれに続く。それを見て、中也の背後
でエマニエルが身を千切るような声を絞り出すのが聞こえた。レウスがい
ると分かっている場所へ行くなど、冗談ではない。しかし、こんなところ
に一人で置き去りにされるのも嫌だ。それに、どちらに向ったらいいのか、
それさえも分からない。彼が考えていることは、おそらくそんなところだ。
エマニエルは無意味に左右を見渡し、地団駄を踏んで独り言を呟い

た挙げ

句、結局、中也たちの後を追いかけてきた。

「レウスのヤツ、派手だな」

中也は周囲の森を見渡しながら、小さく呟いた。レウスがどちらに向か

ったのか、考えなくとも分かる。レウスが通った後の森は、枝が折れ、足

元の苔蒸した地面には巨大な足跡が付いていた。そこかしらに散らばった

木々の枝と、薙ぎ倒された木。翼の鉤爪で傷つけたのか、爪跡らしきもの

が走っている木もあった。

「樹海にレウス？」

レウスが主に生息しているのは、火山だと聞く。灼熱地獄の火山で生き

られるのだから、樹海に現れても不思議ではない。だが、何となく腑に落

ちないものは感じた。

「いないようだ～な」

彼らは森の中の一点で立ち止まる。そこは、派手に木々が薙ぎ倒され、

折れた枝が盛大に散らかっていた。レウスが暴れたのはここだろうと目測

を付けるには、充分だった。

「血がついてる」

それとなく周囲を検分した中也は、地面の一か所に小さな血痕を見つけ

た。触って見ると、まだ乾いていない。指先に、粘つくような感触が付着

した。

「誰か、怪我したかな」

「怪我、だったらいいけど～な」

シヴァが不吉なことを口走る。しかし、その可能性は否定できない。

「死体がないじゃないか！　い、生きているさ！」

震える声でエマニエルがそう言ってくるが、現実は、大型の肉食

獣に
襲われた場合、その現場には何一つ残らないということの方が多い。
し
かし、敢えてそれを教えてやる気にはならなかった。
（教えてやっても怖がるだけだよな……）
ランポスなどとは違い、レウスほどの大きさがあれば人間を細かく千
切って喰らう必要がない。多くて三回。たったそれだけ、その強靭な顎
に捕らえられれば、人間の体は簡単に引き裂かれ、丸飲みにされる。あ
るいは、巣に連れて行かれて、そこで餌になる。そういうものだ。大量
の血が噴き出し、現場に惨憺（さんたん）たる痕跡を残す暇はない。
「血……こっちに続いてる」
屈みこんだ中也の背に夏葉の静かな声がかけられた。身を起してそち
らへ向かえば、木の幹に近い場所に再び小さな血痕が見える。先ほどの

血痕は地面に広がっていたが、ここにある血痕は数滴ほどだ。それを見
て、中也は一つの結論を導いた。
「木の幹に隠れながら逃げたって可能性が高いな」
中也が言うと、エマニエルが血相を変える。
「そ、それなら血痕を辿れば合流できるんじゃないか！　早く行こう！
姫君を助けないと……！」
「無駄だよ」
小さく溜め息をつきながら、中也はエマニエルの神経質そうな顔に視線を向けた。
「最初に見つけた血の量からして、けっこうな深手だ。でも、怪我したヤツはここまで移動してる。だとしたら、その場にいた誰かが手を貸したんだ。で、ここに落ちた血。上から垂らされたような感じだ。だとしたら、怪我したヤツは立っていることになる。怪我人を庇いながら、レウスの目を避けて移動する。冷静だよな。そういうことがで

きるヤツなら、ある程度の距離を取ったら、すぐに怪我の手当をするだろう。だとしたら、血痕はそこで途切れる。樹海の真ん中で、いつまでもその場に残っている可能性は低い。すぐ移動する。だったら、追いかけるだけムダだ」

「目的地はひとつだしな～と。それに、俺が見つけた建物に行けば、怪我の手当ができる薬品があるかもしれない。普通はそう思うものさ～な」

「決まりだな。少なくとも、二人は生きている」

中也はシヴァを見る。彼は空を見上げて、向かうべき方向を指差してみせた。

「問題は、女の子たちが北極星を見つけられるかってことだ～な」

「それは、たぶん大丈夫」

夏葉が静かに言った。

「光は、知ってる」

「あっそう。なら心配いらねえ～な」

光宮が生きていればの話だが、と思ったが口にはしない。こういう状況では、意味もなく悪い方向に結論を出すべきではない。

「四人ともあの建物に来るさ。先に行って待っていようぜ」

「そうだ～な。しかし、お姫様、たかだかションベンするのに、何でこんなところまで来たんだろ～な」

シヴァが呆れたように、そう呟いた。

＊

「第三倉庫・穀物類……？」

樹海のただ中において、そんな有り得ない言葉を見つけたのは、レウスの襲撃を受けてからしばらく経ってからのことだった。ずいぶん歩いたような気がするが、レイが足に怪我を負い、ルナが背中に朱宮を背負っての道中。思うより距離が進んでいないのは明らかだ。おまけに、闇に沈む森の中に襲撃者の気配を探りながらのこと。神経をすり減らすような過程を思えば、実際よりも距離を稼いでいないと考えた方が普通だ。

「何でこんなところに倉庫があるのよ……」

それは巨大な岩壁をくり抜くようにして造られている。ドアは鉄鉱石で、見たところカギはかけられていない。ドアの取っ手を回すと、

鈍い音を立てて簡単に開いた。

「中を見てくる。すぐに戻るから、待ってて」

支えていたレイの体を岩にもたれかけ、光宮は一人で倉庫の中へと入り込んだ。

「気をつけなよ」

背後からかけられるルナの声に、小さく頷いて返し、壁を背にしてゆっくりと足元を探りながら進んで行く。明かりはない。月明かりも届かないので、視界は真の闇だ。靴底に感じる感触からすると、地面ではない。おそらく、床だけでなく壁も天井も、アルテリアに一般的な建造物と同じく鉱石で覆われている。

（しばらく、使われてないみたいね）

何とも言えない埃の臭いが鼻腔を刺激する。足元に気を付けながら進んでいくと、やがて背に付けた壁が緩くカーブしていくのが分かった。

「……」

全身を耳にして、気配を探る。倉庫の中に音はない。見つめてくる視線も感じない。耳に届くのは不規則な自分の呼吸と早鐘のような鼓動だけ。足を交差させながら、じわりと進む。壁はやはりカーブしている。

どうやら円形の建造物のようだ、と察しを付けたところで、いきなり光

宮の腰に堅い物が当たった。

（な、何よ……、もう……）

手に触れてみると、それは木の感触だった。どうやら机か、あるいは

小さな棚のようだ。それを押しのけ、再び壁伝いに歩いて行く。足が何

かを掠った。硬質な音がする。おそらくは硝子のビンだ。再び一歩を踏

み出す。何もない。

（期待はずれ、ってとこかしら）

倉庫、という言葉に僅かばかり持った期待は、どうやら裏切られる方

向に働きそうだ。だしぬけに、頭を何かにぶつけた。手探りで触ってみ

ると、再び木の感触が伝わってくる。この位置に木の感触があるのが不

思議で、更に詳しく調べれば、指に取っ手が触れた。押してみるが、び

くともしなかった。

（窓、よね？）

逆に引っ張ってみると、鈍い音を立てて開いた。やはり窓だったらし

い。暗闇だった室内に、月光が差し込む。視界に、空洞と化した円形の

石造りの建物が映った。転がっているのは、目星を付けた通り、壊

れた

机と硝子のビンだけ。その他には何もない。光宮は、無意識に止めてい

た息を大きく吐きだした。

（？）

ふと、指に何か蠢く感触があったので、視線を向ける。小さな青虫が

指の上を這っていた。僅かに眉を顰めて、青虫を払いのけた。

「夏葉だったら、気絶しちゃうわね」

はぐれてしまった友達の顔を思い浮かべ、光宮は軽く笑う。そして入

口の方へ向かって歩き始めた。見たところ頑丈そうな造りをしている。

レウスが本気で襲って来ない限り、崩れることはないだろう。とりあえ

ず、ここで一晩は凌げそうだ。

「大丈夫よ。中に入って」

声をかけると、疲れたような顔をしたレイとルナが立ち上がる。

地面
には、光宮の双子の片割れが安らかな顔で転がされていた。

（困った姉さんだわ、ホントに）

倉庫の中に入ってドアを閉める。状況に好転は無いが、これでよ
うやく
一息つくことができそうだ。

「レイ、怪我の具合はどう？」

声をかけながら、床に座り込んだ彼女の脚を改めて確認する。朧
な月光
の元、血と泥に汚れた傷口が見えた。洗い流した方がいいのは分か
ってい
た。しかし、どこにあるともしれない水を探して、闇夜の樹海を歩
くのは
危険すぎる。無謀すぎる行動で、簡単に失っていい命など、自分は
持ち合
わせてはいない。

「動く？」

「ああ、心配ないよ。悪いな」

手を添えて軽く動かしてみる。レイは僅かに顔を顰めるが、靭帯の切断
や骨の損傷には至っていないようだ。続いて彼女の額に手を当てる。汗ば
んでいたが、特に熱がある風ではない。血が毒を持ち始めれば、真っ先に
高熱が出る。今のところ、その心配はなさそうだ。

「体力に自信は？」

「もちろんだよ」

「なら、がんばってね。熱を出したら、縄をかけて引きずって行くわよ」

「期待してる」

レイは苦笑して、背中を壁に預ける。隣に並んだルナが大きく息をつく。
その様子を見た後で、光宮は窓の外に視線を向けた。硝子は入っていない。
樹海の匂いが鼻腔をついた。

「悪いけど、窓は閉めるわね」

なぜ、とは言わなかった。血の臭いが、ランポスたちに届くことは避けたい。そのために、一時的に暗闇になることは避けられない。

「夜が明けたら、動くわ。それまで、少し休みましょう」

邂逅7

「ところでさあ……」

レウスが光宮たちを襲撃したと思われる場所から少しばかり南へ進んだ

位置で、中也たちは大木の枝によじ登っていた。要領は、レイとルナがや

って見せたのと、ほぼ同じ。ただし、最初に枝に登ったのは夏葉で、彼を

押し上げたのはシヴァだった。夏葉が蔓を下ろし、地面に残った三人がそ

れを伝って木の上方に登った。そこから更に上方へ。レウスの頭よりも高

い位置で、大木の幹に体を預け、とりあえず周囲が静かなのを確認すると、

今まで張りつめていた緊張の糸が緩んで、ようやく息をつくことができた。

「さっき、聞きそびれたんだけど、あんた……将兄の婚約者ってマジ？」

隣にいる夏葉に問いかけると、言葉もなく頷いた。

「冗談だろ？　第一、お前は男じゃないか！」

中也の上の枝に跨ったエマニエルが、相変わらず神経質そうな顔でそう

言ってきた。彼はひたすら制服の埃を落とすことに専念している。枝のよ

うな手指が、やたらせわしなく体中を行き来していた。

「男じゃない」

「バカにしているのか！　ならどうしてスラックスを履いているんだ！」

「スカートが嫌だったから」

「そんな話があるか！　女性だと言うのならスカートを履くべきだろう！

そんないい加減な意識で軍学校に入学しようなど、笑わせるな！」

「……どっちでもいいって言われた」

エマニエルと夏葉のやりとりを聞いていたシヴァが、ふいに押し殺した

ような笑い声を上げた。

「最初に見た時からもしかしてって思ってはいたけど、あんた、胡蝶(こちょう)だ～ろ？」

シヴァに言われ、夏葉は小さく頷いた。

「やっぱり～な」

そう言ってシヴァは満足げに笑い、夏葉の端正な顔立ちに視線を向ける。

「スカート履いてればバレなかったのに。スラックスなんか履いてるから、ホントに男か～って疑うじゃん。そうは見えないからさ～」

「気分的には男寄りだ」

夏葉の言葉にシヴァは軽く眉をあげた。

「じゃあ何で将兄と婚約なんかしてる～んだ？」

「あんたには関係ない」

はっきりとした答えに、彼は残念そうな溜め息を落とした。

「……相手が将兄じゃあ分が悪過ぎだ～な。あ～あ。せっかく胡蝶とお近

づきになれたんだから、冥土の土産に一発って思ってたのに～な」

「断る」

「はいは～い。分かってま～すよ」

大きく息をつきながら、枝の上に横になるシヴァ。この不安定な場所で、

器用なことである。中也はそっとシヴァに近寄って押し殺した声で話しか

けた。

「シヴァ、胡蝶って何だ？」

中也の口から出た質問に、彼は一瞬、驚いたように片眉を上げ、続いて

苦笑する。

「そっかあ～。中也は記憶喪失だから分からないのか～な」

「だから、記憶喪失じゃねえって言ってんだろ？　で？　胡蝶って？」

シヴァは顔を枝に隠すようにして、再び押し殺した笑い声を上げた。

「胡蝶って、男と女の中間だ～よ。性別が無いって言った方がいい

のか～
な」

つくづく、ファンタジーな世界だと中也は溜め息をついた。この世に、

男と女以外の性別があるなど、とても信じられない。

「天使みたいなモンか……」

今度はシヴァが不思議そうな顔をする。

「テンシ？　何だ、それ」

「いや、こっちの話」

そしてふと思い当る。

「なあ、将兄の婚約者ってことはヤることヤってんだろ？　どこに挿れて

んだ？」

「俺が知るか～よ。胡蝶と言えば誘い通りの高級娼婦だ～ぜ、普通。一般

市民が簡単に手を出せるか～よ。でも、前に鬼龍の子供を産めるのは胡蝶

だけだって聞いたことがあるから、下は女と変わらないんじゃあねえのか

～な。ただし～」

シヴァは悪戯な笑みを浮かべて中也を見やる。

「一度でも胡蝶を抱いた男は二度と普通の女でイケなくなるって言われる

くらいだから、シマリは相当いいんだろ～よ」

「そこに興味があるのは、お前だろ？」

中也は改めて夏葉を見やる。確かに、夏葉は同じ人間だと思えないほど

に綺麗だ。むしろ人間と同じ大きさの妖精だと言われた方が納得できる。

背中に羽がないことが、いっそ不思議なほどだ。

「なあ、夏葉」

僅かながら機嫌が悪そうになっている夏葉に、中也は気がつけば話しか

けていた。

「なに？」

「あ、いや……。えっとお～、そう！　あんた、銀レウスに乗ったことあるのか？」

別に聞きたいことや話したいことがあったわけではない。彼の口から出たのは、どうでもいい内容だった。中也の傍でシヴァが笑っている。

「あるよ。何度か」

中也の内心の動揺を知ってか知らずか、夏葉は淡々とした声で答えた。

「すげーな。どんな感じだった？　やっぱり、最初は怖かったか？」

夏葉は少し考えるような素振りを見せる。先ほどまでの不機嫌さが、僅かに和らいだように見えた。

「大人しいから、怖くはない。でも、飛んでいる時は、寒かったな」

「一人で乗ったのか？　あ、そんな訳ないか。やっぱ速い？」

夏葉は無言で頷いた。モンスターとは無縁の世界で育った中也にしてみ

れば、レウスという名のモンスターの背に乗って空を駆けるということが、

不思議で仕方ない。

「名前とかあるのか？」

「あるよ」

無言で先を促すと、夏葉は軽く笑った。初めて見た笑顔だった。

「俺はピュアって付けたかったんだけど、京さま……いや、将兄が、銀介

って」

銀介、という名前を聞いて、中也だけでなくシヴァとエマニエルも吹き

出した。

「銀レウスだから銀介？」

そう言うと、夏葉が苦笑しながら頷く。中也は、入学式で遠目に見た赤

い髪の青年の姿を思い出していた。

「どんな人？」

聞くと、夏葉は僅かに視線を下に向ける。宙で浮いた脚が揺れている。

月光に照らされる綺麗な顔立ちが、僅かに微笑む。

「優しい、人」

「なあんか、おノロケ話だ～な。他人の幸せな話は耳がこしょばゆいぜ

～と」

木の枝に寝転がったまま、シヴァがつまらなさそうに口走る。シヴァ

の方を見た夏葉は、少し困ったように笑っていた。

「なあ、なっちゃん。無事に帰れたら将兄に銀介に乗せてくれって頼ん

でおいてくれ～よ。それくらいいいだ～ろ？」

「……分かった」

「あ、俺も！」

抜け駆けしたシヴァに慌てて便乗する。夏葉が頷いたのを見て、中也

は何となく笑顔を浮かべていた。

「無事に帰れた暁には、婚約者殿を守った褒美として、ぜひこの僕を軍
の上官として召し上げていただくように、口添えしておいてくれ」
役人根性と下心が溢れ出るエマニエルのセリフに、中也とシヴァは返
す言葉も見当たらなかった。

邂逅8

夜が明けようとしている。眠りという眠りにつくこともできず、窓の向こう

の気配が変わったことを感じ取って、光宮は閉じていた瞼を開いた。

「出てくる」

そう言って立ち上がった彼女を、レイとルナの視線が捉える。二人とも、眠

ってはいなかったようだ。

「水を探しに行く。あんたたちは、ここで待っていて」

「あたしも行くよ。あんた一人で行かせられない」

慌てたようにルナがそう言ってきたので、光宮は軽く首を振って答える。

「ここにレイと姉さんだけを残して行くわけにはいかないでしょ？いざとな

ったら、私を待たずに南の建物を目指して。ルナ、あんた腕時計してるわよね」

いきなりそう言いだした光宮に、ルナはただ頷いた。

「よく聞いて。まず、文字盤を水平に持つ。で、次に時計の短針を太陽に向け
るの。その状態で、文字盤の１２時と短針のちょうど中間が南よ。分かった？」

「そうなんだ……」

ルナは無意識に自分の腕時計を見た。光宮は納得した様子のルナを見て立ち
上がる。情けない話ではあるが、最初にランポスが襲撃して来た際にはパニッ
クになってそのことをすっかり忘れていた。方向を知ることなど、簡単だった
のだ。

「大丈夫なのか？」

壁際からレイの心配そうな声が聞こえてきた。

「平気よ。あんたたちがいたんじゃ、足手まといだわ」

「言ってくれるね」

強気に笑んで、光宮は一人、倉庫の外へ向かう。ドアを開けると、早朝の

森の匂いが流れ込んできた。済んだ空気に、鳥の鳴き声が響き渡る。用心深
く、辺りに視線を巡らせた。周囲には、ランポスやレウスの姿は見当たらな
い。その気配もない。それを確認して、後ろ手にドアを閉めた。

「最初にいた場所からは川の音が聞こえた。そう遠くない場所に、川がある」

独り言を呟いて、彼女は改めて地形を見渡した。周囲には、大木と岩しか
ない。それらから水に繋がるものは連想できない。何とかして最初にいた場
所の近くへ戻ることはできないだろうか、と考え、必死に記憶を探った。

「そう、あの時、シヴァって言ったかしら。彼が確か建物が見えるって言っ
たのよね。建物は南で、ちょうど西日が射していたから……」

光宮はその時の光景をなるべく鮮明に思い出す。その後、自分たちは真夜
中にもかかわらず南へ向けて移動したのだ。そして、朱宮がトイレに行きた

いと言いだして道に迷った。右利きの人間はこういう場所で迷った時、無意
識に左回りに移動する傾向がある。朱宮も右利き。だとしたら、自分たちは
最初にいた場所から見て、南東の方向にいることにならないか。

「目指す方向は、とりあえず北西だわ」

だいたいの目星をつけて、光宮は自分のカバンから筆記用具を取り出した。
その中から、なるべくインク壺とペンを取りだした。

「自分が迷っちゃったら、元も子もないし」

時計で方向を確認する。北東へ向けて歩きだした。途中、手近な木の幹に、
レイたちの残る倉庫の方角と現在の時刻を記す。こうしておけば、帰り道に
は迷わない。周囲に視線を巡らせながら、ところどころに目印を示し、彼女
は一人、樹海の中を歩き始めた。

（怖いところだわ……）

森は不気味なほど静かだった。ふと足元に目をやると、大きなミミズが地
面を這っているのが見えた。時折、鳥の鳴き声が聞こえてくる。風が木立を
揺らす音だけが、耳に響く。静寂の朝、だった。

「あった。カラの実」

視線の先に、子供の頭ほどの大きさの茶色い木の実が地面に幾つも転がっ
ているのが見えた。樹海や密林などの森によく生息している、カラの木だ。
そう珍しい木ではないので、すぐに見つかった。

（水を運ぶには、これが必要なのよね）

カラの実は大きさが大小あり、小さなものはボウガンの弾に使われること
が多い。中央に線があり、力を加えると簡単に割れる。中は空洞で、すぐ
に割れ目をこすれば再びくっ付くという特徴がある。手早く背中のカバン

に大きなカラの実を二つ詰め込み、そして両手にひとつずつ持つ。
一人で
運べる量はこれが限界だ。それに両手が塞がってしまえば、いざという時
に逃げきれない。最悪、持って帰れる水は背中に背負ったカラの実で二つ
分という計算になる。

（傷口の洗浄には、充分だわ）

言いながら、目印を描いた位置まで戻る。そこから時計で北東を確認し、
再び北西へ向けて歩みを進めた。

（薬草でも手に入ればいいんだけど）

傷口にタオルを巻いただけでは不十分だ。本人が敗血症を引き起こすと
いう危惧もあるが、血の匂いを遮断できない。それが問題だ。フィールド
での応急手当の基本は薬草を付けてツタの葉で覆うことだと聞いた。それ
は傷口の保護という目的だけではなく肉食獣の鼻をごまかすという

効果も
ある。薬草が生えているとしたら、水辺。ツタの葉が生えているとしたら、
岩陰だ。どちらにしろ、見つけるのは困難だ。
「まったく、なんでこんなことになったのかしら……」
＊
「夜が明けたな」
大木の梢で、ウトウトしていた中也たちは白み始める空に目を覚ました。
改めて下方を確認し、よく落ちずに済んだものだと感心する。おそらく、落
ちていたら命はない。休む場所については、もう少し見当した方がいいかも
しれない。中也はそう思った。
「で、どうする～んだ。戻ってくるのを待つのか～な？」
シヴァに言われて、中也は迷わず首を振った。
「待つだけムダだよ。森の中では合流できない。目印だけ残して、早目に移

動しよう」

「は～いよ」

言いながら、シヴァは思いきり伸びをした。中也と夏葉は、手近な木の枝

を集めていく。エマニエルは未だに爆睡していた。

「なあ、ちょっと思ったんだけど～な。このツル。ロープ代わりに使えるん

じゃないか～な？　持っていけば、役に立つかもしれない～ぜ？」

「そうだな」

シヴァがツルを手繰り寄せる。手で力任せに切れるようなものばかりを集

めて、それを編み合わせていけば、丈夫なロープに変わる。中也と夏葉がそ

れを手伝った。

「降りよう。俺が最初に行く」

頷いたシヴァが、隣で寝ているエマニエルを叩き起こす。一瞬、寝ボケて

枝から落ちそうになった彼を、慌ててシヴァが支えた。一瞬で、エマニエル
の顔が蒼白になる。
「しっかりしろ～よ」
「う、うるさい。分かっているさ。僕だってこういうことがあるんだ」
「はいは～い」
中也はその様子を見やって、ゆっくり枝を伝って木を降り始めた。周囲に、
特に変わった物音はしていない。自分がたてる物音だけが鼓膜を刺激する。
彼の後に、シヴァ、夏葉、最後にエマニエルが続いた。一番下の枝に足を乗せ
る。そこから改めて周囲を注意深く見渡した。森は静かに眠りから覚めようと
している。中也は蔓に手をかける。
（何も、いないよ、な……？）
ゆっくり、時間をかけて下降する。地面に足がつく。襲いかかってくるもの

の気配はない。上方を見上げる。枝の上でシヴァたちが頷いた。

「ええっと、上から見た限りじゃあ、建物はあっちの方だったよな」

全員が地面に降り立ったのを見て、中也は目的地の方向を見る。
夜であれば

北極星で分かるが、昼間では実際に目的地を目視しながら進むしかない。ちなみに、周囲に生い茂る植物を見ても、だいたいの方角の見当はつく。植物はどうしても日当たりの良い方向に育つので、木の葉が多く茂っている方、年輪の幅が広い方、枝振りが多い方が南だ。あるいは、木や岩の下に生えている苔が多い方が北と言うこともできる。しかし、これらはあくまで方角を知るうえで補助的な役割しか果たさない。目的物が目視できる距離にあるので、面倒だが確認しながら向かった方が確実だ。そちらに向って歩き出そうとした時、夏葉の声がかけられた。

「建物の方向は南東。時計で分かる」

驚いた中也たちに、夏葉は時計と太陽で方角を知る方法を語った。

「なんでそんなこと知ってんの？」

「母さんに、教えてもらった」

「夏葉の母さん、小塾の先生とか？」

「そんな感じ」

内心で感嘆しながら、中也は集めて山にした枝に火をつける。そして、夏葉に教えられた通りの方法で方角を確認しながら歩きだす。先頭はシヴァ。その後ろに中也、夏葉、エマニエルが続いた。方角を確認するのは中也の役目だ。

他の三人はひたすら周囲に注意を配る。

「俺たち、どうしていきなりこんな所にいたんだろ～な。お前、何か見当つい
てな～いか？」

振り返ることさえしないまま、シヴァが尋ねてきた。

「さあね。俺が知るかよ」

言いながら、その時のことを改めて思い出す。入学式で国王の祝辞を聞いて

いた。いきなり目の前が暗くなった。気がつけば、樹海にいた。思い出せるの

は、それだけだ。

「でもまあ、よく考えてみれば有り得ない話だよな。気が付いたら別の場所に

いた、なんて常識じゃあ考えられない。普通に考えれば、入学式の時に睡眠ガ

スみたいなのを撒かれて、寝てる間に連れて来られたっていうのが可能性とし

ては高いけど……」

それはない、と中也は自分の考えを否定する。国王の祝辞を聞きながら急激

な眠気に襲われた覚えはないし、樹海に来た時にも、意識ははっきりしていた。

強制的に眠らされた痕跡は無かった。しかし、そうなると他に思いつく理由が

ない。

「鬼龍（きりゅう）」

静かな声は夏葉からだ。中也は無意識に後ろを振り返っていた。

「夏葉、それは……」

単なる伝説だ、と言おうとして中也は夏葉がひどく真面目な顔をしていること

に気が付いた。

「鬼龍は人と同じ形をしている。だから伝説だって言われる。時空を操れるのは、

鬼龍しかいない。それに、俺はそれらしいヤツを見た気がする」

「え？」

「顔は見えなかった。白い着物に、赤い袴をはいていた。昔の踊り子みたいな恰

好をした女だった」

言われて、中也は思わず息を飲む。そう言えば、確かにそんな人影を見た。講

堂が暗闇に包まれた直後のことだ。長い髪は足元につくほどに伸ば

された黒髪で、

白い顔に、真っ赤な唇が笑っていた。

「あ、それ俺も見た～ぞ。なんか気味の悪い感じだった～な」

お相手はムリ、と茶化したように彼は笑った。

「冗談じゃない！　どうして鬼龍なんかと関わらないといけないんだ！　僕は今

までずっと真面目に生きてきたんだ！　小塾でトップであるために日々、絶え間

なき努力を重ね、他人に見劣りしないように姿を磨き、将来は人の上に立つ……」

「お姫さんだ」

エマニエルの嘆きを遮って、中也はその可能性に思い至った。

「朱宮さんは時期国王。ファーナが狙ってもおかしくない」

ファーナはアルテリアの対岸にある大国だ。今のところ国際関係がどうこうと

いう話は聞かないが、それでもアルテリア朝廷、そして軍は常にファーナを意識

している。それは、おそらくファーナも同じだ。

「どうしてこんなところに？　本国に連れていけばいいじゃね～か？　ついでに

言うと、何で俺たちまで一緒にいるのか～な」

「本国に連れて行けば言い訳できなくなる。それに、朱宮さんだけがいなくなっ

たらどう考えてもファーナが関わっていると思ってしまう。だから俺たちが一緒

なんだ。それに、光宮さんは王位継承権が朱宮さんの次にある。樹海にいきなり

投げ出されて二人とも死んでしまったら、アルテリアの王族の正当な継承者がい

なくなることになるよな。王子がいるにはいるけど、王子は王妃の子供じゃない。

妾腹だ」

「つまり、鬼龍が“気まぐれ”で軍学校の入学式を襲って、その中に“偶然”正

当な王位継承権がある二人の王女がいたって筋書きか～な？」

「そう考えるのが普通じゃないか？」

「迷惑な話だ～な」

違いない、と中也は心の中で呟いた。二人を責めることに意味はない。こうなった原因が彼女たちにあるわけではないのだから。

「光は、継承権を放棄してる」

「は？」

夏葉が言った言葉に、中也たちは思わず目を丸くした。振り返る彼らに、夏葉は無言で頷いて見せる。

「ファーナにも通告されているはずだと思う。去年かそれくらいの話。軍学校に入るから、継承権は捨てるって、国王の前ではっきり……」

「うわあああああ！！」

夏葉の声は、エマニエルの絶叫に遮断された。咄嗟に背後を振り向くと、地面にうつ伏せになったエマニエルの背中に、ランポスが覆いかぶさっている。

「たすけ……たすけて……！！」

エマニエルの爪が地面を掻きむしる。ランポスの鋭利な牙が、エマニエルの背負っていたカバンの布地を引きちぎった。

「動くな～よ！」

真っ先に走ったのは、シヴァだ。彼は勢いをつけてランポスに体当たりをする。

ランポスが地面に横倒しになり、千切れたカバンの布地を口にくわえたまま跳ね起きた。そこへ、シヴァに向って左右から二頭のランポスが跳躍してきた。それを前に飛び込むようにして転がってかわしたところで、彼の肩が蹴爪に当たって小さく裂けた。

「どれか一頭だ！」

素早く地面から起きあがりながら、シヴァが叫んだ。

「どれか一頭を弱らせろ！　やつらに共食いさせるんだ！」

夏葉が身を屈める。最初にエマニエルを襲った一頭に向かって回し蹴りを当てた。

そこへ、シヴァが加わって体重を乗せた拳をランポスの胸のあたり

に叩きこむ。中
也はエマニエルを引き起こしながら周りを見渡した。目の前にいる三頭のランポス
以外、樹海の中からやってくる影はない。シヴァと夏葉に頭部を攻撃され、ランポ
スの足元が僅かに揺らいだ。
「シヴァ！　夏葉！　ちょっと離れろ！」
中也の声に、二人が僅かながら逡巡する。そこへ、別の二頭が頭を低くし、唸る
ような声を上げながら走り出した。一頭が中也とエマニエルの方向へ。もう一頭が、
シヴァと夏葉の方へと向かう。
「夏葉！　今だ！　横に飛べ！！」
中也が自分の目の前にいるランポスの蹴爪を地面に転がって避けながら叫んだ時、
すでにもう一頭のランポスが跳躍している。その蹴爪が、夏葉の額に食い込む直前、
夏葉は横に飛びのいてその爪を避けた。空を切った蹴爪は、そのまま仲間の腹に一

閃する。シヴァと夏葉が攻撃していたランポスの腹が裂け、白っぽい内臓が零れ落ちた。腹を裂かれたランポスが地面に倒れ伏す。そこへ、別の二頭が食らいついた。

地面に横倒しになったランポスの口から瑞鳴とともに血の混じった泡が吹き出す。

両手足が弱々しく空をかき、その腹に二頭のランポスが鼻づらを突っ込んで唸り声を上げながら肉を喰い千切り始めた。

（ジョ……ジョーダンだろ……？）

仲間の肉を喰いながら、一頭のランポスが、もう一頭のランポスに向って威嚇するように吼えた。吼えられたランポスが、一歩ほど飛びのいて、更に威嚇の声を上げる。最初の一頭は再び仲間の腹に頭を突っ込み、内臓を喰い破り始めた。後ろへ飛びのいたランポスが、その背後へ歩み寄る。左右に揺れる尻尾に噛みついた。噛み付かれたランポスは、怒りの咆哮を上げながら噛みついたランポ

スと向かい合う。

威嚇するように唸り声を上げる。両者は少しの間、睨みあう。いきなり、最初に威

嚇した方のランポスが跳躍した。不覚をとったランポスが逃げ遅れる。その蹴爪が、

背中のウロコをむしり取った。地面に鮮血が迸る。

「今のうちだ。急ぐぞ……」

攻撃したランポスが更に一歩を踏み出せば、別のランポスが一歩後ろへ下がる。

そして、何度かそれを繰り返し、怪我をしたランポスが低く頭を下げた。それを

見た後で、最初に攻撃した方のランポスは、地面に倒れたランポスの方へと歩み

寄り、その肉をがっつき始めた。内臓をあらかた喰われたはずのランポスが未だ

に浅く呼吸しているのを見て、中也は背中に戦慄が走った。

「なんてヤツらだ……」

中也は軽く毒づき、四人を促してランポスたちの狂宴の場から早々に立ち去っ

た。背後から再び、いがみ合うような声が聞こえてくる。どうやら、観念したと
見せかけたランポスがまた不意をついて襲いかかったらしい。
「恐ろしいところだな」
「そうだ～な。今のところレウスとランポスだけだけど、他に何がいるのか、考
えるだけで鳥肌もんだ～ぜ」
「何でもいい！　早くこんなところ逃げよう！　僕はもうゴメンだ！！」
エマニエルの紅潮した顔は汗と涙と鼻水で汚れている。
「そうできれば、一番いいんだけど～な」

邂逅9

軍学校の入学式にて、アルテリア王国の王女を含む、9名の子供たちが突如

として消失してから一夜が明けた。帝都、王宮内は早朝にも関わらず、浮足立

った雰囲気に包まれている。書類を抱えて走りまわる高官、焦りを浮かべた顔

で早足に通り過ぎる軍人、通常業務を後回しにされたおかげで混乱している下

官たち。その渦中において、ただ一人、悠然とした動作でポポの毛で設えた赤

い絨毯の中心を踏みしめていく巨体がある。

「あ、艶(あで)の紫さまだ……！」

纏っている衣装は、通常の五倍はあろうかという絹地を使った紫色のドレス。

高く結いあげられた髪は漆黒で、これでもかと言わんばかりに突き刺されてい

る玉の簪は一般の役人の１０年分の給料に匹敵しそうな勢いだ。おしろいを塗

りたくられた顔は厚みを持って腫れぼったく、肉に埋もれるような小さな瞳が

獲物を探るように、せわしなく蠢いている。首と顔の肌の色の差が歴然とした、

異様なまでに白いその顔の中で、頬に刺された桃色と、唇に塗り込められた赤、

バチン、とハエが落とせそうなほど長く太く作られた黒いマツゲに、濃い眉毛

を形取る漆黒が異様に目につく。

「国王のお姉さまだ……！」

背後に控える二人の従者はどちらも軍人で、階級でいうならば、軍将の次で

ある春佐（しゅんさ）にあたるのだが、ガタイがいいはずの春佐二人が小柄に見えるから不

思議である。その人物が歩く度に、ポポの絨毯に足跡がついた。

「艶の紫さまが来たぞ！」

すれ違う人間たちが、いろいろな意味で道を譲っていく中、どこからが人の

顔なのか判別しかねるその人物が足を止めたのは、アルテリア軍を束ねる若き
将兄の執務室の前であった。
「しょ、将兄に用らしいぞ……！」
軽いノックの後にドアを開けたのは背後に従っていた春佐のうち一人だ。ド
アを開くと同時に二人はそれぞれドアの左右に分かれ、深々と頭を下げた。そ
の真中を、その人物はポポのような動作でゆっくりと進む。
「朝早くから誰かと思えば……」
執務机に座ったまま、将兄はやってきた珍客を見上げる。その秀麗な顔立ち
がどこか揶揄するように笑む。そこにいた夏軍将と秋軍将が道を譲り、軽く、
頭を下げた。
「生意気は相変わらずじゃの、将兄。頭（こうべ）を垂れることさえせなんだとは。わ
らわが誰だか分かってはおらんのか？」

一言を発する度に、その油を塗ったような唇が動く。どうやら、自分の訪
問に礼儀を取らないことに対して、僅かに苛立ちを覚えているらしい。

「その顔は一度見たら忘れられない。よく覚えているさ」

「それは褒め言葉であろうの？」

「もちろん。艶の紫さまほど美しい女性はこの世のどこを探してもいない。
それこそ、その美貌はまさしく“人の範疇”を超越している」

「ほう。そなたも気の利いたことを言えるようになったの」

艶の紫、と呼ばれた（一応）女性は、将兄の言葉をそのまま受け止めた
らしく、おしろいが剥げる勢いで盛大に破顔する。夏軍将（かぐんしょう）と秋軍将（しゅうぐんしょう）が、そ
の鉄面皮の下で笑いを噛み殺したことなど、気づいていないらしい。

「要件は？」

将兄の前には山のように積み上げられた報告書が彼の裁可を待ってい

る。その一枚を手に取りつつ、そう切り出すと、彼女は再び不機嫌という文字を顔に書いたような表情になった。

「いつまでわらわを立たせておくつもりじゃ？　はよう、腰かけを用意せんか！」

「これは失礼。あいにく、この部屋にあるイスはとてもあなたにお勧めできる代物じゃないんだ。夏軍将、この方にふさわしい特注のイスを持って来てくれ。確か、技術開発部が開発したグラビモスの素材を使ったイスがあっただろ？」

「かしこまりまして」

グラビモスのイスなんていうものは存在しない。早い話、早々に帰らせたいから座らせるな、ということだ。将兄の意を察したのか、それとも彼の言い回しがおもしろかったのかは定かではないが、鉄面皮を

誇る
夏軍将の顔が僅かに綻んだ。
「それで？」
書類に署名しながら問いかけると、艶の紫は何とも言えない顔で将兄を
見下ろし、唇を開く。どうやら、「特注のイス」という言葉で満足を得た
らしく、その物品が届くまで待っているつもりはないらしい。
「入学式での失踪事件、そなたの婚約者が巻き込まれたそうじゃの。そな
たが気落ちしておるのではないかと思うてな、見舞いに来たのじゃ」
どこか肉食獣を思わせる瞳を将兄の整った顔立ちにひたと据え、彼女は
無意識に厚ぼったい舌で唇を舐めた。
「それはどうも。けれど、あなたに心配してもらうようなことじゃない」
「そう言うでない。話に聞くところによれば、今回の失踪には鬼龍が絡ん

でいると言うではないか。いかにそなたの婚約者と言えど、相手が鬼龍で

は分が悪かろう。そなたの心痛、察しいたすぞ」

「温かい心遣い、痛み入りいますよ」

言いながら、将兄は艶の紫の突然の訪問の理由に感づいた。何となく、

こういうことが起こるような気はしていたが、実際にそうなると正直うん

ざりせずにはいられない。表情には出さず、彼は内心で溜め息をついた。

「ところで、どうじゃ。そなた、花紫（はなむらさき）を知っておるな」

「あなたの一人娘だろ？」

脳裏に思い浮かべるその姿は母親に瓜二つ。珊瑚院・花紫は「超」とい

う言葉がしっくり来るほどの重量級を誇る娘だったような気がする。

「花紫がそなたを気に入っておるのじゃがな、何分、あやつも奥手でな。

自分の口からはなかなか言い出せぬと申す。どうじゃ。一度、食事でもして

みぬか？　わらわに似てたいそうな器量良しじゃ。どこの馬の骨とも知れぬ

胡蝶などより、そなたと二人、並んでいるところは様になろうよ」

将兄は手元の書類から視線を外し艶の紫の白塗りを見上げる。その作り物

のように鋭利な美貌に、取って付けたような笑顔を張りつかせて言い放つ。

「気持ちは嬉しいが、あいにく俺は騎上位が上手い女性が好きなもので」

艶の紫の顔色が変わる。秋軍将が口元だけで吹き出した。

「覚えておくぞ」

艶の紫は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべたまま、ファンゴのような

鼻息を立てて踵を返す。どうやら、見合い話は断られたと理解したらしい。

迷惑な客人がいなくなった執務室は、急激に気温が下がったように感じら

れた。

「相変わらず、お上手ですな」

艶の紫の盛大な足音が遠ざかって行った後で、秋軍将が苦笑いを浮かべ

ながらそう切り出してきた。

「別に。光宮には負けるだろ。あいつ、艶の紫の目の前でバケモノ紫とか

言ったそうじゃないか。怖いもの知らずもいいところだ」

新たな書類を手に取って、彼は視線を走らせる。

「正確には“バケモノ紫”と“紫ババア”でございます」

どっちも変わらない、と将兄は笑う。

「ところで、夏葉さまとは騎上位が多いのですか？」

「さあな。勝手に想像してろ」

答えながら、将兄は大きく伸びをする。彼らは昨晩からずっとこの調子

で書類の整理に追われている。にもかかわらず、いっかな紙の山は減った

ように思えない。疲労も出ようものだ。

「どうでもいいが、夏軍将を呼んで来い。どこまで行ったんだ、あいつは」

「かしこまりました」

丁寧に一礼し、秋軍将は踵を返す。心の内で、若き将兄の婚約者が無事に

彼の腕の中へ戻ることを願いながら。

＊

中也たちがランポスの襲撃を受けていたころ、光宮は北西に向って歩き続

け、そこでアプトノスの群れに遭遇していた。群れの数は全部で１２頭。う

ち2頭が幼体である。アプトノスたちは光宮の姿を見るなり幼体を中心に円

陣を組み、咆哮を上げて威嚇してきた。

「なによ、何もしてないじゃない！」

言いながら、彼女は足早にその場を退散する。光宮の姿が見えなくなった

のを確認した後も、アプトノスたちは警戒を緩めようとはしない。しばらく

して、彼らはようやく移動を開始した。

（なんなのよ、もう！）

それを、風下の木陰に隠れて見守っていた光宮は、足音や気配が届かない

距離を保ちながら群れの後を付け始めた。水場なら、アプトノスの方がよく

知っている。そう思ったからだ。群れが北西に向っていることから考えても、

がむしゃらに水を探し回るより、そうした方が効率的だ。時計で方角と時刻

を確認する。それを手近な木の幹に記した後で、さきほど偶然見つけた薬草

をカバンの中に詰め込んだ。

（とりあえず、水を確保するわ）

人間は食糧が無くても一か月程度は生きられる。しかし、水が無ければ三

日と保たないはずだ。今後の移動のことを考えても、水だけは確保しておか

なければならない。たとえそれが、危険な肉食獣の狩り場に足を踏み入れる
ことになっても、生き延びるためには避けて通れない道だ。
（水を確保した後で、南を目指す。運が良ければ、はぐれてしまった夏葉た
ちとも合流できるはずだわ）
そして、建物の中を探して使えるものを手に入れる。それによって、建物
の中で救助を待つか、あるいはアルテリアに向けて歩きだすか決める。
（問題はレイが建物に着くまで持つかどうか、だわ）
運が悪いことに朱宮もいる。彼女を抱えて、怪我人を抱えて。この樹海を
乗り切れるか。
（歩き続けるのはムリだわ。だとしたら、休む場所を確保しないと……）
月光さえ届かない夜の闇は危険すぎる。ならば、夜はなるべく静かにして
おいた方がいい。安全に一晩を越えるためには、高い木の上が一番

いい。し

かし、それは枝から落ちれば命の危険に曝されることになる。どうにかして、

枝の上で安全に休める方法を探さなければ……。

（やだわ……）

そこまで考えて、光宮は自嘲するように笑った。

「私、余裕を無くしちゃってる……」

状況が悪くなればなるほど、心には常に余裕を持て……と師として仰ぐ女

性は言っていた。光宮は大きく深呼吸をする。それを何度か繰り返し、改め

てアプケロスたちの背中を追いかけた。それからしばらくして、小川のせせ

らぎを耳に捉えることができた。

「やっぱり。私って天才じゃない？」

木の幹に張り付きながら、注意深く辺りの様子を窺う。木々の間を縫うよ

うにして走る小川の周囲には、アプトノスの群れ以外の姿はない。

群れも、

警戒する様子は見せずに水を飲んでいた。時折、群れの中の一頭が頭を持ち

上げて周囲を見渡す。低く鳴けば、別の一頭が答えるように鳴き声をあげる。

長閑（のどか）な光景だった。

「風下で水を汲むのがいいんだろうけど、あいにく風下は下流なのよね。ア

プトノスのヨダレ臭い水なんて冗談じゃないわ」

群れが去るまで待とうか、とも思ったが、それでは肉食モンスターの襲撃

を受けた際に盾になるものがない。どうしようか悩んでいるうちに、一頭の

アプトノスが一段と高い鳴き声を上げた。同時に、群れに緊迫した様子が漂

い始めた。

「さっそくおでましってワケ？　よほどヒマなのね！」

光宮は重い荷物を放り出し、身軽になると、素早くアプトノスの群れの中

に飛び込んだ。先ほどと同じように、幼体を囲んで円陣を組もうとしていた

アプトノスたちは、突然、飛びこんできた小さな影に僅かながら陣営を乱す。

そこへ、小川の向こうの樹海の陰から飛び出してきた三頭のランポスがいる。

「ちょっと失礼！」

木の近くにいたアプトノスの背によじ登る。アプトノスが呻き声をあげた。

「何よ！　あたしが重いって言うの！？　冗談やめてよね！　そりゃあ、あ

たしは姉さんみたいな脂肪じゃないんだから、重いに決まってるでしょ！？」

アプトノスの背から、手近な木の枝に飛び移る。休むことなく、枝を伝って

ランポスの牙が届かない高みへと移動する。途中、野鳥の巣に遭遇し、親鳥か

ら手痛い歓迎を受けた。

「一国の王女の顔を引っ掻くなんて、あんたも勇気あるじゃない」

とりあえず安全圏まで逃げた光宮は、改めて下方に視線を向ける。先ほど
飛び出してきた三頭のランポスは、アプトノスの群れの正面だ。アプトノス
たちは円陣を崩し、一列に並んで背後に幼体を庇い、正面にいる三頭のラン
ポスに向かって威嚇するような咆哮をあげ始める。
（あっちにも、いるわ）
高い場所にいる光宮の視線に、小川の向こう側にいる別のランポスの姿が
映った。アプトノスたちから見れば背後だ。ざっと見たところ、四頭ばかり
いる。
「正面のランポスはオトリだわ。主力は背後の四頭ね。幼体を狙っているん
だわ」
アプトノスたちは気付いていない。ひたすら正面の三頭に向って咆哮を上

げている。その間に、四頭のランポスは樹木に隠れながら小川に近づく。風

向きは、ランポスの主力に有利だ。樹海から僅かに顔を出したランポスは、

互いの意思を確認するように視線を交わしあう。そして、合図という合図も

ないまま、四頭はひと飛びで小川を越えてアプトノスの群れに向かって全力

で疾走し始めた。群れが異常に気付く。陣営が崩れた。

（すごい！）

そこへ、正面にいた三頭が地を蹴る。アプトノスの成体に向って蹴爪を振

り上げた。その間に、背後にいた四頭が突進し、群れの中央を突っ切る。ア

プトノスたちが状況に混乱し、右往左往し始めた。

（さすが、ランポス……！）

アプトノスを襲っているのは最初に正面にいた三頭で、背後にいた四頭は

ひたすら群れの中を駆け巡る。アプトノスたちがバラバラになって

樹海の中

へ消えていく。取り残されたのは、最初に襲われた一頭だけだ。三頭のラン

ポスに混じって、後から来たランポスが加わる。鋭い蹴爪にえぐられ、アプ

トノスの皮膚が裂けて鮮血が迸る。苦悶の呻き声が漏れる。一頭のランポス

がその喉元に食らいついた。

（倒した……）

別の一頭が背に飛び乗る。更に、別の一頭がそれに加われば、アプトノス

はついに地面に倒れ伏した。アプトノスはしばらく痙攣していたが、やがて

動かなくなってしまう。ランポスたちは、そこで饗宴を始めるのかと思いき

や、小川の向こうから駈け出して来るランポスの姿がある。全部で四頭いる。

大きさからすれば亜成体だ。それに、一頭の成体が混じっている。

（先に子供に食べさせてやるのね）

川を渡った亜成体たちは、成体たちが倒したアプトノスの肉に食らいつく。

その間、成体たちは獲物にありつこうとはせず、ひたすら周囲を注意深く見

渡していた。やがて亜成体たちが獲物から離れると、そこでようやく成体た

ちが獲物にありつき始めた。あらかた食らった後で、何頭かのランポスが口

に千切れた肉をくわえて走り出す。亜成体たちを囲むようにして、ランポス

の群れは再び樹海の中に姿を消して行った。

「なんだか、不思議なところだわ……」

時間にして約5分程度。たったそれだけの時間で狩りは成功に終わった。

改めて周囲を見渡す。樹海の中にランポスの姿はない。木立を揺らすものも見

えない。それを確認した後で、光宮はさっさと木を降り始める。ぐずぐずして

いると、流された血の匂いに混じって他のランポスの群れがやって

来る。

「たぶん、あれが本来のランポスの姿なのね……」

木を降りた後で、放り出した荷物を手に取る。小川に降りて、手早く水を汲んだ。

遡遡１０

同じころ、樹海の中に設置された穀物の倉庫では、薄暗い床の上でレイと
ルナが苦い顔を浮かべていた。

「ねえ、お腹が空いたわ」

事の発端は朱宮のこの一言だった。しかしながら食糧を調達しに行くとな
れば、実際に動くのはルナということになる。この倉庫に、怪我をしたレイ
と朱宮だけを残して行くのは、あまりにも不安すぎる。ついでに、モンスタ
ーが徘徊する樹海に、たった一人で出て行く勇気がなかなか持てない。どう
しようか悩んでいるうちに、朱宮の更なる一言が重なった。

「喉も渇いたわ。それに、昨日お風呂に入ってないから、体が気持ち悪い。
ねえ、どうにかならない？」

朱宮のいたって真剣な顔を見ていると、要求している内容に他意

はないこ

とはよく分かるのだ。しかし、それができるならば朝方に光宮が一人で水を

探しに行く必要は無かった。

「……もうちょっと、我慢してもらえないですか？」

絞り出すような声で、ルナはそう答える。すると、朱宮が泣きそうな表情

を浮かべた。

「ガマン、ガマンって。昨日からそう言われてばっかりだわ。お腹が空くの

も、ノドが渇くのも、ガマンしなきゃならないようなことなの？」

返す言葉が見当たらない。

「それに、お化粧したまま寝てしまったから、お肌が荒れてしまうわ。早く

綺麗に洗ってお手入れしないと」

この状況でよくそんなことを考えていられるものだ、と別の意味で感心さ

せられる。しかし、彼女は夕べほとんど失神していたので、レウス

の襲撃や
ランポスに怯えながらの道中を経験していない。おまけに、王女という特殊
な出生だ。考え方が一般人と違うのも仕方ないことなのかもしれない、とル
ナは割り切った。隣で背を壁にもたれかけているレイも、何とも言えない微
妙な顔をして朱宮を眺めていた。
「困ったわ。お顔のお手入れができないなんて。明後日には将来のダンナ様
とお食事の予定だったのに。ボロボロのお肌でお会いしたら、きっと嫌われ
てしまう」
「……王女さまは大変ですね。婚約中？」
「ええ、そうよ。聞いてくれる？　とても素敵な方なの」
言いながら、朱宮はまるで祈るような仕草で胸の前で両手を合わせ、無意
味に天井を仰ぎ見る。その顔に、窓から漏れた陽光が当たった。

「私がいなくなって、きっとお父様もお母様もご心配なさっているわ。それに、きっと将兄も……」

「将兄？」

朱宮の口から出たその言葉に反応したのはレイの方だった。

「ええ、そうよ。私、将来はあの方と結婚するの！」

「へえ……」

何となく、レイとルナは互いに顔を見合わせた。王族は軍に干渉しない。それがアルテリア王国での暗黙の了解だったはず。軍の最高権力者である将兄と次期国王の結婚となれば、王族が軍に思い切り干渉することになる。自由恋愛ならばまだ話は分からないでもないが、それぞれ責任ある立場の者である以上、その可能性は低い。

「そういえば、将兄って婚約してるって話だったよね」

隣のレイに問いかけると、彼女は無言で頷いた。その相手が朱宮

だったのだ

ろうか。しかし、だとしたらもっと大々的に発表がされているはずだ。

「きっと今頃、将兄は私を探しているわ。早く会いたい」

「……その前に死ななきゃいいですけどね」

レイの皮肉は、朱宮には届いていなかった。

「光宮さん、遅いね」

朱宮のことがどうでも良くなって、ルナは無意識に戸口を見やる。朝に出か

けてからすでに六時間近くが経過している。あの人に限ってそう簡単に死にそ

うにはない、と根拠もなく思いながらも、時間が経つに連れて無事が気になる

ことは否めない。

「そろそろ戻って来てもいいころだけどね」

「心配すんなよ。帰ってくるさ」

「そう、だけど……」

静かな樹海。時折、野鳥の鳴き声が聞こえてくる以外は木立を揺らす風の音

だけ。こう静かだと、逆に不安ばかりが募っていく。

「ちょっと見てくるよ」

言い置いて、ルナは戸口の方へ向かう。扉を開けて周囲を見渡す。襲撃者の

気配はない。こちらへやってくる人影もない。暗闇に慣れてしまった目に、真

上から降り注ぐ午後の陽光は眩しい。何度か瞬きした後で、改めて倉庫の周り

に視線を巡らせた。倉庫は岩盤をくり抜くようにして造られている。背後には

剥き出しの断崖があり、とても何の道具もなく上まで登れそうにはなかった。

正面には樹海。ところどころに大きな岩がある以外は、大木が乱立しているだ

けの、何の変哲もない森だ。周囲に気を付けながら、少しばかり樹海に入り込

む。手近な木の枝からツルが伸びていたので、力任せに千切り取った。

「作れるかもしれない」

ツルの感触を確かめたところ、意外にしっかりとしている。これなら、と脳裏に名案が浮かんだ。ルナは視線を樹海の奥へと向ける。レイのことが心配ではあったが、このまま何もせずに待っているだけというのは性に合わない。

（きっと、元気ならレイも同じことをするよ）

そう考えたルナは、ツルを手に持って、更に森を探索する。木の下に落ちている枝の中から、ちょうど良い長さのものを出来る限り集め、カバンに詰め込んだ。ついでに筆記用具を入れた袋を取り出すと、その中に常備してある定規の一片を使って、拾った枝を真っ直ぐになるように削っていく。最後に、枝の端の一方に切れ込みを入れれば完成だ。

（何とか、なりか……）

それを繰り返しながら、更に森の中に視線を巡らせる。帰り道に迷わないよ
うに、光宮から教えられた方法で方角を確認しながら、しばらく歩いたところ
で、日当たりの良い場所に乱立して生えている目的の木を見つけた。

「問題は定規で切れるかどうか、だけど……やるしかない、か」

木は黄土色をしている。背丈は人の身長ほど。幹の太さはちょうどルナが両
手で輪を作ったほどで、葉はなく、枯れたような枝だけが無数に伸びている。
その枝の中から、ちょうど良い太さと長さのものを選び、定規を当てる。正直、
定規で枝を切ったことは無かったが、辛抱強く定規を動かしているうちに、枝
が木から離れた。

「何とかなるものだね」

一人そう呟き、額に浮かんだ汗を拭いつつ、筆記用具の袋に定規をしまい、
代わりに羽根ペンを取り出す。その先端を、たった今、切り取った

ばかりの枝
の先に当て、火を熾すような要領でしばらく動かしていると、枝の端に穴が開
く。もう一方の先にも同じ要領で穴を開け、最初に見つけたツルを二重に通し、
抜けないように止める。枝を引っくり返し、体重を乗せて枝をしならせ、残っ
た一方の穴に蔓を通す。これで、弓の完成だ。

「本当は枝を二重にした方が丈夫で威力が上がるんだけど……」

二本の枝を繋ぎとめるための接着剤が無い。木の樹液でもいいが、樹液を溶
かす火がない。ルナはたった今、作ったばかりの弓に矢の代わりとして拾い集
めた枝をつがえる。弓の弦に、枝に入れた切れ込みを当て、矢を引いた。

（そう悪くはないか）

ただし、即席の弓矢ということで空気の影響を受けやすい。頭上で野鳥の声
がする。その場にあるもので作った弓と矢ではこんなものだ。そう

思いながら、

ルナは無言で木立の狭間に矢を向ける。ある一点を狙い、先ほどの試し撃ちで

得た感触を参考にしながら、風を待つ。

「……」

追い風が吹いた。矢を放つ。空気を切って飛び出した矢は、木々の狭間を縫

って進み、その先にいた野鳥の胸に直撃した。悲鳴を上げて、野鳥が地面に落

下する。

「ま、こんなものか」

本当は目を狙ったはずだった。しかし、矢は軌道を僅かにズレて野鳥の胸に

当たってしまった。それを少しばかり悔しく思いながらも、地面に落ちた野鳥

の傍へと歩み寄る。絶命こそしていないが、苦しそうに息をしている。首を絞

めて、鳥を殺す。そして、その羽根をできる限りむしりとった。残酷なことを

していると思わない。ルナは幼いころから、こうやって生きてきた。それは、

こういった状況になっても変わらない。

「後は羽根を矢の後ろに付ければ少しは真っ直ぐ飛ぶかな」

欲を言えば、矢の先に付けるものが欲しい。本来ならば石を削ったものや、

鉄鉱石をナイフのように尖らせたものを使う。しかし、石をいちいち削っていた

る暇はない。そしてふと、倉庫の中に古びた硝子の瓶が転がっていたことを思

い出した。矢の先に付けるものは、それを割ったもので充分だ。足りなくなれ

ば、枝の先を尖らせてしまえば事足りる。

「何とかしてやろうじゃない。死んでたまるか」

ルナは元来た道を戻り始めた。朱宮と二人で残したレイのことが心配だった。

殺した野鳥はそのままにしておいた。いずれ腐肉を漁る小動物が来て掃除する

だろう。火がない場所で、獣を捌くことに意味はない。

＊

午後の日差しが僅かに西に傾いた。時計で方角を確認するついでに時刻を見る。

午後1時13分。

「早く……早く……帰りたい……。もう嫌だ……もうゴメンだ……。何でこんな

ことになったんだ……。僕は……僕は……」

ランポスの襲撃を受けてからもう二時間以上が経過しているにも関わらず、背

中に飛びかかられたことがよほどショックだったのか、エマニエルの顔色はずっ

と蒼白のままだった。涙を流し、時折、鼻をすすりながら、答える人もないまま

に、ただ独り言を呟き続けている。

「この調子で行けば夜までには着きそうだ～な」

先頭を行くシヴァが、太陽を見上げながらそう呟いた。もちろん、何の襲撃も

無ければの話であるが。

「女の子たちは少し遅れるかもしれねえ～な。何たって王女さまがいるから。樹

海を歩くのに、硝子の靴はないわ～な」

「そんなところばかりよく見てるな、お前」

「それが特技ですから～ね」

中也の呆れたような声にも、シヴァはいっかな気にした様子を見せない。飄々

とした態度で木立の狭間を抜けていく。

「あれ？　なあ、中也。なんかうまそうなモン発見した～ぜ」

ふいに立ち止まった彼が指差した先には、真っ赤な果実を無数に実らせた木が

あった。手の平ほどの大きさの果実は、手に取ってみると表面がツルンとしてい

る。虫喰いひとつ無く、まるで紅玉のような光沢があった。ざっと見た感じ、他

の果実も同様である。地面に落ちた実は潰れ、果肉の部分が腐り始めて微かな異

臭が漂っていた。

「止めた方がいいな。たぶん、毒がある」

中也は手に取った実を地面に捨てる。虫喰いひとつないのがその証拠だ。地面に落ちた実すら荒らされてないことを考えると、ここに生息している動物や野鳥あるいは虫さえこの実を避けているということだ。

「ざ～んねん」

「そういえば昨日の朝から何も食ってねえなあ」

ランポスに襲撃されたり、レウスに遭遇したり、とあまり空腹感を感じる余裕が無かったが、考えてみれば丸一日以上も何も口にしていないことになる。ついでに、彼らは水さえ飲んでいない。体感的にはそうでも無かったが、生き残るこ

とを考えればこれはあまり好ましくない。

「どうにかして何か狩ってみ～るか？」

「いや、水が少ない時に動物性のタンパク質は避けた方がいい。ま

だ、果物を
探した方がマシだ」

「何、言ってんだかよく分かんね～けど、とりあえず肉は食うなってことか～
な？」

「そういうこと」

肉や魚は、消化吸収に伴い腎臓で尿素排泄を促すため多くの水分を必要とし
てしまう。要するに、気が付かないうちに体に負担をかけてしまう、と中也は
知っていた。肉食動物の狩り場である水辺に近づくのは危険だ。それを考えれ
ば、タンパク質はできるだけ避けた方がいい。

「果物なら、やっぱ日当たりがいい場所だな」

中也たちがいる場所は、見渡す限り鬱蒼と茂った木々の葉に遮られて昼間で
あるにも関わらず日光があまり届いていない。南に向っているのでこれ以上、

他にどこを目指すこともできないが、早々に食糧となるものか、あるいは水を
確保しなければならない。
「開けた場所……日光が届く……」
「そんなことどうだっていい！　早く建物を目指そう！　こんなところもう
ゴメンだ！」
「まあ、そう焦るもんじゃあね～よ」
中也はふと思い至る。ここは昼間でも薄暗い森。植物にとっても生存競争
は激しいだろう。ついでに、日陰にあった果実は毒があるような代物だ。だ
としたら、食べられるような果実は人間の視線が届くような位置には実って
いないのではないだろうか、と。
（もともと、植物が果実を実らせるのは、鳥なんかにその実を食べてもらっ
て、消化されない種を遠くに運んでもらうためなんだよな。鳥なら、高さな

んて関係ない……）

日光を充分に浴びるという意味でも、高い場所に果実を実らせた方が効率的だ。

「とりあえず、この周囲にはないみたいだ。歩きながら探そう」

「りょ～かい」

一同は、とりあえず南へ向けて前進する。その間、中也は地面に注意深く視線を巡らせる。目立つ色をしているとは限らない。ましてや、遥か上空から柔らかい木の実が落下するのだとしたら、原型を留めていない可能性の方が高い。

「あの木」

ふいに、足を止めた夏葉がそう言ってきたので、その指差す方向に目を向ける。一見、樹海に生息している樹木はどれも似たり寄ったりで、素人目に

は判別がつきかねる。夏葉が指している木も、他の木とどう違うのか、正直
なところ分かりかねた。
「葉が三角形をしてる」
「だから？」
「うちの庭にあった。この季節に、実が生ってた」
「本当か？」
「うん」
葉が三角形という特徴だけで果たしてその言葉を信じていいものかどうか迷
うものはあったが、それでも可能性があるとしたら探しに行ってみる他ない。
「それに、匂い」
夏葉は言いながら、木の幹に顔を寄せる。
「この匂い、覚えてる」
その記憶力があてになることを期待して、中也はシヴァを振り返る。

「シヴァ、登れるか？」

「は～いよ」

中也が幹の傍で腰を落として両手を組む。少し離れた場所から助走を付けた

シヴァが走りだし、中也の手に足をかける。

「その方法は止めた方がいいかも」

シヴァが飛んだ後で、夏葉が小さくそう言ってくれた。

「枝、脆いからすぐ折れる」

夏葉が言った直後、シヴァがしがみついた枝が盛大な音を立てて折れた。そ

して彼が地面に落下してきた。苦痛に顔を歪めるシヴァを眺めながら、中也は

何とも言えない顔で表情のない夏葉を見やる。

「……先に言ってやれよ」

「うん」

結局、隣の木の枝を伝って登る、という方法を考え付いた彼らは再び同じ要

領でシヴァを枝の上方にあげた。上の方から何やらガサゴソと音が鳴る中、地

面に残された中也たちはひたすら彼の帰りを待っていた。

「軍が……捜索してくれていると思うか？」

何となく、中也は夏葉にそう聞いていた。

「し、してるさ！　王女が二人もいるんだぞ！」

夏葉が答える代わりに、先にそう言ったのはエマニエルだ。彼はもう、放っ

ておけば、建物に向って走って行きそうな雰囲気である。

「していると思う」

「根拠は？」

真っ直ぐに、その綺麗な顔立ちを見ながら問いかける。

「京さまなら、俺を探してくれる」

「そっか」

深紅の瞳は揺るぎない。夏葉の答えに、何となく気分が晴れたような、そう

でないような複雑な気がした。中也は、軍が危険なフィールドでの捜索を長期
間に渡って行う確信が持てなかった。自分たちがなかなか発見されなければ、
捜索は途中で打ち切りにされる。それこそ、ファーナとの交渉の方を優先させ
るだろう。そうなれば、自分たちはこの人の気配がしない樹海で死を迎えるこ
とになる。そう思うのだが、何だか別の理由で、気分が晴れない。そんな気が
する。まるで、夏葉と将兄の関係が気に入らないような……。

「ず、ずいぶん、自分に自信があるじゃないか！　将兄とは、そ、そんなに
親密なのか！　お、お前、朱民のくせに！」

「関係ないだろ？　ついでに婚約者だったら親密で当たり前だっての」

中也は溜め息をつきながら頭上を見上げる。この位置からでは、シヴァの姿
は見えなかった。そこへ、夏葉の静かな声がかけられる。

「なあ、俺と同じ顔をした人を知らないか？」

「へ？」

思わず視線を夏葉に戻す。表情に乏しい人形のような顔立ちの中で、そこだけ人の意思を宿す深い紅玉の瞳がじっと中也を見つめていた。

「いや、残念だけど知らないよ」

何となく気まずくなって視線を逸らす。実際、夏葉の問いかける人物に心当たりはない。

「人探し？」

「うん」

「誰？」

「弟」

夏葉はそれ以上、何も言わない。何となく、聞いていいものかどうか迷ったということもあって、中也も口を閉ざした。

「俺も心当たりはね～ぞ。なっちゃんみたいな美人だったら、一回

会ったら忘
れるはずないし～な」

その声は頭上から。いつの間にかシヴァが一番下の枝まで降りて来ていた。

「お前らのカバンも貸せよ～と。上の方にけっこうたくさんあ～るぜ」

言いながら、シヴァは採ったばかりの実をひとつ投げて寄こした。楕円形の、

手の平に納まるほどの小さな黄土色の実だった。

「間違いないか？」

夏葉に向って差し出すと、造り物のような白い手が伸びてきてそれを受け取る。

手の平に包みこんだ実を口元へと運ぶ。薄い桃色をした唇が果実に軽く口づける。

流れるような仕草を、気づけば中也は見とれたように眺めていた。

「うん。間違いない」

「これでひとつ、問題解決だ～な。中也、お前のカバン、さっさと寄こせよ～と」

「あ、うん」

高い位置からシヴァのカバンが放り投げられる。それを両手で抱えるようにして

受け取り、代わりに自分のカバンを頭上に向って投げた。

「建物の位置はもうすぐだ～ぜ。俺様がメシ採ってきてやるから、もう少しがんばろ～や」

シヴァが木の枝の上からそう言ってくる。何となく、見慣れた幼馴染の表情が、

いつもと違っているような……そんな気がした。

邂逅11

木の幹に記した目印を辿って、光宮が倉庫の近くまで戻って来た時には、

すでに太陽が中天を過ぎていた。あと少しというところで、彼女は真剣な顔

で時計と空を交互に見やっているルナと遭遇した。その背には、何やら不格

好な弓矢が乗っかっている。

「何してんの、あんた」

いきなりかけられた声に、ルナは飛び上がるようにして驚いた。その表情

を見れば何となく想像がつく。どうやら迷っていたらしい。

「それ、作ったの？」

あからさまにほっとした顔になるルナの隣に並んで、背にある弓を示しなが

ら聞くと、彼女は無言で頷いた。

「腕に自信は？」

「地方の大会では、一位だった」

「なら大丈夫ね」

アルテリアでは、年に一度、軍と一般市民が混じって大剣、太刀、弓、ボウガン、ランスなどの武器の腕試しを行う大会が開催される。一般の部と学生の部に別れ、一般の部には軍人だけでなくハンターも参加する。見学者からしてみれば単なるお祭りだが、参加する方にとってはメンツの問題が絡んでくるので、毎年、白熱した戦いが繰り広げられる。学生の部は、一般の部のための前菜のようなものだが、中には大人顔負けの戦いをする者もいて、見る者の興奮と親の顕示欲をひたすら煽ってくれる。

「水、見つけられたんだね」

「ええ。私は不可能を可能にする女なの。覚えておいてね」

茶化すように肩をすくめて見せると、背中と腕に持ったカラの実がチャプ

ンと心地よい音を立てた。

「レイの調子はどう？　変わってない？」

「大丈夫そうだよ。でも、痩せガマンが上手いヤツだから……」

「確かにそれっぽいわね、彼女」

記憶に残るその姿を思い起こし、光宮は軽く笑う。

「さあ、早く戻ってレイの手当をして、さっさと建物に行きましょう。きっ

と、ここにいるよりマシなはずよ」

「そうだね」

目印を辿りながら木立を抜けていくと、やがて前方に倉庫が現れる。樹海

からいきなり開けた場所に出ることになるので、二人は木立から出る前に一

応、用心深く周囲に視線を巡らせる。左右、そして上空にも、襲いかかって

くるモンスターの影はない。

「行くわよ」

ルナが頷いたのを視線の端で捉え、樹海から倉庫の扉までを一気に駆け抜
ける。取っ手に後ろ手に手をかけ、背後に注意しながらルナを先に入らせた。
続いて、自分も体を滑り込ませる。
「……というわけなの。ひどいと思わない？」
静かに扉を閉めると、双子の姉の興奮したような口調が聞こえてきた。改
めて倉庫の中に視線を向けると、勢い込むような朱宮と、うんざりしたよう
なレイの姿が目に映った。
「おかえり」
光宮の帰還に、心底ほっとしたような顔をするレイ。どうやら、ずっと朱
宮の話し相手をさせられていたらしい。それは確かに精神的に辛い、と実の
姉のことながらそう思った。
「手当をして、なるべく早く出発するわ。陽が高いうちに、少しで

も進んで
おかないと」
「分かった」
言いながら、レイの前にしゃがみ込み、傷口を覆っていた布を取り去る。
カラの実を開けて、中の水を使って傷口についた泥と血液を洗い流した。出
血は完全に止まっている。傷の状態からして、おそらくレウスに引っ掛けら
れたのではなく、倒された木の枝で切ったもののようだと見当をつけた。そ
れなら、傷そのものはそこまで心配することはない。問題は、今までの時間
で血が毒を持っていないかどうかだ。
「熱はないようね。体調に異常はない？」
彼女の前髪をかきわけて額に手を当てると、むしろひんやりとして感じら
れる。その手を振り払うようにして、レイが強気に笑った。

「言っただろ？　あたしはそんなにヤワじゃないって」

「そうみたいね」

カバンから薬草を取り出す。葉と葉をこすりあわせるようにして揉んでい

くと、少し臭みのある汁を出しながら柔らかくなる。それを傷口に当ててツ

タの葉で覆う。それが落ちないように、上からツルで縛り付けた。

「切り傷なら、この薬草で間違いないわ。悪いけど、動くわよ」

レイが頷いて立ち上がる。意外にしっかりした足取りで歩きだすのを見て、

光宮も立ち上がり、背後にいる朱宮を振り返る。

「姉さん、出発するか……」

光宮は絶句した。朱宮の足元に、水が入っていたはずのカラの実がカラに

なって転がっている。ついでに、彼女の手には別のカラの実が握られていた。

「姉さん!?　あんた何して……!?」

「え？　何って洗顔に決まってるじゃない。どうしたの？　そんな

に怒って」

光宮は固まった。レイとルナも唖然として立ちすくんでいる。持ち帰って

きたカラの実は全部で４つ。うちひとつをレイの傷口の洗浄に使った。そし

て二つを朱宮が使ってしまったとなると、残るカラの実はたったひとつ。

「朝に起きてからずっとノドが渇いていたの。お水がこんなにおいしいなん

て初めて知ったわ。光ちゃんは飲まないの？」

どうやらカラの実のひとつは飲んでしまったらしい。

「あ、そうだ。ねえ、光ちゃん。わたくし、お腹が空いているの。何か食べ

るものはない？　あ、鶏肉の香草添えが食べたいわ。それに白身魚のオレン

ジソース。みんなで取りに行って、お外で食べようよ？　きっとおいしいわ」

鶏肉にこだわらなければ、樹海には野鳥ならいくらでもいる。香草も生え

ている。白身魚も釣りをすれば食べられるかもしれないし、オレンジは無く
ともそれに代わる果物ならば探せばあるだろう。しかし、当たり前であるが、
そんなことをしている場合ではない。
「……水はカラの実でひとつ分、か」
人数は四人。極限まで節約すれば、建物に辿り着くまで何とかなるかもし
れない。どうしようも無くなったら、また水辺に行くしかない。しかし、ラ
ンポスの群れが見せた連携した狩りの様子を目の当たりにした光宮としては、
できれば二度と水辺には近寄りたくないという気持ちの方が強かった。今回
はアプトノスがいたから良かったようなものの、単身であんな群れに囲まれ
れば、ひとたまりもない。
「とにかく、出発しましょう。時間が惜しいわ」
背後のレイとルナが無言で頷く。朱宮を促して、倉庫の外へと向

かった。

「ねえ、今日の晩御飯はなあに？」

注意深く樹海を見渡す光宮の背に、そんな声がかけられる。思わず怒鳴り

そうになって、慌てて自嘲する。大声を出せば、モンスターに居場所を知ら

せているようなものだ。ここは抑えるしかない。

「あんたの姉さん……ちょっとヤバい人……？」

本人に聞こえないような小声でルナがそう問いかけてきた。それに、黙っ

て頷いて返す。心の内では煮え切らないものが多いが、朱宮にそれを言って

もムダだ。それは、それこそ母親の胎内にいるころから一緒にいる光宮が一

番よく知っている。

（姉さんに何を言ってもムダなのよ……！）

軽く溜め息をついて、光宮は時計と太陽を見比べる。

「行きましょう」

周囲にモンスターの気配はない。先頭を光宮が受け持ち、怪我をしたレイ

と朱宮を挟むように最後尾をルナが受け持つ。昼間でも薄暗い樹海に、足を

踏み出した。

邂逅１２

太陽が西に沈もうとしている。

「俺様の見立てでは三日はかかると思ってたんだけど、意外と早く着いた～な」

目の前には深い渓谷。その先に、目的としていた建物が、オレンジ色の西日に照らされながら悠然と佇んでいた。上空には蛇とコウモリを足して割ったような姿をしたカプラスというモンスターの群れが不気味に舞っている。一瞬、アルテリアの秋軍（空軍）かと期待したが、軍を示す旗が見えないので、期待は落胆に変わった。深い渓谷と建物を繋ぐのは、使われなくなって久しいと思われる、今にも落下しそうな細い吊り橋だった。

（カプラス……危険だな……）

建物の西側……夕陽が見える方なので西側には、高い塔がある。四角形の建物はけっこうな広さと大きさがあるにも関わらず、なぜかその天を突き刺すかのように聳え立つ塔がとても印象に残った。

「なんか……こえ～な、ここ……」

シヴァが珍しくそんな弱音を吐いた。しかし、誰も何も言わない。おそらく、誰しもがこの塔に対して同じ印象を抱いているのだ。夕日に照らされて佇む、石造りの塔。アルテリアでは当たり前のように見かける建造物の、どこからか無気味な気配が漂ってくる。理性では早く塔の中に入って、中を探索しなければならないと思っている。しかし、本能がそこに行くことを頑なに拒絶していた。

（ここは、恐ろしい……）

来てはならない。その先に行ってはならないのだ、と理屈を超えた本能が警告音を発している。けれど、樹海の中ではぐれてしまった光宮たちと合流するには、ここしかない。中也は、たたらを踏みそうになる足を励ますようにして、吊り橋に向かった。

「落ちたら命はね～ぞ。一人ずつ行こう～ぜ」

「分かってる。俺が最初に行くよ」

頷いたシヴァは、それほどの気温でもないのに額に汗を浮かべてい

た。頬を伝って顎に落ちた汗を手の甲で拭いとりながら、彼独特の笑みを口元に浮かべた。

「気を付けろ～よ。落ちても助けには行かね～ぞ」

「ああ」

中也は強気に笑んで吊り橋に一歩を踏み出す。たったそれだけのことにも関わらず、橋は大きく軋む音を上げた。自然と、中也は息を止める。意図的に下を見ないようにして、ところどころ抜けた橋板を注意深く渡って行く。中ほどまで渡ったあたりで、強風に吹かれて大きく揺れた。吊り橋を支える縄に手をかけ、バランスを取りながらそれをやり過ごした。

（こわっ……）

震え出しそうになる足を励まし、ゆっくり、確実に橋を渡っていく。

よほど訪れる人間がいないらしい。橋を支える縄も、渡された板もところどころ腐っている。苔むして、雑草が生えている場所もあった。吊

り橋から軋む音がする度に、寿命が縮まる思いである。

（な、なんとか……）

ようやく対岸の土に足を乗せた時、思わず足元が崩れそうになってし

まう。それを必死に押しとどめ、溜め込んでいた息をついて、向こう岸

で待つシヴァたちに軽く手を上げて頷いて見せた。すると、シヴァに促

されるようにして夏葉が続いた。向こう岸でシヴァとエマニエルが何か

言い争っているのが見える。エマニエルの性格からしたら、恐れてなか

なか橋を渡りそうにないことは火を見るより明らかだ。何となく、嫌な

役を押しつけてしまったようで、幼馴染に対して申し訳ない気持ちにな

った。その時。

「レウス！」

樹海の中からこちらを睨むようにしている、一対の巨大な目が視界に
映り込む。体表を覆う鱗は血のような赤で、夕日の中、その姿が毒々し
く映った。対岸のシヴァたちは気付いていない。中也は身振り手振りで
注意を促した。すると、エマニエルが途端にこちら側へ向かって走りそ
うになる。シヴァがかろうじてそれを止めた。

（あのバカ……！！）

吊り橋は、おそらく二人分の体重を支えきれない。今ここでエマニエ
ルが飛び出していたら夏葉とエマニエルが谷底へ落下し、シヴァがレウ
スのいる対岸に取り残されることになる。レウスには翼がある。たとえ
こちら側へ渡ったからと言って安全とは言い切れない。しかし、頑丈な
建物の中へ入りこむことができれば、少しは違う。そう思って、中也は

塔の入口にカギがかけられている可能性に思い至った。

（せめて確かめないと！）

そう思い、彼は夏葉を待たずに塔の方へ駆けだす。吊り橋から渡って

すぐ正面に、木で造られた小さな入口がある。まるで城のようだ、と思

いながら、その扉に手をかけると、あっけなく開いた。内心でほっとし

ながら、吊り橋の方を振り返る。

「夏葉！　早く入れ！！」

ちょうど吊り橋を渡り終えた夏葉が中也の方を見て頷く。扉を開けた

ままにして、再び吊り橋の方へ戻った。万が一、橋が途中で落ちるよう

なことがあれば、誰か傍にいれば引き上げることができるかもしれない。

そう思ったからだが、対岸を見ればエマニエルが縄に捕まったまま下を

見て震えている。レウスが彼らの気配に気付いたらしく、シヴァとエマ
ニエルの方へ向ってゆっくりと歩き出し始めた。

（まずい……！！）

地面が振動する。その地響きが、風に乗って中也の鼓膜を震わせた。

「エマニエル……！」

エマニエルは動かない。いや、動けないと言った方がいいのかもしれな
い。シヴァが促すように何かを話しかけていたが、エマニエルはただ首を
振るばかりだ。中也は思わず拳を握りしめた。こちらからでは、どうする
こともできない。そうこうしているうちに、レウスが樹海からのっそりと
その巨体を現した。シヴァとエマニエルの方へ向って一歩を踏み出す。そ
の瞬間、弾かれたようにエマニエルが駆け出し、吊り橋を渡り始めた。

「バカ！　足元に気をつけろ！」

しかし、中也や夏葉がしたように、腐った板を選別していなかったようで、

橋の中央付近で彼の体が板を割る。かろうじて両手で橋板を握りしめていた

ので落下は免れたが、自力で登ることができずに両足が無意味に宙を掻いて

いた。

「た、たすけてぇえええ！！」

彼の口から、絶叫が迸る。

「どうしたら……」

どうにかしてレウスの注意をこちらに引きつけることはできないだろうか、

と混乱する頭で中也は必死に考える。攻撃してくるものがあれば、そちらに

向ってくるだろうか。しかし、中也たちが持っているもので、どうやってレ

ウスを攻撃したらいいのか分からない。思考が無意味に空回る。レウスがシ

ヴァに一歩近づく。エマニエルの脚が宙をかく。最初に動いたのは、シヴァ
だった。
「シヴァ！」
吊り橋の方へ向ってシヴァがゆっくりと移動する。レウスの視線がそれを
追った。その様子を見ながら、シヴァは後ろ向きに吊り橋に足をかける。橋
が、大きく軋む。中也は無意識に橋を支えている縄に視線を向ける。軋んで
はいるが、切れそうにはない。それを確認した後で再びシヴァの方を見る。シ
ヴァは足元を確かめながら、レウスに視線を注いだまま、ゆっくりこちら側へ
向けて移動している。
（シヴァ……！）
握りしめた拳に汗が滲む。レウスが咆哮を上げた。身の毛がよだつような

その雄叫びにも関わらず、シヴァは歩みを止めようとしない。レウスが向き
を変え、吊り橋の正面に向き直った。その場で脚を踏みならすが、どうした
ことかこちら側へやって来ようとはしなかった。

（こっちに、何かあるのか……？）

シヴァが橋の中ほどに達した。彼の足元には、絶叫を上げながら橋板にし
がみついているエマニエルの姿がある。視線はレウスに向けたまま、シヴァ
は橋板に捕まったまま無意味に声を上げ続けているエマニエルの制服を手探
りで掴む。力任せに、エマニエルの小柄な体を引っ張り上げた。エマニエル
の小さな上体が橋板に乗っかったのを確認した後で、シヴァは先に残りの橋
を渡り始めた。

「大丈夫か？」

後ろ向きのままこちら側へやってきたシヴァは、見るからに汗だ

くになっ
ている。しかし、彼らしく笑って見せた。
「どうせ死ぬかもしれないなら、レウスに食われるよりは谷底へ落ちた方が
ラクかなって思ったんだ～よ」
「なるほど」
エマニエルが何とか橋に乗り上げた。レウスは未だに向こう岸で脚を踏み
ならしている。エマニエルはすっかり腰を抜かしたらしく、匍匐前進するよ
うに吊り橋を渡り始めた。中也とシヴァはそれを焦れたような思いで見守る。
ようやく橋を渡り終えたエマニエルをシヴァと二人で引っ張りながら塔の方
へ駆けだした。レウスはこちらへやって来ない。中也には、まるでそれがこ
ちらにいる「何か」を恐れているように見えた。
塔の中へ入り込み、扉を閉める。そこには、漆黒の暗闇が広がっ

ていた……。

邂逅13

暗黒だった世界に、炎の揺らめきが浮き上がる。

「夏葉……」

壁に設置してあった松明に火を灯したその姿を見て、中也は思わず天井を見上げながら大きく息をついた。背後にある朽ちかけた木の扉の向こうには、とりあえず追ってくるレウスの気配はない。

（助かった……）

安堵の気持ちが全身に打ち寄せ、一瞬だが頭の中が空白になった。

「何とかなった～な」

中也の横で、ずるずると音を立て、扉に凭れかかりながらシヴァが床の上に座り込む。溜め息のように大きく息をつき、頬を伝う汗を拭った。

「どうする？　灯り、全部つけようか」

息も絶え絶えと言った有様の中也たちの中において、ただ一人、未だに顔色ひとつ変えない夏葉がそう聞いてくる。その態度が心

強いようであり、呆れるようでもある。何となく、彼は疲れた表情に苦笑を乗せた。

「そうだな……」

軽く息をつき、中也は改めて状況を確認する。これから夜になる。塔に火を灯すことは、夜行性のモンスターたちに居場所をみすみす知らせることになるだろう。

（それは、出来る限り避けたい……）

だが逆に考えれば、未だ樹海にいる光宮たちにとっては道しるべになる。それに、見る限りこの塔は頑丈な構造をしているし、窓も小さい。それなら、多少の襲撃があっても簡単に壊れることはないだろう。気を付けるとすれば、今、中也の背後にある扉を開けてランポスが侵入して来ないかどうか。あるいは、塔の中に崩れた部分がありはしないか。それくらいだ。それなら、光宮たちに道しるべを示した方がいい。

「火、点けて回ろう」

夏葉が軽く頷いて、壁に等間隔で並ぶ松明に火を回し始めた。

暗かった室内が、徐々に灯りに照らされていく。次第に、閑散とした室内の様子が明らかになった。部屋の奥には机やイスが乱雑に積み重ねられ、石の床の上には数枚の紙が散らばっている。それ以外には、何もない。

「……」

中也は散らばる紙を拾いあげ、目を通して見た。しかし、それは白紙であったり、あるいは文字が書いてあったとしても挨拶文の書き損じ程度のものばかり。この塔がどんな目的で建てられた建物であるのか、場所的にはどこにあたるのか、あるいはアルテリア本国と連絡を付ける目星になりそうなものはないか。中也は目につくところを探して回るが、特にこれといって有力な手掛かりになりそうなものはなかった。

（何にもナシかよ……）

奥に積み重ねられた机とイスには、うっすらとホコリが積もっ

ていた。軽く息をついて、集めた紙を床に放り投げ、改めて部屋を見回す。

「奥があるな」

部屋の一角が廊下に繋がっている。ドアはなく、暗い闇が口を覗かせているだけだ。近寄って見ると、蝶番の残骸らしきものがあった。どうやら、嵌め込まれていたドアは取り払われたらしい。

「行こう。食糧でも水でも、何でもいいから探さないと」

中也の言葉に、未だに呼吸が整わないシヴァが大きく息をついて立ち上がる。

「エマニエル、行くぞ。立てよ」

奥の廊下へ向かって歩き出そうとした中也たちだが、エマニエルは入口の前から動こうとしない。松明の光に照らされたその顔は、涙と鼻水で究極の惨状を極めていた。

「なんで……なんで僕がこんなメに……。こんなの……」

全身を小刻みに震わせながら、汚れた両手で顔を覆うエマニエ

ルを何となく見ていられず、中也とシヴァが無意味に顔を見合わせた後、どちらともなく彼の傍に向かって歩き出した。さすがに置いて行くわけにはいかない。

「みんな同じ気持ちだ～よ。ほら、さっさと立てよ。先に行く～ぞ」

エマニエルはひたすら首を振る。仕方ない、とでも言うように溜め息交じりにシヴァが彼の脇の下に腕を入れて半ば強引に立ち上がらせる。しかし、エマニエルはその手を振り払って再び床の上に蹲ってしまった。

「イヤだ、イヤだ……僕は行きたくない。ここにいるんだ……。ここにいれば、軍が見つけてくれる……。絶対にイヤだ……」

うわ言のように呟くエマニエルに何とも言えない視線を向けた後、シヴァは困ったように中也の方を向いた。

「しっかりしろよ。一人で残っていたら危ないぞ。ほら、早く行こうぜ」

まるで聞き分けのない子供のように、エマニエルはただ首を振るばかりだ。中也は宥めるように言葉を重ねた。

「奥に行ったら、ちゃんと休める場所があるかもしれないだろ？それに、久し振りにまともなメシだって食えるかもしれないんだぜ？　なあ、がんばれよ」

「そうそう。エマニエルの分は持って来てやらね～ぞ。俺様が全部、食ってやるから～な」

「俺らが布団で寝てるっていうのに、お前は床で寝たいのか？イヤだろ？　ほら、立てよ。あったかいメシを食ってさ、マトモな布団で寝ようぜ」

中也とシヴァはしばらく似たような言葉を重ね続ける。ようやくエマニエルが重い腰を上げた時、彼らが塔に入ってからすでに一時間が経過していた。

「やれやれだ～な」

暗闇が降る廊下にも、部屋と同じように等間隔で松明が並んで

いる。それに火を灯しながら彼らは廊下を進んで行った。目に見えるのは石造りの冷たい壁ばかり。奥に向って進む彼らの左手には、ところどころ鉄製のドアが見えたが、鍵がかけられているらしく押しても引いても反応がない。

（何なんだ、この建物……）

右手側には窓一つなく、ただ松明があるばかりだ。前方には渦巻くような暗闇が居座っている。松明の朧な光のせいか、その中に何か潜んでいるのではないかという錯覚に陥りそうになる。物音ひとつしない。塔はあり得ないような、静寂に包まれていた。

（静かすぎるってのは、逆に怖いな）

やがて突き当たりに差し掛かる。その右手に階段を見つけ、彼らはそちらに足を向けた。

「あの壁の向こう……」

階下の、廊下の突き当たりにあたる壁を見ながら中也は言った。

「壁の向こうは塔だよな……」

「だからな～んだ。何かいいモンでもいるのか～な」

シヴァはいつも通りの口調で言うが、どこか余裕が無さそうな、そんな感じに見えた。

「いや、そうだろうなって思っただけだ」

「あっそうか～い」

中也の一歩前を行く彼は、再び頬を伝う汗を拭った。階段を登り終えると、そこには再び暗闇があった。手近な松明に火を付けてみると、小さな灯りがある分、周囲の闇がより一層、深くなる。そこに横たわる廊下は、暗闇に沈み、まるでその先に何か恐ろしいものを孕んでいるようだと思う。

（ジョーダンじゃない……）

中也は軽く頭を振って、自分の思考に浮かんだ非現実的な考えを振り払う。改めて二階の廊下を見る限り、一階と雰囲気はそう変わらない。しかし、横に並ぶドアの上に標識のようなものがかけられていることだけが相違していた。

（資料室？）

真っ先に目に入ったのは、その標識がかけられた部屋だった。

念のためにドアの取っ手に手をかけてみると、意に反して簡単に開いた。古びた木が軋む、気味の悪い音が静寂の廊下に大きく反響する。中を確認してみれば、松明の光に照らしだされたそこは、見事なまでに何もなかった。

（何か……ここ……）

資料室と名が付いているだけに、かつてはそこに本棚や文献が並んでいたのだろうが、中也たちが目にしたのは煤けた床で壁、そして天井だった。

「ここで焚き火したような感じだな」

資料を焼却処分したのだろうか。それにしては、燃えカスが何も残っていないのが気になる。煤けた床に触れてみると、指に煤が付着した。ここで何かが燃やされてから、そう時間は経過していないようだ。

「中也、早く行く〜ぞ」

「あ、ああ……」

何となく腑に落ちないものを感じながらも、中也は珍しく急かすようなシヴァの声に促されて、資料室を後にした。

（なんか、おかしい……ここ……）

次の部屋は「医療室」の標識がかけられている。ここはとりあえず後でいい。先に探し物だけしてしまおう、と中也が考えたが、夏葉が何を思ったのかシヴァの腕を軽く引いた。

「ここ、入ろう」

「え？」

狼狽したシヴァに構わず、夏葉は躊躇なくドアを開けて中に入る。中也とエマニエルが呆気に取られ、次いで何か言おうとした時には、すでに医療室の松明に火が灯されていた。仕方なく、中也はエマニエルを促して医療室へと足を踏み入れた。

（少塾の保健室みたいだ）

ベッドが四つほど、カーテンに仕切られる形で並んでいる。布団は足もとの方で畳まれており、見た感じ、そう時間が経過した代物ではない。今まで枝の上で休んでいたことを思えば、多少のホコリなど気にならない。

（今日は、マトモなところで休めそうだな）

そう思いながら中也は部屋の奥へ足を進めていく。並んだベッドの向こう側には、簡易な寝台と薬品棚があった。再び、夏葉がシヴァの腕を引き、簡易な寝台に座らせた。

「脱いで」

一瞬、夏葉が何を言い出したのか分からなかった。中也は思わず思考が停止し、言われたシヴァが珍しくあたふたしながら中也とエマニエル、そして夏葉をせわしなく見比べていた。

「なっちゃん？　え、それ……どういう意味～だ？」

「手伝おうか？」

シヴァの慌てぶりをどう受け取ったのかは定かではないが、夏葉

は躊躇なく彼の制服のボタンに手を伸ばす。

「え？　ちょっと、待て～よ。そういうのは……」

うろたえ始めるシヴァ。しかしそれに構わず、夏葉は彼の制服の上着を剥ぎ取り、ついでシャツに手をかけた。その様子を、中也とエマニエルは開いた口が塞がらない思いで眺めていた。

「誰か、これ持ってて」

夏葉が差し出してきたのは、火をつけた蝋燭である。慌てたように、中也はそれを受け取った。動揺するシヴァを意に介さず、半ば強引にシャツを剥ぎ取った夏葉は、彼の背後に回る。何となく、中也はそれに従った。

「おい、お前……」

蝋燭の炎に照らし出されたのは、血が滲んで真っ赤に腫れ上がったシヴァの肩だった。そういえば、朝方にランポスが襲撃して来た際、シヴァが蹴爪に引っ掛けられた、ということを今更ながらに思い出した。

「俺様の背中に見惚れたのか～な？」

背後に回った中也と夏葉の気配を察したのか、シヴァがおどけたようにそう言ってくる。

「お前、早く言えよ」

呆れた、としか言いようがない。こんな傷を負っているのに、一言も何も言わないなんてバカげている。

「そんなにヒドイか～？　別に痛くもな～んともな～いぞ」

強がったように言うシヴァだが、その額にはやはり汗が浮かんでいる。何となく調子が悪そうだった原因はこれか、と思った時、その肩の傷に向って薬液がかけられ、シヴァが軽口を止めた。どうやら、かなり沁みたらしい。

「痛くないはずない。手当するから、我慢して」

薬液をかけた夏葉は、相変わらずの無表情のままそう断言した。

その手には、何かの記号が並ぶ薬品が幾つか握られていた。

「それ、何？」

蝋燭を持ったまま中也が問いかけると、夏葉は傷口を布で押さえ、先ほどとは別の薬品を塗り始める。シヴァの肩が震えた。

「さっきのは洗浄液。こっちは消毒。それから化膿止め。モンスターに付けられた傷は、油断しない方がいい。それだけ」

夏葉は傷口を洗浄液で洗った後、消毒して化膿止めを塗る。その手際の良さには、思わず感心させられる。傷口を布で覆った後、シヴァの肩に上着だけ制服がかけられた。

「あんた、休んだ方がいい。熱あるだろ？」

シヴァの正面に回った夏葉がその額に手を当てながらそう言った。

「大丈夫だ～よ。俺様はそんなにヤワじゃあねえ～んだ」

「そう言うヤツほど、サクッと死ぬ。横になってろよ。いいだろ？」

最後の言葉は中也に向けられた。もちろんダメだと言えるはずもないので、中也は黙って頷く。それを見た後で、夏葉がシヴァを立たせて横のベッドに寝かしつけ始める。

「いいって、なっちゃん。俺は大丈夫だからさ～。それよか早く…

…」

「いいから、寝てろ」

起きあがろうとするシヴァを無理やりベッドに押し付け、夏葉はその体に掛け布団を乗せた。その様子を見て、中也は無意識に口元に笑みを浮かべていた。

「ここは夏葉に任せるよ。そいつのこと、面倒見てやってくれ」

「あんたは？」

「家探ししてくる」

踵を返そうとして、中也はエマニエルに視線を向ける。中也と目が合った途端、エマニエルが怖いものにでも出会ったかのように、大きく身を竦ませた。

「やっぱいいや。お前、ここで大人しくしてろ」

できれば一人でウロウロするのは避けたかったが、相手がエマニエルでは足手まといになりかねない。そう思うと、まだ一人の方がマシだという気がした。

「じゃあ、一時間くらいで戻るから」

松明を手に取り、医療室を出る。暗い廊下に火を灯しながら奥へと進んでいくと、医療室の隣が談話室になっていることに気付いた。中に入って見ると、そこには机やイスなどが定間隔で並べられていた。広さとしては、入口を入ってすぐの部屋と同じくらいだろうか。

（やっぱ、何かおかしい）

机の上には片付けられることなくコップや皿が出したまま放置され、アルテリア本国でよく見かける読み物などもページが開かれたままテーブルの上で読者を待っている。談話室の壁に設置された松明にすべて火を灯せば、まるでついさっきまで人がここにいたような、そんな錯覚に陥った。

「……」

中也は手近なテーブルに触れる。次いで足元の床に目をやり、床に手を触れてみる。指に触れるのは、少量の砂だけ。時間を経過した部屋に積もっているはずのホコリがない。

（誰か、いたんだ……）

石の壁は松明の炎と煤で汚れている。炎を光源にしている場所ではよくある光景だが、その煤の跡が途切れている箇所が幾つかある。大きさからして、どうやら壁に紙か何かを張りつけていたようだが、どうやらすべて剥がされたようだ。壁の汚れとの差が顕著なところを見ると、壁に貼られた紙が剥がされたのはつい最近のようだ。

「おかしなところだな……」

談話室は人の痕跡に満ちている。しかし、一方では資料室や塔の入口の部屋のように人の痕跡を強制的に拭い去られた場所がある。改めて談話室を一周するが、そこに残されたものは、やはり他愛無い日用品ばかりだ。この塔が何であるのか、知るための手がかりは何ひとつ残されていない。

「早めに出た方が無難か……」

中也は軽く息をついて談話室を後にした。廊下の松明に火を灯した時、遥か先の暗闇の中から金属が床に落ちるような硬質な音が聞こえ

てきた。

「……？」

シヴァたちがいる医療室の方向ではない。中也は一瞬どうしようか逡巡するが、意を決して暗闇の方向に向って歩き出した。少し歩いて行くと、床の上に松明の炎を受けて小さく光るものが目に入った。拾いあげてみると、それは数本のカギの束だった。今のところ、この塔の中でカギがかけられていた場所と言えば一階に並ぶ部屋だけだ。

（一階のカギ、か……？）

そう目算をつけるが、どうしてカギがこんなところに落ちているのか不思議だった。中也は拾ったカギをわざと床に落としてみる。先ほど聞いたのと同じ、硬質な音が鼓膜を刺激した。誰かが落とした、そうとしか考えられない。しかし、見渡す廊下に人の姿はない。自分たち以外の誰かが塔にいる。それは危険を孕んでいる可能性がある。

「誰かいるのか……？」

返ってくる答えは静寂だけ。中也は軽く息を詰める。廊下の先に

は、

未だに暗闇が蹲っている。すべての闇を払拭すれば、これを落とした者と遭遇することができるかもしれない。そう思って、中也は戸惑うことなく廊下の松明に火をつけて回る。やがて突き当たりに到着するが、人の気配は皆無だった。ついさっき、このカギを落とした者がいる。けれど、その誰かと遭遇することはできなかった。

（人は消えない……）

だとしたら、その誰かは中也が廊下に灯りを付けて回っている間に、

手近な部屋に隠れたとしか思えない。中也に襲いかかっては来なかったが、手助けしてくれるつもりもないようだ。だとしたら、自分たちは歓迎してもらえない。そのことだけは、よく分かった。

「必要なのは、メシと水。見つけたら、早目に逃げた方がいいかもな」

中也は敢えて廊下に響くように大きな声でそう呟いた。もちろん、反応は無かった。

邂逅１３（後書き）

……。

お色気シーンが無い！

嘘つきや！

……すみません。

これから増えます。

いや……言い訳ですけど、中也たちもそれどころじゃなさそうだな、と……。

妖乱舞をお気に入りに登録してくださった方、ありがとうございます！

嬉しいです！

邂逅１４

視界の遥か先に、人工の光が灯された。

「建物に、着いたのね」

大木の枝の上、幹に寄りかかりながら光宮はそう呟いた。耳に届くのは静かな

虫の音だけ。時折、吹き抜ける風が梢を揺する音以外、何もない、静寂が支配す

る夜だった。

「向こうは今頃ベッドの上かしら。羨ましい話ね。かよわい女の子は未だに枝の

上で寝てるっていうのに」

「あたしらが着いたらベッドは占領させてもらおうぜ。男どもを追い出して」

軽口を言ったレイが、隣の木に生っていた実をひとつ投げて寄こす。それを受

け取り、口を付けた。

（懐かしい味……）

この実は、夏葉の家の庭に生っていたものと同じものだ。軍学校の入学式が明日に迫った昼下がり、夏葉と一緒にあの庭で他愛無い話をしたのは、考えてみれば三日ほど前のこと。それが、一年や二年も前のことのように思える。

（ボロボロだわ……）

新品だった制服は、すでに着古したもののように汚れて、あるいは破れてしまった。手足にも無数の切り傷ができている。王宮の暮らしが好きだったわけではないが、こうして人の気配がない場所で、モンスターの気配に怯えながら歩いて行くのは、予想以上に過酷な労働だった。自分一人では精神的に辛かった。レイとルナが一緒にいてくれることは心強い。けれど……。

「ああ、お腹が空いた……」

切なげな声がやむことなく続いている。昼過ぎ、穀物庫と書かれた場所を出て

からずっと光宮の双子の姉はこの調子だ。

「お腹が空いたわ……切ない……誰かゴハンを食べさせて……」

ホロホロと涙を流しながら、両手に抱えた木の実をひたすら口に運び続ける朱

宮。食べるか泣くかどちらかにすればいいのに、と我が姉のことながら他人事の

ように思った。

「ねえ、光宮さん」

「光、でいいわよ。夏葉もそう呼ぶし」

朱宮を無視することにしたらしいルナが、枝を伝って傍にやって来る。背に流

されたルナの銀髪が、夜風に揺れて煌めいた。

「何でもいいけど。ちょっと聞いてもいいかな。あんた、何でこんなことになっ

たのか、見当はついてないの？」

「さあ、どうかしら。心当たりがあるような、ないような。今のところ確証はな

いわ」

「心当たりって？」

ルナが枝を跨ぐようにして、彼女の傍に腰を下ろす。朱宮の独り言を聞いていられなくなったらしいレイがそれに続いた。

「直接的な犯人は鬼龍ね。それ以外に考えられない。問題は、鬼龍のバックにいるのが誰かって話よ」

鬼龍は人と同じ姿をして、森羅万象と時空を操る。それ故に、時の権力者は鬼龍の力を欲した。人間に扱えるような代物でないことなど、考えてみるまでもなく分かりそうなものだが、普段から他人に傅（かしず）かれて生きている者は、自分の力を過剰評価する傾向があるらしい。大国で何らかの事件が勃発した際、その影に鬼龍の存在が匂うことは実はよくある話だ。ただ、大半の人間が知らないだけで。

「あんたは、鬼龍のバックにいるのは誰だと思うんだ？」

レイの瞳は紫がかかった青。まるで夜明け前の空のような瞳に、月光が宿る。

「普通に考えればファーナか、あるいは艶の紫。あくまで私の推測だけど」

「艶の紫？　誰それ」

レイとルナが真剣な顔で聞いてくるので、光宮は思わずため息を落とした。

「あんたたちねえ……自分の国のことなんだから少しは知ってなさいよ。いい？

アルテリアにはね、二つの大きな敵がいるの。ひとつは言わずと知れたファーナ。もう一つは国王の実姉。敵は外だけじゃないってこと。紫晶院（ししょういん）・紫宮（むらさきのみや）。通称・艶の紫。影の権力者よ」

艶の紫、という言葉を二人は無意識に口の中で反芻していた。

「はっきり言って化け物よ。いろいろな意味でね。それに、私たちをここに

連れてきた鬼龍かどうかは知らないけど、あいつの傍には鬼龍がいるの。知

る人ぞ知るってヤツだけど」

彼女の言葉に、二人が無意識に腰を浮かした。

「何だよ、それ。じゃあ確定じゃねえか」

「結論は急ぐべきではないわ。相手が相手だけに、証拠もなくそうだと決め

つければ痛い目をみる。それに、あいつの傍にいる鬼龍が犯人かどうかまで

は分からないもの。顔は見てない。ただ、何となく無気味な女だなって、そ

れくらいで」

「そうだね……。でも、仮に……仮にそうだとしたら、何が目的であたしら

をこんな目に遭わせたの？」

「そんなの私が知るワケないじゃない。本人に聞いてよ」

夜風が吹き抜ける。こうしてじっとしていると、汗で濡れた肌から体温が

奪われていく。寒い。光宮は無意識に制服の襟を掻き合わせた。

「ただ……」

いったん、地面に向けられていた二人の視線が再び光宮に注がれる。

「ただ、推測することはできるわね。バケモノ紫の目的が国王に起つこと

だとしたら、とりあえず邪魔になるのは姉さん。あるいは、軍の将兄が目

的だとしたら、邪魔になるのは婚約者の夏葉。私を含め、あんたたちも目

くらましってところかしら」

無論、シエンナ内海を挟んでアルテリアの対岸に位置するファーナ王国

が鬼龍を使って襲撃したという線も消えない。仮にそうだとしたら目的は

やはり朱宮になるだろうが、今のところファーナとの国交は正常化されて

いる。だとしたら、ファーナが襲撃したという線は薄い。やはり、有り得

るとしたら艶の紫の線が一番濃いような気がする。そう思った時、光宮は

レイとルナが何とも言えない呆けた顔をしていることに気付いた。

「何よ。どうしたの？」

何か変なことを言っただろうか、と二人を見れば、彼女たちは互いに顔を見合わせる。

「将兄の婚約者って、あんたの姉さんじゃないの？」

「はあ？」

自分でも間抜けな声だと思う。無意識に、彼女は少し離れた枝の上で一心不乱に木の実を齧っている朱宮に視線を向けていた。

「姉さん」

呼びかければ、月光の朧な光の下でさえはっきりと分かる、この場に不似合いな純白のドレスが振り返った。

「あんた、将兄と何がどうなってるって？」

嘲笑が浮かぶのを堪え切れない。わざわざ聞くまでもないことだが、敢

えて本人の口から言わせてみたかった。

「何がって？」

「とぼけないでよ。あんたいつ将兄と婚約なんかしたの？」

「ああ、そのこと？」

涙に濡れた顔立ちが途端に輝くような笑顔になる。

「私がお父様にお願いしたの。そうしたらお父様が、話を付けて来てやる

って。そう言えば、今夜だったわ。本当なら今頃、あの方と一緒に夕食の

最中だったのに……。どうしてこんなことになったのかしら……。早く帰

りたいわ……」

胸の前で両手を合わせ、夜空を見上げて涙を零す朱宮。今まで国王が朱

宮の頼み事を断ったことなどない。彼女が望めば、そんな無茶な要求でも

必ず叶えてきたのだ。それを知っていれば、彼女が軍の将兄に恋をして、

将来、結婚したいと言いだした時に話を付けて来てやると言いだすことに
も納得できる。ついでに、朱宮の中では父親に頼めば何でも手に入ること
が当たり前の図式として定着している。しかし。

「残念だけど、姉さん。それは叶わない願いよ」

「え？　どうして？　もう帰れないの？」

そこじゃない、という本音は敢えて押し黙る。

「将兄はね、夏葉にお熱なの。あんたがいくら口出ししたって見向きもし
ないわよ」

「夏葉、さん？」

朱宮の顔色が変わる。その様子が楽しくて仕方ない。しかし顔には出さず、
敢えて憐れむような顔をしてみせた。

「そう、夏葉。知ってるでしょ？　相手が夏葉じゃあ、いくら姉さんでも
勝ち目はないわ。諦めた方がいいわよ」

「夏葉って、あの黒髪で目が赤い人？」

横から口出ししてきたルナに、光宮は無言で頷いて見せる。

「将兄って、そっちの人だったんだ……」

的外れなルナの言葉に、光宮は思わず枝からずり落ちそうになった。

「違うわよ。確かに夏葉は気分的には男寄りらしいけど、男じゃないわ。

胡蝶よ」

「ああ……」

レイとルナが納得したような安堵したような表情をする。

「びっくりした～。それならそうだと最初に言えっての。まどろっこしい」

「ホントよ。でも、確かにお似合いだね。あんまり覚えてないけど、すごく綺

麗な子だったね」

死の宣告をされたような朱宮とは対照的に、レイとルナの顔に表情が戻る。

「なあ、光は夏葉とは付き合い長いのか？　どんなヤツ？」

「あら、興味あるの？」

少しばかり意地悪げに聞いてみれば、レイが当たり前だという顔をして頷いた。

「我がアルテリアの英雄の婚約者だろ？　気にならないはずないっての」

「私も興味あるよ。ねえ、夏葉ってどんな子？　光なら将兄と会ったこともあるでしょ？　やっぱりカッコいい？」

やはり興味はそこか、と光宮は内心で溜め息をつく。彼女たちは軍学校の生徒だ。これから軍人になろうという人材が、その頂点に立つ者に興味を示さないはずはない。若くて、やたら見た目が派手な男ならばなおさらだ。そう思うものの、光宮は今現在の将兄職にある男には、どうにも好意を抱くことができずにいる自分を自覚する。

「夏葉は風呂と昼寝をこよなく愛するボケ～としたヤツで、将兄は……そうね

……とりあえず、夏葉に骨抜きって感じ、かな」

夏葉と将兄が婚約を結んでから、幾度となく夏葉の家で遭遇しているが、未

だに将兄に対する見解は変わらない。確かに見た目だけはいい。性格もそこま

で問題があるとは思えない。四軍将が揃って推薦したくらいなのだから実力者

であることも間違いないだろう。けれど、どうしても好きにはなれない。一言

で表すなら、そう苦手なのだ。

「何だよ、それ。そんなんでいいのか？　仮にも軍の将兄だろ？」

「いいんじゃないの？　前の将兄と違ってとりあえず仕事はしているみたいだ

し。むしろ、夏葉に会いたいがために日々の業務を颯の勢いで終わらせるから

助かるって秋軍将が言っていたわ」

光宮の言葉に、レイとルナが軽く笑った。

「何だか、意外だね。将兄ってもっと怖いヤツかと思ってたんだけど」

「それはないわね」

実のところ光宮は内心、少しばかり複雑な心境だった。改めて口にしたこと

は無かったのだが、夏葉は彼女にとって初めての友人だった。将兄とそういっ

た間柄になるまでは、よく二人で商い通りに遊びに行っていたし、夏葉の家や

光宮の自室で取り留めのない話をたくさんしたものだ。けれど、今では夏葉の

心の大部分は将兄に占められている。

（だからと言って夏葉との友人関係が変わることは無かったけど……）

それでも少しばかり物寂しいものは拭いきれずにいる。けれど、レイとルナ

が屈託なく笑うので、敢えてそのことには触れなかった。

「熱愛ぶりのエピソードとかあるの？」

「そうねえ……」

言われて考えを巡らせながら、光宮はチラリと横目で朱宮を見やる。夏葉と

将兄に関しては話のネタに事欠かないが、せっかくなので朱宮のプライドを撃

沈させるような話をしてやろう、と思った。彼女は諸外国がこぞって“アルテ

リアに美女あり”とまで囃し立てている女だ。もちろん個人の趣味とお世辞も

あるだろうが、本人の意識の上では絶世の美女である自分を差し置いて、狙っ

た男が違う女に靡くことなどありえない。

「何か知らないけど、最初に夏葉を見た時にあの男、夏葉のためなら何でも

するって言い切ったらしいのよね。それで何をしたかって言うと、夏葉がレ

ウスに乗ってみたいって言ったからって、銀レウスを捕まえて来たりとか」

「マジかよ。今の将兄と言えば銀レウスってイメージなのに」

「そう言えば、夏葉を見せびらかしたいっていう理由でファーナが主催の会
合に連れて行ってクリス三世に紹介した、なんてこともあったかな」
それとなく朱宮を見れば、細い肩が僅かに震えている。それに内心でニヤ
リと笑いながら、声を押さえるようにして笑っているレイとルナに向き直る。
「まあ、あの様子じゃ将兄は朝廷側が何を言って来ても夏葉を探すだろうか
ら、捜索が打ち切られる心配はしなくても大丈夫ってことよ。ただし、探し
ているのはあくまで夏葉だから、あの子と逸れてしまったら見捨てられる可
能性もあるけどね」
軍が探しているのは、朱宮ではない。暗にそのことを滲ませながら、光宮
は断言した。
「今ごろ、将兄は机を叩きながら夏葉～夏葉～って悶えてるんじゃない？」

思い出すのは、目のやり場に困るような二人の熱愛ぶり。身の置き所に困って以来、彼が来る時は早々に退散することにしている。

「もともと、夏葉が軍学校に入学したいって言いだしたのは、今の将兄と一緒に仕事がしたいっていう理由だったのよね。信じられる？　ナメてるとしか思えないじゃない？　でも夏葉にしてみれば真剣だったワケよ。ところが入学するまでもなく、いきなり一足飛びに婚約したって言いだしてね……。あの時はさすがの私も驚いたわ」

三等兵からのスタートでは将兄職にある者と面識できる立場になるまで想像以上の時間がかかる。けれど軍学校を卒業すれば最低でも尉官クラスには出世できる。何をどう思ったのかは知らないが、普段ボケっとしている夏葉が思いつめて行動したのだから、よほど惚れこんでいたとしか思え

ない。

「おまけに、私と会ったころはちょっとワイ談をするだけで真っ赤になって

俯くようなウブな子だったのに、今じゃあ将兄に好き勝手に仕込まれちゃって」

「何だよ、それ」

「英雄と呼ばれる男にはロクなモンが付いてないってことよ」

樹海の夜は、しんしんと更けていく……。

遡逅15

王宮という名の建造物は、人の手によって造られたものでありながら
人のものにはなりきれない。それは、そこに住む者たちが立ち入る者を
選別するせいでもあり、あるいは天を突き刺すようなその姿を見上げて
暮らす者たちが「王」という存在に特別な感情を抱いているせいかもし
れない。

「王」とは、人であって人ではない。アルテリアに古くから伝わる神
話の住人が、地上に残して行った一族。つまり神の一族の末裔なのだ。
このアルテリアと名付けられた国の土の上に根を下して生きる人間にと
っては、国王とは神にも等しい。かつては信仰心にも似た思いで崇拝さ
れていた国王も、今では人の延長という扱いを受けるようになって

久し

いが、それでも未だアルテリア国民にとって国王とは、同じ人という存

在に生まれ、同じ体の構造を持ちながらも自らとは異質な、いい意味で

も悪い意味でも特別な存在であることには違いない。

「朱宮……朱宮……今どこにおるのだ……いったいどこへ行ってしまっ

たのだ……。早く戻って来てくれ……」

室内に設置された何万という数の蝋燭が、忍び寄る闇夜を押しのけて

黄金の装飾を施された食堂を明るく照らし出す。緋色の炎に照らされて

なお青白く見える顔の男は、中年を通り過ぎて老年へと差し掛かろうか

という年ごろ。冷たい汗を浮かべたその顔は多分に脂肪を含んで腫れぼ

ったく、白いものが混ざり始めた茶色の髪も、前方から光源が迫りつつ

ある。対照的に濃い眉と頬の脂肪に挟まれながら、かろうじて役目を果

たしている瞳が、まるで悪夢を見ているかの如く空中を漂っている。こ

の男こそ、アルテリアという大国の頂点に立つ者、名をアルテリア１３

世という。

「軍はいったい何をしておるのだ。こんな時のための冬軍ではないのか。

一国の王女ひとり探し出すこともできぬとは……何たる事態……」

言いながら、彼は顔と同じく脂肪分の多い指先で黄金のイスを握りし

める。強く立てた爪が装飾に食い込み、鈍い音を立てた。彼の頭に過ぎ

るのは、愛娘の笑顔。次いで彼の脳裏に、つい先日、娘が将来の結婚相

手に是非、とせがんだできた男のことを思い描いた。本音を言うならば

あんな男に娘をやるつもりなどさらさらない。だが、可愛い娘のかつて

ないほど真剣な頼みを無碍に断ることなどできるはずはない。それに、

“アルテリアに美女あり”と諸外国がこぞって囃し立てるほど美しい娘、

それも一国の王女を国王が直々に婚約者に勧めたとあれば、あの生意気

な男も態度を改めるかもしれない。そう思うと、僅かながら溜飲がおり

る気もする。

「ところで、宰相」

彼の右前に佇む小柄な姿に声をかけると、この国の宰相職を預かる中

年の男が僅かながら迷惑そうな顔をして視線を上げた。

「将兄はいつになったら現れるのだ」

彼の前には白いクロスをかけられた長大なテーブル。手持無沙汰そう

に佇んでいるのは王族の食事を用意することを生業としている役目の者

たち。肝心の朱宮こそいないが、今夜は夕食の席に将兄を招待してあっ
たはずだ。通達した時間は七時。アルテリアが誇る時計技術を圧縮した
ような立派な柱時計の針は、すでにその時間を三十分ばかり過ぎている。

「さあ……どうでございましょう……。なにぶん、今は業務が立て込ん
でおるようでございますので……」

しどろもどろ、という口調で宰相は最もと思われることを舌に乗せて
みるが、国王の機嫌は次第に悪くなっていく。

「業務がどうのという話なら聞く耳は持たん！　国王の呼び出しの席に
遅れるとはどういうつもりなのだ！」

先ほどまでは失踪した愛娘の身を案じていたらしく蒼白な顔色をして
いた国王であるが、どうやら朱宮から将兄のことを連想した挙句に、招

待された食事の席に顔を出さない将兄に腹が立ってきたようだ。宰相も

人のことは言えないが、国王は考えていることがそのまま顔と口に出る

ので非常に分かりやすい。

「わたくしに聞かれましても……なにぶん……軍のことはわたくしの預

かり知らぬ話でございまして……はい……」

実は将兄が顔を出さないのは宰相にとっても迷惑な話。本当ならば定

時で仕事を切り上げて自宅に帰れる予定であったにも関わらず、こうし

て手当の付かない仕事にいつまでも従事させられている。本音を言えば

さっさと婚約を解消させるなり、朱宮と“ネンゴロ”な関係になるなり

して解放させてもらいたい気分なのだ。

「おい、君」

宰相は目についた月府の役人のひとりに声をかける。

「ちょっと将兄を呼び出しに行って来てくれたまえ」

こうしてただ待っているだけではいつまで経っても事態は好転しない。

そこで彼が下した結論は人を遣って目的の人物を呼び出すという、ごく

一般的で、実にありきたりな、かつ誰でも思いつく方法であった。

「まったく、あの男は何を考えておるのだ。異例の最年少だが何だか知

らんが、あんな若造に将兄職が務まるものか。こんなことならば前代の

将兄の方がまだマシだ。いっそあの男を追放してコルネットを将兄職に

復帰させるべきではないのか」

宰相から白羽の矢を当てられた役人が部屋を出ていく。その背を見送

りながら、国王は誰にともなく小言をもらした。

「しかし、コルネットはとてつもなく平凡な男だったという噂でござい

ますが……」

言ってしまって宰相は口が滑ったことを自覚した。いわゆる、失言で

ある。

「何だと!?　それはどういう意味だ。コルネットは我が姉、紫晶院が

これぞと思って推薦した男。その男を悪し様に言うことは、紫晶院まで

も侮辱することにはならないか!」

「そんなつもりでは……」

国王の頭に事実がどれだけ伝わっているのかは定かではないが、前代の

将兄、コルネットは紫晶院・紫宮の愛人だった男だ。あの巨体相手に夜の

営みを“立派に”務めあげ、結果的に獅子王とまで呼ばれていた前々代の

将兄を追放して将兄職に就任した。しかし、そのムリな人事は軍内部から

批判を受け、就任してから僅か一年かそこらで訴追されるに至った。

執務

室の壁には、歴代将兄の肖像画が飾られるのが習わしであるアルテリア軍

において、未だに獅子王の隣にコルネットの顔が並べられる気配はない。

「おまけに最近の軍人はたるんでおる！」

国王の思考から、実の姉が侮辱されたことという事実が颯爽と通り過ぎ、

最近の軍人の動向に向って暴走を始めた。

「昔は良かった。軍人は軍人らしく、態度はつねにキビキビとしていて服

装に緩みはなく、頭を丸めて我が国のために命をかけて戦ったものだった。

最近はどうだ！」

「確かに……服装や頭髪は乱れておりますね……」

好き好んで頭を丸める者もいるのだが、大半の者たちは巷で流行りの髪型

で見た目を飾っている。特に、最近になって目立つのが、これでもかと言わ

んばかりに髪を真っ赤に染める若い男子の姿である。

「だいたい上に立つ者があんな乱れた男だからいけないのだ。男子は男子らしく、女子は女子らしく、軍人ならば軍人らしく、それなりの節度を持つべきなのだ！　上に立つ者がしっかりした者であれば、従う者たちの態度も自然と改まってくるものだ！」

「なるほど。それで、最近の王宮には肥満体形の者が多いのですな」

あっと思った時にはすでに遅い。またしても失言である。

「わたくしはただ、国が豊かな証拠だと、そう申し上げた次第でございまして……」

国王の顔色が変わる。どうやって言い繕うか、と宰相の頭が回転し始めた時、食堂の扉が勢い良く開かれて、目に鮮やかな赤い髪の青年が姿を現した。

国王の興味が宰相から青年に移動する。格別に会いたい男ではなか

ったが、

この時ばかりはその登場に救われた。

「何だか待たせたみたいで、すみませんね」

幾分、不機嫌さが含まれた口調で青年は国王に向って吐き捨てながら、勧

められるわけでもないのにイスに着く。乱暴というか、ガサツとしか言いよ

うがない態度であるにも関わらず、アルテリア軍の頂点に君臨する年若き将

兄には優美という言葉が纏わりついて離れない。年のころはまだ二十歳かそ

こらだったはず。それにしては落ち着いて見える。いや、落ち着いているとい

うよりも風格がある、と言った方が正しいかもしれない。他人の目を釘付

けにする秀麗な顔立ちや、彫刻のように整った四肢も相まって、その青年は

そこにいるだけで他者の注目を惹きつけて離さない。その姿は、宰相がまだ

少年と呼ばれる年ごろだった折、夢に描いた英雄が神話の世界からそのまま
抜け出してきたようだとさえ思ってしまう。
「遅れて来てその態度は何なのだ。一国の国王に詫びるという礼儀さえ持ち
合わせておらんのか」
テーブルに置かれた国王の拳が怒りに震えだす。
「あいにく、俺が持ち合わせているのは職務への忠誠心だけなんだ」
「国王の呼び出しに時間通り応じることは職務ではないのか」
「それを職務と呼ぶなら、軍の仕事は半減するだろうな」
軽い溜め息を落としながらそう言いきった将兄の前に、年代物のワインを
注いだグラスが差し出される。運んできたのはまだ若い女。あからさまに顔
を赤らめている様が、見ていて微笑ましいと宰相は思った。
「それで？　要件を聞こうか、国王陛下」
頬杖をついたまま単刀直入に問いかけられ、国王の顔が更に紅潮する。

「まさか俺を呼び出して世間話はないだろ?」

グラスを傾ける彼の口元には嘲笑が刻まれている。嘲りの笑みと書いて嘲笑。

たいてい、その笑みを浮かべる者の顔立ちは醜く歪んで見えるものだが、この青年に限っては妖艶でさえある。

自分もこんな見た目に生まれていたら、人生はもっと違っていただろうか、と宰相は一瞬の走馬灯を見た。高級官僚の家に生まれ、いずれは宰相となるべく英才教育を受け、親の勧めで由緒ある家柄の娘と結婚し、子供を二人ほど儲けた。階段を登るように出世し、官僚の頂点である宰相職に就任したのを喜んだのは束の間。庶民からは唇が曲がっているという理由だけで悪い人だと後ろ指を指され、思春期を迎えた二人の娘たちからは汚物のような扱いを受け、すっかり中年太りしてしまった妻からはゴミのような扱いを受け、王

宮で働く役

人たちからは子犬だとバカにされる、この毎日。華やかさなど、カケラもない。

もし生まれ変わるなら、この青年のように軍から推薦されて将兄に立つような

男に生まれたい。「腐っても男子。」男子たるもの、騎獣にまたがり剣を振る、

その姿に憧れを捨てきれるはずはない。

「……将兄、お前の婚約者とはどういう者なのだ。何でも朱民の胡蝶だと聞いたが？」

宰相が走馬灯を見ている間に、国王の思考は本題に向っていたらしい。

「どういう者とは？」

将兄はグラスを手の中で弄びながら、視線だけを国王に向けた。何となく、

威圧するような何かを感じてアルテリア１３世は内心でたじろいだ。国王に就

任して以来、他者に怖気づいたのは初めてだった。

「胡蝶とは美しいものだ。それはお前の婚約者に限ったことではない。けれど、

朱宮であればどうだ。美しく、精錬された顔立ち。溢れ出る品性。それに一国

の王女だ。朱宮の夫となる者には朱民では与えられぬ富と名誉が与えられるぞ」

遠まわしに言っているつもりなのだろうが、単刀直入もいいところである。

「必要ない」

再び注がれたワインのグラスを傾けながら、将兄は何でもないようにそう言

ってのけた。

「な……何だと!?　お前、自分が言っていることが分かっているのか！　朱

宮だぞ!?　アルテリアに美女ありと、諸外国がこぞって噂するほどの！　そ

んな朱宮よりも、どこの馬の種とも知れぬ胡蝶の方がよいと申すか!?」

「……馬の種？　それを言うなら馬の骨だろ？」

「何でもいい！」

食堂に、しずしずと料理が運び込まれ始めた。季節の素材を贅沢に使ったも

のばかりだが、将兄はチラリと目をやっただけ。手を付けようとはしなかった。

「お前が何を言っても構わないが、俺が愛しているのは夏葉だけなんだ。それ

に、ファーナの国王にはもう紹介したしな」

国王の口が開く。それは、宰相も同じだった。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だよ。半年くらい前だったかな。あちらさんが俺たちアルテ

リアの軍部を統括する連中を集めて、酒でも飲みながら親睦を深めようと言っ

て来たんだ。もしかして知らなかったのか？」

知らなかった。それならそれで朝廷側にもファーナから何らかの通告があっ

てもおかしくないだろうし、アルテリア軍も朝廷に報告すべきだ。

「その席に夏葉を連れて行ったんだ。クリス三世から随分とお誉めの言葉をいただいたよ。俺の婚約者は夏葉で定着している。今更、朱宮だか何だかが出張ってきてもファーナが不審がるだけだろう」

「クリス、三世……」

国王の顔から色が消える。何を思ったのか、急に国王が宰相の方を振り向いた。

「宰相、クリス三世とは誰だ？」

「ファーナ王国の国王陛下であらせられます」

国王の間抜けとしか言いようがない質問に、将兄が再び秀麗な顔立ちに嘲りの笑みを浮かべる。

「さすが、我がアルテリアの国王は神童と呼ばれるだけある」

「褒めておるのか？」

「当たり前だろ？　男女に関係なく最初に生まれた者が王位を継承

するのが習
わしのアルテリアで、紫晶院・紫宮を差し置いて国王に就任したわけだし。噂によれば１０歳のころからすでに今と同じだけの知性と品性、そして理解力を備えていたという話なんだから」

褒められたと思ったらしい国王が満足げに笑うのを見ながら、宰相はふと思い立った。

「将兄、それは褒めていないのではないかね？　そんな言い方だと国王陛下が１０歳のころから何も進歩していないように聞こえるぞ？」

場に沈黙が落ちる。宰相は再び自分が失言したことに気が付いた。国王が硬直した。控えている役人たちが笑いを噛み殺している。何とも言えない空気の中、将兄が優雅な動作で立ち上がる。

「宰相、あんたは宰相職より教師の方が向いているよ。それから、ひとつだけ

言わせてもらうなら、朱宮より夏葉の方が美人だ」

蝋燭の炎が宿る金色の瞳を見据えられ、宰相は身が引き締まる思いをした。

無意味に居住まいを正した彼に苦笑し、将兄は最後に爆弾を残して食堂を退室

して行ってしまった。

「いやあ、ウワサ以上に素晴らしい若者ですなあ、彼は。軍人たちが囃し立て

るのも分かる気がしますねえ」

場を繕おうとする宰相の言葉は、静まり返った食堂に空しく響いた。

邂逅16

一方、宰相の失言により完全に硬直してしまった食堂から逃げだしてきた

将兄は、やや急ぎ足で自らの執務室に向って歩いていた。今更、追いかけて

来られたら面倒だ。行きかう役人の姿も随分と少なくなっている時間帯、そ

こかしらに灯された蝋燭が闇を払拭する廊下の先に、見慣れた人影を見つけ

たのはしばらく歩いてのことだった。褐色の肌に薄い水色の髪をした、タヌ

キというあだ名がしっくり来る男、秋軍将だ。

「お早いお戻りですな、将兄」

自分の姿を認めると、秋軍将はニッコリと笑って見せる。

「お迎えに上がろうかと思っていたところです」

「礼なら宰相殿に言うことだ。彼が切り上げるタイミングを作ってくれた」

「さようで」

歩みを止めない将兄に、一歩遅れて秋軍将が付き従う。

「国王陛下は何と？」

「お前が思っているままだ。朱宮と婚約する気はないかと言ってきた」

「それはそれは……」

背後で笑いを噛み殺す気配がする。

「ファーナのクリス三世に夏葉を紹介したという話をしたら、国王だけじゃなく宰相殿まで目を丸くしていたぞ。お前ら、俺たちがファーナを訪問すること

を朝廷に報告していなかったみたいだな」

「はて、朝廷に報告する義務はありましたかな？　何でもクリス三世が個人的

に我々を招待してくださったわけでしょう？　もちろん、秋軍将として招かれ

たのであれば報告する義務もございますがね」

果てしなく心外だと言わんばかりに秋軍将は言葉を重ねる。彼は小さく息を

ついた。それならそれでいい。朝廷がどう思っても、関係ないし興味もない。

それより、問題は別にある。

「三日目だな……」

執務室のドアを開けば、そこに三人の軍将の姿がある。将兄の帰還に、彼らは少しばかり緊張した顔を緩めた。

「もう三日か……」

言いながら彼は執務机に身を沈める。そのまま、声にならない呻き声を上げて書類の散乱する机に突っ伏した。

「夏葉がいないとつまらないな……」

握りしめた拳で机を叩く姿に、机の前に立った四軍将が苦笑を浮かべる。

「将兄、だいぶキておりますね……」

幾分、憐れみを含んだ口調でそう言ってくるのは、春軍将である。

「当たり前だ」

身を起こした彼が胸ポケットから煙草を取り出し、火を付ける。
冷え込み始
めた空気に、紫煙が揺らいだ。
「そういえば、先ほど艶の紫さまから見舞いの品が届きましたよ」
言いながら、冬軍将が箱詰めされた菓子を運んでくる。
「今、帝都で人気のある店の品だそうです。召しあがりますか？」
あいまいに頷くと、心得た彼がさっそく茶を淹れ始める。
「見舞いの品を送りつける前に本人が押し掛けてくるあたりが、あいつらし
いな」
「そのようで」
手際よく淹れられた茶に人気の店の品だという菓子が添えられる。
「お前らも食えよ。どちらかと言えば俺は甘いものは苦手なんだ」
「お言葉に甘えさせていただきます。私はけっこう好きですな」
秋軍将は笑いながら冬軍将が差し出した菓子を受け取った。いい
年をした中

年四人が菓子を囲んで笑顔というのも不思議な光景であるが、それはそれでお
もしろい。
「うむ、なかなかだ。さすが、艶の紫さまは食通でいらっしゃる。将兄、召し
あがらないのですか？」
満面の笑顔を向ける春軍将に、彼は幾分、冷めた視線を向ける。
「お前らの反応を見てからにしようと思って」
「はて、それは？」
全く分からない、という顔の冬軍将に、彼はニヤリと笑って見せる。
「艶の紫が送りつけた菓子だろ？　何か変な薬でも盛られたらたまらないか
ら
な」
四人の中年の顔色が変わった。
「……冬軍将。三日探して見つからないところを見ると夏葉たちは本国にはい
ないと見ていい。今晩には捜索のために動かした冬軍を引き上げさ

せろ。捜索
はフィールドを主にする。ギルドで把握していない場所。春軍と秋軍で部隊を
編成して捜索を開始しろ。夏軍には補給を命じる。早急に動け。ただし」

彼は優雅に脚を組み、固まっている四軍将を見やる。

「“体調不良”が生じたなら、四軍将には誘い通りへ行くことを許可する」

＊

夜が明けようとしている。

「起きて。行くわよ」

漆黒の闇が藍色に薄まり、周囲は深い霧に包まれている。どこか遠くで、野
鳥の鳴く声がした。

「もう動くのか？」

光宮に肩を揺すられて浅い眠りから覚めたレイは、まだどこか夢と現実の境
目を行き来しているような、虚ろな表情をしていた。

「今日中にはあの建物に入りたいの。あまり遅くなると、先に出発してしまう
かもしれないでしょ？」
どこへ、とは敢えて言わずにおいた。建物が予想以上に危険な場所であれば
彼らは自分たちを待たずに動き出すだろうし、軍が発見すれば自分たちは置き
去りにされかねない。
「お姫さん、そろそろ起きようぜ」
幹に寄りかかってウツラウツラとしていた朱宮の肩をレイが揺する。その間
に、光宮はルナを起こした。全員が目覚めたのを確認し、彼女は木の枝に登る
時に使った蔦に手をかける。周囲にモンスターの気配はないが、五感のすべて
が緊張して張りつめようとすることは止められない。一流のハンターにしてみ
れば、ザコ以外の何物でもないランポスでさえ、今の自分たちにとっては多大

な脅威となって襲いかかる。

（フィールドでは、人は弱者なんだわ……）

息を詰め、ゆっくりと蔦を伝って地面へ向かう。慣れない蔦登りで、腕の筋

肉が疲労のあまり悲鳴を上げそうになるが、一気に手を放して地面に足を付け

ることはしなかった。

「ふう……」

霧に沈む樹海は鬱蒼とした闇に包まれている。静まり返った森の土に、よう

やく片方の足が触れた。早朝の空気を胸いっぱいに吸い込むことは、状況が違

えば随分と心地よいのだろうが、今はとてもそんな気分にはなれない。けれど、

敢えて光宮は深呼吸するように新鮮な空気をいっぱいに吸い込んだ。

「……ここで判断を間違うわけにはいかないわ」

否応なしに張りつめる神経のせいで体は緊張している。疲労こそ感じてはい

ないが、おそらく肉体的にも精神的にも自分が思っているより衰弱しているに
違いない。だからこそ、ここは先を急がない。
「大丈夫。降りて来て」
軽く目を閉じた後で、光宮は頭上に向って手招きして見せる。頷いたレイと
ルナが朱宮を促し始めた。
「手が痛い」
「放せばいいじゃない。死ぬだけだけど」
さっそく泣き事をもらす朱宮にはっきりと言ってやれば、蔦に捕まった彼女
が頭上2メートルの位置で動かなくなってしまう。
「早くしなさいよ」
「もうムリ……。手が痛いの……」
未だ枝の上にいる二人が、困ったように光宮を見下ろしている。
「レイとルナ、悪いけど蔦をもう一本、引き剥がして。姉さんは置いて行く

わ」

「光ちゃん、ヒドイ！！」

途端、叫ぶような声が鼓膜を刺激する。こんな場所で大声を上げられること

は嬉しくない事態だが、それでも朱宮を助けるために何かするよりはマシだっ

た。

「忘れているかもしれないけど、ここはアルテリアじゃないの。あんたも私も、

フィールドではただの人よ。他人ばかりアテにしないで」

我ながら冷たい声だと思う。枝の上では、レイが引き剥がした蔦を地面に向

って垂らすところだった。

「さっさと降りなよ。王子さまは来ないよ」

朱宮に向って一言はっきり言い放ったルナが、俊敏な動作で蔦を伝って降り

てくる。続いたレイも、蔦を降りる仕草に躊躇がない。

「前から思っていたけど、手慣れてるのね」

傍にやって来た二人に向ってそう言うと、レイとルナはどこか得意げに笑って

見せる。

「あたしら、実は元・盗賊なんだよ」

「道理で……」

納得するような、呆れるような。言われてみれば二人には街の匂いがしない。

「どうやって軍学校に入学したかは聞かないでくれると助かるかな。ただ、ルナは

あたしらの一味の中でも飛びっきりの弓使いでさ。街に出てきていろんなヤツを見

てきたけど、ルナに敵うヤツはいねえよ」

「レイだって。うっかり怪我なんてしちゃったけどね、実は凄い怪力なんだよ。クマみたいな盗賊の頭でさえ、レイに腕相撲で負けたくらいなんだから」

互いを褒め合う二人を見て、光宮は何となく羨ましいと思った。

友達だと呼べる

人間の実力を認めて、自分も相手から認めてもらえる。それはとても羨ましい。唯

一、友達だと呼べる夏葉のことは自分なりに認めている。けれど、今のところ自分

は夏葉に対して認めてもらえるような物を何ひとつ持ち合わせていない。

「期待してるわ。ちなみに、私が自慢できるのは往生際の悪さだけ。他には何も持

っていないから」

「知ってるよ」

屈託なく笑いながら、レイがそう断言してくれた。

「で、降りるの？　降りないの？　どっち？　脅しじゃなく本当に置いて行くわよ」

軽口を止めて頭上を見上げれば、嗚咽を上げる朱宮が緩慢な動作で動き始めた。

「手のかかる姉さんだね……」

光宮と同じように朱宮を見上げながら、溜め息交じりにルナが呟く。

「まあ、王女さまってのは、そんなモンなんだろうけど」

「失礼ね。姉さんと一緒にしないでよ」

「そう言えば、あんたも王女なんだっけ？　ゴメン、忘れてた。」

「悪かったわね、それらしくなくて」

笑いだすルナを複雑な心境で眺めながら、朱宮が地面に到着するのをひたすら待ち続ける。実際、王女らしくない、とは今まで幾度となく言われてきた言葉である。

かつてはそれに対して憤りを覚えたものだが、今となってはそれすら感じない。むしろ、こうして自分で自分の道を決めたことに、満足している。

「でも、何だって王女のくせに軍学校なんて入学しようと思ったんだ？　光には悪いけど場違いだろ」

「はっきり言ってくれるわねえ……」

光宮は腰の後ろで無意味に腕を組む。話そうか、どうしようか、表情には出さないが心の底では葛藤した。夏葉にも言っていない。理性では、口に

するべきではな
いと分かっている。けれど、何となく誰かに聞いてもらいたかった。
強がってはい
ても、結局、自分は誰かに理解されることを望んでいる。

「王権奪取」

朱宮には聞こえないように、小声でそう呟いた。それまで笑ってい
た二人が途端
に表情を強張らせるのを見て、やはり言うべきではなかったか、と
後悔するが、一
度、音にしてしまった言葉はもう取り消せない。

「バックには軍がいるの。秘密ね」

おどけたように唇の前に指先を当てると、何をどう解釈したのか
レイが爆笑し始
めた。続いてルナまでもが腹を抱えて笑い転げる。

「何よ、人が真剣に言ってるのに……」

些か不機嫌に言ってみれば、二人が息を整えるように深く呼吸す
る。

「悪い、悪い。まさかそう来るとは思ってなくてさ」

腹を抱えたまま、レイが光宮の肩をバシバシと叩く。一応、手加減はされている
のだろうが、かなり痛い。怪力が自慢だということに、否応なく納得させられた。

「なるほどね。そういうことか。いいんじゃないの？　そういうのって、何だかワクワクしてくるよ」

「どういう意味？」

「あんたと知り合いになれたこと。事を起こす時には、あたしらにも声をかけてよ。あんたに、協力したい」

ルナの銀色の瞳が、真っ直ぐに見つめてくる。少しばかり離れた場所で、レイも同じように強い瞳をしていた。

「足手まといにはならないでよね」

目頭が熱くなりそうになるのは、きっと疲れているせいだ、と光宮は強引に自分を納得させる。ようやく、朱宮が地面に降りてきたところだった。

「ねえ、何の話をしているの？」

レイとルナが楽しそうに笑っていたことに興味を引かれたのか、彼女は目の前

にオモチャを差し出された子供のように顔を輝かせている。置いて行く、と断言

した時に泣きだしたことは、もう忘れてしまったらしい。

「姉さんの愛しの将兄と夏葉のエロ話、聞きたい？」

意地悪げに言ってやれば、朱宮の顔が途端に強張る。その様子に軽く笑って、

光宮は時計で方向を確かめる。

「分かってると思うけど、さっきの話は私と四軍将しか知らないから」

「バラすわけねえだろ？　信じろよ」

「そうね」

建物に向って歩き出す。樹海の土は湿気を含んで重かった。

遡迂１６（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

邂逅17

小さな窓から差し込む光が、朝を告げていた。

「今日あたり、着くかな……」

医療室のベッドの上で目を覚ました中也は、次第に白んで行く樹海を複雑な気持ちで見つめていた。ベッドで眠ることができたのは、久し振り。疲れていないはずはないので、ぐっすり休みたかった。けれど、どうしても神経が高ぶって熟睡することができない。今こうしている間も、廊下をやってくる見知らぬ人影がないか、耳を欹てている。

「呑気でいいよな」

中也の隣のベッドでは、エマニエルが盛大な鼾をかきながら爆睡している。

正面にはシヴァと、彼の看病の途中で眠りに落ちたらしい夏葉がベッドにうつ伏せるようにして軽い寝息を立てていた。中也が戻ってきた時、

エマニエ

ルはすでに眠りに落ちていたが、夏葉はまだ起きていた。シヴァの様子を伺

えば一言、落ち着いたと言って、その額に水で濡らしたタオルを置く。水が

貴重だと分かっていないのか、とその行動を咎めそうになったが、蛇口を捻

れば滝のように流水が溢れ出てきたので、何も言わなかった。そう言えば吊

り橋の下には川があった。水車か何かで水を上げているとすれば、水に悩む

必要はない。

中也はベッドから起き上がって、何ということもなく薬品が並べられた棚

の前に立つ。夏葉は躊躇なく必要な薬品を選び出していたが、中也にはどれ

が何の薬であるのかさっぱり分からない。塔を出た後にも、薬品は必要だろ

う。後で夏葉に頼んで消毒薬と化膿止めだけでも持ち出そう、と思ったとこ

ろで、昨晩シヴァの治療に使われた薬品が簡易なベッドの上に放置してある

ことに気付いた。

「消毒薬……」

目についた一つを無意味に取り上げてみる。

「オキシドールとかマキロンみたいなものかな」

ふと呟いたところで、すぐ傍のベッドに突っ伏していた夏葉が身じろぐ気配がした。

「あ、悪い。起こしたか？」

声をかければ、虚ろな深紅の瞳が揺れて中也の姿を映し出す。

「もうちょっと、寝る……」

言いながら、立ちあがった夏葉が隣の開いているベッドに潜り込んでいく。

幾分もしないうちに、小さな寝息が聞こえてきた。

「シヴァ、具合はどうだ？」

確信的にそう問いかければ、いつからか目覚めていたらしい彼が目を開いて
中也の方に視線を向けた。
「悪かった～な、中也。もう大丈夫だ～ぜ」
「怪我してるなら早く言えよ」
少しばかり咎める口調で言えば、シヴァが彼独特の笑みを浮かべて見せる。
「樹海の只中で具合悪いで～すって言って、どうするつもりだったのか～な？
塔は目の前だったし、無意味に訴えても仕方ねえだ～ろ」
「それは、そうだけどな」
「それで？　何か発見できたのか～な？」
ベッドに身を起こしたシヴァに、中也はスラックスのポケットに仕舞い込んでいたカギの束を掲げて見せる。
「誰かがわざと落として行った」
「……この塔も安全じゃあないってこと～か」

中也は無言で頷き、カギの束をポケットに戻す。

「この階には資料室、医療室、談話室、食堂、シャワールーム、それから軍学
校の寮みたいな小部屋が四つあった。手がかりはナシ。ついでにメシになりそ
うなものも見当たらない。望みがあるとすれば、一階のカギがかかった部屋だ
けだ」

「……そのカギが一階のあの部屋のカギだったら、それを落としたヤツは俺た
ちに部屋を見せたいってことになるか～な。あるいは、誘い込もうとしている
か」

再び、中也は無言のまま頷いて返した。その危険性を考え、昨晩は一人で一
階に降りることはしなかった。シヴァが復活したなら、一緒に行ってみる価値
はある。エマニエルは置いて行った方がいいだろう。あの様子では、足手まと

いになりかねない。夏葉には悪いが、その間エマニエルの相手をしておいても
らうことになる。

「行くか？　そういうことなら、なるべく早く探し物を終わらせよ～ぜ」

「そのつもりだった」

中也は手早く夏葉に宛てて書き置きを残す。一階の部屋をシヴァと見てくる、
という文字の後に医療室のドアにカギをかけて外へ出るな、という警告も書い
ておいた。それを夏葉の端正な寝顔の横に残し、中也とシヴァは医療室を後に
する。

「食堂とかシャワールームとかはどんな様子だった～んだ？」

医療室の扉を開ければ、そこには陽の光が差し込まない暗い廊下が、松明の
火を受けてじっとりと佇んでいる。肌に触れる空気は湿り気を帯びて重く、時
折どこからともなく吹き抜ける風が気味の悪い音を立てていた。

「そうだな。談話室もそうだったけど、食堂もシャワールームも個室も、つい
さっきまで人がいたような雰囲気だった。ただ、食堂に限って言えばテーブル
の上にはコップやら何やらが散乱していたけど、食べられそうなものは何もな
し。個室は着替えやら何やら日用品が置いてあった。それから、気になったの
は壁に貼られていたらしい紙がすべて剥がされていること。個室にいたっては
不自然なくらい書物や書類が持ち出されていた」

「つまり、結論は？」

「誰かが証拠隠滅をしているっていう可能性」

「個室に残っていた服はどんな感じだった～んだ？」

「残念ながらアルテリアでよく見る普通の服ばっかりだったよ。個室が四つで、
各部屋に一人ずつだとしたら、男ばかり四人がいたことになるかな。洗面台にカ

ミソリが置いてあったり、男性用の整髪剤……石鹸が置いてあったり、女の人の
部屋っていう感じではなかった」
「ふ～ん」
階段を下り、二人は最初の部屋の前に立った。
「さあて、何が出るのか～な」
中也は手に持ったカギを鉄のドアの鍵穴に差し込んでいく。三度目でようやく
カギが外れる音が耳に届いた。軽く息をつめ、シヴァと目配せをする。二人で扉
の左右を挟むように立ち、中也がゆっくりとドアノブを回し、部屋の内側に向っ
て押した。重い扉が軋む音がして、その後は静寂が訪れる。再びシヴァと視線を
交わし合う。無言で頷き、ゆっくりと顔だけ部屋の中へ向けてみた。松明の灯り
が届く短い範囲の床は、ホコリを被って白く汚れている。鼻腔を、カビくさい匂
いが刺激した。部屋の中に気配がないことを確かめ、体を移動させ

て中途半端に
開いたドアを押す。暗闇に光が走るように、小さな部屋が姿を現した。
「な～んにもねえ～な」
「ドアがある」
医療室とほぼ同じくらいの広さしかないこの部屋には、目につく限り何もない。
ただ、部屋の一角に別の部屋へ続く扉がある。場所的に考えれば、そのドアの向こうにあるのは建物の奥にある塔にあたる。
「一応、開けてみよう～ぜ」
「ああ」
手の中でカギを持ち変え、中也は扉に向って歩いて行く。カギ穴にカギを入れて
いる間、シヴァは油断なく背後を警戒していた。
「よし」
カチリ、と耳障りのよい音がして、カギが開く。前方に向って押しだせば、鈍い

音を上げながら扉がゆっくりと開いて行く。途端、中也とシヴァの顔に強い風が当
たった。
「気圧の差ってヤツか～な」
顔を出して見ると、そこは朝の光に満ちていた。天井には階があるようだが、塔
を覆う壁があちこち壊れて、そこから差し込んだ朝日が塔の中を照らしているのだ。
二人の前には螺旋状の階段がある。ただし、それは人がひとり通れるほどの狭いも
ので、円柱形の塔の壁に巻きつけるように、階段が伸びている。視線を下方へ向け
れば、底の見えない暗闇が蹲っていた。微かに何かが軋むような音が聞こえてくる
のは、塔に水を上げている水車の音だろうか。
「気味悪いところだな……」
「下まで降りてみる勇気あ～るか？」
「……ない」

深さからすれば、この塔の最下層は崖の下の川まで続いているだろう。断崖絶壁

にこれだけの深さの穴を開け、かつ最上部はアルテリア城に匹敵するような高さで

ある。いったい何の目的で、と好奇心だけが擽られた。けれど、螺旋階段を登って、

あるいは降りて塔の中を調べてみようという気にはならなかった。二人とも口には

しなかったが、ここは建物の中で唯一、太陽の光を受けている場所でありながら、

何とも言えない気味の悪い気配が漂っている。一言で表すなら、そう恐ろしいのだ。

昨日、この塔に辿り着いた時、吊り橋を渡って塔に入ることに二の足を踏んだ。その

の時に感じた悪い予感が、凝縮されて周囲に満ちているような、そんな感じだ。

「次、行こうか」

「そうだ～な」

中也は気圧の差の影響で、ひたすら開いたままでいようとするド

アを力任せに引
っ張った。ドアを閉めてしまえば、再びカビの匂いがする。しかし、
なぜだかほっ
とさせられた。カギはかけずに、その部屋を後にする。二人は先ほ
どと同じ要領で、
隣の部屋のカギを開け、中に踏み込んだ。

「あ！」

ゆっくりと光に照らされていく室内に、目的のものを見つけた中
也は思わず小
さく声を上げていた。

「保存食じゃないか……」

最初の部屋とほぼ同じ広さの壁の一角に、何度か見たことがある
アルテリア特
産の保存食の名前が書かれた箱が見えた。駆け寄って中を開けてみ
れば、期待通
り、箱の中には封の切られていない保存食が詰まっている。大きさ
は手のひらほ
どで、湿気を通さない特殊な紙で包装してある。龍都にいたころ、
これと同じも

のを母親が購入してきたから覚えていた。見た目も味も質素の一言に尽きる代物

で、進んで口にしたいものでこそないのだが、何でも、災害時に備えて非常食を

自宅に置いておくことが、最近、主婦の間で流行っているそうで……。

「やったな」

二人の脳裏に、僅かながら希望が宿った。

「ああ。でもこのタイプ、水か湯で溶かさないと食えないヤツだ。面倒だな」

手にとって確かめてみれば、説明通り、水で柔らかくしないととても口に入れ

られそうにないほど固い。けれど、水につければ嵩が増えるという特徴があるの

で、持ち運ぶ食糧の量は少なくて済む。断然、ないよりはマシだ。

「いくつある～んだ？」

「ちょっと待てよ……」

壁際に積まれた箱を引っくり返してみると、半分以上が空になっ

ていた。残っ
ている保存食を数えてみれば、一箱４０個入りが3箱。つまり１２０個ある。
「……光宮さんたちが全員無事なら俺たちは8人。切り詰めて1日につき1食で
頑張ったとしたら、１５日は持つな。ただこれを持って移動するのは、かなり大
変そうだけど」
保存食は小麦などの穀物を粉砕して粉状にしたものを、圧縮して固めた品物で
あるため、見た目よりは重さがある。１２０個を抱えて歩き続けるのは、普通に
考えればかなり負担になるだろう。それも、いつ何が襲ってくるともしれない樹
海の中で。
「考えても仕方ねえだ～ろ。とりあえず、それは後で運ぶとして、先にさっさと
最後の部屋も確認して回ろ～ぜ」
この塔にいる見知らぬ誰かが、親切心でこの保存食がある部屋の

カギをくれた

とは限らない。別に目的があるとすれば、残る最後の部屋に手がかりがあるだろう。二人は部屋を後にする。そして隣の部屋のドアを開け、思わず口元を覆った。

どこかで嗅いだことのある、嫌な臭いが強烈に充満している。それは、紛れもない腐敗臭だった。

邂逅18

太陽が中天に届こうかという時刻にも関わらず、樹海は空高く生い茂った
大木の葉に陽光を遮られ、薄暗い。足元の土は湿気を含み、新品だった皮の
靴に重く纏わりついて離れない。一歩、足を進めるごとに土が靴底に絡み付
き、自然と足が重くなっていった。

「あと半日ってところね」

野営した木の枝から見た限り、おそらくそれくらいの距離だろうと目算を
つけ、光宮は背後に続く三人を振り返る。疲労の色が見えるのは朱宮だけで、
レイとルナの顔色は変わらない。さすが、文明の利器とはかけ離れた荒れ地
でずっと生きてきた盗賊だったというだけある、とその体力を心強く思った。

「足が痛いわ……」

さっそく泣き事を言うのは、言わずと知れた朱宮だった。彼女の履いてい
る靴はヒールの高い硝子でできた代物だ。ポポの毛の絨毯が敷き詰められた
王宮の中を歩く分には問題ないだろうが、樹海の中を歩くにはこれほど不向
きな靴はないだろう。しかし、これぱかりは朱宮のせいではないので文句は
言えない。

「確かになあ……あたしらも皮靴なんて初めて履いたから靴ズレして痛えよ」

「珍しく弱気じゃない」

「いや、別に我慢できねえってワケじゃねえけど……」

歩みを止めると、レイが片方だけ皮靴を脱ぐ。レウスの襲撃で切った怪我
も生々しい脚の踵には、うっすらと血が滲んでいた。

「普段は皮靴なんて履かないから仕方ねえだろ？」

「そりゃあまあ、そうね」

「足が痛いからってここで止まるワケにはいかないんじゃない？早く行こうよ」

「そうね」

最もなルナの言葉に急かされるようにして、彼女たちは再び目的地である建物に向かって歩き始めた。途中、微かに何かが燃える臭いが鼻につく。

「中也だっけ？　あいつがやったんじゃねえの？」

最初の夜から逸れてしまったが、ランポスの襲撃から逃れるために登った木から降りた際、自分たちを探す秋軍（空軍）の目に止まるようにと中也と名乗った少年が集めた木の枝に火を点けていたことを思い出す。近づくにつれてうっすらと煙が見えたので、彼の行動はあながち間違いではないと思い知らされた。実際、自分たちは彼らが通った道順をこうして知ることができ

たわけだ。

「何だか、私以上に頭が回るヤツみたいね」

「小賢しい、の間違いなんじゃない？」

「言ってくれるわね」

振り返れば悪戯な笑みを浮かべたルナと視線が混じり合う。光宮は軽く笑った。

「でも、私なら木の幹に目印を残しておくわね。後から来る人たちが少しでも早く自分たちに追いつけるように」

「そこまで気が回らなかったんだろ？」

「それが私と彼の差ってヤツよ」

「あっそう」

それからしばらく樹海の中を歩いて行くと、彼女たちの前に半分以上が骨になったランポスの死体が転がっていた。途端に悲鳴を上げそうになる朱宮の口

を強制的に塞いだ後、光宮はそっとその死体に近づいた。

「おい、さっさと行こうぜ」

「ちょっと待ちなさいよ」

急かすようなレイの声を押しとどめ、彼女は注意深くランポスの死体を検分する。地面には血の跡がほとんど残されていない。触れてみるとすでに死後硬直が起きている。首には致命傷は無く、逆に大きく裂けた腹の中は見るからに空っぽだった。

「死後、一日ってところかな」

周囲を見渡してみれば、大木の根元に見慣れたカバンが落ちている。拾いあげて見れば、散々に引き裂かれて無残な有様のカバンの一部にエマニエルという真新しい文字が見えた。

「ここで襲撃されたのね」

「無事、だと思う？」

「ええ、私の読みが正しければ全員が生きているわ。怪我をしていないとは限らないけど」

役目を果たさないカバンを放り投げ、先へ進み出そうとする彼女をルナが引きとめた。

「ねえ、ちょっと待ってもらえる？」

「どうかした？」

訝しげに振り向く光宮に、ルナは死体になったランポスの頭部を示して見せる。

「矢尻に、こいつの牙を使いないかと思って」

「……なるほどね。いい考えだと思うわ」

ランポスの牙はレウスの体表に傷を付けるほど鋭い。武器として流用するには、確かに適材である。光宮の了解を得たレイが手近の石を拾って、鋭い牙が

並ぶランポスの口を叩き始めた。そんなことで牙が折れるのだろうか、という

不安は杞憂に終わる。特に力を入れているようには見えないのに、次々に折れ

ていく牙を慣れた手つきでルナが矢の先に付け始めた。

「あんたたち、手慣れているのね……」

本日、二度目となるセリフを思わず口にすれば、二人が素早く視線を上げて

不敵に笑って見せる。

「言ったでしょ？　私たちは盗賊だったの。山にいたころは獣の牙を矢尻に付

けるなんて当たり前にやってたんだよ」

「へえ……」

「そうは言っても、簡単に牙が折れるのはレイが怪力だからだけど」

そして待つ間も少なく、倒れたランポスを歯抜けに仕上げた彼女たちが立ち

上がるのを見て、光宮は目的地へ向けて足を踏み出した。

「ねえ、光。さっき中也たちが全員、生きているって言ってたよね。

何で生き
ているって分かるの？」
　隣にやって来たルナがそう問いかけて来たので、光宮は油断なく
周囲に視線
を走らせながら昨日の出来事を語る。水を汲みに行った時に遭遇し
たランポス
の群れ。最初に見たランポスたちとはまるで違っていた。統制され
た動き、幼
体を庇う社会性。おそらく、狙われれば確実に命はない。
「そこに転がっているランポスの死体は、どう見てもレウスや他の
大型モンス
ターに襲われた死体じゃないわ。腹を一直線に裂かれていることか
らして、最
初の日に見たようにランポス同士で争ったとしか思えないの。昨日、
私が見た
群れは共食いするような群れには見えなかった。中也たちを襲った
ランポスの
群れがマトモなランポスの群れだとしたら、人間くらいの大きさの
獲物だった

ら巣に持ち帰るかもしれない」

いったん言葉を切り、光宮は息をついた。

「仮にここで誰かがやられたとしたら、この場に死体が残っていない理由にな

るけど、共食いしていることからしてもマトモなランポスの群れがやったこと

じゃない。だとしたら、おそらく人間を殺した場合、この場で自分たちが食べ

たいだけ食べるわ。でも食べきれない部分が残るから、必ず死体が残るの。で

も死体は無かった。だったら生きているとしか思えないじゃない」

「ふ～ん、冷静だね。あんな気味の悪い死体なんか眺めて」

「それはこの際、関係ないでしょ？　ちょっとでも変わったものがあれば、そ

こから情報を集めるのは当然のことだって教えてもらったもの」

今更ながら、恩師の教えが役に立つ。心の中で、豊満な体の女性の姿を思い

浮かべると、自然と口元に笑みが浮かんだ。

「帝都の小塾の先生は教えることが違うね」

感心したように言われて、光宮は少しばかり眉を潜めた。

「違うわよ。帝都の小塾の先生なんて頭でっかちの世間知らずばっかりだもの。

私にいろいろ教えてくれたのはね、元・大塾の先生だった人」

「大塾？」

光宮の隣を歩くルナの銀色の瞳が、少しばかり驚いたように見開かれる。

「そう。いわば家庭教師の逆よ。私が話を聞きに毎日通っていたの。リゼさん

っていうんだけどね、夏葉のお母様よ」

「じゃあ、夏葉もあんたと同じように勉強してたってことか」

朱宮の隣を歩くレイの声が背中越しにかけられる。

「そうね。一応、そういうことになっているけど、夏葉の場合はリゼさんの話

を聞くより竜雪に剣を教えてもらっていた時の方が楽しそうだったかな」

「竜雪？」

二人の顔色が変わるのを雰囲気で感じて、光宮はニヤリと笑って見せる。

「そう、前代の将兄よ。アルテリアの獅子王って呼ばれていた、あの有名な」

この際、艶の紫の愛人という立場を利用して出世したコルネット将兄のことは無視しておく。自分の中でも、彼は将兄として認めるにはあまりにも平凡すぎる。彼が頑張ったことと言えば、艶の紫の夜の相手だけだ。それだけで、アルテリア軍の頂点に起とうなどバカにしているとしか思えない。

「正確には竜雪とリゼさんは夏葉の養い親っていう立場になるんだけどね、本当の親子じゃないかって思うくらい仲がいいの。まあ、竜雪の立場が弱いだけなんだけど」

「さすがの獅子王も、嫁と子供には勝てないってオチ？」

「そういうこと。世間では獅子でも家では飼い猫よ」

彼らの姿を脳裏に思い浮かべて口元を緩めたところで、前方に巨大な鳥の姿を認めて彼女たちは硬直したように足を止めた。朱と橙色の毛。取って付けたような派手な尾羽。再度、確認するまでもない。大型の鳥竜種、ヒプノックだ。

「厄介ね……ゆっくり後ろに下がりましょう……」

幸い、ヒプノックは光宮たちに気付いてはいない。木々の間に悠然と佇みながら、時折、思い出したように周囲に視線を走らせている。地面に立って巨体を支える脚には、鋭い鉤爪が見えた。あんな爪で抉られればまず間違いなく無事ではいられない。肉食ではないはずだが、敵に回すにはあまりにも面倒な相手だ。それに、ヒプノックは別名で「眠鳥」と呼ばれている。この樹海におい て、一際目立つその姿からしても、他の生物に危険を促す存在であることには違いない。

「きゃあ！！」

無意識に息を詰めてジリジリと後ろに下がっていた彼女たちの耳に、有り得ない叫び声が聞こえてきた。何事か、と思って見れば朱宮が地面に転がっていた。どうやら、後ろ向きに歩いていた時に足を絡ませてしまったらしい。光宮たちの顔色が消える。額から流れ落ちる汗が頬を伝ってゆっくりと地面に落下していく。恐る恐る、ヒプノックの方を見れば、思いきり視線が交わった。

「逃げましょう！！」

光宮が地面に転がったまま起きあがろうとしない朱宮の腕を引っ張って叫ぶのと、侵入者を見つけたヒプノックが怒りの咆哮を上げるのがほぼ同時だった。

形振り構わずに走りだした彼女たちの背後で地面を踏みならす足音と、振り回される翼の音が聞こえてきた。

「光！　どっちへ！？」

隣で走るルナの顔も強張っている。

「とにかく、ヒプノックから離れ……！」

四人は思わず足を止める。走りだした先に待ち受けていたのは、レウスだっ

た。

「そんな……」

木立ちの狭間からのっそりと顔を出したレウスの影が四人の小さな体を覆って

行く。前方にレウス。後方にヒプノック。成す術もなく、彼女たちはただ硬直し

た。レウスの濁った黄色い眼球がじっと四人に注がれている。瞬きすることさえ

できず、光宮はレウスを見つめていた。レウスは相変わらず、すぐに襲いかかっ

てこようとはしない。まるで値踏みでもするように、巨大な足をゆっくりと一歩、

踏みだして四人に向けて鼻づらを近づけてきた。腐肉のこびりつい

た牙が寄せら
れる。レウスが息を吐くと、嘔吐したくなるような不快な臭いがす
る。息を止め
てやり過ごしていると、今度はレウスが鼻から息を吸い込んだせい
で、髪と制服
がはためいた。
だしぬけに、鼓膜を破るような勢いでレウスが咆哮を上げた。思
わず身を屈め
て耳を覆ったところで、後方から別の咆哮が聞こえてくる。四人を
追って来たヒ
プノックが、威嚇するようにレウスに向けて尾羽を逆立てているの
が目に入った。
「チャンスよ！」
放心したようにレウスとヒプノックを見比べていたレイとルナを
促し、自らは
朱宮の腕を思いきり引っ張る。レウスがヒプノックに向けて足を踏
み出した。地
面が揺れて、思わず転びそうになる。何とか堪えて走り出そうとし
た時、頭上を

通り過ぎたレウスの尻尾が振り回され、危うく弾け飛ばされそうになった。

（モンスター同士の戦いなんて見たくないわよ！）

レウスが吼える。ヒプノックが脚を踏みならす。両者は睨みあったまま、攻撃

するタイミングでも計っているかのように、ゆっくりとその場を回り始めた。

「……今のうちよ。逃げるの」

睨みあっているレウスとヒプノックを刺激しないよう、なるべく声を抑えて三

人を促す。その場を離れようと動き出した瞬間、ヒプノックが雄叫びを上げなが

らレウスに向けて蹴爪を振り上げた。突進してきたヒプノックを避けようとはせ

ず、レウスは敢えてその突進を胴体で受ける。掠めた蹴爪が体表を裂き、レウス

の体の下に血液が迸った。途端、両者は距離を取るように離れた。

「うわ！」

ちょうど、四人が立つすぐ傍にヒプノックが飛んできて、危うく

ルナが踏みつ
ぶされそうになってしまう。レウスが地面を蹴って空中に舞い上がり、器用に上
昇気流を捕まえて上空に留まると、高い位置から火球を飛ばしてきた。ヒプノッ
クだけを狙えばいいものを、我武者羅に火球を飛ばしてくるから堪らない。どこ
に飛んでくるか分からない火球を避ける光宮たちは、正直、生きた心地がしなか
った。灼熱の火球が触れた地面が抉り取られ、土が溶けて不快な臭いがする。ヒ
プノックも空中へ舞い上がる。大木の梢に遮られて見えなくなったが、上空から
絶えずいがみ合うような声が聞こえていた。

「メーワクなヤツらね！　早く逃げないと巻き添えよ！」

走り出した光宮たちの目の前に、ヒプノックが下降する。

「ああ、もう！！」

誰にともなく毒づけば、今度はレウスが下降してきた。さて、どちらへ逃げよ

うと逡巡するのも束の間、レウスが容赦なく木々を薙ぎ倒しながら突進し始めた。

ヒプノックは飛びあがって突進を交わすが、ちょうど降りてきたところへレウス

が尻尾を振り上げる。胴に尻尾の一撃を食らったヒプノックが、大木を倒しながら地面に薙ぎ倒される。光宮たちの1メートル後方でのことだ。

「私、レウスもヒプノックも大嫌いだわ!!」

逃げように逃げきれない。どうすればいいのだろう、と混乱する頭で考えた時、

跳ね上がるように身を起こしたヒプノックがレウスに向けて何かを吐き出した。

真っ白な気体がレウスの頭部に接触する。

「冗談じゃないわ。睡眠ガスを吐くのは宰相だけで充分よ」

レウスの眼球が揺らぐ。その巨体を支える脚が頼りなげにその場で小さく踏み

ならされた。軽い嘶きを上げると、レウスはゆっくりと地面に沈みこんで行った。

「やばい……」

ヒプノックが光宮たちの方に向き直る。再び尾羽を逆立てたかと思うと、翼を

広げて蹴爪を繰り出してきた。

「レウスを起こして！　頭でもどこでも、一発ブン殴ってやって！」

「任せろ！！」

ヒプノックの蹴爪を地面に転がるようにして避けたレイが、モンスター同士の

争いで折れた大木の枝を掴み、レウスに向って駆け出して行く。同時に、ルナが

背中に背負っていた矢を構えた。

「起きろ！」

光宮にはとても扱えないような大きな枝を軽々と振りかぶったレイがレウスの

頭部を思いきり殴り飛ばした。レウスの目が開く。レイが飛びのいて光宮たちの

方へと戻ってくる。ルナが構えた矢が空中を切った。僅かに弧を描きながら飛び

出していった矢は、ちょうど睡眠ガスを吐き出そうと頭を上げたヒプノックの右
目に命中する。
「すごい、うまい！」
ヒプノックが絶叫する。そこへ、眠りから覚めたレウスが正面から突進した。
まともに突進を食らったヒプノックが盛大に転倒し、つかさずレウスがその首に
牙を立てる。ヒプノックが抵抗して蹴爪をバタつかせた時、レウスが後ろ脚に力
を込めた。ヒプノックの体が一回転して、激しい地響きを上げながら再び地面に
叩きつけられる。光宮たちの耳に、首の骨が折れる、鈍い音が聞こえてきた。
「早く……急ごう。矢がムダになる」
「ええ、分かってるわ」
後ろ向きのまま歩みを進める。レウスが横倒しになったヒプノックの胴体に誇
らしげに後ろ脚を乗せる様子を見て、彼女たちは体の向きを変えて

一心不乱に走り出した。

邂逅19

「遅いな……」

医療室の小さな窓から見える景色は黄昏に沈んで行こうとしている。

空には奇声を上げるカプラスの群れ。無意識に握りしめた拳はじっとり

と汗ばんでいる。中也は未だ姿を現さない光宮たちを焦れたような思い

で待ち続けていた。

「最悪の事態が起こった、なんてことはねえよ～な……」

傍にやってきたシヴァも、心無し緊張した顔をしていた。一刻も早く

この塔を立ち去りたい。けれど、樹海ではぐれた光宮たちと合流するに

は、ここしかない。動きたくても動けない。時間の経過とともに、焦り

だけが増していった。

「お姫様が足を引っ張ってるのか～な。またトイレに行きたいとか

言い

だしてさ」

「だといいけど」

彼らの背後には、すでに持てるだけの水を食堂で見つけた空きビンに

詰めて置いてある。保存食と薬品も三つのカバンに詰め込んであるが、

水を入れた空きビンもあるので、とても三人分のカバンに１２０個の保

存食は入り切らない。半分以上が、窓の傍の机の上に積み重ねられてい

る。準備万全とはいかないまでも、あとは光宮たちの到着を待つばかり

だった。

「ほいで、中也。あれから、レウスとヒプノックはどこ行った～？」

「さあ。森に降りてからは分からない」

昼過ぎだっただろうか。今と同じように小さな窓から樹海と吊り橋の

様子を窺っていた中也の目に、森の中から飛びあがって来たレウスとヒプノックの姿が小さく見えた。レウスが火球を飛ばしていたので、ヒプノックと争っているのだと思ったが、その場に光宮たちがいないという保証はない。

「姫君たちを見捨てるわけにはいかないだろう！　助けに行くべきだ！」

背後から主張してくるエマニエルの声は震えていた。

「行きたいなら勝手に行けよ。森の中ですれ違う可能性の方が大きい。俺たちはここを動くべきじゃない」

「そんな弱気で軍人が務まるか！」

「勇敢と無鉄砲は違う」

中也は何度目とも知れぬ深い溜め息を落とした。

「……まったく、何でこんなことになったんだろうな」

「考えても仕方がね～よ。とりあえずは待と～ぜ」

「明日の朝まで待って来なかったら、出発する。これ以上ここにいるのは
危険の方が大きい」
はっきりと断言して、中也は立ち上がった。
「あ、おい！　中也！　来た～ぞ！！」
シヴァの声に慌てて振り向けば、吊り橋の辺りに人影が見えた。全部で
四つ。三人は軍学校の制服で、一人は純白のドレス姿だ。間違いない。
「全員、無事のようだ～な。行くぞ～！」
シヴァが言った時には、すでにエマニエルを除く三人が戸口に向って駆
け出していた。先ほどまで助けに行くべきだと頑固に主張していたエマニ
エルが、僅かに逡巡した後で慌てたようにその後を追いかける。
（よかったって、素直に喜べないな……）
廊下を走りぬけ、飛び降りるようにして階段を降りる。そこに現れた一

階の廊下を走って行けば、否応なく右手に並ぶ部屋が目に入る。そこで見
たものを思い出し、中也は思わず顔を顰めていた。
（今は、考えない！）
ホコリが積もった部屋を通り抜け、朽ちた木のドアにかけたカギを外す。
勢い良くドアを開ければ、ちょうど吊り橋に足をかけようとしている彼女
たちの姿が見えた。光宮と朱宮の姉妹には特に変わったところはなかった
が、レイの手には人の背丈と同じほどの長い枝が握られ、ルナの背中には
不格好ながら弓矢が乗っかっている。自分たちはひたすら逃げることだけ
を考えていたのだが、彼女たちはモンスターと戦うという選択肢をとった
のだろうか。そう思うと、何となく悔しい。
「光宮さん！！」

雑草だけが生い茂る崖の淵を吊り橋に向って走る。少しばかり遅れて中
也の隣に並んだシヴァの肩には、どういうつもりなのか塔の中で見つけた
ロープが輪になってかけられていた。

「一人ずつじゃないと危ない！！」

「分かってるわよ！！」

吊り橋の近くに四人が纏まっていたので、思わずそんな忠告をしてしま
えば、橋の向こう側から不機嫌な声が返ってくる。

「夏葉！　聞こえる！？　レイが足を怪我しているの！　手当してあげて！！」

中也とシヴァの後ろにいた夏葉が、光宮に言われて無言で頷いた。それを
見た後で、光宮がレイの背中を軽く押す。人間一人分の体重を受けて、中也
たちが立つ側の橋柱に結ばれた縄が小さく軋みを上げるのが見えた。ところ
どころ橋板が抜けた橋を渡るのは、中也にとっては思い出しただけ

でも背中
に冷や汗が流れそうになる出来事だった。
（マジかよ……）
しかし、今、目の前で橋を渡っているレイは慎重な足取りだが、躊躇がな
い。表情も、特に強張っているようには見えなかった。谷底から吹
き上がる
風に、レイのスカートがヒラヒラと舞う。性格はともかく、けっこ
うな美少
女のスカートの中がチラリと見えて、ちょっと得した気分になって
いる自分
が情けなくなってしまった。
「ちょっと見えた～な」
どうやらシヴァも同じことを考えていたらしい。
「そんなこと言ってる場合じゃねえよ。つーか、フツーに渡って来
るな……。
俺は怖くて仕方なかった。風が吹くだけで眩暈がしそうになったよ」
「普通はそんなもんだ～ろ。女の子の方が肝が据わってんじゃねえ

か～な？」

待つ間もなくレイが橋を渡って中也たちの傍にやって来た。

「よお、久し振り！」

笑顔で片手を上げてくる彼女に、二人は何とも言えない苦笑いを向けた。

レイは平然としている。一方、中也が橋を渡り終わった時は全身が冷や汗
に塗れていた。

「元気そうじゃねえか。建物の中にはいいモンあったのか？」

「いいモンと悪いモンがあった～ぞ」

「またかよ。今度はどういう意味だ？」

「後で話すよ」

中也とシヴァが再び視線を光宮たちの方へ向ける。レイは僅かに片方の
眉を上げて見せただけで、特に何も言わなかった。橋の向こう側では、光
宮たちが何か言い争っているように見えた。純白のドレスが地面に座り込

んでいるところを見ると、エマニエルがそうだったように朱宮も吊り橋に
対して必要以上の恐怖に苛まれ、一歩が踏み出せずにいるのだろう。これ
は時間がかかるかもしれない、と中也は内心で舌打ちした。

「レイ？　怪我の具合は？」

静かな夏葉の声がレイの背中にかけられる。

「心配ねえよ。光が薬草を付けてくれたし、レウスにやられたっていうよ
りも自分で転んで木に引っかけたって感じだ」

「そうか。じゃあ、みんなが来てからでいい？」

「ああ。そのつもりだったよ。ありがとな」

夏葉とレイの声を聞きながら、中也は橋の向こうにずっと視線を注いで
いた。結局、レイの次に吊り橋に足をかけたのはルナ。おそらく光宮はル
ナより先に朱宮を渡らせたかったのだろうが、ラチが明かないと睨んだの

かルナを先に送り出した。強風の吹きつける吊り橋に、長い銀色の髪が舞
う。彼女も先に渡ったレイと同様、慎重な足取りだが表情に恐怖は浮かん
でいない。中也にはできなかったことだが、しっかり下を見て朽ちた橋板
と無事な橋板を選んでいる。土の上に立っていながら、下の川を見下ろせ
ば足元から震えが立ち上る。自分は高所恐怖症だったのだろうか。普通の
人はこれくらいの高さでは目を回さないものなのだろうか、と中也はどう
でもいいことを考えた。

「久し振りだね」

軽やかとも言える足取りで、ルナは中也たちの傍にやってくる。レイの
時と同様に、曖昧な笑みを返した。

「お姫様が一人じゃ渡れないってゴネてるんだよ」

ルナは向こう岸を眺めながら軽い溜め息を落とした。

「そうみたいだな。でも、吊り橋の強度を考えれば一人ずつじゃないと危
ない」

「分かってるよ。だから置いてくってさ」

「は？」

どういう意味か、と聞き返そうとした時には光宮が朱宮をそこに置き去
りにしたまま橋を渡り始めた。レイとルナの時のように、戸惑いなく、と
まではいかないようだが、それでもしっかりとした足取りで吊り橋を渡り
始めた。

「いいのか？」

「大丈夫だよ。いちいち構っていたら、いつまでたっても前に進まないん
だから。一人きりにされたらイヤでも渡ろうとするでしょ」

はっきりと断言するルナの声は些か冷たいものが含まれていた。

自分た
ちが知らない二日間に、いったい何があったのか。聞きたいようで、聞く
のが怖かった。その時、吊り橋を渡る光宮の頭上に黒い影が落ちる。

「カプラスだ！」

中也は思わず身を乗り出した。無意味に橋柱を握りしめれば、光宮の頭
上に現れた一頭のカプラスが威嚇するように彼女の周りを旋回し始める。

（こんな時に……！）

別名が蛇竜と言われるだけあって、すぐ近くを滑空していったカプラス
の頭はヘビそのものに見えた。ヘビの頭に、コウモリのような翼膜で空を
滑るカプラスは翼を広げても1メートル前後しかない。比較的、小型に分
類されるが、中也たちにしてみれば充分、脅威だった。

「光宮さん！」

彼女の周囲を旋回していたカプラスに、新たな一頭が加わる。そして中

也たちの方にも三頭のカプラスが上空から滑空してきた。うち一頭が橋を

支える縄にとまり、橋がバランスを失って大きく揺らいだ。

「光宮さん!!」

彼女は何を思ったのか、こちら側ではなく朱宮が残る対岸へと戻って行

ってしまう。

「レイ!」

ルナがレイに向って叫べば、彼女は心得たとばかりに頷いた。

「矢が無駄になる!　弓は使うなよ!」

中也の隣でレイが振り回した枝が、頭のすぐ上を飛ぶカプラスの翼、そし

て胴体を殴打する。奇声を上げて、一頭のカプラスが地面に落下してきた。

そこへ、頭に向って更に一撃。僅かに痙攣して、カプラスは動かなくなって

しまった。

「あんた、すげ～怪力だ～な……」

「くだらねえこと言ってないで、お姫さんたちを助ける方法でも考えろよ！」

「残念ながら考えるのは、あっちの役目だ～ぞ」

シヴァが指差したのは、中也。レイは再び枝を振り回すが、今度はカプラス

が凶器の届かない上空に逃げる方が早かった。

「うわあああああ！！」

叫び声が聞こえて中也は後ろを振り向く。エマニエルが二頭のカプラスにた

かられている。地面に座り込んで頭を庇うようにした彼の髪や背を、カプラス

が足の爪で引っかけたり嘴でつついたりしていた。そこへ、夏葉の回し蹴りが

飛ぶ。一頭のカプラスが奇声を上げながら、上空へと舞い戻って行った。残っ

た一頭が夏葉に向って毒を吹きかけた。地面に転がって避けた夏葉は無事だっ

たようだが、顔を上げたところへ、カプラスの爪が飛んでくる。それを、レイ

が薙ぎ払った枝が助けた。カプラスは地面に叩きつけられる。そこへ、夏葉が

駆け出して行き、苦しげに呻くカプラスの頭を思いきり蹴り上げた。首の骨が

折れる鈍い音が、鼓膜を刺激する。夏葉とレイは互いに視線を交えて微かに笑

い合った。

一方、吊り橋の中央付近にいた二頭のカプラスは、対岸へ戻って行った光宮

を追いかけるようにして、向こう岸のあたりを旋回していた。

「光宮さん！　早く！」

「分かってるってば！！」

腰が引けている朱宮の手を強引に掴んで、彼女は再び吊り橋を渡り始めた。

その頭上を上空から戻ってきた一頭を加え、三頭のカプラスが取り巻いている。

「ルナ！　頼めるか！？」

レイが言えば、彼女はすでに弓に矢をつがえ始めている。

「おい、マジかよ……」

中也が唖然とした時には、彼女の手から勢いよく放たれた矢が一頭のカプラスの頭に命中していた。矢に貫かれたカプラスは、一声だけ短く鳴いて遥か下の川に向って落ちて行く。

「すげ～なあ～」

「あんたたちは何もしないの？」

再びルナは矢をつがえるが、今度はなかなか手を放そうとはしない。ふいに感じた風は、吊り橋から中也たちの方向へと吹いている。確かに、矢を飛ばすのに追い風は不利だ。一頭のカプラスがやられたことで、残る二頭は逡巡する様子を見せている。カプラスたちは、先ほどよりも高い位置で互いに奇声を上

げながら右へ左へと行き来していた。

「今のうちだ！　早く！！」

「急かさないでよ！！」

彼女の顔にはあからさまに焦りが浮かんでいる。一歩、遅れて彼女に腕を引

っ張られる朱宮に至っては、顔面が蒼白でいつ気絶してもおかしくないような

有様。助けに行こうか、止めようか、中也はその場で無意味に足踏みをした。

橋を支える縄が軋みを上げている。おそらく二人が限界。この上、中也まで吊

り橋に乗ってしまえば、たちまちのうちに縄が切れてしまうだろう。

光宮と朱宮が橋の中ほどまで来たところで、二頭のカプラスが滑空してくる。

二人は頭を低くして爪を逃れたが、カプラスは躊躇なく二人を目がけて毒を吹

きかけ始めた。

「ルナ！　撃てないか！？」

「……風が悪いんだよ」

思わず振り向いた彼女の褐色の肌にも、うっすらと汗が滲んでいた。悔しげ

に噛みしめられた唇の端が、僅かに切れて血が滲んでいる。

一頭のカプラスが、橋を支える縄の傍を、下から上に向けて滑空する。その

瞬間、吊り橋が大きく軋みを上げた。カプラスの爪が、縄を引っかけたのだ。

気付いた時、頭の中が一瞬だけ空白になった。橋が落ちる……。

「シヴァ！　さっきの縄だ！　橋柱に結んで助けに行こう！」

「りょ～か～い！」

最初からそうするべきだったかもしれない。しかし、できるならこの橋を落

とすような危険な真似はしたくなかった。こちら側に広がる樹海がどうしよう

もないほど危険であれば、最悪、最初にいた樹海へ戻らなければならない。で

きれば一人ずつ渡って欲しかった。

「俺が行く～ぞ！」

「ああ！」

シヴァが縄の一方を橋柱に結びつけ、もう一方を自分の腰に巻きつける。そ

うこうしている間にも、吊り橋を支える縄が徐々に切れていき、橋は右に大き

く傾いた。意を決した光宮が、こちらへ向って走り始めた。中也は手を差し伸

べる。

「きゃあ！！」

「姉さん！？」

邂逅２０

もう少しで届く、というところで、朱宮が朽ち板に躓いて盛大に転んだ。振り返った光宮が、朱宮の傍へ駆け戻ろうとした瞬間、吊り橋を支えていた縄が、カプラスが引っかけた中央付近で完全に切れる。バランスを失った橋が一気に谷底へ向って落下を始めた。

「……！」

朱宮の方へ戻ろうとしていた光宮の腕を掴んで中也たちの方へ放り投げたのはシヴァだった。地面に背中を打ちつけた光宮が、僅かながら苦痛に顔を歪める。飛び出して行ったシヴァが、転んだまま起きあがろうとしない朱宮の腰に間一髪で腕を回した。

「シヴァ！！」

吊り橋の途中にいた二人は、足元を失ったせいで重力に引かれて

いく。しか
し、シヴァが腰に結んだ縄が途中でそれを引きとめた。二人の体重
を支える橋
柱の縄が軋みを上げる。中也は、朱宮を庇うようにしたシヴァの背
中が、思い
きり崖に叩きつけられるのを見た。
「シヴァ！　無事か！？」
「何とか～！　早く引き上げてくれ～！！」
彼が抱えた朱宮はピクリともしない。どうやら気を失ったらしい。
「レイ、手伝ってもらえるか？」
「もちろんだよ」
中也とレイの二人で、崖にぶら下がったシヴァと朱宮を引き上げ
にかかる。
認めたくない話だが、力だけならレイの方が確実に強い。中也より
も彼女の方
が、確実に仕事をこなしていた。
そこへ、二頭のカプラスが再び舞い戻ってきた。狙いは崖の途中
にいるシヴ

ァと朱宮。二頭は互いに競うようにして、二人に向って蹴爪を振り上げ始めた。

朱宮を庇い、シヴァは彼女の体を崖の方へ向ける。その背に、カプラスの爪が

一閃した。

「シヴァ！！」

「まだ生きてるぞ～！！　早く～！！」

下方に向って矢を構えたルナが手を放す。目に見えないような速さで繰り出

された矢は、もう一度シヴァに向って蹴爪を振り上げたカプラスの頭を貫いた。

間髪入れずに、彼女は次の矢をつがえる。矢の先が僅かに揺れたかと思うと、

次の瞬間には最後のカプラスが奇声を上げて谷底へ向って落下していた。

「さすが！　腕は落ちてねえな、ルナ」

「当たり前でしょ？」

縄を引きながら、茶化すような口調で言えばルナが不敵に笑って

見せた。

「シヴァ！　大丈夫か！？」

ようやく地面の上に引き上げたシヴァの背中は、新品だった制服が無残に裂けて

そこから血が滲んでいる。本人は荒い呼吸をしながらも、彼らしい独特の笑みを浮

かべた。

「お姫様を救った俺って英雄～？」

「怪我は！？　大丈夫なの！？」

親指を立ててポーズを決めようとしたところを、シヴァは駆け寄ってきた光宮に

邪魔されて中途半端な笑みを浮かべるに留まる。彼らは、無意識に息をついていた。

「なっちゃん、悪いけどもう一回、手当を頼んだ～ぜ」

「うん」

夏葉がシヴァの脇に肩を入れて立ち上がらせた。

「とりあえず、手当が先だな。でも、なるべく早くこの塔から出た方がいい」

「どういう意味？」

「説明するより、見てもらった方が早いと思う」

訝しげな顔をする光宮に、中也は背後にある塔を示して見せた。

「姫君は、僕がお連れする！」

シヴァの横には、気を失った朱宮が地面に突っ伏している。素早く駆け寄ったの

はエマニエルだった。しかし、彼女の体の下に手を入れてカッコよく「お姫様だっ

こ」しようとしたのだが、１センチと持ち上がらない。何度か挑戦した挙句に、今

度は背中に負ぶってみようとするが、立ちあがることができない。

一同は、その様

子を冷めた目で見つめていた。業を煮やしたのは、レイだった。

「どけよ。あたしが運ぶ」

「う、うるさい！　僕が……姫君は僕が……！」

「うるせえよ。どけって」

エマニエルを押しのけたレイが、軽々と朱宮を背負って立ち上が

った。

「何でもいいけど、少し休みたいわ。無理そう？」

「……どうだろう。あんたがどう思うか、ちょっと聞いてみたい。それによっては、夜でも移動する」

「何よ、それ……」

中也は先に立って歩き出す。その後ろを光宮が続いた。

「絶対に一人になるなよ。医療室に戻るのは、レイとシヴァとお姫様と夏葉でいいか？　光宮さんには、ちょっと付き合ってもらうとして、ルナとエマニエルはどうする？」

「あたしはレイたちと一緒に行くよ。医療室って言うくらいなんだからベッドがあるでしょ？　さすがに疲れたんだよ。ちょっと休みたい」

「分かった。エマニエルは？」

エマニエルの小さな瞳がせわしなく泳ぐ。ややあって、中也たちと一緒に行くと

いう選択肢をとった。

彼らは疲れた足を引きずるようにして塔に向かった。先ほど叩きつけるようにし

て開いた扉をゆっくりと閉める。軋んだ音がして、静寂が訪れた。

「何はともあれ、ようやく全員が揃った～な」

松明の光だけが照らしだす朧な空間に、シヴァの声が反響した。初めてここへ来

た女子生徒たちは、物珍しそうに周囲に視線を走らせている。ここには何もない。

問題は、この隣の部屋だ。

「そうね。さっきはありがとう」

光宮がシヴァに向ってそう言えば、彼はニヤリと笑って見せる。

「どういたしまして～」

「さっさと手当しに行けよ」

「はいは～い」

中也に促され、シヴァと夏葉、レイと彼女に背負われた朱宮、そしてルナが医

療室に向けて歩いて行った。

「で、何があるっていうの？」

「そうだ。僕もよく聞かされていない。早々に事情を説明してくれ」

中也は軽く息をつく。そして、問題の部屋に向かって歩き始めた。

「こっちだ。先に言っておくけど、この塔には俺たち以外に人がいる」

「え？」

中也は光宮に、自分たちがこの塔に来た時のことを語った。一階の部屋にはカギがかけられていたこと。何か役に立つものはないかと二階の部屋を捜索している最中に、カギを落として行った誰かのこと。一階にある三つの部屋のうち、二つは特に問題はないこと。それらを説明し終わった時、三人は問題の部屋の前に立っていた。

「忠告しておく。鼻で息をしない方がいい」

警告した後で、中也は扉を開けた。暗闇が蹲る部屋に、廊下に灯された松明の光

が差し込んでいく。光宮とエマニエルが顔色を変える。最初に目についたのは、床

に倒れている白衣を着た男性の姿。光が差し込んでいくにつれ、部屋の中の様子が

明らかになる。壁際に、鎖で繋がれた十数人の人間が蹲っている。どれもピクリと

もしない。死んでいるのは明らかだった。彼らの前に、白衣を着た男がもう一人、

倒れている。肥え太った肉バエが数限りなく飛び交い、部屋の中は虫の羽音に満ち

ていた。口で息をしているにも関わらず、そこに充満した腐敗臭が喉を刺激して、

彼らは思わず咳きこんだ。

「何よ、これ……」

「どう、思う……？」

光宮は無意識に口元を袖で覆いながら、壁に繋がれた人間たちの方へ歩み寄って

いく。中也は、無言のままその後ろを付いて行った。

「エマニエル、悪いけど廊下の松明をひとつ持って来てくれる？」

放心したようなエマニエルが、光宮に言われて慌てたように頷き、廊下に向って

飛び出して行った。

「死んでから、けっこう日数が経過しているわね。腐敗が進行している」

壁際に並ぶ死体の前に腰を落とした光宮が、見える範囲の死体を検分しながらそ

う呟いた。死体は男女、大人、子供、老人と目立った特徴がない。

「叫んで逃げるかと思った」

光宮の背後に立ちながら、中也は無理やり作った笑顔でそう言ってみる。

「期待に添えなくて残念だわ」

振り向いた彼女に、廊下から松明を持って戻ってきたエマニエルが近付いて行く。

松明を受け取った彼女が、炎を死体の顔に近づけた。そこにいたのは成人男性のよ

うだが、眼球はすでに溶け、鼻や口から夥しい数の蛆が出入りしている。中也は思わず口元を覆う。吐き気が込み上げてくるのを、必死で押さえこんだ。

「外傷はないようね」

光宮は特に顔色を変えないまま、松明の灯りを顔から床に向けて移動させる。死体の傍には腐敗によって溶けた身体から漏れ出した液体が水たまりを作っている。

松明の光の元、どす黒い色をしたその液体にも、ハエがたかっていた。

「腐敗の割に手足の乾燥が早い。衰弱死ってところかしら」

言いながら、彼女は隣に並ぶ女性の死体に近寄って行く。頭髪は一部を残してほとんどが抜け落ち、はだけた胸元からは皮だけになった無残な胸が見えていた。

「衰弱死？　何で？」

「外傷はない。でも皮膚が乾燥しているでしょ？　食べ物も飲み物も、おそらく与

えられなかったのよ。前に難民のキャンプに行ったことがあるんだけど、栄養失調
になった人がこんな感じだったわ」

「へえ……」

中也が曖昧に頷いた時、背後で嘔吐する音が聞こえてきた。どうやらエマニエル
が、耐えきれなかったらしい。

「辛いなら外に出てろよ」

呆れたように呟くと、エマニエルがバツの悪そうな顔を向けてきた。

邂逅21

「う、うるさい……！！」

エマニエルは、頭上に降ってくる中也の呆れたような声を憤慨する気持ち
で聞いていた。

（こんなことなら、目を覚ました姫君に申し訳ない気持ちになるのを承知で
医療室に行った方がマシだった……！）

何も説明せずに、いきなりこんなところへ連れてくるなど、この仕打ちは
あまりに酷すぎる。

（く、苦しい……！）

胸は激しく上下していた。息をしなければ苦しいと分かっているのに、呼
吸をする度に肺の中に死体の臭いが充満した汚れた空気を吸い込んでいるの
だと思うと、吐いた直後にも関わらず再び堪らない嘔吐感に見舞われた。床

に蹲り、胸を押さえながら、彼は何とか呼吸を整えようと必死になる。

「……？」

ふと視線を上げると、目の前の床に白衣を着た男が倒れている。頭から胸にかけて血まみれだ。人の死体なんて、初めて見た。思わず目を逸らそうとした時、その死体の腰のあたりに、白い紙の束があることに気付いた。エマニエルは無意識に、その紙の束に向って震える手を伸ばす。死体から引きずり出すようにして手に取って見る。そこに書いてある文字を見て、愕然とした。

“オオナヅチの習性・実験結果”

オオナヅチと言えば、古龍の中でも極端に目撃例が少ないと言われるあのモンスターだ。しかし、実験の結果とはどういう意味だろう。エマニエルは未だ

震えが収まらない指先で書類をめくる。内容を見て、エマニエルは目を見開いた。

（こ、これは……！）

書類には、難民を使った人体実験の結果が事細かに記してあった。この塔でエマニエルは、オオナヅチに人を襲わせていたのだ。その事実に気付いた時、エマニエルの背中から脳髄にかけて言葉にできない衝撃が走る。

「落ち付け……落ち付け……」

書類を胸に抱えるようにして、エマニエルは床に突っ伏す。中也と光宮が呆れたような視線を向けていたが、それは気にならなかった。エマニエルは呼吸を整える。

（大変なことを知ってしまった……！）

アルテリアは奴隷労働を禁止するような国だ。たとえ他国から流れ込んでき

た難民でも、身分証明書を与えられ、職について自立する権利が与えられていない。そんなアルテリアが、裏で難民を使った人体実験をしていたなど、とても許されることではない。

（お、おそらく独立方向に暴走している軍が勝手にやっていることだ。国王陛下は知らないこと……！）

エマニエルの中で、思考が暴走を始めていた。

「落ち付け……落ち付くんだ……」

この書類を証拠として持ち帰らなければならない。彼は短絡的にそう結論を下した。この書類を持ち帰り、治安維持業務を司る冬軍（警察）の中でも有力な地位にある父親に届けるのだ。そうすれば、父親がしかるべき場所に届け出を出し、このような行いをする軍を裁いてくれるはず。

（これは大事な証拠書類になる……！）

エマニエルは、その冬軍が属していることが「軍」であることも、自らがそ
の「軍」の高官となるべく軍学校に入学したことも忘れていた。彼の頭にある
のは、「重大な不正」を見つけたという事実しかない。彼の中では「不正」と
は裁かれるものであり、見逃してはならないものだ。エマニエルは制服の中に
書類を折りたたんで隠した。落ちないように、ベルトで挟むことも忘れなかっ
た。胸が悪くなるような空気の中にいながら、彼は妙にすっきりした気分に見
舞われていた……。

＊

「服装がバラバラだろ?」

エマニエルの内心の変化には気づかず、中也と光宮は壁際に並んだすべての
死体の検分を終えたところだった。全部で18体。いずれも目立った外傷はな

い。

「アルテリアの国民じゃあなさそうね」

「そうなんだ。……難民だと思う」

「同感ね」

二人はそれきり言葉を噤んだ。難民が鎖に繋がれ、人の気配の絶えたこんな
樹海の果てにある塔に閉じ込められている。傍には、白衣を着た男の死体。こ
こで何が行われていたのか、結果は火を見るより明らかである。

「それより、問題はこっちだよ」

中也は、床に突っ伏している白衣の男の方へと歩み寄る。途端、エマニエル
が身を竦めたのが気になったが、特に何も言わなかった。

「光宮さん、見てくれ」

「光でいいわよ」

中也は白衣を着た男の前に屈みこむ。その隣に、光宮が続いた。

「こっちはどう見ても他殺ね」

「やっぱりそうだよな」

男の喉元には鋭い刃物で抉られたような傷がある。直接的な死因は頸動脈

の切断に伴う出血性のショック死であることに間違いないだろう。

「傷の左右に小さな痣が幾つか残ってる。首の斬り口は左から右。手に傷が

無いことからしても、いきなり後ろから斬られて、思わず手で押さえたって

考えると自然ね」

光宮がそこに松明の火を近づけたせいで、パックリと口を開けたような傷

口の様子が鮮明に見える。まるで口が二つあるようだ。手のひらを見れば、

血まみれになっているが傷はない。正面から襲われれば、人は思わず両手を

突き出して刃物から身を守ろうとするため、手の平や腕に何らかの傷を負っ

ているものだ。いわゆる防御創というヤツだ。それがないとすれば、

自殺か、
あるいは背後からの不意打ちということになる。
（自殺とは考えにくい）
その場に凶器が残っていないこと。傷口が左右どちらかに偏ることなく、
真一文字に切り裂かれていることからしても、他殺と考える方が自然だ。
（なんで……）
二人は入口の近くに倒れている白衣の男性の方へと近づいて行く。
光宮が
松明の先を死体の下に入れ、テコの原理を使って死体を裏返す。胸から腹に
かけてパックリと開いた傷口から内臓が見えた。
「よく動かせるな……」
朝方、シヴァと二人でここの様子を見た時は死体に触れることはさすがに
躊躇われた。しかし、光宮は顔色ひとつ変える様子がない。
「情報は多いに越したことないでしょ？」

「そうだけどさ……」

死体は重量に逆らって不自然な様子で裏返る。死後硬直しているのだ、と

中也は思った。それも、今が最も強い時だ。

「死んでから、だいたい一日かそこらってところだな」

斬り口からは、まだうっすらと血液が滲んでいる。松明の光を当てて見て

みれば、内臓はまだ綺麗な色をしていた。

「出ましょうか」

得るべきものは得た、と言わんばかりの顔で彼女が立ち上がる。中也は、

それに頷いて返した。

「エマニエル、行くわよ。それとも、ここに残りたい？」

放心したような顔で二人の所業を見守っていたエマニエルが、慌てたよう

に立ち上がる。

「中也。ひとつ聞くけど、あの部屋に夏葉を連れていった？」

三人は廊下に出る。再びドアを閉めれば、静かな塔の中に重い音が響き渡った。階段に足をかけた時、光宮が何の脈絡もなくそう言いだして来て、彼は軽く首をかしげる。

「いや、連れて行ってないけど。それがどうかしたのか？」

「そう。それは良かったわ」

彼女は楽しそうに笑いながら、中也の方に視線を向ける。

「あの子、ウジ虫とか毛虫とか、そういった虫を大量に見たら気絶しちゃうのよ」

「マジ？」

意外だ。正直、中也は夏葉のことを多少のことでは顔色ひとつ変えそうにない人間だと思っていた。虫を見て気絶するなど、考えてもみなかった。

「何にせよ、なるべく早く移動した方がよさそうだわ」

邂逅22

中也と光宮、そしてエマニエルが廊下を抜けて階段に足をかけていたころ。

西側の塔に続く入口の扉が、ゆっくりと開いた。現れた人間の手が、緩慢な

動作で石の床を引っ掻く。生命の危機に瀕し、異常なまでに研ぎ澄まされた

聴覚が、どこからともなく聞こえてくる水音を捕えていた……。

＊

中也たちが医療室に戻ってみると、レイとルナ、そして朱宮がベッドで寝

息を立てていた。窓際の席に陣取っていたシヴァが三人を認めて笑顔で片手

を上げて見せる。

「夏葉がいないけど、どうしたの？」

簡易なベッドに腰を下ろした光宮が問いかけると、シヴァが困ったように

笑った。

「体、洗ってくるって～さ。一人じゃ危ないから止めたんだけど、付いてく
るな～の一言で……」
「相変わらず潔癖症ねえ。最悪、自分の身くらい自分で守れるだろうから大
丈夫よ。ほっときましょ」
シヴァの返答に、光宮が声を上げて笑った。
「で、お二人さんの結論はどうだった～んだ？」
中也は、無意識に光宮に視線を向けた。彼女は考えを巡らせるように天井
を見上げる。
「明日の朝、一番に出発しましょう。真夜中に樹海を歩くよりは、カギをか
けた部屋で全員が纏まっていた方が安全だわ」
「中也と同じこと言う～んだな。じゃあ、それで決まりだ～な」
シヴァはイスに座ったまま頭の上で両手を組んだ。
「それで、状況の確認をさせてもらえるかな。あんたたちは、あれ

から何か
気づいたか？」
「そうねえ……」
中也はシヴァの横に腰を下ろす。簡易なベッドから立ち上がった光宮が、
二人の正面に座った。
「結論から言わせてもらうわ。この樹海、何かおかしい」
「と、言うと？」
「最初の夜にあんたたちと離れた後、私たちは穀物庫って書かれた倉庫で一
晩をやり過ごしたのよ。中はカラだったけど、不自然でしょ？　人の手が入
っていないはずのフィールドにそんなもの。それから、ランポスの群れ。私
が思うに、このエリアには三つのランポスのグループがあると思うの」
言いながら、彼女はカバンの中から取り出した羽根ペンとインクでテーブ

ルの上に簡単な地図を書いていった。

「塔がここ。最初にランポスの襲撃があったのは、おそらくこの辺り。その時に見たランポスは全部で6頭。一頭が死んだから5頭ね。で、このあたりに川があったの」

地図の上に、一本の線が描かれた。

「アプトノスの群れがいたわ。12頭の群れで、うち2頭が幼体だった。水を飲んでいるアプトノスを襲ったのが、11頭の大所帯を抱えるランポスの群れ。時間的には正午過ぎくらいよ」

「同じころ俺たちもランポスの群れに襲われた。全部で3頭。この辺りだ」

光宮の手から羽根ペンを拝借し、中也は地図の一角に印を付けた。

「おそらく一頭が死んだから、残っているのは二頭だな。最初に見たランポスの群れよりも、随分、攻撃的というか乱暴なヤツらだったよ」

「ランポスの群れがたった3頭しかいないっていうのも、おかしな話よね」

「そうなんだ。光が見た大所帯っていうのは、どんな感じだった？」

中也に促されて、彼女は狩りの様子を詳細に語った。聞いているうちに、

中也の中で疑問が浮上する。

「いきなり成体を狙った？　幼体がいるのに？」

「そうなのよ」

「何かおかしいことな～のか？」

横からシヴァが質問してきたので、自然に中也と光宮の視線が彼に向かう。

「ランポスって言っても、狩りの成功率はそう高くないはずなんだ。普通に考えればだけど、狩りは成功する確率よりも失敗する確率の方が断然高い。だから普通、肉食の動物は大人よりも体力が少なくて倒しやすい子供

を狙う。それに、アプトノスくらいの大きさがあれば子供と言っても結構
な大きさがあるだろ？　腹をいっぱいにするだけなら、子供で充分なんだ」

「へえ～」

「なのにランポスは迷わず大人を狙っていたの。つまり、それだけ食糧事
情が厳しいってことよ。それに、性格が温和なはずのアプトノスが攻撃的
だったのも不思議な話だった。妙に落ち着きがないって言うか、神経を張
り詰めているような感じだったわね」

「アプトノスの群れを見たのは、その時だけか？」

中也が聞けば、光宮が黙って頷いた。

「なるほどね。それでこの樹海は何かおかしいってワケか」

うすうす感じてはいたことだが、それが確信に変わった。入学式からい
きなりこの樹海に連れて来られて、中也たちは草食のモンスターに遭遇し

ていない。知っているだけでも、ランポスは全部で２０頭以上はいる。加
えてレウスという大型モンスター。この森が養うには、あまりにも被食者
の数が少なすぎる。本来なら、もっとアプトノスの群れなり、モスなりフ
ァンゴなりに出会っているはずなのだ。それに……。
「樹海の中に建てられたアルテリアの建物と、そこにいる暗殺者。俺らと
遭遇することを前提にしていたのかどうかは分からねえけど、この塔は安
全でないことだけは確かだ」
中也は光宮に視線を向けた。
「鬼龍がわざわざここに連れて来たことに、意味はあると思うか？」
彼女は黙って首を横に振る。中也には、それが分からないという意思表
示なのか、それとも意味はないという意思表示なのか、判別がつかなかっ

た。

＊

塔の最下層にある水車が汲み上げた水は、いったん屋上にある貯水タンク
に蓄えられる。そこから円盤石でできた水道管を経由して、各部屋に供給さ
れる仕組みになっていた。もともと円盤石は、内部の温度を一定に保つ作用
がある。そのためアルテリア本国では、郊外にある水道施設で沸かされた清
潔な湯と水を、円盤石でできた水道管を経由して、決して安くはない水道料
金と引き換えに各家庭に供給する仕組みがここ十年ほど前から始まっていた。

「……」

それまでは井戸がアルテリア国民の生活を支えていたのだが、水道が一般
的に使用されるようになってからは、伝染病や中毒などで国民の健康が損な

われる確率がほとんど無くなった。

各家庭の蛇口は冷水用と温水用の二つが取りつけられるのが最も一般的で、

風呂に湯を張る時などは二つの蛇口をうまく調整してちょうど良い温度にす

るのが常である。かつては風呂に湯を張るためにいちいち火を熾していたも

のだが、今では蛇口を捻るだけで気軽に入浴を楽しむことができる。ちなみ

に、毎日風呂に入り、体を清潔に保つこと。また入浴して血行を促進させる

ことは健康に良いということが知れて以来、アルテリアでは入浴を趣味にす

る国民が増えた。

しかし、そんな贅沢な入浴もアルテリア本国にあってこその話。フィール

ドのどことも知れない場所に外れ人知れず建てられたこの塔には、残念なこ

とに温水が湧いていなかった。だが、冷たい水でも目的は果たせる。

廊下の先にあるシャワールームは、カーテンで仕切られただけの粗末なも
ので、全部水の吹き出し口は全部で五つあった。うち四つは体を洗うための
ものだが、最後のひとつはトイレになっている。トイレは別のようだが、排
水溝はひとつしかなく、床が傾斜しているせいで、必然的に最も低い位置に
入った者の足には、他人が体を洗った水がかかることになる。そこまで考え
て、夏葉が選んだのは一番左手にあるシャワーだった。

誰もいないことをいいことに、夏葉は着ていたものをすべて脱ぎさる。そ
れを水がかからない床の上に投げ出し、全裸のまま室内を歩いて個室に入り、
カーテンを閉めた。素足に、冷えた床が心地よい。蛇口を捻れば、頭上から
冷たい水が降ってくる。肌が粟立ったが、特に気に留めなかった。

頭上から降り注ぐ水が一糸纏わぬ白い体を濡らしていく。瞳を閉じて上向

けば、冷たい水が喉元を通り過ぎていった。無意識に、夏葉は両腕で自らの
体を抱きしめる。
「京さま……」
否応なく脳裏に浮かぶのは、幾度となく肌を重ねた愛しい男の姿。たった
三日。それだけの時間しか経過していないのに、まるで何年も離れてしまっ
たかのように、自分の中に埋められない空白が蹲る。
「会いたい……」
人の心とは、この体のどこに存在するのだろう。愛しさも切なさも、悲し
みも怒りも、脳が支配している肉体の反応のひとつでしかないはずなのに、
彼のことを思い出せば、胸のあたりが締め付けられるような息苦しさに襲わ
れる。
「絶対、帰ります……」

閉じていた瞳を開く。左手の薬指に嵌められた指輪。小さな金剛石が、朧
な光を受けて瞬いた。体を蝕む愛しさは飢餓のようで、彼を求める心は不治
の病。自分を抱く彼の幻想は絡み付く呪怨にも似て心と体を締め付ける。夏
葉は、自らを抱きしめる腕に力を込めた。その時。

「！？」

何の前触れもなく、背後のカーテンが引き裂かれ、見知らぬ男が夏葉に向
って覆いかぶさってきた。咄嗟のことでうまく反応できず、夏葉は思わず足
を滑らせ、腰をしたたかに打ちつけていた。痛みに顔を顰めながら、夏葉は
目の前に立つ男を見上げる。

「み……ず……」

襲いかかってきた男は異様な姿をしていた。着衣はあるがボロボロで、辛

うじて纏わりついている程度。きちんと着こんでいたであろう服は、今やそ
の役割を果たしていない。それに、何より臭い。男は全身から饐えたような
臭いを放っていて、夏葉は思わず吐き気に襲われていた。

（な、に……）

露出した肌には、激しい火傷の痕があった。水膨れした体表から皮膚が剥が
れ落ち、ボロ布のように纏わりついている。男が呼吸をする度に、喉から風の
ような音が漏れ聞こえる。それに、何より異様なのは……。夏葉は愕然とした
表情のまま、男を見据えていた。

「……」

男は両腕を突きだして壁に体重を預ける。そのまま大きく口を開けて、頭上
から降り注ぐ水を、喘ぐような動作で飲み始めた。男の興味が自分に向いてい
ないことをいいことに、夏葉は男の横をすり抜けて、個室を出る。

床に放り投
げた制服を適当に掴み、震え出しそうになる足を励まして、医療室
に向って駆
け出した。

邂逅２３

「それで、この塔にいる誰かさんの目的。あんたは何だと思う？中也」

食堂から適当に見つけてきたコップが三つ、樹海の地図が描かれたテーブルに並んでいる。コップの中身は単なる水だが、久し振りに思う存分、喉を潤すことが許された光宮の表情は、生気が戻ったように色を取り戻していた。

「証拠隠滅ってところじゃないか？」

「同感ね」

中也は少しばかり時間を置いて、集めた情報を頭の中で整理した。

「ここでは、難民を使って何か実験が行われていた。それはまず間違いないと思う。だけど、その必要が無くなったんだ。だから、捕えられた難民は食事も水も与えられないまま放置された。そこへ、ここの職

員を
消すための暗殺者が送られたってところかな。まあ、そう考えるのが妥
当だ」
「そこへ、私たちが遭遇したってことね。運悪く」
「まあ、そういうことだろう」
故意的か、あるいは偶然かは分からない。けれど、暗殺者が仕事をほ
ぼ終えたころに、中也たちが塔にやってきた。
「暗殺者は少しでも早く俺たちをここから追い出したいんだ。だから俺
にカギを持たせて、あの部屋を見せたんだと思う。早く立ち去らなけれ
ば、殺す。そういう意味なのかもしれないし、ただ警告のつもりだった
のかもしれない」
実際、暗殺者が何を思ってカギを落としていったのかは分からない。

けれど、この塔に長居することが中也たちにとって状況の好転を招くと
いうことだけは無さそうだ。
「少なくとも、この塔で何をやっていたのか、それを知らせるつもりで
は無いわね」
「ああ。それなら資料なり何なりを残していくはずだ」
「そうよね」
二人は無意識に溜め息を落とした。そんな中也と光宮に、テーブルの
上で雑誌をめくっていたシヴァが軽く笑みをこぼす。
「考える役目は大変そうだ～な」
サボってないで自分も何か考えろ、と言おうとした時、医療室のドア
が叩きつけられるように開かれ、白いシャツだけを濡れた体に纏った夏
葉が蒼白な顔をして駈け込んで来た。その勢いに、深い眠りについてい
てい

たはずのレイとルナが飛び起きる。

「何!?」

レイとルナがベッドから飛び降りる。夏葉に何が起こったのか、とそ

の身を案じるより先に、その姿に思わず顔を赤らめてしまった中也には

目もくれず、夏葉は縺れるような足取りで光宮に縋りつき、腰を抜かし

たように床に座り込んでしまった。

「何かあったの?」

夏葉の肩に手を乗せる光宮は、落ち着いているが表情が固い。それな

りに腕に覚えがあり、多少のことでは顔色ひとつ変えないはずの夏葉が

ここまで動転するような事態……。中也も、ようやく危機感がじわりと

沸き起こってきた。

「サ……サボテン……でっかい……サボテン……」

「は？」

光宮を見上げた夏葉の震える唇から紡ぎだされた言葉は、想像の範疇外だった。

「夏葉、ワケが分からないわ。分かるように説明して。何があったの？」

「サボテンが……」

優しく諭すような口調だが、彼女の声音には僅かながら苛立ちが含まれていた。

「男の人……目の前に……あんなの……」

「……」

夏葉は震えていた。深紅の瞳が頼りなげに揺らぎ、縋るように光宮を見上げている。

「俺、驚いて……それで……」

「分かった。分かったから。とりあえずパンツ履きなさい」

埒が明かない、と見切りをつけたのか、光宮は溜め息を零しながら

らはっ

きりとそう言った。レイとルナが顔を見合わせている。シヴァが困ったよ

うな笑みを浮かべながら中也を見上げた。

「目のやり場がねえ～な……」

「うん」

中也も慌てて夏葉から視線を逸らした。常にはスラックスに隠されてい

た白い脚が、水滴を纏わりつかせて惜しみなく松明の光に曝されている。

震える指で光宮に縋りつきながら、怯えたように彼女を見上げるその姿は、

薄暗い明りの元、ひどく煽情的に映り込む。目眩がする。体温が上昇する

のを感じた。

（夏葉は将兄の……）

自分には届かない立場にある夏葉に対して、無意識に抱きそうになった

欲望を、中也は軽く頭を振って追い出した。

「俺たちが、行ってみようか」

中也が声をかけると、光宮がほっとしたような顔で振り向いた。

「そうね。悪いけど、そうしてもらえると助かるわ」

彼女の言葉を受け、何ということなく急ぎ足になった中也とシヴァが医

療室の扉に向って歩き出す。

「ごめん」

二人の背に、夏葉の小さな声がかけられた。

＊

「ああ～やばかった～」

医療室を出たシヴァが、開口一番に言ったのは、そんな言葉だった。

「ムスコが暴走するかと思った～ぞ」

「……」

「将兄の婚約者じゃあ手は出せね～な。残念～」

「そうだな……」

小さく呟いた時、シヴァが僅かながら驚いたように中也に視線を向ける。

「珍しいこともあるもんだ～な。ムッツリスケベが服を着て歩いているような

中也くんが否定しないな～んて。もしかして惚れたか～な？」

「違うさ」

否定してみたものの、夏葉に対する感情がどういうものであるのか、正直な

ところ中也自身にも分かっていない。そんな内心の事情を知ってか知らずか、

シヴァが悪戯にニヤリと笑った。

「そういうことにしておく～ぜ」

二人は問題のシャワールームの前に立った。閉められることが無かったらし

い蛇口のせいで、ドアの向こうからは微かに水音が聞こえ、中の様子を探るこ

とを邪魔していた。二人は軽く目配せをし、ドアの左右に別れてノブを回す。

一拍置いて反応がないことを確かめ、顔を半分だけドアの向こう側に向けた。

一番左側にある個室の前に、剥き出しになった男の脚が覗いている。

「なっちゃんの脚を見た後で、男のナマ脚はキツイな～」

うつ伏せに倒れた男はピクリとも動かない。中也は用心深く男の傍に近寄って行った。

「何だ、こいつ」

男はほぼ全裸だった。その体を跨ぐようにして蛇口を捻れば、途端に酸っぱいような臭いが鼻につく。体中の皮膚が捲れて、ところどころに血が滲んでいた。手を鼻先に翳して見る。呼気がない。男は死んでいた。

「火傷、か～な」

「いや、どうだろう」

注意深く皮膚を見れば、あらかた水に洗い流されてしまってはいるものの

何か液体が絡み付いている。手に触れてみれば、指先が僅かに熱くなった。

「何か、強い薬品だ。それも、酸性の。頭からぶっかけられたような感じに

見えるな」

「薬品ねえ～」

中也はスラックスで手を拭って立ち上がる。

「とりあえず、戻ろう」

「賛成～」

シヴァが近くに落ちていた夏葉の制服を拾いあげる。それを見て、二人は

シャワールームを後にした。

「で、“サボテン”ってどういう意味だったんだろ～な」

「さあ」

少し急ぎ足で、中也とシヴァは廊下を抜けて医療室に戻る。ドアを軽くノ

ックして名乗れば、すぐに内側からカギが開けられてレイの姿が現れる。二

人が中に入ると、背後で彼女が元通りカギをかけた。

「服、取ってきたぞ」

奥にいる夏葉は毛布にくるまり、先ほどよりは随分と落ち付いた顔をして

いる。シヴァが差し出した制服を受け取ると、何とも言えない苦い顔をした。

「……ありがとう」

「これくらい何でもね～よ」

中也は敢えて夏葉に視線を向けないようにした。すぐに、仕切られたカー

テンの向こうで服を着る気配が伝わってきたので、無意識に大きく息をして

いた。

「それで？　サボテンはいたの？」

中也が何を思っているのか、光宮は気付いたのかもしれない。しかし、敢

えて彼女はそのことに何も触れなかった。テーブルに備え付けられたイスに

腰をおろした光宮には特に表情はない。その隣にいるルナも同様だった。

「サボテン、かどうかは分からね～けど、確かに男はいた～ぜ」

「酸性の薬品をぶっかけられたような感じ。服だけじゃなく体も溶けていた。

残念だけど、もう息がなかったよ」

「酸性の薬品……」

光宮は、考えこむようにテーブルの上で組んだ指の上に顎を乗せた。

「モンスターの可能性はない？」

中也の方を見た光宮の視線が、松明の光を受けて揺らぐ。中也はそのことを

指摘されて初めてその可能性に思い至った。ないとは言い切れない。可能性は

ある。それも、多分に。

「酸性の液体を吐くモンスターはいるはずよね。えっと、クイーン・ランゴス

タとか、あとは……そうね、オオナヅチ……とか」

「ナヅチ、じゃないかな」

クイーンランゴスタがいるならば、部下であるランゴスタがもっといなくて

はならない。けれど、塔の中にはランゴスタの姿はない。だとしたら、ありえ

るのはオオナヅチの存在だ。今朝方、塔に続くドアを開けた時に感じた無気味

な気配が脳裏に蘇る。肌が粟立った。

「いるとしたら、塔の方だな」

これは、暗殺者に警告されるまでもなくさっさとここを立ち去るに限る。改

めてそう思った時、制服をきちんと着た夏葉がカーテンの向こうから姿を現し

た。

「ごめん」

「いや、いいよ」

俯き加減で中也とシヴァに向って謝ってくる夏葉には、すでに先ほどの動揺

は見えない。何となく、中也は夏葉を直視することができず、視線を逸らしていた。

「それで？　なっちゃん、でっかいサボテンって言ってたけど、あれはどういう意味なのか～な？」

シヴァはニヤニヤと締まりのない顔をしている。その顔を見た時、中也は確実にシヴァは答えを知っていながら敢えて聞いている、と気付いた。言い淀む夏葉に代わって声を上げたのは、光宮だった。

「まさか、夏葉が見たっていう男……サボテン・サイズだったってオチじゃあないわよね？」

「……うん」

消え入るような小さな声で夏葉が頷く。一拍置いて、光宮を筆頭にレイとルナが爆笑した。

「でっかいサボテン・サイズって気になるな！　おい、ルナ！　見に行ってみ
ようぜ！」
「分かった！」
　中也には理解不能であるが、レイとルナの二人組が嬉々として医療室を駆け
だしていく。夏葉は、苦い顔をしたままひたすら俯いていた。
「あんたねえ……」
　ようやく笑いを納めた光宮が、正面に座る夏葉に向って呆れたように話かけ
る。
「あんた、誰かさんのサボテンを、さんざんＸＸＸり、ＸＸＸり、ＸＸＸり、
ＸＸＸＸＸりしてるでしょ？」
「……してる、けど」
　してるんだ、と思った瞬間、中也とシヴァが無意識に前屈みになっている。

「今更、なにビビってんのよ」

「いや、いきなり目の前にあったから、ちょっと、驚いて……」

夏葉の声はひたすら重かった。

遡迂２３（後書き）

下ネタでした（笑）

どうか、笑ってスルーしてください！

邂逅２４

その後、医療室に戻ってきたレイとルナが、実に興奮した様子で本当に
サボテン・サイズだった、と事実確認の結果を報告してくれた。それも、
身ぶり手ぶりを加えて、だ。

（見たくねえ……）

中也は想像しただけでも気持ちが悪くなり頭を抱える。彼女たちが示し
てくれたモノは、確かに冗談のような太さと長さを備えたサボテンだった。

女の子にとっては物笑いの種に過ぎないのだろうが、同じ男からしてみれ
ば、自分と同じサボテンなど見たくもないし、想像もしたくない。

「同じ男としては自信なくすな～。見なくてよかった～」

「そんなことより！」

中也は敢えて声を荒げる。自然、起きていた連中の視線が彼に集中した。

「明日の朝一番には出発したい。少しでも休んでおくべきじゃないのか？」

「なんだ、お前。自分のサボテンに自信ねえの？」

何でそういう話になる、とレイを睨めば、彼女は僅かに憐れむような表情

をしていた。

「関係ないだろ。さっさと寝るぞ」

先に立って行動すれば、中也の背後から溜め息が聞こえてくる。何だって

彼女たちはこんな状況であそこまで陽気でいられるのだろう、とその神経の

太さが不思議で仕方ない。

「ベッドは簡易なものを含めて五つしかない。うち二つはお姫さんとエマニ

エルが使ってる。全員がベッドで寝るのはムリだ。誰か……」

「二人ずつ寝ればいいじゃない」

先ほどから中也が頭を悩ませていた問題は、光宮の一言で解決した。

「私、夏葉と一緒に寝るわ。いいでしょ？」

彼女の問いかけに、夏葉が無言で頷く。

「じゃあ、あたしらも一緒に寝るか」

「そうね。レイとひとつのベッドで寝るなんて久しぶり」

そう言って四人はそれぞれベッドに向って行ってしまう。残ったのは、中
也とシヴァの二人組だ。

「男同士で狭い簡易ベッドはね～よな。俺、床で寝るわ～」

「お前、怪我してるだろ？　俺が床で寝るよ」

話がまとまりかけた時、カーテンの向こう側から呆れたような光宮の声が
かけられる。

「バカね。一人が逆を向けばいいのよ。そうしたら寝られるわ」

というワケで、中也とシヴァは互いの足の臭いを嗅ぎながら一夜を明かす
ことになってしまったのだった。

＊

満天の星空にゆっくりと暗雲が立ち込めていた。空を覆った雲から落ちた
雨が、大木の葉を濡らしていく。ポツポツと降り始めた雨は、中也たちが深
い眠りに落ちた夜半過ぎ、激しい雷雨となって樹海を覆い尽くしていた。

医療室に設けられた小さな窓が、落雷の稲光を受けて暗闇に浮かび上がる。
ガラスの嵌められていない窓からは、しきりに雨が入りこんで床とテーブル
を濡らしていた。時計の針は深夜二時を差している。落雷の光が照らしだし
た医療室。そこに並べられたベッドのひとつから、むっくりと起きあがった
人影がある。影はまるで導かれるようにベッドを降りると、夢を見ているよ
うな足取りで、ゆっくりと窓際へと近寄って行った。

＊

中也は夢を見ていた。それは夢と呼べるほどの夢ではなく、幾多の記憶や
漠然とした想像などが浮かんでは消えるだけの、疲れた脳が見せるだけの幻
影で……。

「う、ん……」

夢の中に、獣がいた。その獣は、地面に屈みこんで何かを必死に貪ってい
る。無意識に近づいて行くと、獣の足元に転がった人間の姿が見える。一瞬
で、それが最初の日にランポスに喰い殺された少女、リンだと気付き、中也
は思わずたたらを踏んだ。獣がその小さな体に牙を突き立てる度、骨を砕く
不快な音が鼓膜を刺激する。すべての音が遮断された夢という特殊な空間の
中、獣の牙が堅い骨を砕く耳障りな音だけが異様に耳について離れない。

「う……ん……」

中也は身を捩る。途端、幸か不幸か、目の前にあったシヴァの足に顔をぶ

つけて、悪夢から目を覚ますことができた。夢か、とほっとしたのも束の間。

中也の耳に、獣が骨を砕く、あの不快な音が聞こえてきた。夢じゃない。そ

う思った瞬間、中也は飛び起きていた。狭い室内に、稲光が差し込む。一拍

おいて、激しい落雷の音が聞こえてきた。

「あんた、何……してるんだ……？」

再び、稲光が走る。弾かれたように振り返った朱宮は、両手に何かを抱え

ていた。口にも、何かを咥えている。中也の脳裏に、夢で見た光景が蘇った。

稲光が作りだす不自然な陰影も相まって、その姿に思わずぞっとした時、テ

ーブルの上に積み上げておいたはずの保存食の大半がカラになっていること

に気付いた。

「お、お姫さん……あんた……！」

「何事だ～？」

目をこすりながら起きだしたシヴァも、目の前の光景を目の当たりにして

唖然とする。

「だって～お腹が空いていたんだもの～」

開いた口が塞がらない中也とシヴァの前で、朱宮が再び新しい保存食の袋

に手を伸ばす。二人が見ている目の前で、水か湯でふやかさなければ食べら

れないはずの堅い食品を、彼女は軽々と頬張った。保存食が噛み砕かれる耳

障りな音が聞こえる。

（悪夢の原因はこれか……）

妙に冷静な自分がそう判断した時、半ば寝ぼけていた思考が水を差したよ

うに冴えていくのを感じた。

「ちょっと待て！　あんた、何個食ったんだ！？」

「え？」

慌てて中也はテーブルに駆け寄り、残る保存食の数を確認する。
６０個あ

ったはずの保存食が、２７個に減っている。幸い、中也とシヴァ、
そして夏

葉のカバンに残りの６０個が入っているとはいえ、救助の目途がま
るで立っ

ていないこの状況下、たった一日で３３個の消費はあまりに厳しい。
それに。

「あんた、腹は大丈夫なのか？」

「どういう意味？」

この食品は水をかければ、嵩が増す。言い返れば、そのまま食べ
てしまっ

た場合、胃の中で何倍にも膨らむ計算になるのだ。

「……」

中也とシヴァが怖いものでも見るような顔で朱宮を見つめる。そ
んな二人

を朱宮はポカンとした表情で見つめ返す。少しの間、沈黙が流れた。

「お姫さん、ホントに何ともね～のか～な？」

「だから何が？」

朱宮の顔色は変わらない。

「大食い、なのかな？」

「そうみたいだ～な」

これは、この先の食糧事情で苦労しそうだ、と再び降って湧いた困難に二人はただ溜め息を落としていた。

邂逅２５

「樹海のＸ４エリアで不審火？」

王宮内にある将兄の執務室の横には、簡単な仮眠室が設置されている。

簡単とは言っても、ところどころに黄金とガラスで装飾を施され、高価な

調度品が置かれたその部屋には、大人３人が横になっても充分ゆっくり眠

れる大きさのベッドだけでなく、シャワールームを始め生活に必要な設備

がすべて整えられている。一か月や二か月、ここに泊りこんだからと言っ

て何の不自由も感じさせない立派なものだ。しかしながら、現在の住人は

執務室の横にこういった部屋が用意されていることについて、自分をカン

ヅメにするために四軍将が用意した陰謀だと信じて疑わない。

「先ほど帰還した秋軍一軍の兵士からの報告です。あそこはハンターの出

入りがない場所。それにも関わらず、ところどころで薄く煙が上がっていて
る場所があり、着地して確認してみたところ、木の枝が人為的に積み重ね
られて火を付けられていた、ということです」

「樹海のＸ４エリア、か……」

ベッドに身を起こした将兄は、傍に放り投げていた煙草に火を付ける。

照明が落とされた暗い部屋に、ゆったりと紫煙が舞う様を、ベッド脇に膝
をついた兵士はじっと見つめていた。ややあって、将兄はその金色の瞳を
彼に据えた。無意識に、彼は姿勢を正す。

「タヌキを起こして来い。年だからどうのとゴネたら、水をぶっかけてで
も連れて来い。俺が許す」

「は」

膝をついたまま軽く頭を下げた兵士は、仮眠室の入口で再び丁寧

に一礼

し、退室する。それを見送った後で、彼は脱ぎ捨てた制服の上着を羽織り、

軽く服装を整えた。職務が一段落ついて、うんざりしながら仮眠室にやっ

てきてから二時間あまり。ここ最近はそんな日々が続いていた。

「やれやれ、だな」

言いながら、彼は執務室へ続くドアを開く。誰もいない部屋の机の上に

は、片づけられないまま書類やインクが散らかっていた。

「四日目、か。そろそろだな……」

椅子に腰をおろした彼は、手持無沙汰になって再び煙草に火をつける。

机の上に置かれた灰皿には吸いがらが山を作っていた。

「夏葉がいなくなって、本数が増えたな……」

彼は作り物のように整った顔立ちに苦笑を浮かべた。

「失礼いたします」

手に持つ煙草があらかた燃え尽きて灰に変わったころ、執務室のドアが
ノックされて目的の人物が姿を現した。やってきた秋軍将（タヌキ）の褐色の顔には
眠気のカケラも見当たらない。薄い水色の髪はいつも通り整えられ、不精
髭さえ浮いている様子が無かった。
「叩き起こされたっていうのに、随分ご立派な出で立ちだな」
「そういう将兄こそ、ご自慢の美貌にクマひとつ見当たりませんが？」
時計の針は深夜3時を差している。彼が将兄に就任する以前、こういった
時間に何だかんだと理由を付けて四軍将が自分を叩き起こしにやって来てい
た。一度くらい、四軍将が根を上げる様を見てみたいものだと彼は密かに思
う。
「珈琲を淹れましょう。将兄もいかがですか？」
「ああ、頼む」

秋軍将は真っ直ぐに彼の傍へとやって来ようとはせず、向って左側に設置
されているカウンターへと歩を進める。静かな部屋に、秋軍将の靴音だけが
反響した。彼は慣れた手つきでカップを二つ取りだすと、チコリの根を挽い
て作った珈琲を淹れ始める。
「明朝一番で樹海のＸ４エリアの捜索を始める。話は聞いたな？」
真っ直ぐな背に向って問いかければ、秋軍将が顔だけを動かして彼に視線
を向けた。
「ええ、伺っております。しかし、Ｘ４エリアとは厄介ですな」
幾分、秋軍将の声音に苦いものが混じっていた。それが演技なのか、本心
なのか、彼には判別がつかない。別に、どちらでもいいことではあったが、
いつかこの男の本心を引きずりだしてやりたいと思う気持ちだけはある。

「あそこは確か、極秘にギルドの技術開発部の実験施設があったはずでは」

「閉鎖させたがな」

カップを二つ、手に持って彼の方へと歩んでいた秋軍将の顔色が僅かなが

ら変わった。それに、彼は少しばかり愉悦を感じる。

「将兄……それは、存じませんでした」

「何をするにもお前らにお伺いを立てるのは俺の性に合わないと言ったはず

だ。コルネットとは言わずとも、お前たちにとって都合のいい将兄が欲しか

ったのなら、俺を選んだことは失敗だったと後悔することだ」

彼の前に珈琲が注がれたカップが降ろされた。彼に向って差し出されたカ

ップには珈琲がそのまま注がれているが、秋軍将の手の中にあるカップの珈

琲は砂糖と粉乳が大量に混ぜ込んであるため、かなり変色している。せっか

くの高価な珈琲も、ここまで不純物を混ぜ込まれれば最早、砂糖水

なのか珈
琲なのか判別し兼ねる代物と成り果てている。顔に似合わず、彼は
重度の甘
党なのだ。

「将兄が何をおっしゃっているのか、私には分かりません。獅子王
が退陣な
され、コルネットを訴追しても復帰するおつもりはないとおっしゃ
る。なら
ば、我がアルテリア軍には新しい将兄が必要です。当時の……いえ、
現在の
アルテリア軍の中でも、あなたほど将兄にふさわしい方はいない。
だからこ
そ将兄に推薦した。それだけの話です」

「それなら、仮に俺が将兄の権限をもって、お前を秋軍将から外す
と言えば
お前はどうする？　おとなしく従うのか？」

秀麗な顔立ちに悪戯な笑みを乗せながら問いかければ、秋軍将が
わざとら
しく片眉を上げて見せた。

「私以上に秋軍将にふさわしい者が後継になるのなら、喜んで従います」

「なるほど」

執務机に頬杖を突いたまま、彼は軽く笑う。

「だったら気を抜かないことだ。お前が思っているより、優秀な人材は多い」

「それは、私にもっと仕事をしろと言っておられるのですかな？」

「自分でそう思うのなら、そうなんだろう」

言いながら、彼は秋軍将の褐色の顔を見上げた。

「樹海Ｘ４エリアにある技術開発部の研究塔。その職員が不正に武器を転売しているという情報が入ったのは一か月前の話だ」

「それはそれは……穏やかではありませんな」

秋軍将の顔色には特に変化はない。しかし、彼はニヤリと笑いながら話を続けた。

「転売先についても調べはついている。西にある小国、オーエンだ」

「西のオーエン？」

「そう。アルテリアで言うなら帝都の半分ほどの大きさしかない、小さな国だ。

しかし、ここ数年ばかりおかしな噂が流れていたのを知っているか？　もとも

と東と西は波乱の土地だ。ひとつの国が建てばひとつの国が滅びる。東西の勢

力図が目まぐるしく変わるのはよくあることだろう。だが、最近は小国に過ぎ

ないオーエンが妙に勢い付いていた。おかしいとは思わないか？　アルテリア

のように武器を大量に生産できるほどの技術も人員もない。そもそも戦地に送

る人間の数さえたかが知れている。そんなオーエンがなぜ周囲の小国に対して

優勢なのか」

「ハンターが持つ特殊な武器と防具、ですか」

「その通り」

ハンターが持つ武器はフィールドに生息しているモンスターの素材を使って
作られる。ゆえに、それを持つ者は通常の人間には有り得ない攻撃力と防御力
を備えることができる。簡単に言えば、一小隊の働きをたった一人でこなすよ
うなものだ。

「オーエンの様子がおかしいという情報が入って部下に調べさせてみれば、樹
海のＸ４エリアにある塔が浮上したというわけだ。ついでにオーエンの方にも
手は打ってある。近いうちに、また西の勢力図が変わったという報告が来るだ
ろうさ」

「さようで」

「何か言いたいことはあるか？」

幾分、含みのある声で問いかけると、秋軍将は軽く頭を下げる。

「とんでもございません。精進いたします」

タヌキが、と内心で思いながらも、それ以上は追及しなかった。

「まあいい。それで、本題に入るが、俺の配下に塔の職員の始末と資料の処分、

ついでに塔そのものの爆破を命じたのが二週間かそれくらい前の話だ。秋軍に

しろ夏葉たちにしろ、鉢合わせると面倒だ」

「爆破……ですか？」

「何事も派手にやらないとな」

技術開発部の実験施設である塔は、その目的が極秘であるために大々的に人

員を募ることができず、最小限の人手で長い年月をかけ、石材を運び込んでよ

うやく建てられた代物だと聞いている。何の躊躇もなく爆破してしまうには、

あまりに惜しい。それを知っていて、彼は敢えて爆破を命じた。

「夏葉たちがどういう状況かは知らないが、とりあえず秋軍が本格的に捜索を

始めるのは塔が崩れてからにしてもらう。いいな？」

「それは構いませんが、よろしいのですか？　万が一、あなたの送った者が生
徒たちを傷つけてしまう可能性は……」

「それは心配ない」

はっきりと断言し、彼は楽しそうに笑う。

「あいつは、自分に敵意のない人間に刃を向けない。俺の命令があれば別だが、
そういうヤツだ。予定外の人間が現れれば、殺すより先に何とか気付かれずに
逃がそうとするだろう」

「ずいぶん信用なさっておいでのようですね」

「まあ、お前よりはな」

彼は座っていた椅子から立ち上がる。その足で再び仮眠室へと向かいながら、
秋軍将を振り返った。

「細かい編成は任せる。お得意のトボけたツラでうまくやれよ」

「了解いたしました」

＊

秋軍将は丁寧に一礼しながら、仮眠室へと歩み去っていくその背を見送った。

「相変わらず、不思議な方だ……」

ドアが閉じられる音が静かな執務室に響き渡る。まるで彼を拒絶するように閉じられたそのドアを、秋軍将は意味もなく見つめていた。

＊

彼らが塔を出立したのは、太陽が顔を覗かせて間もない時刻だった。周囲にいるモンスターに気を配りつつ、小雨が降りしきる樹海を歩き続けて幾許かしたころ、大地を震わす振動を感じて歩を緩めた。

思わず振り返った視線の先、彼らは巨大な塔が崩れ落ちる様を目の当たりにした。

邂逅２６

木立の狭間から降り注ぐ冷たい雨が、肩を濡らしていた。

「寒い……」

朱宮が自らの体を抱きしめるようにしながら、そう呟いた。季節は春。

雪と氷に閉ざされる凍てついた冬は過ぎ去ったはずなのに、時折、吹き

荒ぶ風は身を切るような鋭利な冷気を運んでいた。思わず足を止めて見

渡せば、そこにいる誰もが疲れきった青白い顔で黙々と樹海の土を踏み

しめている。

「ちょっと、休もうか」

中也は自らも血の気のない顔色をしながら、そう提案する。すると、

朱宮を始め何人かがあからさまに安堵した顔をした。

「さて、中也くん」

一同が立ち止まれば、隣を歩いていたシヴァがおどけたような口調で
話しかけてくる。
「何だよ」
「問題です。雨の中で火をおこすには、どうしたらいいでしょう～か？」
「……お前、自分は答え知ってんのかよ」
「知らねえから中也に聞いてんだ～ろ？」
さも当然のように言われて、中也は軽く溜め息を零す。しかしながら、
それはかなり深刻な問題だった。樹海の気温はもともと高くはなかった。
暑くもなく、寒くもない。どちらかと言えば過ごしやすい気温だったと
言えるかもしれない。しかし、雨が降れば話は違ってくる。濡れた体を
風に曝され続ければ、嫌でも体力を消耗する。体力が落ちれば風邪など
の感染症を引き起こしやすくなるし、まともな医薬品など無い状況

で、

そこから肺炎に進行する恐れだってあるのだ。そうなれば、生還できる

確立が極端に低くなってしまう。今は、先の見えない道のりを進むこと

より、各自の体調管理を行うことの方が優先だ。

「都合よく洞窟とかないもんか～な」

「無いから大変なんだろ？」

言いながら、中也は屈みこんで地面に触れてみる。水に濡れた落ち葉

をかきわけ、現れた地面を少し掘ってみると、乾いた表面が現れる。

「そこまで浸透してないみたいだ。少し掘れば塹壕タイプの竈が作れる」

「燃やすものは？　何にする～んだ？」

「それが問題。油分の多い木があればいいんだけど、都合良くないよなあ」

普通、薪に使われる木は天日にさらして水分を蒸発させたものだ。今こ

こに茂っている木の枝を折って火を付けたとしても、うまく燃えてくれる
保証はない。おそらく、火がついたとしても煙だけが上がるだろう。
「雨を避けられるだけで充分、違うわよ。いっそ木の上に登って、枝を集
めて雨宿りしましょうよ。その方が早いわ。ランポスだって避けられるし」
「そうする？」
光宮の意見に、中也は同意を求めるようにシヴァを見やる。
「俺に聞くな～よ。そっちの方が安全だって言うなら、そうするべきだ～
ろ」
「じゃあ、そうしようか」
意見はまとまった。彼らはいつも通りの要領で目につく限り一番大きな
木に登って行く。全員が枝によじ登ったところで、身の軽いレイとルナが、
塔の食堂から失敬してきた包丁を使って、周囲の木々から葉を多くつけた

ままの枝を叩き折る。それらを受け取った中也とシヴァが器用にツルを使

って固定する。光宮と夏葉がそれを手伝った。枝を組み合わせ、あるいは

ツルをかけて枝を引き下ろし、屋根を作る。

「動いたら寒くなくなったわね」

「そうだ～な。俺なんか汗かいてる～ぜ」

一時間も木の上で格闘すれば、みすぼらしいながらもツリーハウスが出

来上がった。

「雨が上がるまでじっとしてようか。どうせなら、ハンモックみたいなの

を作ってキチンと休めるようにしよう」

「はんもっく？　それな～んだ？」

何気なしに言ったことだったので、まさか聞き返されるとは思っていな

かった。

「何て言えばいいのかな。網でできたベッドみたなものだよ」

身振り手振りを加えながら説明すれば、彼らは何となく納得してくれた

ようだ。

「いい意見だと思うけど、肝心の網を作るのは一苦労よ」

「網でなくてもできるさ。葉のついた木の枝を集めてベッドみたいにすれ

ばいい。ゴリラでも作れるんだから、俺たちが作れないはずないさ」

中也は偶然テレビで見た動物番組で、ゴリラが木の枝を使ってベッドを

作る様子を思い浮かべた。

「ごりら？　何それ。新しいモンスター？」

光宮だけではない。彼女の隣にいる夏葉も、ひとつ上の枝に寄りかかっ

ているレイとルナも不思議そうな顔で中也を見ていた。気を抜いた時、無

意識に故国の言葉を使うクセが抜けていない自分に溜め息が出る。

ベッド、

とかイエローカード、とか、こちらでもあちらでも共通の単語がある分、

言葉を選びきれないことが難儀である。

「ゴリラって……コンガみたいな動物。モンスターじゃないけど」

「中也って、もしかして朱民か？」

レイに聞かれて、返答に困る。朱民と言えば朱民のようなものだが、一

応、国籍は生まれた時からアルテリアになっている。

「いや……なんてゆーか……」

どう説明しようか悩んでいると、シヴァが堪え切れなくなったらしく隣

で笑いだした。

「中也は記憶喪失なんだ～よ」

「記憶喪失！？」

遡迂２６（後書き）

ああ……。

ドド変態からゴゴ変態に昇格してえ……。

お疲れ様です。いつもながら妖乱舞をお読みいただいてありがとうございます。

先日、この小説のご感想をいただくことができました。もう……しばらく動けなくなるくらい嬉しかったです（笑）

いえ、本当に。

ご感想は、本当に励みにさせていただいております。

邂逅27

シヴァが言った途端、異口同音に驚いた顔をした彼らに一斉に詰め寄られた。

「正確には記憶喪失じゃない」

「朝、起きたら世界が変わってたんだ～と」

「なに、それ。どういうこと？　説明して」

光宮たちは、ひたすら怪訝そうな顔をしていた。中也は腹を決める。光宮はこう見えても国の重要人物の一人だ。もしかしたら、自分たち一般市民には知り得ないことを知っているかもしれない。そう思って、彼は重い口を開くことにした。

「いや、言葉のままだよ。朝、起きたら俺はこっちの世界にいた。もともと、俺がいた世界っていうのがさ、日本っていう名前の国なんだ。日本があるの

が地球っていう、大地。地球には、他にアメリカとかイギリスとか中国とか、
いろんな国がある」
地球を星、と表現してもおそらく理解してもらえないだろうと思い、彼は
敢えて「大地」という言葉を選んだ。この世界では、不思議な話ではあるが
大地は平らだ。
「日本は島国。大きさは、アルテリアの１０分の１くらいしかないかな。ま
あ、それはいいんだけど、いきなり知らない世界に来たっていうなら、まだ
話は分かるんだ。けど、不思議なのが文字は違うのに言葉が通じたり……。
でも一番おかしいのが、周りの人間」
「そうそう。普通は知らない場所に来たら知らない人間ばかりだ～ろ？　な
のに、こいつの場合、世界は知らないのに周りには知り合いばっかりだった

ってオチな～んだ」

「よく分からないわ」

光宮が眉を顰める。中也自身、自らの身に起ったことを完全に受け入れて

いるわけではないので、詳しく説明しようとしても言葉が詰まってしまう。

「えっと、何て言えばいいんだろう。とりあえず、日本でも俺とシヴァは友

達だったんだ。幼馴染ってヤツかな。それに、父さんも母さんも姉ちゃんも

兄ちゃんも、見た目だけじゃなく性格も知っているままだった」

「うん、俺も中也のことはガキのころから知っていた～ぞ。性格もホントこ

んな感じ。ある日いきなり、ここはどこだ？　って言いだしたから、記憶喪

失」

「へえ～……」

苦い顔を向けられても、他に説明の仕様がないのだから仕方ない。

「それに、日本では人の名前にカタカナは使わないんだ、普通」

「かたかな？」

「えっと、レイシェルとかルナジュオンとか、シヴァとか」

「要するに、呼び名が無くて名前のみってこと？」

「そうそう」

レウスを別名で「火龍」、オオナヅチを別名「霞龍」、ミラボレアスを別名「黒龍」などと呼ぶように、人の名前にもイエローカードやレッドカードに記されている名前とは別に「呼び名」が存在する。アルテリアは多民族・多人種の国家である。今でこそ「アルテリア国民」とひと括りにされているが、王族を始め「呼び名」を使わない民族がだいたい半数。「呼び名」を使う民族が残りの半数だ。「呼び名」を使う人間は普通「名前」を名乗ることはないので、

「呼び名」の方が浸透している。それに、モンスターに関しては名

前よりもむ
しろ「呼び名」の方が知れ渡っていると言える。
「俺が知っているシヴァは、柴崎幸太っていうんだ。しばさき、こうた」
中也は、乾き始めた木の幹に、雨の滴で文字を書いた。
「柴崎っていうのは、日本で使う家族単位の名前。日本では、家族単位の名前
の後に普通は個人の名前を付けるんだ。ちなみに俺は友田中也。で、日本でこ
いつに初めて会った時、名前を聞いたら「しばさき」って名乗った。何でか知
らないけど、俺はそれ以来ずっとこいつのことを「しば」って呼んでいた。し
ばさき、だからシヴァ」
「ついでに、幸太っていうのは俺の名前だ～ぞ。シヴァは呼び名」
「不思議な話ねえ……」
頬杖をつきながら言う光宮の顔は、興味津津といった雰囲気である。

「俺もよく分からないんだけど、平行世界っていうのかな。同じ人間がいる別
の世界」
「信じられない話ではあるけど、目の前にあんたがいるんじゃあ、信じるしか
なさそうね。まあ、ウソを言っていないという仮定のもとだけど。人間関係は
どうなのよ。同じ顔で同じ性格の人間って言っても、やっぱり環境が違えば諍
いもあるでしょ？」
言われて彼は少しばかり考える。無意識に見上げた空は、樹海の木立に遮ら
れてよく見えない。
「そうだなあ、性格はそのまんまだから特に違和感は無かったような……。あ！」
「なに？」
中也は思い立ってシヴァを見る。
「シヴァの家。日本では、シヴァの家族は四人揃って仲良くやってたんだ。おじ

さんとおばさんと、こいつと、それから幸也（こうや）さん」

「ああ……」

中也に話を振られ、シヴァが僅かながら苦笑する。

「幸也って、俺の兄貴だ～ぞ。中也の話では仲良くやってるってことだったけど、

こっちの場合、兄貴は俺がまだガキのころに家出しちまった～んだ」

「そういう違いはあるのね」

「みたいだ～な」

「それから、シヴァの家族のこと言っていいか？」

あまり他言できる内容ではないので、中也は一応シヴァに確認をとってみる。意

に反して、彼はいつも通り笑いながら頷いた。

「別に構わねえ～よ。気にしてねえし。えっと、俺と兄貴は母ちゃんが違う～んだ。

オヤジはもともと東の国の出身で、住んでいた国が戦争で焼けたんだ～と。で、俺

は知らないけど兄貴のお母さんがその時に亡くなったらしい。その

あと、オヤジが
まだ小さい兄貴と一緒にアルテリアに来たんだ～と。で、そこで再婚して生まれた
のが俺な～んだ。俺の母ちゃんが呼び名を使う人だったから、俺は名前が幸太で呼
び名がシヴァ～だ。でも兄貴はそのまんま幸也だ～ぞ」

「そうなの……」

「で、日本にいるシヴァの家族も、そういう経緯がある」

「ホントに？」

光宮が驚いたように目を見開いた。

「ああ。ただし、日本は戦争が無い国だから、戦争で亡くなったわけじゃなかった
けど。ちなみに、年齢も一緒。幸也さんは俺らの４歳上。どちらの国でも」

シヴァの家族については、随分前に気軽に知らされた記憶があった。幸也の母親
は病気で亡くなったと聞いた。中也としては衝撃的で、どう反応していいものか悩

んだのだが、対するシヴァも幸也もあっけらかんとしていた。それに、シヴァの家
族は傍目に見ていても非常に仲がいい。

「ニホンでは仲良くやってるって聞かされた時はちょっと驚いたけど～な。でも豊
かで平和な国だったら、そうなっていたのかもな～って思うさ～」

「どういうこと？」

「いや、兄貴が家出したのって、ちょっと理由があったみたいでさ～……」

彼にしては珍しく、シヴァは視線を下方に向けたまま言い淀むように言葉を濁す。

「俺はまだガキだったから、よく覚えてねえ～んだけど、そのころ、ウチの家計が
かなりキツイことになっていたらしい～んだ。ちょうど、大飢饉が重なった年で」

「ああ、知ってるわ。当たり年ってヤツがあったそうね。冷夏に台風に虫の大発生
に。三年くらい続いて、お米とか小麦の値段が跳ね上がったって聞いたわ。ついで

に氷都のどこかの町にクシャルが出たとかで、さんざんな年だったそうじゃない」

虫の大発生、という言葉を光宮が口にした途端、隣で黙って話を聞いていた夏葉

がビクリと肩を震わせる。そう言えば、夏葉は虫が苦手だと言っていた。

「らし～な。さっきも言ったけど、俺は全く覚えてね～んだ。ついでにそのころ、

オヤジは仕事を始めたばっかりでさ～。一家四人が食っていくのが、かなり厳しか

ったらし～んだよ。だからと言って俺たちをどうこうしようって言っていたワケじ

ゃあないんだけど、何も分からん俺が、アレ買って～コレ買って～って言う度に母

ちゃん、かなり困ってたって聞いた。で、そのころに兄貴がいきなりオヤジと大ゲ

ンカしてさ～。こんな家、二度と帰って来ねえ!!　って言って出て行っちまった

んだ～と」

「それって……」

「うん。オヤジもケンカした時はかなりキレて二度と帰って来るな〜とか言ったら
し〜んだけど、後になって冷静に考えてみれば、兄貴はおそらく家の事情のこと感
づいてたんだろ〜なって。普通に考えれば、兄貴は俺とか母ちゃんの悪口を言った
りしね〜し。未だに覚えてる〜よ。優しい兄貴だった」

「なんだか、あんたのお兄さんとは思えないくらい、他人思いのいい人ね……」

屈託のない光宮の意見に、中也は小さく吹き出していた。隣でシヴァが僅かにバ
ツの悪そうな顔をするのが、見ていておもしろい。

「確かに、幸也さんはスゲー楽しくて、いい人だったな。俺も子供のころからよく
遊んでもらったんだ。俺の兄ちゃんは弟の面倒を見るようなタイプじゃないし、姉
ちゃんとはやっぱり話が合わないし、俺にとっては幸也さんが兄ちゃんみたいなモ
ンだった」

「俺が知ってるガキのころの中也も兄貴と俺と三人でよく遊んでた～ぞ」

「やっぱり。俺がこっちに来たころは、幸也さん学生だったんだけどバイト……働いててさ、給料日だからって何だかんだとウマいモン食いに連れて出てもらってた」

「へえ～。ニホンにいる兄貴、そんなことしてんだ～。兄貴らしいな～」

正直、こちらの世界にいるだろう幸也が家を飛び出してしまったと聞いた時は少しショックだった。何となく、彼ならどうにかしてくれるのではないかと無意識が信じていたせいかもしれない。今どこで何をしているのか、とても気になる。口には出さないが、その思いは中也よりもシヴァの方がずっと強いだろう。子供のころも、それに日本で別れたころのシヴァも、幸也の後ろをずっと追いかけていた。本人に言えば否定するだろうが、シヴァにとって幸也は「憧れ」の対象なのだ。それ

に、おそらく自分にとっても。

「それに、シヴァを見てたら想像できねえかもしれねえけど、かなりカッコいいし
な、幸也さん」

茶化すように言ってやれば、シヴァが苦い顔をする。

「俺を見ていたら、が余計だ～ぞ、中也」

「ホントのことだろ？」

「気になるなあ。なあ、中也。カッコいいってどれくらいだ？」

ふいに上から降ってくるレイの声。ルナとともに興味津津といった顔をしていた。

「あんたらの興味はそこかよ……」

呆れたように言えば、レイがさも心外だという顔をする。

「当たり前だろ？　中也が別の世界の人間だからって、あたしらに何か関係あるの
かよ」

「同感ね。並行世界が存在しているっていうのは確かに興味深い話ではあるけど、

今のところ私には関係ないもの。それより、いい男って聞いたらそっちの方が気に

なるわ。ねえ、アルテリアの美形・代表の将兄と比べてどうなの？」

光宮までもが話に食いついてきた。中也にとっては重大な問題も、

「関係ない」

の一言で片づけられれば返す言葉がない。

「知るかよ。実際に将兄を見たのは入学式の一度きりだし。遠目だったから、どん

な顔してたかなんて分かるワケねえだろ？」

「役立たず」

「ええ～？」

そこまで言わなくても、と思うが、背後のレイたちも完全にそう思っているよう

なので、とりあえず押し黙った。

「そういやあ、俺も最近の兄貴がどんな顔してるか知らね～や。兄貴が出て行っち

まった時、俺まだ5歳かそこらだったし。今になって会っても顔が分かるか～な」

「期待しても大丈夫だと思うぞ」

笑いながら言ってやれば、シヴァはあからさまに嬉しそうな顔をする。それに、

嘘は言っていない。中也が知っている幸也は、まさしく「カッコイイ」という表現がとても当てはまる人物だった。いろいろな意味で。

遅延27（後書き）

ぬるい……。

アクション・シーンが書きたい……。

お色気シーンが欲しい……。

邂逅２８

「日本にはカメラっていう便利なモノがあってさ」

中也は興味深そうにしている彼らに向って、日本の文明の話を始めた。久々に故

国の話をするのは、楽しい。それ以上に懐かしさが湧き上がるが、自分がいた国の

ことを真剣な顔で聞いてくれる人がいるというのは、なかなかいいものだと思う。

調子に乗って、中也はカメラから携帯電話のことも説明した。

「せめてこっちの世界にもケータイとは言わないからカメラがあれば、最近の幸也

さんの顔を見せられたのになって、話だよ」

「まるで魔法だね……」

開口一番にそう言ったのは、ルナだった。彼女は隣のレイと顔を見合わせつつ、

信じられないと言った表情で中也を見ていた。

「魔法じゃあないさ。ちょっと分かりにくいかもしれないけど、カメラも携帯もちゃ

んと理屈があるんだ。俺にしてみれば、こっちの世界の方が充分、魔法だって」

「一番、驚いたことは何？」

光宮に問いかけられ、中也は記憶を辿る。

「ネコが二足歩行で人の言葉を喋っていたこと、かな」

答えると、彼女は破顔した。

「ああ、アイルー？　ニホンにはモンスターはいないの？」

「いないよ。人間の言葉を喋る動物がいないワケじゃないけど。アイルーみたいに、自分の意思を持って喋ってるワケじゃないからな」

「そうなの。でも、さっき言ってたデンワだっけ？　それがあったら便利よねえ、きっと。今の状況だって、そのケータイデンワってやつがあれば一発じゃない。こんなに苦労すること無いのに」

それはどうだろう。携帯電話には電波というものが非常に関係してくるので、こんな

樹海の奥地からアルテリア本国に連絡できるとは限らない、と思ったのだが言っても仕方ないことなので黙っておいた。そしてふと、思い立つ。

「なあ、さっき魔法って言ってたよな？」

「それがどうかした？」

後ろのルナを振り返りながら聞けば、彼女は不思議そうな表情で中也を見下ろしていた。

「こっちの世界には、魔法ってあるのか？」

聞けば、ルナが隣のレイと顔を見合わせる。

「さあ、どうなのかな。あったって話は聞いたことあるけど、実際に見たことはないよ」

「じゃあ、俺の知ってる世界と同じか」

「正確には、あると言って間違いではないわ」

ルナの代わりに断言したのは光宮だった。

「どういうこと～だ？」

中也にしてみればレウスなどの巨大なモンスターが徘徊する世界

は充分にファンタジー

なので、ここで魔法というものが存在していると言われても今更、驚かない。しかし、彼

女が言った言葉に驚いた顔をしたのは、シヴァたちの方だった。

「あんたたち、ホントに勉強不足ね」

呆れたような顔をした彼女は、一息置いてから語り始める。

「まあ、魔法って言ってもあんたたちが思ってるような便利なモノじゃないわ。「魔」を

封じる「方法」っていうことで、魔法って呼んでいるだけよ。魔っていうのは、現実的に

モンスターのことね」

「モンスターを倒す方法のことを魔法？」

聞き返せば、光宮が微妙な顔をする。

「ちょっと違うわ。まず最初に、この世には五つの「元素」がある。森羅万象とも言うわ

よね。五つの元素っていうのが、水、氷、雷、龍、そして火。水を封じるのは氷。氷を封

じるのは龍。龍を封じるのは雷。雷を封じるのは火。そして火を封

じるのは水。たとえば、

レウスって火には強いけど、水に弱いじゃない？　それに、クシャルダオラは氷には強い

けど雷に弱い。それって、さっき言った元素の特性と同じなのよ。火に強いレウスは水で

倒す。言い返れば水で火を封じる。氷に強いクシャルなら、雷で倒す。雷で氷を封じる」

元素と聞いて「水平リーベ僕の船」と思いだす中也は、決して自分が間違ってはいない

という気がしていた。

「元素はお互いにお互いを封じているっていう考え方よ。アルテリアの地方都市と一緒。

五角形を思い浮かべればいいの。アルテリアで考えられている魔法の基本ね」

「それだけ？」

光宮がそれきり黙ったので、中也は思わず聞き返していた。

「それだけよ」

彼女の答えはあっさりしていた。この世界にはせっかくマンドラゴラだの何だのとい

う魔法植物があるのだから、もっとファンタジー的な何かを期待していたのだが、その
期待はあっさり裏切られたらしい。

「要するに、五つの元素がお互いに抑制しているってことだろ？
それが魔を封じるから、魔法？」

「そういうこと」

「ふ～ん」

アルテリアで考えられている魔法とは、中也が思い浮かべるようなものではないらしい。事故とは言え、せっかくファンタジーな世界に来たのだから、呪文なり何なりを唱えて手から火や氷を飛ばしてみたかった。それを思うと残念ではある。

「でも不思議な話よねえ～」

「なにが？」

魔法について興味を無くしかけたところで、光宮がわざとらしい声を上げた。

「だって、レウスの素材で作った大剣をハンターが振り回したら、レウスが普通に噛
みついたのと同じくらいの威力が出るらしいんだもの」
「レウスの大剣……？」
この世界、というか、アルテリアにはモンスターの素材から武器や防具を作るという技術があるということは小塾（学校）で教師から聞いていたので知っていた。しかし、現実に見たことはないので、いまいちイメージが湧かない。
「レウスの大剣って、長さが大人の身長くらいで、重さはだいたい１５キロくらいかな。幅が５０センチで、レウスの顎のあたりが材料って聞いているわ。全体的に赤くて、大剣の刃のところには、レウスの牙が並んでいるの」
疑問符を浮かべる中也に、光宮は身振り手振りを加えながら説明する。
「しかも、レウスが強ければ強いほど、武器の威力も上がるし、防具なら、より頑丈

になるらしいわ」

「そんなバカな」

即答した中也に、光宮はどういうわけか、僅かながら驚いたような表情をする。

「生きている時のレウスがどれだけ強くたって、死んだらどれも同じだろ？　まあ、

モンスターは長く生きるほどウロコが固くなるっていうから、防具の強度が上がるっ

ていうのは、納得できるけど」

「まあ、そうなんだけどねえ～」

光宮は再び、わざとらしい溜め息をついた。

「それに、レウスが噛みついたのと同じだけの威力ってどういうことだよ。ハンタ

ーって人間だろ？　普通に考えたら有り得ない」

「どういうこと？」

背後から聞いてきたのは、ルナ。風が吹き、彼女の綺麗な銀髪が頬をかすめた。

「俺はモンスターなんて本でしか見たことなかったけど、レウスに

しろティガにし
ろ、強いのは牙っていうより、むしろ首の筋肉とか顎の力の方じゃ
ないか？　獲物
を倒して、牙で噛み切るっていうより、顎で肉を咥えて、首の力で
食い千切るみた
いな。そんな感じに見えた」

　現実に出会ったレウスについては、恐怖が先立って細かく観察す
る余裕など無か
った。しかし、以前モンスターについて調べようと本を開いた時、
そこに挿絵とし
て描かれていたレウスやティガを見た限りでは、そういった印象を
受けた。無論、
挿絵として描かれたモンスターは、さも恐ろしげに牙が強調してあ
ったのだが、子
供時代「恐竜博士」だった中也にしてみれば、恐竜にしろモンスタ
ーにしろ、いわ
ゆる肉食捕食動物（プレデター）と呼ばれる種類の動物が、どうやって獲物を倒し、
食しているかなど一目瞭然だ。

「だとしたら、大剣でレウスと同じだけの力を出そうと思ったら、

ハンターの腕力
がレウスの顎や首の筋力と同じでないといけない。有り得ないよ」
「そうね～。だって人間とレウスじゃあ体の大きさも構造もまるで違うもの」
「でもレウスの大剣をハンターが振り回したら、レウスが普通に噛みついたのと同
じだけの力が出せるんだろ？」
「ええ、そうよ。しかも、素材になったレウスが強いほど大剣の威力も上がるの」
「……もしかして、それが魔法って言う？」
「さあ、どうなのかしらね」
光宮は足を空中に投げ出したまま、遠くに視線を向けた。
「ただ、ギルドの技術開発部はモンスターの死体から作った武器に、そのモンスタ
ーが生きていた時と同じだけの力を持たせる技術を持っている、ということだけは
確かだわ。いくら水は火を封じるって言っても、レウスの死体に水をぶっかけたか

らって、武器や防具に変身するはずないじゃない。それを魔法と呼べるかどうかは、
謎だけど」

モンスターの体は頑丈だ。それに、鋭い爪や牙を兼ね備えている。それを使うこ
とで武器や防具を作れば、普通に木や鉄を加工して作ったものより、何倍も殺傷能
力が高い武器や、防御力の高い防具を作ることはできるだろう。だが、素材となっ
たモンスターが強いほど、それらの性能が上がるというのは現実問題として考えに
くい。

「さっきの塔だってそうだけど、ギルドは少なくとも、世間一般に伝わっているよ
うな商業組合でないことだけは確かよ」

何とも言えない沈黙が落ちた。人の力が及ばないもの、人の知識を超越したもの。
それは、何だか空恐ろしい。説明がつかないことが確かに現実に存在しているという

のは、中也にとっては恐怖の対象に他ならない。呪文を唱えて手から火や氷が出せる
方が、現実味がない分、まだマシだ。
「なんか、小塾の最後の授業で先生がギルドは胡散臭いって言っていたな」
「ギルドマスターの別名は将兄だ～とも言っていた～ぞ」
中也とシヴァが揃って言えば、光宮が驚いたように二人を見やる。
「よく知っているじゃない。その通りよ。その先生、なんで知ってるの？　まあ、いいけど。知ってるならいいわ。話してあげる。ギルドの正体はね、軍が管轄する組織なの。でも、詳しいことは私には分からない。四軍将を問い詰めても、知らぬ存ぜぬを徹底してくれちゃうんだもの。ねえ、あんたに聞いてもムダと思うけど、将兄はギルドについて何か話してたりしないわよね？」
光宮が夏葉に向き直れば、夏葉は慌てたように首を振る。
「知らない。京さま……将兄は、俺と一緒にいる時、仕事の話とかしないから……」

「もういいわよ、京さま～で。仲がよろしいようで、羨ましいわ～」

溜め息交じりに言う光宮に、夏葉は小さくゴメン、と謝った。

「別に謝ってもらうようなことじゃないわ。情報源としては、あんたは頼りなさそうだし。それとなく聞いて来いって言ったって、すぐバレるでしょ？　最初から期待してないわ」

「はっきり言うなあ、あんた」

明け透けな物言いに、中也は苦笑しながら言ってみる。

「はっきり言わないと分からないのよ、夏葉の場合。そうでしょ？」

「……うん」

「まったく、せっかく軍学校に入れることになったんだから、ＸＸＸのテクニックだけじゃなくて、もっとマトモなことも勉強しなさいよ」

光宮に言われ、夏葉はその白い頬を僅かに染めながら俯いた。どうやら、否定はしないらしい。

「大変だ！」

ふいに、エマニエルの緊迫した声が鼓膜を刺激する。

「どうしたんだ？」

振り向けば、彼は蒼白な顔で意識のない朱宮を抱えていた。

「姫君が熱を出された！！」

「……マジ？」

どうやら、新たな問題は静かに進行していたらしい。

「ギルドは、何をしているんだろうな……」

「私も、それが知りたいの」

思わず見つめた光宮の顔は、今までにないほど真剣だった。

邂逅２９

「京吾～！」

何の前触れもなく開かれたドア。その向こう側からやってきた人物に、執

務室にいた三人の男たちの視線が集中する。

「珍しいな。何か用か、千鶴」

春軍将と秋軍将には目もくれず、突然の来訪者はつかつかと執務机に歩み

寄っていく。大きく肌蹴られた白衣。その下に垣間見える黒を基調にした衣

服は、それを纏う女性の「美」を強調するかのように、挑戦的なデザインが

施された代物だ。一歩を進める毎に揺れる、豊満な胸。引きしまった腰。大

きく入れられたスリットから見え隠れする、魅力的な太股。肩で切りそろえ

られた髪は漆黒で、瞳もまた同じ色。美女、という表現がしっくり当てはま

る、美貌の女だった。

「久し振りに会ったっていうのに、いきなり何か用かはないでしょう？　会いたかったわ、私の愛しい京吾」

全体的に薄い化粧の中、そこだけ人目を引く赤い唇が妖艶に微笑み、将兄の肩に腕を回しつつ、その頬に唇を寄せた。

「私があんたに会いに来るのに、理由が必要？」

そのまま唇が触れあうような距離で、千鶴は優しい細笑みを浮かべる。まるで恋人同士が取るような態度に、さすがの春軍将と秋軍将も唖然とした。

「将兄……」

この年齢不詳の女は、アルテリアが誇る医療施設、療風堂の責任者だ。療風堂を管轄しているのは木府（行政）であるが、実際はそこから独立した組織だと言っても過言ではない。

療風堂は大きく春堂、夏堂、秋堂、冬堂に分けられる。春堂は王族の専属

医。夏堂は軍人の医療行為を専門に行う部隊で、医師たちが場合によってフ

ィールドや戦場に出向くこともある。秋堂は、民間に開かれた施設だ。帝都

だけではなく、地方都市の至るところで見かける「秋堂」の看板が下がった

建物では、専門知識を身に付けた医師が、子供から老人まで分け隔てなく診

察を行う。また、受付でイエローカード、もしくはレッドカードを提示すれ

ば、国から医療費について補助が受けられることになっている。そのため、

アルテリアでは一般人であれ、安価に最新の医療行為の恩恵を受けることが

できるのである。しかし、それゆえに最近、地方の秋堂で、朝早くから元気

な年寄りが弁当を持って待合室に並ぶという問題が発生しているらしい。最

後の冬堂は、医学や薬学のための研究塔だ。それらの総責任者は「療風堂・

代表」、もしくは「代表」と呼ばれる。現在の代表は、年齢不詳の美女。つ

まり、朝も早くから何の前触れもなくやってきたこの女だ。

「今は、いろいろと立て込んでいるんだ。それで？」

「せっかちねえ。まあ、分からないでもないけど。療風堂の予算について直

談判に来たの。正確には療風堂の夏堂。あんたにも関係あるでしょ？」

「そういうことは会議で言えばいいだろ？」

「なによ。理由を付けてあんたの顔を見に来てあげたのに」

言葉の割に不満のかけらも滲まない笑顔で、千鶴は机の上に積み重ねられ

た書類の山に視線を向けた。

「何だか大変そうねえ……」

「そう思うなら、いちいち来ないでくれ。気が向いたらこっちから顔を出す

から」

「いつもそう言って、ちっとも来ないじゃない」

将兄の首に腕を絡めたまま、彼女はクスクスと笑い声を上げる。

「問題が片付いたら顔を見せるから」

親しげに世間話を交わす二人。身の置き所に困って、というよりも目のや

り場に困った秋軍将が、見かねて会話に割って入った。

「将兄、それから代表。今は執務中でございますが……」

秋軍将の声に、仲がいい恋人同士のように寄り添い合っていた二人が、何

とも言えない顔をして振り向いた。

「相変わらず、こちらは堅物ばかりねえ」

その美貌に苦笑を張りつかせた千鶴が、将兄から体を放す。

「まあ、いいわ。予算の件については考えておいて」

「はいはい」

白衣を翻してドアに向おうとする彼女の背に、思い出したように将兄が声

をかけた。

「ああ、そうだ。千鶴」

「なあに？」

振り向きざま、白く整った千鶴の指先が自らの髪をかきあげる。

「入学式の件は聞いてるな？　お前の手を借りるかもしれない。フィールド
に出る用意だけはしておけ」

「言われなくても、そのつもりよ。見つかったら連絡してちょうだい。それ
じゃあね」

ひらひらと手を振りながら、千鶴はやって来た時と同様、二人の軍将には
目もくれずに執務室を出て行ってしまった。ドアが閉じられた後、執務室に
は何とも言えない沈黙が落ちた。

「将兄はナゾが多い方だとは思っておりましたが、まさか代表と良い仲だと

は知りませんでしたな」

最初に沈黙を破ったのは、春軍将だった。

「将兄、あなたには夏葉さんという方がいらっしゃるのでは？」

「は？」

無意識に咎めるような口調を取ってしまった春軍将に、将兄は僅かに片方の眉をあげる。

「代表は確かご結婚なされているはず。人妻に手を出すことは、法律で禁止されておりますぞ。いくら将兄と言えど、少しは風紀を守っていただかねば」

「何、言ってるんだ、お前」

「将兄こそ、何をおっしゃっているのです？　お二人はどう見ても親密な間柄にしか見えませんでしたが？」

春軍将の言葉を聞いた瞬間、将兄が声を上げて笑いだした。

「なにか？」

爆笑する将兄に向って、春軍将は僅かながら不愉快な表情を向ける。

「いや、おもしろい勘違いだと思っただけだ。残念ながら、千鶴は俺の母親だ」

「は！？　母親！？」

思いがけない言葉に、自他共に「タヌキ」を認める秋軍将までもが目を丸くする。

「この世で最も恋人に成り得ない女、だな」

含み笑いながら、彼は途中で中断した書類整理を始めてしまう。しかし、二人の軍将は事実を脳がうまく受け入れきれず、目を白黒させたままだった。

「いや、しかし……とてもお母様には……。失礼ですが、代表はお幾つ……？」

「何歳だったかな。俺を産んだのが２０歳前後だと言っていたから、４０代の前半じゃないのか？」

４０代。二人は色恋沙汰とは無縁の中年とは言え、世間にはとて

も実年齢に
は見えない美女が存在することを知ってはいる。しかし、つい先ほどまでこの
部屋にいた美女が４０代と聞いてとても信じきれずにいる。正直、２０代の後
半か、よくても３０代の前半だと思っていた。

「若い……というより、美しいお母様ですな……」

珍しく本心で、秋軍将は語る。

「本人に言ってやれ。きっと喜ぶ」

「はあ」

しかしながら、目の前に座る美貌の青年と千鶴は似ていない。だとしたら彼
は父親の方の血を濃く受け継いでいることになるだろう。

「将兄を見ておりましたら、ある程度は想像が付きますが、本当に美形・家族
なのですね」

「そう言われるとマヌケに聞こえるな」

内心の動揺をうまく隠した秋軍将がいつも通りの笑顔を張りつかせたまま問いかければ、将兄は僅かながら微妙な顔をする。

「個人的な興味なのですが、将兄はご兄弟がいらっしゃいますか？」

「妹と弟がいる」

秋軍将の思惑とは裏腹に、意外にもあっさりと答えは返ってきた。

「代表に似てらっしゃいますか？　それともお父様に？」

「二人とも千鶴に瓜二つ」

「さようですか。ご家族が並んでいらっしゃるところは、さぞ見応えがありましょうな」

それ以前に、実の母親を呼び捨てにする、という感覚が秋軍将には理解しがたいものがあった。しかしながら、どこか普通と違う彼が育った家庭のこと。

こういった違いがあって当然だという気がしてしまうから不思議だ。

「更に夏葉さんが加われば無敵ですな」

茶化すような口調で春軍将が言えば、将兄が再び微妙な顔をする。

「それで、何の話でしたかな？　そうそう、春軍の編成についてです。樹海の

Ｘ４エリアと言えば梢の高い木立が生い茂っておりますから、春軍を編成して

捜索するには向かないのでは、と」

頭を切り替えた春軍将が、途端に真面目な顔でそう切り出した。

「そうだったな」

「あの辺りは磁石が利きません。ギルドで把握していないモンスターが徘徊する

地に、悪戯に踏み込んでは、春軍の方が遭難してしまいます」

「言われなくても分かっているさ」

将兄は軽く溜め息を零して、二人の軍将を見上げた。

「生徒たちが目印に焚き火をしてくれることを願って、上空から秋軍で捜索する。

霧が晴れたら、早急に動け。春軍は待機。状況によって出動させる」

「了解いたしました」

二人の軍将は軽く一礼し、執務室を出て行った。その背を見送りながら、将兄

は秀麗な口元に自嘲気味な笑みを浮かべる。

「俺に息子がいると知ったら、あいつらはどんな顔をするんだろうな」

遡逅２９（後書き）

……身内（主に男性）にこんな質問をしてみました。

「この話の中でさあ～、いちばん抱きたい女はダレ？」

返って来た答えは、ダントツで夏葉（笑）

次に光宮でした。

「胸が無いけど平気なん？」

と聞き返すと、

「ＭＸＸが良けりゃあ問題ない」

とのこと（笑）

まあ、タイプの問題っすね。

個人的には巨乳の方が……いや、なんでもないっす！

邂逅３０

降りしきる雨は途切れることなく樹海を覆う木の葉を濡らし続けていた。

「とりあえず着替えさせて薬を飲ませてはみたけど、熱は下がらないわね」

枝を伝って中也の傍にやってきた光宮が、溜め息交じりにそう呟く。

「まったく、姉さんは頭の先から足の先まで、本当にお姫様なんだから」

「こっちは気が張ってて倒れるどころじゃねえっつーのに」

光宮の嘆きに、僅かながら苛立ちを含んだレイの声が重なった。

「仕方ねえよ。女の子だし、普通はそんなモンなんじゃねの？」

苦笑交じりに言った途端、光宮とレイ、そしてルナが怒りの形相で中也を

振り返った。

「なによ、それ。どういう意味？　私が普通じゃないとでも言いたいわけ？」

思わず後退りしそうになる中也に、光宮が詰め寄る。

「い、いや……そういう意味じゃ……」

言葉に詰まった中也に、更にレイが追い打ちをかける。

「じゃあ、どういう意味なんだよ。女だからって黙って男の機嫌を取ってりゃ

あいいってのかよ？　自分が生きて帰れるかも分からねえってのに、よくそん

な呑気なこと言ってられるな、お前」

「止しなよ、レイ。男はお姫さんみたいな、かよわい女の子が好きなんだから」

やれやれ、とでも言いたそうなルナの声が更に重なり、中也は更に寄る辺を

失った。

「いや、ゴメン。気に障ったなら、謝るよ」

中也は何が悪かったのかも分からないまま、力無くそう呟いた。

「いいのよ、別に。どうせ、姉さんは特別なんだから」

「はあ？」

それこそ勘違いだ、と言おうとした時、ふいに足元が騒がしくな

った。

「アプトノスの群れだ！」

中也は思わず一番下の枝まで移動し、身を乗り出すようにして、やってきたア

プトノスを見つめる。一同の視線が下方に集中した。樹木の間を縫うようにして

やってくる群れは全部で８頭。すべて成体だ。時折、低い鳴き声を上げ、お互い

の位置を確認しながら、悠然とした動作で土を踏みならしていく。目測だが、１

頭あたりの体重は１トン近いだろう。それが全部で８頭。森は、重量級の生き物

が移動する音に唸り声を上げている。

中也のすぐ足元を、縞模様の入った巨体が通り過ぎていくのが見える。筋肉が

動くにつれて、表面の皮が縮んだり、伸びたりする様子までもが見て取れる。草

食のモンスターだからだろう。レウスと対峙した時に嗅いだような胸が悪くなる

ような体臭はないが、それでもやはり野生の生き物に独特の体臭がある。時折、

鼻の先から勢いよく呼気を吐き出す音が聞こえてきた。

「これが、アプトノス」

中也は感激していた。大好きな恐竜、とはいかないまでも、それに似た類の生き

物に遭遇できた喜びは、とても言葉には表しきれない。もちろん、レウスは別問題

だ。彼は我慢できず、枝の上から手を伸ばしてアプトノスの傷だらけの背に触れて

みる。温かい。手の平には、しっかりと体温が伝わってきた。アプトノスは中也に

背中を触られたことなど、気づいてもいないようだった。

「なんか、スゲー嬉しそうだ～ぞ、中也」

シヴァが呆れたような顔をしている。しかし、緩み切ってしまった頬の筋肉はし

ばらくとても元通りになりそうになかった。

「不思議な人ね。アプトノスがそんなに好きなの？」

「モンスターは全般的に好きだな。でも、もし触る機会があったら大人しいアプト
ノスが一番いいって思っていたんだ」
「ふ～ん」
光宮は全く分からない、という顔をしていた。
「じゃあ今度、ウワサの将兄の銀レウスに触らせてもらったら？“頻繁に変わる”
世話係に火球を吐いたり、“修理代”に金府が嘆くほど突進を繰り返して小屋を壊
す程度には大人しくて可愛いらしいわよ」
「……」

邂逅３１

そう言えば、無事に帰れたら銀レウスに乗せてもらいたいという話を夏葉にした

ことを思い出し、中也は背筋に冷たいものが流れた。大丈夫なのか、と思った時、

樹海の奥地から数頭のランポスが颯の勢いで駈け出して来た。アプトノスだけでは

ない。傍目から見守っていた中也の目にも、何が起きたのか分からないほど、ラン

ポスの速さは尋常でなかった。アプトノスたちに警戒するヒマさえ与えず、目にも

止まらぬスピードでやってきたランポスたちは、一斉に地を蹴って自分の背丈の倍

近くを飛びあがる。最後尾を歩いていたアプトノスの腹に、その鋭い爪が一閃した。

襲いかかられたアプトノスが悲鳴を上げ、頭を振り回す。肉が裂け、真っ赤な血液

が地面を汚した。ランポスの襲撃に気付いたアプトノスたちが、一斉に森の奥へと

駆け出していく。ランポスに襲いかかられた一頭だけが、その場に残された。

「別のランポスの群れだわ」

中也の隣にやってきた光宮が、目の前で繰り広げられる死闘を冷静な目で見つめながら、そう呟く。

「全部で6頭か。ランポスの群れにしては少ない方じゃないか？」

「そうね」

一頭のランポスが背に飛び乗れば、別のランポスがアプトノスの喉元に食らいつく。それを振り払おうと、アプトノスは後ろ脚で立ち上がって威嚇するが、執拗なランポスたちは決して引き下がろうとはしなかった。しきりにジャンプを繰り返してアプトノスの皮膚を裂いていく。雨に濡れた地面に止めどなく流れる血が水たまりを作った。アプトノスが自らの血に足を滑らせ、盛大な音とともに地面に転がった。これ幸いとランポスたちはアプトノスに群がるが、低く唸り声

を上げたアプト
ノスは再び四肢に力を込めて立ち上がる。アプトノスは体が大きい。人間であれば、
すぐに腹が裂けて内臓が零れ出てしまうようなランポスの蹴爪も、肉の厚いアプト
ノスが相手ではなかなか致命傷に至らないのだ。
「私が見た群れよりも、苦戦しているようね」
アプトノスが苦しげな悲鳴を上げながら、尻尾を振り回し、ランポスを振り切ろ
うと四肢を踏みならす。しかし、一頭を追い払っても、また別の一頭が襲いかかっ
てくる。ついに、一頭のランポスがアプトノスの背に乗ったまま、その背中の肉を
喰い千切り始めた。アプトノスが絶叫する。他のランポスたちも、それを真似て手
当たり次第に肉を喰い破り始めた。低く、長く、アプトノスの悲鳴が響き渡る。中
也が思わず視線を逸らした時、突然アプトノスの悲鳴がピタリと止んだ。続いて、

巨大なものが地面に倒れ伏す轟音が鼓膜を刺激した。その音を聞いた時、中也はやっとアプトノスが絶命できたことに対し、安堵の気持ちを覚えていた。

「見ていられなかった」

すぐ近くでそんな言葉が呟かれ、中也ははっとして視線を上げる。すぐ傍に、矢を構えたルナが立っていた。

「あんたが殺したのか？」

「悪い？」

彼女の銀色の瞳は揺るぎない。何でもないように、ルナは弓を背中に戻した。再びアプトノスとランポスを見る。注意して見ると、アプトノスの頭部、それも右の目に一本の矢が突き刺さっていた。アプトノスは体の割に頭部が小さい。おそらく矢は眼球を突きぬけて脳に達したのだろう。一撃で絶命させるなら、実に効果的である。アプトノスが一瞬で動きを止めた理由はこれか、と思う反面、

この距離から、

あんな小さな部分をよくも正確に狙えたものだと感心させられる。

少しでも狙いが

外れれば、矢は堅い頭蓋骨に当たって致命傷には至らなかったはずだ。

「しかし、ひで～なあ。いくら野生だからって、もうちょっと何かあるんじゃないのかよ。山で見た獣はこんなにひどくはなかったぞ」

いつの間にか枝を伝って中也の傍まで降りて来ていたレイが、眼下で繰り広げられる饗宴に苦い顔を向ける。

「そうだね。ランポス６頭でアプトノスの大人を倒そうとするなんてムチャだよ」

「どういう意味だ？」

不思議に思って聞き返せば、二人が何とも言えない顔を向ける。

「普通、野生の獣は自分よりも強い相手は襲わないものなんだよ。ランポス６頭よりも、アプトノス１頭の方が重いだろ？　首に噛みついても窒息死させられないし、

腹を抉っても内蔵まで届かない。言い返れば、その辺のオヤジが将兄に戦いを申し

出るみたいなものさ。その証拠に、あいつらはアプトノスを倒しきれずに、トドメ

を刺さないまま肉を食い始めただろ？」

「普通、そういうことって有り得ないのよ。仮にそういうことが起こるとすれば、

よほど食糧に困っているってことね」

そう言われてみれば、故国、日本でテレビを通じて目にしていたサバンナでは、

ライオンやチーターはキリンやバッファローなどの大型の草食動物を滅多に襲うこ

とがなかった。彼らが主に襲うのは、自分よりも体重が軽いガゼルやシマウマなど

だ。

「ちょっと待って」

中也が一沫の不安を胸に抱いた時、三人の会話に光宮が入ってきた。

「そう言えば、二人には言ってなかったけど、私が見たランポスの群れはアプトノスの成体を簡単に倒していたわよ？　それも、６頭かそこらで」

「そんなバカな」

彼女の指摘に、レイとルナが顔を見合わせる。

「そもそも、ランポスとかギアノスって、群れで狩りをする珍しいモンスターでしょ？　自分たちの何倍もある大きな獲物を、チームプレイで倒すのが普通じゃないの？」

「だったら、ランポスの数がもっと多くないといけないよ。たったの６頭じゃあ今、見た通りだよ。一斉に飛びかかっても振り払われるのがオチ。ランポスを何頭か背中に乗せたままでもアプトノスは動けるから、逃げられる確率の方が高いよ」

「おかしな話ね。じゃあ、この前のランポスの群れは何だったの？　見た感じだ

と狩りの方法に違いはないわ」

「アプトノスの大人はランポスが簡単に倒せる相手じゃないだろ。普通に考えれ
ば有り得ねえよ。最初から病気か何かにかかってて、弱ってたんじゃねえの？」

「そう、なのかしら……」

「そうよ。もし、そうじゃないなら、同じランポスっていう種類のモンスターな
のに、それぞれで力の差があるなんてふざけたことになるよ」

「まさか。それはないだろ」

中也がそう言った時、大気を震わす雄叫びが森を揺らした。思わず身を竦めた
のは、人間ばかりではなかった。さすがのランポスたちも、反射的にアプトノス
の肉から血に染まった鼻づらを上げる。最早、聞きなれてしまった、この唸り声。
姿を見なくても分かる。レウスだ。

「マズイな、こんな時に」

ランポスだけならば、彼らが腹をいっぱいにして立ち去るまで黙って待っていれば、やり過ごせる。しかし、レウスがやってきたとなれば話が違ってくる。目的がアプトノスの肉ならば、ランポスたちが黙って獲物を譲れば事は済むかもしれない。中也は祈るような気持ちで、木立の狭間から姿を現したレウスとランポスの群れを見比べた。

「どうする～んだ？　今のうちに逃げるの～か？」

「いや、じっとしていた方がいい。静かにしてよう。シヴァ、お姫さんに付いてやってくれ。間違っても悲鳴なんてあげないように」

「りょうか～い」

シヴァが枝を伝って朱宮の傍へ行く。息を潜めて成り行きを見守る一同の前に、レウスがのっそりと巨体を現した。頭を低く下げ、ランポスたちに向って威嚇する

ような声を上げる。突然の招かれざる客に、ランポスたちは逡巡する様子を見せた。

獲物を前に立ち去るか、それともレウスを追い払って再び饗宴を再開させるか。どう考えてもレウスと戦うという選択肢はないはずだ、という中也の思惑とは裏腹に、

ランポスたちはなかなかその場を離れようとはしない。まるで指示を請うように、

彼らは一頭のランポスに視線を集中させた。

「あれがリーダーか」

声には出さず、中也は頭の中で呟く。そう思って見れば、確かにその一頭は他のランポスに比べて体が少しばかり大きい。

レウスが一歩を踏み出し、再び威嚇の咆哮を上げる。ランポスの群れが、僅かに後退した。群れの一頭が悔しげに短く鳴く。鳥のような鳴き声には、聞き覚えがあった。ランポスたちが立ち去るか、と思った矢先、だしぬけにリーダーが地を蹴っ

た。他のランポスたちも、それに続く。

「冗談だろ？」

思わず声に出して呟いた時、風のような速さで地面を駆け抜けたリーダーが、あっという間にレウスとの距離を縮め、咄嗟のことに反応できずにいるレウスの鼻づらに蹴爪を振り上げた。その間に、他のランポスたちがレウスの背や腹に飛びかかる。雨の中に、小さく血吹雪が舞った。

「マズイ！　レウスが攻撃したら巻き込まれる！　逃げよう！」

「言われなくても分かってるわよ！」

中也に答えるように、光宮が叫ぶような声を上げた。

「誰か、一人でいいから手伝ってくれ～！」

必死な懇願が、シヴァの口から漏れる。

「あたしが担いでやる！　どけ！」

レイが枝を伝ってシヴァと朱宮の傍へ登って行く。

「こんな時に呑気に寝るな！　起きろよ、お姫さん！」

「叩き起こしなよ、レイ！」

「穏便に行こ～ぜ～」

それぞれが好き勝手に声を上げる中、苛立たしげなレウスの咆哮が鼓膜を震わ

せた。

「木を降りても離れるなよ！！」

念を押すように言いながら、シヴァとレイを手伝おうと動いた時、体表を傷つ

けられたレウスが怒りの咆哮を上げる。思わず耳を抑えてレウスの方を見た彼ら

の視線の先、レウスが狂ったように尻尾を振り回し始めた。

「掴まれ！！」

中也が叫んだのとほぼ同時に、レウスが我武者羅に振り回した尻尾が、彼らが

潜んでいた大木の幹に直撃する。激しい衝撃が全身を襲った。幹や枝に捕まって

何とか耐えたと思ったのも束の間、続いて幹が折れる耳障りな音が聞こえてくる。

「落ちるぞ！　こっちだ！」

中也は雨宿りのためにかき集めていた枝を引き寄せる。こんなものでも、ないよりはマシ。クッション代わりにはなる。一同が集まる間もなく、大木は不自然な位置から真っ二つに折れ、重力に引かれ始めた。体が斜めになる。何とか枝に縋りつこうとする人間たちの努力をあざ笑うかのように、木は一気に地面を目指して落下して行った。

「きゃあああああ！！！」

耳に届く悲鳴は朱宮の声だった。目を覚ましたのか、と妙に冷静な脳が判断する。その間、中也の視界は迫ってくる地面に埋め尽くされていた。

邂逅32

一瞬だけ飛んだ意識が再び覚醒した時、目の前には雨に濡れた地面と泥に汚れた木の葉が散らばっていた。思わず息をつけば、レウスの咆哮と同時にすぐ近くで地面が爆発する。水が蒸発し、土が抉れる様子を見て、中也は無意識に唇を噛みしめた。

「くそ……！」

誰にともなく毒づき、急いで身を起こした。

「大丈夫か！？」

中也のすぐ傍にはルナと夏葉がいた。二人を抱え起こすと、周囲に視線を巡らせる。熱を出して意識が無かった朱宮のために、枝を集めてベッドのようにしていたことが幸いしたのか、シヴァとレイ、そして朱宮本人にも目立った怪我は見えない。小さく呻くような声がして、自分の頭を押さえながら光宮

が起きあがる。
あとは、エマニエルだけだ。
「エマニエル！！」
少し離れた地面に突っ伏すようにして、エマニエルが倒れていた。
駆け寄って
抱き起こし、頬を軽く叩くと、彼はすぐに目を覚ました。
「うわあああああ！！」
「落ち着け、バカ！！」
目を覚ますと同時に絶叫を上げ、暴れ始める彼の頬を思いきり引っ叩いて黙らせると、エマニエルが傷ついた表情で見上げてきた。
「な、殴ったな！　父さんにも殴られたことなのに！」
どこかで聞いたことがあるセリフだったが、この際、気にしないでおく。
「移動するぞ！　走れるか！？」
中也はエマニエルの脇の下に腕を突っ込んで立ち上がらせる。少し離れた場所

で、レイが朱宮を背中に抱えるところだった。レウスとランポスたちの方を見る

と、アプトノスの肉を巡る争いに夢中になっているらしく、中也たちには全く注

意を向けていない。

「急ご～ぜ！」

シヴァに促され、中也は踵を返した。視界の端で、レウスが吐き出した火球に

直撃したランポスが、短い悲鳴とともに一瞬で炭に変わる。固まって森の中を移

動しながら、生き物を一瞬で炭化させる温度を思い浮かべ、中也は背筋が寒くな

った。

「レイ、大丈夫か！？」

自分一人だけで走っている中也たちとは違い、背中に朱宮を背負っているレイ

のことを案じて問いかければ、彼女は何でもない顔のまま笑って見せる。

「大丈夫。気にするなって」

「すげ〜な〜、あんた」

シヴァに言われ、彼女は再び笑顔を返した。雨は降り続いている。走っている

彼らの顔にも、否応なく滴が降り注ぎ、視界を遮る。ただでさえ暗い森。曇り空

と雨、そして霧が重なって、すぐ傍にモンスターがいても分からないほど見通し

が利かない。中也は背後を振り返る。静寂の森が、佇んでいた。レウスとランポ

スが戦っている場所から、ある程度の距離が取れたことを確認し、声を上げた。

「あそこにはアプトノスの死体があるから、そこまで一気に離れなくても大丈夫

だ！　止まるぞ！」

「いやだ！！　早く逃げるんだ！！　あいつが来る！！」

「落ち着け、バカ！！」

恐怖を顔に張り付かせたエマニエルが、中也の言葉を無視して当てもなく駆け

出して行きそうになる。彼を実力行使で制止させたのは、ルナだった。

「見苦しいよ、僕ちゃん」

彼女が差し出した足に躓いて、エマニエルは盛大に地面に転がった。頭の先から

ら足の先まで泥まみれになった彼は、ようやく静かになった。

「こんな視界が悪い中を、我武者羅に走っても体力を消耗するだけだ。いったん

休むぞ」

「賛成だわ」

光宮が、膝に両手をついて荒い息を整えていた。中也はもう一度、周囲に視線

を走らせ、モンスターの気配がないこと改めて確認した。

遡迂３２（後書き）

どうでもいい話ですが、先日、弟と大ゲンカしました。

マジです。お互いマジです。

もう殴り合い寸前でした（笑）

ひさっびさにキレました。

何と言いますか……文系の人間を見下した口調に加えて、お前に説明してもどうせ分かんねえよ的と言うか。これみよがしに専門用語を連発すると言いますか、更にむちゃくちゃ早口で話すと言いますか。

あんまりにも腹が立ったので、エロ小説を突き付けてやりました。

超！アブノーマルで１８歳未満の人は完全に立入禁止！的なものを。

もちろん、作者はハンマーヘッドです（笑）

弟は２０歳を超えていますので、法律的には問題ないハズ……。

邂逅33

「怪我したヤツはいるか？」

安全が確保できたのなら、次は態勢を整えなければならない。今のところ目立っ

た怪我をしている人間は見当たらないが、それでも先日のシヴァの件がある。モン

スターに付けられた傷ではないとはいえ、こんな場所では傷ひとつも油断できない。

「枝から落ちた時にスリ傷ができたくらいだよ。心配ない」

偶然、中也と目が合ったルナが苦笑交じりに答えた。しかし、そんな彼女に歩み

寄った光宮は真剣な顔をしている。

「小さな傷でも消毒した方がいいわ。夏葉、手伝ってくれる？」

「うん」

大袈裟な、とでも言いたそうなルナだったが、光宮の剣幕に押されたのか文句は

言わなかった。ふと、中也は光宮の傍でカバンから薬品を取り出している夏葉の唇

の端に、うっすらと血が滲んでいるのを見つけた。

「夏葉、口のトコ、切ったのか？」

自分の口元を指しながら問いかけると、夏葉は反射的に唇に手をあてた。

「気が付かなかった。いつ切ったのかな」

「枝から落ちた時でしょ？　あんたもちゃんと消毒しなさいよ」

「うん」

光宮に念を押されながら、夏葉は唇に滲んだ血をペロリと舐める。何気ない仕草

だったのに、中也は高なった鼓動に自分で驚いた。

「エマニエル、怪我は？」

気を取り直して、地面に座り込んだままのエマニエルに歩み寄る。

「怪我してないはずないだろう！？　あんな高いところから落ちたんだぞ！？　体

中が痛い！！　せっかくの制服もメチャクチャだ！！」

「喚くなって。打ち身だけなら放っておいても心配ない。切り傷は？」

打ち身と言っても内蔵にダメージがあれば話は別だが、元気に喚けるところを見

ると心配する必要は無さそうだ。中也は溜め息をつきながら、あちこちを点検し始

めるエマニエルを見守った。

「姉さん、具合はどう？」

光宮はレイに背負われたままの朱宮に話しかけるが、再び意識を失ったらしく反

応が返って来ない。

「いい身分だよな、お姫さんは」

「ホントね。まあ、姉さんだから仕方ないわよ。それより、レイ。あんたこそ傷の

手当をしなきゃ。雨がかからないところに姉さんを下ろして」

「恩に着るよ」

レイは大木の根元に朱宮を下ろす。その横に膝をついた光宮が、何日か前に負っ

た怪我と新たにできたすり傷の手当を始めた。

「シヴァ、お前は？」

「打ち身だけだ～ぞ」

「そっか」

とりあえず、全員が無事だ。怪我と呼べる怪我を負った者もいない。安堵の息をつき、中也は一向に降り止まない空を見上げた。

「秋軍、まだ来ないな」

この樹海に投げ出されてから四日目。感覚的には一か月近い時間が経過したような気さえしてしまう。これだけ神経をすり減らしたのは、生まれて初めてだった。

「これってホントにサバイバルだな」

「そうだ～な。とりあえず温かいメシと風呂。それから布団が欲し～ぜ」

「何でもない時には当たり前にあるモンが恋しいなんてな」

「そんなモンだ～ろ」

シヴァが朱宮の近くに腰を下ろしたので、中也もそれに倣った。睡眠不足に加えて、

まともな食事もしていないので、疲れが溜まっている。しかし、気持ちが張り詰めて
いるせいか眠気はなかった。おそらく、眠くなった時が体力の限界だろう。

「ねえ、中也。これからどうする？」

光宮と夏葉が二人の前にやってきて、そのまま地面に腰を下ろした。

「アルテリアの方角に向かうしかないよ。予定通り、南に」

「先が見えないわね」

「いっそのこと、ヘタに動かない方がいいんじゃないか？」

頭上からレイの声が降ってきたかと思うと、彼女は中也の隣に勢いよく座り込む。

その隣に、ルナが続いた。

「葉っぱを燃やして、秋軍に気付いてもらえるようにしておいたら、下手に動きまわ
る必要はないと思うぜ？」

「モンスターが来ないなら、それもアリかもね。そうしない？」

「……うん、そうしようか」

少し考え、中也は頷いた。確かに、焚き火をしておけば本能的に火を怖がるモンスターを避けることもできるかもしれない。ただし、レウスは別だが。

「とりあえず、雨が上がらないことには火が付けられねぇよ。もうひと頑張りして枝の上に避難しよ～か？」

「いや、大丈夫だ。さっきも言ったけど、近くにアプトノスの死体があるから、ランポスは真っ先にそっちに行くだろ。むしろレウスなんかのでっかいヤツが来た時、すぐに逃げられない方がキツイ」

枝の上から落下する危険は、できれば避けて通りたい。

「それに、下だったら焚き火もできる」

「火の光にモンスターが寄って来るんじゃない？」

「来るとしたら夜になるよ。昼間は平気だ」

納得したらしい光宮が黙りこむ。今のところ、彼らにできることは一刻も早くこの

冷たい雨が止むのを待つことだけだった。

遅遅３３（後書き）

１２月ですねぇ。

寒くなりましたねぇ。

痔になりました。

……ケツにすげえ違和感が（汗）

むふふ。

次回（おそらく４時間から５時間後）に、ハンマーヘッドのドド変態が炸裂します。

邂逅３４

期待とは裏腹に、降り注ぐ雨は一向に止む気配を見せずにいた。見上げた空は気分

まで暗くなるような暗雲に満ち、時折、吹き荒ぶ風は冷えた身体からじわじわと体力

を削っていく。自然、表情が暗くなって黙り込んでいる時間が長くなる彼らの中、一

人だけ元気に喚き続けている人物がいた。

「だいたい、おかしな話なんだ！　どうして鬼龍が軍学校の入学式を襲う必要がある

んだ！　そんなことをして何になる!?　どうして僕が巻き込まれなければならない

んだ！　僕はいつだって真面目に生きてきたんだ！　鬼龍に襲われる理由がない！

父上も母上も、僕の家族はみな、清廉潔白！　絵に描いたような理想の家族だ！　い

や、しかし！」

同じ場所をぐるぐる回りながら、エマニエルは一時間あまりずっとこの調子で答え

る人もないまま一人で喋り続けている。

「ねえ、誰か止めないの？」

見かねた光宮が小さな声で言う。中也は首を振って答えた。

「静かすぎるよりマシだろ。内容はともかく喋らせておけば気が紛れるよ」

「そういう使い方もあるのねえ。でも、いい加減ウザいわ」

苦笑交じりに言った彼女は、何を思ったのか、いきなり隣に座るレイに手を伸ばした。

「うわ！　びっくりした～！　何だよ、いきなり！！」

光宮の手が捉えたのは、レイの豊かな胸の膨らみ。男にとっては見てはならないその場所に視線が釘付けになり、中也だけでなくシヴァも思わず腰を浮かせてしまう。

「前から思ってたけど、あんたとルナってオッパイ大きいなあ～って」

何でもない顔をしながら、彼女は遠慮なくレイの胸を揉み始める。レイもレイで、

いきなり他人に胸を触られたというのに、全く慌てる様子がない。
それどころか、今
度はレイが光宮の胸に手を伸ばす。
「なんだ。光だって捨てたモンじゃねえじゃん」
いきなりの展開に思考が付いて行かず、中也とシヴァは開いた口が塞がらないまま
目の前で繰り広げられる光景を見つめていた。
「サイズは？　Dカップくらいありそう」
「正解！　でもルナはEカップなんだぜ？」
「ホントに～？」
光宮はレイの胸元から手を放し、ルナの方ににじり寄って、その制服を引っ張り、
遠慮なく上から中を覗き込む。
「すっご～い！　谷間がくっきり！　羨ましい～！」
「あっても邪魔なだけだよ」
胸元を覗かれたまま、ルナが苦笑交じりに呟いた。谷間がくっきりした胸元、とい

うものを嫌でも想像してしまい、二人は下半身が熱くなるのを自覚した。思わず顔を

見合わせ、気まずい雰囲気のまま視線を逸らす。

「オッパイが大きい人って、みんなそう言うのよねえ。貧乳の気持ち、少しは分かってもらいたいわ～」

ルナの後ろに回り込んだ光宮は、背後から手を伸ばしてルナのEカップを揉み始めた。

「気持ちいい～！！」

「ちょっと、くすぐったいよ！　ぬれる、ぬれる！！」

更に光宮の後からレイが彼女の胸に手を伸ばし、彼女たちはお互いの胸を揉みながら

笑い崩れる。先ほどまでのどんよりとした空気が一変し、男にとって禁断の秘密の花園

に変貌した光景に、両脚の間に棒を持つ人種は何とも言えない気分で顔を見合わせる。

「すんげ～光景だなあ～、中也」

「うん……」

完全に輪から外れている二人は、見てはならないと思いつつも、どうしても視線を向けてしまうというジレンマと、否応なく熱くなっていく下半身との戦いを余儀なくされていた。エマニエルの呪詛が途切れる。さすがの彼も、美少女たちが乳繰り合う様子を食い入るように見つめていた。

「レイとルナってば、オッパイ大きいし、腰は細いし、脚は長いし、女の理想よねえ！」

「そんなことないって！」

否定したレイの手が光宮の制服を捲り上げ、素肌を直接、触り始める。

「貧乳ってほどでもないじゃん。むしろ形で勝負する派？」

「おっきいオッパイには勝てないわよ」

そしてレイの視線がふいに移動し、夏葉の上でピタリと止まる。彼女の意図に気付いたルナがニヤリと笑った。

「新たな展開だ～な」

何とも言えない気分の中也とシヴァの目の前で、レイとルナが立ち上がり、唖然とした表情で彼女たちを見つめていた夏葉を前後から挟み込む。

「な～っちゃん！！」

「！？」

背後からレイに抱きしめられて、夏葉は顔色を変える。

「気になってたんだよなあ。胡蝶を見るのって初めてだし」

レイが夏葉の腕を背後で一纏めに拘束すると、ルナが制服の上着のボタンを外し始めた。スラックスの中から下のシャツを引っ張りだし、その裾から手を入れる。

「なにし……！」

「ふ～ん。やっぱりオッパイは無いんだ～」

「当たり前だろ！」

意図的な手つきでルナに胸元を触られ、途端に夏葉が顔を赤くする。

「純情～！　かわい～！　赤くなってる～！」

「それとも感じやすいとか～？」

背後から拘束するレイが手を伸ばし、スラックスの上から指先で内股を撫でる。意

図的に相手の欲情を引き出そうとする指先に、夏葉が息を詰めて体を硬直させた。

「下はどうなってんの？」

「あんたたちに開いてる穴と変わりないわよ」

夏葉の代わりに答えたのは光宮だった。レイの手は夏葉の内股に添えられたまま。

その指先が探るように肌の上を行き来する。そうしている間にもルナに胸元をまさぐ

られ、夏葉が声にならない吐息を洩らす。

「マジ？　へえ～、楽しい～」

意地悪に笑ったレイが夏葉の首筋に唇を寄せる。中也とシヴァに見せつけるように、

その白い首筋をペロリと舐めた。

「やだ……やめてくれ！」

「や～だよ。ねえ、初めての男はやっぱり将兄なの？」

ルナの指先が確信を持って胸元の一か所を引っ掻いた瞬間、導かれるように夏葉の

体が不自然に震えた。

「なっちゃ～ん？　どうなのかな～？　正直に答えないともっとやるぜ～？」

レイが耳朶に唇を寄せ、息を吹き込むように囁く。刺激に耐えるように硬く閉じら

れた夏葉の瞳がうっすらと開かれた。

「そう、だよ。だから、なに……」

言葉は最後まで音にされることなく、消え去った。噛みしめられ、色づいたように

見える唇から、押し殺した吐息が漏れる。

「ふ～ん。いつもそういう風に将兄を楽しませているわけねえ」

ひたすら傍観に徹していた光宮が、至って冷静な口調でそう呟く。

「見てないで、助けろ……よ、光！」

綺麗な深紅の瞳に涙を滲ませながら、縋るように光宮を見た夏葉に、彼女は飛びき

りの笑顔を向けた。

「楽しそうだから、邪魔しちゃ悪いかなって」

「そんなことな……！」

否定しようとした夏葉の言葉が再び途切れる。その様子に、さすがに口を挟んだのはシヴァだった。

「ホントにそろそろ止めようぜ～、お姉さんたち。見ていたいのはヤマヤマだけど、こっちがヤバくなりそ～だ」

自分の下半身を指しながら言った彼に、二人は笑顔を向ける。

「男は大変だね。でも、そろそろやめとくよ」

二人があっさりと手を引いた途端、夏葉が転がるように逃げ出した。

「あら、もう終わり？」

残念そうな光宮を見て、中也は頭を抱える。これ以上されたら、本当にこちらの理性が持ちそうにない。疲れが溜まっているとはいえ、彼らはまだま

だヤリたい盛りの
15歳なのだ。

「まあね。これ以上やって、なっちゃんがその気になっても責任持ってやれねえし」

そう言ったレイが、素早く動いて再び夏葉を後から抱きしめた。
途端に怯える夏葉
を、彼女は豪快に笑い飛ばす。

「ジョーダンだよ、ジョーダン。仲良くしようぜ、なっちゃん」

背後から拘束したまま、レイは夏葉の頬に軽くキスする。

「お返しに触ってみる？」

キスされ、再び頬を紅潮させる夏葉の手を、ルナは自分の胸元に持って行った。

「うわ、すっごい……。柔らかい……」

触ってみるか、と言われて素直にルナの胸を触った夏葉の口から漏れた率直な感想
に、中也は更なる悶々とした気分を味わった。

「あんたら、ホントに俺らと同級なのか～な？　いいカラダしてるし、年上のお姉さ

んと一緒にいる気分だ～ぜ」

「同級だよ。ただし、経験は豊富だけど」

悪戯な笑みを浮かべたルナが、乱れた制服を直し始める。その際、胸の谷間が一瞬

だけ垣間見え、中也は思わず視線を逸らした。

「俺も数なら負けてないつもりだけど、二人にはリードさちまいそ～だ」

「心配するなって。あたしは年上のエロいお兄さんが好きだから、同級はパス！」

「ええ～！？」

残念そうに呟いたシヴァに、レイたちが笑い崩れる。和やか、とまではいかないま

でもさっきまでの重い空気はどこにもない。中也が、光宮が奇怪な行動をとった理由

にようやく思い立った時、ふいにどこからともなく異臭が漂って来て、彼らは一斉に

顔を顰めた。

遅延３４（後書き）

年齢制限ついてますので、こんなモンかな、と。

ちょっとスッキリ！

邂逅35

「なんか、臭くない？」

口元を手で覆ったルナが臭いの元を探すように周囲に視線を巡らせた。中也は

胸の奥で、静かに鳴り始めた警告の音を聞く。

「何で急に。誰か漏らしたんじゃねえの？」

冗談交じりに言ったレイだが、あながち冗談では済まされない。急に漂い始め

た異臭は、簡潔に言えば排泄物の臭いなのである。彼らが臭いの出所を探そうと

周囲に視線を巡らせるうちに、問題の異臭は次第に強くなっていく。

「なんか、臭い……」

眠っていた朱宮も、さすがに目を覚ました。随分と顔色は良くなったように見

えるものの、未だにどこか虚ろな目をした彼女の腕を取り、中也は一同を促した。

「イヤな予感がする。移動しよう」

異を唱える者は誰もいない。彼らは無言のまま、手早く荷物を手に立ち上がる。

先ほどまで笑顔が浮かんでいた表情に、緊張が走った。

「なるべく静かに」

押し殺した声で忠告すると、無言の頷きだけが返ってくる。中也は再度、不安

そうな表情を張りつかせる朱宮に向って静かにするよう念を押した。

どこに何が潜んでいるかも分からぬまま、彼らはじわりと移動を始めた。沈黙

が満ちる。さすがの朱宮も、無言のまま中也に腕を引かれていた。足音を立てな

いように細心の注意を払いながら、落ち葉が積み重なった柔らかな土を踏みしめ

る。どこからともなく獣の荒い息遣いが聞こえてきたのは、その時だった。

「きゃ…！」

中也は咄嗟に悲鳴を上げそうになる朱宮の口を、髪一発で塞いだ。無意識に力

いっぱい押さえつけたせいか、腕の中の朱宮がもがき始める。中也

が思わず顔を
顰めた時、レイが彼に加担して朱宮を力任せに黙らせた。臭いがしない方向を探
し、行ったり来たりを繰り返すが、どちらの方向へ行っても臭いがきつくなって
いく。自然、彼らの額に冷たい汗が浮かんだ。

「中也、どっちへ逃げる？」

押し殺した中にも焦りと不安が滲む光宮の声が鼓膜に届いたが、答えられる術
はない。臭いを嗅いだ瞬間に移動しなかったことを後悔しながらも、前に進む足
は止められず、彼らは当てもないまま早足に森を移動していた。

「コンガだよ」

弓に矢をつがえたルナの声がした方向に、彼らは一斉に振り返る。樹海の木々
の狭間に、桃色の毛並みが見え隠れしていた。一頭ではない。人間の大人ほどの
大きさの、ゴリラに似たモンスターが、数頭、荒い息を吐きながら中也たちに向

って地面を駆けている。思わずゾッとした時、緊迫したレイの声が聞こえてきた。

「こっちにもいるぞ！」

彼女の視線の先にも、数頭のコンガがいる。コンガたちは鼻息も荒く、時折、

唸るような声を上げながら一心不乱に彼らのいる方向を目指していた。

「こっちからも来た！！」

絶望に打ちひしがれる声はエマニエルのもの。思わず振り返った視線の先、周

囲を埋め尽くすコンガの群れの中で、異様なほどに巨大な体躯を誇る一頭のコン

ガの姿を捉えた。

「ババコンガの群れだわ！」

囲まれていた。逃げ場がない。真っ白になった脳裏に、ババコンガの雄叫びが

聞こえてきた。

「離れるな！！」

中也が無意識に叫んだのと、コンガの群れが彼らに向って一斉に駆け出してきたのが、ほぼ同時だった。

「どうにかして逃げるしかない！！　とにかく、バラバラになっちゃダメだ！！」

目の前で、数頭のコンガが腰を震わせながら放屁した。耳障りな音とともに、雨に濡れていく樹海に満ちた澄んだ空気に、黄色く濁ったガスが混ざる。途端に息もつけなくなるような悪臭が鼻腔から喉を焼き、彼らは思わず咳きこんだ。あまりの悪臭に、思考回路が麻痺する。冷静な判断力を奪っていく悪臭が、そこら中で空気を汚していた。

「こいつら、どうするんだ〜よ！？」

口元を押さえながら、シヴァは突進してきたコンガを飛びのくようにして交わした。

「ふりきるしかない！！」

放屁する音は止むこと無くあちらこちらから聞こえてくる。空気を侵食していく

悪臭に、中也は思わず眩暈を覚えた。足元がふらついた瞬間、一頭のコンガが彼に

向って突進してきた。はっとした時にはすでに遅く、中也は腹に思い切り体当たり

を食らって後方に突き飛ばされていた。息もつけないほどの衝撃に、地面に転がっ

たまま顔を歪める。顔の半分を泥水が汚したが、気にする余裕などない。

「中也！　大丈夫か！？」

耳に聞こえてきたのはシヴァの声だった。しかし、腹を抱えて蹲る中也は答える

ことができない。そこへ、別の一頭がやってくる。彼の頭に向って振り上げられた

爪を、力の入らない腹筋に鞭を打って身を捻り、何とか避ける。

「くそ…！」

コンガが再び突進する前に、中也は咳きこみながら立ち上がった。

しかし、今度
は背後から突進を食らい、再び地面に突っ伏した。
「この……臭いだけのサルのくせに！！」
集まってくるコンガに、光宮が毒づいた。突進してきた一頭を避けた際、彼女は
ぬかるんだ地面に足を取られ、泥水の中に盛大に転ぶ。一方、目の前にいるコンガ
に向って回し蹴りを当てた夏葉に、別の一頭が爪を振り上げた。咄嗟に顔を庇った
夏葉の腕が裂けて、その瞳と同じ色をした血が雨に混ざる。
「いやあ！！　来ないで！！　来ないでよ！！」
「離れるな～って、お姫さん！！」
朱宮はパニック状態に陥っていた。彼女はコンガたちに向かって無我夢中で細い
腕を振り回しながら、どこへともなく駆け出していく。そんな朱宮をシヴァが背中
から力任せに押しとどめる。そこへ、二頭のコンガが突進した。シヴァは朱宮を腕

に抱いたまま自分から泥水の中に転がり込む。何とか突き飛ばされずに済んだのも

束の間、転がった先に落ちていた小石に額を掠め、そこから溢れた血が顔の半分を

濡らした。

邂逅３６

「僕ちゃん！！」

コンガの放屁をまともに食らったエマニエルが失神する。慌てて駆け寄ったレイは、自分に向って突進してくるコンガの顔を力任せに蹴り飛ばした。泥水に桃色の毛皮を汚されたコンガが、怒りの咆哮を上げ、彼女に向って再び突進してくる。その左目に、飛んできた矢が一閃した。コンガが動きを止める。左の目に矢を刺したまま、コンガはふらつく足取りで二歩、三歩と歩き、やがて地面に倒れ伏した。

「サンキュー、ルナ！」

エマニエルを抱え起こしながら、レイは長年の親友に笑いかける。彼女と目が合ったルナも、強気の笑みを返してきた。細かく言わずとも、互いの心情は手に取るように分かる。結論は、ひとつしかない。

「逃げてばっかりじゃあ性に合わないよ！　レイ、やれるだけのことはするよ！」

「そうこなくっちゃあ！！」

拳を鳴らしたレイが、手近なコンガに走り寄り、その右腕に自らの右腕を絡める。

コンガに何が起きたのか理解する間も与えず、レイはそのまま身を沈め、前方に向

って反動をつけてコンガの体を投げ飛ばした。空中で一回転したコンガは背中から

地面に叩きつけられる。間髪入れず、レイは思いきり飛びあがり、高い位置から膝

をコンガの顔面に直撃させた。鈍い音がして、コンガの顔が不自然に陥没する。

「臭いサルに天罰くだしてやろうぜ！　お前ら、ビビってんじゃねえよ！！」

混乱に満たされていた中也の思考に、力強いレイの声が響き渡った。

「誰がビビってるって～！？」

真っ先に反応したのは、人一倍、負けん気が強いシヴァ。彼は朱宮を拘束したま

ま、手近な地面に落ちていた拳ほどの大きさの石を手に取り、少し離れた場所にい

た一頭のコンガの頭部に命中させる。ゴツン、と堅い物が砕ける音がした。その直

後、コンガは頭から血を流しながら地面に突っ伏した。その横を、光のように矢が

駆け抜ける。その先にいたコンガが大きく口を開けた瞬間、ルナが放った矢が喉元

に突き刺さる。苦しげな呻き声を上げ、コンガは自らの口元を爪で掻きむしり始め

た。自分の爪で自分を傷つけ、血まみれになりながら、コンガは仲間に体当たりし

ていることも構わず走り回る。そして、力尽きたように地面に沈んでいった。

「口が臭い男は嫌われる～ぜ！！」

言いながら、シヴァは突進してきたコンガの顎をタイミング良く蹴り上げる。仰

け反ったところへ、間髪入れずに体重をかけた体当たりを当てる。呻き声を上げて

仰向けに転がったコンガの頭に、彼は大きめの石を持ち上げて頭上高い位置から投

げつけた。耳障りな音が鼓膜に届き、泥水に血と潰れた脳ミソが混ざり込む。

「うえぇ～。きしょくわる～」

「きゃあああ！！　助けてえええ！！」

思わず顔を歪めたところに、背後からの悲鳴が重なる。慌てて振り向けば、朱宮

がコンガを前に腕を振り回していた。

「はいは～い！　ただいま～！！」

口調だけはいつもの調子で、シヴァは全速力で朱宮の傍に駆け寄り、地面に四足

を付いていたコンガの頭に組み合わせた両手の拳を叩きつける。短く呻いたコンガ

が泥の中に顔を突っ込む。すぐに起き上がろうとしたコンガの首を蹴り上げると、

鈍い音がしてコンガの首が不自然な方向に曲がった。

「いい加減にしなさいよ！！」

光宮は自分に向って突進してきたコンガを避ける。しかし、その直後に別の一頭が
圧し掛かって来て、彼女はコンガに押し倒されるように地面に背をつける羽目になった。

「光！」

夏葉が叫んだ。その瞬間、光宮は自分の頭の中で神経の糸が切れる音を聞いた。

「この、桃クソザルがあ！！」

コンガの臭い息を浴びながら、彼女は脚を引き寄せて思いきりコンガの下腹あたりを蹴飛ばす。途端、彼女に覆いかぶさっていたコンガが顔色を変えた。そのまま倒れ込みそうになるコンガの体の下から慌てて抜け出せば、目の前のコンガが自らの股間を押さえつつ、泡を吹いて気絶した。どうやら、オスだったらしい。

「コンガも人間も、男の弱点は同じなのね」

そう呟いた彼女の背後から、別のコンガが駆けてくる音がした。慌てて振り向いた

時、コンガと光宮の間に夏葉が立ち塞がる。突然、現れた夏葉にコンガが驚いて動き
を止める。その瞬間を見逃さず、夏葉は身を低く沈め、地面に片手を付いて両足でコ
ンガの顎を下から蹴り上げた。間髪入れずに、よろけたコンガの頭に回し蹴りを当て
る。怒りに顔を赤く染めたコンガの頭に再び回し蹴りを叩きつければ、盛大な音を立
ててコンガが横倒しになった。ふっと息を付いたところで、真横からコンガに体当た
りされ、夏葉は地面に突き飛ばされる。打ち付けられた背中が痛んだ。そこへ突進し
てくる別のコンガがいた。

「キリが無いわ！！」

夏葉に向かっていたコンガの頭に、大きめの石をぶつけて動きを止めた光宮が叫ん
だ。倒しても、倒しても、コンガの群れは一向に減ったように見えない。

「うわあああ！！」

意識が戻ったエマニエルがさっそく絶叫した。

「矢がもたない！！」

地面に横たわっているコンガの顔から血まみれの矢を引き抜き、再び弓につがえな

がら、ルナが近くにいた一頭に向けて矢を放つ。眼球に矢を受けたコンガが絶叫を上

げて顔を掻きむしった。その後ろで、レイが後ろ脚で立ち上がったコンガの右足を払

い、そのまま体重をかけて地面に押し付ける。その背に別のコンガの爪が一閃する。

短い悲鳴を上げ、レイは地面に膝を付いた。

「もういい！　みんな集まってくれ！！」

乱闘さながらの光景を見渡しながら、中也は大声をあげた。彼は素早く背中のカバ

ンから保存食を五個ほど取り出し、封を切っていく。途端、周囲にいた数頭のコンガ

が動きを止め、空気に混じる食べ物の臭いを嗅ぎ始めた。

「逃げるぞ！　こっちだ！！」

近くにいたエマニエルを強引に立ち上がらせる。気絶していたのが幸いしたのか、
彼は全くの無傷だった。
「早くしろ!!」
中也とエマニエルの傍に、光宮と夏葉が駆け寄ってくる。二人とも泥まみれで、夏
葉の腕からは血が滴っていた。四人に向って突進してきたコンガに、中也は石を投げ
つけて動きを止めた。そこへ、朱宮の腕を引きながらシヴァがやってくる。
「なんかいい方法でも思いついたのか〜な?」
顔の半分を血に染めながらも強気に笑うシヴァに、中也は軽く頷いて見せた。
「レイ! ルナ!!」
名を呼ばれ、コンガを背負い投げたレイが息を荒くしながらやって来る。その後ろ
にルナが続いた。

遐逅３６（後書き）

遅くなりましたが……二日ほど前、１９２名さま、ご来店でした！

ありがとうございます！

本日も、妖乱舞をお読みくださっている読者様、感謝の気持ちでいっぱいです。

もうちょっとなので……ぜひお付き合いください！

邂逅37

「とにかく全力で逃げるぞ!!」

中也は封を切った保存食を半分、何も言わずにシヴァに渡した。

彼が何か言う前に、

中也はそれをコンガの群れに向って放り投げる。意を察したシヴァがそれを真似た。数

頭のコンガと、成り行きを見守るようにしていたババコンガが、一斉にそれらに群がっていく。

「走れ!!」

中也の合図で、彼らは一斉に地面を蹴る。背後で、餌を巡り、群れがいがみ合うような気配が伝わってきた。

「何頭か追って来てるわ!!」

必死に走る中也の耳に、切迫した光宮の声が届いた。

「くそ!」

彼は走りながらカバンを漁り、保存食をひとつ取り出して封を切

る。なるべく速度
を落とさないように、振り向かず、走りながら地面に落した。チラリと背後を振り向けば、二頭のコンガが足を止めている。ほっとしたのも束の間、森の奥から突進する
ように駆けてくるババコンガの姿が目に入り、顔色を変える。

「きゃあ！！」

短い悲鳴を上げ、朱宮が転んだ。傍にいたシヴァが力任せに引き起こすが、彼女は
力無く地面に座り込んでしまう。

「姉さん！！　止まらないで！！」

朱宮とシヴァの傍に駆け戻った光宮が、その腕を掴んで引きずるように走り出せば、
さすがに、朱宮が立ち上がって走り始める。

「しっかりしろ！！」

中也はスピードを緩め、彼らの隣に並ぶ。全速力で走っているので、息が切れてど
うしようもない。森を進めば進むほど、周囲には大きな石が目につ

くようになった。

石を避け、あるいは飛び越えて走っているので、早鐘のように鳴る心臓は、いつ爆発

してもおかしくないほど脈打っている。どこからともなく聞こえてくるのは、滝が落

ちるような音。石が目立つようになったのも、おそらく水辺が近いせいだ。だとした

ら、別の肉食モンスターがいる可能性がある。

「もういやあ！！」

考え事をしていた中也の手から、いきなり朱宮がカバンをひったくった。

「おい！！　お姫さん！！！」

「えーい！！」

何をするつもりかと聞く間もなく、足を止めた彼女が中也のカバンごと保存食を

背後から追ってくるコンガたちに向けて放り投げた。

「なんてことするんだ！！」

カバンの中には２０個ばかりの保存食が入っていたはず。それに、

清潔な水を詰
めたビンと医療室から持ち出してきた薬品。ついでに火を付けるため
に、散らばっ
ていた白紙を集められるだけ集めて入れておいた。それに、封を切っ
ていない状態
で保存食をコンガに投げても意味はない。

「小型バクダンだ～な」

石を飛び越えながら、シヴァが呆れたように呟く。予想通り、コンガたちは投げ
つけられたカバンに一瞬だけ注意を向けたが、食べ物の臭いがしないと分かると、
すぐに興味を無くして彼らの後を追い始めた。

「中也！　川だ！！」

先頭を走っていたレイの声が聞こえると同時に、彼の目に濁流となった広い川が
目に飛び込んできた。

「下流へ！」

高低差を考えれば上流へ向って走るよりは、体力の消耗を避けら

れるはず。そう思って、彼は左側を指し示した。レイとルナが頷くのとほぼ同時に、二人の頭上に影が落ちる。

「逃げろ！！」

ありったけの声で叫ぶ。ただならぬ中也の気配に二人が顔色を変え、無意識に頭上を見上げた。そこにババコンガを見つけ、レイとルナは髪一発でその場を飛びのく。

「なんてジャンプ力だよ！」

前転しながら素早く身を起こしたレイが、毒づくのが聞こえた。ババコンガは目標を押し潰すことができなかったことを悟ると、後ろ脚で立ち上がって思いきり放屁する。風に乗って流れてきた悪臭に、整わない息が詰まって窒息しそうになった。

「保存食を投げて目を逸らしましょう！」

荒い呼吸の合間に、光宮が叫ぶように言った。できればこれ以上、食糧を失うこ

とは避けたかったが、背に腹は変えられない。中也は無言で頷く。

そこへ、ババコ

ンガが突進してきて、彼らは慌てて左右に別れ、何とかやりすごした。唸り声を上

げたババコンガが、腕を振り上げる。その爪が、エマニエルを引っかけた。

邂逅３７（後書き）

ご評価いただけました！

ありがとうございます！

邂逅３８

「うわあああああ！！！」

エマニエルの絶叫が聞こえた。彼の小さな体が空中に舞い上がり、川底の泥
を大量に巻き上げて黄色く濁った濁流の中に落下した。

「エマニエル！！」

慌てて中也は川へ近寄る。ややあって、エマニエルの体が浮かび上がってき
た。水面から顔を出してもがいているところを見ると、意識はあるらしい。し
かし、強い流れに揉まれて彼の体は浮き沈みを繰り返し、下流に向って流され
始めている。

「助けてあげる！！」

意外な人物が、先手を切って川に飛び込んだ。なんと、朱宮である。思わず
唖然とした中也の耳に、再びババコンガが放屁する音が聞こえてきた。少しの

時間を置いて、漂ってきた悪臭に顔を顰める。口元を覆いながら朱宮の方を見

れば、腰まで水に浸かったあたりで、白かったドレスが濁流に飲み込まれた。

「助けてー！　私、泳げないのー！！」

朱宮の口から出た言葉に、中也は頭の中が真っ白になる。

「じゃあ何で飛び込んだんだよ！？」

言っても仕方ないことだと思いながらも、どうしても口走らずにはいられな

かった。中也は上着と靴を脱ぎ、近くにいた夏葉に押し付けた。

「シヴァ！　手伝ってくれ！」

「ええ～！？」

盛大に顔を顰めたシヴァだったが、すでに彼は上着に手をかけていた。

「お姫さんを頼む！！」

「りょうかい！」

二人は急いで川に飛び込んだ。浅瀬とは言え、流れが早いので足

を取られて
転びそうになる。何とか耐えながら、腰のあたりまで水に浸かったところで、
泳ぎに切り替える。季節外れの水泳は、とにかく寒い。身体中を覆う水は、刃
物のような冷たさで体力を削っていく。すでにエマニエルの姿は目で確認でき
るかできないかのギリギリの位置にあった。流れに助けられながら、中也は痙
攣しそうになる手足を励まして水をかいた。

「中也！　シヴァ！！」

光宮はババコンガの突進を避けながら、二人が濁流に入っていく姿を見た。

「追いかけましょう！　急いで！！　引き上げないと！！！」

彼女に言われるまでもなく、すでにレイとルナは走り出していた。その後を
夏葉と並んで追いかける。下流に向って走り始める彼女たちの背に、ババコン
ガが激しい異臭のする嘔吐物を吐き出した。しかし、全速力で走っ

ていたので、

嘔吐物は彼女らの背中には届かなかった。川に流されている彼らの姿を確認し

ようと、光宮は川に視線を向けて愕然とする。

「なんで姉さんまで川の中にいるのよ！？」

ババコンガが再びジャンプして逃げだした彼女たちの頭上を軽々と飛び越え

る。先頭を行くレイとルナの前に立ち塞がったババコンガだったが、二人はそ

の巨体を回りこんで先を急いでいく。走りながら、光宮は夏葉のカバンを開け

て保存食をひとつ取り出し、封を切った。身を屈めるババコンガの横を通り過

ぎながら、保存食を鼻づらに向けて投げる。食べ物の匂いに気を引かれたババ

コンガの注意が逸れているうちに、光宮と夏葉は一気に距離を開けた。それに

しても、レイとルナの足の速さは尋常で無かった。二人が全速力で走っている

にも関わらず、その距離は開くばかりで一向に埋まらない。盗賊だったと言う

だけあって、二人は足場の悪さをものともせずに、まさしく飛ぶように駆けて

抜けて行ってしまう。

「都育ちには……マネできないわ……！！」

息を切らしながら、彼女は苦笑を浮かべる。ババコンガを確認するために背

後を振り向くと、鼻息を荒くしたババコンガが数頭のコンガを道連れに突進し

てくるところだった。

「マズイ！　避けて！！」

中也の上着と靴を抱えた夏葉の肩を押し、光宮は後ろを見ながら飛びのく方

向を見定める。背後を見ながら石だらけの川辺を走っていたので、突き出して

いた大きめの石に足を引っかけて前のめりになるが、根性でバランスを取った。

「大丈夫！？」

夏葉の声に、頷いて答える。再びババコンガを振り返った時、彼らが急に動

きを止めてその場に立ち止まったのを見た。雄叫びを上げながら放屁するババ

コンガの姿に、光宮はほっと胸を撫で下ろす。しかし、彼女はすぐに違う可能

性に思い至った。

「別のモンスターの縄張りなんだわ！」

一刻も早く川に流されている中也たちを引き上げなければ、と彼女は顔色を

変え、再び萎えそうになる足に鞭打って走り出した。

邂逅３９

「中也―！！」

遠いところからルナの声が聞こえてきた。しかし、無我夢中で水をかく彼は

答える余裕など持ち合わせていない。冷たい水に辟易としながらも、何とかエ

マニエルの傍まで辿り着く。そこで中也は立ち泳ぎに切り替えた。流れに逆ら

うことは、けっこうな重労働だったが、すぐさまエマニエルに近寄れば、溺れ

ている彼にしがみ付かれて自分まで溺死してしまう。目の前のエマニエルは必

死の形相で酸素を求めてもがいている。何度か浮き沈みするのを用心深く眺め、

彼が自分に背を向けた瞬間に、肩から脇にかけて腕を入れる。水の中で向きを

変え、自分の体をエマニエルの下に入れれば、自然と彼の顔が水面に出ること

になる。

「落ち着いて、深呼吸するんだ！！」

エマニエルに向って叫ぶように言うと、喉から嫌な音をさせていた彼が途切

れ途切れだが呼吸を始める。それを見計らって、中也はレイたちがいる川辺に

向けて泳ぎ始めた。

「お姫さん、しっかりしてくれ！！」

一方、中也と一緒に川に飛び込んだシヴァは暴れる朱宮を何とか捕まえたと

ころだった。溺れている人を助ける方法は、中也から教えてもらった。そのこ

とに安堵しながらも、シヴァはひたすら暴れ続ける彼女にかなりの苦戦を強い

られていた。

「息して、息！！　もう大丈夫だから！！」

彼女の体の下に何とか潜り込んで、耳元でそう懇願するが、苦しげに眉を寄

せる彼女には全く届いている気配がない。振り回される朱宮の爪が、

シヴァの
顔に引っ掻き傷を作る。さすが、手入れが行き届いている爪は一味違う。まる
でカミソリのような爪に抉られ、頬から血が流れた。彼女が大人しくならない
ことには、片手を放して泳ぎだすこともできない。冷たい川の流れに揉まれな
がら、とにかく朱宮を落ち着かせようと、混乱しかけた頭であの手この手と考
える。そこへ、激しい流れが押し寄せてきてシヴァと朱宮は頭から水に埋もれ
た。水中で暴れる朱宮を何とか押さえつけ、態勢を変えずに力を抜けば、何と
か水面に浮上できた。顔を出すと同時に咽かえる。

「こんなメに合うなんて、思ってもみなかったぜ～」

ようやく疲れたのか、水面に上がった朱宮はもう暴れ出そうとしなかった。
彼は無意味だと分かっていながら、濡れてしまった顔を片手で拭う。
そして、

川辺へ向けて片手で水をかき始めた。しかし、そこからが大変だった。

「進まねえ……！！」

思いがけず岸から離れていたらしい。必死に水をかいてはいるが、一向に目

的地は近付いて来ない。流れが速いので、水面に顔を出していることさえ辛く

なっていく。濁った水を飲み込み、咽かえりながらも、岸へ向けて泳ぐ手だけ

は決して緩めない。

「こんなところで死ぬのはゴメンだぜ、兄貴……！！」

脳裏に、幼い日に別れたその姿を思い浮かべる。シヴァは歯を食いしばり、

川の流れに逆らうように必死で手足を動かした。

＊

「よし！！」

さすがに息を切らしながら、レイとルナは流されている中也たちよりも少し

ばかり進んだ場所に辿り着いていた。周囲には、濁流に打ち上げられた木の枝
が無数に散らばっている。その中から、最も長いものを二つ選ぶ。

「レイは中也たちの方をお願い！」

「分かってるよ！」

枝を持ち上げ、流されてくる彼らとの距離を測りながら、慎重に川に足を踏
み入れる。浅瀬にも関わらず、流れはかなり速い。立っているだけでもかなり
負担がかかる。大丈夫か、と疑心が芽生えた時、こちら側に向って必死に泳ぐ
中也とシヴァの姿が目に入った。

「やってやろうじゃない」

「当たり前だっつーの！！」

タイミングを見計らって、二人は長い枝を川に向って投げかける。中也もシ
ヴァも、何とか枝の端を掴むことに成功した。しかし、次の瞬間、川辺で枝を

支える彼女たちの腕が悲鳴を上げる。体重を後ろにかけ、何とかこちら側へ引
っ張ろうとするが、微動だにしない。レイの方は、持ち前の怪力でふらつきな
がらも一歩下がることができたが、それ以上は全く動けずにいる。

「手伝うわ！！」

遅れてやってきた光宮がルナの後ろについた。レイの後ろには夏葉がいる。

しかし、二人ずつで力を合わせても、濁流に揉まれている四人の体は一向に近
づいてこなかった。川辺で枝を持つ彼女たちの体が、次第に前のめりになって
いく。

「シヴァ、中也！！　絶対、放しちゃダメよ！！」

光宮の声を聞きながら、中也は複雑な心境だった。この様子だと、岸に残る
四人の体力が尽きるのも時間の問題だ。運悪く川に落ちれば、全員が溺死とい
う結末を迎える。しかし、だからと言って投げかけられた枝を放す

ことはでき
なかった。今ここで枝を放すことは、自分の死を意味する。命を簡単に捨てる
には、あまりにも未練がありすぎた。せめて落ちたのが一人なら。六人で二人
を引き上げるのと、四人で四人を引き上げるのでは、かなり事情が違ってくる。

「さすがにキツイな……」

レイは唇を噛んだ。馬鹿力が自慢とは言え、その場で踏みとどまっている時
間が長引くほどに、腕も足も、ただでさえ過剰に酷使されている筋肉が悲鳴を
上げている。

「このままじゃ……何とかならない！？」

背後を振り返りながら、ルナが光宮に問いかけた。

「今、考えてるわ！！」

「なるべく早めにお願い！！」

その時、彼女たちの視界の端で青白い稲妻が炸裂した。少し離れ

た下流の大

木に落雷したらしい。続いて、木が倒れる音が聞こえてくる。運が良いことに、

落雷を受けた大木が川に向って倒れ込む。下流で、激しい水しぶきが上がった。

「チャンスよ!!　みんな、手を放して!!　あの木に引っ掛かるから!!」

「やったな!!」

川の中にいる二人も事情を察したらしい。彼女たちが手を放す前に、自分から

ら枝に捕まっていた手を放した。枝を投げ捨て、彼女たちは一斉に駆け出した。

「運がいいわ!!」

倒れた大木に走り寄ると、そこだけ水の流れが緩やかになっていた。自力で

も泳いで来れそうだったが、気がつけば四人とも川の中に横たわる大木によじ

登っていた。中也たちに駆け寄り、ぐったりしているエマニエルをレイと夏葉

で引き上げ、ルナと光宮で朱宮を引き上げた。その間に、中也とシヴァが自力
で岸に向って泳ぎ始める。

「死ぬかと思った～ぞ、中也～」

「生きててよかったな、お互い」

足の裏が川底に着いた瞬間、二人は全身を襲う疲労に脱力した。水面に浮か
んだまま見上げた空は見事な灰色。そこから滴る水の雫に打たれたまま放心し
ていると、何とか助かったことが実感できた。

「大丈夫？」

緩やかな流れに身を任せていた二人の視界に、光宮と夏葉の姿が映り込んだ。

「中也、これ」

夏葉が差し出したのは、咄嗟に押し付けた自分の制服の上着と靴だった。

「ああ、ありがとう」

身を起こし、上着と靴を受け取る。

「光となっちゃんが女神に見える～ぜ。助けてくれてありがとな～」

「お互い様よ。姉さんを助けてくれてありがとう。あんなのでも、一応、私の
姉さんなの」

苦笑しながら言った光宮に、中也は思わず苦い顔をする。

「できれば、泳げないのに川に飛び込むのは止めてほしかったかな」

言った瞬間、光宮の顔色が変わった。

「それ、ホント……？」

答える気力が続かず、中也は無言で頷いた。

「お前ら、早く上がって来た方がいいぜ」

頭上からかけられたレイの声に、水に浸かったままだった四人は反射的に
顔を強張らせていた。

「なんかデケーのがいる。食われたくなかったら早く逃げた方がいいかもな」

中也は大木によじ登る。レイが示した先には、鮮やかな背びれが悠然と濁流

の中を彷徨っていた。

「そうよ、ババコンガが急に追いかけて来なくなったの。きっと別のモンスターの縄張りだったからだわ。早く移動しましょ！！」

言われるまでもない。中也たちは一斉に水から上がり、川辺で横たわっているエマニエルと朱宮を抱えて森の奥へと走り始めた。

遅延39（後書き）

おやつカルパスって、ありますよね。

あれ……めっちゃうまいっすよ！

かっぱえびせん以上にやめられない、とまらない♪

おとな買いしまくってます！

邂逅４０

ひっそりと闇に沈む樹海に、頬を打つ乾いた音が響き渡った。

「な、何するの……？」

殴られた衝撃で地面に転がった朱宮が、愕然とした顔で双子の片割れを見上げる。

「バカだ、バカだとは思っていたけど、ここまでバカだとは思わなかったわ」

これ以上ないほどに冷え切った声音で、光宮は吐き捨てるように言い切った。

突然の展開に開いた口が塞がらないまま、一同は国王の娘たちを交互に見比べる。

「あんた、みんなを殺す気？」

「え？」

状況が理解しきれていないらしい朱宮は、僅かに肩を震わせながら無意味に

周囲を見回した。

「自分が何をしたのか分かってるの？」

「何って……助けようと思っただけじゃない！」

転がったまま起き上がろうともせず、打たれた左頬を押さえたまま、彼女は

悲痛な声を上げる。

「助けようと思った？　笑わせないで！　自分一人、助けられないのに！？

あの時、木が倒れなかったら、今ごろ、あんたも中也もシヴァもエマニエルも、

みんな死んでいたかもしれないのよ！？」

言葉には出さなかったが、彼らを助けようとしていた光宮たちも、運が悪け

れば濁流に落ちていた可能性もある。朱宮が軽はずみに取った行動は、全員の

命を危険にさらす行為に他ならない。光宮は、そんな当たり前のことさえ理解

しない双子の片割れが、もどかしくて仕方なかった。

「じゃあなに!?　光ちゃんは、彼を見捨てれば良かったって言うの!?　目の前で人が溺れているのに、放っておけるはずないじゃない!」

「放っておくべきだったのよ!」

はっきりと言えば、朱宮と、そしてエマニエルが顔色を変える。

「中也がいたじゃない。ちょっと離れた場所にはシヴァだっていた。何があっ

てもあんたが助けに行かないといけない状況じゃなかった」

「そんな余裕なんて無かった!　考える前に体が勝手に動いていたんだもの!」

「その結果、あんたを含む四人が死んでも良かったってワケ?」

「違う!　私は助けようと思ったの!」

次第に、自分に起きた状況が理解でき始めたらしい朱宮は目じりにうっすら

と涙を滲ませ始めていた。誰かに頬を、それも人前で殴られることなど、時期

・国王として後宮で大切に育てられてきた朱宮には到底、考えられない事態に

違いない。彼女の細い肩が激しく震え、頬を大粒の涙が伝い始めた。

「結果的に見れば助けようと思ったあんたが助けられてるじゃない」

「それは……」

「自惚れるんじゃないわよ！　あんたに誰が救えるっていうの！？　ただの足

手まといのくせに！」

「もう、止せ！！」

姉妹喧嘩を始める二人の間に割って入ったのは、エマニエルだった。

「姫君を責めるのは、間違っている！　僕は感動しているんだ！　後先を考える

余裕もなく、僕を救いたい一心で川に飛び込んでくれた、姫君の勇気に！　高官

でもない、ただの軍学校の生徒である僕を助けるために！　姫君の心優しさには、

どんな女神も適わないだろう。こんな素晴らしい王女がいるアルテリアは幸せだ！」

「あんた一回、死んできたら！？」

彼女の剣幕に押され、エマニエルがたじたじとなる。

「よくそこまで脳ミソが腐ったものだわ！　自分が何を言ってるか分かってるの！？」

「も、もちろん分かっているさ……」

「言ってみなさいよ！　時期・国王が何にも考えずに濁流の中に飛び込むってのは、

どういうことなのよ！？　泳げもしないのに！」

光宮が更にエマニエルに詰め寄った時、朱宮がじわりと立ち上がる。

「もう、いい……」

頬を涙で濡らしながら、彼女は握り締めた拳を振るわせた。

「もう、知らない！！」

叫ぶように言い放った彼女は、そのまま踵を返して森の奥へ向かって駆け出して

いく。

「おい、お姫さん！！」

「放っておきなさいよ！！」

慌てて後を追おうとした中也たちを、光宮が引きとめた。

「死にたいなら死なせてやればいいじゃない！　どうして姉さんに振り回されて、危険な夜中に森を探し回らなければいけないの！？」

「賛成～。あたしもゴメンだな。探したいなら、勝手に行けよ」

当たり前という顔をして、レイが両手を広げて見せる。

「私もイヤ。そんなことしてるヒマないし」

木の枝を削って矢を作っているルナは中也たちに視線を向けようともしなかった。

「気持ちは分かるけどさあ」

中也は、焦る気持ちを必死に抑えて、なるべく穏便な声で話しかける。

「ここまで何とか生き残ってきたんだし、みんなでアルテリアに帰ろうぜ」

「お姫さんがあたしらに何してくれたってんだよ。足、引っ張ってただけじゃねえか！」

「仮にも一国の姫君なのだから他者に守られて当然だ！　早く探し

に行こう！　見
失ってしまうぞ！」

勢い込んでそう言うものの、エマニエルは決して先んじて動き出
そうとはしなか
った。

「守られて当然！？　バカじゃないの！？　国王の仕事は国民を守
ることよ！　ア
ルテリアにいる人の命と生活を預かっているから、宮殿で守っても
らってるんじゃ
ない！　兵士が守っているのは国王自身じゃないの！　国王が責任
を持っているア
ルテリアの国民なのよ！」

時期・国王である朱宮が大切にされるのは、いずれ彼女がアルテ
リアという国を
背負って立つ立場にあるからだ。国王の娘だという理由だけで、他
者から無条件で
守られ、宮殿での華やかな暮らしが約束されているわけではない。
そう言い切った
光宮に噛み付いたのはエマニエルだった。

「その責任から逃げたあんたが何を偉そうに！　何もかも姫君に押し付けて、好き
放題しているくせに、分かった風なこと言うな！」
彼の言葉に、光宮があからさまに顔を紅潮させる。
「あんたこそ知った風なこと言うんじゃないわよ！　世間知らずの僕ちゃんのくせ
に、私の何が分かるっていうのよ！？」
「心外だ！　僕は世の中のあらゆる事情に精通している！　諸外国の動向から、国
内の流行まで、僕が知らないことは存在しない！」
火花が飛び散る勢いで喧嘩を始めた光宮とエマニエルの間に割って入ったのは、
相変わらず無表情の夏葉だった。
「とりあえず、俺が探しに行ってくるから」
夏葉の言葉に、二人の瞳が怒りに滲む。
「戻って来るまでに仲直りしておいて」
「どういう意味よ！？　ちょっと、夏葉！！　待ちなさいよ！！」

詰め寄る光宮を振り返りもせず、中也たちが何か言う前に、夏葉はさっさと朱宮が
走り去った方向に歩いていってしまう。
「あいつ、自分だけ姫君に気に入られようと思って……！」
夏葉の後姿を見送りながら、エマニエルが額に冷や汗を浮かべながら歯軋りをする。
「はあ！？　あんた、バカじゃないの！？　なんで夏葉にその必要があるのよ！？」
「分かるもんか！」
「分かるわよ！　夏葉が女に興味持つはずないでしょう！？」
「そういう意味じゃない！！」
言い争う二人を見ながら、中也とシヴァは溜め息を零す。レイとルナは全くの無関
心。ひたすら矢を作ることに集中していて付け入る隙がない。夏葉は単独行動。それ
ぞれが自分勝手に動いている中、自分たちはどうするべきなのか、中途半端に首を突
っ込んでしまった二人は決断がつかずにいた。

「どうしよ～か、中也。止める？　それとも姫様を迎えに行く？」

「迎えに行くのはパス。あっちの方は、とりあえず好きなだけ喧嘩させてやれば気が

済むんじゃないかな。いろいろあってストレスも溜まってたし」

「俺は喧嘩する体力が残っていることがスゲーと思う～ぜ」

「同感」

無干渉を決めることにした二人は、大木の根元に背を預けて座り込む。レウスとラ

ンポスの戦いから逃げたり、コンガと戦ったり、濁流の中を泳いだり。今日はもう、

何をする気力も残っていなかった。本音を言うと、これから朱宮を探すために森の中

を動き回らなければならないと思うと、うんざりしていた。そういう意味では、夏葉

が単独で朱宮を探しに行ってくれたことは、ありがたい話ではある。口喧嘩に白熱し

ている光宮とエマニエルを押し付けられたと思うと、多少なりとも気が滅入らないで

も無かったけれど……。

邂逅41

朱宮を追った夏葉は、一同が夜営を決めていた場所から少しばかり離れた

木立の合間に目的の人物を見つけていた。雲間から覗く月光が、地面に広が

る白いドレスと、大木の根元に突っ伏して泣き崩れている朱宮を照らしてい

る。躊躇なく歩み寄っていくと、人の気配に気づいた朱宮が泣き腫らした顔

を上げた。

「戻らないわよ！」

夏葉の顔を見るなり、敵意の滲む眼差しと口調で朱宮ははっきりと言い放

つ。

「頼まれたって、絶対に戻ってなんてやらないんだから！！　ここに来たっ

て無駄よ！　早くみんなのところへ戻れば！？」

「……それが、あんたの結論？」

再び木の根に突っ伏して泣き声を上げ始める彼女の頭上に、ひどく静かな
声がかけられる。意外なことを言われたせいか、朱宮は思わず涙に濡れる顔
を上げた。感情のない、人形のような顔立ちの中、そこだけ人の意思が滲む
深紅の瞳が、真っ直ぐに彼女を見据えていた。
「最初に言っておく。俺はみんなみたいに優しくないし、お人好しでもない。
あんたが死にたいと言うなら止めないし、わざわざ死にに行くところを止め
ようとも思わない。モンスターが徘徊する樹海でみんなと離れることは、そ
のままあんたの死を意味する。どうしても戻りたくないって言うなら、俺は
このまま一人で戻る。もう一度聞く。それがあんたの結論？」
嘘が入り込む余地の無い真っ直ぐな瞳が、じっと朱宮に注がれていた。お
そらく、ここで戻らないと言えば、夏葉は本当に一人で行ってしま

うのだろう。そう思うと、一緒に戻ると言うべきだと分かっていた。けれど、ここで

素直に戻ると言うのは、プライドが傷つく。戻れば、大勢の前で自分を殴った光宮と嫌でも顔を合わせることになるだろうし、それに何より、迎えに来たのが夏葉だというのが癪に障る。何せ、夏葉は朱宮が恋焦がれていた将兄の心を射止めた人間なのだ。言わば恋敵とも言うべき夏葉の言葉を素直に受け入れることなどできるはずはない。そんなことを思っていた彼女は、無意識にそっぽを向き、棘のある口調で実にどうでもいいことを口走っていた。

「さすが、将兄の婚約者ともなれば言うことが違うのね！　一国の王女を脅すことは重罪だって分かってないの？　それともいざとなれば将兄が守ってくれるのかしら？」

「……なんでそこで将兄が出てくる」

夏葉の表情は特に変わらなかったが、朱宮は全く気にしていなかった。それどころか、今度は妙に焦った表情になる。

「ごめんなさい！　私ったらつい！　こんなことを言うつもりじゃなかったの！　私、すごく嫌な子だわ。本当にごめんなさい！」

「？」

「本当に許してね、夏葉さん。でも、私、本当に将兄のことが好きだったの。

それこそ、彼が将兄に立たれるよりずっと前から、本当に本当にお慕いしていたの。いつか彼と一緒にダンスパーティーに行けたらいいなって、ずっと夢を見ていたのよ。彼が将兄の軍服で、私はそれに合わせて白いドレスを着て。宮廷音楽家が奏でる演奏に、おいしいフルーツがたくさん乗ったテーブル。きっ

と素敵だわ。でも、光ちゃんから将兄はあなたと婚約しているって聞いて、すごくショックだった。だから私、あなたのことが苦手だったの。それに、こんなことになってしまって、きっと疲れていたの。だからつい八つ当たりをしてしまったんだと思うわ。だから……」

「何かよく分からないけど、結局、戻るのか戻らないのか、どっち？」

彼女なりの誠意が込められた謝罪は、あっさりと聞き流されていたらしい。

朱宮は少なからずショックを受けていた。

「戻るわ！　もちろん！　戻るわよ！！」

「じゃあ付いて来て」

夏葉はさっそく森の中を歩き始める。朱宮は、慌ててその後を追いかけた。

「夏葉さんって、冷たいのね！」

小走りに歩きながら、朱宮は自然、刺々しくなる口調でその背に話しかけた。

「冷たいかな。それは初めて言われた」

「とっても冷たいわ！　そう言えば夏葉さんって胡蝶なんでしょう？　ちゃん

とした女の子じゃないから、女の子の気持ちなんて、ちっとも分からないのよ！」

「ふーん」

夏葉の声は、ひたすら気が入っていない。

「ほら、やっぱり冷たいわ！　光ちゃんは私を殴ったのよ！？　普通は、こうい

う時は慰める言葉をかけるものよ。なのに、夏葉さんは何も言ってくれない！

中也くんとか、シヴァくんだったら、きっと慰めてくれたのに！」

朱宮がそう言った時、夏葉がふいに歩みを止めて彼女を振り返った。

「なに？」

「……あんたは、自分の命に責任を持たないといけない」

「え？」

再び歩き出しながら、夏葉は静かな声で言葉を続ける。

「それが分かってないから、光がキレた」

「責任？　もちろん持っているわ！　時期・国王としての自覚も、ちゃんとあるもの。だからエマニエルくんを助けたかったの！　一国の王女として、たった一人の国民の命も見捨てるわけにはいかないからよ！　なのに、光ちゃんは……！」

そこで涙を滲ませた朱宮に、夏葉は溜め息をつきながら真っ直ぐに朱宮の瞳を見つめた。

「自分の命の面倒が見れない人間に、誰かを助ける資格はない」

思いがけない冷たい言葉に、朱宮が胸元のドレスを強く握り締める。

「そんな……じゃあ夏葉さんも、私が間違ったことをしたと言うの？」

「それを判断するのは俺じゃない」

どういう意味だ、と詰め寄ろうとした時、朱宮の前を歩いていた夏葉がふいに動

きを止めた。

「どうしたの？」

「静かに」

朱宮は夏葉の視線を追って絶句した。闇に沈んだ木立の中に、毒々しい色をした
鱗に覆われた長い尻尾が見えた。何度も見たからさすがに分かる。
レウスだった。

思わず叫び声を上げそうになった彼女は、寸でのところで口を塞がれ、引きずられ
るように木立の後ろに誘導された。

夏葉は、幹の間から顔を出し、レウスの様子を確認する。幸い、
二人に気づいて
いる様子は無かった。しかし、ここは光宮たちがいる場所から近い。
いつあるとも
知れないレウスの襲撃を警戒しながら夜を過ごすことは、できれば
避けたい事態だ。

そう思って、夏葉はひとつの決断をした。

一方、思いがけず密着することになった夏葉を淡い月光が照らし

出し、朱宮は無

意識に息を呑んでいた。夏葉を最初に見た時から、綺麗な人だとは思っていた。し

かし、こうして改めて間近で目の当たりにすると、近くにレウスがいるという状況

さえ忘れて見とれてしまう。凛とした美しさを湛えた顔立ちの中、特に目を奪われ

るのは紅玉のような深紅の瞳だ。朱宮は思わず、夏葉を見つめながら溜め息を零す。

そして二人は同時に喋り出した。

「夏葉さんって、本当にキレイ……。男の子だったら、好きになってたかも……」

「みんなのところにレウスを連れて行きたくない。適当に撒いてくる」

「ルビーの瞳が一番ステキだわ。白い肌と黒髪によく似合っているし」

「俺が迎えに来るまで、絶対にここを動かないで」

「胡蝶っていうのが、とても残念だけど羨ましいわ」

そして二人が互いに視線を交える。

「あんた、聞いてる？」

「夏葉さん、聞いてる？」

どうやら、互いに聞いていなかったらしい。

「とにかく、俺が迎えに来るまで絶対にここを動かないで欲しい」

「え、ええ。分かったわ」

朱宮が何か考え始める前に、夏葉は念を押すように言った。そして、足音を忍ばせてレウスの傍を通り抜け、その正面に飛び出した。

邂逅４２

突然、木立の中から現れた人間に、レウスが一瞬だけ目を丸くする。レウスの顎の下には小さな草食獣の死体が転がっていた。肉片を咥えたまま、獲物を横取りされると思ったらしいレウスが怒りの咆哮を上げ、威嚇してきた。レウスの注意が自分に向いていることを確かめながら、夏葉は素早く木の幹に身を寄せる。顔を半分だけ出してレウスを確認すると、夏葉の姿を探すように視線を巡らせていた。空を見上げ、北に輝く一等星で方角を確認する。向かうべき方向を見定め、夏葉はそっと幹を離れる。夏葉がいるのは風下。幸い、臭いで気づかれることはない。そしてレウスの前に姿を晒し、指笛を鳴らす。夏葉の姿を認めたレウスが、さっそく突進してきた。それを避け、レウスが動きを止めている間に、全速力でその横を駆け抜

け、木の幹に隠れる。様子を伺えば、再び見失った人間の姿を探してレウスは視線
を泳がせている。足音を立てないように、注意深く木の幹に隠れながら、レウスの
鼻先の方向へと移動する。そして前触れ無く姿を現し、指笛を鳴らしてレウスの注
意を引く。そこへレウスが突進する。夏葉は再び隠れ、姿を見せて指笛を鳴らす。
それを繰り返しながら、徐々にレウスを光宮たちがいる方向から遠ざけていった。

＊

一方、樹海のただ中に一人で残された朱宮は、意外なほど冷静だった。

「夏葉さん、レウスに一人で戦いを挑むなんて、勇気あるんだ。カッコいい。ホント、どうして男の子じゃないんだろ」

彼女が叶わぬ恋を胸に抱き始めた時、そう遠くない場所から血が凍るようなレウスの咆哮が聞こえてきた。その声音があまりにも恐ろしく、彼女は一気に現実に引

き戻される。冷や汗が出て、両足が震え始めた。

「ムチャよ……」

激しく震えだす体を両手で抱きしめ、朱宮は夏葉のことを思った。

「いくらなんでも、一人でレウスに戦いを挑むなんてムチャクチャだわ！」

最悪の想像が脳裏を掠めた。夏葉が殺されてしまう。そう思うと、肌が一気に総

毛だっていた。

「助けないと！」

唇を噛み締め、彼女は必死に考える。迎えに来るまで待っていろと言われたが、

とても何もせずに待っていることなどできない。その時、ふと名案が浮かんだ。

「そうだ！　みんなを呼んでくればいいんだわ！」

中也なら、シヴァなら、自分を助けてくれたように夏葉のことを助けてくれるに

違いない。そう思った彼女は、震える足で一歩を踏み出す。しかし、見渡す限り、

どこも似た景色。どちらへ向かえばいいのか、見当もつかない。

「もう、呼ぶしかないわよね。よ～し！！」

朱宮は胸いっぱいに冷たい空気を吸い込んだ。

「みんな～！！　大変よ～！！　こっちに来て～！！　ここよ～！！」

その瞬間、せっかく引き離したレウスが朱宮の声に反応し、途端に方向を転換した。

さすがの夏葉も開いた口が塞がらず、歩み去っていくレウスの後姿を愕然として見送っていた……。

＊

一方、夏葉と朱宮の帰りを待つ中也たちは、未だに収束がつかない光宮とエマニエルの喧嘩をうつらうつらしながら聞いていた。

「だいたい、ハンターでもない僕らが何の武器も持たずに生き残れるはずないんだ！」

エマニエルの言い分は、いつしか状況への絶望に取って変わっている。

「だから何だって言うのよ！　私たちはまだ生きているわ！　無闇に悪いことばかり
口走って、みんなの不安を煽るのは止めなさい！」
「僕に命令するな！　ここはどこだ？　フィールドだろう！　そこら中にランポスの
群れがいる！　すぐにでも群れが襲い掛かって来て、全員、殺されてしまうんだ！」
「いるなら、もう出てるわよ！！」
エマニエルは頭を抱えて呻き始めた。
「いや、ランポスだけじゃない。他に何がいるのか考えてみればいい！　知っている
だけで、ランポスにオオナヅチ、ヒプノックもいたと言うじゃないか！　それにレウ
ス！　きっとここにもレウスがやって来る！　そうなれば、今度こそみんなお終いな
んだ！」
「だから悪い方向にばかり考えるのは止めろって言ってるでしょう！？」

光宮がそう言った時だった。そう遠くない場所から、聞き覚えのあるレウスの咆哮

が鼓膜を刺激した。夢と現実を行き来していた中也とシヴァが、慌てて飛び起きる。

ひたすら矢を作ることに集中していたレイとルナも、顔色を変えて立ち上がった。

「ほ、ほら見ろ！　近くにレウスがいるんだ！　僕らはみんな、レウスに食い殺されてしまうんだ～！！」

「黙りなさい！！」

地面に蹲るエマニエルを軽く蹴飛ばし、光宮はレウスの咆哮が聞こえた方向を見据える。

「近いわ。夏葉たち、大丈夫かしら……」

誰もが無言で聞き耳を立てる。どこからともなく助けを呼ぶ声が聞こえてきたのは、

その時だった。

「姉さんの声だわ！　夏葉はどうしたのかしら！？」

「行こう！！」

中也は立ち上がり、みなを促した。無言で頷き合い、彼らはレウスがいると思われる方向に向かって駆け出した。

「ほら、僕ちゃん！　置いてけぼりにされたいか？」

いつまでも立ち上がろうとしないエマニエルの首根っこを掴み、レイが引きずるようにして彼らの背を追いかける。

「みんな、どこ～！？　ここよ～！！　ここに来て～！！」

朱宮の声が近い。

「お姫さん！！　どこだ！？」

中也は危険を承知で声を張り上げるが、声が木々に反響しているらしくなかなか姿が捉えられない。意に反して、先に姿を見せたのはレウスの方だった。風が流れて、

レウスに独特の腐った生ゴミのような臭いを運んでくる。しかし、さんざんババコンガの臭いを嗅いだ後では、まだマシだと思えるから不思議だ。

「ルナ、あいつの目を潰してくれ！」

「任せな！」

逃げようとは思わなかった。全力で走っても、レウスにはすぐに追いつかれる。なら

ば、いっそ持てる武器で足止めをした方がいい。

「みんな～！！　早く来て～！！　何してるの～！？」

ルナがレウスの正面に回りこむ。素早く矢を構えたところへ、朱宮の声が響き渡った。

中也たちが無言だったこともあり、レウスはその声の方に反応し始めた。レウスが、くるりと向きを変えてしまい、正面で矢を構えていたルナが舌打ちする。

「お姫さ～ん！！　ちょっと黙っておいてくれ～！！」

「なんで～！？　早く来てよ～！！」

朱宮の声は高い。レウスはすぐ近くでシヴァの声がしたにも関わらず、朱宮の声に向

かって森を移動し始めた。

「どうして！？　私たちがいるのに！！」

「レウスは滅多に夜に活動しない。きっとよく見えてないんだ」

焦りの中に解せないといった表情を滲ませる光宮と並んで、中也はレウスの後を必死に追いかける。

「だから音に反応してる！」

朱宮が自分たちを呼ぶ声は、止むことなく続いていた。シヴァが何度か黙るように叫んだが、彼女は全く聞き入れようとはしなかった。中也は舌打ちする。レウスの足を止めないことには、攻撃する余地がない。いい加減、黙ってくれと心の底で祈った時、朱宮が再び声を張り上げる。

「みんな、早く～！！　夏葉さんが死んじゃうよ～！！」

その言葉が聞こえた瞬間、全員の脳裏に最悪の状況が思い浮かんだ。中也は自分の耳を疑う。全力で走りながら、胸に走る鋭い痛みに絶句した。まさかという絶望と、全力

で走れば、まだ間に合うかもしれないという期待が頭の中で入り乱れ、無性に苛立つ気

持ちを抑えられずに、握り締めた拳に爪を立てた。その時、各自の想像の中で重態にさ

れていた当の夏葉が、木立の間からひょっこり姿を現した。

「夏葉！　無事だったの！？」

一同は思わず足を止めていた。さっそく光宮に詰め寄られ始めた夏葉は、珍しく表情

を曇らせる。

「ごめん」

「なにが！？」

「いや、レウスを引き離していたんだけど……」

それだけの説明で何が起きたのか理解できるから不思議だった。見たところ、怪我と

いう怪我をしているようには見えない。言い知れぬ安堵が全身を駆け抜け、そんな自分

に中也は自分で驚いた。

「早く行こう。お姫さんが危ない」

気を取り直し、夏葉と合流した中也たちはレウスを引き付ける元凶に向かって地面を

蹴った。

「早く～！！　夏葉さんが死んじゃう～！！」

朱宮の声がすぐ近くで聞こえてきた。

「死んでないわよ！　だから、ちょっと黙りなさい！！」

「ホントに～！？　よかった～……きゃあああああああ！！！」

どうやらレウスに見つかったらしい。一瞬で状況を判断した彼らの顔に、苦い表情が

浮かび上がる。

遡逅４２（後書き）

明日の更新はお休みします。

リアル世界でちょっと用事が……。

明後日には必ず復活いたしますので、どうか見捨てないでください！

邂逅43

「ホントに、あのバカは！」

光宮が毒づいた時、木立の狭間で足を止めたレウスと、その正面で腰を抜かしている朱宮の姿が目に入った。鬱蒼と生い茂る木々の中、朱宮がいる場所だけが狙ったように草木が開けている。そこに、夜空に輝く月が光を投げかけ、まるでスポットライトのように朱宮を照らし出していた。

「とにかく黙って！　それから動くなよ！！」

そう言ったものの、夜目が利かないはずのレウスの視線がはっきりと朱宮を捕らえているこの状況でどうすればいいのか咄嗟に考え付かない。混乱が混乱を呼ぶ。

「姉さん！！」

「お姫さん！！」

一同に絶望が走った。成す術なく固まってしまった中也の横を、レイが身の丈ほどの

長い枝を軽々と抱えて走り抜けた。

「レイ！！」

「このクソやろ～がああ！！」

レウスに対してか、それとも朱宮に対してかは判別がつかなかったが、吐き捨てるよ

うに言い放ったレイは、枝をレウスの脚に思い切り叩きつけた。しんと静まり返った樹

海に鈍い音が木霊する。衝撃で、枝が砕け散った。レウスが絶叫する。唖然とした一同

の中、次に動いたのはルナだった。彼女は風のように走り抜け、レウスの真横に回りこ

む。

「夜目が利かないなら、むしろ潰すのはこっちだね！！」

矢が一閃した。空中を走り抜けた矢が突き刺さったのは、レウスの小さな耳だった。

「早く！！　逃げよう！！」

ルナが叫んだのと、絶叫を迸るレウスが尻尾を振り回しながらその場を回り始めたの

がほぼ同時だった。すでにレイの手は朱宮の腕を掴んでいる。我に返った中也たちは、

何を考える余裕もなく慌てて走り始めていた。レウスから逃げたい一心で、どちらに向

かうべきなのかを確かめることさえできなかった。ただ、一心不乱に樹海を駆ける。

「追ってきてるぞ！！」

背後を振り向いたエマニエルが、最悪の状況を知らせてくれた。舌打ちしながら振り

向けば、レウスはどこかふらつく足取りで彼らの後を追いかけている。よく見れば、レ

イが枝を叩き付けた方の脚を引きずっているようだ。

「なんて力だよ……」

呆れるやら感心するやらでようやく苦笑いする余裕を取り戻した時、レウスが近くの

木に思い切り頭をぶつけて地面に転がった。どうやら、耳を傷つけられているせいで真

っ直ぐに進めないらしい。

「やるなあ～、あの二人～」

「だな」

シヴァは笑っていた。負けず嫌いの彼のこと。おそらく、このまま見せ場がないまま終わるのはプライドが許さないだろう。どうかムチャはしてくれるな、と思いながらも、

彼らの逞しさが羨ましくもあった。背後でレウスの咆哮が聞こえてくる。飛んできた火球を地面に転がるようにして避ける。間髪入れずに起き上がり、全速力で走り続けた。

「洞窟があるわ！！」

前方を駆け抜けていた光宮が、中也たちを振り返りながら、岩の狭間にぽっかりと口を開けた暗い穴を示す。幅が狭く、とてもレウスは入れない。逃げ込まない手は無かった。

「急げ！！」

彼らは転がり込むように洞窟の中に駆け込んだ。ほっと息をついたのも束の間、そこ

に広がる光景に、彼らは絶句した。

「チャチャブーだ!!」

駆け込んだ洞窟の奥は意外なことに、巨岩の狭間に開いた小さな空間だった。まるで

月光を集めているかのように明るいその場所には、奇妙な面を被った子供ほどの大きさ

の小型モンスターが徘徊している。彼らは侵入者を見つけるなり奇声を上げ、手にして

いた刀を一斉に振りかぶって襲い掛かってきた。

「なんでこうなるのよ!?」

光宮の絶叫は、みなの心を代弁していた。

「外へ!」

振り上げられるチャチャブーの刀を避けながら、光宮が洞窟の入り口を示す。

「ダメだ!　レウスがいる!!」

光宮の声に、中也は反射的に洞窟の出口を振り返る。しかし、そこにはまるで立ち塞

がるようにレウスが佇んでいた。前にも後ろにも進めない。そう思った瞬間、右足に走った鋭い痛みに思わず膝をつく。

「中也！　ボケッとしてんじゃねえ～よ！！」

右の大腿部がパックリと避けて血が噴出していた。視線を上げれば、血がこびりついた刀を振り回しながら、一匹のチャチャブーが踊りだしそうな勢いで手足をバタつかせている。奇面の奥に隠されている顔が笑った気がして、背筋がぞっとした。

「こいつら、笑えるのかよ！」

痛みを堪えて、中也は立ち上がる。

「笑っても泣いても、どっちでもいいんだよ！！　とにかく、こいつら振り切ろうぜ！」

「言われなくても、そのつもりだ～ぞ！！」

レイが手近なチャチャブーを投げ飛ばす。その横で、シヴァが力任せに殴りつける。

ルナが矢を放つ。夏葉が蹴り上げる。狭い洞窟内は、途端に乱戦状態になった。

「きゃああ！！」

腰を抜かした朱宮に向かって、二匹のチャチャブーが刀を振り上げた。間に入った中

也は、咄嗟に一匹のチャチャブーの腕を掴んで持ち上げようとして、手を止めた。見た

目の割りに、意外なほど重い。１０歳前後の子供ほども重さがある。一瞬、疑問が浮か

んだが考える余裕などあるはずも無く、力を込めて持ち上げてもう一匹のチャチャブー

に向かって投げつけた。短い悲鳴を上げ、チャチャブーが二匹、地面に転がる。そこで

息絶えてくれるかと思いきや、二匹がモグラのように地面を掘り始めて彼は絶句する。

「なんなんだよ、こいつら！？」

「私に聞かないでよ！」

答えた光宮はチャチャブーが振りかざす刃を避け、近くに転がっていた石を頭部に投

げつける。直撃を受けたチャチャブーは、やはり土を掘り始めた。

「何匹いるのさ!?　キリがない!!」

ルナの額には汗が浮かんでいる。コンガと戦った時には、矢が尽きそうになれば倒したコンガから引き抜いて再び弓で放つことができた。しかし、チャチャブーたちは死ぬ直前に矢ごと地面に潜ってしまうので、矢はひたすら減っていくばかりだ。

「助けて!　助けてよ～!!」

朱宮に群がっていくチャチャブーに気づいたレイとシヴァが慌てて救助に向かう。しかし、助けに行こうとした二人に別のチャチャブーが刀を振り上げ、二人の行く手は阻まれた。二人は一斉に刀を振り回すチャチャブーに群がられ、体中を切り刻まれていく。

「このクソガキ!」

毒づいた彼女を嘲笑うように、地面から数匹のチャチャブーが踊りだしてきて、その足に新たな傷を付けた。

「レイ!　シヴァ!!」

血の臭いに狂ったような声を上げ、チャチャブーたちが嬉々として刀を振り回す。夏葉が駆け出し、目に付くチャチャブーから順に蹴り飛ばしてレイとシヴァのフォローに回るが、一匹を相手にしている間に数匹のチャチャブーに群がられるという事態で始末に負えない。夏葉の端正な顔立ちに、焦りが浮かぶ。一匹のチャチャブーが振り上げた刀が、その白い頬に一筋の傷を走らせた。

「キリがない！！」

中也が一匹を突き飛ばせば、別の一匹に背中を斬り付けられ、地面に膝をついてしまう。

「痛い！　痛い！！　痛いよおお！！！」

エマニエルが体中のあらゆる場所から血を流しながら、洞窟内を横切っていく。

「来ないで！！　あっちに行ってったら！！」

朱宮の周りを四方から五匹のチャチャブーが囲んでいた。彼らは朱宮を斬り付けようと

はせず、刀の柄で小突き回して笑っている。まるで年端のいかない子供たちが寄ってたかって一人を苛めているような、そんな様子にぞっとする。

「これならまだレウスの方がマシだわ！！　外へ出ましょう！！」

そう言った光宮も、顔と言わず腕と言わず、傷だらけになっていた。言われずともそのつもりだった。一同が出口を目指そうとした時、そこら中の岩に開けられた穴の中から、

一匹のチャチャブーが姿を現した。体の大きさや姿は特に変わらないが、頭に石で作られた冠のようなものを被っていることだけが相違している。

「何だよ、あれ！？」

「ロクなモンじゃないことは確かよ！！」

その言葉通り、頭に冠を被った一匹がいきなり冠から真っ赤に燃える火球を振りまき始めた。何事かと目を瞠る彼らの目の前で、火球の当たった地面が爆発する。思わず後退りした一同の中、火球が背中に直撃したエマニエルが地面に突っ伏した。

「エマニエル！！」

中也が慌てて駆け寄れば、制服の布地がチリチリと音を立てて焼け焦げ、露出してしまった背が真っ赤に焼け爛れ、血が滲んでいた。

「おい、しっかりしろ！！」

意識が朦朧とし始めている彼を引き起こしたところへ、冠を被ったチャチャブーが、数匹を従えながら中也たちに向かって駆け出してくる。

「中也、早く逃げる～ぞ！！」

邂逅４４

中也とシヴァでエマニエルを両脇から抱えながら立ち上がる。そして、出口に向かって走り始めた。

「この、クソガキ！！」

今までのお返し、とばかりに光宮が後ろを振り向きながら手近な石を一匹のチャチャブーに向かって投げつけた。石はチャチャブーの顔面に命中し、被ったていた奇面にヒビを入れる。その瞬間、チャチャブーが激しく身を震わせながら絶叫し始めた。出口を目指していた中也は、ただならぬチャチャブーの悶絶に思わず背後を振り返る。

「仮面が弱点なのか」

光宮が投げた石に仮面を割られたチャチャブーが倒れ込んだ。今までのように地面を掘って逃げようとはせず、チャチャブーはそのまま動かな

くなってし
まった。割れた仮面の下にある顔がどんなものなのか、見てみたい
ような欲求
に駆られたが同時に見るのが恐ろしくもあった。四肢を持ち、後ろ
足で立ち上
がり、まるで人間のように仮面を被って、刀を振り回し、笑うモン
スター。そ
の仮面の下に隠れた素顔を想像すると、鳥肌がたつ。

洞窟を抜けると、予想通りそこにはレウスが待ち構えていた。彼
らの姿を見
るなり、レウスは翼を広げて威嚇し、怒りの咆哮を上げて突進して
くる。静か
だった夜気が震える。木々の枝で羽を休めていた鳥たちが、一斉に
飛び立った。

光宮と夏葉が左に飛び避け、朱宮を抱えたレイとルナがそれに続い
た。中也と
シヴァは咄嗟に右に飛び避けたものの、エマニエルを抱えていたた
めに僅かな
がら行動が遅れ、巻き上げられた土煙を頭から被るハメになってし
まった。す

ぐさま起き上がって全員が纏まろうとしたものの、直後に飛んできた火球が彼
らの間を通過し、視界が白く染まって歩みを止める。レウスの火球が当たった
岩が溶け、ドロドロの溶岩となって流れ出す。冷え切っていた空気が、そこだ
け灼熱に染まり、中也たちの肌を焼いた。
「あ、危ないわねえ！　みんな、大丈夫!?」
光宮が叫ぶように言い放った時、何の前触れもなくチャチャブーが数匹、地
面の中から踊り出してきた。
「なんなんだ～よ、こいつら!」
脚に腕を絡みつかせて奇怪な笑い声を上げるチャチャブーをシヴァが思い切
り蹴り飛ばす。チャチャブーの首が不自然な方向に曲がった。背中に顔の正面
を乗せたまま、チャチャブーは狂ったように笑い続ける。そして思い出したよ

うに地面を掘り始めた。新たに地中から飛び出してきた一匹のチャチャブーが

振り上げた刀が、エマニエルの脚に新たな傷を作り上げる。

「ねえ！　冠を被ったヤツが出てきたわ！！」

咄嗟に光宮の方を振り向けば、彼女が指差す方向の先、洞窟の中から数匹の

チャチャブーを従えて、その一匹がやってきた。愕然とする彼らの目の前で、

地面を蹴って空中に舞い上がったレウスが頭上高くから火球を飛ばしてくる。

「シヴァ！　俺たちが狙われてる！！」

「マジか～よ！！」

岩石を一瞬で溶岩に変えるような高温の火球を食らえば、とても生きていら

れるはずはない。二人はすでに意識を手放しているエマニエルを引きずりなが

ら、死に物狂いで場所を移動した。すぐ傍で地面が爆発する轟音が響き、運悪

くその場にいた一匹のチャチャブーが一瞬で蒸発し、地面にはその

影だけが焼

きつけられる。彼らは転がり込むように、光宮たちがいる場所に飛び込んだ。

「ちょっと、こっち来ないでよ！！」

「そんなこと言ったって……！！」

無意識に人がいる方へ移動した三人は光宮によって拒絶されたが、今更、方

向が変えられるはずはない。空中に視線を向けていた彼らの足元から、再び数

匹のチャチャブーが現れ、奇声を上げながら刀を振り回し始める。その刃が、

朱宮の腕を斬り付けた。

「あ！！」

短く悲鳴を上げた彼女は自らの腕を見て途端に真っ青になってしまう。

「血、血が、血が出た……！！」

「死にゃしねえよ！！」

手近な一匹を殴り飛ばしながら、レイが軽く朱宮の頭を叩く。

「仮面が弱点だ！　割るか剥がすかしたら倒せる！！」

恐怖に駆られながらも、中也は咄嗟に捕まえたチャチャブーの腕を持って吊り上げ、その仮面に手をかけた。途端に、チャチャブーが激しく暴れて抵抗し始めるが、構うことなく力任せに仮面を引っ張る。もう少しで剥がれる、という時、空中から舞い降りたレウスが一箇所に固まっている彼らに向かって突進してくる。中也が思わず掴んでいたチャチャブーの腕を放せば、その一匹は逃げるように地中へ消えていった。シヴァと中也がエマニエルを引きずり、レイが朱宮を突き飛ばし、残りの人間たちが好き勝手な方向に飛んで、その突進を避ける。ほっとしたのも束の間、石の冠を頭に被ったチャチャブーが周囲にいるチャチャブーたちよりも一回り大きな刀を振り回し、冠から火球を撒き散ら

しながら、中也たちの方に向かって走ってくる。

「おい中也！　今更だけど、あいつ頭からバクダン飛ばして～るぞ！　バカじゃねえ～の！？」

どうやら思考回路がスパークしたらしいシヴァが、その一匹を指差し、爆笑しながらそんなことを言ってくる。答える余裕が無かった中也は無言を貫いた。

起き上がったレウスが尻尾を振り回す。周囲の木々が幹から折れ、頭上から大小の枝が降り注いできた。咄嗟に頭を抱えて枝を避けている間にも、次々に地中から飛び出してくるチャチャブーたちが刃を振り回し、体中に傷を作っていく。朱宮以外、誰しも頭から足まで全身が血まみれだが、致命的な傷を負っていないことだけが救いだった。

「いい加減にしなさいよ！！」

無駄と知りつつも、光宮はチャチャブーの群れと、そしてレウス

に向かって

叫んでいた。一方的に切り刻まれ、逃げ出そうにもタイミングがない。エマニ

エルは重症。他の者たちも、それぞれが傷だらけになっている。いったい何が

どうなって自分たちがこんな目に遭わなければならないのか、今ごろになって

理不尽さが込み上げてくる。

「こんなところで、死んでたまるかー！！！」

その時、何を考えていたのか光宮自身、よく分かっていなかった。心の底か

ら絶叫した彼女は、気が付けば冠を被ったチャチャブーに向かって駆け出して

いた。そして、そのチャチャブーの首根っこを掴んで持ち上げる。

「光！？　何してんだ、あんた！？」

中也の声が聞こえたが、聞こえないフリをしておいた。

「腹、減ってんでしょ！？　いいモンあげるわよ！！」

冠を被ったチャチャブーが何かをしてくる前に、彼女は全速力で

レウスの正
面に回り込む。レウスが威嚇するように大きく口を開けたところで、光宮は腕
に掴んでいたチャチャブーを放り投げた。
「マジかよ！？」
緩い弧を描きながら、冠を被ったチャチャブーが空を飛ぶ。口の中に入って
きた異物を、レウスは思わず飲み込んでしまったらしい。一瞬、レウスの動き
が止まった。そして次の瞬間、レウスの喉元から腹にかけて、激しい爆発音が
通り過ぎていく。レウスが絶叫する。同時に、血吹雪が上がった。
「ちょっと！！　何、ボケッとしてるのよ！？　早く逃げるわよ！！」
体の内側にある消化器官で爆弾が爆発したレウスが盛大な音を立てて地面に
倒れこむ。未だ胸のあたりが上下しているところを見ると、完全に死んでいる
わけではないらしい。唖然としていた中也は、光宮に頭をしばかれ

てハッとする。同じく開いた口が塞がらないシヴァを促して、エマニエルを抱え直し、光宮たちが走り去っていくその後を追い始めた。

「やることがメチャクチャだな、あいつ……」

チャチャブーをレウスに食わせた、という話はあまり聞いたことがなかったが、結果的に良い方に転んだので問題はないということにしておいた。

「とにかく離れましょう!!　その後のことは……!」

当てもなく森を駆け抜けながら、光宮が叫ぶように言った瞬間、突如として森が途切れる。思わず歩みを止めた彼らの目の前には、果てしない広大な砂漠が宵闇にじっとりと沈んでいた。

邂逅45

「そんな……」

中也は絶句する。息を切らした彼らの間に、何とも言えない空虚な空気が流れた。

「砂漠だ～な……」

「そうだな……」

静かだった。見上げた夜空には満天の星。吹き抜けていく砂を含んだ冷たい風が頬を叩いていく。最初に座り込んだのは、朱宮だった。彼女に釣られるように、一同は次々に腐葉土と砂が混じった地面に腰を付けていく。

「なんでいきなり樹海が砂漠になるんだ～よ」

「温暖化現象が進んでいるんじゃなのか？」

「はあ？　何だ～よ、それ」

「こっちの話」

エマニエルをうつ伏せに寝かせ、中也は大きく息をつく。疲れが雪崩のよう
に押し寄せる。今ごろになって、チャチャブーたちに切り刻まれた傷が疼き始
めていた。

「これから、どうする？」

しばらく無言で座り込んでいた彼らの沈黙を破ったのは、光宮だった。砂漠
の夜は明るい。彼女の薄い色をした金髪も、気の強さを物語る翡翠色の瞳を宿
した整った顔立ちも、新品だった制服も、何もかもが血と泥に汚れて、無残な
姿に成り下がっている様子が手に取るように分かる。

「まず傷の手当てをしよう。それから、枝を燃やして煙を上げる。どう考えて
も砂漠を渡るのは無理だ。ここで助けを待つしかない」

「……いつもながら妥当な意見ね」

苦笑しながら、彼女は軽く溜め息をついて立ち上がる。

「まだ動ける人、いる？」

光宮が一同を見渡せば、シヴァが一人、手を上げて見せる。

「カラ元気ってヤツ？」

「そういうことだ～よ」

「じゃあ、あんた。悪いけど燃やす枝を集めてちょうだい」

「はいは～い」

シヴァが重い腰を上げるのを見た後で、光宮は夏葉が背負っていたカバンを

手に取った。そしてその中身を見て、僅かに顔色を変える。

「ねえ、薬ってこれだけ？」

「残りは、中也のカバンに……」

夏葉が言えば、全員の視線が中也に向いた。しかし、彼はカバンを持ってい

ない。

「あんた、カバンはどうしたの？」

「コンガの群れに襲われた時に……」

朱宮に奪われて投げ捨てられた、と言おうか止めようか迷った挙句に口を閉じる。済んでしまったことを、蒸し返しても意味はない。

「そう。まあ、仕方ないわ。薬の数が限られているから、全員の手当ては無理。悪いけど、重症の僕ちゃんを優先するわ。傷が化膿する前に、秋軍が見つけてくれるのを祈るしかないわね」

「……手伝うよ」

中也は軽く息をつき、シヴァのカバンから勝手にライターを取り出して、着火する。エマニエルの背中を照らし、中也は思わず顔を顰めた。彼の負った火傷は、予想以上に酷い状態だった。焼け爛れ、血が滲んだ背中からは、ところどころに剥がれてしまった皮膚が垂れ下がっている。制服が溶けて、皮膚にくっついている場所もあった。

「俺たちじゃ手に負えそうにない。早く療風堂に連れて行かないと、

死ぬぞ」

「何もしないよりマシだと思わない？」

彼の傷を目の当たりにしても、顔色ひとつ変えない光宮は手早く水が入った

ビンを取り出し、痩せて骨が浮き出た細い背にかけていく。一瞬、エマニエル

が呻き声を上げたが、すぐにまた意識を失った。

「喚き散らさないでくれて助かるわ、僕ちゃん。できることはするから、あと

はあんたの気力しだいよ」

光宮は簡単に洗浄を済ませた後で、塗り薬をつける。そして中也がエマニエ

ルのスラックスを捲り上げ、そこに光宮が残り少ない消毒薬で切り傷を手当て

していく。上半身の怪我を手当てするために、二人は慎重に残った制服に手を

かけ始めた。しかし、エマニエルが気を失っていることもあり、なかなかうま

くいかない。

「手伝う」

頭上から降り注いできた声は、夏葉のもの。その後ろにはレイとルナが疲れた顔で立っていた。

「助かるわ。背中に負担をかけないように、慎重にお願い」

「分かってるって。ルナ、夏葉。あたしが支えるから、その間に腕を抜いてくれ」

「うん」

「分かった。レイ、気合いれなよ」

頷いたレイが正面からエマニエルを抱き起こす。その間に、素早く両脇からルナと夏葉で制服を引き抜くが、一部が背中に張り付いているために、うまくいかない。

「そのまま。慎重に剥がすから」

中也にはとてもできないことだったが、光宮は真剣な顔で皮膚に

くっついた

制服を剥がし始める。上半身の制服を脱がしたところで、体温が下がらないよ

うに中也は自分の制服をかけてやる。そして目に付く傷を素早く手当てしてい

った。

両脇に大量の枝を抱えて戻ってきたシヴァが、中也の手からライターを取り

戻し、樹海の木々から少し離れた砂漠の砂の上で焚き火を始めた。

「手が痛い……。まだ、血が出てるわ」

星空にうっすらと煙が漂い始める。一方、中也たちは五人がかりでようやく

エマニエルの手当てを終え、彼を地面に寝かしつけたところだった。気力も体

力も尽き果てた彼らがそれぞれ思い思いに地面に体を横たえ始めた時、どこか

訴えかけるような朱宮の声がして、彼らは無意識に振り返った。

「こんなヒドいケガしたの、初めてだわ」

涙交じりの声で言われ、中也は思わず呆れて視線を夜空に向けた。

「あっそう。いい経験になったじゃない」

相手にする気力が残っていなかったのか、さすがの光宮も冷たく言い放った

だけで地面に寝転がったまま起き上がろうとさえしない。

「そんな言い方しなくてもいいじゃない！　血がまだこんなに！」

「少し黙ってくれない？」

朱宮の言葉を遮ったのは、ルナだった。胸元のドレスを強く握り締めた彼女は、

ひどく傷ついた顔で一同を見渡し、そのまま引き寄せた膝に顔を埋めて泣き声を

上げ始めた。

「誰かどうにかしろ～よ」

「ほっとけばいいじゃない。いちいち相手になんてしてられないわ」

朱宮の泣き声を聞きながら、彼らは泥沼に引きずられるように意識を手放して

いた。その上空を一人の秋軍兵士を乗せたかプラスが旋回していたことを、知る

由もなく……。

遅延４５（後書き）

昨日、あとがきに書こうと思って忘れておりました。

ハンマーヘッド、無事に復活しちょりま～す（笑）

邂逅４６

一晩をかけて地底を旅してきた太陽が、再び東の果ての地へと辿り着こうとしていた。薄青に染まり行く世界がゆっくりと色彩を取り戻しつつある時刻。

「将兄！！」

執務机に座ったまま、うつらうつらしていた彼は、ドアが破れんばかりの勢いで入ってきた見慣れぬ顔の青年により、心地よい夢の船から強制的に引きずり下ろされていた。

「たった今、報告が！！　見つかりました！！　樹海Ｘ５エリアと砂漠Ｘ３エリアの合流地点です！！」

入ってきた兵士は秋軍を意味する真っ白な軍服を着用している。

どうやら、報告を受けるなり正規の手続きを無視して知らせに来てくれたらしい。

睡眠を妨害

されたことに、多少、苛立たしさを感じないでもなかったが、肌寒ささえ感じる

時刻であるにも関わらず、額に汗を浮かべて肩で息をしている兵士を見ると、さすがの彼も嫌味を言う気分にはなれなかった。

「ご苦労さん」

彼が笑いかけると、兵士は緊張した面持ちに一瞬だけ笑顔を覗かせる。

「悪いが四軍将を全員、叩き起こして来てもらえるか？」

「了解いたしました！！」

折り目正しく敬礼した兵士は、入ってきた時と同様、全速力で執務室を駆け出していく。その後姿を見送りながら、彼は机の上に投げ出していた煙草に手を伸ばした。

「朝も早くから元気なのは若さゆえ、か」

短くなった蝋燭の炎に満たされた空間に、紫煙が舞った。

「年寄りには真似できないな」

自嘲するように笑った時、四人の軍将たちが颯爽と姿を現す。兵士を呼びに行

かせてから、まだ五分も経過していない。いつもながら待機していたとしか思え

ない素早さである。

「話は聞いたな？」

開口一番に言えば、四軍将がそれぞれ真剣な顔で頷いた。

「夜明けと同時に秋軍を編成して、雪山を越えて救出に向かう。生徒たちを発見

し次第、秋軍でデクスター海岸まで運んで、そこから夏軍の船を使ってシエンナ

内海を渡る。ホーランド港に到着したら春軍で馬車を編成しろ。ハンターが使う

ルートだ。生徒を連れて雪山を越えるより、その方が安全だ。それから冬軍将。

帝都の交通整備を任せる。時期・国王がお乗りの馬車だ。そこらにある普通サイ

ズのものを使うわけにはいかないからな」

「了解いたしました」

一礼して退室しようとする四軍将たちを、彼は引き止める。

「話は最後まで聞け。俺の銀介を厩から出しておいてくれ」

「は？　将兄も出られるのですか？」

金髪を背に束ねた春軍将が僅かながら意外そうな顔をしたので、彼はニヤリと

笑う。

「一国の姫君が二人もいるんだ。派手にやってやろうじゃないか。お前らも来い。

命令だ」

「年寄りに空路を行けをおっしゃいますか？」

あからさまに嫌そうな顔をするのは、深い藍色の髪を短く整えた夏軍将。その

横で、秋軍将が溜め息を零した。

「何だかんだ言って、ひと暴れしたいだけなのではないですかな？　ここ最近、

将兄は執務室に缶詰されていましたから」

椅子から立ち上がり、彼は脱ぎ捨てていた軍服の上着に袖を通した。

「否定はしない」

そう言った後で、ふと四人の軍将を振り返った将兄の秀麗な美貌に意地の悪い笑

みが浮かんでいるのを目の当たりにし、彼らは嫌な予感が全身を駆け抜ける。

「俺は生徒たちを発見したら夏葉を連れて先に帰るから、姫君たちの護送は任せる。

何かあっても責任は取らないから、よろしくな」

「なんて身勝手な……」

雪のように白い髪をした冬軍将が苦虫を噛み潰したような顔で本音を漏らすと、将

兄がこれ以上ないほど幸せそうな笑顔を作って見せる。

「そう言うな。軍は国王陛下のお膝元にあるということを見せ付けるための大事な演

出だ。必要だろ?」

「言い訳はけっこうでございます。我々がいない間に夏葉さんを執務室に連れ込んで

仕事中に不謹慎な行為に及ぶおつもりでしょう？」

「心外だな。夏葉はボケッとしているが、書類の整理が早いから使い出があるのに」

「……すでに連れ込んだ後でございましたか」

春軍将が深い溜め息を落とせば、将兄は声を上げて笑ってみせる。

「お前たちの監督が行き届いていない証拠だ。それより、フィールドに一週間近くいたんだ。無傷でいるはずはない。千鶴に連絡することも忘れないようにな」

「ああ、お母様ですか」

夏軍将が敢えて確認するように言ってしまうのは、今をもって療風堂の代表がこの青年の母親だという事実を受け止めきれないでいるせいだ。

「出発時間のギリギリにした方がいい。千鶴は夏葉と同じで低血圧だから、朝早く起こすと機嫌が悪い」

「さようで。将兄、どこへ？」

きっちりと軍服を整えた彼の背に、秋軍将の声がかけられる。

「武器庫」

当たり前のように言って、咥え煙草のまま颯爽と執務室を立ち去ってしまう彼を見送り、四人の軍将たちは互いに顔を見合わせる。

「ひと暴れで済ますつもりはなさそうですな……」

＊

気絶するように眠っていた中也は、周囲を取り巻いている熱にうなされて目を覚ました。意識が覚醒すると同時に、視界に飛び込んできた砂漠に愕然とする。思わず飛び起きたところで、夕べ無我夢中に樹海を走っているうちに砂漠へ出てしまったことを思い出した。

「本物の砂漠だ……」

絵や映像で見たことはあったが、実際に砂漠を目にするのは初めてだった。こんな状況でなければもう少し感動なり何なりできたかもしれないが、数

分後に生きている

かどうかも曖昧な今、とてもそんな気分にはなれなかった。

「あら、中也。起きたの？」

軽い足音をさせて樹海の方からやってきた光宮は、大小の枝を大量に腕に抱えてい

た。彼女は中也を見ても立ち止まることなく、そのまま砂漠に向かって歩いていく。

大半が燃え尽きてしまった焚き火に歩み寄ると、新たな枝に火を付け始めた。

「静かね。砂漠ってこんなものなのかしら」

仲間たちを見れば、光宮と自分の他に目覚めている者はいない。誰もが死んだよう

にっていた。中也は深く息をすると、立ち上がって彼女の隣に並び、長い枝の端を手

に取った。無意味に枝で焚き火を突っついていると、燃え尽きて炭化した枝が崩れて

砂漠の砂を黒く汚していく。

「……現実問題、どれくらい持つ？」

太陽の昇った砂漠は予想以上に暑い。火の傍にいれば、なおさらだった。しかしながら湿気がない分、気温の割に過ごしやすい方だと言えるかもしれない。

「きちんと数えてないから、正確なことは分からないわ。でも保存食はともかく、水はまた探しに行かないといけないかもしれない」

「そうだよな。水っていうか、川があった方向、覚えてるか？」

「覚えてるわけないでしょ？　逃げ惑って来たのよ？」

二人は樹海の方に戻って木の陰に座り込んだ。時折、風が吹き抜けていく音が聞こえる以外、何の音もしない。不気味なほどに、静かだった。

「この気温だし、水が無ければ三日が限界ね」

「昨日までの雨が嘘みたいだな」

自嘲するように笑い、中也は手元の小石を拾い上げて砂漠に放り投げた。

「それに、捜索している秋軍が私たちを見つけたとしても、実際に救助してもらえる

まで時間がかかるわ」

隣に座る光宮に視線を向けた後、彼は再び小石を砂漠に向かって投げた。

「レウスみたいなモンスターが来たら逃げざるを得ない。元の場所に戻るのが危険だ

ったら、また探してもらわないといけない。そういう意味か？」

「それもあるけど」

難しい表情のまま、彼女は膝を引き寄せた。

「秋軍がどこにベースキャンプを張っているか知らないけど、一旦そこに戻って、そ

こから帝都まで報告に行くのに、上空から雪山を越える最短ルートを使っても半日は

かかるわ。そして報告を受けた将兄が命令を出して部隊を編成して、出発の準備が整

うまで数時間。ついでに部隊がここに到着するまで、更に半日……」

「待っている間に、モンスターの襲撃が無い保証はない」

「そういうこと」

自然、溜め息が漏れた。先の見通しは依然、暗いまま。それに、

助かるかもしれな
いという希望が見えている分、いつあるとも知れないモンスターの
襲撃に怯えつつ、
ただ待っていなければならない時間に感じるストレスは、より大き
くなるだろう。

「エマニエルが耐えられるかな？」

彼の性格もさることながら、背中に火傷を負い、止血と手当てはしたものの、体中
に負った切り傷は彼が一番多いはずだ。助かるかどうかは、五分と五分。医者でも無
ければまともな医薬品もない自分たちに彼を救う手立てはないに等しい。

「さあ。できることはしたから、本人の気力にかけるしかないわ。でも、ああいう性
格のヤツって意外としぶといモンだって相場は決まってるから、大丈夫なんじゃない？」

「だといいけど」

あくまで前向きな光宮に、中也は苦笑を漏らす。

「あと、問題があるとすればお姫さんかな。光には悪いけど、夕べ

はお姫さんのせいで
ヒドイ目に遭った。秋軍が見つけてくれるまで、大人しくしておいてくれるのを願うしかない」

「それは違うわ。女神に祈るとしたら、こうね。どうかこれから姉さんがしでかすことが、少しでもダメージが少ない事でありますように。でしょ？　姉さんが何もしでかさず、大人しくしているなんてこと、有り得ないもの」

「……違いない」

中也は溜め息交じりに軽く笑い、目に付いた小石を手に取ってみる。それを砂漠に投げようとして、ふと夕べのレウスのことを思い出した。

「なあ、光」

「なに？」

「お前が退治した、あのレウス。何か妙なところなかったか？」

「妙なところって？　私には普通のレウスにしか見えなかったけど」

光宮が首をかしげたところで、シヴァと夏葉が目を覚ました。起き抜けの二人に同じ質問をするが、やはり二人とも何も変わったところはないと言う。

「お前は何か気づいたの～か、中也？」

「いや、根拠は無いんだけど。俺たちが最初にレウスを見たのが、最初の夜だったよな。それから六日。ほとんど毎日のように、レウスを見てないか？　そもそも、樹海にレウスはいないはずだろ？」

彼が言うと、光宮が僅かに顔色を変えた。

「そう、ね。レウスは普通、火山に生息するモンスターだもの。樹海にいるのはレイアよ。交尾期に森丘に来る以外、滅多に縄張りを移動することはないはず。少なくとも、ギルドはそういう報告はしてないわ」

「だろ？　それに……」

「何の話？」

言いかけたところで、疲れた顔をしたレイとルナが話に加わった。

を除き、彼らは大木の下に円陣を組む格好になる。二人に簡単な説明をした後、中也は話の続きを語った。

「それに、レウスは昼行性だ。レウスだけじゃない。体が大きい飛竜種は体重が重いから、上昇気流に乗らないと空に上がれない。上がれたとしても、火球を吐くために後ろ足で地面を蹴って、翼でバランスを取る程度だ。だからレウスは昼間しか行動しないんだ。砂漠にいるティガとかは夜行性らしいけど」

「レウス、夜目が利かないみたいだったよ～な」

「でもあたしらが見たレウスは真夜中にウロウロしてたじゃねえか」

勢い込んだように言うレイに、中也は視線を向ける。

「そうだよ。だからおかしいんだ。それに、俺たちはレウスから逃げてばかりいた。言い換えれば、レウスが俺たちを追いかけていたとも言えないか？」

「……それ、何だか怖い話だね」

神妙な顔で言うルナに、それぞれが頷いて見せるが、光宮だけは疑問を浮かべる。

「でも、アルテリアには人間に従うモンスターがたくさんいるじゃない。秋軍が乗っているカプラスに、急ぎの馬車を引いているドスランポス。銀レウスをペットにしている人だっているのよ？　誰とは言わないけど」

「レウスが簡単に人間に従うか～よ。将兄は特別かもしれないけど、カプラスにしろドスランポスにしろ、どれも子供のころから人間が飼い慣らしているモンスターだ～ろ？　だから肉食獣の卵ってゆ～か、モンスターの卵をフィールドから持って帰ればギルドから特別に報酬が出るんじゃなかった～か？」

「鬼龍じゃない？」

口を挟んだのはルナだった。

「鬼龍は森羅万象と時空を操るんでしょ？　他のモンスターを従えることくらい、で

きてもおかしくないよ。私らをここに連れて来たのは鬼龍なんだから、レウスがその

鬼龍に従っていたとしても、不思議じゃないと思うけど」

「……だとしたら、鬼龍は俺たちの行動をずっと見ていたのかな」

中也の言葉に、一同がしんとなる。伝説によれば、鬼龍は遥か彼方を見通す千里眼

を備えているらしい。何も樹海に来て後を付ける必要はない。可能性としては、充分

に考えられる。

「鬼龍のバックにいるヤツはよほど俺たちを始末したいのか～な」

「かもしれない」

中也は無意識に唾を飲み込む。仮に鬼龍が自分たちを見ているとしたら、ここにも

モンスターを送って来るだろう。ただ、レウスは光宮が倒してしまったから、やって

来るとしたら別のモンスターになるだろうが。砂漠にいるモンスターと言えば、ディ

アブロス、モノブロス、ダイミョウザザミ、ガレオス、それにティガレックス……。

どれも遭遇したくないモンスターばかりだ。

「移動、する？」

事態を察したらしい光宮が緊張した表情でそう言ってきた。

「いや、千里眼があるならどこへ逃げても無駄だ。俺は下手に移動して体力を消耗するより、見晴らしが利くここで助けを待っているべきだと思う」

反論は無かった。少しの間を置き、中也は少し離れた場所で安らかに眠る朱宮とエマニエルに視線を向ける。

「二人には、言わずにおこう。言ってもパニックになるだけだ」

「賛成」

両手を広げて、レイが呆れたように言った。

「じゃあ、そういうことで静かなうちに腹ごしらえしない？」

明るい声で立ち上がった光宮に、反対する理由は無かった。彼らは昨日の朝、保存食を水に溶いて食べたきり、何も口にしていない。空腹でないはずはなかった。

「お姫さんたちを起こそうか。エマニエルはともかく、お姫さんは腹減ってるだろ」

あっぱれとしか言いようがない朱宮の食欲を思い出したのか、レイとルナが苦笑し

ながら朱宮とエマニエルを起こしに行った。その間に、光宮と夏葉が、カバンから小

さめの鍋を取り出し、味気ない保存食の封を切って鍋に入れ、そこに水を注いでいく。

鍋は塔の食堂から失敬してきたもので、人数分の器を持ち運ぶよりは荷物が少なくて

済んだ。光宮が枝で鍋を掻き回しているところへ、朱宮が起き出してきた。彼女は無

意識か意図的かは知らないが、食べ物がある方へと近づいていく。

邂逅47

「また、それか……」

鍋の中身を見るなり、彼女は泣きそうな声でそう呟いた。

「これしかないんだから、我慢しなさいよ」

「甘いものが食べたいわ」

「はいはい」

朱宮を適当にあしらいつつ、光宮は手早く鍋を掻き混ぜて保存食を食べれる

状態にしていった。エマニエルは起きてくる気配はない。背中の火傷を思えば、

当然のことのように思えて、彼女は深く追求しなかった。

「こっちで食べようよ。少しは涼しいから」

砂漠から少し樹海に入ったところをルナが示したので、中也とシヴァが二人

のいる方へ歩み寄る。砂漠にいるモンスターは地中を移動するガレオス以外、

ほとんどが夜行性だと言う。改めて砂漠を見渡せば、時間が経つに

つれて強烈
になっていく日差しに目が焼かれる。モンスターたちが敢えて夜に行動する理
由が、分かった気がした。
「持っていくわ」
軽く息をついて立ち上がった光宮が鍋に手をかけようとした時、朱宮がその
手を止めた。
「私が持つわ」
意外な申し出に、光宮だけでなく夏葉も僅かに眉を上げる。
「私、何もできないんだもの。光ちゃんは怪我してるし、それくらい私がやる
わ」
光宮と夏葉が顔を見合わせる。迷っている間に、勢いづいて立ち上がった朱
宮が鍋を手に取った。
「さあ、早くゴハンにしよう？　ね？」

屈託のない笑顔で言われれば、返す言葉がない。ありがとうと言うべきなのかどうか迷っているうちに、朱宮は中也たちがいる方へ歩き出し始めた。そして……。

「あっ！！」

鍋を抱えて数歩進んだ時、砂漠の砂に足を取られて朱宮が盛大に転んだ。

「さすが」

その光景を目の当たりにした中也の口から出た第一声は、すでに諦めともとれる一言であった。残り少なかった保存食と貴重な水は、当然、砂漠の砂の上に散らばってとても食べられる状態ではない。最早、怒る気力も残っていない

彼らは、ただ深い溜め息を落とす。

「ごめんなさい！！　私ったら、ドジで！！　本当にごめんなさい！！　すぐに作り直すから！！」

そういう問題ではないという気がしたが、誰も何も言わない。

「いいのよ、姉さん。あんたに任せた私がバカだったわ。何もしなくていいから、とにかく黙って座っていてくれる？」

「ごめんなさい……」

涙をホロホロと流しながら、中也たちの方に歩み寄ってきた朱宮は、ペタンと地面に座り込み、膝を抱えて泣き声を上げ始めた。その様子に、一同は更に深い溜め息を落とした。

「とにかく食お～ぜ。俺、腹減って死にそ～だ」

「そうね」

光宮が再びカバンの中から保存食を取り出そうとした時だった。どこからともなく、巨大な羽音が聞こえてきた。一同は顔色を変える。予想されていた最悪の事態が起きたことは確認するまでもない。

「せめてメシ食うまで待ってくれよな……」

レイが搾り出すように言うと同時に、素早く朱宮を羽交い絞めにして口を塞ぐ。何が起きたか理解できず、暴れだす朱宮の正面に回ったルナが口元に人差し指を翳して見せた。

「死にたくなかったら、静かにしなよ」

声音を荒げるわけでもなく、乱暴な口調でも無かったが、真っ直ぐに見つめながら強く言えば、さすがの朱宮も迫力負けしたのか静かになった。

「エマニエルを助けないと。シヴァ、手伝ってくれ」

「あたしの方が適役だ。あんたはお姫様のお守りをよろしく」

動き出そうとしたシヴァに、レイが朱宮を押し付ける。中也とレイは互いに頷きあい、横たわったままのエマニエルに向かって駆け出した。距離はない。

二人はすぐにエマニエルの傍に辿り着く。

うつ伏せで意識を手放している彼を正面から抱き起こそうとした

時、二人の
目の前に、本来、夜行性であるはずの巨大なティガレックスが舞い降りてきた。
静かな砂漠に、砂塵が舞う。長い尾に、鋭い爪。黄色に青がかかった不気味な
体表は、その凶暴さを表すかのように、今は癒えた無数の傷跡が走っている。
同じ飛竜種だがレウスに比べてやや小ぶりな体格は、上昇気流のない夜間の滑
空飛行に適している。しかしその分、異様に発達した腕や足の筋肉が際立って、
まるで巨大な肉食コウモリのように見える。皮膚が太陽光を反射してテラテラ
と気味悪く光っているのは、砂漠の熱から体表を守るために、粘液が体を覆っ
ているせいだ。風が肉食獣に独特の腐った臭いを運んでくる。
　幸い、ティガは中也たちに気づいてはいない。ここにいることは知っている
のだろうが、どこにいるかまでは分からないのだろう。ティガは眩しそうに瞬

きを繰り返しながら、空高く鼻面を突き出し、「何か」を探すように空気の臭
いを嗅いでいた。

「頼むから気づくな～よ……」

祈るように呟きながら、シヴァは慎重にエマニエルを物陰に運ぶ二人を見守
っていた。腕の中の朱宮が震えている。

「げほっ！　げぼっ！！」

声を抑えながら泣き続けていた朱宮が突如として嘔せた。その瞬間、中也は
天におわす女神が彼らの願いを聞き入れてくれなかったことを悟った。

邂逅４８

「逃げろ！！」

振り向いたティガが彼らの姿を捉える。血も凍るような咆哮が空気を震わせ、

鋭い音を立てて噛み鳴らされた牙の間から異臭のする唾液が滴り落ちた。ティ

ガの筋肉が緊張すると同時に、エマニエルを引きずる中也とレイに向かって一

目散に突進してきた。

「中也！！　レイ！！」

間一髪、レイがエマニエルを投げ飛ばし、自分たちも地面に飛び込むように

して突進を交わす。あの巨体に加えて、あのスピード。爪にかけられずとも、

まともにぶつかれば確実に命はないし、固い鱗に覆われた体表がかすっただけ

でも、脆い人の皮膚は簡単に破れて血が噴出する。ティガが突っ込んだ木々が

薙ぎ倒され、地面に飛び込んだ衝撃で全身を打ち付けた中也の頭上に大小の枝
が降り注いできた。

「私が引き付けるから!!　早くエマニエルを!!!」

砂漠に向かって飛び出したのは光宮だった。その後ろに、夏葉が続く。軽く
頷いて、シヴァとルナが枝に埋もれた三人の方へ向かった。

「こっちよ!!　聞こえてるでしょ!?　こっちに来なさい!!!」

砂漠の砂に足を取られて転びそうになりながら、光宮が大声を出してティガ
を呼ぶ。その声が聞こえたらしいティガの視線が、光宮と夏葉の姿を捉えた。

「中也!!　レイ!!　しっかりしろ!!」

その間に、ルナとシヴァが中也たちが埋もれている枝を掻き分け始めた。

「大丈夫〜か!?」

「何とか!　それよりエマニエルを!!」

「分かってる〜よ!!」

枝を取り払っていけば、苦痛に顔を歪めた中也とレイの姿が見える。彼らの

体の下から引きずり出すようにして、エマニエルを受け取った。

「大丈夫！　まだ息がある！！」

咄嗟に呼吸を確認したルナがそのままエマニエルをシヴァに預け、弓矢を構

えて砂漠に飛び出していく。身を起こした中也は、体の痛みに顔を顰めながら、

慌ててルナの背に声をかけた。

「ルナ！　危ない！！　止めろ！！」

「黙って見てられないよ！！」

矢をつがえ始めたルナの目の前で、ティガの突進を避けた光宮と夏葉が砂に

飛び込んだ。砂が舞い上がり、一瞬ティガの姿が砂煙に隠れる。再び姿を現し

たティガは、真っ直ぐにルナに向かっていた。矢を放つ間も、横に飛んで避け

る間もなく、すぐ目の前に迫ったティガの巨体を、彼女は咄嗟に巨

体の下に潜
り込むようにして避けた。頭上を通り過ぎていくティガ。全身が砂
を被ったが、
奇跡的に傷は負わずに済んだ。

「ルナー！！」

砂煙の向こう側にいるだろうルナに向かって光宮は叫び声を上げ
る。答えを
待つ間もなく、疾風の勢いで砂煙の中から現れたティガが彼女と夏
葉に向かっ
て突進してきて二人は慌てて横に飛んだ。

「きゃあああああ！！　もう、いやあああああ！！」

「お姫さん！！」

中也とシヴァでエマニエルを枝の中から引きずり出していた時、
絶叫を上げ
ながら朱宮が走り出す。咄嗟にシヴァが後を追った。

「シヴァ！　おい、待て！！」

一人ではエマニエルを抱えきれない。中也は思わず引き止めたが、
すでにシ

ヴァは朱宮を追いかけている。

「ちょっと！！　悪い！！　足が……！！」

すぐ近くからレイの声が聞こえて、慌ててそちらを振り向けば彼女の足が大

きな枝の下敷きになっていた。

「中也！！　早くして！！　まだなの！？」

光宮の声に咄嗟に振り向けば、砂だらけになっている光宮が必死の形相でテ

ィガと彼を見比べていた。

「分かってるよ……！」

中也はいったん、エマニエルを枝の散らばる地面に横たえ、レイの足を繋ぎ

とめている大きな枝の下に、別の枝を突っ込んだ。テコの原理を使って持ち上

げれば、自力でレイが足を引き抜く。

「大丈夫か？」

「……折れたかも」

何とか笑おうとしているものの、彼女の額には大粒の汗が浮かんでいた。

「歩けるわけないよな？」

「何とかするよ」

言いながら、レイは片足を引きずって移動し始めた。

「悪い。僕ちゃんを、よろしく」

「……がんばる」

意識を失っている人間は重い。中也はエマニエルを引きずる腕に全力を込めた

が、一人ではなかなか前に進まない。額に汗を浮かべながら、火事場の何とやら

でかろうじて大木の近くまで行った時、砂漠から駆け戻ってきたルナがエマニエ

ルの腕の下に自分の肩を入れる。ようやく幹の裏に身を隠し、エマニエルを横た

えた時、泣き喚く朱宮の手を引きずりながらシヴァが戻ってきた。砂漠でティガ

を引き付けている光宮と夏葉を除き、何とか六人が樹海の大木の陰

へ集まること
ができた。
「光！！　夏葉！！　もういい！！　早くこっちへ！！」
こっちへ来い、と叫ぼうとした時だった。光宮と夏葉に向かって突進していた
ティガが、彼女たちの目の前で突如として制止する。突進が来ると思って、すで
に砂に飛び込んでいた二人に向かって、ティガが鋭い爪を振り上げる。

＊

「光！！　夏葉！！」
中也たちの声が聞こえた。目の前には、真っ青な空に高く振り上げられたティ
ガの爪。あまたの獲物を引き裂き、血祭りに上げてきたであろうその黄色く濁っ
た鋭利な爪が、やけにゆっくりと、自分たちに向かって振り下ろされる。何が起
きたのか理解する間もなく、思考が真っ白になった。

砂の上に転がったまま、光宮と夏葉は無意識に互いを引き寄せ、強く抱き合っていた。襲い掛かる鋭利な爪を覚悟して固く目を閉じる。

「止めろー！！」

中也とシヴァは、形振り構わずに砂漠に飛び出していた。そこへ、巨大な影が舞い落ちる。この上、更に……と思わず頭上を見上げた二人の目に、砂漠の陽光を浴びて宝石のように輝く銀色の鱗が目に入った。

「銀レウス……？」

思わず歩みを止めた彼らの視線の先、今まさに光宮と夏葉に向かって爪を振り下ろそうとしているティガの前に、現れた銀レウスの背に騎乗していた一人の人物が降り立った。風に翻る外套。漆黒の軍服。そして、血のような赤い髪。背に携えていた大剣が抜き放たれ、ティガの爪を受け止めた。静寂の砂漠に重い音が響き渡る。

邂逅４９

「……？」

光宮は固く閉じていた瞳をうっすらと開く。恐る恐るティガの方を振り向けば、

自分たちとティガの間に、見知った人物の後姿が見えた。

「将兄……？」

大剣でティガの爪を受けたまま、将兄はティガの巨体を見上げる。秀麗な顔立

ちが嘲笑を浮かべると同時に、ティガが恐ろしいものでも見たかのようにその場

を飛びのいた。

ティガは彼に視線を注いだまま、全身を小刻みに震わせていた。長大な尾の先

が、空中でピクピクと揺れている。まるで逡巡するように、ティガの爪が幾度も

砂を掻き回した。構わずに、将兄は重量があるはずの大剣を軽々と片手で払い、

ティガに向かって真っ直ぐに歩いていく。そこへ、少し離れた砂の

上に着地した

銀レウスが咆哮を上げた。その声を引き金に、ティガは彼に向かって突進を始める。肉に汚れた牙が彼に届く直前、手にしていた大剣の刃が一閃する。ティガの

首が胴体を離れるのと、銀レウスがその体に噛み付いたのが、ほぼ同時だった。

「マジかよ！？」

轟音を上げながら、巨体が二つ、砂煙を道連れに、砂漠を二転、三転する。銀

レウスが首のないティガの胴体を咥えたまま中也とシヴァの立っていた場所へ転

がり込んで来て、二人は全力でその場を飛びのいた。未だ脈打っているらしい心

臓の鼓動に合わせて、ティガの首から断続的に噴き出した血液が砂漠の砂に染み

込んでいく。痙攣するティガの体からは膨大な量の血液が溢れ出し、激しい血の

臭いに思わず吐き気を催した。銀レウスがティガの体に後ろ足を乗せて押さえつ

け、強靭な顎で噛み付こうとする。しかし、すでに獲物が息絶えていると知って

悔しげな咆哮を上げ、後ろ足で地面を蹴って空に舞い上がった。唖然として二つ

の巨体を見つめていた二人の前に、待ち望んでいたアルテリア軍がカプラスに乗

って次々と降り立ってきた。

「京さま……」

砂を蹴って駆け出したのは夏葉だった。

「京さま!!」

人目も憚らず、夏葉は思い切り将兄に飛びついた。刃に付いてしまった血糊を

軽く振って落とした彼は、それを背に収めて、飛びついてきた夏葉を抱きしめる。

「遅くなった。悪かったな、夏葉」

「会いたかった、京さま!!」

将兄が血と砂に汚れた夏葉の顔に手を添え、夏葉は彼の首に腕を絡める。そし

て二人は当たり前のように深く口付けを交わした。その途端、周囲にいたアルテ
リア軍の兵士たちから羨望とも揶揄とも知れない拍手と歓声が上がり、張り詰め
ていたはずの空気が一気に瓦解した。
「ティガが一撃か～よ……」
砂の上に座り込んだまま、中也とシヴァは顔を見合わせる。
「すげえ……」
異口同音に、二人は呟いた。助かったのだ、という実感がようやく沸いてきて、
脱力しようとする体に任せ、砂の上に寝転んだ。空が青い。雲ひとつない空が綺麗
だと、今更のように思った。
「相変わらずラブラブねえ……」
他者が付け入る隙がないほど固く抱き合っている将兄と夏葉を見ながら、光宮は
軽く息をついて砂の上に座り込む。そのまま寝転んで空を見上げ、ぼうっとしてい

るところに、見慣れた褐色の肌に薄い水色の髪をした男の顔が映り込んだ。

「私、どうしちゃったのかしら。あんたのタヌキみたいな顔が女神に見えるわ」

自分を覗き込んでいる秋軍将に向かって呟くように言えば、彼がこれ以上ないほどの笑顔を浮かべて見せる。

「ご無事で何よりです、姫様」

「そう見える？　身も心もズタボロよ」

起き上がる気力もないまま本心から語れば、彼が笑顔のまま手を差し伸べてきた。

「さあ、まずは傷を手当ていたしましょう。食事も用意できてますよ。姫様のお好きなものばかり運んで参りました」

「……普通にメチャクチャ嬉しいわ、それ」

「ええ、そうでしょうとも」

差し伸べられた手を取って立ち上がる。促された先には、兵士たちによって簡易

なテントが張られ始めていた。砂漠の中に、白い布がとても眩しい。

「私はそんなに重症じゃないわ。エマニエルを先に手当てしてあげて」

思い出したように言えば、秋軍将がにっこりと笑った。

「ご心配なく。すでに手当てしておりますよ。代表がいらしてますから、何とかしてくださるでしょう」

代表、という言葉に、光宮は軽く眉を上げた。

「ホントに？　あの人、よく出てきたわね。日焼けするから嫌だとか言いそうなのに」

「代表も人の子ですからな。可愛い息子の頼みを断れなかったのでしょう」

「は？　息子？　誰のことよ」

質問の答えは返されることなく笑って誤魔化された。釈然としないままテントをくぐれば、すでに中也たちが揃って手当てを受けていた。

邂逅５０

「あらあ、光宮じゃない」

忙しそうに狭いテントの中を行き来している療風堂の夏堂隊員たちの中、一人だ

けふんぞり返ってレイの足を手当てしている白衣姿の女が、彼女の姿を認めるなり

ニヤリと笑いかけてきた。

「もっと参ってるかと思ったのに、元気そうで残念だわ」

「あんたも相変わらずね」

開口一番の嫌味を、軽く受け流す。普段なら噛み付いて返すところだが、今はさ

すがにその気力が無かった。

「お疲れなの？」

「ええ、とっても」

だから静かにしておいてくれ、と言わんばかりに、光宮は中也たちが座っている

場所に一つだけ開いていたイスに乱暴な仕草で腰掛ける。

「姉さんとエマニエルは？」

「夏堂の人たちが連れて行ったよ」

「そう」

軽く息をついたところで、医薬品を詰めた箱を持った夏堂の隊員が歩み寄ってきて、

傷の手当てを始めた。その様子を何とはなしに眺めながら、脱力している中也たちに

視線を注ぐ。それぞれ疲れきっているうえに満身創痍だが、生きている。それだけで

充分だという気がした。

「失礼しますよ」

中也は思わず声がした方に視線を向けた。入り口の布をくぐって入ってきたのは、

金髪を背に束ねた中年の男だった。纏っている軍服は黒で、裾が長い。無意識に胸に

光る階級賞を見ればオオナヅチだったので、春軍を束ねる春軍将だと目星をつけた。

将兄もさることながら、軍学校に通う一般の生徒に過ぎない自分が、

一日のうちに軍
の高官たちを一度に何人も間近に見れるというのは、なかなかない機会だと思った。

「お疲れのところを申し訳ありませんが、フィールドに長居はしたくないもので。動けますかな？」

彼は真っ直ぐに、中也たちが座っている方へ歩み寄ってきて、優しげな笑顔で話しかけてくる。声に出して答える元気が無く、それぞれが黙ったまま幾度か頷いた。

「とりあえず、デクスター海岸までは秋軍で運びます。海岸には夏軍の船が待機していますので、ゆっくりできますよ」

「何でもいいから、まともなモノ食べさせてよ。おなか空いて倒れそう……」

「はいはい。分かっております。さあ、こちらへ」

促されて、中也たちは重い腰を上げた。足に怪我を負っているレイには、夏堂の隊
員が付き添う。テントを出れば、強烈な日差しが目に飛び込んでく

る。手のひらで庇
を作りながら、きびきびとした態度で立ち回っている兵士たちと、欲求不満らしく砂
漠に向かって火球を飛ばしまくっている銀レウスの間を抜けて、コンテナのような木
の箱の前に連れて行かれた。四角形の大きな箱には、ところどころに硝子の窓が嵌め
込まれていて、上部には頑丈な縄が通されていた。縄の先には砂の上で退屈そうにし
ているカプラスがいる。

「窮屈かもしれませんが、少しの間、辛抱してください。日が暮れるまでには海岸に
着きますから」

箱の一角にはドアがあり、春軍将が自ら扉を開けて中也たちを促す。箱の中は大人
が六人、詰めて座れば何とか座れる程度のイスが左右に取り付けられており、その真
ん中には簡易なテーブルが備え付けられていた。

「今更ですが、姫様はこちらでよろしいので？」

「当たり前でしょ？」

わざわざ聞いてくるところを見ると、朱宮は別のコンテナにいるのだろう。さすが

時期・国王ともなれば待遇が違う。そんなことを思っていると、食事を乗せた盆を抱

えた兵士が数人、顔を見せた。

「待ってました～！！」

途端に、シヴァを始めレイもルナも光宮も顔を輝かせる。

「ごゆっくり。出発する時には声をかけますので」

さっそく運ばれてきた食事に手を伸ばす彼らに笑顔を向け、春軍将がゆっくりと

扉を閉めた。

「ゴハンがこんなにおいしいなんて、生まれて初めてだわ」

「同感。ここ最近、味もクソもない保存食ばっかりだったもんな」

「痩せたよ、私」

けっこうな量があったはずの食事は、あっという間に無くなってしまう。後を気

にせず、好きなだけ食べられるということが、こんなに幸せだとは思わなかった。

「雨水でも泥水でも無い～！！　ジュースだぜ～！！」

ビン詰めされていた果汁を一気に飲み干したシヴァが叫ぶように言えば、途端に

みな笑い崩れる。

「そう言えばあんたたち、濁流の中を泳いだのよね」

「そうだよ」

「あん時はどうなることかと思った～ぜ。まさかお姫さんまで溺れるとは思ってな

かったし～な」

「それよりさあ、コンガの臭い、まだ染み付いてない？　あんなに強烈な臭い、初

めてだよ、私」

食事がひと段落ついたところで、これまでのことを思い出して談笑が始まった。

生きるか死ぬかの瀬戸際だっただけに、話題は尽きない。ああだった、こうだった

と語り合っているうちに、外にいる兵士たちの雰囲気で出発が近いことを悟った。

「ようやく帰れるわね」

「ホントだな……」

「なんか一年くらいフィールドにいた気分だ～ぜ……」

その時、前触れなくコンテナのドアが開いて、顔を見せた人物に彼らは顔色を変える。

「将兄……」

条件反射で、中也たちは居住まいを正していた。

「お疲れさん。そろそろ出るからな」

随分と気安く、将兄は中也たちに笑いかける。

「夏葉」

「はい」

「海岸までは俺も付き添うことにしたんだが、お前はどうする？」

固まっている中也たちには構わず、将兄は夏葉に向かって普通に

話していた。

「みんなと一緒にいます」

「分かった。じゃあ、後でな」

想像以上にかっこいい。そう思っているのは、中也だけではないはずだ。光宮

だけは意に介さず、果汁を絞ったジュースを飲んでいたが、さすがのレイもルナ

も身動きひとつしていなかった。

「あ、待ってください」

ドアを閉めようとする将兄を、夏葉が引き止める。

「どうした？」

「中也とシヴァが、銀介に乗りたいって」

そう言えば、そんな話をしたような……。思い出して頬が緩んだところで、

将兄と目が合った。

「乗って帰るか？」

＊

太陽が西に沈んでいこうとしている。オレンジ色に染まった空の中を、カプラスに釣られた木箱に乗って運ばれながら、光宮たちは硝子の向こうで絶叫している中也とシヴァを眺めていた。

「すげー！　楽しそう！　いいなあ！！」

「羨ましい！　後で交代してもらおうよ！」

硝子に吸い付くようにして、レイとルナが銀レウスの背に乗って空を駆けている二人を見つめている。

「信じられない……」

そんな様子に深い溜め息を落としながら、光宮はイスの背に体重を預ける。

「私、レウスなんて当分、見たくない……」

抵抗できない眠気が襲ってくる。長かった旅路が、ようやく終わろうとしていた。

邂逅51

その夜。時計の針が日付の変更を告げようとしている時刻。硝子のケースに入れられた蝋燭の炎が照らし出す朧な光の中、エマニエルはうっすらと目を覚ました。

「……」

真っ先に目に入ってきたのは、見知らぬ天井。一瞬パニックを起こしかけたところで、鉛のように重い体が身動きひとつままならず、彼は力無く両腕を沈めた。静寂に包まれた闇夜に響き渡るのは、微かな潮騒の声。両腕を上げてみると、傷だらけになっていたはずの腕は丁寧に包帯が巻かれていた。

（助かったのか……？）

彼はとりあえず自らの身に危険が及ばないことを悟って全身の力を抜いた。

深呼吸して状況を確認してみる。彼が横たわっているのは、木でで

きた小さな
部屋だった。周囲には清潔そうなシーツが張られた寝台が幾つか並び、壁に据
えられた棚には医薬品と思われるビンが多数、敷き詰められていた。どうやら
医務室のような部屋であるらしい。今のところ部屋にいるのは彼一人だけ。ど
う考えてもアルテリア軍の施設としか思えなかったので、敵と思われる人間が
誰一人いないことは納得できたが、逆に治療を行うべき白衣姿の人間もいなけ
れば、自分を心配して脇に控えているべき人間の姿も見えないことに多少なり
と苛立ちを覚えた。しかしながら今は意識が朦朧としていて、とても説教をす
る気分にはなれなかった。
（誰か呼ばなければ……）
エマニエルは身を起こそうと腹筋に力を込める。しかしながら、まるで身体

全体が他人の手足になってしまったように思うようにならない。ここが何であれ、これだけの怪我人がいるのだから、すぐ近くに誰かいるはず。そう思って声を張り上げようとするものの、枯れてしまった喉からは、呻き声が漏れただけだった。

少し動いただけなのに、息が上がる。エマニエルは孤独に荒い呼吸を繰り返して、自分を心配して様子を見に来てくれる誰かを、ひたすら待ち続けた。

（喉が渇いた。もう死にそうだ……。誰かいないのか……。僕は冬軍の地方統括の息子だぞ……。こんな扱いをしていることが父上に知れたら、どうなると思っているんだ！）

不自由な体の中、そこだけ自由になる指先でシーツを引っかき、血が滲むほどに強く唇を噛み締める。闇夜を照らし出すには、あまりにも頼りない蝋燭の

炎の中、エマニエルは次第にはっきりしていく意識を持て余し、悶々と時を過ごしていた。

「あれ？」

何の前触れもなくドアが開いたのは、それから一時間も経たないころだった。

「寝てると思ってたのに、起きてるじゃん」

ようやく待ち望んだ医者が来たと喜んだ彼だったが、入ってきたのは夏軍を意味する真っ赤な制服を着用した“シヴァ”だった。

「シヴァ？」

掠れた声で名前を呼んだ時、エマニエルはふと違和感を覚えた。目の前にいる青年はシヴァよりも一回り体格が大きいし、何よりも髪が黒い。シヴァの頭は、目を覆いたくなるほどに派手な赤だった。シヴァよりも年上の、彼によく似た誰か。記憶に何か引っかかるものを感じ、思考を巡らせている

ところで、

青年の方から口を開いた。

「そう来ますか～。じゃあ、あの赤い髪のヤツ、やっぱシヴァか～。そうじゃ

ないかと思ってはいたんだけどな～」

頭を掻きながら、溜め息交じりに青年は語る。違うと分かっていても、似て

いる。姿だけではない。ちょっとした動作や言葉の端々に、自分が知るシヴァ

の面影が垣間見える。そしてエマニエルは、何日か前にシヴァが生き別れた兄

の話をしていたことに、ようやく思い至った。確か、名前も言っていたはず。

必死になって彼は曖昧な記憶を辿った。

「お前、もしかして幸也ってヤツか？」

ようやく思い出してその名を口にすれば、寝台の足元に立つ青年が微かに反応

した。

「それ、シヴァが言ったのか？　懐かしい名前で呼んでくれるね～。残念だけど、
その名前はもう使ってないよ」
　では、やはり間違いなさそうだ。青年は笑いながらエマニエルの枕元へ歩み寄っ
てくる。蝋燭の炎がその顔立ちを照らし出す。中也が言っていた以上に、幸也とい
う青年はゾッとするほど美しい顔立ちをしていた。
「お前……家出して夏軍に入ったのか？」
「夏軍？　いや、本業は一応ハンターってことになってるかな。これは借り物」
　笑いながら、彼は赤い制服を摘んで見せた。その瞬間、エマニエルの思考回路
は爆発する。
「ハンターがなぜ夏軍の制服を着てこんなところにいるんだ。それより、ここは
どこなのか教えてくれ。ついでに行き先は？　他のやつらはどこだ？　その前に、
何でここには誰もいないんだ？　だいたい、シヴァの兄が僕に何の

用だ？」

一気に捲くし立てられ、青年は整った顔立ちに苦笑を浮かべた。

「とりあえずここは夏軍の船の中で、行き先はアルテリア。お坊ちゃんと一緒にいた生徒たちは別室でお休み中。で、俺は別件の仕事をしてる真っ最中ってところ。おわかり？」

笑いながら言う青年を見ながら、何となく、エマニエルは不穏な気配を感じ取っていた。中也とシヴァの話によれば、幸也という人物は家族のために家出するようなお人好しだったらしいが、目の前にいる青年は、とてもそんな風には見えない。一見して優しげな青年ではあるが、澄んだ瞳の奥には恐ろしく冷たい色が宿り、纏っている雰囲気はまさしく冷酷そのもの。エマニエルは背筋に悪寒を覚え始めていた。

「で、お坊ちゃん。君に質問なんだけど。樹海の塔から持ち出した

資料、どこや
った？」
「え？」
顔色を変えた瞬間、エマニエルの喉元に銀色に光る刃物が押し付けられていた。
「どういうつもりか知らないけど、資料は全部、処分しろっていう命令なんだ。あんまり時間が無いんで、さっさと答えてくれたら助かるんだけど」
青年は相変わらず笑っている。蝋燭の炎を受けて、銀色の刃が不気味な光沢を
醸し出す。
「し、知らない。な、何の話だ」
エマニエルはパニックに陥って、咄嗟にそう言っていた。実際、塔から持ち出
した資料と言われても、今のエマニエルには何のことだかサッパリ分からない。
そんな彼の様子に、青年は大袈裟に溜め息を落として見せた。
「ガキのころに、嘘はいけませんって教えてもらわなかった？　お

坊ちゃんが資
料をパクるところ、俺、見てたんだからさ」

そう言われて、エマニエルははっとした。突然、樹海に連れて来られ、救助を
求めて目指していた南の建物。レウスやランポスに追われながら、ようやくそこ
に辿りついた時、そこにはオオナヅチという古龍の研究資料とともに、大量の人
間の死体が転がっていた。それを見た時、エマニエルは重大な不正の証拠を手に
入れたと思ったのだ。そして本国へ戻り、摘発すべきと信じて確かに持ち出した。

「まさか、お前……塔にいた……暗殺者……？」

ようやく、彼はその可能性に思い至った。脳裏に惨殺された死体の姿が蘇る。
モンスターに遭遇した時とは違う恐怖が彼の全身を支配する。額から汗が噴き出し、
あらゆる場所が小刻みに震え始めた。

「何と呼んでもらってもいいけど。それより、資料は？」

「せ、制服のポケットに……」

「ふ～ん」

エマニエルの喉元に刃を突きつけたまま、青年は片手で器用に傍らのイスにかけてあった制服のポケットを探る。息を詰めて見守るエマニエルの目の前で、皺になった紙の束が引きずり出される。

「ああ、これこれ。よかった。ちゃんと見つかって」

青年がにっこりと笑ったので、エマニエルは少しばかり安心した。コンガの爪に引っ掛けられて川に落ちた時、無くしていたらどうなっていたのか、考えるだけでも恐ろしい。

「よ、用は終わっただろ？　早く出て行ってくれ……！」

心の底から祈りながら、彼は早口に言った。

「うん。そうさせてもらうよ」

青年が肩の力を抜いたように見えたので、エマニエルも思わず息

をつく。緊張に
張り詰めていた空気が揺らいだ……ように思えた時、エマニエルは自分の首の一部
に、何か鋭利なものがチクリと刺さったような感覚を覚えた。
「悪いけど、俺の顔を見られてるから、このままってワケにはいかないんだ。一応、
極秘の仕事だからさ。即効性の毒だから、苦しまないよ。心配しなくて大丈夫～っ
て言っても、もう聞こえてないかな」
頚動脈には針で刺したような小さな傷跡。しかしながら、エマニエルは全身を痙
攣させ、口から泡を吹き始める。レイアの毒を仕込んだ短剣は、こういった場所で
の暗殺には、非常に都合がいい。
「自分を殺したヤツの名前くらい知っておいた方がいいかな。俺の名はフェンリル。
冥土の土産に持っていきな、お坊ちゃん」
待つほどもなくエマニエルは静かになり、見開かれた瞳孔が拡大する。最早、た

だの肉の塊となってしまった小柄な少年を見下ろし、フェンリルは薄く笑う。また

ひとつ、消えない罪を重ねたことを、自覚しながら……。

継続

邂逅５１（後書き）

お疲れ様でした～！　ここまで読んでくださって本当にありがとうございます！　妖乱舞の邂逅が、無事に終了いたしました～。

……まだ何にも解決しちょりません。

と、いうワケで、次回からサブタイトルを「始動」という形に変えスタートさせていただきます。うんざり……なさらずに、お付き合いくださいませ！！

内容はクエストです。（一応）プロのハンターに付き添われ、邂逅のメンバーがクック先生の討伐に出向きます。雰囲気をガラっと変えましてラブコメ風味になりますが……その水面化では暗躍している人たちがおります（笑）

１２月２６日、午後８時に始動の１話目をアップします！

……え？　何で一週間以上も空くのか？

他の先生方がお書きになられた小説が読みたいぃぃいいいいいいいいいぃぃ！！

もう我慢の限界です！　気になる小説はパソコンの傍に常備しているメモ帳にメモっちょります！！　誘惑に負けてすでに何作か拝見させていただきましたが……。

そして、自分の考えや思ったことなどを簡潔にまとめることが苦手なハンマーヘッドはムダに長い感想を送りつけるという暴挙を働いております（笑）

今のところ、怒られてはいない、か、な……？

もし、ここをお読みくださった先生方、あなた様がお書きになられた小説にハンマーヘッドがムダに長え～感想を送りつけても、どうか暖かい目と広い心でお許しくださいませ！

それでは、また次回！！

始動1　（ラブコメ）

妖乱舞～始動～

「あつい……」

熱気を帯びた空気に満たされた狭い空間で、向かい側に座る少女がシャツの襟をくつろげる。肌蹴（はだけ）られた胸元はしっとりと汗ばみ、緩くウェーブした長い金髪が、ところどころ無造作に張り付いていた。細い顎から滴り落ちた一筋の汗が白い首筋を伝っていく。やたらゆっくりと滑らかな肌を流れ落ちた汗の滴は、やがて胸の谷間に吸い込まれ見えなくなってしまった。

「あつい。まだ着かねえのかよ～」

少女が、自分の胸元に風を送りながら、そう呟いた。昼下がり、真夏に独特の茹だるような熱気の中、石畳の街を緩慢に進んで行く馬車の振動が、少女の豊かな胸を僅かに揺らしている。見てはならない、と思ってはいても、ついついそこに視線を向けてしまうのは、どうし

ようもない男のサガだ。彼女の名はレイシェル。通称レイだ。

（相変わらずスタイル抜群……）

レイは一見、トップモデルのようだと思う。緩くウェーブしたストロベリー・ブロンドに、紫がかかった瞳、豊かな胸、細く引き締まったウエストに、長く形の良い脚。レイは、どこからどう見ても、自分のような少年が気軽に話せるようなタイプの少女ではない。しかしながら入学式の一件があって以来、彼女とは良好な友達関係を維持していた。

（カッコいい系セクシーってところかな）

中也は、レイのことを密かにそう評価していた。

「レイ～。おっぱい揺れてる～ぞ」

中也の左隣に座っているのは、幼馴染のシヴァだ。これでもかと言わんばかりに真っ赤に染められた髪と、独特の間延びした口調がトレードマークの、元気で陽気な少年である。

「触りたい？」

「もちろ～ん！」

自分の胸を持ち上げて、レイが悪戯に笑う。思わず視線を逸らす中也とは対称的に、シヴァは身を乗り出してレイの胸を間近で覗きこんでいた。幼馴染の勇気が、呆れるようでとても羨ましい。自分には、とてもムリだ。

「じゃあ触らしてやらねえ」

「ええ～！？」

あっさり胸を隠してしまったレイの声に、シヴァの悲痛な叫びが重なる。彼のように行動と声には出さないが、その気持ちだけは、よく分かった。

「レイは嫌がる男をムリヤリってのが好きだからね。そっちが乗り気になったら、すぐ冷めるんだよ」

「それはお前も同じだろ、ルナ。あたしだけじゃねえよ」

「まあね」

レイの隣に座っている少女が、無造作に脚を組み替える。褐色の肌

に、腰まで届く銀色の髪。制服のボタンがきちんと止まらないほど大きな胸は、今日も白いシャツの下で窮屈そうに揺れていた。彼女はルナジュオン。通称ルナだ。

「あ～あ。どっかにイイ男、落ちてないかな～」

言いながら、ルナは手の平二つ分ほどの小さな窓に頬杖をつく。その時、馬車の車輪が石畳に開いた穴に嵌まったらしい。今までと違う大きな振動が、中也たちが座る荷台を揺らした。その際、ルナの長い脚と中也の脚が微かに触れ合う。スラックス越しとは言え、女の子の素足に触れてしまって、そこから脳に向けて電流が駆け抜けたような錯覚を覚えた。

「いい男なら俺がいるじゃ～ん」

「あんたはムリ」

シヴァの立候補を軽く一蹴し、ルナは気だるげな動作で髪をかき上げる。その時、彼女の耳に付けられていた鳥の羽根を模したガラスのピアスが露わになった。窓から差し込む午後の陽光が、小さな羽根を

照らし、キラリと輝く。細い指先に、真っ直ぐ伸ばされたプラチナ・ブロンドを絡めて吐息を零すその仕草は、とても同級生とは思えないほど大人びて見える。

（ルナは、お姉さん系のボインちゃんってところかな）

本人にはとても言えないが、中也は心の中でそう思っている。何より、全体的に細い体のラインには不釣り合いな胸が、イヤでも目につくのだから、そのあだ名は妥当に思えた。

「暑苦しい話題は止しなさいよ、もう」

シヴァとルナの話を割って入って来たのは、薄い色の金髪を丁寧に結いあげ、宝石が散りばめられたバレッタで纏めた少女だ。レイとルナが女の子にしては長身だから小柄に見えるが、少女の身長はアルテリアの１５歳女子の平均と変わらないはずだ。彼女の名は光宮（ひかりみや）。紛れもない、このアルテリア王国の第二王女、翡翠院（ひすいいん）・光宮その人である。

「どうせくだらない話なら少しでも気温が下がるような話にしたらどう？」

誰がどんな話をしたところで、暑いものは暑い。しかしながら、そういった常識には一切、頓着しないのが光宮だ。

「涼しくなる話ってどんなんだ～よ。氷菓子（アイスクリーム）の話とかか～な？」

「氷菓子なら食べないと涼しくならないじゃない。あんた、バカじゃないの？」

王女と聞くと、上品で健気で可愛らしい、いわゆる「守ってあげたくなる」タイプを想像しがちだが、光宮に関しては、そういったイメージはカケラほどもない。彼女は入学式での事件の折、やたら現実的な言動と行動をもってして「マタの間に第三の足をブラ下げる人種」をひたすら前屈みにしてくれたという衝撃の過去を持つ。無事にアルテリアに帰って来てからも彼女の性格は健在で、以来、中也は光宮のことを「下ネタ・プリンセス」と呼んでいた。

「そっちが振ってきたんだ～ろ」

「氷菓子の話をしろとは誰も言ってないでしょ。もっと知的に考えなさいよ、知的に」

「う〜ん……」

光宮のムチャな話題に、シヴァが真剣な表情で頭を使い始めた。左隣で頭を使われると、その時に発生する知恵熱というもので荷台の気温が更に上がったような気になる。幼馴染には悪いが、少し迷惑だった。

（黙ってればカワイイのにな、こいつ……）

改めて光宮を見ながら、中也はつくづくそう思った。セミロングのハニー・ブロンドに、翡翠色の瞳。顔立ちも欠点が少なく整っているし、何より声が可愛いらしい。しかしながら、一旦その薄桃色の唇を開けば、そこから飛び出してくるのは、聞くに堪えない下ネタか、そうで無ければひたすら返答に困るような自己中心的な話題ばかりだ。見た目と性格が一致していないと言えばレイやルナも同じだが、光宮に関しては「王女」という特殊な出世も相まって、より本人とのギャップを引き立たせていると思う。

（でも、なんかスゲ〜いい匂い……）

太陽が照りつける真夏の午後、風がほとんど入ってこない狭い空間に、合計6人が詰め込まれているのだ。中也の常識では、そういった空間は汗臭いものだと相場が決まっていたのだが、香料入りの石鹸で磨きたてられた女の子の肌からは、何とも言えない甘い匂いがする。同じ人間なのにどうしてこうも違うのか、不思議だった。

「夏葉はダウンね」

「そうみたいだな」

光宮の視線を追って、中也は自分の右隣に視線を移した。そこには、

窓に寄りかかるようにして眠っている夏葉がいる。陶器のような白い肌に、漆黒の髪、今は静かに閉じられている瞳は、吸いこまれそうな深紅。少年のようであり、少女のようでもある夏葉は、実のところ性別を持たない珍しい人種だ。アルテリアでは、夏葉のような人間のことを「胡蝶」と呼んでいる。

（どっちかって言うと、女の子だよな。本人の意識の上では男寄りみ

たいだけど）

少女ではないから、胸はない。しかし、少年ではない夏葉は自分たちのように「マタの間にブラ下がる第三の足」を持たない。悪い言い方をすれば「ドラム缶」体型である。

（でも、夏葉は綺麗だ）

初めて会った時は少年だと思っていたから、特に何も思わなかった。

けれど、夏葉のことを知れば知るほどに、否応なく惹かれて行く自分に気付いた。樹海からアルテリアに戻ってきて3カ月、夏葉に寄せる特別な感情は、強くなっていく一方だ。

（ジョーダンにしては笑えないよな。夏葉は将兄の婚約者だってのにさ）

将兄……アルテリア軍の最高峰に君臨する年若き美貌の青年の顔を思い浮かべ、中也は内心で深い溜め息を落とした。

（適うわけないよ。どう考えても）

若干２０歳で将兄に抜擢され、諸外国にまで名を馳せるその青年

は、

アルテリア中の女性たちが黄色い声を上げずにはいられないほど見た目がいい。おまけに、剣の腕も名実ともに「最強」となれば、冴えない自分が彼に勝るものなど、何もないと言っても過言ではない。けれど、夏葉のことが気になるのはどうしようもないのだ。理性ではムリだと分かっていても、感情だけが先走る。好きになってしまったものは仕方ない。

（ホント、どうしようもねえな……）

もう一度、中也は心の中で溜め息を落とした。

「涼しくなる話の定番と言えば、やっぱ怖い話じゃね？」

気を取り直して、中也は光宮たちの方へ向き直る。夏葉のことを考えると、思考は泥沼にハマっていく。ここ数ヶ月間、イヤと言うほど経験していた。

「怖い話？　なんだ～それ」

狭い馬車の中に詰め込まれていた少年少女たちの視線が一気に自分

に集中した。

「モンスターの伝説とか逸話のこと？」

シヴァの質問に、ルナの声が重なる。中也は、軽く首を振った。

「違うよ。ゆうれ……じゃなくてゴーストのこと。死んだ人間の魂が生きた人間をどうこう、とか。そういう話したことないか？」

「勝手に一人で喋ってれば？」

我ながらいいアイディアだと思ったのだが、光宮により鼻であしらわれてしまった。相変わらず、こういうところは王女様である。

「ああ～！　暑いわね、もう！！　チンタラ走ってんじゃないわよ！　さっさと進みなさい！　ほら、そこ！　抜かせー！！」

馬車の壁を蹴り上げ、窓の外を見ながら叫ぶ光宮に、中也とシヴァが苦笑いを浮かべる。一方、向かい側の席に座っているレイとルナは、

光宮に便乗し始めた。

（幽霊、か。懐かしいな、なんか）

ちなみに、アルテリア王国では人間は死ぬとニブルヘイムと呼ばれ

る死者の国に行くと信じられている。しかしながら、生前、勇者と呼ばれた者だけは、エインヘリアルという女神オーディナのお膝元に召し上げられ、ラグナ・ロクという世界の終末に、悪神ロキと戦う名誉が与えられるということになっている。

（北欧神話と似てるよな……）

初めてアルテリアの神話を聞いた時には、どこかで聞いたことがある話だと思ったものだ。そう言えば、悪神ロキの息子は“破壊の杖”の意味を持つ巨大な狼だと言われているということを、中也はふと思い出した。

（確か、名前はフェンリル）

女神オーディナと悪神ロキに関する伝説や逸話は数多く残っているが、ロキの息子であるフェンリルについて書かれた伝記などは目にした記憶が無い。

（フェンリル……別名ヴァナルガンド）

意味も無く、中也は胸の内でその単語を反芻した。

「そろそろ着くわよ。中也、夏葉を起こして」

光宮の声によって、思考が現実に引き戻される。そう言えば、今日は午前中で学校が終わり、

「家に来ないか」

という夏葉からのお誘いを受けたのである。

「夏葉。起きろよ。着くぞ」

眠りから覚ます、という名目で、中也は夏葉の腕に触れる。半袖のシャツから覗く白く細い腕は、まるで陶器のように滑らかだった。

（やっぱ綺麗だよ、夏葉は）

一度でいいから、柔らかそうな薄桃色の唇に触れてみたい。そう思った。

（将兄、か……）

夏葉と問題の将兄が一緒にいるところを見たのは一度きりだった。

けれど、その“一度”で、夏葉がそれまで見たこともない顔をして、彼に抱きつく様を目の当たりにしてしまった。その光景を思い出すと、

胸の奥が焼けつくような痛みを、訴える。

「着いたわ。あそこよ」

アルテリア帝都、北部に広がる高級住宅地の一角に、馬車は静かに停車した……。

始動1　（ラブコメ）　（後書き）

お久しぶりです。

何とか宣言通り、始動1話目、アップです。

これからもよろしくお願いします！

始動2

馬車から降りると、目を焼く太陽光が容赦なく照りつけてきた。

（眩しいな……）

アルテリアの道は馬車が通る“車道”と、歩行者が歩く“歩道”が区別されているのが常だ。車道の一角にはところどころ人が乗り降りするためのスペースがあり、馬車がそのスペース以外で停まることは禁止されている。例えるなら、バスの停留所のようなものだ。仮に、駐車スペース以外に停車した場合、冬軍官（警察官）に見つかれば、駐車違反で“罰金”が科せられるらしい。

「あつい……」

馬車から降りてきた夏葉が、眠気が入り混じった声で気だるげに呟くのが聞こえる。どうにかしてあげたい。そう思うが、真夏の暑さは人間の力ではどうしようもない。何もできないので、とりあえず無言を貫いた。

「日に焼ける～！　いや～！」

どこから取り出したのか知らないが、光宮が布製の傘をさっと広げてその中に潜り込む。どうやら王女さまは日焼けがお嫌いらしい。

「こっち……」

完全に夏バテしているらしい夏葉が、どこか危うい足取りで立ち並ぶ高級住宅の街を歩き始める。セミの声がない静かな夏の午後、中也たちはその後ろに続いた。

（まるでハリウッドだな）

高い塀で囲まれた住宅地は、道端から一般人が気軽に家の様子を窺うことを許さない。そこに並ぶ家々は、まさしく“庶民お断り”と言った顔で彼らを見下ろしている。一般人がこの住宅地のことを“ヒプノック街”と皮肉って呼ぶ理由が、何となく分かる気がした。

「なあ、夏葉の父さんって前代の将兄なんだよな？　獅子王って呼ばれた、あの有名な」

隣を歩くシヴァに向かって問いかけると、幼馴染が空を見上げながら緩慢な仕草で頷く。

「らし〜な。でもまあ、なっちゃんは朱民（元・難民）だから血の繋がりはねえだ〜ろ。それに中也、獅子王と今のカッコいい将兄の間にはコルネットさんっていう将兄がもう一人いるはずだ〜ぞ」

額の汗を拭いながら言ったシヴァに、中也は自分も同じ行動を取りながら言葉を続けた。その時、どこからともなく吹いてきた風が、前方を歩く女の子たちのスカートを揺らす。残念ながら、下着は見えなかったが、見えそうで見えないところが想像力をかきたててくれる。

レイとルナ、そして光宮……。性格はともかく、本当に魅力的な異性だと思う。

「コルネットは将兄として認められてねえだろ。光には悪いけど王族の愛人になって将兄に出世したとか何とか。それも、ありもしない罪を捏造して獅子王を将兄の位から追い出したらしいじゃん」

「みたいだ〜な。でも俺はけっこう好きだ〜ぜ。英雄ばかりの将兄の中の、たった一人の庶民って、なんかこう、同情してやりたくならね〜か？」

「そりゃお前だけだよ」

夏葉の父親を失墜させたのが王族である、と思うと、友達である光宮の存在を差し置いて、ついつい「王族」と呼ばれる人種に対して反感を持ってしまう自分がいる。これもまた、惚れた男の弱みというヤツだ。

（でも、お父さんが将兄で婚約者も将兄って、なんか夏葉って……つくづく将兄に縁があるよなあ……）

アルテリア軍を束ねる将兄は、名実ともに“最強”のステータスが付いて回る。中也も男だから、将兄職に就いている者に興味が無いわけではなかった。特に、自分たちとほとんど変わらない年齢でアルテリア軍のトップに立った現在の将兄には、それなりに関心を持っている。しかし、今はその“将兄”という存在が、重圧となって心に圧し掛かる。

（考えても仕方ない）

将兄が夏葉に一方的な好意を寄せている、というならばともかく、

見た感じ二人は両想いのようだ。自分が付け入るスキなど、あるはずはない。

（忘れよう……）

幾度目とも知れない溜め息を零しつつ、中也は軽く頭を振って脳裏に浮かぶ期待を振り払った。

「ここ……」

夏葉が足を止めたのは、真っ白な外壁で囲まれた一軒の家の前だった。元・将兄、ましてや獅子王とまで呼ばれたかつての猛将の自宅と聞いて、てっきり中也は要塞のような建物か、あるいは“超”の付く豪邸を想像していたのだが、その家は近所の住宅と特に変わったところのない、ヒプノック街にありがちな家だった。

（意外とフツー。てゆーか、むしろカワイイ……）

鉄製の門の向こうには、色とりどりの花が咲き誇る花壇と、真っ青な水を湛えたプールがある。正面に建つ建物は、全体的にピンクのレンガ造りで、ところどころに鎧戸付きのダブルハングウィンドウが目

立っていた。中也がかつて暮らしていた国ではあまり見かけないが、上下に開閉が可能なその窓は“ハリウッド映画”でよく見かける“欧米”では一般的なスタイルの窓だ。

（いわゆるダッチ・コロニアン様式ってヤツかな）

この様式の建築で、最も特徴的なのは緩やかに傾斜した屋根である。

屋根と聞くと三角形を想像しがちだが、この様式の屋根は言わば台形の

ような形をしている。

「なんか、獅子王の家ってイメージじゃねえな……」

ついつい呟くと、横を歩いていた光宮が苦笑を浮かべた。

「まあね。奥さんのリゼさんの趣味よ。竜雪……獅子王はね、巷じゃあ

最強って呼ばれてたけど、家じゃあ飼い猫よ。リゼさんと夏葉に頭が上

がらないんだから」

「ふーん」

そんなもんか、と思いつつ、この家と庭が獅子王の趣味ではないと聞
いて少しほっとした。
「獅子王が花壇のお手入れとか、想像したくねえよ～な」
「そうだな」
「さすがに花壇の手入れはしないわよ。草むしりはさせられてるみたい
だけど」
「……」
非常に想像したくない光景だった。
「ただいま」
玄関には広いポーチがある。そこにも鉢植えされた夏の花が生き生き
と葉を伸ばし、来客を出迎えてくれていた。夏葉が手をかけたドアは、
上下で分割されている、いわゆるダッチ・ドアだ。このドアの先に（草

むしりをさせられているという）かつての英雄、獅子王がいる、と思う

と、無意識に体に力が入る。

（本物に、会えるのか……）

自然と高鳴る鼓動を抑えきれないまま、中也は玄関のドアをくぐった。

当然だが“こちら”の世界では家へ上がる時、靴を脱がない。その先に

どれほど高級な絨毯が敷き詰めてあろうと、磨きたてられた石があろう

と、土足が原則である。

「よお、ナツ。友達は連れて来たか～？」

綺麗に整えられた玄関の向こうから、間延びした声が聞こえてくる。

奥に続くリビングからひょっこり顔を覗かせたのは、ヒゲ面の中年だっ

た。てっきり迷彩服かスーツのような服を纏っているのかと思いきや、

彼は意外なことに薄い色の和服を着流しにしていた。ダッチ・コロ

ニア

ンという洋風の家に、和服を着た人がいる、というのは、中也の常識か

らすると、ちょっとイメージが合わなかったが、ここは気にしないでお

くことにする。

「お、お邪魔します……」

予想通り、と言うべきか、かつての獅子王は長身に筋肉の鎧を纏った

ような体つきをしていた。早い話、ガタイがいい。それに、一見して優

しげな雰囲気だが、濃い眉の下に輝く双眸は、獲物を狙う猛禽のような

鋭さがある。

「おお！　ゆっくりしてけ！　こっちだ！　まあ、細けえことは気にす

んな！　それにしても綺麗な子ばかりだな～！　まあいいや！　こっち

だ！」

中也たちが、どことなく緊張しているのを察したのか、獅子王は豪快
な笑い声を上げながらリビングを示す。意外と、気さくな人物のようだ。

「気にすんなって言われても気にするよ～な？」

「まあ、ね……」

横にいたシヴァが小声で言ってきたので、中也も小さく頷いて見せる。

将兄の位を退職したとはいえ、そこにいる男は“あの”獅子王なのであ
る。小塾（学校）や軍学校（士官学校）の授業で取り上げられるような
人物を目の前にして、気にするなと言われてもムリがある。

「あ！！」

ステンドグラスが入ったドアの向こうに広がるリビングには、意外な
人物がいた。

「京さま！」

「将兄！」

夏葉を除き、それぞれが異口同音にそう言った。血のような赤い髪に、

黄金の瞳。非の付けどころがない整った顔立ちに、彫刻のような肢体。

胸に輝くのは黒龍の階級章。そして、アルテリア軍の中でもたった一人

しか着用することが許されない特別なデザインを施された漆黒の軍服。

（将兄……）

紛れもない、現在の将兄がそこにいた。会うのは二度目だったが、や

はり、その姿には圧倒されるものがある。顔かたちが異様に整っている

ことも一因だろうが、この青年は何も言わなくてもその場にいる者を魅

了し、圧倒する雰囲気を備えているような気がする。敢えて言うならば、

王者の風格、とでも言うのだろうか。

「婚約者の家に俺がいるのがそんなに不思議か？」

開いた口が塞がらないまま固まってしまった中也たちに、どこか揶揄

するような声がかけられる。

「京さま！」

彼の顔を見るなり、夏葉は輝くような笑顔を浮かべて婚約者の元へ駆

け寄って行った。互いに手を取り合い、見つめあって微笑む様子を目の

当たりにして、中也は思わず視線を逸らす。

「京さま、いつこちらに？」

「ついさっきだ」

夏葉の心の中には、本当に“彼”しかいないのだ、と見せつけられて

いるような、そんな気分だった。二人が寄り添いあっている様は、非常

に胸が痛くなる。

「ねえ、中也」

ふいに、光宮が顔を寄せて小さな声で話しかけてきた。

「なんだよ?」

「腹が立つと思わない？　夏葉ってば、さっきまで暑さでヘバってたの
に、あの男の顔を見るなり全快よ?」

「……」

腹が立つ、と言いながらも光宮の顔は笑っていた。何と答えていいか
分からず、中也は無言を貫くことにする。

「あら、まあ!」

そこへ、金髪を後ろで纏めたふくよかな女性が姿を現した。紹介され
なくても、彼女が獅子王の妻であり、夏葉の母リゼだということはすぐ
に分かった。“オバサン”という代名詞がしっくり来る女性だが、若い
ころは、さぞかし美人だったのだろう、と見る者に想像の余地を与

える

には充分な女性だ。

「なっちゃん、そういうことはお客様が帰ってからになさいな。ほら、

そこの子たち！　いつまでもそんなところに立ってないで！　さあ！

こっちへいらっしゃい！」

　中也たちに向かってリゼは満面の笑みでそう言った。促されるまま、

彼らはリビングを進み、奥にある応接セットに腰かける。家の外観から

ある程度は想像していたが、家の中はそこかしらに人形やアンティーク

が飾りつけられた、非常に可愛らしい雰囲気に整えられていた。年ごろ

の少年にとっては、ちょっと落ち着かない内装である。

「ちょいと！　そこのドスファンゴ！　コーヒー淹れてあげて！」

「ドス……？」

ドスファンゴ、と呼ばれて振り返ったのは、獅子王・竜雪であった。

「へいへい。分かりましたよ」

しょうがないな、という雰囲気を装いながらも、竜雪は踊るような足取りでキッチンと見られる方向へ歩いて行く。ドスファンゴはフィールドに生息するイノシシのような見た目をしたファンゴというモンスターのリーダーだ。確かに、言われてみると似ていないこともない……。

「俺、手伝う」

彼の後ろに続いたのは、夏葉だった。

「で、将兄さん。聞いていい？　なんであんたがいるの？」

席に着くなり、光宮が将兄に向かってそう切り出す。正直、自分も聞きたいと思っていたが勇気が無かったので、彼女がそう聞いてくれたのはありがたい話だった。

「さっきも言ったろ？　婚約者の家にいるのがおかしいか？」

「夏葉の顔を見にわざわざ来たってワケ？　相変わらず熱愛中のようで

何よりだわ。だったら私たちに用は無いわよね？　夏葉を連れてさっさ

と消えてちょうだい。目障りなのよ」

そこまで言わなくても、と思ったが口に出す勇気はない。中也の横で、

ルナが軽く笑うのが視界の端に映り込んだ。

「まあ、そう言うな。仕事が終わって俺はこれからヒマなんだ」

「やっぱり何かあるのね？　はっきり言うわ！　イヤよ！　絶対にイヤ！

あんたが何を言っても絶対にイヤ！」

胸のポケットから煙草を取り出す将兄の雰囲気に何かしら悪い予感を

感じたらしい。何を聞いたわけでもないのに、彼女ははっきり否定する。

「相変わらず察しがいいな」

「やっぱり！」

磨きこまれたオークのテーブルに両手を叩きつけ、光宮が勢いよく立ち上がった。

「帰らせてもらうわ！　夏葉がいきなり家に遊びに来ないか、なんて言うからおかしいとは思ってたのよ！」

「夏葉は何も知らない。俺が来てることも知らなかっただろ？」

「……あんたとグルなのは竜雪の方？」

「そういうことになるかな。竜雪にも詳しい話はしていない。俺が個人的にお前たちに会いたいから、夏葉に呼んできてもらえと言っただけの話だ」

何だか雲行きが怪しくなってきた。

（もしかしなくても、これは何かある……？）

始動3

「お前たち6人を、ギルド・ナイトの候補生に任命する」

単刀直入に、将兄はそう言った。

「ギルド、ナイト……？」

思わず聞き返してしまったのは、中也だけではない。そこにいた光宮も、レイも、ルナも、シヴァも、竜雪も、リゼも、夏葉でさえ、固まった。

「お前たちは以前、武器も防具も持たずにフィールドの樹海で2週間近く生き延びただろ？　しかも、話を聞いたところによればモンスターともそれなりに戦ったということだ」

煙草の煙を燻らせながら、将兄はまるで世間話でもするように語る。

（簡単に言うなよ……）

将兄にとっては大したことではないのかもしれない。しかしながら中

也たちにとっては、いきなりフィールドに放り出された二週間は、本当

に生きるか死ぬかの瀬戸際だった。そう思うと何かしら言い返したい気

分になったが、相手が将兄なので黙っておくことにする。この世界には

“身分”というものが存在しているのだ。一介の庶民が、軍の将兄相手

に軽々しく意見することなど許されない。

「報告を受けてから考えていたんだ。今はいろいろと面倒なことになっ

ているし、優秀な部下は多い方がいい。それだけの話だ」

「ジョーダンじゃないわよ！」

こちらの意志は聞くつもりがない、と言わんばかりの将兄に、噛みつ

いたのは光宮だった。この場で唯一、将兄に対して意見ができるとすれ

ば王女である光宮だけだ。現実に追いついていない思考の中で、中也は

光宮にエールを送っていた。

「寝言は寝てから言いなさいよ！　あんた何、考えてんの！？　私たち

はまだ１５歳で、軍学校の生徒なのよ！？　ギルド・ナイトに任命する

なんてムチャよ！」

「軍学校は軍の上官を育成するための場所だ。そして、その軍の全責任

を預かっているのは俺なんだ」

「ふざけないで！　四軍将は！？　あいつらの許可は取ったの！？」

彼女の口から出た四軍将、という単語に、将兄はその秀麗な顔立ちに

嘲るような笑みを浮かべる。

「どうして四軍将にお伺いを立てる必要があるんだ。知らないようだか

ら教えてやる。アルテリアのハンターズ・ギルドは軍の裏組織ではある

が、実際はギルド・マスターの私営組織のようなものだ。俺がギルド・
マスターとして仕事をしている時、四軍将には一切、口出しする権利は
ない」
「……」
薄桃色の唇を小さく噛みしめて、光宮が黙り込んだ。
（やっぱ、すげえな、将兄。光を黙らせるなんて）
屁理屈（へりくつ）と減らず口だけは右に並ぶ者がいないと自他ともに認める光宮
が言い負かされたことに、中也は純粋な驚きを隠せなかった。
「それから、以前お前の叔母にあたる紫晶院（ししょういん）・紫宮（むらさきのみや）がコルネットという
愛人を使って軍に干渉し、アルテリア軍の歴史に汚点を残したことは知
ってるな？」
将兄の金色の瞳が、竜雪に向けられる。何とも言えない顔をして視線

を逸らした竜雪に軽く笑った後、彼は再び光宮の方へ視線を戻した。

「その例を受けて、俺は今後アルテリア王族を始め、朝廷が軍に干渉す
ることは一切禁止すると宣言した。それにも関らず、お前は軍学校に入
学したいと言って来た。四軍将の推薦もあったことだし、特別に認めて
やってもいいが、その代わり王位継承権を完全に放棄すること、そして
軍はお前のことを一国の王女として扱わない、ということが条件だと言
ったはずだ」

「……」

「お前は今、一国の王女としてではなく、一人の生徒としてここにいる。
減らず口は慎め」

「あんただって……将兄の仕事が終わってここに来たって言ったじゃな

い」

「将兄としての仕事が終わったから、ギルド・マスターとしての仕事を
していうんだ」

光宮の苦し紛れのセリフは、軽く一蹴されてしまった。

（こええ……）

中也は、それまで将兄に対して抱いていたイメージが音を立てて崩れていくのを感じていた。前に一度会った時は、意外と気やすい人だと思ったものだし、夏葉も彼のことは“優しい人”だと何度も言っていた。

しかしながら、今ここにいる人物はとてもそんな風には見えない。

「しょ～けい、質問はいいんスか～？」

緊迫した場の空気を壊したのは、相変わらず間延びした、幼馴染シヴァの声だった。

「答えられる範囲で答える。何だ」

「えっと～、すっげ～マヌケな質問なんスけど～、そもそもギルド・ナ
イトって何スか～？」

真っ赤に染めた頭をかきながら、シヴァははっきりそう聞いた。その
質問に、将兄を始め竜雪や光宮も驚いたような、呆れたような、何とも
言えない微妙な顔をする。

「ギルド・ナイトの仕事は、フィールドの開拓や問題のあるハンターの
粛清（しゅくせい）、ということになっている。一応は、な」

「粛清……？」

つい音に出して反芻してしまっていた。粛清、ということはつまり、
ハンターを殺す、ということだ。

「そんな顔するな。お前らにハンターの粛清を任せようとは思っていな
い」

将兄と目が合っただけで、中也は無意識に身を竦めてしまう自分に気
が付いた。そんな自分に嫌気がさすが、相手が相手なので仕方ないと都
合のいいイイワケをする。
「俺がお前らに頼みたいと思っているのは、フィールドの調査だ」
中也の内心の葛藤など知らない将兄は、話を続ける。調査、という言
葉を聞いて、ほっとした。情けない話だが、人を殺せと言われたらどう
しようかと本気で心配していた。この世界は、中也がそれまで暮らして
いた国に比べて“人の命の値段”は格段に安い。最近は随分とそうでも
無くなってきたが、ほんの１０年前まで、身分が低い者は道端で殺害さ
れても文句を言えない時代だったのだ。
「ギルドとしては、ハンターが出入りできるエリアを今以上に拡大した

いんだ。そこで、お前たちにはフィールドの開拓という仕事を任せる。

ついでに、そこにいるモンスターの生態も報告すること。分かったか？」

それぞれが顔を見合わせ、曖昧に頷く。

（なんか、すげ～イヤだな……）

つい3か月前、フィールドから救出された時には二度とこんなところに来るものかと思っていたのに、まさか生き残ったという理由でこういう展開になるとは思ってもみなかった。

「私からも質問していいかしら」

将兄に言い負かされて黙り込んでいた光宮が、相変わらず勝ち気な表情だけは保ったまま、彼を真っ直ぐに見つめながらそう切り出した。

「まともな質問なら答えてやる」

「残念ながらマトモな質問よ。フィールドに関してド素人の私たちを、

いきなり前人未到エリアに送り込む気？　前に聞いたことがあるんだけ
ど、ハンターの使う武器や防具は一般人が軽々しく使いこなせるモノじ
ゃないんでしょ？　普通のハンターは、北の氷都にあるハンターの訓練
学校で、フィールド、モンスター、武器、防具、アイテムなんかの説明
を受けるはずよね？　もちろん武器の使い方や注意点なんかも。分かっ
てると思うけど、私たちはそういったこと何も知らないわ。あんた、私
たちを殺す気？」

光宮の質問を聞いているうちに、背筋に寒いものが走った。確かに、
いきなりフィールドに放り出されるようなことになれば前と同じだ。自
分たちを殺すつもりなのではないかと聞いた光宮の言葉には、説得力が

あった。

「いくら俺でもそこまではしない。最低限の訓練は受けてもらうつもり

だし、いきなりXエリアに送り込むつもりもない」

「……それを聞いて安心したわ。それで？」

「もうじき夏季休暇だろ？　休暇に入ると同時に、密林エリアでイヤン

クック討伐に出てもらう。サポートとしてプロのハンターを2名付ける。

問題はないな？」

夏季休暇、とはいわゆる夏休みのことだ。休みに入ったら北東の龍都

にある家に帰ろうと思っていたのに、どうやらそうも言ってられないら

しい。

「夏季休暇まで2週間だ。それまでに最低限の知識と技術は身につける

こと。そこの4人」

将兄が視線を向けたのは、中也、シヴァ、レイ、そしてルナだった。

「お前らは学生寮に入ってるな？」

各自が無言で頷くと、将兄が胸のポケットから書類のようなものを取り出して放り投げてきた。

「特別に外泊許可を出す。寮に戻ったら、寮監に提出しろ」

「は、はい……」

否応なしに、中也たちは書類を受け取った。無意識にそこに書かれている文字に目を走らせ、中也は思わず唖然とした。

「あの、将兄。今日の夜から外泊することになってますけど……？」

「訓練する時間は少しでも長い方がいいだろ？」

恐る恐る口を開いた中也に、当然だと言わんばかりの答えが返された。

（話が早すぎだろ！？）

心の準備が、というイイワケは、聞いてくれそうにないようだ。

（マジかよ！？　ジョーダンだろ！？　また俺たちフィールドに出る

のかよ！？）

ようやく、中也は現実を受け止め始めていた。もちろん、今回は前回の時のように何の前触れもなくいきなりではないし、プロのハンターも付き添ってくれるということだから多少マシだという気はする。

それにしても、この展開はあんまりだと思わずにはいられない。

「夜１０時に軍学校の前で待ってろ。同行する予定のハンター２人を迎えに行かせる。夏葉と光宮、お前たちは自分で統括本部前まで来い。

そこで合流させる」

「はい」

「分かったわよ」

投げやりな口調で返事する光宮とは対照的に、夏葉は特に何も思っていないらしい。好きな男からの命令には逆らいたくないのか、逆らえないのか。どちらかは分からないが、夏葉の態度を見ていると、もう少し意思表示してもいいのではないか、と思わないこともない。そ

れに、将兄も将兄だ。

（夏葉は婚約者だろ？　危険なところに放り込むか、フツー！？　信じられねえな）

とても口には出せないが、中也は内心でそう思った。自分の感覚では当たり前のことだという気がするのだが、この世界ではそうでないのかもしれない。

「と、いうわけだ。他に質問は？」

各自が、無言で首を振る。竜雪が何とも言えない顔をしたまま将兄を見ていたが、結局、何も言わないままだった。

（将兄……とても適いそうにねえな……）

今日一日で、それだけはイヤというほど思い知らされた。

始動4

「ああ～！　もう腹が立つ～！！」

夏葉の家を出るなり、赤く染まった空に向かって光宮が絶叫した。

「何なのよ、あの男！！　ホントに腹が立つ！！　もう～！！　いつかあの気取った顔、コテンパンのボッコボコのボロクソのクソクソのケッチョンケッチョンにしてやる！！」

ケッチョンケッチョン、という言葉を久しぶりにい聞いた気がする、などと思いながら、中也は馬車の停留所に向かって歩を進めていた。

「やっぱスゲ～な、将兄」

間延びした口調に振り向けば、シヴァが頭の後ろで腕を組みながら、空を見上げている。

「なんつ～か、めちゃくちゃカッコいいってのもあるけ～ど、迫力があるってのか～な。見てるだけでこう……すんませんでした！！って謝りたくなるよ～な。そんな感じだった～ぜ」

「まあ、な」

「前に会った時はそ～でもねえじゃ～んって思ってたのにさあ～。やっぱ仕事してる時は違うんだろ～な」

「そんなもんだろ」

以前、顔を合わせた時、自分たちは「助けてもらう」立場だった。だからこそ、気さくに話しかけてくれたのかもしれない。けれど、今回、将兄は「仕事の話」をしに来たわけだ。前に会った時と雰囲気が違っていたとしても、不思議な話ではない。

「それにしてもギルド・ナイトか～よ。まさかそう来るとは思ってもいなかった～ぜ」

「うん……」

「もう二度とフィールドには出たくねえ～って思ってたのに～よ」

「同感」

晴れ渡っていた空に、幕を広げるような勢いで暗雲が垂れ込め始める。夕立が近い。ふと、中也の脳裏に神経質そうな顔をした少年

の姿が思い浮かんだ。

「……エマニエルは、残念だったな」

中也の口から出た“エマニエル”という名に、シヴァだけでなく、レイとルナ、そして光宮が歩みを止めて振り返った。

「そうだ～な。せっかく、あそこまでがんばったのに～よ。なんか、ホントいきなりだった～な」

「ああ……」

何だかんだと弱音を吐きつつも、アルテリア軍に救出されるまでかろうじて生き延びていた少年は、フィールドのデクスター海岸からアルテリア南部の港町ドンドルマへ向かう途中、誰にも看取られることなくこの世を去ったらしい。容体が急変した、という言葉だけで、中也たちはエマニエルの死に顔さえ見せてもらえなかった。

（いいヤツだったとは思わないけど）

けれど、残念だと……そう思う。

「そんなこと言ったって仕方ないじゃねえか。人間は死ぬ時は死ぬ

んだよ」

傍に寄って来たレイの腕が肩に回された。寄せられた体からいい匂いがする。風に流れた長い金髪が、頬を掠めた。

「ちょ……レイ」

思わず固まってしまう中也に、触れ合いそうな距離でレイが笑う。

「なぁに意識してんだよ！　心配しなくてもお前を取って食ったりしねえよ！」

「そ、そういう意味じゃ……」

言いかけた言葉は、音になることなく消えて行った。

「うわ！　雨！！」

厚い灰色の雲に覆われた空から、大粒の雨が降り注ぐ。

「きゃあ！～！　濡れる～！！」

前を歩いていた光宮が、慌てたように両手を頭の上に乗せた。しかし、バケツをひっくり返したような雨は濁流のように彼らを打ち、見る間に全身を濡らしていってしまう。

「なんか、楽しくない？」

最初にそう言ったのは、ルナだった。薄いシャツはしっとりと濡れそぼち、下着を付けていない素肌が綺麗に透けていた。

「もう、どうでもいいんじゃ～ね！？」

シヴァの言葉に、なぜかその場にいた全員が笑い崩れる。確かに、ここまで濡れてしまったら、今更どう足掻いても仕方ないという気がしてくる。

「どうにかなるわよ！」

振り返った光宮が、乱れたハニー・ブロンドから雨の滴を落としながら、笑顔でそう言った。

「そうそう！　どうにかなるって！」

中也の肩に腕を絡めたままだったレイが、思い切りしがみ付いてくる。柔らかな胸の感触が、濡れたシャツの向こうから伝わってきた。

「どうにかしようよ！　この前みたいにさ！」

反対側の肩に、ルナが腕を回してくる。彼女の腕は、そのまま隣にいたシヴァの肩を自然に捕えた。

「俺たちなら、何とかなるって気がする～ぜ！」

光宮の腕を引き、肩を組みながらシヴァがそう断言する。

「そうね！　やってやろうじゃないの！　そしてあの男をギャフンと言わせてやるわ！！」

空に向かって握った拳を振り上げた光宮の反対側の腕が、シヴァの肩に回された。それを見て、中也は戸惑いながらも両脇にいるレイとルナの肩に腕を回す。

（なんか、いいな。こういうの）

女の子と肩を組んで歩いたのは、初めての経験だった。

（仲間、って感じ）

異性として意識するな、と言うにはあまりにも魅力的な女の子たちだが、それ以上に、ここにいる光宮たちと、そして夏葉は“あの”サバイバルを共に乗り切った“仲間”なのだ。

（なんとか、してやるよ）

このメンバーなら、きっと何とかなる。心の底から、そう思えた。

＊

軍学校の建物は、アルテリア帝都の中心に位置する王宮から見て、やや南部に位置する。

「あ～。なんか緊張してきた～ぞ」

「今更かよ」

そこに立ち並ぶ建物はすべて石造りで、何の変哲もない四角形に窓とドアを作っただけの味気ない校舎から、重要文化財に指定されてもおかしくないような美しい城のような建物まで様々ある。

「なあ、あとどれくらい～だ？」

「まだ9時半。もうちょっと待て」

学生寮があるのは、軍学校の建物群の中でも最東端だ。左側が女子寮で、右側が男子寮である。その建物は、中也の故国にあったコンクリート造りの安いアパートのように見えないこともない。

「集合時間って何時～だ？」

「１０時」

学生寮は８階建てで、全部で１０００人程度の生徒が寝泊りしているらしい。その、二階にある一室が、中也とシヴァの部屋だった。

「出発時間は何時～だ？」

「ああ、もう！　９時４５分って言っただろ！？」

冷たい印象がある石造りの部屋は、松明と蝋燭によって明るく照らされている。広さにして８畳ほどの小部屋の右側には中也のベッドと机、日用品や服などを収めた大きな木箱が置いてあり、その反対側には、全く同じシヴァの持ち物が置いてある。ただ、形や色などは同じだが、シヴァのベッドや机の上は有り得ないほど散らかっているのが常だ。

「９時４５分か～。今は何時～だ？」

「９時半！」

部屋の中央には小さな丸いテーブルが置いてあり、食堂から失敬

してきたフルーツ・ジュースが半分ほど中身が無い状態で並んでいる。ジュースが詰められているガラスのビンは、ひとつずつが手作りであることを体現しているように、自分のものとシヴァのものでで大きさと形が微妙に違う。

「ちょっとくらい早く出てもいいんじゃね～？」

「ギリギリでいいって言ったのはお前だろーが！」

「そうだっけ～な？」

幼馴染の身勝手な言葉に、中也は重い溜め息を落とした。緊張しているのは、自分も同じである。先ほどからずっとこの調子で話かけられ、少しばかり苛々（いらいら）していた。

「ああ～、まだ9時半か～」

「そうだよ」

シヴァはひたすら落ち着きがない。ジュースのビンを手にとってみたり、テーブルに戻してみたり、イスをガタつかせてみたり、テーブルの位置を動かしてみたり……見ている方まで落ち着かなくな

ってくる行動ばかりである。

「もう出ようぜ～。いつまでもここにいたって仕方ないだ～ろ」

「はいはい。分かったよ」

訴えかけるような彼の言葉に、中也は仕方なく立ち上がることにした。どちらにしろ、この状態のシヴァと一緒にただ時間が経つのを待ち続けるのはツラい。

「一緒に行くハンターってどんなヤツだろ～な」

「さあ」

木で造られたドアを開け、簡単な錠をかける。換気が悪い上に、朝一番に日雇い労働のオバサンが水を撒いて掃除するせいで、石造りの廊下はいつもカビ臭い。消灯後という時間帯も相まって、暗い廊下はじっとりとそこに佇んでいた。

「やっぱオッサンか～な？　どうせなら綺麗なお姉さんがいいな～」

「勝手に言ってろよ」

廊下を真っ直ぐに進み、突き当りにある階段を降りる。一階の廊

下を半分ほど進めば、そこに寮監室と入口のドアがある。昼間のうちに将兄から貰った外泊許可書は提出してしまっていたので、2人はそのまま入口に向かった。

「明日が休みで良かった～な」

「そうだな」

軋みを上げて、ドアが開閉する。途端に、夜の冷えた空気が頬を打った。

「よお！　早いじゃん」

ドアの前で待ち構えていたのは、レイとルナだった。どうやら2人も、待ち切れずに早く出て来てしまったらしい。

「ワクワクすると思わねえ？　あたし、楽しみで仕方ねえんだけど！」

「まあ、な」

普段、外泊は固く禁止されているので、こうして夜中に外に出るというのはなかなか気分がいい。それに、国の重要人物から仕事を任さ

れた、と思うとそれだけで鼓動が高鳴る。おまけに、仕事内容は極秘とくれば、完璧だ。

（いろいろ思わないワケじゃねえけど、けっこう楽しいかもな）

そんな風に考えながら、４人で連れ立って校門の方へ向かう。しんと静まり返った夜の校舎を見ながら、これから始まる非日常的な出来事を想像し、気分が高まっていくのを感じていた。

「プロのハンターを驚かせてやろうじゃん！　お前らの出る幕なんてねえって思い知らせてやろうぜ！」

「いいねえ、それ！　賛成だ～ぜ！」

「任せなよ。ショボイ男だったら、あたしが弓で股間を撃ち抜いてやる」

相変わらず強気なレイたちの言葉を聞きながら、中也は校門の前に広がる道に視線を向ける。人通りも無ければ、馬車も走っていない。普段とは違う顔をした帝都が、そこに広がっていた。

（どんなヤツなんだろ）

自分たちのチームには夏葉がいるのだ。婚約者を危険なフィールドに送り込む以上、将兄も同行するハンターには一流の者を選ぶはずだろう。

「つーか、イャンクックってどんなモンスターだっけ～か？」

「知らねえよ。見てから考えればいいだろ？」

レイとシヴァに向かって、イャンクックの説明をしようとした時、暗闇に沈んだ道の向こうから、一台の馬車が静かにやってきた。

「来た」

小さな声で呟くと、軽口を叩いていた3人が黙り込んで馬車を注視する。予想通り、やってきた馬車は校門前で停止した。どんなヤツかと期待を寄せる彼らの前で、馬車の中から2人の青年が滑り降りてきた。

「こ……」

淡い月光に照らしだされた青年の顔を見て、中也は愕然とする。

「幸也さん！？」

始動5

「はあ～？」

思わずその名を叫んだ中也を、青年は胡乱げな表情で見下ろした。

「あんた幸也さんだろ！？　なんでこんなところにいるんだよ！？」

長身に、見とれるほど綺麗な顔立ち……見間違えるはずはない。そこに立っている青年は、中也が子供のころからよく知っているシヴァの兄、幸也だ。

「えっとぉ～、悪い。誰だっけ？」

「あ……」

心の底から申し訳ない、という表情をその整った顔立ちに乗せて、幸也は、染めていない黒髪のままの頭をかきながらそう聞いてきた。

（そっか……こっちの幸也さんは、ガキのころに家出したんだっけ）

だとしたら、自分のことを覚えていなくても不思議はない。どうしよ

うもなく胸に湧き上がる興奮を何とか抑え込み、中也は努めて冷静な口
調で話を続けた。
「ごめん。覚えてないかな。俺、中也っていうんだ。ガキのころ、シヴ
ァと一緒に遊んでもらってたと思うんだけど」
「ちゅうや～？」
「そうそう。えっと、サッカー……じゃなかった。球技とか、教えても
らったんだよ。それに、海賊ごっこした時は幸也さんが船長で、シヴァ
が航海長で、俺が水夫長だった。幸也さんがまだ北東の龍都にいたころ
の話だよ」
「ああー！！」
ややあって、幸也が夜の街に響き渡るような大音量で絶叫した。
「思い出した、思い出した！　あの中也か！　覚えてるよ！　言われ

るまで分かんなかった！　マジで！？　すっげ～偶然だな！　へえ～、

中也か～！　なつかしいな～！」

どうやら思い出してくれたらしいと分かって、ガラに無くほっとしてしまっていた。自分がこっちの世界に来るまで、幸也とは本当に仲が良かった。それこそ、自分の兄よりも“兄”として慕っていたのだ。

そんな人に、忘れられるのは正直かなりツラい。

「中也か～。名前だけは聞いてたけど、まさか知り合いとは思わなかったわ。つ～か、お前は何で分かったんだよ。俺、顔見ても分かんなかったぞ」

「まあ、いろいろ……。てゆーか幸也さんは１０年後に会っても分かるよ。相変わらずカッコいいな、あんた」

「まあね～」

お世辞でも何でもなく言った言葉に、屈託なく幸也は笑う。自分が知っている幸也と、どこも違わない。

「でも信じらんねえ。まさか幸也さんに会えるとは思ってなかった」

「俺も、俺も」

心強い味方が戻って来た。そんな気分だった。

「あのさ～。感動の再会の最中に申し訳ないんだけど、いったい何がどうなってんの？」

レイの言葉に後ろを振り向くと、幸也と一緒に来ていたハンターを始め、全員がポカンとした顔で自分たちを見つめていた。周囲を置き去りにしていた自分に気付き、中也は慌てて取り繕う。

「えっと、ほら、前に話しただろ？　シヴァの兄ちゃんだよ。幸也さん」

シヴァの兄ちゃん、と言った瞬間、その場にいた全員の視線がシヴァに集中する。

「シヴァ、どうしたんだよ」

顔を見るなり彼だと分かった自分とは対照的に、４歳の時に別れて以来、幸也に会っていないシヴァは、何をどう言っていいのか分から

ないと言った雰囲気でその場に固まってしまっていた。

「久しぶり、シヴァ」

最初に、幸也の方からそう声をかけた。

「元気そうで何よりだよ。オヤジとおふくろは？　仲良くやってる？」

中也は、シヴァの背を軽く押す。たたらを踏んで幸也の前に進み出た彼は、言葉を探しているように視線を泳がせた。

「……この、バカ兄貴！！」

しばらくの沈黙の後、シヴァの口から出たのは、意外な言葉だった。

「へ？」

「俺たちがどんだけ心配したと思ってんだ～よ！？　今まで何やってたんだ！？　何か言うことあるだろ～がよ！」

「い、いや……ごめん……えっと、う～ん……」

幸也が助けを求めるように、なぜか中也の方を見て来た。しかしながら、これればかりは部外者の中也が口出しできる問題ではない。幸也

に悪いと思いつつ、中也は無言で視線を逸らした。こういうところも、

中也が知っている彼そのままだ。

「謝って済む問題か～よ！　オヤジもおふくろも、兄貴が出て行ってからず～っと機嫌悪いままなんだ～ぞ！」

「あ、そうなの？　へえ……」

「へえ～、じゃねえ～ぞ！　無事だったなら帰って来いよ！　せめて元気でやってるって手紙くらい寄こしやがれよ！　母ちゃんはな、兄貴が出て行っちまってからも、ず～っと、メシ４人分、用意してたんだ～ぞ！　いっつも一人分、席が空いたテーブルで！　１０年間メシ食わされてた俺らに！　何か言うことあるだろーが！！」

「ご、ごめん……」

シヴァの気迫に押されたらしく、幸也は後退りしながら小さく謝った。

「おい、シヴァ。そのくらいにしとけよ」

まだまだ言いたいことがある、という雰囲気のシヴァを宥めたのは

レイだった。

「お前さ、兄ちゃんのこと大好きだって言ってたじゃねえかよ。会っていきなり兄弟喧嘩したいわけじゃないだろ？」

「……」

「とりあえず、会えて嬉しいって言っとけよ」

「そうそう。無事で良かったって」

両側からレイとルナに言われ、シヴァがようやく握りしめていた拳を降ろす。おそらく、シヴァも喧嘩をしたいわけではないはずだ。きっと、何をどう言っていいか分からなかっただけだと思う。

「悪い、兄貴。とりあえず、無事で良かった」

「う、うん。こっちこそ、心配かけて……悪かったよ」

１０年ぶりに出会った兄弟が、気まずげに言葉を交わす。その様子に、重い溜め息を零したのは幸也と一緒に来ていたハンターの青年だった。

「ジャマする気はねえけど、続きは馬車の中でやってくんねえかな？

一応、時間厳守なんでね」

「あ、はいはい。じゃあ、とりあえず乗ろうぜ～」

どこまでも変わらない幸也に促されるようにして、中也たちは路上駐車していた馬車に乗り込んだ。冬軍官（警察官）に見つかったら、御者と依頼主に罰金が科せられる。それは勘弁してもらいたい。小遣いは貴重なのだ。

＊

「うわ～！　マジでカッコいいじゃん！　ホントにあんたのお兄さんなの！？」

小さなランタンに照らされた馬車の中で、開口一番にルナが感嘆した声を上げる。

「マジで兄貴だ～ぞ。悪いか～よ」

「信じらんねえな。まあ、よ～く見たら似てない、こともないような気がしないこともない、けど」

「どんだけ遠回しなんだ～よ、レイ」

シヴァたちの会話を聞きながら、中也は隣に座っている幸也を改めて見てみた。

（幸也さんは確かに、カッコいい）

アルテリアで「美形」と聞いて真っ先に思い浮かぶのは「あの」将兄であるが、幸也も負けず劣らずと言ったところだ。そもそも、言葉にしてしまえば同じ「美形」だが、タイプが違うので比べるだけムダだという気もする。

「で、そろそろ自己紹介、と行きたいところなんだが、いいかな？」

これから軍の秘密任務に向かう、というのに中也たちの、特にレイとルナの興味はもっぱら幸也に集中していた。それに方向修正をかけたのが、幸也と一緒に来ていたハンターである。

「お互いの名前が分からねえのはメンドーだ。俺はリース。ハンター歴は５年だ。専門の武器はランスかな。お前らの名前は？」

リースと名乗った青年は、どこにでもいる一般人と言った雰囲気の男だった。北の氷都にあるハンターの訓練学校に入学できるのが１８

歳で、２年間の必須訓練の後、晴れてプロのハンターと名乗ることを許されるということを考慮すれば、リースの年齢は２５歳ということになる。

（ん？　待てよ）

ふと、中也の脳裏に疑問が浮かんだ。

（幸也さん、確か１９歳じゃねえか？　普通に考えればハンターの訓練生のはずじゃ……）

あちらの世界とこちらの世界で年齢がズレているという可能性も考えたが、シヴァの話を聞く限り、幸也は自分が知っている通り、４歳ほど年上ということで相違ない。

（実力があるから、将兄に抜擢された……ってパターンかな）

そう考えると、何となく納得できた。

（なんか、子供のころから全校朝礼で表彰されたりしてたもんなあ。運動神経バツグンだったし）

成績が良い、という話は聞いたことが無かったが、見た目が良くて

運動神経がいい彼は、全校女子生徒だけでなく近所のオバサン連中からも、ひたすた黄色い声をかけられていた。

（どこの世界でも幸也さんは幸也さんってか？　世の中、理不尽だよ、

チクショー）

レイたちの自己紹介を聞きながら、中也は内心で深い溜め息を落とした。これればかりは、誰を責めるわけにもいかない。

「じゃあ、次は俺ね」

中也の隣で、渦中の幸也が明るく声を出した。充分過ぎるほど知っているからいい、と思わないでもないが、こちらの世界の彼のことはほとんど知らない。せっかくなので、彼の自己紹介はきちんと聞いてみることにした。

「俺はフェンリル。一応、ギルド・ナイト。よろしくね」

「フェンリル……？」

聞き返したのは、中也とシヴァが同時だった。

「そう。幸也って名前は、もうずっと使ってないんだ。シヴァと中也も、できれば俺のことはフェンリルって呼んでほしいかな」

「なんで……」

つい、そう聞いていた。中也にしてみれば、名前を変える、という行為はとても重要なことのように思えるのだ。それこそ、名前を変えるためには、裁判が必要なほどに。それは、こちらの世界でも同じはずだ。黄証（身分証明書）に一度、記載された名前は、よほどのことが無い限り書き換えてもらうことはできない。

「理由はまあ、いろいろと。ただ、フェンリルって名前は大事な人にもらった大事な名前なんだ。だから、できれば幸也とは呼んで欲しくないって思ってる」

「途中で名前を変えたってか？　お前、黄証の名前はどうなってんだよ」

気軽に改名した事実を語る幸也に、呆れた口調で問いかけたのはリースである。

「黄証？　ちゃんとこっちの名前になってるよ。見る？」

言いながら、彼は腰のポケットから布製のサイフを取り出し、中から黄色いカードを取り出して皆に見せた。

「狼王……？」

「そ！　カッコいいだろ？」

黄証に刻まれている名前は「狼王」の文字だった。

（なるほどね。神話のフェンリルは北の狼王って呼ばれてるから、それで名前が狼王で、呼び名がフェンリルか）

こちらの世界に生きる人々の名前がカタカナ名に聞こえる時は、たいてい、それは「呼び名」である。ちなみに、レイの「名前」は暁瞳、

ルナの「名前」は月樹木、と聞いた。今でこそアルテリア国民、と一括りにされているが、アルテリアの内実は多民族・多人種国家である。

“相手を呪い殺すために必要なのは、その人物の名前と生まれ”

今でこそそんな風習は廃れてきているが、呼び名を使う民族の間では、そういった迷信がつい最近まではびこっていたらしい。呪いから身を守るために敢えて自分の本当の名を隠すが、名前が分からないのは不便だから「呼び名」というものを作った、ということだ。リオレウスを別名で「火竜」、ミラボレアスを別名「黒龍」というのと同じような感覚だが、人の名前にはそういった歴史がある。

「ちょっと待てよ。どうやって改名なんかしたんだ。よほどのことがないと役所は認めねえだろ」

「それはヒミツ」

リースの胡乱げな質問は、軽く笑ってかわされた。

「じゃあ、フェンリルさんって呼ぶよ」

知り合いの名前が変わるというのは何だか激しく違和感がある。馴染まない音を舌の上に乗せながら確認するように言えば、相変わらず笑顔の彼が振り返った。

「呼び捨てでいいよ。そんな大した人間じゃないしさ」

「あ、そう」

そういうところは自分が知っている幸也なのに、と思いながらも、中也は曖昧に頷いておいた。

「兄貴～、どうでもいいけど、今まで何してたんだ～よ。ちゃんと聞かせろよ。１０年だ～ぜ、１０年」

「まあ、また今度な」

聞こうと思っていたがなかなかタイミングが掴めずにいた質問を、代わりにシヴァがしてくれた。しかし、幸也……ではなく、フェンリルはあっさり質問をかわしてしまう。

「だって、もう着いたし」

フェンリルが言うのとほとんど同時に、馬車が振動を止めた。どうやら、本当に目的地に着いたらしい。

「こいつ、とんでもねえ“おぼっちゃんハンター”で有名なんだぜ。心配するだけムダだよ」

暗闇に沈んだ軍の統括本部を見上げていた中也の耳に、リースのそ

んな声が聞こえてきた……。

始動6

「なんか、お兄さんの顔をツブした感じね」

統括本部前、中也たちと合流し、フェンリルを紹介された光宮は開口一番、本人に向かってそう言った。

「そこまで言う～か？」

「あるいは、あんたの顔を整えた感じ？」

「ひでえ……」

あからさまに悪意が滲み出ている光宮の言葉に、シヴァが激しく撃沈する。それを横目で見ながら、中也は内心で幼馴染に同情を寄せていた。

（幸也さん……じゃなくてフェンリルさんが俺の兄ちゃんだったら、確かにヘコむよ。兄ちゃんと姉ちゃん、普通にブサイクで本当によかった～）

実の姉に聞かれたら叩き殺されそうなことを考えながら、中也は最低限の松明に灯された階段を下に向かって進む。

「どうでもいいけど、今日は何するのよ。あんたたち、聞いてるんでしょ？」

前方を行くフェンリルとリースの背に、中也の隣を歩いていた光宮が問いかけた。

「まずは武器と防具を揃える。詳しい話は専門家に聞いてくれ。俺らが話してもどうせややこしくなるだけだ」

「専門家？　ギルドの技術開発部の人のこと？」

「ああ。今日は特別に部長が直々に説明してくれるそうだ。モンスターの素材を使った武器や防具に関しては、アルテリアでも指折りの専門家だから、まあ、失礼のないようにな」

「あの人のことだから、どうせ仕事中に居眠りして残業になっただけだろ」

リースの言葉に重なるようにして、苦笑交じりのフェンリルの声が聞こえてくる。

「知ってる人なのか？」

気になってついそう聞けば、相変わらず笑顔のままフェンリルが中也の方を振り返った。

「まあね。よぉく知ってる」

「ふ～ん……」

ギルドの技術開発部と言えば、アルテリア軍あるいはハンターズ・ギルドの中でも最も機密性が高い部署だということで知られている。主だった仕事は、モンスターの素材を使った武器や防具の管理と、開発、そしてフィールドの調査であると聞くが、その内実は極一部の人間しか知らない。軍学校に通う生徒である自分たちも、授業で軽く触った程度で、詳しい内容などは全く教えてもらえなかった。

（知り合い、か）

ギルド・ナイトというからにはそれなりに軍やギルドの幹部と顔見知りであってもおかしくはない。自分たちもこれからそういった人間と知り合いになっていくのか、と思うと、何となく重圧のよう

なものを胸に感じた。

「さて、ここだ」

そこは地下3階。一定間隔に設置された松明の光に照らされ、湿気を帯びた空気に満たされた暗い廊下には、幾つものドアが立ち並んでいる。そのひとつの前で立ち止まったリースが軽いノックの後に取っ手を引いた。重そうな木製のドアには「技術開発部・事務室」という文字が並んでいる。しん、と静まり返った廊下に、ドアが軋む耳触りな音がやたら反響した。

「いらっしゃい。時間通りだな」

ドアの向こうには、ランタンと松明、そして蝋燭に照らされた明るい小部屋があった。中央には木製の机が6つほど並んでおり、まるでどこかの会社のオフィスのような体裁である。

「君らがギルド・ナイトの候補生か。本当にまだ子供だねえ。まあ、別にいいけど」

煙草を咥え、くたびれた白衣をまとった年齢不詳の男が、そこに

立っていた。短く整えられた灰色の髪に、銀縁のメガネ、おまけにひどい猫背……という特徴が重なって、その男を随分と老けて見せていたが、顔立ちなどをよくよく眺めてみれば、まだ２０代の後半か、それくらいにも見える。

「俺は嵐灰（らんかい）。覚えても覚えなくてもどっちでもいいが、とりあえず技術開発部の部長をやってる。まあ、よろしくな」

「オジサン、また残業？　今度は何やったんだよ」

先ほどリースから、失礼のないように、と言われた人物に向かって、フェンリルがいきなりそう言った。

「お、おじさん？」

隣にいたルナと、つい顔を見合わせてしまう。しかし、そんな中也たちの動揺には気付かないらしく、フェンリルは全く気負うことのない足取りで嵐灰と名乗った技術開発部の責任者の方へ歩み寄っていった。

「お前らのために残業をかって出てやったんだよ。少しはありがた

く思えっての」

「ウソつくなよ。面倒くさがり屋では俺以上のオジサンがそんな面倒なこと進んでやるワケないじゃん。何したんだよ。それとも、将兄に脅された？」

「……分かってんなら、いちいち聞くんじゃねえ」

どうやら将兄に脅されたらしい。

「やっぱりそうじゃん。オジサンが残ってるって聞いておかしいと思ったんだよ」

「お前……ホントに腹立つなあ、相変わらず」

「今更だろ？」

屈託なく笑うフェンリルと、苦虫を噛み潰したような顔で彼を見る嵐灰。何だか2人は旧知の友か、あるいは家族のような、そんな印象を受けた。赤の他人だとしたら、フェンリルの態度は怖いもの知らずもいいところだ。

「あの、部長。説明を始めていただけますか？」

軽く咳払いしたリースが、嵐灰とフェンリルに向かってそう言った。

「はいはい。分かりましたよ。で、何だっけ？」

「モンスターの素材を使って作られた武器と防具について、です」

「ああ、そうだったな。すっかり忘れてたぜ」

「オジサン、もうトシだね」

「お前は黙ってろ」

フェンリルの頭を軽くしばく嵐灰を見ながら、中也たちは互いに顔を見合わせる。

（なんか、すげ～大物だな、フェンリルさん）

もしかして将兄に対してもこんな感じで接することができるのだろうか、などと、中也はどうでもいいことを考えた。

「まあ、口で説明してもどうせ分かりゃしねえ。まずは実物を見せてやるよ。付いてきな」

煙草を灰皿に押しつけて、嵐灰が奥に続くドアに向かって歩き

出す。他に選択肢がないので、中也たちは無言でそれに続いた。

「まあ、まずはビックリしてちょうだいよ、と」

事務室の奥にある木製のドアの向こうには、書類や販促などが乱雑に積み重ねてある小部屋になっていた。更にその奥に、鋼鉄で造られた扉が彼らを待ち受けている。石造りの建物に、鋼鉄の扉、である。それはまるで、牢獄にでも迷い込んだような印象を与えるには充分だった。

「ご対面～」

カギが外される硬質な音が鼓膜を震わせる。続いて、重い音をたてながら鋼鉄の扉がゆっくりと開かれた。

「な、なんだ、ここ……」

入った瞬間に、違和感に気付いた。それは、周囲にいる光宮たちも同様のようだ。それぞれが、顔色を変えて互いの顔と部屋の中を見比べている。

「お気付きのようで何より。まあ、そういうこった。早い話、こ

こにあるのは“フツーの”大剣だのランスだのじゃないってことだ」

部屋の大きさは、タタミに換算しておよそ20枚ほど、と言ったところだ。広いようで狭く感じるのは、壁際に所狭しと無気味な武具が並んでいるせいである。他には、分厚い装飾の本が並んだ書棚、そして学校の机と同じくらいの大きさの粗末な木のテーブルが置いてあるだけで、他には何もない。

（怖い……なんだよ、ここ。まるで……）

モンスターの体表がそのまま残った武具が置いてある以外、この部屋は特に何ということもない。しかし、そこに漂う空気はあからさまに“異質”だった。

「まるでフィールド。そんな気がするだろ？　ついでに、すげえ強いモンスターが近くにいて、お前らを見ているような、そんな感じがしねえか？」

嵐灰の言葉が、すべてを説明してくれていた。その部屋を満た

す空気は、何とも言葉に表しがたいが、敢えて人間の言葉にするなら、まさしくそんな感じだ。

「視線を感じるか？　気配を感じるか？　まあ、当然だな。ここには、全部で３８体のモンスターがいる。どこに？　決まってんじゃねえか。これだよ」

嵐灰が指差したのは、壁際に並ぶモンスターの素材で作られた武器、そして防具だった。

「どういう、こと……？」

緊張感のせいか、光宮の声にはいつもの張りが欠けている。そんな彼女の質問に、嵐灰が得意気に笑って見せた。

「それを説明するのが俺の仕事なんだってよ。詳しく話せば難しいし、ややこしいし、面倒くさい。そんな話を敢えて簡単に言うと……」

これだけの異質な雰囲気の中にいるというのに、顔色ひとつ変えない嵐灰が、気取った足取りで机の傍にあったイスに近づき、

腰かけた。自然、彼らは嵐灰の前に横一列に並ぶ。

「簡単に言うと、だな、モンスターの魂を武器と防具に封じ込めてんだ。それだけの話だよ」

いきなり現実離れした話題になり、中也の頭は一瞬、停止した。

（なんだって？）

それは、ここにいなければ笑って終わらせるような話に他ならない。

「モンスターの魂を、封じ込めた？」

思わず反芻してしまった中也に、嵐灰はニヤリと笑って見せる。

「まあ、いきなりそう言われたって、何のこっちゃって思うだろうな。分かる範囲で説明してやるよ」

呆気にとられた顔をしている中也たちを満足そうに眺めた後、嵐灰は白衣のポケットから煙草を取り出して火をつけた。

「まずは、人間とモンスター。どっちが強い？　って聞かれたら君は何て答えるよ。そこの金髪の子」

嵐灰が質問したのはレイだった。

「普通に考えればモンスターだろ。体の大きさも、力も、能力も違う。人間がレウスの前に丸腰で引っ張り出されたら、死ぬしかない」

僅かに視線を泳がせたレイだったが、意外にもはっきりとそう答える。

「その通り。人間は、まあ人間だ。だけど、モンスターはモノによっちゃあ信じられねえような能力を備えてやがる。リオレウスを例に上げようか。ヤツらの平均体長は頭から尻尾までだいたい２０メートル。体重は１５トン。ついでに１０００度近い火球を吐いて攻撃してくるし、空の王者と言われるだけあって飛行能力も高い。リオレウスの平均的な体力を仮に２０００とすると、人間は1だ。１０でも１００でもない。たったイチ。分かるか、この違い」

分かるか、と聞かれなくても分かる。つい3か月前、中也たち

はそのリオレウスと何度も戦ってきたのだ。あの巨大さ、あの運動能力……どれを取っても凄まじいという印象しかないし、忘れようにも忘れられない。

「まあ、そんなワケで、人間とモンスターじゃあ圧倒的に人間が弱いってことは分かったな？　しかし、今現在のアルテリアにはハンターっていう職業があるんだわ。こいつら二人も表向きはそうなってるが」

嵐灰が指差したのは、フェンリルとリースだった。特に表情を変えないリースとは対照的に、フェンリルはニッコリと笑いながら中也たちの方を見てくる。こんな雰囲気の場所にいて、どうして平気で笑えるのか、つくづく不思議だった。

「ハンターはどうやってモンスターを倒してるかっていうとだな、簡単さ。モンスターの素材を使って作られた防具で身を固め、モンスターの素材を使って作られた武器で攻撃しているんだ」

それはアルテリア国民であれば、子供から老人まで誰もが知っ

ている有名な話だ。中也も、もちろん知っている。

「ただし～、モンスターをとりあえずブッ殺して、その牙だの腕だのを使って大剣なり防具なりを作ったとしてもだな、正直、何の意味もない。むしろ、防具が固ければ固いほど、衝撃を受けた時、それを着ている人間はダメージがまともに来る。それに、さっきも言ったが１０００度近いレウスの火球を食らったらな、防具は無事でも中の人間は焼け死ぬのが普通だ。ついでに、レウスの牙を使った剣を使っても、それを振る人間の腕力がレウスの首の筋肉と同じくらいでなきゃあ、とても威力は出せねえ。むしろ、それくらいなら普通に鉄で作った剣の方がマシさ」

「それ、樹海でも話したわね」

光宮が中也の方を向いてそう言ってきた。無言で頷いて返すと、嵐灰が軽く笑う。

「へえ～。いいカンしてんじゃん。さすが、あの将兄がギルド・ナイトに選ぶだけあるね。まあ、それは置いといて。ハンターは

現実にモンスターの素材で作った武器だの防具だのを使って大型の飛竜種だの、古龍種だの、とてもじゃないが人間がどうこうできるような相手じゃないようなモンスターを倒しているワケだ。

これを可能にするためには、人間が使うモンスターの武器や防具に、モンスターが生きていた時と同じだけの威力を持たせるしかない。それを可能にしたのが……」

芝居がかかった仕草で、嵐灰は煙草の煙をドーナツ状にして吐き出した。

「錬金術ってヤツなんだよ」

始動6（後書き）

年の瀬でございます。

今年は本当にお世話になりました。

来年も中也たちをよろしくお願いします。

……作者としては、来年こそは自己満足でない小説を書きたいな、とそう思っております。

それでは、みなさま、よいお年を！

始動7

「オジサン、自分の得意分野のことを話す時ってホント幸せそうだよね。普段のあのヤル気のなさからは、と～て～も想像つかねえわ」

錬金術、と言われて固まった中也たちを差し置いて、フェンリルが相変わらず緊張感のカケラも感じさせない口調で嵐灰に向かってそう言った。

「やかましい。俺だって得意分野があるんだよ。つ～か、お前は少し黙ってろ」

「話が進まない？」

「そういうこった。それでだな、まずは錬金術について説明しとこうか。錬金術ってのは実はかなり高尚な技術でな～。よく言われるように、鉄を金に変えるなんていうチンケなモンじゃあねえ。結論から言うと……」

「不完全なものを完全にする技術。あるいは神の真似事をする技

術、でしょ？　ああ、ここでは女神オーディナって言った方が正しいかな」

嵐灰の言葉を先取りして言った中也に、その場にいた全員の視線が集中した。

「錬金術のことなら知ってますよ。賢者の石、哲学者の卵、ホムンクルス、ウロボロス、プリマ・マテリア、エリキサー、エーテル……他に何があったかな。あ、輪廻転生思想なんかも錬金術のひとつだっけ」

この手の話は昔から好きだったので、興味本位で本を読んだことが何度かある。だから、知っていることも多いのだが……。

「お前、それどこで聞いた？」

やや顔色を変えた嵐灰に詰め寄られて、中也は自分の口が滑ったことを実感した。

（や、やべえ……そう言えば錬金術師たちって、とにかくヒミツ主義なんだっけ。錬金術なんてモンがフツーに横行してる世界で

俺みたいな一般ピープルが知ってたらマズイだろ。何だってついポロっと言っちまったんだ！　どうやってイイワケしよう……。

ご、ごまかさないと……）

自分が言った言葉を激しく後悔する中也に、煙草を灰皿に押しつけた嵐灰の銀色の瞳がひたと据えられる。

「誰から聞いたんだ？」

「い、いや……すみません。え、えっと……」

「どこまで知ってんだ？」

「な、名前だけっす……」

「ふ～ん」

微妙な表情をしながらも、嵐灰はそれ以上を追求しようとはしなかった。

（やべえ……口には気をつけよう……）

余計なことを言って「粛清」の対象になるなどゴメンである。

まだまだこの世に未練はたくさんあるのだ。

「さて、話はズレちまったが説明しようか。まず錬金術というものはだな、そこの坊やが言った通り、不完全なものを完全に変える技術のことだ。言わば、錬金術師たちは女神の真似事をしていると言ってもいい」

先ほど中也がポロっと言ってしまった内容を、嵐灰が改めて口にする。

「じゃあ、不完全なモノとは何か。例えを上げると、病気になった人間、怪我をした人間、死すべき存在である人間……そんなところだ。それを完全なるモノに変えるとどうなるか。分かるヤツいるか？」

質問する口調だったので、中也は恐る恐る手を上げてみる。ムダとは分かっているものの、夏葉の前でちょっとくらいカッコいいところを見せたいのだ。

「病気の人間は健康な人間へ。怪我をした人間は健常な人間へ。死すべき存在である人間は、不老不死へ。ついでに、卑俗な人間

を霊的な人間に変えることとか、不幸な社会を幸福な社会に変えるってことも、錬金術師の目的だったと思います。あと、どんな病気も治す万能薬エリキサーを作ること、とか」

「よぉく知ってんな～。正解だよ」

呆れたような口調で呟きつつ、嵐灰は再び煙草に火をつけた。薄暗い部屋に、紫煙が舞う。煙草の匂いは、中也が知っている煙草の匂いと変わらない。

「もちろん、銅や鉛、鉄なんかの卑金属を完全な金属である黄金に変える、という性格も持ち合わせている。なぜなら、金属ってヤツらは鉄から銅、銅から鉛（なまり）、鉛から錫（すず）、錫から水銀、水銀から銀、銀から金という具合に成長していくからだ。鉄は火星、銅は金星、鉛は土星、錫は木星、水銀は水星、銀は月、金は太陽の影響を受け……」

「オジサン、俺そういう話されると眠くなってくる」

フェンリルの率直な意見に、話の腰を折られた嵐灰が苦い顔を

した。

「お前はホントに……」

「仕方ないじゃん。つまんねえモンはつまんねえんだし」

「ギルド・ナイトだろーがよ。普通のハンターは知らなくてもいいが、お前らは知っとかなきゃいけねえって何回言ったら分かるんだ、このクソガキ！」

「問題があるとすれば、オジサンの説明の仕方かな。ややこし～話を、ややこし～く説明されても分かんねえよ」

「……」

黙り込んだ嵐灰を見て、中也はつい口元を笑いの形に歪めてしまっていた。さすがフェンリル。相手が誰だろうとも決して物怖じしない性格はどこの世界でも健在らしい。

「えっと……早い話、金属が別の金属に変わる時には、だな、腐敗っていう名目の死が必要不可欠で、金属は一度、死んで別のものに甦るってことが言いたかったんだ。それは人間にも当てはま

って、だな、お前らは死んだら、また別の人間に生まれ変わるってことさ。アルテリアの神話じゃあ、死人はみんなニブルヘイムへ行くってことになってるが、俺たちのような錬金術師はそういう考えは持ってない。それが言いたかったんだ」

その時、嵐灰はなぜか夏葉の方に視線を向けた。

「それで？　その錬金術がモンスターの素材を使った武器や防具に何の関係があるのよ」

ようやく、この部屋の雰囲気に慣れてきたらしい光宮が、腕を組みながら嵐灰を見下ろし、そう質問した。

「早い話、錬金術ってヤツを使えばだな、モンスターの死体の一部に、そのモンスターの魂を宿らせて、そいつが生きてた時と同じくらいの力を人間が使えるってことだよ。死体は不完全な存在だろ？　それに錬金術を施すことで、魂が宿った完全な存在に変えるって意味だ」

「だったら最初からそれだけ説明すればいいじゃない。鉄が黄金

に成長するなんて話、必要ないわ」

「……まあ、そうなんですけど、ね」

どうやら必要なかったと認めるらしい。

「で、素材をまあ、ハンターの好みの形に加工するのは鍛冶屋の仕事だ。センスと金が無ければカタログ通りの仕様にされる。そんで、そこからが錬金術師の仕事だ。大剣なら大剣、ランスならランスの形になった武器に魂を封じる時に必要なのが～」

「賢者の石？」

再び口が滑った。

「その通り」

何か言われるか、と思ったが、意外なことに嵐灰は気にする様子を見せなかった。

「そこのお前。賢者の石についてどこまで知ってる？」

そう言って、彼が指差したのは中也だった。これはもう、カッコいいところを見せるチャンス。そう思って、中也は知っている

ことを語ることにした。後からどういうことになるか考えないわけではなかったが、好きな子の気を引ける、という欲求には勝てない。

「賢者の石っていうのは、確か万能の石のことです。黄金を作ることだけでなくて、人間を不老不死にしたり、人間の霊性を高めたり……言わば、不完全なモノを完全なモノにするっていう錬金術の目的を達成するためのアイテムのようなものですよね？　不純な貴金属から鉛を使って金や銀を取りだしていたので、昔の錬金術師たちは変幻自在な金属である鉛を尊重していました。それが賢者の石の発想の元っていうか……。それで、賢者の石を作る作業のことはマグヌス・オプスって言われてて、これは大いなる作業っていう意味だったと」

「はい、その通り。優秀、優秀」

褒められたので、ちょっと嬉しくなった。夏葉の方をチラリと見ると、こちらの方を見ていたので余計に嬉しい。

「それで、問題はどうやって俺たち錬金術師たちが賢者の石を作ったのかってことだが。これはさすがに答えを知らないだろ」

「知りません」

中也のいた世界では、誰一人として賢者の石を完成させることができなかった。もちろん、二コラ・フラメルを始め数名の錬金術師たちが賢者の石を完成させた、という逸話は残っているが、その信憑性はかなり薄いというのが世間の解釈だ。賢者の石というのは、結局のところ単なる科学神話（テクノミス）のひとつに過ぎない。しかしながら、自分がいた世界では完成することができなかった賢者の石、というものが存在している世界、というのは非常に興味深い。

「だと思ったよ。答えは、簡単。古龍の血だよ」

「古龍の、血……？」

唖然とした顔で聞き返してしまった中也に、嵐灰はニヤリと笑ってみせる。

「そう。意外と言えば意外だろ？　ただ、理屈は合ってんだよ。古龍ってのは１０００年、モノによちゃあ１００００年を生きると言われているモンスターだ。言いかえれば、ヤツらには寿命というものが無いんだな。殺されない限り、死なない。つまり不老不死。その龍の血を凝縮したのが、コレだ」

言いながら、嵐灰はくたびれた白衣のポケットから柘榴石（ガーネット）のような赤い固まりを取り出して見せた。

「コレこそ、賢者の石。見た目はまあ、大粒の宝石みたいで綺麗だろ？　ただしコレは使い方に気をつけねえと大変なことになる。気軽に使うと、死ぬぞ」

使い方に気をつけろ、と言いながら白衣のポケットに普通に入れて持ち歩くというその矛盾した行動に内心で疑問を覚えつつも、中也はつい嵐灰の方に歩み寄って賢者の石を凝視した。

（コレが賢者の石……）

自分がいた世界では誰も作ることができなかった、究極の物質

がそこにある。そう思うと、否応なく鼓動が高鳴った。

「触ってみていいですか？」

「ああ。問題ない。こいつは今、休暇中だから」

「休暇中……」

よく分からないながらも、手渡されたそれを手の平の上に乗せてみた。興味を引かれたのか、光宮たちも集まって来る。

「なんか、柔らかい、ですね……」

石、と聞いていたので、てっきり鉱石のような固さを想像していたのだが、手の平に乗せられた賢者の石は何だかブヨブヨしていて柔らかい。

「古龍の血を凝縮させたって言ったじゃねえか。柔らかいに決まってんだろ」

「へえ……」

そんなもんか、と思いつつ、中也は近くにあった蝋燭の炎にそれを翳してみる。真っ赤な宝石のような固まりが光を透過し、手

の平の上に幾何学模様を描き込んだ。

「きれいね」

光宮の口から、珍しく率直な感想が漏れる……。

始動7（後書き）

あけましておめでとうございます！

今年もよろしくお願いいたします！

始動8

賢者の石を使って、モンスターの死体の一部にその魂を宿らせ、人間がモンスターの力を使うことを可能にした。それがアルテリアの錬金術の正体だ、と聞かされて、中也は納得できるような納得できないような、何とも言えない微妙な気持ちになった。

「あの、部長……」

「なんだ。質問か？」

「質問っていうか、疑問なんですけど、古龍の血を使って、どうして賢者の石ができるんですか？　それに、モンスターの死体に魂を宿らせる……って言われても、俺は魂なんてものを見たことがないんで……いまいちピンと来ないっていうか……」

「ああ、だろうな」

ニヤリと笑って、嵐灰は煙草を灰皿に押しつけた。

「口で言っても分かんねえだろうと思って、この部屋にお前らを連れて来たんだよ。頭で理解するより、肌で感じた方が早い。と

りあえず、ほらよ」

そう言って、嵐灰は机の上に放り投げてあったタガー（短剣）を手に取り、中也の方に放り投げる。

「あの……？」

「鞘から抜いてみな。俺が言った意味が分かるからよ」

「はあ……」

言われるまま、中也は綺麗な装飾が施されたタガーを鞘から抜いてみた。

「な……！」

その瞬間、中也は「幻覚」に捕らわれた。

「どうしたの！？」

隣にいる光宮の叫ぶような声が、どこか遠い場所から聞こえてくる。現実の声が、まるで水の中から音を聞いているように、朧に変わっていった。

（フィー……ル、ド……？）

アルテリア軍の統括本部、その地下にある技術開発部にいたはずだった。それなのに、なぜか中也はフィールドにいる。

（ここは、樹海……かな？）

背高く生い茂る苔むした大木に、囀る鳥の声。流れる小川のせせらぎに、鼻腔をつく木の葉の香り……足元に感じるのは石の床ではなく、柔らかな腐葉土の感触……。

（モス……？）

目の前にいたのは、背中に苔を生やした小型のモンスター、モスだった。見た目はブタとよく似ているし、大きさもそれと変わらない。鳴き声も、よく似ている。そのモスというモンスターが、なぜか中也の目の前にいる。

（……）

じっと中也を見つめたまま、モスが一歩前に踏み出した。何となく、気圧されるものを感じて、中也は思わず後ずさる。再び、モスが一歩前に踏み出してきた。

（来るな、よ……）

それは、子供のころ近所の家で飼っていた大型犬が理由も無く恐ろしかったのと、感覚的にはよく似ている。殺されることはないだろう。そう分かってはいても、何だか恐ろしい。本来、動物が持っている攻撃本能が剥き出しになっている様子は、人を怖気づかせるには充分で、中也は再び後退りした。

「そこまで、だ」

ふいに、手に握っていたタガーを取り上げられる感覚があった。同時に、霧が風に吹かれて晴れるように、樹海の幻影が消えて現実が戻ってくる。

「お前の目の前には、何がいた？」

「……モス」

タガー元通り鞘に納めた嵐灰に聞かれ、中也は消え入るような小声で答えた。気が付けば、破裂しそうなほど鼓動が高鳴り、思い切り走った後のように呼吸が速くなっている。額から滴った汗

が滴り落ち、床を汚す。その様子を、呆然とした思いで眺めていた。

「樹海に、いた。モスが目の前にいて……」

「だろうとも。なぜなら、このタガーはモスの骨を削って作ったからだ。ついでに、賢者の石を使ってその魂をここに封じてある。だから、それを使おうとしたお前にはモスの幻覚が見えた。けっこうツラいだろ？」

「うん……」

何が、とは言われなかったが、嵐灰が言わんとしていることは分かった。モンスターの中では「ザコ」に位置づけられるモスを相手にこの有り様だ。

「幻覚の中で、お前はモスと睨みあいをしたな？」

「……はい」

「それを敢えて言葉にすると、だな、言わば魂と魂のケンカだ。魂同士のケンカに、身体の力は関係ねえ。精神力の勝負だと言っ

ても間違いじゃねえな。まあ、モスとは言え、弱肉強食のフィールドで何十年って時間を生きてきたんだ。人間の世界で普通に生きてきたお前が適わなくても仕方ねえよ」

「……」

なんだか非常にバカにされた気分になったが、こればかりはどうしようもない。実際、中也はモス相手に怯んでしまったのだ。

「と、まあ、こういうワケだ。モンスターの素材で作った武器にその魂が入ってるってのは、納得したな？」

「はい……」

納得するも何も無かった。実際に体験させられれば、イヤでも信じざるを得ないのだ。

「でも、これって……。普通のハンターはどうしてるんですか？だって、レウスとかクシャルとか、大型の飛竜種とか古龍種の素材で作った武器を、ハンターは振り回してるはずじゃ……」

自分はモスの素材で作った武器さえまともに振るうことができ

そうになかった。これが大型のモンスターだったら、と思うと背筋が寒くなる。

「いいところに気が付いた。結論から言ってやるよ。レウスに限ったことじゃあねえが、モンスターってヤツはたいていプライドが高い。だから、自分より弱いヤツには従わない。ただ、従いません、で済めばいいけどな、ヤツらはそんなに甘くない。人間がモンスターの素材で作られた武器を手に持った瞬間、普通は殺される。それはハンターも同じだ」

「え、でも……」

「だからこそ、防具ってヤツがあるんだよ」

そう言って嵐灰が指差したのは部屋に並ぶモンスターの防具だった。武器と防具がひと揃えで壁に立てかけられている様を見て、中也はひとつの法則のようなものに気が付いた。

「あれ……」

「ん？　どうした？　なんか気付いたか？」

「属性が、正反対だ」

「なかなか鋭い。その通りだよ」

武器や防具には例外なく、素材となったモンスターの体表が色濃く残っている。その体表から、モンスターの名前はだいたい分かった。水の属性を持つダイミョウザザミの武器には、炎の属性を持つリオレウスの防具……と言ったように、それぞれのモンスターが持つ属性が正反対なのだ。

「早い話、武器と正反対の属性を持つモンスターの素材を使った防具を付けることで、それを使おうとする人間は死なずに済む、と言ったところだな。それに、防具にはいろんなモンスターの素材がゴチャ混ぜにしてあるから、それを付ける間くらいは無事でいられる。分かったろ？　とりあえず、武器を持つ前には必ず先に防具を付けること」

「……そうしなきゃ、死ぬ？」

「正解」

意地悪げに笑って、嵐灰は再び煙草に火をつけた。

「まあ、中には防具ナシでも飛竜種だの古龍種だのの素材を使った武器を平然と振り回すハンターもいる。そういったヤツらは別格だ。いわゆるGクラス・ハンターってヤツだな。まあ、新米ペーペーのお前らには縁がない話だ」

信じられない。そう思った。人間とモンスターは基本的に別格なのだ。どう考えても、人間の方が弱い。それは、モスと対峙してよく分かった。飛竜や古龍の武器を平然と振り回す連中がいる、と聞いても、とても信じられない。

「こんなところかな。ああ、賢者の石の作り方はさすがに教えてやれねえわ。これぱかりは極秘中の極秘なんでね。まあ、ここまで喋ったわけだし？　せっかくだから、ひとつだけ教えてやるよ。賢者の石を最初に作ったのは人間じゃない。ひとり……いや、一匹と言った方がいいかな？　まあ、一体の鬼龍だったそうだよ。その鬼龍から、人間は賢者の石の作り方を学んだそうだ」

「鬼龍……」

久々に聞いたその言葉に、中也たちはお互いに顔を見合わせた。

そもそも、入学式の件は鬼龍の仕業ではないか、と言われていて、結局、あれから何も分からないままだ。

「鬼龍は森羅万象と時空を操るモンスターだ。モノによっちゃあ時間の流れを変えたり、遠くのものを見る千里眼っていう能力を備えているヤツもいるらしい。本当は、賢者の石を作るには鬼龍の血が最適だ。ただ、鬼龍は伝説級のモンスターである上に、人間と同じ見た目をしているから判別が付かない。それに、血を寄こせと言って、はいどうぞ、と差し出すワケもねえしな。だから、言わば古龍の血は代用品ってトコだ」

どこか楽しげに、嵐灰は語る。

「ついでに、賢者の石を作った鬼龍はな、人間に封じられた王のために、森羅万象の力を備えた一本の剣を作ったそうだ。その剣の名はレイヴァーティン。知ってるか？」

「……ロキの愛刀」

アルテリア神話で言うところの、女神オーディナの対極に位置する悪神ロキ。彼が愛用している剣の名が、確かレイヴァーティンと言ったはずである。

「その通り。昔は別モンだと考えられていたらしいんだけどな、今じゃあ神話の中の人物は誰も会ったことがないが、鬼龍に会ったことがあるっていうヤツは探せばいる。今もどこかにいるだろうよ。人間のフリをした鬼龍の王が、な」

「……」

何となく、中也は嵐灰の言葉に意味深なものを感じた。

「さてと、技術開発部の部長からのお話は以上だ。後は、とりあえずクエストに出るまでに、最低クラスの武器と防具くらいは使えるようになることだ。頑張りな」

いったん言葉を切った後、嵐灰はリースとフェンリルの方に視

線を向けた。

「お前ら二人で、武器庫まで案内してやんな。分かってると思うが、こんなガキどもにいきなりGクラスの武器だの防具だのを持たせるようなことはすんなよ。死ぬぞ」

「了解いたしました」

「へいへ～い」

リースとは対照的に、フェンリルの態度は相変わらずだ。そして、その2人に促されるようにして、中也たちはその部屋を出ることになった。

長い夜が始まろうとしている……。

始動8（後書き）

何と言いますか……いつになったらクエスト出んだよ、テメーら、というツッコミがどこかから聞こえてきております（笑）

何事も、勉強と修行と努力という下準備が大事……です、きっと（汗）

相変わらず展開が牛なみの遅さですが……中也たちの修行の時間だということで、お許しください（汗）

楽しいトコだけ書く……というのは、ちょっと自分の中で……ナシなので（笑）

錬金術につきましては、草野巧の「図解・錬金術」を参考に、モンハンに都合よく解釈させていただきました。

始動9

技術開発部を後にして、中也たちはフェンリルとリースに案内されるまま、階段を登る。

「なんか変わった人だったな、あの嵐灰(らんかい)って人」

ギルド・ナイトの2人に聞こえないように、中也は隣にいるシヴァに向かってそう言った。

「だな～。変人・奇人の王道を突っ走ってる感じだった～ぜ」

「違いない」

若いのか老けているのか判別が付かない容姿に、錬金術について語る時のあの嬉しくてたまらないと言った表情。嵐灰という人間を一言で表すと、シヴァが言った通りまさしく「変人・奇人」という言葉がしっくり来る気がする。

「つ～か、ホントにお前、モスの幻覚を見たのか～よ」

どこか疑うような口調で聞かれ、中也は軽く顔を顰めた。思い出してみると、モス相手に怯んでいた自分はけっこう情けない。

できれば無かったことにしてしまいたい過去のひとつだ。

「ああ、見たよ。情けないけどさ、なんかスゲー怖かった。さすが、ザコでもモンスターって感じだったぜ」

「ふ～ん」

それ以上シヴァは何も言わなかったので、中也も口を噤むことにした。

（カッコわる……俺）

石造りの階段を登り、一階に出たところで、相変わらず最低限の松明のみで照らされた廊下を奥へと進んで行く。昼間であればそこを行きかう軍人たちで溢れかえっているだろう軍の統括本部も、深夜0時を回ろうという時刻は、まるで別世界のようにしんと静まり返っている。

（軍学校もそうだけど、普段は人で溢れてる場所に人がいないっていうのは、ホント無気味だよな。特に夜だったりすると、なおさら）

そんなことを思いながら、中也は少し離れた場所を歩く夏葉の方に視線を向けた。

（なんか、眠たそう……）

気になる子の方に自然と意識が向いてしまうのは、どうしようもないことだ。最近、気が付けば夏葉の方を見ている時間が多かった。

（夏葉って意外と低血圧なんだな～。そう言えば朝早いのと夜遅いのが苦手とか前に言ってたっけ）

ついでに睡眠と風呂をこよなく愛し、イモ虫だのウジ虫だのいわゆるニョロニョロ系の虫が大の苦手で、大量に見たら気絶したという情報は、光宮から仕入れた。

（虫を見て気絶するって可愛いよな、やっぱ）

つい口元に笑みを刻みつつ、中也は意図的に夏葉から視線を逸らす。あまりずっと見ていると、他人の好いた惚れたといった恋愛感情には目がない光宮に気付かれかねない。そうなれば面倒な

ことになる。日常会話でネタにされることだけは、死んでもイヤだ。

（将兄に話が伝わったら……鼻で笑われる程度かな）

自分が夏葉に思いを寄せている、と聞いたところで、あの将兄が顔色を変えるはずはない。そう思うと、何だか惨めな気持ちになった。

（あんたはアルテリア・ナンバー・ワンのイケメンで、俺は普通の学生だよ）

内心で、中也はここにいない男に向かってそう毒づいた。

「ここだよ～」

ふいに、現実世界からフェンリルの声が聞こえてきて、中也は慌てて思考を中断する。意識は夏葉の方に向いていることが多いが、今は一応、極秘の任務中なのだ。

「なあ、リース。やっぱ最初は“骨”かな？」

「だろうな。あれなら、そこまで負担は来ない。お前、用意して

やってくれよ」

「あいよ～」

フェンリルとリースがよく分からない会話をしながら、手にしていたカギを使って、大きな南京錠が付いた鉄の扉を開く。リースの手によって扉が開けられた瞬間、ほこり臭い空気が鼻をつき、生温かな風が頬を掠めていった。

「うっげ！　と～ぶん開けてないんだろうな～。くっせ～」

端正な顔立ちを歪めたフェンリルが手で口元を覆いながら、廊下に灯されていた松明をひとつ手に取る。それを持って、暗闇が色濃く立ちこめた部屋の中へ、迷いのない足取りで入って行った。

「広い……」

壁に等間隔で設置された松明に、フェンリルが順番に火を回していく。ひとつ松明が灯る度に、その部屋の広さが露わになっていった。天井こそ低いが、そこはまるで学校の講堂のような大きな部屋だった。石造りの壁に、床。扉が二か所あるだけで、他に

は何もない。

「なあ、フェンリルさん。武器庫って言ってたけど、ここがそれなんか？」

「ん～？　ここは試験場ってヤツかな。武器庫はあっち～」

そう言ってフェンリルが示したのは、奥にある鉄製の扉だった。

「中也～」

「なに？」

「お前ら、しばらくここでお泊りだって～」

何でもないことのように衝撃的な言葉を言ってくれたフェンリルに、中也だけでなくギルド・ナイト候補生、全員が顔色を変えた。

「ジョーダンじゃないわよ！　ふざけないで！　せめてもうちょっとマトモなところを用意しなさいよ！！」

「それ、将兄に言えよ」

光宮の抗議は、リースのたった一言で一蹴された。さすがの彼

女も、将兄の名を出されると言い返せないらしい。

「俺らが決めたワケじゃない。それに、仕方ないことだ。一応ギルド・ナイトは仕事内容はもちろん、誰がギルド・ナイトで誰がそうじゃないか、普通のヤツらにはバレちゃいけねえことになってんだ。今回、俺とあの“おぼっちゃん”は一緒に仕事してるから顔を知ってるワケだけどな」

そう言ってリースが顎でしゃくったのは、武器庫のカギを開けているフェンリルである。

「正直、ギルド・ナイトに任命されて今回の任務に就くまで、あいつがギルド・ナイトだなんて思ってもみなかった。そんなモンなんだ。真昼間にお前らみたいな子供が統括本部をウロウロしてたら誰でもおかしいと思うだろ。だからだよ。まともに武器が振れるようになるまで、残念だが監禁だ」

「……学校があるんだけど？」

同情しているように見えなくもないリースに対し、ルナが至極

真っ当なことを聞いた。

「明日は休みだろ？　ちゃんと学校に通いたかったら、明日中に武器が使えるようになれってことさ」

そんなことが許されるのか、と思ったが、残念ながらここは中也の知っている常識が通用する世界ではない。子供は勉強するもの、あるいは子供は勉強だけしていればいい、という場所ではないのだ。

「将兄はそんなに甘くないぜ」

そのようだ。ここから出たければ、最低レベルでもモンスターの素材を使った武器を使えるようになるしかない。リースは、暗にそう言っていた。

「まあ、そう言うワケさ。せめて今夜中には防具くらい付けれるようになっとかねえと、明日がツラいぜ」

「と、いうワケで。はい、どうぞ～。誰からいっとく？　あ、心配しなくても全員分あるから」

リースのセリフが終わると同時に、フェンリルが抱えていた木箱を床に降ろす。

「素材はフィールドに落ちてた“なんかの骨”だったかな。一応ケルビとかファンゴの素材も入ってるけど、そこまで怖くねえよ」

「……お前、“なんかの骨”って……。せめて“なぞの骨”って言えよな」

「いいじゃん、別に。名前が違っても中身は一緒なんだからさ～」

ひたすらいい加減なフェンリルの説明に、呆れたようなリースの声が重なった。

「一番乗りはあたしが貰う」

前に進み出たのは、レイである。

「お！　さ～すがレイ～！」

木箱のフタを取る彼女の背に、シヴァが他人事のようなエールを送っていた。その様子に微笑を向け、フェンリルが再び武器庫の方に向かって歩き出す。

「フェンリルさん、手伝うよ」

「あ、マジ？　助かるわ」

ひとりで6人分の防具を出すのは大変だろうと思って、中也はついフェンリルの後を追いかけていた。

「なんか、いまいち実感ないんだけどさ、俺らってけっこう大変なことになってる？」

2人並んで歩きながら、中也は会話がない空気に耐えかねてそう問いかける。

「そんなに気負う必要ないんじゃね？　最低限のことしてれば怒られねえよ」

「……そんなもんかな」

「そんなもんだよ」

呆気なく言われ、ちょっと拍子抜けした。しかしながら、そういう言葉をあっさり言えるフェンリルを見ていると、相変わらずだ、と、そう思ってしまう。

「なんか、あんたらしいな」

「それがモットーだからね」

「どんな時でも“俺”らしく？」

「そうそう」

中也が知っている“彼”は、口癖のようによくそう言っていた。こちらの世界でも、彼の性格は変わらないらしいと知ってほっとする。

「さて、と。これ運んで～」

「分かった」

鋼鉄の扉の中は、真っ暗な小部屋になっていた。そこに、幾つもの木棚が組まれ、所狭しと木箱が詰め込まれている。まるでコンビニやデパートの倉庫のような雰囲気であるが、木箱の中に入っているのは、パック詰めされた菓子やオモチャではなく、モンスターの素材で作られた防具だ。少し離れた場所に細長い木箱が置いてあるが、それはおそらく武器だろう。大きさからして、大

剣のようだと察しを付けた。

「なんか、無気味だな、ここ」

「当たり前じゃん。ここに置いてあるのは全部ホンモノだぜ～？」

「ああ、そっか……」

木箱を両手に持って運びながら、中也は自分がマヌケなことを言った気分になって、思わず苦笑いしていた。

「ギルド・ナイトの先輩として、何かアドバイスある？」

「あどばいす？」

「えっと……忠告とか、こうしたらいいよ、みたいな」

「ん～。特になし。とりあえず、なるようになる」

「へえ～」

胸を張っていい加減なアドバイスをくれたフェンリルに、中也は思わず笑ってしまう。

（やっぱ幸也さんは、どこの世界でも幸也さんだな～。あ、違う。ここじゃあフェンリルさん、か）

そんなことを思いながら、中也はフェンリルと一緒に全員分の防具を武器庫から出し終えた。

「がんばれ～、中也」

「うん」

笑って見守ってくれるフェンリルの傍で、中也は他の仲間たちに混じって木箱のフタを開けた。正面では、足と腕に骨を付けたレイが、額に汗を浮かべて固まっている。その横にいるルナも光宮も同様だった。

（すっげ～。なんか、こわ……）

木箱の中には、本当に骨を削って作られただけのような防具が、剣道の面や籠手のように整然と詰め込まれている。とりあえず、中也は取り出しやすい腕のパーツを取り出し、自分の左手に当ててみた。

「う……！」

途端に、防具を付けた左腕から首にかけて、まるで獣に噛みつ

かれたような激痛が走る。

「人間がモンスターの力を使うってのは、けっこう大変なんだよ」

顔を顰めた中也に、頭上からリースの声が降って来た。言われなくても分かっていたが、実際に体験するのと何となく知っているというのは違う。

（これは……全部付けれるようになるまで、大変だ……）

この上更に、武器を持って大型のモンスターと戦わなければならないのだ。先行きは、暗い……。

始動9（後書き）

ギリギリ……アップです！
今日はマジで遊んでました（汗）

相方と車に乗っていると、何の前触れもなく相方が水戸黄門のテーマソングを歌い始めました。

「じ～んせい、楽ありゃ、苦ぅ～ううう～ううぅうぅぅ～うぅ～ううう～ぅう～もあるさ～♪」
「“苦”が長えよ！！」

と、突っ込んでおきました（笑）

始動１０

時計の針が深夜3時を回ろうとする時刻……。

「お！　すげ～じゃん！」

ギルド・ナイト候補生の中で、一番最初に“なぞの骨”で作られた防
具一式を身につけることができたのは夏葉だった。真っ青な顔で立ちつ
くす夏葉に向かって、フェンリルが感嘆の声をかける。その様子を傍目
に見ながら、中也は驚きを隠せなかった。

「意外だな。ちょっと驚いたぜ」

フェンリルの横で、リースもそんなことを口にする。

「外していいぞ。休憩だ」

「はい」

リースに言われて、夏葉はたった今、苦労して纏ったばかりの防具を
脱いでいく。

（すげ……絶対ラストだと思ってたのに……）

そう言えば、夏葉は見た目によらず、けっこうケンカが強かったよう

な気がする。それに、樹海でランポスに群れに襲われた際、パニックに

陥っていた中也たちとは対照的に、真っ先に攻撃を仕掛けたのも確か夏

葉だったはずだ。

（俺とシヴァは見た目通りだけど……女の子たちはホント……見た目と

中身が違うんだよな……）

ここ最近、それはレイ、ルナ、そして光宮だけに当てはまると思いこ

んでいたが、どうやら夏葉もその例に違わないらしい。元通り、私服姿

に戻って、壁に寄りかかる夏葉を見ながら、中也はそんなことを思って

いた。

（普段は大人しくて、おしとやかなのに……）

実際はそうでもないのかもしれない。それに比べて……。

（何やってんだよ、俺）

なぞの骨で作られたという防具相手に格闘すること3時間あまり。未

だに、両足と片手にパーツを付けただけで座り込んでしまう自分がいる。

（負けてらんねえ……！）

気持ちの上ではそう思うものの、新たなパーツを体に押し当てる度に

全身を駆け抜けていく激痛に、なかなか慣れることができない。例える

なら、防具を付けていく度に獣の牙が肌を貫くような、そんな感じだ。

「くっそ……」

激痛が駆け抜ける左腕で、右腕のパーツを掴み、それを押し当てる。

全身を汗だくにしながらも、中也は“負けたくない”という気持ちだけ

で、それを付けようと試みるが、痛みに負けて断念してしまう。ここ数

時間、ずっとそれの繰り返しだった。

「いてえ！！」

横からシヴァの叫ぶような声が聞こえてくる。振り向けば、彼は両手

両脚にパーツを付け、腰回りにまで防具を付けていた。胸のパーツを体

に押し当てながら、必死に歯を食いしばっている。

「なっちゃんに負けてらんねえ～よ！」

その気持ちだけは、よく分かる。

「そうそう！　男を見せろよ、シヴァ～！」

自分たちがこんなに必死になっているというのに、フェンリルは相変

わらずである。それが憎たらしくもあり、羨ましくもあった。

「幸也さ、じゃなかった。フェンリルさん。あんた、コレ付けても平気

なのか？」

激痛の合間に、中也はついそう聞いてしまっていた。正直、何か喋っ
てないと、やってられない。

「平気に決まってんじゃん。ギルド・ナイトだぜ？　お前らと同じだっ
たらヤバいだろ」

予想通りの内容を、あっさり答えられて中也は気分が重くなった。分
かってはいたが、そうも簡単に言われると何だか空しくなる。

「おい、お前。ムダ口ばっか叩いてないで、集中しろよ」

溜め息をついて痛みをやり過ごす中也に、リースの声が降ってくる。

「喋ってないと気分が滅入るんですよ」

顔を顰めながら言い返してみると、リースが嘲笑するような笑みを口元
に刻んだ。

「……いいことを教えておいてやるよ。病気でも怪我でも修行でも、

喋れ
るうちは、まだ大丈夫だ。人間はホントにヤバくなったら、喋る体力も無
くなる。痛い痛いって喚いているうちは、まだまだ大丈夫ってことだ。テ
メーがマジメにやってない証拠だ」

「……」

マジメにやってないワケじゃない、と思ったが言い返すのは止めておい
た。

「集中してやれ。ボーン・シリーズはもともとが死体なんだ。食い殺され
ることはねえ。テメーのヤル気次第だ」

「……はい」

見た目の割に、言ってることは正論だ。さすがギルド・ナイト、と中也
はリースに対する評価を内心で密かに書き換えていた。どこにでもいる青

年、というワケでもなさそうだ。

「アガりだよ！！」

右腕のパーツを付けるのに四苦八苦していた時、いっそ清々しいほどの

レイの声が聞こえてきた。その声に彼女の方を見れば、全身に防具を付け

て天井に向かって両腕を翳している。

「いい感じだな！　脱いでいいぞ！　合格だ！」

「よっしゃあ！！」

颯の勢いで防具を脱ぎ捨てたレイが、夏葉に並ぶ。二人揃って、差し入

れられたビン詰めのフルーツ・ジュースを口に運んでいた。

「次は……俺～！！」

その表情から、かなり無理をしていることがあからさまだったが、レイ

に続いたのはシヴァである。負けず嫌いのシヴァが、女の子二人に先を越

されて黙っているはずはない。

「おお～！　やったじゃん、シヴァ！　ご～かく、ご～かく！」

「当たり前～！！」

フェンリルから合格サインを貰い、シヴァが引き千切るような勢いで防

具を外していった。

「負けて……らんないよ！！」

夏葉、レイに続いてシヴァが防具を付け終わったのを見て、顔色を変え

たルナが真っ白な歯を食いしばりながら、最後のパーツを装着する。

（負けず嫌いなんだな、みんな……）

どちらかと言えば他人と競うよりは、穏便に……という性格の中也には

とても真似できない。誰かに負ける、ということはこの激痛を凌駕できる

ほど重要なことなのだろうか、と、どうでもいいことを考える。

「よ～し、ボインちゃん、合格だ」

「誰がボインよ！　そうだけど！」

ルナの言葉に、リースが声を上げて笑った。彼が笑うのを見たのは本日
始めてである。どうやら、彼は巨乳が好きらしい。
「あとは、お前ら二人だな」
そう言って、リースは中也と光宮に視線を向けた。言われなくても分か
っている。残っているのはもう、中也と下ネタ・プリンセスだけだ。
「あんたにだけは……負けないわ」
「こっちのセリフだよ」
全体的に引きつっている表情の中、口元だけは笑みの形になっている光
宮のセリフに、中也は負けじと言い返す。さすがに、夏葉の前でラストに
なるのはイヤだった。
「中也！　気合いだ～ぞ！　気合いでどうにかなるもんだ～ぞ！」
お前とは違う、と思いながらも、中也はもう、それしかないと知ってい

た。モンスターの素材を使った武器や防具を振るう時は、精神力の勝負だ

と嵐灰も言っていた。精神力とは、言いかえれば気合いである。

「光ー！　気合いよ！　気合いでどうにかなるから！」

少し離れた場所で、ルナが同じことを光宮に言っていた。やはり、先に

合格してしまった彼女たちも気合いでどうにかしたらしい。

「リース、ここ頼むわ。俺、お泊りセット取ってくる」

「ああ、分かった」

気合いだ、気合いだ、と自分に言い聞かせながら七転八倒する中也と光

宮を尻目に、フェンリルが何気ない口調でそう言うのが聞こえてきた。

「俺が戻って来るまでに、付けとけよ。でないと“しょ～けい”に君たち

二人は止めた方がいいです～って報告するよ～」

「おいおい……」

何とも手厳しいフェンリルの言葉に、リースが呆れたように溜め

息を零

す。それが、余計にプレッシャーとなって圧し掛かる。

「どいつもこいつも……なんだって軍のヤツらって……こう……！」

悔しくてたまらないらしい光宮が、横で歯を食いしばるのが見えた。そ

の気持ちは、よく分かる。

「ガンバレよ～、中也～、光～！　一緒にギルド・ナイトやろ～ぜ！」

本人は励ましているつもりなのだろうが、シヴァの切羽詰まった声を聞

いていると何だか惨めになってしまう。

「もう、黙っててよ！！」

中也の心の声は、光宮が代弁してくれた。

「あ、はい……。そうしま～す」

幼馴染が項垂れた様子で壁に凭れかかる様を見ながら、中也は一度だけ

大きく深呼吸をした。

（余計なことは考えない。集中しろ。そんで、あとはもう、気合いだ！）

残っていた片腕に防具を付ければ、やはり獣に噛みつかれたような激痛

が走り抜ける。

（気合いだ！！）

自分に言い聞かせながら、痛みに震える手を胸のパーツへと伸ばす。

（レイだって、ルナだって、シヴァだって、夏葉だって……耐えたんだ！

俺にだけできないってことはない！！）

汗ばんだ手でしっかりと胸のパーツを握りしめ、それを胸元へと持って

いく。

（気合いだー！！）

心臓が止まりそうになりながらも、歯を食いしばって何とか耐えた。ま

るで、大型の肉食モンスターの口に咥えあげられているような、そんな感

じだった。胸、腹……いたるところに、大きな牙が食い込んでくるような

錯覚を覚える。

（負けてたまるか！　気合いだー！！）

あまりの痛みに呼吸することさえ忘れたまま、中也は腰回りのパーツに

手を伸ばした。

（やってやろうじゃん！）

腰回りのパーツを付ければ、上半身と下半身が引き千切られるような痛

みに襲われる。両手両足を縄で縛って、４頭の馬に引かせるという古代の

拷問を、その身で体感しているような感覚だ。

（気合いだ！　俺はまだやれる！！）

唸るような声を上げながら、中也は最後に残った頭のパーツに手を伸ば

す。

（これでラスト！　やってやる！！）

あらゆる痛みがバラバラに全身を襲ってくる。もう、腕の感覚も足の感
覚もない。自分の体がどこにあるのかさえ忘れてしまいそうだ。

（気合いだ！　気合いだ！　気合いだ！　気合いだ！）

呪文のように言い聞かせながら、素材となった獣の顎の形がそのまま残
っている頭のパーツを体に近づける。

（気合いだー！！）

中也と光宮が最後のパーツを付け終わるのと、フェンリルが戻ってきた
のが、ほぼ同時だった。

始動11

「誰が誰だか分かんねえ～！」

武器庫に監禁されて2日目の朝、同じ防具を纏って一列に並んだ中也たちを見て、フェンリルが爆笑した。

「頭のところに名前、書いとこうぜ」

笑いながら、彼は持ち込んでいたらしい羽根ペンとインクで、ギルド・ナイト候補生6人の頭パーツにそれぞれの名前を記していく。

（その気持ちは分からなくもないけど……）

額に名前を書かれながら、中也は苦笑いを必死で堪えた。“なぞの骨”で作られたボーン・シリーズという防具は、胸や腹などがほとんど露出していて、防具としての役割を果たせるのかと聞きたくなるような代物だが、頭の部分だけは顔の半分を覆い尽くすほど大きな獣の頭蓋骨でできている。必然的に、それを纏う者の顔立ちが見えない。

（だからって名前を書くことないだろ！？）

額に名前を書かれた自分というものを想像すると非常に情けない。

（フェンリルさんらしいけど……）

ところが、てっきり各自の名前を書き込んでいくのかと思いきや、フェンリルはシヴァの額に“俺のおと～と”、レイの額に“金髪美人”、光宮の額に“王女さま”、夏葉の額に“しょ～けい”という文字を書き込んでいく。

「……ルナ。俺、何て書いてある？」

周囲の状況に不安を覚えた中也は、小声で隣にいるルナに確認してみた。

「“ちゅ～や”って書いてあるよ」

彼女の答えを聞き、自分はそんなに特徴がないのだろうか、と思って、ちょっと寂しくなる。

「ねえ、私は？」

「……“ボインちゃん”」

本人の性格がよく現れたヘタクソな字を正直に読み上げると、なぜ

かしかめっ面をされてしまった。文句があるならフェンリルに言えばいい、と思うところだが、残念ながら相手は正式なギルド・ナイトなのだ。さすがのルナも友達感覚で文句を言うのは控えている、と言ったところだろう。

（ま、俺の場合は昔からの知り合いだし）

それに、フェンリルがそういった細かいことは気にしない性格であることも知っている。しかしながら、会って間もないルナたちにしてみれば、ギルド・ナイトはやはり別格なのだ。本来なら、顔見知りになることも許されないような相手だ。軽口は控える、という気持ちは分からないでもなかった。

「さてと、もう痛みはねえな？」

候補生６人の額に書かれた文字を見てとりあえず爆笑した後、気持ちを切り替えたらしいリースが確認するように聞いてきた。

「防具を付けただけだったら痛くて仕方ねえが、武器を持ったら違うだろ？　今までの痛みがウソのように消えていく。ただ、だからと言

って、防具を付けてる途中で武器を持つような真似はするんじゃねえぞ。防具の方はまだ大丈夫だが、武器の方は持った瞬間、本当に死ぬからな」

リースの言った通り、全身の防具を付け終わって激痛に顔を歪めている時、とりあえず、と言った雰囲気で渡された片手剣を持つと、それまでの痛みがあっさり消えて無くなった。

（やば……つい、やりそうになった……）

防具を付けるのがあんなに辛くて仕方ないのであれば、いっそのこと途中で武器を持ってしまえばラクになれるのではないか、と思ってしまうのが人情というヤツだ。聞いていて良かった。そういったことをすれば死ぬと聞かされれば、絶対にしない。

「お前らが持ってる片手剣は、ボーンククリっていう剣だ。防具の属性もないが、武器の属性もない。攻撃力も防御力も低い。そうだな～、

仮にレウスの防具の防御力を２００とすると、ボーン・シリーズはせ

いぜい５０ってところだ。ついでにレウスの大剣の攻撃力が８００なら、ボーンククリは８０ってところかな。その程度なら、属性を属性で抑える、なんてことをしなくても、人間がどうにか振るえるってことだ」

リースの説明を聞きながら、中也は手の中にある片手剣ボーンククリに視線を落とした。素材となった骨の形や色、手触りなどがよく残っているその武器は、片方の刃がまるで巨大なノコギリの刃のようにギザギザだ。ついでに、自分の顔よりも少し大きいサイズの丸い盾が付いている。

「当たり前のことだが、一応言っておく。片手剣の盾で防げる攻撃は、

ランポスやギアノスなんかの小型の鳥竜種か、頑張ってもモスやファンゴなんかの小型牙獣種がせいぜいだ。レウス、レイア、クシャル、グラビ……大型の飛竜や古龍の突進を防げるなんて考えるなよ」

「そこまでバカじゃないわよ。どう考えてもムリじゃない。体重差があり過ぎるわ」

リースの説明に、光宮の声が重なった。反射的に彼女の方を見たリースが、無精ヒゲの浮いた顔に苦笑いを刻む。

「たま～にいるんだよ。初めて飛竜討伐に出た連中にはな、大型モンスターの突進は片手剣の盾でも防げる、なんてカン違いしてるヤツらが」

「ああ、いるね～」

呆れたようなリースの声音とは対照的に、フェンリルは心底、楽しそうに相槌を打った。

「まあ、そういう話は置いといて。なんつ～か、ハンターにはそれぞれ得意な武器があるんだよ。ランスが得意なヤツもいれば、ボウガンが上手いヤツもいる。けどな、ハンターの訓練学校の卒業試験じゃあ全種類の武器が最低限、使えるってことを試されるんだ。ましてや、お前らはギルド・ナイトだろ？　とりあえず、今回は自分に向いている武器だけでいいが、いずれは全種類の武器を使いこなせるようにならないといけねえ」

「それ、マジ？」

リースに向かって、そう聞き返したのはなぜかフェンリルだった。

「俺、いまだに太刀しかマトモに使えねえんだけど」

「ジョーダンだろ、おい！　お前、訓練学校の卒業試験どうしたんだよ！？　有り得ねえだろ！？」

フェンリルの口から出た衝撃の事実に、リースだけでなく候補生６人も顔色を変えた。

「訓練学校は一応、入学だけはしたんだけど、ほとんど行ったことないな。それに、ほら。俺、まだ１９歳だし。普通に考えたらまだ卒業できる年齢じゃないじゃん」

「……マジか」

「マジ、マジ」

あっけらかんと笑うフェンリルに、尊敬と疑念の眼差しが向けられる。しかし、本人はいたって気にする様子はなかった。

「……いつからギルド・ナイトやってんだ？」

「ん～とね、３年くらい前かな」

「……マジか」

「まあね」

３年前、ということはフェンリルはまだ１６歳かそこらだ。その年齢でギルド・ナイトに抜擢されることは、普通は無い。なぜならギルド・ナイトの任命はハンター職に就いている者の中から、将兄が極秘で選抜するからだ。１６歳ではハンターになれない。もし、それが事実なら彼は将兄職にある者とそのころから顔見知りだったとしか考えられない。

「……３年前って言ったら、前代のコルネット将兄の時代だよな？」

つい、中也は口を開いていた。

「そうだけど？」

「でも、コルネット将兄はほとんど仕事してなかったって話ばかり聞くんだ。だけど、その頃にもちゃんと軍は動いてた。だとしたら、コルネット将兄に代わって将兄の仕事をしていた人がいるはずだろ。普

通に考えれば四軍将の人たちかなって思うところだけど……」

「残念ながらそれは違うわ、中也。四軍将は基本的に将兄の命令に従う連中だもの。名目上は四人で将兄と同等の権力を持つってことになってるけど、実際あいつらは上に将兄っていう立場の者がいないと何もしないのよ。だとしたら、シヴァのお兄さんをギルド・ナイトに任命したと考えられるのは一人だけね」

光宮の視線が、フェンリルの端正な顔立ちの上にひたと据えられる。

その時、その場にいる全員が、おそらく共通の青年の顔を思い浮かべていただずだ。考えられるのは、今現在の将兄しかいない。

「ん～、まあ、そうなんだけどね」

特に表情を変えることもなく、フェンリルはあっさりそうだと認めた。しかし、そうなると黙っていないのが光宮だ。

「どういう関係なのよ」

「恋・人・関・係」

「あっそう。だったら問題ないわね。けっこうだわ。リース、話を進めて」

フェンリルの周囲を、冷たい風が駆け抜けた。

「話が脱線しちまったな」

「そうね。で、何の話だったかしら？」

「えっと～、そうそう！　ハンターにはそれぞれ得意な武器があるが、

とりあえず全種類の武器が使えなきゃいけねえって話をしてたんだ。ホ

ントに、このおぼっちゃんは……」

呆れたような顔でフェンリルを見た後、リースは気持ちを切り替える

ように軽く咳払いをした。

「で、得意な武器とは言わねえが、クック討伐に出るまでに、どれかひ

とつでいいから武器が使えるようになっとけって言いたかったんだよ。

今の時点で、どれがいいとか決めてるヤツはいるか？」

「私は弓。それ以外はナシ」

リースの問いかけに、ルナが即答した。

「ほう。腕に自信でもあるのか、ボインちゃん」

「あるよ。何なら、見せてあげようか」

「ぜひとも」

一歩前に踏み出したルナが、床に置いてある木箱の中から弓を選んで持ち上げる。

（試すまでもねえよ。ルナは弓の名人だ。俺たちは知ってる）

樹海でモンスターに襲われた時、彼女の弓にはさんざん助けてもらったのだ。今更、確認するまでもない。

「お邪魔するよ～」

ふいに、何の前触れもなく廊下に続くドアが開いて、くたびれた白衣の男が顔を見せた。その顔には見覚えがある。技術開発部・部長の嵐灰だ。

「オジサン、今すげ～いいとこなのに～。何か用～？」

空気を読まない変人・奇人の登場に、その場にいた全員の意見を代表してフェンリルがそう文句を付けてくれた。そんな彼の言葉に、嵐灰は大袈裟に顔を顰めて見せる。

「あっそうかい。そりゃあ悪かったな。お前らの様子を見に来てやったんだよ。ありがたく思え」

「そういうのを余計なお世話っていうんだよ」

「やかましい、クソガキ」

どうやら特に用事は無いらしい。気を取り直して、中也たちはルナの方に視線を戻した。フェンリルの傍に並んだ嵐灰が、腕組みをしながら壁に凭れかかる。全員の注目を受け、ルナが仮面の下で強気に笑った気がした。

「それで？　何を狙おうか？　お望みなら、あんたのムスコを潰してあげるよ、リースさん」

「いや、それは困る……。そうだなあ、じゃあ～」

的になるものを探して視線を巡らせていたリースが、床の上に無造

作に置いてあったインク壺を手に取り、後ろ向きにルナから距離を取っていった。

「コレ、狙えるか？」

「お安い御用だよ」

距離は直線で１５メートルばかり。リースが手に持ったインク壺の大きさは縦横１０センチ。かなり小さな的だが、ルナは特に逡巡する様子を見せるわけでもなく、弓に矢をつがえる。

「インクで汚れないようにしてあげるよ」

彼女が矢を放つ。ほとんど同時に、リースが持っていたインク壺のキャップの部分だけが、硬質な音を立てて床に転がった。

「すげ～じゃん！」

さすがのフェンリルも、驚きを隠せない様子で感嘆の声を上げる。

久々に見たルナの弓矢の腕前は、やはり鮮やかとしか言いようがなかった。

「こりゃあ、問題ナシだな。俺より上手いわ」

「それはどうも」

インク壺を的に選んでおきながら、手を全く汚すことなく戻って来たリースは、苦笑いを浮かべながらそう言った。

「他には？」

その問いかけには、誰も答えない。

「そうか。じゃあ、ボインちゃんは弓で決定だな。他のヤツら、適当に試してみろ。そんで、自分がいいと思った武器で練習しな」

リースに促され、ルナを除いた候補生たちが、のそのそと武器が納められた木箱の方へと近づいていく。

（やっぱ大剣だよな。カッコいいし）

武器の見た目で、中也は大剣を選ぶことにした。その脳裏には、やはり夏葉の顔が浮かんでいる。

「なんかコレおもしろそうだ～な！　俺、コレにするぜ～！」

横で、シヴァがランスを取り上げるのが見えた。何となく、彼らしい選択だと、そう思う。

「王子」

「ん～？」

興味津津と言った顔で木箱の中の武器を吟味している中也たちから少し離れた場所で、嵐灰がフェンリルに向かってそう呼びかけるのが聞こえた。

「お前、この後は？」

「別に～。家に帰って寝るだけ～」

「だったらちょうどよかった。これ、パパに渡しといてくれ」

「書類～？　分かった」

何でもない顔をして、フェンリルは嵐灰から書類の束を受け取る。

（王子？　まあ、それっぽいけど……あだ名かな……）

何となく気になるものは覚えながらも、中也はそれ以上は特に何も考えなかった。横で、夏葉が太刀を手に取るのが見える。彼にとっては、そっちの方が重要だ。

（夏葉は太刀か～。太刀と大剣でコラボとかしてみて～な～）

始動11（後書き）

山奥に生息している作者ですが、本日、山を下りてマクドナルドまで行って来ました。チキン竜田、メッチャうまかったです。

大学生風のお兄さんが2名、やってきた、の、ですよ。

何と言いますか……歩き方が軍隊風と言いますか、二人三脚風と言いますか……。

こう……ザッザッザッザッザ！　みたいな（笑）

そしてお兄さん二人はカウンターへ行って、

「「ダブル・チーズ・バーガー！　セットで！！」」

と、異口同音に叫びました。

「お、お飲み物は……？」

ドン引きしているらしいマックのお姉さんが、とりあえずそう聞くと、

「「コーラで！！」」

と、これまた二人同時に絶叫……。

ダブル・チーズ・バーガーのセット、飲み物コーラを抱えて、お兄さんたちは入って来た時と同様、ザッザッザッザッザと、帰って行

きました。

これがいわゆるテクノ系か、と作者はちょっと感激しました。

始動１２

「う、おっ！」

密閉された室内に、武器と武器がぶつかり合う重い音がこだまする。

「痛っ！」

同時に、リースが衝撃に耐えかね、尻もちをついた。

「勝負あり、だな。残念だったね、リースさん」

仮面に似た頭パーツの奥で笑うのは、ハンマーを手にしているレイである。彼女は苦い顔をしているリースに歩み寄ると、武器を肩に担ぎあげたまま、彼に向かって片手を差し出した。

「驚いた？　女だからってナメてると痛い目をみるぜ」

リースがその手を掴むと同時に、彼女はその手を引いて、大柄なリースを軽々と引っ張り起こした。

「すんげ～馬鹿力だな、金髪美人」

「それが取り柄だから」

レイが手にしているハンマーの名はボーン・ハンマーと言う。何かの骨の固まりに、鉄錨が打ち込まれた姿をしているそのハンマーは、盗賊や海賊が好みそうな見た目だが、これも立派なアルテリア錬金術の結晶である。

（さすがレイ。相変わらず、すっげ～）

ハンマーは、大剣や太刀のように相手を「切り裂く」ことはできないが、先端に重量を集中させた特殊な構造をしているので、うまく使えば敵の急所に大きなダメージを与えることができる。

「あの重たいハンマーをよくもまあ軽々と……」

中也の隣で、リースとレイの試合を見ていた嵐灰が、煙草の煙を燻らせながら、呆れたように呟いた。

「あれ、重さってどれくらいあるんですか？」

「……モノにもよるな。ボーン・ハンマーはだいたい３０キロ前後だ。

お前が選んだ大剣より重いぞ」

「マジですか」

「マジだよ。ああ～、あの子ならハンマーの重量そのものを上げることで武器の威力を向上させる改造ができるかもな。そっちだったら錬金術とは関係ねえから、体に余計な負担はかからねえはずだし……工房の方に連絡してみるか」

ブツブツと独り言を呟く嵐灰を微妙な顔で眺めていた時、試合を終えたリースとレイが見学していた中也たちの方へ帰ってきた。

「いやぁ、参った、参った」

開口一番に、リースは額の汗を拭いながら溜め息混じりにそう漏らす。

「まさかこんなにボロ負けするとは思ってなかったぜ」

「お疲れ～、リース」

気を利かしたらしいフェンリルが、リースにビン詰めのジュースを差し出した。軽く礼を言ってそれを受け取り、リースは一息にすべてを飲み干していく。全身汗だくの彼は、よほど水分が足りていないらしく、続けざまにもう一本あおった。

「つーか、お前は相手してやらないのかよ」

ようやく喉の渇きが満たされたらしいリースが、ひたすら見物人に徹しているフェンリルに向かってそう問いかけた。

「ムリムリ。だって俺、人間だもん。あんな武器でブン殴られたら死んじまうよ」

さも当たり前だと言わんばかりの口調に、そういう問題ではないだろう、と中也は心の中で突っ込んだ。

（あんた、ギルド・ナイトだろ～？）

本人にその自覚があるのか無いのかは定かではないが、早いうちから「あの」将兄に実力を買われ、ギルド・ナイトに任命されたのだ。

それはつまり、彼の実力を裏付けするようなものである。

（せめて“また今度な”くらい言えよな～。カッコ良く）

しかしながら、そう思う反面。

（まあ、フェンリルさんだから仕方ない）

そう思ってしまう自分がいる。中也が知っている彼は、無闇に自分

の実力を誇示するような人間ではなかった。それを思えば、今現在、中也の目の前にいる“フェンリル”が、なかなか実力のほどを見せようとしてくれないのは納得できる。

（でも、あの人、昔からケンカは強かった……）

幼いころの思い出の中で、どちらかと言わなくても「大人しい」子供だった中也は、よく近所のガキ大将とその取り巻きに虐められていた。その度に、ことごとく悪ガキたちを退治してくれたのがフェンリルだった。相手が5人いても10人いても、彼が負けたことは一度も無い。

（こっちの幸也さん……じゃなくて、フェンリルさんは、どれくらい強いんだろ）

自分が子供時代を過ごした世界よりも格段に厳しい世界で、モンスターという未知の生命体が闊歩する世界で、錬金術によって人がモンスターの力を振るうことを可能にした世界で……。そこで生きてきたフェンリルがどんなに強いのか、知ってみたいと思う。

（優しくて、カッコよくて、おまけに強い……。文句ナシに完璧だよな、フェンリルさん。性格がいい分、将兄よりずっとマシだよ）

内心で呟いた皮肉に、中也は自分で笑った。自分が適わないからと言って、フェンリルに将兄に勝ってもらっても何の意味もない。

（くだらねえ、俺……）

横目でチラリと夏葉の方を見やりながら、中也は深い溜め息を落とした。その時、ふと脳裏をシヴァの顔が掠める。

「なあ、シヴァ」

「なんだ～？」

床の上に座り込んでいる彼に声をかけると、相変わらずマヌケな顔が振り返ってきた。本人には悪いが、やはりフェンリルと同じ遺伝子から出来ているとはちょっと思えない。

（似てないこともないんだけどなあ……）

可哀そうなので、さすがに口にはできなかった。

「なあ、お前さあ、フェンリルさんとあんまり話してないだろ。せっ

かく会えたんだろ？　ちゃんと話しろよ」

彼の横に座りながらそう言うと、シヴァが頭をかきながら軽く唸った。

「話してないこともな～いぞ。チラッと話すくらいはした～さ」

「お前、あんなに兄貴、兄貴って言ってたじゃないかよ」

「そうなんだけどな～。でも、いざ兄貴に会ったら何を話していいのかイマイチ……」

「そんなモンかもな」

何となく、シヴァの言葉には共感を覚えた。会って話したいことはたくさんあっても、何から話をしていいのか分からない。最初に何を話していいのか分からない。そういう気持ちは何だか分かる気がした。

「でも、１０年ぶりに見た兄貴が予想以上にカッコ良くてビックリした～ぞ」

「俺、ウソついてなかっただろ？」

「そうだ～な。将兄にも負けず劣らずって感じじゃねえ～か？　さすが兄貴」

「違いない」

二人して、密かに笑い合う。自分以上に、シヴァはフェンリルのことが好きなのだ。１０年という時間が空いていても、フェンリルに対して抱く憧れに似た思いは変わらないらしい。それは、おそらく自分も同じだ。

「おい、そこの二人」

ふいに、中也とシヴァの頭上にリースの声が降って来た。

「後はお前ら二人だけだぞ。相手してやるから、さっさと準備しろよ」

「あ、はい」

慌てて、中也は立ち上がり、横に立てかけておいた大剣を手に取る。

（やっぱ重てえな……）

大剣の名はボーン・ブレイドというらしい。一般的に、大剣は太刀

に比べて重量で勝る分、威力はあるが、その分、機動性に欠けるという特徴を持つ。ついでに、小型鳥竜種や小型牙獣種などの攻撃を、その刃を盾代わりにして防ぐことも可能である。しかし。

（よほど上手いヤツじゃないと、大剣は使いづらいだけだ……）

なぜなら、そういった小型モンスターはたいてい群れで行動しているため、一頭の攻撃を防いでいる間に、背後から別の一頭が攻撃してきてダメージを受けるというパターンが多いのだ。それに、当然だが大型モンスターの突進は大剣で防ぎきれないし、レウスが口から吐く灼熱の火球を防ぐこともできない。結論を言うと、大剣は初心者には向かない。

（今更、遅いってか？　やるしかねえよ、もう）

中也は腹を括って、重い大剣を手に試験場の中央に歩み出た。

「おい、フェンリル。最後くらい役に立ちやがれ。お前の弟だろ？相手しろや」

「ええ～」

中也と一緒に中央に進み出たリースが、全く動く気がないフェンリルに向かってそう言った。

「ええ～じゃない！　たまにはマジメに仕事しろ！」

「ラクして金だけ貰えるからギルド・ナイトになったのに～」

「ふざけんじゃねえ！　テメーの家がどんだけ金持ちか、俺が知らないはずないだろーが！　くっだらねえコト言ってねえで、さっさと来いや！！」

「オジサン、代わりに相手してやってよ」

そう言って、フェンリルはなぜか技術開発部の部長の方を見た。

「俺、メンドーなの嫌いなんだよね。いいじゃん。たまには運動しろよ。ボケ防止になるよ、きっと」

「……ホントにお前は」

苦い顔をしつつも、技術開発部・部長である変人・奇人は白衣を脱いで中央に出てきた。どうやら彼は本当にシヴァの相手をするつもりらしい。

「マジか～よ」

「ガンバれ、シヴァ。何とかなる。きっと、怪我させても事故ってことで許してくれるって」

顔色を変えた幼馴染に、中也は自分なりに励ましの言葉を送っておいた。

「ホントに、あのおぼっちゃんは……」

変人・奇人とフェンリルの方を見ながら、中也の正面に立ったリースが重い溜め息をつくのが見える。

「仕方ねえか。まあ、いいや。始めるぞ」

「あ、はい」

気を取り直し、中也は大剣ボーン・ブレイドを両手で握りなおした。

「まずはその重さに慣れることからだ。大きく振りかぶって、ここに打ち込んで来い」

「分かりました」

リースは中也たちと同じくボーン・シリーズを身に纏って、中也と

同じ武器であるボーン・ブレイドを手にしていた。彼は候補生それぞれが選んだ武器と全く同じ武器を手に取り、各自の武器に合わせた戦い方をしてくれている。そのあたりは、さすがギルド・ナイトというべきだろう。

「それじゃ、行きます！」

「おう！　思い切り来い！」

少し離れた場所でシヴァが嵐灰（らんかい）という名の変人・奇人相手にランスを構えるのを見ながら、中也は言われた通り大剣を思い切り振りかぶった。

「っ！」

重い。腕が千切れそうだ。頭上に振りかぶれば、その重さに負けて後ろに転びそうになる。

（転んでたまるかよ！）

夏葉の前で、これ以上カッコ悪いところは見せれない。たったそれだけの理由で、中也は何とか態勢を整えることができた。そのまま、

勢いを付けて、横に構えたリースの大剣に向かって打ちおろす。

「いい感じだ！」

重量級の刃同士が交わる鈍い音がした。

「今度は刃のところを横向きにして、斜め上に向かって切り上げてみな」

「りょーかい、です！」

大剣の重さにヨロヨロしながらも、中也は言われた通り、大剣を横向きに構える。

「このへんを狙う感じだ」

リースが示した位置に向かって、中也は刃を振り上げた。

「そのまま止まるな！　勢いを付けたまま回って、そのまま横に切るんだ！」

「はい！？」

何を言われたか頭が理解できないうちに、気が付けば大剣を振り上げた勢いに飲まれて体が一回転している。腕が重量に負け、刃が手か

ら離れてしまった。

「惜しかった。もう一回だ」

「はい」

床に落ちた大剣を拾い上げ、中也は改めてその刃を構える。額に浮かんだ汗が、目に入って痛い。しかしながら、今はそんなことは言っていられない。

「……重いだろ？」

目に入った汗を拭うためには、大剣から片手を離さなければならない。しかし、この重さはとても片手では支えきれそうにない。仕方なく瞬きをして誤魔化した中也に、リースがそう言ったきた。

「重い、ですね」

「だろうとも。だから、大剣を使いこなすコツはとにかく止まらないことだ。いったん止まっちまったら、元通り動き出すまで時間がかかるんだ。今はいいが、相手が大型のモンスターだった場合、その一瞬の遅れが死に繋がる」

「……分かります」

「どんな武器にも型ってヤツがある。大剣の型は、まず振りかぶって打ち込む。そして斜め上に切り上げる。そのまま回って、横に薙ぎ払う。そして斜め上に構えて打ちおろす。その繰り返しだ。ただ、大剣は動きが大きいから、傍にいる仲間を巻き込んじまう危険性が高い。きちんと使いこなせるようになるまで、無闇に刃を振り回すのは止めろ」

「……はい」

「今度のクエストのお前の役目は、動きを止めたクックの頭もしくは首に向かって、大剣の刃をブチ込むことだけだ。それ以外はしない方がいい。仲間を斬りたくはねえだろ？」

「もちろんです」

「それがイヤなら、練習を重ねて自分の手足のように大剣を操れるようになることだ。前にも言ったが、大剣は初心者向きの武器じゃねえんだ」

「……はい」

「物分かりがいいガキだな。まあ、俺としてはそっちの方が助かるけどね。さて、とりあえずもう一回だ。重さに慣れるにはとにかく刃を振って振って振りまくるしかない。さあ、かかって来いよ」

「はい」

リースに言われた言葉が、当たり前に思えるようで悔しくもあった。

（使いこなせるようになってやるよ！！）

とにかく、今はそれしか考えられなかった。

始動１２（後書き）

おススメ小説の紹介をさせていただきます。

畑　晃先生がお書きになられた「ＳＴＥＭ」という作品、一読の価値アリです！

「ＳＴＥＭ」第一話のサブタイトルは「吐きすぎ」です。

そのタイトル通り、主人公を始め、いろいろなキャラクターがあちこちで嘔吐してました。

ギャグか……と思いきや、読んでいる方まで「うげっ！」となるような理由がありました。

個人的にとってもタイプの女の子の霊も登場しておりました（笑）

ぜひ一度、ご一読ください！

本当におススメです！

始動１３

国の中心に、国王アルテリア１３世が住まう王宮がある。それは宵闇の中でも仄かに輝く特殊な鉱石を使って建築された城で、国と国王の名を取ってそのまま「アルテリア城」と呼ばれている。

「それにしても、この氷菓子（アイスクリーム）は絶品ですな～、冬軍将殿（とうぐんしょう）」

「違いありませんな～、秋軍将殿（しゅうぐんしょう）」

アルテリア城は主に国王の昼間の居場所であり、国を動かす中枢機関でもある。夜になれば見回りの兵士たちと、残業に勤しむ役人たちを残し、閑散とした雰囲気に包まれる王宮だが、昼間はどこへ行っても、殺気立った表情で仕事をしている人間で溢れかえっているのが常だ。

「この香り、この匂い、この芳香……。何を取っても最高級品に違いありませんぞ、冬軍将殿」

「香りも匂いも芳香も同じではありませんかな、秋軍将殿」

「おっと、そうだった、そうだった。いやはや、もう年ですな～、

冬軍将殿」

「そうですな～、秋軍将殿」

ところで、アルテリアは諸外国へ向けて正式に「平和重視」を掲げた唯一の大国であるが、その実、アルテリアは大規模な軍を包括している国としても知られている。

「おおっと、この舌触り！　ほろっと溶けた甘みと冷たさが喉にしみ込んで行くようですぞ！　まさか姫様がギルド・ナイトに任じられるとは思ってもみませんでしたなあ、冬軍将殿」

「何と上品な甘み！　これぞ幻の食材ミント！　さすが、一味も二味も違いますなあ。いやはや、姫様の御身に万が一のことでもと考えると、心配性の私は夜も眠れませんぞ、秋軍将殿」

アルテリア軍は大まかに四つの組織に分けられる。陸の春軍、海の夏軍、空の秋軍、そして治安維持の冬軍である。春夏秋冬それぞれの名を冠せられた四つの軍の代表者は「軍将（ぐんしょう）」と呼ばれ、四人でアルテリア軍の代表である四軍統括将軍兄（しぐんとうかつしょうぐんけい）、略して将兄と同等の権

利を持つ。

「ミントとはココア（チョコレート）に混ぜるとこれほどまでに軽やかに、まろやかに変貌する食材なのか！　長生きはするものですなあ。また新たな発見がありましたぞ。ようやく入学式の事件がひと段落ついたと思ったら、今度は鬼龍でなく将兄が襲撃して参りましたぞ、冬軍将殿」

「まさしくその通り！　老いさらばえてなお人生とは発見の連続なのですぞ。いやはや、まさか将兄が一国の姫君を危険なフィールドに送り出すなど、あの方がそんな愚かなことをなさるはずがありませんぞ、秋軍将殿」

その、四人の軍将のうち二人が、氷菓子を挟んで談笑しているこの中年男たちである。真っ白な髪を短く刈り込んだ、やや小柄な男が冬軍将。通称・イタチで、褐色の肌に水色の髪という珍しい姿をしているのが、秋軍将。通称・タヌキである。ちなみに、アルテリア軍を束ねる将兄の執務室は、かつて軍が朝廷の傘下にあった頃の

名残で王宮内に設置されている。

「いい加減にしろ、お前ら」

先ほどから繰り広げられている中年男の会話に滲み出たあからさまなイヤミに、将兄職に就いている青年が深い溜め息を落とした。

「言いたいことがあるなら、はっきり言え。聞くだけなら聞いてやらないこともない」

「おや、将兄。何の話ですかな？」

珍しく彼らの意見を聞いてやる気になったというのに、彼の方を振り向いた秋軍将（タヌキ）がさっぱり分からないという顔でサラリとそう聞いてきた。今日もタヌキは健在らしい。

「とぼけるな。お前ら、俺が光宮をギルド・ナイトに任命したことが気に食わないんだろ？」

「これまた心外ですな、将兄。光宮さまは軍学校に入学されるために王位継承権を完全に放棄された方ですし、ハンターズ・ギルドに関しては我らの権力が及ばぬ話でございます。まさかそんな、分不

相応な口出しなどいたしませんよ。いや、ただ、この氷菓子は実に美味である、と。ただの世間話でございますよ。もしかしたら本音がチラッと漏れたかもしれませんがね。いやいや、なにせただの世間話ですから。本音のひとつやふたつ、チラッと漏れても仕方ございませんよ、なあ冬軍将殿」

「その通りであります、将兄。ただの世間話でございますよ。なにせ、我らはもう年ですから。仕事の合間に世間話でもしないとボケてしまいますから。なあ、秋軍将殿」

「……」

軍将たちは一事が万事この調子である。いつもなら、この上更にキツネの別称を持つ春軍将と、フナムシの別称を持つ夏軍将が加わる。今日はまだマシな方だ。

「いやぁ、それにしても今日は良い天気ですなあ、冬軍将殿。ああ、そう言えば、天気の良い日に剣の稽古をつけてくれと光宮さまに頼まれていたのを今、ふっと思い出しましたぞ。はて、肝心の姫様は

どこに……？」

「そう言えば私も姫様に書物を貸し出す約束をしておったのを今、ふっと思い出しましたぞ。はて、肝心の光宮さまはどこに……？」

何が世間話だ、と思わないこともないが、いちいち相手をしていればキリがない。四人の軍将……いわゆる四軍将の相手をするコツは、とにかく「相手をしない」ことだと彼は学んでいた。

「まさかハンターズ・ギルドの武器庫ということはありますまいな あ、冬軍将殿。いやぁ姫様は昔からハンターに憧れを抱いておられましたからなあ」

「まさかハンターズ・ギルドの武器庫にいらっしゃるなどということはありますまい、秋軍将殿。いくら姫様でもあそこは立ち入り禁止だと、重々に分かっておられるはずからなあ。まさかまさか、一昨日の晩から監禁状態で稽古に励んでおられるなんてことは」

立派な「曇り空」を窓の向こうに拝みながら、秋軍将と冬軍将はチラチラと彼の方を見ながらそんな会話を続ける。

「……ドンドルマの麻薬取り締まりの件だ。行商人が持ち込む薬草の中に違法なものが含まれているという報告があった。冬軍将、冬軍の三軍を増員して取り締まりを強化しろ」

「了解いたしました」

「それから秋軍将、国内の盗賊の取り締まりについてはお前に一任したはずだ。あれから半年経ったが、未だに盗賊による被害報告が俺の机の上に登って来る。言い訳はあるか？」

「ございません」

「けっこうだ。他に何かあるか？」

無いらしい。二人は無言で、軽く頭を下げた。

「光宮がどうとか言っていたような気がしたが、気のせいだな？」

「そのようで」

あっさり頷くところもさすがタヌキと言うだけある。ちなみに、彼らの名付け親は光宮である。初めて聞いた時は鼻で笑ったものだが、今となっては妙にその愛称を気に入っていた。

「それから、ドンドルマのホーランド港を拡張する案についてだが、その申請は受理する方向で考えている。陸と空のお前たちにも無関係な話じゃない。細かい編成は任せる。大国ファーナが無敵艦隊を編成しているという話もあるんだ。手抜きせずにしっかりやれよ」

「了解いたしました」

異口同音に二人が返答した時、何の前触れもなく執務室の床に真っ黒な円形の影が現れた。

「アイルーですな」

待つほどもなく、影の中から一匹のアイルーが颯爽と飛び出してくる。そのアイルーは秋軍将と冬軍将には目もくれず、真っ直ぐに執務机に座る彼の方へ歩み寄ると、丁寧な仕草で一礼した。

「ご報告に上がりましたニャ、マスター」

アイルーは二足歩行するネコ型のモンスターで、大きいものでも８０センチ前後しかない。毛並みは千差万別だが、彼の前に立

ったアイルーは全体的に漆黒で、顔の部分にだけ三角形に白い毛が生えている、いわゆるメラルー・カラーのアイルーである。

「失礼いたします」

短く言葉をかけ、秋軍将と冬軍将が一礼の後、執務室を出て行った。アイルーは人語を操ることができ、また鬼龍以外で唯一、時空を移動できるモンスターだ。そのため、ハンターズ・ギルドでは、顔を明かすことが許されないギルド・ナイトとギルド・マスター、つまり将兄の連絡手段としてアイルーが使われることが多い。ついでに、アルテリア軍とハンターズ・ギルドは別組織であるため、将兄がギルド・マスターとしての報告を受け取る際、無関係な人物がその場にいることは許されないのである。

「お久しぶりですニャ。ボクのご主人から報告を預かって来ておりますニャ」

アイルーの名はサスケ。主人の名はフェンリルである。

「続けろ」

サスケとの付き合いは長い。しかしながら、彼は未だに彼の前では恐縮した態度を取る。人の世界に入り込んで長いアイルーとは言え、やはりそこはモンスターだと実感させられる。モンスターは、自分よりも強い者に従順だ。

「了解ですニャ。“とりあえず、全員ご～かく～。中也と光宮がギリギリだったけど、まあ、何とかイケるんじゃねえ～って感じかな～。明日は学校だって言うからさ～、いったん帰らせてやろ～かと思ってんだけど、いい～？　また明日、学校が終わった後に迎えに行く予定～。そんなとこ～。何かある～？”以上ですニャ」

本人の言葉をそのまま忠実に再現したサスケに苦笑しつつ、彼は何も言わずに頷いた。

「けっこうだ。サスケ、フェンリルにはお前に任せると伝えてくれ」

「“お前に任せる”了解ですニャ。それから、マスター。ご主人

から質問も預かって来ておりますニャ」

「質問？」

「そうですニャ。よろしいですか、ニャ？」

「ああ、続けろ」

「了解ですニャ。“今日、何時に帰って来んの～？　夕飯、一緒に食べよう～”とのことですニャ」

サスケの口から出た言葉に、彼は軽く笑って壁にかけられている時計を見上げた。現在、午後5時を少し回ったところである。

「7時までには帰るから待ってろ。そう伝えてくれ」

「“7時までには帰るから待ってろ”了解いたしましたニャ」

彼の言葉を正確に反芻し、サスケは再び丁寧に頭を下げる。

「それでは失礼しますニャ、マスター」

「ああ。お疲れさん」

サスケの足元に黒い影が現れる。同時に、まるで水に飛び込むような動作で、サスケは影の中に飛び込んで行く。影が消えれば、

執務室は元通り、夕暮れ時の空気に満たされた。

「相変わらず、便利な生き物だ」

アイルーは個々の能力によって時空を移動できる距離が違う。個体の能力が強ければ強いほど、より遠くへ移動することが可能だ。普通のアイルーはせいぜい１０数メートル前後、移動できるかできないかと言ったところだが、ギルド・ナイトに付けられているアイルーは鬼龍と同等に、主人とマスターの匂いを頼りに好きな時に好きな場所へ移動できる。

「さっさと終わらせるか」

サスケの気配が無くなったことを感じつつ、彼は元通り、執務机に向き直る。７時までに、仕事を終わらせなければならない。

そんな風に思いながら……。

始動１３（後書き）

お気に入りのエロ・サイトさんにお邪魔して「むふふ……」とか言っておりましたら、この時間（笑）

始動１４

“学期末の試験で、平均８０点以上取ること。これ、全員”

ようやく武器庫から開放されてほっとしていた時、フェンリルが何でもないことのように、そう言ってくれた。

“当たり前じゃ～ん。だってギルド・ナイトだぜ～？　しょ～けいの私兵だぜ～？　頭良くないと務まんないって～”

何だかフェンリルにだけは言われたくない、と思いつつも、将兄の命令だと言われれば逆らえない。レイとルナ、そしてシヴァが顔色を変える中、中也は世の中の理不尽さに重い溜め息を落としたのだった。

＊

「ああ～、何だか眩暈がしてきた～ぞ」

昼下がりの図書室で、向かいの席に座るシヴァが大量に積み上げられた本の狭間から潰れたカエルのような顔を覗かせて、そう呟いた。

「おい、しっかりしろよ。テスト……試験まであと一週間しかないんだぞ？」

「そんなこと言ったって覚えられないモンは覚えられねえんだ～ぞ」

「覚えられなくても覚えろ！　それがムリなら誤魔化せ！」

「誤魔化す材料が俺さまの頭には入ってねえんだ～ぞ」

「だったら材料、詰め込め！　つーか、まずはどこが分かんないか分かるようになれっての」

「う～ん。それが一番難しいんだ～な」

相変わらずヤル気のない顔をしながら、シヴァは目の前にある本のページをペラペラと捲っていく。どう考えても、内容を頭に入れているようには見えなかった。

「数学とかは何とかなりそうな気がするんだけど～な、やっぱ社会

関係がヤバいか～な。どうにも名前が覚えらんねえんだ～よ」

「社会？」

「そうそう。歴史とかさあ～、過去の英雄の話をされても今現在を生きてる俺たちにはカンケーねえって感じしねえ～？」

「“社会”批判をするヒマがあるなら、覚えるものを覚えろよ」

「へ～いへい」

ちなみに、こちらの世界の試験は中也がそれまで受けていた試験とは少しばかりスタイルが異なっている。数学は別だが、国語であれば提示されたテーマについての小論文を書かされるし、社会科であれば「アルテリア軍の代表は何と呼ばれているか」という問題に対して「将兄」と答えるような一問一答式ではない。たとえば「アルテリア４７年に農民が起こした乱について書け」とか「アルテリア軍について書け」とか、そういった曖昧なものばかりだ。つまり、問題用紙は手の平サイズで、解答用紙はたいてい白紙であることが多い。点数は回答の出来具合に応じ、教師のフィーリングで配点さ

れる。

「朝廷の仕組みがイマイチなんだ〜よ。何なんだよ、この月府とか金府〜とか」

「月火水木金土日、に府を付けて、それぞれ月府、火府、水府、木府、金府、土府、日府！　月府は宮中行事とか国王陛下の身辺の世話とかそんな感じだ。火府は軍隊。別名、炎府。アルテリア軍と朝廷は別物だけど、形の上では軍は朝廷の下に付いてるってことになってんだよ」

「えっと、月府が王様の身の回りのお世話するところで〜、炎府が軍隊〜。よ〜し、覚えた〜ぞ」

「水府は立法。つまり法律を作るところ。木府は土木。実際に動いてるのは春軍（陸軍）の三軍だけど、橋を造る計画を立てたり、道路を整備する計画を立てたり、そういった計画の予算なんかを計算して金府に申請するのが仕事」

「もう分かんなくなってきた〜ぞ」

「木府の“木”は土木って意味だろ！　土木建築だから“木府”って暗記しろ！」

「ああ～、なるほ～ど」

「金府はとにかく金を管理するところだ。税金とか予算とか。そんで土府は司法。つまり、犯罪者に刑罰を言い渡すところだ。最後に日府。日府は戸籍関係の役所だよ。俺らが持ってるイエローカードとか朱民に渡すレッドカードとか、そういうのを発行してるのも日府だし、金府が毎年、税金を計算するのも日府が管理してる戸籍に基づいてる」

「金府は金で～、土府が～、悪いことしたヤツに罰を言い渡すところで～、日府が～戸籍？」

「正解。で、各府の長官が宰相。その上に国王」

細かく言い出せばキリが無いのだが、幼馴染の脳の許容量を考慮の上、中也はとりあえず基本的なことだけを言っておいた。

「他には？」

「ヤマ張ってくれ～よ、中也。ダイコン先生ならどんな問題出しそうな～んだ？」

「……」

ダイコン先生、とは社会科の若い女性教諭に不本意ながら付けられたあだ名である。彼女はアルテリア国民・第一主義を掲げ、諸外国からの難民である朱民と呼ばれる者たちへ極端に差別的な態度を取ることが多い。その上「女性とは、かくあるべき」「男性とは、かくあるべき」「国とは、かくあるべき」「兵士とは、かくあるべき」「それ以外の意見は認めません」「私の考えこそ正義」という思考の持ち主であることから、あまり生徒受けが良くない。そういった教師がダイコンに似ていれば、自然と「ダイコン先生」とあだ名が付けられるのも頷けない話ではない。

「ダイコンなら、まず間違いなく朱民の問題は出すだろうな」

「朱民の問題って～？」

「アルテリアの東と西にある国は未だに戦火が絶えないだろ？」

「ああ、らしい～な」

「住んでいた家とか村とか……まあ、国が焼けて、食うに困った人たちがアルテリアに来るんだよ。難民っていう形で。アルテリアは大国だし、とりあえずアルテリアに逃げたら食べる物とか恵んで貰えるからさ」

「そうだ～な。そう言えば昔、兄貴もそうやってオヤジと一緒にアルテリアに来たって言ってた～ぞ」

「そんで、難民って言ってもいろいろいるわけさ。もともと住んでた国が落ち着いたら帰ろうっていうヤツとか、逆に、アルテリアの国民になりますってヤツとか」

「うんうん」

「住んでた国に帰るってヤツは問題ないんだけど、アルテリアの国民になりますって言われるとちょっと困るんだよ。だって身元も分からない連中ばっかりだぜ？　ホイホイ受け入れてたらアルテリアが犯罪者だらけになっちまう」

「ああ、まあ～そうだろ～な」

「だからさ、外国から来た連中がアルテリア国民になるためには、仕事をしていることが条件ってことになってんだ。アルテリアの国内で仕事してれば、とりあえず“身元”ができるから」

「ふ～ん」

「国境に近い場所にある難民キャンプじゃあ、難民に仕事を仲介する仕事をしているヤツもいるらしいぜ。でも、たいてい難民に回ってくる仕事と言えば、毒ガスが噴き出す北東のミラ大鉱山の労働者だったり、裕福な農家……つまり豪農の下働きとか、そんな感じらしい」

「ふ～ん」

言いながら、中也は樹海に建っていた塔の中に並んでいた難民の死体を脳裏に思い出していた。名目上は、アルテリアは諸外国からの難民に対して人道的な態度を取っている。しかし、あの塔を見た後では、そういった話を鵜呑みにすることなどとてもでき

そうにない。

「それで、仕事を貰った難民が日府の窓口に行ったら、晴れてレッドカードを貰えて、朱民って呼ばれるようになるんだよ」

とりあえず、内心の疑問は押し殺して話を続けた。そう言えば、夏葉も朱民だったはずだ。どこの国の出身かは忘れてしまったが、帝都の大規模な料亭で下働きをしていたとか、そんな話を聞いた気がする。そして、どういう経緯があったのかは分からないが、前々代・将兄、獅子王こと竜雪の養子になった。そこで夏葉はレッドカードからイエローカードに切り替えて貰い、軍学校に入学することが許された。

「……生粋のアルテリア国民しか入学は認めないってのは、どうかと思うけどなあ」

「はあ～？」

軍学校に対する批判をつい零したところで、中也は慌てて首を振る。

「何でもないよ。それで、今の話を解答用紙に書いたところでダイコンのことだから６０点くらいしかくれないと思う」

「そりゃ困る～ぞ」

「いいか、シヴァ。高得点を狙おうと思ったら、教師の好みに合わせた回答をすることが重要なんだ。その手が通じない先生もいるけど、ダイコンは単純だから、その手が通じる」

「おう。それで？」

「だから、朱民がアルテリアに入って来ることで、国内にどういう問題が起きているか、とかを書くんだよ。実際は、朱民が農家に入ることで、徴兵制度で帝都に来てた農家の子供たちが家に帰る必要が無くなって、アルテリア軍が大きくなる一因になったらしいんだけど、それは書いちゃダメだ。書くとしたら、農家から出て行った朱民が盗賊になったとか、行商人って形でワケの分からないモノを売りつけるとか、治安が悪くなるとか、難民支援のための出費が国庫を圧迫してるとか、そういう話を書くんだよ」

「な～るほど」

ついでに、アルテリア国民だけでなくレッドカードを持つ朱民にも、１８歳から２０歳までの２年間、徴兵制度が課せられることになっている。彼らはたいてい各軍の三軍、つまり三等兵として起用され、主に軍の雑用を押しつけられる。戦争のないアルテリアでは、三等兵の仕事などそんなものだ。

「ついでに、朱民はハンターになるヤツが多いんだってさ。まあ、当然と言えば当然だけど。北の氷都にあるハンターの訓練学校はレッドカードを持っていれば無料で入学できるしな。奴隷みたいな扱いを受ける農家の下働きよりは、ずっとマシな生活ができるし」

「ふ～ん」

「こんなところかな。後はお前がどれだけ本を読んで知識を身に付けるか、だよ」

試験のスタイルがスタイルなので、高得点を狙おうとする生徒

たちはひたすら図書室に通って本を読む。授業では教えて貰えなかった専門知識などを解答用紙に書けば、その分、教師が点数を加算してくれるからだ。中には「３００点」などというケタ違いの点数を取る者もいる。ちなみに、光宮である。

「ま～ったく。ギルド・ナイトに任命するんだった～らよ、それだけ考えさせてくれりゃあいいのに……。何だって試験のことまで口出ししてくんだ～よ」

「……将兄はそんなに甘くない、ってリースさんが言ってたぞ」

「その通りだ～な」

重い溜め息をついて、シヴァが手元にある本に視線を落とす。今度はマジメに文字を追っているようなので、中也は自分の勉強を進めることにした。

（えっと、イャンクック……イャンクック、と）

討伐対象であるモンスター、イャンクックについて調べておこうと思っていたところで、シヴァに捕まったのだ。

（大型の鳥竜種で、飛竜種との中間に当たるモンスター。飛竜種討伐のための登竜門とされることから、クック先生とハンターたちには呼ばれている、か）

手元のモンスター図鑑には、非常にどうでもいいことが書かれていた。それよりも弱点や攻略法などの情報が欲しい、と溜め息をついたところで、開け放たれた窓から吹き込んできた風が図鑑のページを勝手に捲った。

（ポポポップ？　何だ、コレ）

イャンクックの次のページに、やたら「ヤル気」な顔をしたモンスターが紹介されていた。分類はイャンクックと同じ大型の鳥竜種だが、全体的に真っ白な羽毛を纏い、頭に赤いトサカを付けていることで、巨大なニワトリのように見える。ついでに、目の周りにだけ黒い毛が「特徴的」に生えていた。

（別名、肥鳥……。なんか……ローソンの“からあげクン”に似てるな）

目の周りの黒い毛が、サングラスのように見えるのだ。中也は、ついその姿に笑みを零していた。

始動１４（後書き）

ポポポップについて。

考案者は「ＳＩＢＡ☆翔太郎先生」です。金剛石先生が年末に行われた新オリジナル・モンスター企画にて、ＳＩＢＡ先生が発表なされました。

作者が、ポポポップの異常なファンになってしまい、ＳＩＢＡ先生の許可をいただき、自作にて登場させていただくことができました。オリジナルのポポポップ設定につきましては、金剛石先生の「Ｃｒｏｓｓｉｎｇ　Ｏｆ　Ｄｅｓｔｉｎｙ」にて発表されています。ぜひ一度、ご鑑賞ください。

……ローソンのからあげクンに似ている、という設定はハンマーヘッドの勝手な妄想です。

始動15

帝都の中心に位置する王宮から見て東側には「商い通り」と呼ばれる商店街がある。その名の通り、衣服や食品などを扱う場所だが、その中の「6番街」は少しばかり趣が異なっている。

「眠い……」

通常、商い通りに足を運ぶのは中年の男女が多いのだが、「6番街」はやたら若い女の子の姿が目立つ。その理由は簡単である。要するに「6番街」はいわゆるスイーツを取り扱う飲食街なのである。

「眠い～ぞ……」

美しく着飾った若い女の子たちの往来の中、左右に立ち並ぶ建物はどれも石造りで、客層を意識しているせいか季節の花で彩られた店の姿がよく目立つ。

「眠いな……」

中也たちが入った店は、広くもなく狭くもない、商い通りの6番街では一般的な店のひとつだった。整然と積まれた石の建物の中に、

磨きこまれたテーブルとイスが並んでいる。他の客は中也たちの向かいに座っている二人組の少女だけ。空気に甘い匂いが混じる、静かな夏の昼下がりだった。

「眠たいぞ」

午後４時に学校が終わり、いったん家に帰った後、午後１０時に軍の統括本部に出向き、日付が変更された午前１時に再び帰宅し、眠れるだけ眠って再び学校へ行く、という生活を繰り返すこと、２週間あまり。

「眠いわね……」

おまけに、その途中には全教科の平均点８０点以上だと決めつけられた学期末試験があったため、学校が終わって一度、帰宅してから統括本部に出向くまでの時間を仮眠に充てることもできず……、早い話、中也たちの体力はそろそろ限界を迎えていた。

「何だよ、てめーら。だらしねえなあ～」

目の下に濃いクマを作り、睡眠不足のため呆然自失の表情で宙を

眺める中也、シヴァ、光宮に対し、レイとルナは普段と全く変わらない様子でそこに座っていた。夏葉にいたっては、目の前のテーブルに突っ伏してすでに眠っている。

「なんでそんなに元気な～んだ～？」

睡眠時間が足りていないせいか、シヴァの声音はいつも以上に間延びして聞こえた。

「都会育ちとは違うんだよ。あたしらは実力主義の世界で生きてきたからね」

「それは……すごいわ……ねえ～」

ルナの自慢げな言葉に、光宮が魂の抜けたような声で相槌を打つ。要するに、レイとルナ以外、全員が眠たくて仕方ないのである。

「お待たせいたしました」

虚脱状態の学生たちが座るテーブルに、やたらスカートを短くした店員の女性がやって来る。彼女は特に表情を変えることなく、それぞれの確認を取りつつ、盆に乗せて運んできた氷菓子（アイスクリーム）をテーブル

の上に置いていった。

「ごゆっくりどうぞ」

軽く一礼し、店員の女性が去っていく。その後ろ姿をチラリと視界の端に捕えながら、中也は目の前に置かれたスプーンに手を伸ばした。今は眠気が先立って、店員のスカートの短さを気に留める余裕さえ持ち合わせていない。

「いよいよ明日ね」

氷菓子を口に運んで、やや思考が正常に戻ったらしい光宮が、ふとそう呟くのが聞こえる。

「そうだな」

やれることは、やった。ボーン・シリーズの防具を身に纏うのも10分かそこらでできるようになった。武器として選んだ大剣も基本的な動きはできるし、学期末試験の結果も何とか全員クリアだった。討伐対象モンスターであるイャンクックについても調べられるだけ調べ上げたし、フェンリルとリースから言われた通り、クエス

トに持ち込む荷物もちゃんと揃えてある。あとはもう、フィールドに出るだけだ。

「どうなるかしらね、クック討伐」

「さあ～。なるようになるだ～ろ」

やや不安が入り混じった光宮の声に、いつもの調子を取り戻したらしいシヴァが、軽い口調でそう答える。

「正直、不安だわ。何だか、とてもイヤな予感がするの」

「やる前からそういうこと言っても仕方ねえだろ、光。とりあえず、余計なことを考えるのはフィールドに出てからにしようぜ。大丈夫だって。あたしらは武器も防具も持たずにフィールドを二週間近く生き延びたんだぜ？　何とかなるって」

「そうかしら」

ひたすら明るいレイとは対照的に、光宮の声はいつもより重かった。

「ああ～でも、早いようで短かった～なあ。入学式から今日までの

時間がよ～」

氷菓子の上に乗ったイチゴをスプーンで掬いながら、シヴァがどこか遠い目をしながらそう呟く。

「確かにな。入学早々、俺たちは樹海に飛ばされたし」

「そうそう～。生きるか死ぬかの瀬戸際だったよ～な。もう二度とフィールドなんて出たくねえって思ってたのに、何がどうなってこういう話になったんだ～か」

「その割に試験、がんばってたじゃねえかよ、お前」

シヴァに向かってそう言えば、彼がいかにも胡散臭げな表情を向けてくる。

「じょ～だんキツいんだ～ぞ、中也～。まさか俺さま一人だけ試験の結果が悪かったっていう理由でクエストに出れない、な～んてことになってたまるか～よ」

「ギリギリだったけどな」

「へへ～」

「“へへ～”じゃない！　歴史がギリギリ８０点だったじゃねえか、お前！」

「へっ！」

「“へ”を一個にすればいいってモンじゃねえだろ」

「つまんない会話ね」

中也とシヴァの救いようのない会話に、光宮がサクッと止めを刺した。

「つまんないわ、あんたたち。会話も見た目も何一つおもしろみがないっていうか」

「は？」

いきなり何を言い出したのか、と目を丸くする中也とシヴァとは対照的に、レイとルナが軽く吹き出しながら彼らの方を見てくる。

「何の話～だ？」

「あんたたちが二人並んでるトコ見てもホントつまんないのよね～。何て言うか、ありきたりなんだもの。下半身にグッと来る要素が無

いっていうか何ていうか。早い話、つまんないのよ。暑苦しいだけで」

「そんなこと言われても……」

自分とシヴァで女の子の下半身を刺激する要素を出せ、と言われても答え様がない。そもそも、いったい何の話なのか中也には理解不能である。

「でも、シヴァのお兄さんはかなりオイシイわね。性格はともかく見た目はホントに申し分ないわ」

「それは認める～ぞ。でも何でそこで兄貴が出てくるのか～な？」

糖分を補充し、光宮の脳は完全に覚醒したらしい。シヴァの質問に光宮が答える前に、ルナが笑いながら口を開いた。

「確かにねえ。初めて見た時はホントにビックリしたよ。しかもあんたのお兄さんって聞いて更に驚いた。ぜんっぜん似てない……こともないか、な？」

「……それ、何気にひでえ～ぞ、ルナ」

「そう？」

銀のスプーンで氷菓子をすくい取り、ルナが口元に悪戯な笑みを刻む。

「将兄と並んでるところ見てみたいぜ。将兄も性格はともかく見た目は最高じゃねえか」

「まあね～。近くに来られると蹴飛ばしたくなるけど、遠くから眺めておくには、申し分ない男であることは否定しないわ」

そう言って、光宮とレイが互いに笑い合う。女の子の会話は不思議である。

「何が楽しいんだ？　将兄とフェンリルさんが並んでるところを見てさ」

つい聞いてしまうと、未だに眠りから覚めていない夏葉以外の女の子たちが同時に盛大な溜め息をついた。

「分かってないわねえ、中也。いい男は単品で見るより複数で見た方が楽しいのよ。男だって同じでしょ？　美少女は多ければ多いほ

どいいって思ったことない？」

「まあ、それは……うん、そうかもな」

個人的な感情を胸に抱いているのは夏葉だけだが、確かに美少女はたくさんいた方が嬉しい。男のサガである。

「目の保養ってヤツか？」

「そういうこと。やりすぎは気持ち悪いけど、多少の絡みは欲しいところね。ねえ、どこまで許せる？」

そう言って、光宮はレイとルナに視線を向けた。

「将兄とフェンリルさんで？」

「そうそう」

いったい何の話だと思っていると、次の瞬間、彼女たちの薄桃色の唇から衝撃の言葉が飛び出してきた。

「あたしはキスまでかな」

「あたしも同感だな」

「右に同じく。それ以上やられるとちょっとイヤだわ」

背筋に悪寒を覚えつつ、中也は無意識にシヴァと顔を見合わせていた。

「……俺、見たくないわ、それ」

「俺も見たくね～ぞ。何で兄貴と将兄が……」

「当然よ。あんたたちがそれを見たいって言ったら完全に同性愛者じゃない。あたしたちは何をどう頑張ってもホモにはなれないから好き勝手なこと言えるのよ」

「……ふ～ん」

言われてみれば、自分たちは男同士の絡みは御免被(ごめんこうむ)るところだが、女の子同士の絡みなら全然、大丈夫だと思う。むしろ、ちょっと見てみたい気がする。

「そんなもんかな」

「そんなモンなの。まあ、夏葉が寝てるから言えることなんだけどね」

言いながら、光宮はチラリと視線を夏葉に向ける。目の前に置か

れた氷菓子が夏の熱気に溶けていっている中、未だ夏葉は深い眠りの中にいた。テーブルに投げ出された細い手の指……左手の薬指に、陽光を反射する銀色の指輪が光っている。それを見る度、心をナイフで抉られたような痛みが走り抜ける。

「いい加減、起こしてあげたら？　溶けるよ」

「そうね」

ルナの言葉に促されるように、光宮の白い手が夏葉の細い肩を揺する。

「夏葉、そろそろ起きなさいよ」

眠りの海から掬い上げられ、しっかりと閉じられていた夏葉の瞼がゆっくりと持ち上がった。吸い込まれそうなほど深い深紅の瞳を正面に見て、中也は否応なく胸の鼓動が高まるのを感じる。

（やっぱり、夏葉は綺麗だ……）

意図的に視線を逸らし、中也は内心の動揺を誤魔化すように目の前の氷菓子を一口すくった。

「なんでここにいるんだっけ……？」

眠りから覚めた夏葉が、開口一番に消え入りそうな声でそう呟く。

「はあ？　寝ぼけてんの？　今日はもう訓練もないし、学校も今日で終わりだから、みんなで氷菓子でも食べに行こうって話になったんじゃない」

「あ、そっか……」

光宮に説明され、ようやく事態が腑に落ちたらしい。未だ虚ろな瞳のまま、夏葉はレイに差し出された氷菓子に手を伸ばした。

「さあ、明日はクエストだ～ぞ」

いち早く氷菓子を食べ終わったシヴァが、眠気を振り払うように大きく背伸びしながらそう言った。

「今夜１０時に出発だった～けな？」

「そうだよ。そんで、将兄の銀レウスで南のドンドルマに送って貰えるってことになってる」

通常、帝都からアルテリア最南端のドンドルマへ馬車を使って旅

すれば少なく見積もっても二カ月かかる。夏季休暇は一カ月なので、それではとても間に合わない。どうするつもりだろうかと思っていたら、昨日、リースからそう説明を受けた。銀レウスに運んで貰えれば、遅くても3日で着くらしい。

「ドンドルマのホーランド港からフィールドの密林エリアまで一週間。ヒマになりそうだわ。本でも持ち込もうかしら」

「試験が終わったばかりだってのに、また勉強する気かよ、光」

「勉強じゃないわ。純粋な興味よ。それが結果的に点数に繋がるっていうだけで」

呆れたようなレイの声に、当然だと言わんばかりに光宮が答えた。さすが、学生全体の平均点が６０点かそこらの試験で３００点を取る者は言うことが違う。

「今晩１０時、か。楽しみだな」

何度も思う。やれることは、やったのだ。あとはもう、なるようになれ、だ。

始動15（後書き）

明日は出発します！

始動16

午後10時、中也たちは統括本部の中にある「銀レウス専用」の厩（うまや）の前に建っていた。

（なんか、すげ～思い出したくない声……）

厩は地面から15メートルの高さまで、三重に積まれた石の壁で建てられている。その上は、まるで鳥籠の上部のように鋼鉄が網状に組まれていた。石壁の一角に、巨大な南京錠をかけられた鋼鉄の扉があり、その向こうから、何とも言えない臭いが漂ってきていた。同時に、その扉の向こうで何か巨大な生き物が蠢いている気配がひしひしと伝わってくる。

（なんか……怖え……）

リオレウス……。空の王者の異名を持つそのモンスターには、あのサバイバルで、さんざん酷い目にあわされた記憶がある。そのレウスは光宮が退治してしまったのだが、待ちに待ったアルテリア軍が現れた際、その先頭に立っていた将兄が乗っていたのが、この銀

色のレウスだった。

（あの時は感動したんだけどな……）

リオレウスの中でも極端に目撃例が少ない銀色のレウスを、まるで飼い猫のように従えている将兄の姿は途方もなくカッコよく見えたし、夏葉の口添えがあって自分とシヴァはその背に乗せてもらった。

（空を飛ぶのは楽しかったけど……）

しかし、今は鋼鉄の扉の向こうにいる生き物が恐ろしくて仕方ない。あの時は銀レウスの主人である将兄がいた。アルテリア軍もいた。それに、何より自分たちは精神的にも肉体的にも疲れ切ってしまっていた。

（怖い……）

しかしながら、こうして改めて銀色のリオレウスの前に来ると、恐怖が先立ち、足が竦んだ。

（さすが……Gクラスの希少種……）

長い時を生き「Gクラス」と呼ばれるようになったモンスターは近くにいるだけで威圧感を感じると聞いたことがある。中也は今、それを身をもって実感していた。鋼鉄の扉で遮られているにも関わらず、まるで血に飢えた猛獣に囲まれているような緊張感を感じ、肌が汗ばんだ。

「さあて、銀介～」

銀レウスの気配に呑まれて息を詰めている中也たちを完全に無視して、フェンリルがあっさり南京錠にカギを差し込んだ。

「フェンリルさん、大丈夫なのか!?」

「何が？」

「何がって、あんた……！」

あまりにも緊張感のない様子に、中也は思わず顔色を変えた。ここには、銀レウスの主人である将兄はいないのだ。いくら人に慣れているとは言え、相手はモンスターだ。

「だ、大丈夫なのか～よ、兄貴!?」

「大丈夫だろ～、たぶん」

たぶん、と怖いセリフをさらっと呟き、問答無用でフェンリルは厩に続く鋼鉄の扉を開いた。

「京さまがいない時に銀介に会うの、初めて……」

中也の後ろで、夏葉が光宮に向かってそう言うのが聞こえてくる。やはり、彼女たちも怖いと思っているのだ。

「まあ、食われたらその時ってことで」

あっけらかんとした態度を崩さないまま、フェンリルがずかずかと厩の中に入って行く。閉じられた空間の向こうから漂う、腐敗した臭いが一段ときつくなった。

「レウス……！」

厩の中は、まるで樹海の一角のような雰囲気に整えられている。体長２０メートルを超える巨大な飛竜が飼われているだけあって、そこは学校の講堂よりも広い。焼け焦げた芝生に、叩き折られた樹木、そして食い散らかされた牛の死体が転がる厩は、まるで巨大な

要塞のように見えた。そこに、月の光を反射して輝く鱗を持つ銀色のリオレウスが佇んでいる。

「!?」

中也たちの姿を見止めるなり、銀レウスは鼓膜が破れるような咆哮を上げた。

「これ、ヤバいんじゃない!?」

光宮が叫ぶと同時に、銀レウスが彼らに向かって突進してきた。２０トン近い巨体が風を切り、大地を駆けてくる様子はまさしく圧巻の一言に尽きる。銀レウスが一歩を踏み出す毎に大地が振動し、空気が震える音が耳に届いた。

（殺される！）

あまりの恐ろしさに、中也たちは一斉に厩の外を目指して逃げ出した。その中にはギルド・ナイトであるはずのリースの姿も含まれていたが、ただ一人、銀レウスに向かって走り出した人物がいる。

「フェンリルさん！」

自殺行為だ、と思って、中也は慌てて立ち止まった。それに気付いたシヴァも途端に方向転換する。

「おい、兄貴!!　止めろー!!」

二人の声に、光宮たちも足を止めた。

「ちょっと!!　何、考えてんの!?　死ぬ気!?」

各自の制止の声が聞こえていないはずはないのに、全速力で突進してくる銀レウスに向かっていくフェンリルは一向に止まらない。

「フェンリルさん!!」

中也が叫んだ時、フェンリルの直前で銀レウスが「急ブレーキ」をかけた。

「え……？」

翼を広げ、突進の勢いを落とした銀レウスがそのまま巨大な頭を下げてくる。その鼻づらに、フェンリルが手を伸ばした。

「久しぶり～、銀介～!　元気か～？」

唖然とする中也たちの前で、相変わらず笑顔のフェンリルが銀レ

ウスの鼻づらを撫で、顎の下をくすぐる。その度に、銀レウスがまるで甘えるように喉の奥からゴロゴロという音を出した。

「こ～んなところにず～っといたら、気が狂いそうになるね？　たまには思う存分、遊びに行きたいよな～。今度、しょ～けいに頼んで散歩に連れて行ってやるからな～って、こら、銀介！　ヨダレ付けるな！」

喉の奥からゴロゴロという音を出したまま、銀レウスが軽く口を開いてフェンリルの肩を甘噛みする。彼が慌てて銀レウスから離れれば、小さく唸って鼻づらを彼の体に押し付けた。

「鼻水つけるなって、もう～！」

困ったように笑いながら、フェンリルは銀レウスの頭を撫でてやる。

「すげえ、フェンリルさん……」

開いた口が塞がらないまま、中也たちは銀レウスとフェンリルの様子を眺めていた。

「あれ？　みんな、どうしたんだ？　何でそんなに離れてんの？」

フェンリルの質問に、答えられる者はいなかった。

「あいつ、何なんだよ……」

リースが顎を伝う汗を拭いながら言ったセリフに、中也は無意識に共感していた。

「出発の準備しようぜ～」

「お、おう……」

銀レウスの頭に腕を乗せながら、ひたすら笑顔でそう言ってくるフェンリルに促され、リースが恐る恐ると言った雰囲気で硬直を解き始めた。それを横目に見ながら、中也もそれに従うことにする。

「さっさと作業、済ませるぞ。中也とシヴァ、それからレイ。お前ら3人で荷物を積み込んでくれ。ルナ、それから夏葉。お前らは銀レウスの首に巻く布と鞍が隣の部屋にあるから、それを持って来てくれ。首に巻く布にはアルテリアの国旗が描いてあるからすぐ分かると思う。フェンリルは……銀レウスの相手をしてろや」

「ま～かせて～！」

少し離れた場所で銀レウスにヨダレを付けられ続けているフェンリルが、ひたすら笑顔で頷いた。

「リースさん。コンテナはあれでいいのか？」

「こんてな？」

「木箱。俺らが乗るヤツ」

「ああ、そっちに転がしてあるヤツにしろ」

厩の外には石畳の広場のような場所があり、そこにはまるで貨物列車のコンテナのような木箱がたくさん積み上げられていた。それぞれドアと窓があるので、中に人が乗れるようになっている。現在の将兄が銀レウスを捕えて来てから、アルテリアの貴人の移動手段がひとつ増えたのである。

「さて、さっさと済ませようか」

「了解だ～ぞ」

リースに促され、彼らは最も手近なコンテナの歩み寄る。ドアを

開けると、そこは本当に何もないただの箱だった。そこに、中也たちは持ち込んだボーン・シリーズの防具と各自の武器が納められた木箱、そして個人の荷物を乗せていく。

「なあ、リースさん。ドンドルマまでけっこう遠いけど、銀レウスは大丈夫なんですか？」

「はあ？」

「だって、長旅だし、一応こんな荷物もあるし」

「大丈夫だよ。レウスにとっちゃあ、これくらい1キロくらいの荷物を抱えて3キロ程度の距離を休憩しながら歩くようなモンだ。お前らだってそれくらい全然、平気だろ？」

「まあ……」

ドンドルマまで馬車で二カ月かかる。それなのに、そんな風に例えられて中也は改めてモンスターの脅威を思った。

「リースさん、言われたもの、フェンリルさんに届けて来たよ」

あらかた荷物を積み込んだところで、ルナと夏葉がやって来てそ

う報告した。

「ご苦労さん。じゃあ、ついでにあのおぼっちゃんに“上”を開けてくれって伝えて来てくれ。こっちはいつでも出発できるからよ」

「りょ～かい」

言いながら、ルナと夏葉が再び厩の中に入って行く。その背を見送り、中也は改めて銀レウスがいる厩を見つめた。

（すげえな、将兄。それにフェンリルさん……）

恐ろしいと思った。単純に、怖いと思った。けれど、彼らは銀レウスに対して恐怖というものをまるで感じているようには見えなかった。

（現実味が湧いてきたよ）

軍学校に入学する前、風のウワサで新しい将兄が銀レウスを騎獣にしていると聞いた時には、単純に「すごい」と思った。けれど、それがどういうことなのか、今になってようやく実感できるようになった。

（すごいよ、あんたら……）

傍にいるだけで圧迫感に押し潰されそうになるモンスターを従えられるということがどういうことなのか、それが理解できるようになって、より一層、将兄という存在が自分から遠ざかっていく気がした。

（……あんな風に、なりてえな）

そう思った時、まるで鳥籠のようなドーム型の天井がゆっくりと開いていくのが見えた。

「あれ、どうやって開いてんですか？」

「ん～？　なんか、仕掛けがあってだな、厩の中にあるハンドルを回したら左右にパカ～っと開くようになってんだとよ」

「一人でも回せるんですか？」

「ああ、らしいぜ」

そうなんだ、と思いながら見ていると、厩の中からルナと夏葉が戻って来る。全員で開いていく鳥籠の天井を見つめていると、開き

きった厩の天井から銀レウスが飛び出してきた。

「兄貴、背中に乗って～んぞ」

「まあ……全員が木箱に入ったら誰も手綱が握れないからな……」

「似合うわね。あんたの兄さん」

「そうだ～な」

その時、銀レウスの背に乗るフェンリルの姿が、なぜか将兄と重なって見えた。

「とうちゃ～く！　さっさと入れよ～！　置いてくぞ～！」

目の前に降り立ってきた銀レウスの背から、フェンリルが叫ぶのが聞こえた。やはり、将兄に似ていると思ったのはカン違いだったらしい。

「さあ、入れ。出発だ」

リースに背を押され、中也たちは順番にコンテナの中へ入って行った。いよいよ帝都を出発する時が、来た……。

始動１６（後書き）

「ぐるぐるぐるぐる、どっか～ん！」
「あふ～ん」
「もえあが～れ～、ガンダム～！」
「うれしくなっちゃうな～」

……背後にいる２９歳の男性の口からずっとこういった言葉が迸っておりました（泣）
ああ、大変だった（笑）

始動17

「クエストは基本、４人態勢が基本なんだー！！」

短い言葉の中に「基本」という単語を器用に2回も織り交ぜたリースは、そのまま勢いよく木箱の中を右から左へ転がって行った。

「４人が基本ってどういうことですかー！？」

負けじと聞き返しながら、中也もまた木箱の中を右から左へ転がって行く。

「そんなん知るかー！！　将兄に聞けー！！　ハンターがモンスターを狩りに行く時は４人って昔から決まってんだよー！！」

額を思い切り木箱の側面にぶつけ、眩暈がするような激痛が走った。

「英雄伝説よ！！」

いったん立ち上がった光宮が再び勢いよく床に向かってダイブしながら、そう叫ぶ。

「大昔の英雄が！　５人でクエストに出て！　さんざんなメに遭ったから！　だから４人！」

木箱が上下に揺れる。途端、内臓が浮くような気持ち悪さを味わったと思ったら、次の瞬間には全身を床に叩きつけられ、思わず息が詰まった。

「そんなこたぁ知らん！　だけど！　クエストに出るメンバーは、ギルドが選ぶ！　だから！　いつも同じ顔ぶれとクエストに出ることはない！」

木箱が左に傾いたせいで、彼らは左側に転がる。狭い空間に押し込められた７人が同時に左側に押し寄せ、互いのヒジやヒザが体中に当たって、それぞれ痛い思いを味わった。

「だけど！　中には、どうしても同じ顔ぶれとクエストを続けたいって言う変わった連中がいるんだよ……。そういう連中をギルドは一応だが認めてる。だが、そういった連中は複数で一人だとみなされる。つまり、何人いようが報奨金は１人分ってワケだ。

稼ぎにならねえから、最近じゃあそういった連中は少な……！！」

リースの説明は、途中から絶叫に取って変わった。

「とにかく！　お前ら、６人いるから！　３人ずつに分かれろ！　俺とおぼっちゃんが！　それぞれサポートに付く！」

三連続で、中也たちの体は上下に浮き、その度に床に叩きつけられる。

「大剣とか、太刀とか！　接近武器に対して！　弓だのボウガンだの！　遠距離のサポート武器が１人！　光とルナ！　お前らは分かれることが決定だ！　あとは！」

あとは接近武器を選んだ大剣の中也、ランスのシヴァ、ハンマーのレイ、そして太刀の夏葉である。

「どう分かれようか！？」

揺れに揺れる木箱の中で、右から左に転がりながら、中也は光宮たちに問いかけた。

「どうだっていいわよ！　でも！　レイとルナ！　私と夏葉！

それからあんたとシヴァは！　お互いのことよく知ってるから！　たまには！　そういう顔ぶれが！　別々になっても！　いいんじゃないかしら！？」

光宮が言うと同時に斜め上方に体が浮く。床に叩きつけられることを覚悟して目を閉じれば、覆いかぶさって来た誰かの下敷きにされた。そのヒジが横腹に食い込み、息が詰まる。

「ごめん、中也……」

差し込む月光のおかげで自分の体の上に乗る人物の顔が見えた。嬉しいことに夏葉だった。

「大丈夫？」

「へ、平気だよ」

正直、夏葉のヒジをまともに食らった腹は死ぬほど痛い。しかし、相手が夏葉だと文句を言えるはずも無かった。ついでに「事故」とは言え、こんな至近距離で夏葉の顔を見れたのだから、得をしたようなものだ。その代償は痛かったが。

「もう～、何なんだよ！」

リースの股間から顔を上げながら、レイが腹立たしげに叫ぶのが聞こえた。リースがちょっと羨ましい。そう思ってしまう自分が情けなかった。

「まったく、あのおぼっちゃんは！　自分のことしか考え……！」

中也たちの体が幾度目とも知れぬ無重力状態になる。今度は、背中から落ちた。そう思った瞬間、木箱が大きく右に傾く。必然的に右に向かってゴロゴロと転がったところで、顔全体が何やら柔らかいものに包まれた。

「ちょっと、どこ触ってんだよ！」

すぐ近くでルナの声がする。

「わ、悪い……！」

思わず手を伸ばしてしまったところで、両手に再び柔らかな感触が伝わって来た。もしかしなくても、この感触は……。

（すっげ～柔らかい！！）

こんな状況なのに、初めて触れた女の子の胸の感触に、感激した。何だかマシュマロと肉まんを足して割ったような……何とも言えない感覚だった。

（得した気分だ……）

実際、得をしたのだと思う。銀レウスの容赦ない飛び方には辟易としていたが、今回ばかりはちょっと感謝してしまった。

「う、お！！」

少し離れた場所で、シヴァが光宮の脚の間から顔を覗かせていた。彼女の口から、揺れのせいではない絶叫が迸る。同時に、幼馴染の頬に平手が飛んだ。

（シヴァ……ドンマイ！）

心の中でシヴァにエールを送ったところで、木箱が進行方向に向かって大きく傾いた。離れた場所にいた仲間たちが、一斉に中也の方に押し寄せてくる。

「いってぇ！！」

数人の下敷きにされ、さすがに悲鳴が漏れた。

「悪い、中也！　すぐ……！」

自分の胸に顔を押し付けているのは夏葉である。再び、感激した。心の底から申し訳ないと言う顔をしつつ、自分を見上げてくる深紅の眼差しが堪らない。

（ああ、俺……一生このままでもいいかも……！）

夏葉の上にはシヴァがいるのだが、そういうところは目を瞑っておく。

「で、どうするんだ!?　どう分かれ……！」

リースの声が三度、途切れた。今度は進行方向とは逆に木箱が傾く。

「っ！」

咄嗟に両腕を伸ばしてその体を抱きしめてしまったせいで、中也とシヴァで夏葉を挟んだまま床の上を転がるハメになる。

「大丈夫か、夏葉!?」

「へ、平気……」

まるで夏葉を押し倒したような姿勢だ。夏葉の下にいるシヴァは見なかったことにしておいて、中也は慌てて夏葉の上から離れた。

「もう～！　メンバー編成なんてどうでもいいわよ！　後から決めましょ！　こんな状況で、話し合いなんてできるワケないわ！」

「つ～か、俺……ちょっと休ませて欲し～ぞ」

光宮の切羽詰まった声に、シヴァの力無い声が重なった。

「大丈夫か!?　酔ったんじゃねえだろうな!?」

ヨロヨロしながらも、リースが床の上でヘバっているシヴァの方へと歩み寄って行く。

「酔った、か～も……」

「マジか!?　ちょっと待て！　まだ吐くなよ!」

「がんば～るぞ」

「頑張れ！　今、吐かれたら大変なことになる!!」

「りょ～かいだ～ぞ」

確かに、この狭い木箱の中でリバースされるのはいろいろな意味でキツい。木箱の中の空気が一変した。

「おい！！　フェンリル！！　おぼっちゃん！！　休憩だ！！」

慌てて窓の方に駆け寄った……というよりも窓にしがみ付いたリースが、ガラスを開けながらそう叫ぶ。

「聞こえねえのか！？　休憩だ！！　休憩！！　銀レウスを止めろー！！」

フェンリルからの返答は無い。

「おーい！！　おぼっちゃん！！　止めてくれー！！」

リースの必死の叫びも空しく、木箱はひたすら上下に揺れる。

「ダメだ！　あのおぼっちゃん、聞いてねえ！　なんか、なんか無いか！？　銀レウスを止める方法！！」

「全員で叫ぶとか！？」

「よし！　それで行こう！！　お前ら全員こっち来い！！」

レイの意見に考える間もなく賛同したリースに促され、シヴァを除く全員が窓辺に駆け寄った。

「止めてくれー！！　降ろしてくれー！」

全員で声を合わせ、一斉に叫ぶが銀レウスは一向に止まらない。それどころか、より一層スピードを上げて飛び始めた。必然的に、木箱の中の揺れもより一段と激しくなる。

「ダメだ！　あのおぼっちゃん！　こっちが楽しんでるとカン違いしてやがる！　この方法じゃダメだ！」

どうやらそうらしい。

「何か！　紙でも！　布でも！　何でもいいから「止めろ」って書いてヒラヒラさせるのは！？」

「それだ！！」

先ほどと同様、特に考えもせずにリースが中也の意見に賛同する。よほど焦っているらしい。

「インク！　誰かインク持ってきてないか！？」

「あたし！　あたしが持ってるわ！」

「よし！　それ出せ！！」

激しく揺れる木箱の中、光宮が何とか自分の荷物の中からインクの壺を引っ張り出した。

「布！　布！　あ、俺の服でいい！」

言いながら、リースもまた自分の荷物の中から白いシャツを一枚、取り出した。

「“止まれ”って書くんだ！　“止まれ”って！！」

「分かってるわよ！！」

分かってはいるのだろうが、これだけ木箱が揺れているのだから、まともに字など書けるはずはない。

「どうやって見せるの！？」

必死でシャツに「止まれ」の三文字を刻みつける光宮の横で、ルナが顔色を変えながらそう聞いてきた。

「何か長いもの！　長いものの先に括りつけるしかない！　何か

ないか！？　何か長いもの！」

「武器しかないぜ！」

レイが木箱の側面に固定されている武器の入った箱を見ながら言う。

「ランス！　ランスが一番長いはずだ！」

必死で手繰り寄せた記憶の中で、中也はそう覚えていた。

「今から防具を付けるのか！？」

「俺が持つ！　俺なら骨の武器くらい防具を付けなくても持てるから！　ランスはどれだ！？」

「これだよ！！」

中段に積まれているランスの箱を差した瞬間、彼らの乗る木箱が４５度の角度で傾いた。

「あ！！」

光宮の手から、インク壺が離れる。

「バカ！　それが命綱だ！　落とすなー！！」

リースの言葉に、反射的に飛び出したレイが床を滑りながら何とかインク壺を捕まえる。俗に言うところのスライディングである。

「う、あ！！」

ほっとしたのも束の間、再び木箱が傾いたせいでインク壺がレイの手を離れた。

「おっと！」

木箱の側面に背中を打ちつけながらも、空中に踊ったインク壺を中也は無事にキャッチする。

「早くしろー！！」

「分かってるよ！　光！　シャツを貸してくれ！」

「頼んだわ！！」

光宮の手から使い古された汗臭いシャツが離れた。床を滑りながらやって来たそれを無事に捕まえ、中也は意を決してインク壺のキャップを捻る。

「頑張れ、中也！　早く！！」

「急かすなよ！」

リースの声に顔を顰めつつ、この際と覚悟を決めてインク壺の中に指を突っ込む。右手の人指し指と中指が真っ黒になったところで、床のシャツに“止まれ”の三文字を素早く書き込んだ。

（読めればいい！）

そう、読めればいいのだ。綺麗な字である必要はない。

「できた！」

「よくやった！　こっちに寄こせ！」

「了解！」

慣れた動作でランスを組み立てたリースにシャツを渡すと、彼はその先端に器用にそれを巻き付けて固定した。

「気付け！　気付いてくれ、フェンリルー！！」

窓の外に向かってランスを突き出し、彼らは必死にフェンリルを呼んだ。

「気付いてくれー！！」

＊

結局、中也たちの足が無事に地面に付いたのは、それから一時間後のことだった。シヴァは何とかリバースせずに済んだものの、木箱から降りた中也たちは疲れ切ってボロボロになっていた。

「何でそんなに疲れてんの？」

銀レウスの背から悠然と降り立ったフェンリルの言葉に、中也は泣きそうになってしまった。

「あんだけ止まれって言ってたのに、気付かなかったのかよ……」

ついそう言ってしまうと、フェンリルは心の底から意外そうな顔をした。

「だって、止まったら落ちるじゃん」

「……」

返す言葉も無かった。

始動18

（ここが、ハンターの町……）

晴れ渡った夏の青空の下、数多の色彩で溢れる町がある。町の名はドンドルマ。南東の都、雷都と、南西の都、炎都の中間にある港町である。

（すっげ～人。まるで帝都みたい）

ドンドルマにはアルテリア国内で唯一、大型船が停泊できるホーランド港がある。また朝廷が鎖国的な政策を取っているにも関わらず、軍の計らいによって他国に開かれている港であるため、必然的にドンドルマには人が集まる。人が集まるところには商人が集まり、商人が集まれば、また人も集まる。そうやって、ドンドルマは帝都を含む他の都と同等の繁栄を見せる港町となった。

（ハンターがいっぱいだ）

また、ハンターがモンスターを討伐するためにフィールドに出る際には、必ずと言っていいほど船という交通手段が必要とされ

る。ハンターが大型船を必要とするのは、単純にフィールドに出るための足というだけでなく、大型のモンスターの死体を運ぶために大型船が必要不可欠だからだ。ついでに、大型船はそれが停泊できる港を必要とする。こうして、ドンドルマはハンターの町になっていった。

（あれがハンターの“社宅”かな？）

石畳の通りに面して、様々な商店が軒を連ねている。そのほとんどが宿屋だが、その建物の先に似通った家が並んでいる丘がある。中也は勝手に“社宅”と呼んでいるが、実際は軍の宿舎と同じような扱いを受けていると聞く。下にある家ほど小さく、その造りも単純だが、上へ行けば行くほどその佇まいが立派になる。

これが、ハンターたちの家だ。

（ハンターランクによって住み分けがされてるってウワサは、本当らしいな）

ハンターは北の氷都にある訓練学校を卒業した後、ドンドルマ

にやって来てクエストの依頼を受けるようになる。そして実力に応じて、モンスター討伐に関する報酬だけでなく、毎月ギルドという名の軍から支給される給料と、割り当てられた“社宅”のグレードが上がるのだ。たいていは単身だが、中には家族で一緒に暮らしているハンターもいるらしい。

（そしてアレが工房、だな？）

ハンターの“社宅”が並ぶ丘から視線を右へ移動させると、石造りが基本の町並みの中、たった一軒だけのレンガ造りの建物が目に入る。まるで工場地帯のように大きな煙突が突き出たその建物は、モンスターの素材を加工する“鍛冶屋”が勤務する“工房”である。国の中心にある帝都と、北の氷都にも同じ施設があるらしいが、その規模はやはりドンドルマにあるものが最大らしい。

（やっぱ一番、需要があるもんな。氷都はともかく、帝都の工房なんて研究用みたいなモンだし）

無事にモンスターを討伐してドンドルマに帰って来たハンター

は、その素材を工房に持ち込んで望みの武器や防具に加工してもらう。リオレウスの防具はこの形、ティガレックスの武器はこの形……とあらかじめ決められた形を“カタログ・スタイル”と言うが、たいていのハンターは他人と同じ形の防具を着たり、同じ形の武器を使うことを嫌う。そこで、更に金を上乗せして好みの形に加工したり、あるいは塗装したりするのだ。

（そんなに単純じゃないらしいけど）

一口に鍛冶屋と言っても、ピンからキリまでいる。腕のいい鍛冶屋のところには注文が殺到し、注文してから受け取るまで半年以上も待たされたという話も頻繁に耳にするし、逆に金をケチって評判の悪い鍛冶屋に注文すると、出来上がりが早い代わりに、ボウガンの弾が出ない、などというハンターにとって致命的な欠陥を負った武器が届くこともあるらしい。上位クラスのモンスターの素材で作られた防具なのに、下位クラスのモンスターの攻撃で簡単に砕けたという話も珍しくない。

（難しいよな、世の中って）

ついでに、武器や防具の塗装と言っても、その実はただ色を塗ればいいというものではない。素材となったモンスターの体表を活かしつつ、最も見栄えするように色を重ねていかなければならないのだ。これまた、職人の腕の見せどころであるが、より知名度の高い職人に塗装を頼むためには、それなりの金額が必要とされる。

（Ｇクラスハンターになればできない話じゃないけど、普通のハンターはせいぜい形を変えるくらいが関の山ってところかな。塗装なんてよほど金と実力があるヤツじゃないとしてねえらしいし。防具の全パーツをフルで塗装するのに、８０万ｚとか聞いたことあるし）

アルテリアの一般家庭の月収は、だいたい２０万ｚかそれくらいである。ちなみに、場所にもよるが米３０キロが３０００ｚだ。それを考えると、ハンターの武器や防具の塗装にかかる金額は、

かなりの高額である。

（そう言えば１０年前に比べて、すげえ物価が上がったよな）

母親の話を聞いたところによれば、１０年ほど前には米３０キロが１０ｚで買えていたらしい。しかしながら、庶民の懐もそれに応じて豊かになって行っているので、特に問題視はされていない。しかし……。

（でも何でだろ。市場の開放があったワケでもないのに……）

「中也！　何ボケっとしてるの？」

光宮の声で、中也は現実に返った。はっとして顔を上げると、雑踏の中、訝しげな表情で自分を見ている仲間たちの姿が目に入る。

「なんだ、なんだ？　可愛い女の子でもいたってか～？」

「違いますよ」

茶化すように言って来たリースの言葉をはっきり否定し、物思いにふけっていた自分を誤魔化すように溜め息などついてみた。

「まあ、どうでもいいけどよ。ほら、今夜の宿はあそこだぜ。よかったな、みんな。久しぶりにベッドで寝れるぞ」

「ホントですね」

笑いながらリースが一軒の宿屋を指差してきた。格で言うなら下の上と言ったところだろうが、ここ3日間ずっと木箱の中で寝ていたことを思うと、宿屋の格など気にならない。

「こんな扱い受けたの、初めてだわ」

隣で光宮が溜め息混じりに呟くのが聞こえた。

「荷物と同じ扱いだった～な」

「その通りだよ」

シヴァと顔を見合わせつつ、2人は自分たちの扱いを思い出して苦笑いを浮かべる。極秘任務……と言えば聞こえはいいが、要するにそれは他人の目に触れてはいけないということである。つまり、ドンドルマまでの道程で一般人に「将兄の」銀レウスに運ばれている「者」がいる、という事実を知られてはならないのだ。

結果的に、「将兄から」銀レウスを借りて極秘物資を運んでいるという名目を立てられるフェンリルは宿屋に泊まれるが、中に乗っている中也たちはひたすら閉じ込められていたのである。

（この世界じゃあ、ホントに命の値段は安いんだよな……）

トイレに行きたくてもなかなか行けない、という苦痛をさんざん味わった中也は、今更ながらそう実感した。

「ところでリースさん。フェンリルさんは？」

「ん～？　おぼっちゃんなら銀レウスを預けて来るってよ。宿屋で合流することになってる」

「へえ」

確かに、乗って来るだけ乗って来てそのまま、というわけにはいかない。相手はモンスターだし、当然だがドンドルマに“パーキング”などあるはずはないのだ。

「大丈夫なんですか？　だって、銀レウスでしょ？」

「心配いらねえだろ。ちゃんと帝都の将兄のところまで銀介を連

れて帰ってくれるよ」

「まあ、そうでしょうけど」

リースとそんな会話をしながら、中也たちは宿泊予定の宿屋に歩み寄って行く。通りに立ち並ぶ宿屋の軒先には、ほぼ例外なく行商人と思われる者たちが露店を開いていた。その点だけが、帝都と相違している。あとはもう、人通りの多さにしてみても、店の規模にしてみても、ドンドルマは帝都とほとんど変わらない。

「いらっしゃいませ」

宿屋は石造りだが、扉だけが格子戸風に組まれた木だった。それを横に開けば、やたら愛想のいい若い女性が出迎えてくれる。

「予約していたモンだけど。名前はリースだ」

そう言って、リースは従業員の女性に胸のポケットから取り出した紙を手渡した。

「少々お待ちください」

リースから紙を受け取った女性が、軽く一礼してカウンターの

奥へと入って行く。宿屋は入ってすぐカウンターがあり、その左側は食堂になっている。アルテリアの宿屋はほぼ食堂と兼業しているので、この宿屋も例外ではないようだ。肉を焼く香ばしい匂いと、炒められた油の匂いが鼻腔と胃を刺激する。ここ最近、まともなものを食べていなかったので、自腹でいいから何か食べたいと思った。

「お待たせいたしました。ご案内いたします」

中也の願い空しく、先ほどの女性がカウンター奥から姿を見せる。リースが無言でその後に続いたので、中也は否応なくその後ろ姿に従った。

（ああ～、腹減った……）

整然と並べられたテーブルとイスの間を抜けて、最奥にある扉を開く。その向こうは階段になっていた。

（どうせなら夏葉と同じ部屋がいいなあ～。まあ、ムリだろうけど）

そんなことを考えながら階段を登り切れば、人間が二人、かろうじてすれ違えるほどの廊下に出る。その横に、番号が書かれたドアが並んでいた。

「ご用意させたいただいたのは、こちらと……それから隣の部屋でございます。こちらがカギです。ごゆっくりどうぞ」

そう言って、従業員はリースに2本のカギを手渡し、そそくさと立ち去って行った。

「当然だが男と女で分かれるぞ。夏葉、お前は一応、光たちと一緒にいてくれ」

「はい」

当然だと思う気持ちと、残念だと思う気持ちを胸に抱え、中也たちはそれぞれの部屋へと入って行く。

「何にもね～な」

「そうだな……」

部屋の中には、ベッドが4つと味気ないテーブルとイスのセッ

トがあるだけで、他には何も無い。しかし、ベッドで眠れると思うだけマシだ。

「明日の朝までは自由だ。ハメを外さない程度に好きにしていいぞ。あ、光たちに言うの忘れてたぜ。中也、悪いけどそう伝えて来てくれ」

「あ、はい」

自由行動……とりあえず、中也は仲間を誘って食堂に行こうと決めた。

＊

一方そのころ、中也たちと離れて一人、別行動を取るフェンリルは、人影のない路地裏で“密談”の真っ最中だった……。

始動19

「やっぱカッコいいよね、しょ～けいの制服！」

宿屋と宿屋の隙間にある人目に付かない路地裏は、たいていゴミで散らかっている。それは、いつ誰とも知れない者が捨てた衣類だったり、あるいは腐って饐えた臭いを放つ食べ物だったり、行商人が捨てた売り物にならない商品だったりと様々だ。

「ねえ、一回でいいから貸してよ」

視界の端に、通り過ぎて行く人混みが見え隠れする。誰しもが豊かな町の景色に目を奪われ、あるいは明るい雰囲気に飲み込まれ、狭く汚い路地裏に視線を向けようとはしない。人は自分が見たいと思っているものしか見えない。そんなものだ。

「着てみたいんだ、これ」

言いながら、フェンリルは目の前の人物が着ている服を軽く指先で引っ張ってみる。黒を基調にした軍服に、胸に飾られた黒龍の階級章、銀の留め具。そのどれもが見事に調和して、それを着る人物

の魅力をより一層、引き立たせていると思う。

「帰って来てからな」

「約束だよ」

呆れたように言いながら青年は煙草に火を付ける。その様子を眺めながら、フェンリルはそう念を押した。

「それで？　経過は？」

紫煙を揺るがせながら問いかけられ、フェンリルは意識を将兄の制服から仕事に切り替える。

「順調だよ。問題ナシ。みんな俺と違って素直ないい子だしね。正直、１５歳のガキって聞いてたからもっと手を焼くかと思ってたんだけど、けっこうラクだよ。それに、あいつら見ておもしろいんだ」

「なるほど」

フェンリルの言葉に、青年は口元に笑みを刻む。その笑い方に意味深なものを感じて、フェンリルは大袈裟に溜め息をついてみせた。

「どうせ俺は手を焼くガキでしたよ！」

「自分でそう思うなら、そうなんだろうな」

「何それ」

「さあ。俺は何も言ってない」

そう言われると、返す言葉に困る。視線を彷徨わせて言い返す言葉を探していると、ふいに頭の上に手を乗せられ、まるで小さな子供を褒めるように撫でられた。

「大人になったという意味だ」

「……ホントにそう思ってる？」

「思ってる」

僅かに高い位置にある綺麗な顔立ちが優しく笑う。何となく恥ずかしさを胸に抱きながらも、髪を撫でてくれるその手を振り払おうとは思わなかった。

「銀介はどうした？　亜矢に渡したのか？」

「ちゃんと渡したよ」

「そうか」

「心配しなくても仕事はしてるって」

「分かってる。聞いてみただけだ」

青年の手が離れ、もう片方の指先に挟んでいた煙草を口元に運んで行く。その指先から煙草を掠め、自分の唇に咥えた。

「体に悪いから止めろ……と言っても聞かないな？」

「聞かないよ」

軽く笑って、真っ白な煙を胸いっぱいに吸い込む。内臓を侵す煙の味に、脳が陶酔する。一度覚えれば、この感覚は病みつきになって離れない。彼の真似をして吸い始めた煙草は、今では必要不可欠な日用品になっていた。

「でもさあ、しょ～けい。ギルド・ナイトの仕事は目立っちゃいけないんだろ？　顔を見られたらダメだって理由であいつら閉じ込めてたけどさ、銀介で運んだらメチャクチャ目立つから意味ないじゃん。すっげ～注目浴びたよ。よかったの？」

「別にいいさ。銀介が人間に従うモンスターだということを国民が認識すればそれでいい」

「なるほどね。まあ、俺は久々に銀介に乗せてもらって楽しかったから何でもいいけど。でも、中也たちは大変そうだったな～。船酔いじゃなくて、何酔いって言うのか知らないけど、休憩の度にヘロヘロになって降りて来るんだよ。もう、楽しくて楽しくて」

その光景を思い出しながら一人、笑いを堪えたところで、ふいに顎を掴まれて上向かされた。

「なに？」

「……あまり似てないな」

「は？　何が？　あ、もしかして俺とシヴァ？」

「お前の方が可愛い」

「……相変わらず親バカなんだから」

苦笑いを浮かべつつも、内心ではその言葉に満足している自分がいる。

「つーか、“可愛い”は止めてよね。俺もう19歳だぜ？」

「そうだったかな」

「そうだよ。いつまでも子供じゃないんだから。最近は可愛いより、カッコいいって言われる方が多いんだよ」

事実を言っただけなのに、なぜか笑われてしまった。

「俺にとっては、お前はいつまでも可愛い子供なんだ」

「あっそう」

言いながら、青年は自分の腕時計に視線を向ける。

「そろそろ帰るかな。四軍将に見つかると面倒だ」

「帰るんだ」

その言葉をどう受け取ったのかは分からなかったが、青年は再びフェンリルの頭に手を乗せた。

「あいつらを、頼んだぞ」

「……分かってるよ」

彼に信用して貰えるのが嬉しい。重要な任務を任せて貰えること

が嬉しい。心の底から、そう思う。

「ただ、万が一のことがあったら、お前だけでも帰って来い。いいな？」

「……それはマズイだろ」

「お前には変えられない」

いろいろな意味を含めて口にした言葉はあっさりと否定されてしまった。彼のこういうところは本当に昔から変わらない。大事にされているのだと思うと、言い知れぬ幸せを胸に覚えた。

「大丈夫だよ、父さん。俺は強いから。何があっても光と夏葉だけは死なせない」

「頼んだ」

「うん」

髪を撫でてくれていた手が離れる。名残惜しさを感じながらも、昔のようにその背に縋りつこうとは思わなかった。

「サスケ」

父親であり、軍の将兄である彼が地面に向かってその名を呼ぶ。
すると同時に、フェンリルにとって「友人」でもあるアイルーが石畳に落ちた影から飛び出してきた。

「ご主人～！」

ギルド・マスターを無視して、サスケは一直線にフェンリルに向かって駆け出してくる。しかし、途中で思い留まったらしく、ピタリと制止して将兄の方に向き直った。

「失礼いたしましたニャ、マスター」

背筋をピンと伸ばし、改まった口調でそう言ったサスケがおもしろくて、フェンリルは一人で笑い崩れた。

「そろそろ戻る。執務室まで送ってくれ」

「了解いたしましたニャ」

軍人のように敬礼したサスケが、思い直したようにフェンリルの方を向き直る。

「ご主人～！！」

勢いよく飛びついて来たサスケを胸に抱きとめると、ふわふわの毛並みが何ともいえず心地よかった。

「ご主人、すぐに戻ってくるニャ。それまで絶対ケガしちゃいけないニャ。絶対ニャ」

「大丈夫だって。お前も父さんもホント心配性なんだから……」

「心配されるのは愛されてる証拠ニャ。そう思うニャ。ボクもマスターもご主人のことが大好きニャ」

「知ってるよ」

苦笑しながら、腕に抱いたサスケの毛並みを撫でる。そのまま地面に降ろしてやると、サスケはぎこちない動作で将兄の方に歩み寄って行った。

「明日は出発だろ？　気を付けてな」

「うん。父さんも仕事がんばってね」

互いに笑い合い、視線をサスケに向ける。

「ご主人、ケガするんじゃないニャ。分かったニャ？」

「はいはい」

「それではマスター、お手をよろしいですかニャ？」

念を押すようにそう言った後、サスケは将兄に向かって手を差し出す。彼がそれを握り返すと、地面に広がった影の中に二人の姿は吸い込まれ、消えてしまった。

「相変わらずスゲ～な、サスケ」

きっと今ごろは王宮の執務室だろう。自分のアイルーながら、その能力の高さには嘆息させられる。

「さてと、戻ろうかな」

アイルーは主人の匂いを頼りに時空移動してくる。フェンリルがどこにいても、サスケには関係ない。

「あいつら今ごろ何してるかな～」

仕事の報告終わったところで、気になるのは中也たちの行動である。明日の朝までは自由行動にするとリースは言っていた。

（変なクスリとか買わされてなきゃいいけど）

そんな風に思いながら、フェンリルは路地裏から大通りに出る。
途端に町の喧騒に包まれながら、彼は真っ直ぐに宿泊予定の宿屋を目指した。
（なんか腹減った）
宿屋の扉を潜れば、すぐそこが食堂であるせいか食欲を刺激する匂いに満ちている。無意識に視線を食堂に向けると、そこに中也たちの姿を見つけた。
（全員揃ってんじゃん。好都合～）
中也が自分に気付いたらしく、笑顔で手を振って来る。自分も笑顔で答えながら、フェンリルは彼らが座るテーブルの方へと近寄って行った。
「ちょうど今、メンバーが決まったところなんだよ」
開口一番に、中也がそう言って来る。
「メンバー？」
「そうそう。クエストは４人が基本だろ？　俺とルナと夏葉がリー

スさんのチームで、光とレイとシヴァがフェンリルさんのチーム」

「へ？」

自分がいない間に話が進んでしまっていたらしい。

（光と夏葉が別チーム！？　それヤバくね！？）

そう言えば事前に父親である将兄から、光宮と夏葉は同じチームになるように工夫しろと言われていたのを思い出した。

（すっかり忘れてた……。どうしよう）

リースがそれなりに腕に信用が置けるハンターだから大丈夫だとは思いつつ、肝心なことを忘れていた自分に眩暈がした。

「よろしく頼むわね、美青年」

「こ、こちらこそ……」

内心の動揺を何とか隠しつつ、光宮に向かって愛想笑いなど浮かべてみた。

明日は、いよいよ出港だ。

始動２０

まだ夜が明けきっていない時刻、中也たちは早々に宿泊していた宿屋を出発していた。目指すはホーランド港と呼ばれる、アルテリア最大の港である。

「久々のベッドは捨てがたいわねえ、ホント。船の中ではどうなのかしら？　まさか荷物と一緒に貨物室に積み込まれるってことはないでしょうね？」

早朝の澄み切った空気に包まれながら、光宮が胡乱気な顔でリースとフェンリルに向かってそう問いかけた。

「船室はちゃんと二部屋ほど借りてあるよ。心配しなくてもちゃんとベッドで寝れるよ、お姫様」

「それを聞いて安心したわ、王子様」

「……」

光宮の嫌味に、フェンリルはただ苦笑いで答えた。

「さすがにこの時間だと誰もいないな」

「そうだ～な。昼間はあんなに人がたくさんいたのに～な」

隣にいるシヴァとそんな雑談をしながら、中也は改めてドンドルマの町並みに視線を向けた。シヴァの言う通り、昨日は人で溢れかえっていた港町は、今はまるで町全体が眠りについているように静まり返っている。時折、薄藍の景色に覆われた通りをノラ猫が横切って行く以外、そこに生き物の気配は無かった。

（やっぱ港町だから、宿屋が多いんだろうな。宿が食堂を兼ねてるから、わざわざメシ食うだけの店なんて開いても客は来ないんだろうし）

ドンドルマには諸外国からも人が集まると聞く。公には鎖国的な政策を取っているアルテリアにやってくる人間は、たいてい商人がだと聞くが、中には外国の要人も含まれるらしい。

（そう言えばアルテリアからフィールドまで、船でだいたい2週間もかかるとか言ってたっけな。ついでにクエストを遂行して、それからまた2週間かけてアルテリアまで戻って来ないといけない。途

中に寄港できる港はシドーニアのグレッグ港だけ）

今から１２年ばかり前、年号で言うなら「アルテリア３８８年」に、夏葉の義父にあたる前々代の将兄、獅子王・竜雪が極秘にシドーニア公国の要人と会談し、アルテリアのホーランド港をシドーニア公国に開放する代わりに、ハンターがクエストに出る際シドーニア公国のグレッグ港に寄港し、食料や水を補給することを許可するという条約を結んだ。

（当然だよなぁ～。いくら外国に比べれば豊かな国だって言っても、冷蔵庫とか冷凍庫があるワケじゃないんだし。水なんて未だにタルで運んでるんだ。大丈夫かな……）

真夏の暑い時期に、下手をすれば2カ月近くも経過した水を口にしなければならないのだと思うと、気になるのが食中毒である。それを思えば、途中で寄港する港があるというのはありがたい。

（ひと昔前のハンターの死因で第一位はモンスターによる攻撃だけど、その次が食中毒っていうから笑えないよ。ひでぇ話だよ、ホン

ト）

フィールドに出る前か、あるいはせっかくモンスターを倒しても

その帰りの船の中で食中毒になり、死亡するハンターが多かったと

聞く。ちなみに、その報告を受けて獅子王はシドーニア公国に密約

を持ちかけたのだ。

（逆に言えば、それは乾燥した食料を作る技術が発達した一因らし

いけど）

モンスターの世界であるフィールドに、食料や飲み物を売ってく

れる店屋などない。クエストでフィールドに出る際には、事前に食

料を持ち込まなければならないのだが、果物や肉をそのまま持ち歩

けば必ず腐る。現地調達という手が無いわけではないが、いつどこ

に何が潜んでいるか分からないフィールドで生肉を焼くのは危険が

伴うのだ。

（肉食モンスターは血の臭いに敏感だしな）

身の安全を第一に考えるなら、まずフィールドで生肉を焼くこと

はしない。だが、逆にそれを承知の上で敢えて生肉を焼くという、ふざけたイベントも過去に開催されたことは事実だ。

（前代の将兄コルネットの時代の話だ。確か、艶（あで）の紫が肉焼き大会を開きたいとか言ったんだっけ）

職務に忠実なコルネットはそれを実行し、多くのハンターや軍人、市民から顰蹙（ひんしゅく）を買った。

（向こうにとっては遊びでも、ハンターにとっては命がけ……。何人か死んだって話だ。でも、コルネットと艶の紫は無事にアルテリアに帰って来た）

それを思うと理不尽な話だと思う。だが、自分が考えても仕方ない。コルネットは訴追され、今の将兄が立ったのだ。中也は軽く息をつき、今度は航海技術のことを考える。

（レーダーとかＧＰＳを知ってる俺からすればかなり遅れてるような気がしないでもないけど、昔は星だけを頼りに航海してたっていうんだから、ある意味すげぇ度胸だよ。それに比べれば、羅針盤とコ

ンパスと海図がある今はまだマシかな）

航海技術が発達した国と言えばシエンナ内海を挟んで対岸にある大国ファーナである。アルテリアがまだガレー船を主に使っていた時代に、ファーナは早々とガレオン船に切り替え、今では大陸一周航海に向けて出港した船さえもあるらしい。

（大丈夫かな……。やだなぁ……遭難事故とか）

この世界には当然、海上保安庁などない。それと似た仕事をしているのが海軍を意味する夏軍だが、一介のハンターを捜索するために軍が動いてくれるかどうかはナゾである。

（夏葉がいるから、将兄は夏軍を動かしてくれるよな……？）

心の中で甘い期待を抱きつつ、中也は横目で夏葉の端正な顔立ちを盗み見る。朝早いのが苦手と言っていただけあって、今朝の夏葉は誰がどこから見ても「眠いです」という顔をしていた。

（まあ、今回のクエストは夏葉と同じチームになれたし、良かったと思うしかないか）

そこまで考えた時、町並みが途切れてホーランド港が姿を現した。

「久しぶり……」

思わず呟けば、横にいたシヴァが微かな溜め息を落とす。紺碧の海水を湛えた綺麗な海は、今は薄靄（うすもや）の中、悠然とそこに佇んでいた。

「前に来た時は夕暮れ時だったよな」

「そうだった～な」

船は自然の風を動力源に走る帆船である。そのため、燃料である油が海に流れて海水を汚すことはない。港という言葉からは想像がつかないほど、ホーランド港の海水は澄んでいる。

「……」

磯の香りが鼻腔を刺激した。何度来ても、どこの世界でも、まさしく「海の香り」であるこの匂いには心が洗われるような気分になる。目の前にあるのが真っ青な海であれば、なおさらだ。

「ガレオン船、か」

ここに来るまで、中也は本物のガレオン船というものを見たこと

が無かった。映画、本の挿し絵、あるいはレプリカとして有楽地に飾られていたのを見ただけだ。そんなガレオン船が、この世界では航海の主力として活躍している。なんだか、今更ながら不思議な気分だった。

「俺たちの船はあれだ。ほら、行くぞ」

他の船が未だ静まり返っている中、ただ一隻だけ出港準備に追われている船がある。それに向かって、リースが歩き出した。中也たちは、その後ろ姿に従う。

（大変だな、船員の人たちも）

当然だが、荷物の積み込みはすべて人力である。水が詰められていると思われる1メートル前後のタルをゴロゴロと転がしながら運ぶ者、食料などが入った木箱を両腕に抱えて運ぶ者……。そこには赤銅色の肌に汗を浮かべながら立ち働く男たちの姿がある。

（俺たちの荷物は馬が運んでくれるからいいけど）

武器と防具が詰められた木箱は、大きめの荷車に乗せて馬に引か

せている。日用品が入ったカバンだけは自分で持っていたが、フィールドに馬は連れて行けない。連れて行けるとすれば、比較的おとなしいとされるアプトノス、アプケロスといったモンスターだけだ。

（荷物を運ぶだけで大変だな）

改めて、中也は自分がもともと住んでいた世界の文明に感謝した。

「さあ、さっさと登れ」

そう言って、リースが顎でしゃくって見せたのは、船体の横にダランと垂らされた縄梯子である。フェリーのように、乗客が乗り降りするためのタラップがあるわけではない。客の扱いも、この程度である。

（でも、ガレオン船に乗れるのは嬉しいから我慢しよう）

そう思って、中也はカバンを背に担ぎ、縄梯子に手をかけた。軍学校でそれなりに鍛えられているので、これくらいのことは苦にならない。ただ、下を見ると怖くなるので決して見ないようにしておいた。

「よっと！」

縄梯子を登り切り、デッキに足を乗せる。そこには、出港準備に追われる船員たちがひしめいており、通行の邪魔をした中也に煩わし気な視線を向けてくる者も少なからずいた。いらっしゃいませ、とは言ってもらえないらしい。

（愛想わりぃな……もう）

デッキの上で働く船員たちから汗の臭いがする。上半身を脱いで働いている男の体には、うっすらと汗が浮かんでいた。

「またフィールドに逆戻りね」

自分に続いてデッキに上がって来た光宮が、そう呟く。無言で頷いたところで、シヴァ、夏葉、レイ、ルナ、リース、そしてフェンリル……と、続々と登って来た。

「全員、乗り込んだか？」

ふいに後ろから声をかけられる。反射的に振り向けば、他の船員たちとはあからさまに衣服が違う男が一人、立っていた。紹介され

なくても分かる。船乗りで立派な服を着ているのは、船長である者だけだ。

「はい、これで全員です」

「よし！！　錨（いかり）を上げろ！！　出発だ！！」

リースが答えると、船長の男が腹に響く大声で叫ぶ。同時に、船員たちから威勢のいい掛け声が上がった。

（無線とか無いから、仕方ないんだろうけど……）

それにしてもこの声の大きさはちょっと異常だと思わざるをえない。まるでレウスの咆哮なみだ。

（さすが……）

感心している中也を余所に、船員たちが掛け声と共に錨を上げ始めた。同時に、畳まれていた帆が広がる。

「いよいよ出発、か……」

「そうね」

光宮の翡翠色の瞳と視線が交わった。何となく無言で頷き、中也は

デッキから見える港の景色へと視線を移動した。

（人の世界からモンスターの世界へ、か……）

船長の合図からしばらくして、彼らを乗せた船がゆっくりと風を受けて動き始めた。徐々に遠ざかって行く港は、ようやく朝日に照らされようとしている。

（アルテリアは……綺麗な国だな。こうして見ると）

海上から眺めるドンドルマの町並みは、美しいの一言に尽きる。朝日を受けて輝く軒並みに、白い石壁。人が作り上げた文明の結晶である国は、そこから旅立とうとしている者にとっては郷愁の思いを抱くには充分なほど眩しさに包まれ、そこにある。

（モンスターの襲撃を受けないから、こんなに国が大きくなったんだろうな……）

そう思って、中也は自分の思考に違和感を覚えた。

（何でモンスターが襲撃してこないんだ……？）

フィールドで、モンスターが集まらない場所と言えば、近くに古龍

種かGクラスのモンスターがいる時に限られる。

（人の国の地下に、黒龍がいたりして……）

自分の考えに、中也は自分で笑った。

（まさか、な）

そんなことは、あるはずはない……。

始動２１

「うぉえぇぉおおぇえぇ！！」

「おぇえええぉえぇぇぇ！！」

出港後まもなく、中也たちの乗るガレオン船「オーディナ号」のデッキに、海面に向かって勢いよく胃の内容物を撒き散らすリースと光宮の姿があった。

「大変だ～な、船酔いは……」

「みたいだな……」

二人の様子を遠目に眺めながら、中也とシヴァは互いに視線を交えて苦笑いを浮かべる。見渡す限りの真っ青な海、肌を撫でる潮風、突き抜けるような青空に向かって張られた真っ白な帆……そのどれもが感動的なのに、ふと視線を下に向ければ、そこには海面を流れて行く消化中の食べ物の姿がある。リースと光宮には悪いが、雰囲気が台無しだった。

「つーか、銀レウスに運ばれてる時は二人とも平気な顔してたじゃ

ねえか～よ。むしろ俺の方がヘバってた～ぜ？」

「このビミョーな揺れだよ、シヴァ」

「ビミョーな揺れ？」

「そうそう。このビミョーな揺れが船酔いするヤツにはかなりキツいらしいぜ」

「ふ～ん」

意識を集中していれば、凪の海に独特の何とも言えない微かな揺れが足元から伝わってくる。極端な揺れは平気だと言う者に限って、こういった微妙な揺れが苦手だと言う者が多いのだ。リースと光宮は、まさしくそのタイプのようだ。

「大丈夫か～な。これからクエストだっての～に」

「さあ。てかリースさん……ハンター歴5年目だって言ってたのに船酔いなんかしてて平気なのかな」

「モンスターに会ったらケロッとするかもしれね～ぞ」

「それを期待するよ」

たいてい、船酔いを克服するのは「慣れ」である。だが、中にはどう頑張っても船酔いに「慣れない」人間もいるらしい。リースがまさしくその典型だろう。こればかりは、ハンター歴云々には関係ないようだ。

「レイたちはどこ行った～んだ？」

「夏葉は船室で昼寝。レイとルナはフェンリルさんを誘って探検だってさ」

「兄貴、モテモテ～！」

「そういうこと」

感嘆したように軽く口笛を吹いて見せるシヴァとは対照的に、中也はただ溜め息を落とす。

「……どうせなら誘ってくれればいいのに～な。だって女の子2人に対して男が1人って、な～んかバランス悪くねえ～か？」

「それがいいんだろ？　お互いに……」

フェンリルにしてみれば両手に花、というシチュエーションだ。

そしてレイとルナにしてみれば、いわゆる“超！イケメン”を間に挟んで歩くことが楽しくて仕方ない、と言ったところだろう。

「俺なら1対1で歩きたいけど～な」

「同感。でもレイとルナってすげ～仲良いじゃん。2人揃ってたらお互いの魅力がより一層、引き立つっていうのを知ってるって言うか、何と言うか、さ」

「そんなもんか～な」

「そんなところだろ、どうせ」

世の中の女の子はやはりフェンリルや将兄のような“超！イケメン”が好きなのだ。そう思うと理不尽さを感じないでもないが、持って生まれた容姿を恨んでも仕方がない。

「つ～か兄貴のヤツ、何だかんだ言って自分だけオイシイ思いしてね～か？」

「うん、まあ……」

帝都からドンドルマまでの道のりで、中也たちは木箱に閉じ込め

られて夜を明かしていたというのに、フェンリルだけはキチンと宿のベッドの上で寝ていた。ついでに今のこの状況である。シヴァの言う通り、確かに彼一人だけが得をしていると言っても過言ではない気がした。

「仕方ないだろ。一応、フェンリルさんは“将兄からの極秘任務を言い渡されてドンドルマまで荷物を運んでる”っていう設定だったらしいから。将兄から直々に仕事を任せられるような人が倉庫で寝るなんて言い出したら不自然だろ」

そう言うことにしておこう。中也は納得できないものを感じつつも、自分に向かってそう言い聞かせた。シヴァが納得するかどうかは二の次である。

「そっちの話じゃあねえよ。レイとルナを引き連れて探検って話の方だ～ぞ」

「そっちかよ」

「他にどっちがあるって言うんだ～よ。いいなあ、兄貴。俺もレイ

とルナに挟まれて歩いてみたい～ぞ」

幼馴染の頭の中は、いつだって下半身の欲望で満たされているのだ、ということを中也は今更ながらに思い出した。

（ホントにこいつは……）

呆れて溜め息が出る。その時、ふと中也は最近のシヴァに浮ついた話がないことに思い至った。

「そう言えばさ、最近あまり女の子と付き合ったとかそういう話しねえよな、お前。何かあったんか？　もしかしなくても好きな子ができたとか？」

軍学校に入学する前のシヴァと言えば、それこそ両手で数えきれないほどの女の子のウワサがまるで服のように纏わりついていたものだ。それを思ってそう聞いてみると、シヴァがニヤリと笑って見せた。

「正解！」

あっさり認めるところが、さすがシヴァだと思う。

「誰だよ。教えろよ」

「それは言わね～ぞ。それを言うならお前だって同じだ～ろ、中也。聞かなくても分かる～ぞ。なっちゃんだ～ろ？」

図星を突かれて、中也は思わず黙り込んだ。

「やっぱ～りな。最近の中也、ず～っとなっちゃんのことばっかり見てたも～んな。実のところ、樹海でサバイバルしてた時から好きだった～ろ」

「……何で分かるんだよ」

「俺は他人のそういうところ、す～ぐに分かるんだ～ぞ。大変だ～な。ライバルは“あの”将兄だ～ぞ」

「……言われなくても分かってるよ」

幾度目とも知れない重い溜め息を落としながら、中也は舷側に寄りかかる。夏の潮風が、頬を掠めて行った。

「で？　お前は？　自分だけ喋らないとかナシだろ」

「お前が勝手に認めただけだって～の。俺は何もお前が好きなヤツ

を当てたら暴露するとか言ってね～ぞ」

「……お前なあ」

そういうのを、世間一般的には「屁理屈」と言うのだが、シヴァに言うだけムダという気がして黙っておいた。

「がんば～れよ、中也。応援してやるか～らよ」

彼の言葉が、何だかちょっと嬉しかった。

「ありがと。お前も好きなヤツとうまく行くといいな」

「ど～も！」

親友に向かって改めて例を言うと言うのは何だか照れくさい気もした。けれど、相手がシヴァだとそう言う言葉も自然と口をついて出てくるから不思議だ。

（こいつの人柄ってヤツかもな）

溜め息をつかされることも多いが、シヴァと友達で本当に良かったと思う。そんな風に思える自分さえも“好き”だと思えるから不思議だった。

（誰かを嫌いだって言うより、好きだって言うのは……いいことなんだな。恋愛感情だけじゃなくて）

そんな当然のことが身にしみる。

（シヴァはいいヤツだよ、ホント）

さすがに、それは本人に向かって面と向かって言うことはできない。何となく気恥かしさを覚えて、中也は視線を幼馴染から紺碧の海へ向けた。

（夏葉と海とか行ってみてえな）

そんな夢を見た瞬間、そう遠くない場所からゴキブリが潰れたような呻き声が鼓膜を刺激し、すぐ下の海面を吐瀉物が流れて行く。

（雰囲気、台無しだっての。ちくしょー）

思わず光宮たちの方を見ると、２人揃って舷側に凭れかかり、ひたすら青い顔で宙を見上げていた。

「せっかく豪華な昼飯、食ったのに～な」

「違いない」

船の料理長が丹精込めて作り上げてくれた「人間用」の昼食は、光宮とリースの胃袋という通過点を経て「小魚用」の昼食に代わってしまったようだ。

「なあ、中也。話は変わるんだけど～よ」

「ん～？」

「ガレオン船とガレー船ってどう違う～んだ？　どっちも同じ帆船だ～ろ？」

「ああ……」

言われて、どう説明していいものか中也は少しばかり考えた。

「簡単に言うと、帆の大きさかな。ガレー船は一枚の大きな帆で風を受けて走るけど、ガレオン船は３０枚くらいの小さな帆で走るんだよ。見ての通り、風の強さによって帆を締めたり、緩めたりしなきゃならないんだ。だから、大きい帆が一枚だけだと大変なんだよ。言わば、船上での作業効率を上げるために帆を細切れにしたって言った方がいいかも」

「ふ～ん」

「ついでに、後ろ姿がガレー船の方が……何ていうんだろ……こうずんぐりしているって言うか。まあ、どっちも大量の荷物を運ぶために考え出された船だってことは言えるよ」

「へえ。速く走る方法とかはあるのか～な？」

「あるよ。帆を綺麗な曲線状態に維持すること。あとは帆が麻布でできてることも船を高速化させる一因だよ。雨風による劣化も少ないしな」

「よ～く知ってんな～」

「まあな」

帆船は昔から好きだったのだ。基本的なことは、だいたい知っている。

「ひとつ試験のネタを仕入れた～ぜ」

「なるほど」

帆船の操舵方法などが試験に出るとは思えなかったが、それでも

知識は多いに越したことはない。特にこんな世界だと、この前のように、いきなりどんな状況に放り込まれるか分からないのだ。

「あっちにはファーナがあるんだっけ～か？」

「ファーナ？　ああ、だろうな」

シヴァが指差した先には、水平線と太陽だけが彼らを見つめている。だが、知識の上ではその先にファーナという大国があることを知っていた。

「シヴァ、ファーナの国王の名前は？」

「……クリス、クリス……クリス……3世？」

「正解」

一人の国王の治世が5年と続かないことで有名なファーナ王国において、クリス3世の治世はすでに30年に達しようとしていると聞く。当然だが中也はクリス3世という人物に会ったことはないし、これから先も会える相手ではないだろう。だが、興味を持つことは自由だ。

（乱世のファーナを平定した国王、か）

きっと「偉人」として歴史に名を残していく人物はこの世界について何を思い、何を考えるのか、聞けるものなら聞いてみたい気もする。

「なあ、今日の晩飯、何か～な」

「さあ……」

シヴァの言葉に、中也は思わず肩を落とした。本当に、彼の頭の中には食欲と性欲の2つしか存在していないのかと疑いたくなる。

（まあいいか。船のメシはうまいし。確かに気になる……）

深く考えないことにして、中也は先ほど食べた昼食の味を思い浮かべつつ、夕食に期待を寄せた。

その夕飯の席が、大変なことになることを知る由もなく。

始動２１（後書き）

このあたりは「ヴァナルガンド」の「第４話」と比べていただけたらおもしろいのではないか、と宣伝しときます！

セルフ・プロデュースですから（笑）

宣伝できる時にしとかないと（笑）！

始動22

「はい中也、ボラギノール」

そう言って夏葉が差し出してくれたのは「カルボナーラ」だった。

（ボラギノールって……痔の薬じゃん……）

内心で苦笑いを浮かべながらも、彼は礼を言って湯気を上げるパスタが乗った皿を受け取る。

（夏葉って気が利くよな～）

好きになった子のことは、ついつい良点ばかり見てしまうものだが、夏葉に関しては本当に気が利く優しい子だと思った。事実、中也たち男性陣の向かいの席に根をおろし、ワイ談に花を咲かせている光宮たちとは対照的に、夏葉は忙しく立ち回って全員分の料理を運んでくれている。

（ホント、見た目はともかく女の子って感じがしねえ……）

レイ、ルナ、そして光宮たちを見て中也はそんなことを思いつつ、フォークにパスタを絡めた。ちなみに、料理はテーブルに置いてあ

るメニュー表の中から好きなものを選び、自分でキッチンに伝えに行って自分で取りに行くという方式である。代金は乗船料金の中に含まれているという話である。

「な～んか、なっちゃんってプライベートさんみたいだ～な」

「プライベート？」

聞き慣れない単語に隣の席にいるシヴァを見ると、彼がいかにも心外だと言う顔をした。

「なんだ～、中也。お前、プライベートさん知らないの～か？　男のロマンだ～ぞ」

「知らないモンは知らないんだよ」

「プライベートさんってアレだ～よ。フリフリのスカートにカチューシャ付けてさ、そんで“おかえりなさいませ、ご主人さま～”って言ってくれる女の子のことだ～ぞ」

「ああ……メイドか……」

「冥土？　ニブルヘイム（死者の国）のこと～か？」

「何でもない」

自分が知っている世界で言うところの「メイド」のことを、こちらの世界では「プライベート」と言うらしい。

（夏葉がメイドだったら可愛いかも……）

シヴァの発想に溜め息を落としながらも、脳内ではメイド服ならぬプライベート服に身を包んだ夏葉を想像してしまっている。確かに可愛いかもしれないが、現実に夏葉がプライベート姿で目の前に現れたら気絶できる自信があった。

「プライベートさんのカッコなら俺、昔やったことあるよ～」

中也のささやかな妄想は、フェンリルの心無い一言により、風の前の塵に同じとなった。

「はあ？　プライベート？　お前がか？　でけぇプライベートだな、おい」

その光景を否応なく想像して固まった中也とシヴァを余所に、リースが「大人のツッコミ」を入れる。

「ガキのころの話だって。さすがに最近のことじゃないよ。小塾に入学した年だったから12歳かそれくらいじゃなかったかな。塾祭（学園祭）でさ、なんか知らないけど学級で喫茶店やるって話になって。それでなぜか俺が女装させられて客引きやらされたんだ」

「客は来たのかよ」

「来たよー。俺のプライベートさん姿、意外と大好評だったんだって」

「……そうかよ」

「そうそう。で、父さんたちに見せたら苦笑いされた」

「……俺なら、自分の息子がそんな恰好してたら殴るけどな」

リースの最もな意見に、フェンリルはなぜか爆笑していた。

「兄貴……何やってんだ～よ」

隣の席で頭を抱えるシヴァに、中也は激しく共感した。自分が胸に抱いていた「幸也」のイメージが、音を立てて崩れていくのを感じる。

「それで？　時間あるんだし聞かせてくれ～よ、兄貴。龍都のミナガルデを出てからどうしてたんだ～よ」

「ああ、そう言えばまだ話してなかったっけ……」

テーブルに並べられた料理の皿を空にしたシヴァが、果汁が注がれたグラスを手に取りながらそう切り出した。

「なんでずっと黙ってんだ～よ」

「そういうつもりなかったけど。なんか話すキッカケがなかなか掴めなくてさ……」

何とも言えない顔で、フェンリルはアルコールをグラスに注いだ。こちらの世界の彼がどこで何をして生きて来たのか、確かに気になる。家族の問題だから部外者は聞かない方がいいと思いつつも、気になるものは仕方ない。

「ん～と、とりあえず家出して～、それで俺、ハンターになろうって思ったんだよ。で、ハンターの訓練学校が北の氷都にあるって話だったから氷都まで行こうと思って～」

その時、夏葉が最後の料理を運んできてくれた。両手で抱えなければ持てないような大きな皿には、こんがり焼けたジャンボ・ソーセージが山盛りになっている。それを見て、なぜか光宮が目を輝かせた。

「途中で盗賊に襲われて～、で、そん時に父さんに助けてもらって～、それで何か知らないけど子供にしてくれて～、で、あとはもうゼータク三昧って感じかな」

ジャンボ・ソーセージの1つを小皿に取った光宮が、無気味な笑いを顔に浮かべながら、一方の先端にナイフで切り込みを入れた。それをフォークで突き刺し、ニヤニヤしながらレイの前に翳す。すると、レイが嬉々とした顔で「切り込みが入ったソーセージの先端」を口に含んだ。

「そんでお前らみたいに15歳で軍学校に進学したんだよ。で～、そん時に今の将兄と知り合いになって～。そんであの人が将兄になってからギルド・ナイトに正式に任命されました～って感じ。正確

にはあの人、将兄に任命される一年くらい前から将兄の仕事してたしね。俺もそれくらいからギルド・ナイトやってたかな」

「ふ～ん」

テーブルの向こう側から「オイシイ」という声が聞こえてくる。光宮が手に持つジャンボ・ソーセージは肉汁と油を纏い、ランタンの光を反射して何とも言えないグロテスクな輝きを放っていた。ソーセージの先端から下方へ向けてレイが意図的にゆっくりと舌を這わせていく。

「兄貴の、その……オヤジさんには、ちゃんと面倒見てもらってたのか～よ」

「充分過ぎるくらいに。とりあえずおやつ食べ放題とか～、服とかオモチャとか好きなだけ買ってもらえたとか～、いろんな所に遊びに連れて行ってもらったりとか～、あとは～、冬になったら寝る時に絶対、湯たんぽ入れてもらったとか～、まあ家の中だと寒くないんだけどね」

「とんでもねえ話だ～な……」

「まあね～。俺、メチャクチャ金持ちの家で死ぬほど甘やかされて育った一人っ子ってヤツだからさ～」

突き出されたソーセージを、薄く笑ったレイが口に含み、まるで見せつけるように「出し入れ」をしていた。その様子を、ルナは爆笑しながら眺め、夏葉はひたすら下を向いてやり過ごしている。

「……心配してた俺たちがバカだったワケだ～な」

「そういうこと」

何だか納得しているらしいシヴァの隣で、中也はそろそろ我慢の限界を迎えていた。

「いい加減にしてくれよ！　お前らには恥じらいってモンがねえのかよ！？」

つい大声で叫ぶと、正面に座る彼女たちがニヤリと笑った。光宮の術中にハマってしまった自分を自覚しつつ、我慢できなかったのだから仕方ない、ということにしておいた。

「あら、ソーセージ食べるのに恥じらいが必要なの？　そんなマナー、聞いたことないわよ？」

「食べ方に問題があるんだよ、食べ方に！　何で普通に食べれないんだよ、お前ら！」

「どういう食べ方？　私たちにしてみればコレが普通なのよ。あんたが何にそんなにムキになってるのか、ぜんっぜん分かんないわ。ねえ？」

同意を求めるように、光宮はレイとルナに視線を向ける。彼女たちがあからさまに悪意が滲んだ顔で頷くのを見ながら、中也はどう答えていいか分からず黙り込んだ。

「やぁねえ、男って。女の子がソーセージ食べてるだけなのに自分のソーセージ反応させるんだもの。何を想像したのかしら」

どう考えても彼女たちはソレを意識して意図的にやっていた。誰が何と言おうとそれは事実だ。それなのに、下半身にブラ下がる第3の足を非難されるなど、理不尽だ。

「ズボンの中でＸＸＸがフルボＸキ中？　中也」

「そういうこと、はっきり言うな！　してねえよ！」

「あら残念。まだまだ修行が足りないわね、レイ」

レイが笑いながら頷いた時のこと。食堂のドアが開き、その手に楽器を抱えた男たちが入って来た。全員、年の頃は４０代から５０代といったところだが、誰もが人好きのする笑顔を浮かべているため実際年齢よりも若く見えているかもしれない。服装は船員たちと変わらず、頭髪や顎髭などは整えられることなく伸ばし放題だが、不思議と不潔な印象は無かった。

「音楽隊の登場だわ。楽しくなりそうね」

食事の時間帯は、必ずと言っていいほど音楽が鳴らされるのが最近の船旅である。食堂に溢れた船員たちから、一斉に歓迎のエールが飛んだ。喧噪に包まれていた食堂が、一瞬だけ静寂に支配される。息を整えるように深呼吸した音楽隊の男たちが、お互いに目配せする。

（すっげ……）

彼らが手にしていた楽器が歌い始める。同時に、食堂は今まで以上の盛り上がりを見せた。彼らが手にしている楽器は、骨を削ったものに糸を張っただけのギターだったり、空洞のタルに皮を張っただけの太鼓だったりと単純なものばかりなのに、なぜかそこから奏でられるメロディーには、魂を揺さぶる響きが込められていた。

「おもしろくなってきたー！！」

すぐ近くで不吉な声がした、と思ったら、レイとルナが手を取り合ってテーブルの上に登っていた。

「お、おい！！」

料理や酒が乗ったテーブルに土足で登ることはマナー違反だろうと思い、慌てて止めようとした瞬間、彼女たち二人が上半身の衣服を脱ぎ捨てた。

「ジョ……ジョーダンだ～ろ？」

隣にいるシヴァ、その向こうにいるフェンリルとリースも唖然と

した顔でテーブルの上の二人を眺めていた。レイとルナの豊かな胸を覆うのは、緩やかに巻き付けられた白い布だけだ。

「いいぞー！　レイー！　ルナー！　もっとやれー！！」

てっきりマナー違反で苦情を言われるかと思いきや、酒に酔った船員の男たちは二人のその姿を非常に歓迎していた。それに便乗した光宮がそう叫ぶと、まるでリクエストに応えるかのように二人が下半身を覆うスカートまで脱ぎ捨ててしまう。

「……！！」

目の前で、ほとんど剥き出しの尻が揺れた……。

「マジか～よ……」

「マジ、だな……」

言葉もなく二人の姿を見つめている中也たちに軽く笑った後、レイとルナはかき鳴らされるリズムに乗って長いテーブルを歩いていく。その途中、テーブルの上から酒の入ったグラスを船員の男の手から掠め取り、その中身を胸に向かって零した。

「……」

胸の谷間を汚し、腹を通って太股へと落ちて行く琥珀色の液体が、彼女たちの体を覆う唯一の布に染み込み、肌の色を透かしていく。

「とんでもねえ光景……」

「違いねえ～な……」

テーブルの上の二人に気付いた音楽隊のメンバーたちがお互いに目配せし合うのが見えた。無言の了解で、リズムが変わる。まるで、蛇使いが奏でるような音楽だ。

「な、何が始まるんだ……」

食堂を満たす甘美な音色に、レイとルナの体が揺らめく。そこかしらに灯されたカンテラの薄明かりのもと、二人の肉体が妖しく蠢き始めた。互いに指先を絡め合い、腰をくねらせながらゆっくりとテーブルに沈んで行ったかと思えば、まるで交わる蛇のような動きでゆっくりと立ち上がる。そして、弾かれたように離れた。

「え……」

中也の目の前にやって来たレイが、打ち鳴らされる太鼓の音に合わせて腰を動かし、揺らめく炎を真似た官能的なダンスを目の前で見せてくれた。酒をかぶって濡れた肌が淡い光を反射して艶(なま)めかしい。透ける布の向こうの素肌は言葉にできないほど官能的だった。

（た、大変なことが起きてる……）

腰を沈めたレイが両脚を素早く開いて閉じる。見えそうで見えないのが、また下半身を刺激した。

「ダンスうまいじゃん！」

テーブルの上で踊るレイに向かって、拍手混じりにフェンリルがそう言った。その声に、レイの瞳が悪戯な色を滲ませる。

「え？」

リズムに乗ったまま少しばかり移動したレイの手が、フェンリルの襟首を掴んだ。まさか、と思う間もなく、彼女はテーブルの上に彼を引っ張り上げた。

「ちょっと、マジ？」

苦笑いを浮かべながらも嫌がってはいないフェンリルの首に、悩ましげな仕草でレイが腕を絡める。その腰に、フェンリルの手が回された。

（や、やばいんじゃねえか……？）

中也の危惧を知ってか知らずか、彼女の手がゆっくりとフェンリルの体を滑って行く。まるで自分の体を撫でられているような錯覚に陥り、中也は慌てて視線を逸らした。

（だ、大丈夫かよ……）

見てはならない、と思いつつも、ついつい視線を向けてしまう。レイの手が、彼が来ていたシャツのボタンにかかり、それをひとつひとつ外していく。そこまではゆっくりとした動作だったのに、その肌からシャツを剥ぎ取る時はなぜかとても速かった。

「あ、兄貴……」

それを見たルナが、手近なところにいた男を一人、テーブルに引っ張り上げる。そしてやはり、その上半身を脱がせてしまった。鍛えら

れた体に這う細い指の動きは、見ている方の欲情を誘う。思わず息を呑んだ時、それに便乗した男女が数人、テーブルに上がった。

「な、何が始まるんだ……？」

「さあ～」

テーブルに上がった誰もが上半身を脱いだ時、音楽隊が奏でるリズムが変わる。それに気付いたテーブルの上の人間たちが、まるで計画していたかのように男女で分かれた。

（なんか、この音楽……ヒップホップに似てんな……）

故国で聞いていたそのメロディーに乗って、フェンリルを先頭にした男たちが体を動かす。そして、一拍置いて、女たちが全く同じ動きを真似して見せた。練習などしたわけではないのに、全員が全く同じ動きをしているのは驚きだった。

（カ、カッコいい～、フェンリルさん……）

よくよく見ていれば、フェンリル以外の男たちが微かに遅れている。

つまり、彼らは即興で彼を先頭にしたダンスを披露してくれているのである。

（すっげ～……）

レイとルナを先頭にした女たちが、挑発するような足取りで男たちに近づいていく。中にはズボンの中を覗き込んで歓声を上げている女もいた。そして、女たちが下がれば男たちが追いつめて行く。何度かそれを繰り返した後、今度は男女でペアになって左右が対称的なダンスを披露してくれた。

「兄貴……すげ～んじゃね～か……？」

「それは認める……」

船旅は、眠りにつくことを知らない……。

始動２２（後書き）

日付け変更してしまった！

更新が間に合わなかった……。ちょっとショックです……。

始動２３

「じゃあ、３番の人が５番の人のおっぱい揉んで」

光宮の嬉々とした命令に、リースが歓喜の表情で拳を握りしめ、ルナがやれやれ、という顔で溜め息を落とす。

「やったー！！　俺、３番だ、３番！！　５番は誰だ！？」

「あたしだよ」

要するに彼らは今、ヒマだった。

（いいなあ、リースさん……ルナの巨乳、タダで触れるんだから……）

昼下がり、自分たちに割り当てられた船室のうちの片方に集まった中也たちは「王様ゲーム」を高じていた。言い訳だが、そこに辿り着くまでにはいろいろなヒマ潰しをして来た。絵柄が違うだけでトランプとほとんど同じカード・ゲームをしてみたり、雑談に勤しんでみたり、イャンクック討伐のための作戦を練ってみたり……。様々な過程

を経て、最終的に王様ゲームになった。

（好きだよな、ホント）

こちらの世界に「王様ゲーム」というものが存在していたことも驚いたが、光宮たちがどうしてこんなにも「下ネタ」を求めるのか中也には理解不能である。しかし、内心ではちょっとした下心もあった。

（うまい具合に夏葉と絡めたら嬉しいな）

非常に高いリスクが付きまとうのを覚悟しさえすれば、このゲームはかなりオイシイと言える。

（次こそは、俺に来い！）

遠慮がちだが、ルナの巨乳を「合法的に」触っているリースを見ながら、中也は決して顔には出さずそう願った。

「いつまで触ってんのよ。次、行くわよ、つ～ぎ！」

そう言って、今回のターンで見事「王様」を引き当てた光宮が各自の手から割り箸サイズの木の棒を回収して行く。大きさと形、そして長さが一見して全く同じように仕上げられた8本の木の棒は、一方の

先端に「1」から「7」までの数字が書かれており、1本だけは赤い印が描かれている。その赤い印が付いた棒を引き当てた者が「王様」である。

「さあ、次はどうなるかしら～」

木の棒をシャッフルするのは「王様」の役目だ。そういうわけで、光宮が手の中で8本の棒を転がしてバラバラにした。

「さあ、どうぞ！　誰から行く？」

「じゃあ、あたしから行くよ」

手を挙げたのは、今回のターンで貧乏クジを引かされたルナだった。光宮が軽く笑いながらルナの前に手に握った木の棒の束を差し出せば、わざとらしく逡巡しながらルナが1本ほど引き抜いた。全員が引き終わるまで、自分も数字あるいは赤い印を見てはいけないというのがルールなので、ルナは引き抜いた棒の先をもう片方の手の中に握り込む。

「次は？」

「俺！　俺、行かして。一回もオイシイ思いしてないし」

「ど～ぞ」

こんなところでオイシイ思いをしなくても、プライベートで充分オイシイ思いができるだろう、と思わないでもなかったが、王様である光宮は反論せずにフェンリルに向かって棒の束を差し出した。

「さあ、次は？」

フェンリルが引き終わった後、レイ、シヴァ、リース、中也、そして夏葉の順番で棒を引いていく。最後に残った1本は必然的に光宮のものだ。

「今回の王様は誰？」

「あたしだぜ！」

光宮の問いかけに、これ以上ないほど幸せな顔をしたレイが両手を高々と掲げながら立ち上がった。

「じゃあ、さっそく！　3番のヤツが7番のヤツにキス！　3番と7番、誰だ？」

「俺、7番」

自分が引いた棒には「7」という文字が書き込まれている。これはチャンスだ。中也の頭の中に、開花寸前の花が宿った。ただ問題は3番が誰かということである。

「3番、俺だわ……」

この世の絶望を一身に背負ったようなリースの声に、中也の視界に幕が下りた。頭の中の花は咲くことなく枯れていった。最悪の展開である。世の中、そうそう思い通りになるはずはなかった……。

「いやぁ～！　萌えない～！　見たくない～！」

この展開に、光宮たちが絶叫しながら拒絶している。言いだしっぺのレイまでもが「イヤだ」とか「見たくない」という言葉を繰り返していた。

「……」

王様の言葉には決して逆らえないのがこのゲームのルールである。しかしながら中也の頭は現実を理解することを頑なに拒否し、思考

回路が完全に停止している。ついでに、それに釣られて体の方もありとあらゆる動きを止めているらしい。自律神経でさえも、仕事を放棄したのではないかと思うような時間だった。

「イヤ！　マジでイヤ！　止めて！　見たくない！　脳が汚れる！」

この展開に固まっている中也とリースに向かって、光宮が非常にありがたいような、腹が立つようなセリフを口にする。

「本気で止めましょう！　もういいじゃない！　ねえ！？」

そんなに見たくないのか、と聞きたくなったが、それでもリースとキスするよりはマシだ。

「うん、そうして欲しい」

ようやく活動を再開した脳と体の中で、中也は真っ先に口を動かし、そう言った。

「確かに。やり過ぎちゃいけないってのがあるとネタに困るね、このゲーム」

「でしょう！？　そうでしょ！？　もう止めましょう！　美少年か

美青年同士のキス・シーンなら見たいけど！　それ以外は本気でカンベンだわ！」

中也を後押ししてくれたのはフェンリルで、その意見に光宮がこぞとばかりに酷いセリフを並べ立てる。一同の間に「終了」という空気が流れ始めたのを合図に、それぞれが手に持っていた木の棒を座っているベッドの上に放り投げた。「王様ゲーム」は終了である。

（助かった……）

心の底から安堵しながら、中也は全身の力を抜いて大きく息をついた。ベッドが４つあるだけの狭く簡素な空間に、開け放された窓から吹き込む海の風が流れ込んでくる。

（ああ、よかった）

夏の海、そこを満たす空気は清々しい。なんだか、頭の中を洗われていくような気分だった。

「レイと光のキス・シーンまでは良かったのに。リースと中也じゃ

ちょっと見たくないよな」

ようやく頭の中がリセットしたと思った瞬間、フェンリルの陽気な声がつい先ほどの出来事を思い出させてくれた。

「そうよ、その通り！　ヒマなんだから、すぐにネタが尽きるようなゲームはダメよ」

つい5分前までは誰よりも乗り気だったくせに、もう王様ゲームに向けて反旗を翻す気になったらしい光宮が意気込んでそう言っていた。その身勝手さには、今更だが溜め息が出る。

「あ～あ。でもつまんないの」

真っ白なシーツがかけられたベッドの上に両手をついて、フェンリルが天井を見上げながらそう呟く。

「何バカなこと言ってんだ～よ、兄貴。夕べさんざんオイシイ思いしたじゃねえか～よ」

昨夜の食堂での件を持ち出してきたシヴァに、フェンリルはその綺麗な顔立ちに悪戯な笑みを乗せた。

「まあね～。でもさ、せっかく王様ゲームするなら狙ってる子と絡みたいなあ～って思っててさ」

「は～あ？」

何を言い出したのか、と全員の視線がフェンリルに集中する。

「どうせなら光とチューしたかったなって思って」

「は？」

世間話でもするように、フェンリルはあっさりそう言った。一方、彼に名前を出された光宮は、まるで火山で生きるドドブランゴを見たような表情になる。

「可愛いじゃん、光」

一瞬の静寂が訪れた後、途端に中也と夏葉以外のメンバーたちが一斉に歓声を上げた。

「新しいネタが来たじゃねえか！　お前ら隣に並べよ、ほら！」

自分とキスしなければならない、と言われた時のあの絶望に満ちた表情からはとても想像がつかないほど生き生きとした顔で、リー

スが場所を譲る。一人分空いたフェンリルの横のスペースに、レイとルナから背中を押された光宮が強引に押し込められた。

「ちょっと、待ってよ！　私は何も言ってないわよ！」

「いいじゃん、別に」

気のせいか白い顔を赤くしている光宮の肩に、フェンリルが慣れ慣れしく腕を回す。弾かれたように、光宮がその手を払い落した。

「止めてよね！　私は他人の恋愛を傍観するのが好きなの！　自分が傍観されるのは死んでもイヤよ！」

「まあまあ、そう言わずに、お姫様」

「イヤよ！　ジョーダンじゃないわ！」

てっきり光宮のことだから喜んでその話に乗るかと思っていたのだが、意外なことに彼女は激しく拒絶してフェンリルの傍から抜け出した。

「あ～あ、フラれちゃった。残念」

残念そうには見えない顔で、フェンリルはただ笑っている。

「何でよ、光。もったいないじゃん」

「そうそう。性格はどうだが知らねえけど見た目だけはイイ男じゃん、この人」

夏葉の傍で息を荒くしている光宮に、レイとルナが意外そうにそう問いかける。

「さっきも言ったでしょ！？　私は他人の恋愛を傍観するのが好きなの！　当事者にはなりたくないわ！」

どういう理屈だろうか。光宮の口から出る言葉は中也の理解を超えていた。しかし……。

「べ、別に照れてるワケじゃないからね！」

顔を赤くしたまま、あらぬ方向に向かってそう言った光宮に、中也は衝撃を受けた。

（こいつ……ツンデレ系だったのか……！！）

ただの下ネタ・プリンセスでは無かったらしい。光宮の形容詞に、「ツンデレ系」という新たな接頭句が追加された。

（意外……でもないか、な……？）

気付いてみれば、そんな風に見えないこともない。そう思うと、何だか光宮に対する見方が僅かに変わった。

「何よ！？　悪い！？　そりゃあ少しは嬉しいわよ！　私だって女の子だもの！　いい男のタネは欲しいわよ！」

なぜそこで一足飛びに「タネ」になるのか、やはり中也にとってはナゾだった……。

始動２４

「う、わっ！　くっせ！」

古びた階段を途中まで降りたあたりで、シヴァが手で口元を覆いながらそう呟いた。

「ここは……止めようか」

「だ～な。戻ろうぜ」

中也とシヴァがいるのは、船の最も下……いわゆる汚水槽あるいはビルジと呼ばれる空間の近くだった。

「さっすが！　話には聞いてたけどビルジの臭いは半端ないな」

「どこで聞いたんだか知らねえけど、そうだ～な」

ガレオン船は言わずと知れた木造船だ。そのため、海水に接する部分から、じわじわと浸水してくる。そういった海水や生活排水を一時的に溜めておくための場所がビルジで、普通は港に停泊している時に溜めておいた水を排水する。いわゆる“ビルジ浚い”という作業だが、これはもう罰ゲームに近いものだ

と言っても過言ではない。

「ビルジの中ってアレだ～ろ？　ネズミとかゴキブリの死体とかがウヨウヨしてんだ～ろ？」

「ただの死体じゃねえよ。ビルジの中にはハエがいるから、たいていプカプカ浮いてる死体にはウジが湧いてるらしい」

「うっげ～！　寒気がした～ぞ！」

ネズミは黒死病（ペスト）を媒介する。驚いたことに、こちらの世界でも２０年以上も前にそういった医学の知識が広められていた。

だからこそ、いったん伝染病が流行れば逃げ場がない船の上で大半の時間を過ごす船乗りたちはネズミを退治するためにありとあらゆる方法を駆使してきた。だが、害獣と人間の戦いは言ってしまえばイタチごっこのようなものであり、人間があの手この手でワナを仕掛けても、ネズミやゴキブリはどこからともなく入ってくる。

（ネズミ捕りに、毒入り団子に、燻浄に……。でも一番、効果

があったのはネコを飼うことだけだったって話だな）

ついでにゴキブリに関しては、毒入り団子、ネンチャク草で作られたゴキブリ・ホイホイなどが開発されたようだが、こちらの世界でのゴキブリ退治については、スリッパや丸めた雑誌などによる直接打撃法が最も効果的であるとされている。

「デッキとか食堂とかすんげ～綺麗にしてあるから全然、気にしてなかった～ぜ」

「そりゃそうだって。伝染病を流行らせないためには清潔にしておくのが一番なんだぜ？　船員の人たちがいっつもデッキを掃除してたろ？　見てないのか？」

「見てねえ～よ」

「そうかよ」

ビルジの上はかつては鉄格子があったと思われる場所だった。今でこそその痕跡が残っているだけで実際に鉄格子は見れないが、現実にここで監禁されていた者が過去にいたのだと思うと

何となく無気味な気分になった。

「なんつ～か、無気味だ～な。海の下にいるってのも」

「まあな……」

窓が無いので分からないが、中也とシヴァが立つ場所は実際、海面よりも下である。照明はシヴァが手に持つたった一つのランタンだけで、ここには最低限の照明も置かれていない。普段人が来ない場所だから、というのもあるが、ビルジに最も近いこの場所は航海が長引くに連れて浸水する可能性が高い場所だ。そのため、床には浸水を防ぐためのタールが塗られている。人気の無い場所でタールに火が燃え広がれば、船に乗る人間に逃げ場は無い。そして同時に助けも来ない。

（船乗りは伝染病と火災を何より恐れる）

かつては火災を恐れるあまり、せっかく備え付けの竈（かまど）があるにも関わらず、滅多なことで火を入れることは無かったらしい。

2週間以上も続く航海の毎度の食事に並ぶのは、塩漬けにした

肉や魚、ビスケットのように固いパン、ドライフルーツに家畜の乳か、あるいはエールやワインだけだったという話だ。

（気分が悪くなりそう……）

だが最近はキッチンの壁や床に、リオレウスやリオレイア、あるいはグラビモスといった「火に強い」属性を持つモンスターの外殻を張り巡らせている船が多い。そのおかげで、長い航海の間でも食事が楽しめるのである。

（まあ、当然だな）

今までは、その話を聞いても特に何も思わなかった。そうなのか、と納得する程度の話だ。だが、すでに名前と顔を忘れてしまっている技術開発部の部長の話を聞いた後では、それが当然のことのように思えた。

（どんなに大型のモンスターを倒しても、１頭の死体から作れる武器は１つだけだ。だとしたら、どう考えても素材が余る）

ハンターたちに狩られたモンスターの死体は、こういったと

ころで役に立っているわけだ。

（……ウロコ1枚、毛1本ムダにしない。倒した獲物の体は最後まで使い切る、か。まあ、理解できる話だよな）

モンスターの肉を食することはできないが、こうして死体をムダにしない工夫がされ、結果的に人間の生活は豊かになっている。それが犠牲になった獲物に対する鎮魂、あるいは自然に対する感謝の表明である……とまでは断言できないが、フィールドに死体を打ち捨てるよりは共感できる気がした。

「なあシヴァ」

「な～んだ～？」

「そう言えばさ、フィールドでハンターがモンスターを倒したら、その死体を運搬してくれる業者？　そんな感じの人がいるんだろ？　もう会ったか？」

「はあ～？　そんなヤツ知らね～ぞ」

「俺も知らねえ」

クエストは４人態勢が基本だと聞いた。しかしどう考えても大型モンスターの死体を４人で運搬することなどできない。話に聞くところによれば専門の業者が同行するということだったが、未だ中也はその業者に会ったことは無かった。

「船員の人たちじゃねえの～か？」

「船員？」

「だって俺らがクエストしてる時、船員の人たちはヒマだ～ろ？人数的にもそれくらいいたら運べる～ぜ」

「ああ……なるほど」

ガレオン船の船員は全部で３００名近い。だとしたら、納得できない話ではない気がした。

「ふぃ～！　家畜の臭いもビルジの臭いに比べればマシだ～ぞ」

「確かに」

暗い船底から階段を上がって来れば、ヤギや牛などが縄で繋がれ、自分たち以上にヒマそうな顔でエサを食べている。体臭

と汚物、そして干し草の臭いが入り混じって何とも言えない絶妙な臭いを作り上げているが、生き物の臭いである分、ビルジよりはマシだと思えるから不思議である。

「それにしても、なっちゃんはホントに昼寝好きだ～な」

「え？」

いきなり夏葉の名前を出されて、中也は思わず胸が高鳴った。

「顔が見えないな～って思ったらいっつも昼寝じゃねえか～よ」

「ああ……」

中也の態度が僅かながら変わったのには気付かないフリをしてくれたらしいシヴァが、言葉を続ける。

「あんなに寝てばっかで大丈夫なのか～な」

「さあ……」

言われてみればその通りだ、と中也は今更のように思った。

軍学校にいる時も、気が付けば机に突っ伏して眠っていることも多かった。それに、船に乗ってからは本当に昼寝してばかり

だ。

「夏葉が起きてる時って、光たちと一緒に話してる時かメシの時だけだよな……」

「そうそう～」

家畜が飼われている階の上は、船員たちの寝床になっていた。当然だが、ガレオン船は自動操縦ではない。昼間でも夜中でも、人の手が無ければ動かない。そのため、船乗りたちはシフトを組んで交代で仕事に当たるのだ。壁に吊るされたハンモックのような布や、床の上に直接しかれた布の上では激しくイビキをかきながら男たちが眠っている。起こさないように、ここだけはそっと足音を忍ばせて通り過ぎた。

「うう～、ひっで～臭い。なあ、外に出よ～ぜ」

「ああ」

航海中は風呂に入れない。ましてや真夏のこととともなれば、仕事を終えた１００人近い男たちが身を寄せ合って眠る部屋は

大変な臭いで満たされている。家畜がいた部屋と似たようなものだ。

（仕方ないことだけど……）

分かってはいるが、男の激しい汗の臭いはあまり嗅いでいたいとは思わない。二人は早々に船室を出ることにした。

「ああ～、清々しい～！！」

デッキに出ると、潮を含んだ夏の海の風が全身を撫でていく。それまで薄暗い船内にいたせいか、真上から照りつける真夏の太陽がやたら眩しく感じた。

「……今日で何日目だっけ～か」

「7日目。ちょうど半分くらいじゃないかな」

「まだ半分か～よ」

舷側に寄りかかりながら、シヴァが大きく溜め息を落とした。気持ちは分かる。最初のうちこそ、景色に感動したり船の中を探検したり、雑談で盛り上がったりしていたものだが、景色と

言っても海は海水しかないし、探検と言っても数時間あれば終わるし、雑談のネタも下ネタに変わる。要するに、船員たちは別だが、ただ乗っていれば目的地に着く中也たちは限りなくヒマなのだ。

「光の真似して本でも持ち込めばよかったかな」

「こんなところで勉強なんてすんな～よ、中也」

「勉強じゃないさ。ヒマつぶしだよ。それが点数に繋がるだけで」

「あっそうか～い」

やる気の無い顔でシヴァが呟いた時のことだった。ふいに船員たちの表情が変わった。

「なんだ～？」

「さあ」

シヴァも気付いたらしい。二人してポカンとしていると、舵を握るキャプテンがデッキに向かって歩みを進め、相変わらず

の大声を張り上げて来た。

「ランズ・エンドだ！！　針路を北へ取れ！！　面舵だ！！」

その声に、船員たちが一斉に掛け声を上げて答える。

（ランズ・エンド……）

それはつまり、人の世界の終焉を意味していた。船の向きが変わる。それまでずっと西へ向かって進んでいた船が、北へ向けてゆっくりと回頭した。

「いよいよモンスターの世界だ～な」

「そうだな」

舷側の向こうには雪と氷の大山脈フラヒヤ山脈が見え隠れしていた。身が引き締まる思いで、２人はゆっくりと遠ざかっていくフラヒヤ山脈を見つめる。

「ドドブランゴ見えねえか～な」

「ここから見えたらドドブランゴが老山龍クラスのデカさってことになるぜ？　戦いたくねえよ、そんなの」

「……ジョーダンだって。本気にすんな～よ」

始動２４（後書き）

明日からクエスト始まります！

始動25

紺碧の海の向こう側に、白い砂浜が見えた。その奥には、鬱蒼とした木々が生い茂るジャングルのような森が広がっている。森のすぐ後ろには、無数のツタで覆われた断崖があった。

（あそこから落ちたら死ぬな……）

そんなことを呑気に考えていると、どこからともなくシヴァがやって来て隣に並ぶ。

「ようやく到着だ～な」

「みたいだな……」

船上から見る密林はとても静かで、時折、吹き抜ける風に木の葉が揺れている。密生した木々の狭間にモンスターがいると分かっているからこそ気が引き締まるが、一見してそこはまるでリゾートのような雰囲気を醸し出していた。

（イャンクック、か……）

図鑑で確認したその姿を頭の中に思い浮かべつつ、中也は何と

も言えない気持ちで密林を見つめる。

（また……フィールドに戻ってきたのか、俺たち）

モンスターの世界が目の前に迫り、今更のようにそんなことを思った。

「いよいよだな、クエスト」

「そうだ～な」

3か月前はただ逃げるだけだった。だが、今回はモンスターと戦わなければならない。ここへ来て、改めてそれを自覚する。自然と、舷側を握る手に力がこもった。

（できるのかな、俺に……）

リースがいる。ルナも、夏葉も。一人ではないから、何とかなると思う反面、自分が大剣を振り上げ、大型モンスターの体表に刃を食い込ませる姿というのがいまいち想像できなかった。

（怖い、な……）

モンスターとは言え、相手は生きている。生き物に対して、意

図的に刃を向けなければならないと思うと、それだけで体が無意識に緊張した。

（肉はスーパーでパック詰めにされて売られてたんだ。テーブルの上に並んでる家畜が殺されるところさえ……俺は見たことがない）

中也にとって日常の光景とは、いい意味でも悪い意味でも「死」とはかけ離れていた。けれど今は、自分の手で生き物を殺さなければならない状況にある。

（食べるため、生きていくためじゃない……）

日々の糧を得るためではなく、生き物を傷付け、殺す。そう考えると、自分がとんでもない悪人になったような気がする。

（人間ってホントにエゴの固まりだな）

けれど、なんだかんだ考えたところで、将兄の命令には逆らえないのだ。イヤだとか怖いだとか、そんな風に思っていても結局は言われた通り大剣を手にボーン・シリーズを纏い、イャンクッ

クに刃を向けるであろう自分を知っている。

（……俺ってホント、ダメだな）

そう思って、中也は舷側に凭れかかり、溜め息を落とした。

「錨を降ろせー！！」

中也がぼんやりとどうしようもないことを考えているうちにも、船はどんどん密林へと近づいていく。船底が波の下の砂を擦る音がした。同時に、キャプテンの号令がかけられ船員たちが慌ただしく錨を降ろし始める。

「今回、俺とお前は別チームだ～な」

「ああ、それが？」

舷側から僅かに身を乗り出してみると、澄んだ水色の海水の下に真っ白な砂が透けて見えた。小さな魚が群れをなし、泳ぎ去っていく様子も見える。綺麗な海だった。

「死ぬな～よ」

「死ぬかよ」

いきなり縁起でもないことを言い出したシヴァに思わず眉を顰めてその顔を見ると、彼は独特の笑みを作る。

「まあ、一応そういう大事なことは言っとかないと～な。ほら、行こ～ぜ。兄貴とリースさんが待ってるかもしれね～ぞ」

「ああ……」

なんなんだ、と思いつつもシヴァの背を追いかけ船室に向かう。昼間でもランタンに火を入れられた廊下を通り、自分たちに割り当てられた部屋へと戻って来た。

「遅かったな。出発するぞ。金だけは持って行けよ。あとはここに置いといて構わねえ」

「は～いよ」

船室にはリースとフェンリルの姿がある。ギルド・ナイトの二人が揃って何の会話をしていたのだろうかと気にならないことはないが、とりあえず中也は何も言わずに頷いた。皮で作られたサイフはいつも持ち歩いている。着替えなどは置いたままで大丈夫

だと言われれば、持っていくものは特にない。

「おし、おぼっちゃん。お前のチームのことは任せたぞ。ここからは別行動だ」

「りょ～か～い。と、言うワケで！　シヴァ、行こうぜ～」

「お、おう……」

緊張感のカケラもないフェンリルがシヴァを連れて船室を出て行き、狭い船室は中也とリースだけになった。

「リースさん、光たちは？」

「光とレイはフェンリルのチームだ。おぼっちゃんがどんな作戦立ててんのかは知らねえが、あっちはあっちで勝手にやる。俺らはとりあえずここで最終的な作戦会議だ。フェンリルが呼んできてくれるはずだから、待ってればルナと夏葉が来る」

「そうですか」

そういう風に話が進んでいるのか、と少しばかり感心した中也は、言われた通り二人を待つことにする。ドアの脇に突っ立って

いるのも不自然だったので、いちばん近くに置いてあるベッドに腰かけた。

「あの、リースさんってフェンリルさんと知り合いだったんですか？」

会話が無い雰囲気を気まずく感じて、中也はとりあえず頭に浮かんだ疑問を口にした。地図らしきものを手に眉間にシワを寄せていたリースがその質問に顔を上げる。

「知り合いって言うんかな。3回ほど一緒にクエストに出たことがあるんだよ。その程度だ。別に私生活で飲みに出たりとか、そういう付き合いじゃあねえな」

「へえ……。えっと、やっぱりフェンリルさんって強いですか？」

期待を込めてそう聞くと、珍しくリースが考え込むような仕草を見せた。

「俺が知ってるフェンリルさんは、メチャクチャ強い人でしたけど……」

「う～ん……悩むな……。実はギルド・ナイトでしたって話を聞いた後だと……ナットクするような気がしないでもない気がするんだが……う～ん……。俺から見たあいつの第一印象は……そうだなあ～……う～ん……なんなんだ、このとんでもねえ、おぼっちゃんは!?　ってところだなあ……。まあ、ギルド・ナイトってことが分かってからは……そうだな、掴みどころがない、とでも言うのかな……」

ひたすら曖昧なリースの返答に、中也の方が頭を抱える。

「掴みどころがないってどういうことですか？」

「何て言えばいいんだか……正直、初めておぼっちゃんと一緒にクエストに出た時は、ひたすらメンバーの足を引っ張りまくるザコだとしか思わなかったんだわ。なのに防具は全塗装したティガレックスだったり、な。ただ、今思えばワザとやってたのか、とか思うんだな……」

「ワザと？」

「そうさ。それによ、あいつ普段はスゲー気のいい兄ちゃんじゃねえか。だけどたまに……いや、何でもない」

言いかけた言葉をリースは飲み込んだ。言いかけて止められると非常に気になる。

「最後まで言ってくださいよ。別に驚かないから」

「……いや、悪い。俺の思い込みっていうか、勝手な印象かもしれねえんだ……」

中也が無言で先を促すと、リースが軽く息をついて言葉を続けた。

「たまに、怖いと思うことがある」

「怖い？　フェンリルさんが？」

「そう。信じられねえだろ？　だけど、たまーに思うんだ。あいつは、何か恐ろしいなってな」

「へえ……」

中也自身、フェンリルに対してそんな風に思ったことはないの

でいまいちよく分からない。

「それで、掴みどころがない、ですか？」

「そういうことだ。ところで、夏葉とルナはまだか？」

待てど暮らせどやって来ない二人のことを持ち出され、その話はそこで誤魔化されてしまった。

「あのおぼっちゃん……もしかしなくても呼んで来てくれって伝えたの、忘れてやがるな」

「フェンリルさんなら、あり得ますね……」

「中也、お前ちょっと呼んで来い。いつまでたっても帰れねえぞ」

「あ、はい」

リースに言われて、中也はベッドから立ち上がり、隣の船室へと向かった。一応、軽くノックして声をかけると、中から不機嫌そうな顔をしたルナが出て来た。

「作戦会議やるから来いって」

とりあえず要件を切り出せば、ルナが驚いたような表情を浮か

べる。

「こっちの部屋でやるんじゃないの？」

「誰がそんなこと言ったんだよ」

「フェンリルさん」

どうやら話が間違って伝わったらしい。中也とルナは、顔を見合わせて苦笑いしていた。さすがフェンリル、とおかしなところで納得しながら、中也は夏葉の姿が見えないことを不思議に思った。

「夏葉は？」

「寝てるよ」

彼女が指差した先には、ドアの脇のベッドで寝ている夏葉がいた。死角になっていたので、見えなかった。

「……リースさんが待ってるから、連れて来てくれ。荷物は金だけ自分で持って、あとの着替えとかはそのままでいいって」

「分かったよ」

フィールドに到着したというのに昼寝の真っ最中である夏葉に感心するような呆れるような、何とも言えない感情を抱きつつ、中也は女の子たちの船室を後にした……。

始動25（後書き）

明日は……（一応）ヒロイン光宮の受難です（笑）

始動２６

足元を撫でて行く冷たい海水が心地よい。打ち寄せる白波と、旋律を奏でる鳥の囀りだけが鼓膜を刺激していた。波に磨かれた白い砂と砕け散った貝殻で満ちた海岸は、どこまでも静かに佇んでいる。

「はい、どうぞ」

見上げた空はどこまでも突き抜けるように青く、それは雲ひとつ孕むことなく、モンスターの世界に足を踏み入れた人間を見下ろしていた。

「……」

条件反射で、光宮はフェンリルから渡された小汚い布を広げ、顔を顰める。

「何なのよ、コレは」

「何って地図でしょ？　見たら分かるじゃん」

「初めてコレを見て地図だと分かる人はスゴイわね。子供のオ

ネショの方がよほど芸術的だわ」

「？」

我ながら素晴らしい嫌味だと思ったのだが、隣に並んで浅瀬を歩くフェンリルはひたすら分からないという顔をしているだけだった。嫌味とは、通じなければ意味がない。彼女は内心で重い溜め息を落とした。

「……等高線も無い。地図記号も無い。説明も無い。方角さえ分からない。ナイナイ尽くしで、おまけに全部同じ色のインクで書いてあるからどこがどんな地形なのかサッパリなのよ。あんたコレ見て分かるの？」

茶色いインクで描かれた“固まり”と“線”を見ながらそう言えば、フェンリルが困ったように笑う。

「仕方ないって。それ、１０年前の地図だもん」

「は？」

「最新の地図、持って来ようと思ってたんだけど忘れた」

「……」

こいつ、と、心の底からフツフツと火山地帯のマグマのように怒りが湧き上がるのを感じる。しかし、ここは敢えて我慢した。

（クエストはチームの連帯が大事なんだわ。こういう場合は怒るより、むしろフォローよ）

そう考えて、光宮は喉まで出かかった文句を飲み込むことにする。

「まあ、何とかなるわ。無いよりはマシよ。それに、あんた密林は初めてじゃないんでしょ？」

「一応2回目だけど？」

「だったら平気ね。だいたい地形は覚えてるでしょ？　どこがどんな風になってるのか教えてちょうだい」

「う～ん……」

努めて明るく言いながら、彼女は羽根ペンとインクを腰に下

げたポーチの中から取り出した。地図はギルドからの支給品なのだろうが関係ない。最低限の情報は書き込ませてもらうつもりだ。それに、その方が後にこの地図を使うハンターたちも助かる。

「この前ここに来た時、かなり酔っぱらってたからな～。サマーソルトしてるレイアくらいしか覚えてないわ～」

「……」

思わず、手の中の羽根ペンを強く握りしめてしまっていた。

地形などの情報を全く覚えていないというだけでなく、酔っぱらってクエストに出たなど、バカにしているとしか思えなかった。

（こいつ……！）

つまり、地図はほとんど役に立たないと言っても過言ではないわけだ。

「兄貴、レイアと戦ったのか～よ」

彼女の憤りなど素知らぬ顔で、シヴァが相変わらず呑気な口調で、そんなことを問いかける。

「まあね～」

「どうだった～んだ？　やっぱ強かった～か？」

「どうだろ。とりあえず一緒に付いて行ったのはいいけど、限界すっ飛ばして酒飲んでたから目は回るわ、足元はフラつくわ、呂律は回らないわで他のメンバーたちにキャンプまで強制送還されてさ。そんで寝てる間に他のメンバーが倒してたから知らねえ」

「ダメダメじゃねえか～よ」

「違いない」

こいつはアテにならない。シヴァとフェンリル兄弟の会話を聞きながら、光宮ははっきりとそう思った。

（実質的なメンバーは私とレイとシヴァの3人だわ。私の武器はライト・ボウガンだから援護射撃をしつつ、後ろから戦況を

見て指示を出すとして……。レイとシヴァの2人には前線でイャンクックにひたすら攻撃してもらしかないけど……）

どうすればケガ無く帰れるだろう。普通に考えれば、大型のモンスター相手に接近戦を挑むなど自殺行為でしかない。イャンクックはそこまででもないが、リオレウスやリオレイアなどの飛竜種が相手であれば、足で踏み潰されただけでも人間は大変なケガを負うことになる。

（できれば、接近戦は避けた方が無難だわ）

2人とも、そこそこランスとハンマーという武器を使えるとは言え、危険は少ないに越したことはない。

（どうすればなるべく2人をクックに近寄らせずに倒すことができるかしら……）

シヴァもレイもどちらかと言わなくても血の気が多い性格だ。イャンクックを前にして危ないから離れていろ、と言ったところで納得する性格ではない。

（こいつに押し付けようかしら……）

それまで全く戦力外として扱っていたフェンリルに視線を向け、光宮はそう思った。

（ギルド・ナイトが戦うところ見てみたいって言えば、もしかして2人も納得するんじゃないかしら。シヴァは典型的な“お兄ちゃん大好きっ子”みたいだし、レイだってこいつのことは気に入ってるわ。カッコいいフェンリルが戦うところを見てみたい、とか言えば、ノッてくるんじゃないかしら）

そしてフェンリルが「1人で」戦い、イャンクックがある程度、弱ったところで自分たちが参戦し、トドメを刺す。

（一番、無難な計画だわ）

フェンリルの実力がどの程度なのか知らないが、自分たちがケガをするリスクはそれで大幅に回避される。全く問題ない。

（それで行こう！）

そう決めた。

「じゃあ、とりあえず支給品の説明するね～」

光宮が考えていることなど全く知らないフェンリルは、浅瀬から海岸に上がったところで抱えていた木箱を砂浜に降ろした。箱はどういうわけか水色に塗られ、キチンと錠までかけられている。

「これが応急薬で～、これが携帯食料で～、これが落とし穴を隠すネットで～、これは落とし穴を掘る道具かな」

応急薬はいわゆる化膿止めの薬である。モンスターに付けられた傷は油断できないため、どんな些細なケガでも必ずこういった薬を服用することが決まりだと聞いた。アルテリアの医療研究の賜物である。

（落とし穴を仕掛けられるんならラクだわ。使わない手はないわね）

相手が動けなくなったところで、こちら側としては思う存分攻撃を加えられるのだ。メインの攻撃はフェンリルに押し付け

るという計画に変更はないが、うまくイャンクックを落とし穴に誘導できれば、シヴァとレイがケガを負う危険性を減らしつつ、本人たちの気が済むまで攻撃させてやることができる。

「あ、それから船の中に将兄からのサービスで大タル爆弾が４つほどあるよ～」

「意外と気前がいいじゃねえかよ」

感心したような驚いたような口調で率直な感想を口にするレイを横目に見ながら、光宮は心を決めていた。

「ねえ、あんた」

頭の中でざっと計画を練り上げ、彼女は改めてフェンリルの方を見上げる。

（ホント、見た目だけはいいわね、こいつ）

初めて見た時から思っていたことだが、降り注ぐ午後の陽光を浴びて立つフェンリルはどこからどう見ても「いい男」である。船の中で「可愛い」と言って貰えたことは正直ちょっと嬉

しかった。

（突っぱねるんじゃなかったかしら）

今更そんなどうでもいいことを思い出し、彼女は軽く息をついて、思考を切り替えた。

「一応、聞いておくけど、今回のクエストで何か計画とか立ててあるの？　船の中でリースは中也たちに作戦を話してたけど、あんたからは何も聞いてないわ」

「計画？　そんなモンあるわけないじゃん」

期待と予想を全く裏切らない答えがあっさりと返って来て、光宮は何とも言えない苦笑いを浮かべる。

「あっそう。ならいいわ。あたしたちで勝手に動いても、あんたは文句を言わないのよね？」

「言わない、言わない。好きにしていいよ。俺は見てるだけだから。手も口も出さないよ」

「けっこうだわ」

本人の了解を得たところで、光宮はシヴァとレイの方に向き直った。

「悪いけど、最初に提案させてもらうわ。私は、落とし穴を仕掛けて、大タル爆弾で爆破するっていう作戦を立てたいの。どうかしら」

手持無沙汰に佇むシヴァとレイが、互いの顔を見合せながら曖昧に頷く。

「ケガは少ないに越したことはないのよ。より安全にモンスターを倒せるなら、そうするべきだと思うの。分かってると思うけど、ただ逃げれば良かったあの時とは違うわ」

「俺に反対する理由はねえ～ぞ」

「あたしも。だけどせっかくここまで来たんだからクックをブン殴って帰りてえって気持ちはあるな」

「分かってるわよ、レイ。だけど我武者羅にクックをブン殴りに行っても、自分がケガする確立が高くなるだけよ。思い切り

ブン殴るためには、やっぱり相手の動きをある程度、止めておく必要があるわ」

「……まあね」

納得したようなので、光宮は言葉を続ける。

「まずは落とし穴を仕掛ける。そしてクックが落ちたところで爆弾を起爆する。そしてそのあと、正面からレイがハンマーでブン殴る。シヴァは後ろからランスで突く。あたしは援護するわ」

太刀だの大剣だの、そういった武器を使うメンバーがいないことが残念だった。落とし穴に落ちたクックの羽根を斬ってしまえれば、二度とクックは飛び上がることができない。だが、それは考えても仕方がない。

「いいんじゃねえ～か？」

「いいと思うよ」

あっさり頷くところを見ると、おそらく2人は作戦だの計画

だの、そういったことは何も考えていなかったということが窺える。呆れる気持ちもあるが、とりあえず何だかんだと議論だけが白熱して話が前に進まないよりはマシだという気がした。

「じゃあ、そういう方向で進めましょう。まずは、どこに仕掛けるかが問題よね」

言いながら、手元の地図に視線を落とす。しかし、食い入るように見詰めたところでそこから有力な情報は読み取れなかった。

「自分の足で探して回るしかないようね。どちらにしろ、ザコモンスターの動向も気になるわ。防具を付けて。さっさと終わらせるわよ」

「りょ～か～い！」

「りょーかい！」

シヴァとレイが頷き、傍に降ろした木箱の中から持ち込んだボーン・シリーズの防具を纏い始める。光宮も、それに倣った。

始動２６（後書き）

光宮の受難は……始まったばかりでございます（笑）

始動27

「お、俺……この臭い、ダメ～……！！」

防具を纏い、それぞれの武器を手に持った光宮たちは、とりあえず左回りにエリアの散策を開始することにした。彼女たちが乗って来た船が停泊している海岸はベース・キャンプと呼ばれ、モンスターが嫌う臭いを放つ木を燃やして最低限の安全策が講じてある。そこから左回りに進めば、迫り来る断崖と紺碧の海の狭間に狭いながらも海岸がある。そこを通り過ぎると、木々が鬱蒼と茂る場所が現れた。

「ちょっと、あんた！　何なのよ、いきなり！？」

木の葉が腐ってできた腐葉土には雑草が根を伸ばし、海へ近付くに連れて腐葉土の代わりに足を絡め取る白い砂が広がる。そんな風景の中、のんびりと木の根元に鼻づらを突っ込んで何かを一心不乱に漁っている数頭のモンスターの姿があった。

「いや……マジでいや……ムリ……ホントにムリ……。どうに

かして……」

モンスターの背丈は人間と同じくらいだろうか。彼らは見渡す限り緑色の世界の中、やたら目立つ桃色の毛皮を全身に纏い、何とも言えない体臭を放っている。モンスターの名はコンガ。別名は桃毛獣と呼ばれているが、そのコンガたちを見るなり、フェンリルが顔色を変えた。

「何なのよ、もう！？」

コンガとはなるべく戦いたくない。今はまだ偵察をしてるだけだ。気付かれずに、地図で言うところの別エリアへ移動してしまおうと思っていたのに、口元を押さえて前屈みになるフェンリルの足が進まなくなってしまっていた。

「あいつらどうにかして……。吐きそう……。この臭い、ホントに苦手……もうムリ……吐く……」

前屈みのまま、ヨロヨロしながら海の方へ歩み寄って行くフェンリルを見て、光宮の頭の中で何かが弾けた。

「あんたは悪阻、真っ最中の妊婦かー！？」

「……俺、男だから妊娠はムリだよ？」

「そういう意味じゃない！！　とにかくもう、黙っててて！！」

つい見境なく大声を上げてしまったせいで、木々の狭間にたむろしていたコンガたちが一斉に彼女たちを振り返ってしまった。

（やば！）

本命のイャンクックと戦うまで、なるべく体力やアイテムを温存しておく、という計画が台無しだ。

「ど～するんだ～、光？　この前の時みたいに倒す～か？」

コンガたちは自分たちの縄張りに入って来た侵入者を目に止めると、威嚇するように後ろ足で立ち上がり、両腕を広げて一斉に放屁した。風に乗って、吐き気を催すような汚物の臭いが鼻をつく。

「戦いましょう！　レイ、そっちをよろしく！　シヴァはあい

つ！　私は向こうをやるから！」

「りょうか～い！」

「おっしゃあ！！」

このまま逃げたところで追いかけて来られるのは目に見えている。それに、イャンクックと戦っている時にこいつらの相手などしたくない。それくらいなら、倒せるうちに倒しておいた方がいい。光宮はそう判断し、背負っていたライト・ボウガンを構えた。

（手と口は出さないけど、足は引っ張るつもりなのね！？　望むところよ！！）

呑気に海水で顔を洗っているフェンリルをチラリと眺めながら、彼女は内心でそう毒づいた。

（さっさとくたばれ！）

ボウガンを手に、光宮は砂を蹴って木の葉の天蓋の下へと入り込む。ちなみに、ボウガンに装填する矢の先には、標的に当

たって弾ける特殊な「弾」を装着し、よりモンスターに与えるダメージを大きくする工夫がされている。そのため、ハンターが使うボウガンは矢ではなく、弾を装填すると言われるのが普通である。

（この……桃クソ猿！！）

至近距離から顔面に一発、と思っていたところで、コンガが両腕を地面に付いて彼女に向かって突進してきた。正面から食らったとしても致命傷にはいたらないはずだが、それでも痛いものは痛いし、何よりコンガは汚い。触れるのも近くに来られるのもイヤだ。彼女は慌てて飛び退く。ボーン・シリーズに覆われた足の下で、腐葉土が気味の悪い音を立てた。

「死んでろ！」

すぐ近くで聞き慣れた声がしたと思ったら、レイが大きくハンマーを振り回しているところだった。振り上げられた先端の固まりがコンガの横顔を捉え、衝撃に負けて地面に転がったコ

ンガの頭に、レイは容赦なくトドメの一撃を振り下ろす。グシャっという音とともに、腐葉土に沈みこんだコンガの桃色の頭から鮮血と脳の飛沫が溢れ出て、地面を汚した。

（さすがレイ！）

頭を叩き潰され、痙攣するコンガの下半身から凄まじい臭いのする汚物が溢れ出て来て、自らの毛皮を汚していった。

（死んでもメーワクなヤツだわね、コンガって）

空気を汚す異臭に顔を顰めながらも、光宮は自分の標的に向き直る。他人のことばかり見ているヒマはない。自分は自分の仕事をしなければならないのだ。

（どっち向いてんのよ！？）

自分に背を向けているコンガの背を狙って引き金を引けば、弾かれたようにコンガがこちらを振り向いた。ボウガンの弾は毛皮に刺さってはいない。よほど至近距離で撃ち込まなければ、分厚い毛皮と、その下の脂肪を貫くことができないようだ。

（さあ、さっさと来なさいよ！）

鼻息を荒くしたコンガが、両手両足を使って海岸の砂をかき、彼女の方へと向かってくる。ボウガンを構えたまま、光宮は正面から突進してくるコンガを見つめる。

（今だ！）

練習した時のタイミングを思い出し、コンガが射程距離内に入って来たところで引き金をひく。狙いは左目だったが、残念なことに軌道がズレて鼻づらに当たって、弾かれてしまった。

（くそ！）

慌ててコンガを避けながら、彼女は新たな弾を装填する。ルナのように、百発百中で的を射ることができない。思い通りに攻撃できないことが、こんなに悔しいとは思わなかった。しかも、世間一般には「ザコ」としての扱いを受ける、コンガを相手に、だ。

「トドメだ～ぞ！！」

シヴァの声が聞こえて思わずそちらに視線を向けると、彼は断崖の傍までコンガを追い込み、真っ直ぐ横に構えたランスで思い切りその体を突き刺すところだった。槍の先に串刺しにされたコンガが短い悲鳴を上げている。口から吐瀉物とともに血泡が際限なく溢れ出ていた。シヴァが身を引くと、断崖に血の跡を描きながら地面に向かって沈んで行く。

（何なのよ、もう！？）

接近武器と遠距離武器の違いはあるだろうが、自分がこんなに手間取っている間にレイとシヴァはあっさりコンガを倒してしまった。

（この差はいったい何よ！？）

思い出してみれば、樹海でコンガの群れに襲われた際、レイとルナ、そしてシヴァは体一つで次々にコンガたちを倒していった記憶がある。もちろん、本人たちも傷だらけだったが、それでもコンガの群れはその3人で片づけたようなものだと言っ

ても過言ではない。

（悔しいわね、もう！）

ボウガンに新たな弾を込めながら、光宮は唇を噛みしめた。

（どうして私は……こんなにダメなのよ！？）

シヴァやレイに負けたくないとは思わなかった。けれど、役立たずでいる自分が許せない。そう思うと、胸が鋭い刃で抉られたように痛み、鼓動が早鐘のように高鳴るのを感じた。

（ダメよ！　冷静にならなきゃ！　感情的になったら余計に当たらないわ！）

自然と早くなる呼吸を、意図的に深呼吸をして落ち着ける。改めて、コンガを視界に捉えた。

（どこが弱点？　思い出して……）

コンガは全身を分厚い毛皮と脂肪で固めているが、内臓が集中している腹部だけは背や手足に比べれば柔らかいと本に書いてあった。

（私の腕じゃあ、目とか口とか……そういう細かいところを狙うのはムリだわ！　だったらもう、弾がムダになるのを覚悟で腹を狙った方がいい！）

そう結論を出し、彼女はコンガに向かって走り出す。問題は、四足歩行が基本のコンガに、どうやって腹を晒させるか、である。

（挑発するしかない！）

コンガは威嚇の意味で放屁する際、後ろ足で立ち上がって自らの体を大きく見せるという行動を取る。自分の思う通りに動いてくれるかどうかは確信が持てなかったが、それでもここで助けを求めるよりはずっとマシだ。

（よし！）

標的であるコンガからある程度の距離を取り、光宮はボウガンの引き金を引く。狙いはコンガの頭だが、当たらなければ当たらないで構わない。目的は、コンガを挑発して後ろ足で立た

せることだ。

「光～！　がんばれ～よ！」

シヴァの無責任な応援を聞きながら、光宮は新たな弾を装填する。一発目は幸いなことにコンガの頬に当たった。煩わしげに顔を振るコンガは、激しい異臭を放つ口をガチガチと噛みあわせながら、彼女を睨みつける。負けじ、と睨み返しながら、引き金を引いた。同時に、視線はコンガに注いだまま横方向にじわじわと移動する。コンガに、突進する目的物を捉えさせないためだ。

（さっさと立て！）

再び顔面に弾を食らい、コンガが低い唸り声を漏らした。自分のチマチマした攻撃は、どうやらお気に召さないらしい。いい兆候だ。

（ほら、早く！）

横に移動する足は止めないまま、再びコンガに向かって引き

金を引く。今度はコンガの肩口に当たってしまった。その攻撃を受け、コンガが四つ足を付いたまま、体を深く地面に沈めた。

（突進……？）

避けるつもりで足に力を込めた瞬間、コンガは意に反して後ろ足で立ち上がり、汚物の臭いを撒き散らしながら威嚇してきた。

（やった！　今だ！）

チャンスは今しかない。そう思って、彼女は手早く弾を装填し、目の前に晒されるコンガの腹に向かって狙いを定める。

「……あれ？」

腹部を狙ったはずなのに、弾は予想に反してコンガの下腹部よりも下……つまり股間に命中してしまっていた。

「オス、だったのね」

白目を剥いて泡を吹きつつ、後ろに倒れるコンガを見ながら光宮はちょっと驚いた。

「小さすぎて見えなかったわ」

そんなことを思いながら、彼女は倒れたコンガに歩み寄り、至近距離から眼球に向かって弾を撃ち込んだ。何とか自分一人でコンガを片づけることができたようだ。

（やった……）

ほっとしたような、嬉しいような、不思議な感情が胸に湧き上がるのを感じた。

「さ～すが光だ～な！」

「命中率、サイコーじゃん！」

痙攣しているコンガを見下ろしていると、爆笑しながら近寄って来たシヴァとレイに思い切り背中を叩かれて激励された。シヴァはともかく、怪力のレイに叩かれるとちょっと痛い。

「とりあえずザコは終わったな！」

「そ、そうね。せっかく倒したんだし、ここに罠を仕掛けましょうか」

「りょ～かいだ～ぞ」

背中の痛みに顔を顰めつつ、光宮は次に取るべき行動を考える。まずはベース・キャンプまで戻って落とし穴を掘る道具を持ってくる。そして全員で穴を掘り、イャンクックが大好物にしているハリマグロを運ぶ。そして大タル爆弾を仕掛け、あとは目的のモンスターがやってくるのを待つだけだ。

「さっそく行動に移りましょう。ベース・キャンプまで戻るわよ。絶対に単独行動はダメだからね！」

シヴァとレイに向かってそう言った時だった。口元を布で覆ったフェンリルが相変わらずヨロヨロした足取りで近寄って来る。

「悪いけど……コンガの死体、どっか遠くに捨てて来てよ。死体の臭いもキツイ。俺、息ができない……」

「あんた……」

呆れて言葉もない光宮とは対照的に、彼の言動にレイは爆笑

した。

「分かったよ！　あんた、ホントにおぼっちゃんなんだな！」

「……コンガの臭いが苦手なだけなんだってば」

フェンリルの言い訳を聞きながら、レイはたった今、光宮が倒したばかりのコンガの死体を軽々と肩に担ぎ上げる。

「すぐ終わるから待っててくれよ」

「分かったわよ」

ひたすら明るいレイを見ていると、文句を言う気力も萎えた。

（それにしても、すごい怪力ね……レイ）

始動２８

光宮たちがコンガ討伐に勤しんでいるころ、別チームである中也たちはようやく下船したところだった。

（改めて見ると、すげえ綺麗なところだな）

紺碧の海と白い砂の海岸もそうだが、ベース・キャンプを囲むようにして聳え立つ断崖から、密林を流れて来た川が行き場を失い、まるで滝のように流れ出ている。そのせいで海面にはうっすらと霧が立ち上り、何とも言えない幻想的な景色を作り上げていた。

（モンスターさえいなければ、本当にリゾート地だな）

船の上でも思ったことを改めて肌に感じながら、中也は全身の感覚を集中させてみた。

（静かだ）

鳥の鳴き声と、打ち寄せる波の音しか聞こえない。足元からは太陽の熱に温められた砂の感触だけが伝わって来る。吹き抜ける風は潮を含んで僅かながらベトつく。鼻腔を刺激するのは、やはり海の

匂いと、そして森の匂いだけだ。生き物の臭いは、無かった。

（おかしなところだな、フィールドって）

生命の気配が溢れているはずの場所に、その気配が微塵も感じられない。それは何だか不思議な気分だった。

「まずは基本の偵察だ。標的の居場所を探るのももちろんだが、ザコのモンスターの動向を知っておくことは、そのクエストを成功に終わらせられるか、それとも失敗に終わるかを分ける大きなカギだと言っても過言じゃない。分かったなら、早く防具を付けて武器を持て」

リースの声に、中也は我に返る。砂浜に立ったリースは、午後の太陽を背負いながらやや早口でそう言って来る。彼の言葉に急かされるようにして、中也は抱えていた武器と防具の木箱を砂浜に降ろした。

（なんかリースさん、焦ってないか？）

そんなことを思いつつ、中也は防具が入った木箱のフタを開いた。

そこには、最早見慣れてしまったボーン・シリーズが、傷つかないように布に包まれて居座っている。手早く布をほどき、目に付いた足のパーツを手に取った。

（さっさと終わらせて帰るんだ）

パーツを体に押し当てると、やはり獣に足を噛みつかれたような痛みが走る。

「……っ！」

痛い。痛くないはずはない。だが、初めてこれを付けた時よりは随分と痛みが緩和されてきているような気がした。それこそ、最初のころは足のパーツひとつで歩けなくなるほどだったが、今では顔を歪める程度で済む。

（慣れって怖いな）

防具を付ける痛みに慣れてしまった自分の体を、中也は自分で凄いと思った。

（それとも……）

モンスターの武器や防具を使う際に求められるのは、肉体的な強さではなく精神的な強さだと聞いたことを、ふと思い出した。その場合、初めてこれを付けた時よりも自分の精神力が上がっているということになるのだろうが、そう言われるとちょっと違和感があった。

（そんな気はしない）

精神力が上がったと言われるよりは、慣れたと一言で片づけてしまった方がしっくりくる。顔を歪めつつ防具を付けながら、中也はそんなことを考えた。

「ふう……」

最後のパーツを付け終わり、武器である大剣を背負うと、それまで全身を蝕んでいた痛みが消えて行く。ようやく一息付いたところで、中也は自分が最後であることに気が付いた。ルナも夏葉も、とっくに戦闘準備万端で彼を待っている。

「……」

最初のころに比べれば随分とマシになったとは言え、女の子に負けている自分の姿はやはり情けない。無言のまま、中也は気を取り直してリースを見た。

「行けます」

「おし。じゃあ出発するぞ」

中也の準備が整うと同時に、リースが彼らに背を向けて歩き始める。無言で、彼らはその後ろ姿に従った。

「こっちだ」

リースは、海が広がる方から見て右方向に歩き始める。どうして彼が右を選んだのかは分からなかったが、文句を言う理由が無かったので何も言わなかった。

（ここ、人の手がかなり入ってるな）

ベース・キャンプとなっている海岸の右側には、ところどころ海藻と苔が付着した岩が左右から挟みこむようにして聳え立っている。その間は、砂に覆われてはいるものの「道」のようになっていた。

荷馬車が余裕を持って通行できるほどの広さがあること、そして何より、大きな石や木々の破片などが一切見当たらないことから、中也はそう判断した。

（おかしなところだ……）

人の世界ではないのに、そこかしらに人の気配がする。左右の岩壁には落書きがたくさんあるし、汚れた空きビンや携帯食料の包み紙なども、道の端にたくさん転がっている。ところどころ、思い出したようにヤシに似た植物が枝を広げているが、雑草などは無かった。

「うわ！」

緩やかな上り坂をしばらく進んだところで、ふいに視界が晴れる。右手の絶壁の向こうに広がっていたのは、どこまでも続く果てしない森だった。

（眩暈がしそう）

つい崖の縁に立ってみると、遥か下にある地面から生ぬるい上昇

気流が頬を撫でる。潮の匂いはしない。風が運んでいるのは、完全に森の匂いだけだった。

「こんな風になっていたんだね」

隣に並んだルナが感嘆した声で呟く。それに無言で頷けば、彼女は視線を遠くに向けた。

「何だか、おかしなところ……」

「俺もそう思う」

絶壁のすぐ下には、道ができている。轍がはっきり見えるので、どう考えても獣道ではない。森を伐採し、人の通行を便利にしたという印象が強かった。その道の向こうに広がるのは立派な自然の森なのに、徐々に人の手が入っていっている。そう思うと、無意味に気持ちが沈んだ。

「何してる。さっさと行くぞ」

絶壁の向こう側を見つめたまま動かない中也とルナに向かって、リースが幾分、苛立ちを含んだ口調でそう言ってくる。二人して顔

を見合わせ、リースと夏葉の後を追いかけた。

「ここは地図の上ではエリア1って呼ばれてる。覚えといたら何かの足しになるかもしれねえぞ」

「エリア1ですか？」

「そうだ」

ベース・キャンプからこのエリアに続くまでの道はずっと砂だったが、ここの地面は腐葉土で覆われている。ただ、不思議なのが木がやたら細いこと、そして低いことだった。絶壁の向こうに広がる森は立派な木々が生い茂っていた。それにも拘らず、エリア1の木は何だかとても軟弱に見える。

（モンスターと戦いやすくするために伐採したのか、それともレウスみたいに火球を吐いて攻撃してくるモンスターがいるから木が育たないのか……）

だとしたらどうして向こう側の森はちゃんと自然のまま育っているのだろうか。考えると不思議だった。

（それにしても暑いな）

遮るもののない午後の太陽が容赦なく降り注ぐ。着ている防具は通気性が悪いため、イヤでも熱が体内に籠ってしまう。それに、防具を全身に着けていると、頬を伝い落ちる汗を拭いとることさえ容易ではない。ややうんざりしながら、中也は目に入った汗を瞬きしてやり過ごした。

（うわ～）

視界に陰が落ちたと思って上を見上げれば、随分昔に倒れたと思われる巨木が、まるで橋のように岩と岩を繋いでいた。その下……中也たちのすぐ左手に、人が飛び乗れるほどの段差がある。リースは、迷わずそこに飛び乗った。

（なんだろう、ここ。密林って言うより、むしろ……）

大昔に大地震でも起きて、断層が幾重にも突き出したような、そこに木々が根を降ろしたような……。周囲にある断層を見ながら中也はそんな印象を受けていた。

「よっと！」

段差に飛び乗れば、そこもまた道のようになっていた。自分の後に続いてルナと夏葉が段差に手をかける。リースが反射的にルナに向かって手を出した。それを見た瞬間、中也の頭の中に浮かんでいたいろいろな疑問はすべて消し飛んだ。

（やべ！　これ、チャンス！）

合法的に夏葉の手を握る絶好の機会である。なるべく態度が不信にならないように気を配りながら、中也は段差をよじ登って来る夏葉に向かって手を差し出してみた。

「ありがと」

しょ～けい、というフェンリルの汚い字が書かれた頭パーツの下で、夏葉が微かに笑った気配が伝わって来る。

「別に、いいよ」

夏葉の手を握り、力を込めて上に引っ張った。たった一瞬の出来事で、繋いだ手はすぐに離れてしまったけれど、防具越しに握った

夏葉の手の感触が脳裏に強烈に焼きついた。

（この手、しばらく洗わないでおこうかな……）

そんなことを思いながら、中也は隣に並んだ夏葉の顔を盗み見る。

（俺、やっぱ夏葉のこと好きだな）

今は防具に隠れて見えないが、中也はその無骨な防具の下にある綺麗な顔をはっきりと思い浮かべることができる。その人形のように整った顔立ちの中、そこだけ人としての意志を宿す深紅の瞳が、何よりも好きだった。

（将兄、か……）

夏葉を見て好きにならない男がいるなら会ってみたいとさえ思う。だが、夏葉はもう「あの人」のものだ。自分のものになってくれないなら、いっそ誰のものにもならないで欲しい。そんな勝手な感情とは裏腹に、夏葉の心の中には「あの人」しかいない。

（将兄より早く出会ってたら、とか言ってもムダだよな）

そう思うと、何だか溜め息をつきたい気持ちになった。

「なあ、夏葉。お前、将兄とはいつ会ったんだ？　誰かの紹介か？　まさか個人的な出会いとかじゃねえよな？」

何の前触れもなく、リースがいきなりそんなことを言い出して中也は微かにビクッとしていた。まさしくその質問こそ、自分がずっと気になっていて、ずっと聞けずにいたことだからだ。

「京さまが将兄に就任される時に、父さんのところに挨拶にいらして、その時に」

「ああ、なるほど。お前の父さんって獅子王だよな？　まあ、挨拶に行くっていうのは納得できる話だ。そんで？　婚約？」

いくらなんでもそれは話が早すぎだろうと思ったのだが、予想に反して夏葉はあっさり頷いた。どうやらそうらしい。

「マジか？　じゃあ、いわゆるお互いに一目ボレってヤツか？」

「そんな感じ」

「そんな感じでいいのかよ」

「分かんない。父さんも母さんも反対しなかったし……京さまも」

「へえ～」

確かに将兄と夏葉は揃って人目を惹きつける顔立ちをしているが、仮にも一国の重要な立場にある人間がそんな適当でいいのか、と疑問に思った。自分の思い込みかもしれないが、将兄のような立場にあれば、婚約に関してもっと裏で様々な取り引きがされるものなのではないかという気がする。お互いに「一目惚れ」で更に「婚約」とは、自由度が高いにもほどがある。

（考えれば考えるほどイヤになってくる……）

叶わない恋は辛いのだと、なぜかその時、実感した。

始動２８（後書き）

この場を借りましてちょっと宣伝を。

「妖乱舞～Ｍｅｍｏｒｉｅｓ～」という小説をアップ予定です。内容はその名の通り、妖乱舞に登場するキャラクターの過去話になります。せっかく考えたので、小説にしてみようかな、と（笑）

近日中には公開いたしますので、よろしければそちらも合わせてお楽しみください。

始動29

いつ崩れてもおかしくないような巨石と巨石に挟まれてできた細い道を通り抜ければ、景色が一変してジャングルの只中のような場所が現れた。

（やっぱり、何か変……）

中也たちを見下ろす巨石はそれも苔むし、すでに岩と同化していて一見しただけではそれと分からないような倒木さえ目に入る。しかし、地面を見れば雑草が生い茂った場所と、腐葉土が剥き出しの場所が明確だ。それに、大木が聳えているかと思えば若く細い木も根を伸ばしている。

（モンスターがいるから、かな）

左側に視線を向けると、地下から湧き出た水が小さな池を作っていた。覗きこんで見ると無数の小魚が泳いでいるのが分かる。深さはだいたい1メートル前後で、水が湧き出している中央に近づくにつれて深くなっているようだった。

（地下水、か）

何となく手を突っ込んでみる。意に反して、地下水は妙に生温かった。

（おかしいな。地下水は普通、冷たいものなのに）

生温かな地下水が湧き出ている場所と言えば……。

「中也、何やってんだ。早く行くぞ」

「あ、はい」

リースから声をかけられ、中也は慌てて彼の後を追いかける。

このエリアにモンスターの影はない。その事実さえ分かれば充分なリースたちにしてみれば、いちいち景色に目を止める中也の行動がバカバカしく映るのだろう。彼らの傍に駆け寄った中也に、リースは胡乱げな顔を向けてくる。

「寄り道してるヒマはねえぞ。それに、フィールドに出たら離れるなと言ったろ？　もう忘れたのか？」

「すみません」

「命が惜しければ言う通りにしろよ。ほら、さっさと行くぞ。おぼっちゃんたちに先を越されちゃあ堪んねえからな」

「はい」

歩き出しながら、中也はふとリースの言葉に違和感を覚えた。

（“先を越されたら堪らない”？）

彼は確かにそう言った。

「あの、リースさん。もしかしてこれって、どっちのチームが先にイャンクックを倒すか、競争ってことですか？」

「そうじゃなかったら何だって言うんだよ」

呆れた顔で言われ、ちょっと驚いた。まるで気付かなかった。てっきりイャンクックが2頭いるものだとばかり思っていた。

「だったら、気を抜いてられないね」

どうやらルナも気付かなかったらしい。「ボインちゃん」と書かれた頭パーツの下で、彼女が不敵に笑う気配がした。

「その通りだ。おぼっちゃんたちに負けたくなかったら、気を引

き締めてかかることだな」

そう言って、リースは今までよりも早いペースで、そのエリアの奥にある坂道を下り始めた。

（競争、か）

それはつまり、シヴァと争うということを意味していた。自分たちはこれまで何かひとつのものを巡って争ったという経験が無い。付き合いは長いが、お互いに「欲しい」と思うものや「やりたい」と思うことが重なることが無かったせいで、今までケンカと呼べるケンカをしたことが無かったのだ。ついでに、フェンリルはやはり年上だったせいで、何かにつけて自分たちを優先してくれていた。彼と敵対する立場に立ったのは、テレビ・ゲーム以外では初めてだった。

（大丈夫かな、俺）

いろいろな意味で不安を胸に覚えた時、ふいに視界が晴れて真っ青な海が視界に入り込んでくる。

（あそこからここに来れば、海岸の方に出るのか）

頭の中で地図を整理していると、間もなく坂道が終わって平坦な地面が現れた。そこは例に違わず、細く低い木と、岩と一体化するほど時間が経過した倒木が支配するエリアで、地面はやはり腐葉土と雑草が生えている場所が明確に分けられている。海に近い海岸には、真っ白な砂が広がる綺麗な砂浜が見えた。

「光たちだ」

しかしながらそのエリアの中央付近には、肉体労働に励んでいる3人の男女がある。

「何やってんだ、あいつら」

「落とし穴を仕掛けてるんだろうよ」

「へえ……」

思わず胸に浮かんだ疑問を口にすると、耳ざとくその音を拾い上げたリースが答えをくれた。

（落とし穴か。大型モンスターを落とせるくらいの穴を掘るって

言ったら、かなり大変だろうな）

もちろん、この世界にはショベルカーなどの重機は無い。穴を掘るのも埋めるのも、すべて手作業だ。イャンクックの体高は約８メートル前後だと言われている。その足を止めるために必要な深さを計算すると、光宮たちに同情したくなった。

「よお！　調子どお～？」

中也たちに向かって明るい声をかけてくるのは、一人だけ高見の見物を決め込んでいるフェンリルである。

（手伝う気ねえんだな、この人）

中也から見て左手に、真っ黒な口を開いた洞窟のようなものが見える。その段差に腰かけて、一人のんびりとフェンリルは光宮たちの作業を眺めていた。

「どうもこうもねえよ。こっちはまだ偵察中だ。そっちはもう罠の設置か？　気が早いことだな」

「まあね～」

リースの声にも、フェンリルは特に反応を見せない。相変わらずにこやかだ。

「ホントこいつ、腹が立つ！！」

いきなり光宮が手にしていたショベルを地面に叩きつけながらそう訴えてきた。何事かと振り向けば、防具を脱ぎ捨て私服姿になった光宮が泥だらけの顔を怒りに紅潮させながら中也たちの方を睨んでいた。

「ジャマでジャマで仕方ないのよ！　リース！　こいつ一緒に連れてって！」

「いや……そりゃあムリだわ……」

たじたじとしながら答えるリースが、無意識に後ずさる。どうやら光宮の気迫に押されたらしい。

「もう！　ベース・キャンプでクサリに繋いでおきたいわ、ホントに！！」

言いながら、光宮は自分が投げ捨てたはずのショベルを拾い上

げ、再び穴を掘る作業に戻った。

（フェンリルさん、いったい何したんだ？）

聞きたいようで聞くのが怖かった。黙々と穴を掘るシヴァとレイも防具を脱ぎ、それぞれ何とも言えない苦笑いを浮かべている。

「俺、嫌われてる～。傷つくよな～」

傷ついているとは思えない口調で呟くフェンリルを見ながら、中也は意図的にリースの方を見た。

「じ、じゃあ俺らは俺らでやることがあるから！　そっちも頑張れよ！」

言いたいことは伝わったらしい。こういう時は、深く関わらず逃げるに限る。

「じゃあね～。そっちもがんばって～」

手を振ってくれるフェンリルに苦笑いを向けながら、中也たちはそのエリアを端から端に横切っていった。

（血の跡がある。戦ったのかな）

腐葉土に混じって、ところどころに血痕がある。ついでに、どう見ても生き物の内臓としか思えない残骸も落ちていた。光宮たちがここで一戦交えたことは疑いようがない。

（ザコ・モンスターかな。何だろう）

それに、死体が無いのも気になる。もうすでに解体して船に運んだのだろうか。それにしては、行動が早すぎるような気もした。

「ここだ。入るぞ」

リースが指差したのは、岩と地面の間に僅かに口を開く「穴」だった。それは、注意してみていなければ見逃してしまうような小さな穴で、周囲に根をおろした雑草の葉に隠れるように、密かに彼らを待っていた。

「付いて来いよ」

やや大柄なリースが体を丸め、窮屈そうにしながらも穴に頭を突っ込んで行く。そのあとに夏葉が続き、ルナが続き、最後に中也が穴に頭を突っ込んだ。

（狭いなあ）

穴の中は真っ暗で、しかも匍匐前進でなければ進めない。砂の混じった腐葉土が腕をこすり、時間が経つにつれて痛くなる。だが、ルナも夏葉も泣き言ひとつ言わないのに男である自分がここで喚くわけにはいかない。おかしなプライドに支えられ、しばらく腕だけで地面を這っていると、だんだんと天井が高くなっていくことに気付いた。

（うっそ！）

天井が高くになるにつれて、どういうわけか次第に明るくなっていく。ふと顔を上げた中也の目の前にあったのは、ルナの下着だった。

（モロ見え……）

ちょっと嬉しい自分が悲しい。どうせなら夏葉の下着が見てみたかった、とルナに対して別の意味で失礼なことを思いながらも、夏葉はズボンを履いているということを思い出した。そう思うと、

なぜか残念になるから不思議である。

（俺って悲しい……）

ひとり項垂れながら進んで行くと、立ち上がっても頭が当たらないほどの高さになる。その向こう側から、滝のような水音が聞こえていた。

「静かにしろ。何かいる」

先頭を進んでいたリースがふいに緊迫した声の調子でそう言ってくる。その声を聞き、中也は思わず彼の横に駆け寄ってしまっていた。

（な、なんだよ、あのモンスター！？）

そこには、ローソンの「からあげクン（ベラックペッパー味）」がいた……。

始動２９（後書き）

最近、脱毛症で悩んでおります。

相方に相談すると、

「季節の変わり目だからね～」

と言われました。

「冬毛じゃねえ！！！！」

始動３０

洞穴を抜けた先に広がっていた空間は、天井に開いた亀裂から差し込む微かな光によって、藍を溶かし込んだような仄暗い明るさを保っていた。

（あ、あれって）

底に届くまでも無く霧となり消えていく小さな滝の音と、調子外れな空気の歌声だけが支配する静かな空間は、まるでそこに映るものすべてが眠りについているかのように静かで、幻のように儚い。

（も、もしかして……）

さながら水底に沈み、たゆたい続けるように朧な景色の中、一頭のモンスターが心地よさそうに寝息を立てている。

（確か、肥鳥）

全身を覆う羽毛は白く、目の回りを囲むようにそこだけ黒く生えている毛が特徴的だ。見る者に、まるで巨大なニワトリのよう

な印象を与えるそのモンスターの姿を、中也は図鑑の中で見たことがあった。

「ポポポップ、ですか？」

「良く知ってんな。その通りだ」

隣に並んだリースが緊張しているのが分かる。その頬を、一筋の汗がゆっくりと流れ落ちて行った。

「イャンクックだけじゃないの？」

抑えた声音で、ルナが後ろから問いかけて来る。

「俺はそう聞いていた。なんでこのエリアにポポポップがいるのか分からん」

「そういうことあるんですか？」

「……さあな」

「さあなって」

リースの表情が強張っていた。ここにポポポップがいることは彼にとっても予想外の事態なのだということは嫌でも伝わって来

る。

「リースさん、どうするんですか？」

「今、考えてる」

戦うべきではない、と中也は思った。自分たちの手には余る。どう考えても、自分たちは大型モンスター2頭を相手にするだけの装備を持ち合わせていないのだ。ポポポップを相手にすれば、本命のイャンクックを倒す前に物資が尽きてしまう。それでは本末転倒である。

「いったん引き返すぞ」

「了解」

予想通りの答えに、中也はほっと胸を撫で下ろした。

「つまんないの。せっかく見つけたんだし、戦おうよ」

「そういうわけにはいかねえ。あっちで穴掘りしてるおぼっちゃんたちに知らせないとマズイだろ。それに、イャンクックだけじゃなくてポポポップまでいるとしたら作戦を考え直す必要

もある」

「分かったよ」

リースに正論を向けられ、ルナが残念そうに溜め息を落とした。レイにしろルナにしろ、どうしてこんなに血の気が多いのか不思議で仕方がない。

（俺は……戦わなくて済むならそれに越したことはないと思うんだけどな）

中也は、自分の手に刃物を持ち、命のあるものにそれを向ける自信が未だに持てずにいた。正当防衛ならばともかく、こちらから意図的に相手を傷付けなければならないというのは理屈を超えて恐ろしいのだ。

（殺せって言われて、簡単に殺せるモンじゃねえよ）

何かの命を奪うことは「重罪」なのだと心の深い場所に刻み込まれている。これから何かを殺さなければならないという事実には、拒絶を覚えずにはいられなかった。

「なあ、夏葉」

身を屈めて狭い洞穴を進みながら、中也はすぐ傍にいた夏葉に向かって声をかけていた。

「なに？」

「夏葉は……怖くないか？」

「怖い？　何が？」

好きな子と話すきっかけが欲しかったというのは事実だ。だが、この世界で生まれ、この世界で生きて来た夏葉が、モンスターとは言え、何かの命を奪うという行為についてどう思うのか聞いてみたかったという気持ちも本当だった。

「何かを殺すこと。怖いと思ったことはないか？」

「何かを殺すこと……」

中也の言葉を反芻した夏葉が、少しばかり考えるように低い天井を見上げる。

「モンスターを殺すことを怖いと思ったことはない」

「なんで？」

「人とは違う生き物だから」

返って来た意外な答えに、中也は思わず言葉を失っていた。

「おしゃべりしてないでさっさと行け。時間は限られてるんだぞ」

どういうことなのか詳しく聞こうとしたところで、背後から来たリースにそう言われてしまった。

（人とは違う生き物だから、か）

匍匐前進で進みながら、中也は胸のうちでその言葉を繰り返す。

（確かに人とモンスターは違う）

人間の一生は、赤子として生まれ子供となり、やがて大人に成長し、そして老いて死んでいく。だが、モンスターは違う。本当かどうかは知らないが、彼らには人でいうところの「寿命」が無いのだ。強ければ強いほど、何百年でも何千年でも生き続

ける。つまり、殺されない限り死なない。

（確かに人とは違う）

神話に例えれば、なお分かりやすい。人間を始めとするあらゆる動物たちは女神オーディナの膝元にいる。だが、モンスターたちは悪神ロキの膝元にいると考えられている。

（宗教的な意味合いでも、人とモンスターは全く違う生き物なんだ）

自分と違う場所にいる生き物だから、刃を向けることに戸惑いは無い。夏葉がそう考えているとしたら、分からないでもない。だが。

（そんなこと言われたって実感ないよ。オーディナだかロキだか知らないけど、そんなヤツ、俺は会ったことないんだから）

もともと宗教的な習慣や風習が薄い場所で育ってきた。だから、神がどうのと言われてもいまいち分からない。有り体に言えば、肌に合わない。

（生きてるモンは生きてるんじゃねえのかよ）

それに、本当にモンスターが殺されない限り死なない生き物なのかどうかさえ曖昧だ。人間の一生は１００年あれば長い方だ。モンスターの一生を確かめられる人間など、いるはずはない。

（宗教色が強い国って、難しいよな）

そんなことを思っていると、前方に真昼の陽光が見え隠れし始める。出口だ。

「よいしょ」

つい先ほど通ったばかりの穴から這い出ると、そこには相変わらず穴掘りに勤しむ光宮、シヴァ、レイの姿と、それを眺めているフェンリルの姿が目に入る。

「あれ？　どうしたん？」

戻って来た中也たちを目にとめたフェンリルが、開口一番にそう聞いてきた。光宮たちの周囲に積もっている泥の量が、先

ほどよりも確実に増えている。どうやら作業は順調のようだ。

「ポポポップがいたんだ。フェンリルさんたちに教えておこうって話になって」

「ふ～ん」

汗で顔に付いた泥を拭いながら答えると、フェンリルは興味が無さそうに上を向いた。

「ちょっと待って。ポポポップってどういうこと？　イャンクックだけじゃないの？」

中也の声を聞きとめたらしい光宮が、手にしていたショベルを放り投げながらそう聞き返してきた。

「知らないよ。でもこの先に本当にいたんだよ」

改めてそう言うと、光宮が微かに顔を紅潮させながらフェンリルの方へと歩み寄っていく。この場合、彼女の顔が赤くなっているのは「照れ」ではなく「怒り」であることは、ほぼ確実だと思われた。

「ちょっと、あんた。どういうこと？　知ってたの？」

「は？　何が？」

「とぼけないで。ポポポップのことよ」

「ポポポップ？　知るワケないじゃん」

光宮の剣幕に押されてはいるものの、フェンリルはあっさり事実を否定する。

「よお、中也。何だか困った展開だ～な」

「そうらしい」

泥で汚れた体から微かに汗の臭いをさせながら、近寄って来たシヴァがそう言って来た。

「そっち、何だか大変そうだな。お疲れ」

「そうでもね～よ。光が何だかんだ指示してくれるか～らよ。俺らはけっこうラクだ～ぞ」

「へえ」

そんなもんか、と思ったところで、中也とシヴァは光宮の金

切り声に会話を止める。

「ホントのホントのホント～に知らなかったんでしょうね！？　ウソついてたらあんたの××の穴を掘ってやるわよ！　分かってんでしょうね！？」

「……いや、ホントに知らなかったって」

「ウソついてますって顔に書いてあんのよ！　どうなの！？　正直に言わないと××に枝を突っ込んでソーセージにして、それから××を握りつぶした挙げ句に××にコンガの×××を突っ込むわよ！？」

「そ、それ痛い……。痛いのはイヤです。いや、ホントです。ホントに知りませんでした。ホントです……」

次第にエスカレートしていく光宮の「男性体イジメ」を想像して、背筋に悪寒を覚えた。隣でシヴァとリースが身震いしている。どうやら彼らも想像してしまったらしい。

「光、フェンリルも知らなくて当たり前だ。いい加減やめてく

れ。俺のムスコまで縮み上がっちまう」

「あっそう。良かったわね」

さすがに見かねたのか、それともただ聞いているのが苦痛になったのかは分からないが、横からリースが助け舟を出した。

「俺たちは将兄からクエストの概要を説明されたんだ。一緒に、2人同時に、だ。俺が知らなかったんだから、おぼっちゃんも知らなくて当たり前だ」

「へえ。そうなの～」

いかにも疑ってます、という顔で、光宮がフェンリルを眺める。

「あんた、何か胡散臭いのよ」

吐き捨てるように呟いた時のことだった。頭上から、巨大な羽音が聞こえてきた。

始動３０（後書き）

妖乱舞～Ｍｅｍｏｒｉｅｓ～をアップしました。
（すべて一話完結ですが）第一話は主人公・中也の過去話です。
そちらもよろしくお願いします。

始動31

「か、隠れろ……！　隠れろ！」

腐葉土の上に落ちた巨大な影を目の当たりにして、中也たちは一斉にフェンリルが腰かけていた段差の奥に口を開ける洞窟の陰へと身を寄せた。

「クック先生のご登場～」

緊張感を隠せない一同の中、たった1人だけ平常と変わらないフェンリルが外の様子を見ながら明るくそう言った。

「何度見ても思うんだけど、可愛いよね、クック先生の顔って」

「あたしはクックと同レベルだって言うの!?　ふざけないでよ！」

フェンリルの率直な感想に、なぜか光宮が噛みついた。

（そう言えば、フェンリルさんに船の中で可愛いとか言われて喜んでたっけな、光）

慌てた様子で言い訳しているフェンリルと、なおも納得して

いないらしい光宮を見ながら、中也はつい溜め息を落とす。

（怒るところと、慌てるところが違うだろ……）

自分は間違っていない。根拠も無くそんな風に思いながら、中也は改めて外の様子に視線を向けた。

（普通のクックだな。亜種じゃない）

生い茂る若い木々と、地面を覆う腐葉土、不自然に掘られた穴と、そしてその横に盛られている土と脱ぎ捨てられた光宮たちの防具。そこに赤い甲殻を纏った巨大な鳥が立っている。ニワトリや七面鳥を思い起こさせる爪の生えた2本の足は、固い甲殻で覆われた胴体へと続き、その胴体からは長い尾が、やはり甲殻に包まれながらユラユラと空中を揺れていた。

（でけえ耳……）

イャンクックというモンスターの姿で最も特徴的なのは、やはり顔の周りを囲むようにピンと張られた耳である。耳の下には2つの目があり、好物の魚をついばむのに適した形をしたク

チバシへと続いている。

（クチバシの一撃にも注意しろって本に書いてあったな。確かにあんな固くてデケえクチバシで突かれたら痛いじゃ済まなさそうだ）

現れたイャンクックは、まるでニワトリのように、時折、小首を傾げるような仕草をしながら、注意深く空気の臭いを嗅いでいた。

「私たちがいることに気付いてるのかしら」

「どうだかな。とりあえず静かにしてろ。こっちは戦闘態勢が整ってねえんだ。なるべく早くどこかに飛んで行ってくれることを女神に祈るしかねえさ」

「それしか方法ないの？　あんたギルド・ナイトでしょ？　どうにかしなさいよ」

「俺が戦っても仕方ねえだろ。これはお前らのクエストだぜ？」

「結果がすべてよ。イャンクックが死んだっていう結果さえあ

れば充分だわ」

「……」

光宮とリースの不毛な会話を聞きながら、フェンリルが押し殺した声で笑っていた。風に乗って、異臭が鼻をつく。樹海でレウスに遭遇した時の臭いとは違った。イャンクックの体臭は魚市場で嗅いだことのある臭いに似ている。そこに、野生動物に特有の体臭を混ぜたような、何とも言えない臭いだ。

（クックって何かクセーんだな）

もちろん、コンガほどではない。だが、その肉食モンスターとは別種の独特の体臭は、思わず顔を顰めるには充分だった。

「つまんねえなあ、もう。さっさと戦って終わらせようぜ。相手の出方を見てどうのこうのって性に合わねえよ」

「いいから静かにしてろ、レイ」

「なんなんだよ、もう。そんなに慎重になることか？　イャンクック1頭ブチのめせば終わりだろ？　さっさとしようぜ」

レイは、リースにたしなめられながらも納得できていないと言った顔をしている。そこに、中也の後ろにいたルナが立ち上がった。

「同感だね。レイ、フォローするから武器と防具を取って来なよ」

「そうこなくっちゃあ！」

「さっさと倒すよ」

それはマズイ、と言いかけた中也を差し置いて、2人の前に立ちはだかったのは光宮だった。

「ダメよ。止めて」

血気盛んなレイとルナとは対照的に、光宮は先ほどまでとは打って変って冷静な表情をしていた。

「どけよ、光。さっさと終わらせてやる」

「イヤよ。どかない」

「どきなって。心配しなくても大丈夫だよ」

「イヤだと言ったらイヤよ」

どけ、どかない、イヤ……湿った洞窟の壁の前で、三人の攻防が続く。見かねて口を出したのはリースだった。

「光が正しい。ムリをして死んだら何にもならねえ。それに、これはチーム戦だ。レイとルナはチームが違うだ……」

「あんたは黙ってなさい」

大人の威厳で彼女らの押し問答を「軽く」諌めようとしたリースは、光宮の一言で「軽く」一蹴されてしまった。

「チーム戦だとか、そんなことはどうでもいいのよ。それに、あんたたちが死ぬなんてことも思ってないわ」

「だったら何だよ」

「ケガするところを見たくないだけよ。私が」

意外な言葉に、レイとルナが言葉に詰まる。

「分かってると思うけど、万が一あんたたちがケガするようなことになっても、私はすぐに助けに行くことはできないわ。見

ての通り、今は武器も防具も付けてない。生身でクックの前に飛び出すなんてバカな真似はしないわ。当然よ。命は大事だもの。必然的に、私はただここから見学してるだけになるのよね。それはイヤなの。分かってくれる？」

筋が通っているようで通っていない光宮の言葉に、中也はつい正面にいたシヴァと顔を見合わせてしまっていた。シヴァは苦笑いしているだけで、何も言わない。

「カン違いしないでね。私はお願いしてるの」

言葉の割に真剣な光宮の声は、深く続く洞窟の奥に向かって微かに響いた。

「分かったよ。悪かった」

「そうだね。ごめんね、光」

僅かな沈黙の後、困ったように笑いながらレイとルナがそう言った。

「ありがとう」

戦うことを諦めたらしい2人に向かって柔らかく言った光宮を、なぜかレイとルナは左右から抱きしめる。

「私、そういうシュミは無いわよ！　どうせ抱きしめられるならイイ男がいいわ！」

「分かってるって」

「そうそう」

互いに笑い合う三人を見て内心でほっと息をついた時、中也の耳が不思議な音を拾い上げた。

「何の音だ？」

腰を上げながら呟けば、周囲にいたリースたちも顔色を変えた。何だろう、この音。まるで爆弾の導火線が燃えるような、そんな音だ。

「どこからだ？」

風を吸い込む洞窟が無気味な唸り声を上げている。吹き抜ける空気に服の端が揺れる。ジリジリと燃えてゆくその音は、そ

の場にいる人間たちを妙な焦りへと駆り立て、自然と各自の顔に緊張が浮かぶ。

「ああー！？」

だしぬけに、フェンリルが叫んだ。

「おぼっちゃん！！　何だ！？　どうした！？」

「音爆弾の導火線に火がついた！！」

「何だってー！？」

驚いてフェンリルの方を振り向けば、彼は手の平ほどの黒い固まりを手に呆然自失としていた。焦ったのは周囲にいる者たちである。

「な、何やってんだ～よ、兄貴！」

「あんた、ホント救いようのないバカね！」

「導火線！　導火線を抜くんだ、おぼっちゃん！」

各自が好き勝手な言葉で責める中、フェンリルが慌てたように、火花をあげて燃える導火線に手を伸ばした。

「あっちぃ！！」

「燃えてるところ触ったら熱いのは当たり前だろーがよ！　火を消すんじゃねえ！　導火線を抜くんだ！　抜くんだよ、根元から！」

「リース、なんかエロい～」

「そんなこと言ってる場合かよ！　早くしろ！」

くだらないことを口走っている間にも、火花を上げる導火線はどんどん短くなっていく。

「ああ、もう！　投げろ！　投げるんだ！　ここで爆発したら鼓膜が破れる！　どうにかしろ！」

「りょ～か～い！」

そう言って、なぜかフェンリルはイャンクックの方に向かって音爆弾を投げた。

「バカ！　そっちに投げてどうすんだって……あー！！」

空中に放り出された音爆弾をリースが慌てて捕まえようと手

を伸ばすが、時はすでに遅く、フェンリルの手を離れた音爆弾は穏やかな陽光が降り注ぐ密林に向かって飛び出してしまっていた。

「ヤバい！！　手で耳を押さえろ！！　鼓膜が破れるぞ！！」

鼓膜が破れる、というリースの言葉に、中也たちは慌てて自らの耳を手で覆った。

「やっぱりベース・キャンプに鎖で繋いでおくべきよ！」

手の平の向こうから光宮の切実な声が聞こえたと思った瞬間、空気が破裂する。

「う、わっ！」

強烈な音を叩き込まれた脳が揺れ、眩暈がした。揺れる視界に釣られて足元まで揺れる。まるで地震でも起きたのかと思うほど、音爆弾という名のアイテムが炸裂した時の衝撃は大きかった。

「ああ、もう～」

軽く頭を振りながら光宮が密林の方に視線を向ける。キーンという耳鳴りに顔を顰めながらも、中也はそれを真似てイャンクックの方を見た。

（耳が弱点なんだっけ）

巨大な耳をしているからこそ、イャンクックは他のどんなモンスターよりも強烈な音に弱い。１０メートルほど離れた場所にいた中也たちでさえこれだけの衝撃を身に感じたのだ。耳の真横で音爆弾が破裂したイャンクックは、直立した姿勢のまま上体をユラユラさせていた。

（目を回してるんだ）

よくよく見れば顔の大きさに比べて小さな眼球は上を向き、クチバシの端からは真っ白な泡が零れ出ている。

「ど、どうするん～だ？」

エリアに出ようか、それとも止めるべきか、迷っているらしいシヴァが周囲を見渡しながらそう言った。

「今のうちに逃げるのよ！！　レイ、シヴァ！　武器と防具を拾って！　ほら、さっさとしなさい！！」

状況に混乱した一同を先導したのは光宮である。弾かれるようにして、中也たちは一斉に洞窟から抜け出し、走り出す。

「戦わないんだ。ざ～んねん」

ひたすら残念そうなフェンリルの声が、なぜか妙に印象深く脳裏に染みついた。

始動３１（後書き）

先日、相方がネットである戦争ゲームをしていました。

まあ順調に遊んでいらっしゃったワケでございますが、スナイパーさんにスパーンと撃たれてあっさり死亡。その直後のことです。

復活したと同時に、頭の上から救援物資が落ちてきて再び死亡。

「こんなのアリ～！？」

と嘆く彼の横で、大爆笑してました。救援物資って……助けるためのモノじゃないですか。それが当たって死亡とか（笑）

明日の更新は諸事情によりお休みいたします。申し訳ありませんです……。

明後日には復活します！

始動３２

音爆弾の炸裂音に目を回しているらしいイャンクックの傍を全力で走り抜け、リースの先導の元、中也たちは左手にある岩の切れ目を目がけて一斉に走った。

「ホント、何考えてんのよ、あんた！」

「ごめん、ごめん。指に火打石をはめてたの忘れてた」

「忘れてたじゃすまないわよ、もう！！」

中也の耳に、光宮とフェンリルの不毛な会話が聞こえてくる。フェンリルは笑いながら光宮の前に自らの左手を翳した。彼の人指し指と中指に、指サックのような黒いものが付けられている。彼の言葉通り、それは火打石で、音爆弾だけでなくペイントボールと呼ばれるアイテムなどに点火する際に使用されるものだと聞いた。

（全く手伝う気が無かったくせに、なんでそんなモノしてんだよ、フェンリルさん）

そう思うと何となくだが疑惑が湧いた。

（でも……）

中也の胸には、彼を信用したいと思う気持ちの方が大きかった。フェンリルは幼馴染のシヴァの兄であり、自分にとっても兄のような存在なのだ。彼を疑うようなことだけは、したくなかった。

（きっと偶然だよ。昔から、何だかんだ言ってドジなところあったし）

カッコよくて、優しくて、強くて、それでいて間の抜けたところがある。誰からも好かれる人気者の彼のことが、中也は好きだった。どこの世界でも、彼は変わらない。そう信じたかった。

「うわっ！」

密林を抜け、波に抉られてできた岩の切れ目を通り過ぎれば、そこは左手に岩、右手に白い砂浜がある狭いエリアだった。そ

こに出て間もなく、短い叫び声を上げながらシヴァが砂浜に転がった。

「シヴァ！？」

名前を呼んだのは、中也と光宮が同時だった。

「大丈夫！？　どうしたの！？」

光宮が慌てたようにシヴァの傍に駆け寄ったので、中也は何となくタイミングを逃してしまい、その場に立ち止まるに留まった。

「ちょっと！　足が切れてるじゃない！」

「何で切ったのか分かんね～ぞ」

「中也！　中也、ボケっと見てないで手伝って！　そこを抜ければベース・キャンプだから！」

緊迫した光宮の声に言われて、中也は慌ててシヴァの方へ駆け寄る。

「大丈夫か？」

そう言いながら、彼が手で押さえている部分を覗き込んでみた。そして、顔色を変える。

「マジかよ……」

くるぶしよりも少し上が、まるで鋭利なナイフで抉られたかのようにパックリと裂けていた。三日月のような形をした傷口からは鮮血が迸り、傷口を抑えるシヴァの手を真っ赤に染めて行く。

「立てるか？」

「大丈夫だ～ぞ。悪い～な」

「気にすんな。ほら、腕かせよ」

シヴァの左腕を自分の肩に回し、もう片方の手で彼が立ち上がるのを手伝う。視界の先に、事態に気付いたレイたちが戻って来る様子が見えた。

「急いで！　イャンクックが追って来てるわ！」

叫ぶように言いながら、光宮が中也と反対側を支える。そ

の声に反射的に背後を振り向けば、イャンクックが岩を乗り越えて来る様子が目に入った。

「ベース・キャンプに戻って！　船に医者がいるでしょ！？手当ての準備をするように伝えて！」

「分かった！」

彼女の声に答えたのはレイだった。レイに続き、ルナが飛ぶような速さでベース・キャンプに向かって駆け出して行く。

背後から、耳触りな甲高い咆哮が聞こえてきた。

「マズイ！　火球だ！」

シヴァを抱えて走る中也たちに向かって、イャンクックが大きくクチバシを上下に開いている。喉の奥に赤い閃光が見え隠れしていた。

「光！　シヴァ！　避けろ！！」

左手にあった岩陰に、３人同時に飛び込むようにして身を隠した。その直後、彼らの横を真っ赤に燃える灼熱の火の玉

が飛んでいく。

（クックの火球の温度って確か５００度くらいだったっけ？当たったら火傷じゃ済まねえな……）

そんなことを思っている中也の横で、光宮が岩陰から顔だけ出してイャンクックの様子を窺う。その瞬間、彼女は頭を引っこめた。同時に、頭上を火球が飛んでいく。

「びっくりした……」

「いや、びっくりしたどころの話じゃねえだろ……」

「そうなんだけどね」

砂浜に着弾した火球は、周囲の砂を吹き飛ばし、真っ白な海岸に直径１メートル程度の穴を開けた。焦げ付いた砂が黒く変色し、灰色に濁った煙を上げているのが見える。岩の向こう側から、再び甲高い咆哮が穏やかな波の音を切り裂いて響き渡った。

「シヴァ、立って！」

巨大な羽音が鼓膜を揺るがす。イャンクックが自分たちの傍にやって来ようとしているのが分かった。砂浜に、鳥の形をした巨大な陰が落ちている。

「頑張ってね！　もうちょっとよ！」

「悪ぃ～な、光～」

「気にしない！　ベース・キャンプまで行けば安全だから！」

中也と光宮でシヴァを支えながら立ち上がる。空を見上げると、イャンクックが翼をはためかせながら砂浜に降りようとしているところだった。

「急ごう！」

「分かってるわよ！」

目的のベース・キャンプは１０メートルばかり先にある岩を回り込んだ位置にある。あの岩を超えることができれば安全だ。だが、たった１０メートルが異様に遠く感じる。

「危ないわ！　避けて！！」

光宮の声にイャンクックを振り返った。てっきり砂浜に降りると思っていたイャンクックが、翼を力強くはためかせ、中也たち目がけて後ろ足の爪を蹴り出してきた。

「ウソだろ!?」

「ホントよ!」

「……お前ら、そういうツッコミいらねえ～ぞ」

高さ8メートル近い巨大な鳥が、一瞬で10メートルの距離を詰めて来る様は圧巻だった。中也たちの周囲の空気がイャンクックの方に吸い込まれていく。慌てふためきながらも、3人は砂浜に転がりこんでその蹴爪を避けた。砂地に飛び込んだので、全身を打ちつけた痛みはない。だが、思い切り口の中に砂が入った。

「うげ……」

口の中がジャリジャリして気持ち悪い。うがいをしたいという思いに駆られながら、口に入った砂を唾と一緒に吐き出

した。光宮とシヴァも同じことをしている様を見ると、彼らも砂を食べてしまったらしい。

「早く戻って口を洗いたいわ……」

「同感だ～な」

しかし、背後から蹴爪を繰り出してきたイャンクックは必然的に彼らの行く手に立ちはだかるような位置に着地し、気難しげに長い尾を振り回していた。

（どうしよう）

ケガをしたシヴァを抱えて、イャンクックの横をすり抜けて行くのは不可能だ。再び岩陰に身を寄せながら、中也は注意深くイャンクックの様子を観察する。

（どうにかして俺たちから気を逸らさないと……）

こういう時、プロのハンターたちはどうするのだろう。やはり、1人がモンスターの気を引いて、そのスキにもう1人がケガ人を抱えてベース・キャンプに転がりこむしかないの

だろうか。

「中也！」

短時間に様々なことを考えていると、ふいに光宮に勢いよく服を引っ張られた。

「中也、私がクックの気を引くから、その間にシヴァを連れてベース・キャンプまで走って。分かった？」

「ちょ、ちょっと待て！」

彼女の口から飛び出した言葉に、中也とシヴァは同時に顔色を変える。

「女の子にそんな危険なことさせられるか～よ。俺なら大丈夫だから～よ」

「シヴァの言う通りだよ！　俺がオトリになる！」

「アタマ悪いわね、あんたたち！！」

光宮が突き飛ばすような勢いで中也の服を放した反動で、彼は背後の岩に思い切り後頭部をブツけてしまっていた。ち

ょっと痛かった。

「男だから女だからとかカンケーないのよ！　適材適所よ！　中也の方が力があるでしょ？　私がシヴァを抱えて走るより、あんたが抱えて走った方が早いのよ！　分かる！？」

「え、あ……うん」

「全員が生きて帰るのが目的よ！　分かったら、タイミングを見て一気にベース・キャンプまで走って！」

「わ、分かった」

「分かった～ぞ」

中也とシヴァの返答を聞くまでもなく、光宮が身ひとつで岩陰から飛び出した。

「俺、なんか情けなくなった～ぞ」

「気にするなって」

イャンクックの両目が光宮の小柄な体を視界に捉えたらしい。甲高い鳴き声を上げながら、翼を広げ、片足で砂をかく。

「よし、今だ！　走れ、シヴァ！！」

「おう！！」

イャンクックが光宮に向かって駆け出したのを見て、中也はシヴァを力任せに引き上げ、一気に１０メートルの距離を走り抜ける。

（もうちょっと！）

背後で甲高い鳴き声が上がった。続いて爆発音が響き渡る。かつてないほど、幼馴染の体が重く感じた。

（光、大丈夫か……）

心配だった。だが、今はシヴァをベース・キャンプに連れて戻るのが先決だ。敢えて背後は振り向かず、中也は砂に足を取られて転びそうになるのを必死で堪えて走り続けた。

「中也！　こっち！」

目的の岩の向こう側から、レイとルナ、そして夏葉が顔を見せる。事態を察したのか、レイが真っ先に駆けつけて反対

側からシヴァを支えてくれた。

（すげえな、レイ）

鉛のように重いと思っていたシヴァの体が急に軽く感じた。自分たちの傍を、太刀を携えた夏葉が通り抜けていくのが見えた。

「ルナ！　ルナもフォローしてやってくれ！　光が危ない！」

「分かってるよ！」

弓に矢をつがえながら、ルナもまた駆け出していく。もうチーム戦がどうこうなど関係なかった。

（光の言った通りだな）

全員が無事に帰ることが目的。それに尽きる。

「もうちょっとだ！」

海水に足首まで浸りながら、目的の岩陰を回り込む。その向こうには呑気な顔をしたフェンリルと心配そうなリース、そして白衣を着た中年の男が待っていた。

「お願いします！」

医者にシヴァを押し付け、中也とレイは再び岩を回り込む。

（光！　ルナ！　夏葉！）

未だイャンクックの前にいる彼女たちを思いながら、背中の大剣の柄に手をかける。

「うわ！」

「きゃ！」

その瞬間、向こう側から走って来た光宮と思い切りぶつかった。

「光！　無事か！？」

「見たら分かるでしょ！？　ジャマよ！　どいて！」

「あ、ごめん」

何とか全員、ベース・キャンプまで戻って来れたらしい……。

始動３２（後書き）

「俺のアパートにさあ、ワキガの幽霊が出るんだよ……」

以前、作者が勤めていた会社の上司が、ある日の朝、真っ青な顔をしながらそう言ってきました。

「こわっ！！」

その場にいた従業員一同、肌を泡立て背中に悪寒を感じたものですが、ホラーと言えば最近、我が家の風呂場の排水溝がホラーです。

いえ……頭の毛が、ネ、大量に、ネ……。脱毛症なので、ネ？

ズゴゴゴゴゴ……グジュジュ……ズチュチュチュチュ……。

ホラーです。

始動３３

イャンクックから逃れた後、中也たちは海岸に張られた簡易テントの中にいた。傾き始めた日差しが差し込むテントの中には、木箱を並べただけの簡単なベッドが作られ、その上にシヴァが座っている。治療するなら船の中の方がいいような気もしたが、船の中は昼間でも薄暗いので治療には向かない。松明や蝋燭を大量に消費するより、自然の陽光に頼った方が早い。それに、怪我人が縄梯子を登るのも大変だ。要するに、物資を節約する意味でも、外で治療した方が効率的なのだということは、中也にも理解できた。

「これはおそらくヤオザミにやられたね」

シヴァの足を一目見るなり、船医でもある医者の男はそう断言した。

「ヤオザミ？　何す～か、それ」

「知らないかい？　ヤオザミっていうモンスターが密林の砂浜にはいるんだよ。まあ、密林に限らず、フィールドの砂の中にはよくい

るんだけどね。大きさはこれくらいで……」

言いながら、医者は両手を肩幅より少し広い程度に広げて見せた。

「見た目は、海にいるヤドカリに似てるよ。薄い紫と白のストライプが入った甲殻を持っていて、普段は砂の中で小さな虫を食べているんだ。だけど、たま〜に気まぐれで砂の上に出て来ることがある。その時、運悪く君が近くにいたんだろう。敵だと思って、つい攻撃したんだろうね」

「へえ〜」

感心してるらしいシヴァだったが、消毒薬をかけられ、口を噤む。顔が引きつっているところを見ると、かなり痛いのだということが、傍にいた中也にも伝わって来た。

「ヤツらはいわゆるザコ・モンスターなんだがね、油断してると、こんな風に足をバッサリとハサミで切られることがあるんだ。注意しておくに越したことはない」

消毒を終え、清潔な布で血を拭き取った後、医者は再びその傷口

を丁寧に観察した。後から後から噴き出してくる血は、一向に止まる気配を見せない。

「モンスターに付けられた傷は要注意だ。ヤオザミのハサミで切られると、なかなか血が止まらないという特徴がある。ランポスの鉤爪で抉られれば高熱が出るしね。他にも、カプラスの毒は完全に解毒することができないっていう特徴もある。まあ、切り傷ひとつだと思って油断せずに医者に見せることをおススメするよ。苦しみを快感だと感じるならば話は別だが」

「俺、そういうのはムリだ～ぞ、先生」

「そうかい。なら私と同類だ。さっさと治療するからね。ちょっとばかり痛いが、そこは足の間にブラ下がるムスコのプライドにかけて我慢してくれ」

「何がブラ下がってても痛いモンは痛いんだ～ぞ」

「頑張れ～、シヴァ～。ケガした足はノコギリでゴリゴリ切られて、その上から煮えたぎったタールをかけられるんだぜ～」

フェンリルの言葉に顔色を変えたのはシヴァだけでは無かった。ノコギリで足を切り落とされる……と聞いて、中也は思わず青くなってしまっていた。しかし、医者は笑っている。

「確かに、一昔前まではそんな治療をしていたのは事実だけどね。何と言っても、かつては船大工が医者の代わりだったというから笑えない。でも、今はそんなことはしないよ」

淡々と答え、彼は傍に置いていた鉄製のカバンを引き寄せる。そして、その中から手の平サイズの丸い入れ物を取り出した。フタを開けば、中には軟膏のようなものが詰まっており、色は薄いクリーム色をしている。

「先生、それ何ですか？」

つい興味を惹かれて聞いてみると、医者は紙製のスプーンのようなもので軟膏を掬いながら、中也の方にチラリと視線を向けてきた。

「麻酔だよ。このまま傷口を縫い合わせたら痛いからね」

「麻酔……」

「ゲネポスというモンスターがいるだろ？　ヤツらの麻痺毒を加工したものだ。分量さえ間違わなければ、患部だけを麻痺させることができるんだ。傷の周りに塗るだけでね」

「へえ～」

「まあ、気を付けないといけないとしたら、うっかり素手で触ってしまったら私の手も一緒に痺れるから治療ができなくなるという程度かな。副作用はほとんどないよ。人によっては猛烈に痒くなるらしいがね」

今度は中也が嘆息する番だった。この軟膏はいわゆる局部麻酔である。てっきり麻酔ナシで縫合が始まるのかと思っていたのだが、どうやらそうではないらしい。紙のスプーンで掬い取った軟膏を、医者はシヴァのケガした足に塗っていき、反応を確かめた後で手際よく縫合を始めた。

「すげえな」

「人間だってバカじゃない。日々、進歩しているのさ」

縫われて行く傷口を正視することができず、中也は思わず視線を逸らした。しかし、光宮と夏葉は興味深そうにその様子を除き込んでいる。

「シヴァ、痛くないの？」

「痛くはねえ～ぞ。なんか……皮が引っ張られてるようなヘンな感触があるけ～どな」

「そんなものなのね。こっちから見てるとかなり痛そうよ。どんな感じなのか状況を詳しく知りたい？」

「遠慮しとく～ぞ」

自分がシヴァの立場だったら、きっと同じことを言っただろう。

そんな風に思いながら、中也は簡易テントの入り口から見える海岸沿いの景色に視線を移す。次第にオレンジ色を強くする情景の中、砂浜に座ったレイとルナがリースと何か話をしている。その向こうでは、帆を畳んだガレオン船が静かに波に揺れていた。

「よし、終わりだ。後は飲み薬で一晩ほど様子を見よう。問題なけ

れば、明日の朝からまたクエストに参加しても大丈夫だよ」

「どうも～」

その声にシヴァの方を振り向くと、彼はちょうど綺麗に包帯が巻かれた足をズボンの中に直すところだった。

「普通にしておいて大丈夫だよ。走り回ったりするのはなるべく避けて欲しいがね。でも、モンスターが来たら、走って逃げてもいいからね」

「……それ、当たり前だ～ろ？」

「たま～にいるんだよ。モンスターが襲撃して来たっていうのに、ヨタヨタ歩いて逃げるヤツがね。後から話を聞いてみたら、私が走るなと言ったから走らなかったと答えられた。実に言葉に忠実な行動だよ」

「先生も大変だ～な」

「労ってくれてありがとう。嬉しいよ。それじゃ」

軽く手を挙げた後、医者はカバンを抱えて船の方に戻って行っ

た。

「さ～て。一息ついたところで、大きな問題がありま～す」

相変わらず笑顔のまま、いきなりフェンリルがそう言って来て

その場にいた中也たちは表情を強張らせる。何となく、フェンリルが問題、という言葉を口にするとイヤな予感が背中を悪寒のように駆け抜けるのだ。

「ふりょう？　ふそく？　何て言うんだっけ。まあ、いいや。咄嗟のことで忘れちゃってたと思うけどさ、君たち、武器と防具を向こうの方に置いて来たままだろ？　それ、けっこう減点になるんだよ」

「不慮と不測の事態を巻き起こしたのは誰よ！」

呑気な口調のフェンリルに光宮が噛みつくが、彼は一向に気にした様子は無い。

「まあまあ。それは置いといて。知らないかもしれないけど、ハンターの武器と防具ってけっこう重要なんだよ。理由とか分かん

ないけど、外国の人に盗まれたりしたらヤバいんだってさ～。というワケなんで、エリアに忘れて来た４人分の武器と防具、取って来てくださ～い」

「……」

イャンクックから必死で逃げ惑ってくる原因を作った人に明るくそう言われ、中也たちは何とも言えない顔で互いに視線を交わし合う。

「イヤだったら別にいいよ。でも、武器と防具を無くしたら粛清の対象になるから気を付けてね」

「分かったわよ。だけど、あんたは来ないで！　絶対に！　お願いだからベース・キャンプで昼寝でもしてて！　代わりにリースを連れて行くわ」

粛清、という言葉を聞き、光宮がそう返事をした。その言葉に、フェンリルは苦笑いを浮かべる。

「俺、嫌われてる～。傷つくよな～、ホント。フツーの女の子だ

ったら絶対にリースより俺の方がいいって言ってくれるのにさ～」

「中也、シヴァの代わりに一緒に来てくれる？」

「あ、ああ……分かった」

フェンリルの声を完全に無視した光宮に言われ、中也は縋っていた柱から身を起こした。

「悪いな～、中也」

「いいよ。気にすんな」

申し訳なさそうなシヴァの言葉に適当に答えた時、光宮がどういうわけか、大袈裟な溜め息をつくのが見えた。

「バカねえ、シヴァ。こういう時はね、悪いな、じゃなくて、ありがとうって言うべきなのよ。あんた、何も悪いことしてないじゃない」

「お、おう……そんなモンなの～か？」

「そうよ。じゃあ、行って参りますわね、フェンリルさん」

非常にトゲトゲしい声をフェンリルに向け、光宮は簡易テント

を後にする。中也は、その後ろに従った。

「レイー！　武器と防具を取りに行くわよー！　リースも一緒に来てー！」

光宮が声をかけると、海岸に座っていた3人が同時に振り向く。そして名前を呼ばれたレイとリースが腰を上げて中也たちの方に向かって歩いて来た。それを見て、一足先に中也たちは先ほど死に物狂いで通り抜けた岩の方へと歩き出す。

「シヴァには悪いけど、なんか信用できないわ、あの人」

「フェンリルさん？」

「他に誰がいるっていうのよ。胡散臭いって言うか、掴みどころがないって言うか」

「そうかな……」

「あの人、10年前に家出したんでしょ？　昔と同じ性格だとは限らないわ。それに、あんたが知っている彼と全く同じっていう保障もないじゃない。信用しない方がいいと思うわ」

「……」

光宮の意見は、一理ある。それは分かる。けれど、こればかりは感情の問題だ。どうしても、彼を信じたいと思う気持ちの方が強い。言葉を飲み込んだ時、レイとリースがやって来たので、その話はそこで終わりにした。レイはともかく、リースに聞かれて楽しい話ではない。

「おぼっちゃんが、武器と防具を取りに行けって？」

「そうよ。でも、身の安全を保障するために、彼にはベース・キャンプに残ってもらうことにしたの。悪いわね、リース。ちょっと付き合ってちょうだい」

「へいへい」

リースはフェンリルのことを何と言っていただろうか。フィールドに着いた日、出発前にリースと話をする機会があった。

（リースさんも光と同じことを言っていた。掴みどころがないって……）

ひたすら仲間の足を引っ張る。ギルド・ナイトと知ってからはワザとやっていたのかもしれないと思った。それから……。

（怖い。リースさんは、確かそう言ってた）

思えば、こちらの世界に来る前、中也は「彼」の知り合いに会ったことが無かった。「彼」が中也たちの前で見せていた顔と、「彼」の友達に見せていた顔は違っていたのかもしれない。そう思うと、確かに掴みどころがないという光宮とリースの言葉には納得できるものがあった。

（本当は、どういう人なんだろう……）

よく知っていると思っていたはずの人が、全くの別人のように感じる。中也には、むしろそちらの方が怖い気がした。

「イャンクックはいないようね。さっさと行って戻るわよ。日が暮れる前にはベース・キャンプに戻りましょう。真夜中の密林なんてロクなモンじゃないわよ」

「賛成～。視界が悪いフィールドなんて一回で充分だぜ」

光宮とレイの言葉に、中也は思考を止める。岩を回り込めば、先ほどの戦闘がウソのように静まり返った海岸が続いていた。

「お前ら、鬼龍に会ったんだって？　将兄から聞いたぜ」

「会ったワケじゃねえよ。チラッとそれらしい人影を見ただけさ。まあ、おかげであたしらは大変だったけどな」

「それから何にもないのか？」

「ねえよ。将兄からも冬軍からも、鬼龍からも。樹海から戻って来てからはずっと普通だった。夏季休暇に入る直前までは」

リースとレイの会話をそれとなく聞きながら、中也たちは足早に海岸を抜け、波に削られた岩を潜る。

「大丈夫ね。行くわよ」

「うん」

光宮の合図で、彼らは４人分の武器と防具が転がっている穴の傍まで走る。

（よく掘ったモンだよ……）

光宮たちが人力で掘った穴は、深さ3メートル前後に達しようとしていた。これだけ掘るには大変だったに違いない。おそらく、この穴の底に爆弾を置き、イャンクックが落ちたと同時に導火線に点火して爆破する計画だろう。

（もしかして、ハンターたちが何度も同じ場所に穴を掘るから土が柔らかくなっているのかもな）

そんなことを推測しながら、シヴァのボーン・シリーズとランスを拾い上げる。身を起こしたところで、海岸の向こうに孤島があることに気付いた。

「なあ、リースさん。あっちの島は何ですか？」

「ん～？」

ついついそう聞くと、傍に寄って来たリースが彼の指さす方向に視線を向けた。

「ああ。あの島ね。夜になると潮が満ちて来るから渡れねえよ。諦めな」

「あそこもギルドが管理してるエリアなんですか？」

「まあ、一応な。変わったところだぜ。フィールドなのに、建物があるんだよ。苔だらけで汚ねえけど」

「へえ……」

「フィールド研究者の中には、あの島にある建築物は３０００年前に滅びた古代文明の遺跡だって言うヤツもいる。ホントかどうかは知らねえ。それに、興味も無いけどな」

「３０００年前に滅びた古代文明……」

何となく、中也は孤島を見つめた。

（それは、神話のはず）

かつて栄華を極めた文明がある、という話はアルテリアの神話で何度も読んだことがあった。お伽噺だろうと思っていた。だが……。

（そういう文明が存在した可能性はある）

このエリアは「密林」と呼ばれている。だが、地形を見てい

るとおかしな部分が多い。それに、地下水が生温かったという事実がある。

（ここは昔、火山だったのかもしれない）

あるいは、突如として火山が噴火した。それが、かつてこの場所に栄えていた文明を滅ぼした。

（そして、生き残った人が神話にして後世に伝えた……）

そう思った時、中也の脳裏にひとつのモンスターの姿が思い浮かんだ。

（黒龍……）

火山が噴火した原因がモンスターにあることは、こちらの世界では珍しい話ではない。

（まさか、な）

苦笑いしながら自分の思考を否定した時、自分を呼ぶ光宮の声が聞こえて来た。

始動３３（後書き）

先日、デパートなどというハイカラな場所に出向いて来ました。

そこで、衝撃的なおばあちゃんを見かけました。

膝上までのブーツ、超！ミニスカート（黒）しかもスリット入り、胸元が大きく露出した真っ赤なシャツ……。

スカートの間からモモヒキが見えていたんですよね（汗）

タイツでもストッキングでもなく、モモヒキであります。モモヒキ。

最近のおばあちゃんの間ではそういった服装が流行っているのでしょうか。

始動３４

深い藍色の世界に、潮騒のささやきが木霊する。

「ムスコが暴走しそうだ～ぞ」

砂を撒いたような満天の星空から、遮るもののない月光が絶え間なく降り注ぎ、漆黒に溶け込んだ碧い海を照らし出していた。

「その気持ちは分かる、シヴァ……」

藍と黒の色彩を織りなす波間に、３つの人影がたわわに揺れている。

「こういうの、何て言うんだっけ？　蛇の半殺し？」

「生殺し、だ～ぞ、兄貴。半殺しにしてどうすんだ～よ」

ギルドからの支給品が入った木箱に身を預け、中也たちはひたすら煩悩と戦っていた。背後を振り返ってはならないのだ、と分かってはいるものの、見てはならないと思うからこそ妄想だけが膨らんでいく。首を４５度回せば、そこには同じ年の女の子たちが裸体で波間に戯れているのだ。理性とは裏腹に、下半身は正直である。

「ちょっとだけ……」

人間としての理性をフルに動員し、何とか背後を振り向くようなことだけはするまい、と思っている中也の横で、フェンリルが腰を浮かせて木箱の向こう側を覗き込む。

「うわ～！　ルナちゃん、おっぱいデカい～！　サイコー」

「やっぱ巨乳だな、女は」

フェンリルに釣られてリースも背後を振り返った。中也とシヴァは顔を見合わせ、すぐにお互い視線を逸らす。考えていることは、おそらく同じだ。見たい。見たいが、友達だから見ない。そういうことだ。

「光～、もうちょっと立とうよ。もうちょっと、もうちょっと」

「好きだねえ、おぼっちゃん」

「……あんたに言われたくない気がするけど」

「俺は特別」

「ふ～ん」

フェンリルとリースの会話を聞きながら、中也は気を紛らわせるために、目の前にある焚火を火掻き棒で無意味に突きまわす。船の料理長からのサービスで、釣れたばかりの魚が串刺しにして火にかけてあった。フィールドで肉を焼くことには抵抗があったが、モンスターが嫌う臭いを放つ木を燃やしているし、手の平サイズの魚だからこれくらいは大丈夫だと笑われた。

（魚の塩焼きは確かにウマい……）

乾麺を使ったパスタなども確かにおいしい。だが、たまにはこういった「和食」が食べたくなるのが「日本人」である。パチパチと音を立てながら焼けていく魚を見ていると、背後で禁断の花園が展開されていることさえ……忘れられるはずはない。

「あ～、もう～」

火掻き棒を放り投げ、中也はつい抱きこんだ膝の間に額を埋めていた。

「たまには一人の時間が欲しいよ～な」

「確かに」

シヴァもどうやら同じ気持ちらしい。考えてみれば、アルテリアを出発してから3週間近く。その間、ずっと木箱に詰め込まれていたり、ベッドがあっても他人と相部屋だったりして、一人きりになれる時間というものが無かった。当然、風呂も無い。唯一、可能性があるとすればトイレだが、トイレはたいてい混雑しているのが常である。

（船に乗ってる間、メシの後はお祭り騒ぎだったモンなあ……）

最初の日、夕食の席でレイとルナがダンスを披露して以来、毎度の食事の度に、男性、女性関係なくテーブルの上でダンスを披露するのが習慣のようになってしまっていた。ちゃんと服を着て踊ってくれるなら問題ないが、特に女性たちは自らの肉体を男たちにアピールするかの如く、やたら服を脱ぎたがる。おかげさまで、食事の席の真っ最中もしくは食事の後は、男性トイレは非常に混雑するのである。みんな考えていることと、やることは同じなのだ。

（溜まってんだよ、チクショー）

ついつい視線を上げて正面にいる夏葉を見れば、中也たちの煩悩など素知らぬ風でうつらうつらしていた。

（綺麗だな、夏葉）

炎の光を浴びて、長い睫毛が白い頬に影を落としているのが分かる。どこからどう見ても人形のように整った綺麗な顔立ちを見つめながら、中也は再び重い溜め息を落とした。

（やっぱ、ヤルことヤッてんだよな）

否応なく脳裏に思い浮かぶのは、まさしく神々の具現のような顔立ちをした青年の姿である。アルテリア軍の頂点に君臨し、たった一人だけしか着ることを許されない特別な軍服を着こなし、胸に黒龍の階級を付けて颯爽と王宮を歩く将兄。婚約者ということだから、やはりそれなりの関係はあるだろうと頭では思う。

（そういうイメージないけど……）

夏葉はとことん性欲だとか、そういったものに無縁の存在のよう

な気がしていた。そう思った時、なぜか頭の中に彼の腕に抱かれている夏葉の姿が思い浮かんだ。

「っ！」

想像したくない。考えたくない。好きになった子が自分以外の男に抱かれている姿など、見たくない。中也は軽く唇を噛みしめながら、無意識のうちに頭を振る。

「ちょっと、そこの人！　そんなところで覗き見するくらいなら、こっちおいでよ！」

ふいに、現実世界からルナの声が聞こえてきた。

「そうそう！　こっち来いよ！　ヌいてやるからさ！」

ルナの声に便乗したのはレイである。

（ヌいて貰おうかな……）

ついついそう思ってしまったところで、中也は自分がひどく情けない人間になったような気分に陥った。

「マジで！？　行く、行く！」

「そうこなくっちゃあ！」

２人の声に嬉々として木箱の陰から飛び出すのはフェンリルとリースである。何だって彼らは恥ずかしげもなくそういった行動が取れるのか不思議で仕方ない。

「よせよ！　ヤりたいなら勝手に１人でヤってりゃいいだろ！」

気が付いた時には、つい２人に向かってそう言ってしまっていた。

「中也、マジメ～」

「そういう問題じゃねえよ！　レイたちも！　そういうこと簡単に言うなよ！」

呆れた顔をしているフェンリルから視線を海の方に向けてそう言った瞬間、レイとルナの胸が思い切り見えてしまった。光宮は水の中から顔だけ出していたので残念ながら見えなかったが、初めて見た本物の女の子の胸に、理性とは対照的に下半身が暴走寸前になる。

「ちょっと俺……頭、冷やしてくる」

「便乗する～ぞ」

「俺、あっちに行く。お前、そっちな」

「りょ～か～い」

シヴァと2人、前屈みになりながら中也はベース・キャンプを後にする。モンスターがいるから危険だとか、そういったことを考えているヒマは無かった。

「若いって大変だねえ～、なあ、リース」

「テメーだってまだ19歳だろーがよ」

背後からフェンリルの笑い声が聞こえてきた気がしたが、何も言い返すことができなかった。

＊

「男って大変ねえ」

波間から顔を覗かせつつ、光宮はすごすごとベース・キャンプを去って行く中也とシヴァを笑いながら見つめていた。

「大変って言うのかな。でもちょっと意外だよ」

「何が？」

「てっきり全員こっちに来るかと思った」

「ジョーダンやめてよね。あたしはイヤよ。傍観専門なの」

濡れそぼったプラチナ・ブロンドを指でかきあげながら、ルナが楽しそうに笑う。月光の淡い光の元、髪に隠されていた豊かな胸が露わになる。それを見て、光宮はついついルナの胸を凝視してしまっていた。

「すっごい気持ちよさそうなオッパイね」

「羨ましい？」

「まあね」

普段は胸の大きさなど気にしないのだが、やはりこういう時は大きな胸に憧れてしまう。どうせ見せびらかすなら、大きい方がいいに決まっている。

「なっちゃんは来ねえんだな、やっぱり」

「当然よ。あの子が他の男の前で脱ぐワケないじゃない。大好きで堪らない男がいるんだもの」

「そりゃそうだ」

海の中から現れたレイが砂浜を見ながらそう言った。ウェーブがかかったストロベリー・ブロンドが絡みつく白い体は、まるで人魚のようだと思う。伝説やお伽噺でしか語られない人魚だが、もしも現実に存在しているならきっとレイのような姿をしているに違いない。根拠も無く、そう思った。

「さてと、じゃあ私は先に上がるわね」

軽く頭を振って思考を切り替え、光宮は手に持っていた衣服を上から羽織る。濡れてしまっているが、無いよりマシだ。

「もう上がるの？　もっと泳ごうよ」

「残念だけど、ちょっとやっておきたいことがあるの。さっさと帰りたいでしょ？」

「まあな」

「そういうことで。じゃあ、楽しんで」

レイとルナに軽く笑いかけ、光宮は1人だけ先に海岸を目指した。

砂浜には靴とスカートが置いてある。下着は付けたままだったので、このまま着てしまおうかちょっと悩んだ。

（汗まみれ泥まみれだったから泳いだのはいいけど、乾かすのが大変だわ）

そう思いながらも、とりあえずスカートと靴は身に付けた。

「もう上がったの？　もうちょっと泳いでればよかったのに」

呑気な声に振り向けば、予想通りそこにフェンリルが立っている。

「やることがあるのよ。忙しいの」

「へえ。やることって？」

「あんたには関係ないわ。ほっといて」

冷たくそう言って、光宮は船の方に向かって歩き始めた。なぜか、後ろから彼が付いてくる。

「関係ないって酷くね？　俺ら、同じチームじゃん」

「手伝う気がない人を仲間だと認めるほど、私は優しくないの」

「だって俺が手伝ったらダメって言われてるし」

「あっそう。だったらなおさらよ。ジャマしないで」

「しないって。見てるだけだよ」

浅瀬から縄梯子が降ろされている位置まで歩き、頼りなく風に揺れているそれに手をかけた。

「付いて来ないでよ」

「俺も船に用事」

「だったらお先にどうぞ」

下から付いて来られるとスカートの中が丸見えになる。それだけはイヤだ。そう思って、光宮は場所を譲った。

「ざ～んねん」

「いいからさっさと行ってよ」

何が残念なのか分からないが、とりあえず身振り手振りでさっさと登るように促す。軽く笑った後、フェンリルは身軽に縄梯子を登り始めた。ある程度の時間を置いて、光宮は自分も縄梯子に手をかける。不安定に揺れる縄梯子は本当に登りにくい。顔を顰めながら

も上まで登ると、上からフェンリルが手を差し伸べて来た。

「けっこうよ」

「そんなに嫌うなって。何にもしてないじゃん」

「嫌ってないわよ。ジャマなだけ」

「ひで～」

腕の力を使ってデッキへと登る。航海中は人で溢れていたデッキだが、今はしんと静まり返って朝を待っていた。そのまま船室へ続くドアまで移動し、階段の方へと向かった。船の中は何とも言えない臭いで満ちている。潮の臭い、人の体臭、食事の臭い。それらが入り混じった臭いは、とてもいい臭いだとは思えなかった。

「どこ行くの？」

「貨物室」

「へえ～。何か用事？」

「用事があるから行くのよ！　付いて来ないで！」

振り返って強い口調で言えば、フェンリルが少しばかり驚いたよ

うな顔をした。理由もないのに声を荒げてしまったことに、自己嫌悪を感じる。悪いことをしたような気になったが、謝ろうとは思わなかった。内心に蟠(わだかま)るもやもやした気持ちを溜め息と一緒に吐き出し、光宮は身を翻す。

（付き合ってられないわ。さっさとやること済ませないと）

そう思って歩き出した時、腕を掴まれて引き寄せられた。

「ちょっと何すんのよ。放して」

身を引こうと後退りすると、すぐ後ろに壁があることに気付いた。慌てて逃げようとした瞬間、彼が両腕を壁について逃げ場を奪ってしまう。カンテラが照らす淡い光の中、綺麗な顔立ちが間近にあった。

「……」

思わず息を飲んでその姿を見つめてしまったところで、フェンリルが軽く笑った。

「そんなに嫌うなよ。俺、けっこう本気で光のこと好きだぜ」

「……」

「好きな子に嫌われるって、辛いじゃん」

陶器のような白い肌に、闇色の瞳。初めて見た時から思っていたが、フェンリルは本当に他人を魅了する姿をしている。こんな男に好きだと言われて、心が揺らがない女の子がいたら会ってみたい。そう思うものの……。

「残念だけど、私はあんたのこと好きじゃないわ」

「なんで？」

「何でかしらね。そうね、敢えて言うなら……あんた、血の匂いがするのよ」

はっきり断言すると、フェンリルが意外そうな顔をした。

「俺、どこもケガしてないよ？」

「……そういう意味じゃないわよ」

この男はどうやら夏葉と同類らしい。遠まわしに言っても理解できないタイプの人間と言えば、自分の周りには夏葉しかいない。

「あんたが怖いのよ」

「へえ？」

「とても残酷な目をしている。そんな気がするの。だからできれば関わりたくないわ」

そう言って、彼の腕を押しのける。予想に反して、自分を閉じ込めていた腕はあっさり外れた。

「光に酷いことはしないよ。俺がどんなヤツでもね」

背後から聞こえてきた声に振り向いてしまったものの、何を言うべきか分からず、そのまま踵を返す。それは誰かから命令されているからか、と聞こうと思って止めておいた。

（こいつが命令に従うとしたら、１人しかいないじゃない）

始動３４（後書き）

「ガンダム見ようぜ～」
かつて（頭の中だけ）バラ色だった高校生時代のある日のこと。暗黒の歴史を築きあげることで周囲に恐れられていた友人Ｘ（ゆうじんエックス）が、ダビングしたビデオ・テープを手に遊びに来ました。
「ガンダムかよ……」
鋼鉄の冷た～い肉体よりかは、生身の温か～い肉体が好きだった作者はあまり興味を惹かれなかったのですが、友人Ｘはそんな作者の反応を予想していたかのようにフトコロという名のカバンから一冊の同人誌を取り出しました。

そこには、どこかの学校の教室にて、カッターシャツ１枚で笑っている美少女の姿が！　早い話エロ本ですわ（笑）長い栗色の髪を背で三つ編みにした美少女はまさしく作者の好みの超！ストライク・ゾーンでございました。内容はですね、世の男性ならば最初から最後まで目を離すことができないような、と言いますか、鼻血ものと言いますか、うひょうひょひょ的と言いますか……。要するに、かなり絵が綺麗なエロ本だったわけです。

「この子がヒロイン？　カワイイな！」
「だろ？　だろ？」
「原作見たいわ！　見せてや！」
「おっけい！！」

と、言うワケで。とんでもねー先入観を植え付けられていることに気づかないままガンダムＷを視聴開始。

「こちらデュオ！」

というその声を聞いた瞬間、作者の中で何かが音を立てて崩れました。

「こいつ、男かよっ！？」

思わず背後を振り向けば、友人Ｘが腹を抱えて笑い転げておりました……。

いや、マジですよ。コレ、ホントにあった話です。

夢と希望と（下半身の）情熱を返してくれー！！という作者のガンダム日記は、明日へ続きます（笑）

始動35

階段を使い、貨物室へやって来た光宮は、まず手近なカンテラに明かりを入れた。

「で、何であんたはまだ付いて来るのよ」

「別に～。気にしないで～」

火薬の臭い、乾燥した食料の臭い、家畜のエサとなる干草の臭い……光宮は、いろいろな臭いが混ざりあった空気を肺いっぱいに吸い込んで、ついつい口にしそうになる文句を飲み込んだ。

（相手にしないに越したことはないわ）

用事も無いのに付き纏う背後の人間を鬱陶しく思わないでもなかったが、今は気にしても仕方がない。そう達観して、彼女はカンテラを手に貨物室を進む。

（アイテムの準備をしないと）

一歩を進むごとに、湿った床がギシリと音をたてる。視界の端を、一匹のネズミが横切って行った。出来る限り清潔に保とうと

努力されているにも関わらず、害獣はどこからともなく入りこむものだ。

（まるで誰かさんみたいだわ）

無言で付いて来るフェンリルの方をチラリと見ながら、光宮は小さく溜め息を漏らした。

（普通にしてればカッコいいのに……）

そう思うと残念ではある。世の男たちが美少女に憧れるのと同じで、世の女たちも美少年あるいは美青年に心惹かれてしまうものなのだ。

（私も一応、女の子なのよね）

そう思うと、胸の奥が微かな痛みを訴える。

（普通に恋愛とかできればいいのに……）

国のこと、政治のこと、軍のこと。自分には考えなければならないことや、知らなくてはならないことが多すぎる。何もかも忘れて、好きになった男のことだけ考えていられればいいという立

場ではないし、そういったことは許されない。随分と前に、そういった甘い期待はタヌキの異名を持つ秋軍将によって叩き潰された。

（王女って面倒だわ、ホント）

自分の出生について、かつては女神を怨んだこともある。しかし、今となってはそれを受け入れていた。一国の重要な立場に生まれてしまったのだから仕方がない。この世に生を受けた瞬間に否応なく背負わされた義務や責任を果たしつつ、王女にしかできないことを楽しんで生きて行くだけだ。

「大タル爆弾？　もう爆薬を詰めんの？」

「そうよ。明日の朝一番で落とし穴を掘ったエリアに運ぶわ」

「別々に運んだ方がいいんじゃね？」

「大丈夫よ。導火線に点火しない限り起爆しないわ。爆薬とタルを別々に運ぶ手間を省いた方がいいわ」

「ふ～ん」

大タル爆弾に使用するタルは、水に濡れてしまえば、中に爆薬を詰めても起爆しないという可能性がある。タルの中身がワインや水であれば海面に浮かべて運びこんでも問題ないのだが、大タル爆弾に使用するタルの場合は必ず小舟を用意し、それに乗せて舷側の横まで運ぶ。そして縄をかけて引き上げるのだ。小舟を降ろすだけでも時間がかかる。それに、いつモンスターが襲ってくるともしれないフィールドで呑気に爆弾の調合などしていられない。それくらいなら、ある程度の安全性が保障されているベース・キャンプの船の中で、できることはやってしまった方がいい。

「タルは問題ナシだわ」

乾麺などが詰められた木箱が並ぶ貨物室の一角に、光宮の腰ほどの高さのタルが４つ並んでいる。触ってみた感じ、完璧に乾燥していた。運搬の途中で海水をかぶったり、他のタルの水が零れてかかってしまった不良品ではないようだ。

「爆薬……爆薬……あ、これね」

大タルの近くに、「超・危険！　爆薬」と大きく書かれた木箱が４つあった。フタを開けると、中には紙袋に詰められた火薬が整然と並んでいる。

「作り方は分かる？」

「当たり前でしょ。とっくに調べてあるわよ、そんなもの」

「ふ～ん」

出港前に本で読んだ大タル爆弾の作り方を思い出しながら、光宮は紙袋に包まれた爆薬を手に取った。それを、漏斗を使ってタルのフタに開けられている直径５センチほどの穴から慎重に流し込んで行く。

（タル１つにつき、爆薬の量は１０キロまで。つまり紙袋１０個分だわ）

数え間違えないように集中しつつ、５袋分の爆薬をタルに流し入れる。そして爆薬の袋と同じ木箱に入っていた縄を手に取った。

（導火線は、爆薬を５袋入れた後でタルに入れる。長さは１メー

トル。タルの外に出ている部分は状況に応じて長さを変える）

巻き尺で長さを測り、ちょうど１メートル分をタルの中に入れる。この縄には爆薬が練り込んであるため、普通の縄に点火するよりも、かなり早いスピードで大タル爆弾を起爆することができる。落とし穴にかかったモンスターがいつまでも落ちたままでいてくれる保障はないので、起爆するならば早い方がいい。

（できれば落とし穴の底に木の杭なんかを仕掛けて、クックが落ちたと同時に足の骨くらい折れるようにしておきたいわね。明日レイに言ってみようかしら）

そんな計画を思い浮かべながら、導火線となる縄を避けて残りの爆薬を流しこんでいく。１０袋分すべてを入れ終わった後で、軽くタルを揺すって中の爆薬を均等にする。最後に、爆薬を流しこんだ穴を綿で塞いで終了だ。

「前から思ってたけど、けっこう勉強してるんだね」

「そりゃそうよ。死にたくないもの。調べられることは調べてお

くに越したことはないわ」

「そんなもんかな」

「そんなもんよ」

「俺、未だに大タル爆弾の作り方なんて分かんないよ」

「そう」

つまり、フェンリルは、そういった知識が無くてもクエストを生き残って来れたということだ。

（油断できないわね、こいつ）

自分たちに言っていることと、推測できる状況が違っている。

（そうは見えないけど、私たちの護衛はリースよりむしろこいつの方じゃないかしら。そうでないと、こんなふざけたヤツがギルド・ナイトに任命されるはずないもの。リースは、ただの目くらましってところかしら）

そう言えば、クエストに出るメンバーを決める際、彼はその場にいなかった。銀レウスを人に預けて来ると言って、出かけてい

たはずだ。

「ねえ、あんた」

「何〜？」

「夏葉のこと、どう思ってる？」

「何、いきなり」

「別に。だって夏葉がいちばん美人じゃない。男から見て、あの子はどう？　将兄の婚約者じゃなかったら、やっぱり手を出してみたくなる？」

フィールドという危険な場所に大事な婚約者を放り込むのだ。

あの将兄が、それなりに腕が立つ護衛を付けないはずはない。もし彼がそうだとしたら、むしろフェンリルは夏葉と同じチームになりたかったのではないか。そう思って、光宮は誘導的な質問を投げかけてみた。

「なっちゃんはムリ」

「そうなの？　意外だわ」

「そうでもないよ。俺、あの子のこと、嫌いだから」

「そう……」

フェンリルから返って来た答えは、光宮の予想に反していた。

（やっぱり、ただのヘタレなのかしら……）

内心でそう結論付けながら、光宮は残りのタルに爆薬を詰めていく。気になるのは、夏葉のことが嫌いだと断言した根拠である。

「夏葉が何かしたの？　言っとくけど、あの子は本当にただのボケだから、言ってることとやってることにウラはないわよ」

「何かされたワケじゃないけど。ん～、何となく」

「あんたは“何となく”で人を嫌うの？」

「まあね。ダメ？」

「それは私がどうこう言える問題じゃないわ」

好きだと思うのも他人の自由なら、嫌いだと思うのもまた他人の自由だ。フェンリルと夏葉は別チームだから、とりあえず人間関係のこじれからクエストの達成が難しくなるということもない

だろう。

（放っておいても大丈夫そうね）

そう思いながら、光宮は最後のタルに爆薬を詰め終わり、一息ついて立ち上がる。導火線を仕込むのはひとつだけで充分だから、残り3つのタルにはそこまで手間はかからない。

「次はネットね。ネットを出しておかないと」

掘った落とし穴をモンスターの目から隠すために、ツタの葉を粘着性のあるクモの巣で編み込んだネットは、必需品だ。

「ネットならここだよ」

「どうも」

「いいえ」

フェンリルが指差した木箱のフタを取って中身を確認する。中にはちゃんとネットが入っていた。

「俺ってそんなに信用ない？」

「確認は大事よ。ネットって書いてあるからって中身がネットと

は限らないでしょ？　いざって時に中身が違ってたなんてシャレにもならないわ」

「慎重だねえ～」

「当然よ。私はレイとかルナみたいに強くないもの」

「へえ」

大タル爆弾とネットの準備は整った。

「あとは……ペイント・ボールと音爆弾ね」

カンテラの明かりを頼りに、光宮は積み上げられている木箱の文字を見て回る。

「あ、あった。何でこんなところにあるのよ。出せないじゃない」

「手伝おうか？」

「けっこうよ。そこでじっとしていてちょうだい」

「は～いはい」

目的の木箱は４段に積まれている木箱の一番下にあった。早

目に準備しに来て良かったと思うのはこういう時である。明日の朝になってあたふたしたくない。カンテラを床に置き、さっそく上段の木箱に腕を伸ばしてみる。

「う～！」

上段に積まれている木箱は、中にコメでも詰められているのか、けっこうな重さがあった。おまけに、自分の身長よりも高い位置にあるので、なかなか思ったように動かせない。

（どうしよう……）

一番上の木箱を何とか取り出せても、おそらく自分のことだから降ろした瞬間、下に落としてしまうだろう。それはできる限り避けたい。

（下の木箱だけを力任せに引っ張ったら、うまい具合に取れないかしら）

そう思って、光宮は下の木箱を引っ張ってみる。だが、現実はそううまくいかないものだ。目的の木箱は、押しても引いて

もビクともしなかった。

「うう～！！」

額に汗を浮かべながら四苦八苦していると、背後でそれを見ていたフェンリルの笑い声が聞こえてくる。

「何よ！　笑わなくてもいいじゃない！　重いんだから仕方ないでしょ！？」

「ごめん、ごめん。なんか、おもしろくてさ」

「悪かったわね！」

「いや、悪くないって。これくらい手伝うよ。どいて」

近寄って来たフェンリルに肩を押され、反射的に場所を譲ってしまった。自分の手が届かなかった上段の木箱を、フェンリルは簡単に抱え上げて床に降ろしてしまう。

「はい、どうぞ。どこに置く？」

「こっち。まとめておいて」

「はいはい」

フェンリルが目的の木箱を大タル爆弾とネットの傍に置く傍ら、光宮は床に降ろされた木箱を元通りの位置に戻していく。抱え上げることができなかったので、下段の一箱は力技で押して元の位置に戻した。

「置いといていいよ。俺がやるから」

「……」

何となく悔しいような気もしたが、彼に任せた方が早いという事実に思い至って口を噤む。

「今日はこれでお終い？」

「その予定」

「りょーかい」

木箱を元通り直してくれるフェンリルから意図的に視線を逸らし、手短に答えた。

「えっと……」

「なに？」

「手伝ってくれて、ありがとう」

「どういたしまして」

にっこり笑われて、何だか無性に恥ずかしくなった。

「さっさと戻ろうぜ。明日も早いんだろ？」

「ええ、まあね」

肩を叩かれて、貨物室の出口へと促される。踵を返した瞬間、光宮の耳にイヤな音が聞こえてきた。

「ああー！？」

叫んだのは2人同時だった。

「ちょっと、あんた……！」

「マジで！？」

「早く！　早く水！　みず！！」

床に置いていたカンテラをフェンリルが蹴ってしまったらしい。しかも、カンテラが倒れた先にあったのは、大タル爆弾に続く導火線であった……。

「み、みず！　みず！　水ってどこ！？」

「どっかにあるわよ！　探して！」

「あ、あった！　これだ！！」

慌てふためきながら、２人は水が詰まっていると思われるタルのフタをブチ破る。その間にも、導火線は火花を上げつつ爆薬が詰まった大タルに向かって床を這って行っていた。

「あ、ダメ！　これ違うわ！　これ、油よ！！」

「ウソ！？」

「ああー！！」

ヤバいと思った瞬間にはもう遅かった。すでにタルは傾き、中に詰め込まれていた油は、導火線に向かって零れ落ちて行っている。油が導火線に触れるまでのその一瞬が、光宮の目には妙にゆっくりと映った。

「ヤバい、ヤバい！！　逃げろ！！」

「……私、ここで死ぬんだわ」

いっそ清々しいほどの気持ちで自らの人生の終わりを実感した時、フェンリルに腕を掴まれる。傍にあった窓を叩き割って海に飛びこんだのと、大タル爆弾が起爆したのが、ほぼ同時だった。

「……」

海面から顔を出すと、たった今まで乗っていたガレオン船の船尾から火の手がもうもうと立ち上っているのが見えた。静まり返っていたデッキに、右往左往しながら叫び声を上げている船員たちの姿が映る。

「……」

せっかく掘った落とし穴も、せっかく準備したアイテムも、せっかく頭を悩ませた計画も……。

すべて水の泡になってしまった。

「あはは……あは……ははは……」

もう、笑うしかなかった。

「あんた、キライ……ホントにキライ……この世の果てから大キライ……」

「じ、自分の行動に……ウケてるよ……俺……」

「あんた、ホントにアホよね……これ以上ないほどアホだわ……。世界で一番のドアホーよ……」

「ここまで……するつもり、なかっ……」

海面に浮かんだまま、光宮とフェンリルは揃って腹を抱えて笑っていた。それしかできなかった、とも言うかもしれない。どうやってアルテリアまで帰ろうか、とか、クエストはどうするのか、とか、スパークしてしまった頭では考えることができなかった。

「どうしよう……」

「私に、聞かないで……」

＊

いろいろな意味でスッキリした中也がフィールドから戻って来た時、夜の静寂を切り裂く大爆発の音が鼓膜を揺るがした。

「……」

唖然としてその光景を見つめる中也の目の前で、船尾のマストが唸りを上げながらゆっくりと海面に向かって沈みこんで行く。

デッキには慌てふためく船員たちの姿がある。火を消そうと足掻く者、指示を出す者、逃げ出す者……そこはまるで戦場のような光景であった。

「なぜ？」

ぽっかりと空いた胸の奥にふと浮かんだ言葉を、中也はつい口の端に乗せてしまっていた……。

始動３５（後書き）

「すっげ～“オイシイ”エロ本ゲットしたんだけど。見る？」
高校生活も終わりに近づこうとしていたある日のこと。光輝ある歴史を破壊することで恐れられていた友人Ｚ（ゆうじんゼット）がそんなことを言って参りました。

見ないはずないじゃないですか……（切実）。

というワケで、友人Ｚに勧められるままエロ本を広げてみました。
そこには、雨が降りしきる紫陽花の庭園に、真っ白なキャミソール姿で蹲る美少女の姿が！！　超ストライク・ゾーンでございました。
何とも言えない憂いのある表情と言い、綺麗な顔立ちといい、細い体といい……もう「うひょひょひょ」としか言い様がございませんでした。

「どうどう！？」
「サイコー……。これ二次創作？」
「そう。原作はガンダムＳＥＥＤ」
「へえ～」

ガンダムＷＩＮＧの時と同様、とんでもねー先入観を植え付けられていることに気づかないまま、作者はその日の帰り道、そのままレンタル・ビデオ・ショップに向かいました。そこでガンダムＳＥＥＤを借りようとしていた小学生の手からＤＶＤを掠め取り、後ろ指を差されながらもルンルン♪な気持ちで帰宅。

視聴開始から数分後、騙されていたことに気づきました。

「こいつ、男かよっ！！」

翌日、友人Ｚにその話をすると、「言ってなかったっけ？」とかる～くかわされてしまいました。

それにしても……全く面識がないはずの友人Ｘと友人Ｚが、全く同じ手口を使って他人の夢と希望と（下半身の）情熱を叩き潰したという、この事実。

きっと宇宙人の仕業です。

以後、ガンダムという単語に、妙に警戒してしまう作者のガンダム日記は、更に明日へと続きます……（笑）

始動３６

「マストが一本やられた。２本でも何とか走行は可能だが、その分スピードは落ちる。言いかえれば、本国に着くまでそれだけ時間がかかると言うことだ」

救出作業と消火作業、そして避難作業で眠れぬ夜を明かした翌朝、苦い顔をした船長が中也たちに向かってそう言って来た。

「おまけに、爆弾が起爆したのが貨物室だったらしいということでね、帰りの分の食料や水、そういった物資がすべて燃えてしまったということだ。つまり……」

「どうにかして物資を補給しないと全員が干上がるってことよね。言われなくても分かってるわよ」

「そういうことだ」

その整った顔立ちに疲れ切った表情を乗せた光宮が、どうにでもなれと言わんばかりの口調で吐き捨てる。口調を変えないまま、船長は短く頷き、改めて中也たちを見渡した。

「とりあえず針路を東に固定できるまででいい。風向きにもよるが、だいたい1週間分だ」

針路を東に固定する、とは、つまり大海を抜けてシエンナ内海に入るということを意味する。言いかえれば、モンスターの世界から人の世界へ帰って行くまで、ということだ。

「1週間分の食料と水を確保するために、船員を割いて物資の補給作業を行う。悪いが、君たちハンターもそれなりの人員を割いてその護衛をして欲しい。分かっていると思うが、人の手が無くなれば船は動かない。俺の船を動かすには最低でも200人は必要なんだ。人手が足りなくなって船が動かせないようなことになれば、それは君たちもアルテリアへ戻れないのだということを理解してほしい」

船長の口調は極めて冷静だった。だが、その表情はどう見ても強張っている。

（当然だな。自分の船を壊されたんだから）

船長にとって船とは永遠の恋人のようなものだと聞く。自分の恋人が傷付けられて黙っていられる男はいないだろう。むしろ、船を破壊した原因を前にしてこれだけ冷静さを保てるという方が感心させられた。

「護衛をするための人数は割くよ。で、修理はどれくらいで終わりそうなんだ？」

「早くて3日だ。貨物室には船の応急処置をするための木材も積み込まれていた。修理するためには、近場のエリアを回って木を切り出すところから始めなくてはならない」

光宮と同様、疲れ切った顔をして佇むリースの質問にも、船長は淡々とした口調で答える。中也たちとは対照的に、船長の顔には疲れの色合いは全く浮かんでいなかった。

（さすが、当直の仕事をしてるだけあるよな）

走行中の帆船上では、乗組員全員が一時に眠ることはない。当直という形でシフトを組み、交代制で任務にあたるのが常だ。下

っ端の船員であれば昼と夜が逆転する程度のことだが、船長クラスになるとそうも言っていられない。時間と状況を見て、眠れる時に眠るというのが常らしい。細切れの睡眠、と言えば簡単に聞こえるが、実際にやってみると、けっこう辛いものだと聞く。

（1日や2日くらい寝なくたって平気ってか？　すげえよな、ホント）

過酷な船上での仕事をこなす海の男の強さというものを、中也はその時、深く実感した。

（俺なんて、もうボロボロだってのに）

一晩中オロオロしていたせいで、身も心も疲れ切っている。仮に今、何か欲しいものはあるかと聞かれたら、真っ先に睡眠時間と答えるだろう。

「15分で準備する。そっちも、そのつもりで動いてくれや」

「了解した」

短く答えた船長が踵を返す。彼が向かった先には、焼け焦げて

無残な姿になり果てたガレオン船が、風に頼りなく揺れていた。
どこまでも水色の浅瀬に、木端がまるで汚点のように浮いている。
それを見ると、何だか胸が痛んだ。
「さて、聞いたな」
軽く溜め息を落としたリースが、中也たちの方を向き直る。
「イャンクックの討伐を2チームで競争って話だったが、こういう事態になっちまったんで、それはナシだ。ただ、クックの討伐は続ける。残りの4人で船員さんたちの護衛に当たる。将兄には俺から説明するから、とりあえず討伐チームになっても護衛チームになっても評価は同じだ。分かったな?」
誰も何も答えない。何でも良かった。とりあえず、無事に国へ戻れるならそれでいい。そんな気がした。
「組み分けだが、これは個人の希望を聞くべきだと思う。討伐チームか護衛チームか、どっちに入りたいか、1人ずつ言ってくれ」
そう言われて、中也たちはそれぞれ顔を見合わせた。いつもな

らば、真っ先に討伐チームに名乗りを挙げると思われるレイとルナでさえ、黙り込んだままだった。

「私は討伐チームに入りたいわ」

沈黙を破り、リースに向かってそう言ったのは光宮である。

「珍しいな、光」

「当然よ。私はこのフィールドで他人の命を預かれるような実力なんてないもの。提案なんだけど、レイとルナ、それから夏葉は護衛チームに入るべきだと思うわ」

「それは、また何で？」

「分からない？　今のところ、私たちの中で実力が保障できるのがその3人だからよ。護衛チームにはリース、あんたが付いて。残りの中也とシヴァ、それから私はフェンリルを連れてクックの討伐をするわ。意義があるなら聞いてあげないでもないけど、どうかしら」

残りもの扱いをされてしまった中也とシヴァは互いに顔を見合

わせる。シヴァは生気のない青い顔で呆然と砂浜に座っていた。
おそらく、自分も似たような表情をしているだろう。
「意義はないようね」
しばらく待っても誰も何も言わないので、光宮はそれで大丈夫だと思ったらしい。円陣を組んで座っていた彼らの中で、真っ先に立ち上がって砂を払った。
「いつまでもボケっとしてんじゃないわよ。ほら、早く立って。あんたたちの気力とは反対に、やらないといけないことはいっぱいあるのよ。さあ、シャキっとしてちょうだい」
彼女に促されるようにして、中也たちは重い腰を上げる。これからクエストか、と思うと、何だかとても億劫だった。
＊
「ネットは無くなってしまったけど、昨日あたしたちが掘った落とし穴はまだ使えるわ。クックをうまいこと誘導して、落とし穴に落としましょう。爆弾が無くなってしまった分、穴の底に何か

仕掛けたいところだけど、何かいい手はない？」

レイとルナ、そして夏葉にリースが船員の護衛に向かった後、中也たちはギルドからの支給品が入った木箱を囲んで顔を突き合わせていた。

「普通に考えれば木の杭かな。先を尖らせて、穴の底に仕込めば、クックが落ちた時けっこうダメージが与えられる。問題は船員の人たちが伐採した木を分けてくれるかどうかってことだけど」

「それは私も考えたわ。でも、中也。木の杭を作るだけで1日はかかるわよ。それに、木の杭を使った罠を作ったところで、クックがちゃんと落ちるかどうか保障はないわ。それを考えたら、時間と手間を使って木の杭を作ってもムダになる可能性の方が大きいんじゃないかしら」

「確かに……」

光宮の言うことには一理ある。それだけの手間と時間を使ってクックが罠に落ちなければ、すべてムダになる。

「なあ、そもそも落とし罠の目的ってのは、モンスターの動きを止めて狙いやすくすることだ～な。だったらいっそ閃光玉とかを使ってみるって～のはどうだ？」

「ダメよ。クックは閃光玉で目が眩んだ瞬間、暴れ出すっていう特徴があるわ。閃光玉を使って効率よく戦えるのは遠距離武器の私だけだわ。接近武器のあんたたちには危険の方が大きいもの。私は反対よ」

「なるほ～どな。だったらもう、当たって砕ける肉弾戦しかないんじゃねえか～な？　音爆弾も大タル爆弾もネットも燃えちまったんだ～ろ？　もう閃光玉くらいしか残ってねえ～ぞ」

「それがイヤだからこうして頭を悩ませてるんじゃない。あんたも人間なら少しは頭を使うことを覚えなさいよ、シヴァ」

「……ごめんだ～ぞ」

「分かればいいわ」

しかし、シヴァの頭が悪いという事実を再確認したところで事

態には何の好転もない。支給品はほとんど無い。かろうじて残ったのは閃光玉だけだが、閃光玉を使うには危険が伴う。

（だったら、どうすればお気に召すっていうんだよ）

クエストを安全に終えるために何だかんだと考えている光宮の気持ちは分からないではない。だが、だからと言って、自分たちが提案した意見をことごとく却下されれば、中也にはもう、シヴァの言う通り、当たって砕けろという作戦しか残されていない気がした。

「船の残骸……」

ふと、光宮が呟いた。

「船の残骸が使えるわ」

「どうやって」

「バカね。杭の代わりにするのよ。爆発の影響で木の板はどれも切れ端がギザギザになってるでしょ？　それでクックの足が傷付くかどうかは分からないけど、無いよりマシだわ。穴の底に埋め

るのよ。それなら、手間も時間もかからない。あと、油を撒いておくっていうのはどうかしら。木の板は湿ってるけど、油を撒いておけば火を付ければ燃えるわ」

「クックは火の属性を持つモンスターだろ？　燃やしたところでダメージを与えられるかな」

ベテランのハンターがイャンクックを討伐する際は、必ずと言っていい確立で氷や水の属性を持つ武器を携帯する。言いかえれば、イャンクックは火では殺しにくいということもできる。

「そうか、じゃあ油がムダになるだけね」

「たぶん。なあ、逆にクックを頭から落としてみるってのはどうだろ」

「どういうこと？」

「頭から落とせれば、落とし穴に嵌めていられる時間も長くなるだろ？　その分ダメージも与えられるよ」

「……なるほど。問題はどうやって頭から落とすかってことね」

「こういうのはどうかな。落とし穴の横に、すぐに倒せるようにした木を仕掛けておくんだ。クックが落とし穴の方に向かって突進して来たら、縄でも何でもいいから、それを切って木を倒すんだ。クックが木に躓いてこけたら、そのまま頭から落とし穴に落ちるんじゃないか？」

「……中也、それくらいなら木をクックの頭にブツけた方がいいんじゃないか～な？　むしろ、木を転がすより、溝を掘る方が確実だと思う～ぞ」

「……そうかも」

睡眠不足のせいか、とんでもなくバカげたことを本気で考えていたことに自分で驚いた。

「溝を掘るっていうのは賛成だわ。とにかく、クックを転ばせて頭から落とせればいいんだもの」

「うまくいけば、首の骨が折れるかもしれない。さっそく木の板を集めようぜ」

「分かったわ」

中也、シヴァそして光宮がお互いに頷き合い、立ち上がる。それを見て、少し離れた場所で呑気に昼寝していたフェンリルが身を起こした。

「作戦会議は終わった～？」

「終わったよ」

「ふ～ん、そう」

背中の砂を払いながら、フェンリルが意味深な笑みを浮かべる。

「言っとくけど、タイム・リミットは明日までだからね」

彼の口から飛び出したとんでもない言葉に、３人は思わず顔色を変えた。

「はあ！？　聞いてないわよ、そんな話！！」

「まあね。だって、今、言ったもん」

あっけらかんと言われて、余計に頭の中が真っ白になる。

「何でか教えてあげようか。初めての場所に連れて来られたモン

スターが、その場所に居座るのはだいたい3日かそれくらいなんだってさ。普通は元いた場所に戻ろうと思ってすぐに移動するモンなんだって。だからクエストは3日が期限なんだよ」

「……初めての場所に、連れて来られた？　どういう意味だよ」

答えは分かっているものの、思わず聞き返さずにはいられなかった。中也の質問に、フェンリルは相変わらず見惚れるような笑顔を崩さないまま言葉を続ける。

「そのまんま。だって考えてみなよ。初心者ハンターの登竜門にはイャンクックが選ばれることが多いけどさ、そんな都合よくここにクックがいるはずないじゃん」

「……つまり、俺らのために誰かがクックを捕獲して連れて来たってことか？」

「そういうこと。俺らの努力をムダにしないためにも、頑張って討伐してね」

中也の横で、光宮が拳を握りしめるのが見えた。

「サイテーね。何から何まで、あの男の手の平の上で遊ばされてるってことじゃない」

「そうらしいな」

始動３６（後書き）

引き続きガンダム・ネタでございます。

かつてないほどの（下半身の）情熱を、女体化した男に燃やすことになった作者と友人Ｚのその後であります。

ガンダムにハマった後、友人Ｚはとにかくネットで女体化した彼を取り扱うサイトを探しまくったそうです。そしてついに、ほとんどのエロ・サイトを制覇してしまい、読む物が無くなったと言っておりました。そこで諦めるかと言うと、そんなことはないのですよね……。そこで諦めるようなら、光輝ある歴史を破壊することで周囲に恐れられたりはいたしません。

そこで友人Ｚはどうしたかと言うと、自分で書き始めたそうです、エロを。

作者と同じく絵が苦手だったらしい友人Ｚは手軽な小説という手段を使い、自らの（下半身の）情熱と欲望をルーズリーフに叩きつけまくったとのことです。

ところが……友人Ｚが学校に行っている時、そのエロ小説が母親の目に触れてしまったという事件が発生したのだそうです。その日の夜、夕食の席で母親によるエロ小説の音読会が開催されたらしく……友人Ｚの妄想は家族の前で明るみに出たとのことです。

その後、ガンダム恐怖症になったらしい友人Ｚは、音信不通になりました。都会の大学に進学したということは知っているのですが、音読会の後、どうなったのか作者には分かりません。

ちなみに、作者はと言いますと、これまた女体化した男にハマり、ガンダムＳＥＥＤと（なぜか）名探偵コナンをコラボレーションした小説を（下半身の）情熱ひとつで書きあげたような記憶があります……。

始動37

「まあ～ったく、何だってこんなことになっちまったのかねえ～」

護衛チームとしてフィールドに入ることとなったリースは、鬱蒼と生い茂る木々の狭間に腰かけつつ、そう呟いていた。

「つまんねえ～」

周囲にモンスターの気配は無い。しかしながら、船員たちがノコギリや斧を使って木々を伐採する雑音が脳を揺さぶって気分が悪かった。静寂の森にこだまする人為的な音というのは、何ともいえず不快なものである。そんなことを改めて思いながら、リースは大きく伸びをした。

「何かおもしれえことねえかな～」

回りを見渡せば、船員たちに混じって木材の伐採や運搬を手伝っているレイ、ルナ、そして夏葉の姿が見える。

「よく働くことで。俺なら手伝ったりしねえな」

船員たちは金を貰ってハンターをフィールドへ送り届け、そし

て連れて帰る。それが仕事だ。金を払っている以上、自分たちは言わば「客」なのだ。客である自分たちが仕事を手伝うなど、有り得ない。

「だいたい、船に乗ってる連中なんざ、マトモな連中じゃあねえってのに」

自分のことは棚に上げて、リースはポケットから取り出した煙草に火を付ける。国内のどんな仕事でもなく、船員という仕事に付く連中とは、たいていが前科者だったり、きちんとした身分証明書を貰えない難民だったりする。要するに、落ちこぼれの集団だ。そんな連中の仕事を手伝うレイたちの気がしれない。

（お優しいことで）

口元に笑みを刻みつけつつ、木の葉が生い茂る頭上に向かって煙を吐き出した。モンスターが徘徊するフィールドで、煙草のように臭いがあるものは危険だと知っている。しかしながら一服せずにはいられない気分だったので仕方がない。

（モンスターが来たら戦えばいいさ）

自分は将兄に実力を認められてギルド・ナイトになったのだ。

その初仕事が新米の監督というのは些か納得しかねるが、それでも普通のハンターから1歩も2歩も先に進んだのだと思えば気分はいい。

（それにしても、綺麗な子ばっかりだな～）

中也とシヴァに関しては何ら興味も湧き上がらなかった。ついでに光宮に関しては、どうにもあの性格が苦手で仕方ない。だが、その3人以外についてはリースは興味を持っていた。

（どれから食おうかな……）

レイとルナは、軽く声をかけただけでも乗って来そうだ。問題があるとすれば夏葉だろう。

（将兄の婚約者じゃあ気軽に手は出せねえな）

万が一そのことが将兄に伝われば、まず間違いなく身の破滅を招く。性欲は大事だが、それによって身を滅ぼしては元も子もな

い。

（だったら、将兄に言えねえようなことしてやればいいだけさ）

薄く笑って、リースは夏葉の姿を遠目に観察した。手を出して来た人数はそれこそ両手で済まないということを自慢にしているリースだったが、未だに「胡蝶」という者は抱いたことが無かった。

（誘い通りの高嶺の花。一度でもその体を抱いた男は二度と他の女でイケなくなる、ってか。胡蝶の体がどんな味なのか興味あるしな）

大事な婚約者ならば、他の男の手が伸びないように籠に閉じ込めておけばいい。フィールドで危険なのは、何もモンスターだけではないのだ。どうやら、将兄はそのことを知らないらしい。

（俺みたいな男と一緒にクエストに放り込んだのが間違いなんだよ、将兄）

＊

一方、そのころ。澄んだ海面を汚す木端を集められるだけ集め、中也たちは再びフィールドに出ていた。

「モンスターの気配はナシだな」

「そうみたいね。シヴァ、足のケガは大丈夫？」

「大丈夫だ～ぞ」

「そう。良かったわ。でも、ムリそうだったら死ぬ前に言ってね。だからってどうしてあげることもできないけど」

「……分かった～ぞ」

ベース・キャンプを左側に進み、狭い砂浜だけのエリアを通り抜ける。その先にある波で削れた岩を潜れば、昨日、光宮たちが汗と泥に塗れながら掘った落とし穴があるエリアだ。

「作戦の最終確認よ。まずは、穴の底に木端を置く。それからクックをおびき寄せるために、エサを撒く。この場合は魚ね。時間が許すようなら、落とし穴の手前に溝を掘るわ。いい？」

「了解だ。さっさと済ませよう」

「大丈夫だ～ぞ」

3人揃って頷いたところで、中也は無意識に背後を振り返る。

そこには、相変わらずのんびりした足取りで付いて来るフェンリルの姿があった。光宮は、断固として「彼はベース・キャンプに繋いでおくべき」という主張をしていたのだが、その主張はリースによって退けられた。

（“クエスト達成を確認する者が必要”か……）

当然と言えば当然だろう。リースもフェンリルも、今回のクエストでは「監督者」として同行してきている。監督するべき相手から「付いて来るな」と言われたところで、付いて来ないわけにもいかないというところだろう。

（大丈夫かな……）

光宮から聞いた話を総合すると、どうやら昨日の爆破事件の原因はフェンリルであるらしい。音爆弾の件と言い、彼と一緒にい

ると不安が募る。

（きっと、本番になったらちゃんとしてくれるはず）

そう信じることにした。

「こっちのエリアにもイャンクックはいないわ。じゃあ、作戦通り、始めましょう」

波で削れた岩陰から半身を出して状況の確認をした光宮に言われ、中也とシヴァは黙って頷きながら背中の木端を背負い直した。

「ザコ・モンスターの気配もナシ。念のため、砂浜には近寄らない方がいいかもしれないわね。何て言ったかしら。えっと……そう、ヤオザミ。ヤオザミが下から狙ってくるかもしれないから」

「分かってるよ」

「俺も、もう懲りた～ぞ」

そんな会話をしながら、中也たちは足早にエリアを進み、中央付近にある落とし穴の方へと近寄って行った。足元に広がる腐葉土が、靴の底に絡みついて気持ち悪い。

（滑るかもしれないな……）

完全に土になってしまっている葉はともかく、まだ葉の原型が残っているものには注意が必要かもしれない。気を付けないと、葉に足を取られてこけてしまいそうだ。モンスターの前で無様に転がることは、そのまま身の危険を意味する。

「なあ、光」

「なに？」

腐葉土に注意しろ、と言おうとしたところで、ふと中也の脳裏に名案が浮かんだ。

「葉を集めて、落とし穴の前に置くっていうのはどうかな。見ての通り、すごく滑りやすいだろ？　ちょっと水でも油でもかければ、なおさらだよ。わざわざ溝を掘るより、手間はかからないと思う」

「なるほど。いい考えね」

光宮が納得したのを見て、隣にいたシヴァが笑顔を見せた。

「そうと決まれば、船から油を持ってく～るぞ」

「お願いするわ」

「りょ～か～い」

元来た道を引き返していくシヴァは、僅かに足を引きずっていた。大丈夫か、と思ったが、ここで心配されれば彼のプライドがより傷付くだろうと思って、敢えて何も言わなかった。

「じゃあ、私が先に下に降りるわ。中也、上から木端とショベルを渡してくれるかしら」

「分かった」

中也が頷いたのを見て、光宮が身軽に落とし穴の中に飛び込んだ。しかし、着地した瞬間、バランスを崩して思い切り顔から泥の中に突っ込む。

「お、おい、大丈夫か？」

「うるさいわね！　平気よ！　ほら、さっさと降ろして！」

「わ、分かったよ」

泥だらけの顔を上げながら、なおも強気の光宮に苦笑しつつ、中也はまず、穴を掘るためのショベルを光宮に手渡した。そして船の残骸である木端をどんどん下に降ろして行く。すべての木端を降ろし終えたところで、中也は自分も穴の中に飛び込んだ。

「早く済ませましょう」

「それには賛成」

中也が穴を掘り、そこに光宮が木端を突き刺す。彼女に手で支えておいて貰いながら、再び土を被せて固定していく。その作業を繰り返していた時、上からシヴァが顔を覗かせた。

「油もらって来た～ぞ！」

「ありがとう！　じゃあ、落とし穴の周りに葉っぱを集めて、油を撒いておいて貰える？」

「りょ～かいだ～ぞ！」

それぞれが自分の仕事に精を出し、やっとの思いで罠が完成した時にはすでに3時間が経過してしまっていた。

「あとはクックを待つだけね」

「……夜は、どうする？　俺は反対だけど」

「あたしもよ。夜中の密林なんてとんでもないわ。それくらいなら明日一日にかけた方がマシよ」

「そうだな」

意見が一致したところで、光宮は穴の周辺にいると思われるシヴァを呼んだ。

「どうした～？」

「上がれないの。引っ張って」

「りょ～かいだ～ぞ」

穴の上から手を差し伸べて来たシヴァの手を取り、光宮が先に穴から出て行った。それを見ながら、中也は自力で穴から這い出す。上半身を半分ほど穴から出したところで、シヴァが手を出してくれた。軽く笑って、その手を握る。

「悪いな」

「こういう時は“ありがとう”って言うべきなんだ～ぞ」

何だかどこかで聞いたことのあるセリフだと思い、中也は思わず苦笑した。

「……ありがとな」

「どういたしまして、だ～ぞ」

罠は完成した。イャンクックをおびき寄せるための魚も撒いてある。後は、モンスターがやって来て戦うだけだ……。

始動３７（後書き）

「セイント・星矢～♪　少年はみんな～♪　セイント・星矢～♪
明日の勇者～♪　オーイエー♪」

と、言うワケで「セイント・星矢」ネタでございます。

先週末、我が家にはヒマなオッサンたちが集まっておりました。そして何をしていたかと言いますと、ご察しの通り「セイント・星矢」のアニメを視聴しておりましたわけです。十代の方たち、ご存じでしょうか、セイント・星矢……（不安）

ええ……天界編の序章だったと思われるのですが、まあ、ホニャ年ぶりに見たセイント・星矢にオッサン一同と作者は非常に興奮いたしました。

なぜかと言いますと、終盤にて主人公の星矢がハダカで宙を舞っていたからです。決して変な意味ではなく、神聖さと光輝さが溢れ出る感動的なシーンだったのですが……オッサン一同は大爆笑でした。

「セイント・星矢～♪　少年はみんな～♪　セイント・星矢～♪
ハダカの勇者～♪」

それはまさしく、

「オーイエー♪」

ダメですね。オトナになると心が穢れると言いますか、屈折すると言いますか。いや、自分たちだけかもしれないのですが（汗）感動

的なシーンで普通に感動できないって悲しいです。

始動38

「ああ～、ヒマだ！」

時計の針が正午を2時間ばかり回ろうとする時刻、リースはつい、木の葉が生い茂る頭上を見上げて本音を零してしまっていた。

「ヒマなら手伝えばいいじゃねえか」

「ああ～？」

視線を前方に移すと、そこには大木を1人で肩に担ぎ上げたレイが呆れた顔で彼を見ている。

「ヤダね。俺は無料奉仕はしない主義なんだよ」

「あっそう」

だったら黙って座っていろ、とでも言わんばかりの口調で、彼女は木材が積み上げられた荷車の方に向かって歩き出してしまった。

「相変わらず怪力なことで……」

レイの後ろ姿を見つめながら、率直な感想を口にする。そしてふと、彼の脳裏に名案が浮かんだ。

「なあ、レイ」

事を起こすと決めた時のリースの行動はドスランポスよりも早い。

つい先ほどまでグラビモス級に重かった腰を颯爽と立ち上げ、彼はレイの後を追いかけた。

「何だよ」

「なあ、ちょっとばかりフケねえか？」

周囲にいる船員たちに聞こえないように敢えて小声で囁きかける。

その言葉に、レイが苦笑した。

「溜まってんのかよ」

「その通り。なあ、付き合えよ。自慢じゃねえが、俺はかなりウマいぜ？　感じさせてやるよ。どうだ？」

「勝手に言ってな。やることが済んだら相手してやるよ」

予想に反して、レイはあっさりと彼の誘いを断ってしまった。

「何だよ、つまんねえな」

肩に担いだ木材を荷車に降ろし、レイがそれを縄で固定する。そ

の作業が終わると、船員の男が3人がかりで荷車を引き始めた。

「くそ……」

舌打ちした後、リースは視線を巡らせて夏葉の姿を捉える。内心でニヤリと笑った後、彼は、伐採された木の枝を落とす作業をしている夏葉の方に近寄って行った。

「よお、がんばるね」

わざとらしいほど明るい声をかけ、リースは夏葉の横に並ぶ。他人、と呼ばれる間柄の人間にしては、少しばかり近い距離。しかしながら、露骨に振り払うには遠い、何とも微妙な距離を測り、彼は夏葉の隣に座りこんだ。

「こういう仕事とか慣れてねえだろ。辛くないか？」

「そうでもないです」

「ふうん。でも、夕べは徹夜で作業だったじゃねえか。寝ることが大好きなんだろ？　今、すげー眠いんじゃねえか？」

「そこまでじゃありません」

微妙な距離に座るリースに、少なからず夏葉は戸惑いを覚えているようだ。人形のようなその綺麗な顔立ちに、常にはない不快感のようなものが滲み出ている。

（将兄以外の男には、近付かれるのもイヤってか？　徹底してるねえ）

そんな風に思いつつ、枝の中に「何か」を発見したフリをして夏葉の方に身を寄せた。

「お、これ何だ？」

あからさまなウソを口にしつつ、偶然を装ってそれとなく右手で尻を掠める。その瞬間、身を強張らせた夏葉がその場を飛び退いた。

「何だ？　どうかしたか？」

ウブな反応だ、と内心で笑いを堪えつつ、表情と言葉にはそんな本音を一切、滲ませない。ここで少しでもニヤリとしてしまおうものなら、計画はすべて失敗だ。

「べ、別に……」

視線を逸らした夏葉が元通り、リースの隣に戻ってくる。しかし、確実に距離を置いていた。

「変なヤツだなあ。まあ、いいけどよ。それより、前から気になってたんだけどよ、お前ら鬼龍に会ったってホントか？」

「会った、というより……」

「でも見たんだろ？　どんなヤツだった？　昔から鬼龍には興味あったんだよ。何かないのかよ。男っぽかった、とか、女っぽかったとか、そういう話。聞かせてくれよ」

「たぶん、女の人だったと思います。何だか無気味な雰囲気で……」

「へえ、それで？」

もちろん、鬼龍に興味があるなど、真っ赤なウソだ。そんな伝説級のモンスターに興味など微塵もない。だが、鬼龍のことを聞きたくて仕方がない、という雰囲気を滲ませ、夏葉の方に身を寄せる。

「見たのは一瞬だったので、よく分かりません」

「へえ。やっぱり人の形をしてたんだろ？　身長とかは？　俺らと

変わらねえか？」

「たぶん……」

「髪の色とか、目の色とか、見てねえか？　鬼龍って美形が多いって話じゃねえか。顔は見てねえのか？」

「見てないです」

彼の質問に答える声は、言葉を重ねるにつれて素っ気なくなっていく。

「そうか～。残念だな～。本物の鬼龍に会ったヤツなんて初めて会えたと思ったんだが」

「……すみません」

「いや、いいさ。でも、やっぱり本当にいるんだなあ。ほら、よく言われるじゃねえか。鬼龍なんてただの伝説だってよ」

「そうですね」

「鬼龍に会えて生き延びたってのもスゲえよ。将兄が認めるワケだぜ。俺がお前らと同じ年のころなんて遊び呆けて……」

言いかけた言葉は、最後の方は音になることなく消えて行ってしまった。

「やべえ……来やがった」

木立の向こう側に、真っ白な羽毛が見え隠れしている。見た目はニワトリだが、その大きさはその１００倍近いだろうか。目の周りだけ黒い羽毛が生えた顔が特徴的なモンスター、ポポポップである。

「やべえな……」

ポポポップはあからさまにこちらに気付いている。木立の陰からこちらを窺いつつ、脚の爪で地面を掻いていた。

「ヤツは臆病だ。こっちから刺激しねえ限りは襲って来たりしねえ。黙ってどっかに行くのを待って……」

そう言いかけた時、夏葉の姿はすでに隣になかった。

「マジかよ！？」

その姿を探せば、夏葉は武器と防具が納めてある木箱の方へと走り出している。そこには、レイとルナの姿もあった。

「戦う気かよ……」

今回のクエストの討伐対象モンスターはイャンクックだ。ポポポップが偶然そこにいたとしても、戦わずにやり過ごすべきだと思っていた。

「おい、止めろ！　ムダな戦いはするな！」

「あんたは黙ってな！」

初心者とは思えない早さで防具を身に付けたルナが、矢を弓につがえながら、はっきりとそう言った。

（聞き捨てならねえな……）

彼女たちはあくまで初心者だ。ベテランであり、ギルド・ナイトである自分の指示に従うべきなのだ。それなのに「黙ってろ」の一言が飛んできた。

（生意気なガキだ）

勝手に戦ってボロボロになってみればいい、と思ったところで、彼女たちが重傷を負うような事態になれば、自分の評価も下がるの

だと言うことを思い出す。

「止めろ！　お前らには2頭のモンスターを一度のクエストで相手にできるような実力はねえ！　戻れ！」

「うるせえよ！」

今度はレイにそう言われた。夏葉に至っては、すでにポポポップ目がけて駆け出してしまっている。リースの指示に従うつもりがあるものは、誰ひとりとしていないようである。

「くそ！」

小さく毒づいた時、ポポポップの登場に慌てふためいた様子で船員たちが彼の方に駆け寄って来た。男ばかり、３０名近く。しかも2週間近く風呂に入っていない。更に、力仕事をしている真っ最中。要するに、かなり汗臭い。

「俺たちは逃げるぞ！　モンスターとハンターの戦いに巻き込まれたくはねえ！」

「勝手にしやがれ！　つーか、むしろ、どっか行け！」

欠けて黄ばんだ歯を見せながらそう言ってくる船員の1人に向かって、リースはつい本音を口にしていた。性的欲求の対象にならない相手に囲まれたところで、嬉しくも何ともない。むしろ不快である。

「まったく……たまんねえな……」

木材も道具も荷車も放り出し、蜘蛛の子を散らしたように一目散に逃げ出して行く船員たちの後ろ姿に吐き捨てるように言った後、リースは改めて夏葉たちの方に視線を向けた。

「さて、どうなることやら」

いざとなったら自分が助けに入ってやればいい。腕組みをしながら背後の木に背を預け、リースは夏葉たちの戦いを傍観することにした。

「お手並み拝見」

逃げ出そうか、戦おうか、逡巡している様子を見せていたポポポップを3人が取り囲む。レイと夏葉が背中の武器を手に取る。同時

に、少しばかり後ろに下がって距離を見計らったルナが矢を構えた。

「レイ！　夏葉！　動きが止まったら、足を狙って！」

「りょ～かい！」

「了解」

レイと夏葉の答えを聞くまでもなく、ルナがつがえていた矢を放す。空気を切り裂いて飛んだ矢は、寸分違わぬ正確さでポポポップの片目を貫いた。

「すげえ……」

小首をかしげながら、その場で足踏みを繰り返していたポポポップは、突如として自らの左目を襲った激痛に、上体をのけぞらして悲鳴に似た咆哮を上げた。

「レイ、夏葉！　任せたよ！！」

たった今、片目を潰したばかりだというのに、ルナはもう次の矢を放っていた。予想通り、彼女が放った矢はポポポップの残されていたもう片方の目を貫く。

（本気でウマいな、あいつ）

ポポポップの両目からは真っ赤な液体が川のように流れ落ちている。それを見たレイと夏葉が同時に駆けだす。２人はそれぞれ、ポポポップの両脚に駆け寄り、ハンマーと太刀を一気に振りかぶった。

「マジかよ……」

大きく地響きをたて、ポポポップが地面に倒れ込む。舞い上がる木の葉と腐葉土が、ポポポップとレイたちの周囲に幕を張る。鼓膜をつんざく悲鳴が漏れ聞こえ、ポポポップが苦しげに両脚で宙を掻いているのが見えた。

（レイの一撃が重かったな。骨が折れてやがる）

レイがハンマーをぶつけたポポポップの脚が、不自然な方向にねじ曲がっているのが分かる。たった一撃で、固い甲殻に覆われたモンスターの脚を折ってしまったというその事実に、リースは驚愕していた。

（怪力だとは思ってたけどな……）

地面に倒れ込んだポポポップの腹部を、夏葉が太刀の刃で横一文字に切り裂く。真っ白な羽毛が舞い、鮮血が迸るのが見えた。

（マジかよ）

一度では致命傷に至らなかったことが分かったのか、再び夏葉が全く同じ場所に刃を振り上げた。その瞬間、一際大きな悲鳴を迸らせ、ポポポップが片足だけで何とか立ち上がる。

「逃がすかよ！　なっちゃん！　羽根を！」

「分かった」

立ち上がったポポポップは、片足が折れているせいか、ひどく頼りなげに見える。その一方に回り込んだ夏葉が、羽根の継ぎ目に向かって刃を振り下ろす。その反対側では、再びレイがポポポップの脚に向かってハンマーを振り上げていた。

（力づくで迫ればどうにかなるってモンでも無さそうだね……）

再び、轟音を上げながらポポポップの巨体が地面に沈む。片羽根の継ぎ目から血が迸り、地面にどす黒いシミを作って行くのが分か

った。

（どうしようかな……）

ポポポップの頭部に向かったレイが、そこに向かってハンマーを振り下ろす。ハンマーが頭蓋骨にあたる重い音が、リースの鼓膜を刺激した。

（ムリそうだな。あいつらを犯すのは……）

頭蓋に重い一撃を食らったポポポップが立ち上がろうともがいている。しかし、そこへ更なる一撃が落ちて来る。また、腹部は夏葉の太刀によって切り裂かれ、内臓が零れ出ていた。

（殺しちまったよ）

ポポポップに反撃の隙さえ与えず、初心者ハンターが圧勝してしまった。ポポポップがいったい、何をしたというのだろう。常には考えたことが無い疑問が、リースの胸に浮上し、そして下半身の欲望と一緒に沈没した。

（無難に、おぼっちゃんに相手して貰おうかな……）

動かなくなったポポポップの周りで抱き合って喜んでいるレイ、ルナそして夏葉を見ながら、リースはそんなことを思っていた。

始動３８（後書き）

「アンパンマン・シャーベット～！」

今から１０年ほど前のことでしょうか。テレビを見ていると、わざとらしいほどツラのいいガキ……いえ、美少年と美少女がアンパンマン・グッズのＣＭをしておりました。

アンパンマンの形をした容器にシャーベットの素を調合して入れ、冷凍庫で何時間か冷やせば完成なのだそうで。当時すでにそれなりの年齢だった作者としてはシャーベットにもアンパンマンにも興味を惹かれず、ただボケっとアナログ・テレビの画面を眺めていたワケですが……。美少年と美少女が冷凍庫から取り出されたシャーベットを、いざ食べようという段階になって、衝撃を受けました。

「いただきま～す！」

そう言って、二人はアンパンマンの頭部をガポっと外し、笑顔のまま胴体部分にスプーンをグサっと突き立てました。

「アンパンマンの内臓を食ってる……」

また、シャーベットがストロベリーだかイチゴだが分かりませんが、とにかく淡い赤色をしていたことを未だに覚えています。

「おいしい～！」

という美少年と美少女の声に、アンパンマンの冥福を祈った今日このごろでありました。

始動39

「いつになったら来るのか～な、クック先生」

罠を仕掛け終わって2時間あまりが経過した。しかしながら、エリアは静寂に包まれたまま、一向に討伐対象であるイャンクックが姿を見せる気配は無かった。

「待つしかないのよ。下手に動き回って別のモンスターに出くわしたりするよりマシだわ。今は待つしかないの。分かった？」

「分かってる～よ」

洞窟へと続く岩の陰に身を寄せたまま、光宮とシヴァが幾度目とも知れない会話を飽きもせずに繰り返している。

「クックが来たら、まずは落とし穴に落とすことを第一に考えるのよ。私がボウガンで刺激して注意を引くから、罠に落ちた後、あんたたち2人でダメージを与えてね」

「へいへ～い」

「ボウガンの命中率には期待しないで。私はルナとは違うから」

「……ルナは特別だよ」

アルテリア本国でそれぞれが選んだ武器の練習に励んでいた時のことを思い出し、中也はついそう口に出してしまっていた。どんなに離れた場所からでも、標的がどんなに小さくても、ルナは決して狙いを外さない。彼女が一度でも狙いをしくじったところを、中也は見たことが無かった。

「いわゆる天才ってヤツだよ。普通はあんなに正確に的を狙えたりしねえよ」

「慰めの言葉として受け取っておくわ」

「事実を言っただけだよ」

言いながら、中也は足元に纏めてあるボーン・シリーズと大剣を見つめる。

（未だに使いこなせてるとは言い難い……）

リースからは、無闇に剣を振るうなという忠告を受けた。剣士は剣を振るうことでしか敵を倒すことができない。それなのに、

ギルド・ナイトの先輩からそんな忠告をされたのだ。自分の実力の低さを改めて思い知らされた気分で、中也は内心で重い溜め息をついた。

（でも、できればモンスターとは戦いたくない）

こちらの世界で生まれ育ってきた光宮たちには理解できないかもしれない。だが、どんなに言い訳をしたところで、中也の本音は変わらない。モンスターとは言え、命あるものを自分の手で傷付け、そして殺さなければならないのは、怖い。怖いし、イヤだ。

（光に言ったらバカにされそうだな）

敢えて言葉にしなくても、彼女の性格からして、きっと自分を見下したような、あるいはバカにしたような答えが返ってくることは想像に難しくない。

（黙っておこう。どうせ、俺がイヤだとかダメだとか言っても、クックは倒さないといけないんだ）

そこが自分の弱さだと、中也は認めた。イヤだと思っていても、

やらなければならないと他人から強制されると逆らえない。ましてや、身分あるいは権力が上の者からの命令であれば、なおさらである。

「ねえ、どうでもいいけど、あんたのお兄さんはどこに行ったのよ。散歩してくるって一時間くらい前に出て行ったきり、戻って来てないじゃない」

「知るか～よ。兄貴のことだから、どっかそのへんで昼寝でもしれるんじゃねえのか～な」

「ホントに役立たずね。いいのは見た目だけ？」

「違いな～いぞ」

中也の内心の葛藤など素知らぬ顔で、光宮とシヴァがそんな会話をしていた。そう言えば、彼女の言う通り、フェンリルの姿が見えなくなって久しい。

「まさかクックに会ってサクッと殺されてたりしないでしょうね」

「それは……ないと思う～ぞ」

「だったらいいけど。だってあの人、フィールドを歩くっていうのに丸腰だったじゃない」

「う～ん。そう言われると心配になって来～たぞ」

「一応、アレでもギルド・ナイトなんでしょ？　ほっといても大丈夫よ。きっと……たぶん……おそらく……およそ……」

光宮の声は、最後の方に行くにつれて小さく細くなっていった。

2人の会話を聞いていると、中也までフェンリルのことが心配になって来る。

「大丈夫かな……」

「中也もそう思う？」

「うん。なんか、すっげ～不安」

「同感」

どこまでも呑気なフェンリルの姿を脳裏に思い浮かべつつ、3人は何とも言えない顔で互いの顔に視線を走らせた。

「やっぱ、探しに行った方がいいんじゃないかな……」

「全く、世話の焼ける先輩ね」

光宮が溜め息混じりに腰を浮かせた時のことだった。ふいに、どこからともなく巨大な羽音が空気を揺るがせた。

「タイミング悪いな。クックのご登場だ」

咄嗟に洞窟から半身を出して空を見上げると、そこには真っ赤な甲殻を纏った巨大な鳥が翼膜を羽ばたかせながら、ゆっくりとこのエリアに向かって降りたとうとしていた。

「クチバシに誰かさんを咥えてない？」

「今のところ、大丈夫そうだ～ぞ」

縁起でもない光宮の声を耳にしながら、中也たちは手早く防具を纏い、武器を手にする。

「さあ、行くわよ。死なないことを第一に、ケガしないことを第二に考えて行動してよね」

「分かってるさ」

「了解だ～ぞ」

互いに視線を交わし合い、頷き合う。そして、足音を忍ばせて洞窟の入り口から抜けだした。３人揃ってこっそりイャンクックの背後に忍び寄る。光宮がボウガンに弾を込め、狙いを定めて引き金を引く。それが、作戦開始を意味していた。

（クセーな、やっぱ）

独特の体臭を嗅ぎながら、中也とシヴァは二手に分かれてイャンクックの左右に回り込む。背中にボウガンの弾が当たったイャンクックが、驚いたように上体を跳ねさせた。

（ペンギンの臭いだ。ペンギンの臭いに似てるんだ）

左右、そして背後にいる中也たちを目にしたイャンクックが、狙いを定めるように身を低くして脚を踏みならす。上下に大きく開いたクチバシの狭間から、水蒸気のような白い煙が上がっているのが見えた。

（誰だ！　誰に行く！？）

いつ火球が飛んできても、すぐに身をかわせるよう下半身に力

を込めながら、中也は注意深くイャンクックの様子を観察する。

翼を広げて威嚇しつつ、まさしく鳥のような甲高い鳴き声を上げたイャンクックは、中也の左手にいたシヴァに向かって火球を吐き出した。

「中也！　シヴァ！　落とし穴の方へ誘導するわ！」

横に飛んで火球の直撃を避けたシヴァが、素早く身を起こす。

イャンクックの吐き出した火球は背後に生えていた細い木を焦がし、一瞬で炭化させてしまっていた。

「なるべくじっとしてて！」

光宮がボウガンの弾を装填しながら声高に叫んだ。なるべくじっとしていろ、と言われるまでも無い。

（やっぱムリだよ。勝てるはずない……）

ボウガンの弾を鎧のような甲殻で弾かせながら、イャンクックが不快気に身を捩る。筋肉の発達した力強い脚が、ぐっと腐葉土に食い込むのが見えた。

「光！　危ない！　突進だ！」

「分かってるわ！」

予想通り、イャンクックは光宮に向かって突進する。そのまま通り過ぎるかと思いきや、光宮の目前で急停止し、そしてその硬いクチバシを素早く何度も振り下ろし始めた。まるでニワトリがエサを啄ばむような仕草だが、高さ8メートルを超える巨大なモンスターが取るその行動は、人間にとっては充分な脅威になり得る。ボーン・シリーズという防具を纏っているとは言え、クチバシで思い切り突かれれば、無傷では済まない。左へ、右へと振り下ろされるクチバシを、光宮が寸前のところで避けて行く。見ている方がヒヤリとするような、危うい避け方だった。

（俺だって人のこと言えねえけど……）

振り下ろされるクチバシを、光宮がボウガンの銃身で殴りつける。その瞬間、シヴァがランスでクック腹部を突いた。

「シヴァ！　ダメよ！」

「見てるだけなんてできるか～よ！」

僅かな血液を腹部から滴らせながら、イャンクックが体を回転させて、尻尾を振り回し始める。光宮は身を屈めてそれを避け、シヴァはランスに付属された盾で尻尾の一撃を受け止めた。

「シヴァ！」

思わず叫んだのは、尻尾の一撃を盾で受け止めたシヴァの体が僅かに空中に浮いたからだ。だが、本人は大した傷は負っていないらしく、数歩ばかり後ろ向きに走っただけでしゃがみ込むことは無かった。

「中也！　しっかりしろ～よ！」

振り向いたシヴァが、そう叫ぶ。

「ボケっと見てるだけじゃ、クエストは終わらねえんだ～ぞ！」

「そんなこと言ったって……！」

ムリなものはムリだ、と言おうとした時には、シヴァは再びイャンクックの方に向かって駆け出してしまっていた。

「ムリだよ……」

逃げるだけならまだ何とかなる。だが、戦って殺すとなると話が違ってくる。

「どうしたらいいんだよ……」

あんなに巨大で力強い生き物に、真っ向から立ち向かって勝とうなど、バカげているとしか思えない。どう考えても、自分たちは非力過ぎる。

「落とし穴に誘導するのよ！」

無意識に拳を握りしめていた時、光宮の声が鼓膜を揺るがした。

「落とし穴に落とせば、何とかなるわ！　シヴァ！　ガチで勝負するなんて考えないで！」

ランスの盾を構えつつ、先端でイャンクックの腹部を突き刺しているシヴァに、光宮がそう言うのが聞こえてきた。

（そうか……）

疑問に思っていたことに対する答えが、ストンと音を立てて心

の中に落ちて行った。

（真っ向勝負で勝てないから、人間は頭を使ってモンスターと戦って来たんだ）

言ってみれば、自分が纏っている防具も、手にしている武器も、すべて「人間の知恵の結晶」と言える。

（だったら、それは俺の得意分野だ！）

力勝負ではムリだ。ならば頭を使って勝つ。そう思うと、まだ何とかなるという気がした。

（やってやろうじゃん！）

中也は背中の大剣を握りしめつつ、イャンクックの方に向かって駆け出した。

（まずは落とし穴に落とす！　誘導しないと話にならねえ！）

自分たちが何をしたら、イャンクックは落とし穴の方へやって来るだろう。

「3人で固まるんだ！　落とし穴の向こうへ！」

光宮とシヴァを交互に見つつ、中也はそう叫んだ。

「誘導するのは私がやるわ！」

「ダメだ！　バラバラになってると、クックは誰かれ構わず攻撃する！　固まった方がいい！」

中也の言葉に、光宮が言葉に詰まるのが見えた。

「集まれ！　シヴァ！　早く！」

「りょ～かいだ～ぞ！」

てっきり反対するかと思いきや、シヴァはあっさり頷いて中也の後に続く。

「光！　ボウガンで刺激してくれ！」

「分かってるわよ！」

光宮の傍に駆け寄ってそう言うと、彼女が苦い顔をしながらボウガンに弾を込め始める。

「やっとヤル気になったじゃねえか～よ」

「うるせえよ」

始動３９（後書き）

久しぶりにイニシャルＤを見ました。
何だか昔を思い出して、しんみり……。
土曜の夜は峠！　とか、かつてはよくあったものです。いや、自分はギャラリー専門なんですが（笑）

激アツのバトルを見てしんみりしてしまった自分は、いい意味でも悪い意味でもオトナになってしまったな、と感じさせられてしまいました。

それにしてもイニシャルＤはおもしろいですね！

始動４０

「さあて、どうなることやら……」

中也、シヴァ、そして光宮がイャンクックとの戦いに励んでいるころ、フェンリルは少し離れた高台からその様子を眺めていた。

「頑張って～」

本人たちには一切、聞こえていないことを承知の上、彼はあぐらをかいたまま無責任な応援の言葉を贈る。甲高い鳴き声を上げて威嚇するイャンクックが中也たちに向かって突進する。落とし穴に嵌めるつもりなのだろうが、彼らの思惑とは裏腹に、イャンクックは落とし穴の直前で立ち止まったり、あるいは飛び越えてしまったりして、なかなか思うようにクエストが進んでいない。

「クック相手に苦戦、か。普通はそんなモンなんかな～」

落とし穴を回避したイャンクックに対し、中也たちは飽きもせずに何とかして落とそうと繰り返す。穴を飛び越えられれば、すぐに反対側に回り込み、穴の直前で立ち止まれば後ろに下がって威嚇射

撃をする。そんなことを、もう３０分以上もやっていた。

「さっさと終わらせろよ。つまんねえ～」

ついそう呟いてしまった時、ふいにサスケの気配を感じた。

「ご主人～」

アイルーの気配を察してから間もないうちに、彼が座りこんでいた地面の傍に黒い影が落ち、その中から真っ黒な毛並みが飛び出してくる。

「よお、サスケ」

やって来たアイルーに笑いかけると、満面の笑みを浮かべたサスケが飛びついて来た。胸に毛玉を受け止め、その毛並みを撫でてやる。何度触っても、サスケの毛並みは飽きない。この柔らかな手触りは、ある意味「癒し」だ。

「報告に来たんだニャ～。向こうのチームは、ポポポップをさっさと討伐したニャ。後はもう木材を運びこんで船を修理すれば終わりだニャ」

「へえ～。そうなんだ」

サスケの喉元をくすぐってやると、気持ちよさそうに目を細める。

それにしても、ポポポップを討伐したという報告には少しばかり驚かされた。

「光が言った通り、向こうのチームはけっこう実力あるんだな」

「ご主人ほどじゃないニャ」

「まあね～」

にっこりと笑ってサスケの言葉を肯定すると、膝の上で寝ころんでいたサスケが何とも言えない苦い顔で彼を見上げてくる。

「でも、ご主人。いくらクエストの妨害が仕事だからって、船を爆破したのは“ヤリ過ぎ”だニャ。帰れなくなったらどうするつもりだったニャ」

「いや、あれは……」

痛いところを突かれた気分で、フェンリルは苦笑いしながら頭をかいた。

「カンテラを蹴ったのはワザとだったんだけどね……」

「その後、水のつもりが油をかけてしまったのは本気だったのかニャ？」

「まあ、そういうこと……。いや、光の慌てる顔が見たいなあ～とか思っただけだったんだけど……」

「ほどほどにするニャ」

重い溜め息を零したサスケは、フェンリルの膝の上から這い出して、二本脚でしっかりと地面に立った。

「そういうワケだニャ。とりあえず、後はあのイャンクックを討伐すればクエストは終わりだニャ。ボクは引き続き夏葉さんの護衛をしてるニャ。ご主人も、光宮さんが死なないようにしっかり見張ってるニャ。分かったニャ？」

「分かってるよ～」

「ならいいニャ」

いちいち念を押されなくても、自分がやらなければならないこと

くらい、ちゃんと心得ている。もう子供ではないのだ。

「ところでご主人」

「何～？」

「苦戦してるみたいだニャ。イャンクックの討伐チーム」

「そうだね～」

たいして興味を引かれないまま下方に視線を向けると、そこにはイャンクックが吐き出した火球をギリギリの距離で避けている中也たちの姿があった。地面と木が焼け、フェンリルが座っている位置にまで焦げくさい臭いが伝わって来る。

「ご主人なら、何秒で倒せるニャ？」

意味深な表情でフェンリルを見つめて来るサスケに、彼は思わず笑った。

「そうだね～。まあ、５秒くらいかな。サスケは？」

「１０秒あれば充分、ということにしておいてあげるニャ」

「ええ～。何だよ、それ～」

「ご主人とアイルーの攻撃手段の違いだニャ。というワケで、そろそろ向こうに戻るニャ。ご主人、くれぐれも“ヤリ過ぎ”ないように注意するニャ。分かったニャ？」

「分かってるって」

フェンリルの答えを聞くと、サスケは軽く頷き、現れた時と同様に地面に落ちた影の中に吸い込まれて行った。

「まったく、もう～。みんなして俺のことガキ扱いして……」

「ガキ扱いしてるワケじゃないニャ」

ついそう言った時、何の前触れも無く立ち去ったと思ったサスケが地面から顔を出し、フェンリルはガラに無くビクッとしてしまっていた。

「サスケ……。まだいたのかよ……」

「ご主人の聞き捨てならない独り言が聞こえたから戻って来たニャ」

「相変わらず地獄耳なんだから……」

「ご主人が子供だなんて思ってないニャ。でも、自分で分かってるはずニャ。ボクが言ってること、分かるニャ？」

「はいはい。分かります～。キレないようにするから、大丈夫だって」

「そこは重ねてお願いするニャ。ご主人がキレたらボクじゃ止められないニャ」

どこか深刻なサスケの言葉に、フェンリルは笑う。

「その時は、父さんを呼んでくればいいじゃん」

「……そうするニャ」

視線を落としていたサスケが、軽い溜め息をついて顔を上げた。

「じゃあ、もうオトナなんだからしっかり理性を保って任務を続行するニャ」

「はいはい。じゃあ、なっちゃんをよろしくね」

「了解ニャ」

短く言って、今度こそサスケは彼の傍を離れて行った。

「頼むよ、サスケ。俺、なっちゃんを守るなんて絶対にイヤだからさ」

聞く者がいないことを知りながら、フェンリルは独白するようにそう呟く。脳裏に赤い瞳の綺麗な顔立ちを思い浮かべ、無意識のうちに拳を握りしめていた。

「ホント、冗談じゃないよ……」

嫌いだ。理屈抜きで、嫌いだった。どうして自分が夏葉を死なせないように護衛しなければならないのか、そう考えただけでも理性が飛びそうな怒りが湧きあがる。

「やべ……」

怒りに飲み込まれそうになった自分を自覚し、フェンリルは大きく息を吸って気持ちを落ち着けた。もう子供ではない。感情を抑えることくらい、できて当たり前なのだ。

「また父さんに怒られる」

軽く笑って、彼は改めてイャンクックと戦っている中也たちの

方に視線を向けた。

「早く思い出せよ、光」

目的の少女は、イャンクックに向かってひたすらボウガンの弾を撃ち続けている。背中、腹、頭……そんなところに撃っても、固い甲殻に覆われたモンスターにダメージを与えることなどできはしない。

「君が思い出したら、もう二度とこんなメンドーなことせずに済むんだから」

イャンクックを転ばせるために自分たちが撒いた油に脚を取られ、ランスを担いだシヴァが盛大に転ぶ。そこへ、イャンクックが突進して行った。

「そのまま死ねよ、シヴァ」

願望を込めつつ呟いたのだが、彼の期待と予想に反して、イャンクックとシヴァの間に中也が入り込み、大剣の刃を盾にして彼の弟を庇った。

「中也、頑張るじゃん」

中也の性格からして、てっきり何もできずに見ているだけかと思っていた。

「人間って、そういうことできるんだ。意外……」

イャンクックの蹴爪を受け止めた中也が、勢いに押されてそのまま後方に跳ね飛ばされる。光宮が、中也の名を呼ぶ声が聞こえて来た。興奮状態に入ったらしいイャンクックが、翼をはためかせながら、その場で飛び跳ねる。一声、高く鳴き、イャンクックが火球を吐き出した。

「マズイかな」

火球は地面すれすれを飛び、そこに撒かれていた油に火を付けてしまう。見る間に、密林の地面は火の海に変貌していった。

「バカだよなあ。クックが火球を吐いて攻撃することくらい、知ってたじゃん」

言いながら、フェンリルはやれやれと呟き立ち上がる。隠し持

っていた音爆弾を手に、イャンクックの方を見た。この距離で音爆弾を炸裂させれば、まず間違いなく中也たちの鼓膜を傷付けるだろう。だが、そんなことは関係ない。

「光だけは、死んでもらったら困るんだよね」

生きていればいい。全身に火傷を負うハメに陥ろうが、鼓膜が破れようが、閃光玉で失明しようが、別に構わなかった。生きていればいい。条件は、ただそれだけだ。

「さてと、助けに行ってあげましょうか」

始動４０（後書き）

「スイーツを食べた後に飲みたくなるのは、ブラックのコーヒーか、それともミソ汁か」

という問題で、本日、久々に会った友人Ｘと議論になりました。

「日本人ならミソ汁でしょう！」

作者は断然、ミソ汁です！　甘いケーキとかシュークリームを食べた後には、必ずミソ汁が飲みたくなります。少数派なんでしょうか……。けっこう普通だと思っていたのですが……。

始動41

地面から立ち上る炎が、肌を焼いていく。緋色に包まれた視界の中で、真っ赤な甲殻に覆われたモンスターが、尻尾を振り回して暴れていた。

「くそ！」

近寄れない。ボーン・シリーズという防具で全身を固めていても、それに覆われていない部分がじりじりと焦がされ、むず痒いような痛みを訴えていた。熱い。幾度目とも知れない言葉を胸の中で呟きながら、中也は唇を噛みしめた。

「どうする……」

密林の地面を覆っていた腐葉土がもともと湿気を含んでいたせいか、火の回りは思っていたよりも遅い。炎の勢いに負けた細い木が、音をたてながら折れるのが見えた。木の葉や枝が爆ぜる音が足元から聞こえてくる。熱に煽られた木の葉が空中に舞い上がり、中也の目前を掠めて行った。

「いったん退却しましょう！　これ以上は危ないわ！　命の方が大事よ！　ここはいったん引くべきだわ！」

ライト・ボウガンを背に担ぎ、少し離れた位置にいた光宮が熱風に負けない大声で叫んでいるのが分かる。無意識のうちに大剣の柄を強く握りしめ、中也はイャンクックに視線を注いだ。

（ここで逃がしたら、もうチャンスはないかもしれない！）

なぜか分からないが、その時、彼はそう思った。

（やれる時に、やるしかない！）

シヴァを庇った際、地面に跳ね飛ばされて打ち付けた背中が痛む。周囲は火に囲まれている。大剣の刃も、ところどころ傷付いていた。

（退却すべきなのは、分かってる！）

熱に煽られ次第に薄くなっていく理性は、先ほどからしきりにそう訴えている。退却し、態勢を整え、作戦を組み直し、万全の状態にしてからもう一度イャンクックに挑むべきだ、と。

（逃げたくない！）

噛みしめた唇の端から血液が漏れる。鉄の味が舌を掠めた。

（逃げたくねえよ！）

殺すとか、殺さないとか、そういった話ではなく、純粋に「敵」を前にして背を見せたくなかった。

（俺だって、戦えるんだ！）

背後から、自分を呼ぶ光宮の声が聞こえてくる。敢えてそれを無視し、中也は燃え盛る地面を駆け出した。

「ダメよ！　何を考えてるの！？　中也！」

「まだやれる！　戦えるうちに戦うんだよ！」

「バカ！　死ぬ気なの！？」

ボーン・シリーズに守られているとは言え、足元から鈍い熱が伝わってくる。我慢しているうちに、だんだんと感覚が無くなっていった。

（クックは、平気そうだ！）

足元を炎に包まれているというのに、イャンクックは平然とそこにいる。突如として炎に包まれた時はさすがに驚いたようだったが、今では気にもしていないらしく、時折、小首を傾げながら中也たちの方を見下ろしていた。

「中也！！」

下から吹き荒ぶ熱を含んだ風と、地面を焦がした黒煙が喉を焼く。思わず咳き込みながらも、中也はイャンクックに向かっていく脚は決して緩めなかった。

「お、おい、中也～！」

シヴァの声を聞きながら、彼は大剣を振り上げる。そして、目の前にあるイャンクックの胴体に向けてそれを振り下ろした。

「っ！」

まるで岩でも斬っているような感覚だった。てっきり甲殻が破れ、血が吹き出ると思っていたのに、刃はあっけなく弾かれてしまった。刃を握る手に重い衝撃が走る。痺れるような痛みに、彼

は思わず顔を顰めた。

（俺の大剣より、クックの甲殻の方が固いのか……！）

だとしたら、目に付いた部位を我武者羅に攻撃していてもムダだ。自分が疲れるだけで、イャンクックには何のダメージも与えられない。

（どうする？）

倒せるはずなのだ。自分たちに与えられた武器がイャンクックに全く通用しないと最初から決まっているならば、将兄はそもそもこのクエストに中也たちを送り込んだりはしないはずだ。

（何か、何か弱点があるんだ！）

イャンクックのクチバシを避けながら、中也は死に物狂いで考える。咄嗟に避けた際に、背後で燃える炎が背中を舐めて行った。慌てて身を引いたところで、今度は頭上をイャンクックの尻尾が掠めて行く。上体を屈め、それをやり過ごす。風を切るような音が妙に耳に残った。

（どこだよ！）

甲高い鳴き声を上げ、イャンクックが中也に向かって突進してくる。攻撃そのものは大剣の刃を盾代わりにして防ぐことはできる。しかし、衝撃には耐えられない。先ほど跳ね飛ばされた際に、そのことはイヤというほど思い知らされた。

「くそ！」

翼を折り畳んだまま、イャンクックの巨体が傍を通り過ぎていった。舞い上がる火の粉が目を掠め、涙が浮かぶ。ボーン・シリーズに覆われた手の甲で目を押さえつつ、中也はしっかりとイャンクックを見つめた。

（必ず、何か弱点があるはずなんだ！）

火の手を上げる地面に突っ伏すようにして、イャンクックは突進を終えた。その様子を見ていたシヴァが、ランスでその体を突き始めた。

（ダメだ！　そんなところを攻撃してもムダだ！）

身を起こしたイャンクックが、尻尾を振り回す。後ろに飛んでそれを避けたシヴァが、ランスを構え直すのが見えた。そして、彼はイャンクックが動きを止めた一瞬の隙を狙って、少し離れた場所から勢いを付けてランスの先端をその胴体に食い込ませる。苛立ったように、イャンクックが甲高い鳴き声を放ちながらその場で脚を踏みならすのが見えた。

「あ……！」

中也の脳裏に、ひとつの事実が浮かんだ。

（固い甲殻に覆われているのは、何も全身じゃないんだ！）

仮にすべての部位が固ければ、イャンクックは脚を曲げ伸ばすことができないはずだ。しかし、巨体に似合わないスピードで突進してくることからしても、膝部分の間接はそれなりの柔軟性を持っていなければならないということになる。

（だったら、そこを狙うしかない！）

その可能性にかけて、中也はいったん大剣を背に担ぎなおし

た。

「シヴァ！　こっちに来てくれ！」

「はあ～！？」

「いいから、こっちに来いって！」

落とし穴の前に陣取り、中也はシヴァを呼ぶ。彼の言葉に逡巡する様子を見せたシヴァだったが、すぐに思い直したらしく、ランスを格納して中也の方に駆け寄って来た。

「名案でも浮かんだのか～な！？」

「合図したら、すぐに体を伏せてくれ！　いいな！？」

「お、おう！」

おそらく、自分はシヴァのことを気遣う余裕が無い。そう思って、中也は先にそう警告しておいた。２人の姿を見止めたらしいイャンクックが、上体を低くする。予想通り、こちらに突進してくるようだ。

（翼を広げてない……！　火属性のクックでも、翼は火に弱い

のか……！）

そんな風に思いながら、中也は大剣を横向きに構えた。

（来る！）

イャンクックの脚が地面を蹴る。中也たちを跳ね飛ばすつもりなのか、一切スピードを緩めることなく突進してきた。

「今だ！　シヴァ！　伏せろ！」

横にいたシヴァに向かって叫ぶと同時に、中也は大剣の刃を薙ぎ払う。狙いは、間接の継ぎ目だ。うまくやれるかどうか自信は無かった。だが、やるしかない。そう思って、力の限り大剣を振るった。

「っ！」

手ごたえはあった。手から腕、腕から肩へと鈍い衝撃が駆け抜ける。すぐに背後を振り向いてイャンクックを確認した。甲高い鳴き声を上げたイャンクックは、頭部から勢いよく落とし穴に突っ込んでいった。

「やった！　シヴァ！　今だ！　攻撃するぞ！」

「りょ～かいだ～ぞ！」

２人揃って落とし穴の中でもがいているイャンクックに向けて駆け出す。そこへ、ずっと見物に徹していた光宮が加わった。

「もう、見てる方がヒヤヒヤするわ！」

「そう思うなら手伝えばいいだろ！？」

「だから手伝いに来たんじゃない！」

咄嗟に返す言葉が思いつかず、そのまま3人揃ってイャンクックの傍へ行く。頭から地面に突っ込んだ情けない姿で、イャンクックの両脚が空しく空中を蹴っていた。中也が斬りつけた方の脚から、血が舞っているのが見える。

「思いきりやるわよ！」

「分かってるよ！」

「分かってる～ぞ！」

それぞれ互いの武器で傷付けないように、距離を置き、動き

を止めたイャンクックに攻撃を仕掛けた。近付くと、甲殻と甲殻の間になっている部分がはっきりと見える。そこに当たるか、当たらないかは別にして、中也は敢えてそこを狙ってみた。

（やるしかない！）

一度だけ、大剣の刃が甲殻に継ぎ目に命中した。そこから、血が溢れ出てくる。刃に付着したモンスターの血液が、大剣を振るう度に空中に舞い散る。滴り落ちた血が、中也の頬を汚した。

「マズイ！　そろそろ離れて！」

「了解！」

「分かった～ぞ！」

落とし穴に落ちていたイャンクックの体がじわじわと上がってくる。それを見て、中也たちは一斉にその場を離れた。

「逃げるわ！」

落とし穴から這い出したイャンクックが翼に力を込めるのが

見えた。どこへ行く気かと注意深く見詰めているうちに、イャンクックの体は上昇気流に乗って舞い上がる。中也たちの頭上を通り過ぎて行くその巨体を目で追っていると、イャンクックは隣の海岸エリアの方に向かって飛んでいった。

「追いかけよう！　すぐそこにいる！」

「ダメよ！　今度こそ態勢を立て直すの！」

「今ここで逃がしたら、せっかくダメージを与えたのにムダになる！　行くぞ！」

「ちょっと、中也！！」

光宮の声を振り払い、中也はイャンクックを追って海岸エリアの方へ駆け出した。

＊

「あれ？」

一方、高みの見物をしていたフェンリルが燃え盛るエリアに降りて来た時、そこにはイャンクックどころか中也たちの姿さ

え見当たらなかった……。

始動４１（後書き）

妖乱舞～Ｍｅｍｏｒｉｅｓ～に、夏葉の過去話をアップいたしました。よろしければそちらもご一読ください！

始動４２

波が削り上げた穴を通り抜け、中也たちはイャンクックを追いかけて、先に続く海岸線へと向かう。先日、ここのエリアでシヴァが砂の中に潜んでいたヤオザミに脚を切りつけられた。そのことを頭のどこかで覚えていたせいか、中也は無意識に真っ白な砂浜に視線を走らせる。

（いないのか、見えないのか、どっちだよ！？）

それらしき影は無い。そこに敵がいるのか、いないのか、それが分からないということは予想以上に腹立たしい。

（ヤオザミがいたら、その時のことだ！）

そう結論付けて、中也は白い海岸に落ちる巨大な影の主の姿を目で追いかける。頭上から、羽音が聞こえて来ていた。真っ直ぐに伸ばされた首に、大きく広げられた翼、後ろにピンと伸ばした脚……。地面から見上げるイャンクックの姿は、さながら航空機のようだと中也は思った。傾き始めた陽光が翼膜を透かしている。

日没が近付こうとしていた。

（夜になったら討伐はムリだ！　急がないと！）

背中の大剣の柄を握りしめつつ、中也はイャンクックが降りたとうとしている場所へ向かって駆け出した。翼を広げている今がチャンスだ。完全に折り畳んでしまう前に、それを傷付けることができれば、空を飛んで逃げられるという面倒な事態を回避できる。

「シヴァ！　光！　翼だ！　翼を狙え！」

「そこが弱点なのか～な！？」

「そういうことだよ！」

「仕方ないわね、もう！」

それぞれが武器を構えつつ、地上に向かって降りて来るイャンクックを待つ。光宮が放ったボウガンの弾が、広い翼に穴を開けていく。続いてシヴァが、ランスの先端を使って翼と胴体の継ぎ目を攻撃し始めた。その瞬間、真っ直ぐに海岸へ降りたとうとし

ていたイャンクックが小さな鳴き声を上げて再び上空へ舞い上がってしまう。

「くそ！」

巨体が空中に飛び立ったせいで、中也たちが立っていた周囲の砂が巻き上げられ、顔の粘膜を刺激する。口の中に入ってしまった砂を唾と一緒に吐き出しつつ、中也は上空を旋回しているイャンクックの姿を見つめた。

「滑空攻撃が来るかもしれないわ！　岩の後ろに隠れて！」

「それくらい、何とかなる！」

「バカ！　そんなワケないでしょ！？　さっさと隠れなさいよ！」

やや強引に、光宮が中也の腕を引っ張る。彼女の行動に、僅かながら煩わしさのようなものを覚え、顔を顰めた。しかし、光宮の腕を振り払う前に、横からシヴァまでもが中也を引っ張り始めたので、結局は従った。

「お前らしくな～いぞ！」

「うるせえよ！」

「ちょっと落ち着きなさい、中也！」

岩の後ろに引っ張り込みながら、光宮が中也の肩を強く揺さぶりつつ、強い口調で言って来た。

「落ち着いてるよ！」

「どこが！　あんた今、完全に頭に血が昇ってるわよ！」

「そんなことない！」

「そんなことあるわよ！」

２人揃って同じようなことを言った時、上空からイャンクックが翼を折り畳み、中也たちを目がけて急降下して来た。

「あの翼、叩き斬ってやる！」

「止めなさいってば！」

「放せよ！」

岩陰から抜け出そうとする中也と、それを止めようとする光宮。

２人で互いの腕を引っ張り合っていた時、風が唸る音とともにイ

ャンクックの巨体が降りたってきた。中也たちとの距離は5メートルも離れていない。巻き上げられた砂が周囲に煙幕を上げ、彼らの視界を遮った。

「くそ！」

大量の砂が頭の上から降り注ぎ、息をするのもままならない。すぐ傍に敵がいるのは分かる。砂煙の向こう側で、尻尾を振り回して暴れているその姿が、まるでシルエットのように見えていた。風の音に混じって、甲高い鳴き声も聞こえて来ている。しかし、はっきりとその姿を視認することができない。それに、苛立ちを覚えた。

「終わらせてやる！」

「中也！　ちょっと！」

制止しようとする光宮の声を無視し、中也はイャンクックの方に向かって駆け出して行った。

「俺が倒してやる！」

砂が重力に従って海岸へと落ちて行く。次第にはっきりとしていくイャンクックに向かって、中也は大剣を振り上げた。

「っ！」

胴体に向かって斬りつけた刃は、あっさりと弾かれる。腕から肩へかけて走り抜ける鈍痛に顔を顰めながら、中也は思い切ってイャンクックの腹部の下に入りこんだ。不注意で転んでしまうようなことになれば、イャンクックに踏まれて重傷を負う。その危険性を考えていなかったわけではない。だが、一刻も早くイャンクックを討伐したいという思いが勝った。

（腹は、背中に比べれば柔らかいはず！）

頭上で蠢く薄い黄色の腹を目がけて、大剣の刃を突きあげる。

（ムリか！？）

予想に反して、イャンクックの腹部は大剣の刃を簡単に通そうとはしなかった。歯を食いしばり、中也は大剣を真っ直ぐ上に向かって構えたまま、しゃがみ込み、反動を付けて突き上げた。ジ

ャンプすれば刺さるのではないか、と単純に考えた結果だった。

「中也！　危ない～ぞ！」

「大丈夫だ！」

中也を呼ぶシヴァの声に、イャンクックが反応する。高々と鳴き声を上げながら、イャンクックはシヴァと、その後ろにいる光宮に向かって突進し始めた。木の幹ほどもある太い脚が、目の前に迫って来る。それを見て、中也は何も考えずに大剣の刃を薙ぎ払っていた。

「やった！」

大剣の刃を間接の継ぎ目に食らったイャンクックが、盛大な音を立てながら砂浜に向かって転がりこんだ。脚は切断には至っていない。それを残念に思いながらも、中也はすぐにイャンクックの頭部の方に走った。

「シヴァ！　手伝え！」

「お、おう！」

首を落とせば死ぬだろう。そう思って、イャンクックが立ち上がる前に、渾身の力を込めて大剣を振り下ろす。その横で、シヴァが首に向かってランスの先端を突き立てていた。

「くそ！　何でこんなに固いんだよ！」

二度目を振り下ろす間もなく、イャンクックが砂浜から身を起こす。悔しげに、翼をばたつかせながら中也たちに向かって威嚇するような鳴き声を上げた。

「このヤロー！！」

思い通りにならない腹立たしさにまかせて、中也はイャンクックの横に回り込み、その翼と胴体の継ぎ目を狙って刃を振るった。

「くそ！」

斬り裂けると思った。しかし、刃は骨に当たってしまったらしく、空しく弾き返されてしまった。

「ちくしょー！」

叫びながら、振り回される尻尾を避けて横に飛ぶ。

「……！」

討伐を始めて、どれくらいの時間が経ったのか分からない。これ以上ないほど集中しているにも関わらず、体が疲労を訴え始めていた。ただでさえ重い大剣が、より一層重たく感じる。息は切れ、酷使し続けた脚が感覚を無くそうとしていた。

「中也！　いったん引くのよ！」

「大丈夫だ！　ここで逃がしたくない！」

「すぐに取り返せるわよ！　これ以上はムリよ！」

背後から走り寄って来た光宮が腕を掴んで引っ張ろうとする。

それに捕まる前に、中也は再びイャンクックに向かって駆け出した。

（終わらせてやる！）

尻尾が頭上を通り過ぎた隙に、先ほどと同じようにイャンクックの腹部の下へと入り込む。上を見上げると、黄色い甲殻に覆われた腹部が僅かながら傷付いているのが見えた。

（同じ場所を突き上げられれば、何とかなるかもしれない！　まったく歯が立たないワケじゃないんだ！）

そう思い、中也はしゃがみ込んだ姿勢から一気に刃を突き上げる。腕に重い感触が伝わって来た。

（やるしかないんだ！）

何度か繰り返しているうちに、刃の先端がモンスターの腹部にめり込んだのが分かる。それを察し、中也は力任せに大剣を前方に振り下ろした。

「行けえ！！」

頭上から、生温かい血が降り注いでくる。鼻腔を、錆びた鉄のような臭いが刺激した。鼓膜を甲高い鳴き声が振るわせ、背後で重いものが倒れるような音が聞こえて来た。

「もう一回だ！　シヴァ！　首を落とすぞ！」

「り、りょ～かい！」

砕けそうになる脚を励まし、中也は再びイャンクックの頭部に

回り込む。

「いい加減、死ねよ！」

そんな思いを込めながら、大きく振りかぶった大剣を地面でもがくイャンクックの首に向かって振り下ろす。そのクチバシからは、粘度の高い唾液が溢れ出て、海岸の砂を汚している。零れ出た長い舌が砂を絡め取り、イャンクックのクチバシを汚していた。

「もう一回だ！！」

一回でムリならば、何度でもやる。それしかできない。立ち上がろうと脚をばたつかせるイャンクックに向かって、中也はもう一度、刃を振り下ろした。

「！？」

頭部を持ち上げたイャンクックが、短く高い鳴き声を上げて再び地面に沈む。思わずその顔に視線を走らせると、黄色い眼球にはボウガンの弾が深々と刺さっていた。

「光……！」

何を言うつもりだったのか分からないまま、中也は彼女の名を口にしていた。

「いいから、早く首を落としなさい！」

ボウガンに弾を装填した光宮が、至近距離からもう片方の眼球にボウガンを撃ち込む。それを見て、中也はイャンクックの首に刃を振り下ろした。その正面で、シヴァがランスを使って彼と同じ箇所を攻撃する。

「立つわよ！　離れて！」

光宮の言葉通り、イャンクックが唾液を撒き散らしながらゆっくりと上体を持ち上げ始めた。

（マズイ！　逃げられる！）

翼はまだ切断していない。今ここで逃がせば、確実に仕留めることができなくなる。そう思った時には、体が勝手に動いていた。

「落ちろー！！」

立ち上がろうとするイャンクックの横から、その首に向かって

刃を振り下ろす。一瞬の間を置いて、刃を受けた首から、血液が滝のように噴き出し始めた。

「う、うわっ！」

頭の中が、真っ白になった……。

こんな大量の血液など、今まで見たことが無い。思わず放心してしまいそうになったところで、シヴァが肩を掴んで来て、その場から引き離してくれた。たった今まで中也が立っていた場所に、イャンクックの頭部が重い音を立てて落ちて来る。

「まだよ！　まだ死んでない！　トドメを刺すの！」

ボウガンの矢を構えた光宮が、切り裂かれた喉を狙ってボウガンを連射する。それに続いたのは、シヴァだった。

「……」

中也は、その場を動くことができなかった。手も、顔も、脚も、体も、大剣も、生温かい血で真っ赤に染まっている。

「血……」

全身が震え出した。風に乗って漂って来た血の臭いに、吐き気が込み上げる。胃を押さえてしゃがみ込んだのと、イャンクックが絶命したのが、ほぼ同時だった……。

始動43

「お、おい。中也、大丈夫～か？」

砂浜に蹲る中也に、シヴァの心配そうな声がかけられた。答えることができずに、中也はただ荒い呼吸を繰り返す。気持ちが悪い。吐きそうだ。背筋に悪寒が走る。感覚を無くした手も脚も、情けないほど震えていた。

「血……血が……」

真っ赤に染まった自分の手を見つめながら、かろうじてそう呟けば、背中を撫でてくれていたシヴァが困ったように笑う。

「そりゃあ、そうだ～よ。だって俺たち、クックを討伐したんだ～ぞ。それ、返り血なんだ～ぞ。中也の血じゃあないんだ～ぞ」

「分かっ……分かってる……」

言われなくても分かっている。イャンクックの喉を大剣で切り裂いたのは自分だ。

（血って、こんなに臭いんだ……）

かつて故国にいた時、映画やドラマ、あるいはマンガなどで幾度となく流血シーンを目にしてきた。たくさんの血が溢れだしても、どんなに残虐なシーンでも、決してその場にいることはない中也には、その生温かさや臭いなどは伝わって来なかった。

（臭い……！）

鉄臭いとか、金臭いとか、そんな風に形容される血の臭いがどんなものなのか、知らないわけではなかった。けれど、全身が真っ赤に染まるほどの大量の血など、知らない。息をする度に、体全体から立ち上る血の臭いが喉を刺激する。咳き込めば、胃の中のものを戻してしまいそうで、満足に呼吸することもできなかった。

（臭い……！！）

自分が殺した生き物の血を被っているのだと思うとなおさらだった。今になって、恐怖が血流に乗って全身を駆け抜けて行く。無闇に生き物を殺してはいけないのだと、幼いころから教えられてきた中也にとって、イャンクックは、虫以外で初めて自分の手にかけて

命を奪った生き物に他ならない。

（俺、殺したのか……）

まるで自分が犯罪者になったような気分にさせられた。理屈では無かった。純粋に、罪のない生き物を自分の都合だけで手にかけてしまった事実に戦慄した。

（俺が殺した……！）

イャンクックは、ただ生きていた。それだけだ。それなのに、ギルド・ナイトによって捕えられ、ここに連れて来られ、中也たちの腕試しの道具にされ、殺された。

「っ！」

否応なく肺に入って来る血の臭いが、そんな思いにより一層、拍車をかける。理由も無く、自分の手で生き物を殺した、という事実が、肩に重く圧し掛かってきた。

「シヴァ……俺、パニックになって……！」

「そうだ～な」

「火が回って、まともに考えられなくなって……！」

目の前にいるのは敵だとしか考えていなかった。敵は倒すもので、敵を倒しても誰にも責められない。あれほど手を血で濡らすことを恐れていたのに、パニックになった中也はイャンクックを殺すという意味を考えていなかった。それに……。

「は、早くクエスト……終わらせたくて……夜になったら、見えなくなるし……！」

「中也が何でそんなに落ち込んでんのか俺には分かんねえ～ぞ。どうしたんだ～よ。クックを討伐できたのは中也のおかげだ～ぞ？もっと自信、持て～よ」

背中を撫でてくれるシヴァの口調は、どこまでも不思議そうだった。当然だろう。シヴァには分かるはずはない。モンスターは敵で、倒すべきものだという考えしか知らない彼に、中也の気持ちを理解してもらえるはずはない。

「何かを殺すのは、こんなに……」

「いい加減にしてくれない？　そろそろウザいんだけど」

怖いことなのか、と言いかけた中也の頭上に、ひどく感情の無い声が降り注いできた。反射的に顔を上げると、そこには呆れた顔をした光宮が立っていた。

「情けないわよ、あんた」

冷徹ともとれる光宮の声が、まるでナイフのように胸の中に入り込んでくる。

「パニックになって、1人で突っ走って、ムチャクチャな攻撃ばかりして、私の制止の声も聞きゃしない。挙げ句の果てに、クックを倒したと思えばいきなり冷静になって、モンスターが可哀そうだの、怖いだの言い出すワケ？　そういうことをするなら、誰もいないところで1人でしてもらえない？　私の前でしないで。見てる方が腹が立って来るのよ」

容赦ない言葉に、中也はつい拳を握りしめて立ち上がっていた。

それを見て、光宮が再び溜め息をつく。

「また頭に血が昇ったの？　まあ、いいわよ。そんなにクックが可哀そうなら、しっかり悲しんであげたらいいわ。クックも喜ぶわよ。きっとね」

「お前……！」

「何よ。何か文句ある？　言っておくけどね、中也。私たちはクックを倒すことが仕事なの。嫌かもしれないけど、そういうことになってしまったのよ。でもねえ、自分の仕事に疑問を持ったり、仕事の結果として殺した獲物に同情だの、憐れみだの、そんなものを振りまくのが許されるのは、一人前になってからの話よ。私やあんたみたいな初心者が、知った風な顔して仕事についてどうこうなんて、１００年早いわ」

「そういう問題じゃない！」

声を荒げて、中也は彼女の言葉を否定した。

「そういう問題じゃないんだよ！　俺は……俺は、イヤなんだよ！　モンスターでも何でも、何かを殺すのはイヤなんだ！　理屈とか、

常識とか、仕事とか、そんなんじゃないんだ！　ただ……殺すのが怖いだけなんだ……！」

言いながら、中也は自分の体が震え出すのを感じていた。すぐ傍には、たった今、彼らが討伐したイャンクックの死体が転がっている。上を向いた眼球はすでに何かを映すことなくただ淀み、かつてエサを啄ばんでいただろうクチバシからは、青黒い舌が砂浜に零れ出ていた。空中を自由自在に舞っていた翼は地に落ち、地面を駆けまわっていた脚はピクリとも動かず、そこに横たわっている。喜びや怒り、そんな感情と共に脈動していたはずの鼓動は、もう命を刻むことなく、止まってしまった。その原因が自分だと思うと、どうしようもない罪悪感に駆られてしまう。

「だったら、どう言って欲しいのよ」

頭を抱える中也に、光宮の静かな声がかけられる。

「“そうね、可哀そうね。でも将兄からの命令だから仕方ないわ。せめてクックが安らかに眠れるように祈りを捧げましょうね”それ

とも“倒したクックに恥じないように、これから立派な人間として生きて行きましょうね”こんな薄っぺらなセリフを言えば、あんたは満足できるっていうの？」

光宮の口調があからさまに嘲笑を含んでいたので、中也は思わず顔を上げて彼女を正面から睨んでいた。それを見た光宮が、ふいに表情を変える。

「あんた、バッカじゃないの？」

「……どういう意味だよ」

拳を握りしめながら、押し殺した声で聞き返せば、光宮が真っ直ぐに中也を見つめてきた。

「言葉のままよ。そんなにモンスターを殺すのがイヤなら、将兄に話してギルド・ナイトの候補生を降りればいいわ。でも、それはそのままあんたの死を意味するのよ。分かる？　知ってると思うけど、ギルド・ナイトは極秘の仕事だわ。仕事内容はおろか、誰がギルド・ナイトで誰がそうじゃないかさえ、普通の人は知らないし、知っ

てはならないの。分かってたはずよね？　それでも候補生を降りないってことは、あんたは自分が死にたくないって思ってるのよ」

「理不尽だよ、そんなの！　こんな制度、間違ってる！」

いつもなら心の中に秘めておくはずの言葉を、中也はつい口にしてしまっていた。

「そうね。私もそう思うわ。だから、それに関しては否定しない。でもね、自分が死にたくないなら、言われた通りモンスターを殺すしかないのよ。それが正しいとか間違ってるとか、そんな問題じゃなくて、現状では私たちは将兄の命令に従うしかないの。従うのがイヤなら自分が殺されるだけよ」

「そんなこと、いちいち言われなくても分かってるよ……！」

「でしょうとも。それで、その結果、あんたはモンスターの命よりも自分の命を優先させたんだわ。違う？」

そう言われて、さすがに言葉に詰まった。実際、彼女が口にした言葉は、アルテリアの夏葉の家で将兄からクエストの話をされた時

からずっと考えていたことだったからだ。

「自分の命を優先させると決めたんだから、将兄の命令に従う。そういうことでしょ？　どっちも選択するなんてことができないって分かってたなら、なおさらそういうことよ」

「……」

「子供じみた被害妄想は止めて。あんたは今、自分の命とモンスターの命、両方を取れなかったっていう理由で何だかんだと喚いているだけだわ。それに、さっきも言ったけど、自分の仕事に疑問を持つなら、せめて一人前になってからにしなさいよ。素人が知ったかぶりしてギャーギャー喚いてるところほど、見苦しいものはないわ。分かった？」

背を向けてベース・キャンプの方へと歩き出そうとする光宮を見ながら、中也は唇を噛みしめた。

「お前には、自分以外のものを可哀そうに思ったり、大事にしたり、可愛がったりする気持ちが無いのかよっ！」

光宮の後ろ姿にそう言えば、軽い溜め息をつきながら彼女が振り返る。

「そう思いたいなら、そう思えばいいわ。評価するのは他人なんだから、自分がどういう人間か、なんて、自分で言うだけバカバカしいわね」

言い捨てるようにそれだけ言って、光宮はベース・キャンプへと戻って行ってしまった。

「中也、とりあえず顔、洗え～よ」

項垂れる彼に、光宮の勢いに圧倒されて黙り込んでいたシヴァがそう言って来た。

「で、ベース・キャンプに戻ってしっかり寝ろ～よ。夕べは徹夜した～しな。お前、疲れてんだ～よ」

「そうかも、しれない……」

錆色に染まって行く海岸に入って行くと、火傷してしまっていたらしい足に海水がしみた。

「難しいことは、それから考えればいいじゃねえか～よ。疲れてボロボロになってる時にいろいろ考えても、ロクな答えは出ねえモンだ～ぞ」

澄み切った海水で、血に染まった顔を洗う。シヴァの言葉が、妙に心に響いた……。

始動４３（後書き）

「敵の敵は味方」という格言がありますが……。

「敵の味方の敵は、敵か味方か」

「味方の敵の味方は、敵か味方か」

「敵の敵の味方は、敵か味方か」

などなど。咄嗟に聞かれたら答えに悩みませんか（笑）？　そうでもないですか（笑）？　これについて、やたら身内の間では討論が交わされておりました。

ちなみに自分たちの結論は、

「敵は敵。味方は味方」でした（笑）

始動４４

満月が浮いていた。

「どうしたんだよ、中也のヤツ。戻って来るなりヘロヘロじゃねえか」

釣ったばかりの小魚を焚火に翳していた光宮に、ふいにレイがそう話かけてきた。その声に振り向けば、レイの向こう側にいるルナも、どこか心配そうな顔で自分を見つめていた。

「イャンクックが可哀そうなんだって」

「はあ？」

事実をそのまま答えると、レイがあからさまに驚いたような顔をする。それを見て、光宮は軽く溜め息を落とした。

「よく分かんないけど、自分のせいでクックが死んだのがよほどショックだったみたいなのよ」

「意味が分かんねえ……」

「同感ね」

レイから視線を逸らし、彼女は無意味に焚火に翳した小魚に手を伸ばす。

「最初のうちこそ、作戦通りにちゃんと戦っていたのよ。でも油に火がついたくらいから、パニックになっちゃったみたいでね、私がどんなに止めろって言っても聞かないの。滑空攻撃して来るクックに向かって行こうとしたり」

「滑空攻撃？　強襲って言うんじゃないの、それ」

光宮の言葉を遮って、ルナがそう言って来た。そう言われればそうだったような気がする。けれど、相手に伝わったのだから問題ない。敢えてそのことには触れず、彼女は言葉を続けた。

「大剣の歯がボロボロなのに、そのまま戦いを続けようとしたり。で、

何とか討伐に成功したと思った途端に、ダウンよ」

正確には、中也の様子がおかしくなったのはイャンクックを討伐した後ではなく、その直前だった。しかし、いちいち詳しい話をするの

が面倒だったので、そういうことにしておいた。倒れ込むように寝てしまった中也はいい。けれど、自分たちはこうして今も見張りを続けている。シヴァと夏葉が交代しに来るまでは、眠りたくても眠れない。

自分だって疲れているのだ。

「よく分かんねえなあ」

あぐらをかいていた足を組み直しながら、レイが頭をかいた。

「何でモンスターを討伐したのにダウンするんだ？　普通は喜ぶだろ。

苦労して倒せたんだから、なおさらだよ」

「どうなのかしらね」

自分の声が必要以上に素っ気ないのを自覚して、光宮はつい顔を両手で軽く押さえた。

（ダメだわ……）

他人を気遣う余裕が無くなって来ている。レイもルナもただ見張りをしているだけだ。黙っていると眠ってしまいそうになるから、敢え

て会話をしている。そして、その話題が中也になっただけの話だ。それなのに、自分は意味もなくイライラしていた。

「ああ、もう……！」

理由もなく気が立っている自分に余計にイライラする。

「どうかしたのか？」

「ごめん。何でもないわ。気にしないで」

気を取り直して、光宮は深呼吸をしてみた。イライラするのはよくない。傍にいる他人にも気を使わせてしまうし、つい心にもないことを口走ってしまうことがある。そうなると、人間関係に溝が生まれる。

溝を修復するのは自分の役目かもしれないが、自分がその溝の原因になることは許されない。

「中也は、優しいね」

光宮の内心の葛藤など知らぬ顔で、ふいにルナがそう言った。

「優しい？　あいつが？」

意外な言葉につい聞き返せば、ルナが微笑を浮かべる。

「優しいじゃん。モンスターが可哀そうなんて言うヤツ、初めて見たよ。普通は、そんなこと考えもしない」

「……それを優しさと言えるかどうかは分からないわね。私には、ただ見当外れなことで嘆いているようにしか見えないけど」

思ったままを口にすると、ルナが声を上げて笑う。

「まあね。それが普通。でも、あたしはそういうヤツ好きだな」

それはつまり、自分のことが嫌いだという意味か、と聞きそうになって慌てて口を噤んだ。

「マジかよ、ルナ」

「マジ。けっこう本気」

「ウソだろ!?　どうしちゃったんだよ!?　お前、男なんて死ぬほど嫌いだって言ってたじゃねえかよ!?」

「それはあんたも同じでしょ。心変わりしたんだよ」

目の前で繰り広げられている会話が、信じられなかった。ルナが中

也のことが好きだと言った事実に、思考回路が付いていかない。

「どこがいいのよ……」

漠然とした気持ちのまま聞き返してみると、相変わらず笑顔のルナが、こんがり焼けていい匂いのする小魚を差し出してきた。

「さっきも言ったでしょ？　優しいところ。でも、中也は夏葉のことが好きみたいだから、黙っておいてよ。恋人になりたいとか、そういうことは思ってないから」

「……そりゃあ、言わないけど。信じられない。悪いけど」

ついつい隣にいるレイと顔を見合わせる。レイも、自分と同じように唖然とした顔をしていた。

「ルナが男に惚れる日が来るとは思わなかった……」

「そうだね。自分でもビックリ」

「頭でも打ったんじゃねえの？　それとも熱があるのか？」

「正気だよ」

串に刺された小魚を齧ってみる。塩しか振っていないのに、捕れ

たての魚は妙においしい。

「ひたすら傍観しとくよ」

「そうして」

応援してやる、とも、協力してやる、ともレイは言わない。ルナも、それを求めていないようだった。自分がレイの立場だったら、少なくとも「頑張れ」の一言は口にするだろう。けれど、そういった冷めている雰囲気が、この2人には妙に似合っているような気がして、自分も何も言わなかった。

「光、そこのジュース取って」

ルナが指差しているのは、ついさっき果実を搾って作ったジュースだった。手渡すと、豪快な仕草で喉に流し込む。麦酒（ビール）だったら、ひどく様になりそうだと思った。

「まあ、この話は置いといて。私たち、いつになったら帰れるのさ」

「知らねえよ」

ルナの手からジュースが入ったビンを取り、レイも同じように豪

快な仕草で飲み下す。

「とりあえずクックは倒したんでしょ？　予定通りに行けば、明日の朝には船員の人たちが死体を解体して、船に積んでお終いって話だったじゃないか」

「そうねえ……」

船の話になると、イヤでも「彼」の顔が脳裏に浮かんでくる。

「一緒にいたのは光だったっけ？　敢えて聞かなかったけど、２人きりで何してたの？」

「残念ながら、あんたたちを興奮させられるようなことは何もしてないわ。今日のクエストのために、アイテムの準備をしていただけよ。彼はそれを見てた……いや、見てただけなら問題は無かったはずなんだけど」

床に置いてあったカンテラを蹴り、その炎が大タル爆弾の導火線に引火して、それを消そうとして油をかけた。おかげで、自分たちは多大なる迷惑を被るハメに陥った。

「ホントに、何を考えてんのかしら、あいつ……」

「同感だね。あの人、確かに掴みどころがないよ。見た目はいいけど、仲良くしたい相手じゃない」

「それについては意義なし。シヴァと兄弟って聞いて、ホントかよって思ったもんな。どっちかと付き合えって言われたら、間違いなくシヴァの方を選ぶぜ」

「……私はどっちにも興味が無いわね」

いつも通り言い放ったところで、自分の言葉に違和感を感じた。

否応なく頭の中に思い浮かんだフェンリルの姿を彼女は慌てて否定する。

（ジョーダンじゃないわよ、あんなヤツ！）

小魚が刺さっていた串を焚火の中に放り込みつつ、光宮は自分の気持ちに自分で驚いた。

（嫌いよ、嫌い！　あんなヤツ、大嫌い！！）

胸の中で何度も同じ言葉を繰り返す。しかしながら、フェンリル

のことを思い出せば、何かしら心に圧し掛かって来るものがある。

「……ねえ、そのフェンリルは今どこにいるの？」

どうしても気になって堪らず、光宮はレイとルナに向かってそう問いかけていた。

「知らないよ、そんなこと。日が暮れたくらいにフラっと戻って来たけど、気が付いたらまたいなくなってた」

「そう……」

「何だよ、光。気になるのか？」

「ち、違うわよっ！」

別に気にしてなどいない。真夜中にベース・キャンプを離れることがどれほど危険か、ギルド・ナイトである彼が知らないはずはない。それを知っていて敢えて出て行ったのだとしたら、それはもう自分の責任だ。他人がどうこう言うだけバカバカしい。そう思うものの……。

「そこにいたらいたでジャマだけど、いなかったらいなかったで気

になるのよ！　そういうモンでしょ？」

「はいはい。そういうことにしておいてあげるよ」

見透かされている気がした。レイとルナの視線は、光宮が否定したくて堪らない気持ちに気付いている。そう思うと、より一層、黙っていられなくなった。

「違うわよ！　別にあんなヤツ、好きでも何でもないんだから！　そりゃあ、ちょっとはカッコいいなって思うことはあるけど！　でもそれとコレとは話が違うわ！　ジョーダンじゃないわよ！　ホント、頼まれてもお断りよ！　イヤよ、絶対！」

途中から、自分で何を言っているのか分からなくなってきた。そんな彼女の言動に、レイとルナが腹を抱えて笑っている。

「素直じゃないよね、光は」

目尻に涙を浮かべたルナが、楽しそうにそう言って来た。

「どういう意味よ」

「そのままだよ。まあ、いいんじゃないの？　応援するよ。うまく

行くといいね」

「……応援して貰わなくても、けっこうだわ」

顔を背けて視線を逸らす。その先に、見張りの交代番であるシヴァと夏葉の姿が見えた。

「よ～やく寝れる！！」

焚火を囲んでいた3人が同時に叫ぶ。シヴァと夏葉の存在をこんなにありがたいと思ったことは、かつて無かった。

始動４４（後書き）

オンラインでゲームをしている方々の中に、無線ＬＡＮ（？）チャット・ボイス（？）という便利なものを使用なさっている方がいらっしゃいます。

身内同士の会話なのでしょうが、関係ない自分たちにもその会話の内容が聞こえてくるんですよね……。ゲームの攻略や作戦だったりすると、特に気にしないところですが、中には爆笑ものの会話を披露してくださる方々もいらっしゃいます。

「まつもっさ～ん！　まつもっさ～ん！！」

延々と呼ばれるその名前が、耳に残って離れません。ちなみに今現在、中国人と思しき方々が会話なさっています。昨日は英語圏の方でした。自分は日本語しか話せないので外国語の会話の内容は分かりませんが……。

「なんちゃらかんちゃら“オーイエー”なんちゃらかんちゃら“オーイエー”」

「オーイエー」ってホントに日常会話で使われるんだな、とひとつ勉強になりました。

始動45

「明日の夕方には出発できそうだってな」

漆黒に染まったフィールドを歩きながら、リースは後ろに続くフェンリルへ向かってそう言った。虫の音と、自分たちが踏みしめる草の音だけが響き渡る。静かな夜に、モンスターの気配はない。どこか遠くで、鳥の鳴き声がした。枝にとまって羽根を休めていたところを、何かに襲われたらしい。突如として静寂を切り裂くその悲鳴は、何度聞いてもゾッとする。

「へえ～。思ったより早かったじゃん」

夜の密林は気味が悪い。そこかしらに蹲る闇の中に、何が潜んでいても分からない。先ほどの鳥と同じように、何の前触れもなく捕食者の牙が自分たちの体に食い込む可能性はいくらでもある。そう思うと、イヤでも神経が張り詰める緊張感に苛まれる。しかしながら、リースの背後から聞こえてくるフェンリルの声は、相変わらず緊張感のカケラも見当たらなかった。

「相変わらず呑気だな。一応、ここはフィールドなんだぜ？　忘れてんじゃねえか？」

フィールドに出たら、いつ何と遭遇するか分からない。例えモンスターの姿が見えなくても決して油断してはならない。それは、ハンターならば誰もが頭と体に叩きこまれる教訓だ。

「忘れてないって。大丈夫だよ」

「ホントかよ」

「大丈夫、大丈夫。そんなにピリピリすんなって。ハゲるよ」

フェンリルの声はどこまでも明るい。つい振り返ってしまえば、武器も携えず、防具も付けていない無防備な姿が視界に映り込んだ。まるでアルテリア本国で、ちょっと買い物にでも出かけるかのような、そんな装いである。

「……死んでも知らねえぞ」

「俺は、そう簡単には死なないよ」

「そうかよ」

何を根拠に断言できるのかは分からなかったが、リースはそれ以上、言うだけムダだと言う気がして黙り込んだ。ベース・キャンプを出る前に忠告はした。だが、彼は全く聞く気が無かったのだから仕方ない。フルフル装備で全身を堅め、リオレウスのランスを携えた自分とは大違いである。

「さて、さっさと済ませてしまいましょうかね」

気を取り直して、リースは昼間、レイたちがポポポップを討伐した地点へと足を向けた。候補生が倒したモンスターの死体を検証することも、このクエストに同伴したギルド・ナイトの大事な仕事だと、３０分前にフェンリルから言われたのだ。

「メンドーだな。おい、おぼっちゃん。明日の朝じゃいけねえのかよ」

「明日の朝まで死体が残ってる確立は低いだろ？」

「まあ、な」

フィールドでは、いつまでも死体がそこに残っていることは少な

い。もともとそういう生き物なのか、それとも単に食料事情が厳しいだけなのかは分からないが、モンスターたちはそこに転がっているのが例え仲間の死体であっても、容赦なく食らい尽くし、後には骨さえ残らない。そんなものだ。

「それにしても、イャンクックを倒したのが夕方とは災難だったな。真夜中にフィールドに出たがる解体屋はいねえ。残念だな」

「まあね」

「ついでに、ポポポップの方も人手不足だったからな～。せっかく倒したってのに、解体できずそのまんまだ」

「仕方ないって。みんな、船の修復作業で忙しかったんだからさ。それに、今回のクエストの目的はクック先生を倒すことで、素材を持ち帰ることじゃないよ」

「……テメーのせいだろうが。ああなったのは」

「そうなんだけどね～」

ギルド・ナイト候補生どころか、船員すべてを巻き込んだ事件の

犯人である彼の顔には、全く反省の色合いが見当たらない。そのことに、リースは軽く溜め息を落とした。

「……将兄からは、ちゃんとフォローしてやるようにって言われただろ？　いいのかよ、そんなんで」

「いいんだよ」

「処罰の対象にならなきゃいいけどな」

「ならないよ。将兄は俺に甘いから」

どういう意味か、と聞こうとして止めておいた。そういう個人的なことは聞かないのがルールだ。

「そうかよ。そりゃあ、良かったな」

「それよりさあ、ポポポップを倒した場所ってまだ？」

「ああ、この先だよ」

森林を伐採して作られた道を逸れ、森の中へ入って随分と経過した。記憶にある場所の方向を顎でしゃくって見せると、陶器のような白い顔が軽く笑う。相変わらず、見た目だけは申し分ない青年だ

と、どうでもいいことを思った。

「レイたちのチームが戦うところ、見てたんだろ？　どうだった？」

「さすがって感じだったよ。下手したら、俺らより強いんじゃねえかってくらいだ」

「へえ～」

さして興味も無さそうに、フェンリルは淡々と相槌を打つ。その時、ふとした疑問が脳裏に浮かんだ。

「そう言えば、俺はまだお前が戦うところを一度も見たことねえな。一緒にクエストに出ても、たいていヘバってるか、仲間の足を引っ張ってるか、どっちかだもんな、お前」

「そうだっけ？」

「そうだよ」

実際のところ、どうなんだと聞こうと思った時、木立の向こうに見覚えのあるモンスターの死体が見えた。

「良かった。ちゃんとあるじゃねえか。で、死体の検証って具体的

に何をすればいいんだ？」

背後のフェンリルを振り返りながらそう聞くと、彼は楽しいものでも見たかのように声を上げて笑う。何がおかしいのか分からずに呆けていると、フェンリルがゆっくりとリースを見据えた。

「そんな仕事、あるわけないじゃん。俺の言葉を信じて、こんなところまでノコノコ出て来て、バカじゃないの？」

「は？」

「気付いてないんだ。リースさあ、もしかして自分の実力でギルド・ナイトに選ばれたとか思ってる？」

フェンリルの口調も、態度も、雰囲気も、何一つとして普段と変わらない。それでも、リースはその言葉に何となくイヤな予感を感じだ。

「そんなワケないよ。ギルド・ナイトはもっと強くないと務まらない。俺が、あんたを推薦したんだ」

「……何が言いたい？」

「父さんが、適当に捨て駒にできるハンターを知らないかって聞いて来たから」

「“父さん”……？」

「リースならちょうどいいよって、そう言ったんだ。別にあんたがいなくても、もうひとつのチームの方は俺のアイルーがちゃんと護衛してくれてた。あんたはただの目くらましってところかな」

にっこりと笑いながら、フェンリルは語る。その表情には、汚れも曇りも見当たらない。いつも通り、ただ綺麗なだけの、作り物めいた姿がそこにある。

「……まさか」

理解を拒絶していたフェンリルの言葉が、ようやく体に染み込んで来た。つまり、フェンリルは自分を始末するためにここまで連れて来たのだ。

「そういうこと」

相変わらず笑顔のまま、フェンリルが一歩を踏み出す。威圧感も

殺気も感じない。恐ろしいほどにいつも通り、フェンリルは自分の方へと歩いて来る。

「ジ、ジョーダンじゃねえ！　ふざけんな！」

「ふざけてないよ」

綺麗な顔が薄く笑う。その時になって、リースはようやくフェンリルの闇色の瞳に、恐ろしく冷たい光が宿っていることに気付いた。じっと見つめられているだけで背筋に悪寒が走る。

「く、そっ！」

歯を食いしばりながら、彼は背中のランスに手を伸ばした。目の前にいるだけで、冷や汗が出る。こんなことは、今までどんなモンスター相手にも経験したことが無かった。

「ふざけんなよ！　武器なんか持ってねえじゃねえか！　どうやって俺を始末する気なんだ、テメーは！？」

「それは殺されてからのお楽しみ」

ゆっくりと近づいてくるフェンリルにランスを向け、盾を構える。

簡単に殺されてやるつもりは無かった。これまで倒してきたモンスターの数は５０を超える。人間相手に、圧倒される理由は無い。

「え……？」

ふいに、視界が反転する。気が付いた時、目の前にいたはずのフェンリルが横にいて、自分の首と胴体が離れていた……。

「……」

いつ斬られたのかも、どうやって斬られたのかも分からなかった。自分の血で赤く染まって行く視界が、次第に宵闇よりも黒い漆黒に包まれていく。

「さよなら、リース。あんたのことは、嫌いじゃなかったよ」

返り血ひとつ浴びていない綺麗な笑顔が、脳裏に焼きついた。それを最後に、リースの視界は闇に閉ざされる。

「武器なら持ってたよ。ずっとね」

首と胴体が離れた場所に転がっているリースを見下ろし、フェンリルは独り言のように呟く。いつ、何が襲撃して来ても対処できる

ように、フィールドに着いてからフェンリルは一度も「それ」を手放さなかった。

「ファントム・ミラージュって言うんだよ。Gクラスのオオナヅチの素材で作った太刀。名前くらいは知ってただろ？」

周囲の景色を映し出す特殊な皮で覆われたその太刀は、鞘に納めた状態でも他人の目には映らない。今でこそリースの血で汚れているからそこにあることは分かるが、血糊ひとつ付いていないファントム・ミラージュは、持ち主以外その存在を知ることさえ難しい。

「まあ、どうせ聞こえてないよね」

切断面から血液を零しているリースの頭を、フェンリルは軽く爪先で蹴飛ばした。見開かれた両目に、大きく開いた口からはみ出た舌。首を落とされた死体は、いつものことながら生前の形相など少しも留めず、ただ醜いだけの肉の塊として、そこに転がっていた。

「じゃあね、リース」

刃に付いた血を払い、鞘に納める。無意識に、自分の手に視線を向けた。

（また1人、殺した）

人が人を殺すのは罪であるらしい。消せない罪が重なって行く。

そして、フェンリルは薄く笑った。

（でも、父さんは許してくれる……）

満月が見下ろしている。

始動４５（後書き）

風邪ひきました（汗）

読者様、お体にはお気をつけください。

……力尽きました。

始動４６

ベッドの横の窓から、真昼の陽光が燦々と降り注ぐ。茹だるような暑さに包まれた部屋の中、中也は気だるい体をベッドから起こした。

「……」

時刻は午後１時を少し回っている。昨日、イャンクック討伐からベース・キャンプへ戻って来て、そのまま倒れ込むようにして眠ってしまった。時間に換算すると２０時間近くも意識を手放していたことになる。それだけ眠ってしまった自分に、少し驚いた。

「みんな、何してんのかな」

イャンクックを討伐したからと言って、クエストは終わりではない。

死体を解体してくれる船員たちを護衛し、船に素材を積み込み、そして再びアルテリア本国まで帰らなければならないのだ。

「……」

ベッドが４つ、かろうじて並んでいるだけの狭い部屋には自分以外、

誰もいない。外の気配に耳をそばだてて見ても、聞こえてくるのは波の音と海鳥の歌声だけ。人の声も、気配も、何も無かった。

「探しに行こうかな」

何となく自分だけが取り残されたような気分に陥り、中也はベッドを降りて靴に足を突っ込んだ。

（それにしてもよく寝たな、俺……）

こんなに寝たのは久しぶりだ。そんなことを考えながら廊下へ続くドアの取っ手を回す。廊下に半身を出した瞬間、誰かと激突した。

「……！」

ぶつかった時、反射的に両手を前に出していたせいで、中也はそこにいたレイの胸を思い切り触ってしまっていた。世にも稀な柔らかな感触に、半ば漠然としていた意識が急速に覚醒するのを自覚する。

「ご、ごめん、レイ」

「起きたのかよ。そろそろ起こしてもいいんじゃねえかって話してて さ、手が空いたから様子を見に来たんだよ」

「あ、そう……」

胸を触られたというのに、レイは気にも留めていないらしい。そのことに内心でほっとしつつ、彼女たちには随分と心配をかけたのではないかということに思い至った。

「悪かったよ、俺だけ寝ててさ。あれから、いろいろ大変だったんじゃないか？」

「そのセリフは光に言ってやんな。あいつ、かなりピリピリしてやがるからよ。睡眠不足で」

光、と言われて中也は少しばかり胸に痛みを覚えた。イャンクックを討伐した後、つい感情的になって光宮に八つ当たりをしたような記憶がある。思い出すと、光宮に申し訳ない気持ちが膨らんで行く。

「俺、光に謝らないと」

「そうしろよ」

相変わらず、昼間であっても薄暗い廊下を進み、階段を上ってデッキに出る。途端、眩しい光に包まれた。

「動けるだろ？」

「ああ、もう平気だよ」

「それを聞いて安心したよ。とりあえず、いつでもモンスターと戦える準備をして、向こうの海岸エリアの方に行ってくれ。で、光には少し休めって伝えてくれよ」

「分かった」

海岸エリアは、ベース・キャンプから見て左手にある。昨日、中也たちがイャンクックを討伐した場所だ。

「光たち、あれから寝てないのか？」

「夕べ、キャンプの見張りしろってリースさんに言われてさ。で、あたしとルナと光が夜１２時までで、夏葉とシヴァが朝６時まで。それからフェンリルさんとリースさんに交代する予定だったんだけど、朝になっても２人がキャンプに戻って来なかったんだな、これが」

「マジで？」

「ああ。そんで仕方なく朝６時くらいから、あたしら３人がまた見張

りの仕事してたんだ。ルナはともかく、光はかなりキツそうだったな。

そういうワケだからさ、よろしく」

デッキから見下ろす砂浜には、船員の姿が溢れていた。誰もが手に木箱を抱え、船とフィールドを行き来している。その木箱の中身は、おそらく昨日、中也たちが倒したイャンクックの素材だろう。

「レイ？　来ないのか？」

海岸へ降りるために縄梯子に手をかけた時、一緒に付いてきていたレイは船室の方へと体を向けてしまう。不思議に思って問いかけると、

彼女はニッコリと笑って見せた。

「あたしは別の仕事。貨物室で積み込み作業の監督だよ」

「へえ」

踵を返したレイの背を見送り、中也はそのまま縄梯子を使って海岸へと降りる。冷たい海水に足を浸した時、足元を手の平にも満たない小さな魚が一匹、通り過ぎて行った。

「……」

広大な海のどこかへ泳ぎ去っていく魚を目で追い、中也は内心で溜め息をつく。

（生きて、いるんだよな……）

身を守るためではなく、食べるためではなく、何かの命を奪う。自分が置かれた立場には、やはり疑問が付きまとう。だからと言って、どうこうできるわけではないが、それでも利己のために何かの命を奪うという行為には、抵抗を感じずにはいられない。

（難しいな、いろいろ。ここは21世紀の日本じゃないんだし）

常識が違う。考え方が違う。習慣が違う。今までそれとなく考えていたことが、急に胸に重く圧し掛かる。

（違うって、大変だな）

今更のようにそんなことを思いながら、彼は浅瀬を歩いて砂浜へと上がった。すぐ目の前に、簡易テントが張られている。その中に、自分の武器と防具が置いてあるはずだった。

「よお、中也。おそよう」

「おそよう？」

「お早くないじゃん。だから“おそよう”」

「……おはよう」

テントの幕をくぐって中に入るなり、そこにいたフェンリルが笑顔でそう言って来た。彼の座った木箱の前には、白衣姿の男がベッドに腰かけている。どうやら雑談でヒマを潰していたようだ。

「スッキリした顔してんじゃん。一晩ぐっすり寝て、頭が冴えた？」

「おかげさまで。いろいろメーワクかけてごめん」

「いーよ、いーよ。初心者なんだからそんなモンなんじゃない？　それに、俺はな～んにもしてないし」

そう言えば、フェンリルとリースは真夜中に出かけたきり、朝方になっても戻らなかったとレイが言っていた。何をしていたのか気にならないでもないが、中也はとりあえず光宮と交代するために手早く防具を付けることに専念した。

「解体作業の監督かい？」

顔を顰めながら防具を装着している中也に向かって、医者の男がそう聞いて来た。

「たぶん。レイが、光と交代してくれって言ってたので」

「なるほど。ヤオザミには気を付けることだね」

「はい。それじゃあ」

大剣を背負い、中也は医者とフェンリルに軽く挨拶して海岸エリアの方へ向かって歩き出す。真上から降り注ぐ太陽の光が、剥き出しの腕や顔を焼いて行く。ヒリヒリするような痛みを僅かながら感じつつ、

中也は打ち寄せる波に足を晒して、海岸エリアへ続く岩を回り込んだ。

「……」

そこには、見るも無残な姿になったイャンクックの死体が転がっていた。翼を切られ、足を切断され、クチバシを折られ、耳を切り取られ、甲殻はすべて剥ぎ取られたその死体は、ただの真っ赤な固まりに

しか見えない。イャンクックだと知っていても、すぐには信じられない。人の背丈ほどもある大きな包丁を2人がかりで抱えた男たちが、腹部と思われる個所に刃を入れて行く。腹が開くと、その中に腕を突っ込んで内臓を取り出し始めた。

「……っ！」

血の臭いが風に乗って漂ってくる。その光景に吐き気を覚え、中也は思わず顔を逸らしていた。

（やっぱり、イヤだ、俺……）

口元を手で押さえながら、中也はなるべく遠回りしてイャンクックの死体を通り過ぎる。死体の向こう側にいた光宮とルナが、中也を見止めるのが分かった。

「よ～やく起きたの？　あんまりにも起きて来ないから、てっきり死んだのかと思ったわよ」

開口一番の嫌みにカチンと来ないでもないが、自分に非があることは認めていたので、ここは素直に謝ることにした。

「……いろいろメーワクかけて悪かったよ。光、レイが交代だって」

「あっそう。それはありがたい話だわ。昨日の夕方からサボってたんだから、その分、しっかり働きなさいよ」

「分かってるよ」

「ならいいわ。それじゃあね」

ヒラヒラと手を振って、光宮はベース・キャンプの方へ歩き去ってしまった。謝罪の言葉がちゃんと伝わったのかどうかさえ定かでは無かったが、自分はちゃんと謝ったのだから良しということにしておいた。

「それで、仕事って？　何すればいいんだ？」

「特にないよ。ただ見てればいいだけ。でもモンスターが来たら、それを撃退」

「ふ～ん」

難しい仕事では無さそうだ。モンスターと戦うのはイヤだが、作業の監督なら歓迎と言ったところである。改めてイャンクックの死体に

視線を向け、中也は顔を顰めた。

「気持ち悪ぃ……。よく平気だな、ルナ」

「中也が優しすぎるだけだよ」

苦い顔をしている中也にかけられたルナの声は、なぜかとても柔らかかった。

＊

イャンクックの解体作業を終え、すべての荷を船に積載し終わった時、すでに太陽は西へ向かって傾き始めていた。2本のマストに張られた帆が広げられ、船員たちによって錨が引き上げられようとしている。

「ポポポップは残念だった～な。何か、解体しに行った時にはもう、死体が無くなっちまってたんだ～と」

「へえ。そんなモンなんだな」

シヴァと並んで舷側に凭れかかりながら、中也は改めてフィールドの方へ視線を向けた。

「終わったな……」

いろいろあった気がする。夏葉の家で将兄からクエストの説明を受け、こうしてイャンクックを討伐できた今日までの日々を思い出し、中也は無意識に組んだ指先に力を込めた。

「まあ、何とか全員が無事だったんだ～し、良かったってことにしとこ～ぜ。な？」

「ああ……」

複雑な思いを胸に抱きながらも、シヴァが言った通り、全員が生き残れたことで充分だと思い直す。

「なあ、そう言えばリースさんは？」

ふと、中也は昨日の夕方くらいからずっとその姿を見ていないことに思い至った。

「そう言えば、顔見てな～いな。どうした～んだ？」

まさか、まだフィールドに残っているのではないだろうか。だとしたら、かなりマズイ状況だ。船はもう出発し始めている。もしもそう

なら、リースはフィールドに置き去りになってしまうことになる。

「あ、兄貴～！」

どうしたものかと考えあぐねていた時、タイミング良くフェンリルが船室から出て来た。

「どうかした～？」

中也とシヴァの慌てた様子に、フェンリルは軽く眉を上げる。

「リースさんが、まだ残ってるかもしれない。確認した方がいいかも」

手短に用件を伝えると、どういうわけかフェンリルが声を上げて笑う。

「リースは別の仕事だよ。しばらく密林に残って任務を続行だってさ」

「あ、そうなんだ」

「びっくりした～ぞ」

それを聞いて安心した。ならば心配しないようにちゃんと自分たちにもその旨を伝えて欲しいと思ったが、ここにいない人間に文句を言

っても仕方がない。シヴァと顔を見合わせて胸を撫で下ろしたところで、船は大海原へ向かって走り始めた。

その日の夜、中也たちが乗ったガレオン船は、嵐に巻き込まれ大破することとなる。しかし、今はまだ、海は静かに夕焼けに染まっている……。

始動４６（後書き）

お疲れ様でした。これにて「始動」は終了でございます。

次回からはサブタイトルを「共鳴」という形に変えまして、話を大筋の方向に戻そうと思っております。

嵐に巻き込まれて流れ着いた外国の地での事件がメインになります。テーマは「時代劇」……マジメに「時代劇」……モンハンで「時代劇」……。登場予定モンスターはベルキュロスです。（アトラスくんではありません！）

インターバルを置きまして、２月２０日（土）午後８時アップ予定です。どうかこれからもよろしくお願いいたします。

共鳴１（時代劇）

漆黒に沈んだ闇夜の中、鋭利な刃物に似た光を放つ銀色の月が浮いて
いる。周囲を彩る小さな星の瞬きは虚ろで、さながら狂気を孕んだ銀月
から零れ落ちた欠片のようにも見える。砕けた月と、その欠片に見下ろ
された人の世は、今は静寂の中、眠りについている。生きとし生ける者
がたゆたう夢に酔いしれるこの時刻、眠らぬ場所が唯一つ。黒に染まっ
た世界に揺れる小さな光は、今にも宵闇に飲み込まれそうなほど儚く、
漆黒の中に浮いていた。

「ああ～！　さっぱりした～！！」

ドアの向こう側から聞き慣れた声がして、彼はガラスの窓の向こうに
広がる一面の暗闇から、部屋の中へと視線を移した。何百もの蝋燭に照

らされた明るい部屋の中、濡れた髪を乱雑に掻き上げたフェンリルが、
勝手知ったる様子で応接用のソファに腰を降ろす。
「久々の風呂って、サイコー！　ねえ、父さ～ん、やっぱベース・キャ
ンプと船の中に風呂を付けてよ。２週間も風呂に入れないとか有り得ね
えもん」
「……現時点では難しい注文だな」
息子が突き付けて来た難題に苦笑を向けながら、彼は室内を進んでカ
ウンター・テーブルへと歩み寄る。執務室の一角に設けられたそのスペ
ースには、選りすぐりの珈琲や酒が磨き抜かれたグラスと一緒に並べら
れ、蝋燭の明かりを受けて鈍い輝きを放っていた。様々な種類の酒類の
中から、彼は適当に黄金酒を手に取り、それを用意した２つのグラスに

注ぐ。

「ありがと～」

グラスのひとつを湯上がりのフェンリルに手渡せば、混じり気の無い

笑顔が返される。大人になったものだと思う。自分の身長の半分も無か

った子供はいつの間にか酒が飲めるような年になり、呼び方も「パパ」

から「父さん」に変わってしまった。幼かった日々はいつしか過ぎ去り、

今では青年に成長した息子が目の前に座っている。

「まだ仕事～？　もう１０時だよ」

「残念ながらしばらく終わりそうにない。一国の王女が再び行方不明だ

からな」

「へえ～」

フェンリルの正面に腰を降ろし、胸のポケットから取り出した煙草に

火をつける。無意識に時計を見上げれば、息子が指摘した通り、すでに
１０時を回っていた。
「父さんも大変だね。将兄って、ただカッコ付けてるだけの仕事じゃな
かったんだ」
「今更か？」
「俺はクエストに出て遊んでれば、金もらえるもん。父さんがどんな仕
事してるか、とか、分かるワケないよ」
「まあ、そうだろうな」
屈託のない意見に微笑を返せば、正面のフェンリルが笑いながら煙草
に火をつける。
「父さんが将兄っていうのも不思議な感じがするけどね。アルテリアの
将兄って言えば、なんかカッコ付けてふんぞり返ってるイメージだけど、

父さんはいつもと変わらないしさ」

「そうか？」

「そうだよ。式典に出てる時も家にいる時も、あんまり違わない気がす

る。俺はムリだな～。千人とか並んでる前に出たら緊張する」

「お前の場合は意識し過ぎなんだろ？」

「父さんが意識しなさ過ぎるだけだって。あ、そう言えば、おじさんが

出発前に作ってくれた新しい武器、けっこう役に立ったよ」

「ファントム・ミラージュ？」

「そう、それ」

フェンリルの口からその言葉が出たのをきっかけに、彼は仕事関係の

面倒な報告を済ませてしまうことに決めた。息子と仕事の話をするとい

うのは、何度繰り返しても不思議な気分になる。しかしながら本人が望

んでこの仕事をやりたいと言っているのだから、こればかりは仕方ない。

「クック討伐はどうだったんだ？」

話の矛先をクエストに持って行けば、グラスを傾けていたフェンリルがその中身を見つめながら口を開いた。

「普通だよ。予想通りの展開。まあ、初心者だし、こんなモンじゃないかなってところ。意外だったのは、えっと～……レイって子と、胸が大きいルナって子と、それから夏葉のチームが上位ハンターと同じくらいのレベルでポポポップを討伐したことくらいかな。まあ、あそこにいたポポポップは下位レベルだし、そんなに驚くようなことでも無い気がするけど」

「……なるほど」

中也、光宮、そしてシヴァのチームは初心者ハンターにありがち

なパ
ターンでイャンクックを討伐したということだろう。レイ、ルナ、そし
て夏葉がそれなりの実力があることは知っていたので、フェンリルが言
う通り、ポポポップを簡単に討伐したことは予想の範囲内だ。特に目立
った点は無い。フェンリルの言葉から、彼はそう判断した。

「お前と一緒に出たハンターがいただろ？　死体はどうした？」

「リース？　ランポスに食わせたから何も残ってないと思うよ。心配し
なくても仕事はちゃんとしてるってば」

「確認しただけだ」

強い口調で自分が仕事をきちんとこなしていることを強調してくるフ
ェンリルに、彼は密かに笑みを零す。彼にとっては、まだまだ子供の域
を出ない息子だが、本人は子供扱いされることを嫌がる。それにも関ら

ず、未だに言葉遣いや態度には子供らしさが色濃く残っている。しかも
そういった部分に自分では気付いていない。そういうところが、彼にし
てみればおもしろくて堪らないのだが、敢えて言葉にすることは止めて
おいた。
「ファントム・ミラージュは実用性があるということでいいな？」
「うん。いいと思うよ。だって、ず～っと持ってたのに誰も気付かなか
ったもん。モンスター相手にはGクラスのナヅチでないとキツイかもし
れないけど、対人戦で相手をビックリさせるにはちょうどいいんじゃな
い？　採用してあげようよ。おじさんが徹夜で作ってくれたんだしさ」
「……そういう問題じゃない」
知り合いが頑張って作った武器だからという理由だけで、ギルド・ナ

イトが携帯する武器を採用するわけにはいかない……というのが将兄職
にある彼の本音だが、フェンリルに言うだけムダなので黙っておいた。

「モンスター戦はどうなんだ？」

「モンスター戦？　知らないよ。ランポスで試そうと思ったんだけど、
戦う前に逃げられたから」

「……」

フェンリルの報告に、彼は軽く溜め息を落とす。Gクラスの武器を防
具なしで携帯していれば、気配に敏感な野生のモンスターは危険を察し
て逃げ出す。それは周知の事実である。新しく作られた武器のモンスタ
ー戦における性能については、何の収穫も得られなかったということだ。

「嵐灰から説明されただろ？　あいつは何て言っていた？」

「忘れた……って言うか、聞いてなかった」

相手がフェンリルでなければ、マジメに仕事をしろ、と言うところだ

が、喉まで出かかった言葉を音には出せずに飲み込んだ。

「後で嵐灰に報告書を提出させるか……」

ハンターズ・ギルドの技術開発部・部長の何とも言えない顔を思い浮

かべながら、彼はそう決めていた。自他共に、息子には甘いことを認め

ている。今更どんな嫌味を言われたところで関係ない。

「他に何かあるか？」

「ん～、特にナシ」

「そうか」

黄金酒を注いだグラスを持ったまま、彼は一息ついて立ち上がる。通

常の仕事はまだ終わっていない。机の上に積み上げられた書類は、未だ

彼の裁可を待っているものの方が多いのだ。

「ねえ、父さん」

執務机に戻ったところで、一緒に付いて来たフェンリルに声をかけら

れ、一旦、机の上に落とした視線を上げた。

「向こうの部屋のベッド、使っていい？　明日の朝に出発するから」

「ちょっと待て」

何でも無いことのように言ってのけたフェンリルに、彼は思わず絶句

した。

「お前、まさか行く気か？」

「当たり前じゃん。てか、ちょっと待ってよ。俺以外の誰に任せる気だ

ったんだよ。あいつらのお守り（も）は俺がやるって言ったじゃん」

「……分かった。分かったから。お前に任せる。悪かった」

詰め寄って来た息子に、両手を上げて降参の意を示して見せると、フ

ェンリルは満足そうに笑った。

「そう来なくっちゃ。任せてよ。じゃあ、朝まで寝るね。7時になった
ら起こして」
「……」
息子の言動に、頭を抱えつつも頷いてしまう自分がいる。
「おやすみ、父さん。仕事がんばってね」
「ああ、おやすみ、王子」
執務室の横に設置された仮眠用の部屋に入って行くフェンリルの後ろ
姿を見送り、彼は口元に小さく笑みを浮かべた。子供の何気ない「仕事
がんばって」という一言で、つまらない書類整理も頑張ろうという気に
なるから不思議だ。
「やれやれ……」
いつまで経っても可愛い息子だからこそ、危険な場所には行かせたく

ない。出来れば、目の届く場所にいてほしいと思う。しかしながら、そ
んな親の思いとは対照的に、子供は親の元から飛び出して行きたくなる
ものなのだろう。

「サスケ」

足元に向かって声をかければ、待つほどもなく真っ黒な毛並みのアイ
ルーが飛び出して来た。

「お呼びですかニャ、マスター」

どうやら眠っていたらしいサスケは、大きな両目を手でこすりながら
も、後ろ足できちんと床に立ち、背筋をピンと伸ばしている。

「明日の朝、フェンリルを出発させる。同行するアイルーは今回もお前
に任せる。間違ってもフェンリルにケガさせるな。いいな？」

「……マスターはホントに親バカですニャ」

サスケの口から洩れた言葉に無言で睨みつければ、サスケが慌て

たよ

うに両手を振り回す。

「な、何でもございませんニャ！　申し訳ございませんでしたニャ……。

ご主人はボクが責任をもってお守りいたしますニャ。どんなモンスター

相手でも、人間相手でも、ご主人に指一本触れさせたりしませんニャ」

「分かればいい」

短く言って、彼は再び書類に向き直る。

「要件はそれだけだ。下がれ」

「了解いたしましたニャ」

深く一礼し、サスケは再び時空の狭間へと戻って行った。

「さあ、どうなるか……」

今ごろ、異国の地で眠りについているだろう6人の少年、少女たちを思

い浮かべ、彼は薄く笑った……。

共鳴１（時代劇）（後書き）

お久しぶりです。無事に「共鳴」をアップすることができました。

今回もサルみたいに「毎日更新」して参ります。少しでも読者様が楽しんでいただければ幸いに存じます。

それでは、今回もよろしくお願いいたします。

共鳴2

青白く染まる視界に、誰かの叫び声が重なった。

（危ない……！）

暗く、低い空から撃ち落とされた光が、船のマストを直撃する。

（逃げないと……！）

強い力で体の奥から引き裂かれるような音とともに、割れたマストが

海面に沈んで行った。

（逃げろ、逃げろよ！）

立っていられないほど傾いたデッキに、横から高波が襲いかかる。

（何とか、しないと……！）

冷たいだけの海水を全身に浴びた。身を起こす間もなく、再び雷が頭

上で炸裂する。

（ヤバい！　もう、ダメだ！！）

海の猛威に、船が悲鳴を上げている。脳がそう認識した時、まるで巨
人が振り上げる手の平のように高く盛り上がった波が、軽々と船を飲み
込んでしまう。
「う……」
水に呑まれる。息が塞がれ、身動きひとつ、ままならない。塩辛い水
が大量に喉へ流れ込み、焼けつくような痛みを訴えてきた。
（こんなところで死にたくない！）
必死で海水を掻き、うねりを上げる海面に顔を出せば、自分と同じよ
うに海に投げ出された船員の誰かが必死の形相で腕を振り回していた。
（泳げないのかよ！？）
何か捕まるものはないか、と高くうねる海面を見渡す。天で輝いた光
に、周囲が青白く照らされた。つい先ほどまで乗っていた船が、波

に揉
まれ、まるでオモチャのように壊れて行こうとしていた。
「うぅ……」
このままでは死ぬ。海面に浮かんだままでは体力が持たない。せめて
何か体を支えられるものがあれば……そう思った時、目の前を三角形の
背びれが悠然と通り過ぎて行った。
（……！）
真っ黒な海面に浮かぶ、三角形の背びれ。それは時折、海面に沈み、
思い出したように浮き上がり、海に投げ出された人間たちの間を縦横無
尽に泳ぎ回っていた。どこかで誰かが叫ぶ。
（サメだ……！）
一頭ではない。サメの群れが、いる。
（カンベンしてくれよ！）

魂を引き千切るような絶叫が迸る。はっとして振り向けば、自分の近
くで溺れていた船員が、まるで下から足を引かれたような勢いで水面下
に沈んで行った。
（あ……）
ほんの少しの時間を置いて、男の体が勢いよく浮き上がって来る。生
きていたのか、と安心したのも束の間、稲光に照らされて海面に浮かぶ
その体には、下半身が付いていなかった。
（う、うそ……だろ……！？）
天を駆け抜ける雷光は、あまりにもリアルに上半身だけの男の姿を視
覚に伝えてきた。噛み千切られた皮膚はズタズタになり、そこから淡い
色をした内臓が垂れ下がっている。細い管のような長いものは、腸だろ
うか。彼が見ている目の前で、その体から何か丸いものが零れ落ち、

海
の底へと消えて行く。
（う、わ……！）
世界を真っ二つに割るような激しい音と共に照らし出された光に、
断
末魔の形相が垣間見える。降り注ぐ雨を受けても瞬きひとつしない
眼球。
とめどなく流し込まれる海水にも、決して閉じられない口。そこか
らは
み出した舌。それは本当にこんなものが人間の口の中に収まってい
たの
かと思うほど長く、太く、顔の横に垂れている。
（人間の死体って……こんなに残酷なものなのか……！）
そんなことを思った時、黄色を混ぜた赤が広がる海水の向こう側
から、
鋭い牙が並んだ巨大な口が、自分を目がけて迫って来ているのが見
えた。
＊

「うわぁあああぁああ！！」

自分の声に驚いて、中也は目を覚ました。

「あ、うわ……あ……」

自分の手を見る。ちゃんとある。自分の足を見る。ちゃんとある。自

分の体を確かめる。ちゃんと、あった……。

「……」

荒い呼吸をしながら、中也は思わず自分で自分の体を抱きしめていた。

生きているようだ。通常時よりもかなり速いが、心臓も、ちゃんと動い

ている。

「生きて……る……」

間違いない。自分は生きている。手足も、失わずに済んだらしい。今

になって、体が震え出した。

「死ななくて、よかった……」

冷たい海に投げ出された時の、あの感触。すぐ近くでサメに襲われて死
んだ人間の、あの姿。自分に襲いかかって来る、あの牙……。思い出した
だけで、息をするのも苦しくなるような恐怖が全身を駆け抜けて行った。

「……」

どくどく……と規則的に脈動する心臓の音を聞きながら、中也はしばら
くの間、両腕で自分の体を抱きしめたまま膝に額を付けていた。

「……ここは」

深呼吸を繰り返し、強制的に気分を落ち着ける。命は助かった。しかし、
状況が安全なのかどうかは分からない。確か、嵐に遭遇したあの夜は、フ
ィールドを出発した日だったはず。だとしたら、自然に波に流されて本国
に帰りつけた可能性はほとんど無いと言っていい。

「ここ、どこだ……？」

いっそ腹立たしいほど穏やかな陽光の元、白い海岸がどこまでも続いて
いる。打ち寄せる波も、その向こうに広がる海も、嵐の気配など微塵も感
じさせないほど落ち着いている。大破したはずの、船の残骸さえも見当た
らない。綺麗な砂浜には、貝殻と岩だけが存在していた。

「誰もいないのか……？」

あまりの静けさに、中也はついそう呟いた。その途端、言い知れぬ焦り
のようなものが腹の底から湧きあがってくる。誰もいない、見知らぬ場所
に、１人きり……。孤独が恐怖をかきたてる。

「お、おい！　誰か！　誰かいないのかよ！？」

周囲に危険なものがいるかもしれない。頭のどこかで警戒音が鳴り響く。
しかし、人間の存在を求めずにはいられなかった。

「誰か！　返事しろよ！　誰か！」

自分の他に生き残った者はいないのか。自分は本当に1人きりなのか。

拒絶したくなるような事実を認めるのがイヤで、中也は大声を張り上げな

がら、無意味に海岸を歩き続けた。

「あ……」

しばらく海岸を進んだ時、海藻と砂が張り付いた岩の陰から、うつ伏せ

に倒れているらしい人間の脚が2本、覗いていた。何も考えず、中也は2

本の脚に向かって砂浜を蹴る。

「お、おい！　シヴァ！　しっかりしろ！」

岩陰の向こうで意識を失っていたのはシヴァだった。見間違えるはずは

無い。駆け寄って、中也はその体を力任せに仰向けにした。

「シヴァ！　おい、シヴァ！　起きろよ！」

肩を揺すり、頬を叩く。呼吸はある。夢でも見ているのか、時折、伏せ

られた瞼が痙攣するように動いていた。シヴァがここにいること。そして
生きていることに、言葉にはできないような安堵を覚える。１人ではない。
それが、何よりの救いだった。
「シヴァ！　起きろ！」
なかなか目を覚まさないシヴァに微かなイラ立ちを覚え、中也は少しば
かり強く頬を叩いてみる。表情を歪めたシヴァの腕が動き、額の近くまで
持ち上がった。
「ん～……う……」
何とも形容しがたい情けない声をもらしながらも、シヴァがようやく瞳
を開いてくれた。
「あれ～？　中也～？」
「大丈夫か？」

「ん～、大丈夫……と思う～ぞ」

上体を起こしたシヴァが、眩しそうに瞬きを繰り返す。これでもかと言

わんばかりに真っ赤に染められた彼の自慢の髪も、今は砂をかぶっている

上に、さんざん絡まって、見るも無残な有り様になっている。しかし、ざ

っと見たところ怪我らしきものはしていないようだった。

「ここ、どこ～だ？」

「知らねえ。俺も、さっき目が覚めた」

「そうな～のか。他のみんなは～？」

「探してる……」

「手伝う～ぞ」

中也の言葉をどう受け取ったのかは定かでは無かったが、軽く息をつい

てシヴァは立ち上がる。海岸を歩き出す彼に、中也も付いていった。

「……どこまで覚えて～んだ？」

２人並んで、何もないだけの海岸を歩いていると、ふいにシヴァがそう
聞いて来た。
「海に落ちて、サメに襲われそうになったところまで。お前は？」
「似たようなモンだ～ぞ。海に落ちて、とりあえず海面に顔を出した～ん
だ。そしたら、ルナが船員の誰かにしがみ付かれて苦しそうにしてたから、
助けに行こうと思って泳いだんだ～ぞ。そこまでは覚えて～る」
「記憶、いきなりブツ切れしてんのかよ」
「さあ～な。ルナを助けた記憶はね～ぞ。気が付いたら目の前にお前がい
た～んだ」
「そうかよ」
お互いに最後の記憶を確認し合ったところで、何かしら一抹の不安のよ
うなものを感じた。けれど、その不安が何なのか全く分からなかったので、

それについては何も言わずに黙り込むことにした。

「他に、誰もいねえのかな」

「そういうことは言うモンじゃねえんだ～ぞ」

「……悪い」

海岸線の反対側は崖のようになっており、その向こう側は見渡せない。

不用意な発言で少しばかり気まずくなってしまった空気を誤魔化すように、

中也は何か場所の見当が付くものはないかと視線を巡らせた。しかし、あ

るのは海と海岸と崖だけ。残念ながら、ここがどこなのか手がかりになる

ようなものは無かった。

「中也、あれ見ろ～よ」

ふいに、足を止めたシヴァがそう言って来て、中也は彼の視線を追いか

ける。

「人がいるな」

「行ってみ～るか？」

「何言ってんだよ。行ってみようぜ」

シヴァが何を迷っているのか分からなかった。人がいるならば、助けを

求めない手はない。それに、ここは身を隠すものが何もない海岸なのだ。

今更隠れたところで、どうせ見つかる。

「……お前って、慎重なのか大胆なのか分かんねえんだ～ぞ」

「はあ？」

呆れたように言ったシヴァにどういうことかと聞き返してみたが、彼は

それ以上、何も言わなかった。2人揃って、人だかりが出来ている方向へ

向かって駆け出す。

「何だ、あの人たち……」

近付くにつれて、そこにいる人間たちの姿が鮮明に見え始めた。着てい

る服は、どこからどう見ても和服で、随分と着古した印象が強い。
ただ、

意外だったのが、それを着ている人間の顔立ちである。掘りの深い目鼻立

ちに、白い肌や黒い肌。どこから見ても「コーカソイド」あるいは「ネグ

ロイド」と呼ばれる人種が、普通に和服を着て、しかも金髪や赤毛、縮れ

た黒髪を「チョンマゲ」にしているのだ。

「変わった人たちだ～な」

「そうだな……」

シヴァが何を思ってそこにいる人間たちを「変わっている」と言ったの

かは分からなかったが、中也からしてみれば違和感がこれ以上ないほどに

溢れ出ていて、余りある。

「ジョーダンだろ……？」

ついそう呟いた時、ネグロイド系の男が走って来る中也とシヴァを見止

めて表情を変えた。

「外国人だ！　あそこにもいたぞ！」

ネグロイド系の男がそう叫ぶと同時に、周囲にいた男たちが同時に2人

の方を振り向いた。

「捕まえろ！！」

駆けていた足が急に重くなる。慌てて立ち止まった時、チョンマゲを結

った男たちの足元に倒れている少女がルナであることに気付いた。

「逃がすな！　取り押さえろ！」

ルナを見捨てて逃げるわけにはいかない。だからと言って、ここで捕ま

ればロクでもない目に遭うことが目に見えている。逡巡している間に、中

也とシヴァは取り囲まれていた。

「お役所から報酬が出るぞ。3人分だ」

嬉しそうな声は、コーカソイド系の金髪の男の口から発せられた。

「……」

その時になって、中也はシヴァが人間がいるところに行くのを躊躇って

いた理由が分かった。

（迂闊だった）

分かっていたはずのことを改めて思う。ここは、２１世紀の日本ではな

い。そこにいる人間が、自分たちに好意的であるという保障など、どこに

も無いのだ。

（しまった……）

人間の敵はモンスターだけではない。人間の敵になるのは、同じ人間が

最も多い。強い力で抑えつけられ、後ろ手に縄をかけられながら、中也は

自分が取った短慮な行動に、心の底から後悔した……。

共鳴2（後書き）

本日、午後2時ごろに昼寝をしてしまいました。で、夢を見ました。

夢の中でたこ焼きを焼いていました。

ソースたっぷり、マヨネーズたっぷり、ネギたっぷり……何だかとてもおいしそう（笑）よし、食べようと思って箸を手に取った瞬間、相方が運転するドラッグスター（バイク）の爆音が聞こえてきて、目が覚めました。

非常に腹が立ちましたね。いや、理不尽なのは分かっているんですが、せめて一口くらい食わせろよ、と思いました。で、近所でおいしいと評判のたこ焼き屋さんにたこ焼きを買いに行ってもらいました。

普通においしかったです。

共鳴3

「ここに入ってろ」

強い力で背中を押され、たたらを踏んだ。同時に、視界を塞いでいた

布と、拘束していた縄が解かれ、体が自由になった。

「すぐに取り調べが行われる。静かに待っていろ」

鍵がかけられた格子戸の向こう側から、金髪をチョンマゲに結い、和

服を着用した男がそう言い放ち、丁寧にカギをかけた後、背を向けて立

ち去って行った。

「取り調べかよ……」

自分たち以外、人の気配がしなくなった場所で、中也は悔し紛れにそ

う呟く。自分たちはクエストの帰りに嵐に巻き込まれ、気が付いたらあ

の海岸に流れ着いていただけだ。何ひとつ、誰かに咎められるようなこ

となどしていない。それにも関らず、自分たちを取り巻くこの状況はま
さしく罪人の取り扱いである。

「やってらんねえ～な」

小さく溜め息を落とし、シヴァが汚れた床に腰を降ろす。鬱陶しそう
に銀髪を掻きあげたルナも、それに続いた。

「お、おい止せよ。汚いぞ……」

石で造られた床は、藁と思われる植物が敷き詰められ、壁と床の接合
部分には苔のようなものまで生えていた。見るからに汚い。正体不明の
「シミ」のようなものも、ところどころに付着している。

「気にしないよ、そんなこと」

自分たちが閉じ込められているこの場所は、どう見ても「牢屋」だ。
そして牢屋に藁が敷き詰められているのは、トイレが無いからである。

長い間ここに閉じ込められ、ちゃんとしたトイレに行かせてもらえない

罪人は、この場で用を足すしかない。床に汚物が浸透するのを避けるた

めに、簡単に取り換えが可能な藁を敷き詰めるのが通例なのだ。饐えた

ような何とも言えない臭いが染み付いていることかしても、この場所で

も似たような理由で藁が敷き詰められていることは想像に難しくない。

そんなことを知っているからこそ、中也はなおさら床に腰を降ろすのを

戸惑った。

「ここ、どこだか分かる人いるのか～な？」

「知らないよ、そんなの」

中也の心情など素知らぬ顔で、シヴァとルナがそんな会話を始める。

アルテリアにいた時はあまり気にしなかったが、こういう状況になると

改めて彼らと自分の衛生感覚の違いを痛感した。

「中也、お前は何か分かる～か？」

「分かるワケねえだろ。ずっと目隠しされてたんだぞ？」

「だ～よな」

無意識に周囲を見渡すが、ここがどこなのか手がかりになるようなも

のは何も無かった。中也たちが閉じ込められた牢屋は、床と三方の壁が

石造りで、一方が木の格子戸になっている。見たまま、牢屋である。照

明となっているのは、格子戸の向こう側にかけられた松明だけで、窓ら

しきものは見当たらない。自分たちが入れられている「個室」の正面に

も牢屋があったが、今は無人のようだった。

「気味悪いところだよな。まあ、牢屋なんだから当たり前か」

「違いな～いぞ」

換気が悪いせいか、そこを満たしている空気は重く、じっとりとしていて、肌に絡みつく。鼻をつく異臭は、船で飼われていた家畜の部屋を満たしていた臭いに似ていた。

「……」

おそらく、数えきれないほどたくさんの人間がこの牢屋に入れられ、

そして「消えて」行ったのだろう。そうでなければ、他に人がいないのに、これほど強く人間の体臭が残っている理由が見当たらない。

「……ヤバいかもしれない」

「今更か～よ」

「取り調べするとか言ってたよな。余計なことは喋らない方が無難かも」

中也がそう言った時のこと、どこか遠くで扉が開く音がした。今まで石のようにその場に腰を据え、全く動かなかった空気が動いて錆びた鉄のような臭いを運んできた。

（血の臭い……）

脳裏に甦った嫌な記憶を、中也は軽く頭を振って追い払う。今は、そんな感傷的なことを考えている場合ではない。この場所に血の臭いが漂っている理由を考え、背筋がゾッとした。

（拷問とか、してんじゃねえだろうな……）

可能性としては、充分過ぎるほど有り得る。ここは「外国人」という理由だけで、後ろ手に縄をかけ牢屋に閉じ込めるような場所だ。自分たちが罪を犯したかどうかは別問題として、犯罪者に対する「人権」というものが確立されている可能性は極端に少ないように思えた。

（これは……かなりヤバい状況だ……）

今更のように、自分が取った短慮な行動に腹立たしさが湧きおこる。

もう少し考えて行動していれば、少なくとも自分の命の選択権をあっさり相手に握られるような状況には陥らなかったはずだ。徐々に近付いてくる足音に、恐怖心が掻きたてられる。

（……死刑囚って、もしかしてこんな気分なのかな）

看守の足音が怖い、というその発言を今まさしくその身に実感しながら、中也は背後にいるシヴァとルナを振り返った。

（どうする……）

逃げるべきか、それとも従うべきか。どちらに転んでも、状況に好転はない気がした。逃げだせば、殺される確率も高いが生き延びられる確立も高くなる。従えば、殺される確率も低いが生き延びられる確率も低い。どっちもリスクが大き過ぎて、簡単には決められない。

（逃げるべきか……）

しかし、ただ「逃げよう」という言葉だけで3人が3人とも無事に逃げ切れる可能性はあまりにも低かった。作戦を立てるにしても、意見の交換をするにしても、すぐそこまで看守がやって来ているのだ。時間が足りない。それに、自分たちはここへ来るまでずっと目隠しをされていた。牢獄の様子がどうなっているのか、外の様子がどうなっているのか、看守の勤務はどうなっているのかさえ分からない。

（脱獄に必要なのは、情報収集……）

今の時点では情報が足りない。今ここで逃げだせば、殺される確率の方が高い。必要な情報を得られるまで自分の体が無事かどうか保障は無いが、少なくとも無謀な脱獄を試みるよりは身の安全を確保できる。

「大人しくしてよう。俺たちはアルテリアのハンターで、クエストの帰りに嵐に巻き込まれたんだってことにするんだ」

「そのまんまじゃねえか～よ」

声を抑え、早口で要件を2人に伝えれば、シヴァから呑気な言葉が返ってきた。

「違う。ギルド・ナイトの候補生だってことを言うなってことだよ。で、話の辻褄を合せるために、年齢を聞かれたら18歳だって答えるんだ。分かったか?」

「分かったよ」

「了解だ～ぞ。3人一緒に取り調べされたら、中也が答えろ～よ。俺だとボロが出そうな気がする～ぞ」

言われなくても分かっている。そう返そうとした時、看守と思しき足音が、中也たちが入れられた牢屋の前で立ち止まった。

「……」

やって来たのは3人の男だった。先頭に立っているのが、コーカソイド系の赤毛の男で、腰に2本の刀を差し、和服の上に薄い水色の肩が出っ張った服のようなものを重ねている。一見して、武士という表現がしっくりくるような出で立ちだ。その背後にいる2人の男は、モンゴロイド系の顔立ちをしていて、きちんと和服を着用していた。見た目に違和感が無いのは背後に付き従う2人だが、その先頭に立っているのがコーカソイド系の男だと、おかしな印象を強く感じる。それぞれ年齢は３０代の後半かそこらで、チョンマゲを結っているという点が共通していた。

「出ろ。取り調べだ」

先頭の男がそう言うと同時に、左側に従っていた男が一歩前に進み出る。その男は、まず先頭に立つ男に向かって４５度の角度で丁寧に

一礼した。そして舞踊でも踊るような仕草で着物の袂を払い、右手を懐の中に入れる。その時、彼の左手は右の袂を押さえていた。そして懐から鍵を取り出し、鍵を外すと、再び左手で右の袂を押さえたまま、

鍵を懐の中に戻した。そして両方の袂を払い、真っ直ぐに背筋を伸ばしたまま一歩後ろに下がり、先頭の男に向かって４５度の角度で礼をする。最後に両手を太股に添えたまま、元いた場所に戻った。

（鍵を開けるだけじゃねえかよ……）

たったそれだけの動作に、これだけの作法があるというのが信じられない。

（身分ってヤツかな……。雰囲気的には、それっぽい感じがする……）

和服、刀、チョンマゲ……それらから想像できる故国の風習を思い出すと、何となく腑に落ちるものを感じた。先頭に立っている男は、後ろに付き従う2人の男よりも身分が高い。目上の者に対して、型にはまった作法をきちんとこなすことは、最も失礼の無い態度と見なさ

れる。そう思うと、ここがどんな場所なのか、おぼろげながらイメージを掴めたような気がした。

「さっさと出ろ。3人一緒でいい」

先頭に立った男の口から出た言葉に、中也たちは互いに顔を見合わせていた。それぞれ、あからさまではないがホッとしたような表情をしている。

（良かった……）

1人きりで取り調べをされるのではない、という事実に心の底から安堵していた。中也にとって、それはシヴァがボロを出すよりもずっと重大な問題のような気がした。

（何とか、うまくやらないと……）

格子戸を抜けながら、中也はそんなことを考える。うまく行けば、ここがどこで、帰るための方法があるのか、など基本的な情報も聞き出すことができるかもしれない。

「こっちだ。付いて来い」

先頭にいた男が踵を返し、牢屋が並ぶ廊下を奥へ向かって歩き始めた。その後ろに従えば、中也たちの背後を固めるように、2人の男が後ろから付いて来る。3人で横一列に並べば、互いの肩に触れ合うほどの幅しかない狭い廊下の脇には、ところどころに松明が灯されており、周囲を無気味に照らしている。

「……！」

ふと、視線を横に並ぶ牢屋の中に巡らせて、中也は絶句した。薄暗い光の元、干からびた人間が壁に寄りかかっているのが見える。

（日干しかよ……）

死んでいるのだと思った。しかし、つい視線を逸らせずにいた中也の視界の先で、干からびた人間の腕が微かに動いたような気がした。

（まだ生きて……）

死体である方がまだマシだと、そう思った。生かさず、殺さず。死の手前にありながら未だ息絶えることなく息をしている人間の姿を目の当たりにして、体中を悪寒が駆け抜けた。

（なんなんだよ、ここ……）

空気が動いた。風に乗って、むっとするような腐敗臭と汚物の臭いが鼻をつく。思わず手で口元を押さえ、中也はその人間から意図的に視線を逸らしていた。

（拷問は何も、叩いたり斬りつけたりするだけじゃない……）

何カ月もの間、食事を与えない。それだけで、人間にとっては拷問に成り得る。

「……」

無言で廊下を進んでいると、両側に並んだ牢屋のところどころに先ほど日干しにされていた人間と似たような姿の罪人の姿を見かけるようになった。奥へ行けば行くほどに、目に付く囚人の数も増えていく。

さながらそこは、地獄へ続く道筋のようだった。

共鳴3（後書き）

ヒザに「ニコちゃんマーク」の形をしたアザができていました。

どうしてそんなアザができたのか、ナゾです。

共鳴4

薄暗い廊下を無言のまま付いて行くと、その突き当りに障子(しょうじ)があった。

障子の前には、人間が1人、かろうじて立てるほどの幅がある木の板が

渡してあり、廊下と障子の間を仕切っていた。

（障子だ……）

久しく見ていなかった障子というものを目の当たりにして、こんな状

況であるにも関わらず懐かしさのようなものを感じてしまう。土が剥き

出しの廊下は、そこから右方向に曲がっており、廊下の両端には障子が

ズラリと並んでいた。

（デカい建物だな）

右に曲がった廊下は奥が暗闇に沈んでいる。ここまで歩いて来た長さ

から考えても、この建物は相当な大きさがあるのだということは、

想像
に難しくなかった。
（ここ、いったいどこなんだよ。まるっきり昔の日本じゃねえか。こん
な国があるなんて聞いたことねえぞ）
そんなことを思っていると、中也の背後にいたモンゴロイド系の男が
両手を太股に添えたまま背筋を伸ばして前に進み出る。中也たちの方に
は視線すら寄こさないまま素通りすると、先頭に立っていたコーカソイ
ド系の男に向かって４５度の角度で丁寧に礼をした。
「御免」
短く言って、彼は障子の前へ進み出ると、まるで軍隊のような隙のな
い動作で回れ右をする。そして視線と背筋を微動だにしないまま草鞋（わらじ）を
脱ぎ、横を向いたまま板間に足を乗せた。続いて背筋を伸ばしたまま腰

を落とし、首を４５度ほど下げて右手で障子を開く。

（障子を開けるだけじゃねえか……）

細かすぎる動作に呆れるものを感じつつ、先頭に立った男が前に進み

始めたので中也たちもそれに付いて行った。てっきり障子を開けた男と

同じように部屋に入るのかと思いきや、コーカソイド系の男はそのまま

普通に草鞋を脱ぎ、板間に足を乗せる。どうしたものかと、中也は隣に

いるシヴァとルナに視線を向けた。

（普通に上がっていいのかな……）

作法がなっていないという理由で、相手の印象を悪くしてしまう可能

性がある。だが、見ず知らずの国の作法や礼儀など知る由も無い。もし

かしてシヴァとルナが何かしらリアクションをしてくれるかもしれない

と期待したのだが、2人は無表情でじっと前を向いたまま、中也の方を
見ることさえしてくれなかった。
「さっさと入れ」
背後にいた男に背中を押される。どうしようか迷った挙げ句、中也は
素直に聞いてみるという選択を取ることにした。知らないことを聞くだ
けだ。そこまで気を悪くされる理由は無いはず。そう考えた。
「あの……俺たちは、その……外国人なので、この国の作法を知りませ
ん。もしよかったら、作法を教えていただけないでしょうか」
知っている限りの丁寧な言葉を選び、恐る恐る言ってみる。その間に
も、相手がいきなり怒り出したりはしないかと心臓が破裂しそうなほど
高鳴っていた。
「自分たちの無知で、この国の方を御不快にさせるようなことは望んで

いません……」

相手に反応が無いので、更にそう言ってみる。中也の質問に対する答

えは、先に部屋に入ったコーカソイド系の男から返ってきた。

「お前たち外国人が礼儀を知らぬ野蛮人であることは先刻、承知の上だ。

お前たちの国の流儀で良い。それを許す。早く入れ」

「はい……」

礼儀を知らない、野蛮人。外国人であるという理由で、初対面の人間

からそう決めつけられた。正直、頭に来ないわけではない。しかし、こ

こで言い返すことは止めておいた。状況は、依然として自分たちに不利

である。

（腹立つな……）

そう思いながらも、中也は言われた通り、板間に方に進んだ。そして

靴を脱ぎ、ふと思い立って、脱いだ靴の踵を揃えて爪先を反対側にして
おいた。シヴァとルナも、それを見て同じようにする。
「ほう。最低限の作法は心得ておるのか」
コーカソイド系の男からそう言われ、故国での常識がこんなところで
通用したことに少しばかり安堵した。何と答えていいか分からず、無言
のまま部屋へ進む。
（畳だ……）
窓の無い6畳間に、背の低い机がひとつ。照明となっているのは、行
燈の光だけ。全体的にカビ臭いが、ここだけは掃除されているらしく、
気になる「シミ」は見当たらなかった。障子の外で、中也たちの背後に
立っていた男がコーカソイド系の男が脱いだ草鞋を丁寧に整えるのが見

える。彼は続いて、芝居がかかった仕草で自分も草鞋を脱ぎ、板間に足
を乗せた。
（何を聞かれるんだろう……）
部屋の中に入って来た男が障子の脇に正座したのを合図に、最初に障
子を開けた男がさっと立ち上がり、部屋の中へ入って来る。そして再び
後ろを向き、腰を落とし、両手で障子を閉めた後、すでに正座している
男の反対側に正座した。
「さて、取り調べを始める」
コーカソイド系の男が机の向こう側に腰を落とす。それを見て、中也
たちはその正面におずおずと座った。中也は当然、正座したのだが、そ
もそも正座というものを知らないシヴァは胡坐（あぐら）をかき、ルナは体育座り
をしてしまう。それを見て、中也は慌てて自分の座り方を示して見

せた。

（畳の部屋だし、向こうのオッサン2人も正座してるから、正座で間違
いないはず……）

そんな中也の心情とは裏腹に、シヴァとルナは生まれて初めての正座
に窮屈そうな顔をしていた。

（落ち着け、落ち着け……）

自分がもともと生まれた国が、他国から隔絶した島国であったせいか、
肌の色が違う人間を前にすると無意味に緊張してしまう。こんな状況だ
と、なおさらだ。ルナや光宮などは慣れているからそうでもないが、や
はりコーカソイド系やネグロイド系の人間を前にすると、つい身構えて
しまう自分がいる。

「まずは名を聞こう。1人ずつ申せ」

中也の内心など素知らぬ顔で、懐から帳面のようなものを取り出した

コーカソイド系の男が、それをパラパラと捲りながら聞いて来た。

机の

上には、硯（すずり）と筆のセットが用意してある。アルテリアでは文字を書く際、

羽根ペンとインクを使うが、この国では墨を使うらしい。帳面を開いた

男は、慣れた仕草で墨を磨（す）り始める。

「中也、です」

「シヴァだ～……です」

「ルナ」

「それだけか？」

各自が名前を言い終えると、男が胡乱げな目つきでこちらを窺って来た。

「それだけかと聞いておるのだ」

「……それだけ、です。俺たちの国……アルテリアでは、個人名だけ

で家族単位の名は名乗りません。民族によっては、名前とは別に呼び名を使いますが、普段は呼び名だけで名前を使うことは滅多にありません」

「ほう」

顔立ちや見た目はともかく、彼らの雰囲気からして名字を重んじる風習があるのではないかと推測した中也は、敢えてそう言ってみた。おそらく、シヴァやルナが「名前はこれだけだ」と単刀直入に言うよりも、相手方に理解しやすいはずだ。

「アルテリアの出身か？」

「はい」

「……妙だな」

男の目つきが変わり、内心で心臓が悲鳴を上げた。

「妙、とは……どういうことですか？」

恐る恐る聞き返すと、墨を磨り終えた男が組んだ手の上に顎を乗せ、

真っ直ぐに中也たちを見つめてきた。

「未だかつて、この国にアルテリアの民がやって来たことはない。しかも、話に聞くところによると、そなたらは海岸に倒れていたと言う。

アルテリアの民が、何の目的でこの付近の海岸をうろついておったのだ？」

「それは……俺たちにも分かりません」

下手にウソをつくと面倒だと判断し、中也はあったことをそのまま答えることにした。形ばかりとは言え、自分たちが彼らに「礼儀」を示していることが伝わったのか、「お前」から「そなた」に呼び方が変わっている。つくづく、分かりやすい国だと思った。

「俺たちはアルテリアのハンター……正確には、その訓練生です。モンスターを討伐するために、クエストに出発しました。その帰り道、嵐に巻き込まれて、気が付いたら海岸にいました。本当です」

中也の話を聞き、正面に座る男の目つきがより一層、鋭くなった。

「それこそ妙な話だ。アルテリアのハンターもクエストに出るという

話は聞いたことがあるが、その航路から外れてここまで流れ着いて来たという話は信憑性に欠ける。アルテリアからここまで、どれほどの距離があると思っておるのだ。それだけの距離を、フカ（＝サメ）にも襲われず、しかも無傷で流れ着いたなど、とても信じられん」

「……失礼ですが、この国の名前を教えていただけませんか？」

自分の話を信じない、と断言する男に向かって、中也は勇気を出してそう聞いてみることにした。信じられないと言われたところで、自分たちは、ここがどこかすら分かっていない。相手が信じられないと言う根拠が分からない時点では、言い訳のしようもない。

「ここか？　ここはファーナ王国だ」

「ファーナ……？」

男の口から出た答えに、さすがに中也は顔色を変えた。それは隣で慣れない正座に苦しんでいるシヴァとルナも同じだったらしい。互いに顔を見合わせ、唖然とする。

（そんなバカな……）

ファーナ王国は、シエンナ内海を挟んでアルテリアの対岸に位置する大国だ。普通に考えれば、アルテリアからファーナまで船で一カ月近くかかる。それを思えば、男の言う通り、自然に波に流されてファーナに辿り着いた可能性は極端に低い。それに、嵐に巻き込まれた夜は、まだフィールドに近い場所にいた。

「顔色が変わったな。どうだ、もっとマシな言い訳は思いついたか？」

言い訳どころではない。いくら何でも有り得ない状況に、頭の中が真っ白になってしまった。

「もう一度聞く。どうしてあの海岸にいたのだ？」

「分かり……ません……」

そう答えるしかなかった。誤魔化しているのでも、言い訳を考えているのでもない。本当に分からなかった。

「まあ、いい。一応聞くが、クエストに出たのはいつだ？」

「確か、文月……３６５日を１年として、その始まりから７番目の月の、２５日でした。暦は同じですか？」

「そのようだ」

アルテリアでは1月を「睦月」、2月を「如月」……と呼ぶ。文月は7月のことだ。呼び方は太陰暦だが、その中身は太陽暦であるところも同じらしい。

「アルテリアのハンターには訓練所のようなものがあるのか？」

「あります。北の都、氷都と言います。氷都のシュレイド地方に、ハンターの訓練学校があります。俺たちは、その生徒です」

「その訓練学校に入るには資格が必要か？」

「国から支給されている身分証明書が必要ですが、１８歳以上であれば、誰でも無料で入学できます」

いつかどこかで仕入れた知識を必死で思い出しながら、中也は矛盾が無いようにそう答える。正面にいる男は、それを筆でつらつらと帳面に書き記していった。チラリと覗き見ると、文字もアルテリアと同じだった。筆を使って書き連ねられている文字は、もちろん「漢字」では無い。少し違うが、ハングル文字に似ている。

「訓練生であっても、クエストに出ることができるのか？」

「あくまで訓練です。正式なハンターに付き添われて、フィールドに出てモンスターを討伐しますが、ハンターではないので報酬は出ません」

「タダ働きか」

「そうです」

これは本当の話だ。ハンターの訓練生は実戦での訓練を積むために、積極的にクエストに参加することが認められている。アルテリア国内に連れて来たモンスターと闘技場のような場所で戦うこともあるらしいが、実際にフィールドに出て訓練を積む方が効果的だとされている。

それに、４人１組でクエストに出るのが通例となっているが、そのうちの１人から３人が訓練生であれば、同行する正式なハンターに報酬がすべて手渡されることになるので、金欠病を抱える正式なハンターからも人気が高い。

「つまり、そなたらは文月（7月）の25日にアルテリアを出発し、その帰り道に嵐に巻き込まれてここに流れ着いた、ということだな？無事に流れ着いたことについては矛盾を感じないではないが、そなたらはその理由を説明できる術を持たぬ。それで間違いないか？」

「間違いありません」

筆を置いた男が、どこかおもしろそうな表情でそう言って来た。目の前にいる男の思考が読めず、警戒心だけが強くなる。しかし、実際その通りだったので否定はせずに頷いておいた。

「いやはや、話には聞いていたがアルテリアとは不思議な国だ。ところで、そなたらはハンターの訓練生と言ったな？」

「はい」

「ちょうど良い。では、その実力を見込んで頼みがあるのだが」

「頼み？」

なぜいきなりそういう話になったのか分からなかった。展開に付いて行けず、中也は微かに表情を顰めながら聞き返す。

「村はずれの荒れ地にモンスターが住み着いておってな、村人が手を焼いておるのだ。そのモンスターを討伐してもらえぬか？」

「モンスター……」

「そうだ。ベルキュロスという種類だが、知っているか？」

知らない。そんな名前のモンスターは聞いたことが無かった。シヴァとルナと顔を見合せる。その表情からして、2人とも知らないようだった。

「存ぜぬか。まあいい。無事にベルキュロスを討伐して貰えるのなら、

上に掛け合ってそなたらがアルテリアに戻れるよう、便宜を取り計らってやろう。断るのなら、法に定められている通り、外国人には鞭打ち刑を下す」

完全な脅しだった。断れば鞭打ち刑と聞いて、断れるはずなどない。

外国人という理由でそこまでされる理由が分からず、内心に憤りを感じた。

（つまり、それが目的かよ……）

自分たちの出身や経歴など関係ない。要は手っ取り早くモンスターを討伐させる人間が欲しかっただけだろう。そう悟って、中也は膝の上に置いた手を握りしめた。

（外国人だから、いつ死んでも構わないってことか）

ファーナはアルテリアに並ぶ大国であり、名君クリス3世の元、法と秩序が行き届いた国だと聞いていた。だが、目の前にいる男を見る限り、とてもそうは思えなかった。

「分かりました。やります」

「俺もやる～ぞ……ます」

「あたしも」

理不尽なものは感じないでもない。しかしながら、今の時点で答えられることはひとつしかなかった。中也たちの答えを聞いて、目の前の男は満足そうに笑った。

「よかろう。では、部屋を用意させる。ノエル、客人を案内しろ」

「かしこまりました」

ずっと無言で正座したまま状況を見守っていた男が、畳に手をつきながら返事をする。今更だが、モンゴロイド系の顔立ちをして着物を着用した男の名が「ノエル」というのも、不思議な感じがした。

「おっと、しばし待たれよ」

正座で痺れてしまった足に顔を歪めながら立ち上がろうとした時、いきなり呼びとめられた。

「まさかと思うが、一応、確認はさせてもらう。そなたらの中に、胡蝶はおらぬな？」

「胡蝶？　いえ、俺は男です」

「俺も男だ～……です」

「よかろう。そなたはどう見ても女だな？　問題ない」

ルナの胸を見ながら言った男は、軽く手を振って「行ってよし」と伝えてくる。

（胡蝶……？）

なぜ彼がそれを確認して来たのか、中也たちには知る術も無かった。

共鳴４（後書き）

久しぶりにＤＶＤでブリーチを観ました。やっぱおもしろいですね～、ブリーチ。個人的にルキアちゃんと一護、それからレンジ（漢字が不明！）が好きです。

ブリーチ、単行本で３０巻くらいまで持っていたんですけどね……知り合いに貸したら返してもらえないまま2年が経過してしまいました（泣）

いわゆる「借りパク」というヤツです。

今更ですが「返してくれぇえぇぇえええええぇえ！！」という感じです（泣）

「ああ、もう！　やってらんないわ！」

赤い色の土に覆われた地面を歩きながら、光宮は手近にあった木の幹を力の限り殴りつけた。もちろん、木は倒れるどころかヒビひとつ入らない。自分の手が痛いだけだった。しかしながら、今現在の自分たちの状況を考えれば、何かに八つ当たりしなければやってられない気分なのである。

「そんなにカリカリすんなって、光。どうにかなるって」

「どうにかなる、ならないの問題じゃないわよ！　どうして私たちだけいつもいつも、こんな目に遭わなきゃいけないの！？」

「いや、まあ……そうだけど。でも泣いても喚いても状況は変わらねえだろ？」

レイは相変わらずだ。ついでに夏葉も、いつものことながら眠たそう
な顔をして歩いている。2人とも「こんな」状況であるにも関わらず慌
てる素振りひとつ見せない。それに比べて、自分はもう他人と自然に八
つ当たりしている。彼女たちに比べて、あまりにも脆弱な自分の精神力
を改めて実感し、光宮は手近な木の幹に寄りかかって溜め息をついた。
そこへ、レイが傍に寄って来て軽く肩を叩く。
「大丈夫だって。何とかしようぜ。な？」
屈託のない笑顔で言われて、血が昇っていた頭が少しばかり冷めて行
くのが自分で分かる。いつもながら、レイは優しい。
「少し休もうぜ。光は疲れて来るとす～ぐ機嫌が悪くなるから」
「……返す言葉が無いわ」
「そうだよ」

レイに促され、光宮はそのまま地面に腰を降ろした。服が汚れるとか、

スカートの中が見えるかもしれないとか、そんなことは考えなかった。

どうせ、ここにいるのはレイと夏葉だけだ。自分のスカートの中に興味

を持つはずはない。

「静かねえ……」

頭上を見上げ、ついそう呟く。正面に座った夏葉が微かに頷くのが見

えた。聞こえるのは繰り返し打ち寄せる波の音と、ざわめく木の葉の声

だけ。野鳥の歌すら聞こえない。自然の音の中に身を委ねるというのは

悪い気分では無かった。仮に、何の音も聞こえない真の静寂であれば、

逆に不安が募ったと思う。

「ここ、どこなのかしら」

気を取り直し、光宮は寄りかかっていた木の幹に視線を向けた。まる
でモンスターのウロコのようにゴツゴツした幹に、針のように尖った葉。
指先で幹に触れると、微かに樹液が付着して粘ついた。こんな木は見た
ことが無い。気味の悪い木だと思いながら、光宮は夏葉に視線を向けた。
「ねえ夏葉。この木の名前、分かる？」
「さあ、俺も初めて見た」
植物に関しては、自分よりも夏葉の方が詳しい。植物の名前が分かれ
ば、その木が生えやすい場所、あるいは人間がよく見かける地域と言っ
た具合に連想していき、うまくいけば場所の見当がつくかもしれないと
思ったのだが、いきなり出鼻をくじかれてしまった。
「でも、これ……自然に生えた木じゃないと思う」
「どういうこと？」

「たぶん、植林。海が近いから、もしかしたら防潮林かも」

言われて周囲を見渡せば、どこもかしこも同じ種類の木が立ち並んで

いる。夏葉の言う通り、同じ種類の木だけが並んでいる様子を見ると、

自然にできた森と言うよりも植樹された林だと言われた方が納得できる

気がした。

「人間がいるってことは、フィールドじゃないわね」

確認するように言えば、夏葉が無言で頷いた。問題はどこの国かとい

うことだ。少なくとも、アルテリアではない。自分たちが嵐に巻き込ま

れた場所から考えて、自然に本国へ帰りついた可能性はまず無い。

（友好的な国だといいんだけど……）

何百年もの間、アルテリアの「王族」は諸外国を見下し、鎖国的な政

策を大々的に打ち出してきた。ここ最近になって軍の将兄がドンド

ルマ

を外国に開放するようになり、諸外国のアルテリアに対する印象も随分

と和らいで来たという話だが、場所によってはアルテリア国民は見つか

ったただけで八つ裂きにされる。

（ここが、そういう国でないことを祈るだけだわ……）

心の中に女神オーディナの姿を思い浮かべ、光宮は軽く息をついた。

「とりあえず、人を探してみましょう」

「大丈夫かよ」

「話しかけたりはしないわ。遠目に眺めるだけよ。服装が見れだだけで

も場所の見当が付くかもしれないし。できれば町を見てみたいんだけど」

海岸で目を覚ましてから一時間あまり。ここがフィールドであれば、

ガノトトスなどのモンスターに襲撃される危険があることを考え、とり

あえず傍にあった林の中へと身を隠した。自分たち3人以外、人どころ
か動物の姿さえ見ていない。
「まずは、ここがどこなのか知ることが先決だわ」
レイと夏葉が頷いたのを合図に、光宮たちは再び立ち上がって林の中
を歩き始めた。
「最後の記憶は？」
海岸がある方向とは反対側に向かって歩きながら、光宮は傍にいる2
人にそう聞いてみる。
「あたしは海に落ちたところだな。水面に浮かんで立ち泳ぎしてたとこ
ろまでは覚えてる」
「夏葉は？」
「俺も似たような感じ。顔を出したところに誰もいなくて、誰か探そう

と思って泳いだ」

「そう」

自分も同じだ。嵐の影響で船が転覆し、海に投げ出された。そして何

とか海面に顔を出したのはいいが、そこから先の記憶が無い。気が付い

た時には、先ほどの海岸に倒れていた。否応なく脳裏を掠めるのは、忘

れようにも忘れられない「あの」記憶である。

「似てると……思わない？」

「似てる？　何が何とだよ」

「卯月（４月）の入学式の時と、今のこの状況よ。あの時も、気が付い

たら樹海にいたじゃない」

光宮の言葉に、レイと夏葉が微かに表情を変えた。

「だって、おかしいわ。私たち以外に誰もいないなんて。言いかえれば、

私たちだけがここにいるとも言える。海岸には、船の残骸も何も無

かっ

た。漂流してここに辿り着いたんだとしたら、少なからず船の残骸とか

積み荷が一緒に流れて来てるはずよ」

2人から、返って来る答えは無い。

「入学式の件は、どう考えても鬼龍が絡んでる。もしかしたら、今回も

鬼龍が絡んでる可能性はあるわ」

そう言えば、鬼龍は時空を操るだけでなく森羅万象も操るモンスター

だと言われている。森羅万象とは水、氷、火、龍、そして雷。船が大破

したあの嵐も、もしかしたら鬼龍の仕業かもしれない。

（目的は、いったい何よ……）

鬼龍は人と同じ姿をして、人と同じ言葉を使い、人と同等あるいはそ

れ以上の知能を持つ。それ故に、時の権力者たちは鬼龍の存在を欲した。

今現在の世界で政治の影に鬼龍がいると言われても、いまいちピンと来
ないが、少なくとも自分はその存在を知っている。今回の件にしろ、前
回の入学式の件にしろ、鬼龍が気まぐれでやっているとは考えにくい。
だとしたら、鬼龍の背後にいるのは誰なのだろう。もちろん、見当を付
けることは容易である。しかし、確証はない。それに、その目的までは
まるで分からなかった。

（私たちを外国に送って、何をさせたいの？）

自分は血統の上ではアルテリア王国の王女だが、軍学校に入学するた
めに王位継承権は捨てた。軍学校に通う一般生徒としての扱いを受ける
ことが多い自分に、利用価値があるとは思えない。レイはなおさらだ。

彼女は元・盗賊で、親友のルナと共にイエローカード（身分証明書）を

偽造して学校に通っている。

（可能性としては夏葉がいちばん有り得るけど……）

今現在のアルテリアの実質的な権力者は国王ではなく、軍の将兄だ。

夏葉が彼の婚約者であることを考えれば、確かに利用価値はある気がす

る。しかし、こんなところに連れて来る理由が分からない。

（人質にするなら目の届くところに連れて行けばいいわ。逆に夏葉の存

在が邪魔なら、こんな面倒なことしなくても殺すはず）

それこそ、鬼龍の力を使えば暗殺など何と言うこともないはずだ。わ

ざわざこんな面倒なことをする理由が分からない。

（何なのよ、もう！）

クエストに出た時のように、他者から強制的に「ああしろ」「こうし

ろ」と命令されるのも腹が立つ。しかしながら何も分からないまま、何

も教えられないまま、こうして見知らぬ土地に放り出されるのは、それ
以上に腹立たしかった。
「中也たちが心配だな」
頭の中でいろいろと画策していた時、ふいにレイがそう呟いた。
「大丈夫よ。前回の樹海と同じような感じだし、おそらく向こうも3人
一緒に生きてるわ。どこにいるかまでは分からないけど」
はっきりと断言すると、レイが一瞬だけ驚いたような顔をして、すぐ
に笑顔を浮かべた。
「だよな。あたしもそう思う」
「そうよ。何か知らないけど、どっかの鬼龍さんとその後ろにいるヤツ
は、私ら6人に用があるみたいだもの。私たち3人だけ生かしておいて、
中也たちは見殺しにするなんて有り得ないわ」

言いかえれば、一緒に船に乗っていた船員たちの命は絶望的だとも言
える。だが、それは敢えて言葉にしないことにしておいた。

「フェンリルさんは……無事かな」

夏葉が小さな声で呟いた名前に、否応なくその姿が脳裏に浮かび、胸
が激しく高鳴った。

「し、知らないわよ、あんなヤツ！　サメにでも食われてるに決まって
るわ！」

「気になるくせに」

からかうような口調で言って来たレイに、無意識に頬が赤くなる。

「気になってなんかないわ！　カン違いしないでよ、私は別に……」

言いかけた言葉は、最後まで音になることなく消えて行った。前方に、
人影が見える。

「何だ、あいつら」

レイも夏葉も気付いたらしい。それぞれ緊張感のある表情を浮かべな
がら、木の陰に身を寄せる。

「変わった髪型ね。あんなの見たことないわ」

視界の向こうに見えているのは、5人ばかりの男だった。共通してい
るのは、夜着に使うような前合わせの服を着ていること、そして何より、
頭の左側と右側に剃り込みを入れ、残った髪を束ねて前頭部で結ってい
る、その髪型だった。肌の色や髪の色はバラバラで、それについては違
和感が無い。だが、その髪型と服装には首を傾げてしまうほど異様な印
象を持った。

「どこからどう見ても、いい人たちって顔はしてないわね」

「そうだな。盗賊か、そんなところだろ」

レイと夏葉と顔を見合わせる。結論は、ひとつしかない。

「悪い人たちなら、少々いいわよね」

「違いないな」

「俺もそう思う」

目的を達成するために、悪人という名の他人は躊躇なく利用する。

それが、自分のやり方だ。3人は互いに頷き合い、盗賊と思われる男たち

がいる方向に向かって駆け出した。

共鳴５（後書き）

最近、家にカメムシが大量発生していて困ります（泣）

……「カメムシ」で全国的に通じますかね？　クサムシとかホウムシとか言われたりしますが。山口県では主にカメムシと言われていますね。潰したらくっせ～あのムシです。

掃除機で吸っても臭い。もちろん潰しても臭い。紙などの上に乗せて屋外へ搬送するのも面倒くさい……。

カメムシについて友人Ｘに相談すると、ガムテープにくっ付けて包んで捨てるのが最も効果的だと言うアドバイスをもらい、最近はそれを実践しております。

我が家では日々、カメムシと人間のガムテープ・デスマッチが繰り広げられておりますわけで……。

いや……寝室のカーテンに１０匹くらい佇んでらっしゃったりしてですね……。カメムシ、嫌いっす（汗）

共鳴6

「まず最初に、この国の名前を答えてちょうだい」

地面に両手両足を付け、愕然としてこちらを見上げている赤毛の男に向かって、光宮はそう問いかける。

「光が聞いてんだろ？　さっさと答えろよ」

青を通り越して、土色に変わってしまっているその顔を、やたら笑顔のレイが覗きこみながら、催促と言う名目の脅しをかけた。可哀そうなほど震えている彼の傍には、レイと夏葉によって伸されてしまった盗賊と思しき男たちの体が転がっており、時折、苦しげな呻き声を上げていた。

「こ、ここはファーナ……だ……」

「ファーナ？」

男の口から出た答えがあまりにも予想の範囲外だったので、光宮は軽く眉を顰めて男に詰め寄る。

「テキトーなこと言ってんじゃないわよ。どうして私たちがファーナ

にいるのよ。普通に考えれば、あそこから漂流してここまで来れるワケないでしょ？　あんたの頭の中のシエンナ内海は、どんだけ小さな水たまりなのよ？」

「そ、そんなこと言われても……」

男の口調や態度からして、どうやらウソはついていないようだと判断した。だとしたら、この国の名はファーナで間違いない。今回の漂流に鬼龍が絡んでいるかもしれないという推測は、より信憑性を帯びて来たようだ。

「まあ、いいわ。次の質問。ここはファーナのどこ？」

「ティ……ティア村と、えっと……鎮路（ちんじ）村の間……だ……。む、向こうに、街道が……ある。右がティア村で……左が、鎮路村だ……」

どちらの村の名も聞いたことが無い。自分が知っているファーナの地名と言えば、クリス3世が住まう王宮のある、首都ディーダ。そしてその周囲にある幾つかの大きな街だけだ。

「そんな説明じゃ分かるものも分からないわ。いい？　図を描いてあ

げるから、だいたいの場所を指で差してちょうだい」

そう言って、光宮は地面に転がっていた小枝を手に取り、赤土の地面にやや楕円形の円を描いた。

「これがシエンナ内海。こっちがアルテリアで、こっちがファーナ。首都のディーダがこのあたり。で、ここは？」

シエンナ内海を挟んで北側にあるのがアルテリアで、南側に楕円形に広がるのがファーナである。首都のディーダは北東寄りの、内海に接する位置にある。

「た、たぶんこの辺り……」

男は、ファーナ王国の西の果てを震える指で示して見せた。

「なるほどね。だいたいの位置は分かったわ。で、次の質問。そのおかしな髪型はいったい何？　ファーナの国民がそんな髪型をしてるなんて聞いたことないわ。あんたたちの個人的な趣味？　それとも、田舎でしか流行（はや）らない流行（りゅうこう）？　どっち？」

髪型を指摘されて、男は僅かながら顔を顰める。どうやら気分を損

ねてしまったらしい。しかしながらレイと夏葉が怖いのか、抵抗する様子は見せなかった。

「こ、この辺りの地方じゃあ、昔から男はみんなこの髪型って決まってんだ！　身分によって形は違うけどよぉ、髪を下ろしてるヤツは男だろうが、女だろうが罪人だと、そ、相場は決まってらぁ！」

「……女もそんな髪型してんのかよ」

罪人、という言葉が気にかかったが、横からレイがもっと気にかかることを指摘して来たので、聞き返そうとした言葉は飲み込んだ。

「バ、バカにすんじゃねえ！　男と……お、女の髪型が同じでたまるか！」

この髪型をしている人間は、他人から髪型のことを指摘されると腹を立てるらしい。新しい情報をひとつ仕入れた。

「……女はどういう髪型なの？」

「どういうって……そりゃあ“角ぐる”に決まってんだろうが……」

「つのぐる？」

聞き慣れない言葉に聞き返せば、男は更に顔を顰める。

「そうだ。嫁に入った女は丸髷（まるまげ）、遊女（あそびめ）なら島田か勝山。お役所で働いてる女なら肩はずし。全部、決まってんだよ」

「……」

言葉は通じるのに、会話の内容がまるで頭の中に入って来ない。これでは、言葉が通じない異国の地と同じだ。光宮は軽く息をついた。

「悪いけど、髪型の件については聞かなかったことにするわ。ファーナの首都ディーダには何回か行ったことがあるけど、そこでは女の人もアルテリアと変わらない感じだったもの。問題は、服装ね」

この場所が首都ディーダから地理的にかなり離れている点、男の口調から読み取れる前時代的な考え方、盗賊が徘徊しているという治安の状況。それらを考慮して、一目で外国人だと分かる見た目をしているのは、自分たちにとって不利な状況に陥るかもしれない。そう判断した光宮は、倒れている男たちに視線を向けた。

「悪いけど、あんたたちの服、それをちょうだい」

「はあ！？」

冗談ではない、と言わんばかりに両目を見開いた男に、光宮はニヤリと笑って見せる。

「あら、あんたたち盗賊なんでしょ？　今までいろんな悪いことして来たのよね？」

この男から聞くべきことはすべて聞いた。彼の頭のレベルを考慮すれば、これ以上どう叩こうが絞ろうが、有益なことは聞き出せないだろう。そうなると、次は貰うべきものを貰っていくだけだ。

「……と、盗賊じゃない。俺たちは野盗だ」

「どっちも一緒よ。あんたたちが働いて来た悪事の中には、何の罪も無い人たちを脅して、着ている服とか、持っているお金とかを奪い取った、なんてことも含まれてるはずでしょ？」

「……」

男の額を一筋の汗が伝い落ちる。

「だから、同じことをされても文句は言えないんじゃない？」

ひたすら笑顔だけは保ったまま、光宮は言葉を続けた。

「と、言うワケだから。ここにあんたたちの服と有り金を全部、置いていきなさい」

逡巡する様子を見せる男の前に、レイと夏葉が無言で進み出る。何も言わなくても分かっているはずだ。言葉に従わなければ、力づくで奪い取る。そこに転がっている仲間のように余計なケガをしたくなければ、大人しく言う通りにしろ。それだけだ。

「わ、分かった……」

すごすごと立ち上がる男に向かって、光宮は極上なだけの笑顔を向けた。

「分かればいいのよ。それから……」

続く言葉に、まだ何かあるのか、と男の表情が更に軋む。

「それから、まさかとは思うけどお仲間にこのことを言ったりしないわよね？　あ、言いたくても言えるはずないか。だって、こ～んな可愛くて、かよわい女の子にボコボコにされた、なんて、仲間に話せる

ようなことじゃないものね～。おまけに、女の子に脅されて有り金と服を置いて来ました、なんて～。あんたも一応、ＸＸＸが付いてるんだ

し、それなりにプライドってモンがあるはずだものね～」

苦虫を噛み潰したような顔、という表現があるが、今まさしく男の顔は苦いだけの虫を食べたらきっとこんな顔になる……と想像させるには充分な表情をしていた。ここまで脅しておけば、仲間を引き連れて仕返しにやって来たりはしないだろう。ムダかもしれないが、できることはやっておくに限る。

「さあ、さっさと脱ぎなさい！」

＊

「まったく、汗臭いわね～。ダニとかノミとかいるんじゃないの？」

男たちから奪い取った服を身に付けた後、とりあえずその汚い服に文句を並べ立ててみる。ところどころ擦り切れて穴が開いたその服は、長い間ちゃんと洗濯していないらしく、彼らの汗の臭いが色

濃く染みついていた。だが、この際、贅沢は言っていられない。それより何より、男が着ている下着がおもしろくて仕方なかった。長方形の白い布を、局部に垂らして居心地が悪そうに佇んでいるその様は、まさしく笑ってくれと言わんばかりの姿である。

「なっさけないパンツ～！」

どうやら同じことを思ったらしいレイが、不躾に男の局部を眺めながらはっきり断言してのけた。

「ダメよ、レイ。本当のこと言ったら、傷付くでしょ？」

「それもそうか。悪ぃな！」

「そうよ。ねえ、純粋な興味なんだけど、そのパンツ……下着って言う単語で通じるかしら。その白い布の名前は何て言うの？」

「……フンドシだ」

「フンドシ？　へえ、覚えておくわ」

黙りこんだら危険だと感じたのか、それとも単なる親切心か、光宮の質問にはあっさり答えが返って来た。

「さて、じゃあそろそろ行きましょうか。いろいろありがとう。おかげで、とても助かったわ」

男たちに形だけの、心のこもっていない感謝の言葉を贈り、3人は先ほど教えられた通り、街道があるという方角に向かって歩き始める。

「……理不尽だ」

「どっちが野盗なんだか分かんねえ……」

背後から何か聞こえたような気がしたが、聞かなかったことにしておいた。

「何だか変わった国だな。働いてる場所とか、結婚してるかしてないかで髪型が違うとか、やってらんねえよ」

林の中を歩きながら、隣に並んだレイがふいにそう言ってくる。

もともと着ていた服を両手に抱え、着なれない男物の服に袖を通したレイは、大きさがあからさまに合っていないせいか、胸元から谷間が大きく覗いていた。

「そうね。何だか、見ただけでその人がどんな人なのか分かるようにしてるって感じがする。個人的に、あんまり好きじゃないわ。そういうのって」

「あたしも」

その人がどんな職業に就いていようが、仕事をしていない時にどんな服を着ようが、どんな髪型をしようが、その人の勝手だ。他人から強制されるようなことではない。そう思う。しかしながら、この地方ではそれが当たり前ではないらしい。

「ファーナは建国してまだ５０年かそこらだもの。もしかしたら、クリス３世の統治が完全に行き届いていないのかもしれないわ」

「……ふ～ん」

実際のところは分からない。だが、その可能性はある。アルテリアがあそこまで中央集権国家になるまでには、実に３００年もの年月が必要だった。５０年かそこらで、中央の政治が隅々まで完全に行き届いていると言われる方が不思議な感じがする。治める領土が

広ければ広いほど、なおさら難しい。ファーナは純粋に領土の広さだけで言えば、アルテリアよりも広い。シエンナ内海の沿岸部を完全に制覇しているとは言え、地方の統制までは手が回っていないのだろう。

「それに、ファーナにはいろいろ問題があるもの」

「どういうことだ？」

「短期間にたくさんの国を落として領土を広げたのよ？　２０年くらい前にクリス３世が王位に就いてからは随分と減ったって話だけど、反乱の火種はいろんなところに落ちてると思うの。未だにね」

「へえ……」

レイの声から興味が失せているのが分かって、光宮はそれ以上、余計なことを喋るのを止めることにした。

「まあ、とにかく、とりあえず首都のディーダを目指せるようにしましょう。何とかクリス３世に会えることができたら、アルテリアに送り返してくれるかもしれないわ」

「なるほど。光は一応、アルテリアの王女様だもんな」

「一応、が余計よ」

クリス3世に会うのは、言うほど簡単なことではないだろう。だが、現時点で口にできる「希望」はそんなところだ。どんなに小さな希望でも、無いよりはマシなのだ。

「あ！　あれが街道じゃねえか？」

レイの表情が明るくなる。その視線を追いかけると、林の間を縫うようにして、舗装も何もされていない砂利道が伸びているのが見えた。どうやら、あの野盗の男たちはウソをつかなかったらしい。

「えっと～。左に行ったら鎮路（ちんじ）とか言う村で、右に行ったらティアとか言う村だったよな？　どっちに行く？」

林から出て街道に降り立ったところで、左右を見渡しながらレイがそう聞いて来た。

「ティア村に決まってんじゃない。“チン”路なんてロクなモンじゃないわよ」

「……そっちのチンじゃないと思う」

夏葉が消え入るような声で、何か言っていた。だが、ここは敢えて無視する。

「さあ、行きましょう」

共鳴６（後書き）

……現在、中也・シヴァ・ルナ。そして光宮・夏葉・レイという組み分けで話が進んでおります。

組み分けについては、クジ引きで決めました。

……すみません（汗）

共鳴7

「それにしても暑いわね」

「……暑いって言うか、蒸し暑い感じがするぜ」

街道とは名ばかりの砂利道を歩きながら、光宮は首筋を伝う汗を手の甲で拭い取る。天頂に登った太陽はジリジリと肌を焼き、否応なしに体から水分を奪い取って行く。

「本国を出たのが文月（7月）の25日だったし、あれから3週間くらいは経ってるはずだから、そろそろ暑さも控えめになってきてもおかしくないのに。やっぱり国によって気候が違うのかしら」

「だろうな」

アルテリアの北部の地域では、真夏でも気温が低くなる早朝や夜間に暖炉に火を入れることは決して珍しい話ではない。ついでに、長月（9月）も半ばになれば、比較的、暖かいとされている南部の地域ですら、普通に暖炉を使い始める。しかし、葉月（8月）も下旬に近付こうという時期にも関わらず、今現在、自分たちが身を置いているこ

の地域では、最も暑さが厳しい文月（7月）の半ばと同じくらい、あるいはそれ以上の暑さを体感できる。あと一カ月もすれば少しは違うのかもしれないが、服を着たまま風呂に入っているようなこの気候には、正直うんざりさせられた。

「あら？」

暑さに顔を顰めながらも街道を進んでいると、その先に一軒の店のようなものを見つけた。

「何かしら、あれ」

木造りの見慣れない建築のその店は、一見して小屋のような印象がある。しかしながらそれが「店」だと分かったのは、木の棒に括りつけられた赤い、長方形の布に「あしやすめ」という文字が書かれて風にはためいていたからである。

（あしやすめ……やっぱり足を休めるってことで、休憩所っていう意味なんじゃないかしら）

近付くにつれて、その店の全貌が克明に分かるようになった。人が

１０人入っても余裕があるような大きな傘の下に、木で作られた横長のイスが置いてあり、そこに腰かけた４人の男が、コップを手に和やかな雰囲気で談笑している。イスには赤い布のようなものが敷かれており、中の１人はアルテリアの雷都で見かけたことがある菓子をおいしそうに頬張っていた。

「行ってみましょうか」

レイと夏葉の顔を交互に見ると、２人が揃って首を縦に振る。この暑さで体力も随分と削られてしまった。何より、喉が渇いて仕方が無い。先ほどの野盗から貰った小金もある。そこにある休憩所に、寄ってみない手は無かった。

「何か聞かれても、外国人っていうことは黙っておくのよ？　首都のディーダから知り合いに会うために旅をしてきましたっていうことにしておいて。ついでに、私たちは野盗に襲われて、僅かなお金だけを残して何もかも奪われてしまった可哀そうな少女ですっていう雰囲気を出せれば、うまく行けばタダで飲み物が貰えるかもしれないわ。い

い？」

「……人を騙すのは、よくないと思う」

光宮の言葉に、一も二もなく頷くレイとは対照的に、夏葉は渋った顔を見せた。

「そういうの、女神は許してくれないと思う」

正論を突き付けられて、光宮は少しばかり考えた。人を騙すのは重罪とする女神の教えか、それとも現実的な問題か。逡巡した挙げ句、光宮はひとつの結論を導き出した。

「バカね。ここはファーナよ？　アルテリアじゃないの。女神は見てないわ」

「そうかな……」

「そうよ。女神だって忙しいの。アルテリアの国民を見るだけで手一杯だわ。他国に来た国民の行動まで、見る余裕なんかないわよ」

そう言うと、夏葉はどうやら納得してくれたらしい。その綺麗な顔から迷いの色が消えたのを合図に、３人は「あしやすめ」と看板を出

した休憩所に向かって歩き出した。

「いらっしゃいませ～」

店の近くまで行くと、小屋のような建物の中から１０代の後半か、それくらいに見える少女が顔を出して、光宮たちを迎えてくれた。横に張り出した髪型に、黄色に赤い線が入った着物。腰に巻いているのはエプロンのようだが、少し形が違う。少女の装いに不思議なものを感じながらも、光宮は努めて笑顔を保ち続ける。

「外のお席でよろしいですか？　ちょうど今、店の中が一杯なので」

「けっこうよ。何か飲み物をいただけるとありがたいんだけど」

「かしこまりました。冷たい麦茶でよろしいですか？」

麦茶……と言われて何のことか分からなかった。麦を使った酒ならばビールという名で知っているが、茶というからには紅茶のような類のものだろう。とりあえず、少女の口振りからしてその「麦茶」という飲み物が、この国では一般的な飲み物なのだろうと察しをつけ、不信に思われないように笑顔のまま頷いた。

「それをいただくわ」

「はい。少々お待ちくださいませ」

少女は大きな傘の下にあるイスに3人を案内した後、クルリと後ろを

向いて小屋の中へと戻って行った。その後ろ姿で目に付いたのは、後頭

部のあたりで髪を巻いてアップにしている、その髪型である。

（もしかして、あれが角ぐるっていう髪型なのかしら）

野盗の男が口にしていたその単語をふと脳裏に思い出したところで、

光宮は上を見上げた。午後の陽光が、暗い色の赤い傘を透かして自分た

ちの肌を赤く染めている。

（傘……だと思ったけど、ちょっと違うわ。張ってあるのは、もしかし

て紙かしら）

この傘は、雨を避けるためのものではなく、単なる日除けの目的で作

られたものかもしれない。傘の骨組みに使われている木も、見たことが
ない代物だ。淡いクリーム色で、触った感じはスベスベしていた。
（これ、何て言う木かしら。アルテリアじゃあ見かけないわね）
そう思った時、自分たちを迎えてくれた少女が、トレイのような丸い
板にコップを3つ乗せて戻って来た。
「どうぞ、ごゆっくり」
「ありがとう」
受け取ったコップには、見覚えがある。普段、自分たちが使っている
コップはガラス製か、あるいは木製なのだが、このコップは土を焼いて
作られた、いわゆる焼き物だ。こういった物は、アルテリアの南東部に
ある雷都という都の伝統文化として知っていた。雷都の焼き物は、他に
も料理を乗せる皿や、壺などでも有名である。

（もしかして、雷都の文化はファーナから来てるのかしら）

可能性としては、充分に有り得る。外国に来て、自分の生まれた国の
文化の出所を知るとは何とも不思議な気分であるが、知識が増えること
は良いことだ。そう思って、光宮は土で作られたコップに注がれた茶色
い飲み物に口をつけた。

「……」

一言で表すと、味が薄い。無意識に隣のレイを見ると、彼女も微妙な
顔をしていた。

「何とも言えない味だな、これ」

「そうね……」

夏葉だけは気にもしていない様子で飲んでいたが、どうにもおいしい
飲み物とは言い難かった。普段、珈琲や紅茶、あるいは果汁しか飲まな

いせいか、こういった味が薄い飲み物はいまいち口に合わない。

（贅沢は言ってられないわ……）

どんな飲み物でも、無いよりはマシ。喉が渇いて仕方なかったのだか

ら、飲まないで捨てるなど有り得ない。

（泥水よりは、全然いいわよ）

麦茶を好んで飲む人たちにとっては冒涜とも取れることを思いながら、

光宮はコップに注がれていた麦茶というものを飲み下した。

「良い天気ですねえ」

目に映るものを興味深く観察していた光宮は、突然、誰かに話しかけ

られて驚いた。声がした方を振り向けば、隣に並んで呑気にお茶を飲ん

でいる４人組の男たちの１人が、自分たちに向かって微笑みかけている。

（な、何て答えれば普通なのかしら……！？）

天気が良いのは見れば分かる。良い天気であることを改めて言葉にさ
れても、返す言葉が見当たらない。この辺りでは天気が良いと何かある
のか。それともモンスターが来る前兆か。相手が何を求めているのか分
からず、光宮は数秒ばかり固まった。

「そ、そうですね……」

とりあえず無難に肯定してみる。すると、話しかけて来た男が更に、
にっこりと笑った。

「旅のお方ですか？」

「ええ、そうです……」

どうやら「良い天気ですね」という先ほどの言葉は、こちらに話しか
けるための口実というか、挨拶のようなものだったらしい。余計なこと
を口にしなくて良かったと思いながら、光宮は隣に並んでいる４人の男

たちの姿に視線を向けた。

（旅の人かしら。そんな雰囲気ではあるけど……）

自分たちに話しかけて来た男は４０代の半ばと言った年ごろで、地味

ながらも上等な着物を着ている。素材の名は分からないが、野盗たちや、

給仕の少女が着ている着物と比べると、その生地がそれなりに値が張る

ものであることは想像に難しくなかった。肌の色は黒に近い褐色で、髪

の色は黒だ。野盗たちと同じように頭部の左右を剃り、残った髪を前頭

部に持って来た特徴的な髪型だが、野盗たちよりもスッキリ纏まった印

象がある。

「どちらから？」

「首都のディーダです」

「それはそれは……若い娘さんだけで首都からここまでとは。苦労

の多
い道だったでしょう」
「そうですね……」
その男の両脇にいるのは、四角に畳んだ布のようなものを頭に被った
2人の男である。年齢はそれぞれ30代の前半かそこらで、1人はやた
ら四角い顔で、もう一人はやたら丸い顔をしている。ともに肌の色は黄
色で、布の向こうにチラリと覗いている髪の色は黒だった。更に、一番
端には一心不乱に菓子を頬張っている男がいる。こちらは、40代の後
半かそこらで、やはり肌の色は黄色で、髪の色は黒だ。
（どうしようかしら。悪い人には見えないわね）
先ほど即興で考えた作り話を披露すべきかどうか、考える。この男た
ちの同情をかうことが、自分たちにとって利益になるかどうかは重要な

問題だ。

（金を持ってることは、間違いなさそうだわ）

男たちの服装や、持ち物、ちょっとした身のこなし。そういったもの

から、光宮はそう判断する。悪い人には見えない。金もあるようだ。野

盗から奪った金では、どう考えても今夜の宿代には足りない。うまく行

けば、野宿を避けられるかもしれない。

「どちらまで行かれるのですか？」

光宮の考えていることなど知らぬ顔で、四角い顔の男がそう聞いて来

た。

「この先にある、ティアの村まで行こうと思っています」

「それはそれは。実は、我々もティアの村に行こうと思っているのです

よ」

ティアの村の名前を出した途端、最初に話しかけて来た褐色の肌の男
がそう言った。
「ティアまではまだ3日はかかります。若い娘さんだけでは何かと苦労
も多いのではないですかな？　よろしければ、我々とご一緒いたしませ
んか？」
「え……？」
願っても無い申し出だった。しかし、初対面の人間に警戒も何もせず、
何でも無いことのように同行を申し出るという、その行動に、僅かなが
ら不信感を抱く。
「どうする？」
相手の出方を見るために、敢えてレイと夏葉の方を振り向いた。
予想
通り、2人はすべての判断を自分に任せるという顔でこちらを見ている。

「なに、おかしな下心などありませんよ。そのお姿からして、野盗に襲
われたのではないかと思ったまでです。随分、怖い思いをなされたので
はありませんかな？」

「そ、そうです、ね……」

正確には野盗に襲われたのではなく、襲ったのであるが、わざわざそ
んなことを言う必要などない。適当に相槌を打っていると、褐色の肌の
男がにっこりと笑って、更に言葉を続けて来た。

「ご心配なさいますな。私の供をしている者は、それなりに腕が立つと
自負しておりますゆえ。娘さん3人、無事にティアまで送り届けてみせ
ますよ。なに、旅は道連れ、世は情け。旅の人数は多ければ多いほど良
い。ましてや美しく若い娘さんがご一緒してくださるなら、男だけのむ

さ苦しい道中に花が咲くというもの。さあ、そうと決まれば善は急げ。

そろそろ参りましょうか」

褐色の男がそう言うと、両端にいた四角い顔と丸い顔の男が身軽な動作で立ち上がった。

「ヒチ、いつまで団子を食っているんだ。そろそろ行くぞ」

ずっと一心不乱に菓子を食っていた男に向かって、四角い顔の男が呆れたような口調で言った。菓子を食っている男の名は「ヒチ」、菓子の名は「ダンゴ」と言うらしい。

「まあ、待ってくださいよ、ライトさん。ライトさんも食ってみれば分かりますって。この団子は天下一品なんですよ～？」

四角い男の名はライト。その名を脳裏に刻みつけたところで、褐色の肌の男が笑顔のまま立ち上がるのが見えた。

「やれやれ。ヒチにかかれば、どんなに美しい少女を前にしても、団子
の前ではその色香も霞んでしまうようだ」
「そう言わないでくださいよ、若旦那。もう1本だけ。もう1本だけで
すから」
「仕方ないヤツだな……」
もう1本だけ、と繰り返すヒチに向かって、丸い顔の男が溜め息をつ
く。その様子を、若旦那と呼ばれた褐色の肌の男が楽しそうに声を上げ
て笑った。
「ちょうど良い。ヒチの腹が満たされるまで、お互い名乗り合おうじゃ
ありませんか」
こちらはまだ一緒に行くとも何とも言っていないのだが、いつの間に
やら、そういうことになってしまっていた。

（まあ、何かあれば力づくでどうにかすればいいわ）

唖然とした顔で成り行きを見守っているレイと夏葉をチラリと眺めつつ、光宮はそう結論を出した。利用できるものは利用させてもらうに限る。

「私は薬屋の跡取り息子でして、薬を売り歩きながら全国を回っております。名は楠三郎。こちらは供をしてくれている……」

「ライトです」

くすのきさぶろう……と聞き慣れない名を口にした薬屋の「若旦那」の右側に立った四角い顔の男が、軽く会釈しながらそう名乗る。

「こちらは……」

「レフトです」

続いて若旦那の左側に立った丸い顔の男が、ライトと同じく会釈しながら笑顔で名乗った。

「そして、あちらはヒチ」

予想通り、若旦那は幸せそうな顔で団子を頬張っている男の名をヒチと紹介した。

「お嬢さん方の名を窺ってもよろしいかな？」

「……私は光です」

アルテリア王族の女性の名には、例外なく「宮」の字が付けられる。

万が一ということを考え、光宮は自分の名を省略して名乗った。

「あたしはレイシェル。みんなからはレイと呼ばれてる」

「俺は夏葉、です。正確には女性でも、男性でもないので……」

夏葉がそう言った瞬間、それまで和やかな雰囲気だった彼らの表情が微かに変わった。

（なによ……）

胡蝶というのは確かに珍しい。だが、人間であることには違いない。

若旦那はそうでもなかったが、右に控えるライト、左に控えるレフト

は何とも言えない微妙な顔をしている。ヒチに至っては、団子を食べるその手を止めて夏葉を見つめていた。

「そうですか。お嬢さん、という呼び方は正しくありませんでしたな、

夏葉さん。失礼いたしました」

「いえ……」

彼らの雰囲気が何を物語っているのか分からないまま、光宮は促されて立ち上がる。

（なんなの……？）

共鳴7（後書き）

友人Xの家にも、カメムシが大量発生しているらしいという話を聞きました。で、寝ているとカメムシが耳の中に入ってくるのだそうで……。ゴソゴソという音がしても、ヤツは起きないのだとか（汗）翌朝、自分の耳の中からカメムシのものと思われる足がポトリと落ちてくるという話を聞き、戦慄いたしました（汗）

妖乱舞のメモリーズに、シヴァの過去話をアップしました。

過去話……という名目ですが、やはり読んでくださる方が少しでも楽しんでいただけなければ意味がない、というのが自分の考えです。あちらはあちらで、それなりとは言えオチを用意しております。よろしければご一読くださいませ！

共鳴 8

（静かだな……）

４畳ほどの部屋は三方が土壁に塞がれ、一方が障子戸になっている。

障子に張られた薄い和紙の向こうには、見張りを兼ねていると思われる

男の背中が、まるで影絵のように浮かび上がっていた。隣にいるシヴァ

もルナも、一言も喋らない。互いの息使いさえ吸い込んでしまうような

深い静寂が、そこに蹲っていた。

（日本にいた時には、何だかんだ言って音があったもんな……）

普段、意識していなかっただけで、かつて住んでいた国の日常は音に

溢れていた。３６５日、２４時間、休むことなく稼働している冷蔵庫。

台所で回る換気扇。井戸のモーター。その他、聞こえていないような気

がしていただけで、実際は家電が動く音が当たり前のようにしていた。

（台風とかで、停電した時に似てる）

自然災害が人間の町からあらゆる文明を奪ってしまった時、こんな静

寂に包まれる。もっとも、昼間であれば母親が何だかんだと喋っていた

ので、改めて静けさは感じなかった。災害に襲われた夜。いつもと違う

夜の気配に不安を抱いて眠る夜は、きっとこんな感じだった。

（俺たち、これからどうなるんだろう）

自分たちの取り調べを行ったコーカソイド系の男は、ベルキュロスと

言う名のモンスターを討伐すれば、アルテリアに戻れるように取り計ら

ってやると言っていた。しかし、その言葉を鵜呑みにするほど、おめで

たい頭は持っていない。

（そんな親切なヤツらなら、最初から外国人ってだけで牢屋にブチ

込ん
だりしねえだろ）

そう言えば、最初に自分たちが倒れていたあの海岸で出会ったこの国
の住民たちは、外国人を捕まえれば役所から報酬が出る、という意味の
言葉を口走っていた。

（何でだ？　外国人だと何かあるのか？）

この国に独特の宗教的な考えだろうか。それとも他に何か理由がある
のか。今の時点では、情報が少なすぎて判断できない。

（それに、取り調べの最後で胡蝶はいないかって聞かれた）

胡蝶と言えば夏葉の顔が思い出される。

（無事かな……）

夏葉だけではない。光宮とレイ。それにフェンリルの行方も気になる。

切迫した状況にあった時は自分のことだけで精いっぱいだったのに、と

りあえずとは言え、身の安全が確保できると、今度は姿が見えない仲間
たちの安否が気にかかる。
（胡蝶……）
男性でも女性でもない、その存在。夏葉以外の胡蝶に会ったことはな
いから実際のところはよく分からないが、文献などを読む限り、胡蝶と
呼ばれる人間は、ほぼ例外なく「美しい」という形容詞が付いて回って
いた。
（アルテリアで胡蝶と言えば誘い通り。つまり歓楽街の高嶺の花。胡蝶
が相手する男と言えば、軍や朝廷のトップ・クラスの人間か、相当な金
持ちだけ。一般庶民だと顔を見ることもできないって言われてるらしい
な……）

誘い通りの胡蝶がどんなものなのか分からないが、本を調べたり、周
囲の人間の話を聞いた限りでは、どれも似たような知識しか得られなか
った。ふと、中也の頭にひとつの事実が思い浮かぶ。

（そう言えば、鬼龍の子供を産めるのは胡蝶だけだって話じゃなかった
っけ？）

鬼龍は、人と同じ姿をしているとは言え、モンスターであることには
違いない。黒龍と並ぶ伝説のモンスターである鬼龍について、人間は詳
しいことなど何も知らない。だが、どういうわけか、胡蝶と呼ばれる人
間が鬼龍の子供を宿すことができるという、その事実だけはあらゆる国
のあらゆる人間に知られている。

（だから、かな）

胡蝶が鬼龍の子供を宿すから、だからこの国の人間は胡蝶という

人間
に警戒心を抱くのだろうか。
（だったら、納得できないことでもない）
そんなひとつの結論に思い至ると、今度は夏葉のことが気がかり
で仕
方なくなってくる。
（胡蝶だと分かれば、殺されるかもしれない）
この国の人間なら、やりかねない。胸に、焦げ付くような怒りと
焦り
が湧き上がる。
（男のフリでも、女のフリでもどっちでもいい。とにかく、自分が
胡蝶
だって喋るなよ、夏葉……！）
ここにはいない夏葉に向かって心の中でそう言った時、ふいに障
子の
向こう側から複数の足音が聞こえてきた。シヴァとルナも気付いた
らし
い。それぞれ閉じていた瞳を開き、シヴァは寝転がっていた畳から

身を
起こした。
「食事だ」
ガラリと開かれた障子の向こうには、それぞれ手に足付きの盆のよう
なものを抱えた男が3人ほど立っていた。共通しているのは、チョンマ
ゲに着物を着ているということで、肌の色や髪の色はそれぞれ違う。中
の1人は、熟れたオレンジのような橙色の髪をしていた。
「明日の朝一番、案内役を兼ねたハンターを連れてくる。それまで余計
なことは考えず、大人しくしていろ」
食事が乗せられた盆が畳の上に降ろされる。その際、味噌汁と思われ
る吸い物の中身が少し零れた。そして、男たちはそそくさと部屋を出て
行ってしまう。後ろ手に閉められた障子の向こうから、遠ざかって行く

足音が聞こえて来た。

「メシを食わして貰えるとは思ってなかった～な。ありがたい話だ～ぞ」

「で、毒入りっていうオチ？」

盆の上に並べられた食事に視線を注ぎながら、シヴァとルナがそんな

ことを口走る。

「それはないだろ」

わざわざ食事に毒を盛るような面倒なことをする意味がない。今の自

分たちの立場を考えれば、それこそ拷問の末に殺され、海に捨てられて

も不思議ではないのだ。

「まあ、責任もって俺が最初に食べるよ」

揺れる行燈の光の元、運ばれて来た食事に視線を向ける。手の平に半

分ほどの量しかない白米と、５ミリ角に切られた３つの豆腐、数枚のワ

カメが浮かぶ味噌汁。そしてキュウリとタコの酢の物だけの簡素な食事

は、どこか懐かしさを感じさせる。添えられた箸を手に取り、中也は久

しぶりに味噌汁を口にした。

「ダシはカツオかな。何か、すっげー美味いよ、これ」

かつて、故国の母親が作ってくれていた味噌汁とは少し違う。おそら

く既製品として日本の各家庭にありふれている「ダシの素」というもの

が存在しないせいだろう。

「ちゃんとカツオ節からダシを取ってあるんだ」

「よく分かんないけ～ど、食っても平気だってことだ～よな？」

「ああ、平気だよ」

断言すると、シヴァが中也の真似をして箸を手に取り、それを不思議そうに眺めた。

「な～んだ、これ。何でこんな棒でメシが食える～んだ？」

「慣れないと難しいかもな」

軽く笑い、中也はシヴァに箸の使い方を簡単に教えてやった。

「難しい～ぞ」

「頑張れよ。推測だけど、この国じゃあ箸の使い方がなってないヤツは、けっこう軽蔑される」

「分かった～ぞ」

四苦八苦しながら箸を使うシヴァを眺めながら、中也は白米がよそわれた茶碗を手に取る。

「ココット米とは、味が違う。日本の米と同じ味だ……」

率直な感想を口にしたが、シヴァもルナも何も言ってくれなかった。

「ルナ、食わないのか？　食っても大丈夫だって」

「それは分かってるんだけど、ちょっとね」

考えてみれば、まる一日ぶりの食事だった。忘れていた空腹を思い出し、ついつい箸が進むペースが速い中也とシヴァとは対照的に、ル

ナは箸を手に取ることもせず、ずっと膝を抱えたままだった。

「最近、腰回りに余計な肉が付いて来ちゃってさ、ちょっと痩せないとヤバいかなって思ってたんだよ」

「ダイエット中？」

「だいえっと？　そう言うの？　何でもいいけど、良かったら食べない？　まだ口を付けてないから」

ルナがダイエット中……。無意識に視線は彼女の豊かな胸に向いてしまう。服の上から見た感じ、本人が言うほど腰回りに脂肪が付いているとは思えなかった。むしろ、充分過ぎるほど細い。しかしながら、

ここで彼女のダイエットについて根掘り葉掘り聞いたり、こちらの意見を並べ立てるのは禁物である。

「じゃあ、貰うよ」

余計なことは言わずに、くれると言ったものを受け取ることにした。

女の子のダイエットは複雑な心理の上で行われているのだ。自分の姉

のように、ダイエットと口走るだけで生クリームたっぷりのケーキを1日に5個も6個も平らげる者もいるが、ルナのようなタイプは、一度ダイエットをすると決めたら、目標を達成するまで諦めないタイプだ。こちらが何を言ってもムダだろうし、下手なことを言うと過度なダイエットに走ってしまう可能性もあり得ると聞いた。

「シヴァ、半分に分けようぜ」

「おうよ」

それに、正直なところ自分はかなり空腹だったので、これだけの食事では満足できなかったというのもある。おそらく、それはシヴァも同じだろう。ルナの分の食事を半分に分ける手に、戸惑いがない。

「女の子は分かんねえ～な。いいカラダしてんじゃねえか～よ。どこの肉を落とすって～んだ？」

「ヒミツだよ」

せっかく中也が敢えて何も言わなかったのに、シヴァが何も考えずに余計なことを言った。

（このバカ……！）

仕方ないことだとは認める。そもそもこちらの世界にはダイエットという言葉そのものや概念が存在していないのだ。他国に比べて豊かとは言え、アルテリアでさえ飢饉に陥ることがある。その際、米の値段が上がったり、野菜や魚を扱う店先に商品が並ばなかったりするということは、決して珍しい話ではない。唯一、他国と違うことがあるとすれば、それは飢饉に襲われた村や町には行政から援助が出ることだ。

（だけど、その援助だって、俺の感覚からすればかなり少ない）

災害地に出向いたアルテリア軍の春軍（陸軍）が、難民キャンプのようなものを設置し、1日に2回、1人につき1つ限りの握り飯を配ると聞いた。育ち盛りの自分からしてみれば、1日の食事がたったそれだけだと思うとウンザリさせられる。

（食事を授けてくれる女神オーディナに感謝の祈りを捧げる人もいるくらいだしな）

こちらの世界では、太っている人を見かけることは滅多にない。中也の感覚の上で標準的だと思える体型が多いのがアルテリアなので、おそらく未だに戦火が絶えない諸外国に生きる人たちは痩せ細っているのが普通だろう。

（そう思うと、こっちの世界でダイエットしようって考えるルナが変わってるのかもしれねえな……）

何となく気になったが、女の子の体重や体型に触れてはならないという正当な思い込みが邪魔をして、それを問い正すことはできなかった。

（でも、ルナの巨乳が無くなるのはイヤだな……）

前に一度、事故とは言え彼女の胸に触れたことがある。その時の記憶を思い出すと、あの柔らかな感触が無くなってしまうのは、どうにも残念で仕方ない。

（女の子って大変なんだな。そのままの胸がいいとか、言ってしまえば男の勝手な希望なんだし）

もしかしたら、ルナは本気で痩せたいと思っているのかもしれない。

そうだとしたら、男の自分が口出しする権利はない。

「ところでよお～、こっちのギルドってどうなって～んだ？」

中也が心の中でルナの胸についていろいろと思考を巡らせていた時、

食事を終えたらしいシヴァが元通り、畳の上に寝転がりながらそう言って来た。

「いいのか～よ。ハンターの訓練生ってだけで、外国人の俺らをクエストに出したりして。アルテリアじゃあ、考えられねえ～な」

「まあ、な」

アルテリアのハンターズ・ギルドは、言わば軍の秘密組織のようなものだ。だから機密性が高いし、錬金術が施されたモンスターの武器や防具を紛失することは、下手をすれば粛清の対象にさえ成り得ると聞かされた。確かに、シヴァの言う通り、アルテリアのハンターズ・ギルドでは、外国人をクエストに送り込むなどとは考えられない。

「中也～。お前、ファーナのハンターズ・ギルドについて何か知らねえのか～よ」

「残念ながら知らねえよ」

「ふ～ん」

少なくとも、アルテリアのように国が大きく関わっているというわけでは無さそうだ。罪人の取り調べを行う役人の判断ひとつで外国人にもクエストに出る権利が与えられることからして、もしかしたらファーナのハンターズ・ギルドは、その名の通り商業組合（ギルド）のような体裁をしているのかもしれない。

「明日、俺たちの案内役を兼ねたハンターが来るって言ってただろ？その人に聞いてみればいいさ。もちろん、答えてくれるなら」

「そうだ～な。じゃあ、腹もいっぱいになったし、俺は寝る～ぞ。あ～あ、風呂に入りてえ～な」

「言うなよ」

今日のシヴァは一言多い。そう思った時には、シヴァはすでに寝る

態勢を整えつつあった。

「私も寝る。寝不足は肌に悪いし」

そう呟いて、ルナもまた寝る姿勢に入る。彼女が何気なく言った言葉に、やはり本気でダイエットするつもりなのだと察しをつけた。

（１０時、か）

窓が無い部屋では時間の感覚が狂う。幸い、所持品を取られることは無かったので、自分の腕にはアルテリアの特産物のひとつである腕時計が巻きついたままだ。

（俺も寝よう……）

４畳間に3人。意外と狭く感じる。女の子のルナの方にスペースを残しつつ、中也は久々に畳の上に横たわった。

（朝になったら、顔に畳のアトが付いてんだよな、きっと……）

共鳴８（後書き）

本日のあとがきは……食事中の方にはちょっとオススメできない内容になっている可能性があります。ご注意ください（汗）

高校生時代のクラスメートに「ものを食べながら大きく口を開けて笑う女の子」がいました。言葉のまま、です。

それを聞いて「ふ～ん」と思われる方、「うげっ！」と思われる方、様々でしょうが、作者としては……彼女の口の中で唾液と混ざり合い、グチャグチャになったゴハンやハンバーグ、エビフライなどなど、お弁当の定番メニューが舌と言い、歯と言い、口の中すべてにこびりついている様を頻繁に見せつけられるのはちょっと……という考えです。

最もカンベンしてくれと思ったのは「ゆでたまご」でしたね。白身と黄身がシャッフルされた固まりが、彼女の上顎から舌の上へボトリと落ちるその様は、正直、見ていてあまり気持ちのいいものではありませんでした。個人的に……。

何が問題かと言いますと、その女の子は「ものを食べながら大きく口を開けて笑う」という行為が、「男の子にカワイイと思われる」あるいは「男の子にウケる」と思い込んでいたということです。

個人的に、男性・女性に限らず食欲を無くすと思われる方が多いのではないかと思われるのですが……やはり考え方は人それぞれですね（汗）

彼女の考えは、未だに理解できませんが……。

共鳴9

「起きろ。出発だ」

障子がガラリと開かれる音で、中也は目を覚ます。一瞬、ここがどこなのか分からず、寝ぼけた頭で周囲を見渡した。

（ああ、そっか……）

ここはファーナ。そして自分たちは虜囚。ベルキュロスというモンスターを討伐するために、牢獄から連れ出されてこの和室にいる。

昨日の出来事を一気に思い出して、朝一番にも関わらず中也は軽く頭を抱えた。

（今何時だ？）

外からの光が入らない空間では、体内時計が狂う。無意識に腕時計に視線を向けると、その針は午前7時ちょうどを差していた。

「付いて来い。案内する」

障子の向こうに立っていたのは、まるでクマのような大男だった。墨を溶かしたような黒い着物、同じ色の袴。そしてその顔にはキツ

ネに似た仮面のようなものを被っている。廊下から漏れる明かりが逆光となり、その姿をより一層、無気味に網膜へと焼き付ける。

「俺の名はベアルド。ベルキュロス討伐を任されたハンターだ」

油断できない相手だ、と根拠もなく思いつつ、中也たちは身を起こして和室から出た。それを見て、キツネの面を被った男がそう名乗る。反射的に自分の名を口にしようとした中也だったが、ベアルドと名乗ったその男は彼らの名を聞くまでも無く、踵を返してしまっていた。

（なんだよ、こいつ）

初対面で名乗り合うのは礼儀のようなものだし、何よりこれから一緒にモンスターを討伐するのだから、互いの名を知らないのは不便で仕方がないはずだ。

（でも、そういう考えもアルテリアとか日本の考えなのかな）

ファーナという国では、そういった常識は存在しないのかもしれない。あるいは……。

（自分より身分が低いヤツの名前なんか興味が無い、とか？　それって有り得るよな）

これまで会って来たファーナの民を見ていると、ベアルドがそういった考えを持っていても不思議ではないような気がした。今の自分たちの立場は、言わば「罪人」のようなものだ。これと言った罪を犯した記憶など無いが、それでも外国人であるということはこの国の人間にとって「鞭打ち刑」の対象と成り得る。

（腹立つな、チクショー）

迷いの無い足取りで、薄暗い廊下を進んで行くベアルドの広い背中を、中也は無言で睨みつける。

「腹減った～な。朝飯はナシか～よ」

中也の心情など素知らぬ顔で、隣を歩いていたシヴァが小声でそう言って来た。

「夕べ、メシが出て来ただけでもありがたいと思えよ」

「そうなんだろ～けどな」

シヴァの気持ちは分かる。食事は出して貰えたとは言え、その量はかなり少なかった。どれだけ食べてもすぐに腹が減る年ごろの自分たちにしてみれば、物足りないことこの上ない。

（朝食は1日の基本なんだぞ？　健康を維持するためには、毎日ちゃんと朝飯を食えって、厚生労働省も言ってんじゃねえかよ）

別の世界の政府の行政機関の名を引き合いに出したところで、こちらの国の人間は鼻で笑うだけだろう。しかし、心の中でそう毒吐かずにはいられない気分だった。

（アルテリアは、ホントにマシな国だったんだ）

ここへ来て、今更のようにそんなことを思う。アルテリアで暮らす外国人と言えば、周辺の小国から戦火を逃れてやって来た難民がほとんどだが、そんな難民にもアルテリアの朝廷や軍は最低限の物資を支給しているし、仕事を見つけた者にはレッド・カードという身分証明書を発行し、生粋のアルテリア国民と同じように国からの援助を受けられるようにしてある。ファーナとは大違いだ。

（どこまで行く気なんだよ）

無言のまま、ベアルドは廊下を進んで行く。暗い色をした板張りの廊下は、ところどころの土壁に、鉄製と思われる籠のようなものがかけられており、その中で燃やされている木炭のようなものが照明となっていた。土壁の反対側には、延々と襖が並んでいる。人の気配は、どこにも無い。

（無気味……。何か幽霊屋敷みたいだ……。化け猫でも出るんじゃねえか？）

炎に炙られて木が爆ぜるパチパチという音と、自分たちの体重で軋む床の音。しんと静まり返り、朝だというのに一切の光の介入も許さない暗い廊下は、まるで迷路のようにあちらこちらで折れ曲がり、あるいは分かれ道になっていて、とても一度通っただけでは、その道順を覚えられそうにない。

（文明が遅れた国の地下っていうのは、ホントに怖いな）

ここが地下だと分かったのは、最初に放り込まれた牢屋がどう考

えても地上一階で、寝泊りしたあの和室へ移動する際に階段を降りたからだ。あの時は、何とか正確な道順を覚えようと試みた。しかし、案内役のサムライが意図的に幾度となく同じ場所を通り、中也の記憶を撹乱させてくれた。おかげで、頭に地図を描くことはできずに今に至る。ベアルドがどの辺りを通っているのか、全く分からない。すべては彼任せである。

（どうするつもりなんだろう）

先頭を歩くベアルドが左へ曲がる。続いて中也たちも左に曲がった。その先にあったのは、昨日あの和室へ行くために使ったと思われる階段だった。

（どうやってここまで来たんだか、もう分からねえ。どこもかしこも襖と壁だけ。こいつ、何で道を覚えてられるんだよ）

足を乗せる度にギシギシと音を立てる木の階段を登ると、そこには一枚の板戸がある。ベアルドがそれを開けた瞬間、眩しいほどの朝の光が目に飛び込んできた。眩暈さえ覚えるほど強烈な光に顔を

顰めつつ周囲の見渡して、中也は愕然とする。

（あれ？　昨日の場所じゃない）

左手にズラリと並んでいるのは襖で、右手の硝子戸の向こうには見事な日本庭園が佇んでいる。昨日、階段を降りて行く前に通った場所ではないことは、一目瞭然だった。

（別の階段か）

場所が移動（ワープ）することは無いので、自分たちが別の階段を上がって来たと考えるのが普通だ。昨日、中也たちが通った場所は、牢獄の最奥にあったのだ。

（広い庭だな）

真っ白な小石が敷き詰められた庭は、自然そのものを凝縮してここへ持ってきたような印象がある。丁寧に剪定された植木に、ところどころアクセントのように置かれた大きな石。奥にある池には、色鮮やかな鯉が優雅に泳いでいた。２５メートル・プールと同じような大きさの池の中央には、真っ赤に塗られた橋がかけられている。

その光景は、中也に故国を思い起こさせるには充分だった。

（懐かしい……）

久しく見ていなかったその光景に目を奪われているうちに、ベアルドはさっさとその廊下を通り過ぎ、突き当りを右へ曲がった。それまで強烈過ぎる光の中にいたので、足を踏み込んだその廊下は必要以上に暗く感じる。土壁に左右を挟まれた廊下をしばらく進んで行くうちに、鼻腔を味噌の臭いが刺激した。どうやら、そう遠くない場所に台所があり、そこで朝食の支度が行われているらしい。

（腹減ったな……）

空腹の時に嗅ぐ食べ物の匂いというのは、何とも食欲を刺激してくれる。今現在、作られているその食事が、自分の口に入ることが無いと分かっていれば、なおさらだ。

「……」

ほんの少しの期待を込めて大柄なベアルドを見上げるが、彼が振り返ってくれることは無かった。

（やっぱりダメか）

今日の朝食は抜きになることが確定したところで、中也の視線の先に玄関が見えて来た。

（玄関だ）

改めてそう思ったのは、アルテリアでは土足のまま家の中に入ることが当たり前で、外と中の境がほとんど無いからだ。玄関には、履き古された1足の草鞋と、自分たちがもともと履いていた靴がキチンと揃えて置いてある。ベアルドに続いて靴を履く。考えてみれば、家の中で裸足でいたのは久しぶりだった。

（それにしても無口なヤツだな）

横開きの板戸を開くベアルドは、何も喋らないままさっさと先に行ってしまう。

（くそっ！）

どこまで自分たちをバカにしているのか分からない。内心でベアルドを罵りつつ、中也は板戸を潜った。目の前には堀のようなもの

があり、石垣の中に緑色に濁った水を湛えていた。その傍には、柳としか思えない木が等間隔で立っている。

（江戸だ……）

堀の向こうには、テレビ画面でしか見たことがなかった「江戸」の町並みが広がっていた。朝日を浴びて輝く瓦屋根。歴史を感じさせる日本建築……。今は静まり返ったその町は、中也にとって「かつて」の故国の姿そのものだった。

「中也、あっちだ～ぞ」

「お、おう」

開いた口が塞がらずに呆然としていた中也は、シヴァに肩を叩かれて我に返った。シヴァの視線の向こうには、1台の馬車が止まっている。ちょうど、ベアルドがそれに乗り込もうとしていた。

「アルテリアの馬車とは形が違うんだ～な」

「そうだな」

江戸に馬車があるというのも不思議な感じがしたが、正確にはこ

こはファーナであって江戸ではない。そう思うことで納得することにした。

「モンスターが出るフィールドって、どこにあるんだろうな」

「ベアルドって人に聞けばいいだ～ろ。俺に聞くな～よ」

「確かに。聞いて悪かった」

「分かればいいんだ～ぞ」

シヴァが指摘した通り、アルテリアで普通に通行している馬車に比べて若干、四角い印象が強い馬車に乗り込む。その後ろを、シヴァとルナが続いた。同時に、御者が馬に鞭を入れる気配がする。４人用の席は、敢えて例えるなら電車の向かい席に似ている。必然的に、誰か1人がベアルドの隣に座らなければならないという状況になって、ほんの数瞬、３人の思惑が視線だけで交差した。

「ベアルドさん、だっけ？　隣を失礼」

自分たちの中で、最も精神年齢が上であることが予想されるルナが率先してベアルドの隣に座ってくれた。どうやら自分と同じこと

を考えていたらしいシヴァと2人、無意識に顔を合わせて苦笑いする。

（さすがルナ……）

そんなことを思いながら、シヴァと並んでベアルドとルナの向かいに腰を下ろした。

（役所、みたいなモンか）

馬車の中には窓がある。硝子が嵌めこまれた窓の向こうに映っていたのは、先ほどまで自分たちがいた建物だった。

（でけえな、改めて外から見ると）

白壁に、藍色と鼠色を混ぜたような色をした瓦屋根が、ずっと続いて城壁のような体裁を保っている。この建物の規模からして、ついさっき自分たちが出て来た出入り口は、正面玄関でないことはほぼ確実と思えた。

（どっか別に、ちゃんとした玄関って言うか、入口があるんだろうな。そんで、そこには槍を持って白いハチマキを締めて、タスキを

かけた侍さんが警備してんだよ、きっと）

しばらく馬車に揺られているうちに、まさしくそのままの光景が目に飛び込んで来た。

「……」

予想が的中して嬉しい気持ちもあるが、何となく溜め息をつきたい気分にさせられた。

「なあ、オッサン。聞いていいか～な？」

「答えられる範囲ならば答える」

何の前触れもなく、シヴァがいきなりベアルドに話しかけて、中也は内心で飛び上がった。「オッサン」と呼ばれたことに気を悪くしなければいいが、と思った中也の心配とは裏腹に、ベアルドの態度は特に変わらなかった。

「その、ベルキュンとか言うモンスターが出る場所までは、どれくらいかかるのか～な？」

「3日だ」

ベルキュロス、と聞いたような覚えがあったが、ベルキュンと発音したシヴァをベアルドが否定しなかったので、どちらが正しいのか分からなくなった。もしかしたら、ベルキュンというのはベルキュロスの別名なのかもしれない。中也はそう考えた。

「りょうか～い。で、俺らは今のところ丸腰なんだけど～よ、武器と防具は貸して貰えるのか～な？」

「その予定だ」

「あっそう。それなら安心だ～ぞ。ついでにもう1個。俺らは外国から来たってことで牢屋にブチ込まれたんだけ～ど、クエストに出てる間はどういう扱いになるのか～な？　あんたに言ってもムダかもしれないけ～どよ、とりあえずメシくらいは食わせてもらいたいんだ～ぞ」

確かに、それは気になる。食事も水も与えられずにモンスターと戦えと言われると、かなりキツい。ベアルドの答えが気になって視線を彼に注ぐと、彼の正面にいたベアルドが今更のようにキツネの

仮面を被った顔を上げる。

「お前たちの扱いは基本的に通常のハンターと同じだ。ただし、町での自由行動は認めない。ついでに、もしも逃げ出すようなことがあれば上から始末命令が出ている」

「それを聞いて安心した～ぞ。でも、俺らは3人でオッサンは1人。3人がバラバラの方向に同時に逃げ出したら、どうするのか～な？」

「お前たちの似顔絵はハンターズ・ギルドに提出されている。俺が始末できなかった場合、別のハンターが追いかける。他に何かあるか？」

「けっこうだ～ぞ」

ベアルドの口調からは、あからさまに話しかけるな、という雰囲気を醸し出ていた。しかし、そんなことには頓着しないらしいシヴァは明るく笑う。

「まあ、よろしく頼む～ぜ、オッサン」

ベアルドからの返事は無かった。何だか重苦しい空気の道中にな

りそうだ、と中也は密かに溜め息をついた。

共鳴９（後書き）

よっしゃ～！　終わった～！　ブリーチ見るぞ～！！

ブリーチのセカンド・オープニング・テーマ（？）に使われている、
ＵｖｅｒＷｏｒｌｄの
Ｄ－ｔｅｃｎｏｌｉｆｅという曲が好きです。

「癒えない痛み、悲しみで傷ついた君よ～♪　消せない過去も背負いあって行こう。生きることを投げ出さないで♪」

カッコいいっすよね～！　痺れますよね～！

ちなみに、自分の場合は他人に「言えない」傷ならたくさんあります。痔とか……ネ……（笑）

共鳴１０

時計の針が昼の１２時を過ぎるころ、中也たちを乗せた馬車がふいに
振動を止めた。
「休憩地点ってヤツか～な？」
「そうだ」
シヴァの質問に短く答え、立ち上がったベアルドはさっさと馬車を降
り始めてしまう。
（何でもいいから、とりあえずメシを食わせてくれよ）
先ほどからしきりに空腹を訴えて鳴いている腹を抱えたまま、中也は
軽い溜め息を落としながらもその背に続く。
（田んぼだ）
馬車から降りたそこには、長閑な田園風景がどこまでも果てしなく続
いていた。強烈な夏の日差しに見下ろされ、生き生きと育っている

稲。

どこからともなく一陣の風が穏やかに吹く。澄んだ空気の匂いを含んだ

風に稲たちが擦り合わされ、まるで笑い声のような音を立てながら走り

去って行った。

（平和だなあ……）

こんな田園風景を見ると、中也は意味も無くそう思ってしまう。ここ

には、走る車もバイクも無い。存在しているのは、本当に自然の音だけ

だ。上空で鳶が鳴く。ピーヒョロロロ……というその鳴き声を聞いたの

も、本当に久しぶりだった。

（昔の日本って、こんな感じだったんだろうな）

緑一色の景色の中、まるで木の葉に入った筋に似た砂利道の傍に、一

軒の家が建っている。その家は、人間が１０人も入れば満杯になってし

まいそうな小さな平屋で、一見して小屋のような印象を受ける。トラク
ターだの、耕運機だの、農機具を納めておくにはちょうど良いような小
屋だが、ベアルドが何の迷いもない足取りでその小屋の中に入って行く
のを見て、もしかしたら人が住んでいるのかもしれないと思った。

「誰か、住んでんのかな」

「休憩地点ってことは、もしかしたら店かもしれねえ～ぞ」

「有り得ない話じゃないな……」

もしもこの小屋が「店」であるとすれば、良い言い方をすれば趣(おもむき)があ
る。悪い言い方をすれば、ボロい。はっきり言ってしまえば、進んでこ
の店に入って飲み食いをしたい気分にはならない。だが、今の自分たち
には選択権は無い。中也とシヴァは互いに溜め息を落としつつ、先に入

ってしまったベアルドとルナに続いた。

「こいつらで最後か？」

横開きの板戸を引いて顔を見せると、中にいた男が2人の顔を見るな

り、ベアルドに向かってそう聞いた。その男の年の頃は50代の後半か

ら60代の始めと言ったところで、初老という形容が良く似合う。髪の

色は金に近い茶色で、豊かな口ひげを蓄えていた。その手には煙管（きせる）を持

ち、くたびれた紺色の着物を着流しにしている。一見して農民のように

見えなくはないが、他人を見下すようなその表情や、横柄な態度からし

て、農民だと断定するには戸惑われた。

「その通りだ。案内を頼む」

何の話だと困惑する中也たちを余所に、ベアルドが淡々と頷いて答え

る。それを見て、囲炉裏（いろり）と思われる四角い穴の傍に座っていた初老

の男
が腰を上げた。
（日本昔話だよ……。よくこんなところに住んでんなあ、この人……）
外から見た通り、家の間取りはたった一部屋きりだ。玄関から上がってすぐに居間があり、その居間の中央には囲炉裏が備え付けてある。部屋の片隅には、布団が敷きっぱなしになっていて、玄関からでも分かるほど床にはホコリが溜まっていた。
「あの～、ちょっといいですか？」
中也は部屋の中を一通り見渡した後、おずおずとベアルドに向かって声をかけた。
「何か用か」
「トイレ行きたいんですけど。朝からずっと馬車に詰め込まれてたし」

「あ、俺もだ～ぞ」

相変わらず無愛想だとしか思えないベアルドに向かって生理現象を訴えた時、ついでとばかりにシヴァが便乗して来た。

「厠のことだな？　それなら裏だ。行けば分かる」

中也の訴えに答えてくれたのは、この家の主と思われる初老の男だった。どうやら、この家のトイレは家の外にあるらしい。

「ちょっと行って来ます」

軽く声をかけて、中也とシヴァはたった今、入って来たばかりの板戸を潜った。再び夏の強烈な日差しに包まれながら、言われた通り家の裏手へ進む。

「ファーナのトイレって外にあるんだ～な。家に入るのにもいちいち靴を脱ぐし～よ、ションベン行きたくなる度にわざわざ外に出るなんて、

面倒くさいんじゃねえか～な？」

「仕方ねえよ」

「はあ？　どういう意味～だ？」

「行けば分かる」

シヴァの疑問は最もだ。アルテリアしか知らない彼からしてみれば、

ファーナの習慣が面倒に感じるのも致し方ない。こればかりは説明する

より見て貰った方が早いだろうと思い、中也は敢えて何も言わなかった。

「あれ～か？」

「そうだ。先に行けよ」

「おう」

予想通り、家の裏手にはかつて建設現場などで見かけていた簡易式ト

イレのようなものが設置されていた。簡易式トイレと違うのは木造だと

いうこと、そしてその地に根付いていることを意味しているように、

箱

のようなトイレの周囲には苔や雑草の蔓が巻きついているということだ。

（まず間違いなくアレだな。ボットン便所……）

俗に言うところのボットン便所とは、正確には汲み取り式の便所のこ

とだ。汲み取り式の便所では、地下１０メートル以上の穴、あるいは空

間が掘られ、排泄物はそこに溜められる。そして一杯になってくると、

汲み取りをしてくれる専門の業者を呼んで内容物を処理して貰うのだ。

もちろん、ファーナにそんな業者はいないはずなので、人間の排泄物は

肥料として活用されるのではないかと中也は推測した。

「くっせ～んだ～ぞ……」

先にトイレに入ったシヴァが鼻を押さえながら出て来る。言われなく

ても分かっていた。故国の田舎に住んでいた祖母の家は、２１世紀

にも
関わらず未だに汲み取り式で、トイレの傍を通りかかる度に何とも言え
ない嫌な臭いがしていたことを知っている。夏場となればなおさらで、
専用の殺虫剤を投げ込んでいなければハエが大量発生するらしい。
（アルテリアのトイレはショボいけど水洗だもんな～。ここに比べれば、
やっぱ進んだ国だよ）
シヴァと交代でトイレに入る。板戸を開いた先に広がっていた狭い空
間は、予想通りの臭いで満ちていた。汲み取り式のトイレはどうしても
臭う。だから、家の中ではなく家の外に取りつけられていることが多い
のだ。ちょっとでも腕を振り回せば左右の壁にぶつかってしまいそうな
ほど狭いトイレは、長い間、きちんと掃除されていないらしく、板張り

の床に様々な虫の死骸が転がっている。土の固まりのようなものもある

し、何より、小さな格子窓から差し込んでくる光に照らされて、穴の底

でテラテラと光る汚物が目に入るのが、何とも言えずやるせなかった。

（役所にいた時のトイレは暗かったから、中が見えないだけマシだった

な……）

夕べ使わせて貰ったトイレは、ちゃんと掃除がされていたし、何より

照明が暗くてよく分からなかった。改めてこういうトイレの実態を知る

と、アルテリアが恋しくなって来る。

（うぅ～。日本とは言わないから、せめてアルテリアに帰りてえな～）

用を足して、中也は汲み取り便所を後にした。トイレの傍には桶が置

いてあり、その中には水が張られていた。おそらく手を洗うためのもの

だろうと判断し、桶の中に突っ込まれていた柄杓(ひしゃく)を使って手を洗う。
祖
母の家でも、手洗い場はトイレの外にあった。
「アルテリアに帰りてえ～ぞ」
「同感。でも、ちょっと前のアルテリアはここよりヒドかったらしいじ
ゃねえか。窓から投げ捨ててたんだろ？　それに比べればマシだよ」
「そうか～な？」
「そうだよ。でも、小さい子供が落ちて死ぬっていう事故があるから、
こういうトイレは危険らしいけどな」
ついそう言った途端、シヴァの顔色が変わる。
「マジか～よ！？」
「ああ、マジだよ。ホントに、そういう事故で死んだ子供がいたらしい
ぜ？」
「……俺、その死に方だけはカンベンして欲しい～ぞ」

「まあな」

そんな会話をしながら、2人は元通り雑草が生い茂った家を回り込み、

玄関へと向かう。

「戻りました」

「おう。さっさと上がれや。草履（ぞうり）……じゃねえ。靴は脱いでくれよ」

板戸を開けるなり、初老の男がわざわざそう言って来た。言われなく

ても分かっているが、余計なことは言わないに越したことはない。

黙っ

て靴を脱ぎ、ホコリだらけの居間へと上がった。

「さて、こっちだ」

まるで案内するように、初老の男は中也たちに背を向けて歩き出す。

たった一部屋しかない家で、どこに連れて行くつもりなのだろうと思っ

た時、彼は万年床の前で足を止める。

（なんだ？）

布団の前でしゃがみ込んだ男が迷いの無い手つきで、敷き布団ごと一

気に捲り上げた。唖然として見ている中也たちの目の前に現れたのは、

正方形の隠し戸だった。

「地下だ。付いて来な」

初老の男が隠し戸を引き上げれば、深い穴が口を覗かせている。つい

その穴を覗きこんで息を飲む中也たちに、初老の男がニヤリと笑った。

「心配しなくても、この中にはモンスターはいねえ。ほら、行くぞ」

四角い穴の一方に取りつけられた梯子（はしご）を、男は身軽な仕草で降りて行

く。シヴァとルナと顔を見合わせ、誰が最初に行くか無言のやり取りが

行われた。

「じゃあ、一番手は俺だ～ぞ」

ほんの数秒、音の無い会話が交わされた後、シヴァが先陣を切って梯
子を降り始めた。
「次は私が行くよ」
「おう」
シヴァの姿が光が届かないほど進んだところで、ルナが続いた。
（ファーナのギルドって、いったいどうなってんだ？）
そんなことを思いながら、中也はルナの姿が見えなくなったのを確認
した後、梯子に手をかける。
（深いなあ……）
見上げた入口の四角形が、手の平ほどの大きさになってもなお、中也
の足が床に届くことは無かった。狭くて暗い空間は、どうしても先ほど
の汲み取り式便所を思い出させる。身震いしつつも、無意識に鼻で息を
することは止めていた。どこまで続くのか不安を覚えながらも梯子

を降
り続ければ、ようやく足が床に触れた。その時には、すでに入口は
豆粒
のような大きさになってしまっていた。
（ベアルドさん、降りて来ないのか）
中也の後に彼が来る気配は無い。それを不思議に思いながらも額
に浮
かんだ汗を拭い取ると、暗闇の中で誰かが背後から近付いてくる。
「おーい！　ベアルド！　全員、降りたぞー！！」
その声で、初老の男だと判断した。中也の近くにやって来た男は、
何
やら懐（ふところ）をいじっているような音をさせ始める。何をしているのかと
思う
間もなく、いきなり目の前に小さな炎が灯された。
「お疲れさん。ここが武器庫だ」
男が手にしていたのは蝋燭だった。それを持って、男は壁際へと
歩い
て行く。頭上に浮かんでいた四角い光が途切れる。どうやら、ベア

ルド
が入口を閉じたらしい。
（なるほど。誰かが来たらマズイから、絶対に1人は上に残ってるって
ワケか）
だとしたら、ファーナのハンターズ・ギルドは非公式的なものである
可能性が浮上する。今の時点では何も分からないが、その可能性がある
ことだけは胸に留めておいた。
（もしそうなら、ベルキュンとか言うモンスターを討伐したからって、
ちゃんとアルテリアに帰してくれる可能性はかなり低いじゃねえかよ）
今更ながら、役人に口約束の胡散臭さを実感する。しかしながら、逆
らえば鞭打ち刑に処せられると聞いて、それを断れるはずなど無かった。
（ホントに利用されてるだけだ。とりあえず役所は抜け出せたんだ

し、

何か逃げ出す方法を考えないとな）

中也の心情など素知らぬ顔で、初老の男が松明に火を灯した。

「さあ、好きなものを選びな」

徐々に明るくなっていく部屋の中に並べられていたのは、モンスター

の素材で作られた武器と、そして防具だった……。

共鳴１０（後書き）

メイドさん……ｗｗｗ！

カワイイですよね～。素敵ですよね～。萌えですよね～、メイドさん！

一度はメイド・カフェというものに行ってみたいものです。

ところで、作者は以前、近所のスーパーでメイドさんのコスプレをした女性に出会ったことがあります。メイド・カフェやコミケにいるメイドさんは「カワイイ！」という印象しか持たないのですが、山口県のクソ田舎のスーパーにメイドさんのコスプレをした女性がいると、非常に景色から浮き上がって見えました（汗）

そのメイドさんの年齢は３０代の後半から４０代と言ったところで、１７０センチを超える長身の持ち主でした。黒髪をお下げにして、顔はスッピンでしたね。横にはダンナさん？　と思われる同じ年ごろの男性がいて、カップラーメンやレンジでチンするゴハンなどなど、カゴに２つ分ほど買いこんでらっしゃいました。

「インスタントを出すメイドさんか……」

何かが違う気がする……。

やっぱメイドさんと言えば、お盆（トレイ？）に手作り料理を乗せて運んで来てもらいたいものだと思うのは……自分だけでしょうか、ね……？

共鳴11

（モンスターの武器と防具だ……）

灯された松明の淡い光の元に照らし出されたその武具たちは、かつて
アルテリア軍の統括本部で見たのとほとんど変わらない姿で静かにそこ
に眠っていた。

（ファーナの錬金術もアルテリアとほとんど同じってことか）

素材となったモンスターの体表がそのまま残る防具や、鋭利な刃を晒
す大剣、双剣。鞘に納められて佇む太刀、片手剣。天井を突き刺すよう
に立てかけられたランス、ハンマーの数々……。まるでそこにモンスタ
ーがいるかのように、空気が重いところまで同じだ。

この部屋は、広さにして畳12枚分。上の部屋の2倍はある。それだ
けの空間に所狭しと並べられた、モンスターの武器と防具に囲まれ

て時

を過ごすのは、なかなか神経が擦り減る作業だった。

「あれ？　この武器は？」

ふと、中也は見慣れない武器のひとつを目に止めた。素手で触れば痛

いでは済まされないということは知っていたので、手を伸ばして触れる

ことはせずに近寄ってみるだけに留めておいた。

「ああ、そりゃガンランスって言う武器だよ」

中也がつい口に出してしまった疑問に答えをくれたのは、初老の男で

ある。

「ガンランス？」

「そうさ」

聞き慣れない武器の名を反芻すれば、初老の男が得意気に笑って見せ

る。

「アルテリアには無い武器だろうな。まあ、この国の隅から隅まで探し
ても、ガンランスがあるのはこのラタ地方だけだろうがね。そのうちフ
ァーナ全土のギルドに広がるだろうが、今のところガンランスがあるの
は、その開発に成功したラタ地方だけさ」

「……ファーナのハンターズ・ギルドは、国の管轄ではないんですか？」

男の口振りに、どうしても気になっていたことを聞いてしまっていた。

中也の問いかけに、彼の白いものが混じり始めた眉毛が軽く上がる。

「違うさ。アルテリアはどうだが知らねえが、ファーナのハンターズ・
ギルドは言葉のまま、商業組合だ。各地の商人たちが出資してハンター
を育てたり、雇ったり、依頼を仲介したり……。まあ、いろいろさ。そ
んで、ハンターがモンスターを倒して必要な素材を剥ぎ取った後、強欲

商人たちは残りの死体を加工して売りに出すんだよ」

ハンターズ・ギルドを管轄する商人たちにとって、ハンターがモンスターを倒すということは、そのまま商売に繋がるということか、と中也は頭の中で思った。ついでに、金になるモンスターの素材を確保するために、それを倒すことができるハンターの養成にも手をかけているということだろう。

「つまり、地方によってギルドの中身が違うって言うことですか？」

「どうだろうな。言ってしまえば似たようなモンだとも言えなくもないが、ハンターのランクだの、訓練所の過程だの、そういった細かいことを言い出せば地方どころか村によって違うこともある。場所によっては、訓練所が無いようなところもあるしな。ハンターになりたいんですけど

って言えば、簡単にクエストに出させてくれるような場所もあるんだ。

アルテリアじゃあ考えられねえだろ？」

「そうですね」

ここはファーナ。アルテリアではない。国が違えばギルドの中身や体

制も違って当然なのだが、何ともややこしいことだと内心で溜め息を落

とす。

「ちなみに、ラタ地方……ここのことだ。このラタ地方には４つの村が

あるんだよ。鎮路（ちんじ）村、ティア村、ソルト村、松座（まつざ）村。共通点はただ１つ。

とにかく貧乏だってことだ。だから、４つの村が共同でハンターズ・ギ

ルドを作ってる。お前たちがこれから出向くのはソルト村。ここは役所

のある町とソルト村の境界に当たる」

「大きな村になれば、その村単体でハンターズ・ギルドを作ってること
もあるってことですか？」
「そういうことになるな。他に質問は？」
質問があるなら纏めて言え、とでも言わんばかりの口調である。相変
わらずこちらを見下したような視線に腹が立たないわけでもないが、せ
っかくなので相手が答える気になっているうちに聞けることは聞いてみ
ることにした。
「単純な質問なんですけど」
「おう。何だ？」
「ここは何なんですか？」
見たところ、このラタ地方にあるハンターズ・ギルドの秘密基地のよ
うだが、正確はことは知っておきたい。そう思ったのだが、中也の質問

を耳にした男は爆笑する。

「何言ってんだ、テメー。それでもハンターの見習いか？　見りゃ分か
るだろ？　武器庫だよ、武器庫！　そこにあるのはモンスターの素材で
作った武器と防具だ！」

「……」

それは見れば分かる。そんなことを聞いたのではない。

「中也が聞いたのは、この建物は何かってことだ～ぞ。外から見た感じ、
フツーの家にしか見えなかったけど、中に入ったらこんなことになって
た～んだ。これはどういうことなのか～って意味だ～ぞ」

「そうなのか？」

どう言い直そうかと迷っているうちに、シヴァが代わりにそう言って
くれた。改めて確認して来る男に、中也は無言で頷いて返した。

「そういうことか。ここか……。ここはまあ、早い話……ラタ地方

のハ
ンターズ・ギルドの集会所さ」
「集会所？」
「そう言うこと。アルテリアも同じかもしれねえが、錬金術師ってヤツらはとにかく秘密主義な連中が多いんだよ。そんで、自分たちの技術が込められたモンスターの武器だの防具が、何にも知らねえ普通の農民だの町人だのの目に触れるのはイヤだって言ってな。結果的にこんな感じでやってんだよ。それに、お役所のお代官さまはハンターズ・ギルドがお好きでないみたいだしな。まあ、コソコソやってた方が無難だろうってことでね」
お代官様、というその単語を久々に聞いた気がした。アルテリアでは当然のことながら、故国でもそんな言葉は滅多に使わない。

「じゃあ、ハンターはクエストに出る前に絶対ここに立ち寄って武器と
防具を持って行くってこと～か？　面倒クセーことが好きだ～な」
「いいや。ハンターはちゃんと各自で武器と防具を管理してるさ。ここ
に置いてあるのは基本的に新製品ってヤツだ。新製品が溜まって、気が
付いたらこんだけの数になった」
「なるほ～どな」
　確かに、ここにあるものが他人の武器や防具であれば、本人に無断で
貸してもらうわけにはいかないだろう。アルテリアでも、モンスターの
素材を使った武器や防具は一般庶民からすれば破格の値段で売られてい
る。ファーナも同じだとしたら、万が一壊してしまうようなことがあれ
ば、とても弁償しきれない。

「で、オッサンは管理人ってワケ～か？」

遠慮の無いシヴァの質問に、男がニヤリと笑って見せた。

「間違いではねえな。だが、できればギルド・マスターと呼んで欲しい

もんだ」

「ギルド・マスター！？」

男の口から飛び出してきたその言葉を反芻したのは、中也とシヴァが

同時だった。少し離れた場所で、武器を物色していたルナは軽く振り向

いただけで、またすぐに物色を始めてしまった。

「そうさ。アルテリアのギルド・マスターの正体は軍の将兄なんだって

な？　残念ながら、こっちじゃあギルド・マスターを名乗ってるヤツは

掃いて捨てるほどいる。俺もその1人さ。ラタ地方のハンターズ・ギル

ドを代表してる」

「……」

人は見かけによらないものだ。まさかこんな小汚いオヤジがギルド・

マスターを名乗っているとは思わなかった。ギルド・マスターと聞いて、

否応なく中也の脳裏に思い浮かぶのは、金色の瞳に血のような赤い髪を

した「あの」青年の「あの」姿……。たった今、自分でギルド・マスタ

ーだと名乗ったこの男とは、似ても似つかない。

「オッサン、あんた仕事してんのか～よ……」

率直なシヴァの質問に、ギルド・マスターだと名乗った男が大袈裟に

顔を顰める。

「不躾なガキだな、テメーは。してるに決まってんだろ？　普段は夜に

ならねえと人が集まらねえんだよ。言いかえれば、俺は普段、この時間

は寝てるってことだ。眠い目をこすってわざわざ起きて来てやって

んだ

ぜ？　少しは感謝しやがれ」

「夜になったら、ハンターが集まるってことですか？」

多少、押しつけがましい感じがしないではないが、それには触れるべ

きではない。中也の隣に並ぶシヴァがギルド・マスターの言動に何かし

ら言い返して面倒なことになる前に、さっさと次の質問を口にしてしま

う。

「そうだな。だいたい夜9時以降だ。たいていは上でダベって酒飲んで

帰って行くがね」

「そうですか」

ギルド・マスターの返答に、中也は内心で顔を顰める。

（おかしいな……）

たいていは上でダベって酒を飲んで帰って行く。ギルド・マスターは

今、確かにそう言った。だとしたら、この周囲にいるハンターたちは滅
多にモンスター討伐の依頼を受けないということにはならないだろうか。
（そりゃそうだ。モンスターが頻繁に出てたら、村なんてあっという間
に無くなる）
ハンターはモンスターを倒すことで報酬を受け取り、日々の糧にして
いるはず。滅多に依頼が入らないということは、それはそのままハンタ
ーの収入源が無いとも言える。
（ベルキュンが来たなら、普通は飛びついて行くんじゃねえのか？）
その名を持つモンスターがどんなモンスターなのかは分からない。だ
が、収入源が滅多に無いハンターが溢れているとして、そこにベルキュ
ロスが来たとしたら、普通は皆その依頼に食いつくはずだ。外国から来

たハンター見習いの自分たちに、その依頼が回ってくるとは思えない。

（でも、俺たちに任せられた）

嫌な予感がする。

（この辺のハンターたちは、そのベルキュンとか言うモンスターを相手

にしたがらないんだ……）

ハンターが相手にしたがらないモンスターと言えば、報酬が少なかっ

たり、その死体から剥ぎ取れる素材に魅力が無い場合が大多数だ。それ

ならば問題ない。だが、相手にしたがらないのではなく、相手に「でき

ない」のだとしたら……。

（そうか）

中也の中で、何かが繋がった。

（この辺りのハンターじゃ手も足も出ないから、俺たちを捨て駒にした

んだ）

　ベルキュロスが現れて困っているという村があって、そこからギルド
に依頼が入った。だが、この周囲のハンターたちではそのベルキュロス
には適わない。ギルドが依頼を断ることがあるかどうかは分からないが、
この男を見ている限り、あっさり依頼を断るということも有り得ない話
ではない気がする。

（それで、困った村の人たちは役所側に依頼したんだ。もしかしたら、
役所が別の村のギルドから、そのベルキュロスを倒せるくらいの実力が
あるハンターを呼んでくれるかもしれない……いや、呼んでくれって言
ったんだ。きっと）

　役所側はそれを承諾した。だが、ハンターにモンスターの討伐を依頼

するには結構な金がかかる。

（でも、俺たちなら……）

ベルキュロスを倒せても、倒せなくても役所側に一切の損は無い。そ

れに、外国人の自分たちに、報酬金を支払う必要などない。中也たちが

ベルキュロスを倒したら幸い。倒せなくて死んだとしても、役所側は村

人の求め通り、ちゃんとハンターを探して送り込んだという筋書きにな

るわけだ。

「どうした？　他に質問はねえのか？」

中也の顔色が変わったことに気付いたのか、ギルド・マスターを名乗

る男は、より一層ニヤニヤと締まりのない顔をしながら、そう聞いて来

た。

「いえ、もういいです」

そもそも、秘密主義だというギルドが外国人にあっさり自分たちの情
報を漏らすことからしておかしい。ベルキュロスと戦えば、まず間違い
なく死ぬ。そう思っていなければ、ここまでペラペラと喋るわけはない。
万が一、生き残るようなことがあったとしても、ベアルドが始末すれば
それで終わりだ。死人に口なし。そういうことだ。
「そうか。じゃあ、さっさと好きな武器と防具を選びな」
この国では、外国人の命の値段はとことん安いらしい。分かっていた
はずの事実が、今再び胸の中に重く圧し掛かる。
（くそ……！！）
唇が切れるほど強く噛みしめても、血が滲むほど強く拳を握りしめて
も、今のこの状況ではどうすることもできない。言われた通り、中也は

シヴァを促して乱雑に並べられている武器と防具に歩み寄った。

（誰も助けてくれないんだ……。どうにかしないと！　ベルキュンと戦
って死ぬのも、ベアルドとか言う無愛想なオッサンに殺されるのもゴメ
ンだ……！）

属性が正反対の武器と防具が一緒に置かれているので、真剣に考えな
がら選ぶ必要は無かった。こういったところは、アルテリアの錬金術と
同じらしい。中也は目の前にあった大剣と防具のセットを適当に選ぶ。

（モンスターの武器……）

ふと頭に閃いたことがある。モンスターの素材を使って作られた武器
は、鉄や鉛などで作られた普通の武器の何十倍も殺傷能力が高い。アル
テリアのハンターズ・ギルドが、表立って軍の組織であることを公表し

ていないのも、そもそもはこれが理由だ。

（これがあれば、ベアルドとも戦えるんじゃねえか……？）

ベアルドだけではない。逃げ出して、追っ手がかけられたとしても、

モンスターの武器と防具があれば撃退できる可能性が高い。

「……」

これしかない。そう思った。ここから生きて帰るには、この方法しか

残されていない。

（やるしかない）

相手がどう思っているかは知らないが、自分たちだって人間なのだ。

死ねと言われて簡単に死ねるはずもない。

（こんな扱いを受けてんだ。少しくらい反撃してやるよ……！）

共鳴１１（後書き）

ストレス発散にはいろいろな方法がありますよね。

作者の場合、ストレスが溜まるとネットでエロ小説を読み始めます。

どんなにイライラしていても、どんなに「このクソヤロー」と思っていても、３時間ほどエロ小説を堪能すると、アラ不思議。いろんなことがどうでもよくなってくるのですよ。

ハタから見ていれば、パソコンの画面を睨みつけ、時折マウスをカチカチ言わせているだけのこのストレス発散法。騒がない、動かない、壊さない、金かからない。イイ意味で、ナイナイ尽くし！！

誰にもメーワクかけないでストレス発散している自分！　なんてオトナなんだろう！！　……と、思っているのは、もしかしなくても自分だけのようです。

ストレス発散方法がネットでエロ小説を読むことだ、と他人に話した場合、たいてい白い目を向けられるか、嘲笑されます。

……ムナしいな、自分（汗）

共鳴12

真夏の太陽が西の果てへ沈み、周囲を満たしていた熱気がようやく成り
を潜め始めたころ、光宮たちは成り行きで道中を共にすることになった薬
屋の一行と共に、未だ街道を歩き続けていた。

「あの……若旦那」

暑さと疲れが重なってそろそろウンザリし始めたころ、ふいに夏葉が薬
屋の若旦那に向かって声をかけた。

「どうされました、夏葉さん？」

隣に並ぶライトとレフトと共に、天気が良いだの気温が高くて嫌になる
だの、くだらない会話を延々と繰り返していた若旦那が相変わらず人好き
のする笑顔で振り返る。

「あの木、あれは何て言う木ですか？」

夏葉が指差したのは、最初に目覚めた海岸の傍にあった林を覆い尽くし
ていた木だった。モンスターのウロコのようにゴツゴツした木肌に、針の
ような葉を持つ、アルテリアでは見かけない、あの木だ。

「ああ、あれは松という木ですよ。赤松と黒松という種類があるのですが、
ここにあるのは黒松の方ですね。赤松は別名、雌松。黒松は別名、雄松と
も呼ばれます」

「そうなんですか」

夏葉が感心したように言った時、若旦那の後ろからレフトがひょっこり
と顔を覗かせた。

「自然に生えている松は、ファーナのこの地方にしかありません。ファー
ナ王族は、それを珍しがっておりましてね。わざわざ王宮に植樹したそう
ですよ」

「……でも、海岸線にあったあの林は、人が作ったものでしょ？　どう考えても自然に生えたモンじゃないわ」

夏葉が指摘したことをちゃっかり自分が気付いたことのように言えば、

レフトが軽く顔を顰めて見せる。

「ほらほら、レフト。知ったようなことを言うから」

「いや、面目ない」

若旦那にたしなめられて、レフトはあっさり自分の非を認めた。内心で

随分と大らかな連中だと思った時、若旦那が光宮の方へ視線を向けて来た。

「おっしゃる通りです。海岸線にある松は人が植えたものでしてね。松は

潮害に強いということで、防潮林としてこの地方の人々に大切にされてい

るのですよ。高波から街道を守るのは、大切ですからね」

「そうなの」

「ただ、レフトの言う通り、自然に生えている松がこの地方にしかないこ
とも事実です」

「へえ」

ひとつ勉強になった。自分は夏葉と違って植物にはあまり興味が無いの
で、それ以上その松とか言う名の木について何かを聞いてみたいとは思わ
ない。無意識に視線を前方に戻した時、その先にある不思議な建物が目に
入った。

「お！　若旦那、関所（せきしょ）が見えましたよ」

行く手に佇むその建物は、関所という名であるらしい。その建物は、森
から切り出して来た木材をそのまま縄で結んだだけのもので、屋根にあた
る部分には枯れた植物の葉か茎のようなものが被せられていた。壁は無く、

二階と三階が丸見えだ。随分と手抜きな印象が強いその建物は、どうやら
見張り台を兼ねているようで、最も高い三階の部分には人影が見えた。
（村の出入りを管理しているのかしら）
そこかしらで松明や、鉄製の籠に入れられた木炭が燃やされているせい
で、関所の周囲は無気味に明るい。見張り台を兼ねているらしいその建物
の下には、防具を付け、頭に白い布を巻いた強面の男たちが数人、佇んで
いる。その手にはランスに似た武器を持っていたが、自分が知っているラ
ンスに比べて随分と細かった。
（聞けないっていうのも、メンドーね）
自分たちはファーナの首都ディーダからここまで旅をして来たことにな
っているのだ。今ここで薬屋の一行に向かって関所とは何か、あの男たち

が持っている武器は何か、などの質問を向けるのは不自然過ぎる。

（盗賊……じゃなくて野盗に襲われたショックで記憶喪失になりましたっ
てことにしてみようかしら）

そうすれば不自然ではないかもしれない、と思ったが、いくらなんでも
唐突すぎると思って止めておいた。

「いやはや、たかだが旅人の行き来を見守るだけだというのに、槍（やり）とは。
何とも物騒なことですねえ、ライト」

「その通りですね、若旦那。しかし、この辺りは野盗が多いですから、仕
方ありませんよ」

「なるほど。物見櫓（ものみやぐら）に見張りがいるのも野盗を警戒してのことですか」

「そのようです」

都合よく、知りたいと思っていたことをペラペラと喋ってくれた。
どう

やら、あの兵士が手に持っている武器の名はランスではなく「槍」と言う
らしい。そして、あの手抜き工事が看板を出して建っているようなあの建
物は「物見櫓」と言うようだ。

「そこの一行、止まれ。手形を検(あらた)める」

街道を真っ直ぐに物見櫓の方へ進んで行くと、槍を手にしていた兵士の
1人が歩み寄って来て、感情の籠らない声でそう告げて来た。

（通行には手形が必要なのね。どうしよう）

ここで言う手形、とはいわゆる「通行手形」のことだろう。ファーナの
行政がどうなっているのか分からないが、もしかしたら旅をする際には住
んでいる町や村の役所のような場所に出向き、手形を発行してもらわなけ
ればならないのかもしれない。

（そんなもの持ってるワケないじゃない）

両脇にいるレイと夏葉と視線を交わし合う。こうなったら、いろいろと
面倒なことになる前に逃げるに限る。
（何か言われる前に全速力で引き返さないと……！）
光宮たちが足に力を込めた時、何でも無い顔をしたライトが服の袖の中
から手形と思われるものを取り出し、それを兵士に見せた。手渡された手
形の表書きに視線を走らせ、続いて裏返した兵士の顔色が僅かに変わるの
が見えた。
（どうしたのかしら）
逃げようと思っていたのだが、兵士の顔色が変わったことに興味を引か
れ、そのタイミングを逃してしまった。
「お通りください。失礼いたしました」
予想通り、兵士の態度が変わる。道を開けるように脇へ退いたその兵士

は、光宮たちについては何も触れず、物見櫓の傍を通り抜けるのを無言で
見送ってくれた。
（気になるわね……）
聞いていいものかと迷いつつ、若旦那の一行がさっさと村の中へと入っていくので、自分たちもそれに従うことにした。村の中へと通して貰える状況になったのだ。ここで引き返す意味はない。
「ほう、ここがティア村ですか」
「話に聞いていた通り、活気のある町ですねえ、若旦那。こりゃあ、美味いモンがたくさん食べられそうだ」
「ヒチはそればかりですねえ」
周囲を見渡しつつ、若旦那とヒチがそんな会話をしていた。旅人の出入りを監督する関所があることからして、ここが村外れだということはまず

間違いない。しかしながら、村外れに独特の寂れた印象はなく、むしろ人
の熱気で活気づいてさえいる。

「すごい人ね」

「そうですね。ティア村と鎮路村は、シュアナ地方とラタ地方の境目にあ
る村ですからね。ちなみにここはラタ地方と呼ばれていますよ。シュアナ
とラタを行き来する旅人が落とす金で生きている町です。村外れに宿屋が
多くて賑わっているのは、まあ当然でしょうね」

「そうなの」

立ち並ぶ建物は、アルテリアでは高級物件と呼ばれる建築でしか見られ
ない木造ばかりで、そのすべてに松明が灯され、明るく通りを照らしてい
た。土が剥き出しの地面は行きかう人々に踏み固められ、まるで石畳のよ
うに固くなっている。

（外国の田舎なんて初めてだわ）

首都ディーダの町並みは、アルテリアと似通っているような印象があっ

た。そこにいる人間の髪型も服装も、通りを埋め尽くす建物も、王宮も、

何もかもが似ていて、あまり外国に来たという印象を持たなかった。けれ

ど、たった今、自分の目の前に繰り広げられている光景は、まさしく外国

そのものである。

（やっぱり男の人はみんなチョンマゲなのね）

不思議で仕方なかったこの地方に独特のその髪型が、チョンマゲと呼ば

れる髪型であることは、薬屋一行の会話で学んでいた。どうにも自分の好

みに合わないが、それは言っても仕方ない。それはそれで、外国の文化な

のだ。

（そして女の人もみんな同じ髪型）

既婚女性と独身女性で髪型が違うのだと盗賊の男が言っていた意味が、

ようやく分かった。通りを行きかっている女性たちは、髪型を見ただけで、

既婚者か独身者か分かる。

（独身女性を狙う男には便利な風習だわ、確かに）

客引きをする男の声が聞こえてくる。楽しそうに笑う若い女性たちの声

が聞こえてくる。どこかで男たちが喧嘩する声が聞こえてくる。ファーナ

の田舎町は、思った以上の喧騒に包まれていた。

「すごいね……」

隣にいた夏葉も、その光景に驚いたような顔をしていた。

「もっと静かなところかと思ってた」

「同感。まあ、田舎って言ってもここは大国ファーナなんだし、これくら

いの人が溢れてても不思議じゃないわ」

「人に酔いそう……」

「我慢しなさい」

夏葉は人混みが苦手だ。前に一度、アルテリア帝都で行われた収穫祭に

連れ出した際、１０分もしないうちに路地裏に避難することになった覚え

がある。知ってはいたが、ここで倒れてもらうわけにはいかない。

「楽しそうだな。何か出店があるぞ。行商人か？」

一方、祭り事が大好きなレイはあからさまにウキウキしていた。彼女の

視線の先には、直径が１メートル近い、木で作られた洗面器のようなもの

があり、その中には水が張られ、色鮮やかな小魚が無数に泳いでいる。

「あれは金魚すくいというものですよ」

説明してくれたのはレフトだった。

「金魚すくい？　なんだ、それ。金魚を救うのか？　何から？」

「いやいや、救うではなく、掬うです。和紙で出来た網で金魚を掬う遊び
です」
「へえ」
金魚を掬うことがそんなにおもしろいとは思えない。大して興味を引か
れないまま、光宮は視線を移動する。行商人と思しき人間はそこかしらの
軒先で店を開いており、先ほどの金魚すくいだけでなく、ボウガンのよう
なもので的を落とすような遊びもあれば、香ばしい匂いのする食べ物を焼
いて売っている店もあった。
（変わった雰囲気だわ。今度は観光で来てみたいわね）
一通り、通りの雰囲気を見回した後、光宮は頭の中を切り替える。
今は、
単純に外国の景色に酔いしれている場合ではない。
「純粋な興味なんだけど、聞いていいかしら」

「何でしょうか」

誰にともなく声をかけると、近くにいたレフトが返事する。

「手形を見せて貰えない？」

断られることを承知で言ってみた。関所を警備していた兵士が、手形を

見て顔色を変えたところを目の前で見ていたのだ。そこに書いてある文字

に興味を引かれたとしても、不自然ではないはず。もしもこの薬屋一行が

ファーナの高官に関係ある人物だと確認が取れれば、自分たちのこの状況

に光が見える。最も簡単な方法は、身分証明書と似たような役割を果たす

手形を見せて貰うことだ。

「いいですよ。どうぞ」

意外なことに、ライトが一度は袖の中にしまったはずの手形を再び取り

出し、あっさり光宮に手渡してくれた。

「……」

いいのだろうかと思いつつ、渡された手形に視線を向ける。手形は木で
作られており、手の平ほどの大きさの五角形だ。表にはよく分からない幾
何学的な模様がオレンジ色のインクのようなもので描かれている。ファー
ナ王国の紋章は両翼を広げた赤い鳥だったので、これはファーナの紋章で
はない。ちなみにアルテリアの紋章はは剣に巻きついた黒龍だ。

（この模様、どういう意味かしら）

知らないことは、いくら考えても分からない。その疑問は後回しにする
ことにして、光宮は手形を裏返し、そこに書かれた文字を読んで目を瞠っ
た。

「……ファーナ王国・宰相、重枝エディ」

どこの国でも、宰相とは王宮に努める数千の官たちの長であり、国王に

最も近い位置にある民だ。その宰相の名が、ここに刻まれているというこ
とは、目の前にいるこの薬屋の一行は、ファーナを動かす中枢人物とそれ
なりの接点を持っていると言える。

「宰相と知り合いなの？」

つい声に出して聞くと、若旦那がにっこりと微笑んだ。

「知り合い、というほどのものでもありませんよ。私の家は首都で何代も
薬屋を営んでおりましてね、ご先祖様と親兄弟の努力が功を奏し、２０年
ほど前から王宮に薬を手配する特権が与えられました。それで、放浪癖の
ある三男坊の私が全国行脚に出ると言い出した際、親がお偉い方に頭を下
げ、宰相殿に手形の裏書きをしていただけた次第なのです」

「へえ……」

一般人が王宮に薬を手配するなど、アルテリアでは考えられない。

しか

し、それが認められた家ということは、この若旦那の家は相当、名のある

薬屋であることは間違いないだろう。地味な服装をしているが、どことな

く品性があるのはおそらくそのせいだ。

「なあ、光。“ぜんこくあんぎゃ”って何だ？」

抑えた声音で、レイがそう聞いて来た。

「知らないわよ。たぶん、国の隅々まで歩いて回るってことなんじゃない

の？」

会話の流れから、光宮はそう判断することにした。

「ありがとう。参考になったわ」

珍しく本音を滲ませつつ、宰相の名が刻まれた手形をライトに返した。

さすがに、宰相の名が裏書きしてある手形を盗むわけにはいかない。どう

せ盗むなら、誰も気にしないような立場の人間でなければ、かえっ

て目立
ってしまう。
「そういうわけなので、今夜の宿は私が奢って差し上げましょう。
さあ、
今夜はどこの宿に泊まりましょうか」
いきなりファーナに連れて来られたというこの状況に大きな好転
は無い
が、薬屋一行と共にいるうちは、当面の問題は解決できそうだ、と
判断す
ることにした。

共鳴１２（後書き）

昨日は風邪でダウンでございました（汗）

待っていてくださった方、（もしいらっしゃいましたら）本当に申し訳ございませんでした……（汗）

共鳴１３

「部屋も無事に取れたことですし、旅の汗をゆっくり流して来られたら
いかがですか？」

薬屋の若旦那に勧められるまま、畳が１０枚ほど敷き詰められた物珍
しい客室を出たのは今から１０分ほど前のことである。宿泊の受付をし
た際に貸してもらった夜着と１枚のタオルを手に、暗い色をした木の廊
下をハダシで歩きながら、光宮とレイは温泉を目指して宿屋の中を進ん
でいた。

「なっちゃんも来ればいいのにな」

「ダメよ。あの子、かなりの風呂好きではあるけど、他人と一緒に入る
のは嫌がるもの。人が少なくなったころを見計らって、勝手に１人で入

るんじゃない？」

「面倒クセーなあ。胡蝶だか何だか知らねえけど、別にいいじゃねえか

よ。女みたいなモンじゃねえか、胡蝶なんて」

「私だってそう思うけど、夏葉は嫌だって言い出したら聞かないから仕

方ないわよ」

廊下の空気には、魚を焼く匂いが混じっている。今日一日まともに食

事を取っていなかったので、その匂いには否応なく食欲をそそられる。

風呂から上がって部屋に戻れば、おそらく何か食べさせて貰えるだろう

と思い、今は我慢することにしておいた。

「それにしても、見知らぬ人間同士が一緒に大きな風呂に入るってのは

ちょっと驚いたな」

「そうね。そういうの、アルテリアじゃあ考えられないわ」

アルテリア北部の都、氷都はフラヒヤ山脈の麓にある。そこは温泉の
町としても有名で、氷都の住人の大半が温泉宿で働いていると聞く。立
ち並ぶ温泉宿には格の上下こそあるが、共通しているのは「風呂」は必
ず1部屋につき必ず1つ以上あるということだ。公共の浴場というのは、
初めてである。
「夏葉の気持ち、分からないでもないわね。何だか、知らない人の前で
服を脱ぐって、ちょっと抵抗があるわ」
「まあな……」
しかしながら、風呂には入りたい。仕方がないこととは言え、真夏の
この時期に何週間も風呂に入っていないのだ。途中、何度か海水浴で誤
魔化してはいるが、気分的にはそろそろ限界だった。
「クエスト中にお風呂に入れないっていうのは、女の子にとっては

死活
問題よね。いっそのこと、どっかのギルド・マスターに直訴してみよう
かしら」
「……やれるならやってみろよ。あたしは傍観してるぜ」
「言うだけならいくらでも言えるわよ。ただ……」
「言い負かす自信は無いんだろ？」
「……ええ、その通りよ」
ハンターをフィールドに運ぶ船に風呂を付けてくれと言ったところで、
おそらく鼻で笑われるのがオチだろう。四軍将や王族相手なら、ゴリ押
しする自信はある。だが「あの」将兄が相手となると、どんな屁理屈を
考えてもムダだと言う気がしてならなかった。口喧嘩で戦う前から勝て
る気がしない相手というのも、珍しい。
「いいじゃねえか。今日は風呂に入ってベッドで寝れるんだ。クエ

スト

がどうのとか、そういうことはまた今度、考えればいいさ」

「そうね」

レイの言う通りだ。今はガレオン船に風呂を付ける計画を立てても仕

方が無い。そう見切りをつけた時、漆喰で塗り固められた白い壁に、温

泉がある方向を示す案内を見つけた。

「部屋から、けっこう距離があるのね。湯冷めしそうだわ」

自分たちが泊まることになった部屋は、四階だ。そこから階段を降り

て、一階の廊下を随分と長く歩いて来たような気がする。１つの部屋に

１つの風呂が常識だと思っていた光宮たちにしてみれば、湯上がりに自

分の部屋まで結構な距離を歩かされるというのは不思議な感じがする。

「男湯と女湯……？　まあ、当然よね」

「あたしは一緒でも別にいいけどな」

「私は嫌よ」

辿り着いた先にあった温泉への入り口は二か所に分かれており、それぞれに布が吊るされている。赤い色の布には「女湯」の文字があり、青い色の布には「男湯」の文字が書かれていた。

「どんな感じなのかしら」

多少、緊張しながらも、光宮たちは当然のごとく「女湯」と書かれた布の下を潜る。その途端、風呂場に独特の湿気を含んだ空気が頬を掠めて行った。湯に浸かっている時には気にならないし、むしろ心地よいと感じる風呂場の湿気だが、ちゃんと衣服を纏っている時には何だか気持ち悪く感じる。

「光と一緒に風呂に入るのって初めてだな」

「そうね」

入ってすぐに段差があり、それを踏み越える。足の裏に違和感を感じ

て視線を落とせば、そこには薄い黄土色をした植物で編まれた絨毯のよ

うなものが床全体に敷き詰められていた。

（絨毯じゃないわね。これ、何て言うのかしら）

これだけの湿気にも関わらず、足元だけはカラカラしている印象があ

る。もしかしたらこの絨毯に似た敷き物は、床の腐食を防ぐために敷か

れたものではないかと光宮は勝手に推測した。

「このカゴに脱いだ服と着替えを入れとけってことかな？」

「そうなんじゃないの？　だって、みんなそうしてるわ」

入口のすぐ傍には見慣れない植物の茎で編まれたカゴが積み重ねられ

ていた。周囲を見渡せば、そこかしらに脱ぎ捨てられた服が入ったカゴ

が置かれているのだ。状況からして、そうだとしか思えない。

「じゃあ、さっさと入ろうぜ」

「そうね」

カゴをそれぞれ1つずつ手に取り、空いているスペースに適当に置く。

その後で、光宮は腰に結んでいた紐に手をかけた。

（やっぱり、何だか恥ずかしいわ……）

ここは雰囲気からして脱衣所だ。脱衣所には自分とレイ以外、誰もいない。もし他人がいるとしても、それはまず間違いなく同性だろう。しかし、それでも見ず知らずの他人がいると思うと、服を脱いでハダカになることには躊躇いを覚えずにはいられなかった。

「どうしたんだ？　さっさと脱げよ」

「……」

自分の戸惑いなど露知らず、レイはさっさと服を脱いでしまう。形が

いい上に、豊かな胸が目の前に晒されて、さすがにちょっと劣等感が胸
に芽生えた。
（レイみたいに胸が大きくて、腰が細くて、足が長ければ、誰が見てよ
うがさっさと脱いでやるわよ！　そりゃあ、もう！　どうぞ見てくださ
いと言わんばかりにっ！）
おまけにレイは可愛い……いや、むしろ美人だと言った方がしっくり
来る気がする。
（ああ、もう……女神って不公平だわ……）
そんなことを思いながら、光宮はしぶしぶながら盗賊の汗が沁み付い
た臭い着物を肩から落とした。
（レイみたいな人ばっかりだったらどうしよう。さっさと洗うだけ洗っ
て上がろう……）

脱衣所の一角は、格子戸になっている。その向こう側がおそらく風呂
場であることは間違いないだろう。タオルで胸を隠しながら、光宮は風
呂場にいる女たちの体を想像して溜め息をついた。

「いいわね、レイは」

「はあ？　何が？」

「羨ましいわ、そのカラダ……」

「何、言ってんだよ」

２人並んで格子戸を開く。その向こうに広がる光景を目の当たりにし
て、光宮は絶句した。

「……」

風呂場は暗い色をした石で建築されていた。中央には、若旦那から事
前に聞いていた通り、４０人以上が余裕で浸かれそうな大きな風呂があ

り、そこに5人ばかりの「老婆」が浮かんでいる。向かって右手にある
洗い場には、ざっと見たところ２０人以上はいると思われる「老婆」が、
枯れた枝のような肉体を歯ブラシのようなモノで擦り上げていた。
風呂
と洗い場を移動中と思われる「老婆」は3人。それぞれ、手にタオルは
持っているものの、自分の体を隠そうとさえしていない。それはまさし
く、男ならば夢にも見たくないであろう「老婆の」楽園であった。
（緊張すること無かったわね）
例え胸に発育不全の傾向があっても、周囲を埋め尽くすのが老婆であ
れば、全く気にならない。むしろ、若い女であるという理由だけで、ど
うぞ見てくださいという気分になってしまう。
「先に洗おうぜ。お湯を汚したら他の人に悪いし」
「そ、そうねっ！」

レイは周囲にいるのが老婆であっても気にしていない様子だ。本当の意味で自分に自信があれば、周囲の人間など気にしなくて済むのかもしれない。そう思うと、周りが老婆ばかりであることに安心した自分が少しばかり空しくなった。

「勝手に使ってもいいんだよな？」

「いいんじゃないの？　後から文句を言われたら若旦那に頼んで料金を払って貰えば済む話よ」

洗い場には高さ２０センチばかりの小さなイスが置いてある。周囲の老婆たちは皆それに腰かけていたので、自分たちもそれを引き寄せて洗い場の前に座った。正面は石壁で、壁の前には深さ３０センチほどの用水路のようなものがあり、中にはお湯が満ちていた。周りの老婆たちは、

それぞれ傍に置いてある、木でできた洗面器のような物を使って用水路
の中からお湯を掬い、自分の体にかけていた。そこで、自分たちもそれ
を真似してみる。
「久しぶりだわ。あったかいお湯なんて」
冷たい水ばかり被っていると、暖かなお湯が体の上を流れて行く感触
が堪らなく気持ちいい。早く温泉に浸かりたくて、光宮はさっさと体と
髪を洗ってしまうことにした。
「石鹸もちゃんとあるじゃん。初めて見るな、この石鹸。匂いも薄いし」
「ホントね。むしろ、油みたいな臭いがするわ」
用水路の前に、木でできた小さな置物があり、その中にはどす黒いオ
レンジ色の固まりが置いてある。触ってみるとすぐに泡立ったので、石

鹸であることはすぐに分かった。ただ、アルテリアで普通に見ていた石

鹸とは違い、香水の匂いがしない。

「まあ、いいか。無いよりマシよね」

「違いないな」

「そりゃあ、廃油を使って作った石鹸じゃからいね」

何の前触れも無く、隣でシコシコと体を擦っていた老婆がいきなり話

しかけて来て、光宮とレイは同時にビクッとしていた。見ず知らずの他

人と風呂に入っている上に、話しかけられるとは夢にも思っていなかっ

た。

「娘さん、あんたらぁ、ここいらの人間じゃないんじゃろ？　廃油で作

った石鹸は珍しいんじゃないかね？」

「そ、そうですね。やっぱり、分かりますか？」

どことなくニヤニヤしながら、思い切り田舎者だと分かる口調で

話し
かけて来た老婆に、光宮は引きつった笑顔で適当な返事を向ける。
「そりゃあ分かるいね。ラタの人間に髪を降ろしちょるようなモンはお
らんけえ。都会から来たんかね？」
「首都のディーダから、来ました……」
「首都から！？　そりゃあ大変だったじゃろう！　よぉここまで歩いて
来たモンいね。２人だけじゃないんじゃろ？」
「え、ええ……薬屋の、若旦那様のお供です……」
ここは、偶然彼らと出会って成り行きで一緒に来たと言うよりも、お
供だとしていた方が面倒ではないだろうと思い、そう答えた。内心で何
なんだと思った時、レイの隣でお湯をかけていた別の老婆がレイの体を
無遠慮に覗き込んだのが見えた。
「まあ、娘さん！　ええ体しちょるねえ！　ピチピチじゃないかね

！」

今時、ピチピチなんて言葉を使う人がいるのかと思っていたら、目の前に実際いた。

「若い娘さんの肌は綺麗でええねぇ！　ちょっと、おトメちゃん！　見てみぃよ、この肌！　ムチムチしちょるよ！」

レイの方に気を取られていたら、最初に話しかけてきた老婆がいきなり光宮の腕を掴んで揉み始める。しかも、どこからともなく現れた別の老婆がそれに加わった。

「可愛い娘さんじゃねえ。ねえ、おトメちゃん、この子たち薬屋のお供で首都からここまで来たんだって」

「まあ、ホントに？　そりゃあ大変だったんじゃないんかね？　よぉこここまで無事だったモンいね！」

「ちょっと、おトメちゃんにおシンちゃん？　なになに？　その子たち、

首都から来たんだって？」

どこから湧いて出たのか、また新たな老婆がにじり寄って来た。

唖然

とする光宮とレイの視線の先で、興味をひかれたらしく、湯舟に浮かん

でいた老婆たちも、続々とこちらへやって来る。

「……」

老婆たちの無遠慮な行動に、何を言っていいか分からなかった。多少

の嫌味では、恐らく毛ほどにも感じないということは、言われなくても

分かる。それに、年老いた女性に向かって嫌味を言うというのも、気分

的に憚（はばか）られた。

（ハダカのお婆ちゃんたちに囲まれるなんて……）

こんな経験をすることになるとは、人生何があるか分からない。

「まあまあ、大きなオッパイねえ！　今はいいけどねえ、年を取ったら
こうなるんよ～？」
レイの周りにいた老婆の1人が、彼女の豊かな胸を突きながらそんな
嫌味を言っていた。てっきり嫌味を言うだけかと思いきや、その老婆は、
自らの垂れ下がった乳を両手に「持って」ブラブラと揺すって見せる。
「……！！」
レイと2人、愕然として開いた口が塞がらなかった。
「何をしよるんかね、おサエちゃん！　あんたのはまだマシいね！」
背後にいた別の老婆が、乳を揺さぶる老婆をたしなめる。この中にも
常識的な人間がいたのかと思ったのも束の間、その老婆は自分の乳を肩
に「担ぎ上げ」てしまった。
「……！！」

途端、風呂場は光宮とレイを除いて、老婆たちの和やかな笑い声に包
まれる。
「まだまだ！　あたしのを見てごらん！」
どうやら対抗意識を刺激されたらしい別の老婆が、声高に名乗りを上
げた。何をするのかと思いきや、彼女は左の乳を右肩に、右の乳を左肩
に「担ぎ上げ」てしまう。
（人間の胸って、クロスするものだったのね……）
余計な知識を刷り込まれてしまった。知識は多ければ多いほど良いと
秋軍将は言っていた。だが、この時、光宮は世の中には知らない方が幸
せなこともあるのだと学んでいた。
＊
結局、老婆たちの妨害に遭いながらも何とか髪と体を洗い終えて温泉

に浸かれた時には３０分近くも経過してしまっていた。

「なんか……アレだな……」

「何よ」

「生きてれば、絶対にババア……いや、オバサンになるんだろうけどさ、

どういうオバサンになるかで、人間って変わってくるんだろうなって、

ちょっと思った」

温泉は果てしなく心地よい。肩まで暖かなお湯に包まれるのは、本当

に幸せなことだ。

「あたしは、あんなオバサンにはなりたくねえよ」

「同感ね」

重い溜め息を零した時、レイが悪戯な笑みを浮かべながらこちらを振

り向いた。

「あのオバサンたち、中也とかシヴァが見たらどんな顔するだろうな？」

「……男の頭の中では、オバサンと美少女は違う種類の生き物だってこ
とになってるから、大丈夫なんじゃない？　私たちがオッサンと美少年
が別の生き物だと思ってるのと同じよ」

「そうかな」

「そうよ」

当然だと言わんばかりの口調で断言した時、脱衣所へ続く格子戸が開
かれて、１人の女性が入って来た。見たところ、まだ二十代の前半だが、
腕や足に比べて腹が不自然に大きいのが嫌でも目に付く。

（妊婦さん……）

久しぶりに見た。真っ直ぐに洗い場に向かって、新たな獲物が来たと
ばかりに纏わりつく老婆たちを軽くいなしているその女性の姿が、何と
なく印象深かった。

共鳴１３（後書き）

友人Ｘが通っていた大学では、サークルの歓迎会で巨大パフェを食わされるそうです。両手でやっと抱えられるほどのバケツ・サイズの入れ物に、たっぷりの生クリームとフルーツ……。

考えただけで、気分が悪くなります（汗）

いや、自分は甘いものが苦手なもので……。

けれど、それを完食できなければ「ヘタレ」と呼ばれるのだそうです。

ついでに、下宿先の廊下には「ヘタレの部屋、あっち」という案内表示までされるのだとか……。

こわっ！

友人Ｘ曰く、その巨大パフェですが、女の子は意外と完食する子が多かったらしいです。すげえ……と思いました。いや、マジで。

共鳴１４

「何だか妙に疲れた気分なのは、気のせいかしら」

「いや、気のせいじゃねえと思う」

「まさかお婆ちゃんたちに質問責めにされるとは思ってなかったわ。こっちの人間はフレンドリーね」

「フレンドリーって言うのかな……」

温泉がある場所の横には、湯上がりの人間がお茶を飲んでくつろげるように、テーブルとイスのセットが並べられたスペースが確保されている。いわゆる休憩所のようなスペースであるが、そこに並べられた２人掛けの小さなイスとテーブルは５０脚ばかり。そのほとんどは、チョンマゲを結った人で埋まっていた。

「お茶は無料って言うのがいいわよね」

「そうだな。まあ、美味いとは思わねえけど」

光宮が座っている席から見て左手にカウンターのようなものがあり、

そこに立つ１０代の後半かそこらの少女が、土を焼いて作られたコップ

に冷たいお茶を注いで、やって来た客に配っている。無料と書いてあっ

たので、光宮たちもさっそくいただいてみた。湯上がりの水分補給は重

要である。

「なんか、見慣れてくると、そこまでおかしな髪型じゃないって気にな

るわね」

「ああ、チョンマゲ？」

「それもだけど、女の人の、あの髪型」

カウンターで忙しく立ち回っている少女も、やはり髪が左右に張り出

した特徴的な髪型をしている。初めてこの国の、この地方に独特の髪型

を見た時は、田舎でしか流行らない髪型かと思ったものだが、こうして
見ていると悪くないという気がしてしまう。ただ、真似したいかと聞か
れれば、断じて否定する。
「お茶と水は無料だけど、やっぱ酒とかは金がいるんだな」
「ちょっと、レイ。あんた、酒なんて飲む気？　まだ未成年でしょ？」
「飲みたくても金なんて持ってねえよ。第一、ここはファーナじゃねえ
か。アルテリアの法律は通用しねえさ。気にすんな」
　こうした考えが犯罪を増やす。レイの単純な発想に、光宮は溜め息を
落とした。
「そういうことを考える人が多いから、アルテリアは治外法権っていう
のを完全に否定してるのよ」
「ちがいほうけん？　何だ、そりゃ」

「……外国に来たら、外国の法律に従えってことよ、簡単に言うと。そ
んなことより、今は止めてよね。面倒なことは少ないに越したことはな
いんだから」

「分かってるって」

カウンターに大々的に張り出されたメニュー表には、麦酒（ビール）や芋酒など
自分たちにも馴染み深い名前の酒の名も陳列されていたが、中には焼酎
だの梅酒だの、見たことも聞いたこともない酒の名も並んでいた。

「やっぱり外国ね。知らないことばかりだわ」

ついそう零した時、温泉へ続く廊下の向こうに、やたら大きな腹をし
た２０代前半と見える女性の姿を見つけた。

「妊婦さんだわ」

「温泉にいた人？」

「たぶん」

こめかみの辺りを手の平サイズの小さなタオルで押さえながら、上気
した頬を片手で仰いでいるその姿には、見覚えがある。何とはなしに彼
女の姿を目で追っていると、その女性はカウンターで水かお茶が入った
コップを受け取り、こちら側へと歩いて来た。

（空いてないんじゃないかしら）

どうやら座る席を探しているようだが、見渡す限り、空いている席な
ど見当たらない。どうしようか逡巡する必要など無かった。光宮は隣の
テーブルの方に手を伸ばす。

「ここ、誰もいないわよね？　このイス、貰うわよ」

「え、いや、そこは連れが……」

自分たちが座っているテーブルの隣の席は、２人掛けの席にチョンマゲ

姿の男性が1人しか座っていない。空いている方のイスを奪われた男がモ

ンスターでも見るような目つきで何か言っていたような気がしたが、聞こ

えなかったことにしておいた。健康そのものに見える男より、妊婦の方が

優先されるべきだ。

「ねえ、そこの妊婦さん！　こっち、空いてるわよ！」

大きく手を振りながら叫ぶと、その声に驚いたような顔をしながらも、

その女性は笑顔を浮かべつつ、光宮たちの方へと歩み寄って来た。

「どうも、すみません。ご親切にありがとうございます」

開口一番にそう言って深々と頭を下げる女性に、光宮はさっさとイス

を勧めた。妊娠中の女性というのは体を大事にしなければならないもの

だと教えられて来たので、長く立たせておくのが可哀そうだと思ったか

らだ。

「お腹に、赤ちゃんがいるんでしょ？」

「ええ、そうです。もう臨月なので、あと一月もすれば」

「へえ～」

イスを勧めてみたものの、会話が無いのもどうかと思い、光宮はとり

あえず彼女の大きな腹に視線を向けつつ、そんなことを言ってみた。会

話の糸口が欲しかったというのも事実だが、何より妊娠中の女性というものが近くにいないせいで、純粋な興味が湧いたというのが本音だったりする。

「すげえな。こんなに腹が大きかったら大変なんじゃねえの？」

どうやら、妊婦に興味があるのはレイも同じらしい。張り出した腹を

しげしげと眺めながら、そんなことを言っていた。

「そうでもないですよ。いきなり大きくなったわけではないですからね。

だんだん大きくなっていくので、そんなに気になりません」

「そんなモンなんだ」

「ええ、そうですよ」

答えながら、その女性は自らの腹を優しく撫で、柔らかく微笑んだ。

「なんか、不思議ね。お腹の中に子供がいるって……。ねえ、前にどこ

かで聞いたことがあるんだけど、お腹の中に赤ちゃんがいたら、お腹が

動くって、ホントなの？」

「ええ、分かりますよ。触ってみます？　ちょうど今、起きてるみたい

だから」

「え……！？　お腹の中で、子供って寝てるの！？」

「そうですよ。起きてたり、寝てたり」

「へえ～」

それは知らなかった。意外な事実を知った気分で、光宮は言われ

るま

ま手を伸ばし、大きく膨らんだ腹に触れてみた。

「わっ！」

思いがけず、触れた個所が大きく盛り上がり、自分の手を押し返して

来て驚いた。動く、とは聞いていたが、こんなにはっきり分かるとは思

ってもみなかった。

「あたしも！　あたしも触っていいか！？」

「ええ、どうぞ」

光宮の反応に興味をそそられたらしく、レイも手を伸ばして女性の腹

に触れる。そして、自分と同じような反応を返した。

「すっげ～な。こんなに動くモンなんだ」

「そうですね。ひどい時には、お腹の一部が出っ張ってしまったりする

んですよ。初めて見た時は、さすがに驚きました」

自分の腹の一部が出っ張る……。ちょっと想像できなかった。違う人
間が腹の中に入っていて、自分の意志とは関係なく動いているのだから、
そういうこともあるかもしれない、とは思うものの、妊娠した経験など
あるはずもない今の光宮にしてみれば、不思議な気分でいっぱいだった。

「名前とか、もう決めてるの？」

「ええ。旦那と、そのご両親が“市松”と」

「へえ、そうなの」

この国の風習には詳しくないので、その名前が良いか悪いかなど分か
らない。余計なことを言って彼女を不快にさせるのもどうかと思い、敢
えて名前については何も言わなかった。

「元気に生まれて来るといいわね」

「はい。ありがとうございます」

心の底から幸せそうに、女性は笑う。腹の中に子供がいると、こんな
笑い方ができるものなのかと、その時、光宮は思った。
「ところで、あの……」
「なに？」
「あなた方は、余所から来られた方ですよね？」
どこか遠慮がちに口にされた質問に、光宮は敢えて笑顔で頷いた。自
分たちは「ここではない別の地域」のことを「余所」とはあまり言わな
い。しかし、この地域ではそういう言い方をするのだろうと、勝手に推
測した。
「そうよ。やっぱり髪型のせいかしら。誰が見ても分かるのね」
「そう、ですね。髪を下ろされている方は、この辺りではとても珍しい
ですから」
そう言えば、最初に出会った盗賊たちは、この辺りで髪を下ろし

てい

る人間はみな罪人だと言っていた。もしかしたら、この女性の頭の中に

も、そんな事実があったのかもしれない。

「私たち、首都のディーダから来たのよ。ラタ地方じゃあ、髪を下ろし

ている人は罪人なんだって聞いて驚いたわ。首都じゃ、そんな髪型をし

ている人の方が珍しいわよ」

自分たちは罪人では無い、という意味合いを含ませて、そう言ってみ

た。その途端、女性の顔に微かに浮かんでいた懸念の色が消える。やは

り疑っていたようだ。

「そうなんですか。私は、生まれも育ちもラタなので、他の地方のこと

はさっぱりなんです」

「そうなの。こういうことを聞くのはどうかと思うんだけど、他の地方

のこととか、外国のこととかに興味は無いの？　首都の流行とか、気に
ならない？」
「そうですねえ……」
自分が生まれ育った地域のことしか知らないというのは自分からして
みれば考えられなかった。一国の王女という立場からしても、そういっ
たことは知らないでは済まされない問題だ。ましてや、目の前にいる女
性は、知らないことに満足しているような雰囲気さえある。
「街の人からすれば、時代遅れな話に聞こえるかもしれませんが……こ
の辺りはやはり田舎ですから。昔ながらの習わしというものが未だに大
事にされているんですよ」
「昔ながらの習わし？　その髪型のこと？」
つい目に付きやすい特徴を挙げてみると、女性は困ったように笑

う。

「確かに、それもあります。でも、女は嫁に行くまで家を出ないもの。外のことを知るより、炊事や洗濯、縫物や掃除など、家のことを覚えるべき、と言うのが、私が育った町では当たり前なんですよ」

「……」

女性が「当たり前」だと言う、その事実が全く理解できなかった。そもそも「家を出ないこと」という意味がよく分からない。その言葉を聞いて自分の頭の中に思い浮かぶのは「監禁」という2文字だ。ついでに、嫁に「行く」とはどういうことだろう。花嫁、という言葉は自分の国にもある。だから嫁に「なる」なら分からないでもない。

「……田舎って、不思議なところだわ」

「そうですか？」

「ええ、とっても。まるで外国よ」

実際は「外国」なのだが、ここは敢えてその言葉を使ってみた。話し

ている言葉と文字が同じであることが、いっそ不思議なほどだ。言葉は

分かっても、その意味がまるで分からない。国が違えば、こんなに常識

が違ってくるものなのか、と今更のように思った。

「首都から、どうしてわざわざラタへ？　長い旅でしょう？」

「薬屋の若旦那のお供よ。全国……行脚の真っ最中なの」

一瞬「全国行脚」という単語が出て来なくて、視線が宙を泳いだ。幸

いなことに、女性はそういった細かいことは気にしていないようで助か

った。

「全国行脚。そうなんですか……。薬屋……」

「ええ。それがどうかした？」

「良かったら、その若旦那様にお会いできないでしょうか」

女性の口から出た言葉に、光宮とレイは顔を見合わせる。この女性を
若旦那に紹介することは問題ないだろう。お人好しが服を着て歩いてい
るような、あの若旦那のことだ。喜んで相談に乗るのではないかとい
う
気さえする。
「別にいいけど、何かあるの？」
「実は、お義母さんの腰が悪くて……。良い薬が無いものかと思ってい
たんです」
「そうなの？　なら、ちょうどいいじゃない」
「はい、本当に。良かった。わざわざラタに来た甲斐がありました」
口元を綻ばせて笑う女性の言葉に、光宮は僅かに眉を寄せた。
「わざわざラタまで来たって、あなたも旅の人なの？」
「ええ、そうです。私の嫁ぎ先は、ラタの役場町（やくばまち）でモンスターの素材屋

を営んでおりまして。本当は日暮れまでには戻ろうと思っていたんです
けど、このお腹なので……。休み休み歩いていたら、関所が閉まってし
まったんです」

「モンスターの素材屋……」

「ええ、それが何か？」

お腹が大きい妊婦を使いに出す、というのもどうかと思ったが、何よ
り興味を引かれたのは、モンスターの素材屋という、その商売の名前だ
った。

「モンスターの素材屋って、何を売ってるの？」

「そうですね……正確には素材屋という言い方は正しくない気がします。
職人が手を加えて簪（かんざし）にしたウロコを売っている店、飛竜の爪を研（と）いで鋤（すき）
や鍬（くわ）、鎌（かま）などの農機具を作って売っている店、牙獣種の内臓で袋を

作って売っている店……いろいろあります。モンスターの素材から作っ
たものを扱っている店を、まとめて素材屋と言うんです。うちは、簪を
作っている店です」

「へえ～」

言いながら、女性は髪に差していた飾りを取って、光宮とレイに見せ
てくれた。深い緑色の光沢があるウロコは、銀細工に嵌めこまれ、幾重
にも折り重なった小さな銀の造花と一緒に、燃え盛る木炭の明かりを受
けてキラキラと輝いている。

「綺麗ね」

髪飾りのことを簪と言うのか、とこちらの地方に独特の単語の名前を
覚えながら、光宮はお世辞でも何でも無い率直な感想を口にする。

「職人の技、ですよ。モンスターのウロコはとても固いので、手を加え

るのはなかなか難しいんです。それに、銀を思い通りの形にするのも、かなりの修行が必要ですしね」

「へえ」

確かに、小さな銀の造花をひとつひとつ作ると考えただけでも気が遠くなりそうだ。ざっと見ただけで、１００個はあるのではないかと思われる。たったひとつの商品にこれだけの手間がかかるのだとしたら、それはもう、とんでもなく根気がいる作業であることには違いない。ついでに、その幾百という銀の花は、よくよく見ればひとつひとつの花弁に露のようなものが乗せられ、内側の雄蕊（おしべ）と雌蕊（めしべ）には花粉らしきものまでちゃんと作られている。

「純粋な興味なんだけど、ウロコはどうやって加工……手を加えるの？

だって、そのままだと痛んじゃうでしょ？」

「我が家の秘伝の薬を上から塗るんですよ。その後、一月ほど天日に晒して、完全に馴染んだ後、簪の形に削ったり、掘り込みを入れたりします。掘り込みが入ったものも綺麗ですよ」

「そうなの」

秘伝の薬、と言うからには、その中身はおそらく教えて貰えないだろうと思い、最初から聞くのは止めておくことにした。

（アルテリアではモンスターの素材はいろんなところに垂れ流されて国の管理が行き届いてないけど、こっちではちゃんとした商売になってるのね）

モンスターの素材を扱う店があるということは、モンスターを倒すことを生業にしているハンターもいるだろう。ハンターが必要とする

モン

スターの素材は、その巨大な体のほんの一部分に過ぎない。余った死体

を有効活用しようとする者がいても、何の不思議もない話だ。

「興味あるわ。ぜひ、あなたの店を見てみたくなった」

「まあ、嬉しいわ」

率直に言うと、隣に座っているレイが何とも言えない顔をする。

「いいのかよ」

「大丈夫よ。どうせ、長い旅になることは目に見えてるし、ちょっとく

らい寄り道したからって、大して変わらないわ」

「……まあ、そうだけどな」

他国の文化には興味を引かれてやまない。もともと先が見えない旅な

のだ。状況を楽しむくらいの余裕があった方がいい。

「じゃあ、さっそく若旦那に紹介するわ。あ、その前に名前を聞いても

いいかしら。私は光よ。こっちはレイ。あなたは？」

「私は美代（みよ）と申します。どうぞよろしくお願いします」

互いの名前を確認したところで、光宮たちは席を立ち、若旦那とその

お供が待つ部屋へと歩き出した。

共鳴１４（後書き）

夢の中でランボルギーニに乗っていました。

……フトンの中で見る夢の中では、どんなビンボー人でもランボルギーニに乗れるのですよ（笑）

で、調子良く高速道路を時速２００キロ前後で走っていた時、後ろからサイレンが聞こえて来ました。

バック・ミラーを見ると、そこには「原付」に乗ったケーサツが……！

逃げました。とにかく逃げました。

でも、原付に乗った警察がどこまでも追いかけて来るんですよ……。

時速２００キロですよ？

しかも、警察官１００人くらいいるんですよね……（汗）

起きた時、全身が汗だくでした。

いやぁ、怖かった～（笑）

共鳴15

（ちゃんとした宿屋じゃねえか。ちょっと意外……）

周囲が宵闇に包まれて随分と長い時間が経った。中也たちを乗せた馬車が足を止めたのは、見渡す限り宿屋の看板を出した店が軒を連ねる、村とも町とも言い難い場所だった。民家と思しき建物は無く、あるのは宿屋ばかりで、山と荒れ地の間にそこだけ風景から切り取ったように存在していている。

（ソルト村は、あの山を越えたところにあるって言ってたな、確か）

下弦の月が浮かぶ東の山を見上げると、それはまるでこの世の闇を凝縮して固めたような気難しい顔をして、ひっそりと、しかしどことなく重苦しい雰囲気を醸し出しながら、そこに佇んでいる。

（あの山の向こうに、ベルキュンがいるのか）

そして、山の麓にあるソルト村の住人は、そのモンスターの襲撃に怯え
ながら日々を過ごしている……。

「……」

モンスターの襲撃を受けるということが、どういうことなのか知らない
わけではない。戦ったことは無いが、あの将兄が飼っている銀レウスを近
くに何度も見て来たのだ。あんなものが本気で襲って来たとしたら、人間
の村など跡形も無く消し飛ぶことくらい考えなくても分かる。

（家が無くなれば、安心して眠れなくなる。田んぼや畑が焼かれれば、収
穫が台無しになって食べるものが無くなる。襲撃に巻き込まれて、知り合
いや家族が死ぬのは、耐えられない。だから、モンスターは討伐しなきゃ
いけないんだ）

分からない話ではない。大半の人間にとっては、知り合いを亡くすこと、
そして住む場所を奪われることほど辛いことはないのだ。
（分かってるよ。でも……）
見ず知らずの他人を助けるような義理など、今の自分にはない。あるはずもない。それに何より、この国の人間たちは自分たちに途方も無く冷たかった。友人、家族、恩義のある人間、知り合い……そういった人たちがモンスターの襲撃を受けて困っているというのならばいざ知らず、敵意しか向けて来なかった人間を助ける理由など自分は持ち合わせていないのだ。
（知らねえよ。俺には関係ない……）
それに、今は自分たちの命の方が大切だ。上位クラス以上のモンスター
の前に曝け出されて、みすみす殺されて来いと言わんばかりのこの扱い。

自分の命がまず危ういのだ。会ったこともない人間の命まで気にしてやる
筋合いはない。
「……」
モンスターの襲撃を受けている村のことなど知ったことじゃない。
そう
思うものの、何となく心に重く圧し掛かるものはある。
（もし俺が……そのベルキュンとか言うモンスターを倒せたら……）
村人はモンスターの脅威から救われる。途方も無く単純な話だ。
モンス
ターに怯えながら生きている村人たちは、二度と知人や住む場所、
田畑を
失うことなど無くなる。
（それに、ベルキュンはギルドに連れて来られたワケじゃない）
ソルト村の近くに住み着いて、他のモンスターを狩るより遥かに
食料と
して簡単に捕えられる人間を襲っている。こちら側の都合で殺さな
ければ

ならないわけではない。

（できるかもしれないんだ）

下位クラスとは言え、自分たちはイャンクックを討伐したこともある。

それに武器と防具も無しにモンスターが徘徊する樹海を生き延びたことだ

ってあるのだ。ベルキュロスという名のモンスターを討伐できる可能性は

決してゼロではないはずだ。

（今は、考えない）

心に浮かんだどうしようもない考えを、中也は軽く頭を振って追い払う。

（まずは、自分の命が優先だ）

無意識に、拳を強く握りしめる。手の平に食い込んだ自分の爪が、少し

痛いと感じた。

「難しい顔してどうしたんだよ、中也。ほら、入るよ」

いきなり肩を叩かれて、中也はハッとして顔を上げる。そこには、

呆れ
たような顔をして自分を覗きこんでいるルナの姿があった。
「何でもない。悪い」
「だったらいいけど」
背中を押される。足が、勝手に前に出た。
（ベルキュンとかソルト村の人たちとか、どうでもいい。まずは自分の命
を守らないと……）
複雑な気持ちを抱いたまま、中也は見たまま宿屋の顔をしている木造の
建物の中に、足を踏み入れた。
＊
中也たちが泊まった宿屋は、格で言うなら下の上と言ったところだった。
畳は毛羽立っていないし、温泉という名の公共浴場も、綺麗に掃除されて
いる。具はあまり入っていなかったが、夕食には雑炊も出た。それに、宿

屋の従業員が、きちんと日干しされた布団を敷いてくれる。内情はどうあ
れ、自分たちの外面はこの国のハンターということになっているようで、
それなりの扱いはして貰えるようである。
（布団で寝れるなんて、何年ぶりだろうな……）
アルテリアの一般的な寝具はベッドだし、帰ろうと思って帰れない故国
にいたころにもベッドを使っていた。最後に畳の上に敷かれた布団で寝た
のは、まだ小学生だったころに泊まった祖母の家だ。
（まあ、そんなことはどうでもいい）
今現在、簡素な6畳の客室にいるのは自分を含めて3人。シヴァとルナ
は、まだ見たこともないベルキュロスというモンスターについてあれこれ
と楽しそうに憶測を並べていた。ベアルドは、１０分ほど前に部屋を出た

きり、まだ戻って来ていない。

（やるなら、今しかない）

そう思って、中也は立ち上がった。

「中也、どっか行くの～か？」

「トイレ」

「あっそうか～い」

相変わらず緊張感もカケラもない様子で和やかに雑談しているシヴァとルナにウソをつき、中也は1人、部屋を出た。

（俺たちを殺すつもりなのか聞く。その後どうするかは、相手の返答次第だ）

心は決まっている。殺すつもりだと答えた時は、戦うだけだ。巨大なモンスターと戦った経験がある自分からしてみれば、人間相手に恐怖は感じない。

（正当防衛だ……！）

そんなことを思いながら、中也は暗い照明の廊下を歩き、階段を降りた。

足を止めないまま、軽食屋や受付、湯上がりの客のための休憩所などが立

ち並ぶ一階を通り過ぎ、靴を履いて外に出る。

（チョンマゲを結ってないからかな。やたら注目される）

その場にいた誰もが、自分に一度は視線を向けていた。すぐに興味を無

くして知人との雑談を再開する者もいたが、中にはあからさまに嫌悪感の

ある表情で見つめて来る者もいた。

（外国人ってのは、何だってこんなに嫌われるんだ？）

生まれた国が違うということは、そこまで嫌悪の対象にはならないはず

だ。自分の感覚ではそう思うのだが、どうやらこちらの国の人間はそんな

風には考えないらしい。

（面倒な国だな、ファーナってのは）

内心で舌打ちしながら、中也は足早に馬車の荷車が停めてある宿屋の裏手へ向かった。

（何でこんなことになったんだか……）

夜風が涼しい。明かりが零れ出る窓の向こうからは、酒に酔った客の喧騒が絶え間なく聞こえて来ていた。虫の声が無い静かな夜。壁1枚を隔てた先にある場所では、楽しそうに笑っている人がいる。それを、全く関係ない場所から、ただ聞いている自分。まるで、夜の中にただ1人、取り残されたような気持ちになった。

（あれ？）

理由の無い孤独感に似た感情を胸に抱きながらも足を進めていた時、ふいに中也の視界に映り込んだ人影があった。

（ベアルド？　何してんだ？）

丸い小石が敷き詰められた庭の先に、井戸だとしか思えないものがある。

三角形の屋根の下に、丸く石を組んで作られた井戸。その傍に、クマのよ

うな大男が1人、立っている。どこからどう見てもベアルドだ。

（井戸を使ってんのか？　何で？）

中也が見ていることに気付いていないらしく、ベアルドは慣れた手つき

で井戸の滑車を回す。そして、上半身だけ脱いだ体に組み上げた水をかけ

ていた。それを何度か繰り返し、顔に手をかける。

（あのキツネの仮面……）

井戸の横にベアルドが置いたのは、あの無気味な仮面だった。そして、

今度は頭から水をかぶる。

（何やってんだよ、あの人。もしかして禊（みそぎ）とか言うヤツか？　有り得ない

話じゃないけど……）

この国の風習は、かつて自分がいた国に似ている。だとしたら、クエス

トに出る前に冷たい水で体を清めるという習慣があっても不思議ではない。

（困ったな）

ここを通らなければ、馬車が置いてある物置には行けない。ベアルドが

まさかこんなところにいたとは、中也にとって思わぬ誤算だった。

「あ……」

ほんの少し逡巡した後、中也はひとつの事実に思い至る。

（あの人、今は丸腰じゃねえか）

見ての通り、ベアルドは防具を纏っていないし、ついでに武器らしきも

のも何一つ手にしていない。自分は、武器を手にしていない相手に武器を

向けようとした。

（サイテーだ……）

それはとんでもない卑怯者がすることに他ならない。相手を自分よりも
劣勢に置かなければ強気に出れない人間というものは、どんな創作物にお
いても小悪党として描かれる。
（俺は、そんな人間にはなりたくない）
状況は最悪だ。だが、だからと言って人間としてのプライドを捨てても
いいという理由にはならない。
「……」
思い直して、中也はそのままベアルドの方へと歩みを進めることにした。
「なあ、ベアルドさん」
顔を洗っていたベアルドに声をかけると、彼が弾かれたように振り返る。
窓から洩れる光の下に露わになったその素顔を見て、中也は少しばかり驚
いた。

「何か用か」

ベアルドの顔は、その半分が「崩れて」いた。光に照らされたその皮膚は無残に焼け爛れ、ドス黒い紫色に変色している。ついでに、冷えた皮膚がおかしな繋がり方をしたらしく、頬のあたりは不自然な盛り上がり方をしていた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだよ。いいか？」

「何だ」

ベアルドがずっとキツネの仮面を被っていた理由はコレか、と思った。

ケロイド状になった皮膚は、確かに知らない人間が見たらさぞかし恐ろしい顔に映るだろう。

「本当のことを答えて欲しいんだ。いろいろ考えた。もしかしたら、俺たちは役所の人間の都合で、ただ捨て駒にされるためにクエストに出

ること

になったんじゃないかと思ったりする。そして、あんたは俺たちを殺すた

めに一緒に来たんじゃないかって……思ってる。どうなんだ？」

思っていたことをそのまま口にすると、ベアルドからは沈黙という答え

が返って来た。無言のまま、彼は手ぬぐいで濡れた顔をただ拭いていた。

「……外国人という理由で理不尽な扱いを受けているお前たちの立場には

同情する」

「何だよ、それ」

答えになっていない。それに、同情されたからと言って嬉しくなどない。

差別する側の人間に、差別される側の気持ちは分からない。だから、いつ

までたっても差別というものは無くならないのだ。

「……この地方では外国人は珍しい。珍しいものが来ると、それは災いの

前兆だと解釈される。田舎の人間は迷信深いんだ」

「それは理解できないでもない。俺の質問に答えろよ。あんたは俺たちを
殺すためにここにいるのか？」

「結論から言うと、違う」

「本当か？」

信じられないという思いを込めてベアルドを睨むが、彼の瞳は真っ直ぐ
に自分に据えられたまま、揺るぎがない。直感だが、ウソを言っている目
には見えなかった。

「本当だ。信じろとは言わない。だが、事実は事実だと言っておく」

「だったら、何であんたは付いて来てるんだ？」

「依頼を受けたからだ」

ベアルドから返って来た答えは、当たり前すぎるものだった。当たり前
すぎて、むしろ拍子抜けしてしまう。

「……あんたに依頼を仲介したのは、誰だ？」

「もちろんギルドだ」

「そうかよ」

ベアルドと話をして、余計に分からなくなった。役所の人間がなぜ外国

人の自分たちにベルキュロス討伐の依頼を任せたのか、分かったと思った

はずのことが再び混沌に帰ってしまう。

「……聞きたいことはそれだけか？」

「ああ、それだけだ」

他に何を聞いて言いか分からず、中也は短くそう言った。自分の答えを

聞き、ベアルドは元通り、キツネの仮面を顔につける。そして、宿屋の方

へと歩み去ってしまった。

「何なんだよ、いったい……」

共鳴１５（後書き）

珍しく「マトモな」あとがきです（笑）

「なろう」にてＲ指定作品の扱いが厳しくなったことは、大半の方がご存じのことだと思われます。

知り合いになった他の先生方の中には、Ｒ指定を受けて作品を削除したという方もいらっしゃいます。

「妖乱舞」に関しましては、特に変更するつもりはありません。このまま、年齢制限ナシで更新を続けていきたいと考えております。

どこまでがＲ１５で、どこからがＲ１８なのか、人によって基準が違うため、判断は非常に難しいと思われます。年齢制限を付けていない作品についても、同様です。

作者側としては「愛情表現」として書いたつもりでも、読者様から見れば「性表現」だと受け取られるというパターンもあると思われます。作者側の思いや考えを読んでくださる方にうまく伝えられないのは、作者側の実力不足以外のなにものでもないため、作者側から「愛情表現だ」と言い訳するのもどうかと思われます。

そこで、作者としては「週刊少年ジャンプ」に連載されている作品を年齢制限に関する一種の目安にしたいと考えております。ジャンプは、小学校の低学年の方も対象年齢に含んでいる大手雑誌ですので、目安の参考にするには間違いではないと思ったからです。

作者は自分の作品に関してのみ、「性別、年齢などの条件を一切選

ばない、誰でも気軽に楽しんでいただける作品」を目標としています。そのため、年齢制限を付けなければならない作品は書きたくないというのが本音です。

難しい問題ではありますが、今回のR指定作品に関して問題視されたことに対する自分なりの考えです。

ジャンプ誌面に掲載されている表現以上のことは書かないつもりですが、作中の登場人物同士の恋愛感情、それに伴う何かしらの性表現等は、物語の進行上、必要と判断した場合、それなりの表現はするつもりです。

作者側の勝手な判断ではありますが、読者様のご理解をいただけたら幸いに存じます。

これからも「妖乱舞」を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

共鳴16

「おはよ～、中也～」

和紙を張られた窓の向こう側から、スズメの鳴き声が聞こえてくる。

畳の部屋に差しこんでくる朝の光は穏やかで、柔らかな色合いを持って

中也たちを照らし出していた。

「おはよ、ルナ」

布団の上で胡坐をかきつつ、未だ覚醒しきれていない脳を揺り起こす

ように、軽く頭を振る。何だか妙に良く寝てしまった。夕べ布団に入る

時はそれなりに緊張感があったのに、朝起きてみればこの有り様だ。

（ベアルドさんが俺たちを殺すつもりじゃないって断言したからかな。

俺って単純……）

そんなことを思いつつ、中也は隣の布団に視線を移す。そこでは、シ

ヴァが心地よさそうに寝息を立てていた。

（こいつ……意外と寝相とかいいんだよな……）

起きている時にはとても考えられないが、シヴァは昔から寝相がいい。

就寝して翌朝に目覚めるまで、ほとんど動かない。言い方を変えれば、

死んだように眠る。

（黙ってれば、フェンリルさんに似てるよな。まあ、兄弟なんだから当

然か）

あまりにも安らかな寝顔を見せつけられているせいで、起こすのが忍

びないという気持ちに襲われてしまう。しかし、ここで起こさなければ

朝食にありつけない。睡眠か朝食か。どちらかひとつを選べと言われれ

ば、まず間違いなくシヴァは朝食を選ぶはずだ。

「おい、シヴァ。起きろよ」

後で文句を言われては堪らない。そう思って、中也はシヴァの肩を揺
すった。
「んあ～？」
起き抜けの彼の顔は、誰がどう見てもマヌケの一言に尽きる。いつもの
シヴァの顔にホッとしつつ、中也は時計を指差した。
「メシの時間が過ぎるぞ。８時までに飯屋に入らないと、食いっぱぐれる
って言われたろ？」
「おう。了解だ～ぞ。起きる、起きる。起きる～ぞ」
同じ言葉を何度も繰り返し言いながら、シヴァはゴソゴソと布団から這
い出して来て、大きく伸びをすると同時にアクビをする。
（起きてる時は、フェンリルさんとは似ても似つかねえな、やっぱ……）
そんなシヴァの姿に内心でそんな感想を抱きつつ、中也は傍に用意して

おいた普段着に手を伸ばした。

「ルナ、先に着替えろよ。俺ら、廊下に出てるから」

「別にいいよ。そんな細かいこと気にしなくても」

「いや、でも……なあ？」

微妙な顔で横のシヴァと顔を見合わせた瞬間、何の前触れも無くルナが

後ろを向いて、着ていた浴衣を肩から落とした。

「……！」

朝日に晒される綺麗な背中を至近距離で目の当たりにして、完全に覚醒

しきれていなかった脳に急激に血液が巡った。

「ルナ～。朝から目の毒だ～ぞ」

シヴァが率直な意見を口にした途端、ルナが胸を押さえつつこちらを振り

向いてくれた。

「ちょっ……！　ヤベーって！」

反射的に手の平で目元を覆ったものの、本能の成せるワザと言うべきか、
指の隙間からその巨乳をしっかり見てしまう自分がいる。
「さっさと脱ぎなよ。私だけ見せるのはナシでしょ？」
「……そ、そういう問題じゃない気がする～ぞ」
動揺を隠せず、互いに顔を合わせて苦い顔をする中也とシヴァであったが、
そんな2人には全く頓着しないらしいルナは、胸を晒したまま彼らの方へと
歩み寄って来る。
「ほら、脱いだ、脱いだ！　それとも、脱がせてあげようか？」
「……え、遠慮しとく」
「あっそう。ざ～んねん」
無邪気とも言える笑顔で言った後、ルナは再びクルリと後ろを向き、床に
置いていた普段着を身につけ始めた。その様子に、中也は重い溜め息を落と
してしまう。

（レイもそうだったけど、ルナもけっこう大胆だよな……）

真っ白な下着に包まれた形のいい尻を横目に見つつ、中也は一応、ルナの

方に背を向けて、浴衣の帯に手をかけた。

（あんだけスタイルが良かったら、むしろ見せびらかしてナンボって感じに

なるんかな……）

きっとそうに違いない。レイとルナは、他人に隠さなければならないよう

な欠点を持ち合わせていないから、男の前でも平気で服が脱げるのだろう。

勝手に、そう納得することにした。

「そう言えばベアルドのオッサン、どこ行った～んだ？　夕べも俺らが寝る

時、まだ帰って来てなかった～よな？」

「知らねえよ」

普段着に袖を通しつつ、中也は夕べのベアルドとの会話を思い出す。

（あの人、俺たちを殺すつもりは無いって言った）

ウソを言っているようには見えなかった。だとしたら、本当にギルドか
らベルキュロス討伐の依頼を仲介され、自分たちと一緒に来ただけなのか
もしれない。だが、そう言われても納得できかねるものはある。

（……外国人の俺らをクエストに出すんだ。こっちの国の常識とかルール
とか知らないのは、向こうにも分かっていたはず。何の説明も無く、ただ
ベルキュロス討伐に出ろって言われたはずはない）

一緒にクエストへ出るメンバーは外国人だから、フォローしてやれと言
われただけならば問題ない。アルテリアのハンターズ・ギルドに関して、
何かしらの情報収集でもして来いと言われたのか。それとも、もっと他の
何かがあるのか……。

（分かんねえな。ベアルドさんの心の中が読めれば簡単なのに）

そう思った時のことだ。廊下と客室を隔てていた障子が何の前触れも無
くガラリと開き、１本の日本刀を手に携えたベアルドが姿を現した。

「おう、おはよ～、オッサン。どこ行ってた～んだ？」

「野暮用だ」

能天気な声で朝の挨拶をするシヴァに簡単な返答を向けた後、ベアルド
は大股に部屋を横切って中也の方へとやって来た。

「好きな女はいるか？」

「は？」

キツネの仮面の下から聞こえて来た意外過ぎる質問に、中也は思わず目
を丸くした。シヴァとルナも同様である。３人揃って、大柄なベアルドを
奇異の眼差しで見つめる。

「好きな女、胡蝶。あるいは男でも何でもいい。そいつの顔を思い浮かべ

ろ」

「へ？」

「それがコツだ」

自分に関しては、好きになる対象に男は含まれない、と言おうとしたの

も束の間、ベアルドが手にしていた日本刀が、強く目の前に押し付けられ

る。

「な、何だよ？」

無言の圧力がかけられる。受け取るべきなのか迷っていると、ベアルド

は更に強く日本刀を押し付けてくる。それも、鞘の部分ではなく柄の部分

を、である。

「……」

何の説明もされないまま、ただ武器を押し付けられることに戸惑いを覚

えつつも、ノーとは言わせないベアルドの雰囲気に押され、突き付けられ
た日本刀の柄を手に取った。

「なっ！？」

その瞬間、ベアルドが鞘を勢いよく抜き放つ。抜き身の刀を手にした中
也の身は、通常では有り得ない高温の炎に包まれて行った……。

＊

「お、おい、オッサン！　あんた、何してんだ～よ！？」

ベアルドの唐突な言動に唖然としていたシヴァの目の前で、いきなりベ
アルドは中也に小さな太刀を持たせ、その鞘を抜き放った。その途端、中
也の体が炎に包まれて行った。ベアルドが中也に持たせた小さな太刀が、
モンスターの素材で作られたものであったことは、いくら自分でもはっき
り分かる。

「殺す気か～よ！？」

人間がモンスターの素材で作られた武器を使おうと思う時、先に属性が
正反対の防具を付けなければ、その属性に負けて死ぬ。周知の事実だ。

「中也！！」

小さな太刀を握りしめたまま、畳の上に膝をつく中也。それを見て、慌
てて中也の傍へ駆け寄ろうとした時、ベアルドに肩を掴まれ引き止められ
た。

「何すんだ～よ、オッサン！　中也が死んじま～うぞ！！」

「……他に手っ取り早い方法が思いつかなかった」

「はあ！？　あんた、何言ってんだ～よ！？　放せ～って！！」

ベアルドの腕を振り払おうとしたが、より強い力で掴まれて顔を顰める。

見た目通り、ベアルドという男はけっこうな怪力の持ち主であるらしい。

（くそっ！）

内心で毒づいた時、自分の代わりにルナが中也の方へ駆け寄るのが見えた。それを見て、ベアルドが自分からルナへと視線を移す。

「触るな。助けるな。他人が手を貸せば意味が無い」

ベアルドは怒鳴ったわけではない。しかし、その声音にはどこか他人を威圧するような雰囲気が含まれていて、さすがのルナも中也に触れる寸前で手を止めた。

「……どういうことだ～よ。説明しろ～よ」

自分の肩を掴むその手を振り落としながら言えば、キツネの仮面の奥に隠された眼差しがひたと据えられた。

「お前たちが今のままベルキュロスと戦えば、まず間違いなく殺される」

「……戦ってもいねえうちから分かんのか～よ」

「分かる」

何の迷いもなく、断言してくれた。腹が立った。自分の実力など知らな
いくせに、と思うと、胸の奥がチリチリと焼けつくような怒りを訴え始め
る。このヤロー、という思いを込めて強く睨むが、ベアルドの態度はまる
で変わらず、そのまま何でもないことのように言葉を続けた。
「1年、あるいは2年の訓練を重ねて臨むべき相手だ。ハンター訓練生が
いきなり相手にできるようなモンスターではない」
「やってみなきゃ分かんねえだ～ろ。俺らのことナメてっと、痛いメみる
～ぜ、オッサン」
「そのつもりはない」
「だったら何だってんだ～よ」
イライラする。端的な言葉ばかりで、中也にいきなり防具なしで武器を
持たせた理由の説明になっていない。

「手っ取り早く実力を上げるには、モンスターの素材で作られた武器を素
手で持つことが最も効果的だ」

「はあ？」

「知らないのか？　武器と防具には錬金術により、モンスターの魂が封印
されている」

「そんなことは知ってる～さ」

それがいったい何だ、と無言で先を促す。ベアルドの態度は相変わらず
素っ気ない。ただ、仮面の奥にある瞳は真っ直ぐに自分に注がれていた。

初めて会った日もそうだったが、ベアルドは今まで一度たりとも自分たち
をまともに見ようとしなかったのだ。それが、どういうわけか今日になっ
て気が変わったらしい。

「素手で武器を持てば、その武器に封じられているモンスターの魂

が襲い
かかる。それに打ち勝つには、モンスターとの擬似的な戦闘をこなさなけ
ればならない。イチかバチかの賭けであることには違いないが、刀に封じ
られているモンスターに勝てれば、実力を上げることができる。訓練所で
数年間の訓練課程をこなすよりは手っ取り早い」

「意味が分かんねえ～ぞ」

「やれば分かる」

つまり、中也の次は自分ということらしい。

「負けたら中也が死ぬじゃねえか～よ」

「危なくなったら助ける」

「そうか～よ……」

そう言うベアルドの懐には、片手剣と思しき武器が仕舞われていた。

（先に説明しろってんだ～よ）

焦った。とりあえず焦った。だが、ベアルドには少なくとも中也を殺
すつもりが無さそうだということは分かった。肩の力を抜きつつ、シヴ
ァは改めて中也の方へ視線を注いだ。

「苦しそうだ～な……。大丈夫～か？」

「さあな」

「さあなって……オッサン……」

「強ければ勝つ。弱ければ負ける。それだけだ」

畳の上に膝を付いている中也から、時折、苦しげな呻き声が漏れ聞こ
えている。炎に包まれた幼馴染を何とも言えない気持ちで見つめながら、
シヴァは背を壁に預けた。

「がんば～れ、中也」

手を貸せば意味がないと言われれば、下手に飛び出して行くわけにも
いかない。いたたまれない思いを抱きつつ、その姿を見つめるシヴ

ァの
目の前で、中也が太刀を放り投げようともがき始める。だが、どうした
ことか、太刀はまるで中也の手に吸いついてしまったように離れようと
しなかった。
（勝つか負けるか……ってこと～か？　途中で離そうと思っても離れね
えんだ～な。恐ろしいモンだ～ぜ）
そう思った時、横にベアルドがやって来て自分と同じように壁に背を
預けた。
「柄にはネンチャク草の成分が塗ってある。剥そうと思ってそう簡単に
剥がれるものじゃない」
「……そういうトコ、細けえんだ～な、オッサン」
「当然だ」
「当然なのか～よ」

ベアルドの意外な一面を見た気がした。

共鳴１６（後書き）

いつも通りのあとがきっす（汗）

自分は風呂が好きです。いえ、決して綺麗好きではないのですが…
…湯船に浸かってぼけ～っとしている時が人生で2番目に幸せです。

1番は何か？　もちろん妄想してる時っす。

で、入浴剤なんかも大好きなもんで、ついつい買いだめしたりします。

イイ匂いがする入浴剤なんかに当たると、非常にニャハハンな気分になります……が！

昨日、世に熟女と言われる方々が愛用しそうな香水の匂いがプンプン漂う入浴剤に当たってしまいました（汗）

いや、別に熟女を否定するワケではないのですが……あまりにもキツイ匂いでして……ハイ……息をするのもままならず……金魚のように口でフハフハと呼吸していたのですが……早々に上がりました（汗）

あれは……きつかった……。

共鳴17

どろどろと流れる溶岩の川がそこにあった。

（う、うそだろ……！？）

地上で燃え盛るマグマは暗黒に閉ざされた空を赤く焦がし、人間には

決して手が届かない天を無気味に染めている。どこか遠くで稲妻が光っ

た。一拍置いて響き渡る轟音。世界が、震えている。

（そんな……まさか……！）

さながら大地が流す血に似た煮えたぎる溶岩の中に、１頭のモンスタ

ーが佇んでいる。赤黒く染まった空と同じ色をした体表に、鉤爪の生え

た両翼、力強い後ろ足。人間の体など一瞬で溶かしてしまうような高温

の溶岩の中から、一対の黄色く濁った瞳が自分を見つめている。

（レウス……！）

武器も防具も無い。体ひとつで、中也は今、空の王者の前に曝け出さ
れていた。腐肉がこびりついた巨大な牙が噛みならされる。その隙間か
ら、唾液が滴り落ちるのを見た。溶岩の中に落ちた唾液が、ジュッと音
を立てて蒸発する。

「うわ……ぁあ……あぁ……！」

全身が小刻みに震えていた。手を伸ばせば届くような距離にいるレウ
スは、今にも自分を食らおうと牙を打ち鳴らしている。レウスがその足
を1歩……たった1歩踏み出せば、中也は簡単に踏み潰されるだろう。
あるいは、その巨大な頭蓋をほんの少し下げるだけでいい。それだけで、
自分の命は簡単に弾け散る。

（う、動けねえ……！）

逃げなければならない。頭では分かっていた。けれど、まるで全

身が
石になってしまったように、指一本さえ自分の意志で動かすことができ
なかった。
（逃げない、と……！）
目の前に立つレウスは、さながら小山のように聳え立っている。巨大
な影に似た彫像の中、自分を見つめる一対の瞳だけがギラギラと輝いて
いる。長大な尾が揺れていた。
「く、そ……っ！」
かろうじて後退りした時、中也は自分が溶岩の上に「立って」いると
いう事実に気付いた。
「うそ、だろ!?　な、なんで!?」
目の前のレウス。溶岩の上に立っている自分。何がどうなっているの
か分からない。現実を拒絶する脳がパニックに飲み込まれようとす

る。

（ダメだ！　ダメだ！！　お、落ち着け！　落ち着け！！）

今ここでパニックを起こせば、レウスのエサになるのを早めるだけだ。

震える膝に力を込める。血が滲むほど強く拳を握りしめ、欠けてしまう

ほど歯を噛みしめて、中也は自分を見下ろす一対の黄色い瞳を見上げた。

（目を逸らしたら負ける！）

レウスは値踏みしている。そんな気がした。殺すべきか、それとも止

めるべきか、レウスは今じっと自分を見つめながら考えている。

（負けるか！）

勝機も何も無い。素手で立ち向かって勝てる相手ではない。分かって

いた。けれど、黙って食われるのは嫌だった。殺せるものなら殺してみ

ろ。そんな思いを込めて、震える体を必死に励ましつつレウスを睨みつ

ける。

「負けて、たまるか……！」

レウスに人間の言葉が理解できるとは思わなかったが、口に出さずに

はいられなかった。負けたくない。そんな思いだけで、中也はレウスと

睨みあいを続ける。

「……う、わ！」

先に動いたのはレウスだった。混じり合っていた視線を外し、レウス

は空を見上げながら巨大な咆哮を上げる。耳をつんざくような叫び声に、

中也は思わず両耳を押さえて蹲った。

「くそっ！」

長い尾が振り回されている。ゆっくりと、レウスが頭蓋を下げて来た。

（やばい！）

襲ってくる。考えるより先に体が動いた。レウスの口から吐き出され
た火球が自分の体を焼く前に、膝に力を込めてその場を飛び退く。岩を
も溶かす高温を宿した炎の固まりが、中也のすぐ傍を通り過ぎて行った。

溶岩が2つに分かれ、残っていた大地が抉り取られる。火球の直撃を受
けた岩の固まりが崩れ、溶けて行った。

「……！」

レウスが最初に上げた咆哮のおかげで、恐怖で硬直していた自分の体
から緊張が抜けていた。幸か不幸か、逃げ回る程度のことはできそうだ。

（足場が、危なすぎる……！）

どういうわけか、今の自分は溶岩の上に立っている。普通に考えれば、
溶岩の上に立つなど有り得ない。

（いきなり……下に落ちたらヤバい……！）

何がどうなっているのか分からないが、いつまでも溶岩の上にいるのは危険すぎる。せめてまともな場所で戦おうと思い、中也は背後にある大地へと視線を向けた。

「わっ！」

その瞬間、レウスが両翼を広げ、激しい咆哮を上げながら自分に向かって一直線に突進してきた。全速力でその巨体を避ける。巻き上げられた溶岩の飛沫が襲いかかってくる。赤と黄色の、宝石のようなその滴を被れば火傷では済まされない。中也は思わず両腕で頭を抱え、その飛沫から身を守る。

（熱く、ない……？）

自分の傍を通り過ぎたレウスが、岩の固まりに頭から突っ伏して行っ

た。ガラガラと音を立てて崩れた岩が溶岩の中に落ちる。まるで沸騰し
た湯の中に落とされた氷のように溶けて行く岩の固まりを見ながら、中
也は自分の腕に視線を向ける。

（何か、おかしい）

撒き散った溶岩の飛沫は、数えきれないほど自分の腕に落ちていた。

しかし、不思議なことに熱さは全く感じない。

「っ！」

どういうことだろうか、と考える間もなく、ゆっくりと身を起こした
レウスがこちらに向き直る。両翼に力が込められた。力強い肩の筋肉が
盛り上がり、風を切る轟音を上げながらレウスの翼がはためき始める。

「くそっ！」

踏み潰す気だ。視線はレウスから逸らさないまま、中也は両腕で顔を

覆って風と、溶岩の飛沫から身を守りながら早足で溶岩の上を移動する。

（何なんだよ、いったい！）

巨体が空に舞い上がるのを見た。力強いその翼は、レウスの巨体を簡

単に空中へと持ち上げる。そのまま、レウスは予想通り自分の方へ向か

って飛んできた。

（かわせるか！？）

強風が巻き起こり、思うように動けない。巨大台風の渦中にでもいる

ような気分だ。真っ赤に燃える溶岩の上に、空を覆い尽くすような巨大

な影が落ちる。見上げる中也の目の前に、鋭い鉤爪が生えた両脚が落ち

てくるのが見えた。足の裏を覆う肉球が見える。爬虫類のようなウロコ

が近付いてくる。爪の間に挟まった土や腐肉のカスまでもが、手に取る

ようにはっきりと映る。

「っ！！」

レウスの両脚が自分に届く直前、中也は膝に力を込めてその場を飛び

退いた。溶岩の上に、転がる。慌てて跳ね起きたが、やはり火傷ひとつ

負っていない。それどころか、土の上に転がった時のように、全身を強

く打ちつける痛みすら無かった。

（レウスがそこにいるのは分かるんだ……）

けれど、なぜかこのレウスには現実味が無い。それに、溶岩が煮えた

ぎる場所にいるという実感も無い。これだけの熱気の中にいるにも関わ

らず、自分は熱さというものをまるで感じないのだ。

（なんなんだ、これ！）

中也を踏み潰すことに失敗したと気付いたらしいレウスが顔を上げ、

自分の方を睨んできた。眼前に、レウスの顔が近付いて来る。軽く開かれた口の向こうに、腐肉がこびりついた牙が並んでいるのが見える。

レウスが呼吸する。吐き出された息がまともに顔にかかり、髪と服を揺らして行った。

（臭いが、ない……？）

自分が知っているレウスは、ほぼ例外なく凄まじい悪臭を纏っていたものだ。王宮内で飼われている銀レウスも、その例外ではない。生ゴミが腐ったような、生肉が発酵したような、何とも言えない臭いがしていた。けれど、今目の前に立っているレウスからは、何の臭いもしない。

（立体映像みたいだな……）

幻覚、という文字が頭に浮かんだ。だが、幻という言葉で片づけてしまうには、あまりにもレウスは殺気に満ちた瞳で自分を見下ろしていた。臭いも無い。現実味も無い。しかしながら、レウスの全身から

迸る殺気は、まるでそこにあるものすべてを飲み込んでしまうそうな勢いで渦を巻き、その巨体に纏わりついている。

（意味が分かんねえ！　これが幻なら、少しくらい攻撃を食らっても平気なんじゃ……！）

だが、攻撃を甘んじて受けることには恐怖があった。頭を振りかぶり、頭突きをしてくるレウスを慌てて避ける。直感だが、攻撃を受ければただでは済まないのではないかという気がした。

「くそっ！」

レウスから距離を取る。背を向けて逃げだせば、背中から火球で打たれ、死ぬ。そう思って、レウスを見つめたまま後ろ向きに歩いた。

（どうすればいいんだよ！？）

戦って倒すのはムリだ。武器も無いのに、レウスと戦って勝てるはずなどない。だとしたら逃げるしかない。だが、見渡す限り溶岩の海が続いているこの場所で、どこにどう逃げれば安全なのか分かるはずは無かった。

（どうすれば……！）

考えている間に、レウスが再び突進してくる。巨体が通り過ぎる爆風に、溶岩が飛び散っていく。何とかその突進を避けたものの、中也は溶岩の上に置いた自分の手が灼熱を感知したことに気付いた。

（マズイ！）

慌てて両手を離し、起き上がる。今度は、足の裏からじわじわと這い上がって来る熱を感じた。

（なんで……！？）

先ほどまでは熱さなど微塵も感じなかった。それなのに、今になって急に体が周囲を満たす熱を感じ始めている。見る間に、両脚が焼けただれてしまいそうな熱に立っていることさえままならなくなって来た。

（ヤバい！　くっそ、熱い！）

理由は分からない。だが、とにかく急がなければならないということだけは分かった。このままだと、レウスに殺されなくても溶岩の熱

に焼かれて死ぬ。

（せめて岩の上か、どっかに……！）

周囲を見渡し、最も近い場所にある岩場に視線を止めた。

（あそこまで辿り着ければ！）

少なくとも、溶岩に飲まれて死ぬことは先延ばしにできるはずだ。

横目でレウスを確認する。レウスは今、怒りに狂ったように尻尾を振り回しながら、その場をグルグルと回っていた。岩場まで走るには、今しかない。そう思って、中也は一気に岩場を目指して駆け出した。

（急げ、俺！）

全速力で走る。その間にも、足元から立ち上る熱気に肌が焼けて行くのが分かった。息を切らしながら、溶岩の上を駆け抜ける。すぐ傍にあるはずの岩場が、妙に遠く感じた。

（早く、早くっ！）

必死で走る。とにかく走った。けれど、岩場は一向に近付いては来ない。事実に混乱を覚えつつも、体を焼く熱に煽られ足を止めること

ができない。

（何でだよ！？）

心の中で叫んだ時、ふいに目の前が赤くなった。

「……？」

光がやって来る方向を振り向く。そこにあったのは、灼熱の炎の固まり……だった。

（レウスの火球、か？）

頭では理解できる。背を向けて走っていた自分に、レウスが火球を吐き出したのだ。

「……」

動けなかった。飛び退くには、あまりにも距離が短すぎる。どうしようもできない。近付いて来る火球が、どんどん目の前で膨らんで行く。

「う、あ……ぁあ……！」

反射的に両腕を上げたものの、何の意味も無い。自分の体が、灼熱

に呑まれて行く。高温に包まれる。頭の中が、真っ白になった。

（俺、死ぬのか……？）

何も考えられない。白く染まった視界の中で、自分が霧散していくのを感じる。

“好きな女はいるか？”

ふいに、ベアルドが発したその言葉が脳裏に甦った。

「好きな女……？」

否応なく思い浮かぶのは、女ではないが夏葉の顔である。

「な、つは……！」

このまま死ねば二度と夏葉の顔を見ることはできない。ワケも分からずファーナに来て、何も知らされないままベルキュロスの討伐に駆り出され、そして何も分からないまま、こんなところで死ぬ。

「死に、たく、ない……！」

まだ、死にたくない。夏葉の姿を思い浮かべながら、中也は心の底

からそう思った。

「まだ死にたくない！」

強く、強く、そう願う。帰りたい。アルテリアへ。夏葉がいる場所へ。シヴァやルナ、光宮やレイが待つ場所へ。自分はまだこんなところで死にたくなどない。

「俺は、帰るんだ！！」

光が、弾けた。

「あれ？」

ふと気が付くと、目の前には「おにぎりセット」を持ったベアルドが立っていた。盆に乗せられた味噌汁から、いい匂いがする。湯のみに淹れられた緑茶から立ち上る湯気が、顔にかかった。

「あ、あれ？　なんで？　俺……」

「合格だ。メシだ。食え」

「……」

何が何だか分からないまま、目の前にあるおにぎりに手を伸ばす。

無意識に口に運ぶ。おにぎりの具は、梅干しだった。

共鳴１７（後書き）

ロケランが好きです。

大好きです。

無限ロケット・ランチャーを手に入れるためだけに、バイオハザードとかでポイントを稼ぎまくるタイプです。

ロケランをブチかましまくる時のあのカイカン、たまらんです。

ところで、今日の更新分をパチパチやってる間、ずっと後ろで相方がブリーチを見ていました。

「ふぉおおお！！」

ではなく、

「ぬぉおおおぉぉぉおおおおぉ！！」

って感じでした。

共鳴18

「……なるほど。だいたい話は分かりましたよ」

ベアルドが差し出してくれたおにぎりを残らず胃の中に収めながら、

中也は隣で障子に寄りかかっているベアルドに視線を向ける。

「でも、一言くらい説明があってもいいんじゃないですか？　気が付いたらいきなり目の前にレウスがいるし、溶岩の上に立ってるし、本気で焦りましたよ」

「悪かった。次からはそうする」

先ほどの不思議な体験は、自分たちの実力を手っ取り早く上げるための最も効果的な手段だと聞かされた。言われて納得できるようなできないような何とも言えない気分であるが、当のベアルドは中也の困惑などど素知らぬ顔で、炎に包まれながら小さく呻いているシヴァを見つ

めて
いる。

（大丈夫かな、シヴァ）

現実問題、火だるまになっている親友の傍で呑気にお茶を啜っている

自分の姿というのは非常に違和感がある。他人が手を貸せば意味がない

と言われているから傍観しているのであって、危なくなったらベアルド

が助けると言うから安心していられる。ついでに、シヴァはそうなるこ

とを承知で自分からあの日本刀の鞘を引き抜いた。そうでないならば、

すぐにでも水を探してきて頭からかけるところである。

（すんげー光景だな、改めて見ると……）

まるでガソリンでもかけて火をつけたかのような勢いでシヴァの体は

燃えている。しかしながら、これだけの火の手にも関わらず、シヴァが

着ている服にも、周囲にある布団や畳にも一向に火は燃え移る気配を見
せない。それに、自分とシヴァに距離は1メートル前後しか離れていな
いが、特に熱いとも思わなかった。

「本当に、あの炎って幻みたいなモンなんですね」

「その通りだ」

「でも、あの時、火山みたいな場所にいたレウスに負けてたら、俺は本
当に燃えて死んでたってことですよね？」

「その通りだ」

「俺、どっちかって言うと負けてたと思いますよ？　最後に火球を思い
切り食らった記憶がありますから」

「……気持ちの問題だ」

「気持ちで勝てれば勝ちってことですか？」

「その通りだ」

ベアルドの返答は相変わらず素っ気ない。もしかしたら話しかけられ
るのが嫌なのかもしれないと思い立って、中也は黙ってシヴァを見守る
ことにした。

「まだやってんの？　そろそろ終わったかと思ったのに」

その時、背後の障子が開いて湯上がりらしいルナが顔を覗かせる。シ
ヴァから、ルナは朝風呂に行ったと聞かされていたので、彼女の髪が濡
れていることは特に不思議に思わなかった。

「いい湯だった。やっぱりお風呂は大切よね」

「まあな」

「で？　どうなのよ、中也。強くなったっていう実感はある？」

「どうだろう……」

中也の隣に座ったルナが、濡れた髪を手ぬぐいで拭き始める。その仕

草が妙に色っぽくて、中也は意図的に視線を逸らしていた。

「よく分かんねえよ。実感は無いな」

無意味に自分の手の平を見つめながら答えた時、左隣に座っているベ

アルドがいきなり会話に入って来る。

「今までのお前の力を「1」とすると、今回の経験で「1．01」に上

がったと考えればいい。実感が無くて当然だ」

「……0．01の実力向上に何か意味があるんですか？」

「無いよりマシ、という意味がある」

「……そうですか」

こちらの世界にも少数という概念があったらしい。そんなところに、

中也は少しばかり感心した。

「つまり自惚れるなということだ」

「え……」

ベアルドが言った言葉の意味をいまいち理解しきれずに聞き返せ

ば、

キツネの仮面を被った顔が中也の方に向けられる。

「モンスターとの戦いにはいつだって危険が付き纏う。自分の力を過信

すれば、そのまま死に繋がることはよくある話だ。もう一度言う。生き

て帰りたければ、必要以上に自分の力を過大評価するな。昨日よりはマ

シという程度だと思っておけばいい」

「はあ……」

この人はいったい何を考えているのだろう。話しかけて欲しくないの

かと思えば自分から会話に入ってくるし、必要最低限のことを細切れに

口にしたかと思えば、事前説明という重要なことを忘れていたりする。

（こういう性格なのかな）

本人に分からないように気を使いつつ、中也は軽く溜め息を落とした。

（でも、何でいきなり……）

昨日までのベアルドは話しかければ最低限の情報はくれたが、それ以上の会話には頑として応じようとしなかった。まるで電車に乗っている時に、偶然、隣の席に座っただけの赤の他人のような、通り過ぎて行くだけで決して接点を持たないその他大勢のうちの1人のような、そんな雰囲気を醸し出していたのだ。それが今日になって、いきなり態度が変わった。

（何かあったのかな……）

つい深読みにしてしまう自分がいる。自分たちの実力をそれなりに上げなければならない理由。それはどんな理由だろう。

（ベルキュンが実はGクラスだったとか？　いや、それならちょっとくら

い強くなったって意味が無いよな……）

それこそ焼け石に水だ。Gクラスのモンスターは見たことがあるので分

かる。とてもではないが、中途半端な訓練や修行をこなせば簡単に狩れ

るような相手ではない。

（だったら何だよ。俺たちが実力をつけたからって、こっちの国のギル

ドにも役所にも得はねえだろ）

得があるとすれば、やはり一緒にクエストに出るベアルドに他ならな

い。自分たちのレベルがどう伝わっているかは知らないが、一緒にモン

スターを狩る相手は強い方がいいに決まっている。

（体調不良とか？）

それは有り得る気がした。昨日までは何ともなかったが、今日になっ

て体を壊した。そこで、一緒にクエストに出る中也たちに頑張って貰う

という意味で……。

（バカバカしい。どっからどう見ても、この人は健康そのものじゃねえ
かよ）

自分の頭に浮かんだ可能性を自分で否定する。しかしながら、だとし
たら、もう他に思い当たる理由は見当たらなかった。

（考えても仕方ねえ。本人が横にいるんだ。聞いてみるしかない）

ただの気まぐれだと誤魔化されればそれまでのことだ。もしかしたら
答えてくれるかもしれない。その可能性はゼロではないのだ。聞いてみ
るしかない。

「なあ、ベアルドさん」

「何だ」

「あんた、どうして急に俺たちの訓練なんてする気になったんですか？

ただの気まぐれってヤツ？」

気まぐれ、という言葉を相手が使う前に先に言ってやった。ベアルド

がどう思ったかは知らないが、彼が少しばかり逡巡するように仮面の下

の視線を彷徨わせるのが分かった。

「特に理由は無い。敢えて言うなら気が向いたから、だ」

「そうですか……」

言い方を変えただけで「気まぐれ」以外の何物でもない答えが返って

来た。やはり聞くだけムダだったらしい。

「アルテリア出身と聞いて、親近感が湧いた」

「は？」

「俺の顔を見ても態度を変えなかった」

「はあ？」

「だから手を貸してやる気になった」

「はい？」

「それだけだ」

気まぐれ、という言葉で終わらせるのかと思いきや、ベアルドは端的な

言葉だけをズラズラと並べ立て、1人で勝手に満足してしまった。言うこ

とは言ったと言わんばかりの雰囲気だが、言われた中也の方は何が何だか

分からない。

「……もうちょっと説明文を付け加えても、誰も怒らないと思うよ？」

どうやら自分と同じことを思ったらしいルナが、呆れたような顔でベア

ルドに換言する。

「そうか。それは気付かなかった」

気付かなかったらしい。どこからどう見ても自分の2倍は生きていると

思われる年齢のベアルドがそんな当たり前の事実に気付かないというのも

どうかと思ったが、敢えて何も言わなかった。

「私たちがアルテリア出身って聞いて親近感が湧いたってことは、もしか
してあんたもアルテリア出身なの？」

「そうだ」

「マジで？　それで、何でファーナに来たんですか？」

「ディアブロス討伐クエストの際に事故があった。その時、ギルド・ナイ
トの顔を見てしまった。本人は俺が黙っているなら特に手は下さないと言
ったが、アルテリアにいる以上、いつギルドから抹殺命令が下ってもおか
しくなかった。家族もいる。身の安全を考えて、ファーナに来た」

大変な過去をサラッと言ってくれたベアルドに、中也は驚きと困惑を隠
せなかった。確かに、ギルド・ナイトは極秘の仕事をこなすハンターだ。
普通のハンターは誰がギルド・ナイトで、誰がそうでないかすら知らない

し、知ってはならない。身の安全を考えてファーナに来たというベアルド
の考えには納得できる。
「で、あんたの顔を見ても態度を変えなかったっていうのは？」
ルナが先を促すように質問を重ねる。そう言えば、ルナはベアルドの顔
に大きな火傷の痕があることを知らないはずだ。
「ファーナに来て何度目かのクエストの時、リオレウスの火球を食らった。
おかげで、人前では素顔を晒せない顔になった」
言いながら、ベアルドはキツネの仮面に手をかける。明るいところで見
たその顔の皮膚は、やはり無残な有り様だった。女性でないから顔に傷が
付いても気にしない、と言われればそれまでだ。だが、そういった話は顔
にちょっとした傷ができる程度の話である。原型が分からないほど顔が崩

れてしまうのは、男でもそれなりにショックであることには違いない。仮面の下に現れたその素顔を見て、ルナが微かに眉を上げる。

「ひっどいね。まあ、レウスの火球を食らったなら仕方ないと思うけど。

それであんたは他人に顔を見られるのが嫌で仮面を被ってるってワケ？

見かけによらず繊細なんだね」

屈託の無いルナの意見に、半分だけの顔でベアルドが微かに苦笑した。

「少し違う」

「どういう意味？」

「この国……と言っても主にこの地方だが、ラタの人間は自分と違うもの

をとことん嫌う傾向がある」

そう言われて、中也は思い当たる節があった。外国人という理由で差別

するのも、その一環だ。それに、全体から見ればラタの人間はみな同じ髪

型に、同じ服装をしている。チョンマゲが文化だからというのもあるだろ
うが、他人と少しでも違うことをしようと躍起になるのが当たり前のアル
テリアでの生活が長いと、そこにいる人間が同じ装いで佇んでいるのは不
思議な感じがする。確かに、それは事実だ。

「どうやら、この地方の人間は自分が他人と同じであることに満足と安心
を感じるらしい。既婚者と独身者で髪型を決めたり、身分によって着ても
良い服装を決めたり、女性とはかくあるべきだ、男性とはかくあるべきだ
という理由のない理想を振り回して人格を決めたり……。いろいろある。
そういう社会の中では、俺のような人間はとことん毛嫌いされる」

ひたすら感情の籠っていない声で語りながら、ベアルドは元通り仮面を
顔につけた。

「顔の半分が火傷で崩れた人間は化け物と罵られ、石を投げつけられるか、
物笑いの種にされるか、災厄を呼ぶという理由で罪人と呼ばれて刑場に引
き出されるか、だ。俺がケガをしたせいで、家族も酷い目に遭った。だか
ら、余計な面倒事を引き起こさないために仮面を付けることにしている」

「……それ、おかしいですよ」

堪え切れず、中也はついそう言ってしまっていた。

「おかしいですよ。間違ってます。だって、ベアルドさんがケガをしたの
は誰のせいでもないでしょ？　ハンターは危険な仕事なんだから、それく
らいのケガをしている人がいても全然、不思議じゃない」

「それはアルテリアの考えだ」

「分かってますよ。でも、事故で酷いケガをした人をそんな風に扱うなん

ておかしい。自分と少しでも違うところがあるからっていう理由で他人を
化け物扱いするなんて、そっちの人たちの方がよっぽど化け物じゃないで
すか」
　渾身の思いで言ったつもりだったのだが、ベアルドから特に反応は返っ
て来なかった。彼の視線はシヴァに注がれたまま、中也の方には向けられ
ていない。
「私も中也に賛成だね。何だか面倒臭いところにお住まいのようで、同情
するよ、ベアルドさん」
「そうでもない。今ではそれなりに愛着が湧いている。それに、すべての
人間がそういう人間だとは限らない」
「ふ～ん。まあ、そんなモンだろうね」
　そんなものなのだろうか。自分には分からなかった。仮に自分がベアル

ドの立場だったなら、まず間違いなくアルテリアに帰るという選択を取る
だろう。ケガをしただけでもショックなのに、あまつさえ周囲の人間から
そんな扱いを受けるなど考えただけでも耐えられない。
「そういうワケで、お前たちに手を貸す気になった。ベルキュロス討伐戦
で死ぬところを見たくない。俺1人で3人は守りきれない。そういうこと
だ」
淡々と語られる言葉に、中也は何だか妙に胸が重くなってしまった。会
って間も無い自分たちが死ぬところを見たくないと言ってくれた。それは、
自分たちがこの国へ来て、初めて触れた「誰か」の優しさだった。
「ありがとね、ベアルドさん。あんたが思ってる以上に実力はあるつもり
だけど、一応、お礼は言っとくよ」

感謝の言葉を口にしようと思った瞬間、ルナに先を越されてしまった。

「礼を言われることじゃない。ただの気まぐれだ」

そう言われると、2人目の自分は余計にお礼が言いにくくなる。

だが、

ここは空気を読まないことを覚悟の上で、ちゃんとお礼の言葉を言うこと

にした。

「気まぐれでも何でもいいけど、お礼だけは言われて貰うよ。ありがとう」

「ベルキュロスを倒した後に言え」

相変わらず素っ気ない反応だった。だが、気を悪くしている風ではない

ので安心した。

「ふぃ～！！　勝った～ぞ！！」

その時、日本刀を天井に高々と掲げながらシヴァが立ち上がった。

彼の

全身を包んでいた炎は、見る間に消えて行き、後には火傷ひとつ負ってい

ないシヴァが現れる。こうして見ると、今更だが不思議な光景である。

「あぁ～、疲れた～ぞ！　中也、そのお茶くれ～よ」

「おう」

中也が答える前に、シヴァは自分の目の前に勢いよく胡坐をかいて、湯のみに残っていた緑茶を一気に飲み干した。

「ああ、大変だった～ぞ。でもちょっと驚いた～ぞ。モンスターにも名前があるんだ～な」

「はあ？」

何を今更そんな当たり前のことを、とシヴァの方を呆けたような顔で見ると、シヴァの方が意外そうな顔をする。

「あれ？　中也は聞いてねえの～か？　レウスが名前、教えて来ただ～ろ？

って、あ……あれ？　え……？　何で～だ？　うまく言えねえ～ぞ。名前」

「名前を聞いたのか。それは意外だった」

困惑している中也たちの横で、ベアルドがさも当然だと言わんばかりの

口調で意外だったと口にした。

「モンスターの名前は発音できない。言えなくて当然だ。名前を教えて来

たということは、そのレウスがお前を主人だと認めたということだ。そこ

までできるとは意外だった。主人だと認めた以上、もう防具ナシでその刀

を振るっても何の痛みも感じない。自由にレウスの力を使える」

「へえ～」

説明を聞いてもよく分からないという顔をしているシヴァに、中也は何

だか差を付けられた気分になった……。

共鳴19

「ここがファーナか……」

昼間だというのにまばらな人混みの中、フェンリルはサスケと並んで
大通りを進んでいた。

「何て言うか、アルテリアの田舎よりも田舎だね」

「違いないニャ」

「ここ、一応この辺の役場町なんだろ？　何だっけ、この辺りの地方の
名前」

「ラタ地方ニャ」

「そう、それそれ」

アルテリア帝都を行き交う馬車が1台、かろうじて通れるほどの道幅
を保った道は、左右に建てられた木造建築に挟まれ、今にも押し潰され
てしまいそうな勢いでそこを行く人の足に踏み固められている。舗

装は
されておらず土が剥き出しの道は、ところどころに馬車が通った跡と思
われる轍（わだち）が目立つ。こんな場所にも馬車があるのか、とフェンリルは少
しばかり意外に思った。
「珍しいものばっかりだね。特に人間が」
「あれはチョンマゲと言うニャ。昔はファーナ全土で一般的な髪型だっ
たんだけど、今ではこの地方にしか残っていない髪型ニャ」
「へえ、そうなんだ」
フェンリルが何を差して「珍しい」と言っているのか、いち早く察し
を付けたサスケが聞いていないことまで説明してくれた。相変わらず、
サスケは博学である。
「サスケってさ、俺より年上なんだよね」
「それがどうかしたのかニャ？」

アイルー全般に言えることだが、彼らは子供ほどの身の丈ほどしかな
く、語尾に「ニャ」という擬音を付ける特徴的な喋り方をする。そのせ
いで、つい実際年齢よりも幼く見てしまいがちだが、実際は人間よりも
遥かに年上だったりする場合が多い。サスケも、その例に漏れない。
「ちょっと気になって。単純な興味なんだけどさ、サスケって実際は何
歳？」
「１００を過ぎたくらいで数えるのを止めたニャ。アルテリアっていう
国ができるずっと前から知っているから、恐らく１０００歳くらいかニ
ャ？　正確な年齢は分からないニャ」
「……古龍並みじゃん。そうは見えないけど」
「よく言われるニャ」
自分の横をヨチヨチ歩きで付いて来るサスケが実は１０００年も

前か
ら生きていたと言われても、あまり実感が湧かない。フェンリルにとっ
てサスケとは、幼いころからの遊び相手であり、今では仕事をこなす上
でのかけがえのないパートナーだ。それ以上でも無ければ、それ以下で
もない。出会ってから１０年が経過したが、今まで特に年齢を聞いてみ
ようとは思わなかった。自分でも不思議に思うくらい、サスケは気が付
けば自分の生活の一部になってしまっている。

「そんなことはいいけど、ご主人」

「なに？」

「気を付けるニャ。ラタ地方の人間は迷信深いから、外国人は災厄を運
んで来ると本気で信じてるニャ。外国人だってバレないようにしないと、
後からが大変だニャ」

「ふ～ん」

サスケの忠告に生返事をしながら、フェンリルは周囲にいる人間たち

に改めて視線を向けた。

（同じ髪型、同じ服装、同じような仕草……）

ついでに、喧噪の中から拾える会話にも目立った特徴が無い。誰も彼

もが、天気のことや最近の情勢のことを話している。互いの商売を褒め

合う声が聞こえて来たかと思えば、それほどでもない、とか、あなたほ

どではない、という決まった答えが返される。

「確かに、不思議な国だね」

「そうですニャ」

何だか演劇でも見ているような気分だった。あらかじめ用意されたセ

リフと、それに対して決められた返答をする人間。何もかもがすべて決

められた中で動いている。自分とサスケだけが、景色から浮き上がって
しまったような感じさえする。

「この辺りの人たちってさ、何が楽しくて生きてんのかな」

「そういうことは住んでいる人にしか分からないニャ。まあ、ここはい
ろいろなことが最初から最後までキチンと決められている社会なんだニ
ャ。だから、そういうところに外国人が迷い込んだりすると、この辺り
の人たちには違和感があるんだニャ」

「よく分かんないけど、どうでもいいよ。要するに、外国人だってこと
がバレなきゃいいんだろ？」

言いながら、フェンリルの脳裏にひとつの名案が浮かんだ。

「なあ、サスケ。俺もそのチョンマゲとか言う髪型にしてみようか。そ
したらこの辺りを歩いてても目立たないよ？」

薄い布を被って顔と髪型を隠している自分の頭を差しながら言うと、

サスケが非常に微妙な顔をする。

「……止めるニャ。絶対に止めるニャ」

「なんで～？　おもしろそうじゃん」

「もう一度言うニャ。止めてくださいニャ」

光宮に見せたらきっと笑ってくれるだろうと思ったのに、サスケから

全否定されてしまった。

「ご主人のチョンマゲ姿だけは見たくないニャ。髪型のせいで外国人だ

ってバレそうになった時は、ボクが全力でご主人をお守りするニャ」

「サスケに守って貰わなくても大丈夫だって」

「ご主人がチョンマゲにされそうになるのを全力でお守りするという意

味だニャ」

「……そこまで言う？」

「言いますニャ」

サスケはよほどチョンマゲが嫌いらしい。チョンマゲに関して、過去に何か心の傷になるようなことがあったのだろうか、と思った。それならそれで、これ以上は触れない方が無難だ。そう思った時のことだ。決められた会話だけで作り上げられた町の喧騒を破る、物騒な声が聞こえてきた。

「何かあったのかニャ？」

「さあ」

何となく、フェンリルとサスケは物騒な声が聞こえる方へと足を向けた。大通りを歩く人々も、その声に気付いているらしい。だが、誰もが自分は無関係だという顔をして視線を逸らし、足早に通り過ぎて行って

しまう。

（なんか、冷たい人たちばっかりだな。女の子が助けを求めてるって言
うのに）

物騒な声は、店と店の狭間にある細い路地から聞こえていた。数人と
思われる男たちが誰かを脅迫する声音と、それに混じって上がる甲高い
悲鳴、そして助けを求める声。

（そこの通りを歩いてたら、絡まれてそのまま路地に連れ込まれちゃっ
たってヤツかな）

そんな風に状況を推測しながら、フェンリルは声が聞こえてくる路地
を覗きこむ。そこには、予想通り数人の男たちと、彼らに絡まれている
1人の少女がいた。

（可愛いじゃん！）

男たちの方はどうでもいい。肝心なのは、これから自分が助けること

になる少女の方だ。どうせ助けるなら、美少女の方がいいに決まっていい

る。金髪に、小柄な体躯。この辺りの者ではないらしく、少女は長い髪

を背に下ろし、淡い色のドレスを着ていた。

（やったね～！）

うっすらと涙を浮かべたその顔立ちも自分の好みの直球領域である。

これはもう、助けに行かない手はない。思うことがないわけではないが、

フェンリルは呆れた顔のサスケを伴って、彼らの方へと歩いて行く。

「何か用か、兄ちゃん」

「痛い目みてえのか？」

「何モンだ、テメー！　役所のモンか！？」

少女を襲っている男たちの数は５人。そこにいた誰もが、あからさま

に自分は悪者ですという顔をして、お決まりのセリフを吐いて来た。

「そこのお姫様を助けに来た、通りすがりの王子様だよ～」

一度は言ってみたかったセリフを是非この機会に、と思って口にする

と、横にいたサスケが激しく項垂れた。

「ご主人、そのセリフ、かなり寒いニャ……」

「ええ～、別にいいじゃん」

我ながらカッコいいと思ったのだが、どうやらサスケには受け入れ難

かったらしい。仕方ない。サスケは人間社会に溶け込んで長いとは言え、

やはりアイルーなのだ。人間のセンスが理解できなくても仕方ないのだ。

「な、なんだテメー？　バカか？」

状況が読めず、行動を停止していた男たちの1人が非常に頭に来るこ

とをこれ以上ないほどマジメな顔で言って来た。

「ひっで～な、おじさん。俺はバカじゃないって。そもそもバカっ

て言
う方がバカなんだって知らない？　まあいいや、もう決めた。手加減な
んてしてやらねえ！　本気でぶっ飛ばす！」
「はあ？　ヤル気がテメー！？」
「当たり前じゃん！　さあ、どっからでもかかって来な！」
勢い込んで拳を鳴らした時、５人の男たちが一斉に殴りかかって来た。
（弱いくせに……）
とりあえず最も前に出ている男の喉に隠し持っているファントム・ミ
ラージュの刃をめり込ませようとした瞬間、サスケが自分より先に前に
出て、男の頭をハンマーのようなアイルー特有の武器で叩きのめしてし
まった。ネコの肉球を拡大したようなハンマーは、非常に愛嬌があって
おもしろい。一度は使ってみたいと思っているのだが、どういうワケか

サスケは絶対にそのハンマーだけは貸してくれようとしなかった。

「サスケ～？　何してんだよ～？」

「ここはボクで充分ニャ」

地面に転がって泡を吹いた男を見て、残りの連中の拳が止まる。

あか

らさまに動揺が走る男たちに向かって、サスケが更にハンマーを振り上

げた。別の１人が激しい音を立てながら地面に転がったのを見て、あと

の３人の顔に恐怖が浮かび始める。

「や、やべーよ、さぶちゃん！」

「こいつ、やべーよ！」

「く、くそっ！」

さぶちゃん、と呼ばれた男がどうやらリーダー格らしい。せめてそい

つだけでも自分の手で殺してやろうと思ったのだが、ファントム・ミラ

ージュの柄に手をかけた時にはすでに遅く、さぶちゃんを筆頭に男たち
は遥か遠くに逃げてしまっていた。
「お、覚えてやがれー！！」
地面でのびている仲間は見殺しにするらしい。逃げる時のセリフも型
通りである。
「つまんねえの～」
「そう言わないでくださいニャ。ご主人に任せたら後が面倒だニャ」
すっかり大通りの喧騒に飲まれて消えてしまった男たちの後ろ姿を見
送りながら、フェンリルは軽く頭をかいた。
「あ、あの……」
すっかり興醒めといった気分になってしまったフェンリルの背に、存
在を忘れてしまっていた少女の微かな声がかけられる。
「あ！　えっと……大丈夫？　怖かったんじゃない？　もう平気だから

さ！」

胡散臭い笑顔を振りまきながら少女の方を向けば、感激で堪らないと

言った表情の少女と視線が交わった。

「あ、ありがとうございました！　助かりました！　本当に、何とお礼

を申し上げて良いものか……！」

「いいよ、お礼なんて。倒したのはサスケだしね」

「そんなわけには！　ぜひ、お礼をさせてください！」

自分を見上げて来る少女の頬はうっすらと桃色に染まり、大きな青い

色の瞳は微かに潤んでいる。その表情を見て、フェンリルの心にちょっ

とした悪戯心が芽生えた。

「お願いします！　何かお礼をさせてください！」

「だったら……」

サスケが項垂れるのを横目に見ながら、フェンリルは意図的に少

女の
方へ顔を近づける。
「だったらさ、今夜一晩、俺と遊んでよ。それでチャラってのはどう？」
了解を得られれば儲け。断られれば残念。その程度の気持ちで誘いを
かけると、一瞬だけ驚いた顔をした少女が頬を更に紅潮させながら視線
を逸らす。
「わ、分かりました……」
「マジで！？　やったね！」
「でも……」
了解を得た。自分は何もしていないのだが、思わぬところで報酬が転
がりこんで来た、と喜んだフェンリルだったが、続く少女のセリフに絶
句した。
「でも俺、男の子なんだ～！」

少女、いや少年はドレスの裾を捲り上げ、強制的に中を見せつけてき
た。ソコに、自分と同じものを見てしまい、フェンリルは頭の上から岩
が落ちて来たような衝撃を味わった……。
「男の子だけど、いい？　お兄さん、いいオトコだよね～！　だから特
別にタダでいいよ～？　ねっ？　ねっ？」
「ちょ……ま、待って……え……？　ええ！？」
先ほどまでの恥じらい深い少女の姿はどこへ行ったのか、少年である
ことを暴露した彼はかなり積極的である。
「お、男って……。マジで！？」
現実が信じられずに、つい聞き返してしまうフェンリルに向かって、
彼はドレスの裾を軽く持ち上げながらニッコリと微笑んできた。
「もう一回、見てみる？」

「……ご、ご遠慮します」

「あっそう。ざ～んねん。お兄さんにならいくらでも見せてあげるのに」

「い、いや……け、けっこうです……」

ずいずいと迫って来る少年に対して、無意識に後退りしてしまう自分

がいる。サスケは、石のように固まっていた。

「な、なんで女装してんの!?」

当たり前のことを聞くと、少年は再び花のような笑顔で笑って見せる。

「しゅ～み！」

「あっそう……趣味、ですか……」

それなら何も言えない。そんな気がした。

「とりあえず自己紹介しとくねっ！　俺は蘭玉。アクアマリンっていう

宝石の名前だよっ！　だからマリンちゃんって呼んでねっ！」

「……アクアマリンだから、マリンちゃん？　アクアちゃんでもいいん

じゃない？」

状況に付いて行けずに思考が停止した頭で、フェンリルはどうでもい

いことを口走った。しかしながら、そんなフェンリルには無頓着にマリ

ンちゃんと呼んでくれと言った少年は、強制的にフェンリルの手を握っ

て上下に激しく振りまくる。

「マリンちゃんの方が可愛いでしょ？　それより、お兄さんの名前は？」

「……フェンリル」

「フェンリル？　カッコいい名前だねっ！」

「そ、そう？」

名前を褒められると少し嬉しい。ようやくマリンちゃんの手から自分

の手が開放され、フェンリルはそのまま無意識に頭をかいた。

「で、どうでもいいけど、マリンちゃん。あんた鬼龍だろ？　なんでわ

ざわざ男に絡まれるようなことしてたの？」

　自分かサスケが助けなくても、自分1人でいくらでも切り抜けられる

状況だったはずだ。不思議に思って敢えて聞いてみると、マリンちゃん

はニッコリと笑って見せる。

「カッコいいお兄さんに助けてもらうっていう状況（シチュエーション）を1回でいいから体

験してみたかったんだ～」

「……あっそう」

　だったら何も言えない。状況作りに貢献できて、良かった。そう思う

ことにした。

「フェンリルさんこそ、アルテリアの人でしょ？　Gクラスのナヅチの

武器なんて持って、ファーナに何の用？」

「……」

ちょっと話が長くなりそうだ、とフェンリルは思った。

共鳴１９（後書き）

１週間ほどメシを食わなかったら、フラフラになりました（笑）

いや、もちろんビンボーだというのもありますが、何より最近リアルがムダに忙しく、メシを食う時間とトイレに行く時間が無くて無くて……（笑）

おかしいです。

二十歳のころは1か月くらいアルコールしか摂取していなくても１日１６時間の肉体労働に耐えられていたのに……。やっぱトシのせいですかね（汗）

そういう話を友人Ｘにすると、手軽に食べられる魚肉ソーセージとカルパスくんを大量に差し入れしてくれました。持つべきものは友ですっ！

……と、言うワケでして……更新時間が今以上に不規則になりそうな予感です（汗）

なるべく日付変更前にはアップしようと思っていますが……現実の都合上、それが難しい場合も……。作者側の勝手な都合で読者様にはご迷惑をおかけします。

毎日更新は続けていきますので、これからもよろしくお願いします！

共鳴２０

「お！　役場町が見えましたぞ！」

若旦那が意気揚々と指差した先にようやく目的地と思しき町並みが見え始めたのは、すでに夕闇が迫る時刻のことだった。

（まったく……）

ティア村を出発したのが午前７時。休み休みとは言え、ほぼ丸１日をかけてここまでやって来た。街道という名の砂利道、坂道、下り道を延々と歩き続け、光宮の足腰はすでにガタガタになっている。それに比べ、一緒に旅して来た連中の顔には疲労の「ひ」の字も見当たらない。

（田舎モンの体力を、ナメてたわ……！）

しかも１人は妊婦である。若旦那が美代の体を気遣って街道の途中で見かける「あしやすめ」という休憩所では必ず休憩を取っていたのだが、「ああ、疲れた」と言いながらケロッとした顔で優雅にお茶を口元に運ぶその仕草を見ていると、改めて自分と田舎者の体力の差と

いうものを見せつけられた気分であった。

（1日中、歩いてたって言うのに、何でみんな平気な顔してるのよ！）

夏葉とレイは分かる。あの2人の体力はモンスター並みだ。2日や3日ほど寝ていなくても何でもないという顔をしていられるのだから、

しっかり寝た状態で1日を通して歩くくらい、何でも無いのかもしれない。だが、薬屋の若旦那一行は、どう考えても普通の人間だとしか思えない。ついでに、太鼓のような腹を抱えている妊婦であるならばなおのこと、もう少し「疲れた」という顔をしても良いと思う。

（何で私だけ、こんなにヒーヒー言ってんのよっ！？）

足が棒のようになる、という言葉があるが、今の自分の状態はまさしくその言葉そのものだった。体を前屈みにして、ムリヤリにでも足を前に出さないと、とてもじゃないが足が前に出てくれない。談笑しながら普通に歩いている薬屋一行と妊婦が、ある意味で恐ろしい。

「光は相変わらず体力ないなあ、ホント。大丈夫か？」

「うるっさいわね！　ほっといてよ！」

横に並んで来たレイが、気にしていることをはっきりと言ってくれた。更に、彼女はどこか楽しそうに口元を綻ばせる。

「“おんぶ”してあげようか～？」

「冗談じゃないわよ！」

言ってしまった後で、レイに負ぶって貰えたらこの苦痛から解放されるという誘惑に襲われた。しかし、レイに背負われて進んでいる自分の姿を想像するとあまりにも情けない。苦痛よりはプライドの方が大事だ。そんなみっともない真似、死んでもできない。

「まあ、都会の方っていうのはそんなものでしょう。何せ、首都の方では一般庶民も皆、豊かな人ばかりだというから。どこへ行くにしても必ず馬車を使うそうじゃないですか」

ライトがフォローするように言ってくれたが、あまり嬉しいとは思わなかった。実際、彼の言う通りである。特に自分の場合、幼いころからずっと従者に囲まれて育ってきた。何か欲しいものがあれば、一

声かけると誰かが持ってきてくれたし、街へ出ようと思ったり、夏葉の家に遊びに行こうと思えば、呼ばなくてもいつだって馬車が待機していた。

（軍学校へ入ることを本格的に決めてからだもの。日常生活の中でも体力作りに気を使うようになったのは）

意図的に歩いたり走ったり、あるいは剣の訓練などを始めたのもつい最近の話だ。移動手段は自分の足だけ。ちょっと隣町へ出向こうと思えば険しい山道を1日がかり。そういった環境で育ってきた人間の体力には到底適わないと思い知らされた。

「さあ、光さん。もうひと頑張りです。人生は楽あれば、苦もあるのです。挫（くじ）ければ誰かが先に行きますよ」

「……意味が分かんないんだけど」

笑顔で軽く背中を押してくれた若旦那に苦笑いを返しつつ、光宮は疲れて思うように動かない足に力を込めた。

「やっと関所だわ。ねえ、お美代さん。お美代さんの家って、ここか

ら遠いの？」

「そうでもありませんよ。ここまで歩いて来た道のりを考えれば、何ということもありません」

「……あっそう」

田舎モンが言うところの「そうでもない距離」がどれほどのものなのか想像すると、目の前が暗くなるような絶望に襲われる。ちなみに、

この地方では女性の名に「お」という1文字を付けることが習わしなのだと教えられた。美代、と名乗ったから「美代さん」と呼んでいたら、若旦那にこっそり注意されてしまった。

（役場町の関所も、ティア村の関所と変わらないのね）

細い街道の先で、旅人を待ち構えている関所を見上げ、光宮は少しばかり意外に思った。この地方の中心となる場所なのだから、もっと立派なものを想像していた。だが、そこにある関所は予想に反して貧相な印象が拭えない造りをしている。

（あ、でも、警備している武士の数はティア村よりも多いわ）

兵士、ではなく武士。これも若旦那から教えられたことだ。正直、兵士と武士で、服装と髪型以外の何が違うのか気にならないわけではないが、どうでもいいことなので敢えて聞こうとは思わなかった。

「さあ、行きましょう」

相変わらず笑顔のまま、若旦那は自ら先頭に立って関所に向かって行く。進み出て来た武士にライトが通行手形を翳して見せれば、ティア村の関所にいた武士と全く同じような反応が返って来た。態度を改めた武士に促されて門を潜った後、光宮は何となく後ろを振り返っていた。

（細い道……）

山を削って作られたその道は、次第に暗くなっていく景色の中どこまでも果てしなく続いている。しかしながら、少しでも気を抜けば、左右から迫る森林にいつの間にか飲み込まれてしまうような危うさが漂っているような気がしてならない。

（人間って、ホントに小さいわね）

この細い道が維持され続けているのは、そこを通る人間が絶えないからだ。人が通らなくなってしまった道は、簡単に森に飲まれて消えてしまうだろう。人間の国も、もしかしたら同じかもしれない。なぜかその時、そう思った。

「さあ、参りましょう。お美代さん、本当に今晩はお宅に泊めていただいてもよろしいのですか？」

「ええ、もちろんです。首都で名うての薬師さまがいらしてくださるなんて、こんな光栄なことはありません。お義母さんも、お義父さんも、主人も、きっと喜んでくださいます」

「ご期待に添えるとよいのですが」

若旦那と美代の会話を横に聞きながら、光宮はそこに広がる景色に視線を向けた。

（役場町って言っても、ティア村と大して変わんないのね）

日が落ちて、道行く人の数も少なくなった通りは、舗装もされるこ

となく地面が剥き出しだ。森林が少ないアルテリアでは木造建築というものは高級な部類に入るので、見渡す限り木造建築しか見当たらない光景は、最初に見た時には随分と不思議な感覚だった。だが、良い言い方をすれば「趣がある」、悪い言い方をすれば「ボロい」建物たちは、どこからどう見ても高級な建築では無い。

（照明も変わってるわね）

どうやら店じまいをしている真っ最中らしい一軒の店の玄関先には、

楕円形の不思議なランタンが吊るされている。おそらく中に蝋燭か何かが入っているのだろうが、ランタンの周囲は考えられないことに紙で覆われていた。

（紙でランタンを作るなんて……。すぐに燃えるじゃない）

それとも、使い捨てのランタンなのだろうか。もしかしたら、用が終われば度に燃やして灰にしてしまうのかもしれない。森林が少ない。

つまり紙が貴重なアルテリアでは、そんな浪費は考えられない。

（まあ、ファーナは山と田舎だけはいっぱいありそうだから、考えられない話じゃないわね）

風が運んで来た空気に乗って、焼き魚の匂いが漂って来た。正午近くに食事は取ったが、1日中歩けば腹も減る。久々に、心地よい空腹感を覚えた。そしてふと、脳裏をひとつの疑問が掠める。

「ねえ、若旦那」

「はい、何でしょう」

景気のいい返事に少しばかり気圧されそうになりつつ、光宮は気になったことを口にしてみる。

「この辺りの人たちは、肉料理は食べないの？　ラタ地方に来てからずっと野菜と魚しか食べてない気がするわ。あと、海藻が浮かんだミソのスープ」

「ああ、そうですねえ。基本的には、あまり肉というのは口にしない方が多いですよ。中には、山で狩った猪（しし）を食す方もいますが」

「しし？　獅子？」

「いえ、ファンゴに似た動物の猪の方です。それに、山に昇られた方は殺生はご法度という決め事があるのだそうで、魚さえも口になさらないそうです。生臭いものは、汚れを呼ぶという意味もあったかな」

「へえ～」

汚れを呼ぶ、というその言葉で、山に昇った人というのはこの地方に独特の宗教的な意味合いを持つのではないかと推測した。自分たちが女神オーディナを崇拝しているように、この地方の人々にも崇拝している神がいるのだろう。

（ファーナの国教はそんな感じじゃなかったと思うけど。やっぱりこの辺りは遅れてるのね）

絶対神がいて、救世主と呼ばれる者がいて、アルマゲドンだかハルマゲドンだか、何だかよく分からないが、そんな感じの名前で呼ばれる世界の終末が起こるとか、何とか。光宮が記憶している限り、ファーナの国教は、そういった内容の宗教だったと思う。

（世界の終末。アルテリアで言うところのラグナ・ロクね。どこの国

でも、いつか世界は終わるんだって思われてるんだわ）

そんなことを考えながら、一同を先導する美代の背中に視線を向ける。

（モンスターの素材で作った髪飾り……簪（かんざし）って言ったかしら。それを作る店、か。どんなところなのかしら）

正直、興味はある。見てみたいとは思う。だが、今は何より早く温泉に入って食事を取って、布団という名のベッドに入って休みたいという気持ちが先立ってしまう。

（明日でいいわ。明日で。明日ちょっと見せてもらえないか頼んでみよう……）

＊

疲れてくると無言になる。それが自分の癖だと光宮は自覚していた。

ライトとレフト、ヒチ、美代、それに若旦那が楽しそうにどうでもいい会話をしながら歩き続けている横で、光宮は朦朧としながらほとんど本能だけで足を進めていた。

「おい、光。お前、死人返り（ゾンビ）みたいな顔してるぜ？」

「……ほっといてよ、レイ」

いつもならば言い返すところだが、今はくだらない会話をする体力すら惜しい。惜しくて仕方ない。

「あそこです。着きましたよ」

気分的にはレテの川（三途の川）を半分ほど渡ったような感覚に襲われていた時、ついに美代から救いの声がかけられた。

「お疲れ様でした。さあ、どうぞ」

朝から全く変わっていない美代が、少しばかり足早に一軒の家を目指して進み始めた。

（やっと寝れる……。とにかく休みたいわ……）

関所を通過して1時間余り。ようやく目的地に到着したらしい。今更だが、随分と遠かった。

「ただいま戻りました」

木で作られた板戸の前に立ち、美代は木造の建物の中へ向かって声

をかける。どうやら鍵というものは持っていないらしい。随分と不用心だ。建物の雰囲気は周囲に軒を連ねる家々と変わらない。建築年数にも、特に目立った特徴は無かった。店、と聞いていたが、時間的にもう閉店してしまっているのだろう。きっちりと引かれた板戸の前には、商品らしきものは何一つ見当たらなかった。

（2階建てなのね）

窓の数と建物の高さからして、2階建て。広さや奥行きまではよく分からなかったが、昨晩泊まった宿屋ほどの大きさはないだろうということは推測できた。

「遅いよ、お美代！　どこで油売ってたんだい！？」

美代が声をかけてから少しして、奥の方からせわしない足音が聞こえて来たかと思うと、勢いよく開かれた板戸の向こうから老年に差しかかろうかという年ごろの女性が顔を見せた。随分と元気そうである。

（……この人がお美代さんのお義母さん？　え？　確か、腰が悪くて

困っているから、美代さんにティア村までお使いを頼んだって言ってなかったかしら？）

困惑を覚えつつ女性の顔を凝視する光宮であったが、凝視されている女性の方がもっと困惑した顔をして光宮たちを見渡していた。

「この人たちは誰だい？」

「首都の薬屋さんの若旦那様です、お義母さん。王宮にも薬を納めてらっしゃるんですって。ティア村で偶然お会いしたんです。お義母さんの薬を作ってくださるとおっしゃってくれているんですよ」

「まあ、それはそれは……まあ、王宮に……」

美代の説明を聞いて、女性の顔にあからさまな畏怖のようなものが刻まれる。同時に、女性は悪いという腰を勢いよく４５度の角度に曲げた。

「まあまあ、そんなところに立っていらっしゃらないで、こちらへお入りください。大したもてなしもできませんが、さあさあ、どうぞこちらへ。すぐに主人と倅（せがれ）を呼んで参りますので」

何だか変わった人だ、と光宮は思った。

共鳴２０（後書き）

ブリーチがおもしろくて仕方ない今日この頃です。

マンガで読んでいるので先は知っているのですが、今ＤＶＤで戸魂界・救出編の３まで見ました。

一護が卍解を会得するとかしないとか、あの辺りですね。

それにしてもアニメのブリーチは予告がおもしろいっ！

斑目一角と綾瀬川弓親が十一番隊の隊員募集をしていた時には本気で応募しようかと思いました（笑）

どうせ入るなら更木隊長の十一番隊がいい！　だって、おもしろそうじゃないですか～！

共鳴２１

「それでねぇ、しらす屋さんの若奥さんと若旦那さんなんだけど、真夜中もと～っぷり更けたころによ～く喧嘩してるんだよ。それも商売のことがどうのとか、そういうんじゃなくてねえ、うちにはお金が無いのにまた幾らスッただの、またどこそこから借金をして来ただの、そういう話ばっかりでねえ。どうも若旦那が賭博（ギャンブル）にハマっちまったみたいなのよ。まあ、最初のうちは自分の小遣いの範囲で遊んでたみたいなんだけどねえ、最近じゃあ金貸しに頭下げて借金してるって話さ。

まったく困ったモンだと思わないかい？　もしもうちの倅（せがれ）がそんなことになったら、とてもじゃないが家には置いておけないよ。しらす屋さんの大旦那さんと大奥さんも、よく我慢してるモンさ」

「はあ……」

「ああ、でもやっぱり育て方が悪いっていうのもあるんじゃないかねえ。何たって、しらす屋さんのところは男の子が１人だけでしょう？

たった1人の跡取り息子ってことで、それはもう大事に大事に育てられて来たってのを、あたしはよぉく知ってるんだから。しらす屋さんのところは他に娘さんが3人いるんだけどねえ、3人が3人ともロクなことになってなくてねえ。一番上の娘さんは、2年くらい前にどこの馬の骨とも知れない男と駆け落ちして家を出て行っちまってねえ。二番目の娘さんは早くに亡くなったし。末の子はもう三十路を過ぎてるっていうのに、未だに嫁の貰い手が無いんだよ」

「へえ……」

「やっぱり大奥さんよ。そもそもねえ、あそこの大奥さんは余所(よそ)から嫁に来た人なのよ。あたしはちゃ～んと忠告したのよ、あそこの大旦那さんに。余所から来た女なんて、どうせロクなモンじゃないよって。

この辺りの習わしも礼儀作法も、な～んにも分かっちゃいないんだから。そんなどこの馬の骨とも知れない女を家に入れたら、家が傾くだけでロクなことになりゃしないんだから、お止しなさいって。でもあの人もホラ、頑固な人だから。あたしらがいくら親切心で忠告してあ

げても聞きゃしないんだよ」

「そうですか……」

光宮は、そろそろウンザリしていた。それは両脇にいるレイと夏葉、

そしてさすがの薬屋一同も同様らしい。それぞれの顔には苦笑いという名の愛想笑いが浮かんでいる。だが、一様に口元が引き攣っていると言う点で共通していた。

（よく喋るオバサンだわ……）

自分も大概、第三者から頻繁に「口から先に産まれて来た」と評されるが、今自分の目の前にいるオバサンはまさしく「口しか産まれて来なかった」と言っても過言ではないような気がする。

（そろそろ3時間なんだけど……）

朝食の席に着いたのが今から3時間前。その時、自分たちの食事の世話をしてくれたのが、この女性である。名前は佐知。美代の義理の母にあたる人だ。

「そうそう、そう言えばねえ、ここから左に曲がって、ず～っんと真っ直ぐ行った後、もう一回左にず～っと行って、ネコの看板がある店のところを右にず～っと行ったところにある橋を渡って、ま～っすぐず～っんと行って右に曲がったところに、よろづ屋さんって言う店があるんだけどねえ」

身振り手振りを加えて、少しでも自分たちにその「よろづ屋」という店の位置が分かりやすいように説明してくれている佐知だが、その説明で場所を特定できるのは本人と神のみである。

「よろづ屋さんのところにねえ、最近よくお役所の人が出入りしているのよ。それがどうも妙な話でねえ。真夜中の零時過ぎなんて言う時間に、いつもいつもコッソリやって来るらしいのよ。あ、この話はねえ、よろづ屋さんの正面の3軒お隣にある、きつつ屋のお千代ちゃんから聞いた話なんだけどねえ。何せ、あの人もホラ、年でしょう？だから最近、夜中にお手水（トイレ）に起きることが多いんだって。それでホラ、

夜中だから暗いじゃない？　暗いと年寄りはすぐこけるしねえ、足元

が見えないのは怖いし、もったいないと思いつつも提灯に火を入れて厠に行ったんだって」

「へえ……」

「あ、お千代ちゃんの家はねえ、まだ家に厠が無いのよ。古い家だから。それに大旦那さんも昔堅気の人でしょう？　家の傍に不浄が来るとモンスターを呼ぶなんて迷信を未だに信じてる人でねえ。だから、お千代ちゃんの家の人たちは今でも川の横にある厠を使ってるのよ」

「そうですかあ……」

佐知の話は、最初のうちこそ「よろづ屋」という店にやって来る不信な役所の人間から始まっていたが、最終的には千代という知人女性の身辺情報へと摩り替わってしまっている。

（ライトボウガンの速射能力も、お佐知さんの口くらい向上すればいいのに。そうしたらもっと簡単にモンスターを倒せるわ）

内心で密かに嫌味を呟きつつ、光宮はまさしく速射能力最大のスキルを備えた佐知の口が回転を止めるのをひたすら待ち続けていた。昨

日一晩の宿を無償で恵んでくれた上に、夕食と朝食まで食べさせてくれたのだ。さすがに、佐知を無碍にはできなかった。

（きっと、普段は話し相手になってくれる人がいないのね）

そう思って長い話に耐えているものの、3時間も付き合わされればさすがに疲れてくる。ついでに、彼女の口から出る言葉に、あからさまな他人への悪口が含まれていることが多いとなればなおさらだ。正直、他人の悪口はあまり聞いていて気持ちのいいものではない。

（そりゃあ、人間だもの。たま～に愚痴というか悪口を言いたくなる気持ちは分かるわ）

しかしながら、そろそろ嫌になってきている。

「でもまあ、よろづ屋さんのところは商売が繁盛してるしねえ。お役所の方をお招きして、お接待をしていてもおかしな話じゃあないけど。

でも、あそこは昔はそりゃあ小さな店だったのよ。それが今の旦那さんの代になって、急に店が大きくなってねえ。奥さんもよく働く人だ

から。それを言うならウチの店だって、お祖父さんの代はそりゃあ小さな小さな店だったんだよ？　でもあたしがウチの亭主の尻を叩いてやったからねえ、何とかここまで漕ぎつけたよ。ウチの亭主ったら、弱いくせに酒なんて飲んで来ることが多くて。次の日になっても布団から起きてきやしないんだよ。でもその時、あたしは言ってやったのさ。そんな情けない男に嫁いだ覚えは無いよってね。だいたい、酒に飲まれて商売を休むなんざ、男のすることじゃないしねえ。そんな覚悟で店を継ごうなんて、甘ったれるのも大概にしなって」

今度は自分の自慢話が始まった。

「まあ、ウチは幸いなことに倅に恵まれてねえ。誰に似たんだか知らないけど、あの子は昔から何でもできる子で、体も丈夫だったしねえ、

おまけに手先も器用で。ウチのお弟子さんが１０年も修行してやっとできるようになることを、あの子はたった３年で習得してしまったんだよ」

自分の自慢話の次は息子の自慢が始まってしまった。

「それもまあ、あたしが小さいころからきち～んと教育して、跡取り息子としての器量ってモンをイチから教え込んだからだと思うんだけど。だってそうでしょう？　いくら産まれた時からいろんなモンを持っていても、それを磨いてやらないと、な～んにもなりゃしないんだから。今のあの子があるのもあたしがちゃんとしていたからさ。それにあの子も、ちゃ～んとそれを分かっててねえ」

再び、佐知の話は自分の自慢に戻った。今度はまた息子の自慢話に移行しそうな気配だったので、もうマジメに聞かないことにした。他人の悪口以上に、自慢話ほど聞いていて面倒だと感じるものはない。

（自分を肯定して欲しいのがミエミエなのよね。こんなに頑張って来ました。こんなに苦労して来ました。こんなに誰それに尽くして来たって言うのを言いたいだけ言いまくって、それを聞いてる人が、本当にその通りですよって言ってくれるのを待ってるんだわ）

そして、肯定以外のいかなる言葉も聞きたくない。佐知のそういった心理は、手に取るように分かる。むしろ顔に書いてあると言っても

過言ではない。

（こっちが何か別のことを言い出す前に、とにかく自分が喋る。喋りたいだけ喋って自分が満足できれば、それでいいんだわ）

正直、光宮は佐知のようなタイプの人間は好きではなかった。泊めてくれた恩義は感じるが、あまり仲良くなりたいとは思わなかった。何より、そろそろ開放して貰いたい。

（簪を作っているところを見たかったんだけどな）

しかしながら、佐知の口車は一向に止まる気配がない。いつになったら立ち上がれるのか、痺れた足を撫でながら、内心で重い溜め息をついた。

＊

結局、光宮たちが佐知から解放されたのは昼の1時を回った時刻のことだった。朝食を取った畳の部屋で、そのまま続けて昼食をいただくことになってしまったのである。

「ごめんなさいねえ。お義母さんも悪気があってのことじゃないんで

すよ。普段はあんな人じゃないんですけど。やっぱり久しぶりのお客様だったし、舞い上がってしまったんだと思います」

光宮たちの昼食を運んで来てくれたのは美代だった。彼女は相変わらず笑顔のまま、姑(しゅうとめ)をさりげなくフォローする。

「いえいえ、こちらも楽しませていただきました。やはり、その地方の方の話を詳しく聞かなければ、こうして各地を旅しているという実感が湧きませんからね」

そして、そんな美代をさりげなく後押しする薬屋の若旦那。あれだけ佐知の舌攻撃を受けてなお、これだけの余裕がある彼はある意味、大物に違いない。

「そう言ってくださると有難いです。さあ、どうぞ。店の方へご案内いたします」

「おお、ぜひとも」

美代の言葉を受けて、薬屋一同が一斉に立ち上がった。それに釣られて光宮たちも立ち上がろうとしたのだが、慣れない正座で足が痺れ

ていたらしく、レイと夏葉と一緒になって畳の上に転んでしまった。

長時間の正座で、すでに足の感覚が無くなるほどに痺れてしまっている。痺れていることさえ気付かなかったのは、初めての経験だった。

「首都の方は普段、正座などしませんからね。仕方ないことです。大丈夫ですか？」

「だ、だいじょ……う、ぶ……よ」

若旦那の心配そうな声にかろうじて答えつつ、光宮たちは気持ち悪さを何とか堪えて立ち上がる。

「都会の方は大変ですね。さあ、どうぞ」

笑顔の美代が、襖（ふすま）と呼ばれる紙素材の戸を開く。そして、そこに続く板張りの廊下へ、おしとやかな仕草で足を進めた。

（ああ、もうカンベンして欲しいわ）

佐知を恨んでも仕方ないと思うのだが、まるで拷問のようなこの仕打ちには、文句の1つや2つ垂れても許される気がしてならない。

（どこの国でも女の人はよく喋るのね。特にオバサンは）

最も、アルテリアの女性の場合は、何かしら気に食わないことがあると本人に直接、文句を付ける場合が多い。その本人がいないところで、長々と陰口を叩く人というのはあまり見かけない。

（お国柄の違いってヤツかしら）

どうやらファーナの女性たちは、陰口が好きらしい。勝手にそう決めつけながら、光宮は美代の背中を追いかけた。

（やっぱり家の中では靴を脱ぐのね。あたしたちはハダシだけど、美代さんは、何て言うのかしら。足先だけのストッキングみたいなのを履いてるわ）

踝（くるぶし）までしかない短いストッキングは、自分が知っているいかなるものより厚手の生地でできている。ついでに、どういうワケか、足の親指と人指し指の間に切れ込みのようなものが入っていた。

（着物に合わせて履いてるのかしら。何だか見てるだけで足が痛くなりそうだわ）

ついでに、美代が着ている服は随分と窮屈そうな印象がある。この

暑い時期に、全身をぴったり覆って露出が少ない着物。更に腰には見ただけでウンザリするほど重たそうな帯を巻いていた。首都から来たということになっているので、下手な変装は無用と判断し、光宮たちは今、もともと自分たちが着ていた服に袖を通している。布地が少なく、露出部分も多いため動きやすく、涼しいアルテリアの服に比べて、

こんな窮屈な服を着ているファーナの女性は大変そうだと思う。

「さあ、こちらですよ」

廊下の先にあった階段を降り、昼間だと言うのになぜか薄暗い廊下をしばらく進んだ後、美代が板戸をガラリと開いた。

（なに、ここ）

板戸の向こう側は、家の中だというのに地面のようになっており、自分たちが今、立っている場所よりも５０センチばかり低くなっている。正面は大通りに向かって開かれており、そこから午後の陽光が斜めに入り込んで来ている。光宮たちが立っている廊下のすぐ下には、

草履（ぞうり）という名の靴が人数分きちんと用意されて置いてあった。

「さあ、こんなもので申し訳ございませんが、こちらをお履きになってくださいまし」

美代に勧められるまま、光宮は生まれて初めて草履に足を通す。何だか足の裏がチクチクして、お世辞にも履き心地が良いとは言えない。

だが、無いよりマシ。そう思って我慢することにした。

「うわぁ～！」

広さにして畳8枚分ほどの部屋に、自分の腰ほどの高さの棚が幾つも並べられ、そこには見るからに美しい簪が所狭しと飾られて客を待っていた。

「綺麗ね。これ、本当にモンスターの素材からできてるの？」

「ええ、もちろんです」

色とりどりの簪たちを見て回りながら、光宮たちは感嘆の声を上げていた。数百にも登ると思われる数の簪たちは、どれもこれも繊細な

細工が施され、あるいは美しい花を形どり、差しこむ陽光を受けてキラキラと輝いている。

（欲しい……）

お金があれば買うのに。心の底から、そう思った。

「ねえ、触っても大丈夫？」

「もちろんです」

美代から了解を得たので、光宮はさっそく気になっていた桃色の花の形をした簪をひとつ、手に取って見る。

「それは、桜の花ですね。小さな銀の花はオオイヌフグリという野草です。桜の素材はリオレイアのウロコですよ」

「へえ～！」

桃色のウロコを持つリオレイアと言えば、やはりレイアの亜種、通称・桜レイアと呼ばれているあのモンスターだろう。

（生きている時には厄介というか、メーワクなだけのモンスターだけど、こんなに綺麗な簪に加工してもらえれたんだもの。死んだ甲斐は

あったって思ってるわね、きっと）

買いたい。だが、手持ちの金が無い。残念で仕方無かったが、ここは諦めるしかない。そう思って、光宮は簪を傷付けないようにそっと棚へ戻した。

「お美代さん、あちらは工房ですか？」

自分たちと同じように簪に嘆息を漏らしている薬屋一行の中、若旦那が向かって右手にある板戸を差しながらそう問いかけるのが聞こえて来た。

「はい、そうです。でも、申し訳ございません。簪の作り方などは家の者以外にお見せするわけにはいかない決まりでして」

「ああ、そうでしょうね。まあ、残念ですが、仕方ありませんね」

心の底から残念という顔をしながら、若旦那が大袈裟な溜め息などついて見せた。その時、光見たたちが歩いて来た板戸の向こうにある廊下から、人の話し声が聞こえて来た。

（この声、お佐知さんだわ……）

忘れたくても忘れられないこの声に、光宮は簪を見て高揚していた気分が一気に沈んで行くのを感じた。自分たちがここにいるのを見たら、きっとまた自慢話が始まるだろう。

「……ったく、堪んないよ。これだから余所の女は！　礼儀がなってないったらありゃしない！　余所の家の畳にハダシで足を乗せることが、どれだけ非常識なのか分かってすらいないんだよ!?　おまけにあんな恥ずかしい着物を着て！　首都から来たっていうから、どんな女かと思えば、とんだアバズレばっかりだね！」

現在、この家に首都から来たということになっている女というのは自分たちしかいない。佐知が自分たちのことを言っているのだと言うことは、すぐに分かった……。

（クソババア！！）

共鳴２１（後書き）

中学時代の先輩がバイク雑誌に載っていました。

それも、今が旬の芸能人並みに特集を組まれて……。

乗っているバイクもハンパないけど、本人もすげえ！！　と思いました（笑）

「ＶＩＢＥＳ」というバイク雑誌です。４月号の……。もしよかったら、書店で見かけられた際にご覧になってください。バイクが、本気でハンパないっすよ（笑）

先輩の名前は「つっちー」さんです。

共鳴22

「本当にすみませんね、光さん、夏葉さん、レイさん」

二階にある美代の部屋。畳6枚分の小さな部屋に、たったひとつだけ
置かれた家具である四段重ねの木箱をゴソゴソ言わせながら、美代は背
後にいる光宮たちに向かって苦笑を向けた。

「お義母さんには、決して悪気は無かったと思います。我慢に我慢、苦
労に苦労を重ねて、今日までやって来た人ですので、ついつい思っても
いないことが口に出てしまったんだと思います。どうか許して差し上げ
てください」

言いながら、美代は木箱の中から厚手の紙に包まれた着物を3枚ほど
差し出して来た。

「……許す許さないの問題じゃないと思うんだけど。どれだけ苦労

とか
我慢を重ねて来たのか知らないけど、それは他人を傷つけていい理由に
ならないわ」
「そうおっしゃらないでください」
「お美代さんはどうしてあのババアをそんなに庇うの？　どう贔屓目に
見ても、誰かから庇われるような人じゃないと思うんだけど」
美代は何も言わない。いつも通り、ただただ困ったような笑みを刻ん
で言葉を濁すだけだ。
「光、もういいよ。済んだことだろ？　それに、お佐知さんがいないと
ころで何だかんだ言っても意味が無い」
「……それはまあ、そうなんだけど」
光宮の肩に手を乗せながら、夏葉にやんわりと窘（たしな）められてしまった。
普段あまり喋らない夏葉に正論を向けられると、喉まで出かかった

言葉

も何となく飲みこまなければならないような気分になる。佐知だけでな

く、美代にも言いたいことはあったが、ここは諦めて「済んだこと」に

することにした。

「まったく、やってられないわね。この辺りの人間には」

溜め息混じりに小さく嫌味を呟きつつ、光宮は着ていたアルテリアの

普段着を脱ぎ捨て、美代のものと思われる着物に袖を通す。

（暑苦しいのに……）

露出を極限まで控えたラタ地方に独特の衣装、着物は、シャツやスカ

ートに慣れている自分からすれば着心地が悪いことこの上ない。おまけ

に、ただでさえ暑苦しい着物の上から帯を何重にも巻かれるのだ。

暑苦

しいだけではなく、息苦しい。美代だけでなく、この地方の女性たちは

よく耐えるものだと感心させられる。

（ホント、やってられないわ）

そもそもの始まりは、光宮たちが店先にいることを知らない佐知が、

簪（かんざし）を作る工房で働く弟子の誰かに彼女らの悪口を言っていたことだ。アア

バズレだの、礼儀知らずだの、好き放題言われて、光宮の神経は音を立

てて切れた。

（言いたいことがあるならちゃんと言えばいいんだわ。畳にハダシで上

がらないで欲しいって。そしたらいくらでも聞くわよ）

しかし、佐知は光宮たちにはそのことを告げず、全く関係ない者に愚

痴として零していた。それも、あからさまな誹謗、中傷の言葉でもって、

である。

（あのクソババア！　思い出しても腹が立つ！）

光宮たちに自分の発言を聞かれたと分かった佐知は、あっさり開き直った。そして今度は首都の女でも簪に興味を持つのか、とか、自分の店の簪の良さが分からない者に買われても簪の価値が下がる、だの、そう言った言葉を器用に「丁寧な言葉」の中に織り交ぜながらペラペラと喋りまくってくれた。

（何なのよ、もう！）

一触即発だった光宮を止めたのは、夏葉でもレイでもなく、薬屋の若旦那だった。彼曰く、見知らぬ土地に来た時にはその土地の風習や作法に従え。それが礼儀である、とのこと。真っ向からそう言われれば佐知だけでなく、若旦那にも怒りという名の火山が爆発したところだが、それは年の功と言うべきか。うまい具合に気分と思考を逸らされなが

ら言

葉巧みにそういった方向に話を進められてしまい、気が付いた時には佐

知に文句を言うことができない雰囲気になってしまっていた。

（せめて“クソババア”の一言くらい言っておくべきだったかしら）

結論から言えば、薬屋の若旦那のおかげで光宮と佐知の口喧嘩が勃発

することなく万事がうまく納まったと言えるだろう。だが、言いたいこ

と、言うべきことを一言も言わせて貰えないまま、まるで負け犬のよう

に尻尾を巻かされることとなった光宮にしてみれば、何だか戦っても い

ないうちから敗戦してしまったようで、非常に気分がよろしくない。

（くっそ～！！）

若旦那の言葉を聞いて、美代が自分の着物を貸すと申し出てくれた。

そのおかげで、今こうして彼女の着物に袖を通しているわけだが、美代

の部屋に引き下がって行く自分たちを見送る時の、佐知の「あの」顔。

（思い出しただけでもハラワタが煮えくりかえるわっ！）

およそこの世に溢れる「悪意」というものをすべて濃縮、もしくは凝縮し、笑顔に作り変えて人間の顔に張り付ければ、きっとあの時の佐知の顔になるだろう。そう思うには充分なほど、佐知の表情は幸せに満ち溢れていた。

（将兄だって、あそこまでタチの悪い顔はしてないわよ！？）

今まで出会って来たいかなる人間の中でも、自分が最も苦手だと感じた1人の青年の端正な顔立ちを引き合いに出しつつ、光宮は無意識に拳を握りしめていた。

「さあ、出来ました。よくお似合いですよ。姿見（すがたみ）をご覧になりますか？」

先ほどの一連の出来事を最初から最後まで思い出しながら眉間に皺を
寄せていた光宮は、相変わらず優しい美代の声で現実に引き戻された。
「けっこういいじゃん。暑いけど」
ふと周りを見渡せば、自分と同じように美代の着物を着せられた夏葉
とレイが、それぞれの着物をしげしげと見下ろしつつ、満足そうに笑っ
ていた。
（こいつらも……！　何でさっきあんなことがあったっていうのにケロ
ッと笑ってられるのかしらっ！？）
黄色を基調にした着物に袖を通したレイ、赤を基調にした着物に袖を
通した夏葉。確かに2人とも、着物を着ていてもあまり違和感が無い。
夏葉など、まるでよくできた等身大の人形のようだ。だが、それとこれ

とは話が別である。

（頭のネジが吹っ飛んでんじゃないの！？）

自分がただ単に執念深いだけだとは思ってはいるが、認めたくはない。

それを認めれば、自分は佐知と同レベルになってしまう気がする。

それ

だけは、死んでも嫌だ。それはまさしく価値観の違いだの、生活習慣の

違いだの、宗教の違いなどという単純な問題ではなく、メンツとプライ

ドという複雑な問題なのである。

「へえ～、着物もけっこういいな！」

「うん」

美代が襖を開き、隣へ続く部屋から持って来た人間の身の丈ほどの鏡

に自分の姿を映しつつ、レイと夏葉が楽しそうに会話していた。

「光～、いつまでキレてんだよ」

「キレてないわよっ！　失礼ねっ！」

「はいはい。キレてない、キレてない。いいから見てみろって」

とことんバカにされながら、レイに腕を引かれて光宮は鏡の前に立た

される。アイリスの花が描かれた淡い桃色の着物を着ている自分が、鏡

に映った。

（あら……）

自分でも単純だと思うほど、佐知に対して抱いていたマグマのような

怒りが、可愛い着物を着ている自分を見ているうちに冷え固まっていく

のを感じる。ただし、これもまたメンツとプライドという複雑な問題で、

事実関係は決して認めたくはない。

「き、着物は可愛いわね！　それは認めてあげるわっ！」

精一杯の嫌味を呟くと、傍で見ていた美代とレイと夏葉が同時に声を

上げて笑った。

「な、何よ!?　可愛いものを可愛いって言って、何が悪いって言うの
よ!?　私は何もおかしなこと言ってないわっ!」
「はいはい、そうだね。着物は可愛いね」
「どういう意味よ、レイ!?　バカにしてんの!?」
「べっつに～」
視線を逸らしながら適当なことを言うレイの顔には、バカにしてます
という文字が書かれているような気がしてならない。もちろん、幻覚で
ある。
「それより、せっかく着物に袖を通されたのですし、御髪(おぐし)も結ってみま
せんか?」
「おぐし?」
「えっと……髪のことです」
髪のことを「御髪」と言うらしい。初めて聞く言葉だった。成り

行き

とは言え、せっかく可愛い着物を着せてもらったのだ。ついでに髪型も

可愛くしてみたいと思うのは、どうしようもない乙女心である。美代の

言葉に、心が揺らいだ。

「……チョンマゲは嫌よ」

「それは殿方だけです」

分かってはいた。分かってはいたが、万が一のことを考えて最初に断

っておくに越したことはない。それに、嬉々として髪を結ってくれと頼

むのも、何だか癪に障るのだ。

「素直じゃねえなあ、ホント」

「それが光だから」

「違いねえな」

鏡の前に誘導される自分を、レイと夏葉が笑っている。とりあえず文

句を垂れようとしたのだが、何を言っていいのか咄嗟に分からず黙り込
んでしまった。

「ラタの伝統的な髪型にするには、ちょっと長さが足りないですね。軽
く纏める感じで、着物に似合うように結ってみましょうか」

「え、ええ……お願いするわ」

＊

「おやまあ、随分と可愛くなられて。見間違えましたよ」

着物に袖を通し、髪をアップにした後、改めて店先に向かおうとして
いた時、自分たちの様子を見に来たらしく、途中の廊下を歩いていた薬
屋の若旦那が開口一番にそう言って来た。

「誠にその通りで。いやぁ、もともと美しい方というのは、何を着ても
似合いますねえ」

使い古された褒め言葉で若旦那に便乗するライトと、

「いやいや、美代さんの見立てもなかなかのものですよ」

さりげなく美代を上げるレフト。この2人もなかなか口が達者である。

「これなら文句ないでしょ？」

刺のある言葉を隠せないまま、彼らの賛辞を一切無視して言えば、若旦那がニッコリと笑って見せる。

「ええ、もちろんです」

彼が自分たちに何を求めていたのかは分からないが、とりあえずご満足になられたらしい。

（タヌキに似てるわ）

そんな若旦那の態度を見ていると、否応なく脳裏に思い描いてしまう人物がいる。アルテリア秋軍を束ねる、秋軍将その人である。そう言えば、秋軍将と若旦那は褐色の肌という点で共通している。

（今ごろ心配してる……ワケないわね）

秋軍将が自分のことを心配するところなど、想像もつかなかった。幼いころから世話をして来たのだから、少しくらい心配してくれてもいいのではないか、と思わないでもない。ただ、そんな理屈が通じるのはあくまで相手が人間であることが前提である。実質タヌキである彼に言うだけ無駄なのだ。

「さて、簪を拝見させていただいている途中でしたね。おお、この機会だ。光さん、夏葉さん、レイさん。お一人ずつにどれかおひとつ、お好きな簪を買って差し上げましょう」

「はあ？」

願っても無い申し出だった。だが、いきなり自分たちに簪を買ってや

ると言い出した若旦那の真意が分からない。何の疑いもなく喜んでいる
レイを尻目に、光宮はついつい胡乱気な顔を若旦那に向けてしまっていた。そんな彼女に、彼はどこかのタヌキを彷彿させる笑みを向けて来る。
「なに、深い意味はありませんよ。私も男ですから、若くて可愛らしい女性にはちょっとした贈り物をしてみたくなるものなのです。それが男のサガというもの。お気になさいますな」
「……」
「それに、光さんがお美代さんをご紹介してくださったおかげで、薬が売れましたからね。お礼のつもりです」
それを先に言えばいいのに、と思った。
「と、いうことを先に言ってしまうとつまらないですからね。この年になると、若い女性に見向きもされないもので、この機会に男を上げ

てみ

ようと思った次第です」

「……あっそう」

初めて会った時から感じてはいたが、やはり薬屋の若旦那は変わった

人間のようである。

（まあ、いいわ。あの桜の簪、欲しかったし。後から何か言ってきたら、

力づくで逃げればいいわ）

そんな風に思いながら、光宮たちと薬屋一行は階段を降りて店の方へ

と向かう。相変わらず薄暗い廊下を歩いている時、どこからともなく聞

き覚えのある声が聞こえてきた。

（クソババアだわ）

どうやら誰かと話しているらしい。だが、佐知の声は先ほどとは違い、

あからさまに媚びへつらっている雰囲気が滲み出ている。

「まあ、ホントに？　それは大変でしたねえ。早くお元気になられると
いいのですが。まあ、しらす屋さん、おたくのところも？　それはそれ
は。本当に、最近は物騒な世の中ですねえ」

話し相手は「しらす屋」であるらしい。その店の名前は記憶にある。
朝食の席で、佐知がさんざん悪口を言っていた店の名前は確かそんな名
前であった。

（本人がいないところでは言いたい放題。いざ本人が目の前に来ると、
コレだわ。何なのよ、もう）

佐知の態度を見ていると、ネコかぶりという単語も浮かんでくる。た
だし、佐知がかぶっているネコはどう考えても1匹ではない。少なく見
積もっても、5匹はかぶっている。

「お美代。ここにいたのか」

佐知の豹変した態度を何とも言えない顔で見ている時、工房があると

いう板戸の向こうから、美代の旦那であるエドが顔を見せた。その途端、

なぜか美代が廊下に正座する。

「エドさま」

エドは、上半身を脱いでなお汗だくになっていた。肩にかけた手ぬぐ

いで顔の汗を拭いながら、彼は薬屋の若旦那の方へ向かって軽く一礼す

る。何だか礼儀正しい人だ、と光宮は思った。

「お美代、ちょいと用ができた。出て来る。上掛(うわか)け」

「はい」

着物の上に羽織る上着を意味する上掛け、と言われ、美代は丁寧な返

事をして立ち上がる。何となく、光宮は2人の態度が気に食わない感じ

がした。

「財布！」

「はい」

まただ。必要な物の名前を言うだけで、エドは美代に「取って来てく

れ」とも言わない。

（何よ。まるで美代さん、キッチン・アイルーじゃない）

これもまた、この国に独特の風習なのだろうか、と光宮は廊下を立ち

去って行く美代の背中を見つめながら思った。

そしてその夜、エドは帰って来なかった。

共鳴２２（後書き）

本日、友人Ｘが遊びに来ました。

友人Ｘ曰く「夏に食べる肉には哀愁がある」とのこと。

……？

何だかよく分かりませんが、セミの声とか風鈴の音とか、いわゆる夏の音を聞いていると無常感に襲われるそうです。で、その無常感の延長で殺された家畜が哀れになってくるとか来ないとか。

「冬に食べる肉は平気なのか？」

と聞くと、

「もちろん平気」

とのこと。その理由は……。

「冬は寒いから脂肪が必要。そのためにタンパク質を摂取するのは当たり前」

らしいです。

よく分かりませんが……。

共鳴２３

腰と足の裏から、砂利道に揺れる馬車の振動が伝わって来る。傾き始めた午後の日差しが、人の手の平ほどしかない小さな窓の向こう側から差し込んでいた。薄暗い馬車の中に落とされた小さな丸い光は、さながら夕暮れの空に浮かぶ太陽のようで、振動に合わせてゆらゆらと揺らぐ光を見ていると、水に落としたインクのように小さな不安の滴が心に広がって行く気がした。

（気味が悪い……）

無駄と知りつつ、中也は床に落ちた光に向かって片足を差し出してみる。願わくば消えて欲しい。そう思った。しかしながら当然のごとく、光は消えることなく、床の代わりに自分の足の甲を照らし出すだけだ。

「な～にしてんだ～、中也～？」

自分の取った行動を見ていたらしいシヴァが、間の抜けた声でアクビ混じりに聞いてくる。

「別に。何となく」

「あっそう～」

真意は特にない。そういう意味合いを込めて、中也は適当な返事をした。シヴァもそれ以上は何も言わず、頭の後ろで腕を組んだ姿勢のまま、足を組み替えて再び目を閉じてしまった。

（余裕、だな）

明日にはいよいよベルキュロスと戦わなければならない。考えただけでも緊張で息が詰まりそうな自分とは対象的に、シヴァもルナも普段と変わったところがない。それが羨ましくもあり、腹立たしくもある。何とも言えない気分だった。

「なあ、ベアルドさん」

「何だ」

気を取り直して、中也は自分の横で静かに座っているベアルドに声をかける。いつも通りキツネの仮面を被っている上に、行動と言動が極端に少ない彼は、起きているのか寝ているのかいまいち判別が付か

なかった。起こしたら悪いと思ったのだが、声をかけてすぐに返事があったところを見ると、起きていたらしい。

「あんた、ベルキュンと戦ったことあるのか？」

「ある」

返答が短いのはいつものことだ。気にせず、中也は話を進めた。

「どういうモンスターなのか、教えて欲しいんだけど」

彼が起きていたことに少しばかりホッとしつつ、中也は今更ながらにそんな基本的なことを聞いてみた。ベルキュロスというモンスターは、名前すら聞いたことが無かった。何の特徴も分からないまま、いきなり戦うことは、恐ろしい。普段ならばきちんと図書館で調べてからクエストに臨むところだ。しかし、今回ばかりはそんな余裕など無かったのだ。それに、ベアルドのことをおかしな方向に誤解していたせいで、聞きそびれていたこともまた事実である。

（ベアルドさんなら、教えてくれるだろ）

確信はあった。だとしたら、聞けるうちに聞いておくに越したこと

はない。

「ベルキュロスは飛竜種の、雷を操るモンスターだ」

「……それで？」

一言喋るなり黙り込んでしまうベアルドに、中也は先を促した。

「飛行能力が高い」

「どれくらい？」

「レウス以上だ」

リオレウスは通称、空の王者と呼ばれている。その由来通り、レウスは他のいかなるモンスターよりも飛行能力に長けたモンスターだと言っていい。しかし、ベアルド曰くベルキュロスは更に高度な飛行能力を有しているらしい。だが、もちろんそれだけの説明では分かるものも分からない。

「具体的に言ってよ」

「……レウスは上昇気流を捕まえ、すぐに上空に舞い上がり、そこから火球を飛ばしてきたり、強襲攻撃をかけてきたりする」

「うん」

「レウス本来の力に加えて、上空から一気に下降してくる力が加わるから、まともに受ければかなりのダメージとなる」

「うん」

「それに比べて、ベルキュロスは低空飛行が主だ」

「低空飛行!?」

ベアルドの口から出た言葉に、中也は思わず腰を浮かせていた。

「それ、ホントかよ」

「ウソはつかない主義だ」

「……」

レウスがすぐに上空に舞い上がる理由、それは言ってしまえば低空では巨体を安定させるだけの気流が足らないからだ。強靭な脚と翼の力を持ってしても、レウスほどの巨体があれば低空に留まることはできない。しかし、ベルキュロスはそれができると言う。

「……それって、かなりヤバいモンスターじゃないか？　言ってしま

えば、天災クラスになるんじゃねえの？」

「その通りだ」

高度に発達した飛行能力に加えて、雷を操る力、ついでに巨体そのものが秘めた力……それらが合わさるれば、まさしくベルキュロスは人間にとって天災と言えるほどの脅威と成り得る。

「ベルキュロスの攻撃パターンは、言ってしまえばレウスと似ていると思っていい。ただし、レウスと決定的に違うのは、突進した後すぐにハンターを振り返り、グラビモスのグラビームに似た雷を矢のように吐いて攻撃してくること」

「……」

「そして低空から、雷を纏った状態で何度も体当たりしてくること。ついでに翼の先に生えた長い尾のようなものを使って、離れた場所からでも攻撃してくること。もっと言えば、雷の固まりを自分の周りに飛ばして身を守ることができるということ。そんな感じだ」

「……全然レウスと違うじゃないかよ」

「そうでもない。ベルキュロスもレウスのように突進する」

「あっそう」

ベルキュロスとレウスの相似点は突進の一言に尽きるらしい。どう考えても相似点よりも相違点の方が多い気がしたが、ベアルドに言うだけ無駄だと思って黙っておいた。

「戦う時に注意していた方がいいこととかあれば、教えて貰いたいんだけど。出来るかどうかは別にして」

「低空飛行状態になったベルキュロスの下半身には近付かないことだ。尻尾を振り回して攻撃してくる」

「他には？」

「雷に注意しろ。まともに食らえば死ぬ」

「……参考になったよ」

自分の声にトゲが混じるのが、自分でもよく分かった。ベアルドは本当に言葉が少ない。ここは自分が戦った時の経験などを持ち出して、あれこれとアドバイスをして欲しいところだった。

「ただし、ヤツにも弱点がある」

「え？」

内心で溜め息をついた時、ベアルドが何の前触れもなく話を続けた始めた。

「天災クラスのモンスターとは言え、無限に雷を放ち続けられるワケではない。個体によって違うが、必ず限度がある。体内に溜め込んだ雷をすべて放出した後、ベルキュロスは低空飛行のまま一定時間、攻撃をしかけて来なくなるという特徴がある。ハンターが狙えるとすれば、そこだ」

「……」

「雷を纏っている時に攻撃したら、お前たちも一緒に痺れるから気を付けろ」

「……」

弱点を説明してくれる言葉に続いたベアルドのセリフは、どう考えても先ほど中也がベルキュロスと戦う時の注意点で答えるべきと

ころである。やはり、彼の話には脈絡がない。

「囮には俺がなろう。なるべく早くヤツの体内に溜め込んだ雷をすべて放出させ、お前たちが攻撃を仕掛けられるスキを作り出す。俺が合図したら、とにかく武器で一斉に攻撃しろ。いいな？」

いつの間にやら作戦まで決まってしまっていた。反射的に頷いてしまった中也は、今更だがシヴァとルナは寝ていて作戦も注意点も聞いていないことに思い当たった。

「……それ、シヴァとルナにもちゃんと言わないと」

ついそう言ったが、ベアルドは特に態度を変えることなく淡々と言い放つ。

「心配ない。タヌキ寝入りしているだけだろう。ちゃんと聞いている」

ベアルドがそう言った途端、それまで静かに目を閉じていたシヴァとルナが口元に笑みを刻みながら目を開いた。どうやら本当にタヌキ寝入りしていたらしい。

「バレてるとは思わなかった～ぜ。オッサン、意外と鋭いんだ～な」

「もちろん、ただのカンだ」

「……そうか～い」

もしもカンが外れて、2人が話を聞いていなかった時はどうするつもりだったのだろう。聞くだけバカバカしくて、中也は何も言わずにおいた。

「なあ」

「今度は何だ」

「……あんたは、モンスターを殺すことが怖いとか、可哀そうだとか思ったこと、あるか？」

「ない」

何となく聞いてみた質問には、あっさりとした答えだけが返って来た。

＊

すっかり太陽が世界の最西端に沈んだころ、中也たちを乗せた馬

車は目的地であるソルト村近くにある馬車の停留所へと到着した。

素人目にはどこが停留所で、どこがそうでないのか判別など付かないが、プロが見ると分かるらしい。そんなことより何よりも。

（ようやく降りれる）

半日以上、馬車に揺られていると平衡感覚も狂ってしまうし、何より足腰が凝り固まってガチガチになってしまう。馬車から降りて念願の地面に足を付けた中也は、大きく伸びをした。

「やっと到着した……ん？」

その時、鼻腔を刺激する何とも言えない「いい匂い」を嗅いだ気がして、中途半端に腕を降ろす。匂いに気付いたのは、シヴァも同様であるらしかった。

「何か、すげえいい匂いする～な」

「そうだな」

昼間の熱気が影を潜め、涼しさを含んだ空気の中に漂っているのは、

早い話、バーベキューの匂いだった。ここ最近、味噌汁だの惣菜だの、

そう言ったいわゆる和食系の食事しか摂っていない。魚が出ることもあったが、食べ盛りの自分たちにしてみれば同じタンパク質でも魚よりは肉の方が食べたいのだ。

（最後に肉を食ったのって、いつだっけ？）

そんなことを思うと、無意識に口の中に唾液が込み上げて来た。

「肉でも焼いてんのかな？　大量に」

「ちょっとくらい分けてくれねえか～な」

考えていることは一緒だった。バーベキューのようなものをしているなら、ぜひとも参加させて貰いたい。そう思って、中也とシヴァは期待を込めた眼差しをベアルドに向ける。

「ベアルドさん、先に行ってもいいか？」

「……好きにしろ」

実質リーダーのベアルドから了解を得た。これはもう、バーベキューをしているところに行って、ご相伴（しょうばん）に預からせてもらうしかない。

「行こうぜ、シヴァ」

「おう～よ！」

森林の狭間に切り開かれた暗い山道を、中也とシヴァは2人同時に駆け出した。予想通り、ダイエット中であるらしいルナは来ない。ベアルドの後ろで、退屈そうに自分たちの背を見送っていた。

「肉～！　肉が食いてえんだ～ぞ！　もう、ウメボシのオニギリとか、

ワカメだけのミソシルとかはいらねえんだ～ぞ！」

「同感！」

下り坂を一気に駆け下りる。ソルト村の関所は、もうすぐそこに迫っていた。

「……あれ？」

めくるめく肉の欲望に心をときめかせながら走っていた中也とシヴァは、近付いて来る関所の雰囲気に奇妙な違和感を覚えた。

「な～んだ～？　誰もいねえ～ぞ」

「そうだな」

関所には必ず槍を携えた武士がそこを通行しようとする者を検分するものだと、これまでに学んでいた。しかし、今彼らの目の前にある関所は蛻（もぬけ）のからだ。人の姿どころか、ノラ猫1匹見当たらない。

「肉焼き大会があるから、関所の人も出払ってんのかな」

「だろ～な」

手形を見せる手間が省けた。そう思うことにして、中也とシヴァは無人であるのをいいことに関所の門を通過する。

「あっちだ。何か明かりが見える」

まだ宵の口だというのに、立ち並ぶ古い家屋は、まるで深夜のようにどれも静まり返っている。それを不思議に思いながらも、次第に強くなって来る肉の匂いの誘惑に負けて、中也はシヴァと特に気にとめないまま明かりがある方向を目指して一気に走った。

「……？」

ようやく明かりがある場所へと辿り着いた中也たちだったが、そこ

に広がる光景が予想していたものとは違うことに絶句した。

「な～んだ？」

そこは、畳で言うなら２０枚かそれくらいの、小さな広場だった。

中央には直径８メートルほどの穴が掘られ、穴の中では炎が激しく燃えている。それを囲む人々は１０人あまり。誰もが、この世の絶望を見たという顔で、呆然と炎を見つめていた。

（なんだ？）

バーベキューのような、いい匂いは、間違いなくこの辺りから漂っている。しかし、そこにいる誰もがバーベキューを楽しんでいるという雰囲気ではない。

「何なんだ？」

「俺に聞くな～よ」

シヴァと顔を見合わせた時、穴の向こう側に続く道から、数人の男たちがやって来た。彼らは1台の荷車を引いている。遠目に、随分とたくさんの荷物を積んでいることは分かった。

（ゴミ、かな）

見ているうちに、男たちは無言で荷車を穴の方でと近付けて行き、そのまま荷台の上に乗せられた荷物を一気に燃え盛る炎の中へと投げ入れる。

「っ！？」

一瞬だけ見えた。夜空を焦がして燃えて行く炎の中へ投じられたのは「人間の」死体だった。

（う、うそ、だろ……！？）

肉を焼く、いい匂いがしたと思った。てっきりバーベキューでもしているのだと思った。しかし、焼かれているのは牛でも豚でも鶏でもなかった。

「ベルキュロスの襲撃を受けたんだ。どうやら間に合わなかったようだな」

愕然とする中也たちの背後から、ベアルドの冷静な声がかけられる。

「目が覚めたか？」

共鳴２３（後書き）

知人にハンドル・ネームを聞かれたので「ハンマーヘッド」と答えると、彼から「シュモクザメ（英名：ハンマーヘッド・シャーク）の愛好家か？」と聞き返されました。

そういうワケでは……。どっちかと言うとホオジロザメの方が……。

ヴァナルガンドのあとがきとカブってしまいますが、私はオフスプリングというハード・コア・バンドの「ハンマーヘッド」という曲が大好きで大好きで大好きで……ハンドルネームを考える際、これしかない！　と思ってこうなりました。

ついでに死体の愛好家でもないです。

よく言われるので……（笑）

共鳴２４

東の空から太陽が昇り始めた。オレンジ色に照らし出された清々しい
夏の朝、夜気に冷えていた空気に太陽の熱が反射する。朝日に光る露、
照らし出された人の村。そこにあるのは、倒壊した家屋と、その下敷き
になった人間の体だった。
（死体だ……）
ぽっかりと穴を開けた2つの空虚な眼窩が自分を見つめている。そこ
には本来あるはずの眼球も瞳もなく、ただニブルヘイム（地獄）へ続く
のではないかと思わせるような穴があるだけだ。歯茎も唇も溶けてしま
った口に、鼻の無い顔。煤（すす）を被って汚れた肉の無い顔は、ほとんどが骨
になってしまっていて、申し訳程度に皮膚の残骸がこびりついている。

数えられるほどの髪が纏わりついている頭部も、そのほとんどが煤を被
って黒くなった骨に変わっていた。
（熱かっただろうな）
崩れた屋根の下から上半身だけを出して固まってしまっている死体は、
死んでなおそこから這い出そうとしているかのように、片手だけを中也
の方に伸ばしていた。服も、肉も、皮膚もない、骨だけの指。地面には、
引っ掻いたような跡も見えた。
（死体って無表情なんだな）
いくら見つめていても、そこにある人間の体は何の反応もしない。瞬(まばた)
きが無い。瞬きをする瞼(まぶた)が無い。呼吸をしない。呼吸をする口が無い。
何も喋らない。喋る唇が無い。建物の下敷きになり、炎に炙られている

時にはさぞや苦しそうな表情をしていただろう。口を開け、目を見開き、

助けを求めて泣き叫ぶ。けれどもう、そういった表情を作り上げていた

体は残骸しか残っていない。そして、果てしなく静かだ。

「ここにいたのか」

ふいに背後からかけられた声に、中也は我に返った。振り向けば、相

変わらずキツネの面を被って顔を隠したベアルドがそこに立っている。

「依頼主に会いに行く。クエスト出発のための最後の仕事だ。一緒に来

い」

「……分かった」

小さく呟いて、中也は重い腰を上げた。

（だるい。面倒だな、クエストとか）

昨日一晩、結局、中也は一睡もできなかった。ついでに、何を出され

ても口に入れることができなかった。人間の死体を焼く時も、バーベキ
ューと同じ匂いがするのだと知った。自分で思っていた以上に、当たり
前と言えば当たり前の事実は、自分にとって重かったらしい。

「クエスト前だ。感傷的になるなとは言わないが、体調には気を使え」

「分かってるよ」

通りには人が溢れていた。人間5人がかろうじて横に並べるほどの細
い通りは、場違いなほど活気に満ちている。感傷的になっているのはど
うやら自分だけのようで、そこに生きる人々はベルキュロス襲撃の後片
付けに必死のようだった。

（すげえな、人間って）

ふと視線を足元に落とせば、そこに人間の形をした黒い固まりが転が
っている。行き交う人の足に今にも踏み潰されてしまいそうな黒い

固ま
りは、炎に焼かれて死んだ誰かの死体だ。死んだ時の姿勢のまま黒く焦
げ、今はもうピクリとも動かない。
（あれ？）
何となく視線を逸らせずに見つめていると、うつ伏せになっているそ
の死体の、背中の部分だけが不自然に白いことに気付いた。
（背中だけ、皮膚と肉が残ったのか）
そう思って視線を巡らせると、その死体の１メートル後方に、妙に小
さな固まりがあることに気付いた。大きさは５０センチかそこらで、ま
るで人間のように頭と胴体と手足がある。何となく気になって近付いて
みると、自分の手の半分も無い小さな手には、きちんと5本の指が付い
ていた。空洞になった眼窩に、泣き叫ぶように大きく開けられた口。口

の中には、歯がなかった。

（赤ちゃんの死体、か……）

おそらく、前方に倒れているのが母親だろう。生まれて間もない子供

を背負って逃げている途中で、母親は炎に飲まれて力尽きた。子供を背

負っていたせいで、その背中だけ焼かれずに皮膚と肉が残った。そして、

強風に煽られたか、それとも通りを忙しなく行き交う人の足に蹴られた

か。背中の子供は母親の背中から地面に転がってしまった。そんなとこ

ろだろう。

（踏まれそうだ……）

まるでゴミのように地面に転がっている子供は、なおも母親を求めて

いるように両手と両足を空中に向かって差し出している。その手を取る

者は誰もいない。その体を抱き上げる手はもう無い。そこを行く誰もが、
目を留めることさえ無く通り過ぎていく。
「どうした。早く来い」
「あ、うん」
ベアルドに促され、歩き出す。改めて視線を向けた前方に、荷車を引
いている男と、彼に纏わりついている数人の子供の姿が見えた。男がグ
シャグシャになった家の傍に荷車を止めると、周囲にいた子供たちが一
斉に家の方へと走って行く。
（危ないんじゃねえか？）
中也の危惧とは裏腹に、子供たちはすぐに男の方へと戻って来た。そ
の手には、それぞれ黒焦げになった人間の体の“パーツ”を抱えている。
それなりの重さがあるらしい胴体部分は2人がかりで抱えているが、腕

や足などは1人でも充分運べるようだ。子供たちは、手に抱えた人間の

パーツを、勢いよく荷車に放り投げる。荷車を引いていた男が子供たち

に労い（ねぎら）の言葉をかけるのが聞こえた。そして、褒められた子供たちは屈

託のない笑顔を浮かべる。

（頑張ってるんだな、あいつら）

生活費を稼ぐためだろうか。こちらの子供はたくましいものだ。

「ここだ。着いたぞ」

「うん」

ベアルドに案内されながら通りを進んで行くと、やがて突き当りに大

きな門が見えた。その向こうには、瓦屋根の屋敷も見える。周囲にかろ

うじて原型を留めている家に比べて、一回り以上は大きい。これが村長

だか依頼人だかが住む家だろうということは、容易に想像がついた。

（広い庭……）

門を潜ると、そこには真っ白な小石を敷き詰めた庭があった。小ぶり

ではあるが、鯉が泳ぐ池もある。ただ、その庭を埋め尽くすほどの人間

が溢れている。

（みんな、ひどいケガだな）

呻き声が聞こえる。異臭がする。白いはずの小石が赤黒く染まってい

る。ゴザやムシロさえ敷かれることなく、大半の人間はそのまま体を地

面に横たえていた。

（モンスターの襲撃を受けたら、こんな風になるのか）

全身を真っ赤に染め、苦しげな呻き声を上げている男をまたぎ越す。

男は衣服さえ付けておらず、真皮が露出した体を朝の陽光の下に曝け出

していた。ボロ布のように纏わりついているのは、皮膚の残骸だろ

う。

頭髪はすべて抜け落ち、さながら赤い鬼のようだった。

（人間ってモロいんだな）

その男の傍には、下半身にロープのようなものを巻き付けた女がいた。

もう息はしていないらしく、ぽっかりと開いた瞳は瞬きさえしないまま

真っ青に晴れ渡った空を睨んでいる。女は鼻から大量の血を流していた。

出血は止まっているようだが、唾液と一緒に女の口の中には、血が溜まっているのが分かる。腰に巻き付けてあるロープは淡い桃色と赤を中途半端に混ぜたような色をしている。太さは自分の指2本分くらいだろうか。ロープにしては妙に生々しい、と思ったところで、それが女の体から零れ出た腸なのだと気付いた。ドロンとした濁った瞳、動きの無い表

情。女は死体らしく死体の顔をして、ただそこに横たわっている。

（ベルキュロスの爪でも引っかけられたのかな）

そんな風に思いながら、中也はベアルドの後ろに続いて、前方に迫る

家屋敷へと足を進めた。ふいに、誰かに足首を掴まれ、驚いて下を見る。

「ま、ま……ま、ま、まま……」

自分の足を掴んでいるのは、１０歳前後の少年だった。骨でも折れた

のか、少年の片腕はピクリとも動かない。ついでに、下半身も動いてい

る様子は無かった。ケロイド状になった火傷が体のいたるところに見え

る。棒のような手足に、取って付けたような赤黒い皮膚の固まり。ハダ

シの足には木端のようなものが突き刺さっていて、頭部は血まみれだっ

た。

「ま、ま……ど、こ……？」

血と泥で汚れた口の端から涎を垂らしながら、少年は中也の足首を痛
いほどの力で握りしめてくる。片言のように呟かれるその言葉が「ママ」
と呼んでいるのだということに、中也はようやく気付いた。
「すぐ、来るよ……」
気休めにもならないそんな言葉しか言えなかった。どのみち、少年は
もう長くない。妙に冷静な頭で、中也はそう知っていた。自分の言葉を
聞いて、少年が足首を掴む手を緩める。その隙に、まるで恐ろしいもの
から逃げ出すように、中也は少年から距離を取った。
（ママ、か……）
平屋建ての屋敷の前に、自分と同じ年ごろの少女がいる。彼女は衣服
こそ付けているが、その下半身は汚物で汚れていた。当然だろう。誰か

の手を借りなければトイレに行くことさえできないのだ。誰にも助けて
もらえずに放置されたままだとすれば、そうなるのは目に見えていた。
人形のように横たわっていた少女の視線が動いて中也を捕える。
「……」
慌てて目を逸らした少女は、おぼつかない仕草で腕を動かし、下半身
の周囲にある小石をかき集めて、自分の体から出た汚物を隠し始める。
見てはいけなかったのだ、と気付いた。自分が少女の立場だったとした
ら、そんな姿になった自分を同世代の異性に見られたいとは思わない。
多少なりとも理性が残っていれば、なおさらだ。
（ここは、地獄より酷い……）
ようやく、当たり前のことを思った。どんな物語に描かれる“地獄”
という場所より、今こうして目の前に広がっている光景の方がよほ

ど酷
い。中也は、思わず目を閉じて、拳を握りしめていた。
「気にするな。そのうち慣れる」
そんな中也の様子に気付いたらしいベアルドが、自分の方を振り返っ
てそう言ってくれた。
「慣れ……ねえよ」
喉の奥から絞り出した声は、自分でも驚くほど掠れていた。周囲を満
たす悪臭に息が詰まりそうだ。血の匂い、焼けた肉の匂い、汚物の匂い、
吐瀉物の匂い、腐った肉の匂い……。モンスターの体臭より、ずっとキ
ツい。
「慣れないか。そうか。それは良かった」
「は？」
「人の死や傷付いた人間の姿に“慣れた”と感じた時、それはお前が人

間であることを止めた時だ」

どういう意味だ、と聞こうとしたが、言葉をうまく続けることができなかった。

「お前は俺に、殺されるモンスターが可哀そうだと思ったことはないか」

と聞いた」

「……うん」

「逆に聞きたい。モンスターに殺された人間や傷付けられた人間は可哀そうではないのか？」

「それは……」

言葉が出て来ない。「可哀そう」なんて一言で片付けられるほど、目の前の光景は自分にとって生易しいものではなかった。そんな感情が入り込む余地など、どこにもない。ただ、目を覆いたくなるような現実だ

けがそこにある。

「それが俺の戦う理由だ」

揺るぎない声が、キツネの面の奥から聞こえて来た。不思議なほど、

その言葉は中也の胸の中に、ストンと音を立てて落ちた気がした。

「あ、中也。やっと来たのか～よ」

屋敷の入り口近くには石段が置かれ、その上には幾つかの靴や草履が乱雑に散らかっている。すぐ傍は廊下になっており、もともとは障子か、あるいは襖があったと思われるが、今は取り払われていた。廊下の向こうから、いつもと変わらない顔をしたシヴァとルナが顔を見せる。2人の背後からは、真っ青な顔をした中年の男が、忙しない足取りでやって来ていた。

「ああ、もう！　この忙しい時に！」

シヴァとルナを押しのけるようにして中也とベアルドの正面に立ったその男は、開口一番にそんなことを言って来た。

「さっさと行け！　何のために高い金を払ってお前らを雇ったと思っているんだ！　お前たちがグズグズしていたせいで、村はこの有り様だ！　怪我人は押し寄せるし、物乞いは来るし、何もかもメチャクチャだ！」

両腕を振り回し、足を踏みならしながら、頭を抱えた男は人前であるにも関わらず喚き散らす。八つ当たりだ、と思った。だが、言い返すことは止めておいた。この人も、被害者の1人なのだ。

「では、クエストに出発する。クエストが失敗した際には、モンスターに与えられたダメージを考慮の上、金は幾らかお返しするが、成功した場合、返金はない。いいか？」

「分かってる！　こんな時にまで金の話を持ち出しやがって！　ホントにハンターだのギルドだのは、金の亡者ばかりだ！」

「問題ないようだ。行くぞ」

ベアルドが合図したのをキッカケに、中也はそれに倣って踵を返した。シヴァとルナが慌てたように付いて来る。

（必ず、討伐する）

もう、迷いは無かった。

共鳴２４（後書き）

ＰＳＰでモンハン３が出るそうで！

今からすごく楽しみです！

またモンハン大会が開かれるんやろな……。

共鳴25

夜風が吹く。

「ねえ、お兄さん。もう一軒いっとく～？」

「いいよ～！」

酒に火照った頬に、流れる夜気が心地よい。酒場の喧騒を背後に、しん

と静まり返った通りは、今にも闇に溶け込んでしまいそうなほど静寂に包

まれていた。

「お兄さん、けっこうイケるんだね～？」

「まあね～！」

左手には微かな流れを湛えた堀。淀んだ水は蟠り、道端に植えられた柳

の木を月光に映している。儚げに飛ぶ小さな黄色い光が、鼻先を掠めて行

った。夏の間だけ生きるその虫の名はホタル。堀を飛び越えて何処

かへ消

えて行く光は、さながら死者の魂の具現のようだった。

「マリンちゃんもけっこう強い方～？」

「と～ぜん！」

堀の反対側には、あばら家が軒を連ねていた。深夜を回ろうという時刻、

澄んだ空気に満ちた町。眠りについた人々を守る家。そんな役場町の一角

を、フェンリルはマリンと共に歩いていた。

「ねえ、お兄さん。今晩の宿は～？」

「あっち～」

「あっちって、どっち～？」

マリンと出会ったのは今日の朝方だった。はっきり言ってしまえば、そ

の出会いのキッカケは自分の単なる下心だったような気がする。しかしな

がら、そこからいろいろと事情が込み合って来て、とりあえずちゃんと話

をしようということになり、マリンを食事に誘ってみた。落ち着いて話せ
る場所がいい、と飯屋に入ったのは良かったが、そこで酒を飲んだせいか、
それとも、そもそもマジメな話を長時間できる性分でないせいか、いつの
間にやら話は脱線を繰り返して、気が付けば千鳥足になるほど酒が進んで
いた。

「お兄さ～ん。お月さまが、きれい～！」

「きれい～！」

「お月見～！」

「それ、秋じゃ～ん！」

最初のうちこそ、フェンリルはそれなりに緊張感をもってマリンに接し
ていたはずだった。しかし、気が付いた時には仲良くなってしまっていた。

マジメに話をしていたのは、最初の１０分かそこらである。あとは

もう、

くだらない話しかしていない。それでいいのか、とサスケは問いかけた。

もちろん、いいに決まっている。そう答えた。とりあえず、マリンは話し

ていておもしろいのだ。だから問題ない。

「お月さまには～、ウサギさんがいるんだよ～」

「ウサギさ～ん？」

「そう、ウサギさ～ん！　それでね～、おもちをついてるんだって～」

「月ってウサギが住めるんだ～」

「そうだよ～」

ハタから見ていれば、まるで愛を誓い合った男女のように見えるだろう。

だが、そこに関しては例え酔っていてもキチンと否定する自分がいる。マ

リンの下半身には、どんなに可愛い顔をしても自分と同じものが付いてい

るのだ。そこは重要である。

「お兄さん、おもしろい～！」

「マリンちゃんもね～」

“さりげな～く”自分の腕に絡みついて来るマリンから“さりげな～く”

逃げる。フェンリルのその行動に気付いたマリンが、再び“さりげな～く”

身を寄せて来る。それを、再び“さりげな～く”避ける。何でも無い会話

をしながら、実は互いに真剣勝負だったりする。

「あれ～？」

「ど～した～？」

ふいに、マリンの視線が堀の方へ移動した。何となくその視線を追いか

けると、淀んだ水の中にプカプカと浮かんでいる男の姿が目に入る。

「人じゃん」

「人じゃん、じゃないよ、お兄さん！　なに呑気にしてんの！？早く助

けないと！」

「ええ！？」

なぜ自分が、という疑問は口にすることさえ許されなかった。気が付い

た時には、マリンに思い切り背中を突き飛ばされ、堀の中へと落とされて

しまっていた。

（マリンちゃん……やっぱり、力は男なんだね……）

そんな風に思ったのも束の間、酒が回った頭から冷たい水の中に飛び込

み、思考が一気に冷めて行く。

「お兄さん！　こっちだよ！　こっち、こっち！」

水面から顔を出したところで、自分は安全地帯から指示を出すつもりら

しいマリンの誘導するような声が聞こえて来る。

「はいはい……」

落とされてしまったからには仕方ない。フェンリルはしぶしぶな

がら、

堀の中に浮かんでいる男の方へと近づいて行った。

「何で俺が死体の回収なんかしないといけないんだよ」

口頭で文句を垂れながら、自分の胸ほどの深さの堀の中を進んで行く。

夜とはいえ夏なので、寒さは感じない。ただ、泥臭い水に浸かっている

のだと思うと気分は良くない。

（宿に帰ったらソッコーで風呂に入ろ……）

内心で替えの服の心配を始めた時、堀の上に浮いている男の体が近く

に見えた。

「どうせ死んでんでしょ……って、あれ？」

意外なことに、水に浮かんでいる男には、微かだがまだ息があった。

暗闇でよく見えないが、腹の部分には何か鋭利なもので刺されたような

傷痕がある。

「誰かに刺されたのか～。お～い、おじさん、大丈夫～？　俺の声、聞
こえる～？」

頬を軽く叩きながら声をかけると、閉じられていた瞼が僅かに動いた。

どうやらまだ意識はあるようだ。

「お兄さ～ん！　どう～！？」

「生きてるよ～！　ヤバい感じだけど～！」

堀の上から叫んでくるマリンにそう返したものの、これからどうすれ
ばいいのか全く見当が付かなかった。堀の上までは１０メートル近い高
さがある。堀の塀は石垣でできているので、背負って登れば登れないこ
ともない。だが、考えただけで疲れそうだったのでやりたくない。

「サスケ～」

「イヤだニャ」

水面に落ちた影に向かって自分のアイルーの名前を呼ぶと、要件も何も言っていないうちから断られてしまった。

「濡れるのはイヤだニャ」

「……わがまま～」

「ご主人にだけは言われたくないニャ」

「あっそう」

影の中から顔だけ出したサスケが、はっきりと断言してくれた。こういう時のサスケはテコでも動かないことを知っている。そうなると、自分たちでどうにかするしかない。

「マリンちゃ～ん！　サスケがイヤだって！　どうやって引き上げれば いい～！？」

サスケがダメならマリンに頼る。もしここでマリンが「どうにかして」

と言った場合、すぐ傍に浮いている半死半生の男は置き去りにして、

自

分だけ堀の上に登ろうと思った。

「担架（たんか）を下ろすよ～！　ファーナ王室の特注品だよ～！」

「……担架？」

マリンから返って来たのは、意外な言葉だった。怪我人を乗せて運ぶ

担架がすぐ近くにあったらしい。

（担架なんてあったっけ？）

自分の知る限り、記憶にない。堀の周りにあったのはあばら家だけだ。

ましてや王室の特注品の担架など、あるはずはない。

「行くよ～！」

フェンリルの疑問には頓着しないまま、マリンは本当に担架を放り投

げて来た。自分たちの1メートル後方に投下された担架に歩み寄り、フ

ェンリルはとりあえず、それを男の体の下に入れてみた。アルテリアで

見るのと同じ、木の棒に布を張った普通の担架だった。どのあたりが王
室の特注なのか、自分にはさっぱり分からなかった。
「次はロープだよ～！」
「う、うん……」
どうやらロープもあったらしい。担架と同じように投げ込まれたロー
プを空中で受け取る。だが、それをどうやって担架に固定したらいいの
か分からない。
「ねえ、これどうやって結ぶの～！？」
ロープの先端を翳しながら聞けば、同じようにもう一方の先端を握っ
たマリンが笑顔で言ってくる。
「持っててくれればいいよ～！　で、どこでもいいから担架を触って
～！」

「へ？」

意味が分からなかったが、条件反射でフェンリルは重傷人を乗せて浮

かんでいる担架に手を伸ばしていた。

「あれ？」

いきなり景色が変わる。つい先ほどまで堀の中にいたはずなのに、気

が付けば、どこかの宿屋の客室にいた。

「あ、そっか。マリンちゃん、鬼龍だから時空移動ができるんだっけ」

担架もロープも時空移動で持ってくれば簡単に手に入る。そういうこ

とか、と納得しながら、フェンリルは部屋の中に視線を巡らせた。

「今ごろ気付いたの～？」

畳の匂いがする、行燈の明かりに照らし出された部屋。欄間には龍の

彫り物が見える。広さは6畳間が2つ。一方には、客がくつろげるよう

にと、机と椅子のセットがあり、お茶菓子と急須のセットがスタンバイ
していた。

「マリンちゃんが泊まってる部屋？」

「そうだよ」

自分が泊まっている宿と似たり寄ったりであるところを見ると、それなりに1泊あたりの値が張る宿だということは、すぐに分かった。

「で、この人どうすんの？」

「もう大丈夫だよ。後は風邪をひかないように、濡れた服を着替えさせて、それから布団で寝かせるだけ」

「ふ～ん。そう」

特に興味は無かったが、マリンは時空だけでなく時間も操る能力があ
る鬼龍なのだ、と思った。怪我をした体の時間を、怪我をしていない体
の時間まで戻す。そうすれば、結果的には傷が治るのだ。

（おばあちゃんと同じ、だな）

知っている限り、時間を操る能力を持っている鬼龍は祖母が唯一だっ

た。今まで何度も、くだらない怪我をして来ては祖母に治してもらった

記憶がある。

「お兄さん、手伝ってよ」

「ええ～！　俺、風呂に入りたい～！」

「ワガママ言わない！　今は怪我してる人が先だよ！」

「もう大丈夫だって、言ったじゃん！」

「それとこれとは話が別なの！　いいから早く布団を出してよ！」

マリンが指差している先は、押し入れと呼ばれるスペースだった。フ

ァーナに来たのは初めてだったが、ここと似た雰囲気を持つアルテリア

の雷都には何度も行ったことがあったので、物の名前や習慣など多少な

りとも知っている。

（布団って、押し入れに入ってるモノなんだよな～。何でベッドにしな
いんだろ。いちいち出したり直したりしなくていいから、ベッドの方が
ラクじゃん）

そんなことを思いながら、マリンからおかしな反撃を受けては堪らな
いと思って、しぶしぶながらも押し入れから布団を出して敷き始める。

（えっと～、北に枕を持って行ったらいけないんだよな。だから頭はこ
っち向きで～）

うろ覚えではあるが、記憶の彼方からファーナの風習を引きずり出し、
枕を持ってくる方向に気を付けながら、さっさと済ませる。その横で、
マリンが男の服を脱がせていた。

（手慣れてるなあ～）

マリンは男の体を横向きに寝かせ、その背中と畳の隙間に替えの服を
差し入れる。その後、反対方向に横を向かせ、下に敷いた替えの服を引
っ張った。そうすると、うまい具合に男の下に服が敷かれることになる。
後はもう、前合わせの夜着の袖に腕を通して紐を結べば終了だ。
「男の服を着替えさせるのって、お手のものってヤツ？」
「ジョーダン言ってないで。そっちに寝かせるから足の方を持ってよ」
「……はい」
てっきり冗談を返してくれるだろうと思ったのに、ひどくマジメな顔
でそう言われてしまった。指示通り男の足を持てば、マリンが頭の方に
手をかける。そして2人で男の体を持ち上げ、一気に布団まで運んだ。
（男の足とか、どうでもいいよ～）

フェンリルの本音など素知らぬ顔で、マリンは押し入れから掛け布団
を取り出し、それを男の体に乗せる。これで、とりあえずひと安心と言
ったところである。

「ねえ、マリンちゃん。俺、風呂に入りたい～！」

濡れてしまった自分の服を摘まみながら訴えると、マリンがニッコリ
と笑った。

「じゃあ一緒に温泉に入ろうか！」

「……けっこうです」

「何、言ってんの！　アルテリアと違ってファーナは公衆浴場が普通な
の！　みんな一緒に入るの！　それが普通なの！　分かった！？」

「……マジで！？」

それはイヤだ。絶対にイヤだ。見知らぬオヤジと一緒に湯に浸かるな
んて耐えられない。愕然とするフェンリルの背中に冷たい汗が流れ

た。

「お、俺……ちょっと風呂に入りに帰って来る！」

「……お父様の仕事場まで？」

「もしくは自宅まで」

どっちでもいい。とにかく、風呂だけはアルテリアまで帰るしかなさ

そうだ。幸い、フェンリルにはサスケがいる。サスケに頼めば、ひとつ

息をする間に自宅の風呂まで帰れるのだ。

「ワガママ王子～！　もう、甘やかし過ぎだよ、お父様は！」

「父さんの教育が間違ってたかどうかは知らないよ。そんなの本人に聞

いて！　サスケ！　サスケー！！」

フェンリルの必死の叫びに、これ以上ないほど面倒臭そうな顔をした

サスケが影の中から飛び出してくる。

「……ご主人には困ったものだニャ」

「そうだよ。甘やかし過ぎはダメ！　ここはいっそ心を鬼にして、お兄
さんをアルテリアに連れて帰ってあげたらダメだよ！」
マリンの言葉に、サスケが微妙な顔をしながらフェンリルを見つめて
きた。
（ヤバい！）
この表情は非常によくない。このままでは、自分を甘やかしてはなら
ないという方向に話が進んでしまいそうだ。
「サスケ、マタタビ２個！」
「乗ったニャ」
問題はマタタビで解決した……。

共鳴25（後書き）

東京都で青少年の健全な育成に悪影響を与えるとか言うことで……二次元世界のキャラクターに規制がかけられようとしているそうですね。

とりあえず審議は先送りになりましたが……先送りにして世間の関心が冷めた時を狙って一気に可決するつもりなのではないかと危惧する声も上がっています。

それにしても……すごい世の中ですね。

個人的な意見については活動報告の方に書いたのでここでは控えますが……二次元のキャラクターを規制する国になりましたか、日本は。

オタクと呼ばれる人たちのことを「障害者」などと発言する人たちが推し進める計画……可決して欲しくないですね。本音を言うと。

共鳴２６

「いくら何でもおかしいよ！　もう１２時だよ！？」

畳が１０枚ほど敷き詰められた部屋の一角に、人の身の丈はあろうかと
いう巨大な柱時計がかけられている。時計の長針と短針がちょうど１２の
時を打った時、人で溢れた部屋の中に重苦しい鐘の音が響き渡った。

「あの子が出て行ったのは昼だよ！？　こんなこと今まで無かった！　何
かあったに違いないよ！」

落ち着かない様子で時計の針と部屋に集まった一同をせわしなく見比べ
ているのは、言わずと知れた佐知（さち）である。佐知はまるでドスギアノスのよ
うに、部屋の中をソワソワと動き回っては、同じようなことばかり口走る。

最初のうちこそ、出先で飲みにでも誘われたのではないか、とか、積もる

話が嵩んでいるのではないか、と佐知を宥めていた一同だが、午後１０時
を回ったあたりから無言に徹している者が圧倒的に多い。喋っているのは、
佐知だけである。

「お美代さん」

ひたすら一方通行な佐知の話を横目に、静寂を保っている一同の中、薬
屋の若旦那が美代に向かって話しかける声が聞こえて来た。

「お美代さん。そもそも、旦那さん……エドさんは、どのような用事で出
かけられたのですか？」

「それが……」

「よろづ屋だよ！」

美代が答える前に、佐知が答えた。さすが、話の主導権を奪う技術は亀
の功より年の功である。

「よろづ屋さん、ですか？」

何となく含みのある声で佐知に聞き返したのは、ライトだった。
そんな
彼に向かって、佐知は赤黒く紅潮させた顔のまま、カッと目を見開き、唇
を横一文字にギュッと引き締めて何度も何度も素早く頷いて見せる。
何だ
かゲリョスに似ている。光宮は内心でそう思った。
「そうさ、よろづ屋だよ！　だからあたしは言ったじゃないか！　よろづ
屋が怪しいって！　あたしがせっかく忠告してやったって言うのに、あん
たたちはちっとも聞きゃしない！　だからこんなことになったんだよ！」
「止せ！　よろづ屋が下手人（げしゅにん）だと決まったワケでもねえのに、そんなこと
を言うモンじゃねえ！」
下手人……つまり犯人は「よろづ屋」だと決めてかかっている佐知を強
い口調で窘めたのは、この簪屋の大旦那である。美代の義理の父で

あり、

佐知にとっては夫にあたる男だ。年齢は５０代かそこらで、白いものが混

ざり始めている金髪を、やはりチョンマゲにしている。

「だって、お前さん……よろづ屋だとしか考えられないじゃないかぁ！」

「そうとも限らねえ。おい、お前ら」

大旦那に呼ばれ、顔を上げたのはこの店の弟子である3人の若い男たち

だった。彼らは大旦那の元で簪作りの修行をしているということだったが、

実際の扱いは下働きと変わらない。炊事、洗濯、掃除、雑用その他。何で

もやらされる。他人事ながら、よく耐えているものだと思う。

「お前ら、手分けしてウチの倅を探して来てくれねえか？」

「へい」

大旦那に言われて、３人の男たちが同時に腰を浮かせた。それを見て、

佐知のゲリョスに似た顔が美代へ向く。

「お美代、あんたも行きな」

「ちょっと……ちょっと待ってよ！」

佐知から発せられた言葉に、光宮は黙っていられず、つい声を上げてし

まっていた。

「何だい？　自分の旦那の行方が知れないって時に、家で呑気にしてる嫁

がどこにいるってんだい？　あたしなら今ごろ顔色を変えて探しに出てる

よ」

「……お美代さんは、こんな体なのよ？　こんな夜中に歩かせていいワケ

ないじゃない！　転んだらどうするの！？」

「転ばないように歩けばいいだけの話じゃないか。ああ、それにしても本

当に薄情な嫁だねえ。あたしはエドが可哀そうで仕方がないよ、まったく。

あたしが若いころには、そりゃあこの人に尽くして来たものだけどねえ。

あの子が腹にいる時だって、額に汗を浮かべて朝から晩まで働きづくめだ

ったさ。こんなにノンビリさせて貰ったことなんかないよ、ホント。何せ、

あたしの時には、お義母さんがそりゃあ厳しい人だったからねえ。今の若

い娘は幸せだよ、ホント」

本当にそうかと疑いたくなるような言葉をペラペラ喋ってくれる佐知に

光宮はつい腰を浮かせていた。それを止めたのは夏葉だった。

「止めなよ、光。今はそんなことしてる場合じゃない。一緒に行こうよ。

手伝おう」

「……」

確かに、夏葉の言う通り今は佐知と口論している場合では無い。何があ

ったか知らないが、とにかく美代の旦那であるエドを探し出す方が

先決だ。

しかし、どうしても光宮は美代の大きな腹が気になって仕方ない。

「でも、お美代さん、大丈夫なの？」

心配で堪らずにそう聞けば、美代が困ったような笑顔でニッコリを笑っ

た。

「大丈夫ですよ。それに、少しくらい歩いた方が、お産の時にラクだって

聞いていますから」

だったら昼間に歩け、と思ったが敢えて何も言わずにおいた。

「そうそう。あたしはお美代の体を気遣って、そう言ってあげたのさ。そ

れに、お美代だってあたしがそう言ってあげないと、動きにくいだろ？

何せ、その腹に入ってるのはこの簪屋の大事な跡取り息子なんだからね」

どこまでも都合のいい佐知の言葉に、怒りが湧きあがる。どう考えても、

先ほどまでの佐知は美代の体のことなど気にしてさえいなかった。

「……お佐知さん。あんたも当然、探しに出るんでしょう？」

せめてもの反撃でそう聞くと、佐知はこれみよがしに畳の上に座りこん

でしまう。

「あたしは腰が悪くてねえ」

探しに出る気はないらしい。

（このクソババア！！）

音に出さずに、光宮は内心で毒づいた。

「どれ、我々もお手伝いさせていただきましょうか。ライト、レフト、そ

れからヒチ。一緒に行って差し上げなさい」

＊

「ああ、もう！　何なのよ、あのクソババアは！　何様のつもりよ、まっ

たく！！」

しんと冷えた夜気に満たされた町を、光宮はレフトと簪屋の弟子

の1人
と共に歩きながら、つい我慢できずにそう叫んでいた。
「言ってることと、やってることが違うのよ！　なんでお美代さんも言い
返さないワケ!?　信じられない！　どうして何でも笑顔ではいはいって
頷いてしまうの!?」
「まあ、そう仰らないでください、お嬢さん。ウチの大奥さんは、あれが
普通なんですよ」
　そんな光宮に向かって、簪屋の弟子は苦笑いを浮かべながらそう言って
来た。その表情を見て、美代と似ていると思った。間違っている、理不尽
だと感じていながらも、とりあえず耐えるしかない。そう思っている人間
が浮かべる顔そのものだ。
「……あんたたちも、よく耐えてるわね。私だったら絶対にイヤだわ。あ

んな人がいる店で修業なんて」

「大旦那さまの簪職人としての技術はホンモノですから。大奥さんの人柄

は関係ありませんよ」

「……そうなのかしらね」

最もだと言える意見を口にされれば、黙りこむしかない。ただ、この場

合、この弟子は佐知が「いい人ではない」と間接的に認めていることにな

る。やはり、彼も佐知のことはよく思っていないのだろう。

「よほど簪職人になりたいのね。そんなに魅力的な仕事なの？」

「もちろんですよ」

確かに、出来上がった簪は美しいの一言に尽きる。その技術は素人目に

見ても素晴らしいと認めていい。だが、その技術を手にするために、日々

あの「佐知」に耐えなければならないのだと思うと気は滅入る。ついでに、

弟子たちは家の仕事も手伝わされているのだ。

「……ちょっと聞いてみたいんだけど、どれくらいお給料を貰えるの？

やっぱり弟子って言うからには、そんなに高くないんでしょ？」

失礼を承知で、光宮はつい聞いてしまっていた。自分なら、せめて王宮

で働く下官かそれくらいの給料は貰えないと、こんな仕事やってられない。

「……残念ながら。弟子であるうちは半人前ですからね。お給料は無いん

ですよ」

「はあ！？」

返って来た答えに、愕然とした。

「じょ……ジョーダンでしょ……？」

「本気ですよ。どこの店でも同じです。だから、職人の弟子になろうと思

ったら、一人身の男じゃないとムリですね」

無償労働。ついでに家事雑用。更に佐知。彼らの境遇を思うと胸が痛くなった。

「住み込みで働かせて貰っているワケですし、三度の飯も食わせて貰える。ありがたい方ですよ、ウチなんて」

ありがたいと思う基準が違うようだ。アルテリアでは、そんなのは当たり前だし、ついでに現場の労働者から声が上がって、無償労働を禁止する法律ができたのは今から１０年前の話だ。

（自分たちの暮らしを自分たちでラクにしようって言う考えがないの？）

信じられなかった。苦しければ耐えればいいとでも思っているのか。なぜ声を上げないのだろう。ファーナ王国の国王であるクリス３世は人道的な王だ。声が小さければ別かもしれないが、大声を上げればちゃんと聞く

耳を持ってくれるはずだろう。

（何か、この国の人たちって、ヘン……）

同じ人間なのに、違和感を感じる。個人に、ではない。周辺にいる人間

すべてを含めて、光宮にしてみれば違和感でいっぱいだった。

「それにしても」

簪屋の弟子と光宮の会話が途切れたのを見計らって、レフトが声をかけてきた。

「それにしても、なぜ大奥さん……お佐知さんは、エドさんの帰りが遅い

理由をよろづ屋さんと決めつけてらっしゃったのでしょうね。いや、私は

部外者なので、込み入ったことは分かりませんが……」

「ああ、それですか」

レフトの問いかけに、弟子が曖昧な表情を浮かべた。

「大した話じゃあないんですよ。何と言いますかね……最近モンスターの

素材が値上がりしておりましてね」

「ほう。それは、また」

「ええ。まあ、物の値段は生き物と言いますからね。常に動いていても仕
方ないと言えば仕方ないのですが……ここ最近になって異常にと言ってい
いほど……。それこそ今までの2倍が普通でして……ひどい時には3倍な
んてことも」

「2倍から3倍……。それはまた……」

レフトの悲痛な声に、弟子は深く頷き言葉を続ける。

「そうなんですよ。そもそも、ハンターが倒したモンスターをバラして町
まで運んでくるのはギルドです。言わば問屋のようなものですよ、この地
方のギルドは。それで、ギルドが運んで来た素材を職人が見て、値段を交
渉するのが普通なんですけどね……」

「ほう。一種の競りですか」

「ええ。ところが、ですね。最近モンスターの素材そのものが、とても少なくなってしまっているんです」

「……それは、モンスターが人里の近くに現れなくなったから、ではないのですか？」

「いえ、それはないんです。村から買い出しに来る連中の話じゃあ、どこそこに何とか言うモンスターが来たとか、そういったことをよく話していますから」

「ほう」

「それなのに、町まで届く素材が妙に少ないんですよ。それなのに、よろづ屋さんのところは」

「稼ぎがいい、と」

「はい。ついでに、大奥さんの知り合いの方が、夜な夜なよろづ屋さんを
訪ねて来る役所の者らしき人影を見たとか何とか」
そう言えば、佐知は今朝そんなことを言っていたような気がする。だと
すれば、もう結論は1つしかない。
「よろづ屋とギルド、それから役所が共謀してるってことね」
はっきり言うと、弟子とレフトが微妙な顔をした。
「可能性は大きいじゃない。モンスターが出ていて、その素材はちゃんと
町まで届いてる。でも量が少ない。ついでによろづ屋さんのところだけが
稼いでる。そう聞けば何かあるって思うのは当たり前だわ。エドさんが出
かけたのも、よろづ屋さんのことじゃないの？」
「……はい。ギルドに直談判に行く、と」
やはりそうだった。だとしたら、佐知がよろづ屋を疑うのも、頷けない

話ではない。だからと言って佐知に同情したり、共感したりはしないが、

その思考回路は分からないでも無かった。

「で、よろづ屋さんのことでギルドに直談判に行ったエドさんが帰って来ない。何かあったと思うのも当然ね」

2人からの返事は無い。無言は肯定だと受け取ることにした。

「そうと決まれば、こんな町中を探していても無意味よ。もっと町はずれに行って、そこの堀の中とかを探さないと。急げば間に合うかもしれないわ。行きましょう」

最悪の事態も想像した。だが、こういう時は無闇に不安を煽っても仕方ない。ここはエドが生きている可能性を信じて、町はずれを探してみるしかない。

「もし見つからないようでしたら、役所に届けて捜索してもらった方がよ

ろしいのでは……」

レフトが弟子に向かってそう言った時のこと、前方に見覚えのある人影

が現れた。

「あれ、光じゃん。こんなところで何してんの？」

「フェンリル……！」

生きていたのか、と喜ぶより先に、何でこんなところにいるのだ、と思

った……。

共鳴２６（後書き）

ブリーチの「バウント編」を見ました。やっぱおもしろいですね、ブリーチ。特に予告と死神図鑑では随分と笑わせてもらいました。

オフィシャルはやっぱり恋次とルキアのカップルを推奨しているのかな……。個人的には一護とルキアなんだが……。どっちとも取れるシーンがたくさん。恋次は間違いなくルキアに惚れてますよね。でもルキアはどうなんだろう……。

いや、すべて妄想ｄｅａｔｈ。

東京都で青少年健全育成条例の改正案が通れば、ブリーチも見れなくなってしまうんでしょうね。

それはとても残念です。

ところで、我が家のリビングは窓際にソファを置いているのですが、数時間前、何気なくソファに座ったら、頭の上から警棒が落ちてきました。

正確には警棒と言うよりトンファですが。外国の警察が持ってる、まさしく警棒に似た武器です。敵を攻撃することができます。

幸い、肩に当たったので重症には至りませんでしたが……。

ウチにはサバイバルゲームが好きだった連中が多くてですね（笑）ＰＳＧ１とかの延長でトンファも購入したヤツがいたのですよ。で、せっかくだからソレを飾っておこうってな話で、カーテンレールの

ところにポンっと置いた記憶があります。４年くらい前の話でしょうかね。それが今になって逆襲してきた、と。

「誰だよ、カーテンの上にトンファなんて置いたヤツ……」

……自分だよ。

と、言う感じで、しばらく肩を押さえながら誰も責められない苦痛に耐えておりました（笑）

共鳴27

「お知り合いの方ですか？」

フェンリルの顔を見て愕然としている光宮に向かって、簪屋の弟子が

不思議そうにそう聞いて来た。

「まあ、ね。知り合いたくないけど、残念ながら知り合いよ」

微妙な言い回しに、弟子は曖昧な笑顔を浮かべる。どうやって逃げよ

うか、と別に逃げる必要もないのに考え始めた時、光宮の心境など素知

らぬ顔でフェンリルが近付いて来た。

「相変わらず冷たいよね。知り合いって言い方は無いんじゃない？せ

めてトモダチ～とか言おうよ」

「誰がいつどこで、あんたと友達になったのよ！　寝言は寝てから言い

なさいよ！　そのための寝言でしょうが！」

「……俺、まだ起きてるけど？」

「そういう意味じゃない！！」

吐き捨てるように言って、光宮は意図的にフェンリルの顔から視線を

逸らす。まともに顔を見ることができないのだ。きっと必要以上に見た

目「だけ」がいいからだ、と光宮は自分の心境をそう解釈した。

（とりあえず、無事で……よかったわ……）

まさかこんな時間にこんな場所でバッタリ再会できるとは思わなかっ

たが、とりあえずひと安心できた。

「で、何してんの？　この人たちは？」

「……」

まるで紹介してくれ、とでも言わんばかりの口調で、フェンリルはレ

フトと簪屋の弟子、それから光宮を交互に見比べて来た。

「私はこの先にある簪屋の弟子に入っております者で……名を秀央（しゅうおう）と申

します」

光宮が紹介する前に勝手に名乗りを上げた彼の名は、秀央と言うらし

い。光宮も、実は今まで知らなかった。興味が無かった、とも言うかも

しれない。

「私は首都ディーダの薬屋の者でして、全国行脚をしている若旦那の供

をさせていただいております。レフトです」

「へえ～」

秀央に続いて自己紹介したレフトは、どういうわけかフェンリルに向

かって丁寧にお辞儀した。何だってこんなヤツに、と思わないでもなか

ったが、薬屋の一行は若旦那を始め礼儀正しい人間が揃っていたので、

そこまで不思議には思わなかった。

「俺はフェンリル。何かよく分かんないけど、よろしく～！　で、

こん

な夜中に3人で何してんの？」

「実は……」

どこまでも明るいフェンリルに、秀央が戸惑いがちに口を開いた。

「実は、ウチの若旦那の行方が分からなくなっておりまして……薬屋さ

ん御一行にもご協力していただき、周辺を探している最中なのです」

「ふ～ん」

自分から聞いたくせに、フェンリルは秀央の話にまるで興味が無いよ

うだった。何をしていようが実のところどうでもいいが、もしおもしろ

そうなことなら便乗しよう……まさしく、そう考えていたことが手に取

るように分かって腹立たしくさえある。

「年は27で、金の髪をされています。萌黄色の上掛けを羽織られてい

たと思うのですが、お心当たりはございませんか？」

「もえぎ……」

どこまでも適当と言うか、いい加減なフェンリルには気付いていないらしく、秀央は律儀にエドの特徴を口にする。そんな秀央に向かってフェンリルが何か言おうとした瞬間、レフトが光宮の方に胡散臭いほど輝かしい笑顔を向けて来た。

「首都の方では、萌黄色とは言いませんよね。最近では、黄緑色と言う言い方が流行っていましたっけ？」

「そ、そうね」

どうやら首都の方ではアルテリアと同じく「萌黄色」のことを「黄緑色」と言うらしい。自分も知らなかった。エドが出かける前に美代に持って来させていた上掛けが黄緑色だったのを覚えていたから、もしかし

たらそうではないかと思っていただけだ。

「黄緑色の上着を着てて、２０代の後半くらいの人……」

てっきり、そんな人は知らないと言うのかと思いきや、フェンリルは

まるで記憶を手繰り寄せるように少しばかり視線を夜空に泳がせた。

「よく分かんないけど、少し前に黄緑色の着物を着てた金髪の人を、堀

の中で見つけたよ」

「な、何ですって!?」

「それは本当ですか!?」

光宮と秀央が同時に叫ぶと、フェンリルが少しばかり驚いたような顔

をする。

「あ、いや……探してる人だって証拠は無いんだけど……」

「分かってるわよ、そんなこと！　それで、もちろん助けたんでしょう

ね!?　どこにいるの!?」

「マリンちゃんの宿……」

マリンちゃん、という名前に、否応なく女の顔が浮かぶ。何だか妙に

腹が立った。

「案内して！　違ったら違ったでいいわ！」

「う、うん。分かった」

光宮の勢いに押され、フェンリルがたじたじとなりながらも踵を返す。

そう言えば、どうして彼がこんな時間にこんなところを歩いていたのか、

その理由を聞くのを忘れていた。だが、今はエドのことが最優先である。

そう思って、聞くのは止めておいた。

＊

「ここだよ」

フェンリルが案内してくれたのは、一軒の高級宿だった。深夜を回っ

いるせいか、明かりこそ灯されているものの建物は静寂に包まれて

いる。

そこに人の気配はあるのに、誰もが寝静まっている場所というのは、何

とも言えない空虚な感じがある。

（マリンって女、よほど金持ちなのかしら）

大木のように太い柱でできた門を潜り、その先に続く庭を通り抜ける。

真っ白な小石が敷き詰められた庭は、月光を反射して仄かな光を放って

いた。その中に一定間隔で渡された深い色の石は、さながら池の中にか

けられた橋のようだ。噂には聞いていたが、ファーナのラタ地方の人々

は自然の姿を自らの棲家にそのまま持ち込むことに美徳を感じるらしい。

（私はアルテリア王国の王女なんですもの。金を持ってるか持ってない

かで言ったら私の方が持ってるわよ。……税金だけど）

庭の先に、丁寧に剪定された植木で隠されるようにした入口が見

えて

来る。引き戸になっているそれを横に引けば、行燈の光に照らされて淡

い照明を保った玄関が見えて来る。さすが、高級宿と言うだけあって、

その先に見える木板が張られた廊下は光り輝いてチリひとつ見えない。

（その女……フェンリルとどういう関係なのかしら）

玄関先でレフトが奥に向かって軽く声をかけると、すぐに従業員と思

われる中年の男が顔を見せた。彼は自分たちの顔を見るなり、板間に正

座する。立っている自分と、正座している相手。視線は、当然のごとく

自分の方が高い。何だかくすぐったい気分になった。

「お泊りになってらっしゃる方のお名前をお聞きしてもよござんすか？」

さすがに、誰かれ構わず宿の客室に通すわけにはいかないのだろう。

レフトから事情を説明された従業員の男は、特に表情を変えないままそう聞いて来る。一同は、一斉にフェンリルを見た。

「マリンちゃん……っていうのは、あだ名だったから、えっと、何だっけ名前……」

「ちょっと、あんた！　名前を忘れたの!?」

「だって……ずっとマリンちゃんって呼んでたから……」

肝心のフェンリルがこの宿に泊まっているマリンの名前を忘れてしまったらしい。前から思っていたことだが、本当にイザという時に役に立たないヤツだ。

「マリン、という名は、本名から来ているのではないですか？」

必死で名前を思い出しているフェンリルに助太刀したのはレフトだった。

「うん。何かそんな感じだった。何とかいう宝石の名前で……ナントカ・

マリンだから……どうのこうの……」

「アクアマリン、でしょうかね」

「ああ、それそれ！」

「アクアマリンは別名で蘭玉と言いますが。違いますか？」

「思い出した、思い出した！　それだよ、それ！　蘭玉！」

レフトから助言を得て、どうやら名前を思い出してくれたらしい。知り合いになったなら名前くらいちゃんと覚えてもいいのではないかという気がしたが、フェンリルに言うのもどうかと思って黙っておいた。

「蘭玉さま、でございますね。確認を取って参ります。申し訳ございませんが、少々お待ちくださいませ」

蘭玉という名を聞き、従業員の男が正座したまま丁寧に一礼して去って行く。それを見送り、光宮は無意識に溜め息を落としていた。

（マリンって女と知り合いになって、一緒に飲んだ帰りにエドさんらしき

人を堀の中で見つけたって言ってたわよね。何なのよ、もう。こっちが大

変な思いをしてるって時に、1人だけ女と仲良く遊んでるなんて）

腹立たしい。フェンリルはもちろん、そのマリンという女のことも何だ

か腹が立つ。まだ顔を合わせてもいないうちから、誰かにこんな腹立たし

い思いを抱いたのは初めてかもしれない。

（べ、別にフェンリルと仲良さそうだから嫌いって、そんなワケじゃない

んだからね！）

誰にともなく言い訳をしながら、光宮は気分を落ち着かせるように深く

息を吸い込んだ。

「それにしても」

光宮が人知れず葛藤していた時、無言のまま過ぎ去ろうとしていた時を

切り裂くようにレフトが明るい声を上げる。

「それにしても、フェンリルさんは本当に男前ですね」

「え？　あ、そう？　どうも……」

何を言い出すのかと思えば、そんな話題である。フェンリルの見た目が

いいのは見れば分かる。いちいち本人に言わなくてもいいのではないかと

思ったが、レフトは一向に気にする様子はない。

「男前という言い方では、何だかしっくり来ませんね。何だろう。美形と

でも言うのですかね。さぞや女の子に好かれるのではないですか？」

「……どう、なんかな」

わざわざ謙遜してくれなくていい。普通の女であれば、好きになるなら

ないは別問題として、とりあえず意識してしまうことは間違いない。むし

ろ、そんな顔をして謙遜するという行動そのものに腹が立つ。

「またまた。いやぁ羨ましいですね、ホント。1日でいいから、フェンリ

ルさんの姿を借りて町を練り歩いてみたいものですよ。そう思いませんか、

秀央さん」

そして今度は秀央を話の中に引きずり込む。何とも鮮やかな話の振り

方だった。

「そう、ですね。確かに、綺麗な姿をしてらっしゃいますよね……」

秀央の言葉に、光宮は拳を握りしめる。

（男に向かって“綺麗”とか言わないでよ、もう！　認めるけど！　確か

にそうだけど！　私が空しくなるじゃない！！）

さすがに声に出して叫ぶのは止めておいた。ここで叫べば、もっと空し

くなる。しかし、そんな光宮の心の叫びとは対照的に、フェンリルはにっ

こりと笑って見せる。

「ありがと。でも、父さんの方がもっとカッコいいよ」

フェンリルがサラッと言ってくれた言葉に、レフトは笑顔で頷き、秀央
は曖昧な表情を浮かべ、光宮は背筋に悪寒が走った。
（そりゃあ、あんたのオヤジなんだから見た目はいいでしょうよ…
…って
こいつのオヤジって確かシヴァのオヤジよね？　それとも育ての親
の方？
どっちでもいいけど、この状況でそういうことサラッと言わないで
よ！
オヤジなんだから、もういい年でしょ！？　私はヒゲに興味はない
のよ、
ヒゲには！　ヒゲはイヤよ！）
なぜか、オヤジと言えばヒゲを生やしているという勝手なイメー
ジが刷
り込まれてしまっている。おそらく、夏葉の養い親である竜雪の影
響が強
いのではないかと自分で分析しているが、どちらにしろフェンリル
の父親
には「萌え」なかった。

（てゆーか、１９歳でしょ、こいつ！　１９にもなって“父さんの方がも
っとカッコいい”とか普通に言うワケ！？　もしかして……もしかしてこ
いつ……）

頭の中にイヤな単語が思い浮かんだ時、玄関の向こうから先ほどの従業
員が姿を現した。

「お待たせいたしました。どうぞ。先方さまがお待ちになってらっしゃい
ます」

救いの手が差し伸べられたような気がした。

（こいつと一緒にいると、疲れるわ……）

ほとんどは自分の勝手な妄想による思考の暴走なのだが、フェンリルと
一緒にいるとどうしても自分のペースが乱れてしまう。それは事実なので、
フェンリルが悪い、ということにしておいた。

「まあ、フェンリルさんを見ていたらお父様が男前だとおっしゃるのも頷ける話ですね」

せっかく話が終わったと思ったのに、レフトが再び混ぜ返してくれた。

「まあね」

今度はあっさり肯定するフェンリル。再び、背筋がゾッとした。

「明るいところで見るとなおさら。まるでどこかの王室の王子ですね。そう思いませんか、光さん」

「……王子でも、玉子（たまご）でもどっちでもいいわよ」

なぜ玉子が出て来たのかは分からない。だが、とりあえず玉子にしておいた。

「そうだ。これからフェンリルさんのことは王子と呼びましょう。それがいい。そうしましょう」

勝手に決められた。そして、そんなレフトの提案に頷く秀央。フ

エンリ

ルのことを「王子」と呼ぶ人間はアルテリアにもいた気がする。確かに、

そんな見た目をしているとは言え、なぜ誰もが揃いも揃って彼を立てたが

るのか、理由は全く分からなかった。

「そちら様は確かに綺麗な方ですねぇ。後で店の女衆に話しておきましょ

う。きっと喜ぶ」

関係ないはずの宿の従業員まで、なぜか話に乗って来た。しかも店の女

性従業員を呼んで見世物にする気らしい。

（美形は大変ね。まあ、私にはカンケーないけど）

関係ない。そう、関係ないのだ。フェンリルが女たちに何をされようと

何を言われようと、自分には一切関係ない。そう自分に言い聞かせ、光宮

は貸して貰った美代の草履を脱ぎ、ハダシの足を板間に乗せた。

「ご案内いたします」

先に立って歩き出す従業員の背に続き、光宮たちは奥まった場所にある

階段に向かった。玄関から入ってすぐ左には土産物屋があり、右手には休

憩所のようなスペースがある。時間が時間であるせいか、今は誰もいなか

った。

（暗い階段ね）

照明を付ければいいのに、宿の階段にはどういうわけか一切の照明具が

設置されていない。明かりとなっているのは、先頭を行く従業員の男が手

にしている蝋燭だけだ。

（木造だから、もしかしたら火事を気にしてるのかしら）

そう言われてみれば、周囲にある建物はすべて木造だ。いったん火事に

なれば大変なことになるだろう。人の動きが少ない夜に、火の数を減らす

というのは分からないでもなかった。

「こちらです」

階段を上がってすぐに、客室が続くと思われる廊下が現れた。左手に並

ぶのは障子戸で、火が灯っている部屋はひとつしかない。目的の場所は、

目に見えていた。

「あ、お帰り、お兄さん」

従業員の男が板間に膝をついて声をかけると、すぐに中から1人の少女

が現れ、笑顔で出迎えてくれた。金髪に、青い瞳、そして小柄な体つき。

この少女が、マリンだろう。

（ま、負けた……）

少女の顔を一目見るなり、光宮は頭の上から石が落ちて来たような衝撃

を受けていた。

「どうぞ入って。話は聞いたよ。探してる人だったらいいんだけど」

光宮が心に負ったダメージなど素知らぬ顔で、マリンは一同を部屋の中

へと促した。

「ほんと、お兄さんにも困ったものだよね。お風呂は入って来たの？」

「入ったよ」

「怒られなかった？」

「……ビミョーな顔された」

「やっぱり甘やかし過ぎだよ」

何の話が知らないが、フェンリルとマリンは仲良さそうに話している。

その姿が、何だか悔しくて仕方ない。

「こっちだよ。どう？　探してる人？」

部屋は襖で区切られており、光宮たちが入った方の部屋にはテーブルと

イスのセットがある。マリンが示したのは襖の奥にある部屋で、彼女は慣

れた仕草で、そっと襖を開き、秀央を中へと促した。

「若旦那……！」

秀央の顔色が変わる。どうやら、エドで間違いないらしかった。

共鳴２７（後書き）

ブリーチの続きが気になって仕方ないです。

明後日には続きを借りに行けるかな、と。

仕事しながらボケっと横目でＤＶＤを観れるのは、自営業の特権ですね。

……自営業？

ある意味、自営業……（笑）

共鳴２８

「いやぁ、誠に面目次第もございません」

光宮たちがマリンの部屋へ入ってしばらくして、眠っていたエドが目を覚ました。どうやら起き上がっても問題ないらしく、今はマリンが淹れてくれた茶を片手にテーブルがある方の部屋で正座している。

「いったい何がどうなっちまったって言うんですか、若旦那。昼に出て行ったっきり戻って来ねえと思ったら、町外れの堀の中に浮かんでたなんて。まさかと思いますが、酒でも飲んでたんじゃないでしょうね？」

「悪かったよ、秀央。ただ、酒を飲んだような覚えはねえんだけどな」

「だったら……」

秀央の疑問は分かる。連絡も無く、この時間まで帰って来なかったと思ったら、エドは町外れの堀の中で発見されたのだ。ついでに言うと、彼の体には怪我ひとつ見当たらない。深酒でもして、自分で堀に

落ちたのかと思うのは何も秀央だけではないはずだ。

「エドさん。昼に出て行ってからのお話を、詳しく聞かせていただけないでしょうか」

何とも言えない顔をしているエドと秀央に向かって、レフトがそう促した。その声を聞いて、エドが彼の方に向き直る。

「へい。それがですね……。私は店を出た後、よろづ屋さんの店に行ったんですわ。それで、よろづ屋の旦那に事情を説明しましてですね、

一緒に町外れにあるギルドの出張所まで出向いたわけですよ。どこまで事情をご存じか分かりませんが、最近モンスターの素材がやたら値上がりしておりましてね……。それは私らのように、モンスターの素材を加工することで飯を食ってる職人連中にとっては死活問題でして。

もちろんウチの簪屋だけの問題じゃないんで、モンスターの素材を扱う職人連中を集めて、ギルド・マスターに直談判に行こうじゃないかという話になってたわけです」

「ほう。それで、よろづ屋さんも一緒に」

「そういうことです。それで、及ばずながら今回の直談判を考えたのは私でありましてね、名ばかりではありますが、代表を務めさせていただいていたわけです。まあ、そんなことはいいんですがね、そんな込み入った事情があって、私はよろづ屋の旦那を誘って、ギルドの出張所に出向いたんですわ。その時……」

今日の出来事を語るエドの表情が曇る。苦いものを無理やり飲みこむような表情ではあったが、同時に何かしら不思議で堪らないという表情も滲んでいた。

「その時、私は誰かに……刀で刺されたんですわ」

「刀で、刺された!?」

エドの言葉に、腰を浮かせたのは秀央だった。

「刀で刺された……って、若旦那！　あんた、傷一つないじゃありませんか！」

「そうなんだよ」

言いながら、エドは夜着の袂を広げて、自らの痩せた腹をしげしげと眺める。黙って話を聞いている光宮の目にも、その皮膚に掠り傷ひとつ付いていない事実は、はっきりと分かった。

「確かに刺されたと思ったんだが、気が付いたらこの宿にいて、お前がいて……。俺にも何が何だか……。まるでキツネにつままれたような気分だよ」

それが本当だとしたら、確かに不思議な話だ。それに、エドは実際堀の中で見つかった。刺された後、堀の中に捨てられたと考えると自然だが、その体に傷ひとつ無いというのは不可思議である。

「とにかく、明日の朝一番に役所に届け出ましょう。刀で刺されたなんて、重大事ですよ！」

「……それは、どうでしょうね。肝心のエドさんに傷が無いとなると、

お役所の方も取り合ってはくれないでしょう。それこそ、酒でも飲んで夢でも見たんだろうと言われるのがオチのような気がします」

秀央の提案を、レフトが静かに否定した。彼の言う通りだ。それ

に、

今回の件に役所が絡んでいる可能性がある以上、無闇に役所を頼るのは危険すぎる。ついでに、始末したと思っていたはずのエドが生きているという事実を、わざわざ教える必要もない。

「何より、ご無事でよござんした、若旦那」

「ああ、心配かけちまったな」

会話の間に一瞬だけ訪れた静寂の間に、秀央はエドに向かって深々と頭を下げながらそう言った。

「レフトさんと光さんにも、ご迷惑をおかけしました。本当に、面目次第もございません」

今度は、エドが自分たちに向かって丁寧に一礼する。次いで、エドはマリンとフェンリルに向き直った。

「マリンさんとフェンリルさんにも、重ねてお礼を申し上げます。お2人が見つけてくだらさなかったら、今ごろどうなっていたことか」

「別にいいよ。気にしないで〜。助けたのはお兄さんだし、俺は何に

もしてないよ」

どこまでも丁寧なエドの言葉を、マリンは笑いながら受け流した。

しかしながら、光宮はマリンの言葉に僅かながら違和感を覚えてしまっていた。

「……“俺”？」

確かに、マリンは自分のことを“俺”と言った。どこからどう見ても可愛らしいの一言に尽きるマリンに似合わない、その一人称。何とも言えない顔でマリンを見つめる光宮に、彼女はニッコリを笑って見せた。

「あ、ゴメンね。言ってなかったっけ？　俺、こう見えても男の子なんだ～！」

沈黙が落ちた。

「それで、エドさん。これからどうするつもり？　店の人たちが心配しているから、できれば早く戻ってあげた方がいいんじゃない？　って言いたいところだけど、あなたが刺されたって言ってたのが気にな

るわ。もしそれが本当なら、あなたはほとぼりが冷めるまで、どこかに隠れていた方がいいかもしれない。その方が安全だわ」

微妙な顔で固まっているマリンを完全に無視してエドに問いかけると、マリンが男だと知って衝撃を受けていたらしいエドの顔が急速に引き締まった。

「できればそうしたいところですがね……。商売人ってのは、雨が降ろうが槍が降ろうが、稼ぎのためには我が身に鞭打って働くってモンです。店の方も親父1人じゃキツいでしょうしね、戻りますよ」

「あっそう」

それなら、レイか夏葉が傍にいた方が万が一の時に彼の身を守れるかもしれない。そう思ったが、口には出さなかった。

「そっか～。戻るんだ～。せっかく知り合いになれたのに、ざ～んねん」

特に残念だと思っている口振りもなく、マリンが思わせぶりにそう呟いた。そして、彼女あらため彼はフェンリルの方を笑顔で振り向く。

「お兄さんはどうするの？　せっかくだし、もうちょっと俺と一緒に遊んでくれるよね？」

「い、いや……俺も別件で用事があるから……ねえ、中也たちを探しに行かないといけないし……」

期待という名のシロップを大盛りにした口調でフェンリルに詰め寄るマリンだったが、彼の返答を聞いて、その愛らしい顔を見ている方が痛々しいほど顰めて見せた。

「じゃあ、俺がお兄さんの人探しに付き合うよ。それなら一緒にいられるよね？　いいでしょ？」

「えっ……！」

どうやら、この辺りのフェンリルの反応は通常の人と変わらないらしい。けっこうな美少女と言えるマリンだが、そのマタの間に第三の足がブラ下がっていると知っている以上、フェンリルの下半身の欲望の対象にはならないようだ。ちょっと、ホッとした。

（な、何で私がホッとしなきゃいけないのよ！？）

別にフェンリルが女装した男とナニをしようが、自分には関係ない。

興味もない。そのはずだ。いや、むしろ……そうでなければならない。

それなのに、なぜかホッとしている自分がいる。

「人探しなら1人でやるより、2人でやる方が効率的だよ。ねえ、そうでしょ？　探してる人の特徴を教えてよ。協力するからさ」

「あ、あっそう？」

どうやら押しに弱いらしい。詰め寄って来るマリンに、フェンリルはあっさり承諾してしまう。ちょっと絶望してしまった。そこは、きっちりと断って欲しい。微妙な乙女心である。

「ねえ、探してる人たちの特徴は～？」

「んっとね～。名前は中也とルナとシヴァ」

「それだけの情報で見つけられたら、神だねっ！」

光宮も、そう思った。

「じゃあ、そういうことで。我々はお暇させていただきましょうか。

早く帰って、大旦那さんとお佐知さんを安心させてあげなければ」

「そうですね」

立ち上がったレフトに、エドが続く。それを見て、光宮と秀央も腰を上げた。

「光」

部屋を出ようとした時、ふいにフェンリルに呼びとめられた。

「何よ」

「中也たちはちゃんと探すからさ。とりあえず、俺が中也たちを連れて戻って来るまで、その簪屋にいてよ」

「……参考までに聞いておくわ。状況によっては、あんたを待たずに出発する」

「……はいはい」

素直に「待っている」と言うのが癪だったので、光宮は最も無難な言葉を選んで口にした。

＊

「エド！　エド、無事だったのかい！？　よかった！　本当に良かったよ！　いったいどうしちまったんだい！？　あんた、今までこんなに心配をかけたことなんて無かったじゃないか！」

エドを連れて簪屋に戻ると、彼の顔を見た佐知が涙混じりの顔で出迎えてくれた。かなり胡散臭い女ではあるが、息子を心配する母親心は本物であったらしい。

「あたしゃもう、心配で心配で！　どれだけ探しに行こうと思ったことか！」

そこはウソだ。探しに行くのかと確認を取った自分の問いかけに、佐知は腰が悪いと言う理由を持ち出して断って来たはずだ。

「さあさ！　中に入りなさい！　夕飯は食べたの！？　すぐに用意させるからね！　ああ、もう！　お美代ったらどこで油を売っているんだい！？　旦那が帰って来たって言うのに！」

身重の美代を捜索に出させたのは佐知だ。なぜそこで美代の名前が出て来るのか全くもって意味不明である。

「本当に、ご無事でよかったですよ」

なぜか知らないが慌てふためいた様子でエドを家の中へと誘導する佐知に向かって、レフトが笑顔でそう言った。すると、佐知がまるで怒り状態のディアブロスのような顔で振り返る。

「どこが“ご無事でよかった”なもんですか！　エドの身に何かあったのかと思うと……あたしはもう、居てもたってもいられなかったんですからね！　エドに万が一のことがあったら、１００年続いたこの簪屋は終わりなんですよ！？」

言っていることが支離死滅である。なぜ怒った顔でレフトを見るのか、どうしてそこで簪屋の歴史が出て来るのか、光宮には全く理解できなかった。

（バカバカしいわ……）

考えるのも相手にするのもバカバカしい。時間の無駄だ。そう思って、光宮は早々に風呂を借りて布団に入ろうと思った。時計を見れば、

もう夜中の2時を回っている。

（寝不足は美容の天敵なのよね。それに、歩き回って疲れたわ）

ごく当たり前のことを思いながら草履を脱いだ時、ちょうどそこへ美代と夏葉、そしてライトの3人が帰って来た。

「エドさま……！　ご無事で……！」

戻って来た美代は、いつもより少しばかり疲れているように見えた。

しかし、夫であるエドが無事な姿でそこに立っているのを見ると、その顔に笑顔を浮かべて夫の方へ走って行く。

「お美代っ！！」

しかし、感動的と言えなくも無い夫婦の再会の狭間に立ち塞がったのは、佐知である。佐知は、いきなり美代の頬を平手で殴りつけた。

「ちょっと、お佐知さん！　何してんの、あんた！！」

佐知の行動が信じられず、光宮は思わず声を荒げて、頬を押さえている美代を庇うように、彼女の前に立った。佐知が美代を怒る理由も、

平手で殴る理由も思いつかない。八つ当たりしたいのだとすれば、相手が間違っている。

「このバカ嫁！　あんたがもっとしっかりしていれば、こんなことにはならなかったんだよ！　ホントにあんたはいつもいつも……！　そんなことで簪屋の跡取り息子の母親になれるのかい！？」

「あんた、何言ってんの！？　エドさんが行方不明になったのと、お美代さんは関係ないでしょ！？」

「関係ないものかい！　この子がもっとちゃんとしていればね、そもそもエドを1人で出かけさせるなんてこと無かったんだ！　まったく首都の女ってのは、ホントに物の道理が分かってないね！」

佐知を睨みつける光宮に向かって、佐知は鼻息を荒くしながら近付いて来る。

「いいかい！？　女ってのはね、嫁に入ったらもうその家の一部なんだよ！　家のために、夫のために尽くして死ぬのが女の幸せで、そして女の役目なんだ！　この子はその役目を果たしてないんだよ！！」

「何よそれ！」

そんな理由で美代を殴りつけたというのか。信じられなかった。

「意味が分かんないわ！　家!?　女の幸せ!?　くだらない！　そんなの、他人が決めるものじゃないでしょ！?」

「何を言ってるんだい、このバカ娘は！　これだから最近の若い者はダメなんだよ！」

バカ娘、と言われて頭に来た。佐知にだけは、バカと言われたくない。

「その言葉、そっくりそのまま返してあげるわ。これだから最近の年寄りはダメなのよ！　ワケ分かんない理屈を振り回して、お腹に赤ちゃんがいる女の人を殴るなんて、人間としてサイテーよ！　女としてどうこう言う前に、あんたは人間としてサイテーなのよ！」

「何だって!?　この……この娘は……！　あたしが今までどれだけ苦労を重ねてここまでやって来たと思ってるんだい！　あたしの苦労を露ほども知らないくせに、よくもそんなことを……！」

「あんたの苦労なんて知るワケないでしょ！？　過去のことなんて分かるワケないじゃない！　だいたいね、本当に苦労を重ねて来た人は他人にそれを自慢したりしないわよ！　もしも本当に苦労して来たって言うなら、あんたはその苦労から何を学んだの？　自分より弱い立場の人に嫌がらせする以外に、何を学んだって言うの？　言ってみなさいよ。聞いてあげるから。ほら」

この世で最も尊敬する師である女性は言っていた。悲しいこと、辛いこと、苦しいこと。生きている限り、必ず何度もあるはず。大切なのは、ただ悲しかった、辛かった、苦しかったで終わらせないことだと。そこから何かを学んで、明日「笑顔」でいられるために考えなさい……と。

「ホントに礼儀がなってないね！　首都の娘は、目上の者に対する礼儀ってものを親から教えて貰わないのかい！？」

質問には答えられなかったらしい。要点がスリ替わっている。

「……目上と呼んで欲しいなら、目上らしい態度を取りなさいよ。礼

儀知らずだと言うのなら、まずは自分が礼儀を見せてみなさいよ」

「光、そろそろ言い過ぎ」

佐知の顔が激しく歪んだ時、横から夏葉が口を出してきた。

「謝れとは言わないけど、あんまり大声を出したらお美代さんのお腹の赤ちゃんが、ビックリする」

夏葉に言われて、その事実を思い出した。確かにそうだ。妊娠中の女性は、なるべく穏やかに過ごさなければならないのだと知っている。

美代の傍で佐知と大声で言い争うのは、美代の体に良くない。

「……お佐知さんも。俺は、この地方の風習に詳しくないからあまり言えないけど、お美代さんの体に障るようなことしちゃいけないと思う。お美代さんのお腹にいるのは、お佐知さんの孫でしょ？」

「犬の子が生まれるに決まってるさ」

佐知の口から、衝撃的な言葉が飛び出した。思わず言い返しそうになった時、夏葉にそれを止められた。

「犬と人間じゃ子供は生まれないよ」

夏葉が口にしたのは、当然と言えば当然の一言だった。

（さすが夏葉……。嫌味が通じないわね……。てゆーか、エドさんも大旦那さんも、何でお佐知さんを止めないの？　自分の嫁が殴られたって言うのに、信じられないわ）

成り行きを傍観しているエド、そして簪屋の大旦那。どちらも、佐知か美代の味方になるつもりはないらしい。

「……夏葉さん」

エドと大旦那を何なんだと思いながら眺めていた時、ふいに秀央が抑えた声音で夏葉を呼んだ。

「夏葉さんは……女性、ですよね？」

「いえ、俺は胡蝶です」

夏葉がはっきりと言った途端、簪屋の一同の顔色が変わった。

「こ、胡蝶！？」

佐知の顔が、今まで以上に激しく歪む。

「し、秀央！　塩！　塩を持っておいで！　胡蝶だって！？　冗談じ

ゃない！　鬼龍が来る！　塩だ！　塩だよ！　ついでに、マイク！

お役所に連絡するんだ！　胡蝶がいるよって！！」

共鳴２８（後書き）

明日はツーリングに行ってくるのであります。

楽しみなのであります！

……現在、山口県は暴風の真っ最中。

大丈夫なのか……、明日……。

共鳴２９（前書き）

長らく更新できず、大変申し訳ございませんでした。

これからまた頑張っていきますので、どうぞよろしくお願いします。

共鳴２９

砂を孕んだ乾いた風が頬を打つ。天頂に浮かぶ太陽が投げかける光は黄色く濁っていて、そこにある景色をさながら夕焼けに似たセピア色に染めていた。どこまでも果てしなく続く、砂と岩だけの大地。この世のあらゆる生命を拒絶するかの如く厳しい顔をしている峡谷の中、それでも僅かばかりの生にしがみつくように雑草が根を張り、砂に汚れた葉を太陽に向けて広げていた。

「そろそろ時間だ」

駆け抜けて行く風の声だけが音の世界を支配していた中、静かだが重みのある独特の声音で、ベアルドが告げた。無言で頷く。無意識に、拳を強く握っていた。

「出発するぞ。夕べ言ったことを忘れるな」

「分かってる」

大剣を背に担ぎあげるその仕草には、一切の迷いがない。その広い背中

を頼もしく思いながら、中也は着用している防具の紐をきつく結び直した。

「さあ、ウワサのベルキュンとご対面だ～ぞ」

自分とは対象的に緊張感のないシヴァの声を横に聞きながら、手入れし

ていた弓矢を肩に担ぐルナの姿を横目に見やる。ふいに目が合った。クエ

ストを前にして、鋭さを宿していた彼女の瞳を柔らかく笑む。釣られて微

かな笑みを返し、中也はベアルドの後を追いかけた。

「気温の割にあんまり暑くねえ～な」

「そうだな」

だらだらと道案内をするかのように先頭を行くベアルドの後を追いなが

ら、シヴァが感じたままのことを告げて来る。それに生返事を返しつつ、

中也は周囲を囲む切り立った崖を見上げた。一陣の風が舞い、崖の上の砂

を空中に散らして行く。砂が落ちるサラサラという音が、静寂の峡谷にこ

だました。

（ここは湿気が少ないな。ひと山越えたら、こんなに気候が変わるモンなのか）

ベルキュロスの襲撃を受けて壊滅状態になってしまったソルト村は、それなりに湿気を含んだ蒸し暑い夏の様相を呈していた。そこはまるでかつての故国とよく似た、まさしく「夏」そのものであったのに、山の向こうに広がっているこの峡谷は、まるで違う国に入りこんでしまったかのように空気が違う。幼馴染の言う通り、この峡谷を満たしている空気の温度は

確実にソルト村よりも高いはずだ。それにも関わらず、湿気のない乾いた
気候は、ソルト村にいた時よりも過ごしやすいとすら感じる。
（あそこは山に囲まれてた。盆地だから、余計にそう感じたのか。まあ、
そんなことどうでもいいけど……）
軽く息をついて、中也は上を見上げる。
（あんなところから落とされたら、確実に死ぬしかないな）
左右から迫りくる崖は、ゆうに高さ２０メートルを超えているだろう。
いくらモンスターの素材を使った防具を着用しているとは言え、その衝撃
までは緩和されない。戦う場所は選んだ方が無難だと内心で思った時、ふ
いに先頭を行くベアルドがその動きを止めた。
「どうかしたのか～な、オッサン」
何事か、と疑問に思って中也も足を止める。ベアルドの視線の先にある

大地には1メートルばかりの亀裂が入っていた。その亀裂がどうかしたの
か、と思う間もなく、いきなりベアルドに腕を引かれる。
「何ですか……って、うわあっ！！」
亀裂の上に立たされた瞬間、下方向から凄まじい圧力がかかり、その力
に抗う術を持たない中也は簡単に空中に投げ出されていた。地面が見る間
に遠くなっていく。驚愕と不安が入り混じった表情で、シヴァとルナが自
分を見上げているのが分かる。
「近道だ」
いつもながらベアルドの説明は一足遅い。亀裂から噴き出した空気に飛
ばされ、空を飛びながら、中也は少しばかり呆れた。
「すぐそこがベルキュロスの巣だ。着地と同時に戦闘態勢を取れ」
「ちょ、ちょっと待……っ！」

上空を満たす空気の心地よさを感じたのは一瞬のこと。息をつく間に小
さくなっていくベアルドの姿から、衝撃的な言葉が聞こえて来た。冗談だ
ろう、と願ったその思いは、目の前に鎮座するその巨体を前に、風の前の
塵と同じになった。

「これが……」

ベルキュロス。

「でかい……」

崖の上に広がる地面に向かって落ちて行きながら、中也はその姿に一種
の戦慄を覚えた。真っ先に目に付いたのは、顔の周囲を覆う神獣にも似た
そのたてがみだった。そして長く伸びた鼻づらに、鋭く尖った牙。大地の
色に似た鱗に、小さな家屋であれば簡単に包みこんでしまいそうなほど巨
大な翼。現れた小さな侵入者に、ベルキュロスと思しきモンスター

は、至
極ゆっくりとした動作で大地につけていた頭をもたげる。宝玉にも
似たそ
の瞳が中也の姿をはっきりと捕えた瞬間、ベルキュロスは怒りの咆
哮を上
げ、翼を休めていた崖を蹴って空中に舞い上がった。

「……っ！」

中也の両脚が地面に付くのとほぼ同時に、崖の上から急降下してきたベ
ルキュロスが大きく裂けた口から黄色く濁った光を吐いて攻撃してきた。

（危ねえっ！）

ベルキュロスは非常に縄張り意識が強いモンスターだと聞いた。
繁殖期
のメスが縄張りに侵入してくるのを唯一の例外とする他、自分の縄張りに
侵入して来た者には一切の威嚇なく攻撃を加える。目の前にいるこの巨大
な飛竜ベルキュロスも、その例に漏れないらしい。中也は寸でのと

ころで

地面に転がり、ベルキュロスが吐き出した光の直撃を避ける。

「っ！」

光が自分の真横を通り過ぎた瞬間、防具の下に着ている普段着が肌にへ

ばりつくような、奇妙な感覚を覚えた。前髪が額に張り付く。何とも言え

ない、この不快な感触には覚えがある。

（電気か……）

冬場、風呂に入ろうとしてセーターを脱ぎ、これと似たような経験は何

度もしていた。どうやらこのベルキュロスというモンスターは、話に聞く

通り電気……正確には雷を操ることができるモンスターであるようだ。

「くそ……っ！」

思わず背中の大剣の柄に手をかけてみるものの、巨体が巻き起こす爆風

に煽られて今一つタイミングが掴めない。低空飛行を続けるベルキュロス

が再び口から雷を吐いて攻撃してくる。横に飛び退いた瞬間、ベルキュロ

スが翼を大きくはためかせるのを見た。

「っ！」

思った通り、ベルキュロスは中也に向かって低空飛行のまま突進して来

た。翼の第二指に生えた特徴的な長い副尾が空中にはためく。その様子は、

まるで伝説に聞くところの不死鳥のようだった。

「って！」

ベルキュロスが中也の上方で止まり、そこから羽根を広げて勢いをつけ、

一気に下降してくる。踏み潰されると思った中也はそのまま横に転がって

その爪を避けた。風が動く。凄まじいとしか言い様のないスピードで動き

回る巨体に巻き起こされた風に煽られ、砂埃が宙を舞った。露出し

た目に
砂が入り、思わず目を閉じ防具をつけた手でこする。余計に痛くなるだけ
だと頭では分かっているものの、こればかりはどうしようもなかった。
「砂漠や峡谷。砂が多い場所では目を保護するゴーグルを着用することを
勧める」
「……クエストに出る前に言ってください」
「悪かった」
赤く充血した目を開いた時、目の前にはベアルドの大きな背中があった。
続いて、身の丈ほどもあるガンランスを背負ったシヴァが何とも形容しが
たい奇声を上げながら落ちて来るのが見える。
「いってえ～んだ～ぞ！」
着地と同時に一回転、二回転、三回転……器用なことに顔面でその回転

を止めたシヴァが口に入ったであろう砂を吐き出しながら叫んだ。
そして
その直後、シヴァとは対照的に華麗な仕草で地面に着地し、ほぼ同時に矢
をつがえるルナの姿が見えた。低空に留まったまま、ベルキュロスが新た
な侵入者たちに視線を巡らせる。
「さあ、まずはヤツが体内に溜め込んだ電気を使い切らせることだ」
「了解っ！」
ベアルドの指示に、中也は立ち上がりつつ叫ぶ。体力が落ちていない状
態ではベルキュロスは常に低空に浮遊している。はばたく翼からの風圧も
さることながら、中也の身長ではいくら振りかぶっても大剣の刃はその巨
体に届かない。武器を手にしていれば、走り回るのに邪魔なだけだ。
夕べ
ベアルドから言われた通り、冷静に、中也はこの段階で武器を手にするの

を止めておいた。

（さっきはパニクって大剣を構えようとした……）

いきなり空中に飛ばされて、そこにいきなりモンスターがいて、いきな

り攻撃されたのだ。一連の出来事を考えればパニックになってしまったと

しても仕方ない気もするが、それは敢えて考えないことにしておいた。文

句を言ったところで相手がベアルドでは言うだけ無駄だということも知っ

ている。

「走れ！」

シヴァとルナが自分たちの方へ駆け寄ってきた瞬間、ベアルドの指示が

飛ぶ。無意識に、全員がベアルドと同じ方向に向かって走っていた。小山

ほどもある巨大なモンスターと格闘するには些か狭いとさえ感じる崖の上

の大地を、四人は駆け抜ける。彼らの方向に向かって、ベルキュロ

スが光
線のようなものを吐き出した。
（あれに当たったら即死だな）
鼓膜が破れそうなほどの轟音が脳を振動させる。空気を切り裂き、凄ま
じい速さで一直線に飛んでくる光線は近くの岩に当たって霧散した。空気
が揺れているのが分かる。そこかしらに、ベルキュロスが吐き出した光線
の残骸ともとれる電気の残り火がパチパチと音を立てながら爆ぜていた。
「すんげえモンスターだ～な。気に入っちまった～ぞ！」
「はあ？」
光線の威力に戦慄した自分とは裏腹に、隣にいるシヴァはさも嬉しそう
に笑っている。
「こいつの素材で作った武器、欲しくなっちまった～ぞ！」
「欲しければやる。ただ、こいつを倒せればの話だが」

不謹慎ともとれるシヴァの言動に、ベアルドが冷静な返答を向けた。

「当然！　倒してやるんだ～ぞ！」

ぜひともそうして貰いたいものだ、と思った時、シヴァが背中のガンラ

ンスを手にベルキュロスに向かって駆け出して行った。

「おい、待て」

静かな声でベアルドが制止をかける。だが、シヴァは止まる気配を見せ

なかった。

「オッサンはオッサンのやり方で戦えばいいんだ～ぞ！　俺は俺のやり方

で戦う～ぞ！」

「ノった！」

そして中也の予想通り、ルナまでもがシヴァに便乗していってしまう。

「シヴァ！　援護するよっ！」

「恩に着る～ぞ！」

中也とベアルドの間に、微妙な空気が流れる。お互い何も言わず、とり

あえず状況を見守ることにした。

（あいつら、ホントに戦うことが好きなんだな……）

今更ながらにそんなことを思った時、それまで逃げ回っていた小さな侵

入者が2人、自分の足元に駆け寄って来たのを見て、ベルキュロスが空中

に留まったまま視線を下方に向けたのを見た。その足元に潜り込んでガン

ランスを構えたシヴァは、鋭い先端をベルキュロスの足に向かって突き刺

し始める。

「いい判断だ」

シヴァの行動に、静かな声でベアルドが呟く。視線の先で、ベルキュロ

スが僅かに悲鳴に似た咆哮を上げ、ほんの少し空中に踊り上がった。

「足の裏の肉はどんなモンスターでも柔らかい。ついでにモンスターの真
下にいれば攻撃も受けにくい」

「確かに」

「……と、言うのはベルキュロスに限っては通用しない」

「はい？」

何を言い出したんだと思う間もなく、シヴァの頭上1メートルの位置に
浮遊しているベルキュロスの巨体が淡い黄色に輝き始めた。シヴァもそれ
に気付いたらしい。素早い動作でガンランスを背に担ぎ上げ、ベルキュロ
スから距離を取る。

「判断はいい」

「シヴァ！！」

中也が叫ぶと同時に、ベルキュロスの体から電気の筋が迸る。つい先ほ
どまでシヴァが立っていた位置が黄色く輝く電気の固まりを受けて

砂埃を
巻きあげるのが見えた。ついでに、低空飛行を続けるベルキュロスの瞳が
中也とベアルドを捕える。
「死にたくなければ運でかわせ」
「運！？」
その対処法はどうか、と言う間もなく、ベルキュロスが空中で軽く頭を
のけぞらせた。鋭い牙が並ぶその口の奥が淡い光を放ち始める。
「っ！」
一瞬、周囲を満たす空気が静まったような気がした。その直後、ベルキ
ュロスがその口から光線を吐き出しながら空中を移動し始める。少し離れ
た場所で、ルナがベルキュロスに向かって矢を放った。空中を舞う砂埃を
裂いてベルキュロスの眼球に向かって飛んで行った矢は、何の前触れも無

く突如として空中に出現した電気の固まりに阻まれ、目標物に届くことな
く地面に落下してしまった。黒く焦げた矢を見て、ルナが軽く顔を顰める
のを見た。

「運でかわせ……ってのは、このことですかっ！」

「そうだ」

見れば、狭い崖の上の大地のあちこちにそれと同じ電気の固まりが浮遊
している。それはいきなり現れ、いきなり消える。これでは前もって予測
して避けることなどできない。

「負けるか～よっ！」

光線を吐き出し終えたベルキュロスに向かってシヴァが再び走り出して
行った。止せ、と叫ぼうとしたその声を音にすることはできなかった。空
中に留まったままバサバサと巨大な羽音を轟かせているベルキュロスと、

思い切り視線がかち合ってしまったのだ。シヴァの心配をしている余裕は
一瞬で消えた。
「シヴァと言ったな。彼の度胸だけは一人前だと認めよう」
ベルキュロスがこちらに向かって低空飛行状態のまま突進して来ている
にも関わらず、特に慌てる様子も逃げる様子もなくベアルドが呟く。巨大
な生物が自分に向かって一直線に突進してくる様は、幾度、体験してもそ
の迫力に圧倒される。故国の物体に例えるなら、１０階建てのビルが自分
に向かって倒れて来るようなものだ。それも、自らの意志をもって。
（堪んねえな、もうっ！）
突進そのものを避けても、巻き起こった爆風に足を取られる。ついでに
砂埃で呼吸は苦しくなるし、運が悪ければ砂は目に入って視界までもを塞

いでしまう。更に言うなら、ベルキュロスというモンスターの場合は、近
くにいるだけで手足や顔にパチパチという嫌な電気が纏わりつく。中也は
ベルキュロスから距離を取りながら、とりあえず視界だけはしっかりと確
保した。何をするにしても、目を開けていられなければ何もできない。
「俺を無視してんじゃねえんだ～ぞ！」
どこまでも余裕のあるシヴァの声が砂埃の向こうから聞こえて来る。ベ
ルキュロスが一瞬、甲高い声を上げて首をのけぞらせたところを見ると、
どうやら再び足先への攻撃を開始したようだ。
「避けろ」
ベアルドの声は、本当によく通る。特に大声を張り上げたわけでもない
のに、その一言はベルキュロスが巻き起こす羽音にも咆哮にも遮られるこ

となくシヴァに届いたらしい。一瞬こちら側に視線を巡らせたシヴァが、

飛び退くようにベルキュロスから距離を取った。

「うわっ！」

その瞬間、雷撃が周囲を襲う。高圧の電気の固まりがあちこちに出現し、

周囲を黄色く染め上げた。その眩しさに、中也は思わず両腕で顔を覆う。

光が収まると同時に腕を降ろせば、目の前にルナの姿を捕えた。彼女はす

ぐ近くに出現した電気の固まりを一回転して避け、起き上がると同時に弓

矢をつがえてベルキュロスに向かって放つ。ベルキュロスの顔を目がけて

飛んで行った矢は、モンスターが体の向きを変えたせいで背のあたりに当

たった。固い鱗に覆われたその体は、モンスターの素材を使って作られた

矢でさえ簡単に通すことはない。硬質な音を立てて弾かれた矢が、地面に

落下していく。しかしながらルナは中也に「惜しい」という一言さえ与え
る時間を許さなかった。
「ルナ！」
矢が地面に落ちるより早く、彼女は地を蹴って走り出し、再びベルキュ
ロスの正面に立つ。矢を放つ。同時に走り出してベルキュロスの攻撃が当
たらない位置へ移動する。彼女が放った矢は、ベルキュロスの顔を覆うた
てがみの辺りに当たった。
「いい腕をしている」
ベルキュロスが不快そうに頭を左右に振るのを見て、ベアルドが感心し
たように呟いた。
「こいつを倒すのは俺だ～ぞ！」
ルナの積極的な攻撃に刺激されたらしく、再びシヴァがガンランスを構

えてベルキュロスに向かっていく。そのシヴァに向かって、ベルキュロス
が低空飛行のまま突進した。向かってくる鉤爪を、シヴァは盾を持ってい
るにも関わらず横に転んで避けた。その様子に、中也の隣に彫像のように
立っていたベアルドが軽く息を漏らした。
「盾を使ってガードしなかったか。なかなか頭がいいな」
「はい？」
「経験が少ないハンターは、大型モンスターの攻撃でさえ盾を使ってガー
ドできると思いこむ。当たり前だが、体重差にやられてそのまま吹っ飛ば
されて死ぬか重傷を負う。ハンター見習いと聞いていたが……」
「あいつは、こういうことにかけては天才的ですから」
内心、少しばかり悔しい思いを抱きながらも、中也はそんなことを言っ
てみた。事実、ウソは言っていないつもりだ。

「逃げ回るのは性に合わねえんだ～ぞ！」

言いながら、シヴァは再びベルキュロスの足に向かって攻撃する。その

時、それまでずっと空中を舞っていたベルキュロスの足が初めて地面につ

いた。

「チャンスだ～ぞ！」

シヴァが言った時、いきなりベルキュロスが体の向きを変え、その長大

な尾を一振りした。中也がはっとした瞬間、その尾の先端がシヴァの体を

直撃する。

「シ……！」

鈍い音がした。咄嗟にガンランスの盾でガードしたシヴァの体が空中に

浮く。そして、彼は大声を上げながら崖の向こうに落下していった。胃の

辺りに冷たいものが流し込まれたような感覚に襲われる。あの高さ

から落
ちれば、まず間違いなく無事では済まされないことを知っているだけに、
頭の中が真っ白になる。
「シヴァ！」
中也が慌てて彼が落ちた方に駆け出した時、崖の向こうに落ちたはずの
シヴァが、雲ひとつない真っ青な空に弧を描きながら戻って来た。
「おかえり。よく戻った」
顔面から着地したシヴァに向かって、ベアルドが静かにそう言った。シ
ヴァは何も言わない。どうやら、ここへ来る時に使ったあの近道に運よく
落ちたらしい。
「お前らしいよ、シヴァ……」
ほっとしたような、情けないような何とも言えない微妙な思いを胸に、
中也は思わずそう呟いていた。

共鳴３０

「大丈夫か？」

言いながら、中也は立ち上がろうとするシヴァの腕を取った。

「死ぬかと思った～ぞ」

「大丈夫だ。お前はまだ死んでいない」

それなりに青い顔をして肩で息をするシヴァに向かって、ベアルドがはっきりと言ってのける。わざわざ言わなくてもいいようなことを言ってくれるベアルドに少しばかり冷めた視線を向けつつ、中也はシヴァに目立った怪我がないことを確認して心の底から安堵した。

「おしゃべりしている時間はない」

ベアルドが何を差してそう言ったのかは、考えなくても分かる。反射的にベルキュロスの方を振り向けば、巨大なモンスターはルナが放った矢を顔面に受け、煩わしそうに頭を振りつつ地面に付けた足を踏みならしていた。

「チャンスだ。斬りかかれ」

「分かってますよっ！　シヴァ、いけるか！？」

「当然だ～ろ！」

シヴァとルナにばかり任せてはいられない。せっかく大剣を担いで来たのだ。せめて一太刀くらいは浴びせたい。

「雷撃が来る時は合図する」

ベルキュロスに向かって駆け出した自分たちの背後から、ベアルドのそんな声がかかった。彼は戦うつもりがないのだろうか、と疑問に思いつつも、中也は迫りくるその巨体に向かって大剣を振り上げた。

「いくぞっ！」

ベルキュロスが動く度に、地面から振動が伝わってくる。その巨体に近付くにつれて、周囲を満たす空気が電気を含んで痺れているのを肌で感じた。不死鳥を思わせる福尾が目の前を通り過ぎる。その風圧を剥き出しの顔に受けながら、中也はベルキュロスに向かって行った。

巨大な足が迫る。頭上で天まで覆い尽くしてしまいそうなほど広い翼

がはためく音がする。薄い膜に覆われたその翼を通って地面に降り注ぐ太陽の光は、まるで泥水のように濁っていた。

「っ！」

振り上げた刃が、ベルキュロスの脚に激突する。さながら岩でも斬りつけたような硬質な音が鼓膜を刺激し、続いて大剣の刃を握りしめていた両手が痙攣しそうになるほどの反動が伝わってきた。顔を顰めつつ、自分が斬りつけた個所に目をやる。大地と同じ色をした鱗が剥がれた程度で、特に傷らしい傷は見当たらなかった。

「硬い……」

「当たり前だ～ろっ！」

思わず呟けば、嬉々とした様子でベルキュロスの胴体の下に潜り込み、その腹をガンランスで攻撃しているシヴァからそんな答えが返って来た。

「脚を狙うなら、こっち側から関節の辺りを斬るしかねえ～ぞ！　そんなとこ斬っても弾かれちまうだけだ～ぞ！」

「……」

わざわざ解説してくれなくても、たった今その事実は証明された。

何となく腹立たしいものを胸に抱きつつ、中也は敢えてベルキュロスから距離を取った。今現在、ベルキュロスの腹の下で攻撃しているのはシヴァだ。今ここで自分までもがそこへ入り込めば、互いが互いの攻撃の邪魔をする結果になりかねない。運が悪ければ、人間同士で傷つけあうこともあり得るだろう。悔しいが、ここは先にその場所を確保したシヴァに譲るしかない。

（他に斬れそうなところはないか……）

自分にはベルキュロスが地面に足を付けている間しか攻撃チャンスはないのだ。この機を逃すのは何とも惜しい。

（くそっ！　シヴァもルナも何でそんなに簡単に戦えるんだよっ！）

自分は未だに攻撃チャンスひとつ掴み切れていないというのに、彼らはあれこれと考えを巡らせる自分が惨めに思えるほど悠々と戦っている。

「……」

ベルキュロスが自分の腹の下にいるシヴァを踏み潰そうと、脚力だけを使って空中に飛び上がれば、シヴァはその動きを利用してより深くガンランスの先端を突き刺す。ベルキュロスの注意がシヴァに向いている隙を見逃さず、ルナが矢を放つ。彼女の手を放れた矢は、ベルキュロスの鼻づらに命中した。軽くのけぞったベルキュロスの様子を見て、ルナの口元が微かに笑ったのを見た。2人とも、どこまでも楽しそうだ。

「どうする……」

唇を噛みしめつつ呟く。見れば、シヴァのガンランスに攻撃されていたベルキュロスの下腹から、微かに血が滴っているのが見えた。その血を浴びて、幼馴染の顔に点々とした赤い模様が現れる。

「雷撃だ」

ベルキュロスが低い唸り声を上げたのが分かった。それとほぼ同時に、少し離れた場所から中也たちの様子を見ていたベアルドからそん

な声がかけられる。中也は慌てて距離を置く。ベルキュロスが放つ雷をまともに食らえば即死であることには間違いないのだ。しかしながら、腹の下にいたシヴァは盾を前にしながら慎重な足取りでほんの少し離れただけにすぎなかった。

「お、おいっ！　シヴァ！！」

中也の呼ぶ声にも、シヴァはベルキュロスをひたと見据えたまま、こちらを振り向くことさえしない。何を考えているんだ、と文句をつける間もなく、ベアルドの言葉通り、ベルキュロスが光線を吐き出そうと上体を持ち上げた。空気が変わる。パリパリという、静電気が走る音が鼓膜を刺激した。

「っ！」

ベルキュロスが狙いを定めたのはベアルドだった。自分ではないことにほんの少し安堵を覚えた時、ベルキュロスが喉の奥から光線を吐き出した。ベアルドが素早い動きでそれを交わす。それを確認し、再びベルキュロスに視線を戻せば、その喉元に深々とガンランスを突き

立てたシヴァの姿を目の当たりにした。

「シヴァ！」

シヴァが何をしたのか、一瞬分からなかった。そしてベルキュロスが唸る。彼がガンランスの先端を引き抜くと、そこからゴボリと音を立ててどす黒い血が溢れだした。

「てめえがそのデカい頭を下げる瞬間を待ってたんだ～ぞ」

黄土色の大地に黒い染みが現れる。そこにあるものが「血」であるという事実を全く意に介している様子もなく、シヴァが赤黒く染まった大地の上を横向きに移動し始めた。

「おいっ！　何する気だっ！　シヴァ！！」

ベルキュロスの首に深い傷を負わせたのだ。てっきり満足してそこで引き下がるかと思いきや、彼はベルキュロスの正面に回り込んでいってしまう。地面に落ちた血がこすれて、掠れた筆で描いたような不自然な模様が現れる。首から血を流すベルキュロスの傍に立つシヴァも、全身に返り血を浴びて何とも気味の悪い姿になっていた。

「さっきのお返しだ～ぞ」

ニッと笑ったシヴァがガンランスを構え直す。今度は何をするつもりなのかと思う間もなく、その先端が火花を噴いた。

「あ……」

何かが爆発した、と思った。耳触りな破裂音が脳を揺らす。ほぼ同時に、ベルキュロスが甲高い唸り声を上げつつ跳ねあがったのを見た。

「やるじゃん、あいつ」

唖然とした自分の傍に、いつの間にやらやって来ていたルナがどこか楽しげに呟く。何とも言えない顔で彼女の方を振り向くと、その綺麗な首筋をゆっくりと汗が伝わって行くのが見えた。微かに乱れた呼吸と、赤く染まった唇……。長い銀髪が風に揺れて、中也の鼻先を掠めて行った。風が運んで来た何とも言えない花のような匂いに、状況が状況であるにも関わらず、中也は無意識に胸の高鳴りを覚えた。

（な、何考えてんだ、俺っ！）

慌てて視線を逸らす。女の子は汗をかいてもこんな匂いがするもの

なのか、とひたすら汗の匂いしかしない自分の体を見下ろしつつそんなことを思う。こんなことを考えているあたり、自分の精神にはまだ余裕がありそうだ。本格的に追い詰められてはいないことを自分で感じて、自分で自分に苦笑した。

「ベアルドさん。いったん退却したいんだけど」

そんな中也の心情など素知らぬ風で、ルナが珍しいことを口にする。

光宮ならばいざ知らず、彼女のようなタイプの口から「退却」という単語が出て来るとは思いも寄らなかった。

「矢が足りない。ついでに、シヴァの武器もそろそろ限界でしょ？」

「そのようだ」

そういうことか、と思った時、再び電気を纏って空中に舞い上がったベルキュロスが悲鳴に似た咆哮を上げながら、地上3メートルの距離から鉤爪を繰り出し始めたのを見た。狙いを定めているのはシヴァのようだ。しつこいほどに、ベルキュロスは何度も同じことを繰り返

し、自分たちには目もくれない。その鉤爪が触れた地面は抉れ、体内から溢れ出た電流が鈍い光を残し、輝いていた。

「退却か……」

いかにも面倒だと言わんばかりの口調で、ベアルドがゆっくりと背後の岩に預けていた上半身を起こした。

「何か問題でもあるの？」

「いや、そういうワケではない。退却の前にするべきことがあるだけだ」

言いながら、ベアルドはベルキュロスを見据える。中也が思わず彼とベルキュロスを交互に見比べると、ベアルドは何も言わずにゆっくりとした足取りで、シヴァに向かって雷を纏った鉤爪を繰り出すベルキュロスの方へと歩み寄って行った。

「あのオッサン、何をする気なの？」

「俺に聞かれても……」

雷を纏ったまま、ベルキュロスが地面に足を付ける。シヴァに向か

って一声唸った後、ふいに巨大な飛竜はくるりと後ろを向いてしまった。

「注意しろ」

中也たちに背を向けたまま、ベアルドがそう言ったのが聞こえる。

ベアルドがこういうことを口にする時は必ず何か危険な攻撃が来る時だと知っている。中也はベルキュロスに視線を注いだ。どんな攻撃が来てもすぐに避けられるように、意識を集中する。自然と、全身の筋肉が強張って行くのを感じた。

「避けろ」

ベアルドの声とほぼ同時に、ベルキュロスが晴天に向かって高々と振り上げた尾を、地面に打ち付ける。巨岩でも落ちて来たかのような激しい地鳴りがし、直撃を受けた大地が無残に裂けた。その瞬間、ベルキュロスの体内から黄色く光る電流が迸る。電流は三つの光の筋となり、さながら坂道を転がるかのような勢いで、ひとつはシヴァに、ひとつはベアルドに、そしてもうひとつは中也とルナに向かって大地

を駆ける。

「何て攻撃してくるんだよっ！」

自分に向かって来た電気の固まりを避けながら、中也は思わずぼやいてみる。そして再びベルキュロスに視線を注いだ時、未だ地面に近い位置にあるその長大な尾の、すぐ傍に立って大剣を構えるベアルドの姿を確認した。

「ベアルドさんっ！」

中也の呼ぶ声に耳を貸す様子もなく、ベアルドは刃を振り下ろした。

「な……」

ベアルドが持つ大剣の刃が切り裂いたのは、予想通りベルキュロスの尻尾の先端部分だった。ゴトン……という何とも気味の悪い音がして、ベルキュロスが甲高い悲鳴と同時に前方向に転がりこむ。

「見た目以上にやるね、あの人」

「そうみたいだ……」

自分が同じ大剣という武器を担いでいるから分かる。自分ではとて

もあんな速さで大剣を振り下ろすことなどできないだろう。おまけに、

彼の動作は重量級の武器を担いでいるとは思えないほど軽やかで、しっかりしている。ルナの言葉に、中也は無心で同意してしまっていた。

「さあ、退却だ」

「ど、どうやって……」

ベルキュロスはまだそこにいる。おまけに、いつまた電撃を纏った攻撃を仕掛けて来てもおかしくないほど、血走った目で自分たちを睨んでいるのだ。

「すぐに飛んで行く」

「はい？」

中也が何を根拠にした言葉か理解でき兼ねているうちに、彼の言った通り、ベルキュロスは鋭い牙が並んだ嘴をガチガチと噛みならしたかと思うと、そのまま両翼に力を込め、大地を蹴った。地面に巨大な影が落ちる。その横にボタボタと血の固まりが降って来た。影が移動

する方向へ、血痕も点々と続いて行く。

「大型飛竜種のクエストでは、一時撤退する前に尻尾を切断しておくのが普通だ。そこからの出血で体力を奪える上に、地面に落ちた血の痕を辿れば次に討伐に出向いた際に、いちいち探し回らなくてもいいからだ。アルテリアのハンター訓練学校で教わらなかったか？」

「……」

そう言われてみれば、いつかどこかでそのようなことを聞いたような気がする。大型飛竜種の尻尾の先端には血管が集中していることが多いため、一度でも切断しておけば出血はそう簡単に止まらないとも聞いたような気がする。ついでに、ペイントボールというハンターのためのアイテムも存在しているが、あれは風向きひとつでモンスターの居場所があやふやになるため、好んで使うハンターは少ないということも思い出した。

「オッサン、あのベルキュンは俺の獲物なんだ～ぞ。勝手に尻尾なんか斬るな～よ」

「それは悪かった。しかし、どうやってガンランスで尻尾を切断するつもりだった？」

「それは……まあ、その、ねえ！　何て言うか～」

ベルキュロスが立ち去って行って肩の力を抜き、ほっとしたところへ、ガンランスを担いだシヴァが文句を垂れつつ戻って来た。幼馴染の体から、かつてないほど濃厚な血の匂いがする。シヴァに分からないように、中也は顔を逸らしつつ表情を顰めた。

「さあ、戻るぞ。あまりのんびりしているとベルキュロスが回復してしまう」

ベアルドが踵を返したのを合図に、シヴァはくだらないおしゃべりを止めた。ベース・キャンプへ向かって真っ直ぐに帰るつもりだろうと思っていたベアルドがふいに立ち止まって中也たちを振り返った。

「何ですか？」

自分たちを見やるその表情は、キツネの面に隠れて分からない。おかげで毎度のことながら今度は何だ、と身構えてしまう。

「ベース・キャンプへ戻る道は二つある」

「それがどうかしたのか～よ」

さもどっちでもいいと言わんばかりに、シヴァが適当な返事を向けた。彼の興味はベルキュロスそのものなので、おそらく退却ルートなど、本当にどうでもいいのだろう。

「そこの崖から飛び降りるのが一番早い。もうひとつは遠回りだ。どっちを行く？」

「……遠回りを選ぶ～ぞ」

そこだけ真剣な顔で、シヴァが答える。中也もルナも反対する理由がなかった。

共鳴３１

「まったく何なのよ、あの人たち！」

体に回された縄が肌に食い込む。長時間に渡って後ろ手に縛り上げられたままの腕は、そろそろ感覚を無くしてしまいそうなほどに痺れていた。

「夏葉が胡蝶だから何だって言うのよ！　いきなり態度を変えて役所に連絡するなんて有り得ないわ！　おまけにどうして何もしてないのに牢に入れられて、こんな扱いを受けなきゃならないのよっ！」

暗い色をした板張りの牢には格子が嵌められた窓がひとつきり。そこから差し込む光は朝焼けの淡いオレンジ色を宿していた。

「それにあのクソババア！　思い出しただけでも腹がたつ！　ああいうヤツは一度ニブルヘイム（地獄）の底の底に叩き落されてグッチョングッチョンのケッチョンケッチョンにされてしまえばい……ハックチュン！」

自分の意図とは関係なくクシャミが飛び出した。見れば、窓からの光に照らし出されて大量のホコリが宙を舞っているのが分かる。いったいどれだけ長い間ちゃんとした掃除をしていないのだろう。明るくなっていくにつれて、狭い部屋の隅にホコリが山になっているのが目に映ってゾッとした。

「この国の人間はっ！　まったくもう！　他人の生まれだとか見た目だとか服装を陰からコソコソコソコソあだこうだと言うヒマがあるんだったら、少しくらい掃除しなさいよ、ホントに！」

鼻水が出る。しかしながら、両腕を縛られているため、どうすることもできない。仕方ないので、そのまま吸い上げた。

「だいたい！　最低限の掃除をして自分の周りを清潔に保つことが病気を防ぐ基本だってことくらい、今じゃあ当たり前よ、ホントに！　自分の怠惰を胡蝶だとかモンスターのせいにしてんじゃないわよ、まったく！」

言いながら、再びクシャミをする。だんだん自分が何を言って

いるのか分からなくなってきていた。

「ああ……もう……やってらんないわ」

そろそろ疲れてきた。それを見てとったらしい薬屋の若旦那が相変わらず笑顔のまま自分の方を振り返る。

「まあまあ、光さん。そうカッカなさらずに」

しかしながら、彼の一言で再び頭の中で何かがキレた。

「カッカせずにいられる方がおかしいわよ！　どうしてこんな理不尽すぎる扱いを受けてヘラヘラヘラ笑ってられるのよ！あんた、頭のネジがどっかブッ飛んでんじゃないの！？」

ついつい思ったことを口にすると、なぜか若旦那のお付きであるライトとレフト、そしてヒチが軽い笑い声を上げた。

「すみません、俺のせいで迷惑をおかけしてしまって……」

こちらが本気で怒っているというのに、余裕で笑って見せる薬屋一行にもついでに怒りの矛先を向けようとした時、ふいに夏葉が沈痛な面持ちでそう呟くのが聞こえた。

「いえいえ、夏葉さ……」

「何であんたが謝んのよ！　バッカじゃないの！？　あんた、何にもしてないでしょう！？　何にもしてないのに、どうして謝ったりすんのよ！？　人がいいにもほどがあるわよ！　むしろバカよ、バカ！」

若旦那が夏葉に向かって何か言おうとしていたような気がしたが、そんなことは関係ない。とりあえず夏葉に向かって言いたいことを言っておく。反論してくるかと思いきや、夏葉は何も言わずに、視線を下げた。

「ねえ、若旦那」

夏葉の態度に内心の煮え切らない気持ちが掻き回されて余計に頭に血が昇る。更に文句を並べようとした時、レイが落ち着き払った声で若旦那に話しかけてしまって、そのタイミングを逃してしまった。喉まで込み上げていた文句の言葉は音にすることなく飲みこむしかない。

「せっかくだから聞かせてもらえねえか？　どうして胡蝶がいるとこんな扱いを受けないといけないわけ？　やっぱ胡蝶は鬼龍の子供を産めるから、とか？」

「まあ、８割はそれで正解です」

ニッコリと笑ったまま、若旦那はレイの質問に答える。

「８割っていうのが気になるわね」

「でしょうとも」

どうやらわざわざ気になる言い方をされたようだ。始めからそれとなく思っていたことではあるが、いちいち癇に障る男である。

「敢えて一言で締めくくってしまえば、この国のこの地方では夏葉さんのような胡蝶はいわゆる“差別”の対象なんですよ。まあ早い話、それだけです」

「そんなことはいちいち説明されなくても分かってるわよ」

つい今しがた身を持って思い知らされたことをわざわざ言葉

にされて、先ほどの出来事が脳裏に甦る。夏葉が胡蝶だと分かった瞬間、佐知を筆頭にそれまで普通に接してくれていたはずの弟子たちまでもが態度を一変させた。そして、まるで汚いものでも見るかのような視線を向け、挙げ句の果てに塩まで撒かれた。そして連絡を受けてやってきた役人たちに捕えられ、まるで罪人のように縄をかけられて牢屋に放り込まれたのだ。

「思い出しただけでも腹が立つ……」

「まあまあ」

やり場のない気持ちに肩を振るわせる自分を、若旦那が柔らかくたしなめてきた。

「胡蝶は確かに鬼龍の子を宿すことができると言われています。大半の人間はモンスターを忌み嫌っておりますからね。人間の常識では計り知れない力を秘めた鬼龍というモンスターを恐れ、子孫を残されることを阻止しようと考えても不思議はありません」

「それはまあ、分からないでもないけど」

だからと言って、胡蝶だというだけで、あるいは胡蝶と共にいるという理由だけでこんな扱いを受ける理由にはならない。本音を言うなら、自分たちに塩を投げつけた連中のことがどうにも好きになれないということも関係している。

「しかし、実際に鬼龍と胡蝶の間に産まれた者に会ったことがある人間がいったい何人いるかと聞かれて答えられる人は少ないでしょう。ついでに、鬼龍そのものを見たことがある人間も極僅かです」

だから何だと言わんばかりの顔をしている自分に向かって若旦那は言葉を続ける。

「すべては憶測の領域に過ぎないのですよ。憶測が憶測を呼び、姿を現したならばハンターを呼んで討伐して貰えば済む普通のモンスターとは違い、姿かたちが見えないからこそ鬼龍というモンスターに人の心は余計に恐怖を駆り立てられる。そしてい

つか、モンスターには関係のないはずの人災や天災、個人を襲う不幸に至るまで鬼龍というモンスターの仕業ということになっていく。そんなものです」

「でも鬼龍は実在してるじゃねえか」

自分の考えをレイが代弁した。その通りだ。他の誰が何と言おうと、自分たちは鬼龍というモンスターが確かに存在していることを身をもって知っている。そして、そのおかげで様々な痛い目をみていることもまた事実である。

「誰も鬼龍が存在しないなどとは言っておりませんよ。肝心なのは、鬼龍が存在しているかしていないかではなく、そこに生きている人間そのものの心情なんです」

自分たちの心情などどこ吹く風、と言った雰囲気で若旦那は語る。その表情は、今まで見たことがないほど真剣そのものだった。

「極端な思想ではありますが、いろいろな意味で貧しい人間は、

胡蝶という存在を数多の人間の中で最も下位に位置づける。それだけで、ただ男として生まれた自分、女として生まれた自分は胡蝶よりも優れた存在だと思いこむことができるようです。自分は何かよりも優れている……そう思えることは差別する側にしてみればさぞ気分がいいことでしょう」

自分で言った通り、極端な思想だと思った。単純に、幼いころから「胡蝶とは劣等人種だ」と親から言われ続ければ、大人になってもなかなかその考えは変えられないものなのではないかと自分は思う。それに、問題となっている胡蝶そのものが極端に数が少ないのだから、本人たちが声を上げてもなかなかその声が大勢に届くことはないだろう。

「人それぞれ考えは違いますから何とも言えませんが、何の努力もなく、何の犠牲も払うことなく得られる“優位”というものほど人の心を誘惑する蜜はないでしょう。胡蝶は、ちょうど良い存在だったのですよ」

「そんなモンかしら」

溜め息混じりに言ってみる。

「誰かより優れていると思えることが、そんなに素晴らしいことは思わないわ」

有り体に言ってしまえば、興味がないの一言に尽きる。第一どう生まれたかで優位に立てるとも思わない。思ったこともなかった。むしろ、一国の王女として産まれたことでまるで服のように付き纏う責任感や義務感、体裁作りなどに翻弄されてばかりだ。

「そんなに自分に自信を持ちたいなら、自信が持てるような生き方をすればいいじゃない」

「それができない人間もいるんですよ。この国で最も保守的な色合いが強い、この地方の人間のことです」

言われてはっとした。この国に来てから出会った人間のことを思い出してみる。何となく、納得できる気がした。

「……クリス3世はどう思っているのかしら」

少しばかりの沈黙の後、光宮はふと呟いてみる。

「前時代的、とでも言うのかしら。昔ながらの習慣を大切にしていることは悪いことだとは思わないけど、それでも悪い習慣とか、悪い迷信なんかは無くしていかなきゃならないでしょ？どこにどう生まれたかでどう生きるべきか決まっている。他の選択肢はない、なんておかしいわよ」

「さあ、そればかりは何とも……。ただ、人の心ばかりは上からこうしろと言われて、はいそうですかと簡単に変わるものではないですからね」

「そうね」

何が一番の問題かと言えば、この地方の人々に「命令」している者がいないことだ。誰かから強制された考えであるのならば、強制している者を排除すれば済む話である。誰からも強制されていないにも拘わらず、自分が出会ってきた人々は「こう

生まれた者はこうあるべき」という理想に忠実に生きようとしていたように思う。

（これだから面倒なんだわ）

壁に凭れかかりながら重い溜め息を落とす。世界にはいろいろな国があって、いろいろな人間が溢れていて、いろいろな考えを抱いて生きている。誰かにとって正しい考えが、他の誰かにとって正しい考えとは限らない。

（嫌になるわね……ホント）

自分もいずれは、こういう面倒なことと四六時中向き合っていなければならない立場になるだろう。たとえ王位継承権は捨てたと言っても、それでも一国の王女であるという出生そのものは変えられない。

（王女っていうのは、ホントに嫌だわ）

先ほどまでの怒りが、まるで潮が引くように消えて行くのが分かる。変わりに残されたのはヘドロのような憂鬱だった。

「取り調べだ」

ふいにたったひとつしかないドアの前に人の気配が現れ、今は静寂に満たされたその狭い空間の中に、低く籠ったような男の声が響き渡った。

（何なのよ、取り調べって）

木のドアが軋む気味の悪い音がして、その向こうに立っていたチョンマゲ姿の男の姿が見てとれる。何度見てもおかしな髪型だと思う。彼は牢に入れられていた光宮たちを舐めるような視線で順に見渡し、最も反抗的な視線で見つめていたと思われる光宮に目を留めた。

「まずはお前だ。出ろ」

ずかずかと歩みを進めた男は、光宮が着ていた衣服の襟を掴んで強引に立ち上がらせる。その乱暴な態度に、そろそろ堪忍袋の緒も限界を訴えていた。

「気安く触るんじゃないわよ！　あんた、ちゃんとトイレに行

って手を洗ったんでしょうね！？」

ついついそんなことを口走る自分を、薬屋一同たちが心配そうな目で見つめている。レイと夏葉は、呆れたような情けないような何とも言えない表情で下を向いていた。一方、自分に手を洗ったのかと問われた男は、見下したような視線を向けてくる。余計に腹が立った。

「これからお代官様が直々に取り調べを行ってくださるんだ。その失礼な態度を改めろ」

「態度を改めるのは、むしろあんたたちよ！」

体を揺すって、男の手を強引に振り払う。男の正面に立って真っ向から見据えながら、光宮は言い放った。

「私はアルテリア王国の王女よ！　これ以上、あんたたちが私に不快な思いをさせれば、アルテリア全軍をもってしてあんたの股間を踏み潰してやる！」

その場にいたすべての人間の表情が、いろいろな意味で激変

した……。

共鳴３２

「使いモンにならねえ武器だ～な。この程度でもう先端がボロボロだ～ぞ」

昼下がり、無人のベース・キャンプへと戻って来た中也たちは、それぞれ武器の手入れに勤しんでいた。

「お前が攻撃し過ぎるからだろ？　もうちょっとベアルドさんの作戦通りに動いた方が無難じゃないのか？」

大して痛んでいない大剣の刃を無意味に砥石で磨きながら、正面でガンランスを研いでいるシヴァに嫌味混じりの言葉を返してしまう。そんな中也に、シヴァは冗談ではないと言わんばかりに笑ってみせた。

「あのベルキュンは俺が倒すって決めたんだ～ぞ。そうと決まればチマチマ攻撃なんかしてらんねえ～ぞ」

「何だよ、それ」

自然と、幼馴染に向ける声が冷たくなってしまう。シヴァは何も

悪いことなどしていないと頭では分かっている。しかしながら、あのベルキュロス相手に果敢に戦いを挑む姿を見せつけられたのだ。

ついでに言うなら、むしろ彼は自分のペースで戦っていた。攻撃のチャンスさえ見極め切れなかった自分との差を嫌でも思い知らされて、胸のうちが悔しさに歪んでしまう。

（こいつは、いつだってそうだよ……）

思い返してみれば、3か月前の入学式にいきなり樹海の只中に放り出されたあの時でさえ、彼はパニックとは無縁だった。無論、それなりに戸惑った顔をしていたのは事実だが、レウスのような大型モンスターが現れても、ババコンガ率いるコンガの群れに強襲されても、シヴァは怯む様子を見せたことはない。どちらかと言えば、自分から戦いに行っていたように思う。それは好戦的な性格だとか、負けず嫌いだとか、そういった言葉では片付けられない次元の話だと自分は思う。

（俺には真似できねえ……）

そう思えば思うほど、内心に渦巻くやりきれない気持ちが膨れ上がってしまう。そしてふと思い至った。

「なあ、お前……こないだのクエストでクックを討伐した時は、あんまり攻撃してなかったことないか？　光が指示してくることを、いちいち守ってたじゃないか。何で光が言うことは守るのに、ベアルドさんの言うことは無視すんだよ」

「はあ？」

あの時はクエストを始める前にヤオザミに足を斬られて怪我していた。そのせいだろうか、とも思うものの、彼の性格上たかが足を怪我したくらいで誰かの指示通りに動くとは思えなかった。

「クック相手じゃノらねえんだ～よ」

何でもないことのように答えたシヴァは、一瞬、今まで見たことがない表情を見せた。その表情がまるで別人のようで、中也は驚きのあまり無意識だが微かに体を浮かせていた。

（こんな顔するのかよ、こいつ……）

家が近所だったこともあって、シヴァのことは本当に子供のころからよく知っている。いや、知っているつもりだった。けれど、中也の嫌味混じりの質問に答えた彼は、さながら多くの獲物を狩り、その血を浴び続けた熟練ハンターのような顔をしてそこにいた。

（自分が知っていることだけが、すべてじゃない……）

いつかどこかで聞いたことがある言葉が、なぜかその時、胸に浮かんだ。

「それより中也～。俺、腹減った～ぞ。何か食いモンねえのか～よ」

研いでいたガンランスから顔を上げたシヴァは、いつも以上に間の抜けた顔をしていた。

「!?」

先ほど一瞬だけ垣間見せたその表情とのあまりのギャップに、中也は空いた口が塞がらなかった。

「ん？　中也～？　どうかした～か？」

「あ、いや、何でも……」

唖然としてシヴァを見つめる中也に、彼が不思議そうな顔で聞いて来る。

（気のせいか……？）

あるいは自分の見間違いだろうか。

（気のせいだよな……）

考えてみれば、あのシヴァがあんな残酷な表情をするはずがない。きっと光の加減でそんな風に見えただけだ。中也は自分にそう言い聞かせて、シヴァの注文を遂行するため、重くなった腰を上げた。

（気のせい、気のせい。忘れよう。今はそれどころじゃないんだし。それに、確かに俺も腹減った）

ベルキュロスと戦っている、あるいは戦わなくてはならないというこの現状にも拘わらず、成長期の胃袋は実に欲求に忠実である。しかしながらこればかりはどうしようもない。誰が何と言おうと腹が減るものは減るのだ。

「ベアルドさん」

気を取り直して、中也はベース・キャンプに張られた簡易テントに向かって声をかける。目的の人物は乱雑に積み上げられた木箱の上に腰を降ろし、自分が担いでいた大剣の刃をじっと見つめていた。

「何か用か」

呼ばれてキツネの面を上げた彼の正面にはルナがいて、ベアルドと同じように木箱の上に陣取り、何をするでもなく矢尻の先を見つめていた。ベース・キャンプにいるのは「これだけ」だ。他に、クエスト達成を手伝ってくれる者はひとりとしていない。

「腹減ったんだけど。何か食うモンないかな」

「携帯食料ならばある。味は保証しないが、とりあえず腹は膨れる。好きに食え」

ベアルドが指差した先には青く塗られた木箱があり、言われるままそれを開けてみると、その中には紙で包まれた手の平サイズの物体が四つ、箱の大きさに似合わないささやかさで転がっていた。

「四つあるから、俺とシヴァの分を二つ貰っていくよ」

「あたし、いらない。あんたにあげる」

ルナの申し出は実にありがたかった。そう言えば彼女はダイエット中だったような気がする。何だか申し訳ないような気分になりつつも、中也はその申し出を進んで受けることにした。

「じゃあ、遠慮なく貰っていくよ、ルナ」

「どうぞ～」

手の平の上で弄ぶ矢尻から視線を上げないまま、ルナはそう言ってくる。ルナの分はシヴァと半分に分けるか、と思った時、ベアルドが静かに声を上げた。

「俺の分も持って行け」

「え？　いいんですか？」

見た目に似合わずいい人だ、と感激すらした。しかし、続く彼の言葉に絶句した。

「ギルドから支給された携帯食料はとても食えたモンじゃないから

な。愛妻弁当を持参した」

「……そうですか」

いい人だと思ったのだが、そうでもないらしい。だが、背に腹は変えられない。食えたモンじゃないとベアルドからお墨付きをいただいた携帯食料を四つ抱え、中也はシヴァのところに戻って行った。

＊

足元に、白骨が転がっていた。かろうじて頭蓋の部分だけを覗かせている真っ白な骨が、空洞の瞳で自分たちを見つめている。傍の岩には何かメッセージのようなものが書き残されていたが、今はもう読み取ることができなかった。それはこの白骨化した人間が死の直前に書き残したものなのか、それとも仲間からの手向けの言葉か。それすらも判別がつかず、今はただ岩に残った傷痕のようにしか見えない。

（最後の言葉だったら、こんな風に消えかかる前にちゃんと誰かが読んでいたらいいな……）

視線の先に、今は眠っているように見えるベルキュロスがいた。

岩と砂しかないと思っていたこの場所にも、水場と呼べるものは存在したらしい。高い岩に挟まれ、さながら外界から閉ざされたように見えなくもないこのエリアで、ベルキュロスは傷付いた体を庇うように、蹲っている。

「第二ラウンドだ～ぞ」

中也の横で、シヴァがガンランスを担ぎなおすのが見えた。クエストに出る前、ベアルドからベルキュロスは夜行性なのだと聞かされている。そのため、ベルキュロス討伐戦は少しでも動きが鈍っていると思われる昼間に行うのが常であるらしい。普段は動かない昼間に、ちっぽけな侵入者たちと戦わされ、挙げ句に思わぬ傷を負ったのだ。ベルキュロスが眠っていたとしても、不思議はない。

「俺としてはここで罠を仕掛けることを提案するが」

今にも飛び出して行こうとしているシヴァに向かって、ベアルドが抑えた声音でそんなことを呟く。

「くだらねえこと言ってんじゃねえんだ～ぞ」

「そうか」

おそらく、ベアルドも中也と同様に、シヴァがそう返すだろうと思っていたようだ。それ以上は特に何も言わず、足元に白骨が転がる岩に体を預けてしまう。どうやら彼はここでも先手立って戦うつもりはないらしい。

「さてと～。ルナ、援護してくれ～よ」

「了解」

当たり前のような顔をしてルナが頷き、弓矢を構える。そして、シヴァは自分の方を見ることもなく、ベルキュロスに向かって走り出して行ってしまった。

（俺には何も言うことないのかよ！？）

シヴァとルナの後を追いかけて行きながら、中也はシヴァの態度に苛立ちを覚えた。真夏の陽光が眼球に突き刺さる。日陰から一気に日向に出たせいで、一瞬、目の前が白く染まったような錯覚に捕

らわれた。

（最初からアテにしてないってことか！？）

自分でも気にしていることだけに、余計に腹が立つ。しかし、腹が立つからと言って、自分にできることは変わらない。

（足を……引っ張らないようにするのが、せいぜいだ……）

悔しいが、それ以外に思い浮かぶことはなかった。

先頭を走ってベルキュロスに向かって行ったシヴァが、その場に似合わない陽気な声を上げながら、ゆったりと眠りにたゆたうベルキュロスの頭に向かってガンランスの砲撃を浴びせる。途端に、それまで眠っていた巨大なモンスターが、嘴から牙を零しながら、鼓膜が破れるような咆哮を上げ、目を覚ました。

「おはよーさんだ～ぞ！！」

（ドラゴン、だな……、ホントに……）

黒煙を纏わりつかせながら、鎌首を空に向かって勢いよく持ち上げるその姿を間近で見せつけられ、中也の脳裏にそんな単語が思い

浮かんだ。シヴァやルナ、ベアルドを始め、この世界に生きる誰に言っても、おそらくその単語は理解して貰えないだろう。だが、手を伸ばせば触れられるような距離で両翼をはばたかせ、宙に舞い上がっていくその姿には、一種の神々しさのようなものを感じないでもなかった。砂煙が舞う。途端に、空気が電気を含んで痺れ始めたのを肌で感じた。

「ルナ！　翼を狙ってもらえる～か!?　ピョンピョン飛ばれたままだとウザいんだ～ぞ！」

「やってみる！」

モンスターという脅威の生き物に一瞬だが思いを馳せていた中也を余所に、シヴァとルナが爆風に負けない大声でそんな会話をしているのが聞こえて来る。見る間に、ベルキュロスの姿が遠くなる。上昇気流を捕まえ、高く高く空に昇りつめたベルキュロスが太陽を背に動きを止めた。

（まさか……！）

灼熱の球体を背負うように空中に留まっていたベルキュロスが、ふいに両翼を折り畳む。その瞬間、その巨体からは想像もつかないスピードで、それが滑空してきた。

「マズイ!!　シヴァ、ルナ、避けろぉ!!」

中也の叫び声に二人の顔色が変わる。風を切る凄まじい轟音が見る間に近付いて来る。ガンランスを構えていたシヴァが、中也の忠告を聞いて、それを背に担いだ。ほぼ同時に、地上寸前で雷を纏ったベルキュロスが中也たち目がけて突っ込んできた。

（なんて威力だよ……っ!）

ベルキュロスが突っ込んだ大地は、まるで隕石でも落下したかのように巨大な穴が空いている。ところどころ帯電し、ビリビリと小さな雷を走らせる大地を、中也は愕然とした思いで見つめていた。

（こんなの、マトモに食らったら粉々だよ……!　何より……）

何より、これだけの威力を放つ攻撃を仕掛けてなお、ヒビひとつ入っていないその鉤爪だ。それに秘められた力に圧倒されながら、

中也は砂をかぶった体を起こした。

「チャンスだ～ぞ！」

そんな中也とは対象的に、シヴァがベルキュロスに向かって走って行く。どうやら先ほどの攻撃は、最大限に雷を放出するものだったらしく、今は地面に足を付けているベルキュロスは雷を纏ってはいない。

「行くぞ～！！」

自分に向かってくるシヴァに、ベルキュロスが気付いた。低い唸り声を上げながら、翼を折り畳んだベルキュロスはその場で尻尾を振り回す。シヴァの頭上すれすれを、硬い鱗に覆われた尾が通り過ぎていく。ヒヤヒヤしながらそれを眺める中也の心情を余所に、シヴァは素早くその腹部に潜り込んだ。

「っう……！」

援護しようにも、どこに入り込んだらいいのか分からない。それに、ベルキュロスは先端が切れた尾を振り回していたので、迂闊に

近付くこともできなかった。ベルキュロスの方も、雷で攻撃できない今、自分の真下に入り込まれてしまってはどうすることもできないようだ。鬱陶しそうに唸りつつ体の位置を変えるが、移動してもシヴァは離れない。嬉々として、ガンランスの先端で腹部を突き刺し続けていた。

「あぶな……！」

ベルキュロスが地面を蹴る。一瞬、空中に舞い上がったその巨体が、鉤爪を繰り出しながらシヴァに向かって落ちて来る。中也が危ない、と叫ぼうとした時には、すでにシヴァは横に転がってその爪を避けた後だった。

（俺、ただの役立たずじゃないかよ……！）

憤りの思いが、胸に蹲る。

共鳴３３

中也が無意識に拳を握りしめた時、ベルキュロスが翼を広げた一瞬の隙を見逃さず、ルナが矢を撃ち込んだ。薄い膜に覆われた翼が裂け、そこから青い空が微かに覗く。

（確かに、翼に穴が空いてたら飛べなくなる……）

しかしながら、標的となるベルキュロスは巨体とは言え激しく動きまわっていたし、飛び立つつもりのないモンスターは地上にいる時は、その両翼を折り畳んだままだった。本当に、ベルキュロスが翼を広げたのは瞬きをするような一瞬だったのだ。ついでに言うなら、周囲はベルキュロスという巨大なモンスターが巻き起こす風圧で、空気が不規則に流れている。

（なのに、ルナは命中させた）

シヴァだけではなく、女の子であるルナにまで遅れを取っている自分。想像するだけで精神的ダメージを食らった。別の言い方をするなら、激しく「へコんだ」。

（そりゃあルナの弓がスゲーのは知ってるけど……）

相手は名前さえも聞いたことがなかったモンスターで、自分たちにとっては初めての飛竜討伐戦。おまけにモンスターの情報もほとんどないに等しく、援助してくれるはずのギルドはほとんどアテにならないときている。これだけ不安要素を抱えたクエストなのだから、少しくらい戸惑う様子を見せてくれてもいいのではないかと見当違いなことを考えてしまう自分に、更に落ち込んだ。

「中也、どうかした！？」

ふいにルナに話しかけられて、中也は慌てて首を振った。

「何でもないよ！」

「ならいいけど！」

風が激しく動いている。声を張り上げなければ、１メートル向こうにいるルナの声は聞こえないし、中也の声も届かない。普段使わない大声を何度も張り上げているせいで、先ほどから喉の奥がヒリヒリと痛んでいた。

（心配しないでくれよ……）

余計に情けなくなる。ルナに悪気はないのだろうが、戦いの場で女の子に心配されると、自分の情けなさが強調されてより一層、悲しくなるのだ。

「そろそろか～な！？」

中也が人知れず葛藤している間に、シヴァがガンランスを背中に担ぎ直し、素早くベルキュロスから距離を取った。その時、ベルキュロスの体が黄色く輝く電気を放出し始め、低く唸り声を上げながら頭を低くする。

（運でかわす攻撃だ！）

咄嗟に身構えた。同時に、狭い空間のあちこちに高エネルギーを秘めた電気の固まりが出現する。バチバチと帯電する音が周囲を満たし、ルナが横に転がりながら電気を避けたのが見えた。

「くっ！」

自分のすぐ傍にも固まりが現れる。慌てて後ずさって回避した。

視線の先で、ベルキュロスが左右に軽く頭を振っている。そして打ち鳴らされる尻尾から、雷撃が飛んできた。様子を窺うようなゆっくりとした動作で、シヴァがそれを余裕のある距離から避けているのが見える。

（尻尾の先端が切れてるんだぞ！？　普通に考えれば、怪我したところを地面に思い切り叩きつけたら痛いだろ！？）

中也は、二度、三度と地面に尻尾を打ちつけて雷撃を繰り返しているベルキュロスを見ながらそんなことを思った。だが、そんな人間の常識はモンスターには通用しないらしい。ベルキュロスに表情があるのかどうかは定かではないが、中也の目に、標的となっているベルキュロスは出血量にも拘わらずひたすら平然としているように見えた。

「シヴァ！　足を狙って！　そいつを飛ばせてくれない！？」

いつの間にやら離れた場所にいたルナが、水の近くにいるシヴァに向かってそう言ったのが聞こえてくる。

「やってみる～ぞ！」

ルナからのリクエストに答えるように、シヴァがガンランスを構えつつ、帯電状態のままのベルキュロスに向かって進んで行く。

「お、おい！　危ないぞ！」

電気を放出している時に攻撃すれば、攻撃しているシヴァも一緒に痺れる可能性がある。しかし、中也の声など素知らぬ顔で、シヴァは足を踏みならしているベルキュロスに近付いて行く。

「そぉれ、だ～ぞ！」

振り回されていた長い尾を、ガンランスを構えたまま横に転がってやりすごし、起き上がると同時に、その大木のような足に向かって砲撃を浴びせる。

「……っ！」

どうやら、自分が心配しなくても帯電状態のベルキュロスに攻撃を仕掛けるリスクをシヴァはちゃんと知っていたらしい。中也が見ている前で、砲撃をまともに食らったベルキュロスがたたら

を踏む。そして、器用なことに片手で弾を装填しているシヴァを睨みつけたあと、後ろ足と両翼に力を込めて低空に舞い上がって行った。

「ここからは私の仕事だね」

中也たちの頭上1メートルの位置に留まったベルキュロスが上体をのけぞらせる。思った通り、口から旋風のように雷撃を吐き出しつつエリアのあちこちを移動し始めた。そんなベルキュロスに向かって、ルナが嬉々として弓を構える。

「さあ、落ちなよ」

三本の矢を同時に弓につがえたルナが、迫りくるベルキュロスの真下に潜り込み、そこから羽根に向かって矢を放つ。少し離れた場所から見ていた中也には、ルナの矢が羽根を貫通する様子がはっきりと分かった。

（勇気があるとかないとか、そういうレベルじゃないよなあ……）

低空を思うままに飛行するベルキュロスを追いかけ、ルナは走

りながら弓を引く。矢を放ち、再び走り、ベルキュロスが攻撃を仕掛けてくれば寸でのところで地面に転がって避け、近距離から矢を放つ。先ほどからそんな一連の動作を繰り返している彼女は、その運動量にも拘わらず特に息を切らす様子は見せなかった。

（体力からして俺とは違うよな……）

そして、ベルキュロスが低空から雷を纏った鉤爪を繰り出す攻撃に切り替える。大砲でも鳴らされたかのような音が響き渡り、ベルキュロスが抉った地面が割れた。

「あ……！」

ベルキュロスの攻撃を避けた後で、中也はルナが水辺に入って行くのを見た。本人は全く気にする様子はない。相変わらず、恐れを知らない銀色の瞳でベルキュロスを見つめたまま、ひたすら矢を放っている。

「ルナ！　危ない！　水から出ろ！」

「え？」

中也の叫びにも似た声に、驚いたような顔で振り返る。そんな彼女に向かって、ベルキュロスが雷をまとった鉤爪を水面に向かって繰り出した。

「ルナ！！」

気が付いた時には体が勝手に動いていた。水の中にいたら感電してしまう。ベルキュロスが放つ雷がどれほどの威力を持っているのかは分からないが、そうなると分かっていて無視するわけにはいかない。

「地面の方に！」

ベルキュロスの鉤爪が水に触れる直前、中也はルナの腕を思い切り引っ張っていた。勢いのあまり、二人して地面に転がりこむ。

「っ！？」

背中に当たる地面の感触に、何とか感電死は免れたとほっとしたのも束の間、中也は顔全体を包み込む何とも柔らかなその感触に愕然として固まった。

「……羨ましい～ぞ、中也」

少し離れた場所で、シヴァがボソリと呟いたのが聞こえてくる。

だが、その世にも稀な心地よい柔らかさに意識が集中するあまり、体がまるで石になってしまったかのように指先一本動かせなかった。

「ごめん」

初めてルナと会った時から大きいなと思っていたルナの胸は、とにかく柔らかい。そして温かい。ついでに言うなら程良い弾力が堪らなかった。かつて故国で売られていたビーズが詰められたクッションや最高級のマシュマロでさえ、これほどの極上の柔らかさは生み出せないだろう。頭の上でルナが小さく謝りながら体を離していった。何とも言えない花のような匂いが遠ざかっていってしまう。心の底から、それが残念だと思った。

「……」

一瞬だが意識を手放してしまった中也を現実に引き戻したのは

ベルキュロスの巨大な咆哮だった。天国とも、花園とも呼べる異空間から戻ってきた中也は、慌てて飛び起きベルキュロスから距離を取った。

「ご、ごめん、ルナ！！　ホントにごめん！　わざとじゃないんだ！　ホントに！」

ベルキュロスを意識しつつ、思い出したように必死で謝った。そのつもりがあってやったことではなかったのは本当だ。それは言わば事故であって、故意ではない。

「いいよ、別に」

てっきり怒られるかと思ったのだが、予想に反してルナは気にする様子を見せなかった。しかし。

「中也なら、いいよ」

僅かに視線を下げながらそう言ったルナの顔が微かに赤らんで見えて、中也は心臓を鷲掴みにされたような気分を味わった。

（な、何考えてんだ、俺！　め、目の前にベルキュロスがいるっ

て言うのにっ！）

そこにいる人間の心情など、当然のことながらベルキュロスが知るはずもない。問題のモンスターは、雷を纏ったまま猛然とシヴァに向かって突進していた。

（し、集中だ！　集中！！　マジで集中しないと！）

余計なことを考えていれば、今度は冗談抜きでホンモノの天国へと強制連行されてしまうだろう。それだけは御免被る。

（と、とにかく今はクエストだ！）

深呼吸を繰り返し、中也は無意識に周囲の地形を見渡していた。峡谷と名付けられるだけあって、そこはまさしく切り立った崖に挟まれた、せまくて深い谷だ。すぐ傍に水が湧いている以外、砂と岩があるだけの不毛の地と呼んで間違いない。

「！」

ふと、中也は岩と岩に挟まれた小さな道に目を止めた。左右を覆う岩の高さは１０メートルほど。一方の岩は、下の方こそ堆積

した土のようだが、上方へ行けば行くほど岩石が多く含まれているように見える。大きいものでは、直径3、4メートルはある。

その危ういバランスを見ているうちに、頭の中で何かが繋がった。

（やってやろーじゃん！　うまくいったらそれでよし！　失敗だったとしても、このまま何もしないよりはずっとマシだ！）

心の中でそう呟き、手の中の大剣を握りしめる。

「翼、壊れたよ！　もうそいつは飛べないはず！」

ルナの声が、自分を後押ししてくれている気がした。飛べなくなったベルキュロスが繰り出す攻撃パターンは、自然と限られてくるはずだ。

「よっしゃあ！　サンキューだ～ぞ、ルナ！」

シヴァが意気揚々とガンランスを構え直す。その時、それまでシヴァを執拗に攻撃していたベルキュロスがふいに中也の方を振り向いた。

（よし！）

思った通り、ベルキュロスは中也に向かって短く唸り声をあげるなり、後ろ足で地面を蹴って突進してきた。一瞬、広げた翼はルナの矢に貫かれ、あちらこちらに穴が空いてボロボロだった。

確かに、あの翼で飛行することはいくらベルキュロスでも難しいだろう。そんなことを思いながら、中也は峡谷の狭間に立ち、突進してくるベルキュロスを敢えて避けずに待ち構える。

（こええ……！　さすがに……！）

巨大なモンスターの突進を正面から見据えるのは、思った以上に勇気が必要だった。これならば、まだ時速８０キロで向かって来るダンプカーの前に突っ立っている方が精神的にはラクなのではないかとさえ思えてしまう。

「今だ！」

自分で呟き、中也はベルキュロスから3メートルの距離で横に飛び退いた。砂煙の中、何とも言えない重低音が響き渡る。

「とりあえず成功！」

ベルキュロスの巨大な頭蓋が、細い道に突っ込んでいる。勢い余って突っ込んできたせいで、ベルキュロスはなかなか抜けない頭に手こずっているようだ。時間的余裕は、まだある。

「次は……！」

素早く岩の反対側に回り込み、握りしめていた大剣の刃を力いっぱい横に薙ぎ払った。

（モンスターの素材で作った武器なら、いけるはず！）

ベルキュロスの甲殻には歯がたたなくとも、自然の岩なら自分の腕でも破壊できるかもしれない。そう考えた結果、中也の期待通り、危ういバランスで聳えていた岩がベルキュロスに向かって崩れ始める。地響きがして、大地が揺れた。

「よし！　作戦どお……！」

「借りる～ぞ、中也！」

幾つもの巨石に頭を潰され、さすがのベルキュロスも苦しさに悶えている。あとはベルキュロスが抜け出す前にできる限りのダ

メージを与えれば済む、と思っていた矢先だった。

「シヴァ！？」

風のような速さでやって来たシヴァが、中也の手から大剣を掠め取って行った。

「俺の武器、もうボロボロなんだ～ぞ！」

「だからって……！」

それはないだろう、と口にする間もなく、シヴァが砂煙の中へ走りさっていってしまう。呆然とする中也の耳に、何かが切断される気味の悪い音が聞こえてきた。

「……」

舞い上がった砂煙が静まって行く。中也の目に映ったものは、首を切断され、静かに横たわるベルキュロスと、その横で悠然と大剣を背負っているシヴァの姿だった。

（いくらなんでも……そりゃないぜ、シヴァ……）

先ほどと同じセリフを、中也は心の中で呟いていた。

共鳴３４

砂と岩だらけの不毛の地を、一陣の砂が舞う。どこからともなく現れた風が旋風（つむじ）を描き、地面に落ちていた枯れた葉を道連れに、再びどこへともなく消えて行った。

「さてと、中也たちは生きてるかな～？」

フェンリルがこの、巨大なモンスターが暴れ回る騒音が轟いていた峡谷に降り立ったのは三時間ほど前のことだろうか。見渡す景色の中に人間の姿はなく、モンスターどころか、虫一匹見当たらなかった。ベルキュロスという聞き慣れない名を与えられた飛竜が住まうその大地は、今はただ風の音だけが支配する静寂に包まれていた。

「よ～やく行く気になったニャ？」

「うん。だって真昼間に動く気になれないじゃん。暑いのに」

やられたのは飛竜か、それともハンターか。大地が静けさを取り戻した理由は二つにひとつしかない。別に、どちらでもよかった。

何が死体になってそこに転がっていようと自分にとっては問題には

ならない。なるはずもない。

「ご主人はホントにワガママだニャ……」

「いいじゃん、別に。何時までに帰って来いとか言われたワケじゃないんだしさ」

町中に比べて空気が乾いているとは言え、それでも真夏の暑さには変わりない。太陽が西に沈んで行こうとしているこの時刻にも拘わらず、体感温度は果てしなく高かった。

「日除けの布はしっかり被っとくニャ」

「いいよ、別に」

「いつもいつも日焼けした後で痛い痛いって喚き散らすのはどこの誰ニャ！」

隣をヨタヨタと歩いて付いて来ていたサスケが、勢いよくジャンプして頭から足先まで全身を覆い尽くせる麻布を被せてきた。フェンリルは何とも言えない顔をする。サスケの言っていることに身に覚えがないわけではなかった。

「いいよね、アイルーは。日焼けなんかしたことなんだから、どんだけ痛いか知らないだろ」

「ご主人こそ、真夏のこの暑い時間帯に毛皮を着て歩く辛さを知らないニャ」

「……」

確かに知らない。知りたくもない。毛皮は冬だと相場は決まっているのだ。フェンリルが言い返す言葉を探していると、サスケが何も言わずに荷物の中から水を出して手渡して来た。

「ありがと」

「さっきまで寝てたんだからしっかり水分は取るニャ」

「へいへい」

「せめて、はいはい、と言うニャ。言葉遣いが悪いと怒られるんじゃないかニャ？　……お父様に」

「……はいはい」

サスケとそんな軽口を叩きながら乾ききった砂の上を進んでいく。

薄い革靴の底から太陽の光に温められた砂の熱が伝わってくる。目深に被った麻布の下で、額にうっすらと汗が浮かんだ。

「ああ、夏って暑いから嫌だ」

「寒かったら寒かったで文句言うニャ」

「そんなことないって」

「そんなことあるニャ」

そんなことはない、と更に言おうとした時、前方に聳え立つ岩の向こうに、四人の人影を見つけた。途端に、サスケが地面を掘って異空間へと身を隠す。アイルーを連れているところを見られたら面倒だという理由もあるが、実のところサスケはかなり人見知りするのである。付き合いが短い連中と話をせずに済むならそれに越したことはないのだろう。

「あ！　あいつらだ！　お～い！　中也～！　ルナ～！！」

さっそく手を振りながら名前を呼んでみる。向こうもフェンリルに気付いたらしい。自分の姿を認めた中也が、勢い込んでこちらに

向かって走り始めるのが見えた。

「フェンリルさん！」

「よお、中也！　無事みたいで何より！」

息を切らしながら走って来た中也が、自分の顔を見てこれ以上ないほど安堵した顔をする。本音を言うなら、彼のそういった部分は未だに謎だった。

「フェンリルさんこそ、無事でよかったよ。こっちはもう、いろいろあり過ぎて……。今、ベルキュロスを討伐してきたところなんだ」

「ベルキュロス？　何それ」

知らない振りをしてみれば、中也が簡単にベルキュロスについて説明し始めた。そこへ、キツネの面を被った大柄な男とルナが荷車を押しながらやって来る。最後尾にいたのは半分しか血が繋がっていない弟で、その肩にはベルキュロスのものと思われる尻尾を担いでいた。

「王子……？」

キツネの面を被った男が、自分の顔を見るなりいきなりそう呼んできて少しばかり驚いた。フェンリルだけでなく、その場にいた誰もが知り合いかという雰囲気を滲ませ始める。

「覚えておいでないのも無理はない。お会いしたころ、王子はまだ幼かった」

その場の雰囲気に流されたのか、キツネ面の男がそんなことを言い出した。はて、と記憶を辿ってみる。しかし、もともと少ない脳ミソのどこをどう詮索しても、その男に関する情報は引き出せなかった。

「それ、いつの話？　申し訳ないけど、全く思い出せないんだけど」

「俺がまだアルテリアでハンターをしていたころ、旅に出ていた王子と、それから父君と共にドンドルマからセクメーア砂漠へディアブロスの討伐に出たことがあった。今から１０年ほど前のことだ」

「ドンドルマから砂漠に……？」

言われてみれば、確かに子供のころハンターに付き添って父親と

一緒にクエストに参加させてもらったことがあった。しかし、その時の顔ぶれなど約一名の変人を除いて覚えているはずもない。ちなみに、その変人とは未だに付き合いがある。

「悪いけど、名前を言ってもらえない？」

「ベアルドだ」

「ベアルド……」

口の中で名前を反芻してみた。１０年前、ディアブロス討伐戦、ドンドルマ、ベアルド……ようやく、頭の中で何かが繋がった。

「ああ！　思い出した、思い出した！　あのベアルドさんか！　うわあ、懐かしいなあ！　お面なんか被ってるから分かんなかった！　元気そうじゃん！」

一気に記憶が甦る。あの時の高揚感までもが胸のうちに舞い戻ってきたようで、ついつい捲し立ててしまった。そんなフェンリルに、ベアルドは微かに視線を下げたように見えた。

「……王子はご立派になられたな。父君とはしばらくお会いしてい

ないが、ご健在か？」

「うん、俺も父さんも相変わらずだよ」

「それはよかった。王子がこちらにおいでとは知らなかったので、少し驚いた」

再会の喜びを伝えあったところで、遠巻きに眺めていた中也たちを振り返る。

「昔の知り合いなんだよ、俺たち。ね？」

「そうだ」

「へえ……そうだったんですか」

中也が何とも言えない顔でフェンリルとベアルドを見比べた。何かしら詳しいことを聞かれそうな雰囲気だったので、すぐにベアルドが引いている荷車へと視線を移す。

「あ、そう言えばベアルドさん。ベルキュロスっていう飛竜を討伐したって言ってたよね？　こっちのギルドじゃ死体を運ぶのとかどうやってんの？」

「ああ、それは、ギルドにクエスト達成を報告すれば、後々、商人が集団で回収しに来ることになっている」

「ふ～ん」

荷車の上には、木箱が3つほど乗せてある。おそらく、中身は空だろう。入っていたとしても、モンスターから剥ぎ取った少量の素材に過ぎない。クエスト帰りのハンターは、アルテリアであってもたいていそんな物だ。

「ベルキュロスの素材からは武器を作る予定らしい。今回は、功労者である彼がその権利を得た」

そう言ってベアルドが指差したのはシヴァだった。

「へえ？」

少しばかり意外な気がしたが、別にベルキュロスの素材を誰が持ち帰っても自分には関係ないので軽く流すことにする。

「やっぱ、こっちの錬金術も一頭のモンスターからひとつの武器か防具しか作れないんだ」

「残念ながら、そうだ。残った死体は商人が加工して売ることになっている。アルテリア・ギルドの技術開発部にできぬことが、ファーナの地方錬金術師にできるはずもない」

「ふ～ん。まあ、そうかもねえ～」

気のない返事をした時、ふいにシヴァが抱えていた尻尾を乱雑な動作で地面に落とした。どうかしたのかと思っていると、近寄って来たシヴァが軽く腰を沈める。

「あだっ！」

完全に油断していた。相手が殺気も何も感じさせなかったせいも相まって、気が付いた時には頬を殴られ反動で地面に転がっていた。

「ご、ご主人っ！」

地面に落ちた陰の中から、サスケが押さえた声音で驚いたように名を呼ぶのが聞こえてきた。それには答えず、フェンリルはシヴァの方を見上げる。

「いきなり、何すんだよ！？」

ハンターを生業にしている連中が、何の前触れもなく仲間に突如として襲いかかることはそう珍しい話ではない。麻薬系のアイテムを多様し過ぎて頭が狂ってしまった連中には、どうやら人間がモンスターに見えることがあるらしく、最近のアルテリアではそうでもないが、それこそ１０年前にはそういった連中の方が多かったとも言える。ベルキュロス討伐戦の貢献者がシヴァだと聞いていたこともあって、真っ先に思ったのはシヴァがそうではないか、ということだった。

「期待してた以上に面倒クセー性格で嬉しい～ぜ、兄貴」

しかしながら、見上げた弟の表情には麻薬中毒者に特有の雰囲気がない。自分と同じ真っ黒な双眸はどこまでも澄んでいた。

「お、おい、シヴァ……！　やめろよ！　どうしたって言うんだよお前！」

どこかしら楽しそうな雰囲気を滲ませているシヴァの前に、慌てた様子の中也が割って入る。その肩を、シヴァは軽く押しのけた。

「いい加減こっちも面倒臭くなっちまったんだ〜ぞ。いろいろはっきりさせようじゃねえ〜か」

わけが分からない。何がどうなっているのかサッパリだった。

「立て〜よ」

薄く笑いながら、拳を鳴らしてシヴァが言う。

「それとも、昔みたいに俺にイジメられてピーピー泣いてたあのころのまま〜か？」

「ウソぉ！？」

弟の口から飛び出した衝撃的なセリフに、フェンリルは弾かれたように飛び起きていた。

「そんなバカな！　なんで俺がお前にイジメられて泣かなきゃなんないんだよ！？」

思わずシヴァに詰め寄ると、彼は答える代わりに拳を突き出してみせる。

「ホントかどうか、確かめてみたらどうか〜な？　まあ、あんたに

できるもんなら～な」

カチン、ときた。これはもうやるしかない。後でサスケや父親に何と言われようが、ここで引き下がるなどできるはずもない。

「後悔させてやるよ。殺されても恨むんじゃないぞ」

「こっちのセリフだ～ぞ、兄貴」

兄貴、と、自分をそう呼ぶ低い声には挑発的な色が隠すこともなく含まれていた。

「おい！　シヴァ！　フェンリルさんまで！　何やってんだよ、やめろよ！」

制止を求める中也の声が、どこか遠くから聞こえてきた。

共鳴３４（後書き）

番外編　～孤高の銀火竜～

風を切るような速さで、突き抜けるような青空を銀が舞う。

「やっぱ堪んないね～！　銀介、サイコーだよ！！」

眼下に広がるどこまでも果てしなく続く草原を見渡しながら、フェンリルは騎乗している銀色の鱗を強く撫でた。

「ご主人、落ちるニャ～！！」

背中に靡くフードにしがみ付いているサスケが必死に訴えてくるが、落ちたら落ちたでサスケなら自力でどうにかするだろうと思い、敢えて聞かなかった振りをした。

「空の上って気持ちいい～！！」

今年、１３歳になったフェンリルは頻繁にフィールドへ出向くようになってい

た。それこそ毎週末は銀介と空の散歩というのが当たり前になりつつあるほどに。

「ん？」

ふと、見下ろした草原の外れに一頭の飛竜を見つけた。

「レイアじゃん！」

銀介と同じ火竜の雌が、澄んだ水辺で翼を休めている。

「銀介！　行ってみろよ！」

フェンリルがそう言うと、どうやら銀介もその気だったらしく、レイアに向かって飛んで行った。

「頑張るニャ、銀介！　世間は春！　恋の季節ニャ！」

レイアから少し離れた場所に降り立ったところで、サスケがそんなエールを送る。その声に励まされるように、銀介は意気揚々とレイアに近付いて行った。

「ガウ……」

さしずめ「こんにちは」と言ったところだろうか。銀介がレイアに話しかけるよ

うな声を出した。しかし、その瞬間、レイアが怒りの咆哮を上げ、銀介に向かって
突進してきた。
「サマー・ソルト！？」
レイアが銀介の手前で大地を蹴る。そのまま空中で一回転し、鉱石さえも一撃で
砕く尻尾の一撃を浴びせて来た。レイアの尾の先には毒がある。手痛い一撃と同時
に毒も食らった銀介が、花咲き乱れる大地に火山が爆発したような轟音を上げなが
ら横倒しになる。
「あはははははは！！」
「ニャハハハハハ！！」
傍で見ていたフェンリルとサスケが同時に笑い転げる。飛び去っていくレイアを
見送り、二人は銀介に駆け寄った。
「ヘタレウスの銀介！　ドンマイだニャ！」

「次は頑張れよ、ヘタレウス！」

二人の励ましの声を聞き、銀介がノソリと立ち上がる。そして、どこか寂しげな雰囲気を背中に漂わせながら、どこへともなく飛び去って行った。

「銀介、大丈夫かな」

「放っておくニャ、ご主人。ああいう時はヘタに話しかけない方がいいニャ」

銀介が飛び去った空を眺めながらそんなもんか、と思った。

「銀介は孤高の銀火竜ニャ。ひとりきりがよく似合うニャ」

＊

本編には関係ないエピソードやメッセージ等でお寄せいただいたリクエストなどを番外編として「あとがき」に掲載していこうと思っています。

作者のくだらない日常よりはお客様に楽しんでいただけるのではないか、と……？

休載していた分、これからはお客様サービスに励みたいと思います！

共鳴35

背中を強く押され、床に叩きつけられる。したたかに打ち付けた肩の痛みに夏葉が顔を歪めていると、すぐ傍にレイが同じように倒れ込んできた。

「レイ！」

「へーき、だよ」

思わず名を呼べば、いつも通りの強気な笑みが返される。更に何か言おうとした時、役人らしき三人の男がレイが着ている着物の襟を掴んで無理やり引き起こした。

「いってーな！　何すんだよ！」

「黙れ。そなたも女であるなら、その無礼な言葉遣いを改めよ」

「……余計なお世話なんだよ、ハゲ」

レイが“ハゲ”と呼んだ男は、確かに頭髪が薄かった。頭上に乗っている髷も、他の二人に比べて格段に細い。その通

りだ、などと考えていると、ハゲと呼ばれた男が激昂したようにレイの頬を殴りつけた。埃だらけの薄暗い部屋に、乾いた音がこだまする。

「レイ！」

「大丈夫だって」

殴られた頬は赤くなっていたが、レイは特に気にする様子は見せなかった。どうしたものかと考えていると、残りの二人がレイを縛り上げていた縄を解き、天井から吊るされていた鉄の鎖にその両腕を繋ぎ始めた。

（どうしよう……）

光宮が連れ出されてから数分も経過しないうちに、夏葉たちが拘束されていた牢の門は別の役人たちによって再び開かれた。そして、やって来た役人たちは夏葉とレイを薬屋の一行から引き離すように連れ出したのである。

（ここは、どう考えても地下……）

夏葉の目の前で、ハゲと呼ばれた男がレイの乱れた着物の裾から覗く豊かな胸元を無遠慮に眺めまわしていた。視線を鬱陶しく感じたらしいレイが、その男の脛のあたりを自由の利く足で軽く蹴り飛ばす。痛みに顔を歪めた男が、何とも言えない顔でレイから離れた。

（逃げるべきか、それとも……もう少し……）

下手に行動を起こして薬屋の一行や光宮に刃が向けられたら、と思うと、なかなか思ったような行動に出ることができない。それは、おそらくレイも同じなのだろう。あの怪力が自慢の彼女が、縄が解かれた時に大人しく鎖に繋がれるなど、それ以外に考えられない。

（光……無事かな……）

窓のない暗い部屋は、たったひとつの松明によって歪んだ光に照らされていた。不規則に揺れる炎に照らされて、壁際に所狭しと並べられた様々な道具が目に付く。刀、縄、夏葉

の腕ほどもある鉄の棒……。ここが何を目的に作られた部屋であるのかなど、一目瞭然だった。

「まったく、最近の若い者は礼儀がなっとらん」

ハゲた男が吐き捨てるように呟く。自分たちはどうなんだと言いたくなったが、ここは黙っておいた。

「さて」

そして、その飢えたブタのような視線が未だ床に転がったままの夏葉に注がれた。

「縄を解け」

彼が命令すると、残りの二人が男に向かって軽く一礼して夏葉の方へ近寄ってくる。見知らぬ男の手が肩に触れる。条件反射で体が固くなった。背後で縄が切られると同時に、縛られていた体が自由になる。

「……」

手の先に血液が流れ込んで行く感触がした。長い間、縛ら

れたままでいたせいで冷たくなっていた手に、体温が戻ってくるようだった。

「そなた、胡蝶であるというのは誠か」

「……それが？」

二人の男が自分から離れ、禿げた男の背後に並ぶ。二人がきっちりと控えたのを確認し、男が喋り始めた。自分を見下ろすその視線には軽蔑と嘲りの色が濃く滲み出ていている。負けじと睨み返せば、禿げた男が何でもないことのように言葉を続けた。

「では、その証拠を見せてみよ」

「は？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。証拠を見せろ、と言われて頭を掠めた事実に、夏葉は顔から血の気が引いて行くのを感じた。無意識にレイの方を見る。彼女が、どこか青い顔で小さく首を振った。

「聞こえなかったのか。証拠を見せろと申しておるのだ」

「……」

聞こえてないはずはないのに、男が更に命令してくる。そのことに、少なからず苛立った。一向に動こうとしない夏葉に、男が大袈裟な溜め息をついてみせる。

「胡蝶とは、鬼龍の子を宿す不浄の存在であるだけでなく、どうやら人の言葉も理解できぬ愚か者でもあるらしい。はっきり申さねば分からぬようだ」

そう言って、男は下卑た笑みをその顔に刻む。

「脱げ」

「冗談じゃない！」

反射的に拒否していた。鳥肌がたつ。体中を冷たい汗が濡らしていった。男たちが何を求めているのかなど、いちいち説明されなくても分かる。だが、それだけは嫌だった。

「ほう、よいのか？」

夏葉の心の内を知ってか知らずか、ハゲた男は楽しそうにレイの方に視線を注ぐ。同時に、背後の男たちのうちひとりが、レイの喉元に冷たく光る短い剣を突き付けるのが見えた。

「そなたが拒否すれば、ここにいる女だけでなく、共に捕えられた者たちも惨い責め苦の果てに死を迎えることになるぞ」

惨い責め苦、と言ったその言葉が心に突き刺さるようだった。今現在、自分たちが置かれている状況で、相手にそう言われてしまえば従うより他に術はない。自分が殺されるだけならばまだしも、光宮やレイ、無関係な薬屋一行の命まで盾に取られれば、他に選択の余地などない。しかし……。

「おい！　なっちゃんは……！　なっちゃんは婚約してんだ！　だから止めろ！　手を出すんじゃねえよ！　代わりにあたしが……！」

レイがハゲた男に向かって、嘆願する。彼女の言葉に、男たちがさもおもしろいものでも見たように嘲笑した。

「胡蝶を嫁に迎えるとは！　そんな変わり者もおるのだなあ！　よほどの物好きか？　それとも、男として役に立たなんだ故に胡蝶を選んだのか？」

ハゲた男の言葉に、背後の男たちが声を上げて笑う。夏葉は、無意識に拳を握りしめていた。

「……俺のことはいい。何とでも好きに言え。ただ、京さまのことまで侮辱するのは許さない」

そう言って、美代から借りた着物を留めてある帯紐に手をかけた。

（京さま……）

否応なく脳裏に思い浮かぶのは、ただひとりの青年の姿だった。

（ごめんなさい……）

しんと静まり返った狭い部屋に、外れた帯が床に落ちる滑らかな音が響き渡る。男たちの視線が纏わりついていた。全

身を舐めるように見つめるその視線に、肌が泡立つ。

（あなた以外に……見られたくない）

自分の体は女性体ではない。レイやルナのように豊満な胸など持ち合わせてなどいない。見ていて楽しいものでもないだろうに、と思うものの、先を促す視線は一向に途切れることはなかった。

「どうした。早うせんか」

自分の意志とは無関係に、指先が震えている。モンスターに出会った時とは違う恐怖に、鼓動が高鳴った。

「なっちゃん、止めろ！」

帯が外され、途端に緩んでしまった着物の襟に触れれば、左手の薬指に嵌められた銀の指輪が目に付いた。いたたまれなさに苛まれながら、意を決して着物を肩から落とす。無骨な黒いだけの板の間に緋色が落ち、そこに描かれていた牡丹が舞い散る。松明の炎だけが照らしだすその空間に、夏葉は

今、半透明な襦袢だけを体に纏わりつかせ立っていた。

（京さま……！）

白い布の下に、自分の肌が透けているのが分かる。羞恥のあまり思わず目を閉じた。自然と、頬を冷たい水が伝う……。

「もう……もう我慢の限界だぜ……！」

襦袢の紐を解いていた時、鎖に繋がれていたレイが体の奥底から絞り出すような声で呟いた。

「黙って大人しくしてやってりゃあ、つけあがりやがって！」

男たちの視線が夏葉から外れる。思わずレイを見れば、彼女はその紫がかった青い瞳に、燃え上がるような怒りを湛えていた。

「テメーら、絶対許さねえ！！」

鼓膜が破れるような大声で叫んだレイが、両腕を繋いでいた鉄の鎖を、力任せに引き千切る。ガシャン、という音が木霊すると同時に、男たちの顔から表情と血の気が一気に引い

た。

「レイ！」

「なっちゃん！　とりあえず服着ろよ！」

「う、うん……」

レイの繰り出した拳が男の腹にめりこむ。カエルが潰れるような声を上げ、男が胃液を吐き出しながら床に転がった。

間髪いれずに、もうひとりの男の顎に回し蹴りを叩きこむ。勢いよく壁に打ち付けられた男は、そのまま気を失ったようだった。

「残ったのは、テメーだけだ」

レイの視線の先にいるのは、ハゲた男だった。どうやら腰を抜かしてしまったらしい彼は、床に両手両足をついた情けない姿のまま、出口に向かって這って行こうとしている。

「ば、化け物……化け物が……！」

男の指が木の引き戸に届こうとした瞬間、レイが男の襟を

掴み、そのまま背後に向かって放り投げた。

「や、やめてくれ……！　たのむ……たのむから……！」

男は全身を恐怖に震わせながら、先ほどとは打って変わった態度でレイに向かって懇願する。その声を聞いたレイが、急いで服を身につけた夏葉にニッコリと微笑んで来た。

「なっちゃん。悪いんだけど、ちょっとの間、向こうを向いて耳を塞いでてくれねえかな？　見てても聞いてても、おそらくなっちゃんは楽しくねえと思うからさ」

「え……」

何をするつもりだ、と思ったのは夏葉だけではなかったようだった。まだ何もされていないのに、すでに生死の境目にいるような顔をしたハゲた男が、忙しなくレイと夏葉を見比べる。

「さて、始めようか」

夏葉が言われた通り、後ろを向いて両手で耳を塞ぐと、ど

こか楽しそうなレイの声と、男が鎖に繋がれるような音がし

っかりと聞こえてきた。思わず横目で様子を伺えば、レイは

その手に鞭のようなものを持っていた……。

共鳴３５（後書き）

番外編　～偽善と老犬～

道の端に植えられた木々の葉が赤く色づく季節だった。何と言うこともない退屈な休日の午後、ヒマを持て余した光宮は夏葉の家に遊びに行こうと思い立った。最近、時間があれば夏葉の家に顔を出している気がする。

（まあ、もともとリゼさんには勉強をみてもらいに通ってたんだけど……）

最近は夏葉と遊んでいる時間の方が長い。勉強の方にも力を入れなければ、などと思った時のこと。ふと、窓の向こうに数人の少年たちが何かに群がっている様子が目に映った。

「止まって、止まって！　止まれって言ってんのが聞こえないの、この役立たず！！」

馬車停めではない場所に光宮が乗った馬車が停まる。１０歳かそ

こらの少年たちが、一斉に光宮に注目した。

「何やってんの、あんたたち」

馬車から降りるなり些か冷たい口調で問いかければ、5人の身なりのいい少年たちが、あからさまに他人を小馬鹿にしたような表情をする。

「別に。あんたこそ何なんだよ」

彼らはそれぞれの手に太い枝の端を持ち、道端に蹲った一匹の犬を小突きまわしていた。

「どきなさい」

少年を押しのけ、犬の傍に膝をつく。そこにいたのは、泥だらけの年老いた小型犬だった。途端に牙を剥きだして威嚇してくる犬には構わず、光宮は少年たちに向き直る。

「動けない犬相手に5人がかり？　あんたたち、カスね」

はっきり言ってやると、彼らの顔が一斉に赤らんだ。

「じゃあ、あんたはその犬を助けに来た正義の女戦士だとでも言う

のかよ。知ってるか？　そういうのをギゼンって言うんだぜ？」

少年のひとりがそう言うと、残りの４人も一斉に「ギゼンシャ」と連呼し始めた。光宮は軽く溜め息を落とす。

「バカねえ。誰が助けに来たなんて言ったの？」

彼らの顔に疑いの色が滲み出たのを見て、光宮はニヤリと笑う。

「食べるのよ」

＊

その後、ロッキーと名付けられたその犬は、光宮の自室にあるソファで今も日がな一日、惰眠を貪っている。決して、食用ではない。

共鳴３６

黄昏を飲みこんだ西の空が、今もなおその名残を惜しむように微かな光を湛えて輝いていた。

「お前、なに考えてんだよ、シヴァ」

半分だけ血が繋がった弟が繰り出してきた回し蹴りを腕で受け止める。思いのほか威力があって、軽く眉を顰めた。

「だからさっきも言ったじゃねえか～よ。あんた見てるとイライラするんだ～よ」

お返し、とばかりに自分も同じ攻撃をしてみるが、軽く避けられてしまった。

「俺が何した？」

呆れたように言ってみれば、シヴァがバカにしたように笑い、何の前触れもなく下から蹴り上げてきた。身をそらし、そのまま地面に両手をついて一回転する。そのまま身を沈め、シヴァの足を払うために、左腕を軸に低い位置から回し蹴りを繰り出した。

「寝言は寝てから言え～よ」

上に飛んでフェンリルの蹴りを避けたシヴァが、飛んだ勢いを利用してそのまま顎を蹴り上げてくる。後ろに仰け反るようにして避け、シヴァから距離を取った。

「あんた、俺のこと嫌いだ～ろ？」

自分の顎先を伝う汗を手の甲で拭いながら、シヴァが何でもないように言って来た。

「何の話だよ？」

知らないふりを装い問いかければ、未だに息を乱していない弟は、わざとらしく溜め息をついた。

「俺の特技は人間観察なんだ～ぞ。あんたが俺のこと嫌ってることも～、なっちゃんのことが嫌いで仕方ないこと～も、中也たちが思ってるほどマトモな人間じゃないこと～も、俺らとは違った仕事で動いてること～も、ぜ～んぶお見通しなんだ～ぞ」

シヴァの、その間延びした間抜けな口調とは裏腹に、核心をつ

いたその言葉に僅かながら眉を上げる。夏葉のことが嫌いだということはともかく、別件の仕事で行動していることまで知られているとは思わなかった。

「ついで～に、スキがあれば俺らのことを殺そうって思ってねえか～な？」

「……」

フェンリルが何も言わないでいると、シヴァは軽く笑って言葉を続けた。

「俺のこととなっちゃんのことが嫌いなのは態度を見てりゃあ分かる～ぞ。違う仕事をしてるんじゃねえかって思ったのは、あんたがアイルーを連れているから～だ」

地面の中で、サスケがビクッとした。

「確か、アイルーは鬼龍と同じように時空を移動できるはずだ～な？　つまり、あんたはいつでもどこでも好きな時に好きな場所へ行ける～と。で、クック討伐みたいなチンケなクエストにそん

な必要なんかねえだ～ろ」

「……サスケとは子供のころからの付き合いなんだよ。で、俺のことが心配だからって、いつもクエストには付いてきてくれるんだ」

あながちウソでもないことを並べてみる。シヴァは特に反応しなかった。

「それならそういうことにしとく～ぞ。で、あんたがマトモな人間じゃねえって思ったのは目え見りゃあ分かる。あんたは人殺しの目えしてる～ぞ」

「……お前、人を殺した人間を見たことあるのかよ」

「あるに決まってんだ～ろ」

意外なほどあっさりと言われて、どう答えていいか分からなくなってしまった。

「俺は、あんたを探してたんだ～ぞ」

無言を貫くフェンリルに、シヴァが思いがけないことを言い出

した。

「中也は知らねえことだ～ぞ。あいつは俺が女の子と遊び呆けてたせいで小塾（学校）の出席日数がヤバいって話を本気で信じてくれてるから～な。まあ、それは置いといて～だな、北東の龍都の中はほとんど探して回ったか～な。地図に載ってるところは全部行った～ぞ。でも、誰に聞いてもどこに行ってもあんたを見たって人はいなかったんだ～な」

それはそうだろう。フェンリルは、家を出たその晩に行商人の一座に出会い、そのまま北東の都、龍都を離れて北の氷都を目指したのだから。そして、龍都と氷都の狭間に広がる荒れ地で盗賊に出会い、行商人の一座は皆殺しにされた。自分のことを知っている人間が龍都にいなくても不思議はない。当時のおぞましい記憶が甦り、フェンリルは軽く頭を振った。

「そんでだ～な、もしかして～って思った俺はミラ大鉱山に忍び込んだんだ～ぞ」

ミラ大鉱山と言えば、アルテリアの国中から重罪人が送られてくる場所だ。まさかシヴァの口からそんな場所の名前が出るとは思っていなかった。

「まあ、結果は知っての通りだけど～な、そこで強制労働させられてた連中に、あんたと似たような目えしたヤツらがたくさんいた～ぜ」

「どういう意味だよ」

敢えて問いかければ、シヴァが何かを思い出そうとするように少しだけ空を見上げた。遮るもののない夜空には星が輝いてる。満月が二人を見下ろしていた。

「なあ、知ってる～か？　人殺しには三通りのパターンがあるんだ～ぜ」

「三通り？」

「そうだ～ぞ。ひとつは、事故ってヤツだ～な。ついカッとなって～とか、そのつもりはなかったんだけど～とか。ふたつ目は怖

がってるヤツだ～ぞ。で、三つ目は殺しを楽しんでるタイプだ～な。血を見るのが好きで好きで仕方ないか～ら、ダメだとアタマじゃあ分かってるんだけ～ど、つい殺しちまうってヤツ。あんたは……」

自分は間違いなく三番目にシヴァが口にした「殺しを楽しんでいるタイプ」だと思って、フェンリルは自嘲した。

「あんたは間違いなく怖がってるタイプだ～な」

「は？」

シヴァは思いがけず、二番目を指摘した。

「何で俺が怖がってんだよ」

「……人殺しだって認めた～な」

「！」

こういうのは誘導尋問というものだっただろうか。見事にシヴァの策にはまってしまった。しかしながら言ってしまったことはもう元に戻せない。軽く唇を噛みしめた。

「で～、何で怖いから人を殺すかって話だけど～な」

フェンリルの反応を楽しむように、彼は続ける。

「臆病なんだ～よ、そういうヤツらは。殺されるのが怖いから殺すんだ～ぞ。で、相手がもう死んでても、まだ死んでないような気がする～とか、また起き上がって来て自分に襲いかかってくるんじゃねえか～とか、そういうことを考えるんだと～さ。で、必要以上に向かっていくか～ら、見るも無残なグロい死体ができあがる～と。とんでもねえ死体が見つかって犯人はいったいどんなヤツだって話になるけ～どよ、フタを開けてみればそんなモンだ～ぜ」

「……残念だけど、俺は違う」

「何もあんたの話だとは言ってねえだ～ろ。それはあくまで最初に人を殺した時の反応だ～ぞ。あんたの場合は、殺し慣れてるだ～ろ？　最初に人を殺した時、あんたの前にあった死体はどんな感じだった～よ。覚えてるだ～ろ？」

「……覚えてない」

脳裏に否応なく甦る無残なその姿に、フェンリルはシヴァに分からないように軽く拳を握りしめて耐えた。苛立ちが募る。感情が湧きたつ。煮えるような胸の内を、必死で抑え込んだ。

「ウソだ～な。まあ、いいけど～よ。別に、そんな話を聞きたいワケじゃねえんだ～し？　俺と再会してから、あんたは俺とマトモに話をしようとしなかった～な。話しかければ答えるけど～よ、適当に流してさっさと終わらせるって雰囲気がミエミエだった～ぞ。話しねえどころ～か、こっちを見ようともしねえ。そんなあんたがマトモな理由で俺を嫌ってるハズないんだ～ぞ」

お前を見ているとイライラするからだ、と言おうとして止めた。それは先ほどシヴァが自分に向かって言った言葉と同じだったからだ。弟の真似だけはしたくない。

「……腹立つヤツだな、お前」

自分でも驚くほど、静かな声が出た。

「今ごろ気付いたか～よ」

身構えながら、シヴァが笑う。

「殺してやる」

「やれるモンならやってみろ～よ、さっきも言ったけど～な」

砂を孕んだ風が流れた。拳を握りしめ、左脚を僅かに後方に引く。吹き抜ける風に舞い上がった砂が地面に落ちた時、先に動いたのはシヴァの方だった。

「ヘタクソな芝居は見てる方がイライラすんだ～ぞ！」

左から拳が飛んでくる。直撃する寸前に、身を低くして避けた。そのまま地面に左手をつき、それを軸にシヴァの腹を蹴り上げると、さすがに体勢を崩し地面に膝をつく。

「死ねよ」

その隙を見逃さず、背中に背負っていた太刀に手をかけた。オオナヅチの素材で作られた不可視の太刀、ミラージュ・ショテル。その刃を、迷うことなくシヴァの首元に向けた。

「なっ……」

刃がシヴァの首と胴体を切り離す直前、素早く身を起こしたシヴァが自分の方へ飛び込んでくる。そして、太刀を握っていた右手を掴まれた。

「……避けられるとは、思ってなかった」

「……隠してるつもりだったことに、俺は驚いてる～ぜ」

互いに一歩も引かない。体温の高い手が、骨をへし折ろうとするかのような強い力で掴んでくる。負けてたまるか、と太刀を握る手に力を込めた。

「くっ！」

ギリギリと骨が軋む音がするようだ。思わず顔を顰めれば、シヴァが更に力を込めて来る。

「俺様の握力、ナメてんじゃねえんだ～ぞ！」

言いながら、もう片方の手が伸びて来て太刀を握る指にかけられた。指が外されていく。手首を締め付けるその力も相まって、

太刀にかけた指がゆっくりと離れていった。

「形勢逆転だ～な」

自分の手からミラージュ・ショテルを奪い取ったシヴァに蹴り飛ばされ、地面に転がる。すぐに後ろを振り返ると、刀身の見えない太刀を肩に担いだシヴァが平気な顔をして笑っていた。

「てめえ……！」

悔し紛れに呟いて、シヴァに向かって拳を繰り出すが、太刀の刃に阻まれて握りしめた拳は彼に届くことは無かった。

「本当のこと言われてパニクっちまったか～な？」

年下のくせに年上のような顔をして自分を見るシヴァがおもしろそうに言ってくる。腹が立つ。何度目ともしれない言葉が胸のうちに湧き上がった。

「攻撃がミエミエだ～ぞ？　あんた、それでもギルド・ナイトか～よ」

「なん……だと……？」

言いながら、ふと視界の端に離れた場所でルナと何か話している中也の姿が映り込んだ。その背には、大剣が乗っている。

「余所見してんじゃねえんだ～ぞ！」

シヴァが太刀を薙ぎ払う。後ろに下がって刃を避ければ、続けざまにシヴァが下から上へ斬り上げてきた。更にそれも避け、一方的に攻撃を受けながら徐々に中也とルナの方へ向かって行った。

「中也！　大剣、借りる！」

本人の了承を得ないまま、フェンリルは勝手に中也の背中から大剣を掴み取った。

「またかよ！？」

中也の言う「また」の意味はよく分からなかったが、とりあえず武器は手に入れた。

「……」

重い。大剣を手にして最初に思ったのは、そんな当たり前のことだった。考えてみれば、自分は記憶にある限り太刀以外の武器

を手に取ったことさえなかった。

「不慣れな武器でケガすんな～よ」

そんなフェンリルの心中を見抜いたような言葉を向けて来るシヴァを睨みつけ、大剣を構える。持っているだけで疲れそうだと思った時、シヴァが斬り込んできた。刃で受け止めようとして、いつものように簡単にいかないことに歯噛みする。

「貧弱だ～な。大剣くらい、普通に持て～よ」

「うるせー！」

刃がこすれ合う耳触りな音がした。拮抗に負けるのは、まず間違いなくフェンリルが手にしている大剣の方だろう。オオナヅチの太刀と、ブランゴの大剣ではもともとの素材となったモンスターの力が違いすぎるのだ。このままではマズイと思い、フェンリルは体重をかけてシヴァを突き放した。同時に、大剣の切っ先が地面に落ちる。

「っ！」

大剣とはこんなに使いにくい武器だったのか、と思った時には、シヴァが横から斬りかかってきていた。慌ててその刃を避け、地面を蹴る。大剣の柄を軸にシヴァの横顔を蹴り飛ばした。

「……せっかく中也から大剣パクったんだから大剣で戦え～よ」

「何とでも言え」

大剣は肌に合わない。二度と使わない、などとどうでもいいことを思う。額から流れた汗が頬を伝い、鬱陶しく思って肩で拭った。

「いちいちウルセー」

言いながら大剣を掴み、全力で下から上に斬り上げる。思った通り、刃を避けたシヴァが脇腹に蹴りを入れて来た。

「ガラ空きだ～ぞ！」

「どっちが！」

空中で大剣を離し、脇に叩きこまれた痛みに耐えつつシヴァの足を腕に挟みこむ。シヴァの表情が変わると同時に、その脚に肘

を叩きこんだ。

「っ！！」

距離を置いたシヴァが、肘で打たれた片足を庇っている。手応えはあった。互いに打たれた個所を庇いつつ、しばらく無言で睨みあっていた。

「……」

低い位置に太刀を構えたシヴァが一歩を踏み出す。無意識にフェンリルも歩を進めていた。

「あんたは……何で俺が自分のこと探してたか考えねえの～か？」

「どうだっていい。そんなこと」

中也たちには聞こえないような小さな声で、シヴァが呟く。何かしら引っかかるものはあったが、聞く気にも考える気にもなれなかった。

「いく～ぞ」

シヴァがニヤリと笑った。その瞬間、太刀を振り上げて斬りか

かってくる。

「遅えよ！！」

足のケガが響いているせいか、先ほどまでのようなスピードがない。下から、太刀を握るシヴァの手首を蹴り上げる。太刀がシヴァの腕を離れた。その瞬間、蹴り上げられた腕に構うことなくシヴァが体重をかけて圧し掛かって来て、二人揃って地面に倒れ込む。

「くっ！」

起き上がろうとすれば、喉元を腕で抑え込まれた。呼吸がつまり、噎せ返る。

「心配してた、とは思わねえ～か？」

腕を振りほどこうとするフェンリルに、シヴァが余裕を無くした表情で言ってくる。

「それ、ホント……かよっ！」

「んなワケねえっつーの」

顔面に向かって繰り出した拳を掴まれ、逆に抑え込まれた。

「どいつもこいつも……口を揃えて同じようなことばっか言ってくんだ～よ」

共に荒い呼吸を繰り返しながら、振りほどこうとする力と抑え込もうとする力の拮抗が続いた。

「俺の兄貴はいいヤツだった～ってよ。中也までも～な。いい迷惑だったんだ～ぞ。あんたはここにいないから～よ、好き勝手にいいヤツにできるじゃねえか～よ。理想と比べられてどうのこうのと言われても困るんだ～ぞ」

「そりゃあ……悪かった、な」

「でもよお、それって結局のところ、み～んなあんたのこと終わったことにしてるって思わねえか?」

息が詰まる。全力で片足を引き寄せ、圧し掛かるシヴァの脇に膝をめりこませた。顔色を変えるシヴァの下から抜け出し、その真っ赤に染めた頭を蹴り上げる。

「さっきから、何言ってんだよ」

喉を押さえつつ、呼吸を整える。掴まれた腕が腫れていた。先ほど蹴られた脇腹も熱を持ち、心臓の鼓動に合わせてズキズキと疼いていた。

「……別に。俺はあんたのこと忘れねえって言いたかっただけだ～よ」

身を起こしたシヴァが汗を拭いながらそんなことを言い出した。シヴァの口の端が切れて血が滲んでいた。

「俺は今まで一度も、あんたのことを過去に終わったことだって思ったことはねえんだ～ぞ。だからあんたも、いつまでも昔のことにこだわってんじゃねえ～よ」

「こだわってねえ！」

「どうだか～な。いい加減、気付け～よ」

「……何を」

「誰も、あんたを殺すつもりなんかないんだ～ぞ。自分でそう思

いこんでるだけじゃねえか～よ」

「何だよ、それ」

「ついでに、あんたを裏切るようなヤツもいねえんだ～よ」

「……」

「俺以外」

カチンときた。再び険悪な空気で睨みあう。ジリジリとお互いに距離を測り、地面につけた脚に力を込める。

「大変だよー！！」

その時、何の前触れもなくいきなり空中からドレス姿の美少女ならぬ女装した少年が降って来て、さすがのシヴァも唖然とした。

「大変だよ！　光さんたちがピンチ！　早く行って！！　サスケくん！　どこ！？」

「はいニャ！」

彼の登場に、ホッとしたような顔でサスケが飛び出してくる。

フェンリルとシヴァが無意識に視線を交わし合った。

「早く連れて行って！　大変だから！　もう、喧嘩なんかしてる場合じゃないよ！！」

「了解ニャ！」

フェンリルが何も言わないのに、サスケが強制的に腕を握ってきた。

「ちょっと待っ……」

気が付いた時には景色が暗く変わっている。夜の闇とは違う筆で描いたような真の闇の中、フェンリルは後ろを振り返る。

「マリンでぇす！　きゃは！」

呆然とした顔をしているシヴァたちに、マリンが自己紹介を始めていた……。

共鳴３６（後書き）

番外編　～捕らわれし幻影～

狭い馬車の中を、茹だるような夏の暑さが満たしていた。

「お前と二人きりで馬車に詰め込まれていると、ただでさえ暑い夏が余計に暑苦しく感じるな」

「まったく、その通りでございますね、将兄」

彼が“将兄”と呼ばれるようになって二週間あまりが経った。引き継ぎだの人事異動だのと雑務続きの日々を送り、ようやくひと段落したのがちょうど今日の午後を回ったあたりだった。

「しかし、夏の暑さだけは私のせいではございませんので、ご容赦を」

一息付こうかと思っていた矢先、アルテリアの秋軍（空軍）を束ねるこの男が、前代・将兄に挨拶に出向こうと言い出した。

「しかしながら、あなたが将兄に立たれて軍の注目度が上がりましたよ。特に若い女性が、それまでコンガと呼んで忌み嫌っていた軍人に

興味津津のご様子で……」

「それはよかったな」

適当に答えながら、秋軍将の横で馬車に揺られている小包に視線を向ける。秋軍将曰く、中身は温泉の素であるらしい。せめてもう少しマトモなものはなかったのかと思わないでもなかったが、いちいち口を出すのも面倒なので黙っておいた。

「さ、着きました。参りましょう」

案内された先は、これでもかと言うほど花が飾られた「可愛い」家だった。何度か会ったことがある前代・将兄、竜雪とその家のイメージがかけ離れ過ぎていて、一瞬、家を間違えたのではないかと本気で思った。

「よお！　久しぶりだなあ、タヌキ！　元気そうじゃねえか！」

「恐れ入ります。竜雪殿もお変わりないようで」

しかしながら、花だらけのオシャレなドアの向こうから竜雪本人が顔を出したので、どうやらここで間違いないらしい。

「よお、将兄」

竜雪が彼の方を向き、きさくな様子で話しかけて来た。

「随分と似合わない家に住んでいるんだな。就任の挨拶だ。手土産に文句があるならそこのタヌキに言え」

「……家は女房の趣味だ。家のことに関しちゃあ俺に口出しする権利はねえんだとよ。わざわざ御苦労なこって。まあ、上がれや」

竜雪に促され、家の中へ足を踏み入れる。予想通り、通されたリビングには人形や花が溢れていた。家の景色の中で、ドスファンゴのような竜雪だけが場違いのように浮いて見える。

「おお、いいところに来た」

自ら紅茶を淹れていた竜雪が、ふいにその手を止めた。何かと思ってそちらを見れば、そこに幻影のような人物が立っていた。

「俺の養子の夏葉だ。綺麗な子だろ？　夏葉、お前の憧れるアルテリア軍の将兄と、秋軍のタヌキ……じゃなかった……いいか、タヌキで。

挨拶に来てくれたんだとよ。せっかくだ。二人に茶を淹れてやってくれ。俺が淹れた茶よりは気分良く飲めるだろ」

深紅の瞳と視線が交わる。互いに、その視線が逸らせないままじっと佇んでいた。

「夏葉？　どうかしたか？」

「あ……いえ、すぐ用意します」

夏葉がキッチンの方へ下がっていく。少しして、手にティーカップの乗ったトレイを持って戻って来た。丁寧な身のこなしで、ソファに腰を下ろした彼らの前にカップを置いて行く。何気なく手を差し出せば、彼の手の上にカップが乗せられた。

「俺は京吾だ。よろしくな、夏葉」

触れ合う指先。赤らむ白い肌。夏葉は、幻影ではない。

「こ、こちらこそ……」

そんな自分たちの姿を見て、竜雪と秋軍将ことタヌキがニヤニヤ笑っていた……。

共鳴37

冷えた夜気が、朧な行燈（あんどん）の光に照らされた狭い部屋の中をじっとりと
包みこんでいる。障子の微かな隙間から入り込む風が炎を揺らし、床の
上に横たわった年若い少女の体に不自然な陰影を付けた。

「それで、よろづ屋。素材の運搬はうまくいっておるのか？」

ほっそりとした少女の体を包むのは、白を基調にした着物だ。白地に、
目にも鮮やかな緋の椿が花を咲かせ、金糸で縫い取られた流水が落ちて
いる。

「もちろんでございます、お代官様」

床の上に投げ出された素足は、随分と柔らかそうな印象を与えて来る。
傷ひとつ見当たらないその足先は、日がな一日、野良仕事に精を出す農
民の娘には有り得ない造り物のような姿をしてそこに投げ出されて

いた。

「例のベルキュロスも無事に討伐されたという報が入っておりますゆえ、

これを売り捌けば、また懐も温かくなりましょう」

肌蹴られた裾の中には、艶めかしい曲線を描く脚が納まっている。視

線をじっとりと上へ向かって動かせば、着物の下から覗く半透明な襦袢

が絡みついた太股が見えた。向けられるその視線に耐えかねたように、

瑞々しい肌が微かに揺れる。

「利益の3割を献上する代わりに、ハンターが討伐したモンスターの素

材の買い占めを見逃せとは、お主もよく言ったものじゃのう」

触れれば折れてしまいそうなほどに華奢なその腰に纏わりつくのは、

金地の帯だ。帯に守られたその腰は、少女の不規則な呼吸に合わせて大

きく起伏を繰り返していた。

「そう言えば、何かしら感づいた者がおったのであろう？　そのものの
始末はどういたした？」
僅かながら乱れた胸元には、麻の縄がきつく食い込んでいる。少女の
年齢そのままのささやかな隆起が、縄に挟まれてその存在を主張していて
るようだった。
「もちろん、お代官様のお心を悩ませるようなことは一切ございません」
襟元から覗くのは汗ばんだ白い首筋だ。行燈の光を受けて、肌に滲ん
だ汗が怪しげな光沢を放ち、見る者の心をかきたてた。
「それを聞いて安心したぞ」
布を噛まされた唇が赤く色づいていた。通った鼻筋に、気の強そうな
翡翠の瞳が、自分たちを睨んでいる。
「それにしても、モンスター討伐に正規のハンターを使わず、報酬

を支

払う必要の無い流れ者や罪人を送り込むとは」

　少女が苦しそうに頭を振った。綺麗に結われていた薄い色の艶やかな

金髪が零れ、枕に鮮やかな模様を散らして行く。

「依頼主からの金子（きんす）はすべてわたくし共よろづ屋とお代官様の懐にクク

エストが成功しても失敗しても、こちらに損はございませんゆえ」

　少女から視線を逸らし、左横で酌をする男を見やった。すこぶるいい

気分だ。目の前に並べられた膳も、背後で床に横たわっている麗らかな

肴には適うまい。

「はっはっは！　よろづ屋、お主も悪よのお！」

「いやいや、お代官様ほどではございますまい」

　杯を呷る。ほろ苦さを含んだ口当たりの良い滑らかな美酒に、顔も綻

ばずにはいられない。

「さて……」

わざとらしく溜め息をついて、膝元の膳と脇に避ける。

「ではまた。お代官様、ごゆっくり」

意を察したらしいよろづ屋が、うやうやしく頭を下げて退室していっ

た。障子の閉まる音が、虫の音だけが聞こえる静かな部屋の中に妙に大

きく響き渡った。

「随分と待たせてしもうたようだの」

言いながら、身を起して背後に敷かれた布団の方へにじり寄る。途端

に、そこに寝かされていた少女が大きく体をしならせた。

「聞いたぞ。そなた、アルテリアの王女であるとか。長い旅路であった

ろう。ご苦労であったな」

大国アルテリアの王女が漂流してこんな場所へ辿り着くなど有り得な

い。おそらく刑から逃れるために口から出た出まかせだろう。だが、そ
んなことはどうでもよいのだ。
「取り調べを行った薄井は手厳しい奴であるからの。乱暴はされなんだ
か？」
自分がこれからしようとしていることは棚に上げ、猫を撫でるような
声音で問いかける。何気なく触れた白い脚は、柔らかく、しっとりと手
に吸いつくような質感を伝えてきた。
「朝から今まで取り調べとは、大変であったろうのう」
脚に纏わりつくその手を嫌がるように、白い肌が揺れた。体を伸ばし
て少女に覆いかぶされば、それまで諦めたように大人しくしていた少女
が弾かれたように起き上がる。
「まあまあ、よいではないか」

拙い抵抗を封じ込め、その腰に回った帯に手をかけた。

「おとなしくしておれ」

胸に回された縄はそのままに、口元を塞いだ布を取ってやる。手にした帯を引けば、軽い体が床の上を転がった。

「止めろってんのよ、このクサレ・チXX・ヤロー！！」

美しく可憐な少女の口から飛び出したその似合わぬ言葉に、一瞬だが目が丸くなった。どう考えても、少女は「おやめください」と嘆願すると思っていたからだ。まさか空耳かと思って少女の顔をまじまじと見つめる。

「聞こえなかったの！？　イャンクックから地獄耳を借りて来てあげましょうか！？　あんたの大事なクサレ息子を潰されたくなかったら、

今すぐこの手を放しなさい！！」

「……なんと」

世の中には信じがたいことが存在しているものだ。こんなに可愛らしい少女が、身分の上下を顧みずに自分に向かってこのような暴言を

吐くとは、未だ嘗て経験したことなどなかった。なんと、嘆かわしい世になったものか。

「こっちはねえ……朝からロクに食べ物も貰えず、延々延々延々と同じことを言わされて、その度にはぐらかされて、おまけに夜になったらいきなり真っ赤なフトンの上に転がされて！　我慢の限界なんかとっくの昔に過ぎてんのよっ！」

「……」

庶民が代官である自分に向かって使う言葉遣いではない。開いた口が塞がらないとはまさしくこのことだ。少女に圧し掛かったまま、彼は上半身と下半身の意味で固まった。

「距離が近いのよ、距離が！　代官だか退官だか知らないけどねえ！　それ以上、私に近付いたら……素っ裸に剥いてドスランポスに町中を引き回させてや……！」

「光！！　無事っ！？」

何やら不穏なことを少女が口走った時、何の前触れもなく障子が勢

いよく開き、見慣れない青年が駆けこんできた。

「来るのが遅いのよ、この……！」

「ごめん。俺、こういうのマジでムリ。出直してくる」

光、と呼ばれた少女を助けに来たと思われる青年だったが、部屋の中の光景を見るなりなぜか真っ青になった。そして、本当にクルリと回れ右をしてしまう。

（何だ、こやつは。何をしに参ったのだ？）

彼がそんな風に思った時、ふと、体の下から何とも言い表しがたい嫌な空気が流れて来た。

「！？」

思わず視線を下に向けると、そこには怒れる雪山の主ラージャンが怒り状態で佇んでいた。こんな場所にラージャンなどいるはずはない。

見間違いに違いないと思って目をこする。見間違いだった。そこにいるのは間違いなく可愛らしい可憐な少女だ。

「あんたねえ……」

どうしたことか、夜気に満ちた空気が痺れているようだ。静電気が纏わりつき、衣服が張り付いて気持ち悪い。空耳に違いないが、バリバリという稲妻のような音まで聞こえる。

「ちょっと、そこのハリマグロ！！」

ラージャンのような瞳が、いきなり彼を捕えた。思わず背筋を伸ばしてしまう自分がいる。目の前にいる少女は、これまで生きて来た中で出会った「女性」の姿とあまりにもかけ離れていて、未知のものを見る恐怖に心臓が凍りつく。見た目はともかく、纏っている空気はまさしくラージャンそのものだ。彼は今、怒り状態で金色に輝くモンスターの前に裸で放り出されたハンターの恐怖をその身をもって体験していた。

「あんた、私とやりたいみたいだったわよねえ？」

「いや、気のせいであろう」

当然のような顔をして言ってみたが、少女の耳には全く届いていな

いようだ。今こそ、怪鳥の地獄耳とやらを借りてきたい気分である。

「だったら先にそのバカをやっちまいなさいっ！！」

突き付けられる指先とともに、頭の中に叩きこまれる衝撃の言葉。

顔色を変えたのは、助けに来たと思われる青年も同じだった。

「ちょ……光、落ちつけよ。悪いと思ってるって。ちゃんと助けるから、そういうこと言うのは……」

青年がラージャンに向かって話しかけていた。言葉は通じるのか、と一瞬だが本気で考えた。

「一度言ってしまったことは元に戻せないのよ、フェンリル。お分かりかしらぁ？　やられそうになるのは慣れてるでしょ？」

柔らかく、まるで子犬に語りかけるような口調だ。花も綻びそうなほどの微笑を浮かべながら彼女は続ける。だが、急に表情と口調を一変させた。

「だったらいいじゃない！！」

「よくないって！！」

クシャルダオラさえ吹き飛ばせそうなラージャンの咆哮に、青年はよく反発したものだと心の中で思った。はっきり言って、自分にはできそうもない。未だかつて、女性がこれほどまでに恐ろしい生き物に変貌するとは思ってもみなかった。

「ねえ、あんた」

呼ばれて肩がビクリと跳ねた。

「さっさとやっちまいなさいよ。できないの？　腰にブラ下げた立派な“カタナ”は見かけ倒し？　そう。そうなの。それなら、用ナシのブツ……私がいただきましょうか……」

目が据わっている。本気だ、と直感した。途端に下半身の危機感が腰のあたり、やや下部から脳髄に向かって突き抜ける。

（頑張らねば！！）

なぜかその時、そう思った。

「……」

改めて、やってきた青年を見つめる。無意識に、喉をゴクリと鳴ら

せていた。

「お、おっさん……あんた、まさか……」

怯えたような顔で、青年が後ずさる。確かに、目の前の青年は男にしてはかなり綺麗な顔立ちをしている。肌も白く、長く伸ばされた漆黒の髪は艶やかで、何よりその闇色の双眸は息を飲むような深い色をしていた。

（いけるかもしれない！！）

いざ、禁断の花園へ……と思った時、ラージャンの怒り状態がもう一段階上がったのが気配で分かった。

「あんたたちねえ……なにさっきからカン違いしてんの……」

空気を満たす電気がより激しさを増している。少女の体から稲光が走ったような気がした。

「やれって言うのは“殺れ”ってイミよ！！　誰が男同士でヤれなんて言ったの！？　あんたたちの脳ミソはどこに付いてんのよ！？　少しは腰から上でモノを考えなさいよ、腰から上で！！」

どうやら“カタナ”とは本当にそのまま“刀”という意味であったらしい。その言葉を聞いて、青年と共に二人揃ってほっとしたような顔をした。

「いや……光のことだからさあ……絶対そっちの話だろうなって思って……」

苦し紛れの言い訳を並べる青年を完全に視界の端から追い出し、少女が彼の襟を乱暴に掴んできた。全身を、冷たい汗が滝のように流れ落ちていく。

「で？　殺るの？　殺らないの？　どっち？」

「も、もちろん殺るとも……」

少女の迫力に押されながらも、何とか答えてみる。そして、深呼吸をひとつして気持ちを落ち着かせた後、腹に力を込めて叫んだ。

「曲者（くせもの）じゃあ！！　であえ、であえ！！」

静かだった屋敷が途端に騒がしくなる。自分の声を聞きつけたらしい側近たちが、慌てたような足取りでこちらに向かってくるのを感じ

た。

「あんたが殺りなさいよ、この根性ナシ！！」

少女が無礼なことを叫んだような気がしたが、言い返すのが怖かったので聞かなかったことにした。障子が開かれる。真っ白な小石を敷き詰めた庭園には、太刀を手にした侍たちが集まっていた。

「引っ捕えい！！」

味方は３０人あまり、敵はひとり。強気を取り戻したところで命令する。集まった侍たちが次々に抜刀し始めた時、なぜか廊下の向こうから少女と一緒に捕えられていたはずの薬屋一行が姿を現した。

「ライトさん、レフトさん、懲らしめてやりなさい！」

若旦那と呼ばれていた褐色の肌の男が脇に控えていた二人の青年に言うと、丸い顔の男が腰の得物を抜き、四角い顔の男が袖を捲り上げた。どうやらこの大人数相手に戦う気であるらしい。

（敵ながら見上げた心意気だ。それでこそ、この国の武士……！）

勝利のために命を捧げる。その思いこそ、長年に渡ってこの国を支

えてきた理想の男たちの姿であるのだ。ライトとレフトと呼ばれた男たちに、侍たちが一斉に斬りかかる。

「……！？」

哀れ二人の男は白刃の錆に成り果てた……と思いきや、驚いたことに二人は襲いかかって来た侍たちを見るも鮮やかな太刀筋と腕っぷしで簡単に伸してしまったのだ。

（な、なんと！？）

あちらこちらで掛け声が上がる。信じられないことに、薬屋の若旦那も腕だけで太刀を持った相手を伸していた。優勢だと思っていたはずの自分たちが劣勢に置かれている。戦慄した。

「フェンリル！　あんたも戦いなさい！　ほらっ！　あそこにいる４人！　さっさと倒して！！」

「え？　うん……」

乱戦状態の最中、少女が青年にそんなことを言い出したのが聞こえた。青年は、微妙な顔をしながらも少女が指差した方向に向かってい

く。ふと気付いた。少女が指した先にあるのは、裏口だ。

「……」

逃がしてなるものか、と自ら刀を抜いてその行く手を阻もうとは思わなかった。むしろ、早く消えてくれと願っている自分がいる。

「ありがとう、フェンリル。たまには役に立つこともあるのね！　じゃあ私は逃げるから！！　あとはよろしく！！」

青年が武器も使わず、まるで舞いを舞うかのような身のこなしで裏口の前に立ちはだかった四人を地面に伸したのを見届けるなり、少女が当たり前のように言い出した。

（よかった……）

しかし、裏口から逃げようとした少女を青年が引き止める。

「それはないって！　心配だろ？　薬屋さんがまだ戦ってるのに」

「こないだ会ったばかりの他人が生きようが死のうが……私には何の関係もないし、興味もないのよ！」

「またまた～」

自分の部下たちが次々に倒れて行く。そんな中、青年が何だかんだと言いながら少女を引き止めていた。

（おのれ、妨害するでない！）

自分は何より、そのラージャンをこの敷地内から追い出したいのだ。

薬屋一行のことなど本音を言うと二の次だ。とりあえず追い出した後、

夢だと思って忘れたいのである。

「ライトさん、レフトさん、もういいでしょう！」

味方があらかた倒されてしまったころ、ふいに若旦那が言い出した。

「静まれい！！」

ライトが叫ぶ。なぜか静まらなければならない気がしたのは、どうやら自分だけではないようだ。

「静まれ、静まれい！！」

今度はレフトだった。未だに刀を振り上げていた侍たちが、微妙な顔をしながらも刀を降ろし、若旦那を中心に縁側に立った薬屋一行を

見上げる。

「ここにおはすお方をどなたと心得る！　恐れ多くもファーナ王国第２８代国王、クリ……！」

「父ちゃん！？」

明かされた薬屋の正体に唖然として顔色を変えたところで、ふいにどこからか別の声が割り込んで来て、芝居の一節のようなその雰囲気を台無しにした。

「おお、中也。久しぶり～、ははは。まあ、話は後にしよう」

見れば、裏口のところにクエスト帰りと見られる年若いハンターたちが佇んでいる。そこにいた少年の１人に向かって国王はにこやかに手を振っていた……。

共鳴37（後書き）

番外編　～獅子の午睡～

「ああ～！！　もう、やってらんねえぜ！！」

かつて世間から「獅子王」と呼ばれ尊敬と畏怖、そして憧景を欲しいままにしてきた男、その名は竜雪。ちなみに、夏葉の養い親である。彼は自宅の風呂場のドアを思い切り開きながら吐き捨てるように言った。

「くっそ～！　リゼのヤツ！！　俺を何だと思ってやがるんだ、チクショー！！」

風呂場に来たのは入浴が目的ではない。竜雪は妻であるリゼの顔を思い浮かべながら、風呂場に常備してある洗剤とタワシを手に取った。

「少しは俺の意見も聞いてくれたっていいじゃねえか、くそぉ！」

洗剤を床に貼ってあるタイルに垂らし、その網目にタワシをあて

る。

「だいたい何だってんだ、あいつは！　ひとのことドスファンゴ呼ばわりしやがって！　自分は……！」

自分はナントカであろう、と言おうとして、ちょうどよいモンスターの名前が思い浮かばなかったので中途半端に黙りこんだ。そして、ひたすら無心にタイルの網目を擦り回す。

「昔は綺麗な女だったんだけどなあ……」

今となっては、どこにでもいる重量級のオバサンになってしまった。

タイルを擦る。

「胸だけは昔のままなのになあ……」

ウエストや足周りは3倍か4倍になってしまった。洗剤を垂らす。

「せめて洗濯くらいしてくれや……」

料理はいいのだ。自分の趣味だから。タワシで擦る。

「家中をピンクの花と人形とぬいぐるみで埋め尽くすのは止めてくれね
えかなあ……」

自分を訪ねて来る客がドン引きするのだ。水をかける。

「……」

顔を上げた。そこには汚れひとつない輝かんばかりの浴室がある。

「ああ～！　スッキリした！」

ストレスが溜まった時は風呂掃除に限る。カビの「カ」の字でさえ入
り込む余地のない完璧な浴室を見ると、いろんなことがどうでもよくな
るから不思議だ。

「さて、午睡（ひるね）でもするか～」

共鳴３８

（な、何がどうなってんだ……？）

全く状況が理解できない。意味不明、理解不能だった。シヴァとフェンリルが喧嘩していて、その途中でいきなり空中からドレス姿の少年が降って来て、とりあえず話は後だと言われて気が付いたらここにいた。マリンの正体を確かめるヒマさえ与えられなかった。

（と、父ちゃん……？）

目の前には３０人ばかりの侍がいる。刀で峰打ちされているか拳で殴り飛ばされているはずなのに、全員、なぜか元気そうだ。そして、彼らの視線の先には水戸光圀よろしく自分の父親がいる。父親の脇に控えた二人の男が一同を見渡し、声高らかに命令した。

「頭が高い！　控えおろう！！」

その場にいた侍たちが、慌てた様子でてんでに地面に土下座していく。雰囲気に流されて、呆然としたまま中也たちも従った。

（な、何で俺……父ちゃんに土下座してんだ……？　なんか悪いこ

としたっけか？）

そんなはずはない、と理性が叫ぶ。ならば、と理性が問いかけた。土下座しなければならない理由は何か。答えは簡単だ。目の前にある。ただその答えを、自分のすべてが受け入れることを拒否しているだけだ。

「ラタ地方代官、大山フェルディナント」

「ははーっ！」

中也の動揺を余所に、父親は最前列で土下座している立派な着物の男に向かって語りかけ始めた。

「代官という立場を利用し、一介の商人と組んで悪事を働くとは何事か！　そなたらの悪事、このクリス3世、しかと見届けておるぞ」

何だかよく分からないが父親は怒っている。その怒りの矛先が自分でないことに、不思議と安堵感を覚えている自分がいた。

「恐れながら、国王陛下が何をおっしゃっているか、この大山まるで記憶にございません」

予想通りの展開になった。おそらく次は父親の身内が証人を捕まえて登場するはずだ。

「ちょっと待ちなよ」

やはり来た。一同の視線が屋敷の奥へ続く廊下へ集中する。そこから出て来たのは、三人の中年男性を縄で縛りあげたベアルドとマリンであった。

（ベアルドさん……あんたもグルだったのかよ……）

シヴァとフェンリルが喧嘩している途中でいつの間にやらいなくなったと思ったら、何だかよく分からない騒ぎの証人を捕まえていたらしい。ひとりはやたら恰幅のよい男で、身なりと髪型からして裕福な商人なのではないかと思われた。そして残りの二人は、フィールドに出る時のような旅支度をしている。ベアルドが捕まえて来たことからしても、この二人は自分たちが討伐したベルキュロスの素材を運びに来た商業組合（ギルド）の者なのではないかと中也は推測した。

「大山フェルディナント」

引き立てられて来た三人の顔ぶれを見るなり苦い顔をした代官に向かって、父親がいっそ静かとも言える声音で語りかける。

「これでもなお言い逃れをいたすか」

見据えられて、代官が腹の底から唸るような声を上げた。

「恐れ入りました……」

どうやら、あっさり罪を認めるらしい。そこはもう少し頑張れと言いたくなったが、黙っておくことにした。

「そなたらの処分については正規軍ウォーリアに一任してある。心して罰を受けよ」

「は、ははーっ！」

代官が改めて深く土下座した時、ふいに裏口のあたりが賑やかになった。まるで待っていたかのようなタイミングである。中也の背後にある木戸が開くなり、今度は西洋風の鎧を纏った兵士たちが雪崩のように入って来た。

（統一感がねえ！　和風か洋風かどっちかにしろよ、ファーナ！）

狭い入口を、立派な鎧を纏って窮屈そうに入って来る彼らのために、中也たちは立ちあがって道を譲る。美しい真っ白な砂利が敷かれた日本庭園を埋め尽くす侍と西洋の騎士たち。何ともあべこべな光景に、中也は内心で苦笑いを浮かべた。

「こやつらの身柄は役所内の牢に放り込んでおけ！　見張りをたやすなよ！」

西洋風の騎士たちの先頭に立ち、指揮を執っているのは驚いたことにまだ若い女性だった。見たところ２０歳前後といったところだろうか。銀に輝く鎧をまとい、紺青の髪を背になびかせたその姿はさながら戦いの女神の具現のようだと中也は思った。

「うむ。これでめでたし、めでたし！　はーはっはっはっは！」

侍たちが一通り連行されて行った後、閑散とした庭に父親の呑気な笑い声が響き渡る。中也は、その声を何とも言えない絶妙な思いで聞いていた。

「で、中也。久しぶり！　元気そうだな！」

そして何事もなかったように、父親が話しかけて来る。無意識に、握りしめた拳が震えていた。光宮の自分を見る目が冷たい。目を合わせれば雷を纏った拳に吹き飛ばされそうな気がして、敢えてその視線には気付かないフリをした。

「父ちゃん……」

いったい何から言えばいいのだろう。言いたいことと聞きたいことは山ほどある。

「父ちゃん！　あんたの名前は友田和弘だろ！？　何なんだよ、クリス3世って！？　あんた、いつからアメリカ人になったんだ！？」

「あ、あめりか？　はて、どこだ、それは」

ついアメリカ、という国名を口にしてしまったが、そんなことはこの際どうだってよいのだ。なぜ友田和弘がクリス3世になるのか、そこが知りたいのである。シヴァたちが、興味深そうに自分と父親を見比べている。その視線にいたたまれない気分になった。まるで、自分が彼らを騙していたような気さえしてくる。

「いやぁ気付かなかっただろ？　だよなー、だよなー。そうだと思ったよ。なにせ、普段はアルテリアに住んでるからなあ」

中也の心情などお構いなしに、父親は何でもないことのように言ってくれた。確かにその通りだ。自分の家はアルテリアの北東の都、龍都にちゃんと存在している。極まれに出張だということで帰って来ない日もあるにはあったが、父親は３６５日のほとんどを、ちゃんとそこに帰宅していたのだ。

「そのナゾはほら、マリンちゃんだよ」

父親が笑顔で指差した先にいたのは、どう考えても人間ではないひとりの少年……少女であった。言われてハッとする。中也たちもマリンの能力によって、フィールドからここまで一瞬で連れて来てもらった。他人に言われても信じられないことだが、自分で体験したことなのだから信じざるを得ない。

「毎日、龍都の自宅からファーナの王宮まで、マリンちゃんに送り迎えしてもらっていたんだなあ。まあ、鬼龍の時空移動を使えばシ

エンナ内海など、あってないようなものだ。はっはっは」

「……」

そんなことをサラリと暴露していいのだろうか、と当たり前のように話す父親の行動に、中也は眩暈がした。思わず黙り込んで頭を抱える。いろいろな意味で、脳が現実を拒絶していた。

「信じられないわね。あんたと中也が親子なんて」

ひたすら落ち込んでいく中也に代わって、光宮が口を開く。

「似てないじゃない。それに、肌の色だって違うわ」

「ああ、これは日焼けです」

自らの顔を指差しながら、父親はひたすら笑顔で続けた。光宮の眉がピクリと動いた。

「日焼けですよ。なにせ、外を出歩いている時間が長いもので。腹や背中の方は白いですよ。ご覧になりますか？」

「……見たくないわよ」

光宮が拒絶してくれてよかった。自分の父親が同年代の少女に

上半身を脱いで見せているところなど、見たくない。今の中也の脳は、そんなことしか考えられなかった。

「それで？」

溜め息をひとつついて、腕組みした光宮は些か鋭い視線で自分と父親を交互に見やる。

「何が目的なの？」

「目的？　何の話です？」

心底分からないという顔をした父親に、光宮の表情が変わった。

「すっとボケてんじゃないわよ！　私たちはねえ！　クエスト帰りに遭難したのよ！　荒波で船が大破したの！　そんで気が付いたらファーナにいたのよ！　有り得ないでしょう！？　遭難した場所はランズ・エンドからそう遠く離れていなかった！　普通に考えれば、漂流して辿り着けるような場所じゃないのよ！　それでそこにファーナの国王がいて、鬼龍がいた！　何もないなんて言われて信じると思う！？　入学式の時に私たちを樹海に放り出

した鬼龍も、そこにいるオＸＸなんじゃないの！？」

オＸＸ、と言われてマリンが一瞬だけ嫌そうな顔をするが、すぐにまた取って付けたような笑顔に戻った。

「残念ながら俺じゃないよ」

マリンは予想通りと言えば予想通りと言える返答をした。その答えに噛みつこうとした光宮を制して、父親が口を開く。

「アルテリアの軍学校を鬼龍が襲撃し、その場にいた生徒たち８名と春宮・朱宮さまが行方不明になったというお話は窺っておりますよ。ただ、その一件に関しましては我が国ファーナは一切、関与しておりません」

「どうだか」

光宮は、今にも爆発しそうな雰囲気を滲ませている。何だかラージャンに似ているな、と中也はそんなどうでもいいことを考えた。

「あんただけじゃないわ。権力者っていうのはね、いつだってウ

ソつきなのよ。私と姉さんが死ねば、アルテリアの後継者がいなくなるもの。その混乱に乗じてファーナが攻めて来たとしても、おかしくない状況だったわ！」

「けれど、実際のところファーナはアルテリアに攻め込んでおりません」

宥めるように言われて、光宮が一瞬だが黙りこむ。父親が言葉を続ける。どこか遠くで、夏虫が鳴いた。

「戦争を仕掛けるには大義名分が必要です。あなたがどう思っているかは分かりませんが、アルテリアがそうであるように、ファーナにも大国としての威信と名誉というものがあるのです。大義のない戦争は侵略に過ぎない。ファーナは他のどこよりも自国の名誉を重んじます。名誉を捨て、自らの顔に泥を塗りつけるような行いは国王として断固として決断するわけにはいきません」

もっともらしいことを父親は語っていたが、その内容はほとんど頭に入って来なかった。何だか知らないが光宮が父親に諭され

ている。中也の現状認識能力は現在そんな程度だった。

「それに、現実問題としてファーナは財政難を抱えておりますのでね。ここで戦争など引き起こせば否応なく増税を迫られる。国民の理解が得られるとは思いません」

そう言えば、戦争とはとにかく金がかかるものらしい、と中也はどこかぼんやりとした頭で思い出した。武器はもちろんのこと、1万人の兵士を一カ月ほど維持するだけの食料だけでも相当な量になる。かなり切りつめて、ひとりが1日につき1合の米を食べるとしても、たった1日で1万合。一カ月だと30万合……。

「ついでに言うなら」

必死で返す言葉を探している光宮に向かって、父親が笑顔のまま続けた。

「私がもし鬼龍を使ってアルテリアを襲撃するとしたら、王族ではなく軍の将兄を狙います」

「……あの男があっさり殺されるワケないじゃない」

光宮の苦し紛れともとれる反論は、父親の笑い声に軽く流されてしまう。

「まあ、そうでしょうけどね。しかし、アルテリアを動かしているのは王族ではなく将兄でしょう？　飾りに過ぎない国王の後継者を襲撃したところで、アルテリアは特に混乱に陥るとは思いませんが。いかがでしょう？」

何だか光宮にとってはプライドを傷付けられるようなセリフがところどころに含まれていたような気がしたが、予想に反して彼女は何も言わなかった。

「だったら……だったらなぜ私たちが漂流した先にあんたがいたの？」

どうやら入学式の件にファーナは絡んでいないという線で納得したらしい。今度は今回の件について持ち出してきた。

「都合が良すぎるじゃない」

「そればかりは何とも……」

そして父親は苦い顔をしながら背後に控える供の者たちを見やる。

「私たちはもともとファーナのあちこちを渡り歩いて各地の諍いや不正を正しておりましたのでね。今回は、このラタ地方のギルドに不信な動きがあるというウワサを耳にしまして、それでやって来た次第なのです」

父親に付き従う連中が軽く頷いて見せる。どうやら、父親は本当にこのファーナで水戸黄門まがいのことをしていたようだ。

「あんたにそのウワサを流したのは誰？」

「私です」

答えたのはライトであった。無言で先を促す光宮に、彼は言葉を続けた。

「ラタ地方から首都ディーダに品を運んでいる途中の行商人でしたよ。今年になって急にラタの品が値上がりした、と。それも、モンスターの素材で作られた品ばかりが去年に比べて3倍から4

倍にもなって困っている、と。別段、怪しい雰囲気はありませんでした。どこにでもいる行商人の一座でして……」

「だとしたら、また振り出しってことね」

ライトの言葉の途中で、光宮が溜め息混じりに呟いた。行商人の一座は国境さえ超えて品を売り捌く。今更あとを追うことなど不可能に近い。それに、鬼龍がわざわざ行商人を使って国王一座に情報を流す意味が分からない。彼女が考えているのは、おそらくそんなところだろう。

「ねえ、光宮さん」

少しばかり落ちた沈黙を破って、ふいにマリンが声を上げた。

「アルテリア国王のお姉さん……あなたにとっては叔母さんにあたる人、いるでしょう？　何だっけ、名前。確か紫ナントカ……」

「艶の紫？」

「そう。その人の側近に鬼龍がいるでしょう？　その人じゃないの？」

マリンの言葉に、光宮だけでなくその場にいた全員が顔色を変えた。

「名前は確かユウナ、とか言わなかったっけ？　俺は直接会ったことないから分からないけど。時期・国王のあなたのお姉さんと、お姉さんの次に王位継承権がある光宮さんがいなくなったら、次に継承権があるのは、誰？」

「……腹違いの弟の青龍院・光星か、紫ババアの一人娘の花紫」

光宮は何となく気になる言い方をした。それきり、マリンは黙り込む。光宮も何も言わなかった。一同の間を、何とも言えない冷たい風が通り抜けて行った。

「まだこのような場所においででございましたか」

沈黙を切り裂いたのは、先ほどやって来た兵士たちの先頭に立って指揮を執っていたあの年若い女性だった。彼女の後ろには、レイと夏葉の姿がある。

「まったく陛下の道楽には困ったものです。毎度毎度申し上げて

おりますが、これで最後になさってください」

視線だけで再会の喜びを語る中也たちを差し置いて、彼女は父親に向かってそんなことを言っていた。

「いやぁ王宮の暮らしは退屈なのでね。ついつい……」

「日々の業務をまともにこなしておられれば、退屈などというお言葉は間違っても出て参りませんよ」

呆れたように言われ、父親が降参とばかりに頭をかく。そして、彼女は父親に背を向けてフェンリルの方へ歩み寄った。

「おひさしゅう、王子。相変わらずだな」

「沙耶さんこそ。元気そうで何より」

どうやら知り合いらしい。それにしても、フェンリルはファーナにも随分と知り合いが多いようだ。

「その顔の傷はどうなされた？　まさかモンスターにでもやられたのか？」

「いや、これは……」

幾分、苦い顔をしてフェンリルはシヴァに視線を向けた。彼と目が合ったシヴァがニヤリと笑ったのを見て、なぜか沙耶と呼ばれた女性が笑い声を上げる。

「兄弟喧嘩か。それはよいことで」

「よくないって！　いきなり殴られてワケの分かんねえこと言われて、おまけに……あぁ！！　シヴァ！　お前、俺のミラージュショテルどこやった!?　返せ！！」

「知らねえんだ～ぞ」

何でもないことのようにシヴァは言ってのけた。

「自分の武器くらい自分でしっかり管理しろ～よ」

フェンリルが握りしめた拳を振るわせ始めた時、父親の呑気な笑い声が響き渡る。

「まあまあ、いつまでもヤブ蚊に刺されながら立ち話も難儀でしょう。とりあえずどこかゆっくりできるところへ参ろうではありませんか」

「かしこまりました。すぐにご用意いたします」

父親の言葉に、沙耶が優雅な仕草で腰を折る。そして彼女は改めて中也たちの方を振り返った。

「申し遅れたな。私はファーナ正規軍ウォーリアの天礎沙耶（あまいしさや）と申す者。以後、お見知りおきを」

「……正規軍のウォーリアなんて言われたって分かんないわよ。はっきり言ってよ、はっきり。上から何番目？　下から何番目？」

凛とした美しさを湛えた沙耶に少なからず見とれていた中也だったが、横から光宮が不躾なことを口にしたので思考が現実に引きずり戻された。

「上から3番目だ。翡翠院殿」

共鳴３８（後書き）

番外編　～黄昏の逢瀬～

硝子越しに差しこむセピアの光が、執務室を染めていた。

「京さま、これ終わりました」

「ああ、悪いな」

誰もいない、二人きりの部屋。書類の束を差し出せば、軽く笑って受け取られた。赤い髪が綺麗だと思う。その肢体を包む、漆黒の軍服も、彼という存在をよりよく惹きたてている。この人のすべてが、好きで仕方なかった。

「お茶、淹れますね」

アルテリア軍の最高責任者の位に君臨する彼は忙しい。なかなか会えない寂しさは募り、いつしか自分たちの逢瀬は将兄の執務室で夏葉が彼の仕事を手伝っていることがほとんどになっていた。

「少し休むか」

言いながら、彼は身を起してソファに進む。淹れたばかりの紅茶を手に、その傍へ寄った。

「……」

テーブルにカップを降ろし、そのまま絨毯が敷き詰められた床に膝をつく。彼の組んだ脚の上に手を乗せ、吸い寄せられるように額を寄せた。

「京さま……」

彼は何も言わない。黙って自分の好きなようにさせてくれている。髪を撫でてくれる手が暖かく、心地よさに瞳を閉じた。

（あなたのところへ、返りたい……）

共鳴３９

「何だか、や～っと一息つけた感じがするわ」

湯上がりの肌を真っ白な夜着に包んだ光宮が、だらしなく布団の上に寝転がりながら溜め息混じりに言い出しだ。彼女が何気なく両脚を動かした際、裾の合わせが肌蹴て形のよい白い脚がチラリと見える。勘弁してくれ、と中也は心の中で呟いた。

「ホントだね。でも、何より全員が無事でよかったよ」

濡れた銀髪をタオルで拭きながら、どこか疲れた顔をしたルナが小さな声で答える。胸元を広げて、汗ばんだ肌に風を送っている彼女から意図的に目を逸らした。昼間に、アクシデントとは言え、その豊かな胸の中に顔を埋めてしまったのだ。嫌でも思い出すその感触に、無意識に顔が赤らんだ。

「いつものことながら、と言うべきじゃないかしら？　何だかんだ言って、私たちは全員ケガもしてないもの。誰かの手の平の上で踊らされてるみたい。嫌な感じだわ」

光宮の言うことには一理ある気がする。その点においては、中也も反論するつもりはなかった。そもそも、ここに来るキッカケとなったあの海難事故の際も、自分たちだけはウソのように助かっているのだ。ふっと、目の前でサメに食い千切られた死体を思い出し、背筋が寒くなった。

「そう言えば、フェンリルはどうしたの？」

光宮の視線が、壁際で真っ赤に染めた自分の髪をいじっていたシヴァに向けられる。

「知るか～よ。何で俺が知ってんだ～よ」

「あっそう。あの人、気が付いたらいなくなるんだもの。この宿に来た時まではいたじゃない。なのに、私たちが温泉から上がって来た時にはもういなかったわ」

気のせいだろうか。フェンリルのことを語る光宮の口調にはどこかしら刺々しいものが含まれている気がした。何かあったのだろうか、と思う反面、フェンリルが誰かに嫌われるようなことをするは

ずがないと思う自分がいる。

「さて、俺もちょっと出て来る～ぞ」

ふいにシヴァが立ち上がり、夜着のまま廊下に続く襖に手をかけた。

「どこ行くのよ」

「ん～？　ちょっとベアルドのオッサンに頼みがあんだ～ぞ」

ベアルドに用事、と聞いて気にならないでもなかったが、何だか根ほり葉ほり聞くのもどうかと思って、黙っておいた。

「どこに行ってもいいけど、明日の朝にはアルテリアに向けて船を出して貰えることになってるのよ？　遅れたら置いて帰るわ。そのつもりでいてね」

「はいは～い」

いちいちお節介な光宮の言葉に適当な仕草で手を振り、シヴァはそのまま部屋を出て行ってしまった。

「……」

シヴァがいなくなってしまうと、狭い四畳間に光宮、夏葉、レイ、そしてルナという顔ぶれの中に、たった一人で残されることになる。そもそもは女の子たちが情報交換を兼ねて自分とシヴァの部屋に遊び来たのが始まりなのだが、正直、湯上がりの女の子たちにたったひとりきりで囲まれているのは、下半身の意味合いでかなり辛かったりする。

「それにしても、中也がファーナの王子様とはねえ……。さすがの私も想像してなかったわ」

部屋を満たす匂いからして違う。石鹸のような香水のような甘い匂いに満たされた部屋など、今までの人生で経験したことがあるはずもなかった。ちなみに、自分の母親と姉は女であって女ではない違う生物なので湯上がりの匂いを嗅いでも何とも思わない。

「ねえ、聞いてんの？」

光宮が投げた固い枕が顔面に直撃し、思考が現実に戻って来た。

「わ、悪い。聞いてなかった。何の話？」

「都合よく聞いてないフリ？　あんた、そういうところクリス3世にソックリじゃない」

言いがかりをつけられた。しかしながら本当に聞いていなかったのだから仕方ない。光宮相手に食い下がるだけ無駄だと知っているので、中也は素直に謝ることにした。

「悪かったよ。違うこと考えてたんだ。で、何？」

「だから、あんたがファーナの王子だなんて想像つかなかったって話よ」

言われて、急激に頭が冷えた。目の前に広がる光景と部屋を満たす甘い匂いにのぼせきっていた体に、冷水を浴びせられたような気分になる。無意識に、視線を落とした。

「俺も……知らなかったんだよ」

「ふ～ん」

光宮の目はどこまでも猜疑的だった。

「本当に、知らなかったんだ。それに、俺自身が未だに信じ切れて

ない。何より、父ちゃんがファーナの国王なんて……有り得ねえよ、マジで」

自分はこの世界ではない別の世界で育った。それがある日突然、起きたら世界が違っていた。そしてその後はアルテリア龍都の、どこにでもある普通の家庭で育ったのだ。それがいきなりファーナという国の国王の息子だと言われても実感など湧くはずもない。ファーナの王宮どころか、アルテリアの王宮さえ知らないのだ。王族と言われて頭に浮かぶのは、本の中でしか見たことがない空想的なものばかり。現実味などあるはずもなかった。

「中也はどっからどう見ても庶民だよな。今更、王子サマだとか言われても全然そんな気がしねえよ」

いたたまれない気分で壁に寄りかかる中也に、レイが助け舟を出してくれた。そう思ってくれていることがありがたい。光宮がどう思ったのかは知らないが、レイの言葉を受けてその表情が少しばかり和らいだ。

「まあね。そういうことにしとくわ」

光宮が、溜め息を落とす。釣られて自分も小さく息をついていた。

「……ネムイ」

たったひとつの行燈が照らし出す和室に静寂が落ちた時、ふいに夏葉が呟いた。反射的に夏葉の方を見ると、もともと白い顔が更に白抜け、深紅の瞳にはどこか虚ろな色が宿っていた。その表情さえ煽情的で、中也は思わず視線を逸らす。

「あんた、ホントによく寝るわよねえ。まだ１０時よ？」

「ん～……」

光宮の呆れたような言葉に、夏葉が生返事を向けていた。鼻にかかった甘えたようなその声音は、普段は決して聞くことができない。気が付けば、畳に強く爪をたてていた。

「仕方ないわね。そろそろ戻りましょうか」

「なっちゃん、あたしがおぶってやろうか？」

「……自分で歩ける」

光宮に釣られるように、レイとルナも立ち上がる。そして彼女たちは、中也たちの部屋を出て行った。

（……ヤバい）

遠ざかる彼女たちの話し声を聞きながら、中也は何とも言えないモヤモヤした気持ちを持て余していた。深呼吸を繰り返し、嫌でも下半身に集中しようとする血液を違う部分に分散させようと試みる。

（こ、怖い話だ、怖い話）

しんとした和室に、たったひとつの行燈。怪談話にはもってこいのシチュエーションである。中也はふたつある布団のひとつに潜り込みながら、昔どこかで聞いた怖い話を必死に思い出した。

「！」

布団から、石鹸の甘い匂いがする。光宮を内心で呪いたくなった。男の気持ちなんて分かろうともしないくせに、こうして生殺し的な悪戯ばかり残して行く。彼女が意図的にやったことではないと分かってはいるものの、処理しようにもできない状況で妄想のネタを撒

いていかれることほど男にとって困ることはない。

（覚えてやがれよ、チクショー！！）

中也はひたすら耐えた。耐え忍んでいるうちに、気が付いたら寝ていた……。

＊

翌朝、目を覚ました中也はいつの間にやら戻って来たらしいシヴァが隣の布団で寝ていることに気付いた。いつものことながら死んだように静かに眠る彼の真っ赤な頭が、いつの間にやら金色の頭に変わっていた。

（寝ぼけてんのか、俺）

目をこすってもう一度見てみた。やはり金髪である。それも、光宮のハニー・ブロンドともレイのストロベリー・ブロンドとも違う。限りなく灰色に近い、薄い色の金髪だった。

（ベアルドさんに頼みって、このことか）

妙に冷静にそう思った時、シヴァの瞼が僅かに動く。

「ちょうどいいか。朝だぞ、起きろよ」

「んあ～？」

肩を揺すって起こしてやれば、死体のようだったシヴァが動き始める。いつものパターンである。

「お前、どうしたんだよ、そのアタマ」

活動を始めたシヴァに敢えて聞いてみると、彼は一瞬、何のことだという顔をする。そして中也の視線を追って、自分の頭のことを思い出したらしくニヤリと笑ってみせた。

「似合うだ～ろ？」

「……あ～、うん……まあ……うん」

正直、よく分からないというのが本音だった。灰色に近い金髪のシヴァを見慣れてないせいかもしれないし、どうにも以前の強烈な赤の印象が強すぎるのかもしれない。どちらにしろ、コメントに困ることには違いない。

「オッサンはいいカンジになったって言ってくれた～ぞ」

「……ベアルドさんの言うこと、信用できんのかよ」

シヴァは無言だった。

「とりあえず降りようぜ。朝飯、食いっぱぐれたくねえよ、俺」

「おう～よ」

そう言って、二人そろっていそいそと着替え始める。横目でチラリとシヴァを見た。やはり、何だか違和感がある。

「なあ、何で急に髪の色、変えたんだ？」

「べっつに～。気分転換だ～ぞ」

「ふ～ん」

脱いだ夜着は宿からの借り物だ。あとで店の人が片付けてくれるだろうと信じて、そのまま敷きっぱなしの布団の上に放り投げておいた。そして、部屋を出て廊下に出る。等間隔で並ぶ窓から、朝の光が暗い板張りの廊下に格子模様を描き出していた。スズメの鳴く声を久しぶりに聞いた気がする。何だか爽やかな気分だった。

「アルテリアに帰るのに、また船に乗るんだっけ？　ヤダな」

「何で～だ？」

「こないだ海難事故に遭ったばっかじゃねえか。どうしてマリンさんが連れて帰ってくれないんだろうな。ちょっとトラウマなんだよ、ジョーズ……」

「上手？　何が？」

「いや、こっちの話」

くだらない会話をしながら階段を降り、その先にある食堂に顔を出すと、そこにはすでに起きて来ていたらしい光宮たちの姿があった。慣れない箸に四苦八苦しながら朝食を楽しんでいた彼女たちだったが、シヴァを見るなり予想通りのリアクションをする。

「どうしたの、その頭！　いつの間に？」

光宮を筆頭に自分が先ほど聞いたのと同じようなことをてんでに問いかける。それに、シヴァは適当なことを答えていた。しかし。

「なかなか似合うじゃない。見違えたわ。別人みたい」

光宮が珍しく率直に褒めた。

「ホントだよ。なんかカッコ良くなった」

シヴァの髪を触りながら、ルナが笑う。

「オトコが上がったな、シヴァ」

レイが背中を叩きながら言った。

「うん、いいと思う」

夏葉までもが褒めた。

「……」

自分も髪を染めてみようかな、とちょっと思った中也であった。

そして中也とシヴァも並べられた木のテーブルにつく。店の雰囲気といい、家具といい、店員といい、すべてが時代劇の中から抜け出してきたようだ。

（久しぶりに腹いっぱい食える！）

山盛りの白ごはんに、具だくさんの味噌汁、焼き鮭に出し巻き玉子、色とりどりの天ぷら……。すべてがごちそうに見える。シヴァと違って箸に馴染みの深い中也は、特に苦労することなく朝飯を堪

能した。

「うう～。眠い～」

あらかた食べ終わったころ、客室に続く階段から激しく眠たそうな顔をしたフェンリルが姿を現した。

「どうしたんですか？　仕事とか？」

「マリンちゃんとリバーシしてたら朝になった……」

中也の前の席に座った彼に何となく聞いてみると、力のない声でそう答えられた。ちなみにリバーシとはオセロのことだ。何とも彼らしいことだ、と思い、つい苦笑いしてしまった。そんなフェンリルの前に、店員の若い女性が朝食の乗った膳を運んでくる。眠いからいらない、と言いそうな雰囲気があったが、予想に反して彼はちゃんといただくつもりらしい。

（この人ってホントに箸の使い方が綺麗だよな）

何気なくフェンリルを眺めていた中也は、そんな感想を持った。

アルテリアでは箸はほとんど使われない。馴染みなどないはずなの

に、彼は流れるような仕草で箸を運んで行く。そう言えば、こちらの世界に来る前に知っていた彼もまた、シヴァと兄弟なのが信じられないくらい箸の使い方が綺麗だったことを思い出した。

「あれ？　お前、どうしたんだよ、その頭」

フェンリルの視線がシヴァの頭に止まる。今ごろ気付いたらしい。

「べっつにー」

「ハゲちまえ」

「女の子みたいにズルズル髪の毛伸ばしっぱなしの誰かさんに言われたくねえんだ～ぞ」

「何だって？」

「別に誰とは言ってねえんだ～ぞ。そんなんだから男のくせに大剣もマトモに持てねえんじゃねえのか～な？　別に、誰とは言わねえけ～どよ」

フェンリルとシヴァの空気が険悪になった。これはマズイ、と中也は思う。このままではまた昨日のように二人が喧嘩を始めてしま

い兼ねない。

（ど、どうしよう……！）

そもそも、なぜシヴァがフェンリルにあんな言いがかりをつけたのかが分からない。途中、二人が何か会話していたようだが、離れた場所にいた自分とルナには全く聞こえなかった。シヴァがいきなりフェンリルを殴って、そこから二人が喧嘩を始めた。分かっているのはそれだけだ。

「そう言えば、決着ついてなかったよな？」

「はあ？　何言って～んだ？　どう見ても俺の勝ちだ～ろ？　まあ、リベンジしてえって言うなら付き合ってやんねえでもねえ～ぜ？」

「こ、のヤロー……」

立ち上がったフェンリルがシヴァの胸元を掴む。正直、この二人が喧嘩している姿を見たのは昨日が初めてだった。中也としては、どうやって止めたらいいのかさえ分からない。

「あら、なに？　兄弟喧嘩？　いいんじゃないの？」

ひたすらオロオロする中也とは対象的に、隣のテーブルから、呑気な光宮の声が聞こえて来た。

「で、どっちが勝つ方に賭ける？」

こいつらは……とは声に出して言えない。賭けるより先に止めろよ、とも言えない。女の子四人相手に意見する勇気は残念ながら持ち合わせていなかった。

（ヤバいって！　こんなところで喧嘩なんかすんなよ！）

店員たちが不安げな表情で自分たちを見ている。周囲にいる他の客たちも、あからさまに迷惑そうだ。そして、自分の仲間たちは誰も止めようとしない。睨みあった二人は視線から火花を散らしたまま、くだらない言いがかりを付けあっている。

「朝から賑やかだな」

一触即発だったフェンリルとシヴァをたった一言で停止させたのは、久しぶりに見た将兄だった。

共鳴３９（後書き）

番外編　～中年とツンデレ～

ある夏の終わりの夜のこと、いつもながら遊びに来ていた光宮が夏祭りに行かないかと誘って来た。

「竜雪もリゼさんも絶対に反対なんかしないわよ。いいじゃない。行ってみましょ？　いろんな露店が出ててきっと楽しいわよ」

養われている身の上から、どうにも遊びに行くとは言いづらい。さすがにその程度の気は使うのであるが、光宮はそんな夏葉の思いを知ってか知らずかいつも以上に強引だ。

「竜雪さんに、聞いてみる」

半ば押し切られるようにそう言った時、ふと光宮の表情が怪訝なものに変わった。

「なに？」

「あんた、竜雪のことそう呼んでるの？　リゼさんのことは？」

「“リゼさん”だけど……」

夏葉が答えると、光宮が大袈裟な溜め息を落とした。

「“お父さん”って呼んであげなさいよ。きっと喜ぶから」

そして夏葉と光宮は二階にある自室を出て、問題の竜雪とリゼがいるリビングに顔を出した。

「お父さん」

光宮に言われた通りそう呼ぶと、竜雪が雪山でヴォルガノスを見たような顔になった。少し離れたソファで化粧をしていたリゼも、僅かながら驚いたように顔を上げる。

「光と、夏祭りに行って来ていい？」

「な、夏祭り？　ああ、ああ、そうか。夏の祭りか。そうか、そうか。行って来い。うん、行って来い。気をつけろよ」

「うん」

了解は得た。では行くかと踵を返すと、ニヤニヤしている光宮が目に映る。

「あ、ああ、ちょっと待て、ナツ！」

ふいに呼びとめられた。何事かと振り返れば、竜雪がふところから幾枚かの紙幣を出して渡してくる。

「好きなモン買って来い」

「ありがとう」

断るのもどうかと思って受け取った。

「べ、べつに“お父さん”って呼ばれてテレてるワケじゃねえからな！」

誰にともなく宣言している竜雪に、リゼが重い溜め息を落とす。

「オッサンのツンデレは気色悪いだけだよ、ドスファンゴ」

共鳴４０

早朝の澄んだ空気が街道を満たしていた。石で舗装されていない道は
歩く度に砂利を踏む音がする。商人の朝とは早いもので、大方の人間が
未だ床についているこの時間にも拘わらず、そこかしらに立ち並ぶ店舗
の中では忙しそうに働く人間の姿が目につく。朝早くからご苦労なこと
だ、と思いながらも、彼自身もまたこんな時間から仕事をしていること
に思い当たり、軽く苦笑した。

「いらっしゃいませ」

食堂を兼ねた宿屋の暖簾をくぐる。木のテーブルとイスが整然と並べ
られた店内には人の数もまばらだった。席へ案内しようとする店の主人
に形だけの断りを入れ、彼は目的の人物が座るテーブルへと進む。

「お久しぶりです。こんな朝早くからご苦労なことで」

正面の席につくなり、その男は目の前の蕎麦から顔を上げることもせ

ずに言って来た。

「こんな時間じゃないと抜け出せないんでな。そっちこそ、肩書きの割

にヒマそうじゃないか。相変わらずだな」

煙草に火を点けつつ冗談混じりに言うと、男はさも心外だとばかりに

笑ってみせる。店主が無言で自分の前に灰皿と粗茶を置いて行く。

注文

は、との問いかけには無言を返した。

「私は私なりに忙しいのですよ。執務室にカンヅメされているあなたよ

り、よほど世のため人のために仕事をしておりますとも、将兄」

「俺はそもそも世のため人のために仕事をする気になれん」

「それはまあ、そうでしょうね」

ここでようやく顔を上げた褐色の肌の男と視線がかち合った。男

の名
は友田和弘。またの名をファーナ王国・国王クリス3世。
「うちの候補生たちが世話になったな。あとから何だかんだと言われて
も面倒なんでな。形ばかりの礼はしておく」
「いえいえ、ここの蕎麦を奢っていただけるなど身に余る光栄でございます。こちらこそ、うちの中也がいつもお世話になっておりますね。それにしても、アルテリアにはなかなか見所のある子ばかりが揃っておいでのようで。羨ましい限りでございます」
「どうだか」
紫煙が舞う。窓の向こうに広がる景色に暁光が広がり始めていた。
「またご謙遜を。あれくらいの年齢でベルキュロスを討伐できるハンターなどなかなかおりませんよ。ついでに、一緒に旅をしたお嬢さんたち

にも随分と楽しませていただきました」

「道楽だな」

「よく言われます。アルテリアとファーナではそこに生きるのが同じ人

間であっても頭の中身が違います。これからいろいろな国の人間と関わ

っていかねばならない光宮さまにとっては、最初に乗り越えるべき試練

の真似事程度にはなったのではありませんかな」

クリス3世は視線を蕎麦に注いだまま、口元だけで笑ってみせる。蕎

麦の椀がテーブルに置かれる重い音が静かな店内に響き渡った。無言を

貫けば、ふいに彼は視線をあげる。

「そう言えばあなたの王子にお会いしましたよ。王子がいらっしゃると

いう話は聞いておりませんでしたのでね、ライトとレフト、それからべ

アルドは随分と驚いておりました」

「……本人が行くと言って聞かなかったんだ。俺は止めろと言ったんだ
が」

「相変わらず息子さんには甘いことで」

蕎麦をすすりながら、クリス3世は楽しそうに笑った。

「俺にしてみれば自分の子供をわざわざ危険な場所に送り込むお前の気
が知れん。心配じゃないのか？」

「……娘だったら心配しますがね。息子なんだから少々大丈夫ですよ。
むしろ、少しくらい危険な目に遭った方が人生経験が豊かになっていい
と思っております。そもそも、ベアルドが付き添っている時点で危険と
は無縁でございましょう」

何でもないことのように言ってくれる彼の心理は本当に理解不能だっ
た。そんなものか、と思うものの、自分の息子の顔を思い浮かべる

と冗
談ではないという考えが急上昇してくる。
「そうそう。ベアルドがそれとなく喜んでおりましたよ。王子が自分の
ことを覚えておいでだったと。昔の面影があったからすぐに分かったと
申しておりました」
「……覚えてたのか。意外だな」
父親の自分が言うのもどうかと思うが、息子のフェンリルは興味のな
いことはどれだけ言い聞かせようがすぐに忘れる。ある意味、特技だと
さえ思う。そんなフェンリルがほんの一カ月も顔を合わせていないはず
のベアルドを覚えていたとは少し驚いた。それも、フェンリルがベアル
ドと会ったのは１０年も前の話である。
「ベアルドが言うには、王子の弟さん……シヴァくんでしたかな。彼が

ベルキュロス討伐で随分と活躍されたそうですよ。聞いていた話と随分
実力に差があるようですが」
「それは俺に言われても困る」
「ああ、そうでしたね」
それに比べてうちの息子は、と続けるクリス3世の表情はどこまでも
楽しそうだった。吸殻を灰皿に押し付け、出された粗茶に手を伸ばして
みる。随分と薄い味の茶だった。煙草には合わないので、一口で飲む気
が失せた。
「ところで、ヤンさんはお元気ですか？」
蕎麦の露までしっかりと口に運びながら、クリス3世は彼が苦手と分
類する人間の名を口にした。
「いっそ死んでくれと思うほどには元気だ」

「なるほど。相変わらずカンタロスにご熱心で？」

「……あいつの話をいちいちマジメに聞いていたら頭がおかしくなる」

「趣味は人それぞれでございますよ、将兄」

出された粗茶に口をつけつつ、クリス３世は喉の奥で笑ってみせる。

「では、そろそろ参りますか」

立ち上がったクリス３世に続いて席をたつ。テーブルの上に多めの金

を残したので、見送る店主の態度は異様に丁寧だった。

「それで？　お前の目的は果たせたのか？」

並んで静かな街道を進みながら問いかければ、クリス３世は満足そう

に頷いた。

「ラタ地方の不正も正すことができましたし、ウワサの光宮さまのお顔

も拝見できた。まあ、私は今回いろいろと頼まれただけですがね、もの

はついでと言いますか。中也もいい経験ができたでしょう。それにして
も、光宮さまは話に聞いていた以上に可愛らしいお嬢さんで」
「……アレのどこを見て可愛いという言葉が出て来るんだ？」
「将兄こそ、光宮さまのどこを見て可愛くないと思われるのですか」
半ば本気で問いかけると、有り得ないとでも言わんばかりの顔で逆に
聞き返された。前から分かってはいたことだが、クリス3世とはどうに
も合わない。考え方が違いすぎる。
「ぜひともうちの嫁に欲しい」
「……冗談だろ」
「私がこの国の責任ある立場でなければ、本気です」
含みのある口調に、内心で頷いた。中也と光宮が互いにどう思ってい
るかは分からないが、光宮をファーナに嫁がせることはおそらくアルテ
リアが反対するだろう。クリス3世も、それを知らないはずはない。

「将兄は、どうなさるおつもりなので？」

「何の話だ」

「夏葉さんのこと以外に何がございますか。随分と大切になさっておい

でのようですが、ずっと今のままというわけには参りますまい。いずれ

は、必ず分かることです」

「お前に言われるまでもないさ」

はっきりとした答えは口にしないまま黙りこむ。クリス３世も特に答

えを求めてはいなかったらしく、それ以上は特に何も言わなかった。

「では、王子が女性を紹介してきたらどうなさいます？」

「……それは、おそらくないだろうな」

「はい？　もしや王子はそちらの趣味がおありで？」

「それこそ絶対にない」

なぜか興味津津という雰囲気を滲ませるクリス３世を一瞥し、視線を

一軒の宿屋に向けた。まだ早朝と呼べる時間帯であるにも関わらず、そ
の宿屋からは賑やかな声が漏れ聞こえていた。
「そうですか。王子の嫁にうちの娘はいかがでしょうかと申し上げよう
と思いましたのに。それは残念」
「寝言は寝て言え」
「いえいえ、今起きたばかりでございます。年寄りは早起きが取り柄で
ございますのでね」
そんな軽口を交わし合いながら暖簾をくぐる。騒動の中心にいたのは
フェンリルとシヴァだった。
「朝早くから賑やかだな」
少しばかり呆れた口調で言えば、その場にいた人間が顔色を変えて彼
を凝視する。

「な、何であんたがここにいるの！？」

真っ先に声を上げたのは予想通り光宮であった。先ほどクリス３世か

ら言われた言葉が頭を掠め、改めて光宮を眺めてみる。顔立ちは悪くな

い。そこは認める。しかし。

「ファーナ国王からお前たちを保護したという報を受けたから迎えに来

てやったんだ。とりあえず、全員無事そうだな」

「あんたに迎えに来られたんじゃあファーナの方も迷惑でしょうに。少

しは気を使いなさいよ。オトナでしょ？」

やはり可愛いとは思えなかった。クリス３世はこの生意気な子供のど

こと何を見て可愛いと形容するのだろうか。おそらく、自分は死ぬまで

理解できないだろうと本気で思った。

「いえいえ、非公式な訪問でございますから特に迷惑などしておりませ

んよ。将兄も気を使わなくていいとおっしゃってくださいましたしね」

「あんたも国王なら、もうちょっとビシッとしなさいよ、ビシッと！！」

彼の味方をするような発言をしたクリス3世に、さっそく食ってかかる光宮。付き合ってられない、と溜め息を落とせば、光宮の傍にいた夏葉と目が合った。特に何も言わずに軽く笑ってみせれば、微かに頬を赤らめて視線を逸らす。夏葉の方がよほど可愛いという形容詞が当てはまる気がする。

「まあまあ、それはともかく。港に船を用意しております。お疲れのところ非常に申し訳ございませんが、なにぶんキャプテンが気まぐれでしてね。いつまでも陸にいる保障がないのです」

「……そんなヤツに送らせないでよ。大丈夫なんでしょうね」

「そう言わずに。船乗りとしての腕は確かでございますから」

クリス3世の言葉を合図に、アルテリアの候補生たちがそれぞれ席を

立ち、荷物を纏めに部屋へと引き上げ始めた。

「将兄はどうなさるので？」

「俺も戻る。四軍将に見つかると面倒なんだ」

「なるほど。あなたも大変ですね」

「まったくだ」

軽く息をつき、なぜかふてくされた様子でテーブルについたままの息

子のところへ歩み寄った。

「どうかしたか？」

「べっつにー」

視線を合わせずに適当な返事をする時はたいてい機嫌が悪い時だと知

っている。子供のころからの悪い癖だ。

「話は後だ。お前は俺と一緒に戻れ。声楽（せいらく）が来ているから」

「分かった」

フェンリルは短く言って立ち上がる。特に持ち帰るものはないらしい。

「お前、ミラージュ・ショテルはどうした」

「……サスケが探しに行ってる」

気になって問いかければ何とも苦い声音で答えられた。モンスターの

素材で作られた武器あるいは防具を紛失することは、アルテリアでは処

刑に値する重罪だ。知らないはずはないのに、本人が探しに行こうとし

ないところがフェンリルらしいと思う。呆れて返す言葉が無い自分を、

少し離れた場所でクリス3世が笑いを堪えながら眺めていた。

「気を付けろよ」

「俺のせいじゃない」

どういう意味だと聞こうとしたところで、光宮たちが何だかんだ

と騒
ぎながら階段を降りて来た。その手には、クリス3世から送られたこと
が一目で分かる手土産を山のように抱えている。
「女性に貢ぐのは気分がよいもので」
何も言っていないが、どうやら言いたいことは伝わったらしい。どこ
までも楽しそうに、彼は答えた。
「さて、皆さんを見送りに参りましょうか」
そして、クリス3世の一言で賑やかな一行が港へ向かうために宿を出
ていく。やかましいとさえ言える少年少女たちがいなくなった宿屋は途
端に何とも言えない静寂に満たされ、それを払拭するかのように店員た
ちがまた新たな客を迎えるための準備を始めた。それを何の気なしに見
送った後、フェンリルを促して外へ出た。

「あの……！」

街道へ出たところに、数人の男女が待ち構えていた。彼らはクリス3

世の姿を認めるなり、いきなり地面に土下座する。

「国王陛下とは存じ上げず、数々のご無礼をどうかお許しください！」

何事かと思って成り行きを見守る彼の前で、先頭で土下座している中

年の男が弁明を始めた。その様子に、クリス3世は高らかな笑い声を上

げる。

「いえいえ。こちらも正体を明かすつもりなどございませんでしたので

どうかお気になさらず。さあ、お立ちください」

国王に促されて、戸惑う様子を見せながらも彼らは立ち上がる。その

態度を見て、これからは四軍将が謁見してきた際には土下座させてみよ

うかと少し考えた。

「お佐知さん」

ふいに、クリス3世が一際縮こまっているひとりの老婆に声をかける。

「いろいろとご苦労がございましょうが、どうかお美代さんをお大事に。

大事な跡取りでございましょう?」

そう言われて、老婆は小さく何事か答えながら何度も何度も頭を下げていた。見れば、老婆の後ろには腹の大きな若い女が立っている。

「……お佐知さんが望む望まないに拘わらず、これから先はどう生まれたかではなく、どう生きているかを評価される時代が必ずやって来ます。

それを受け入れるも否定するも、あなたの自由です。ただ……」

候補生たちの胡乱げな視線と自分の胡散臭げな視線が見つめる中、クリス3世が何やら老婆に向かって語り始めた。

「どうか、あなたが幸せだと思える生き方をなさってください」

老婆の態度は相変わらずだ。クリス3世の方を見ようともせず、ただ
ひたすらお辞儀を繰り返している。言いたいことが伝わったのかどうか
定かではないが、クリス3世は気にする様子はなく候補生たちの方へ向
き直った。
「さあ、行きましょうか」
そして、彼らはついさっきまで土下座していた男女に見送られながら
港の方へ向って歩き始める。その背に、彼らはいつまでも深く頭を下げ
ていた。
「俺、先に声楽さんのところに行ってる。どこで待ち合わせ?」
ふいに、フェンリルがそんなことを言い出した。
「見送りに行ってやらないのか?」
「行かない」

はっきりと否定したフェンリルには敢えて何も言わず、知人が待って
いる店の名前だけ告げてやった。光宮たちが向かった港とは逆方向に足
早に立ち去って行くその背を眺めながら、胸の内でやれやれと溜め息を
落とした。

「いつまでたっても子供だな……」

軽く呟き、形ばかりの見送りをするために港へ向かって踵を返す。

「しょ～けい」

次第に増えて来た人混みの中を歩いていると、ふいに隣に並んだ人物
にそう呼ばれた。

「ちょっと聞きたいことあるんスけど、いいっスか？」

視線は前方に向けたまま、歩調を変えるわけでもなく少年が話かけて
きた。少し考えて思い当たる。フェンリルの弟のシヴァだった。

「髪の色を変えたのか。一瞬、誰だか分からなかった」

「……いつまでもあんたの真似してんのが嫌になっただけっスよ」

「なるほど。それで？」

街道は行き交う人々の話し声や、客を呼びとめる宿屋の店員の喧騒に

満ちていた。通り過ぎる風に潮の匂いが混じる。どこか近くで海鳥の声

がした。

「あんた、ホントに人間なんスか？」

シヴァの口から出た予想外の質問に、思わず笑った。しかし、前方を

睨みつけるように見つめている彼はいたって真面目な表情をしている。

「いきなり何なんだ」

「……あんたは人間に見えないから聞いてるんスよ。別に答えたくねえ

ならそれでいいっス。だけど」

初めてシヴァと視線が交わった。フェンリルと同じ、闇色の双眸が自

分をひたと見据えていた。どうやら冗談のつもりではないようだ。

「俺たちと、それから兄貴のことをあんまり巻き込まねえでもらいたい

んス。あんたがどういうつもりなんかは知らねえし、想像もつくわきゃ

ねえ。だけど、そろそろこっちもいい加減イラっとしてるんで」

「残念ながらそういうことは俺に言われても困る」

笑いながら言ってやると、シヴァがどこか複雑そうな顔をした。

「だったらいいっス」

短くそう言って、シヴァは歩調を早めて光宮たちの後を追い始めた。

「血は争えない、か」

開けた視界に真っ青な海が広がっていた。石で舗装された港にはたく

さんの船が出港の時を待っている。その中でも、一際目を引くのが真っ

白な帆を誇る知人の船である。舷側から降ろされた縄梯子を伝って、光

宮たちが船に乗り込んでいる様子が見えた。

「そろそろ出港するようですよ。相変わらずキャプテンはせっかちです
ね。ところで王子は？」

「先に声楽との待ち合わせ場所へ行くそうだ」

「そうですか」

クリス3世と並んで、候補生たちが乗った船を見上げる。デッキから
威勢のいい掛け声が漏れ聞こえていた。相変わらず、この船のキャプテ
ンは船に乗っている時はまともに仕事をする男のようだ。

「シヴァくんと派手に喧嘩なさっていたそうですからね。仕方ないかも
しれません」

「そうなのか？」

「はい」

知らなかった。不機嫌だった原因はそれか、と思いつつ先ほどの

シヴ
ァの言動を思い出して苦笑いした。どうやら精神年齢は弟の方が上であるらしい。
「ついでに、あなたと夏葉さんが一緒にいるところを見たくないのではありませんか？」
クリス3世の言葉には何も言わずにおいた。真っ白な帆が晴天に映える。港に並ぶどの船よりも早く、候補生たちが乗った船「ホワイト・パール号」が大海原へ向かって旅立っていこうとしていた。
「それで、何がいるって？」
「確かテオ・テスカトルとか何とか」
「健闘を祈る」
その目的地は、ラティオ活火山……。

共鳴４０（後書き）

お疲れ様でした。

これにて妖乱舞「共鳴」が終了でございます。

途中、更新できずに休載していた手前、この話でムリヤリ完結させようかと思ったのですが……中途半端に完結させて悔いを残したくないという気持ちが強く、当初の予定通り最後まで書ききろうと決心いたしました。

次回・妖乱舞「交差」です。逆異世界パラレルで、作中でも誰かさんたちが会話しておりますが登場するモンスターはテオです。

中也・夏葉・レイが逆異世界チームで（笑）、光宮・シヴァ・ルナがテオの討伐に出向きます。

しかしながら……光宮が討伐チームにいる時点でマトモに狩りなんかするわきゃあないでございます。彼女らしい討伐をご期待いただければ幸いです。

それでは、次回の更新は１１月１０日を予定しております。

ここまでお付き合いくださいまして誠にありがとうございました。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

交差1（逆異世界パラレル）

「え？」

ふと気が付くと、目の前に「電車」のドアがあった。思わず周囲を見渡せば、背広姿のサラリーマンや制服姿の学生たちの姿がそこかしらに溢れている。聞き慣れた、けれどどこか懐かしい喧騒に満ちたホームに、けたたましくベルが鳴り響き、発車を告げるアナウンスが流れた。

「なんで……」

目の前でドアが閉まる。無意識に後ずさると同時に、電車がゆっくりと走り出して行った。

「中也？」

名前を呼ばれて反射的に振り向けば、そこにはセーラー服を着た夏葉がいる。口の中だけで夏葉、と呟き、視線を周囲に巡らせる。人が少なくなった

ホームに据え付けられたベンチの傍に、呆然とした表情のレイが立っていた。

「まさか……」

戦慄した。ここがどこか考えるまでもない。自分がよく知っている国、生まれ育った場所……自分の故郷だ。

「そんな……」

そこかしらに刻まれた文字はどこからどう見ても日本語にしか見えない。

駅の名前は自分が住んでいた家がある町と同じ。思い立って自分の服装を見れば、かつて志望校として掲げていた高校のブレザーを着ている。手に持っているのはやはりその高校の指定カバンで、名前の記入欄には「友田中也」とはっきり記されていた。

「中也、あんた……もしかして、ここがどこか分かる？」

幾分、低い声でブレザー姿のレイが聞いて来た。どこか呆然とし

た頭で頷
く。

「ここは、日本……日本だよ」

ホームの屋根の向こうに、僅かながら赤みを帯びた小さな空が広がってい
た。こんな小さな空を見たのは、随分と久しぶりな気がする。自分が暮らし
ていた世界の空は、いつだって広かった。

「ニホン？　あんたが言ってた異世界のこと？」

「そう……だよ」

膝から力が抜ける。つい額を押さえつつその場にしゃがみ込んだ。自分に
何が起きたのか分かるだけに、眩暈がするようだった。

「中也？　大丈夫？」

「おい、しっかりしろよ」

心配したらしいレイと夏葉が自分の傍に膝を折る。

「大丈夫。ちょっと……」

ちょっと頭が痛くなっただけだ、と言おうとして言葉にならなかった。目の前に膝を折った夏葉がいる。そのスカートの狭間から真っ白な下着がチラリと見えた。その瞬間、自分が異世界から帰って来たという重要な問題がどうでもよくなった。

「……」

慌てて目を逸らしたのだが、たった今見たものが頭に焼きついて離れない。

気のせいだろうか。夏葉がはいていた下着は随分と薄い生地だったような。

ふと思い当る。おそらくアレだ。いわゆるシースルーというヤツだ。肌の色が透けるえっちな下着だ。何度か雑誌で見たことがある。そうか、夏葉の下着は真っ白なシースルーか……と思ったところで我に返った。

「な、なんで俺はまたこっちに帰って来たんだ!?」

しゃがみ込んだと思ったら飛び上がるようにして立ち上がった中也に、レイと夏葉が驚いた顔をする。

「他のヤツらはどうしたんだ!?　ルナは!?　シヴァは!?　光は!?」

レイと夏葉に言っても答えなど返ってくるはずはない。分かってはいる。

しかしながら先ほど見えてしまった夏葉の下着の映像が脳内を反復横飛びしていて収拾がつかないのだから仕方がない。

「マズイだろ！　あいつらもこっちに来てるとしたら、こっちのことなんか全く分かんないのに！」

「……探す？」

立ち上がった夏葉が静かに言って来て、中也は無意識にコクコクと何度も頷いていた。

「なあ、なっちゃん」

「なに？」

思考が現実と下着を行ったり来たりしている中也を余所に、レイが夏葉に

何でもない調子で話しかける。

「さっきから思ってたんだけどさ、あんた、胸があるんじゃない？」

「え？」

心臓が止まるかと思った。いや、むしろ逆だ。心臓がこれ以上ないほど脈

打っている。どんな有名なドラマーが刻む１６ビートも、今の自分の心臓に

は適うまい。そう思えるには充分なほど、激しく心臓が高鳴った。

「ホントだ。胸がある」

「でっしょ？　見せて見せて。うわ、マジ！？　すっごい形がいいじゃん！

しかもピンクだし！　Ｃカップくらい？」

やめてくれ、と理性が叫ぶ。自分にも見せてくれ、と下半身が叫ぶ。言葉

通り、体が真っ二つに引き裂かれるような苦悶の瞬間だった。

「こっちの世界じゃ、なっちゃんも女なんだね」

「……なんか足元がスースーする」

「なっちゃん、スカート普段はいてないからね。それにしても変わった服だ

な、これ。あたしのは分かるけど、なっちゃんの服、それ、どうやって着た

り脱いだりするんだよ」

「さあ」

中也の葛藤など素知らぬ風で、レイと夏葉がそんな会話を始めていた。彼

女たちは、突然見知らぬ世界に連れて来られて不安や恐怖を感じないのだろ

うか。むしろ、元いた世界に帰って来た自分の方が戸惑っている気がする。

（夏葉のセーラー服か……）

気を取り直して、そんなことを考えた。夏服のセーラーは真っ白で、胸元

には真っ赤なリボンが結ばれている。スカートは膝よりも少し上の

あたりで、

茶色いローファーに、黒いハイソックスを履いていた。

（可愛いっ！）

夏葉の横にいるレイは、紺色のチェック柄のスカートをかなり短めにして

いる。白いカッターシャツのボタンは上から三つほど外されており、豊かな

胸元が見えそうで見えないところがもどかしい。夏葉と同じく黒いハイソッ

クスだが、足元はスニーカーだった。

（あれ……。夏葉の制服って有名な私立女子高のじゃなかったっけ）

地元で育ったのだから知っている。彼女が着ている制服には覚えがあった。

ついでに、レイの制服にも何となく覚えがある。彼女には申し訳ないが、俗

に言うところの「不良高校」の制服だ。

（まあ、二人とも似合ってるからいいか）

そしてふと気付く。夏葉の瞳が、黒いということに……。

（そりゃあ、そうか。こっちの世界に生まれつき真っ赤な瞳をしてる人なんていないんだし）

分かってはいるものの、夏葉と言えば真っ先にあの深紅の瞳が思い浮かぶほど印象的だったために、少しばかり残念に思った。一方のレイは金髪に青い瞳をしている。しかしながら目を皿のようにしてじっくり観察すると、髪の生え際が僅かに黒いということが分かる。つまり脱色しているということだ。おそらく、瞳の色はカラー・コンタクト・レンズだろう。

（とりあえず、ジュースでも飲みながらゆっくり考えるか）

余計なことをたくさん考えたおかげで、突然こちらの世界に戻って来たという動揺は治まった。そこで、中也は自分が持っていたカバンを漁る。思っていた通り、カバンの中には財布が入っていた。中身を確認すると千円札が

三枚と小銭が少し入っている。

（高校生なんだから少しくらい現金もってたって不思議じゃないよな）

読みは当たったようだ。財布を取り出し、久々に手にした故郷の現金で懐

かしい自動販売機に歩み寄った。

「なあ、ジュースおごるよ。どれがいい？」

レイと夏葉に向かって言えば、二人が自分と自動販売機を交互に見比べて

不思議そうな顔をする。当然だ。向こうには自動販売機はない。

「これ、金を入れて欲しいヤツの下にあるボタンを押したら、ここから出て

くるんだよ。紅茶はこれとこれ……コーヒーもあるよ。ジュース系は……」

整然と並んだジュースの銘柄を示しながら説明していくと、途中で夏葉が

紅茶を選んだ。中也がボタンを押せば、当然だが下の取り出し口から午後の

紅茶のストレートが出て来る。

「すごい。便利。しかも冷たい」

手渡すと、中也にしてみれば当たり前のことに夏葉が感動していた。

「じゃあ、あたしはこれかな」

レイが選んだのは無難なオレンジ・ジュースだった。レイもまた渡された

缶が冷たいことに驚いていた。ちなみに「なっちゃん」である。

（俺はコーラかな。すっげー久しぶり）

取り出し口からコーラのペットボトルを取り出す。おつりの返却レバーを

回せば、ガシャンと音を立てて小銭が落ちて来た。こういう動作もひどく懐

かしかった。

「座ろうか。向こう、空いてるし」

そして、今度はペット・ボトルの開け方が分からない夏葉に代わってペッ

ト・ボトルのフタを回し、缶のプルタブが開けられないレイに開け

方を教え、
そうこうしているうちに下りの電車がやって来た。興味津津の様子で電車を
見つめる二人に電車について簡単に説明する。レイも夏葉も真剣に聞いてい
た。電車から降りて来たのは４人の学生だったが、誰も自分たちに興味を示
さなかった。
「それはそうと……なんか今の状況が分からないかな」
久々のコーラに幸せ気分を味わいつつ、中也は自分のカバンを引き寄せた。
中身を漁ってみる。教科書と筆記用具、財布。それに携帯電話と思しきもの
が入っていた。
（ケータイ！　これがあればシヴァと連絡取れるかもしれねえ！）
こちらの世界のシヴァがケータイを持っていない確立は低い。本人がケー
タイに出れるかどうかは分からないが、それでもやってみないよりはマシだ。

そう思って中也は自分のケータイを手に取り、固まった。

「何だ、これ」

ボタンがない。しかも電源が切れているらしくディスプレイは真っ暗なま

まだ。何となく裏返してみた。カメラのレンズと思しきものがついている。

それは分かる。だが、電源がどこにあるのか分からない。横向きにしてみる

と、電源と思しきマークが付いたボタンを見つけた。

「お、動いた！　ん？」

何かがおかしい。待ち受け画面はよく分からない幾何学模様で、やや下部

にカギのようなマークが出ている。矢印のようなものが動いているが、だか

らどうしたというのが本音である。

「これ、ケータイか？　何かのゲーム機かな」

ゲーム機だとしたらこの状況では使い物にならない。諦めてその不可思議

な物体をカバンに放り投げた。

「字が全く読めない」

自分と同じように持っていたカバンの中を探っていた夏葉が、英語の教科

書をペラペラと捲りながらポツリと呟く。

「なんかワケの分かんねえモンがたくさん入ってる」

指先でコンドームの袋を弄びながらひたすら首を傾げているレイに、中也

は慌ててそれを仕舞うように促した。理由を求められるが、自分の口からは

説明できなかった。

「これ、イエローカード（身分証明書）みたいなものかな」

夏葉がカバンの中から取り出したのは生徒手帳だった。

「ちょっと見せてくれ」

「いいよ」

受け取って、本人の確認を取ってから中身を見る。予想通りの有名私立校

の名前と高章が刻まれた手帳を開く。１ページ目に、名前と顔写真があった。

写真の顔は夏葉で間違いない。

「宮村……夏葉」

こちらの世界での夏葉の名前が印字されている。その下に学年とクラス、

そして出席番号が書かれていた。住所欄はあったが、白紙だった。

「レイは？　何か名前が書いてあるモンないか？」

生徒手帳を夏葉に返し、レイと一緒にカバンを漁る。教科書は入っていな

い。彼女のカバンには、化粧品が入っていると思われる大きなポーチと、そ

してケータイなのかゲーム機なのか判別がつかない物体、そしてなぜか着替

えが数枚入っていた。

「名前も住所も分からないってのは不便だな。今日の夜、どうする？」

住所が分かれば、どうにかして送って行くことができるかもしれ

ない。だ
がそれが分からないのであれば、どうしようもない。
「別に、あたしは野宿でもいいよ。慣れてるしね」
「……危ねえよ」
言ってから、どっちが危険だろうか、と思ったりした。なんだかんだ言っ
て自分が住んでいた町は田舎なので、治安は悪くない。不良グループと呼ば
れる連中もいるにはいたが、それでも真夜中に原付で暴走して近所の人に通
報され、警察に説教されるのが関の山である。それに、モンスターもいない。
だが、向こうは……。
「まあ、ともかく。どうにかして名前と住所だけでも調べようぜ。同じ学校
の制服を着たヤツに聞けば分かるかもしれないし。どうにもならなかったら、
俺の家に泊まってくれ。父ちゃんと母ちゃんも、事情を話したら嫌とは言わ

ないと思うからさ」

言いながら、すでに頭の中で親への言い訳を考えていた。異世界から飛ば

されてきた、などと言うわけにはいかない。それに、家には兄と姉もいるは

ずだ。兄はいいのだ、ゲーム猿だから。中也が誰を連れて来ようが興味など

持つまい。しかし姉は問題だ。ブサイクなくせに人一倍、恋愛関係の話に反

応するあの姉が、自分が女の子を二人も家に連れて来たら何と言うだろうか。

考えただけでも恐ろしい。

「あ！　中也、またデンシャが来たぜ！」

ホームに鳴り響くけたたましい騒音と同時に、電車がホームに滑り込んで

くる。レイはなぜか電車を見て嬉しそうだった。そして、中也たちが座った

ベンチのほぼ正面でドアが開く。数人の学生がホームに降り立ち、その中に

見知った顔がいた。

「シヴァ！！」

三人同時に名を呼ぶと、物凄く胡散臭そうな表情でシヴァが手にしていた

ケータイだかゲーム機だかから顔を上げた。彼は制服ではなくパーカーにジ

ーンズという姿をしていて、やはり髪の色は灰色に近い金髪だった。探して

いたシヴァが自分から出て来た。よかった、という気持ちが先立って、中也

は彼が普通に電車から降りて来たという事実に思い至らなかった。

「中也じゃねえか。久しぶりだ～な。何か用か？」

「え？」

何となく雰囲気が違う。どこがどう、とははっきり分からないのだが、そ

れでも自分が知っているシヴァとはどことなく違って見えた。だが、そんな

ことより今は現状の把握と情報交換が優先だ。

「シヴァ、お前、大丈夫なのか？」

「はあ？　いきなり何言って～んだ？」

「いや、こっちに来たんだろ？　よく電車に……あ、まさかお前……」

ひとりごとのように呟く中也にシヴァが何とも言えない顔をする。

「お前、また記憶喪失になったの～か？」

「……こっちでも記憶喪失扱いされてんのかよ」

ほんの少しだけ沈黙が落ちた。呆れたように溜め息をついたシヴァの視線

が中也の後ろにいるレイと夏葉に注がれる。

「知ってるか？」

問いかけると、シヴァの視線が一瞬だけ中也に戻るが、すぐにまた後ろの

二人に注がれてしまう。

「ひとりは分かる～ぞ。本庄レイだ～ろ？　もう一人は知らねえ～な。あん

た、名前は？」

「……夏葉」

「なっちゃんね。ふ～ん……」

シヴァは興味深そうに夏葉を見ていた。そう言えば、初めて樹海で自分たちが夏葉と出会った時も彼は似たような反応をしていたような気がする。どこの世界でもシヴァはシヴァだ。美人や可愛い子にはすぐ興味を示す。きっとそうだ。そうでないはずはない……。

「なあ、シヴァ。手伝ってくれよ」

「はあ？　何を」

さっそく要件を切り出すと、何とも嫌そうな顔をされてしまった。中也を寄せ付けないその態度に何となく気遅れするものを感じながらも、シヴァなのだから大丈夫と信じて言葉を続ける。

「いや……シヴァがどこまで知ってるか分からないけど、俺はともかく……

その……レイと夏葉はこっちのこと全く分からないんだ。だから、住所とか
も調べようがなくて、家にも帰れなくて……」
口ごもりながら説明すると、シヴァは少しばかり考えるように自分たちを
見つめていた。
「分かった～よ」
ややあって、降参とばかりに彼は両手を広げてみせる。
「とりあえず、今日はいろいろ用事あるから住所まで調べてやれねえ～ぞ。
泊まりでいいってんなら、俺ん家に来い～よ。誰もいねえから遠慮いらねえ
～ぞ」
ほっとしたところで、シヴァがニヤリと笑った。
「ただし、女の子だけ～な。中也、お前は帰れ」
「……」
激しく嫌な予感がした。そう言えば、こちらの世界のシヴァは夏

葉に婚

約者がいるということを知らないのだ……。

交差１（逆異世界パラレル）（後書き）

こんばんは、作者です。

共鳴４０話に「国王陛下（御老公様）とは存じ上げず、数々のご無礼を……」というシーンを追加といいますか、加筆修正いたしました（汗）

すみません……。

本日より妖乱舞「交差」スタートということで……これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

交差2

「まぁ～ったく、やってらんないわよねえ」

「違いねえ～な」

窓の外はひたすら雨が降っている。その光景を眺めながら光宮は溜め息

混じりに呟いた。ほとんど朽ちていると言っても過言ではない木のテーブ

ルを挟んだ向かい側には自分と同じような表情をしたシヴァがボケっと座

っている。その顔を見ているだけで、余計に気分が沈む気がした。

「ねえ、あんた何かおもしろいことしなさいよ」

「無茶なこと言うんじゃない～ぞ」

退屈凌ぎに言ってみた言葉は、あっさり否定されてしまった。つまらな

い。ひたすらつまらない。ヒマ過ぎて頭の中にカビが生えそうだ。

「だったら何か喋りなさいよ」

「ネタがないんだ～ぞ」

「作ればいいじゃない」

「どうやって」

「どうにかして」

シヴァが黙る。自分も黙る。雨の音だけが支配する狭い空間に、気まず

くはないが、居心地の悪い沈黙が落ちた。

「はあ……」

溜め息をつく。本日、すでに数えきれないほどの溜め息を落としている

気がした。

「もう三日目ね」

「そうだ～な」

ファーナ王国からアルテリア王国へ向けて船で北上している途中、「少

しばかり」変わった雰囲気のある船長が嵐の気配がすると言い出して、最

寄りの島に一時的に上陸したのが三日前の話である。その日から、

船長の
言葉通り激しい雨が降り続き、未だ降り止まない雨のおかげで光宮たちは
この島に足止めを食らっていた。
「中也たちは？　まだ起きないの？」
「知らねえ～ぞ」
「……腐ってんじゃないでしょうね」
「どうだか～な」
やることがない。することがない。ひたすらヒマなだけの時間を過ごす
こと三日。ついでに、島に上陸した当初はいつも通りだったはずの中也、
夏葉そしてレイがなぜか眠りについたまま起きて来ない。死んだかと思っ
たのだが呼吸はしている。ならば放っておけばいいと結論付けて、そろそ
ろ二日になろうかとしていた。
「ルナが様子を見に行って～んぞ」

「ふ～ん」

特に興味を引かれず、光宮はテーブルの上に置いてある水が入ったグラスを傾けた。彼女たちが泊まっている宿屋は、アルテリアでは考えられないほど簡素な造りをしている。海に近い場所にあるせいか、人が１０人も入れば一杯になってしまいそうなその狭い空間には潮の匂いが満ちていた。

宿は木の板を組み合わせただけの平屋で、奥に客が泊まれる共用の大部屋がひとつと、食堂があるだけの小ぢんまりした建物である。

「いつになったら降り止むのよ」

「なんで俺が知ってると思うんだ～よ」

「知らないわよ」

薄暗い室内には今は火の入っていないカンテラがそこかしらに置いてあ

る。そのほとんどのガラスにヒビが入り、汚れて曇っていた。つい

でに、

宿屋を経営している老夫婦は二人とも愛想も愛嬌もサービスもない。今は

食堂の奥にある厨房で、二人が二人ともヒマそうに煙草をふかしていた。

「早く国に帰りたいわ」

「それは同感だ～な」

煙草をふかしているヒマがあるなら最低限の掃除くらいしろ、と思わな

いわけではなかったが、今はこの降り続く雨のせいでウンザリしているせ

いか、見知らぬ他人に喧嘩を売る気にはなれなかった。それに、ここはこ

の島で唯一の宿屋なのだ。選り好みはできない。

「お風呂に入りたいわ～」

自室にある風呂を思い浮かべつつ、ここ最近は井戸の水で体を拭くだけ

という何とも貧乏くさい風呂事情を思い、より一層重い溜め息を落とした。

「航海中は飲み水を節約すんだから仕方ないんじゃねえのか～な？」

「んなこたぁ、あんたにいちいち言われなくたって分かってるわよ。願望よ、願望。男はいいわよね、少しくらい汚れてたって気にならないんだもの。羨ましいわ。だけど近寄らないで」

「へいへ～い。そう言やぁ船長たちはどこ行った～んだ？」

「なんで私が知ってんのよ」

「そうだ～な～」

突っぱねてみたものの、他に考えることがないのでついつい思考はそちらの方向に進んでしまう。チャック・ストローという変わった名を持つ男が率いるホワイト・パール号は、今は海岸に錨をおろし、荒い波にもまれていた。窓の向こうに広がるその光景は相変わらずで、デッキには雨に濡れながら忙しなく立ち働く船員たちの姿が見えた。こんな悪天候の

中、ご
苦労なことだと思いつつ、間違っても手伝おうという気にはならないから
不思議である。
「船のクルーは大変だわ」
何の気もなくそう呟いた時、客室へ続く廊下の向こうからルナが姿を現
した。
「中也たちはどうだ～？」
「変わらないよ。死んだように寝てる」
シヴァの問いかけに軽く答えつつ、ルナは光宮の隣に腰を降ろした。自
分と同じく井戸の水で流しているだけのはずなのに、なぜかルナの銀髪は
今日もサラサラしていて、何とも言えないいい匂いがする。隣に座るなり、
下着のような姿をした彼女の豊かな胸が目に入り、羨ましい気持ちが膨ら

んだ。

「静かだね。ホワイト・パールのクルーは？」

「知らないわ。下っ端はデッキでウロウロしてるけど」

「そう」

食堂には自分たち以外、誰の姿もない。それこそ、この島に上陸したそ

の晩は鼓膜が破裂するかのような大騒ぎをしていただけに、言われてみれ

ばこの静けさが身に沁みるようだった。

「退屈だわ。早く雨が止まないかしら」

「そうだね。でも、これぱかりは言っても仕方ないんじゃないの？」

「そうだけど」

それでもつい口に出してしまうものなのだ、と思った時のこと。

食堂の

入口のドアが開き、室内に流れ込んでくる雨の音が激しくなる。その向こ

うには、ズブ濡れになったチャック・ストロー船長が斜めになって立って

いた。

「よお、キャプテン。どこ行ってた～んだ？」

昼間なのにどんよりと薄暗い空の下、船長は全身から水を滴らせている

ことにも構わず食堂の中へずかずかと入って来る。まるでダンスのステッ

プを踏むような足取りで光宮たちの方へ近づいて来ると、無意味とも思え

る至近距離でたくさんの指輪を嵌めた人指し指を眼前に突き付けてきた。

「お客さんだ」

日に焼けた顔がニヤリと笑う。なんだかゾッとした。日焼けとタールで

浅黒くなった顔に、縮れた髪。頭の上にはキャプテンらしい三角形の帽子

が乗っかっているが、その帽子もまた潮風に晒されて随分と痛んでいる。

ご丁寧に三つ編みした顎ヒゲに、汚れたコート……。第一印象からして無

気味な男だった。

「客？　誰よ」

反射的に聞き返すと、船長は芝居がかった大袈裟な動作で上体を起こし、

優雅な動作で両腕を広げる。そして自分の背後を示した。

「このラティオ村の、村長だ」

「村長？」

つい気になって船長が示す方を見ると、入口のドアの向こうに未だ雨に

打たれながらひとりの老人が立っていた。

「誰よ、あの人」

「だから村長さんだって～よ」

「それは聞いたわよ」

自分たちと目が合うと、村長と呼ばれたその老人はうやうやしく一礼し

ながら食堂の中へ入って来た。船長が広げた両腕をクルクルと回し、老人

を促す。村長という言葉に珍しく気を利かせたのか、宿屋を営む主人がイ
スをひとつ用意して、四人がけのテーブルの一方に置いた。
「あの……あなた方がアルテリアのハンターとお伺いしたもので……」
チャック・ストロー船長は、当然のようにシヴァの隣に腰を下ろす。彼
が隣に座った瞬間、シヴァが僅かに嫌そうな顔をした。
「ハンターだったらどうだって言うの？」
「いえ……」
何だかぱっとしない人だな、と思った。こんなにオドオドした調子で本
当に村長という役職が務まるのだろうか。光宮は初対面の老人に対してそ
んな印象を持った。
「いえ、その……実は、ハンターの皆さまに……ぜひとも討伐していただ
きたいモンスターが……」

宿屋の店主がビールのビンを3つと、水が入ったグラスを3つ置いて去っていく。せめてジュースくらい用意しろ、と心の中で思ったが口には出さない。

「モンスター？　どういうことだ～よ」

なぜかシヴァが村長に話の先を促す。ヤル気がなさそうにだれている様子は相変わらずだが、何となく光宮はシヴァが楽しいことを見つけた子供のような雰囲気を滲ませているような気がした。

「ええ……その……長い話になりますが……そもそも……」

「長い話は要約して喋ってちょうだい」

村長の言葉を途中で切ってはっきりと言うと、老人は困ったように俯いてしまった。枯れ枝のような見た目も相まって、そのあまりの頼りなさに、

光宮は久々に自分が悪いことを言ったかもしれないという気分を味

わった。

「テオ・テスカトルだ」

ひたすら俯いて言葉を探している村長に代わり、ビールを一気に飲み干

したチャック・ストロー船長がいきなりそんな固有名詞を口にした。

「この村……というか、この島には大昔から一頭のテオが住み着いている

んだ。それを討伐して欲しい、という話さ」

「そんな危険なところに住む方が悪いじゃない。仕方ないわよ」

思ったことを口にすると、チャック・ストロー船長が人指し指を立てた

まま一瞬、動きを停止した。

「それもそうだ」

あっさり納得した。

「それが……そうもいかない事情がありまして……はい……」

自分と船長の間で話が纏まりかけていた時、消え入るような声で村長が

口を挟んだ。

「これはこのラティオ村に古くから伝わる伝説なのですが……大昔、島の
住民の先祖にあたる者たちが大陸の戦火から逃れるために大型の船に乗っ
て内海を横断していたそうなのです」

「大陸って？　アルテリア側？　ファーナ側？」

「確かアルテリア側だったと……。それで、ですね。食料も水も残り少な
い上に流行り病が一族の者たちを襲い、絶望のるつぼに追い込まれていた
のだそうです。そこへ追い打ちをかけるように巨大な嵐が襲い、先祖は一
族全滅の危機に見舞われました。ところがその時、どこからともなく一頭
のテオ・テスカトルが舞い降り、波にもまれる船もろとも一族の者たちを
咥えあげ、この島へと連れて来たのだそうです」

「ウソくさ」

光宮、シヴァ、ルナ、そして船長が異口同音に呟いた。

「その後、この島に住み着いた先祖たちはそのテオ・テスカトルを神とし
て崇め、奉ったのですが……。ただ、一族を助けてやった見返りに、毎年
年若い娘を生贄として捧げろ、と。さもなくば皆殺しにする、と」

自分たちの反応などまるで気にする様子もなく、村長は言葉を続ける。

「この村の者たちはその言葉を忠実に守り、毎年必ず儀式を執り行い若い
娘を生贄として捧げてきたのでございますが……」

沈痛な面持ちで、村長はビールを煽った。なかなかいい飲みっぷりであ
る。

「最近はその……少子化と申しますか……早い話、この村にはもう若い娘
がおらんのです！」

「そりゃあ重大だ」

チャック・ストロー船長が激しく相槌を打った。

「それで、島の住民は全滅の危機に瀕しておるのです。どうか助けていた
だけないでしょうか」

しばしの沈黙が落ちる。

「それは……どっちの意味で助ければいいのかしら」

どちらにしろ断る以外に選択肢はないのだが、とりあえず聞いてみた。

村長がしばらく考える。

「……テオを討伐してくださいませ。お願いします」

「イヤよ」

「それならば、どうかこの村に残って村の若者と子供を作ってください」

「それこそ嫌に決まってるでしょ！」

そこをどうか、と食い下がる村長だったが、光宮ははっきりと断る。互
いに一歩も譲らず、同じ言葉を何度も繰り返した。

「あれ～？　どこ行く～んだ？　キャプテン」

シヴァの言葉にふと視線を村長から逸らすと、出口に向かってコソコソ

と歩いて行くチャック・ストローの後ろ姿が目に映った。シヴァに声をか

けられ、彼は両手の人差し指を立てたまま2秒ほど動きを停止させる。そ

して、まさしく今思い立ったとでも言わんばかりに人指し指をクルリと回

すと、嬉々とした足取りで出口の方へと歩み寄って行く。

「なんなの？」

奇怪な行動に呆気にとられていると、チャック・ストローが大きな木箱

を抱えて戻って来た。

「では諸君、健闘を祈る！」

大きな音を立てて木箱を床に降ろすと、船長はそのまま外に向かって一

目散に駆け出して行った。

「あー！！　逃げたー！！　早く！！　追いかけるわよ！！」

光宮に促され、唖然としていたシヴァとルナが立ち上がる。そしてなお

も子供を作ってくれと嘆願する村長をその場に残し、三人は土砂降りの雨

の中へと駆け出して行った。

「速え～な、キャプテン……」

店を出てすぐに痛いほどの雨が顔を打つ。手前にある斜面を駆け下り、

海岸へ向かって走る船長を追いかけた。しかしながら、シヴァがポツリと

呟いた通り、船長の逃げ足は尋常ではない。広げた両手をクルクル振り回

しながら砂地を駆け抜けるそのスピードは、ドスランポスも顔負けである。

「……出港してる」

雨の向こうに、帆を広げたホワイト・パール号が見える。錨を上げ、悪

天候の中、沖合へ向けて漕ぎだそうとしているホワイト・パール号のデッ
キから、駆け寄ってくる船長の姿を認めたらしいクルーの誰かが縄梯子を
降ろす。とても海の中を走っているとは思えない速さで、チャック・スト
ロー船長が降ろされた縄梯子に駆け寄る。

「アディオース、マイ・フレンズ！！」

がっしりと縄梯子を掴んだ船長が、光宮たちに向かって自信満々の笑顔
を向けて来た。

「諸君らはこの日を永遠に忘れることなく胸に刻みつけることとなるだろ
う！　勇気と機知に富んだ孤高の海賊に騙され、裏切られた日！　その海
賊の名を……！」

背後からの荒波が船長を飲み込む。波を被った船長がポツリと何か呟い
たような気がしたが、雨の音でよく聞き取れなかった。

「あ、あのヤロォお～……！！」

握りしめた拳がふるふると震える。その肩を、ルナがポンと軽く叩いた。

「とりあえず、戻ろうよ」

視界の先に悠々と波を切るホワイト・パール号が見える。憎らしさと馬

鹿らしさと悔しさが入り混じり、頭の中が沸騰しそうだった。交通手段が

無くなった。これでもう、自分たちに残された道はテオ・テスカトルを討

伐する以外なくなった。ちなみに、村の誰かと結婚するという選択肢は始

めからない。

「やってくれた～な、キャプテン」

どこか楽しそうにシヴァが呟いた。なぜシヴァもルナもこんな扱いを受

けて平然としていられるのだろう。信じられなかった。

「あんたたちねえ！　なんでそんなにボケっとしてられんのよ！

もうち

ょっと怒るとか殺すとか、何かあるでしょ！！」

「まあまあ」

ルナに宥められた。そして、シヴァに促されるようにして宿屋へ向かう。

「騙された方がバカなんだから仕方ないよ。とりあえず、宿に戻ってキャ

プテンが置いていった荷物を調べようよ」

「そうだ～な。下手すれば宿屋のオヤジに盗まれるかもしれねえ～ぞ。早

目に戻った方が無難だ～な」

「……」

二人とも最もなことを口にする。握りしめた拳を、黙って降ろした。

「ここはどこだ！？」

とぼとぼとした足取りで宿屋に戻り、その扉を開けた瞬間、中也の切羽

詰まった声が鼓膜を刺激した。

「なんでこんなところにいるんだよ、俺は!?　そんなバカなことあって
たまるかよ!　明日は課外があるってのに!　高校、レベル高いんだから
休めないんだよ!」

「ジョーダンじゃねえよ!!　あたしはこれからバイトなんだよ!　こん
なところでモタモタしてるヒマなんかないっての!　バイト休んだらウル
セーのがいるんだ!　ワケの分かんねえこと言ってねえで、早くあたしを
送っていけよ!!」

どうやら中也とレイが目を覚ましたらしい。二人そろって村長と店主に
何かよく分からない言いがかりをつけていた。シヴァの姿を認めた中也が、
ルナの姿を認めたレイが揃ってこちらに向かって近寄って来る。

「シヴァ!　なんでお前までこんなところに……」

「ルナ！　何がどうなってんだよ!?　あたしはこれから……！」

何か言いかけた二人に向かって、光宮は黙れという意味で両手を前に突

き出した。素直な中也は大人しく口を閉じる。レイの方も、その場の雰囲

気に流されて黙った。そのまま、前進する。条件反射で中也とレイが後ろ

に下がる。互いに何も言わない。ただひたすら中也とレイが後進し、光宮

が前進する。光宮の後ろを、シヴァとルナそして店主が付いて来た。

「お、おい、何の真似だよ、あんた……」

中也が何か言った。その背後には客室のドアが開かれたまま彼らを待ち

受けている。何も言わず、中也とレイを客室に押し込む。そして勢いよく

ドアを閉め、外側から南京錠を厳重にかけた。中から怒鳴るような声がし

てくるが、聞かなかったことにする。

「ねえ、あんた」

店主に向き直ると、なぜか彼が姿勢を正す。

「こいつらの面倒を見てやって。生かさず、殺さず。……いい？」

「かしこまりました」

話は纏まった。

交差2（後書き）

番外編～まどろみの秘宝～

「さあ、こっちよ。遠慮しないで、入って入って」

つい先日のことだった。遊びに来た、と言って夏葉が暮らす前代・将兄のひたすら可愛らしい家に遊びに来た薄い色の金髪に翡翠色の瞳をした少女は、このアルテリア王国の第二王女、翡翠院・光宮その人だった。

「まったく、くだらないと思わない？　夜這い対策だか何だか知らないけど、王宮から自分の部屋に帰るのに、いちいち船に乗らないといけないのよ？　あれだけ大きな池を完備して手入れして維持と通行のための人手を雇って、税金のムダ以外の何物でもないわよ！　これで財政難とかよく言えたモンだわ！」

竜雪に紹介され、その妻であるリゼを交えて談笑しているうちに、気が付けば夏葉と光宮は打ち解けていた。そして、今度は光宮の部屋

に遊びに来いという話になったのである。

「テキトーに座って。今、お茶を淹れるから」

難民としてこの国にやってきた自分には、きっと死ぬまで縁がないと思っていた王宮にいる。それも王女の自室に。何となく気遅れするものを感じながら、夏葉は部屋の中を見渡した。

（本がいっぱい……）

広い部屋には、難しそうなタイトルを記された本が溢れている。その他にはソファとテーブルがあるだけの、簡素な部屋だった。何となく、部屋の壁に備え付けられた本棚の方へ近寄ってみる。

（なんだ、これ……）

タイトルが記されていない赤い装飾の本が一冊あった。気になって手を触れてみると、いきなり本棚全体が回転し始める。

「！？」

回転式の本棚の向こうにはもうひとつ部屋があった。一軒の家ほどもあるその部屋にも、やはり本が溢れている。しかし、その中身が問

題だった。

（これって……）

タイトルを見ただけでも分かる。この部屋に陳列されている本は、すべてがいかがわしい内容の本……俗に言うところの“エロ本”だった。

「あら、すごいじゃない。よく分かったわね、その隠し部屋」

背後を振り向くと、ティーカップをトレイに乗せた光宮が何でもない顔をして立っていた。

「ど、どうして、こんなに……」

「気にしないで。どうせ税金だから」

天井付近の窓から差し込む午後の日差しが部屋を満たしている。さながら水の中にでもいるような朧な空間の中、いかがわしい内容の本たちは、ゆっくりとまどろんでいた……。

「自慰（G）級でしょ？」

交差3

懐かしい匂いがした。

（あのお婆ちゃん、まだ頑張ってんのか）

駅前に広がる商店街の一角で、白いかっぽう着を着た老年の女性が今日も黙々とコロッケを揚げている。幼いころ、兄弟3人揃って母親の買い物に付いて行き、その度にあそこの店でコロッケを買って貰っていた気がする。

（久々に食べてみようかな）

明日にでも一人で来てみよう、と思った時、今にも爆発しそうな音をたてながらバスが一台ロータリーの中に進んで行った。排気ガスの臭いが鼻をつく。久しぶりに嗅いだ人工的な悪臭だった。

（蝉が鳴いてる……）

蝉の声のない夏に慣れている自分にとって、夏の終わりを告げるツクツクホウシの鳴き声を聞くと、故郷に帰って来たのだという思いが

今更のように込み上げてきた。

（飛行機だ）

茜色に染まる澄んだ空の中、中也の遥か頭上を轟音を上げながら飛び去って行く飛行機が目に映る。隣でレイと夏葉がモンスターでも見るような目で飛行機を眺めていた。

「あれ、なに？」

夏葉が聞いて来たので、飛行機について簡単に説明する。説明が進むにつれて、レイと夏葉の顔色が変わって行った。

「なんで鉄が空を飛ぶんだよ」

「……そのセリフ、田舎の爺ちゃん婆ちゃんがよく言うよ、レイ」

軽く笑って先頭を行くシヴァの背中に視線を向ける。具合でも悪いのかと疑いたくなるほどに口数が少ない彼は、携帯電話に似たゲーム機を操作しながらも、不思議と真っ直ぐに進んでいた。そう言えば、アスファルトの上を歩くのも3年ぶりだった。

「え？　ここに住んでるのか？」

「そうだ～ぞ」

てっきり自分が知っているシヴァの家に行くのかと思っていた中也だったが、予想に反して彼が自分たちを案内したのは駅前に新しく造られたと思われる高層マンションだった。

「引っ越したのか？」

「う～ん。何つ～かなあ～」

オートロックを通り抜けると、磨きこまれたエントランスが目に映る。左手には郵便受けとみられる箱が並んでいるが、そのどれにも曇りひとつ見当たらなかった。郵便には見向きもせず、シヴァは真っ直ぐ正面にふたつ並んでいるエレベーターへと向かって行った。

「なあ中也、何でここはこんなに涼しいんだ？　洞窟の中でもないのにさあ」

「エアコンが利いてるからだよ……。あ、エアコンって、冷たい風を出して気温を下げてくれる便利なアイテムのこと」

「へえ～」

マンションの中に入るなりいきなり涼しい風が肌を撫でていく。エアコンとは本当に素晴らしい。まさしく文明の利器である。ここ最近はエアコンのない生活にすっかり慣れてしまっていたが、こうして夏なのに涼しい場所にいると、そのありがたさが身に沁みた。

「なっちゃん、ここ、クシャル街の建物と似てると思わねえ？」

「うん」

レイと夏葉は興味深そうにあちこちを見渡しながら自分たちの後ろを付いてきている。自分も、ある日突然あちらの世界で目が覚めた時は、目に映るものすべてが珍しくて、今となっては当たり前すぎてどうでもいいものにまで興味を示していたような記憶がある。例えば、文字を書く時のインクと羽根ペンなどだ。おそらく後ろの二人も同じような気持ちに違いない。

「フェンリ……じゃなくって、幸也さんは？　元気にしてるか？」

「まあ、そこそこか～な」

「おじさんとおばさんは？」

「普通だ～ぞ」

自分の問いかけに適当な返事をしながら、シヴァがエレベーターに乗り込む。最上階のボタンを押せば、当然だがドアが閉まって上昇を始める。その瞬間、レイと夏葉が目に見えてビクっとした。中也にしてみても久しぶりの感覚だった。ガラス張りのエレベーターの向こうには、自分がかつて住んでいた町並みが広がっている。この町で一番高い建物は中学校の三階建ての校舎だと思っていたのだが、どうやらそうではなくなってしまったらしい。

「すげー」

「うん」

ガラスに張り付いたレイと夏葉が、次第に低くなっていく景色を見ながら感動したように呟いた。

「お前は泊めてやんね～ぞ？」

「分かってるって」

やがて最上階に辿り着き、ドアが開くと同時にシヴァが再び同じこ

とを言って来た。彼は最初、中也をここに連れてくることさえ乗り気でない様子だったのだが、向こうのことを知っている人間がいた方が都合がいいからという理由で辛抱強く説得したところ、しぶしぶながら納得してくれた。

「なんか、高そうなマンションだな、ここ」

「さ～てな」

落ち着いた色調で纏められた廊下を進み、シヴァが立ち止まったドアを見ながらそんなことを呟く。

「日本では、家の中に入る時は靴を脱ぐのが普通だから」

カギを開けてもらって中に入りながら、物珍しそうに付いて来る二人に向かってそう言うと、思った通り二人とも驚いたような顔をした。

その様子を見て、シヴァが僅かに笑う。

「何だっけな。アルテミスじゃねえ、アマテラスじゃねえ……アル、ナントカ言う国？　お前らの知ってる国じゃあ土足が普通なんだっけ

～な？」

「アルテリア。まあ、基本はアメリカみたいに土足だよ」

「ふ～ん」

誰のだか分からない靴が脱ぎ散らかされた広い玄関を過ぎれば、そこにモデル・ルームを絵に描いたようなリビングが現れる。ぱっと見たところ、自分が記憶している自宅のリビングよりも広い。確か母親が自宅のリビングは畳１４枚と言っていたから、ここはそれよりも広いことになる。

「おかえり……あれ？　友達？　中也？」

リビングの中央に設置してあるアイボリー色のソファにはフェンリルもとい幸也の姿があった。

「幸也さん……」

こちらの世界の彼を見るのは随分と久しぶりだ。茶色く染めた髪にＴシャツ、ジーンズ姿の彼を見ると、懐かしさが込み上げる。しかしなが

ら、事情を知らない彼は自分たちの姿を見るなり不思議そうな顔をした。

（シヴァが俺を連れてくるのがそんなに珍しいのかよ）

考えてみれば、こちらの世界に来て再会したシヴァはどこかよそよそしい。もしかしたら、自分とシヴァ、そして幸也は最近ではあまり付き合いがないのかもしれない。そう考えると、なんとなく寂しいものがあった。

「……尻尾がない」

幸也に向かってレイが開口一番にそう言った。

「シッポ？」

本人が聞き返す。

「あたしが知ってるあんたは髪が長くて、後ろで束ねてるから尻尾みたいだって思ってたんだよ。ついでに、髪の色は真っ黒だった」

「え？　知り合い……だっけ？　人違いじゃない？　俺、髪を長く

した

ことないから」

「こいつら前の中也と同じだ～よ。記憶喪失ってヤツ？　異世界から来

たんだ～と」

記憶喪失じゃない、と言いかけたが今更なので黙っておいた。シヴァ

の簡単な説明を聞いて、幸也が微妙な顔をする。そんな彼に構うことな

く、シヴァは言葉を続けた。

「で、自分の家が分かんねえって言うから～よ、一晩泊めてやることに

した～ぜ」

「へえ、そう」

「まあ、女の子だけ～な。気になるなら出てろ～よ」

「いや、別にいいけど」

シヴァに促されて、突っ立ったままだった中也たちはソファに腰掛け

た。幸也と向かい合わせになって、なぜだか分からないが気まずい沈黙
が落ちる。
「幸也さん、バイクとか乗るんか？」
黙っているのが気まずく感じて、つい彼の傍に置いてあった雑誌の内
容を口にしてみる。
「ああ、これ？　幸ちゃん……幸太（こうた）のだよ」
幸太、と言われて一瞬誰のことか分からなかった。少し考えて、そう
言えばこちらの世界のシヴァの名前は「柴崎幸太」だったと思い出した。
「シヴァが？　あいつ、バイクに興味なんかあったっけ？」
「知り合いの影響じゃないかな。最近、幸太は免許取ったんだ」
「マジで！？」
本気で驚いた。確かに法律上１６歳以上であれば中型二輪の免許は取

れるが、まさかシヴァがバイクの免許を取っているとは思ってもみなか

った。言われてみればシヴァの誕生日は確か６月だったはず。今は８月

なので、免許を取っていたとしてもかしな話ではない。

「俺の愛車はヤマハのドラッグ・スターだ～ぞ」

対面式になっているキッチンの方から様々な銘柄のペット・ボトルを

持って来たシヴァが少しばかり自慢げに言った。相変わらず、可愛い女

の子にはサービス精神が旺盛だ。

「いずれはナイトロッドだ～な」

アメリカのハーレーダビットソン社が販売している３００万コースの

バイクの名前をサラリと口にしながら、シヴァは幸也の隣にドサッと座

った。そして未成年にも拘わらず当たり前のような顔をして煙草に火を

つける。ジッポのライターも久々に見た。向こうでのシヴァも喫煙

して
いるが、マッチか火打石で点火している。シヴァが煙草に火をつける度
に面倒な手順を踏んでいるのを知っているだけに“カチ。シュ。ボッ”
のスリー・ステップで煙草に火をつけている姿が妙に笑えた。
「ドラッグ・スターって言えばアメリカンだよな。やっぱハーレーみた
いに改造とかしてんのか？」
「当たり前だ～ろ？　見た目はほとんどハーレーだ～ぞ。ただ、エンジ
ンがなんか小せえなあ～ってくらいで」
「なんだよ、それ」
想像がつかない。自分も向こうでいろいろと頑張って来たが、こちら
の世界でもシヴァはシヴァなりにいろいろしているんだな、と妙に感慨
深い気持ちになった。

「幸也さんは？　何してんの？」

「俺？　俺は大学生だよ」

「あ、そーか」

自分の記憶では幸也は高校生のイメージが強かったが、あれから三年

も経っているのだ。彼が大学に進学していても不思議はない。

「お前らは何してんだ～よ。普通に学生やってんの～か？」

大学はどこなのかと聞く前に、シヴァから先にそう聞かれてしまった。

レイと夏葉と顔を見合わせる。何をどこから説明すればいいのか普通に

悩んだ。

「いや、俺らはちょっと複雑で……」

「何だ～よ、それ」

シヴァが苦笑しながら言った時、ふいにどこからともなく携帯の着信

音が流れてきた。咥え煙草のまま、少しばかり鬱陶しそうな顔をしてシ

ヴァがポケットから携帯電話に似たゲーム機を取り出す。そして画面に
触れた。
「何だ～よ」
シヴァが普通に喋り始めた。どうやらあの物体は携帯電話で間違いな
いらしい。煙草を灰皿に押し付けて立ち上がったシヴァがリビングを出
て行く。何となくその後ろ姿を見送った後、中也はふと思い立って自分
のカバンの中から似たような携帯電話を取り出してみた。
「……あいつ、何ひとりで喋ってんだ？」
隣で、レイがおかしなものでも見るような顔をしているが、今はどう
答えていいものか分からなかった。
「なあ、幸也さん。これってケータイ？」
「へ？」

問題の電子機器を差し出しながら聞いてみると、幸也は再び微妙な顔
をした。
「ケータイだよ。スマホ……スマートフォン」
「スマホ？」
初めて聞いた。中也の中の携帯電話と言えば、二つ折り全盛期時代で
時が止まっている。改めて幸也からスマートフォンなるものの使い方を
教わり、その機能に驚愕した。
「時代は進んでんだなあ……」
思わず呟いたところで、シヴァが奥の部屋から顔を出す。
「幸也」
「なに？」
シヴァが幸也を呼び捨てにしているところは初めて聞いた。中也にし
てみれば激しく違和感があったが、幸也もシヴァも特に気にしている様

子はなかった。

「用事できたから出てくる～ぞ」

「ああ、分かった」

「早目に戻ってくるけ～どよ、鬱陶しかったら中也は追い出せ～よ」

自分の方を見ながら、シヴァが笑ってそう言った。どういう意味だと

聞こうとしたが、幸也だけでなくレイも笑っていたので声には出さずに

黙りこむ。

「大丈夫だ～な?」

「へーきだって。行って来いよ」

笑って手を振る幸也に、シヴァが一瞬だけ心配そうな顔を見せた気が

した。しかし、そのままシヴァは背を向けて玄関の方へ立ち去ってしま

う。

「なんか、雰囲気違うね、シヴァのヤツ」

玄関のドアが閉まる音がした後で、レイがそんなことを言い出した。

自分も思っていたことを、どうやらレイも感じていたらしい。

「そう？」

「そうか？」

そしてなぜか、夏葉と幸也が同時に呟く。二人が目を合わせ、気まず

げに視線を逸らした。

「あたしらが知ってるシヴァはもっと緩いヤツだよ。なんか、同じ顔し

てんのに別人みたい」

「幸ちゃんはいつもあんなカンジだけどなあ……」

「あんたは向こうでもこっちでもそんな感じだけどね」

「あ、そう？」

幸也にしてみれば、レイとは今日が初対面のはずだ。自分は知らない

のに、相手は知っているという状況が気まずいのか、幸也は少し困

った

ように笑う。

「異世界って、ホントにあるんだね。中也がいきなりここはどこだって

言い出したって幸太から聞いた時は夢でも見てんのかなって思ったけど」

「ホントにあるんだよ。俺だって自分がこうなるまでは信じられなかっ

た。向こうでも相変わらずだよ、幸也さんは」

「へえ。でも、俺って何してんの？　そっちの世界で」

「あんたはギルド・ナイトよ。それも、へっぽこ」

「へ？」

中也に代わって、レイがはっきりと断言してのけた。それから、聞か

れてもいないのにレイが勝手にアルテリアでの幸也のことを説明し始め

た。時折、頷いたり笑ったりしながら黙って話を聞いていた幸也だった

が、中也には彼が特に興味を持っているようには見えなかった。

（なんか、寂しい、な……）

たった三年。言葉にすれば一瞬で終わってしまうようなそんな時間を

異世界で過ごしていただけで、自分が産まれ、そして生きて来た世界と

の絆が急激に薄まったような気がする。シヴァの素っ気ない態度、幸也

の無関心な態度……。それまで自分の周りに当たり前にあるような気が

していた繋がりというものが、指の間から零れ落ちる水のように消えて

いってしまった気がした……。

交差3（後書き）

番外編　～ある午後の会話～

「それにしてもファーナの夏は暑いな」

ファーナ王国のとある地方、とある町の、とある宿屋、その一階にあ

る食堂にて、ファーナ王国の国王とアルテリア王国の将兄は煙草の煙に

巻かれながら紅茶を飲んでいた。

「ああ、確かにそうですね。北の氷都ともなれば、真夏でも早朝や深夜

には暖炉に火を入れるそうではありませんか。ファーナでは考えられな

いことですよ」

「普段はアルテリアに住んでるんだろ？」

「ええ。前代・将兄、獅子王のご厚意で。まあ、私はもともとアウト・

ドア派ですから。夏は暑く冬は寒いのが普通と言いますかね。あま

り気
にしない主義なんです」

午後の陽光が差し込む古びた食堂には、彼らの他に数人の旅人らしき
姿が見える。格子と板戸で遮られた調理場には料理人が手持無沙汰に佇
んでいる様子が目に映る。長閑な午後のひと時だった。

「おお、美しい女性が」

クリス3世に言われて、無意識に格子窓の向こうに視線を向けた。金
髪と黒髪の女が二人、何やら楽しそうに会話しながら通り過ぎていく。
どちらも平均的と言うべきか。大して興味は惹かれなかった。

「どこがいいんだ？」

つい聞き返してみると、クリス3世は大仰に顔を顰めてみせる。

「分かっておられませんなあ、将兄。若い女性はそれだけで美しいもの
ではありませんか」

「……若ければ何でもいいのか」

「もちろんです」

だったら今度、艶の紫の一人娘を紹介してやろうか、と思ったが口に

は出さなかった。

「ですが、欲を言えばそうですね、普段はあまり素直じゃなくて、冷た

い態度をとったり、可愛くないことを言ったりするのに、ふとした瞬間

に可愛いところを見せてくれる。そんな女性がいいですね。何と言いま

したか。今はやりの……そうツンデレ！　ツンデレがいいですね」

「女は素直な方が可愛くていいだろう。何がいいんだ？」

「いやいや、分かっておられませんね。そ・こ・が可愛いんじゃないで

すか。ツンとデレのギャップにやられるんですよ、男は！」

「いや、普段から素直な方がいいに決まってる」

「いーや、普段はツンツンしている方がいいです。でも、たまに可愛い
ところを見せてくれると最高です」

「いや、それはない。面倒臭い」

「いーや、それはありません。普段から素直だとギャップがないじゃな
いですか」

「いや、そのギャップの意味が分からん。むしろ普段は純情でセッXXの
時にだけ別人のような姿を見せる方がギャップがあっていい」

「いや、そういう話でしたらツンデレの方がよりギャップを感じさせら
れます」

不毛な会話は続く……。

ちなみに、クリス3世が光宮と出会ったのは
この会話の1か月後のことである。

交差4

「何なのよ、コレは」

逃亡したキャプテン・チャック・ストローが残していった木箱を開けて、光宮は戦慄した。

「ドスギアノスにドドブランコにダイミョウザザミにガノトトス。ついでにこれはウカムルパスの鱗か～な。あとはもうガラクタばっかりだ～ぞ」

「あんたにいちいち言われなくても見りゃあ分かるわよ！！」

木箱の中には、それぞえのモンスターの素材で作られたと思しき武器と防具がバラバラに投入されており、どういう嫌がらせか分からないが、北の氷都にあるポッケ村に伝わる伝説のモンスター、ウカムルパスの鱗と思われるカケラが1枚だけ入っていた。

「ウカムルパスってよお、鱗がここにある時点で伝説でも何でもない気がする～な」

「そんなことはどうでもいいのよ！」

相変わらず緊張感とは程遠いシヴァの呑気な意見を聞きながら、光宮はひたすら頭を抱える。他には何かないのかと木箱の中を漁ってみるが、空きビンが数本とよく分からない木の切れ端、ついでに石ころのようなものと虫の死骸が転がっているだけで、目ぼしいものは何もなかった。

「こんな装備で、どうやってテオを討伐しろってんのよ！　ふざけてんじゃないの!?　こんなんじゃみすみす死にに行くようなモンじゃない！！」

「……それ以前に属性が氷と水だから～よ、まともに装備できるかどうかも疑問だ～ぜ」

「それも含めて言ってんのよ！！」

通常、武器と防具は素材となったモンスターが持つ属性を正反対にして装備する。そうしなければ、それを振るおうとする人間は武器に封じられたモンスターの力に耐えきれない。下位クラスであればそうでもないが、知らずに上位クラスやはたまたGクラスの武器

を持とうものなら、持った瞬間に死に至る。だからこそ、武器と防具の属性をそれぞれ反発させ、人間がモンスターの力を使うことを可能にしているのである。しかし、今ここにある武器と防具はすべてその属性が「水と氷」という似たようなものであり、おまけにドスギアノスの腕装備が2つに、ドドブランコの頭装備がひとつ、ガノトトスの胸装備が4つ……などというデタラメとしか思えない顔ぶれでそこに並んでいた。

「テオの討伐が無理でしたら、ぜひともこの村に残ってこの村の若者と子作りを……」

「あんたは引っこんでなさい！！」

むしろ、そちらが本音なのではないかと思わせるような口ぶりでジワジワとにじり寄って来る村長を一喝し、光宮は木箱の傍に屈みこんだ。

「開けろー！　開けてくれー！！　なんでこんなところに閉じ込めるんだよ！！　せめて事情を説明してくれー！！」

「ルナー!!　ルナ、そこにいるんだろ!?　助けてよ!!　何がいったいどうなってんのさ!?」

廊下の向こうから、処刑囚さながらの悲鳴が聞こえてくる。言わずと知れた中也とレイだ。しかし、出て来られても事態がややこしくなるだけなので聞こえないフリを決め込んだ。

「どうにかするしかないわよね」

ここに残って子作りさせられるなど冗談ではない。しかし、どこへ逃げるにしても狭い島。本国へ逃げ帰るにしても船がない。何がなんでも、テオを討伐するしか残された道はないのだ。

「武器は、ドドブランコの太刀にドスギアノスのヘビー・ボウガン。それからガノトトスの弓、か」

幸いなことに、武器は自分たちにとっては慣れ親しんだものだ。問題は、ここに並べられた武器がどれほどの威力を持っているのかということだ。光宮は木箱の中からドスギアノスの太刀を手に取り、村長に手渡した。自分の行動を咎めるような常識的かつ良心的な人

間はいない。シヴァもルナも、気付いているのに何も言わなかった。

「ちょっと。コレ、鞘から出してみて」

「は、はあ……」

防具を付けずに、モンスターの素材で作られた武器を持つと非常に危険だということを、村長は知らない。言われるまま、彼は太刀を手に取った。

「うっ！！　おっ……はうっ！！」

死なない。光宮から言われた通り、太刀を鞘から抜き放った村長は、真っ青な顔をして床に倒れ伏したが、息はしている。ハンターでも無ければ武術の嗜みがあるとも思えない枯れ枝のような老人が防具なしで装備して生きている。ということはつまり、ドスギアノスの素材で作られたこの太刀は下位クラス、もしくは雑魚クラスの武器ということだ。

「ごくろうさま。はい次、これ」

痛い思いも辛い思いもしたくないので、床に落ちている鞘をしっ

かりと装着してから太刀を取り上げる。次に、バラバラの防具を順番に村長の前に並べて行った。

「お、お嬢さん……」

「テオを討伐して欲しいんでしょう？」

息も絶え絶えといった雰囲気を滲ませている老人に向かって、光宮は冷たい眼差しを向けた。

「だったら、あんたも少しくらい協力しないとねえ？」

世の中、無償で得られるものなど何もないのだ。この老人もいい歳をしているのだから、そろそろそれくらいの常識を理解していたはずだいてもバチは当たらないだろう。

「さっさと付けなさい」

冷や汗を浮かべ、涙を流しつつ、老人はおとなしく従った。

「光ってさあ、悪役の方が似合ってんじゃないの？」

「それは言えてる～な」

少し離れたテーブルにのんびりと腰かけ、事態の成り行きを見守

っているシヴァとルナがそんなことを言い出した。

「見て見ぬフリをしてるあんたたちも同罪でしょうが。文句があるなら、この装備でテオを討伐する方法を言いなさいよ」

「……見て見ぬフリはしてね～ぞ。見てるだけだ～ぞ」

「同じことでしょうーが！　むしろ、罪の意識がない分そっちの方がよほどタチが悪いわよっ！」

「そうかもしれねえ～な～。で、結果は？」

何でもないことのように言ってくるシヴァに言われ、反射的に村長の方を見た。かろうじて、という表現が合っているかもしれないが、生きている。ついでとばかりにライト・ボウガンと弓も握らせてみた。やはり死なない。

「どれも下位クラスで間違いなさそうね」

「みたいだ～な」

泡を吹いて気絶した村長はとりあえず放っておくことにして、光宮はシヴァたちが座っているテーブルへ近寄り、重い溜め息を落と

した。

「チマチマ攻撃するしかなさそうね」

防具はほとんど役に立たないと言っていい。だとすれば、遠距離武器で時間をかけて弱らせるしか方法はないだろう。いったい討伐までにどれほどの時間を要するのか、本で見たテオの情報を思い出すと眩暈がした。

「それがそうもいかねえかもしれねえんだ～な～」

「はあ？」

どういう意味か、と聞こうとしたところで、シヴァがふいにビンに入った薄い水色の液体を目の前に掲げて来た。

「クーラードリンクってヤツだ～ぞ。木箱の中に一緒に入ってたんだ～な」

言われてはっとした。テオが住まうのは煮えたぎるマグマが満ちた灼熱の火山である。生身の人間が何の装備もなしに近寄れば、おそらく5分とて生きていられない。

「クーラードリンクは、全部で何本……？」

「４つだ～な。ひとり1本として……俺らが火山でテオと戦える時間は2時間かそこらだ～ぞ」

「……チマチマした攻撃なんかしてらんないってことね」

だとしたら、もう八方塞がりだとしか言い様がない。防具は無意味に近い代物で、制限時間も少ない。その上、武器の攻撃力はテオにしてみれば蚊が刺す程度ときている。

「なら、おびき出すしかないんじゃない？」

ふいに、ルナがそう提案した。

「何も、こっちが向こうの縄張りに出向いて行かなきゃならないって決まったワケじゃないだろ？　だったら、わざわざマグマの近くで戦うんじゃなくて、こっちが戦いやすい場所におびき出してから、チマチマ攻撃していくってのはアリなんじゃない？」

「ついで～に」

テーブルの上に置かれたグラスの水を勢いよく煽ってから、シヴ

ァが不敵に笑う。

「いくら相手が古龍って言ったって～な、物理的なダメージは受けるだろ～さ。なら、罠を仕掛けるのも有効じゃないか～な？　何もモンスターを倒すのに、モンスターの武器を使わなきゃなんねえなんて決まってないんだし～よ。むしろ、武器は補助的なモノくらいに考えてもいいと思う～ぜ？」

「……なるほどね」

そう考えると、何とかなるかもしれないという気がしてきた。

「まずは偵察だ～な。どのみち、この雨が降り止まねえと何をするにも面倒だ～ぞ」

言いながら、シヴァは窓の外を見やる。土砂降りの雨は降り止むどころか勢いを増しているかのようにさえ見える。つまり、今は何もすることがないということだ。

「まったく、何が迎えに来てやった、よ！」

シヴァとルナのおかげで少しばかり余裕が持てた光宮の心は、途

端にアルテリアの将兄への怒りに塗りつぶされた。

「どー考えてもあいつの策略じゃない。ファーナの次はこーんなワケの分かんない島に送り込んで、何をさせるつもりだって言うのよ、ホントに！　そもそも入学式のあの一件からして、ぜーんぶあの男の仕業なんじゃないでしょうね！」

「……それはどうなんだろ～な～」

「はあ？」

思いがけず、シヴァがそんなことを呟いた。

「何を根拠に言ってんのよ」

「光の方こそ、何を根拠に将兄だって決めつけてんのか～な？」

「それは……！」

考えなくても分かる、と言いかけて止める。確かに、自分たちをギルド・ナイトの候補生に任命し、フィールドへイャンクックの討伐へ向かわせたのは彼だ。それは間違いない。しかし、その帰り道に海難事故に遭い、遥か離れた場所にあるファーナ王国のラタ地方

へ辿り着いたことが彼の策略かと聞かれれば、はっきりと断定できる証拠はなかった。

「まあ、相手は将兄だし～な。ファーナの国王陛下とお付き合いがあって、なんだかんだと複雑な事情があっても不思議はなかろ～さ。だけど～よ、結局俺らってファーナで何したんだ～って話じゃねえか～な？」

「ベルキュロスを討伐したことと、ついでにラタ地方の不正に巻き込まれただけだね」

シヴァの言葉に、ルナが笑いながら答えた。

「そういうことだ～ぞ。それが将兄の狙いって言われたところで、はあ？　ってなカンジなんだ～ぞ」

「それは、そうだけど……。でもやけにタイミングよくファーナに来たじゃない。朝も早くから。あの男があんなに職務に忠実なんて話、聞いたことないわよ？」

「それはそれで、いろいろあんだろ～よ」

考えてみれば、光宮はクリス3世と出会ったばかりのころ、自分の身分を明かしていなかった。それは向こうも同じだが、すったもんだの挙げ句、光宮がアルテリア王国の王女であることを明かした後、アルテリアに連絡したと考えれば説明がつかない話ではない。

ファーナからアルテリアまで、通常では二カ月の航海が必要だが、アイルーなり鬼龍なり、時空移動ができるモンスターを使えば一瞬の話だ。

「だけど～よ、今回のこの話には間違いなく将兄が絡んでるだろ～な。いや、将兄“も”って言うべき……」

「そりゃあそうでしょ！　どうしてわざわざ私たちを船に乗せたのよ！　本当に連れて帰るつもりだったんなら、アイルーなり鬼龍なりに送らせればいいことでしょう！　ついでに、誰があんな役に立たないアイテムをキャプテンに持たせたと思ってんのよ！　木箱の裏を見た!?　思いっきりアルテリアのハンターズ・ギルドの紋章が入ってるじゃない！　これであいつが関わってないなんて話、信

じられるワケないわよ！！」

「……そうだ～な」

シヴァが何か意味深に言っていたような気がしたが、どうでもいいので深く考えないことにした。

「でもさあ、光。テオを討伐したからって、アルテリアに帰して貰える保障はあるの？　悪いけどさ、ここからアルテリアまで航海できる大型船がないっていう事実には変わりないんじゃない？」

「……嫌でも連れて帰っていただくわよ。約束を破ったら、あそこで気絶したフリをしている村長を村人全員が見ている前で素っ裸に剥いた後、亀の甲羅の形に縄をかけて島全体を歩かせた後、溶岩の上に生かさず殺さずの高さで7日7晩、吊るしてやる」

床の上で、村長の肩がビクッと揺れた。やはり、思った通り彼はとっくに目が覚めているのに、気絶し続けているフリをしていたらしい。

「さてと。こんな話はどうでもいいとして。どうやってテオをおび

き出すか考えましょ？　テオって何を食べるんだったかしら……？」

「そ、それでしたら……」

かつて本で読んだテオの情報を引き出そうと頭を捻っていた時、恐る恐ると言った雰囲気で村長が床の上から身を起こした。

「そ、それでしたら、もうすぐ生贄の儀式が開催される予定になっております。その儀式の時にだけ、テオは必ず火山の外に出て参りますので……」

「そうなの？　それなら好都合じゃない。なら、その儀式の真似事をすればいいだけの話だわ。で、その生贄になる人はどこなの？」

いろいろと打ち合わせをしておきたい、という意味合いを込めて真顔で言うと、村長が激しく困った顔をした。

「ですから、我が村にはもう若い娘がおらんのです」

「と、いうことはつまりどういうことか～な？」

続きを聞くことを頭が拒否している。そんな光宮の心情を無視して、シヴァが笑いながら村長に問いかけた。

「つ、つまりお二人のうち、どちらかが生贄になっていただかなければ……」

「私は無理」

言おうと思っていたセリフを、ルナに先に言われてしまった。

「私だって嫌よ！　だいたい生贄って何されんのよ！？」

脅すような勢いで村長に聞くと、彼は忙しない仕草で顔の汗を拭う。

「我が村では、その……生贄という言葉はあまり好まれておりませんでして、そのぅ……花嫁という言い方をしております。はい、普段は……。アルテリアの方々に分かりやすいように、敢えて……はい、生贄という言葉を使わせていただいたのですが……はい……」

冷や汗を滲ませながら、しきりに頭を撫でつつ説明する村長の顔には“しまった”という文字が書かれているような錯覚を覚える。

「まずは……お清め、と言いまして、はい……早い話、活火山の麓に湧き出ております泉にて、神官たちが生贄の体を清めます……」

つまり、見知らぬ誰かに体を洗われるということだ。冗談じゃない。心の底からそう思った。神官というくらいなのだから男だろう。例え去勢していて股の間にブツをぶら下げていないから大丈夫だと言われても、絶対に嫌だ。

「それからラティオ活火山の麓にございます神殿にて……3日間を過ごしていただき……そして……麓での儀式の後に村を回った後、神官たちと共に火山へ登っていただきます……」

「で、置き去りにされるってワケ？」

ひきつる顔を必死に抑えながら聞くと、村長が無意味に頭を下げた。

「そ、そうでございます……」

冗談じゃない。心の底からそう思った。例え囮とは言え、そんな扱いを受けたくなどない。だとしたら、ここはもう誰かに押し付けるしかない。

「シヴァ！　あんた女装して生贄になりなさい！！」

「別にい～ぞ」

「……」

嫌がられると思って言った提案をあっさり受け入れられると返す言葉がない。

「止めてよ。あんたの女装なんて見たくないよ」

ルナがはっきり言ってくれた。ついでに、自分も同感である。自分で言っておいてどうかと思うが、女装したシヴァなんて想像するだけで気持ち悪い。

「私かルナかってこと……？」

「あんたで決まりだよ、光。私は無理だって。花嫁さん、なんてキャラじゃないしね」

そういう問題か、と思ったのだが、すでに村長は光宮に向かって揉み手をしている。

「ではさっそく衣装のサイズを……」

助けを求めてシヴァとルナの方を見るが、二人は素知らぬ顔で窓

の外を見ていた。

（ど、どうしよう……！）

交差４（後書き）

番外編　～夢は夢のままに～

アルテリア軍の秋軍（空軍）を束ねる男、秋軍将。誰も知らない上に
誰も興味を持たないことだが、彼の名は兼好（けんこう）と言う。１０年ほど前のこ
と、この国の第二王女、光宮と顔を合わせるなり「タヌキ」と呼ばれた。
それ以来、彼の名はタヌキとして浸透している。
「あなた、おかえりなさい」
そんなタヌキであるが、家に帰れば２０歳年下の可憐な妻と2歳のそ
れはそれは可愛らしい娘が待っている。同じ年ごろの中年男性にとって
は夢にまで見る結婚生活である。
「あなた、今日もお疲れ様。ごはんになさいます？　お風呂になさいま

す？」

年若い妻の笑顔を見ながら食事の選択をすると、彼女はてきぱきとテーブルに料理を並べていく。

「あなた、今日の夕飯はミナガルデ特産牛のサーロイン・ステーキに、ヒレ・ステーキに、シュレイド産クロブタのジンジャー焼き、ココットつ

産のロースト・チキンですよ」

テーブルの上には、これでもかというほどの肉料理が並んでいた。

いでに、妻の口からは紹介されなかったが、サラダには脂身たっぷりの

ベーコンがギッシリと混ぜ込まれ、スープがスープとしての役割を果た

さないほど何かの肉が浮いていた。しかし、文句は言わない。

「あなた、残さず食べてくださいね」

そう言えば、今朝のメニューはチャーシューに埋め尽くされたラーメ

ンとマーボー豆腐、山盛りにされた春巻きに、肉９割・野菜１割のチン

ジャオロースなどなどであった。

「あなた、おいしい？」

昨日は分厚いチーズの層ができたグラタンが出ていた。もちろん、そ

の他にも大量の高カロリー食品が並んでいた。

「あなた、おかわりありますから、いっぱい食べてくださいね」

そして食事の後、必ず妻は酒を勧めてくれる。それも、ビール瓶でい

うなら１０本以上は必ず飲まされている。つまみの量も半端ではない。

「あなた、いつ死ぬの？」

夢は夢のままにしておいた方がいい。

交差5

開かれた窓の向こうから、湿気のない乾いた風が入り込む。以前この部屋に来た時には感じられなかった涼しい風に、そろそろ秋の気配も近いと妙なことを考えた。

「報告書は？」

「コレ」

応接用のソファに座ってサスケの毛並みを撫でながら、フェンリルは背後からかけられた声にぞんざいな態度で一枚の書類を手渡した。

「ごめんニャ、ご主人。あちこち探したんだけど見つからなかったんだニャ……」

膝の上で項垂れるサスケに、軽く笑ってみせる。喉をくすぐってやると、気持ち良さそうに目を細めた。

「武器と防具は無くすなよ。報告書で済ませてやっただけありがたいと思うことだ。次はないぞ」

「はいはい。すみませんでした」

頭の上で腕を組みつついい加減なことを言えば、重い溜め息を落とされる。ミラージュ・ショテルを紛失したのは確かに自分の責任だ。それは分かっているのだが、その原因となった弟には何の罰則もないのに、自分だけ報告書の提出を義務付けられたのが気に入らない。最近、何だかんだと慣れない考え事をしている時間が多いことも相まって、そんなちょっとした扱いの違いが妙に腹立たしかったりする。

「……でもご主人、普通は武器と防具を無くしたら処刑だニャ。報告書で済ませて貰えたことをありがたく思うべきだニャ」

サスケが膝の上から遠慮がちに言って来たが、聞こえなかったフリを決め込んだ。

「な、何をそんなに拗ねてるニャ～」

「別に」

ファーナから戻って来て一週間が過ぎようとしている。今ごろ自

分の弟はラティオ村という島でテオ・テスカトル討伐に精を出しているころだろう。そう思うと、本国でのんびりしている自分が嫌になる。理由は自分でもよく分からないのだが、弟のシヴァがモンスターの討伐で活躍しているかもしれないと思うとイライラするのだから仕方ない。

「フェンリル」

「なに」

呼ばれて振り向けば、父親が咥え煙草のまま書類の整理に勤しんでいた。

「これから客が来る。早目に戻れ」

「客って誰」

「誰でもいい。用が済んだなら帰れ」

帰れと言われると妙に居座りたくなったりする。将兄に用事があるとすれば、アルテリア軍の幹部か、王室の関係者か、はたまたギルド・ナイトか、そのいずれかだろう。どちらにしろ自分にとって

は聞いていても退屈な話でしかないが、部外者に聞かれると面倒な話をされた場合は後々いろいろと問題になったりするらしい。

「ご主人、戻ろうニャ」

サスケが腕を引いて促してくる。自分が聞いてはならない話を聞いたしても、フェンリル自身は別に困ったことにはならない。むしろ、大変なのは誤魔化さねばならない将兄である父親の方だ。

「どうしよっかな～」

敢えてそんな風に言ってみた。呆れたような顔をされただけで特に何も言われない。それがまたイライラする。

「ご主人！　お父様を困らせるのは止めるニャ。さあ、用事は終わったんだから帰るニャ！」

「……はいはい」

サスケが小さな体で精いっぱい怒って来るので、フェンリルは飲みかけだった紅茶を一気に流し込んだ。もともとどうでもいいことだったので、いつまでもサスケを怒らせておくのも面倒だと思った

ということもある。

「ちゃんと帰りま……」

「失礼するヨ！！」

ソファから立ち上がりかけたその瞬間、ノックもなく執務室のドアが破れんばかりの勢いで開かれた。反射的にそちらの方を見ると、そこにはよく見知った男が今日も楽しそうな顔をして立っていた。

「ヤンさん！」

逆三角形の顔に、カマキリのように細長い手足、よく分からない服装、そして何より緑色に染めた髪。会うのは随分と久しぶりだが、記憶にある姿そのままに彼はやって来た。

「これはこれは王子。お久しゅう」

つかつかと歩み寄って来た男がいきなり自分の手を取り、激しく上下に振り回す。何となく父親の方を見ると、苦虫を噛み潰したような顔で頭を抱えていた。

「父さんが客が来るって言ってたけど、ヤンさんのこと？」

「その通り！」

本人に向かって聞くと芝居がかかった仕草で肯定した。ヤンが近くに来ると、何とも言えない饐えたような臭いがする。例えるなら昆虫を飼っている虫カゴのような臭いだが、なぜか今まで一度も不快に思ったことはなかった。何より、ヤンと話をしているとおもしろいという感情が先んじるせいかもしれない。

「いやあ、ここに来るのも久しぶりダヨ、王子。何せ私は今まで極秘任務に就き、日々シコシコと情報収拾にあたっていたのだからネ。とりあえずひと段落ついたから上司に報告に現れるのは当然なのダヨ！」

言いながら、ヤンはフェンリルの手を握ったまま、もう片方の手を腰に回し、そのままクルリとターンを決めた。

「へ、へえ。極秘任務って何？」

「よくぞ聞いてくれた、王子！　実は秘密なのだがネ、最近ミラ大鉱山の様子がおかしいという報告があってだネ、それで将兄もとい

ギルド・マスターは目障りで仕方ないこの私をあわよくば大鉱山の毒ガスに塗れて死んでほしいという願いを込めて極秘に送り込んだのダヨ！」

「ミラ大鉱山が？　おかしいって？」

確かあそこはアルテリア中の罪人が集められて強制労働に就かされる場所だ。咄嗟に頭を過ぎったのは反乱という文字だった。ヤンにクルクル回されながら聞き返すと、途端に彼は自分から手を離して真剣な表情になる。

「いや、実は秘密なのだがネ、ここ最近になっておかしな地震が頻繁に起きているというのダヨ。実は秘密なのだが、地震と同時にモンスターの唸り声のような気味の悪い音を聞いたという話もあってだネ、それで事実関係を調べに行ったのサ」

「どういうこと？」

「つまりだネ、昔からミラ大鉱山というのはとにかく不吉な場所として人々から忌み嫌われている場所だったのダヨ。ちなみにこれは

アルテリアの国民ならば子供でも知っている話だから秘密でも何でもないのだがネ。そんなワケで、ミラ大鉱山は罪人の流刑地としてもってこいの場所となったワケなのダヨ。それで実は秘密なんだが実際のところはただの処刑場だったりするワケなんだがネ」

「ふ～ん……」

「そ・れ・でだネ！」

自分が興味を無くし始めたことをいち早く察したらしいヤンが急に口調を改めた。さりげなく肩に乗せられた細長い手の指が右から左へ向かってカタカタカタ、と動き、そして今度は左から右へ向かってカタカタカタ、と動く。

「そのミラ大鉱山が何かおかしいというワケで、調査に行ったところ、実は秘密なんだが、やはりヤツが来そうな雰囲気なのダヨ」

「やつ？」

「そう……ヤツさ……」

ヤンが間近でニヤリと笑ってみせた。いかにもな雰囲気を醸し出

そうとしているのだろうが、はっきり言ってもう見慣れているのであまり緊張感は抱けなかった。

「ヤツの名を言って差し上げたいところなんだがネ、見タマエ、王子！　あそこの“ショウケイ”ギザミを！　マグマの中からハサミでハンターを切り裂くショウグンギザミも真っ青な顔をして逃げ出すこと間違いナシ！　これ以上、王子にちょっかいを出すと本気で斬り殺されそうだから、ここまでにしておくヨ」

「……いい加減にしろ」

ヤンが言うところの“ヤツ”の正体に僅かながら興味を持ったところで、横から父親が口を出してきた。

「うちの息子にいちいち触るな」

「分かってないねえ、お父サン」

人指し指を眼前で左右に振りつつ、チッチッチと舌を鳴らしながらヤンはフェンリルの肩から手を離す。

「その者にとって最も大事な存在とは、言いかえればそれそなわち

弱点なり！！」

天井を指差しつつ、ヤンは叫んだ。

「私のような男に弱点を晒したあなたが悪いのダヨ。精進しタマエ」

はっきりと言った後、ヤンは再びニヤリと笑う。

「いつになっても親バカぶりは健在だねえ。からかい甲斐があるヨ。見た目も変わらないが頭の中身の方も変わってないようだネ、あなたは。王子はもう立派な大人じゃないか。いつまでも父親に子供扱いされて、王子も可哀そうダヨ」

ヤンがしみじみと言ってくれる。何となく、自分の心境を代弁してくれた気がして嬉しかった。

「……どちらにしろ、関係ないフェンリルに余計な話をするんじゃない。それでもギルド・ナイトか、お前は」

「私は誰よりも口が軽いギルド・ナイトを自負しているのでネ、王子に聞かれれば何だって答えるサ」

ヤンはどこまでも気にする様子もなくあっけらかんとしていた。

相変わらずである。

「それで、あなたに報告すべきことは今すべて王子にお話ししましたのでネ。私はこれにて退散させていただきますヨ？　この近距離で喋ったのだから、さすがのあなたにも聞こえていたでしょう？聞こえなかったとすれば、医者にかかることをおススメするヨ」

何でもないことのように、ヤンは言ってのけた。傍から見ている自分にも、父親の機嫌が激しく悪いことが手に取るように分かる。機嫌が悪い彼を前にして平然としているヤンは、本当にすごいと昔から思う。

「おお、そうだった、そうだった。親バカのギルド・マスターのことなど、どうでもいいのダヨ。王子、私が留守にしている間に頼んでいたことはやってくれていたかい？」

「え？　ああ、大丈夫だよ。ちゃんと世話してたから」

ヤンの質問に普通に答えると、横で父親が顔色を変えた。

「お前、フェンリルに何をさせていた……？」

「別に。留守の間、私の同志たちの食事の面倒を見て貰っていただけサ。何か問題が？」

サラリと答えられて、更に父親の怒りゲージが急上昇したような気がした。ヤンは昔からカンタロスの愛好家だ。それで、彼が今回のような長期任務に就く際など、頻繁に世話役を頼まれている。カンタロスに埋め尽くされた家を初めて見た時は戦慄したが、最近では見慣れてしまってどうってことはない。それの何が問題なのか、フェンリルは本気で考えた。

「レジスタンス！！」

何の前触れもなく、ヤンが叫ぶ。そして目にも止まらぬ早業で執務机の上の重要書類を掴んで丸めると、床に向かって叩きつけた。彼が叩き潰したのは昼間であるにも関わらずうっかり出て来たらしいゴキブリである。カンタロスのことを本気で愛していて、いっそカンタロスになりたいとまで公言するヤンであるが、見た目が非常によく似ているゴキブリのことはレジスタンス（反抗勢力）と呼び、

見た瞬間に叩き潰す。未だに理解不能な行動だが、これまた最早、慣れ親しんでしまっているヤンの行動パターンである。

「やれやれ、アルテリアの将兄の執務室でまさかレジスタンスを目撃する日が来ようとはネ。この国も堕ちたものダヨ」

執務机の方から、羽根ペンがへし折られる音が聞こえたような気がした。確かめるのが怖いので、敢えて気付かないフリをした。

「では、これにて！」

そしてヤンは、やって来た時と同様、唐突に帰って行ってしまった。

「……フェンリル」

「な、なに？」

「お前も用が済んだならさっさと帰れ」

「分かった……」

ドアが閉まる音がした後で、父親が感情を押し殺したような声音で低くそう言って来た。普段あまり感情を表に出さない父親だが、

どうにもヤンと話をした後は激しく機嫌が悪い。

「サスケ、家に送って」

「はいニャ～！！」

部屋の隅で縮こまっていたサスケが嬉々として近寄って来る。そして父親に一言、挨拶を述べた後すぐにフェンリルの手を取った。

その瞬間、視界が暗くなり気が付けば目の前に慣れ親しんだ我が家の玄関がある。サスケが目に見えて肩の力を抜いたのが分かった。

「緊張したニャ……」

蒼天石を溶かしこんだような、雲ひとつない見事な青空が広がっていた。庭に植えられたコスモスの花が、涼しい風に揺れている。上空で穏やかに鳥が鳴く。何となく我が家を見上げてみた。

「ご主人？　どうかしたニャ？」

「いや、別に……」

ふいに、ここで暮らすようになってからもう１０年になること思い至った。本当に子供のころはいろいろと大変だったが、ここへ来

てからは苦労とは無縁の生活を送らせて貰っている。変わらない顔ぶれ、変わらない家、変わらない生活……。唯一変わったとすれば、それは自分の身長だけのような気がする。

「あら、おかえりなさい」

ぼけっと家を見上げていたところへ、裏庭の手入れをしていたと思われる女性に声をかけられた。手に抜いたばかりの草が大量に入ったカゴを持ち、頭には日除けのための薄い布を被っている彼女の名は声楽。フェンリルにとっては母親のような存在の女性だ。

「どうしたんです？　そんなところにボケっとして」

柔らかな栗色の髪に、綺麗な顔立ち。声楽はいつも上品な物腰でとても優しく語りかけてくれる。

「お昼はいただきました？」

「え？　あ、うん。食べた」

「そうですか。ではお茶を淹れましょうね。ちょうど、今日はお隣さんからラズベリーをいただいたので、タルトを焼いたんですよ。

好きでしょう?」

「うん、貰う……」

「雑草を処分して来ますから、先に入っていてください。ちゃんと手は洗ってくださいね」

「分かってるって」

「ならいいです」

声楽に促されるようにして、サスケと一緒に家の中に入る。入ってすぐのリビングでは、茶色い毛並みのアイルーが一匹、箒で掃除をしていた。

「おかえりなさい、ぼっちゃん」

「ただいま」

適当な返事をして、声楽に言われた通りちゃんと手を洗ってからキッチンの方へ向かう。彼女が言っていた通り、ダイニングに置かれたオークのテーブルの上にはラズベリーのタルトが出してあった。

「おいしそうニャ。声楽さんが作るお菓子は絶品だもんニャ～！！

ご主人、ちょっとでいいから分けて欲しいニャ！」

「うん……」

サスケの言葉に生返事を向けつつ、イスに座る。いつも通り、綺麗に整えられたダイニングがいつも通りの顔をしてそこにある……。

「さあ、お茶を淹れましょうか」

声楽が入って来て、慣れた手つきで紅茶を淹れ始めた。その後ろ姿を何となく眺めつつ、無意味に自分の指先を擦ったりしてみる。

「お疲れ様です。ファーナに行ってらしたんでしょう？　あちらはいかがでした？」

声楽がいい匂いのする紅茶をカップに乗せて運んできた。続いてタルトを切り分けようとしたところで、顔を上げる。

「フェンリル？　どうしました？」

「ちょっと、出かけて来る」

特に何か考えていたわけではない。考えるより先に、体と口が動いてしまっただけの話だ。そんな自分に、声楽はいつも通りの柔ら

かい笑顔を向けてくれた。

「いってらっしゃい。お父様には内緒でいいですね？」

「うん。お願い」

「え！？　えぇ！？　ご、ご主人！　タルト食べたいニャ～！！」

何やら喚くサスケの手を握って、たった今、入って来たばかりの玄関へ向かう。

「タルトはまた作りますよ、いくらでも」

後ろからそんな声が聞こえてきて、サスケが見るからにホッとした顔をした。その気持ちは分かるが、今は家でじっとしていることの方が耐えられないのだ。

「で、どこ行くニャ」

「ラティオ活火山」

「……あとでお父様に怒られても知らないニャ」

文句を言いつつも、サスケはフェンリルの手を握って来る。一瞬の暗闇、そして視界が雨模様に覆われた。

「わっ！！　雨ニャ～！！　嫌だニャ～！！　濡れるニャ～！！」

サスケが慌ててフェンリルの服の中に潜り込んできた。アイルーを腕で庇いつつ、少し離れた場所にある木造の建物へと急ぐ。先ほどまで晴れ渡った空の下で長閑な鳥の声を聞いていたというのに、今聞こえるのは打ち寄せる激しい波の音と降り注ぐ滝のような豪雨の音だけだ。全身があっという間にズブ濡れになっていく。

「ご主人！　急ぐニャ～！！」

「分かってるって！！」

言いながら、フェンリルは駆け込むようにして建物のドアを開いた。ドアが開くなり、そこにいた馴染みの顔ぶれが自分に注目する。どういうわけか、そこにはシヴァと光宮、そしてルナの姿しかなかった。人数が足りない、と思ったその瞬間、それまで可愛いと思っていた光宮の顔が、ゲリョスのような醜悪な表情に歪むのを見た。

「……ちょうどいいのが、いるじゃないの」

交差5（後書き）

ユーザー名を変えました。

本名ではないです。念のため……。

交差6

「シヴァのヤツ、遅いな」

何となく時計を見上げれば、すでに１０時を差していた。シヴァが出て行ってから、すでに5時間が経とうとしている。会話がない空気に耐えきれずに向こうの世界のことを一方的に幸也に向かって喋り続けるのは３０分で飽きた。そして傍に置いてあったプレステ3なる最新ゲーム機を堪能し、テレビに映った人間を見て驚くレイと夏葉を観察し、ホットモットの弁当を奢って貰って空腹も満たされ、そろそろネタ切れになっていた。

「幸太はいつもこんなモンだよ」

シヴァの帰りが遅いことを気にかける自分に、幸也は何でもないことのように言った。

「まさか塾とかじゃないよな？」

「それはないよ」

ふと思い浮かんだ単語を口にすると、幸也は楽しそうに笑う。それ

はそうだ。塾に通っているシヴァというのは想像できない。だいたいあんな派手な頭でよく学生が務まるものだ、と思ってふいに疑問が浮かんだ。

「……高校、行ってんの？　あいつ」

「普通に行ってるよ。あれでもけっこう……」

幸也が何か言いかけた時、玄関のドアが開く音が聞こえてきた。

「おかえり、幸ちゃん。お疲れ」

「お～よ。中也、お前まだいたのか～よ」

帰ってくるなりそのセリフ。もう少し他に何か言うべきことはないのか、と思ったのだが、シヴァの後ろから現れた人物を見て、そんなどうでもいい文句は吹き飛んでしまった。

「将兄！？」

「は？」

レイと夏葉と異口同音に叫んだのだが、その役職名で呼ばれた当の本人はかなり胡乱げな顔で中也たちを見やる。

「しょうけい？　何だそれ。こいつら、誰だ」

「さっき話したじゃねえか～よ。こいつら異世界云々から飛ばされてきたんだって～よ。向こうじゃあ、あんたと知り合いなんじゃねえのか～な？」

「ああ、異世界ねえ……」

将兄の髪が赤くないというのも不思議な感じがするが、彼がシヴァと普通に話している光景というのは物凄く違和感があった。しかし何より、どこの世界でも彼は彼だ。何をしているわけでもないのに何とも言葉に言い表しがたい威圧感を感じて、無意識に背筋を伸ばす自分がいる。

（こ、怖え……！）

全身を冷や汗が伝うのは、きっと冷房のせいだということにしておこう。顔を見ただけで竦み上がる自分というのは、あまりにも情けなさすぎる。

（何なんだよ、あの人……！）

ナイフを持っているわけでもなければ、銃を構えているわけでもない。ましてや怒っている雰囲気ですらない。濃い茶色の髪に、ジーンズ、やたらカッコいい黒いシャツを着ただけの、どこにでもいる青年の服装だ。それなのに、まるで独裁者でも登場したかのような緊張を覚える。

「おい、幸也。お前、飯は？」

「みんなで食った」

「そんならいい～ぞ」

シヴァと幸也がそんな会話をしているのを何となく聞き流しながら、

中也はふとレイの隣に座る夏葉を見やった。

（レイも緊張してるんだな）

将兄が登場してから、それまでくつろいだ雰囲気だったレイですら僅かに表情を変えている。自分だけではないと分かって、少しばかりホッとした。続いて夏葉を見やる。

（なんか、落ち込んでるな……）

思い出したくはないが、アルテリアでの夏葉は婚約者である彼とかなり仲が良かった。普段あまり表情を表に出さない夏葉が、彼と一緒にいるだけで幸せそうな笑顔を浮かべていたことも知っている。こちらの世界で彼と出会い、相手が自分のことを知らないとなれば落ち込むのも分からない話ではない。

（何か、言ってやればいいのかな……）

こういう時どんな言葉をかければいいのだろう。強く拳を握りしめながら、必死で考える。けれど、現実の恋愛には無縁の自分には、思いつく言葉は見当たらなかった。ついでに、夏葉と二人きりならばともかく、周囲にはシヴァもレイも幸也もそして問題の人物そのものもいるのだ。とてもではないが、気が利いたセリフなど言えるはずはない。そう思うと、ひたすら落ち込んだ。

（こっちの世界でも、相変わらずスゲーカッコいいな、この人……）

幸也の隣に腰を降ろし、煙草に火をつけるというたったそれだけの

仕草がとても様になっている。そんな彼を見ていられずに、つい視線を下に向けた。

「で？　お前らの言う異世界で、俺は何をしてるんだ？」

「え？」

いきなり話を振られて、中也は心臓が縮みあがるような思いを味わった。アルテリアでも、実のところ彼とまともに話などしたことはなかった。蛇に睨まれたカエルは、きっとこんな気持ちだろう。中也は内心でそんなことを考えた。彼がどこか楽しんでいる雰囲気だったので、中也は思い切って口を開く。

「知り合いなんだろ？　しょうけい、とか何とか」

「あ、はい……そう、です……で、でも知り合いってほどじゃ……」

言いかけて、夏葉のことを思い出し口を噤む。

「え、えっと……将兄というのは、アルテリア軍の頂点にいる将軍のことです。陸の春軍、海の夏軍、空の秋軍それから治安維持……警察みたいなことをしている冬軍の、四つの軍を束ねる将軍ということで、

正式には四軍統括将軍兄と言うんです。一般的には略して、将兄と呼ばれて……ます……」

「へえ。さすが京吾さんだ～な。向こうでも派手だ～ぜ」

だんだんと小さく細くなっていく自分の声に重なるように、シヴァが笑いながらそんなコメントを寄こした。将兄の方はもう自分たちの話などどうでもいいと言わんばかりにケータイを取り出して何やら操作している。

（し、信じてないのかな……）

おそらくそうなんだろう、と思う。中也も、自分が実際に体験するまで異世界があることなど信じていなかったし、信じるはずもないと思う。当然のことだが、彼を目の前にした緊張感も相まって妙に気分が落ち込んだ。

「狭いって～の。少し寄れ～よ」

そしてシヴァは、幸也と将兄が座っている方のソファに文句を垂れつつ腰を下ろした。そして、当たり前のように煙草に火をつける。

「あ、あの……将兄じゃなくて……えっと……」

「ああ、天礎（あまいし）だ。天礎京吾」

そんな名前だったのか、と妙なことを思う。そしてふと、ごく最近その名字をどこかで聞いたような気がしたが、残念ながらそれがいつどこで誰が名乗ったのかまでは思い出せなかった。

「あ、天礎さんは……その、こっちでは……し、仕事とか……何をされているんですか……？」

自分の声が震えているのがはっきりと分かる。まともに目を合わせられないのだが、それでも聞いてみたいことはあるのだ。

「仕事？　普通に会社員だ」

「それはナイでしょう」

レイと夏葉と揃って反射的に否定していた。そんな中也たちを見て、

シヴァと幸也が兄弟揃って爆笑する。会社員という立場を否定された本人は僅かながら苦い顔をするだけで特に何も言わなかった。

「そんな雰囲気ねえもんなあ。仕方ねえ～よ。だけど、ホントのことだ～ぞ、中也」

「……マジ？」

信じられない。この人が普通に会社勤めしている姿など想像できなかった。絶対にウラで何かしている。そんな確信があった。

「それで、シヴァは？　お前はどこの高校行ってんだ？」

これ以上、彼と話をするのは怖かったので、話題をシヴァに移してみる。確かさっき幸也がシヴァはちゃんと高校に通っていると言っていたはずだ。

「俺か～？　俺は第一だ～ぞ」

第一、と聞いて思い浮かんだのは、このあたりの地区ではかなりの難関に位置するハイレベルな高校であった。

「……その頭で？」

つい思ったことをそのまま口にしてしまうと、今度は将兄と幸也が笑いだした。

「どういう意味だ～よ」

「あ、いや……だって、メチャクチャ派手な頭してるからさ」

自分は髪の毛の色を差して「頭」と言ったのだが、シヴァにはどうやら頭の「中身」の意味に聞こえてしまったらしい。しかし、勉強ができるシヴァというのははっきり言って自分のイメージの論外だった。

それこそ、幼いころからよく一緒に遊んでいた自分にしてみれば、ニワトリの卵から鷹が産まれて来るほど違和感がある。

「夏休みだから染めてるだけだ～ぞ。新学期になったら黒くするって～の」

「あ、そうなんだ」

そう言われれば納得できないこともない。

「夏休みに入ってすぐくらいにさ、幸ちゃんは一回、髪の色を真っ白にしたんだよ」

「真っ白に？」

「そうそう。それで、その上から赤く染めてね」

これでもかと言わんばかりに髪を赤くしたシヴァには確かに見覚えがある。どうやらこちらの世界でも一時期、シヴァは髪を赤くしていたらしい。

「それで、赤の上から黒を入れて、かなりイイ感じだったよね」

「あった～な、そんなこと。だけどよ、髪を洗ったらピンクになっちまったんだ～ぞ」

ピンクの頭をしたシヴァを思い浮かべ、隣のレイと共に思わず笑いを堪えた。

「で、どうしようもねえからボウズにしたんだ～ぞ」

「ボウズ？」

聞き返すと、将兄と幸也がその光景を思い出したように苦々しく笑っていた。

「俺はピンクでも良かったんだけど～よ」

「いや、似合ってなかったって」

力を込めて言う幸也に、将兄が相槌を打つように軽く頷く。

「で、伸びて来たなあって思ってたら金髪になってた」

「へえ……」

よくそこまでして毛根が生存しているものだ、と思った。髪の毛を染めたことなどないので実際のところはよく分からないのだが、それでも髪を脱色したりするとかなり痛むという話はよく聞く。

「ハゲるなよ、シヴァ」

「俺ん家の家系はハゲねえから平気だ～ぞ」

そう言えばシヴァと幸也の父親は頭に白いものが混じり始めていた記憶があるが、薄くなってはいなかった。それを言われると返す言葉が見当たらないので、とりあえず軽く頷く程度にしておいた。

「そろそろ帰るか」

会話が途切れた時、ふいに将兄が時計を見上げつつそう言い出した。

「幸也、ついでに送って行ってやるから来い」

「え？　ああ、そう？　ありがと」

将兄に言われ、幸也が何とも言えない顔をしながらも立ち上がる。

そして、奥の部屋へと入って行った。

「幸也さん、ここに住んでるんじゃないのか？」

「なんで幸也と二人で住まねえといけねえんだ～よ。あいつは普段は東京にいる～ぞ。京吾さんも～な」

「そう、なんだ」

何かの用事でこっちまで来たのだろうか。高速道路を使えば、ここから東京まで二時間かそこらで行けるはずだ。確かに、幸也はともかく将兄に田舎暮らしは似合わない気がする。

「じゃあまたな、幸ちゃん」

「おう～よ」

奥の部屋からスポーツバックを抱えて出て来た幸也がシヴァに手を振った。さっさと玄関に向かおうとする幸也を何となく眺めていた時、

ふと思い出したように将兄がこちらを振り返った。

「柴崎」

「何ス～か？」

「武藤が連絡する」

「へいへ～い」

シヴァのいい加減な返事を聞き、将兄もまた玄関に向かって歩いて行ってしまった。彼はいったい何をしに来たのだろう。まさか異世界からやって来たという自分たちに興味があったわけではないだろう。ちょっと疑問に思った。

「やっぱ迫力あんねえ、あの人」

将兄と幸也がいなくなった分、コーヒーテーブルを挟んで向かい側のソファがやたら大きく感じる。溜め込んでいた息をつくように呟いたレイに、中也は激しく共感した。

「よく普通に話せるよね、あんた」

「そうか～？」

レイがテーブルの上のペットボトルに手を伸ばしたのを見て、釣られて自分も同じことをしていた。緊張すると喉が渇くのだ。何の変哲

もない緑茶が、妙においしく感じた。

「あんた、緊張したりしないの？」

「緊張？　なんで～だ？」

聞くまでもないことだが、どうやらこちらの世界と向こうの世界では、彼という人物と出会った経緯云々が違うらしい。それでも、シヴァが普通に会話していることは凄いと思う。

「どうやって知りあったのさ」

「はあ？　京吾さんと～か？　幸也の先輩だったんだ～よ。で、何回か顔を合わせてるうちに～ってトコか～な。俺がバイクの免許取ってからはけっこう会ったりしてる～な。使わなくなったパーツとか、頼んだらくれたりするんだ～よ」

「へえ……」

そんなモンか、と思った。向こうの世界ではそれこそ雲の上の存在である彼だが、こちらの世界では一般人らしい。いまいち信じられなかったが、そう言えば彼は自分で会社員だと言っていた。

「さっきから何なんだ～よ、お前ら。何でそんなに京吾さんのこと気にして～んだ？」

「いや……だから、あの人はホントに……俺らが知ってる限りじゃあホントに……すげー人で……こっちの世界で言うなら……アメリカの大統領みたいな……ホントに……」

彼の姿を脳裏に思い出しただけで胃のあたりが縮みあがるような錯覚を覚える。中也は日本の首相が現在、誰なのかは知らないが、むしろ例えるなら確実に合衆国大統領という気がした。

「ところで今の大統領って誰なんだ？　確かもう大統領選があったはずだよな？」

「民主党のバラク・フセイン・オバマだ～な。合衆国初の黒人系大統領だ～ぞ」

「マジか！？」

歴史は動いたものだ。あとでパソコンで自分がいなかったこの３年のことを調べてみよう、と本気で思った。

「じゃあ、そろそろ俺も帰るよ。シヴァ、二人のことよろしくな」

「分かった～ぞ」

時計の針は１１時を差している。いい加減に帰らないと家族が心配するかもしれない、という気持ちもあったのだが、何より3年ぶりの我が家というものが急に懐かしくなったせいもあった。

「明日、朝の9時くらいに顔出すから」

「分かった～ぞ。じゃあ、女の子二人は風呂でも入って来い～よ。その間に寝るところの準備しといてやるから～よ」

シヴァが何やら気の利いたことを言い出した。その言葉に釣られるようにしてレイと夏葉が立ち上がる。

「なあ、服の脱ぎ方とか分かんのか～な？」

玄関に向かおうとしていた中也だったが、シヴァが何やら不穏なことを言い出した気がして無意識に足を止めた。

「どうにかして脱ぐよ。あんたに気を使って貰わなくても平気」

レイがはっきり言ってのける。彼女がいれば大丈夫か、と思ったと

ころで、シヴァが素早く夏葉のセーラー服の裾から手を突っ込んだのを見た。

「きゃ……！」

途端に胸のあたりを押さえて前屈みになった夏葉を見て、シヴァが何をしたのかだいたい想像がついた。

（は、はやわざっ！！　ブラのホック外しやがった！）

本で見た知識しかないが、それでもそれくらいのことは分かるのだ。

僅かに顔を赤くしている夏葉と、呆れたような顔をしているレイ。そしてシヴァは、楽しそうに笑っていた。

「あ、ありがと」

なぜ夏葉がシヴァに向かって礼を言うのか分からない。

「なっちゃん、そこはお礼を言うところじゃないよ」

「え？」

中也の気持ちを、レイが代弁してくれた。そんな二人を、シヴァが

浴室と思われるスペースへと案内する。

「なっちゃんは天然だ～な。ほら、中也、さっさと帰れ～よ」

虫でも追い払われるような仕草で、玄関へと誘導される。大丈夫なんだろうか、と本気で思った。

「お、おい……夏葉に手ぇ出すなよ。あの子は向こうに婚約者がいるんだ。だから……」

「分かった、分かった。じゃあ～な」

多大なる不安を抱えつつ、目の前で玄関の扉が閉められた。一抹の疎外感を感じたが、今となってはどうしようもない。レイが何とかしてくれるだろうと信じて、中也は帰宅の途についた。

交差６（後書き）

番外編　～モンスターたちのお茶会～

その日、アルテリア王国の王宮では他国の姫君を招いてのお茶会が開かれていた。他国とあまり交流を持たないアルテリアでは非常に珍しい光景である。

「あ、こんなところにドスランポスがいる～。か～わいい～！」

小さな村ほどもある広い後宮の、その中央にある花咲き乱れる広場にて、着飾った少女たちが思い思いに話に花を咲かせていた。

「こっちはランゴスタちゃん。はじめまして、よろしくね」

ランゴスタ、と呼ばれたのはシドーニア公国の第一王女である。シドーニアと言えば、アルテリアのハンターたちがフィールドに出向く際に寄港し、物資を補給する協定を結んだ重要な国だ。

「あ、あっちにはレウスくんがいる～」

着飾った少女たちの中でも、最も豪奢だと思われるドレスに身を包

み、頭の先から足の先まであらゆる宝石で埋め尽くしたひとりの少女が、嬉々とした様子でどこかへ走っていく。

「こんにちは、ギギネブラちゃん」

大国ファーナの王女に向かって、断言した。顔色を変えた王女に構うことなく、その少女は池の中へとダイブする。

「気持ちいい～！」

季節は冬。季節外れの水泳を始めた大国アルテリアの第一王女を、一同が唖然とした表情で見守る中、同じくアルテリアのもう一人の王女が血相を変えて走ってきた。

「姉さん!!　あんた、何やってんのよ!!　早く上がりなさい!!」

「何怒ってるの？　光ちゃん、ラージャンみたい～」

ちなみに、アルテリア王国第一王女、春宮・朱宮にギギネブラと呼ばれたのは、中也の姉である……。

交差7

「な、何の話？」

どういう経緯だが知らないが、誰が花嫁という名目の生贄になるかで揉めていた時に都合よくフェンリルが現れた。これはもう、彼にこの面倒な役目を押し付けるしかない。

「何でもない～ぞ。とりあえず、話は決まりってことでいい～な？」

「そうだね」

「そうね。問題はひとつ解決したわ。後は村長さんと、それからその神官だか何だか知らないけど、その人たちと打ち合わせすればいいわ」

しかし、ここで顔色を変えたのは村長である。

「ちょっと待ってください。それはさすがに……！　選ばれるのは汚れ無き処女だと相場は決まって……」

「そんなモン、モンスターに分かるワケないでしょ！？　あんた、頭おかしいんじゃないの！？」

せっかく話が纏まったというのに、老人が素っ頓狂なことを言い出した。この老人はいったい何を言っているのだろう。モンスターはしょせんモンスター。女神オーディナでもなければ悪神ロキでもない。生贄となる人間が男か女かなど、ましてや性的な経験があるかないかなど、分かるはずないではないか。

「いえ……ですから、そうは申されましても……はい……やはり……テオが気に食わない生贄を前にして、暴れ出さないという保障が……」

「余計なこと言うんじゃないわよっ！！」

慌てて村長の薄くなった頭髪にガラスのコップを叩きつけたのだが、

時はすでに遅かった。生贄、というその単語を聞いて、フェンリルが顔色を変える。

「い、嫌だよ。そんなの、絶対やりたくないって！」

割れたガラスが頭に刺さった村長が悶えているが、見ないことにしておき、光宮は軽く舌打ちした。こうなったら路線を変更するしかな

い。村長が余計なことを喋ったせいで、面倒なことがひとつ増えてしまった。

「じゃあ聞くけど、あんたは私かルナがモンスターの前に引きずり出されて酷い目にあってもいいって言うの？」

「え……」

「相手は古龍よ？　そんじょそこらのモンスターじゃないわ。凶暴で名高いあのテオ・テスカトルよ？　かよわい女の子をテオの生贄にさせるなんて、そんな危険な目に遭わせて、あんたは平気なの！？」

「う……」

「あんた、それでも男なの！？」

フェンリルが黙り込んだ。いい調子だ。内心でほくそ笑みつつ、更なる追い打ちをかけようとしたところで出血を抑えながら再び村長が邪魔してきた。

「お、お待ちください。やはり……いくら何でも……。確かに綺麗な方ではありますが……！」

「ほ、ほら。ね？　このオジサンもダメだって言ってんじゃん。やっぱ無理だって」

村長の言葉に、フェンリルが便乗し始めた。面倒臭い。さてどうしてやろうかと思ったところで、シヴァが立ち上がる。

「やっぱ怖がりだもん～な、あんた。仕方ねえ～よ、光。別の方法を探そう～ぜ」

弟の言葉を聞いてフェンリルがその整った顔を盛大に顰める。これはイケそうだ、と敢えて顔だけは残念そうな表情をしておいた。

「そうね。まあ、それもそうかもしれないわ。そもそもフェンリルが役に立ったことなんかないものね。シヴァの方がよっぽどマシだわ。ごめんね、フェンリル。無理なこと頼んで」

「そうです。その通りです！　やはりテオの花嫁となっていただくのはお嬢さんでなければっ！」

溜め息など落としながら言ってみたところで、空気を読まない村長のセリフが割り込んできた。その態度に、苛立ちが募る。光宮は無言

で村長の肩に腕を回し、食堂の隅へと引きずった。

「な、何でしょう？」

「ねえ、よく考えてごらんなさいよ」

「は、はい？」

「あんたが村長の時に頭痛の種になってるテオを討伐したってことになるのよ？」

「はあ……」

「次の村長選は、いただきよね？」

村長がゴクリと生唾を飲み込んだ。

「それに、万が一テオとの戦いで生贄が殺されたとしても、それはあの人の運と腕が悪かったってことで、あんたが失うものは何もないじゃない。テオもいなくなって、あんたの村長としての株も上がる。一石二鳥でリスクはゼロ。何か問題がある？」

「ございません」

「……聞こえてるよ、光」

村長と話がついたところで、苦い顔をしたフェンリルの声が割って入った。

「あら、聞こえてたの。で、やるの？　やらないの？」

「……分かったよ」

あっけなく落ちた。本音を言うともう少し粘ってくれた方がイジメ甲斐もある気がするのだが、せっかく本人がやると言ってくれているのだからここはもう余計なことは言わないに限る。

「でも女装は勘弁して」

おもしろいことを言い出した。

「何でよ。あんた前にプライベート（メイド）のカッコしたことがあるって自分で言ってたじゃない」

「あれは本当に子供の頃の話だって！」

「今だって大して変わらないじゃないのよ！！」

「ええ！？」

食いついて来た。どうやら彼は自分で思っている以上に子供扱いさ

れるのが嫌らしい。こうなればとことん弄るしかない。

「一応、聞くけど。あんた今、何歳？」

「え？　１９だけど」

「アルテリアの法律では１８歳以上がオトナってことになるから、あんたは立派なオトナであるワケよね？」

「少々お待ちください！　この島の法律では２０歳以上がオトナだと見なされます！　よって１９歳はまだ未成年……」

「うっさいわね！！」

再び話に割り込んできた村長を一喝すると、ただでさえ小さな老人が背を丸めて縮こまったため、より一層小さく見えた。

「で。あんたは立派なオトナであるわけでしょ？　だったら少しはオトナらしい対応をしなさいよ」

「何歳だろうが嫌なものは嫌なんだよ！　だいたい俺が女装したとこなんか見て、何が楽しいのさ！？」

「あんたが苦しみ悶えて、のたうち回って死ねばそれでいいのよ！！」

つい本音が出た。少し離れた場所で、シヴァとルナが盛大な溜め息をつくのが聞こえて来る。

「光ってアレだよね」

「あ～？」

「真性サディスト」

「ああ……ん？」

「気に入ったヤツが苦しんでる姿を見てコーフンするタイプ」

「……アレのどこを気に入るん～だ？」

「見た目とか？」

「なるほど～な」

自分に聞こえていると分かっていて敢えてはっきり言ってくれた。

しかも本人が目の前にいるにも関わらず、である。

「あんたたちねえ……」

光宮の八つ当たりの対象が自分たちに向かったことを悟ったらしい二人が素早く席を立った。

「ちょっと待ちなさいよ！！　いったい誰がいつどこでこいつに惚れたなんて話になってんのよ！？　ジョーダンじゃないわよ、こんなヤツ！！」

「……誰も惚れたなんて言ってないよ」

ルナに、冷めた目を向けられた。そういう反応をされると、言い返す言葉に迷ってしまう。

「まあ、後は二人でのんびりやれば？　邪魔なあたしらは中也たちと遊んでるからさ」

「ちょ、ちょっと待って！　待ちなさいって！！」

光宮が慌てて後を追おうとしたのだが、二人はさっさと奥の部屋へと引き上げてしまった。一気に静まり返った宿屋の食堂に、気まずい沈黙が落ちる。

「どうぞ」

余計な気を利かせた店の主人が、水が入ったグラスをふたつ運んで来た。

「……で、あんたは何でここに来たの？」

会話がない空気に耐えきれず、そんなことを口にしてみる。

「そう言えばファーナの時も、いつの間にやらいたわよね。どうやって移動してんの？　まさか鬼龍絡みじゃないでしょうね？」

幾分険しい顔で聞けば、フェンリルが慌てて否定した。

「違うよ。俺はほら、一応ギルド・ナイトだからさ、時空移動ができるアイルーがいるんだ」

「あっそう。それで、ここに来た目的は？」

ギルド・ナイトにしては頼りないが、確かに彼は自分たちの「先輩」として紹介されたということを今更だが思い出した。正体を隠すことが義務付けられ、極秘任務で動くことも多いギルド・ナイトを任された者にはギルド・マスターである将兄との連絡用に時空移動ができるアイルーがパートナーとして就くのが常だと聞く。そういうことなら、

納得できない話ではない。

「偵察？　もしくは監視？」

「いや、違う」

「だったら何よ」

追求すれば、フェンリルが視線を落とす。何かしら言いにくそうな雰囲気を滲ませているため、別の任務という単語が頭を掠めた。

「ご主人の気まぐれニャ」

ふいに、どこからともなく声がしたと思うと、フェンリルの足元に落ちた陰の中から、一匹のアイルーが飛び出してきた。毛並みはメラルーカラー。つまり真っ黒。何ともまあ、主人によく似たアイルーだとくだらないことを思う。

「あんたがこいつのアイルー？」

「そうニャ。名前はサスケです……ニャ……よろしく、ニャ……」

じっと睨みつけると、サスケと名乗ったアイルーは尻ごみしながらフェンリルの後ろに隠れて行った。

「サスケは、その……人見知りするタイプでさ」

「それが何だって言うのよ。わざわざ出て来たからには何か言いたいことでもあるんでしょ？　なら、とっとと言いなさいよ」

急かすようにテーブルをバンバン叩きながら言えば、サスケが恐る恐る前に出て来る。

「何だかよく分からないけど、いきなりご主人がここに来たいって言い出したニャ。だから、本当にギルド・マスターからの密命でも何でもないニャ」

「サスケ！　余計なこと言うなよ！」

余計に意味不明だ。ギルド関係の任務でもないのに、どうしてこんなところに現れる必要があるというのだろう。サスケに文句を垂れるフェンリルを見つめつつ、光宮の心にひとつの名案が浮かんだ。

「……なら、こいつの代わりに私をアルテリアに連れて帰りなさい。面倒事はもう嫌なのよ」

「え？」

ほぼ同時に、フェンリルとサスケが振り向いた。揃って、それは困

るという顔をしている。

「何よ、何か問題でもあるの？」

「いや、えっと……それは……」

「む、難しい注文ですニャ……」

これは何か知っている。そんな確信を得るには充分な反応である。

「私がアルテリアに帰ったら困るの？　一応言っておくけど、私はあの国の王女よ？　王女が自分の国に帰るのが悪いの？　それとも、テオを討伐しないといけない理由でもあるのかしら」

ニヤリと笑いながら言えば、サスケが脱兎のごとくフェンリルの陰の中へと引っ込んで行った。それを見て、フェンリルが慌てている。

「サスケが余計なこと言うからっ！！」

余計なことを言わずとも、時空移動できるアイルーを連れていることをバラした時点でいつかは聞くつもりだったことだ。何もサスケひとり……一匹の責任ではない。

「聞かせて貰いましょうか。まあ、座りなさいな」

自分が座っているテーブルの正面へと促せば、彼がおずおずと腰かける。相手より優位に立っているこの状況に、久々にいい気分だった。

「俺も……詳しくは知らないんだけど……」

「知ってることだけでいいわよ」

どうでもいいからさっさと話せ、という本音は抑え、敢えてニッコリ微笑んでみせる。逡巡するように、闇色の双眸が宙を彷徨った。

「えっと……光に、錬金術を思い出して欲しいんだって……」

「はあ？」

予想外の言葉に、思わず笑顔が崩れた。

「錬金術？　なんで私がそんなモン知ってるのよ」

「そのあたりは詳しく知らないって。でも、光が錬金術のことを思い出してくれれば、それで全部終わるからって……」

無意識に、表情が険しくなっていく。軽く息をつき、改めてフェンリルを見つめた。

「それ、誰が言ったのよ」

「……将兄」

消え入るような小さな声で、フェンリルがその名を口にする。やはり、という思いが浮かぶ。妙に納得した。

「どうでもいいけど、あんた、そんなんでよくギルド・ナイトなんか務まるわね。大丈夫なの？」

「俺は主に実戦が仕事だから……」

交差7（後書き）

番外編　～新兵器は闇の中～

アルテリア王国ハンターズ・ギルド技術開発部・部長。誰も覚えていないその名は嵐灰。彼は今、自らが開発した新兵器をニヤニヤしながら見つめていた。

「これが実用化されたら、すごいことになるぞ～」

机の上に物々しく置かれた金属製の武器を様々な角度から眺めつつ、

その新兵器がいろいろなシチュエーションで活躍するシュミレーションを妄想しては顔の筋肉が緩んで行く。

「クルップ式無反動砲、口径４０ｍｍ、全長９５０ｍｍ、全重量７ｋｇ、

銃口初速１１５ｍ／秒……。しかも構造は単純で取扱いは簡単。おまけ

に製造価格も低くて済むから量産可能……」

敢えて欠点を上げるとすれば、弾頭を発射した際の反動軽減目的で

ある後方噴射の白煙が凄まじいため、敵にその位置を知らしめる可能性があるということだろうか。

「こいつにふさわしい名前が必要だな。ルチノーイ・プラチヴァターンカヴィイ・グラナタミュート……長すぎる。これじゃあ誰も覚えられん」

むしろ、名前を見た瞬間にこいつの恐ろしさが脳髄へ駆け抜けるような名前が好ましい。少し考える。決まった。

「よし！　ロケット・ランチャーだ！　これに決まりだ！！」

我ながら素晴らしいネーミング・センスだと思ったところで、そこへなぜかアルテリア王国の第二王女、光宮が現れた。

「なあに、これ」

「な、何って新兵器に決まってんだろ？」

触るな、と言おうと思った時にはもう遅かった。光宮の手にはロケット・ランチャー「ＲＰＧ－７」がしっかりと握られている。可愛らしい

顔立ちがニヤリと笑った。

「試し撃ち！！」

いきなり、光宮が自分に向かってロケット・ランチャーを発射した。

慌てて避けたのでケガはなかったが、発射された弾頭は窓を突き破って、王宮の建物の方へと飛んで行った。

「あ、危ねえなあ！　何しやがるんだ、いきなり……！！」

久々に本気で冷や汗をかいた。しかし、ロケット・ランチャーのような強力な武器ほど弾の数が限られているのは常識だ。当然のことながら、今の一発で弾切れのはず。とりあえずは安心、と思ったところで、再び光宮がどこからともなく取り出した弾頭を装填した。

「二周目かっ！！」

その日以来、技術開発部・部長、嵐灰はロケット・ランチャーを永遠に封印した。

交差8

目が覚めると、見知らぬ部屋の風景が広がっていた。

「ここは……」

ふと隣を見れば、同じベッドの中でレイが気持ちよさそうに眠っている。そう言えば、昨日いきなり異世界に来たのだということを思い出した。よく分からない場所でシヴァに会って、そのまま彼の家に泊めてもらったのだ。

「違う、世界」

無意識に自分の手を見下ろしてみる。改めてまじまじと見つめたことなどないのだが、それでもここにある自分の手は記憶と全く変わらない姿をしているように思う。自分と同じ自分が生きる、もうひとつの世界。頭では分かっていても、いまいち実感が湧かなかった。

「レイ、起きる？」

ふいに一緒に寝ていたレイが寝返りを打ったので問いかけてみると、

眠たそうな声だけが返された。何を言っているのか分からなかったので、まだ寝るという意味だと判断した。そして、夏葉はレイを刺激しないように、そっとベッドを抜け出した。

（よく分からない物がたくさん）

どちらかと言えば殺風景だと呼べる部屋には、ベッドの他に黒い箱のようなものが幾つか置いてある。昨日、中也からテレビとプレステという名前を聞いたような気がする。しかしながら使い方を知らないので下手に触ることは止めておいた。

（起きてる、かな……）

なるべく音を立てないようにそっとドアを閉めた後、リビングの方へと向かった。夕べ、自分たちにベッドを譲ってくれたシヴァはソファで適当に寝ると言っていた。何だか彼に悪いことをしたような気分だった。

（寝てる……）

朝の陽ざしが差し込むリビングは、昨日と同じ顔をしてそこにあっ

た。ソファの上で、上着をかけたまま寝ているシヴァは、死んだように静かに寝ていた。そして、ふと夕べそこに座っていた人のことを思い出す。

（京さま）

不思議なほどに、心の中は落ち着いていた。どうしてだろう。少しの間、自問してみるが、はっきりした答えは見つからなかった。いつもなら、彼の顔を見た瞬間そばに行きたくて堪らない衝動に駆られる。

感情に突き動かされ、周囲に人がいることが分かって赤面した経験も一度や二度ではない。それなのに、こちらの世界の彼を見ても、そういった衝動は湧き上がって来なかった。自分のことを知らない、と、そう言われてもなお、思っていたほどの衝撃を受けなかった。

（違う人なワケない……。まあ、いいか）

考えても仕方ないことだ。それに、どちらにしろ自分はまた向こうに帰るのだ。繋がらない人のことで悩んでいても埒が明かない。そう割り切って、夏葉は手持無沙汰にキッチンの方へ向かった。

（何か、作れないかな）

シヴァもレイもまだ寝ている。それに、シヴァには泊めて貰った恩もある。簡単なものでも、作れるなら作りたい。そう思った。

（カマドがない）

ついでに、食材そのものがどこにあるのかさえ分からない。何だかよく分からない機械のようなものが並んでいるが、調理器具のようなものは見当たらなかった。

（こっちの世界の人は料理とかしないのかな）

ならどうやって食事をしているのだろう。外食が主なのだろうか。

そんなことを考えていた時、ソファで死んだようになっていたシヴァが軽く呻きながら起き出してきた。

「ごめん、起こした？」

咄嗟に声をかけると、シヴァがいぶかしげな顔をしながらこちらに視線を向ける。その視線にあからさまな敵意が含まれていて、一瞬背筋がゾッとした。

「ああ、なっちゃんか。誰かと思った～ぞ」

眠たそうな声で呟いた彼には先ほどまでの敵意は寸分も残っていない。そのことに少なからず安堵した。

「早起きだ～な。まだ6時前だ～ぞ」

「え？」

言われて反射的に時計を見上げると、確かに5時50分を差していた。こんなに早く目が覚めたのは久しぶりだった。光宮から昼寝が趣味だと言われるほど、自分は気が付けばよく寝ていることが多い。もしかして違う世界に来て緊張していたせいだろうかとも思ったが、自分に限ってそれはないと断言できる気がする。

「本庄は？」

「ほんじょう？」

「ああ、そ～か。名字がないんだった～な。レイのことだ～よ」

「レイなら、まだ寝てる」

「そうか～」

言いながら、シヴァは灰色に近い金髪の頭をガシガシを乱暴に掻き回す。随分と眠たそうだった。

「何時に、寝たの？」

「ん～、何時だったか～な」

「寝てていいのに」

「いや、目え覚めたからいい～ぞ」

そう言って、シヴァはソファから起き上がると、キッチンの方へとやって来た。無意識に、彼の行動を目で追っている自分がいる。彼はキッチンの端に置かれた黒い箱の前で立ち止まり、横開きのドアを開けた。そして、中からペットボトルに入った水を取り出す。

「なっちゃんも何かいる～か？」

じっと見ていた自分に気づいたらしく、シヴァがそう言ってくれた。

「あ、えっと、それ……その箱みたいなの、何なのかなって」

「これ？　冷蔵庫のこと～か？」

「れいぞうこ？」

何となく興味を引かれて近寄ってみる。シヴァがドアを開けてくれたので中を覗くと、何とも言えないひんやりとした風が頬を撫でていった。淡い色の証明に照らされた「れいぞうこ」の中には、ペットボトルと金属製の缶が幾つも並んでいる。

「どうして冷たいの？」

「どうしてって言われても～な。そういう機械だからとしか言い様がないわ～な」

「そうなんだ」

納得した。冷蔵庫は冷たいもので、水やジュースなどを入れておく。

それだけで充分だ。

「こっちは？」

冷蔵庫の中段を指差すと、シヴァがなぜか苦笑いした。

「何だっけ～な。チルド室とか何とか言った気がする～な。野菜とか入れとくらし～ぞ」

「野菜？　そうなんだ」

野菜の保存庫まで付いているとは驚いた。シヴァに確認を取ってから開けてみたチルド室は、何にも入っていなかったが、微かに冷たい空気に満ちていた。これなら、夏でも野菜が長持ちするかもしれない。

自分の世界では到底考えられない。

「一番下は冷凍庫だ～ぞ。凍らせて保存するトコだ～な」

聞く前に説明してくれた。

「すごい……」

夏だというのに、氷が家の中にある。魚や肉の類も冷凍すれば長持ちするに違いない。それに、家にいながら夏に氷が食べられるなど、そんな夢みたいな話は聞いたことがなかった。

「そんなに珍しいか～な」

「うん。夏に氷があるのは、北の都くらいだから」

冷凍庫を閉めながら、ふと夏葉は疑問が浮かんだ。

「どうして、こんなにすごいものがあるのに何も入ってないの？　野菜とか魚とか入れておけばいいのに」

「俺が料理するように見える～か？」

「しないの？」

「しねえ～よ」

そうなのか、と思った。もったいない。

「何かあれば、作れるのに」

「なっちゃんが作ってくれるのか～よ」

何気なく呟いた言葉だったのだが、予想外にシヴァが乗って来た。

「材料とカマドがあれば作れる」

「……カマドはねえけど、コンロはある～ぞ」

再び聞き慣れない単語が出て来た。未だかつて「コンロ」という言葉に巡り合ったことなどなかった。シヴァが少し離れた場所にある機械の方へ向かったので、付いて行こうとして立ち上がる。

「わっ！！」

立ち上がった瞬間、シヴァから借りたズボンがズリ落ちた。慌てて座りこんで長めのシャツで隠したのだが、思い切り見られてしまった。

意図せず、顔が赤くなる。そんな夏葉を、シヴァが爆笑していた。

「悪ぃ～な、俺のだからサイズ合ってねえんだ～よ」

「……ちょっと、向こう向いてて」

「はいは～い」

慌てて脱げてしまったズボンをはく。男物の服は確かに大きい。借りた時に分かっていて気をつけようと思っていたのに、すっかり失念していた。

「もういいか～な？」

「……いいよ」

情けないやら恥ずかしいやらでシヴァの顔が見れない。

「ごめん」

「謝るトコじゃねえだ～ろ」

気にしていないらしいシヴァは楽しそうに笑っている。しかしなが

ら気になるのは、こちらの世界の女性が履く下着である。信じられない。これでは下着としての意味をなしていない気がする。

「なんで、こんなに布が少ないのかな」

「はあ～？」

夕べ風呂に入った時に驚いた。こんなに布が少ない下着など初めて見た。レイもびっくりしていたが、履いている自分でさえも恥ずかしくなるような代物だ。

「こっちの女の人は、みんなこういうの履いてる？」

「パンツ？　どうだろ～な。人それぞれじゃなんじゃねえか～？」

「へえ……」

それならば、こっちの自分はいったいどういう生き方をしているのだろう。何だか不安になった。

「まあ、とりあえず朝飯に何か適当に買って来てやる～よ。一緒に行くか～って言いたいトコだけど～な、外で今みたいにパンツお披露目されても困るから～な」

「着替えていく」

もともと着ていた制服ならば問題ないはず。こちらの世界の文明が気になるというのもあったが、何よりこれ以上シヴァに迷惑をかけたくないという気持ちが先立った。

「ああ、そう。そんならそれで別にいいけど～よ」

「レイにメモ残しとく。何か書くもの貸して」

「へいへ～い」

笑いながら、シヴァは手の平サイズの紙の束のようなものと一本の棒を差し出してくれた。

「そのまんま使え～よ。すぐ書けるから～よ」

「へえ」

これはまた便利なものだ。文字を書くのに羽根ペンとインクが必要ないとは。少し感激しながら、手早く文字を書き込んで行った。

「こういうのがあったら、嵩張らなくて済むのに」

「俺にしてみりゃあ、字を書くのにいちいちインクだの持ち出す方が

信じられねえ～ぞ。で、着替えはひとりで大丈夫か～な？」

「大丈夫」

頭から被ればいいだけだ。夕べ脱ぐ時に覚えたので大丈夫だと思う。

自分の制服はハンガーを借りてリビングにかけてある。手にとって、ハンガーをシヴァに返した後、浴室を借りて着替えた。

「服、どこで洗ったらいい？」

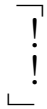
「洗濯機の中、放り込んどけばいい～ぞ～って言っても洗濯機が分かんねえよ～な」

あれこれ説明してもらう。洗濯機の中に汚れた衣類を放り込んでボタンを押せば、勝手に洗ってすすいで乾かしてくれるという話を聞いて愕然とした。

「で、どうでもいいんだけど～よ、なっちゃん」

「なに？」

「ケツ丸出しだ～ぞ」



交差8（後書き）

番外編　～ガムテープ・デスマッチ～

いつものように執務室にカンヅメされて日々の書類整理に精を出して

いた時、ふいに開け放たれた窓から一匹の虫が侵入してきた。

「！」

この虫はアレだ。潰したら強烈な臭いを放つ、あの迷惑な虫だ。

そこにいるだけで妙に苛立ちを覚えるが、下手に手を出すともっと厄介なこ

とになる。虫の方もそれを知っているらしく、机の上を堂々と横切って

いく様には余裕が感じられた。

「……」

気になる。どうしても気になる。しかし、手は出せない。さてどうし

ようかと思ったところで、最近になって技術開発部の嵐灰が開発し

た新

商品の存在を思い出した。

「やってみるか」

将兄は引き出しにしまっていた新商品を取り出す。薄い布の片面に、

ネンチャク草から抽出したネンチャク成分が塗ってあるという代物だ。

嵐灰曰く、その名は「ガムテープ」というらしい。

「……」

適当な長さにガムテープを切り、迷惑な虫の背後からそっと近付ける。

そして狙いを定めて、一気に吸着する。うまくいった。ネンチャク成分

に絡めとられて足をバタつかせてはいるが、特徴的なあの臭いは出して

いない。彼は人知れず笑い、虫を包んでそのままゴミ箱へ投げ捨てた。

「……！」

ふと見ると、窓ガラスの向こうに数十匹のカメムシが張り付いている。

無意識に拳を握りしめていた。

「おい、タヌキを呼んで来い！」

執務室の外に控えていた兵士の一人にそう命じると、ものの5分で目

的の人物が姿を現した。

「将兄、ご用件は」

「……レジスタンスを撲滅しろ」

「はい？」

交差9

「ふふふふ……」

闇夜に沈んだ世界に、青白い月の光が燦々と降り注ぐ。

（ああ、楽しい。もう堪んないわね）

剥き出しの地面の上に、真っ白な光石で出来た神殿が月光を受けて仄暗い光を放っていた。夜を突き刺すかのように聳えるその建物は、これから行われる儀式のために何とも言えない重い空気に満ちていた。

（フェンリルのやつ、今ごろさぞ気持ちよさそうに寝ているでしょうね）

そう思うと抑えきれない笑い声が喉の奥から込み上げて来る。

（目が覚めて、いきなり目の前にテオがいたら……）

その時の反応を想像するだけで、体中が震え出すような忍び笑いが溢れだした。

「さっきから怖いよ、あんた」

ひとりで笑っている光宮に、ルナが何と言えない言葉をかける。

「……目的が完全にウサ晴らしに変わって来てる～な」

「悪い？」

「い～や、べっつに～」

村長を急かし上げ、もともと予定されていた儀式の日取りを無理やり早めさせた。生贄となる花嫁にはまずこういったことをしてもらい、

ああいったことをしてもらい、とグダグダとマニュアル的なことを並べ立てては渋い顔をしていた村長だったが、光宮にライト・ボウガンで脅されてからは素直に言うことを聞くようになった。ついでに、花嫁が儀式で口にする予定の酒をネムリ草のエキスから抽出した超・強力な睡眠薬にすり替えてやった。

（ああ、楽しい。テオに会うその時が楽しみだわ）

事は万事ぬかりなく、すべて順調に進んでいる。

「そろそろだ～な。出て来るころだ～ぞ」

「そうねえ。ふふふふ……」

シヴァの言葉通り、夜の闇を否定するように月の光を放つ神殿から、

真っ白な服に身を包んだ神官たちがのそりのそりと出て来た。人数は全部で２０人ほどだと聞く。誰もが顔をマスクのようなもので覆い、手によく分からない旗のようなものを持った者や、壺のようなものを抱えた者など、様々である。

「さあ、行くわよ」

「分かってるよ」

「へいへ～い」

行列の最後尾について歩き出す。本来ならばこれから町を一周するらしいのだが、今回はそのままテオが住まうというラティオ活火山に登ることになっていた。

「フェンリルさん、大丈夫？　なんか、死んだように寝てない？」

「大丈夫でしょ？」

事情を知らないルナが心配そうに呟く言葉には、何も知らない風を

装って軽く流すように答える。彼女の言葉通り、行列の中心で担架のようなものに乗せられている問題のフェンリルは、ピクリとも動こうとしなかった。本人の強い希望で花嫁衣装の着付けこそしていないが、

彼は今、前合わせの白い夜着を纏って揺れていた。

（黙っていれば、確かに綺麗な人だわね）

そこは認める。だがしかし、それは決してシヴァやルナが言うような感情ではないし、そんな感情を彼に抱いていると第三者に思われるのも堪らなく嫌だ。

「まだ着かないの？」

行列の最後尾を歩く神官に問いかけると、旗を持った男が白いマスク越しに振り返る。

「もう少しです。マグマのある場所に我々人間は近寄れませんので、儀式は活火山のほぼ麓で行うのが通例です」

「どこだって同じでしょう。さっさと始めちゃいなさいよ」

「そう言われましてもですね……。あまり村に近い場所にテオを呼べ

ば、村に被害が……」

「どうせ滅びる村でしょうが、少子化で。いいじゃないの、少しくらい」

「危険な発言はお控えください」

思ったことをそのまま口にしただけなのだが、思いがけず強い口調で窘められてしまった。

「ああ、山登りって嫌だわ。足は痛い、腰は痛い。誰が責任とってくれるってのよ」

「正確にはまだ山ではありません」

先ほどの神官に、はっきりと否定されてしまった。

「光って相変わらず体力ないよね」

「ほっといてよ」

溜め息をつくルナは、長い上り坂を歩いているにも関わらず平然としている。後ろにいるシヴァもまた同様だ。何だか自分だけ遅れをとっているような気がして、無性に腹が立つ。

「別にヘバってなんかないからね！　ちょっと言ってみただけじゃない！」

「はいはい、そうだね」

軽くいなされてしまった。同じ歳なのにルナの余裕を帯びたこの態度が何となく癪に障る。

「それにしても、何にもねえところだ～な」

ルナに向かって何か言いかけた時、シヴァが溜め息混じりに言ってきた。

「確かにそうだね。山だって言うのに、どこにも木がない」

相槌を打つルナの声に、光宮は無意識に周囲を見渡していた。二人が言う通り、ところどころに突き出た岩があるだけで、あとは足元に灰色の石ころが転がっているだけだ。言葉通り、無気味なほどに何もない場所だった。

「ラティオ活火山はアレね」

前方に、夜の闇より禍々しい雰囲気を纏う山が聳え立っている。漆

黒の山肌に、マグマが漏れ出た赤い筋が走っていた。さながら山が血を流しているかのような光景に、風に乗って唸り声に似た火山の慟哭が混じる。

「気味の悪いところだ～な」

「同感」

「そんなことないわよっ！」

強がって言ってみたが、二人には無視されてしまった。だが、光宮自身はっきりと感じていた。目的地に近付くにつれ、言葉では言い表しがたい何とも気持ちの悪い空気が肌に纏わりついて離れない。敢えて言葉にするならば、ナイフを持った殺人鬼が今にも自分を刺し殺そうと背後に潜んでいるような、そんな気配が一歩を踏み出すことに強くなっていく。

「話に聞いていた以上だね、古龍ってヤツは」

「そうみたいだ～な」

そう言えば、古龍が生息する場所には鳥竜種どころか飛竜種でさえ

近寄らないという話を聞いたことがある。人間よりも遥かに気配に敏感なモンスターや野生動物たちは、この周囲に決して近づいてはならない危険なモンスターがいると感じた途端、早々に逃げ出していくものなのだ。それほどに、古龍種に分類されるモンスターや一部のGクラス・モンスターは危険極まりない存在なのである。

（倒せるかしら）

今更ながら不安になってきた。

（こんな武器と防具しかないのに……）

ふいに、「錬金術」という言葉が頭に浮かんだ。フェンリルから聞き出した話によれば、自分が錬金術をうまく使えばこんな腐ったような武器でもテオを討伐できる可能性があるらしい。

（あの男が、そう言った）

顔を思い出すだけで腹が立つ。どうして彼に言われた通りにしなければならないのか。自分たちは確かに彼の部下という立場に収まっているが、だからと言って理不尽な要求まで聞いてやる必要はないはず

だ。

（誰が思い通りになんてなってやるもんですか！）

内心で激しく毒づく。錬金術を思い出し、それを使えと言われたところでそんなことがいきなりできるはずなどない。錬金術は言わば秘術中の秘術。素人がやろうと思ってできるものではないし、その内容を知ろうと思って知れるものですらないのだ。

（そう言えば、モンスターの素材で作られた武器と防具にはモンスターの魂が封じられていて、それを可能にしているのが錬金術だって言ってわね）

名前は忘れたが、アルテリアのハンターズ・ギルドの技術開発部の部長を務めるくたびれた男がそんなことを言っていたような覚えが微かにある。

（だからって、私にできるわけないじゃない！）

読書が趣味の自分だが、錬金術に関する書物だけは未だに目にしたことがない。錬金術の内容は、師から弟子へと口伝のみで受け継がれ

るというウワサは本当らしく、どんなに探してもそれに関する書物だけは手に入れることができなかった。

（考えてもムダだわ。私は私のやり方でテオを討伐してやる。将兄の言う通りになんかしてやらないわ）

空気に玉子が腐ったような臭いが混じり始めた。どうやら目的地が近いらしい。

「いよいよね。作戦通り、気を引き締めていくわよ」

「分かってるよ」

「了解だ～ぞ」

何とも言えない重苦しい空気がより一層濃くなった。話に聞くところによる古龍独特の気配というものをその身に感じながら、光宮は無意識のうちに止めていた息を吐き出した。

（さあ、来るなら来なさい、テオ）

先頭を行く神官のひとりが右手を挙げ、その手に持っていた錫のようなものを夜空に翳す。泥沼の底のような濁った空気の中、澄み切っ

た鈴の音が木霊した。行列が止まる。神官たちが円を描くように広がって行ったおかげで、岩に囲まれた丸い空間の中心に据えられた、石の祭壇が視界に入り込んで来た。

「フェンリルさん、災難だね、ホント」

「自分じゃないんだからマシでしょ？」

「まあ、そうだけど」

祭壇の上に転がされ、両手両足を鎖で固定されていく彼を見つつ、光宮は無理やり笑った。

「どうせなら亀甲Xりにすればいいのに」

「見たくねえんだ～ぞ」

軽口でも叩いていなければやっていられない。呼吸をすることさえ億劫に感じるほど、ひたすら空気が重い。じっとりと、手の平が汗ばんでいく。こめかみを、一筋の汗が伝わり落ちた。

（テオを呼ぶって言ってたけど、どうやって呼ぶつもりなのかしら）

行列の先頭に立っていた神官がフェンリルが寝転がっている祭壇の

前に立ち、深々と一礼した。そして、聞いたこともない言葉を喋り始める。ボソボソと抑揚のない、何とも耳に残る嫌な雰囲気の言葉だ。呪文ともとれるその言葉が始まると同時に、周囲を囲む神官たちが一斉に地面に土下座した。

（ぎ、儀式って話に聞いていた以上に無気味だわ！）

地面に土下座している彼らが呪文のような言葉に合わせて頭を上げ、再び下げてを繰り返す。そしてふいに言葉が止まったかと思うと、呪文を唱えていた神官が大きく息を吸い込み、夜空を仰ぐ。

「テオ・テスカトルー！！　今年の生贄はここにおりますー！！　どうぞおいでくださいませー！！」

普通に呼んだ。

「それでは、誠に残念ではありますが、これも村のため」

軽く咳払いをした神官は、真っ白な服の隙間からもったいぶった様子でナイフを取り出した。光宮は自分の顔から血の気が引いて行くの

を感じた。

「あなたは幸運です。たった一口の酒でここまで意識を失うとはさすがの我々も予想外でした。普通なら、意識があるままその喉元にこの短剣を突き刺される。しかし、これもまたテオにいたぶられる生贄へのせめてもの情け」

「ち、ちょっと待ちなさい！！」

光宮とルナ、シヴァ、そしてフェンリルの陰の中からサスケが同時に飛び出した。さすがに殺されてはマズイ。嫌がらせはしたいと思っていたが、さすがにそこまでされれば困るのだ。

「いくらなんでもやり過ぎでしょう！！　だいたい、これはテオをおびき出すための演技だって何度も打ち合わせしたでしょうが！！　何考えてんの、あんた！！」

「……そのことですが」

短剣を構えた神官に向かって詰めよれば、マスクの下から重い溜め息が聞こえて来る。

「我々はあなた方がテオを討伐できるとは思っていません。危ない橋は渡れない。それくらいなら、恒例通りに儀式を執り行い、テオの気を鎮めた方がよほど村のためというものです」

あっさり手の平を返した。握りしめた拳が震える。

「やってみなければ分からないでしょうが！　何なのよ、もう！！」

「何とでもおっしゃってください。さあ、テオが来ました。あとは戦うなり、殺されるなり、ご自由に」

そう言って、神官たちは有り得ないようなスピードで一目散に逃げて行った。後に残された光宮たちの頭上が熱くなる。どこからともなく、巨大な羽音が聞こえて来た。

交差9（後書き）

番外編　～憧れのクエスト～

１２歳の光宮は密かにハンターなる職業に憧れていた。一度でいいから

巨大なモンスターを討伐し、地面に伸びたその死体の上に片足を乗せて高

笑いしてみたいと思っていたのだ。

「と、いうワケだからこれからクエストに出るハンターのパーティを探し

て来てちょうだい」

後宮の召使いは走った。社会人になってからこれほどまで廊下を疾走し

たのは初めてというくらい走った。そして、無事に光宮はクエストに同行

させて貰えることになった。

「くそ！　どこに逃げやがったんだっ！」

「ボクの大剣はもう限界です！　支給品はまだなんですか！？」

「私はもう弾がないの。何とか落とし穴にガルルガを落として一気に叩いたらどうかしら？　もうそれしか手はないわ」

念願叶ってイャンガルルガ討伐戦に同行させてもらったはいいのだが、ハンターたちの雲行きは見るからに怪しい。

「罠を仕掛けるにしろ、ガルルガがどこに降り立つかも分からないってのに！　下手したら時間と労力とアイテムのムダになるぞ！！」

「だったらどうしろって言うのよ！？」

そんな会話を聞きながら、光宮は何気なく空気の匂いを嗅ぐように鼻を軽くひくつかせた。

「ガルルガはエリア３に降り立つわ」

断言するように言うと、三人のハンターたちが一斉に驚いた顔をする。

「翡翠院さま、失礼ですが、どうして分かるんですか？　確かにガルルガ

にボクはペイント・ボールを当てましたが、この風向きでは方向さえも分

かりません」

光宮はニヤリと笑ってみせた。

「オ・カ・ル・ト」

ハンターたちが、火球を吐くクシャルダオラに出会ったような顔をする。

「あたしのオカルトは常連のおばちゃん以上よ」

そしてクエストは更に難航した。

交差１０

朝一番、シヴァが住んでいるマンションのドアを開けると、そこには
メイド服を着た夏葉がいた。
「可愛いだ～ろ？　似合うと思って着て貰ったんだ～ぞ」
愕然として固まる中也に向かって、シヴァが何でもないことのように
言ってくれた。
「ちょ……おま、シヴァ……な、何、考え……」
フリルが付いた白と黒のワンピースに、ふわふわで真っ白なエプロン
をかけ、頭にはこれまた白い花がふんだんにあしらえてあるカチューシ
ャが乗っかっている。しかしながら、夏葉の細くて白い脚を覆ってい
るのはなぜか薄く透けた真っ赤なストッキングで、それを吊るガータ
ーベルトが短いスカートの間から見え隠れしている。確実にシヴァの趣

味で

あろうことは容易に想像がついた。

「メイド服の下は亀甲Ｘり～な」

刺激的な夏葉の姿に目のやり場がない中也に向かって、シヴァが更に

衝撃的な一言を呟く。

「ジョーダンだ～よ」

その光景を想像する。ついでにその「過程」を想像する。一気に下半

身に血流が集まった。これぱかりは仕方ない。男のサガだ。

「相変わらずだ～な」

「悪かったな。朝っぱらからそういうジョーダン言う方が悪いんじゃな

いか」

ソファに勝手に座りつつ、そんな文句を垂れてみた。正面に座ったシ

ヴァがシニカルに笑う。時計の針は午前9時を指そうかとしていた。

広

いリビングには朝の眩しい光が大きなガラス窓から差し込んで、電気を
付けていないにも拘わらず随分と明るい印象を与えて来る。
「レイは？」
「まだ寝てる～ぞ」
「そっか」
久々の「我が家」ということもあって、妙に早く目が覚めてしまった
中也だったが、レイは慣れない環境でもよく眠れるようだ。羨ましくも
あり、シヴァと夏葉が二人きりでいったいどんな会話をして何をしてい
たのか非常に気になる自分がいる。
（夏葉は普段通りだし、別におかしなことしてるような雰囲気じゃない
から大丈夫だろうけど……）
分かっていても、何か気になる。別にシヴァのことを信用していない

わけではないのだが、それでも心配なものは心配なのだ。

（シヴァのヤツ、妙に雰囲気違うし）

自分が知っていたはずの幼馴染とはどことなく違う気がするからこそ、

夏葉のことが気になるという気持ちはあるかもしれない。

「おはよ～」

中也が一人で悶々としていた時、ドアが開いて眠たそうな顔のレイが

姿を現した。彼女の顔を見て、なぜかほっとした。

「なっちゃん、あんた何てカッコしてんの？」

夏葉の姿を見るなりレイがそんな感想を口にする。

「着れれば何でもいいから」

「……制服はどうしたのさ」

「洗った」

レイの質問に、夏葉が普通に答えていた。着れれば何でもいいと言う

が、もう少し気にしてほしいと思ってしまった。対面式のキッチンで何
や洗い物をしている夏葉が動く度に、スカートの端が揺れてガーター
が見え隠れするその姿が堪らない。

「レイ、サンドイッチ作れるけど食べる？」

「……もらうよ」

「分かった」

中也の隣に座ったレイの返答を聞くなり、夏葉が冷蔵庫を開けて中か
ら何やら取り出し始めた。

「コンビニで買って済ませようぜ～って言ったんだけど～よ、ちょうど
駅前で……何つ～んだっけ～か？　農家のオッサンたちが野菜売ってる
ヤツ」

「朝市？」

「そう、それだ～よ。それに出くわして～な。なっちゃんが作って

くれ

るって言ってくれたんだ～ぜ」

「へえ」

手際良くレイのサンドイッチを作っている夏葉に視線を向ける。

もう

少し早く来たら、夏葉の手作り料理が食べられたかもしれないと思うと

とても残念だった。

（いいなあ、レイ）

女の子にヤキモチを妬いても仕方が無いと思うのだが、綺麗な形に整

えられたサンドイッチを食べている彼女が羨ましくて仕方ない。そんな

ことを思っていると、夏葉が中也とレイそしてシヴァの前にコーヒーを

運んできてくれた。

「あ、ありがと」

コーヒーでも嬉しい。メイド姿の夏葉が近くに来るだけで、何と

も言
えない気分の高揚を味わった。
（か、かわいいっ！）
中也の鼻先3センチを、カチューシャが掠めていった。そのまま腕を
伸ばして抱きしめることができたなら、どんなにいいだろうか。願いと
は裏腹にスッと離れていってしまう夏葉の姿を、中也は無意識に目で追
いかけていた。
「で～。なっちゃんと本庄の住所、分かった～ぞ」
「え？」
思考が完全に夏葉に支配されていたせいか、中也はシヴァが何を言い
出したのか一瞬分からなかった。
「中也、これ本庄の住所な。送って行ってやれ～よ」
「え？　ああ、うん」

コーヒーテーブルの上に汚い字で何か書かれた紙を放り出すなり、シ
ヴァが咥え煙草のまま立ち上がった。
「なっちゃん、制服が乾くまで時間あるから～よ、ちょっと出かけよ～
ぜ。さっき言ってたバイク乗せてやる～よ」
「ちょっと待って。これ洗ってから」
状況についていけずに、中也はレイと顔を見合わせる。住所など、ど
うやって調べたのか、と聞く前に彼はさっさと夏葉の傍に行って、洗い
物をしている彼女と何やら楽しそうに話し始めた。
「何なんだよ、あの二人」
レイが小声でそう聞いて来た。正直、自分に聞かれても困る。
「シヴァのヤツ、妙に慣れ慣れしくない？　いいのかよ、なっちゃん」
「お、俺に言われても……」
夏葉のことだ。将兄以外の男に靡くとは到底思えなかった。それ

はそ
れで自分にとっては辛いことではあるのだが、それでもシヴァと夏葉が
仲良さげに話している光景というのは何だか妙に違和感がある。
（そう言えば、シヴァってあんまり自分から話さないよな）
自分たちが集まっている時、シヴァは話しかけられたり、用がある時
は喋るが、よくよく思い出してみればシヴァが自分から積極的に話をし
ているところは見たことが無い。それは、どちらかと言えば口数が少な
い夏葉も同様だ。だからこそ、シヴァと夏葉が話している様子が不思議
に思えるのかもしれなかった。
（だいたい喋りまくってるのって光だもんなあ。そんでアイツに便乗し
てレイにルナに）
だいたい自分はツッコミ役というかむしろイジラレ役のような気がす

る。光宮が一人いるだけでどんなに静かな空間も途端に喧しくなること

を久々に思い出した。こうして何となく居心地の悪い空間にいると、彼

女のマシンガンが炸裂するようなあのトークが懐かしくなってしまった。

「おい中也、さっさと行け～よ。カギ閉められねえんだ～ぞ」

「あ、ああ、分かった。悪い」

考え事をしていたらいきなりシヴァに急かされた。条件反射で立ち上

がってしまう。そんな中也に、レイも無言で続いた。

「次はもう手え貸してやんねえから～な」

「え？」

マンションのドアを閉めながら、シヴァが何でもないことのように言

ってくれた。一瞬その言葉の意味を測りそこね、中也は呆けた顔をした。

「ガキのころとは違うってことだ～ぞ。俺はお前のことどうでもい

いし、
お前も俺と関わってもいいことなんかないだろ～さ。そういうことだ～
よ」
背を向けて歩き出したシヴァが妙に大人びて見えた気がした。
「中也？　どうしたんだよ」
シヴァが当然のように夏葉を連れて立ち去っていってしまったため、
長い廊下にはレイとふたりきりで残されてしまった。
「あ、悪い。何でもない。行こうか」
手元の紙に改めて視線を落とす。そこに書かれていた住所を確認して
中也はのろのろとエレベーターに向かった。マンションを出たところで
シヴァたちを顔を合わせるのが嫌だったという気持ちもある。意図的に、
エレベーターのボタンを押すことを遅らせた。
「シヴァってさあ」

ふいに、レイが口を開く。

「あんなヤツだったっけ？」

返す言葉が見当たらなかった。

「同じ人間なのに性格が違うとかって、有り得ると思う？」

「さあ、どうだろう」

言いながら、中也はふと思い立った。以前ファーナでベルキュロスを

討伐した際、シヴァが妙に冷酷な表情を一瞬だけ垣間見せたことがある。

その時は気のせいだろうと思っていたのだが、今になって思えばそうで

はなかったのかもしれないと思った。

「……もしかしたら、こっちの世界のシヴァが本当のあいつなのかもし

れない」

そう思うと、胸の奥に蟠りを感じずにはいられない。親友だと思って

いた人間が、本当の顔を隠して自分たちと付き合っていた……。何だか
裏切られたような気分だった。
「とりあえず、レイの家に送って行くよ」
「いやだ」
「へ？」
エレベーターが到着した。二人して乗り込みながら、中也は返ってき
た意外な言葉に驚いて彼女の顔を見る。
「家にひとりでいて何しろって言うんだよ。勝手も分かんないって言う
のにさ」
「それは、まあ……」
「それよか、こっちの世界を案内しろよ、中也」
遠くで、雷が落ちるような音がした。ガラスの向こうは快晴。確実に、
シヴァが言っていた愛車のエンジン音だろう。

「分かった。いいよ」

交差11

ふと目が覚めると、目の前に突進してくるテオ・テスカトルがいた。

「!?」

慌てて身を起こそうとして、自分の両手両足が鉄の鎖で繋がれていることに気付いてフェンリルは愕然とした。

「ご、ご主人~!!」

物凄い勢いで地面を駆け、サスケが近寄って来ようとしていた。ムダと知りつつ、無意識に鎖で繋がれた手を振り回す。耳元で、鉄が擦れる嫌な音がした。

「サ、サスケ! これ! これ外して!!」

「わ、分かってるニャア~!!」

テオが迫っている。冷たくひえていた夜の空気が、炎を司るモンスターの襲来により急激に熱せられていくのが分かる。ジリジリと肌が焼かれて行く。あまりの熱に、思わず顔を歪めた。

「危なーい！！」

どこか遠くで光宮の声がした。同時に、彼女が撃ったと思われるヘビー・ボウガンの弾が飛んできて、なぜかサスケに直撃した。

「ニャア！！」

こういう時の光宮の射撃成功率はプロ級である。

「サスケ！！」

起こせない体をムリに捻ってサスケの様子を窺おうとした時、すぐ近くに、モンスターの吐息を感じた。

「……っ！」

熱い。全身から汗が噴き出す。ゆっくりと視線を上に向ければ、そこに炎を纏ったモンスターが暗い空を焦がすような悠然たる姿で佇んでいた。古竜種は例外なく体臭がない。こんなに近くに巨大な肉食モンスターがいるというのに、何の臭いも漂って来なかった。

「っつ……」

真っ赤な毛並みが風に揺れている。黄金色をした瞳が、じっと自分

を見下ろしていた。ゆっくりと、頤が降りる。意図的に体内から生ずる熱を抑え込んでいるのか、手が触れるほどに近寄って来られても火傷を負うほどの熱さは感じなかった。

（あっち行け！　あっち行け！　あっち行け！）

心の中で思い切り叫んだが、残念ながらテオには通じなかった。洞窟の中を吹き抜けて行く風のような音を出し、テオは呼吸していた。ひどくゆっくりとしていて、とても深い。それでいてどこか気味の悪さを漂わせる吐息を耳元に感じ、動けないフェンリルはとりあえず相手を刺激しないように、ただじっとしていた。

「な、何がしたいんだ、こいつ……」

何をするでもなく自分を見下ろしていたテオだったが、フェンリルが思わずボソリと呟いたその瞬間、鼓膜が破れるような咆哮を上げ、夜空に向かって高々と角を振りかざした。

「なんで怒らせるのよ！？」

「俺が何したって言うんだよ！？」

理不尽な光宮の文句に、とりあえず正当な言葉を向ける余裕があったのも一瞬のこと。次の瞬間、フェンリルはそれどころではなくなった。

「あ、あちちち！！　うわっちい！！」

テオが抑え込んでいた熱を開放したらしい。途端に剥き出しの皮膚が熱い空気に舐められ赤くなって行く。テオを中心に、熱風が渦巻いていた。白い夜着の裾が風にはためき、耐えきれない熱さにフェンリルは石壇の上で身を捩る。

「あっちい！！　マジで熱い！！　ひ、光！！　何でもいいからこいつ、どうにかしてくれ！！」

「ムリに決まってんでしょ！？」

「だったら、せめてこのクサリを外せー！！」

体を拘束している鉄の鎖さえどうにかなれば、逃げるなり戦うなりどうにでもできる。ただそこにいるだけで火傷を負わせるほどの熱を発するテオの前に、動けない状態で転がされているというこの状況だ

けはどうにかして欲しかった。

「文句があるなら、この村のヤツらに言うんだ～な」

「なっ！？」

ふいに自分とテオの間に割り込んできた人物がいた。灰色に近い金色の髪が、炎が巻き起こす風に揺れている。誰なのか確かめるでもなく分かる。顔を見ただけでも腹立たしい弟のシヴァだ。突然の侵入者に、テオが反射的に後ろに飛びずさる。そんなテオに、シヴァが不敵に笑った気がした。

「さあて、始める～ぞ！」

シヴァが構えているのは先ほどまで光宮が持っていたはずのドスギアノスのヘビー・ボウガンだった。すぐ近くで威嚇してくるテオを前にしても慌てることなくヘビー・ボウガンを手早く組み上げると、テオが口を開けた一瞬の隙に至近距離から弾を放った。口の中に弾を食らったテオが僅かに怯んで一歩、後退する。

（ムチャクチャだろ！？）

確かに下位の武器とは言え、至近距離から粘膜に食らえばそれなりの効果は期待できるかもしれない。だが、ヘビー・ボウガンは威力がある分、重量もある。もともとは遠距離から味方を援護するために考案された武器だ。モンスターがこんな近くにいる状況で使用すれば、リスクの方が大きい。

「ルナ！」

「了解！」

シヴァが手早くヘビー・ボウガンを背中に担ぐと同時にルナが滑り込んで来てテオの眼球目がけて矢を放った。しかし、彼女の矢はテオが纏う熱の風に邪魔され、途中で大きく狙いを逸れてしまう。

「まあ、せっかくだし～な、あんたはもう少しそこでおネンネしてればいいんだ～ぞ」

「なんだって！？」

シヴァのセリフに頭に血が昇る。思わず身を起こそうとしたが鎖に阻まれた。そんな自分に構うことなく、シヴァとルナはテオに向かっ

て少しずつ近づいて行った。

（サスケは……！？）

自分のアイルーがいれば、とりあえずこの拘束を外してもらえる。

そう思って周囲に視線を巡らせると、サスケは光宮によって岩に縛り付けられている真っ最中だった。

「シヴァ！　頼んだ！」

「おう～よ！」

絶望に苛まれる自分を余所に、シヴァとルナがジリジリとテオに近付いていく。ルナが弓を構え、熱風に邪魔されると知ってか知らずか矢を放つ。テオの視線がそれを追う。そこへ、ヘビー・ボウガンでシヴァが射撃した。鼻先に弾を食らったテオが煩わしげに顔を振る。そして牙を打ち鳴らすと、周囲で爆発音が木霊した。

「あっちぃ！！」

顔の横で大タル爆弾が爆発したかのような衝撃を食らった。幸い火傷こそしなかったが、爆発によって生じた土埃を思い切りかぶってし

まった。炎に炙られた土は熱を孕んでとにかく熱い。払い落そうにも手が拘束されていて動かせない。ひたすら耐えるしかなかった。

（クシャルの防具、持ってくればよかった）

今更ながらに、そんな後悔に襲われた。あらゆる氷の属性を持つモンスターの中でも、その最高位に位置するクシャルダオラの素材で作られた防具を纏っていれば、たとえテオ・テスカトルが放つ熱気であっても火傷を負うことはない。このラティオ活火山にはテオがいると分かっていたのに、手ぶらでやって来た自分の考えの無さに自分で呆れた。

「もー少しよ！　もー少し！」

ひたすら同じことを繰り返しているシヴァとルナに向かって、光宮が遠くからエールを送っていた。

（光は何がしたいんだろう……）

本気でそう思った。とりあえず、彼女が自分に好意を持っていないことだけは分かる。テオが離れて行ったおかげで少しばかり涼しくな

った空気の中、フェンリルは少しだけ息をついた。

「!?」

安堵した瞬間、テオが勢いよく地を蹴った。黄金色の瞳は迷うことなく自分を見据えている。生身で古龍の突進を食らえば、さすがの自分も大ケガでは済まない。考えなくても分かるだけに、絶叫するしかなかった。

「だ、誰でもいいからコレ外せー!!　マジで死ぬー!!」

「ああー!!　もうー!!　何でそっちに行くのよ!?」

自分の心の叫びとは裏腹に、どこまでも冷たい光宮の声が聞こえてきた。

「ちょっとシヴァ!!　ルナ!!　何やってんのよ!!」

「俺に言われても～な～」

「そうだねえ」

誰も助けてくれない。ガシャガシャと耳触りな鎖の音を聞きながら、

次第に近付いて来る古龍の姿を呆然と見据えていた。視界の端で、シ

ヴァが面倒臭そうに歩き出すのが見えた気がした。

「……っ！」

鋭い牙が自分に届くのが早いか、それとも石壇ごと吹き飛ばされて圧死するのが早いか。そう思った時、ふいにシヴァが地面から何かを引っ張り出した。同時に、自分に向かって突進していたテオが激しい音を立てて顎から地面に転がりこんだ。土埃が舞う。熱を纏った真っ赤な毛並みが肌を撫で、その熱さに思わず顔を顰めた。

「何やってんのよ！？　それはまだ使わないハズでしょ！？」

「あ、そうだったか～な」

改めてシヴァの方を見てみると、弟は手に太い鉄製の縄のようなものを持っていた。どうやらそれを地面にあらかじめ埋めておいたようだ。おそらくは、突進するテオを転ばせる罠のようなものだろう。とりあえずは、一命を取り留めた。

（お、俺もう帰りてえ！！）

ヒヤヒヤしたどころの話ではない。本気で死ぬかと思った。こんな

危ない経験は二度とゴメンである。それに、ここにいる誰もが自分の拘束を解いてくれる気配を見せない以上、いつまたこんな危険な思いをするか分かったものではない……と思った矢先、ゆっくりと起き上がったテオが再び牙を打ち鳴らした。

「うげっ！！」

爆発の直撃こそ受けなかったのだが、再び巻き上げられた熱砂を思い切り食らって激しく咳き込んだ。

（も、もう～嫌だ～！！）

喉の奥がヒリヒリする。拘束されたまま手足を振り回していたせいか、そろそろ手首や足首も痛くなり始めている。

（そもそも何で俺、ここに来たんだっけ……？）

何となく来たくなっただけだ。それだけの理由だったはずだ。それなのに、いつの間にやらこんな面倒なことに巻き込まれている。面倒どころではないかもしれない。今まさに、テオが怒りに燃える瞳で自分を見据え、突進しようと足を踏みならしている。

（サスケはあのザマだし……）

視線を巡らせれば、必死に縄から抜け出そうともがいているサスケの姿が目に映る。それはそれで可哀そうなのだが、サスケ以上に危険な場所にいるフェンリルにはどうしてやることもできないし、簡単に捕まったサスケに怒りさえ覚えてしまう。

（父さん～！　声楽さん～！　おじさん～！　誰でもいいから助けてよ～！！）

何だか妙に赤い夜空に向かってフェンリルはここにいない仲間たちの顔を思い描いた。

「ご、ご主人！！」

サスケの声が聞こえて来る。名前を呼ばれたからと言って何ができるわけではないのだ。突進してくるテオの姿とその熱を肌で感じながら、フェンリルは無意味に鎖で繋がれた手足を振り回す。

「せえの～！！」

何だか可愛らしい掛け声が聞こえて来た。見れば、先ほどシヴァが

やったのと同様に、光宮とルナが二人で地面に埋められた鉄縄を引っ張り上げていた。それを察したらしいテオが慌てたようにその場を飛び退く。

（……？）

狙いが外れ、光宮が舌打ちする気配がした。

（なんだ、こいつ）

仕掛けられた罠を回避するというその行動を見て、フェンリルは妙に違和感を覚えた。

「落とし穴に誘導するわよ！　シヴァ！　ルナ！　さっきの作戦で！」

「了解だ～ぞ！」

「了解！」

光宮たちが一斉に動き始める。シヴァとルナがペアになってヘビーボウガンと弓を使い、威嚇射撃を行おうとしたところで、テオがふいに誰もいない方向に向かって駆け出し始めた。

「ああー！！　あんなところに！！　もお！！　面倒ね！！」

光宮の言葉に、テオが僅かに頭蓋を下げる。そして走り始めた光宮たちをあざ笑うように、再び誰もいない場所に駆け出してしまった。

（……まさか、と思うけど）

交差11（後書き）

番外編　～キッチンの主～

じっとりと佇む夜の闇の中、ヤツらはいた。

「出たー！！　出ました！！　ちょっと！！」

鬼龍一家が住まう屋敷に、声楽の叫び声が木霊する。

「どうしたの？」

真っ青になって壁に張り付いていた声楽に話しかけてきたのは、絶叫を聞いて駆けつけてきたフェンリルだった。

「ご、ごきぶり！　ごきぶり！！」

「ご、ゴキブリ！？　ご、ごめん、声楽さん！　俺もムリ！！」

「京吾さん！　京吾さん呼んで来てください！！　早く！！」

「わ、分かった！」

そう言えば王子は、ヤンという名の変人の影響でカンタロスは平気なのにゴキブリはダメだったのだ。

こうなればもう一家の主に頑張ってもらうしかない。

声楽はゴキブリが消えた棚をじっと睨みながら、真打ちの登場を

今か今かと待ち続けた。

「どうしたんだ。血相かえて」

やがてフェンリルに引っ張られるようにして目的の人物が姿を現した。

「何も言わずに、あそこにいるゴキブリをあなたのレイヴァーティンで叩き斬ってください」

「はあ？」

ゴキブリ、と聞いて本人はあからさまに呆れた顔をしている。面倒だ。どうしてやろうかと思った時、いきなり台所の壁の方から別のゴキブリが飛行してきた。

フェンリルと抱き合い、その恐怖をやり過ごす。

「……明日、煙で皆殺しにします」

ボソリと彼女は呟いた。

「キッチンの主はこの私です」

害虫がいることは許せない。

交差１２

小さな窓の向こうに軒を連ねる家の瓦が、夕焼けの赤を反射して鈍い
輝きを放っていた。かつてここに暮らしていたころには、見慣れたとい
う意識すら念頭に浮かばないほどに当たり前だったその光景が、今はと
ても懐かしく感じる。

（もうひとりの俺が暮らしていた部屋……）

夕べ戻って来た時には、不思議とそんな思いは浮かんでこなかった。
自分が思っていた以上に疲れていたのかもしれない。部屋に戻るなり、
中也は泥のように眠りに落ちた。

（変わった、な）

ベッドやタンスなど、大型の家具こそ自分の記憶と同じ位置に居座っ
たまま静かに主の帰りを待っている。しかし、本棚の中身や衣服な

どは
最早違う顔をして、夕闇に濃くなる陰に沈んでいこうとしていた。
　中也は何となく部屋の中を横切って自分の勉強机へと近寄っていく。
小学校に入学する際に、母方の祖父母から送られたその机は、ところど
ころシャープペンシルの粉に汚れ、あるいはどこでどうやって付いたの
か分からない傷を抱え、そこにある。
（懐かしい）
　無意識に手を伸ばし、その表面に触れてみた。この三年間、自分では
ないもうひとりの自分は、ここに座って何を思っていたのだろうか。中
也は、その手がかりとなる断片を求め、机の周囲に並ぶ参考書やノート
の類に視線を巡らせた。
「さっぱり分かんねえや」

何となく手に取った数学の教科書をパラパラと捲ってみた。あちらと
こちらでは同じ年齢の少年少女に教える内容が異なっているせいか、そ
こに並んだ数字と記号を見てもまるで異世界の言葉のようにさえ見えて
しまう。そんな自分に、中也は苦笑いを零した。
教科書を棚に戻し、乱雑に並べてあるノートの類を手にとってみる。
どれもこれも、今の自分には意味不明の文字と数字と記号のオンパレー
ドで、見ていても何もおもしろくなかった。
（マジメに勉強してるんだな、俺）
ノートにはあれこれ添削した形跡が残っている。それこそ、数学の問
題を解いたものには、赤いペンで書き込まれた文字に目が痛くなるよう
な有り様だ。
（そう言えば、俺も向こうに行ったばかりのころは猛勉強したっけ

なあ。

シヴァが文字の読み方とか、いちいち教えてくれて……）

ふと思い出した幼馴染の顔に、中也は胸の奥に言葉には言い表せない

苦い思いが込み上げるのを感じた。今は考えても仕方ない。そう思って、

軽く首を振る。

（こっちの俺も、とりあえず何でもいいから知ろうとして、とにかく勉

強しまくったんだろうな。やっぱ俺は俺ってことかな。どこの世界にい

ても……）

そう思うと、嬉しいような悲しいような、何とも言えない微妙な気持

ちになった。中学生時代、中也はアメリカに行きたいと思っていた。映

画やドラマの中で垣間見るアメリカ人の生活スタイルや物事の考え方、

捉え方があのころの中也にしてみればひどく魅力的だったのだ。し

かし、

中也はアメリカには行けずに異世界へと旅立った。

（俺は、何かを変えたかったのかもしれない）

ここではないどこかへ行けば、今とは違う自分になれるかもしれない。

当時の自分は否定するだろうが、今になって思い返してみれば自分はど

こかそういうものを求めていたような気がする。

（でも、現実は違った）

異世界という大多数の人間の手が届かない場所へ行っても、自分は勇

者でも無ければ英雄でもない。ただの学生だ。いろいろと複雑な事情が

あって「普通の学生」とは言い難いものがあるのは事実だが、それでも

自分は「その他大勢」のひとりに過ぎないのだと自覚していた。

（もしあの日、向こうに飛ばされることがなくて、ずっとこっちにいた

ままで……それで夢を叶えてアメリカに行けたとしても、たぶん、俺は
何も変わらずにいたと思う）
それが分かるようになっただけ、中学生時代の自分よりは幾分マシに
なったような気もする。自分が何を追い求めているのかさえ分からない
まま、ただただ違う世界を求めていたあのころと今は少し違う。
そして中也は表紙に向こうの文字で大きく「帰りたい」と書かれたノ
ートを見つけた。
（日記、か？）
他人の日記を勝手に見る分には問題があるが、自分の日記なのでいい
だろうと考え、中也はボロボロになった薄いオレンジ色のノートを捲っ
た。
「うわ……」

中身は幼稚園児の勉強かと疑いたくなるような代物だった。ひらがな
から始まり、簡単な漢字から難しい漢字が何度も繰り返し書かれている。
その横には必ずといっていいほど向こうの文字で読み方が綴ってあり、
まさしく自分がしたのと同じ過程をこちらの自分も行っていたことに、
思わず嘆息が漏れ出た。
（大変だっただろうなあ。向こうの文字は一種類しかないけど、こっち
はひらがなにカタカナに漢字に……）
痛んだページのところどころに、必死で文字を覚えようと努力してい
たころのもう一人の自分の本音が書き込まれていた。ノートの最初の方
はまさしく絶望。それ以外に言い様がない。そして郷愁。表紙に大きく
書き込まれている通り、帰りたいという五つの文字は数えきれないほど

散らばっていた。そしてページが進むにつれて、もう一人の自分は次第
に前向きになっていく。
（落ち込んでいても仕方ない。帰る方法が分からないんだから、こっち
で生きて行くしかない、か）
自分もかつて同じようなことを思ったような気がする。そしてそれま
での自分の人生では決して相対することはなかったモンスターという生
き物にひどく興味を惹かれ、のめり込んで行ったような覚えがあった。
そんなことを思い出しつつ、ページを一気に捲って文字が書き込まれて
いる最後のページを開く。そこには「ＡＸＢ最高！　センターの大島、マジ
で可愛い！！！！！」と書き込まれていた。
（……ＡＸＢって何だよ。アイドルか？　センターって何！？）

どうやらこちらの自分は違う方向に走ったらしい。自分がかつてここ
にいたころにはそんな名前のアイドルは聞いたことがなかった。どんな
アイドルだと気になって机の引き出しを探れば、そこには問題の「大島」
とやらの写真が数枚入っていた。

（自分のことながら……なんか……）

むしろ自分のことであるだけに、余計に恥ずかしいとも言える。しか
し、その写真に写った女の子はどこからどう見ても自分のタイプだった。
夏葉とは違うが、それでもテレビで彼女を見かけたらその瞬間にファン
になるであろうと確信する自分がいるのもまた事実である。

（まあ、それなりに楽しんでるならいいや）

自分もまた、それなりに楽しんでいる。自分ではない自分が築き上げ
てきた人生の続きを引き受け、自分なりに頑張って生きて来たつも

りだ。

勇者ではない。英雄でもない。それでも、もう一人の自分に恥ずかしい

と思える生き方だけはしていない。根拠はないが、今はただそう思える

自分がいる。それだけで充分だった。

「中也ー！！　ご飯よー！！」

階段の下から母親が呼ぶ声が聞こえて来た。何とも懐かしいその響き

に思わず笑みを零し、中也は踵を返そうとしてふと思い立った。ボロボ

ロになったノートを開き「大島、マジ可愛い！！！！！！」の後に、向

こうの言葉で少しばかりメッセージを書き込む。そして母親に返事をし

つつ、部屋を出た。

＊

「おお、中也〜。今日はちゃんと家にいるんだなあ。昨日は夜遊びした

って言うじゃないか～。お前もやるなあ～」

あちらとこちらでは食材が違う。それにも拘わらず、どちらの世界で

も母親が作った料理は同じ味がする。何とも不思議なことだと思いなが

らも久々のダイニングでの食事をしていると、父親がニヤニヤしながら

そんな言葉をかけてきた。

（そう言えば、うちの父ちゃんってファーナの国王だったっけ？）

すっかり忘れていた事実をふっと思い出し、中也は質問には答えずに

改めて自分の父親の顔を凝視する。

（有り得ねえ）

右から見ても左から見ても、父親の顔はどこにでもいる「オッサン」

にしか見えない。コレが国王だと言われて信じる者がいるならばぜひと

も会ってみたい。そう思わせるには充分なほど、中也の父親は普通

の中

年だ。だが、一応聞いてみることにする。

「なあ、父ちゃん」

「何だ、あたま……あらま……あまらた……」

改まって、と言えない父親が一生懸命、真剣な顔を作りながら聞き返

して来た。

「父ちゃんってさ、実は会社ですごい出世してるとか、そんなことない

よな？」

中也は至極マジメに聞いた。少なくとも、そのつもりであった。しか

し、一瞬だけ落ちた沈黙の後、父親と母親が揃って腹を抱えて笑いだし

てしまった。

「心配するな、中也！　父ちゃんは万年・平社員だ！」

返って来た答えに、中也はせめて「係長」くらいにはなって欲しいと

率直に思ったのだが、それを言ったところでどうにもならないことは身
に沁みて知っているので麦茶と一緒に飲み下した。
「そう言えば、兄ちゃんと姉ちゃんは？」
両親の笑いが納まったタイミングを見計らって、先ほどから気になっ
ていたことを聞いてみた。すると、今度は二人揃って音爆弾を食らった
イャンクックのような顔になる。
「なんだ、中也。お前、また記憶喪失になったのか？」
返す言葉がない。向こうでもこちらでも、自分には「記憶喪失」とい
う言葉が付いて回って離れないようだ。
「龍之介は一人暮らししてるわよ。さすがにもういいトシなんだし、い
つまでもゲーム猿やってて貰ってたんじゃ困るじゃない」
「へえ、ついに」

「そうそう。長男がネット廃人で困るって近所の人に相談して回ったの
よ。そしたら有名な霊能者の先生にお願いしたらどうかって、アドバイ
スしてもらえたの。それでお祓いを頼んだらね、悪霊と一緒に龍之介も
出て行っちゃったの」

「……」

その光景を思い描くだけで、自分たち家族が世間からどのような目で
見られているか容易に想像がつく。何とも恐ろしいことを当たり前にや
る母親だと今更ながら思った。

「で、姉ちゃんは？」

「晶子なら同棲するって言って、三か月くらい帰って来てないぞ～」

かつ丼をかきこみながら、父親が何でもないことのように言ってくれ
た。親として他に何か言うべきことはないのだろうか。普通はもっと怒

るなり悲しむなり、無理やり連れ戻すなり何かしらリアクションがある
べきだ。
「……相変わらずだなあ、父ちゃんも母ちゃんも」
ふと漏れた言葉に、二人は再びクックのような顔になった。
（こっちの世界も、ちゃんと続いてんだなあ）
何となく、自分が向こうに行ったあの日からこちらの時間は止まって
しまったのではないかという気がしていた。だが、こうして改めて変わ
らない家族と変わっていく状況を目の当たりにすると、何とも言えない
気持ちになる。だが、不思議と悪い気分ではなかった。
（向こうに戻る手段を探さなきゃな）
自分はもうこちらの世界の人間ではなくなってしまった。はっきりと
誰かに言われたわけではないが、肌でそう感じている。今の自分の繋が

りも絆も、明らかにこちらの世界よりも向こうの世界の方が濃い。
だと

したら、何もかも中途半端に投げ出してきた向こうの世界に戻らなけれ

ばならない。

（探そう。手段を。そしてレイと夏葉を連れて帰るんだ）

交差１３

夜気を満たす激しい熱気に、止めどなく汗が滴り落ちる。

「なんなのよ、もう……！」

テオ・テスカトルに向かってヘビー・ボウガンの弾を放つ。重い振動が
両手を伝って体に響き、光宮は無条件に後退りしていた。至近距離で、相
手は巨大なモンスター。外れるはずはない。しかし、放物線を描きながら
テオに向かって飛んで行った弾は、着弾寸前でヒラリと交わされ地面が小
さく爆破した。

「どうしてなの！？」

テオは今、確かにシヴァに注意を向けていたはずだった。シヴァが太刀
を振りかざしてテオの気を引いている間に、自分がボウガンで狙撃し、落
とし穴へと誘導する……。簡単なことが、なぜかうまくいかない。

「光！　危ない！」

ルナの声が響く。言われるまでもなく、光宮は突進してくるテオ・テス
カトルの巨体を直前で避けようと身構える。しかし、テオはまるでそんな
彼女の考えを見通したかのように、目の前で止まった。

「っ！」

テオが片手を振り上げる。そのモンスターが近くにいるだけで、剥き出
しの肌が火傷を負い、ヒリヒリと痛んだ。そして、小さな家であればその
一撃で簡単に吹き飛ばしてしまうほどの威力を持った拳が、真っ直ぐに自
分に向かって振り下ろされようとしていた。

「死んでたまるか！」

言いながら、光宮はヘビー・ボウガンをその場に残し、両脚に力を込め
て飛び退いた。重い武器を携えたままでは避けきれない。命あって

の討伐
だ。この状況で遠距離武器を失うことは自分たちにとっては痛手だが、背
に腹は代えられない。
「光！　大丈夫～か！？」
テオが振り下ろした拳が地面を抉る。舞い上がる土煙が、熱風に乗って
体に覆いかぶさってくる。熱い。ひたすら熱い。だが、熱さを感じられる
程度には無事だ。
「へーきよ！　それより！　どうにかして落とし穴まで誘導しないと！」
立ち上がり、テオに視線を注ぎながらも光宮は無意識にホコリを振り落
としていた。汚れていることを気にしている状況ではないが、いつもの癖
というのは恐ろしい。
「シヴァ！　私がオトリになるわ！　太刀で攻撃して！　ルナは弓で援護

よ！」

言いながら、光宮は丸腰のまま落とし穴が仕掛けてある地点へと横向き

に走る。巨石が立ち並ぶ一角に、僅かながら地面の色が違う個所がある。

昨日のうちに村でヒマそうにしている男たちに無償で掘らせた穴だ。深さ

は約3メートル。横幅は5メートルほどある。その上に、今は草で編んだ

布を被せ、薄く砂利を乗せてモンスターの目を誤魔化せるようにしてある

のだ。

（あそこへ落とせれば……！）

穴の底にはネムリ草のエキスを濃縮した液体が大量に塗った杭をたくさ

ん仕掛けてある。テオが眠った隙に、横の巨石を頭の上から落とせばいく

ら古龍と言えどもそれなりのダメージは受けるはずだ。

「気を付けて！！」

テオが牙を噛みならしたのが見えた。その事実を認識すると同時に叫ぶ。

その直後、あちらこちらで爆炎が上がった。幸い、ダメージはない。いつ

どこで爆破するか予想できない攻撃というのは、何とも迷惑な代物だ。誰

も致命傷を負っていないことに安堵したところで、フェンリルが連れてい

た真っ黒なアイルーが爆破の直撃を食らって伸びているのが見えた。

「サスケー！！」

フェンリルの悲痛な声が聞こえる。幸か不幸か、爆破の影響で自分が巻

いた鉄の鎖が切れていた。地面に倒れ伏したアイルーは、震える片手を必

死に主人であるフェンリルの方へと伸ばす。しかし、その手は取られるこ

となく無情にも地面へと落ちて行った。その直後、力尽きたかに見えたア

イルーが元気よく起き上がり、時空移動をするために地面を勢いよく掘り
始めた。
（そう言えば、傷付いたアイルーは時空の中で傷を癒すとか何とか聞いた
ような）
ならば死ぬことはない。放っておいても大丈夫だ。そう判断したところ
で、光宮は改めてテオに向き直る。落とし穴を挟んで自分の正面に来るよ
うに、位置を調節する。
「こっちよー！！　聞こえてんでしょ！？　こっち来なさい！！」
神官と同じように、光宮はテオに向かって声をかけてみた。すると、ル
ナに向けられていたテオの視線がゆっくりと光宮の方へと滑ってくる。
「シヴァ！　ルナ！　もう攻撃はしなくていいから！」
ただでさえ役に立たない武器なのだ。ルナの弓は矢が無くなることが心

配されるし、シヴァが手にしている太刀は刃の劣化が気になる。ここはも
う落とし穴に誘導する作戦ひとつに絞った方がいい。ヘビー・ボウガンを
砕かれて状況はより一層不利になっている。これ以上のムダな消耗は避け
るべきだ。

「こっちよー！　こっちに来なさい！！」

自分の方を向いたまま、何やら攻めあぐねているように見えるテオに向
かって再度呼びかける。

「何やってんのよ!?　もしかして私が怖いの!?　言っとくけどね、私
の方が怖いに決まってんでしょ!?　見なさい、ほらっ！」

言いながら、光宮は両手を頭上で大きく振って見せる。

「丸腰よ、丸腰!!　丸腰の女の子が怖いなんて、あんたモンスターとし
て失格なんじゃない!?」

テオに言っても伝わるはずなどないと分かってはいても、ついつい憎まれ口を叩いてしまう自分がいる。ぴょんぴょん跳ねながらなおもテオを呼び続けていると、ようやく決心したのかテオが自分に向かって走り始めた。

「よし！！　シヴァ！　石を落とす準備を……！」

これで思惑通りにテオが落とし穴に落ちる、と思った瞬間、モンスターは落とし穴を大きく迂回して光宮の右側に回り込んで来た。

「そんな……！」

熱風が頬を打つ。その巨大な頭蓋を軽く左右に振った後、テオがゆっくりと自分に向かって歩き始めた。じわりじわりとテオの巨体が迫る度に、肌を焼く熱もまた温度を上げて行く。

（どうしたら……！）

ここで背を向けて逃げだせば、まず間違いなく背後から噛み殺さ

れる。

しかし他にどうすることもできずに、光宮は無意識に後ずさっていた。テ

オが近付き、光宮が下がる。

「……！」

テオは自らが発する炎の塵を纏い、まるでそれ自体が発光しているかの

ように赤く燃えあがりながらそこに立っていた。ごうごうと風の唸り声が

する。熱風に煽られテオが纏った毛並みが不可思議で美しくさえある模様

を描きながら揺れていた。背中が何か固いものに当たる。視線だけを巡ら

せて背後を確かめれば、そこには巨大な岩があった。逃げ場がなくなった

のだと頭で分かる。今になって、脚の先から震えが全身に駆け巡った。

（甘かった……！）

古龍と呼ばれるモンスターがどれほどのものか、自分はまるで分

かって
いなかった。様々なモンスターが徘徊する樹海を体ひとつで生き抜き、イ
ャンクックを討伐し、そして中也たちはつい最近ベルキュロスという未知
のモンスターを討伐してきた。今までどうにかなってきたのだから、今回
もまたどうにかなるだろうと思っていた。そんな考えの甘さが、こうして
古龍の前に曝け出され、逃げ場が無くなったという状況を生み出した。

「だから申し上げましたのに……」

無言でテオと睨みあいをする光宮の耳に、聞き覚えのある声が届いた。

「ここのテオはそんじょそこらのモンスターとは違うのです。誰かひとり
が生贄にならない限り、テオの怒りは決して収まりません」

カチンときて思わず振り向けば、岩の陰に思い切り隠れているラティオ

村の村長の姿が目に入った。いつの間にやって来たのだろう。全く気付か
なかった。
「ここは諦めて、潔くお嬢さんがテオの生贄になってください。さすれば
今後１０年程度は、この村の平和は約束されるのです」
「ジョーダンじゃないわよ……」
悔しさに歯を食いしばりながら、再びテオを見据える。古龍は僅かに開
いた口から牙をちらつかせながら、じっと自分を見つめていた。
「ムダです。何をやっても、討伐などできるはずありません。できるもの
ならとうにやっております。あれはいつのことだったか……。かつてこの
ラティオ村にもこのテオを討伐しようとした勇者が……」
「うるさいわね！！」
なぜかこのタイミングで昔話を語って聞かせようとした村長の頭を無意

識にしばいていた。その瞬間、はっとした。

「光！！」

自分の名を呼ぶシヴァとルナの声がする。テオとの睨みあいに負けたつ

もりは無かったのだが、視線が逸れたその一瞬、テオが自分に向かって猛

然と襲いかかってきた。

「あんたも一緒に食われなさい！！」

何の解決にもならないと分かってはいたのだが、仕返しせずにはいられ

ない。岩陰から村長の着物の襟を掴んで引きずり出せば、かよわいご老体

がこれ以上ないほどに暴れ出した。

「わ、私はホネです！」

今まさにその牙で自分たちの肉を食い破ろうとするテオに向かって村長

はそんなことを言い出した。

「ホネしかありません！　ついでにあなたの嫌いなモノも股の間に

ブラ下
げております！　老いても男！　そこは譲れません！」
テオの牙がピタリと止まった。
「こ、こんな干からびたモノ食いたくはないでしょう？　さすがは古龍！
よく分かっていらっしゃる！」
光宮に抑えつけられながら、村長はモンスターを一生懸命おだてていた。
そんなことを言ってどうにかなるものかと思ったのだが、予想に反してテ
オは牙を引っ込め、自分たちから僅かに距離を取った。
（何なのよ、こいつ）
まるでこのモンスターは……。
「やっぱり」
ふいに、フェンリルの静かな声が風に乗って鼓膜を震わせた。
「そいつ、人間の言葉を理解してるんだよ」
反射的に石壇に縛り付けられたままのフェンリルの方を向けば、

彼は
上半身を微かに起こした状態で首だけ自分たちの方を向けていた。
「どういう、意味よ……」
「そのまんまだよ」
石壇に体を横たえながら、フェンリルは溜め息を零すように言葉を続
ける。
「さっきから何かおかしいと思ってたんだ。光たちが作戦の内容を話し
ちゃったから、そいつはもう罠には引っかからない。光は、自分から敵
に作戦をバラしたんだよ」
「……！」
彼の言葉に驚愕に満ちた表情をしたままテオに視線を戻す。何をする
でもなく、テオはじっとこちらを見つめていた。
「……もしかして“儂くらい生きれば人間の言葉が理解できるようにな

るんじゃ”とか思ってんの？」

そうであって欲しくないと思いつつも、半信半疑のままテオに向かっ

て話しかけてみた。すると、ややあってテオがゆっくりと巨大な頭蓋を

上下に動かす。それはまるで、頷いているかのような仕草だった。

「遊ばれてたんだよ、光たちは」

フェンリルの言葉に、頭の中で何かが音を立てて切れた。

「ジョーダンじゃないわよ！！　モンスターが人間の言葉を理解するな

んて１００万年早いわよ！！　そんなことあってたまるもんで……！」

怒鳴りながらフェンリルの方に歩み寄っていく途中で、ふいに足元が

軽くなった気がした。

「きゃ……！」

あっと思った時にはもう遅い。地面だと思って歩いていた場所には落
とし穴があった。自分で掘らせた穴に自分で落ちたのだと気付いた時に
は、思い切り背中から穴の底に叩きつけられていた。
「……」
幸いなことに、壁を伝うようにして落ちたせいでケガらしきものはし
ていない。ついでに底に仕掛けてあった杭にも触れなかった。要するに
体は無傷だった。だが、プライドだけはこれ以上ないほどにズタズタに
なった。
「ふっ……くっくっく……」
なぜか、光宮は笑っていた。
「ふ、ふふふ……」
モンスターに作戦がバレているとも知らず、真剣に罠に誘導しようと

していた自分。

「ふぇふぇふぇ……」

テオを前にして震えた自分。

「あ、はっはっはっはっはっはっは」

落とし穴にハマった自分。

「はーははっはっはっは！！」

すべての自分の姿が許せない。こうなったのは何もかも……。

「全部あんたが悪い！！」

穴の底から這い上がりながら、光宮は村長を睨みつけた。頭上で、老人が脱兎のごとく逃げ出す様が見て取れる。

「にーがーさーなーいー」

土を掴み、脚を踏ん張り、カエルのような情けない姿になりながらも

光宮は一心不乱に穴の外を目指した。

「どーこーにーいったー」

ようやく穴の外に這い出てみると、フェンリルの傍にサスケを連

れた

将兄が立っているのが目に映った。どうでもよかった。

「村長はどこ！？」

交差１３（後書き）

番外編　～リバーシ～

「あ～、また負けた～」

畳敷きの部屋、行燈の光に照らされながら、フェンリルはマリンとともにリバーシに勤しんでいた。

「マリンちゃん、強過ぎだって」

「ふふふ～ん。こういうのは年の功ってヤツだよ、お兄さん」

散らかった盤目を片付け、二人は傍に置いてあった湯のみに手を伸ばす。

「それにしても“一晩、俺と遊んでよ”とか言うからちょっと期待してたのに」

「……それはマリンちゃんが女の子じゃないからでしょ？」

「もし俺がちゃんとした女の子だったらそういう意味で遊んでくれたの？」

悪戯を含んだマリンの瞳に、フェンリルは無言で苦笑いを返した。

「ムリだよね。そんな気がする。好きな女の子でもいるの？」

「いるよーな、いないよーな」

否応なく脳裏に浮かぶのは光宮の顔だったが、だからと言って彼女とそういうことをしたいかと言われると非常に微妙である。

「お兄さんは、リバーシみたいだよね」

「え？」

「一見して真っ白なのに、いきなり真っ黒に変わる。ホント、リバーシみたいだよ」

交差１４

「お前はいったい何をしてる」

傷付いたサスケがようやく回復して時空間から戻って来たと思ったら、

なぜか父親を連れてきた。わざわざ確認しなくても分かる。ひたすら無表

情に近い顔をしている時の父親は、本気で怒っている時だ。

「ご、ご主人の命が危ないと思ったニャ……」

思わず恨みを込めた視線をサスケに向ければ、泣きそうな声でそう返さ

れた。

「じ、事情は後で説明するから……その、この鎖……切って……ください」

寝転がったまま動けない自分が何とも情けない。しかし自分ではどうす

ることもできず、目の前の怒っている人に頼んでみた。

「ご、ごめんなさい」

何か悪いことをした時はとりあえず謝るに限る。まず謝っておけば何と

かなる。今までの経験から、条件反射でフェンリルは謝罪の言葉を口にす

る。しばしの無言の時を挟み、父親は無言のまま腰に差した愛刀レイヴァ

ーティンをすらりと抜き放った。

「……」

鎖が断ち切られる耳触りな音が鼓膜を震わせる。テオが放つ炎の熱に照

らされて、限りなく透明に近いその刃が怪しげな光沢を纏っていた。いつ

見ても美しいとしか言えないその刃。しかしながら怒っている人が持って

いると妙に怖かった。

「あ、ありがと」

ひとまず体を起こし、きちんと礼を述べておく。さて、どうやって言い

訳しようかと考え始めた時、仄暗い穴の底から筆舌に尽くしがたい

狂気を

纏った光宮が這い上がって来た。

「村長はどこ！？」

彼女は自分たちの姿を見るなり、とんでもない形相で聞いて来た。

そう

言えばどこに行ったのだろう。光宮が落とし穴にハマった直後までは確か

にここにいたような気がするのだが、今は陰も形も見当たらない。

彼女は

血走った目を周囲に巡らせ、今にも食い殺しそうな勢いで目的の人物を探

している。父親とは別の意味で怖かった。

「光宮」

「何よ！？」

相変わらず表情は変えないまま、父親は静かに光宮の方へ近づいていく。

何となく、その背中に従った。

「お前は馬鹿か」

はっきり言った。

「と、父さん……！　そんなにハッキリ言ったら光が可哀そう……」

フォローしようとして、ハッとする。幼いころならばともかく、今の自

分たちはどう見ても親子には見えない。正体を怪しまれないためにも、決

して人前で父親と呼んではいけないはずだった。

「何よ、どういう意味よ！　何が言いたいのよ、あんたは！　いきなり出

て来て何様のつもりなのよ！？」

どうやら光宮は自分の失言を聞いていなかったらしい。内心でホッとし

つつ、このまま3歩あるいて忘れてくれとフェンリルは本気で願った。

落ちた。他に言い方があるなら教えてもらいたいものだな」

「お前は下位装備で古龍に挑み、翻弄された挙げ句に自分が仕掛けた罠に

「相変わらずムカつくヤローだわね、あんたは！！　これでもね、

必死に
戦ったのよ！」
　1歩。
「どうにかして討伐しようとしたのよ！　まさかモンスターが人間の言葉
を理解してるなんて、そんなこと思わないじゃない！！」
　2歩。
「そんなモンスターがいるなんて聞いたことないわよ！！　ジョーダンじ
ゃないわよ！　だいたい何よ錬金術って！　私がそんなモノ知ってるワケ
ないでしょ！？　頭イカれてんじゃないの！？」
　3……。
「“父さん”ってどういう意味か～な？」
　うまく誤魔化せたと思った瞬間、横から入って来たシヴァの声に光宮が
ピタリと口を閉じる。彼女はギギギ……と音を立てそうな雰囲気で首を回

し、ややあって驚愕に見開いた目を自分に向けた。

「この野郎！！」

ついつい勢いに任せて弟を殴ろうとしたのだが、その拳はあっさりと避

けられてしまった。

「“父さん”……？」

それはまるで地の底からの慟哭に似た声音だった。見た目だけは可愛い

女の子の、どこからこんな声が出るというのか。まるで光宮が何か別の生

き物に成り変わってしまったような錯覚を覚え、思わず背中に悪寒が走っ

た。しかし……。

「イメージプレイ？　何よ、あんたたち、そういう関係だったの？」

彼女の口から飛び出してきた言葉に、一瞬だが全身から力が抜けそうに

なってしまった。そう思いたいなら、いっそのことそう思っておいてくれ

と言わばヤケクソに近い思いだったのだが、そこでなぜか父親が僅かに表
情を変えた。
「お前の頭はどういう造りをしてるんだ」
「はあ！？」
「何をどうやったらそういう発想が出てくるんだ」
「余計なお世話よ！　だいたいねえ、あんたには婚約者の夏葉がいるでし
ょう！？　二人でいる時には見てる方が恥ずかしくなるくらいのイチャつ
きぶりなのに、隠れて男とよろしくやってたって言うの！？」
「ジョーダンじゃない。俺にはそっちの趣味はない」
その時、じっと成り行きを観察していたかに見えたテオ・テスカトルが
ふいに牙を打ち鳴らす。周囲に粉塵が飛び、途端にあちらこちらで爆発音
が上がった。咄嗟にその場を飛び退いたところで、フェンリルは睨みあう

父親と光宮の背後で爆炎が上がっているのを目の当たりにした。

「夏葉に言いつけてやる！　ああ、もう気色悪いったらないわ！　男同士の恋愛はねえ！　紙の上で見るから楽しいのよ！　現実には見たくなんかないわ！！」

「いい加減その話題から離れろ」

爆発をものともせず、光宮と父親が不毛ともとれる言い争いを続けていた。一緒に飛び退いたシヴァとルナと無意識に顔を見合わせる。ある意味凄い。言葉は交わさなかったが、自分だけでなくシヴァもルナも同じことを思っていると、妙に確信した。

「ホモじゃなかったら何だって言うのよ！？　あんたとあのバカの関係を説明できる言葉があるとでも言うの！？」

「フェンリルはお前と違って馬鹿じゃない」

「何ですってー!?」

テオ・テスカトルが二人に向かって猛然と突進を始めた。顔色を変えた

のは自分たちだけで、二人は未だに突進してくるテオに気付いてさえいな

いようだった。

「危ないよ!!　避けて!!」

叫んだのはルナだったが、彼女の言葉に父親も光宮も振り向くことさえ

しなかった。近付いてくる炎の龍に空気がざわめく。まるで吸い寄せられ

るように、風がテオに向かって流れていた。

「さっきから何よ、ひとのことバカバカバカって!!　自分はそんな

に頭いいワケ!?　残念ながらそんな風には見えないわね!」

「少なくとも、お前よりはマシな頭をしているさ」

「何よ、エラそうに!!　このホモ!!　変態!!　早X!!」

地を駆ける巨大なモンスターの足音が響く。さながら耳元で打楽器でも
打ち鳴らされているかのような轟音だ。テオが近付いてくるにつれて、足
元から全身へ、大地の悲鳴に似た振動が伝わってきた。

「お前にだけは言われたくないな。いや、そもそもそんな性格をしてるよ
うじゃ相手する男はいないか」

「ほんっとに余計なお世話よ、それ！　いいでしょ、別に！　本の世界で
他人の恋愛を楽しんでても！　誰に迷惑かけてるワケじゃないわ！」

「寂しい女だな」

「何ですってー！？」

テオと二人の距離が見る間に縮まっていく。思わず、フェンリルはサス
ケに視線を送っていた。心得たとばかりに、サスケがテオに向かって駆け
出していった、その時。

「お前は引っこんでろ」

「あんたは引っこんでなさい！！」

睨みあっていた二人の鋭い一喝がテオに向かって放たれ、その勢いに負

けたテオとサスケとフェンリル、シヴァそしてルナが魔法でもかけられた

かの如くその場でピタリと動きを止めた。

「だいたいねえ！　あんたみたいなヤXチンに言われたくないのよ！！　女

の子は純潔を守るのが常なの！！　分かる！？　穴が空いてりゃコンガの

ケツでも平気で突っ込むような節操無しに文句言われる筋合いはないのよ！」

「残念ながら突っ込む穴は選ぶさ」

それぞれが中途半端な姿勢のまま動きを停止していることになど、どこ

吹く風といった様子で、二人が再び口喧嘩を始めた。隣で、シヴァが肩の

力を抜くのが分かった。釣られて、自分もまた息をついていた。

「むっかつくわね、ホント！　ツラがいいってだけで、何であんたはそん
なに傲慢で尊大な態度になるのよ！？　世の中の女はすべて自分に靡くと
でも思ってんじゃないの！？」

「思ってて悪いか」

「悪いに決まってんでしょうが！　女は見た目より中身で男を選ぶのよ！
あんたは今まで、そんな当たり前のことさえ分かんないようなバカしか相
手にしてこれなかったのよ！！」

すぐ傍にいるモンスターを無視して言い争いをする二人に焦れたのか、
テオが小さく唸り声を上げて片手を振り上げた。思わずフェンリルたちは
息を詰めるが、二人に睨まれてテオがスゴスゴと腕を降ろす様を目撃し、
何とも言えない気分になった。

「……そのバカには夏葉も含まれるのか？」

「何言ってんのよ！　夏葉をバカにしたのは他ならぬあんたでしょうが！

知ってんでしょ！？　あの子はあんたに仕込まれる前は男のＸＸＸでさえ見たことなかったのよ！？」

テオが再び腕を振り上げる。そして睨まれて腕を降ろした。何となく、見ている方が可哀そうになってくる光景だった。

「なんかよ～、将兄と光ってどことなく似てる～な」

「え？」

ふいに横に座ったシヴァが呟いて、フェンリルはつい二人を見比べてしまう。言われてみれば、雰囲気が似ていないこともない気がする。そして再度、テオが二人に攻撃を仕掛けようと唸り声を上げた。しかし、思った通り、睨まれただけで竦み上がっている古龍の姿がそこに出来あがる。

「テオもああして見ると可愛いモンだ～な」

苦笑いを浮かべながらシヴァが言った時、どうやらその言葉が癪に障っ

たらしいテオが自分たちの方へ向き直った。あの二人を攻撃するよりかは

自分たちを噛み殺す方が簡単だと判断したようだ。気持ちは分かるが、何

となく腹立たしかった。

「ちょっとお待ちなさいな、子猫ちゃん」

フェンリルたちがテオの突進に備えて身構えた瞬間、およそこの世のも

のとは思えないほどに凶悪な笑みを浮かべた光宮が、ようやくテオに視線

を向けた。

「ねえ、あんた。人間の言葉が分かるんですって？」

光宮に笑いかけられて、なぜかテオが一歩下がった。

「初めてあんたを見た時から思ってたんだけど……」

くっくっく、と、光宮が喉の奥で笑う。

「あんたのＸＸＸって、お子ちゃまサイズねっ！！」

可憐な唇から発せられた言葉に、テオが思い切り仰け反ったように見えた。

「よくもまあ、そんな情けないモンをブラブラ、ブラブラ堂々と公開しながら生きていけるモンだわ！！　自分で分かるでしょ！？　見たことあるでしょ？　自分のＸＸＸが他のテオに比べて、かーなーり小さいってことくらい知ってるでしょ？　それに何？　何でそこだけ毛に覆われてないの？」

ブツそのものが毛に覆われていたら困るだろう、と男であるフェンリルは思う。しかし、それを口に出す勇気はなかった。

「私の前で公開するなら、もう少しマシなモンをブラ下げて来なさい！！

分かった！？」

しばしの沈黙が降りる。そして、テオは体の向きを変えると、猛然と地
を蹴り、どこへともなく立ち去って行ってしまった。

「……」

誰も何も言わない。古龍を悪口で撃退した話など、聞いたことがなかっ
た。それはどうやら父親も同じだったらしい。彼にしては珍しく、何とも
言えない苦い顔をしていた。

「ああ、スッキリした。いつ言ってやろうかとずっと考えてたのよ。やっ
ぱり弱い者イジメは最高よね。弱い者……」

光宮が何か思い出したらしい。

「村長ー！！　あいつどこ行ったー！？」

そしてそのまま、彼女は自分たちには見向きもせず村へ向かって走り出
して行った。一晩を通してテオに翻弄されていたとは到底思えないスピー

ドで走る光宮は、何だかドスランポスを思わせた。

「俺らも戻ろうよ」

とりあえずテオは撃退した。これから先にどうなるか分からないが、少

しでいいから休みたいという気持ちが今は先立っていた。

「そうだ～な。だけど、その前にあんたたちのことを聞かせてもらおうか

～な」

そう言って、喉元に何か冷たいものが押し当てられた。目の前にいるシ

ヴァは何も持っていない。だが、確かに突き付けられる刃の感触がある。

この雰囲気には覚えがあった。

「お前……それは俺のミラージュ・ショテル……」

恨み事を言おうとしたところで、シヴァが更に強く刃を押し付けて来る。

肌に食い込む切っ先に、血が滲んで首筋を伝った。

「あんたは人質だ～ぞ。おとなしくしてろ～よ」

軽く笑って、シヴァは父親の方に視線を向けた。

「どういうことか話してくれるだ～ろ、将兄？」

交差15

午後の陽光が差し込む中、中也は町を歩いていた。目的の場所はこの田舎町
に唯一の図書館である。

（変わってねえなあ）

街路樹が立ち並ぶ歩道の、アスファルトの熱を靴底に感じながら、中也は無
意識に表情を緩めていた。すれ違う高校生は、この近くにある高校の制服を着
ている者が多い。また、部活帰りなのか、ジャージ姿のまま自転車を漕いでい
る同年代の者の姿も頻繁に見かけた。

（懐かしい）

目深に日傘を差して歩く中年の女性に、煙草を吸いながら歩いている小汚い
姿の男性、ケータイで喋りながらどこかへ歩いて行く青年……。何もかも、か
つて自分が知っていた世界そのものだった。

（けど、戻りたいとは思わない）

昨日、自分にとってこの世で最も身近な存在である両親に対して感じた何とも言えない疎外感は、一夜明けた今もなお消えることなく胸の奥で燻っていた。

やっと帰って来れた、とは思わない。初めて自分が向こうの世界に飛ばされた時は、帰りたくて仕方なかったこの世界から、今は向こうの世界へ帰りたいと願っている。

（何もしないよりはマシ）

自分が知る限り、こちらの世界は非現実的な要素が極端に薄い。だが、ずっと家に閉じこもったまま時計の針を眺めていることだけは耐えられなかった。

（調べるだけでもいい）

収穫があれば儲け、その程度の気持ちで、中也は久々に来た図書館の自動ド

アを潜った。

（涼しい。やっぱ、エアコンって最高だな）

ガラス張りのドアの向こうは残暑とは無縁の涼しげな空気に包まれていた。

ここの図書館は昔、どこかの金持ちが蔵書を寄付したらしく、けっこうな書籍

が顔を揃えている。中には専門書と呼ばれる書籍も揃っており、以前はどうで

もいいと聞き流していた情報が妙にありがたいものに思えた。

入口の正面に設置してあるカウンターの中でヒマそうにしている司書の男性

に軽く頭を下げ、中也は一心不乱に絵本を眺めている小さな子供たちの傍を通

り過ぎて図書館の奥へと向かう。

（マニア向けの本はこのあたりにあるハズ）

どこの図書館にも共通なのだろうが、たいてい奥へ行けば行くほど手に取る

人を選ぶような内容の書籍へ変わっていくものだ。まずは何から調べようかと

迷いながら、中也は背の高い本棚の間をふらふらと歩いた。

（異世界に帰るための手段なんか、本で調べて分かるハズないよなあ）

今更ながらにそんなことを思いつつ、何となく背表紙の青が印象的だった一

冊の本を手に取ってみた。パラパラとページを捲って、ところどころ目に付いた内容がどこかの自称・占い師の自慢話でしめられていたため、どうでもよくなって本棚に戻した。

（オカルトはオカルトだけど、占いじゃないっての）

自分の行動に溜め息を落としつつ、中也は一旦そこの通路を抜けて更に奥を

目指した。黒魔術だの白魔術だの、カニバリズムだの、同性愛だの、次第に怪

しげなタイトルが目につくようになった本棚をとりあえず真剣に眺めてみる。

参考になりそうなものは残念ながら無かった。あるいは、と思って黒魔術に関

する書籍を手にとってみたが、その中身が意味不明な図式や図形ばかりだった
ので嫌気がさした。
（何か、ないかなあ）
少しでもいい。あちらに帰る手段そのものは分からなくても、せめて何かし
らの手がかりを見つけたい。そんな思いで、中也は同性愛の書籍がズラリと並
ぶ本棚の間を通り過ぎた。
「あ……」
薄いベージュのカーテンに遮られた柔らかな日差しの中に、一人の少女が立
っていた。夏葉が着ていたのと同じ、私立の名門女子高校のセーラー服を纏い、
古くなった書籍に独特の匂いに包まれながら、その少女は真剣な表情で活字を
追っていた。透き通るような白い肌に、薄桃色の柔かそうな唇。頬に落ちた艶

やかな黒髪を、煩わしげに耳へとかけるその仕草……。髪の色と瞳の色こそ違

うが、その顔立ちには見覚えがあった。

「光？」

無意識に名を呼ぶと、少女が不思議そうな顔をして振り返る。間違いなかっ

た。そこにいたのは自分がよく知っている光宮その人だ。

「何よ、何か用？」

こちらの世界で知り合いに会えたという喜びを胸に抱いた中也とは対象的に、

光はどこか冷たい色を含んだ言葉を向けて来た。

「あ、いや……えっと、その……」

何か用かと聞かれても用はなかった。どう答えようかと逡巡したところで、

ふと光が手にしていた本の挿し絵が目に映る。そこには、男と男の激しい性交

の様子が事細かく描写されていた。

「……」

まさしく“撃チン”した中也を余所に、光宮は何でもない顔をして本を棚に

戻した。どこの世界でも彼女は男性同士の恋愛が好きらしい。自分には理解不

能の世界だが、好きな人は好きなのだからそれを否定することはできない。分

かってはいるが、背中に走る悪寒を抑えることはできなかった。

「久しぶりね、中也。あんたもついに同性愛に目覚めたの？」

「……違います」

「ふーん、そう。じゃあ何してんの？」

何しているのか、と聞かれてもどう答えていいか分からない。口ごもったと

ころで、光宮が自分の名前を知っていたという事実に思い当たった。

「変なこと聞くけど、俺らって知り合い？」

思ったことをそのまま口にすると、光宮があからさまに怪訝な顔をした。

「何よ、今更。もしかしてまた記憶喪失になったの？」

「……たぶん」

「あっそう。それはご愁傷様。頑張って記憶を取り戻してね」

何でもないことのように言うと、光宮は足元の絨毯の上に置いていた学校指

定のカバンを手に取り、そのまま歩き出してしまった。

「ち、ちょっと待ってくれ！」

思わず引き止めていた。光宮は性格はともかく持っている知識が自分の比で

はない。こちらの世界の光宮が向こうの彼女と変わらないとすれば、今のこの

状況を打開する手掛かりくらいは見つけてもらえるかもしれない。

「何よ」

絶対零度の視線を向けられ、思わず緊張してしまう。だが、ここで諦めては

何も変わらない。協力者がいるのといないのとでは気分的にも随分と違うのだ。

中也は光宮の態度に怯みそうになりながらも、必死で言葉を探した。

「もしよかったら、話だけでも聞いてもらえないか？　今いろいろ

と複雑な状
況で、ちょっと困っててさ」
　かろうじてそんな言葉を絞り出すと、しばしの沈黙の後、光宮が凶悪な笑み
をその可愛らしい顔立ちに乗せた。
「どうか話を聞いてください、女王さまって言ってみなさいよ。そしたら聞い
てあげないでもないわ」
「……お前、まだ王女だろ？」

＊

　図書館とは、静かな場所である。それはその建物そのものが建設された目的
として「読書」が挙げられるせいでもある。それに、たいていの場合、図書館
の中で騒ごうものなら面倒臭そうな顔をした司書の人が注意しにやって来る。
結果的に、古書の匂いに満たされたその場所はどこか浮世離れした特別な空間

という体を醸し出すのである。

「ぎゃーはははははは！！　あっはっはっはっはっは！！」

静寂を切り裂き、そこで読書や勉学に勤しむマジメな利用者の鼓膜に改造マ

フラーさながらの爆音を叩きこんだのは、他ならぬ光宮だった。

「マジでウケるっ！！　さいっこーね、あんた！！　寝言は死んでから言いな

さいよ、ホント！！　もー、たまんなぁい！！」

利用者たちが迷惑を通り越して犯罪者でも見るような目つきで自分たちを見

ている。実際のところ、騒いでいるのは光宮ひとりなのだが、一緒にいる自分

まで一緒くたに犯罪者扱いされていた。いたたまれなさに自然と小さくなって

いく中也を余所に、光宮は机をバンバンと叩きながら腹を抱えて笑っていた。

（こいつ……ホントに可愛いのは顔だけだな……）

その態度、発せられる言葉、その思考。何もかもが自分には相容れない。唯

一、光宮は容姿だけは世間一般の女子以上に可愛いと認めているが、それ以外
は何ひとつ女の子として惹かれるものはないと断言できる。

「ちょっと、光ちゃん。声が大きいよ」

見かねたらしい司書の男性が注意しにやって来た。どうやら知り合いである
らしい。

「ああ、ゴメンなさい、白井さん！！　だって中也があんまりにもバカみたい
なこと言うもんだから、おかしくって！！」

白井という名であるらしい司書の男性に謝っているその声もまた図書館中に
響き渡るほどの大音量を誇っている。白井が、あからさまに顔を顰めた。

「気持ちは分かるけど、ここは図書館なんだから。図書館では静粛に」

「だからゴメンなさいって！！」

大阪のおばちゃん顔負けの笑い声を上げながら、光宮はまるで犬

でも追い払
うようなぞんざいな仕草で白井に消えろとジェスチャーしている。
「まったく、頼むよ」
「はいはい！！」
苦虫を噛み潰したような顔をしながら、白井はカウンターに向かって踵を返
した。その瞬間、光宮がニヤリと笑ったのを、中也は確かに目撃した。
「ところで白井さん。かなりイイ感じのショタコンの本を見つけたんだけど、
後でカウンターに持って行ってあげましょうか？」
光宮の口から発せられたそのセリフに、白井があからさまに肩を竦めた。侮
蔑の眼差しで自分たちを見ていた利用者の視線が、あからさまな好奇心と軽蔑
の眼差しを持って白井に向けられるのが分かる。
「な、何の話だ！？」
「あらあ、白井さんって小さな男の子が好きなんでしょ？　可愛い

男の子のハ
ダカじゃなきゃボXキしないんだって自分で言ってたじゃない」
　白井の顔が見る間に憤怒の形相を表し始める。光宮のことを知っている中也
にしてみれば、おそらくはただの嫌がらせだろうと分かるのだが、公共の場で
自らの特殊な性癖をカミングアウトされたに等しい白井にしてみれば、たまっ
たものではないだろう。
「いい加減なことを言わないでくれ！　静かにできないなら帰りなさい！！」
「白井さんの声も大きいわよ、充分ね」
　わざとらしく溜め息などつきながら、光宮が立ち上がる。目で合図されて、
中也もおずおずと席を立った。
（光にちょっかいを出すヤツは、みんな不幸になる……）
　そんな教訓を、胸に抱きながら。

交差１５（後書き）

番外編　～テオの本音～

僕はずっと寂しかった。

とっても寂しかった。

それだけだった。

友達もいなかった。

だから知らない場所へ行ったら、誰かお友達になってくれる人がいるんじゃなかなって思ったんだ。

それでシエンナ内海を旅していたら、嵐に遭っている可哀そうな船を見つけたんだ。

助けてあげなきゃって思ったんだ。

助けてあげた人たちは、シエンナ内海に浮かんでいるラティオ活火山に運んであげた。

嬉しいことに、そこにはモンスターがいなかったから、僕はそこに住むことにしたんだ。

でも、やっぱり友達がいない。

寂しくなった僕は、助けてあげた人たちにお願いすることにした。

「この村で最も美しい娘を生贄として捧げよ。さすれば１０年の間、この村をあらゆる災厄と苦難から救ってやろう」

交差16

「うぅ……ぁあ……ん……うぅう……うっ……あぁ……」

降り止むことを知らない激しい雨が、四角形に切り取られたガラスの

向こうに広がる景色を満たしていた。藁ぶきの屋根を雨が打つ音はさな

がら滝の間近にいるかのような錯覚を与え、湿った空気に陰鬱な表情を

浮かべる人間たちの思いをより一層、暗くそして重たいものへと導いて

いた。

「ぁあ……うぅ……うっ……ぅうう……あぁ……ぅうう……」

蝋燭の炎が揺れている。どこからともなく入り込んで来た一匹の羽虫

が、揺らめく炎を目印に宙を舞い踊る。円を描くように飛んでいた虫は、

やがて熱に焼かれて儚い命を閉じていった。

「聞かせてもらおうじゃないの」

仄かな明かりの中でさえ憎らしいほどに整ったその顔立ちを正面から

見据え、光宮ははっきりと口にする。

「その前に、アレをどうにかしろ」

小さな溜め息をひとつ落とし、将兄が指差したのは亀X縛りの挙げ句

に天井から吊るされている村長だった。

「気になるの？　いいじゃない、別に。趣味の悪い置物だと思えば何て

ことないわ」

亡者に似た呻き声を上げながら、全裸に縄をかけられた小柄な老人が

涙目になりながら何かを訴えて来る。意図的に、それを無視した。

「で、あんたとあのバカが親子ってどういうことよ」

視線を動かした先には、無関心を決め込んでいるルナと、フェンリル

の喉元に不可視の刃を突き付けたシヴァがいる。

「そろそろこっちの我慢も限界なんだ～ぞ。光にも関係ある話だからっ
て言うから～よ、ここまで待ってやったんだ～な。いい加減、誤魔化す
のは止めろ～よ」

「別に誤魔化す気はないさ」

言いながら、将兄はフェンリルの方にチラリと視線を向ける。彼にし
ては珍しく、その視線にはどことなく心配そうな色が混じっているよう
な気がした。

「フェンリルと会ったのは１０年前。北の都、氷都のスノーレイだ」

「……あんた、２１歳って聞いてたけど、思い切りウソなのね？」

「何を今更」

開き直られた。何かしら言い返したい思いがあったが、ここで言い返
せばまたしても話が前に進まなくなるという自覚があったため、喉元ま

で出かかった言葉は音にすることなく飲みこんだ。

「数人の孤児たちと一緒に暮らしていたな。そう言えば、初めて会った

ころ、俺はあいつに嫌われていた」

「別に嫌ってたワケじゃ……。ただ、何となく怖そうな人だなって思っ

ただけで」

笑いながら語る将兄に、フェンリルの声が重なった。なぜ慌てたよう

に否定するのか、光宮には彼の真意が全く分からなかった。仲が良さそ

うだということは分かる。だが、多少なりとも気持ち悪いものは感じて

しまった。

「それで、熱にうかされたフェンリルを看病してやってたら俺のことを

父親と間違えて、そのまま今に至る」

「何よ、それ」

何の説明にもなっていない。熱にうかされていたところを看病したと
いうくだりは理解できないでもない。しかし、それでなぜこの男のこと
を父親と間違えることに繋がるのか納得できる説明は何一つなかった。

「あいつにとって楽しい話じゃない。過ぎた日の出来事を今更お前たち
に語って聞かせることに意味はないさ」

「……つまり、あんたはガキのころのコイツに父ちゃんと間違えられて、
そのまま引き取ったってことか～な」

「そういうことだ」

「考えられないわね」

シヴァの言葉を引き継ぐように言えば、金色のその瞳が自分の上へと
注がれた。

「あんた、どっからどう見ても哀れな境遇の子供を引き取るような男じ

ゃないでしょ？　むしろ、ブチ殺したって言われた方が納得できるわ」

「……俺がもし殺したと言うなら、今そこにいるあいつは何だと言うつもりだ」

「気のせい」

とりあえず存在を否定してみたのだが、将兄の表情は特に変わらなかった。正論を向けられると弱い。光宮はそんな自分を自覚していた。

「それならそれでいいんだ～ぞ。あんたとコイツの間に何があったのか

は知らねえし、俺は興味もねえから～な。肝心なのは、あんたが人間じゃねえってことだ～な。まあ、今更って気もするけど～よ」

苦笑しながら語るシヴァのセリフに、聞き捨てならないものが含まれていた。

「ちょっと待ってよ！　あんた、まさか気付いてたの！？」

「まあ、そういうことになるか～な」

思わずテーブルに両手を叩きつけながら立ち上がった自分とは対象的

に、シヴァは何でもないことのように言ってくれた。

「初めて会った時は分からなかった～な。まあ、あん時は樹海でサバイ

バルした直後だったってのもあるだろうけど～よ。何か雰囲気がおかし

いなって思ったのは、クック討伐のことをなっちゃんの家で聞かされた

あの時か～な」

言いながら、シヴァはフェンリルの方に視線を投げた。

「確信したのは、あんたがファーナに来た時だ～ぞ。どう見ても人間に

は見えなかったんだ～な。何つ～か、あんたには独特の雰囲気があるん

だ～な。うまく例えられねえけど～よ」

そう言えば、鬼龍と呼ばれるモンスターには「独特の気配」があ

ると

以前何かの本で読んだ記憶があった。普通の人間には分からないが、一

部の人間……例えば剣の達人や、異常なまでに気配に敏感、あるいは勘

のいい人間に言わせてみれば、彼らはまるで「気の遠くなるような長い

年月、人の血を吸い続けてきた刃物のような」とか「笑顔で何人もの人

間を斬り殺してきた殺人鬼のような」などと例えられるらしい。シヴァ

も、もしかしたらそんな気配を感じていたのかもしれない。

（そう言えば、カンだけはよさそうだものね、こいつ。野生児って雰囲

気だし）

そう思えば、何となく納得できるものがある気がする。おずおずと、

光宮は元通りイスに腰掛けた。

「ついでに言うと、ベルキュンを討伐した時にコイツからかって遊

んだ

んだけど～よ、そん時に～な、あんたらの関係が普通じゃねえって気付

いちまったんだ～な」

からかって遊んだ、という言葉にフェンリルがあからさまに嫌そうな

顔をしていたが、シヴァは視線を向けることさえしなかった。

「あんたら、お揃いのピアスしてるだ～ろ。黒龍の～さ。あんたのピア

スに気付いたのはなっちゃんの家。こいつのピアスに気付いたのはさっ

き言った通り、ベルキュン討伐の時だ～ぞ」

お揃いのピアスと言われて、思わず光宮は目の前の青年の耳に視線を

向けていた。左は夏葉とお揃いの赤い宝石。そして右は、シヴァが言っ

た通り銀細工の黒龍だった。衝動的に席を立ち、シヴァに刃を突き付け

られたままのフェンリルへと駆け寄る。長い髪を引っ掴んで耳を確

認す

ると、左耳にシヴァが言った通りのピアスがあった。

「き、きしょくわる……」

「子供のころに買って貰ったんだよ！　気に入ってるから、そのまま外

してないだけだって！」

「……パパにお揃いで付けよう、とか言ったの？　マジで？　ウソでし

ょ？　しかもその年になってもそのまんま？　勘弁してよ。やっぱりあ

んたたちホモなんじゃないの？」

「違う！！」

表情が歪むのを隠しきれなかった。普通の親子では有り得ない。むし

ろ、それを受け入れる父親も父親だと本気で思った。しかしながら、肝

心なのはそこではない。２１歳と公言している青年が１０年前も同じ姿

をしていたとしたとすると、そこから導き出される答えはひとつしかな
い。

「つまり、あんたは鬼龍なの？」

「そうだ」

断言したその声音に揺るぎは無かった。むしろ、正体を言い当てたに
等しい自分の方が気まずい思いを感じてしまう。額を冷たい汗が伝った。

伝説とされていたモンスターが目の前にいる。それも、自分たちと同じ
人間と同じ姿をして……。

「それで、子供のころのフェンリルがあまりにも可愛かったから、その
まま自分の子供だってことにしちゃったの？　あんた、話に聞いていた
以上に変態ね」

「何でそうなるんだ」

「違うって言うの？　あんた、さっき自分で言ったじゃない！」

言い争いが始まりそうな自分たちの間に、苦笑いを浮かべたシヴァが

割って入ってきた。

「まあまあ、光。こいつらがナニしてよーが俺らには関係ねえことじゃ

ねえか～よ。それよか、将兄がどういうつもりなのか聞かせて貰いたい

と思わねえ～か？」

言われて我に返る。危うく、またしても誤魔化されてしまうところだ

った。不可視の刃から解放されて、フェンリルが何とも言えない顔をし

ながら自分たちの方を見つめているのが目に入る。今更だが、この青年

は自分と同年代にしか見えない男を「父親」と呼ぶことに抵抗がないの

だろうか。そんなことを思った。

「で、あんたは俺らに何させる気なのか～な？　ああ、あいつのこ

とは

もういいんだ～ぞ。どうせ、あんたの親バカが災いしてくっだらねえワ

ガママ聞いてやってるだけだ～ろ？」

「……否定はしない」

「否定しなさいよ……」

実際年齢が何歳なのかは知らないが、見た目が同年代の青年二人が親

だの子だの、ましてや親バカだのと口にしている様子は激しく違和感が

あった。はっきり言ってしまうと、気持ち悪いという言葉以外、どう表

現していいか分からない。

「いきなり樹海に放り出したり、ギルド・ナイトの候補生に任命したり、

ファーナに送り込んだり？　あんたはいったい何がしたいのか～な」

「……お前らを樹海に放り出したのは俺じゃない。ついでに、ファーナ

に送り込んだのも俺には関係ないことだ。ただ、ギルド・ナイトに任命
したのは嫌がらせだな。お前らに用事がある連中に対して」
「じゃあ誰だって言うのよ！」
自分で言ってハッとした。そう言えば、以前ファーナでも似たような
会話を国王クリス3世とした覚えがある。その時に、一匹の鬼龍の名前
が出たはずだった。
「確か……ユウナとかいう名前だったわね。アルテリアの王宮にいる鬼
龍は」
「そうだったかな」
「そいつのバックにいるのは、誰？」
「それを答える義理はない」
あっさりとした答えに、光宮は唇を噛んでいた。肝心なことは喋らな
いその態度に苛立ちが募る。無意識にフェンリルに視線を向けたと

ころ

で、将兄が言葉を続けた。

「俺が用があるのは夏葉と、そしてお前だ、光宮」

「はあ？　どういうことよ」

「大昔に預けたものを返して貰いたい。それだけだ。用が済めば、お前

らには関わらない。関わり合いになる理由もないしな」

「何よ、それ」

さっぱり意味が分からない。夏葉はともかく自分はこの男と積極的に

関わりたいなどとは思ったことなどないのだ。預けたもの、と言われた

ところで何か預かったような覚えさえなかった。

「早い話、それと同じ原理だ」

音爆弾を食らったクックのような顔をしている自分に向かって、将兄

はシヴァが手にしている不可視の太刀を指差した。

「その太刀には錬金術によってオオナヅチの魂が封じられている。同じ
ように、夏葉の魂にはかつての俺の力が封じられているんだ。封じたの
は大昔の錬金術師たちの中で最高位にあった存在。つまり、お前のこと
だ、光宮」
「……！」
言われたことの意味は、はっきり言ってよく分からなかった。しかし、
今の話でひとつだけ思い至ったことがある。
「そう言えば、鬼龍の王とか呼ばれてた最強のモンスターがいたとかい
ないとか本で読んだんだけど……そいつって、確か人間の女に引っかか
った挙げ句に騙されて力を封じられたって話なのよね……」
その場の雰囲気がより険悪なものへと変貌した。
「もしかしてそれがあんただって言うの！？」

指を突き付けながら言えば、将兄が軽く溜め息を落とす。

「事実関係は違うが、間違いでも無い」

その瞬間、光宮は堪え切れずに爆笑していた。

「あんた、何歳だか知らないけど昔っから変わってないのね！！」

ゲラゲラと腹を抱えて笑い転げる自分を、将兄が呆れたような視線で

眺めている。しかし、その視線を受けても込み上げて来る笑い声は一向

に収まる気配を見せなかった。

「……笑っている暇はないと思うがな」

「はあ？　何よそれ、負け惜しみ？」

「夏葉の魂に封じられた俺の力を開放しなければ、近いうちにあいつは

死ぬ」

自分でも不思議なくらい、ピタリと笑いが納まった。

「普通に考えれば分かるだろう。いくら古代の巫女とは言え、鬼龍の力

を人間が封じ切れるはずはない。夏葉が急に意識を無くしたように眠る

のを見たことはないのか？　それに、シヴァが俺の正体に気付いたのも

封印の効力が弱まって来ている証拠だ」

「……」

「どうするかはお前が決めろ。俺は別に人間のままでも構わない。困る

のは、友人を亡くすことになるお前の方だ」

仄暗い部屋の中で、切り刻んでやりたいほど整った顔立ちがニヤリと

笑ったのを見た気がした。

交差17

腹立たしい。

非常に腹立たしい。

嫌いな相手に弱みを握られることが、こんなにも腹立たしいとは思わな
かった。

だが、ここで彼の意のままになるには光宮のプライドが高すぎた。

「……信じると思うの？」

怯んだら負けだ。自分にそう言い聞かせ、光宮は正面から真っ直ぐに相
手を見据える。

「シヴァがどう思ってるか知らないけど、私にはあんたが普通の人間にし
か見えないわ」

「そりゃあねぇんだ～ぞ」

「あんたは引っこんでなさい！」

「ハイ」

横からくだらない言いがかりを付けて来たシヴァを一喝すると、彼の横

でフェンリルがニヤリとした。

「それに、夏葉は確かによく寝るヤツだったけど、それはそれであの子の

性格ってことで納得できない話じゃないわ。大昔に鬼龍の王がいたっていう話だって、証拠なんか何も残ってないわ。伝説なんてほとんどがマユツバ物よ。何とでも言えるし、どうとでも解釈できるわ。だいたい、そんな

突拍子もない話をいきなり信じろっていう方がムリなのよ」

信じて欲しければ証拠を見せろ、という意味合いを強く込めて、光宮は

一気に言葉を繋いだ。伝説の通りであるならば、目の前にいる鬼龍はその

力のすべてを封印され、今は人間と何ら変わらぬはず。だとすれば、自分

が鬼龍である証拠など出せるはずはないのだ。大人しく言いなりになるな

ど、冗談ではない。せめて対等。できれば優位。そうでなければ腹の虫が

収まらない。

「相変わらず、くだらないことに拘るな」

「何ですって？」

あからさまに溜め息を零すその態度に頭に血が昇る。しかし、そんな光

宮を無視して、将兄は無言のまま帯刀していた剣を抜き放った。大剣にし

ては細く、太刀にしては短い。何とも形容しがたいその剣は彼がいつも身

に付けていた記憶がある。半透明の刃の向こうで、蝋燭の炎が揺れていた。

「嵐灰が命がけで作った俺の愛刀だ。名はレイヴァーティン。古代錬金術

の結晶とも言えるな」

「嵐灰って誰よ」

「……アルテリアのハンターズ・ギルドの技術開発部・部長だ。クック討
伐に出る前に会っただろ？」
言われてみれば、そんな人物がいたような気がする。くたびれた白衣を
纏い、薄い銀縁のメガネをかけていたような覚えがあるが、ひたすら陰が
薄いという印象が強いだけに、それ以上は思い出すことができなかった。
「持ってみろ」
「ジョーダンじゃないわよ！　殺す気！？」
錬金術の結晶ということは、何らかのモンスターの魂が封じられている
のだ。ましてや彼が愛刀だと断言するくらいだから、それなりにレベルの
高いモンスターが封じられていることは間違いない。素手で持てば確実に
死ぬ。当然だが拒否した。

「お前ひとりで持てば確実に死ぬだろうがな、お前に死んで貰ったら困る
とさっきも言ったはずだ。俺が一緒に持っているから死ぬことはない」
「……分かったわよ」
怖気づいていると思われるのも嫌だったので、死ぬことはないと言った
その言葉を信じることにする。震えそうになる手を必死に抑え、光宮は何
でもないという雰囲気を装って、レイヴァーティンの柄に触れた。
「なっ！？」
剣に触れたその瞬間、景色が変わる。古びた宿屋の食堂は闇の中に溶け、
代わりに現れたのは、どことも知れない荒野だった。
「ここ……」
「幻影だ。錬金術で封じられたモンスターが作り出す架空の空間と言った
方がいいか」

「いちいち言わなくたって分かるわよ、それくらい！」

暗雲立ち込める空には稲妻が走り、耳をつんざくような落雷の音が木霊する。四肢を引き千切ってしまいそうな強い風の中、横に並ぶ長身の青年を見上げて文句を垂れる。同時に、この青年は本当に見た目だけはいいと余計なことを思った。

「来るぞ」

金色の瞳は、真っ直ぐに低い空へと向けられている。何となく、その視線を追うと、暗い雲の中から真っ白なモンスターがゆっくりと舞い降りて来ようとしていた。

「あれは？　あんなモンスター見たことないわよ」

「アマツマガツチ」

白銀の体はさながら雪のようで、絹でできた薄布のようでさえある白い

風がその巨体に纏わりついていた。風の声に似た鳴き声を時折漏らしながら、アマツマガツチと呼ばれたモンスターは優雅ともとれる動きで宙を踊る。そして、アマツマガツチの向こう、暗黒の雲の中から新たなモンスターが姿を現した。アマツとは対象的に、こちらのモンスターは暗色の空に溶け込みそうなほど、禍々しい漆黒の体表をしていた。

「アルバトリオンだ。他にもジンオウガとイビルジョー、それからジエンモーランがいる」

「分かった！　もういい！　もういいわ！！」

反射的に手を引っ込めると、そこには元通り小汚い食堂の景色が広がっていた。全身が汗に濡れている。隠そうとしても、震える体を誤魔化しきれなかった。

（怖かった……）

認めたくはない。しかし、レイヴァーティンに封じられているモンスタ
ーに対峙した瞬間、本能的にマズイと悟った。彼が一緒にいるから、殺さ
れることはなかったかもしれない。だが、そんな理屈を超えて恐ろしいと
思ってしまった。宙を泳いでいたアマツマガツチと、正面から向かい合う
勇気がない。想像しただけで、手が震え出す。

「信じる気になったか？」

楽しそうに言われ、光宮は苦い顔をした。普通、ひとつの武器には一頭
のモンスターしか封印されていない。一頭を従えるだけで人間は防具にあ
れこれと工夫を施し、何とかモンスターの力を使っていると言っても過言
ではないのだ。

（なのに、コイツの剣には5頭……）

そして、それを平然と使いこなしているという事実がある。それも、見たことも聞いたこともないモンスターを……。

「聞いてもいいかしら。いつの時代のどこの国のモンスターなのよ、そこにいるのは」

「さあ、どこだったかな。昔、人間の国があった場所は今ではほとんどがフィールドだ」

「……あっそう」

冷や汗を拭い、呼吸を整える。二度と対峙したくない。そう思わせるには充分だった。遥か古代のモンスターの魂を封じた剣……。信じる信じないというよりも、光宮はただその力に畏怖した。

「……分かったわよ。やれるだけはやってみる。それでいいんでしょ？」

喉の奥から絞り出した声は、自分でも嫌になるくらい震えていた。一方、

目の前の青年は相変わらず顔色ひとつ変える様子はない。使い古しのボロ
ボロなイスなのに、彼が座るとまるで玉座に見えるから不思議だった。

「そういうことだ」

唇を噛む。自分に、選択肢はなかった。

「でも、錬金術は、秘法中の秘法よ。知ろうと思って知れるものじゃない
し、ましてや生まれる前のことを思い出せって言われて思い出せるはずな
いじゃない」

自分が口にしているのは当たり前のことだ。女神の教えの中では人を始
め、この世のありとあらゆる生命は輪廻の中を旅するものらしい。だが、
実際に生まれる前のことを覚えている人間はいない。そんなものだ。しか
しながら、その当たり前が今は苦しい。

「あんたが知ってる私がどういうヤツだか知らないけど、今の私は錬金術
なんて名前くらいしか知らないわ。せめて何かないの？　参考書でも、何
でもいい」
「……お前にその気があるなら、錬金術に詳しい嵐灰を連れて来てやるさ。
ただ、テオ一頭さえ錬金術で狩れないようなら、夏葉の魂に封じられてい
る俺の力を開放させることは諦めた方がいいだろうな」
先ほどまでとは違う意味で、握りしめた拳が震えた。
「あんた、まだやらせる気？　いいじゃない、もう！　テオは撃退したん
だから！」
「練習台くらいにはなるという意味だ」
そう言われると、反論の仕様がなかった。少しばかり逡巡し、光宮は大
きく息をついた。

「とりあえず、夏葉を呼んで来ましょうよ。中也とレイみたいに記憶喪失
になってるかもしれないけど、本人を交えて話したいわ」
これから何をするにしても、肝心の夏葉の意見も取り入れたい。
そう思
って、光宮は奥へ続く廊下の方へと視線を向けた。
「ムダだよ、光」
記憶喪失の3人を閉じ込めている大部屋へ行こうとした自分を、
ルナの
静かな声が引き止めた。
「中也とレイはともかく、なっちゃんは寝たまんまだよ」
「え？」
「いきなり訳の分かんないことを言い出した日があったでしょ？
異世界
がどうのこうのって。あの日から、なっちゃんは一度も起きてない
んだよ」
戦慄が走った。
「……タイム・リミットが近いんだな」

特に慌てる様子もなく、将兄が呟いた。その態度に、光宮は全身を駆け
抜けていく激しい怒りを感じる。

「あんた……！　よくそんな平然としてられるわねえ！　仮にも夏葉は婚
約者でしょう!?　心配じゃないの!?　死ぬかもしれないっていうのに、
その態度は何よ!?」

「今更だ」

「はあ!?」

思わず両手をテーブルに叩きつける。そのまま憎たらしい顔を殴り飛ば
してやろうかと思ったが、手が届かなかったので諦めた。

「こういうことが今までなかったとでも思うのか？　長い時間の中で、俺
は何度も夏葉に出会って来た。そしてその度にあいつが死んでいく様を見
て来たんだ。夏葉の魂に封じられている俺の力を開放する以外、あ

いつを
助ける方法はない。だが、それができるのはお前だけだ。俺にはどうする
こともできない」
「……無様な話ね」
「何とでも言え」
強く握っていた拳からゆっくりと力を抜く。ふいに視線を落とせば、自
分の手が小さく震えていることに気付いた。
「ねえ、どうして昔の私は、夏葉にそんな酷いことをしたの？　友達だっ
たんじゃないの？　考えられないわ。私が夏葉をそんな風に利用するなん
て」
「昔と今では何もかも違っているんだ。国の在り方も、人の在り方も。あ
る意味、お前の決断は正しかったと言えるかもしれない」
その言い方だと、まるで自分が進んで夏葉を利用したように聞こ

える。

信じたくなかった。嘘を言っているのだと思いたい。だが、自分には記憶

がないことである故に、彼の言葉を否定することも肯定することもできな

かった。

「とりあえず、その錬金術に詳しい技術開発部の部長を連れて来てちょう

だい。ついでに、目障りなあんたの息子も連れて帰って」

「言われなくてもそのつもりだ」

珍しく、自分たちの意見が一致した。

交差18

ハンバーガーが、言葉にならないくらいおいしかった。

「う、うめえ！」

大雑把に言ってしまえば、パンの間に肉と野菜を一緒くたに挟んだだけの

食べ物だ。それなのに、今ここで中也に齧られているこの食べ物は、値段以

上の深い味わいを醸し出している。

「何よ、チーズバーガーくらいでそんなに感動しちゃって。食べたことない

の？　冗談でしょ？」

「いや、向こうにもハンバーガーみたいなのはあるんだけど、こんなにウマ

いハンバーガー、初めてだ！」

パンはどこかほんのりと甘く、間に挟まれたレタスはシャキシャキとして

歯ごたえがある。メインとなる肉は冷凍とは思えないほどに新鮮で、ほどよ

く利いたスパイスが何とも言えない絶妙な味わいを生み出していた。何より
も驚くのがこのソースだ。隠し味に使ってあるというミソがデミグラス・ソ
ースに深いコクと微かな甘みを与え、みじん切りにされたタマネギとともに
口の中で素晴らしいハーモニーを奏でている。

「これは美味い！！」

断言するには、充分だった。

「よかったわねえ」

ふと視線を上げると、光宮が呆れたような顔で自分を見つめていた。我に
返って、中也は再び視線を落とす。

「あんた、もともとこっちの世界にいたんでしょ？　それで向こうに行った
って話じゃない。どうしてそれでこっちのハンバーガーに感動するのよ」

「いや……ハンバーガーって、その……今までマックしか食ったこ

となかっ

たんだよ。俺ん家、兄弟が3人いるし、ビンボーだしで、その……」

「へえ」

言い訳がましい家庭の事情を述べる自分に注がれる光宮の表情にはどこか

おもしろがっているような雰囲気が滲み出ていた。こういうヤツだから仕方

ないと分かってはいるが、失言した自分に少しばかり後悔を感じる。

「で？　あんたと一緒にこっちに飛ばされて来たっていうヤツらはどうした

のよ」

「それより、俺とお前のこと教えろよ。何でお前が俺のこと知ってんだ？」

ガラスのコップに注がれたコーヒーを飲んで落ち着いた後、中也は改めて

光宮にその話題を促した。

「そんなの簡単よ。中学が同じだったから。ついでに部活もね」

「はあ？　俺が向こうに飛ばされたのは中学の時だぞ？　俺はお前

のこと知
らねえよ」

「バカねえ。私は中学2年の時に転校したのよ」

「あ、そーなんだ」

だとしたら、光宮が自分を知っていて自分が彼女を知らない理由に説明がつく。中也がアルテリアに飛ばされたのは中学に入学してすぐのころだったからだ。

「転校か。親の仕事の事情とか？」

「それもあるけど。ただ、前の中学でちょっとした問題を起こしてしまった
から……」

「何だ、そりゃ」

その薄桃色の唇に、ストローでミルクティーを運びながら、光宮は何とも
意味深なセリフを呟いた。敢えて聞かないことにした中也は、残りのハンバ

ーガーを一気に口の中に押し込んだ。食べてしまうのが惜しいような気さえ

する。しかし、食べ足りなかったらまた買えばいいという事実に気付いて軽

く笑った。ここは、現代の日本。金さえあれば、食べ物に不自由することは

ない。

「部活って？　俺ら何してたんだ？」

「帰宅部よ」

「……それって部活じゃないだろ」

「そうね。バスケ部の幽霊部員って言われるのと、どっちがよかった？」

何だ、それは……と言いかけて、光宮の口元に悪戯な笑みが浮かんでいる

ことに気付いた。中也は思い切り溜め息を落とす。

「で？　本当のところは？」

「文芸部よ」

「……サッカーじゃないのか」

「あんた、自分がサッカーなんかできると思ってんの？」

彼女の屈託のない言葉が、思い切り胸に突き刺さった。そんなにハッキリ

言わなくてもいいではないか、と思ったが、光宮相手には今更だとしか思え

ない。

「そう言えば、シヴァ……柴崎幸太っていたろ？」

「ええ、それが？」

自分がサッカー部に入ろうと思ったのは彼がサッカー部に入ると言ってい

たからだ。あのころの自分にとって、学校生活は果てしなくどうでも良いも

のだったと言っても過言ではない。それで、シヴァと一緒なら何かと楽しい

かもしれないと思ってサッカー部に入ろうと思ったような記憶が微かに残っ

ている。

「あいつ、中学時代どうだったんだ？」

「どうって言われてもねえ……」

自分が知らない三年間。つい最近、再会したシヴァは自分が知っている彼

とはあまりにもイメージが違っていた。気にならないと言えばウソになる。

「深い付き合いがあったワケじゃないから、詳しいことは知らないわよ。初

めて会ったころはけっこうフツーだった。でも、中学2年の夏休みが明けた

ら、いきなり金髪になってたわ」

「金髪で学校に？」

「そうよ。パッキンで始業式に堂々と出てたわよ」

その光景を想像し、真っ先に思いつくのは教師の存在である。

「先生とか、何も言わなかったのか？」

「廊下で何度か注意されてるところは見かけたわ。でも、いつの間にか先生

たちも何も言わなくなった気がする」

「呆れたのかな」

「そうかもしれないわね。でも、柴崎は成績が良かったから。それもあるんじゃない？　知ってる？　彼、第一よ」

「それは、知ってる」

そんなもんだろうか、と思いつつ、やはり成績の良いシヴァというのは想像に難しい。

「何か、あったのかな」

「何かって？」

「いや……、何か久しぶりに会ったらあいつ、性格が何か違ってて……」

言いかけたところで、光宮のケータイが着信を告げた。彼女は学校指定のカバンの中からやはりスマートフォンを取り出す。どうやら流行っているらしい。テンキーに慣れている中也としてはスマートフォンの使いにくさには

辟易とされられた。なぜこの時代の人間が好きこのんでスマートフォンを持
ちたがるのか、非常にナゾである。

「夏葉だわ」

「え？」

光宮の口から出たその名前に、心臓が跳ねた。自分に気遣うような仕草を
見せた光宮に一言いいよと告げれば、彼女は画面にタッチしてケータイを耳
元へと運ぶ。

「どうしたの？　え？　……ああ、ちょっと待ってね。中也」

「何？」

電話で夏葉と話していた光宮が急に自分の名前を呼んだので、中也はコー
ヒーに伸ばしかけていた手を無意識に引っ込めていた。

「友達。夏葉って言うんだけど、来てもいいかって」

「いいよ。つーか、夏葉とは知り合いだし」

「そーなの？」

自分が夏葉と知り合いだったということに、光宮は少しばかり驚いたような表情を浮かべた。彼女にしては珍しいと本気で思った中也を余所に、光宮はその旨を電話で夏葉に告げ始める。

「１０分くらいで来るって。ねえ、どうして夏葉と知り合いなの？あの子、男友達なんかいるタイプじゃないわよ」

ケータイを無造作にテーブルの上に投げ出し、さっそく光宮が質問してきた。確かに彼女の言う通り、こちらの世界で自分と夏葉が知り合いというのは不思議な感じがする。

「向こうの世界の話だよ。クラスメートで、ついでにいろいろと……」

「ふ～ん」

自分こそ夏葉と知り合いなのか、と言おうとして、彼女たちが着

ている制
服が同じであることに思い至った。
「夏葉と、仲いいのか？」
「まあね、友達よ」
それは自分が知っている世界でも同じだ。違うことも多いが、同じことと
変わらないこともあるのだと思って、なぜかホッとする。
「夏葉も、俺と一緒でこっちの世界に飛ばされて来たんだ」
「え？」
「だから、光が知ってる夏葉じゃないかもしれない」
「どっちにしたって変わらないわよ。あんただって、私が知ってる中学のこ
ろのままだもの」
「そ、そうかな？」
「そうよ」
断言できる光宮が疑問であり、それでいてなぜか羨ましいと思った。彼女

と夏葉の間に存在している信頼関係というものは、住んでいた世界が変わる
という大事を前にしても揺るぐ気配がないらしい。知らないから言えるのだ
とも思う。けれど、光宮たちは例えいろいろな事情を知ってしまっても変わ
らず互いを友達だと言い切るだろう。根拠はないが、そんな確信があった。
自分とシヴァの間には無かった信頼関係。思い出すと、気分が重い。
「あら？」
ふいに、どこからともなく長閑な雰囲気を切り裂く爆音が近付いてきた。
雷が移動しているとしか思えないこの音には覚えがある。今ごろになって、
夏葉が誰と一緒にいたのか思い出して中也は気まずい思いが胸の中をじわじ
わと満たしていくのを感じた。
「なに？　このご時世に暴走族？　勘弁してよ。うるさいわねえ」

「いや、アレはカスタム・バイクのマフラー音で……暴走族の人たちとは目
的が違うと……思われ……」
「はあ？　知り合い？」
光宮の質問に答える間もなく、ガラスを挟んでちょうど目の前に広がる駐
車場にドラッグ・スターが滑りこんできた。
「柴崎じゃない。噂をすれば何とやらね」
「後ろにいるのは夏葉だろ？」
「ええ！？」
フルフェイスのヘルメットを被っていたので、光宮にはシヴァが乗せてい
る少女が誰だか分からなかったらしい。腰を浮かせて、彼女はガラスに張り
付き、外の様子を窺い始めた。
「夏葉に彼氏ができたなんて聞いてないわよ！？　しかも柴崎！？」
「違うって」

ガラスの向こうの二人も自分たちに気付いたらしい。二人揃ってなぜか笑
顔でこちらに向かって軽く手を振った。

「何事よ」

「いや、だから……こっちに来た日にシヴァに会って、それで夏葉と……も
うひとり、レイって子が、シヴァの家に泊まって……それで」

その後のことは知らない。追い出されてから、そのままだ。こちらに帰っ
て来てからまだ二日だが、その間にシヴァと夏葉がどんな会話をしていたの
かなど考えてもみなかった。

「よお、若草。久々だ～な」

「ホントね！　あんたも元気そうじゃない、柴崎！」

屈託なく挨拶する光宮とシヴァ。こちらの世界の光宮の名字は若草と言う
らしい。

「相変わらずね、何よそのアタマ！　よくそんなんで第一に通える

わよ！」

「夏休みが終わったら戻すからいいんだ～ぞ」

光宮が席を立ち、自分の隣に座った。

（ちょっと待てよ、おい！）

四人掛けの席に、自分と光宮、シヴァと夏葉が並んで座る。光宮が何をどうカン違いしたのか知らないが、これではまるで有難くないダブル・デートだ。

「あんたたち、何がどうなったの！？」

いきなり興味津津という顔でそんな質問をする光宮。そんな彼女に、シヴァは苦笑いを向けた。

「ちょっと用があるんだ～よ。で、その間なっちゃんを一人にできねえから～な。頼んでいいか～？」

用があるなら座るな、と中也はその時本気で思った。

「忙しいヤツねえ。何でもいいけど。ねえ、付き合ってんじゃないの？」

「残念ながら違う～ぞ」

ケータイを手にしながら、シヴァが立ち上がる。

「お似合いじゃない。どうして付き合わないのよ」

彼女のセリフに、ゾッとした。

交差19

灼熱の火山が再び迫ろうとしていた。

「重い！！」

肩に担いだ荷物の重量は軽く１０キロを超えているだろう。うんざり

する。光宮はこれでも一応、アルテリアの王女として産まれ、王宮の中

で蝶よ花よと育てられて来たのだ。体と同じくらいの大きさの荷物を背

負い、山道を登るなど経験したことが無い。肩も腰も脚も、すでに限界

を訴えてボロボロだった。

「これじゃあテオをぶっ殺す前に私の方がヘバっちゃうわ！　どうにか

なんないの！？」

ムダと知りつつ叫んでみる。一緒に山を登っているシヴァ、ルナそし

てハンターズ・ギルド技術開発部・部長もまたそれぞれ重い荷物を

抱え
ているのだ。他の誰かに荷物を持たせるという選択肢は取れそうにな
か
った。
「何よ、もう！　メンドーなこと押し付けるだけ押し付けておいて、自
分は討伐戦には出ないなんて！！　ふざけてるとしか思えない！！」
「王子のことが心配なんだろーよ。ほっときな。京ちゃんの親バカは今
に始まったことじゃねえんだしよ」
「フツーに気色悪いこと言うんじゃない！！」
横からポツリと意見を述べた部長を一喝すると、彼は苦い顔をして黙
り込んでしまった。これから古龍を討伐しに行くというのに、技術開発
部・部長は相変わらずくたびれた白衣を纏い、煙草をふかしながら面倒
臭そうな足取りで山を登っている。

「だいたい“京ちゃん”って何よ!?　将兄のこと!?　ジョーダンじゃないわよ!　あの男のどこを見たらそんな可愛い呼び方になるって言うの!?」

「……それはまあ、長い付き合いだからね」

苦り切った顔で、技術開発部・部長は言い訳じみたセリフを口にした。

彼のことをそんな風に呼べるという事実があるだけで、本人の言葉以上に付き合いが長いのだろうということは容易に想像がつく。だが、しかし、赤の他人が聞いて背筋が寒くなるという事実には変わりないのだ。

それに。

（こいつ、ヤル気あんのかしら）

自分でなくてもそう思うだろう。光宮たちがこれからやろうとしているのは通常の討伐戦ではない。成功するかどうかも危うい古の錬金

術な
のだ。彼の飄々とした態度を見ていると、緊張で汗をかいている自分の
方がバカバカしくなってくる。
「ねえ、あんた」
「嵐灰（らんかい）だ。いい加減、覚えてちょーだいよ」
「嫌よ」
きっぱりと断ったところで、改めて彼を見る。どこからどう見ても、
どこにでもいる中年にしか見えない。将兄が言っていたような賢者とい
う印象は、右から見ても左から見ても上から見ても下から見ても、どこ
にもなかった。
「あんた、ホントに大丈夫なんでしょうね……」
「なにが～？」
嵐灰と名乗った技術開発部・部長がこの島に顔を出したのは夕べのこ

とだった。将兄から聞かされた話、これからのこと、夏葉のこと、記憶
にない昔のこと……。いろいろと考えることが多すぎて憂鬱にさえ感じ
ていたころ、タイミングを見計らったかのように彼は姿を現した。軽い
挨拶を交わした後、テオ討伐に向けて錬金術に関する講義を受けたまで
は良かった。

（ただの変人じゃない……）

心の中に、インクを水に落としたような不安の沁みがじわじわと広が
っていく。この男を信頼してあの古龍に挑めるか。ムリに決まってい
る。

知識はある。それは認める。だが、信頼を置くに足る要素は何一つ揃っ
ていない。

（将兄のお墨付きだか何だか知らないけど、こんな変人の何を信頼しろ

って言うのよ）

心の中で呟いて、ふと光宮の脳裏をある事実が掠めた。

「将兄のレヴァーティンを作ったのはあんたなんですって？　あんな腐れヤローのために、どうしてあんな凄い剣を命がけで剣を作ってあげたりしたのよ。女に騙されて鬼龍の力を失うようなバカ、ほっとけばいいじゃない」

「ん～、まあ、それはねえ……」

あの剣を作れるだけの技術。それを考えるといろいろと納得できないでもない。人間の見た目あるいは性格と、その人が持つ技術が比例しないことはよくあることだ。だからこそ、その過程を少しばかり聞いてみたい気持ちが芽生えた。

「本音を言うと、最強の剣を作ってみたかったっていう気持ちもあ

った

かもしれないねえ」

「何よ、それ。バカじゃないの？」

微妙な顔をした部長とは対照的に、隣を歩いていたシヴァが微かに笑

う。

「気持ちは分からんでもないかもしれねえ～な。まあ、一言で言ってし

まえば男のロマンってヤツだ～よ」

「余計に分かんない」

「そういうモンなんだ～よ。男ってのはさ、最強って名前が付くモノに

は理由もなく憧れるって言うか～な。自分が最強になりてえって思うヤ

ツも多いだろうけど～よ、最強って呼ばれるモノを作ってみてえって思

うヤツも少なからずいるだろ～さ」

「お前、若いのに話が分かるじゃねえか！」

なぜか、シヴァと部長が意気投合した。無意識にルナの方を見ると、

彼女は素知らぬ顔で黙々と歩いていた。どうでもいいらしい。

「一度でいいから作ってみたかったんだよ。あのころの俺はそれなりに

若かったしな。１００年経っても１０００年経っても、誰も真似できな

い最高の技術を結晶した最強の武器って言うのかねえ。アマツだのジエ

ンだの、モンスターを探すだけで２０年だぞ、２０年」

「ご苦労さま」

感情の無い声で冷たく告げると、部長は見るからに寂しそうな顔をす

る。どうやら話を聞いてもらいたいらしい。だが、自分が聞きたいのは

そこではない。

「討伐したのはオッサンなのか～よ」

「オッサンって呼ぶな。見た目は２０代なんだからよ。残念ながら、

討伐したのは京ちゃんだ」

「ひとりでか～な？」

「大抵はひとりだったな。まあ、万が一の時のために声ちゃんがフォローに付いてたけど」

「ふ～ん」

「そんなことはどうでもいいのよ。どうやって作ったのか聞いてるの」

本音が出た。腐った玉子のような風が、音を立てて流れて行く。

「一緒だよ。今現在、アルテリアのハンターズ・ギルドが使ってる錬金術と」

どこか呆れたような口調で、部長は言葉を続けた。

「ただ、モノがモノだけに封じ込めようとしてもなかなかうまく行かねえんだな。下手すりゃこっちが食われちまいそうになる。ジンオウガな

んか、暴れまくって雷撃を飛ばしまくってきたしな。討伐した京ちゃん
も大変だったろうけどよ、それを武器にするこっちはもっと大変だった
って言いてえワケよ」

「……連中、相手が鬼龍でも簡単には従わねえのか～よ」

「当たり前だろうが。モンスターの世界では純粋に力が優劣を決めるん
だ。人間みたいに、どう生まれたか、何に生まれたかなんて気にするヤ
ツはいねえさ。ただ、鬼龍って呼ばれてるモンスターに妙に強いヤツら
が多いだけでよ」

ついでに、他のモンスターに比べて明らかに知能が高い、とどこか誇
らしげに部長は語った。

「そう言えば、あんたも鬼龍だったのよね」

「今更か？」

「悪かったわね。あんた、最弱の鬼龍でしょ？　分かんなくて当然よ」

返って来た答えは、沈黙だった。

「そう言えば、鬼龍はもうほとんど残ってないって話じゃない？　それ

こそ、伝説って言われるくらいに。どうして最強のモンスターって呼ば

れてた鬼龍がそんなに簡単に数が少なくなったの？　やっぱり繁殖力の

問題？」

「違うに決まってんだろ」

苛立ったような口調で、部長は否定する。鬼龍は胡蝶としか子孫を残

せないと聞いていたから、てっきりそうだと思っていた。しかしながら、

本人たちは否定したいらしい。

「別に胡蝶がいなくても人間を鬼龍にする方法はあるんだ。だから繁殖

力が弱いワケじゃあねえ！」

「あっそう。なら何で？」

「……誰かさんが、殺しちまったからだよ」

新しい煙草に火をつけながら、苦々しい口調で彼は言った。

「理由なんかねえさ。ただ、退屈だったんだろうな。鬼龍くらいしか、

マトモに相手できるモンがなかったからかもしれねえ。とにかく、随分

昔に鬼龍はほんの一部を除いて絶滅したって言ってもいい」

「……血の気が多かったんだ～な、あの人」

「そんな生易しいモンじゃねえよ」

煙草の煙が流れる。吸わない人間にとっては、ひたすら迷惑だった。

「闘争本能って言葉あるだろ？　あのころの京ちゃんは、まさしくそれ

そのものだった。で、それが王子に会ってから人が変わったみたいに親

バカになっちまってよ。一緒にいる俺らからしてみれば、アタマで

も打
ったんじゃないかって未だに疑ってるワケさ」
「おめでたい話ね」
溜め息混じりに呟いた。将兄が親バカだというのは昨日、嫌と言うほ
ど思い知らされた。それならそれで別にいい。今ごろフェンリルを連れ
てアルテリアに帰っているだろう彼のことを思うと、もう何も言う気に
なれなかった。
「事情を知らないと、ホモってるようにしか見えないのよね」
「今はまだマシな方さ。王子が小さかったころは、もう……」
「聞きたくないわ。それより、テオを呼び出す準備するわよ」
目の前に、黒く染まった火山が立ちはだかる。くだらない話は終わり
だ。
「火山内部に侵入するから、クーラードリンクを飲むわ。でも、その前

に装備の最終確認をして」

溶岩が冷えて固まったと思われる山の一部が、不自然にぽっかりと穴

を開けていた。その向こうには、熱く煮えたぎったマグマの熱に満ちた

空間が広がっている。

（いよいよだわ）

漆黒の闇を赤く照らす火山の内部を見つめながら、光宮は拳を握りし

めていた。

交差１９（後書き）

番外編　～サスケの決意～

サスケはダメなアイルーだった。

料理をすれば炭を作っているのかと言われ、掃除をすれば備品を破壊し、洗濯をすれば高価な衣類を土の上に落として模様を描く。お酒が入ったグラスを運べば躓いてこけるし、おつかいを頼まれれば違うものを買ってくる。

そんなこんなで、サスケはこの屋敷で働いているアイルーたちから日々ジャマ者扱いされ、文句を言われ、役に立たない自分が嫌で、裏庭でひとりぼっちで泣いている日々が多かった。

「どうしたの？」

ある日のこと、いつものように肩を震わせていたサスケに優しい声がかけられた。驚いて振り向くと、そこにはとてもとても綺麗な男の子がいた。

一目ぼれ、とも言うかもしれない。

何があってもこの人を守りたい。

その日、サスケは心の底からそう思った。

交差２０

「……やってらんねえ」

中也はひとり、町を歩いていた。シヴァが席を立ってくれたおかげで

気まずい思いをしなくて済むとホッとしたのも束の間、自分をそっちの

けで炸裂する光宮のガールズ・トークに、狭いを通り越して肩の身が無

くなるような居心地の悪さを味わい、彼は早々にファーストフード店を

立ち去った。

「ホントに光のヤツは、どこの世界でも……」

いっそ感心させられる。異性として全く意識されていないせいかもし

れないが、少しくらいは“恥じらい”というものを覚えても損はないだ

ろうと他人事なのに思ってしまう。

“今日、生理の二日目なのよ！　頻繁にナプキン替えないと洩れちゃう
のよね！”

光宮がトイレに立った際、聞いてもないのにそんなことを言って来た。

しかも店内に響き渡るような大声で。別にトイレに行くくらい何とも思わない。わざわざ理由を説明してくれなくてもいい。だが、夏葉はそんな光宮の言葉を聞いて、傍目にも分かるくらい納得し、あるいは同情していた。そしてこの時、中也はテレビでチラッと聞いた“ガールズ・トーク”の恐ろしさを実感したのである。

（女の子はいろいろ大変なんだろうけど……）

学校の授業でもいろいろと教えられたし、何よりそういった異性の体に関する情報は思春期の男子ならば自然とアンテナが伸びてしまうもの

なので、知っていることも多い。だが、それを惜しげもなく披露される

と、身の置き所に困ってしまうというのが本音だった。

（大勢の女子に囲まれた男って、ホントに立場が弱いよなあ……）

人によっては“ハーレム”などと呼ばれ、憧れの眼差しを向けるかも

しれない。だが、世の男性陣が思い描く女性の理想とは例えるなら泡沫

のごとく儚く脆いものであり、現実の女性はたいてい逞しいというより

むしろいろいろな意味で強烈であることが多い。中也は最近、そんな事

実をその身をもって実感していた。

（延長線上にいるのがオバサンだと思えば、納得できる……。光も今は

可愛いけど、年を取ったら絶対とんでもなく強烈なオバサンになりそう

だ……）

そう思うと妙に気分が沈んだ。

「あれ……レイ……」

大きく溜め息を零した時、中也は通りがかった公園のベンチに見慣れた人影を見つけた。

（ひとりか？　何やってんだ？）

彼女にしては珍しく、レイはどこかぼうっとした様子でひとり座っていた。何となく、そのまま通り過ぎることができずに、中也はレイの方へと歩み寄って行った。

「レイ！　こんなところで何やってんだ？」

何の気なしに話しかけたつもりだったのに、レイは弾かれたように顔を上げる。自分の姿を認めたその表情が今まで見たことが無いほど固まっていて、中也は驚いて思わず歩みを止めた。

「中也……」

「な、何かあったのか？」

思わず身構えてしまった中也だったが、レイが途端に気の抜けた表情を取り戻したので、釣られるように肩の力を抜いてしまう。おずおずとレイの方へ歩み寄ると、彼女は隣に置いていたカバンをずらして中也が座れるスペースを作ってくれた。

「驚いた。ちょっと考え事してたから」

「ご、ごめん」

とりあえず謝りながら、せっかくなのでレイの隣に座ってみる。それなりに距離を置いて座ったのだが、やはり同年代の女の子と並んで座るという状況には少しばかり緊張を覚えてしまう。よく見知った相手とは言え、そればかりはどうしようもなかった。

（な、何か喋ろうぜ～！）

無言のまま時が過ぎて行く。

（深刻なことでもあったのか～？）

昼下がりの公園には幼い子供とその母親の姿がちらほら見えた。砂場

で遊んでいた子供が、よちよちとぎこちない歩みで母親の元へと向かい、

途中で転んで盛大な泣き声を披露してくれる。

（どうしたんだよ、レイ～！）

日傘の下で世間話に花を咲かせるオバサンたち。その中のひとりの視

線がふいに自分たちの方へと流れた。オバサンたちの話題が変わったの

がその表情を見れば分かる。勘ぐられて困ることは何もないのだが、そ

れでも気まずいものは気まずい。

（何か言ってくれよ～！）

威勢のいい掛け声をあげながら、中央の広場で小学生がキャッチ・ボ

ールをしていた。ボールが子供に当たったら大変だな、とそんなことを
思ってしまった。
（お、俺から何か喋るべきかな……）
歩道を挟んだ先にある道路を、ハイブリット・カーが通り過ぎて行く。
しばらくして、今度は宅配業者のトラックが走り去って行った。聞き慣れたエンジン音が聞こえなくなれば、今度は歩道を行く女子中学生の賑やかな話し声が聞こえてくる。
「こっちの世界は、平和だね」
ふいに、レイが口を開いた。
「でも、人間はとてもイヤ」
「え？」
先ほど転んだ小さな子供が、母親の腕に抱かれてようやく泣きやんだ。

母親は困ったような、それでいてどこか慈しむような表情を湛え、子供
を抱いたまま日陰の方へと向かって行く。その先には可愛らしいタオル
や水筒が下げられたベビーカーがある。

「どういう意味だよ。何かあったのか？」

「いろいろと、ね」

額を抑えたレイは、なぜか疲れ切っているように見えた。

「なあ、何かあったのかよ。話してくれよ」

自分でよかったら力になるから、とは恥ずかしさが首をもたげて言葉
にはできなかった。自分たちがこちらの世界に来た翌日、一通り町の中
を案内して回った後、シヴァから渡された住所に彼女を送っていった。

屋根の汚れが滴り落ち、黒い染みを作ったヒビだらけの壁が印象的な集
合住宅だったことを覚えている。

「……あたしさ、親の顔、知らなかったんだ」

しばらくの沈黙の後、レイが重い口調で語り始めた。

「前に話したよね。向こうの世界であたしは山賊だったって」

「うん」

「随分ガキのころに捨てられたから、親の顔なんか知るワケない。で、

こっちに来て、初めて会えて、ちょっと……感激した」

苦笑いしながら、レイはずっと足元に落ちた陰を見つめていた。

「でもさ、顔を見るなり“どうして帰って来たのか”って言われた」

「え？」

「何のことだかよく分かんなかったけど、こっちの世界でもあたしの親

はあたしのことが邪魔みたいだった。男がどうの、金がどうの、学校が

どうの……」

何を言ったらいいか分からず、中也はじっとレイの横顔を見つめる。

レイには申し訳ないが、そういった話は正直こちらの世界ではありふれ
ている。だが、自分の知り合いが語ると、妙に重い話に聞こえた。
「父親はいないみたいだった。あ、誰が父親なのか分からないって言っ
た方がいいのかな。向こうの世界のあたしの親が、あたしを捨てたのは
貧しかったからだって、ずっと思ってたよ」
「……」
「だけど、そうでもないのかもしれないって思った。食べるものがたく
さんあって、あったかいベッドもあって、お風呂にも入れる。こんなに
恵まれた場所に生きてるのに、あたしの親は自分の子供が邪魔みたいだ
った」
返す言葉がない。勇気づけようと思って頭の中でいろいろと言葉を探
してみるものの、どれも陳腐で色あせているように感じる。

「……男のことばっかり考えてた。ケータイだっけ？　それ握りしめて、

ネコみたいな甘えた声出して、服を出したり入れたり……。その半分で

もいいから、あたしのこと考えてくれればいいのにって思った。あたし

がいなければ、ケッコンできるんだって。そもそも、あたしが生まれて

来なければ、幸せになれていたのに……ってさ」

「それは……違うだろ」

かろうじて絞り出した言葉に、ようやくレイが顔を上げる。泣いてい

るのかと思ったら、意外にも彼女は苦しそうに笑っていた。

「そうかもしれない。でも、分からない。やっぱり、どこの世界でも人

間は変わらない」

言いながら、レイは再び視線を落とす。どこの世界でも人は変わらな

いと断言したその言葉が、妙に頭の中に残った。

「またひとつ、あたしは無くした……」

「どういう意味だよ」

「何でもないよ」

振り切るように、レイは深呼吸をして空を見上げた。飛行機雲が、真っ青な空に一筋の線を描いていた。互いに何も言わず、並んで座ったまま消えて行く雲を見つめていた。

「そう言えば、ルナとは会ったか？」

しばらくしてから、中也は話題を変えようと思ってレイの親友の名を口にする。

「ルナ？　ああ、こっちの世界のルナは観月ルナって言うらしいよ」

「へえ、観月……」

「会ってはないよ。でも、どこにいるかは分かる」

「どういう意味だよ」

「……知らないならいい」

気になる言い方をされた。質問を重ねようとしたところで、レイがカバンを手に立ち上がった。

「ねえ、今日の夜、泊めてよ。家には帰りたくないから」

「え!?」

いきなりの申し出に、中也は思わず腰を浮かせてしまった。

「いいでしょ？　別に何もしないからさ」

「そ、そういう問題じゃ……」

「だったら何？　野宿でもしろっての？　言っとくけど、シヴァの家にはいかないよ。あいつら、妙に仲がよくて気まずいから」

「……」

レイの言う“あいつら”というのがシヴァと夏葉のことだというのは考えなくても分かる。確かに、あの二人は光宮にカップルと間違えられ

るほどに仲がよさそうだった。なぜか……。

（そう言えば）

ふいに、中也の脳裏に過ぎ去りし日の一瞬が思い浮かんだ。確かあれ

はクック討伐に出た時のことだ。アルテリア最大の港町ドンドルマを出

発して間もなくのこと。退屈凌ぎに二人で雑談をしていた。フェンリル

がレイとルナに挟まれて船の探検をしていることが羨ましいなどとほざ

いていた彼だが、最近の彼はあまり浮ついたウワサがないことに思い至

ったのだ。そして中也は彼に言った。

“そう言えばさ、最近あまり女の子と付き合ったとかそういう話しねえ

よな、お前。何かあったんか？　もしかしなくても、好きな子ができた

とか？”

シヴァは笑って言った。

“正解！”

結局、誰なのかは分からずじまいだったが、今になって疑惑が湧いて

出て来た人物がいる。

（ま、まさか……そんな……！）

どこの世界でも、人間は変わらない。先ほどのレイの言葉が、キリキ

リと頭を絞めつける。ついでに、胃の辺りも痛んだ。

交差21

「まっず……！」

支給された飲み物のあまりの苦さに、光宮は思わず顔を顰めていた。

にが虫の体液に含まれる効果持続性分と、砕いた氷結晶を調合したその

支給品は、俗にクーラードリンクと言われている。これを飲めば灼熱の

溶岩に満ちた火山内部でもあっても、数時間は生きていられるという話

だ。

「ホントに大丈夫なんでしょうね」

クーラードリンクを飲んでも、特に体に異常はない。ハンターが使う

アイテムにはマユツバ物が多いという話は嫌というほど聞いているだけ

に、不安が胸の中に広がって行くのを抑えられなかった。

「大丈夫に決まってるでしょーが。クーラードリンクは大昔からハ

ンタ
ーの間じゃあ必需品なんだぜ？　言いかえれば、それが無ければ火山に
お住まいになってるモンスターなんか、とてもじゃないが狩れねえよ」

「……だといいんだけど」

相変わらず飄々とした態度の部長を横目で眺めつつ、光宮は手にして
いた錬金術の参考書を無意識に抱え直す。見つめる先には火山への入り
口がぽっかりと口を開け、自分たちを待ち構えていた。

（嫌な感じだわ）

黒々とした空間の中から赤い光が漏れ出ているその様は、さながらニ
ブルヘイム（地獄）への入り口のようだと思う。怖くないと言えばウソ
になる。それに、気味が悪い。古龍が近くにいることによって生まれる
独特の空気も相変わらずだ。

（やるしかない……）

今は躊躇っている暇などないのだ。逃げ出したくなる気持ちを必死に
抑え、光宮は熱風が吹きだす穴へ向かって一歩を踏み出した。情けない
ほど、足が震えている。

（もし、クーラードリンクがマユツバ物で、火山の中に入った瞬間に焼
け死んだらどうしよう）

嫌な考えが、首をもたげる。

（もし、錬金術が成功しなかったら？）

テオに食い殺されて死ぬだけだ。

（もし……）

その時、光宮は自らの体に異変が起こったことに気付いた。

「な、何なの？」

むしろ暑くて堪らないきらいの外気温だったはずなのに、なぜか雪山

の真っ只中にハダカで放り出されたような寒気が全身を襲う。それまで
とは違った意味で、全身がガタガタと震えはじめた。
「当たり前だろーが。クーラードリンクが利いて来たんだよ。火山の中
でも生きてられるくらいの効果が出るんだから、普通の場所じゃあ寒く
て仕方な……」
面倒な説明をする部長の言葉など最後まで聞いていられなかった。目
の前の洞窟の中が妙に暖かそうに見えて、堪らず光宮は駆け出していた。
「ああ、あったか～い！」
火山への入り口を潜った瞬間、真っ先に思ったのはそんなことだった。
思わずほっとしたところで、続いてやって来たシヴァとルナに視線を送
る。

「……あんたたち、すぐにクーラードリンク飲まなかったわね？もし
かしなくても、私が大丈夫そうだったら自分も飲もうとか思ってないわ
よね？」

「そんなワケねえんだ～ぞ。考えすぎだ～よ」

「そうそう。最近、被害者妄想が強すぎだよ、光」

信じられない。胸に芽生えた疑惑の芽が葉を伸ばし茎を伸ばし、立派
な大木へと成長していくのをヒシヒシと感じた。

「……覚えときなさいよ」

苦い口調で言ってみたものの、二人は全く聞いている様子ではなかっ
た。

「さぁて、テオはどこかなあ～？」

シヴァとルナの後ろ姿を見て自分も歩き出した時、遅れて部長がやっ
て来た。そう言えば、彼はクーラードリンクを飲んでいなかったよ

うな
気がする。
「あんた、平気なの？」
「はあ？」
目の前には血のような色をしたマグマがドロドロと流れていて、まる
で火山が大出血しているようだとさえ思う。粘度の低いマグマはそれだ
け高温の証だし、自分たちがいるのは空気の逃げ道が限られた言わば密
封状態に近い空間に違いない。今の自分は温かいくらいにしか感じない
が、おそらく周囲を満たしている空気は実際のところ軽く数百度を超え
ているはずだ。
「俺を何だと思ってんだ？　人間じゃねえんだぞ。これくらいの温度で
ヘバるかよ」

「あっそう。でも、白衣が燃えてるわよ」

「なにっ！？」

本人は平気でも、その着衣まではそうはいかないらしい。それは自分

たちも同じはずなのだが、なぜか自分が着ている普段着は燃えていない。

（クーラードリンクの影響かしら。まさかね……）

必死で消火作業を行う部長を余所に、光宮はそんなことを思った。

「お～い、オッサン。サボってねえで、テオがどこにいるか教えろ～よ。

鬼龍だから千里眼が使えるんだ～ろ？」

「サボってねえ！　テオは頂上だ！　さっき見たらそこで寝てやがった

よ！　さっさと行け！」

「へ～いよ」

千里眼という言葉を聞いて、真っ先に疑った自分とは対象的に、シヴ

ァはあっさりテオが頂上にいるという情報を信じるらしい。確かに

時間
が限られているということもあり、モンスターの位置を特定してもらえ
るのは有難いが……。
「千里眼って何よ。どういうものなの？」
ついつい聞いてしまう自分がいた。そんな光宮に、部長は面倒臭そう
な態度で振り返る。
「遠くを見渡せる能力のことに決まってるだろ？」
「そんなことは知ってるわよ」
「……鏡でも、水でも、ガラスでも何でもいい。とにかく、虚像が映る
ものを使えば、大抵の鬼龍はいろんな情報を集められるんだよ。ただし、
見ようとして見れるのは場所だけだ。人とかモンスターに限定して千里
眼を使うのはムリだな」
「つまり、ここに鏡があってアルテリアの国王の寝室を見ようと思

えば、
そこにいる人間が何をしてるか分かるってこと？」
「そうだ」
「でも、国王が何をしてるか知りたいから国王を探そうと思ってもできないの？」
「そうそう」
「死ねばいいのに」
「……」
どうでもよくなった光宮は荷物を担ぎなおし、先を行くシヴァとルナを追いかけた。
（無気味な場所だわ）
改めて周囲を見渡し、ここへ来た当初と似たような感想を胸に抱いた。
いくらクーラードリンクを飲んでいるとは言え、マグマの中に落ちてし

まえば生きていられないだろう。一瞬で骨まで溶かしてしまう灼熱が、

まるで川のようにすぐ近くを流れている。その光景の異常さに、今更な

がらゾッとした。

（火山なんか二度と来ない）

周囲を取り囲む黒い岩は泡立ったような表面をしていて、それが冷え

て固まったマグマのなれの果てだということは一見して分かる。今もな

お生きて呼吸する火山。その内部にいる自分。地面が脈動しているよう

な錯覚さえ覚える。

（さっさと討伐を終わらせて、帰りたいわ）

ふいに、突き出た岩の陰にひっそりと葉を伸ばす赤い雑草が目に入っ

た。何と言う草なのか知らないが、こんな悪条件でも根を張り、必死に

葉を伸ばしているその様が妙に印象的だった。

（まるで、私たちみたいだわ）

普段、感じたことのない思いが胸を満たす。決して美しい花ではない。

立派な木でもない。それでも、必死に生きている命はこんな場所にも確

かに存在している。そう思うと、何だかホッとするような、気合いが湧

いて出るような不思議な気持ちになる。

「お、火薬草じゃねえか！　ちょうどよかった、コレ欲しかったんだ」

無神経な部長が、たった今、感動を覚えた小さな生命を根こそぎ引っ

こ抜いた。条件反射で、股間を蹴り飛ばす。もんどり打って気絶した部

長をマグマの中に放り込んでやろうかと思ったが、重たそうだったので

諦めた。

「まったくもう！　男ってどうしてこんなにバカなのかしら！？」

「光？　どうかしたの？」

「何でもないわよ！」

部長はその場に置き去りにして行くことにして、光宮はずんずんと山

を登って行く。

「光～、急所蹴りは反則だ～ぞ。タマが潰れたらどうすんだ～よ。人類

が滅びちまう～ぞ」

「そんなことで滅びる人類なら、いっそ滅びてしまえばいいのよ！」

「……お前には分かんねえと思うけど～な、本気で死ぬほど痛えんだ～

ぞ。俺にだけは勘弁してくれ～よ」

「だったら態度に気をつけなさい」

シヴァはそれ以上、何も言わなかった。納得したのだと解釈し、彼女

は先を急ぐことにした。

（さっさと終わらせてやる！）

そんな決意を胸に、ごつごつして歩きにくい地面を歩く。後ろから、

何とも言えない微妙な雰囲気を纏ったシヴァとルナが付いて来る。

自分

は何も悪いことをしていない。責められるべきは無神経な部長の方だ。

二人の態度が釈然としない理由を無理やり部長に被せた時、ふいに視界

が晴れた。

（ここね……）

マグマが放つ赤い光でかろうじて前が見えていた火山の内部とは違い、

そこには空が広がっていた。どんよりと濁った暗い空だが、太陽の光は

届いている。開けた場所の中央にはマグマが溢れだしていたが、それで

もそれまでいた場所よりは気分的にマシだった。

「テオ、いないじゃないの！」

千里眼が使える鬼龍の部長は頂上にいると言っていた。だが、見

渡す

限り、目的のモンスターの姿はどこにもなかった。

「あいつ、ウソついたのね！？　何が千里眼よ！　ホントに役立たずな

んだから！」

「あるいは、テオの方が逃げたんじゃないの？　鬼龍の気配を感じて」

「はあ！？」

ルナの言葉に、ただでさえささくれ立っていた神経が余計に逆なでさ

れた。

「あんな最弱の鬼龍を怖がるとか、どんだけ小心者なのよ、あのテオ！

ＸＸＸも小さいけど、中身の方も小さいってワケ！？　信じられない！」

「ＸＸＸの大きさは関係ねえと思うけど～な」

「うっさいわね！　あんなんだから何百年も何千年もナナに相手されな

いんじゃないの!?　炎の帝王が聞いて呆れるわ!」

誰にともなく怒鳴っていた時、ふいに頭上から何とも言えない唸り声

が聞こえて来た。はっとして振り向くと、自分の背丈の二倍はあると思

われる岩棚の上に、しょぼくれ返っているテオ・テスカトルを発見した。

「いたの?　いるならいるで、さっさと出て来なさいよ!　そういうと

ころも度胸ないのね、あんた!　ほら、そんなところにいたら攻撃でき

ないでしょう!?　早く降りてらっしゃい!　そして大人しくその首を

差し出して、死になさい!」

テオの目に、涙が光ったような気がした。

交差22

「……仕事、いいの？」

ひたすら雨の音だけが支配する空間に耐えきれず、フェンリルはおずおずと口を開いた。少し離れたテーブルに付いている父親は先ほどからずっと無言のまま、金色の視線を窓の向こうに向けていた。

「もう二日目じゃん。将兄がいなくなったらさ、四軍将の人たちが困るんじゃない？」

「……知ったことか」

会話が途切れた。明後日の方向に向けられた視線も何とも言えない空しさを覚えて辛くなってくるが、自分に向けられた視線はそれはそれで心の中を見透かされているようで居たたまれなくなってくる。

「……勝手にここに来たのは謝ったじゃん」

そろそろ許して欲しい。そんな意味合いを込めて呟いてみると、軽い溜め息が落とされた。

「今更か？」

「……いや、だって父さん、ずっと機嫌悪いし」

「別に機嫌が悪いわけじゃない。とりあえず、お前はアルテリアに戻れ。ここにいても仕方ないだろ」

「それはそうだけどさ……」

そもそもここに来た目的は何だったのだろう。特に思いつめて行動したわけではないだけに、ここに留まりたい気持ちはあっても、その理由を説明することはできなかった。

「……俺のこと怒ってないなら、何をそんなに考えてんのさ」

遠慮がちに向かいのイスに腰を下ろす。できればもっと軽い話題で時間を繋いでいたかった。けれど、口をついて出たのはそんなことでしかなく、視線を合わせていられずについテーブルの傷を数えてしまう。

「お前が気にするようなことじゃないさ」

返って来た答えは自分が望むものではなかった。自分に気遣って

いるのか、それとも部外者だから口を出すなと言っているのか。どちらにしろ、それはフェンリルにとってはおもしろくはない。

「昔のこと？」

「……どうだか」

「何だよ、それ」

片足で、テーブルの足を軽く蹴飛ばした。汚れたグラスに注がれた水が、波紋を描いて僅かに落ちる。

「いいから、お前はアルテリアに戻れ。こんな小汚いボロ屋、居心地が悪いだろう」

奥で掃除をしていた店主の肩が僅かに跳ねたような気がした。

「別にいいよ。気にしてない。夕方になったら風呂入りに帰るけど」

「それくらいなら、いっそもう戻ってろ」

「嫌だ」

口が滑ってしまった後で、フェンリルは軽く唇を噛む。視線を上げると、困ったように苦笑いを浮かべている父親の姿が目に映る。

「……嵐灰が言っていたが、お前は今ごろになって反抗期でも迎えたのか？」

「違うよ！　何だよ、それ！」

「だったら何だ」

何だと言われても、はっきりとは答えられない。しかし、うまく言葉にできないだけで胸の内に蟠っているものはたくさんあった。

「……よく分かんないけど」

「そういうのを反抗期と言うんじゃないのか」

「違う！！」

言われてみればそうなのかもしれないという思いが浮上し、慌てて否定する。世間一般に言うところの反抗期とは十代の前半で迎えるもの。とっくに成人し、２０代を目前にしている自分がそれを認めるわけにはいかなかった。

「……よく分かんないけど、気になる」

「何が」

「だって、俺は詳しいこと聞かされてないし。父さんたちが何しようとしてるのか、とか。これから何がどうなるのか、とか」

「お前に話したこと以上に深い意味はないさ。俺はただ鬼龍の力を取り戻したいだけ。これから何が起きるか知りたいなら、未来が予言できる占い師にでも聞いてみればいい」

「……そんな人いるわけないじゃん」

思ったままを口にすると、なぜか苦笑いを返された。

「お前は、これからどうしたい？」

「え？」

幾分、柔らかくなった視線が自分に向けられる。途端に、安堵を覚える自分がいる。おかげで、聞かれた内容の意味がよく分からなかった。

「俺は鬼龍に戻るつもりでいる。そして、その後はしばらく人間に関わるつもりはない。けれど、俺がそうするからと言ってお前までそうする必要はないということだ」

「つまり？」

「自分の生き方は自分で決めろ。お前がどういう選択をしたとしても、俺は肯定もしないが否定もする気はない。そういうことだ」

返す言葉に迷った。何か言わなければならないと思っているのに、思考は空回りするばかりでうまく言葉が紡げない。普段、当たり前のように使っている言葉が、こんなにも不自由に思ったことはなかった。

「もう子供じゃないから、自分で決めたい。でも何を決めていいか分からない。だからとりあえず親の言葉と反対の行動を取ってみる。違うか？」

「……ちがう」

「そういうのを、反抗期と言うんだ」

「だから違う」

ほんの少し、沈黙が落ちる。

「別に、父さんにイライラしてるワケじゃないし」

だから反抗期ではない、と自分なりに見つけた最大の理論を展開してみたのだが、ただ笑われただけだった。

「失礼するヨ！！」

その時、外へと続くドアが勢いよく開かれて見慣れた人物が両手を広げながら入って来た。

「ヤンさん！」

途端に苦い顔をする父親とは対象的に、気分が浮上する自分がいる。ヤンは長時間、雨に打たれていたらしく全身から水を滴らせていたが、それでも彼自慢の緑色の髪は健在だった。

「いやぁ、陛下と王子が二人きりでいったいどんな会話をするのか気になって気になってネ、３時間あまり窓の下に張り付いていたのだが、前半の２時間はひたすら無言で、よーやく会話が始まったと思えば口からヘドロが出て来そうな内容ばかり！　そろそろ全身がこしょばゆくなって来たのでお邪魔させていただいたヨ。相変わらず気色悪いネ、君たちは」

「……取っている行動もゴキブリそのものだな」

「失礼な！　カンタロスと言ってくれタマエ！　ところで陛下、のんびりしていられなくなったヨ」

クルクルとダンスのステップを踏みながら狭い食堂を無意味に移動していたヤンだったのだが、急に真顔になったかと思うと、まるで貴族のような足取りで自分たちの前にやって来た。

「ラオシャンロンが、お目覚めだ」

「それがどうした」

「……あんた、一応アルテリアの最高責任者でしょう？　もうちょっと危機感のある表情をしタマエよ」

謎としか言い様のない沈黙が支配する中、ヤンが口にしたモンスターの名前にフェンリルは興味を引かれた。

「ヤンさん、ラオシャンロンって、あの？」

「そうとも！！」

針金でも通っているのではないかと疑ってしまうようなストレー

トの緑色の髪が、本人の激しい回転に合わせて目の前を猛スピードで通り過ぎて行く。

「さすが王子！　ラオシャンロンの名前に反応するとは見る目が違うネ！」

「そう？」

「……やめろ」

血が騒ぎ出すような錯覚を覚え始めた自分の耳に、低く唸るような父親の声が届いた。

「冗談じゃない。いいか、フェンリル。ラオシャンロンは体格こそ巨大だが、攻撃パターンは至って単純なんだ。それに、ラオシャンロンを相手にするハンターの行動も遠距離からひたすらボウガンか弓で射撃するだけだ。戦ってもつまらないぞ」

「しかし、ラオシャンロンを特定の場所に誘導できれば、仕掛けられた橋の上からその背中に飛び乗ったりもできるヨ？　いやぁ素晴らしい景観だろうネ。今現在、確認されているモンスターの中で最

大最強を誇るラオシャンロンの背中に乗って小さなハンターたちのチマチマした攻撃を眺めるさまは！」

「……最大はともかく最強ではないだろう」

「何のことだネ？　そんなこと言ったかい？」

父親とヤンが無言で睨みあいを始める。

「ついでにラオシャンロンの背中に時計仕掛けの爆弾なんかを置いてやったりなんかした日には、その快感はおそらく１０年は忘れられないかもしれないネ。まさしく、夜のおともにピッタリだ」

「息子の前でおかしなことを言うんじゃない！」

「……だから、そういうところが気色悪いって言っているのダヨ。王子はもう立派な大人なんだから、少しくらい不健全な話題を覚えるべきなのではないかね？　それとも、あんたが手取り足取り教えてやるのかい？」

店の奥で、店主の妻が激しく振り向いた。その反動で、腹の肉が三回ほどバウンドする。その表情は、なぜか輝かんばかりに期待に

満ちていた。

「……くだらないことを言ってないで、さっさと帰れ、ヤン。少しは四軍将を働かせてやれ」

「失礼なことを言うネ。四軍将の方たちは少なくともあなた以上には働いているヨ」

「俺が働かせろ言っているのはアタマの話だ」

「そうかネ」

そして、ヤンはクルリとターンを決めてフェンリルを見やる。

「さあ、王子。ご一緒に戻りましょうか」

「ちょっと待て！」

頷きかけたところで、横から父親が引き止めて来た。

「何だネ？　何か問題でもあるのかい？　さっきから何度もさっさと帰れと冷たく突き放していたじゃないか」

「……突き放したワケじゃない。ここにいたら巻き添えを食らうかもしれないから戻れと言っただけだ」

そうなのか、と思った途端、彼が言う「巻き添え」の理由が気になった。

「ほほう？　そんなに心配なのかネ？　部長殿もご一緒されていることだし、そこまで心配する必要はないと思うがネ？　いくら光宮殿が古代の最高錬金術師であったとしても、復帰していきなり周囲を巻き込むような複雑かつ迷惑な術は使えまいと思うが？」

「……お前、どこまで知っているんだ」

「ワタシの情報網を甘く見て貰っては困るヨ、陛下。王宮の図書館に忍び込んでひたすら地道に古代の歴史書を当たっていればそれなりに事実関係は掴めてくるものサ」

本当に地道だ、とフェンリルは思った。

「ついでに言うなら、鬼龍諸君たちはムリにでも隠そうとはしていなかったことでもあるしネ。で、どうするのだネ？　ワタシの希望としてはぜひともラオシャンロン相手に王子と共に双剣を振るってみたいのだが」

「……ヤンさん、３回乱舞したらバテるじゃん。大丈夫なの？」

「何を言うか、王子！　３回乱舞したらワタシの気は済むのダヨ！」

「ふ～ん」

ヤンとフェンリルの視線が窓際の将兄に注がれる。

「……フェンリル、サスケと一緒に帝都の屋敷に戻っておとなしくしてろ」

「ええー！？　何でー！？」

いくら何でもそれはあんまりだ。そう思って言い寄ろうとした時、横でヤンが密かに笑っていた。

「陛下はラオシャンロンそのものはどうでもいいのサ。むしろラオシャンロンの体内に……」

「フェンリルさーん！！」

ヤンの言葉に聞き慣れた声が重なった。はっとして振り向くと、廊下の向こうに血相を変えた中也とレイが立っている。どうやらバリケードを突破したらしい。

「中也？　どうかしたの？」

「どうしたもこうしたもねえよ！！　まただよ！！　部屋のドアを開けたら俺たち、またこっちに飛ばされて来たんだ！！」

「へえ、そう」

どうでもよくて、気の無い返事をした時、中也とレイが将兄である父親に気付いて硬直する。

「どうやら、光宮殿が頑張っているようだネ」

交差２３

クーラードリンクでは誤魔化しきれないマグマの熱が肌を焼く。
間近に
迫った熱源に辟易しつつ、光宮は手早く荷物を解いて行った。

「ねえ、あんた」

股間の激痛から復活し、自分の背後に立っている部長を振り返る。

「いざって時は、あんたが犠牲になりなさいよ。その間に私は逃げるから
よろしくね」

「……やってみる前からそんなに悲観的になるもんじゃねえよ」

「黙っててよ！　集中できないじゃない！」

「……そっちが話しかけて来たんだろ」

「ああ！　もう！　うっさいわね！！」

間違いなく、自分は静かな場所でなければ集中できないタイプだ。
た
だでさえ慣れない環境で緊張しているのに、後ろからグダグダと話
しか

けられると気が散って仕方ない。

（シヴァとルナが、どれだけテオの気を引いておいてくれるかが勝負だわ）

自分が身を潜めている岩陰の向こうから、テオの唸り声が聞こえてくる。二人が持っているのは変わらず下位の弓と太刀だ。それに防具も付けていない。普通に考えれば、逃げ回って殺されない確立はかなり低いと言っていいだろう。

「えっと、まずは設計図」

焦る気持ちを抑え、丸められた羊皮紙を広げる。これは昨晩、後ろの変人から借り受けたカンペである。よって、扱いは少々ザツになる。手近な地面を丁寧にならして平らにした後、戸惑うことなくカンペを地面

に直接置いた。

「おいっ！　それは錬金術の秘訣が記された重要な……！」

「やかましい！」

カンペを見ながら、最初に円を幾つか書き込んでいく。文字と図形を

描くために使うのはビンに詰められた古龍の血だ。正直、かなりひどい

臭いがする。

「円が楕円になってる。やりなおし」

図形をいかに正確に描くかで、術の成功率が変わってくると聞いた。

指摘された部分の土を削り取ってミスの痕跡を跡形もないほど削除し、

再び綺麗に地面をならした後、今度はかなり慎重に円を描いた。

「左端が歪んでる。やりなおし」

背後でテオの粉塵爆発が巻き起こる。その衝撃で手元が狂い、再びダ

メ出しを食らってしまった。岩陰の向こうから流れて来る土煙が綺

麗に
ならした地面の上に降り積もっていく。慌ててそれを手で払った。
「焦るな。まだ時間はあるからよ」
「ほっといて」
巨大なモンスターが地面を駆けまわる振動が地面を揺らしていた。唸
り声が聞こえる。シヴァとルナの緊迫した声がする。唇を噛みつつ、今
は目の前のことに集中しようと努めた。
（焦っちゃダメ……！　焦っちゃダメ……！）
自分に言い聞かせながら、蒼天石を細く削って作られた棒状のペンを
血に浸す。手元が震える。うまくいかない。背後で衝撃が木霊した。思
わず振り向けば、テオが自分が隠れている岩に激突したところだった。
（ああ、もうっ！）
崩れた岩が落ちて来て、せっかくならした地面を再び乱してしま

う。

イライラしている自分を何とか宥めつつ、光宮は邪魔になっている小石
を取り除いて行った。

（今は集中しなきゃ……！）

テオが走り去ったのを確認した後で、注意深く地面に図形を書き込む。

正確な円。そして一字一句間違えることないよう何度も確認しながら古
代の文字を掘り込む。

「それは誤字だ。やりなおし」

はっとして手元のカンペとたった今、自分が書き込んだ文字を見比べ
る。指摘された通りの事実に、惨憺たる気分で再び土を削り取る。唸り
声が近い。間近で起きた爆発に、マグマが跳ね上がって慌てて避けた。

（またやりなおしだわ！）

マグマが飛び散った地面を見て、光宮は無意識に拳を握りしめていた。

嫌になる。だが、やらなければならない。今度こそ、という思いを強く

込め、少し離れた場所の地面をならした。

（シヴァ！　ルナ！　頑張って！）

焦らずに、だがひたすら正確に、図形を掘り文字を記す。下部の円を

それぞれ道で繋ぎ、更にそこから上方向にも道を伸ばす。正確な尺度に

伸びた道の横にも円を描き、更にそこから道を伸ばして行く。

（世界樹……ユグドラシル……）

これが、魂の設計図。これを元に、今は失われ眠りについている魂を

再びこの世に呼び出すのだ。媒体として使用するのは数千年の時を経た

古木。樹海エリアでそのまま「ユグドラシル」と呼ばれている大木の破

片を円の中に並べる。

「破片は丁寧に削れよ。やりなおし」

カチンときたが何も言わず、たった今、地面に置いた古木の破片を拾い上げた。荷物の中からナイフを取り出し、言われた通り丁寧に削って整えた。この時、削りかすが設計図の上に落ちないように最大限の注意を払うことを忘れない。

「よし……」

元通り、円の中に古木の破片を並べる。そして今度は荷物の中からドラグライト鉱石でできた鍋を取り出した。

「マグマで料理する日が来るなんて思わなかったわ。それもモンスターの素材を」

「意外だな。お嬢さん、あんた料理できるのか？」

「悪かったわね！　できないわよ！」

部長に鋭い一瞥をくれた後、光宮はギリギリの距離までマグマに近付
き、慎重に柄を伸ばしてマグマを掬う。冷えてしまう前に、手早くドス
ギアノスの鱗を放り込んだ。灼熱に触れ、白銀の鱗はあっという間に形
を無くしてしまう。
「危ない！！　光！！」
ドスギアノスの鱗が溶け込んだマグマを設計図の上に垂らそうとした
時、ふいに魂切るようなルナの叫び声が聞こえてきた。目の前のこと
集中し過ぎていたあまり気付かなかった。はっとして視線を上げた時
はもう、テオ・テスカトルが眼前に迫っていた。
「やば……！」
妙に冷静に自分が置かれた状況を認識した時、横からとんでもない力
で突き飛ばされた。何が起きたのか一瞬分からなかった。気が付け

ば自
分は地面に倒れていて、慌てて振り向いた先にはどこか戸惑ってい
る様
子のテオだけがいる。自分の身代りになってくれたハズの部長の死
体が
ない。
「もう一回、最初からだな」
真上から声がした。そこには飄々とした姿の部長が立っていて、
今更
だが彼もまた鬼龍だったということを思い出す。鬼龍であれば時空
移動
ができる。だとすれば、あの一瞬の後に離れた場所まで移動したと
して
も不思議はない。
「……分かったわよ」
礼を言うほどではない。そう思いつつ、光宮はテオの突進によっ
てメ
チャクチャになってしまった場所へと戻った。軽く深呼吸する。苛
立つ

神経を宥め、改めて古龍の血が詰まったビンを手に取った。

（腹が立つわね、もう！）

地面をならし、図形を描き、文字を彫り込み、古木の破片を並べてい

っている途中、何の前触れもなく、すぐ近くでテオの粉塵爆発が炸裂し

た。

「きゃ……っ！」

思わず両手で頭を覆って地面に伏せてしまう。周囲の空気が落ち着い

て来たのを見計らってゆっくりと顔を上げる。そこには、再びやりなお

さねばならない惨状が広がっていた。

「もう……いい加減にしてよ！！」

我慢できずに叫んでいた。さっきから幾度となく描いては削り、書い

ては削りの繰り返しばかりしている。一向に術が前に進まないどころか、

募るのは苛立ちと疲労だけで、成果は何もない。

「ちょっとあんた！　少し大人しくしてなさいよ！！」

テオに向かって指を突き付けながら言えば、なぜか巨大な古龍が竦み

上がった。

「どういう理屈だよ……」

背後から呆れたような部長の声が聞こえて来る。

「あんたもよ！　さっきからダメ出しばっかりして！　ジョーダンじゃ

ないわよ！　あんた、そもそも他人にダメ出しできるくらい偉い立場な

の！？」

「……一応、現在のアルテリアで最高の錬金術師ってことになってます

がね。だからこそ技術開発部の部長を名乗れる……」

「それがどうしたって言うのよ！？」

詰め寄ると、部長が何とも苦い顔をした。

「錬金術が何よ！？　やってることは子供のお絵かきと大して変わんな
いじゃないのよ！　こんなモンで飯が食えると思うあたり、あんたの社
会に対する認識の甘さが露呈してるってモンなのよ！」

テオが唸り声を上げた。

「黙ってなさい！」

大人しくなった。

「もうイヤ！　面倒臭い！　こんなことやってらんないわ！　あんたが
代わりにコレ描きなさい！！」

拾い上げたカンペを部長に突き付けると、彼は雪山でドスガレオスを
目撃したような顔になった。

「俺が描いたら意味がないだろ！」

「文句があるなら、あんたの大好きな“京ちゃん”に言えばいいのよ！

私はそもそも巻き込まれただけよ！！」

「……いや、むしろ逆だったんだけどね」

「何か言った！？」

「い、いえ」

そこでふと地面に視線を落とす。目に映ったのは、割れて中身が零れ

出た古龍の血を納めたビンだった。

「あらまあ、こりゃあ出直すしかないなあ」

頭を掻きつつ、部長が溜め息混じりに呟いた。出直すためには一度あ

の宿屋に戻らなければならない。宿屋には将兄がいる。テオを討伐せず

に引き上げて来たことを絶対に言わなければならなくなる。それだけは

イヤだ。

（どんな嫌味を言われるか分かったモンじゃないわ！）

どうしたものかと考えを巡らせた時、目の前に必要な素材があるとい

うことに気付いた。

「……現地調達でいきましょう」

部長が目を見開いた。太刀を肩に担いだシヴァがニヤリと笑った。

ル

ナが溜め息を落とした。テオが、方向転換して逃げ出した。

「追いかけて！！　逃がしちゃダメよ！！　あんた鬼龍なら何とかしな

さいよ！！　これだから最弱の鬼龍は！！」

部長の背中を蹴り飛ばしながら言えば、彼は少しばかり苦い顔をする。

「……手ぇ貸してやるのは、一回だけだからな」

随分ともったいぶった言い方をする、と思った時、いきなり目の前に

落雷が木霊した。

「！？」

驚いて固まった光宮たちから離れた場所で、落雷の直撃を受けたらし

いテオが横倒しになっている。何が起きたのか未だに認識できていない

光宮に、部長が白衣のポケットから取り出した小瓶を差し出してくる。

「ネムリ草のエキスを濃縮したアイテムだ。これをテオの鼻先に落としてやれば、しばらくは起きねえだろうよ。さあ、今のうちにさっさとしな」

「どうしてあんな離れたところで気絶させるのよ!?　もうちょっと私たちのことを考えなさいよ！　ほんっとに役に立たないわね、あんた！」

差し出された小瓶を毟り取りつつ、ずかずかと気絶しているテオの方へと歩み寄って行く。背後で、シヴァとルナが部長の肩を叩く気配がした。

（このまま殺してやりたいわね）

白目を剥いて気絶しているテオの情けない顔を見下ろしながら、光宮
はそんなことを考えた。しかし、それでは自分が錬金術を成功させるた
めの実験台にするという目的が果たせない。さっさと血を分けてもらっ
て、設計図を完成させるべきだ。

「シヴァ！　さっさと採取して！」

「へいへい」

モンスターの体には触りたくない。当然だ。シヴァが持っていた太刀
でテオの脚を傷付け、血を集め始めた。それを横目で見ながら生理的な
吐き気を必死で堪える。やがて差し出されたビンには鮮紅色の液体が満
ちていた。

「ああ、何か面倒になってきちゃった」

おざなりな動作でシヴァからビンを受け取り、地面に屈みこんで適当

に土をならす。そして記憶を頼りに図形と文字を掘り、古木の破片を並
べた。そして古龍の血を固めたもの……俗に賢者の石と呼ばれるものを
荷物から取り出して、空中に放った。
「あ！　素材！！」
思い出した時にはもう遅い。描かれた図形と文字、そして古木に賢者
の石が反応した。まるでそれ自体が小さな太陽ではないかと疑ってしま
うような強烈な光を放った賢者の石は、しばし空中に留まっていた末、
やがてゆっくりと地面に落ちて行った。
「……何も起こらないじゃない。失敗だわ」
途中、モンスターの素材を溶かしたマグマを設計図の上にかけるのを
忘れていたのだ。失敗は仕方ない。だが、近寄って来た部長は何とも言

えない顔で設計図を見つめていた。

「……何で基本もできねえのに、時空間の歪みを修正しちまうんだよ」

言われた意味が、よく分からなかった。

交差２３（後書き）

次回の更新は年明けになりそうです。

活報にも書きましたが、明日から実家にカンヅメなので（汗）

みなさま、良いお年をお過ごしください！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7594i/

妖乱舞

2011年12月28日23時51分発行